
現代日本文學全集
XXXVI

PL
772
K5
1929

Kiko zuihitsu shu

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

杉浦非水装幀

紀行隨筆集

（附）「春」「嵐」

改造社版

LIBRARY
MAR 24 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
772
K5
1929



諸家照影

(1)大和田建樹(2)落合直文(3)大町桂月(4)鹽井雨江(5)武島羽衣(6)馬場孤蝶(7)平田禿木(8)戸川秋骨(9)遲塚麗水
(10)志賀重昂(11)柳田國男(12)小島烏水(13)吉江孤雁(14)河東碧梧桐(15)阪本四方太(16)篠原温亭(17)寒川鼠骨

紀行隨筆集 目次

序

隨筆の世界には約束がない。從つて誰もが親しみ得ると共に、容易にものし得る。かくてこの世界は縱に、また横に、あまりにも廣汎である。しかしながら、それだけに、ずばぬけた隨筆家が少いといふことは逆說ではなく事實である。此の點に於いて、本集の編纂に就いて最も顧慮を必要とする、如何なる作家の如何なる作品を選び收めるかの疑問には自ら明解があつた。なほ、本集が「明治大正の文學を文學史的見地より體系づける」ことを目的する『現代日本文學全集』の一分册たることは、編纂方法に更に一つの大きな制限を與へた。

本集が特に明治二十年代よりその末期に亙る所謂美文寫生文的隨筆、並びにそれ等の働きかけによつて特殊なる發達を遂げた當代の紀行文に重點を置き、これに、變遷の過程を示すべく新しきものを加へた意圖は上述の理由によつて了解され、Aも高名な隨筆家だ、Bも高名な紀行文家である、それが何故に本集には逸せられたか、といふ或ひは起るかも知れぬ一應の疑問も、結局一應にしてとゞまるであらう。

さて、隨筆のうちで特殊なる形式を以て發達したところの、かの文學史の所謂美文、寫生文、紀行文とは何か？

明治十年代末より二十年代の初頭へかけて我國のあらゆる狀勢が、ひたむきに歐化主義的傾向に趨らうとした際、その反動として起つた國粹保存運動は、藝文の範圍に於いては、必然、國文學、漢文學の復興となつて、芭蕉、西鶴、近松、馬琴等の近世文學を顧望するに至り、ここに幾久しき世代に渉つて圓熟に圓熟を重ね來つた古典語を表現のメディアムとし、盛るに當代の思想を以てする一スタイルの出現となつた。それは散文詩でもあり、隨筆風のエッセイでもあり、世俗はこれをいつしか「美文」なる稱呼をもつて稱呼するに至つた。蓋しその先驅者大和田建樹、落合直文は言はずもあれ、またその陣頭に最も鮮明なる旗幟を飜した戰士大町桂月、鹽井雨江、武島羽衣の名は、忘るべからざるものであらう。而してこのスタイルを深き西歐文學の素養を以て取扱つた人々はかの雜誌「文學界」の同人、平田禿木、馬場孤蝶、戸川秋骨等である。

寫生文は、三十年代に至つて子規居士を中心として起つた文章上の新運動である。「作者若し須磨に在らば讀者も共に須磨に在るが如く感じ、作者若し眼前に美人を見居らば讀者も亦眼前に美人を見居るが如く感ぜしめるといふ居士の言葉こそ、この文派の主生命をなすもの。河東碧梧桐、篠原溫亭、阪本四方太、寒川鼠骨等のものした小說、紀行、隨筆等々は、こゝにその文脈出發が置かれてある。

自然を目的格とする紀行文に於いても、當代新興の美文、寫生文は、これに一つの鋭い衝撃を與へて多々の紀行文家を輩出せしめた。遲塚麗水、柳田國男、小島烏水、吉江孤雁等、いづれもあまりに有名である。而して『不二山に登る記』『不二の高根』を讀みて『ヨセミテ谷と上高地』『成都道中記』と至る時、時代と紀行文の交錯をもうかゞひ知ることが出來よう。

志賀重昂は一つの變種である。それだけに瞠目すべきものがある。『日本風景論』が當代に於て劃期的實行を示した所以は、彼が「科學と美」との調和を最も意とした點にあらう。

こゝに集められた十七作家、五十餘篇の文章は、故人以外はすべて作者その人の選によつたものである。

附錄とした島崎藤村の『春』『嵐』二篇は、解說すべくあまりに有名である。

大和めぐり
千里の春

大和田建樹

大和めぐり

ふみの上にては明暮親しうすれど。足いまだ其地をふまねば。我ながらはづかしく物足らぬ心地せしを。今年は夏に暇をえたれば。思ひたちて大和めぐりをせんとするなり。をりよく道づれもあれば。まづ大阪より和歌山に遊び。それより大和に入らんとて。七月廿三日の朝。新橋より汽車にていでたつ。雨をやみなくてうるさき物から。いと涼し。たゞものさびしくて幾ところもすぎぬ。舞坂を出でて入海の中道を走りゆくに。暮れそめたれば。雨はけむり渡りて一面の白きなかを。黒き鳥の處々に群がり飛ぶなど。あはれ此景色を家なる人にと。思へどかひなし。かくてふけそむる頃名古屋につきぬ。紙屋橋といふを渡りて川村屋といふに宿る。とかくして枕につきたるは一時過なり。

廿四日。雨やまず。一番汽車にてたつ。道に岐阜のあたりをすぐる〳〵みるに。田も畑も水にひたされて。たゞ湖水の上をゆくに似たり。造化の恨は。などて此地にのみかたよれるやらん。京都につきて。麩屋町の押小路上る處にて。澤文といふにやどる。けふは祇園祭なりといへば。それ見んとて。四條わたりまでゆきたるに。山は既に通りぬとて。たゞ御旅宿に神輿のみおはす。殘りをしけれどせんかたなきに。雨は篠を亂していや降りに降れば。袖もすそもぬれとほりぬ。人々とひくらして夜ふかく宿りにかへる。

廿五日。雨少しやむ。二番汽車にて大阪につけば。加藤延治氏は早くも停車場にあり。車にて其家につく。酒いでてねんごろに逗留せよとすゝめらるれど。明日は同行の井上はるえ子を和歌山に送らんの約あれば。旅行の終りに。京大阪に又たちかへるべきよしをのぶ。けふは天滿祭なるが。降りつゞく雨に水高ければ。舟ならで陸にて神輿の御わたりあるべしといへば。晝過ぎて難波橋を渡りて。西へ〳〵とゆき橋一つわたれば。今ぞ一むれのねり物わたる。侍烏帽子に梅の花をかざし。狩衣のいでたちなる女。傘をさゝせ車にのりつゞけて。四五人もゆく。それのみにてあとは。までども〳〵みえず。大路には隙なく篝火焚きたてゝ。黒煙そらを染むるばかりなり。さらでも少し日光のみえてあつきにとて。見さしてかへる。あすの地圖などしらべあひて。物語しつゝ。深更に及びたれば夢路にいる。

廿六日。はれたり。ふるさかに大阪をたちて。夕方和歌山につく。はるえ子と共に其家に至れば。母人まちむかへていさといはるゝうちに。二人の弟は。姉上にお歸りよと。其あたりとりかこみつゝ。喜びおもてにあらはれたる。よそめにも心晴れゆく團居なりけり。今宵は此家にやどる。

廿七日。けふも日よし。はるえ子の兄人に案内せられて。一家の人々と紀三井寺にのぼる。寺のさまきら〳〵しからねどさびわたりて。木立すゞしく。蘆邊の浦ちかく見おろされたる。まづうれし。寺山の麓より舟にのりて。和歌の浦の拜殿といふ處までゆく。こゝより見かへれば。名草山緑ふかくゑみたてるに。かの寺の塔白くあふがれたる。又更に尊くなつかし。蘆邊のあしべ屋といふにて。物くひなどして久しく涼む。蘆邊をさしてとよみけん鳥はと問へば、維新前までは殺生禁斷にて。あまたおりゐたりしに。今は影みることもたえはてぬ。といふ

こそあさましけれ。されど見と見る海山。みな古人の如く。半日の身はいつしか代々の撰集にもいりたるこゝちす。玉津島もをがみはて。東照宮などの名所々々をめぐり。濱邊にいづ。此あたり松おほし。

　またもこんかた葉の蘆の浦風に
　　聲うちそふるまつの下かげ

かの蘆邊のあたりにおふるをば。かた葉のあしとぞいふなる。漁夫あまた軒をつらねて。けふのえもの賣りかふにや。かしがましくつどひのゝしる中をぬけて。潮あむまうけせる家につきぬ。前は海にて。淡路島したしく影をかはし。蘆なく松なく。けしき又あらたなれば。盃のかずもいつしか重なりぬ。幾度となく波とすまひ戯れて。歸り來ぬれば夜はさきがけして家にあり。

　廿八日。けふも日よし。渥美氏をとひて。ともに白樫氏にゆく。けふより此家にやどらんとするなり。あるじの翁は。まづ和歌山城にのぼるべしといはるゝに。隨ひゆく。

　まだそめぬ蔦の色さへあはれにて
　　夏も身にしむ城のまつかぜ

　あはれ此地に入りけるをとつひ。青田のすゑにほのみえつゝ。はるえ子のゐがほをむかへつる白壁は。是なりけるよ。天守のいち高き樓にのぼりはつれば。和歌山城下をはじめ近きあたりの村々山々まで。一幅の畫圖に集まる。白樫氏にかへりて晝過ぐれば。また和歌の浦に汐あみにともなはれゆく。

　　へだてなき遊びがたきとなりにけり
　　　きのふはよその和歌の浦波

　廿九日。けふも。朝涼しきほどにとて。日前國懸の二宮にまうづ。人氣にしまぬ宮居おくぶかし。

　　鷺のこゑそらにきこえて日の影も
　　　神さびわたる森の竹むら

　夕方は。城の麓なる岡東館といふに。この地の人々よりまねかれてゆく。集まれるは八九人にて。うちとけたるまとゐに。夏さへ旅さへわすれはてつ。

　三十日。けふも。渥美氏の案内にて。主客三人うちつれて。加太町といふにゆく。町を離れて西の方三里ばかりの海邊なり。粟島神社もこゝにたゝせり。いでいろ繪のさまなどみつゝ。近くは苫が島。遠くは淡路島に向ひゐて。心しづかに物語しつゝすゞむ。例のくせとて潮もあみつ。夕日やうやう横になりて。波に黄金の龍をゑがくなど。なごりをしからぬものなきを。あはれ釣人の生涯ならましかば。

　こよひは渥美氏に宿りて。語りふかす。あすは高野にのぼらんとすれば。夢まづ白雲のうちに入りて。まだきにすゞしき假寐なりけり。

　卅一日。けふも。夜をこめていで行く道すがら。白樫氏より途中の用意にとて。暑氣拂やラムネやと惠まれたること。渥美氏の夜もねず[illegible]心つけて贈られしこと。井上氏の草鞋など朝の飯など取りまうけ。心盡してめぐまれしことを思へば。なにゝかたとへん。

　　けふわけん高野のおくの雲よりも
　　　ふかきは人のなさけなりけり
　　わすれじよ友のなさけにおくられて
　　　旅だつけさのあけぼののみち

　わたし一つ渡りて。紀の川ぞひをのぼる。晝に近き頃。又川を渡りかへして。九度山村につく。こゝより四里ばかりの山道を。[illegible]籠にて不動坂といふをさしつゝ。けはしき道をつられゆく。其苦しみを慰めんとや。水音松風。さては秋の花の處々にほころびたるありて。[illegible]山路に[illegible]ふる[illegible]の[illegible]いと深きよ。[illegible]やうやうはてゝ。女人堂の前に[illegible]。此あたりの谷間には。いく[illegible]いく丈ともしられぬ杉檜など。ふかぶかと立ちなみて。いと物すごく。[illegible]

めて心は高野めきぬ。
渥美氏の紹介にて。東根院といふ寺にやどりは借る。こゝに名刺を通じ置きて。案内する小童こひて處々みめぐるに。立ちならべる寺々は皆檜皮ぶきにて。清らかなること浮世の物ならず。されど。先年の火にてなかば焼けうせぬとて。今猶その名残の枯木石ずゑなどの残れるかれこれみゆ。あたら霊地をといとくちをし。玉川と教へらるゝ小川を渡りて。奥へ〳〵といれば。右も左も塔やうの石碑。大きなる小さき。さま〳〵に市をなして立てり。これなん昔より貴賤尊卑の別なく。かたみの骨を埋めて冥福をとぶらふ墓なりける。此あたりすべて女人堂のあたりの如く。木立物ふりて夕日梢にうすし。

　雲にいる杉より上にひゞくなり
　　たかののおくの日ぐらしの聲

墓を過ぐれば骨堂といふあり。六角のさゝやかなる堂を戸のひまよりうちのぞけば。ほの暗きに白骨るゐ〳〵たり。あはれ老少不定の世の習と。觀ぜらるゝも此あたりなるべし。奥の院の前には燈籠堂とて。數萬のともしびを常にたむくる所あり。こゝかしこ見はてゝ。もとの道にいで彼寺に歸れば。僧出で迎へて懇にもてなすも。友の惠ぞかし。更けゆくまゝに。『あらしやのりを』と謡はまほしき夜のさまなるに。窓をひらけば。影青き星の木のまにきらめくなど。

八月一日。朝霧ふかし。

　名もしらぬ花をちこちにみえそめて
　　あさぎりはるゝ寺のなかみち

僧きて別れをつげつゝ。けふはみづからがと思ひつるを。にはかに宗務いできたればとて。昨日の童つけて案内せさす。青巖寺の幽寂なる。金堂の荘嚴なる。みめぐりて。丹生明神の社にまうづ。檜皮の軒ばをまばらに見せて。楓の青葉しげりあひたり。

　さながらのぬさやたむけん心あらば
　　露にさきだて森のもみち葉

をとこべしのみあまた。寺のかきねをめぐりて咲きたるも。ところからをかし。

　をみなべしにほはぬ山の秋風に
　　ところえがほの花のいろかな

これは三鈷の松。かれは西行櫻など。さししめすをきゝさしつゝ。又もとの女人堂にいづ。こゝより昨日の駕籠にてかゝれゆくに。露まだ乾かぬ草葉の上に。日影美しうこぼれかゝるなど。いと面白ければ。山路の苦しさもまだおぼえず。

　妹とわがうゑし垣根のをとこべし
　　つぼみを乳子や今朝見つくらん

くだるにつれて。木蔭すくなく日高くなりて。寺にておきいでし今朝の心地は。いづくへかうせつらん。あなくるし此籠の小さきよ。頭は上につかへてゆるゝまゝに打たれ。膝は折りたるまゝにすゑなほすこともかなはず。うちみじろげば底もぬくべき心地するはと言へば。そは籠の罪ならず。旦那のふとりすぎ給へる故ぞとて。かごかきつぶやく。九度山に下りつきたるは晝なりき。昨日の道を川づたひして。火ともし頃和歌山に歸りぬ。白樫氏にてかの山の物語するほどに。火影もねむげになりぬるは。夜のふけたるにか。

二日。けふも日よし。白樫翁は常に網もて魚とる事をたしまるゝが。今日は其えものまゐらせん。あとより來ませとて。いでゆかれぬ。晝をあひづに。息女などと打ちつれだち。荒濱といふをさして陸地をゆく。紀の川の海にいづる所なり。道に吹上寺によりて。本居大平翁の墓に詣づ。昔はさはなかりしときけど。かれ〳〵の草どもおひこりて蜘蛛の絲の處得顔なるは。はらひに來べきかたみのをしへ子たちも。のこ

りずくなりぬるならんと。あはれなり。

　春ならばふきあげでらの庭の草
　　貝ひろふ子も来てふまゝしを

翁は。舟に鮮らかなる魚と。ぬれたる網とをのせて。酒菓物と共に待ちゐたり。和歌山人の汐あみに多くつどふは。こゝなりとき〻しもしるく。沖に向ひたるかたの渚には。老若男女ひまもなし。舟こぞりて衣ときすてゝ海にいる。これを東國にたとふれば。かの和歌の浦は岩間にすがりて波と遊ぶ所なれば。大磯に似たるべし。この荒濱は幾町も遠淺になりて。砂とすまひ流れゆくさま。鎌倉の海にや似たるべき。時の間にあさりやうの貝人々の手に餘れば、さはとて舟より桶とりきたるに。これにも滿ちぬ。あはれ汐干狩の頃にあひて。家人子どもなど携へこば。いかに樂しき遊びならまし。歸りは舟にて。涼みの火影を漕ぎ分けつゝ。和歌川を來て。何がし橋のもとにつきぬ。

三日。けふも晴れぬ。井上はる之子の案内にて。四五人伴ひつれて鳴瀧といふに遊ぶ。紀の川を渡りて。やゝ山にいる所に寺あり。こゝを少し奥にいれば。其瀧なり。流れ潔くほとばしりて。木陰多く。外に訪ひ來る人もなければ。岩をむしろに涼みゐて。寺に歸れば、この庭にも小瀧ありて面白く絲を繰りかけたり。本堂のはしをかりて。わりごなどひらきつゝみやれば。瀧のあたりに楓三もと四もとたてるが。色づきそめたり。

　たきの音になつもわすれて山寺の
　　庭のもみぢ葉まだきそめけん

といへば。六浦ならぬに。こゝにも紅葉を止めてはと笑ふもあり。爲相卿ならねばなど戯れて。よきほどに白樫氏に歸る。今宵は歌よみ遊ばんとて人々集ふ。題をさぐりなどして。夜中過までうち興ず。其人々はあるじの翁を初めとして。七八人もやありつらん。

四日。なほつゞけり。近きほどに立たんとすれば。名殘にとて。また和歌の浦に遊ぶ。ますますつきせず。

　わかれても夢路にかよへいにしへの
　　あとなつかしき和歌の浦波

五日。けふも。わか山をさること東南のかた。五里許の處に加茂といふあり。このわたりに。不動の瀧また長保寺などの見所あるを。ゆきて見ずやと人の勸むれば。晴がたより井上渥美白樫などの人々と車にて出でたつ。紀三井寺のふもとをすぎ行くに。今日は千日まゐりとて。市人も田舍人も。黄なる藍なる日傘さしつゞけてゆきかふにあふ。猶今やうならぬこゝちす。心晴れたる海原を右にひかへて。いと早く鹽津といふ港につきぬ。こゝには渥美ちよ子の教へたる生徒ありて。其父は質朴なる老人なるが。よろこび迎へて懇に案内せんとす。加茂はこゝより一里許とか。かのさしつる寺は一條天皇の勅願所なるに。もとの和歌山城主の代々の御墓もあれば。いかめしきなごり見えていと尊く。物しづかにて世ばなれたり。瀧は裏見とて。岩の上より幅廣く落つるを。其うらに道ありてぬけとほりつゝ見るなり。日光のおもかげをうつせる心にやあらん。ゆきゆく道のほとりには蜜柑の木ずゑ。緑を深めて。黄に紅にひかり滿つらん秋の色さへ思はせたり。かへればかの老人きぬの裾まくり上げつゝ。菓子よ飯よと立ち走りつゝもてなしふるまふ。夕風涼しくなれる頃老人に別れて。こゝより和歌山に通ふ汽船にのる。和歌の浦名草の山。よび答へつゝゐまひたてる中を。一はしり行けば。馴れつる城は猶顔かくさで。夕雲の外に我をむかへつ。

六日。なほ晴れわたれり。あすはたゝんとすれば。別れを告げに我もゆけば。人も來る。夕方まで。白樫氏にて懇なる別れの盃をうけ

て。それより井上氏にゆく。わが旅の具はこの井上氏にあづけてあれば。こゝより立たんとするなり。白樫氏は廣瀬とて和歌川の西にあたり。井上氏は新中通と云川より東なれば。橋一つ渡りゆくに。川下近く名草山見わたさるゝも。明日はよその空になりなんと思へば。たゞならず。井上氏にては酒出だされて。物がたりなどするほどに。猶いとまごひに來る人ありて。嬉しく悲しく夜ふけにけり。

七日。日よし。明けぬうちにと思ひしを。とかく立ちおくるゝは旅のならひぞかし。白樫逞美井上三氏。父子兄弟車を連ねてはるかに送りく。いつかまたとて人々しめりがちなり。吾身は初めて來つる旅人なるを。夜に日に心を盡していつくしみもてなされしさへあるに。かくも別れも惜まるゝよと。胸ふたがりて詞も出でず。車をおりて立ちたる人は遠くなりぬ。日の影きら〱と城のやぐらにのぼるも殘り多し。

すみなれし方はそなたとみかへれば
なみだにかすむ和歌山の城

なほゆく〱。

人々の深きなさけを身ひとつに
あつめてしぼる我たもとかな

今日はながく紀の川ぞひに。さきの日と同じ高野の道をゆく。さるははじめよりかくとさだめたば、高野もついでにすべかりしを、熊野より伊勢路にかゝりて大和に入らんとせしかば。また和歌山に立ち歸りたるなり。しかるに熊野のかたは此旅行には日數足らずなりたれば。ふたゝび此道より吉野をさすこととなりて思へば、おぞましき二度の川づたひなるかな。妙寺村といふより高野道にわかれて。なほ川上へとゆく。橋本を過ぎ落合川といふを渡れば。大和なり。水の音蟬の聲。聞くもの見るもの。何となくなつかしきは。國の名にひかれたる心なるべし。五條などすぎて六田に出づれば。渡しあり。同じ紀の川ながら吉野川になれるぞうれしき。かなたより漕ぎ寄する舟に。桔梗女郎花など折り持ちたる老女を乘せくるは。吉野の秋風をまづ見せんとての山姫のしわざかと我ながらものぐるほし。渡りはてゝ。けはしき坂路をめぐりのぼれば。うちはれたる處に茶屋あり。水こひつゝ問へば。こゝぞ一目千本なりける。見ゆるかぎりはと。八田翁のよまれしも。此あたりならん。すゞしき陰は。いづれもきのふの花なりけり。

なほいかに花の雪ちるおぼろよの
その下かげの旅寢なりせば

吉野町にいりて。さこやといふに宿る。奧深き谷に臨める家にて。碧をたゝむ山々の色まどに移り。みおろせば。軒遠くゆらす賤が屋のなりはひも。一目にあつまる。

來てみればまじる浮世の塵もなし
よしのやまの夏の夕暮

さらでも山風に親しくなれる夜を。月さへ訪ひ來て。寐ざめの枕などさむることよ。

八日。日よし。案内者に從ひて仁王門を入り。まづ藏王堂。それより吉水院にまうづ。これは後醍醐天皇のおはしましける所にて。其御靈を祭りたれば。心とゞめて拜み奉る。勝手の社。水分の社。金峯の社など拜みめぐる。何れも木立ふかく神さびわたれりとは今さらなるべし。金峯の社に一社務所めきたる處にたちより。西行庵の事など問へば。上人自作の像は。春の頃參詣人多きをりは番人つけて庵に安置すれど。其外はこゝにすゑおきて守りまゐらするなりとて。奧の間にしるべす。近くよりて拜すれば。忍辱のうちに柔和のまなざし人を射るこゝちして。生きたる其人に接するおもひあり。またやゝのぼりて。草深き野路を薄高萱かきわけ〱暫しゆけば。音たてゝ落ち來る水あり。上人の常にむすびつる苔清水はこれ

なりといふ。

あな戀しこの苔水をむすびあげて
筆ぬらしけん人のおもかげ

少し廣やかなる所に庵ありて。昔のさまなりといへど。近頃たてたる物なれば。寧ろなくもがなとぞ思はるゝ。元の道にいでて下り下りて谷に入り。木ぶかき處をあへぎ〳〵ゆけば。辛うじて寺のやねみゆ。如意輪堂はこれぞかし。門をいり堂を右に見て。石の階を昇れば。後醍醐天皇の陵なり。松椎など玉垣のうち暗く枝をかはして。立ち去りがたき御前なりけり。

古寺のかけひの清水音すみて
みさゞきさむし秋の初風

僧に案内乞ひて。寶藏にいり。かへらじとの扉や何やと。古の名殘の品々みあさるもなつかし。案内者にいざといはれて。細道づたひしつゝ宿りに歸れば。日もなかばになりぬ。駕籠にてこゝをたつ。櫻の渡しといふをわたりて。上市村にいで。さかしき山路をゆくに。女郎花撫子。岸の左右にさききほひて。はねかへり袂にふるゝなど。くるしきうちにもおもしろし。弓立峠といふにかゝる頃。一陣の風をさきにたてゝ。夕立の脚をたばねて來る。假初なる茶店に雨やどりして。あな涼しといふ間もなく。はや日影あかき空となりたれば。道いそがせて多武峯をさす。

あきつ飛ぶみちの撫子露みえて
なごりしづけき夕立の雨

四軒茶屋といふは。眺望いとよき處にて。あすゆかん道のくま〴〵目の前に見おろさる。何れの山何れの岡かおろかなるべき。夕ぐれ近くつきて花中屋といふに宿る。夜にいれば冷やかなり。宿のあるじはもと此寺の僧にて。多武峯縁起の畫卷物もちたりときけば。今宵借りえて。ともしびのもとにて心しづかにひらきみる。

九日。けふも。涼しき内にと多武峯神社にまうづ。葉櫻の梢のひまに。朱の堂塔の朝日に輝くかう〴〵しさ。廊を右の方に登れば。寶物を置きならべたる室あり。中にも能の面五つ六つなど。心留とて暫しは足を留めたり。社をいでて長谷の道にかゝる。焼くるが如き山ぞひの道を來て。砂にまみれゆくほどにつきぬ。町を左に折るれば下界をはなれて寺の屋根高くあふがる。あはれ世々の文人歌人に導かれて。今日こそこゝに來にけれと。まづうれし。枕の草紙の貝の聲なゝ。世をへだてたるこゝちもせず。御堂にまうでて僧にしるべこひて。本尊を拝みなどす。

わが身さへ佛さびても見ゆるかな
松風かをるはせのふるてら

いつかはとおもひわたりし初瀬山
のぼるもしるべ世々の言葉の

初瀬川はさゝやかに麓を流れたり。二本の杉は何れとも人をしへず。晝すぎて明日までの車を雇ひ。この町をたつ。

暫しゆけば左の方に小さき流れあるを佐野とをしふ。三輪近き處なれば袖うち拂ふの舊蹟なるべし。三輪町を過ぎて鳥居の前に出づ。こゝより車を下りて。奥ふかく杉の中道を幾町もいりて。御社に至る。白木に檜皮の御あらかもいとさびたるに。金燈籠を軒のつまにかけ連ねたるなど。昔おぼゆる廣前ぞかし。參詣の人もわれならではなく。いとしづけし。石の階を下れば。右の方に杉の枯木のうつぼなるに。しめなはめぐらしたるは。是やしるしのと。見るものごとになつかしからぬはなし。

おもかげの夢も今宵はかはらまし
けふぞわけつる三輪の杉村

昨日遙かに。それかこれかと心にかけつる三

つ山も。ちかくなりぬ。前なるは耳梨。中なるは畝傍。左のは香具山。何れも笠など伏せたらんやうに見ゆる中に。畝傍は峯しげく木々おひたれば。兜などにやたとふべき。いと睦ましげに。昔の怨も淺からざるべし。物しらぬ人も此地にくれば。歴史讀みたうなると聞くに。ましてわれは童の頃より好みたる道とて。親しう心にゆきかひたる土地なれば。うれしさ餘りて夢のやうなり。道を折れ〳〵て畝傍山の麓にいづ。右の方に玉垣いかめしうしわたせる陵は。是ぞ橿原の宮に天の下しろしめしゝ御事のよ。少し入りて拜み奉る。奥は只廣々と木々の緑のみゆるのみ。あゝ天つ日と畝傍山と、此御はかの土と。二千五百年前の事を語らば答ふべきか。

御とらしにふれししらべか玉だすき
うねびの山のまつかぜの聲

北の方に少し離れて。綏靖天皇のも立たせり。前のよりはめぐりいと小さく。玉垣の中も現はに伺ひ奉る。松櫻など立ちならべる岡なり。日高く當麻寺につく。こゝは役の行者の開山とて。かの中將姫の蓮の絲もて織りたるまんだらを。本尊とすといへば。いとうるさきまで其姫の事どもときほこれり。されば閑寂清淨の地にて。二つの塔の山際にけむり殘れるなど。浮世の人に見せまほし。塔の前なる玉屋といふにやどる。夕立して涼しく暮れる。

十日。とき〳〵くもる。達磨寺を經て。龍田に九時まへにつく。龍田川といふいさゝけき川。村の入口を流れて。楓の木あまた岸に立てり。されど川も御社もまことのにはあらで。誠のはなほ五十町も山深く入りたる處にありといふ。けふ詣でつる御社は拜殿とぞ申すべき。楓の木影に。鷄むれ居て遊ぶなど。さはいへど神さびたり。來ん月は龍田の能をせんとの望あれば。殊に心こめてをがみ奉る。

たゞひと日われにかさなん龍田姫
紅葉かさねの舞のたもとを

少しゆけば法隆寺なり。伽藍の莊嚴。寶物の富麗。天下にならびなしと案内の僧の説きほこりたる。よしやそれまでならずとも遠からざるべし。金堂の壁に曇徴といふ百濟畫師のかけりしなど。眞僞はしらず。其中の二三にやとぞ思ふ。

郡山をいでて垂仁天皇の陵にまうづ。此岡は木立しげからず高からずして。池水にきよく影をうつせるも。さるかたに尊し。田道間守の墓もこゝにありといふを。あとにて聞きつるこそくやしけれ、菅原村の天滿宮また西大寺などめぐりて。昔遠くの奈良の町にいりぬ。猿澤の池にのぞめる魚屋といふにやどりは定めたり。今日の暑さは格別なる上に道いとあしく。ともすれば車かたむきがちにて危き所多く。かれこれの苦しみにて。いつよりも疲れたり。

一ゆあみして案内者を伴ひて見物にゆく。まづ池の岸に立ちて。あれは衣かけ柳とてむかし采女の何々と説き出だしたるが。やがて此地の形さの文字になりたるをもて。猿澤の池といふ歌ありといへるにぞ。かゝる時こそほゝ笑みあふ友ありせばと。戀しくなりぬる。ゆきゆきて春日明神の一の鳥居に出づ。こゝよりは木蔭ひまなく。左の方はやゝ廣き草村なるに。あれみよといふ方を見やれば。草葉の末より角のやうの物みゆ。鹿なるもうれし。すべて暑き頃は隠れゐて日を避くるなりとぞ。道の傍に茶店ありて。鹿にはまする卯の花團子を賣るあたりには。二つ三つもむれゐて客まち顔なり。取りて與ふればなれ〳〵しくより來て食ふ。あはれ家なるちごにみせましかばと。その喜ぶらん面影さへ思ひやられて。一人見ることのさびしさよ。二の鳥居よりは木かげます〳〵生ひ増さ

りて緑涼しきに。宮居あからに立ち續きたる。晝か夢か。はたうつゝか。神樂殿の奥には。女の童なるべし。白衣に緋の袴なるが。花をかざしたるやうの頭つきして二人すきかげにみえたるは。昔人の筆すさみにもいりぬべき樣なり。手向山も拜みはてゝ三笠山の麓にかゝる頃。俄に神鳴して夕立さつと來たり。

旅衣ぬれてもうれしとりあへぬ
三笠の山のゆふだちのあめ

雨やどりにとて立ちいる家は。三條の小鍛冶とて。刀劍あまた並べて人待ち顔なるは。良將を待たでも賣らんとなるべし。是も能にて親しうする中なれば。と笑ひながら小刀一つ求めていづ。世は泰平になりけるぞや。雨も名殘になりぬ。二月堂三月堂などを右にみて東大寺の大佛に至る。昔の人のと今更いふまでもなし。顔の長さ一丈六尺ぞかし。堂の內に博物館の設けあれば。是もめぐりて。與福寺南圓堂なども殘さず。宿りに歸ればたそがれ頃となりにけり。暮れはてゝ欄干によれば。涼みなるべし。池のかなたは一面のともし火となりぬ。其影水に長く落ちて龍となり流星となるなど。いと興あり。鐘の聲するも面白きに。雲やう〳〵薄らぎて月姿をみす。

もろこしに昔の人のながめけん
これや三笠の山のはのつき

神垣の杉の木かげにふす鹿の
すがたもうつるそらの色かな

十一日。はれたり。やどりを立ちて町を北に出で離れ。西に折れて奈保山の。元明元正二御代の陵にまうづ。

もゝしきにつゞく夢路のあともなし
いな葉をわたるなほの山風

其れより立ち歸りて。東大寺の正倉院に至る。今年は此御庫なる御物拜觀を許されたれば。かならずと思ひしを。今朝は夕立の名殘の空にて心にかゝりつるに。さきの陵拜みはつる頃よりやう〳〵日出でて。なごりなくはれたるぞうれしき。大佛の門前に車を乘りすてゝ。院の入口に至れば門はまだひらかず。こゝを守る巡査に問へば。今日は曇りたれば御庫はまだあかねど。既に晴れたれば掛りの人にしか申すべし。こちきませとて。くゞり戸おしあけていりぬ。これにしたがひゆけば。掛りの人いできて給仕に茶などはこばせつゝ、今少し待ち給へといふ。さればあくべきにこそと。天の惠みを思へばいとうれし。かくてこちへといふにつきて御庫の東側の梯子より昇る。掛りの人こゝにまちゐてねんごろに指し示さるゝを。自ら一人なればくはしく拜觀するも。一つは掛りの人の親切なるに由るなり。そも〳〵此正倉院と申すは。聖武天皇の御冥福を祈らせ給はんとて。其御遺愛の御物を此寺にをさめさせ給ふによりて立ちたる御倉なり。其のち絶えず勅封の處となりたれば。昔のまゝに姿かふべき由もなし。されば畏くもその大御手に觸れ奉りたるものなるは申すまでもなく。御冠。御袈裟。さては御杖。御如意。御旗やらの物まで。見奉るまゝに。御口に御念誦となへさせ給ひし御おもゝちまで。恐れ多くも胸に浮びて。かの大佛殿の綱ひき給ひし時にあの御沓やめされし。三寶の奴とぬかづき給ひし時のはこの御裝束なりけん。など忍び奉られて。暫しは今の世人の心地もせず。すべて精巧華美なること驚かるゝといふも愚なり。此處をいでて聖武天皇とその后の宮との佐保山の陵に詣づ。さきには其の御手に觸れたる御かたみを拜し。今は此土となり給ひし御跡にまうでて。かへす〳〵も忍び奉るは千年の昔なりけり。

佐保の山草葉しづけしふる寺の
かねに千年のこゑを殘して

それより西を指して法華寺といふを過ぎ。平

城天皇の陵にまうづ。たが手向けけん。蓮の花の枯々なる玉垣の外にたてり。成務孝謙二御代の陵にまうづ。このみさゝぎは道一つ隔てゝ。何れも小池の上にたゝして似たる様なれば。世には鶴亀の陵などと稱へ奉るとぞ。神功皇后のは小高き岡をのぼりたる上にあり。玉垣の外には池ありて。村の童ども泳ぎゐたり。外のよりは木だちなどふか〴〵としていとけだかく。御功にもおのづから通ひたるかと思ひ奉れば。何か歌一つと苦しみたれど終に得ず。こゝを下りて砂石のいとあしき道をまがりうねりて。辛うじて一時も下る頃にやありけん。木津町に出づれば山城になりぬ。亀岡氏によるに。必ず一泊をと留められて。今宵は留まることに定む。木津川に向ひて遠くは愛宕山も見やられ。又うしろには三笠山も顧みられたり。酒出でて大酔になりぬ。疲れたるべければとて下婢枕持てきぬ。あはれ一睡のまに何をか見まし。

　すぎつる跡を都になしてみん
　　夢ふきおくれ木津のかはかぜ

十二日。くもる。今日は立たんとしつるに。あるじ舟のまうけしてあればいざといふ。すゞしきうちに京までと思ひしをといへど。それはひるからにてよしとて。許さんけしきなければ。伴はれ行く。あの山はなに。そのこなたはいづくと。指し示さるゝは名所ならぬもなければ。晝のうちを漕ぎ行く心地す。あるじは魚ねらひつゝ網を腕にして舳先にあり。舟人は眼をこらし艪をあやつりつゝ後へにあり。其中央に眠るが如く憂ふるが如きおもゝちしたるは。歌おもひする客なりけり。一水さつとほとばしりくれば。銀の鱗すでに舟に躍る。忽にして舳に遊び。忽にして俎に上り。忽にして椀に入れば。酒ははや九分になりぬ。目を望めば。身は遂にあるじの手の内に落ちてけるかな。家に歸りて欄干にせなかおしつゝ。うち見やれば。

　うちむかふ故郷びとのおもかげを
　　みそらにゑがく雲のいろかな
あすはわがたもとの露となりぬべし
　あたごの山の夕暮のくも

酒冷え物語果てゝ。あるじは階をおりぬ。月は峯をやゝ離れぬ。

　三笠山つきにむかしのあと問へば
　　あらしにひゞく古てらの鐘

十三日。てる。月瀬の梅にはかならず。との詞をあとにして急ぎ立つ。井手村といふに出づれど。玉水といふ名はあれど。花の露そふとよみけん流も見えず。河づたへを來て伏見の里に渡り。いなり大佛などを右に見つゝ。三條小橋の萬屋といふにつく。十時に少し遅かりけん。まづとりあへず。護王神社の平野氏をとふ。あるじの曰く。猪熊翁は君の此地につかるゝを待ちてあり。それにもしらせん。さるにても物語せんは水邊こそよけれ。いさといはるゝに。あるじをさきに立てゝ。何某のもとなる何某亭に登る。梢茂り日影遠く。川風よくいるところを肴にて。盃一つふたつ廻らすほどに。猪熊翁來れり。あふより肝膽を顯はして。文を論じ歌を語り。面白き間居となりぬ。翁は京都師範學校の教官ぞかし。

　たちよれば夏も殘らずなりにけり
　　おなじながれの加茂川のみづ

と記して見すれば。おきな。

　老いぬともおなじながれの末かけて
　　そこまでくまん鴨川のみづ

と返しする〳〵。身は實盛となりてもとて。大笑となりたれば。また。

　篠原のむかしのあともかたらはん
　　あやせの月に小舟ながして

とは。こん年の夏東京に行かんとの。翁の契

をかたむるなりけり。

　見わたせばわが友ならぬ山もなし
　　こゝもへだてぬ森の下かげ

くれはてゝ。車に送られかへる。わが住む處は三階にて。夜に入れば川原涼みの燈火空にうつりて。手にとるやうなり。笛鼓の音。氷賣る聲など。たゞこゝもとなるも涼しきに。東山の火影畫の如くうちむかはるゝなど。樂しき旅寢ならぬかは。

十四日。はる。昨日平野氏とやまめぐりの契しつれば。暁方寢ざめて聞くに。雨の音するやうなり。くちをしやと戸を押しあけて見れば。空に一點の雲もなし。あな耳にぶ。はやくも川音にてありけるぞや。燈火のもとにて朝飯して。御茶屋といふまで行く。三條の大橋を渡るに。東山の藍色にて打ち臥したるさま。朝景色は又ことなり。茶屋にて平野氏と出で逢ひ。八瀬を指して行くに。大原木いたゞきつれたる女。あまた出で來るに逢ふ。踏み分け行くほどに八瀬は果てゝ。大原村となる。音なしの瀧といふを見て。いく度も道踏み迷ひつゝ。もとの道に下り。小田の中道づたひして。西の山そばにうつりゆけば。瀧の清水としらべせる水あれども。實は名にしかず。猶おくふかく入れば。寂光院なり。門は鎖したるやうに竹を横に二つ渡せり。案内云ひ入るれば。四十の坂を上か下かの尼一人出で來て。御堂の方にといふに。わらぢ解き捨てゝ從ひ行く。本尊は地藏尊にてきらめき立たせる奥の方に。建禮門院の御像を拜み奉る。墨染の御衣の上に。白絹をまとひ給へるやうにあふがるゝは。安徳天皇の御かたみの御衣なりとかや。御傍には阿波の内侍のも見ゆ。寺のさま磨かねども。世の常のとは清らかにて。昔の姿を失はじと見ゆるは。尼等のゆゑにもあるべし。庭に出でて見れば。御堂の前に池ありて。櫻の大木影をうつせるは。波の花こそとよませ給へる跡ぞとをしふ。

　みゆきせし朧のしみづ影たえて
　　さきちる花の春やいくはる

北に〳〵と江文峠を越ゆ。是さへあるに。またひとつ靜原村過ぎて奴坂にあへるこそくるしけれ。されど前に鞍馬に出でん望みある身は。猶何かに引かれゆく心地す。川一つ渡りて里におりぬ。疲れも甚しければ。しづかに休まんとて。酒命じなどするほどに。一夕立あらひ來る。今はとて勇氣を杖にて。八町の坂を上りはつれば鞍馬寺なり。雨止みて夕日すゞし。

　くらま山谷間のすぎのうらみえて
　　ゆふだつあとの風のすゞしさ

猶奥の方に天狗杉を見て。僧正が谷にくだる。此山は麓より杉一面にて。入るにつれて老木枝をかはし。ひる物すごき處なり。かの杉のもとには供物などそなへたれば。神か何かのおはすらんと。おぼえず髪もふとる心地す。

　ふきすてゝ花にしばしの夜嵐も
　　神はこの木のものとなすらん

僧正が谷には大魔王の堂ありて。此あたりはことに暗し。夏もかさなる落葉踏み分けつゝ。やう〳〵漲り落つる川瀬に降りつきぬ。貴船とぞいふなる。小橋渡りたる右の方に鳥居の立てるは。明神なり。本社は猶六七町も奥と聞けば遙拜して川に沿ひつゝ下る。

上加茂に詣でしは。入りかゝる日のいち高き杉に殘れる頃なりけり。神殿のいろ。みたらしの音。例のいさぎよし。馬場などそれと聞きつつ川瀬に出でて。此所より車に乘り。平野氏とは道より別れて。すゞみの興にいる頃宿りにつきぬ。今日あるきつる道の程は。八里もあるべしとか。

　ひがし山ともし火青くまたゝきて
　　まくらになるゝ加茂の川風

いざゆあよいざゆあよ。

十五日。けふもよし。東山めぐりやせまし。泉涌寺へや參詣せまし。など思ひ居たるほどに。客ありて若王寺の瀧にものせんといふ。うち連れて大橋を渡り。南禪寺永觀堂などに休みつゝ行く。永觀堂には池ありて楓あまた蔭を深めたるは。秋ならましかばと見ゆ。御堂の方に人聲かしましくさわぎあひたるは。京の盆とてなるべし。猶ゆけばかの瀧の寺なり。山を後ろに入れば茶屋あまたかけわたして。酒飲み居るもあり。こゝは兩岸高く大木聳えたれば。風なくてもいと冷やかなり。瀧は岩間を走り落つるを。あびさせんためにや。筧に受けて中空より眞直にかゝるやうにせり。わがえたるむしろは高き所にて。あたりに亦人なければ。下界の客を見おろしつゝしめやかに物語す。こゝは二の瀧とかや。山を下れば又もとの焦熱地獄に入りぬ。道より人々に別れて。ひとり知恩院より高臺寺をぬけて淸水寺に詣づ。御堂を出でて。田村堂の前なる茶店に休みつゝ。熊野の謠口ずさびゐたるに。店もる翁。釜の下に柴さしはてゝ。あれは何の山これは何の御寺。今熊野いなりの森などは彼方に隱れて。今は見えがたしなどいふ。歸りには八坂神社にまうで。祇園町より四條の橋を渡り。宿に歸るに。盆なる故か。常より賑はし。くれはつればすゞみ見に行く。數萬の燈火。天を焦し水をやきて彩しきに。氷嚙む客あり。瓜はむ客あり。行く人歸る人。たゞうごめくやうにて。かへりてあつきところへ涼みにゆくも。珍しきは人心ぞかし。

ともし火の影をはなれてやすらへば
　ひえのねおろし袖にふくなり

十六日。くもる。あさとく平野氏にさそはれ出づ。今日は嵐山にとてなり。太秦といふあたりの田つらをすぐるに。ほに出でてうち靡くは。かの淸少納言が物見車のすだれに入りたりけんけしきもかくやと、ながめ行く道のかたへに。太子堂あり。しるべに從ひて草踏み分けつゝ右の方に入るに。堂は六角にて檜皮ぶきなるが。錠さしかためてあり。あたらこゝまで來つる物をとつぶやけど。寺守をらねばせんかたなし。こゝの御像は吉風の御姿なり。

渡月橋を渡りて北に折れ行く。道は川づたひにて嵐山の麓なり。こゝかしこに秋の花のひもときたるも見ゆ。川は潔く玉躍らせて走りゆく。向ひに立てるを龜山といへば。昔の友に迎へらるゝ心地す。となせの瀧といふもしたしくながれて。更をわかためにとられし、道はまりて坂路を高くつゞらをりて上れば。寺あり。大悲閣といふ。住持出で迎へて。風よくとほす所に座をすゝむ。山ごしに東山殘らず見ゆ。わが物がほに口とく地理など敎ふれど、歎おもひ居たる折なれば。忘れにけり。法輪寺は橋より少し南にあり。これもめぐり果てゝ。川向ひのほとゝぎすといふ茶屋に入りて。高殿より眺め渡す。下行く水のさま見上ぐる山の景色。さらによし。肴はと問へば。桂川の鮎ありといふ。さはとて盃めぐらしつゝ口ずさむも例の唯言なりや。

大井川たえしみゆきのあと問へば
　聲せぬ波にまつ風ぞふく

いく人の花にいとひし末ならん
　露ふきおとすさがの山かぜ

小雨やう〳〵こぼれいでて。眺望あたらしくなりぬ。山の綠は薄く濃く煙の底に沈みて。還繪の山水にも似たるかな。

あらし山つきぬなごりをおくるとや
　雨にすがたをかへて見すらん

今はとて。一時もくだる頃こゝを出でて。野の宮に詣でんとするに。車夫道を知らず。處の人にきゝなどしつゝ。竹むらの中の淋しき道を

少し入れば。そこなりけるぞ嬉しき。小さきほこら三つありて。小柴垣黒木の鳥居のくづれ殘れるなど立てり。榊の卷のあはれさ思ひ出づれば。立ち去り難きも一つは處からなるべし。

われのみとおもひし物を野の宮の
くろ木の鳥居あめもとひけり

上嵯峨の釋迦堂を左に見て、廣澤の池の汀にいづ。池には蓮菱など一つらに緑を深めて。見渡し清し。燕の高く低く一つ飛び居たるのみにて。水鳥も見えず。

おのれは明日出で立たんとすれば。猪熊翁に別を告げんとて共に其家を訪ふ。忽に酒出でて文話盛んなり。翁は愛國の情胸に溢れて教育の志いと深きあまりに。なほ若輩のわが說をも信じうけらるれば。今日訪ひつるをかへすがへすもよろこばれたり。

かたらへばこゝも浮世の外なれや
さが野のおくのあらしのみかは

など物にしるしおきて。夕暮近くなれば。暇を告げ平野氏にわかれて急ぎ宿りにかへる。今宵は名高き大文字火などのともるをりなれば。それ見んには。わが宿の三階に及ぶ所なしとの事なれば。急ぎしに。人々押し合ひつゝ。屋根に出で手すりに上りなどしてあり。恰もよき時に歸り着きぬるかな。雨も晴れぬ。眞向には如意嶽の大文字。北にふれては舟岡山の舟。さては鷹が峯の左大文字など。あざやかなり。木蔭に少し隱れたるは松が崎の妙法なりと云ふ。あれよ〳〵と云ふ内に。はやかたへより薄らぎ行く。

世の中の姿を見せて山の端に
誰が書き初めし文字の燈火

洛中の少女どもは晴衣着飾りつゝ。これ見んとて橋のあたりなど指して爭ひ行く。之も今日歸りくる道にての見物なりき。

十七日。はれたり。向ひ馴れたる東山を顧みつゝ。二番汽車に乘りて出で立つ。平野氏など停車場まで見送られたり。大阪に着きて加藤氏に宿る。梅田氏をも訪ひつ。

十八日。くもる。朝は當地の博物場など見めぐり。夕方は明石氏を訪ふ。夜に入りて歸るに。風烈しうなりて雨大きく。嵐めきたり。

十九日。風雨荒く吹き降り暮らす。何所へも出で難し。夜に入れば空ます〳〵惡し。

二十日。おだやかになりぬ。今日は堺に寺前より加藤氏に伴はれ行く。汽車より途に下りて。住吉神社に詣づ。此社には是にて三度なれど。松の色燈籠の樣いつも新なる心地す。

我ためはねぎ事もせじ神よたゞ
御庭の松を千代に枯らすな

家人にいつか聞かせん住吉の
松にしらぶる神風のこゑ

堺にては潮あみせんとて。濱の丸萬と云ふを指して行く。かくて欄干により西瓜など切らせつゝ。あな涼し〳〵と云ひ居たる折こそあれ。さうな來て雨戸くらんとて急がしうす。否。さしては暑うてと云へば。今に一雨來るべしとてくり終るほど。風横さまに吹き荒れて。盆をこぼす樣なり。さればこそ違はざりけれといふいふ。間の一間に押し籠められつ。戸の隙より見出だせば。怒れる波の頭振り立てゝ。磯に爭ひ碎くる樣。木々の眞白に裏返りて折れ返る樣。いと凄し。やう〳〵靜まりて空の一方は蒼に返るもあれば。今はとて大阪に歸らんとす。大和川は常に水なき所なるを。昨日の雨にて濁れる波岸を浸し。橋の桁のあまた水の上に顯はれたる。かねて聞き及べる洪水の面かげを見ることよ。加藤氏に着けば。其あたりの川には水高く。今にも橋ひたりて落ちやせんとて。區役所警察署の提灯足をそらにて行きかふに。橋の中程には篝火を焚きて。水のふかさを測り居たり。宵は雷の如く嵐の如く聞えて。

膓を冷やす。されど我住む陸に及ばん憂はあらじと云へば。やゝ心落ち居たれど。想ひやらるゝよその空は如何ならん。

廿一日。はれたり。晝前より高津の社より天王寺に詣づ。今日は月なみの大師めぐりとて。いづこも／＼老若男女集ひ居て。黄なる袋を胸にしたるが。涼しき蔭に施行の水茶など受くるもあり。此袋には米を入れて。四十いくつとかの大師々々に供へ行くなりとぞ。

佛をがむ人こそ集へ靡きけん
けむりの末のさかえしられて

高津にて詠みけるなり。歸りには茶臼山の雲水といふ寺にて。物食ひ酒飲みなどしつゝ涼む。こゝは精進料理ふるまふ處にて。童法師のみ給仕しつゝ。經机やらの物に芋豆腐などの皿置き並べて。持ち出づるが面白ければとて物したるに。今は女の交れる寺となりぬるこそあさましけれ。廚屋の方をかいまみれば。今日はかの大師參りにて物よく賣るゝとにや。ゑましげなる老僧の鍋の中に箸さし入れつゝ手つだひ居るも見えたり。

歸れば明石まつ子より文來れり。櫻の宮の夕景色に必ずとあり。やがて其妹も同道して。夕日の水を染むる頃。宮の前なる何がし樓に着きぬ。東の方には生駒山隔つる雲もなく。うち晴れたる青田の面に假庵のかりそめなるが所々に見ゆるなど。物靜かなり。西は夕日大方隱れて。殘れる雲のまん／＼たる淀川の水をやくも。また更なり。ひぐらしの聲を聞きつゝ。蓮亭の飯調ぜさせてもてなさるゝに。立ち去り難きはあるじも客も同じ心ならざらんやは。

蓮かをる櫻の宮の夕風を
明日は雲井のよそに忍ばん

とて。日もくれかゝればあるじを勸めて。かへさにつく。

今宵はかねて堀江の伯母君を訪ひ參らせん心構へあれば。其由をのべて。難波橋より別れて衣笠町の其家に行く。知らせも置かざりし事なれば。驚かるゝ事限りなし。あはれ我母上には九人の姉妹おはしつるに。今は皆失せて。たゞこのをば君のみになり給へるを。十一年も逢ひ奉らねば。夢の樣なり。あるじの從兄もをりよく物へ行きたるが歸り來て。昔語り興そひぬ。逢ひて語れば十一年の心地もせず。昨日今日のやうなるも怪し。夜も更けぬれば今はとて。

十年へて君に逢ひぬる嬉しさを
歸りて告げん母のいまさば

廿二日。けふもはる。加藤氏に別を告げて岐阜行の二番汽車に乘る。高槻より山崎にかゝるあたりは。十九日の雨に淀川の水溢れて。目もあてられぬ樣なり。家は水の面に空しく立てる中に。旅人休まする所にや。膳椀飯櫃など取り散らせるまゝに殘れるを。主はと問へば。答へぬ波のみ今もごう／＼と音するこそあはれなれ。此さまに向ひては汽車の響きなど云ふべきものとも覺えずかし。

夕方岐阜に着きて津の國屋と云ふにやどる。安藤氏來りて鵜飼に案内せんと云ふ。此水にては如何ならんと危みたるを。今宵初めてと聞くぞ嬉しき。急ぎ湯あみし夕げも終へて。伴はれ出づ。町を離れて長良川の橋を渡る頃は。やう／＼暮れそめたり。渡り果てゝかなたの岸より小舟に乘らんとす。金華山の黒く影を殘す麓には。川ぞひの燈火波にきらめきて。先づ景色よし。あれなるが先つ年宿りし家よなど眺め居たるに。いざ舟にといふ。舟には簾うちめぐらし提灯ともし連ねて。川風あるじがほに待ち居たり。なつかしき友に迎へられてむかしの景色を見つゝ行く程に。舟は眞砂多き汀に寄りぬ。猶同じ物見の舟も三つ四つ集ひぬ。こゝにて酒酌みかはしつゝ鵜舟の下るを待つなり。

自らは、一日汽車にゆられたる疲の上に。酒めぐりて風に吹かれ居たれば。何となく眠くなりて、舟ばたに枕しつゝ寐入りやしけん。俄によぶ聲す、起き上り見れば。今ぞ七つの火影。山のそひより顯はれ出づる。あれよ／＼と云ふほどに。鵜を勵ます聲近く聞えて篝のほのほ。鵜の羽風。消されては焼き。焼かれては消す。鵜舟は巴をなし輪をなして亂れ廻るを。我舟は其間を見つゝ從ひ行く。愉快の極ともやいはん。忽にして天地闇にかへりて。たゞ物見舟の螢なす火影を殘すのみ。あはれ兼好法師に見せましかば。

　明日までの鮎の命もあはれなり
　　波にきえゆくかゞり火のかけ

名残惜しさをいかにせん」など口ずさみつゝ宿りに來ぬれば。夜も半なりけり。

廿三日。日よし。一番汽車にて靜岡に行く。暑さの外には記すべき事もなし。

廿四日。なほ晴れたり。くだりしをりは雨雲八重におほひて。富士の姿も見えざりしに。今日は晴れて其影を窓の前近く見せたるこそうれしけれ。頂はかりの雲なくて。雪ひとむらも見えず。十四五年の昔。われ初めて東京に上りつる道にて。此山に向ひつるをりは。

　うき旅の夢なぐさめし富士の嶺に
　　むかへば今はふるさとの空

今日の心地は。高根も空に思ひ知るらんかし。磯洗ふ波。絶えず眺めに入る。

　昔人いかにながめしわがためは
　　いとうれしくもかへる波かな

あな樂し。家人の前に旅寐の夢を語るも。三時よときの内になりぬ。馴れし垣根の秋風も。今宵は枕の物とならん。富士の嶺はあとに遠ざかりぬ。箱根の雲は見えずなりぬ。あはれ戀しかりつる武藏の海よ。

千里の春

依稀千里。山また山。水また水。近き水は澄みて山の峰をうかめ、遠き山は霞みて水と共に藍をなかす。此間に、線を引き行くものは何ぞ。一列の汽車。いまや東京より東海を下りつゝあるなり。海に面して窓に倚る客。鉛筆と紙とを手にして寫しいだせるは。歌か詩か抑も畫か。

七砲臺邊波おだやかにして。高く低く群れ飛ぶ鷗。落花の風に飜るに似たり。帆を半ば張りて出で行く船あり、櫓をあやつりて横ぎる船あり。房總二州の山は霞に消えて探れども見えず。

松青きところ。色どりそふるに桃の紅なるを以てす。自然は此美をおくりて旅客をなぐさめ、詩人は彼美を詠じて春に謝せんとす。藤澤の野。山北の谷。人ごとに唯うつくしと叫ぶ。

三保の松原けむりわたりて春は畫の如し。磯にくだけて折れかゝる波。波路の末にうきたつ雲。何ものか造化の妙筆に漏れん。近き舟はゆけども遠き帆影はうごかんともせず。杳として見とめられたるは伊豆なるべし。富士は水彩色もてつくられたるが如く。窓の右に立ち又左にあらはる。

平原千里。麥は綠に菜種は黄なり。熱田の祠を左に見て春風に吹かれゆけば。名古屋の城はまがはぬ影を見せそめたり。田夫は金の鯱を指さして妻と語り。行商は旅宿の可否を評して我好むかたへと人をすゝむ。

彦根去り草津來り。煙は早くも瀬田川に横はりて京都も近くなりぬ。朝日將軍の遺跡も今は何れのところぞ。問へども答へず。霞にたゝまるゝ遠近の山影。或は淡く或は濃く。鳰の浦風波に眠りて粟津の松原ひとり昔に似たり。

東寺の塔は睦まじく我を迎へて立ち。鴨川の水はなつかしく我をむかへて歌ふ。最愛の母にあひ。なつかしき妹と語るに似たるは。いつも京都に着きしときの心地なり。年一年よりも感情其深さを加へゆくを覺ゆ。

山紫に水あきらかなるところ。唯夢の如く現の如く、三條を渡り四條を過ぐること日に幾たびぞ。祇園を背に折りていでたち來たる大原女も、いつしか我となれ慣し。如意嶽より吹き來る春風は。輕く我袖を拂ひて又長き堤の柳を吹く。

たぐひなき晴天は。花の如き少女をいざなひて、西へ東へと群れはかしむ。さしつどひたる日傘は、橋の欄干と共に水に影をおとせり。花に誘はれて佛にまうで、佛に導かれて花を見る客。けふも清水觀音ノ堂前をみたしぬ。舞臺から、より見おろす人。舞臺の下より咲きほこる花。あたかも一幅の四條畫なるに。嫗は此間に立ちて蕨餅めせなど呼ぶ。暫し休みてながめわたせば。淺黄に霞みわたれる八幡山崎のあたりもおもしろきに。東寺の塔を松の間に黒がきなせる筆の力こそたくみなれ。

燈火の影は水にうつりて星の如く花の如し。祇園の夜櫻みんとする人は圓山へと向ふ。一もとの老木は枝を垂れて篝火のほのほにまもられ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれては額を打つ。田樂を賣る聲。茶をすゝむる聲。この花の前後に山彦をかへし來れり。夜はまだ早し。歸さには祇園町の都踊見にゆく人もあら

ん。

西山の花みる人は多く先づ御堂を指す。松青く樓門赤く。茶煙たえ〲にあがりて。花きはめて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え。鐘樓は昔を説きて香雲の中につゝまる。誦經の聲遠くひゞきて。鶯の歌とこしへに高き梢にあり。

重なる岩根をふみしめて生ひたつ松。その間を點綴して咲きほこる花。嵐山の春こそ今たけなはなれ。小舟にのりて漕ぎゆく人あり。岸のこなたにてながむる人あり。一すぢの渡月橋は錦の如き袂をのせて。此大井川を横ぎりゆく。散るとなき花は風にたゞよひて主なき後に落ち。ものいふ花はかたらぬ花にひかれて此岸にます〲咲き加はる。水清く岩をあらひて巖とくだけ。山白く煙をはなれて空にたゞよふところ。此美は彼美と相映じて自然の彩色をなす。坂をのぼりて大悲閣に至れば眼下にひろげらるゝ一幅の圖。柳櫻をこきまぜて恰も西陣を織り出たせる如く。又友禪を染めなせるが如し。

途に太秦を過ぎて廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに靈樓の瓦を染めて。春ものさびし。茶店あれども客來らず。少女は落花を風に任せて眠り。兒童は仁王門に紙礫を打ちつけて去る。

暮色は東山をこめ。叡山をめぐり。やうやう鴨川に襲ひ來れり。清水の塔も半かくれぬ。大文字の跡も姿をかくしぬ。紫に紅に藍に墨に見る〲いろどられゆく山影。うすくこく青く黒く消されゆく人影。詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和。四望たゞ寂寞。かへりみれば西山もなく北山もあらず。

和歌山に友あり。來れとすゝむ。和歌山は山のかたち魚の味。なにとなく我故郷に似たるをもて常にわが好むところ。遂に京都をうしろにして桂川をわたる。菜種いよ〲黄にして春さらに深し。麥穂をあらはすこと一寸。少女兩三赤き帶をからげて畑の中をあちこちとゆくは。花ある社に詣づるなるべし。春日あたゝかにてらして。田村に父母の里を見舞ふ新婦も見ゆ。

汽車を下り大阪を經て更に阪堺電車に乗る。住吉の鳥居は松の木の間に近く我を送りて立ち。淡路島は霞のひまに遠く我を迎へて浮ぶ。淡路の杜におもかけみせたる紀州の山々。汽車をおりてもなほはなれず。沖の帆影と共に永く伴なひ來るは。歌よめよとすゝむるにやあらん。

堺より和歌山まで行程およそ十三里。其半なる處に茶店あり。銷茶屋といふ。缺けたる茶碗。剝げたる膳。旅は却りて物足らぬこそ樂しけれ。花はちら〱と客待つ車夫の背なかを撲つ。

路は登りになりて右に谷川ひくゝながれたり。椿紅なる川ぞひの道に鶯をきゝゆくたのしさ。此時の心。蝶ならで又誰かは知らん。雄の山の峠にも着きぬ。見おろせば未來の路は白雲の間にありて春更に新なり。おりのぼる人馬たゞ蟻の如く。花を出でて花に入る。

紀の川は近く流れて帶の如し。名草山は遠く霞みて眉に似たり。其間に影を見せたるこそ和歌山城なれ。あなたなつかし。我しば〱遊びしはかの岡たりしよ。一路の春風我を迎へて車は早くも地藏の辻を行く。

紀三井寺は和歌山を距る一里にして東南のかた名草山の麓にあり。花見をかねて來り寒する人なきも切らず。風なく雲なく日あたたかに霞みわたる海原。すべて眼界の無盡藏なり。入江をへだてゝ人家の如くなれば和歌の浦の拜殿なるべく。はるかかなたには。隣津の人家より大島の崎までたゞこゝかしこに見ゆ。水あき

ぎなる波ぢの末に。煙の如く浮雲の如くなるは淡路ぞと人のいふに。猶目をつくれば。それにつゞきて阿波までも面かげ浮ぶが如し。此間に點を打ち線を引きてゆききする舟。そも〳〵いかなる詩人をか載せたる。

和歌の浦にわたりては蘆邊屋といふ樓にのぼる。見かへす紀三井寺。晩霞の上に立ちて猶わがためにや語るらん。汁に浮べる牡蠣。鱠にもらるゝ鯛。たれか此風景に對して箸を取らしむるものぞ。友は盃を手にして片雄波の名所を説き。我は波間の夕日をながめて畫人ならざりしを憾む。

かへりて再び京都を訪へば。春くれんとして三十六峯煙雨の中にたてり。母衣かけてゆく車。傘さして來る人。三條橋頭また昨日に似ず。

七株松

恩愛刃

弦月旗

落合直文

七株松

七株松とは、おのが故郷の家の庭前に、父君の植ゑ給へる松なり。植ゑ給ひし年月は、明治十五年の冬、霜雪降り氷る時なりけり。その折一封の書を寄せ給へり。その中に、「汝等兄弟どもの齢を祝ひて、七株松を植ゑたり。この松の變らぬが如く、よく霜雪に堪へて、學の道を勵み勉めよ」とあり。他の兄弟は知らず、おのれは深く肝に銘じて、一日も忘れしことあらず。

わが家は伊達家の門閥、しかも一家の筆頭にて、維新前は藩中にても、最も尊敬せられたる家なり。祖父の君、理財の道に長じ給ひしかば、家産も他の家には劣らず。父君そのあとを嗣ぎ給ひしが、夙に主家の爲に東奔西走、多くは家におはせず。維新の際、兵に將として、旗卷などにて激しき戰をし給ひしことは、藩人のよく知る所なり。その後幽閉せられたるのみならず、家祿をさへ減せられしかば、家政の衰微いふばかりなし。仙臺を去る三十里、一の仙鄕あり。氣仙沼といふ。そのわたりは、すべて舊領地なりしかば、遂に一家をまとめて、そこに退隱せられたり。館のある所は、氣仙沼より半里ばかり南なる、松岩といふ所なり。後に山を負ひ、前に海を控へ、雲は庭に下りて、自然の籬をなし、波は軒に寄せて、また自然の池をなせり。かゝる所にしあれば、俗塵絶えて至らず、ただ聞ゆるは、舊臣の父君を慕ふとて、朝夕歌ふ謠の聲のみ。

おのが兄弟は七人なり。上には姉と兄と、各〻一人、下には弟三人と妹一人とあり。姉一人は家にて育ちしかど、他は皆里子となりて、人の手にて育ちたり。父君はさまで心にとめ給はざりしかど、母君はいかにして、このあまたの兄弟を教育せむと、常に案じ煩ひ給ひたりとか。明治四年の春ばかり、おのれと次の弟とを携へて仙臺に上り、それぞれ學校に寄宿せしめ給へり。一人手を離るれば、母君はしばしも、心を慰め給ふ折なし。その後姉は他に嫁ぎ、おのれは落合家に養はれ、一人の弟は壹岐家を嗣ぎ、妹は飯田家の養女となれり。家に殘れるは兄と末の弟とはての弟と三人なり。兄弟の多きは、兄弟たるものゝ爲には、いふべからざる幸福なれど、親の身に取りては、これより心づくしなるものはなかるらむ。

七株松は七人の兄弟にちなみて、植ゑ給へるものなり。その松は七株とも一ところに生ひたれど、われわれ兄弟は未だ嘗て、一堂のもとに會したることなし。おのれ松岩にありし頃は、三人の弟と妹とは里にあり、おのれ仙臺にありし頃は、姉と兄とは松岩にあり。兄來る時は弟去り、妹去るときは姉來るなど、あるは二人あるは三人、多き時も、四人より多かりしことはなかりしなり。ことにおのれは早くより都に上りしかば、兄弟團欒といふ快樂を得ること、最も少かりしなり。

同じく十一年、次の弟都に上れり。他鄕にて兄弟に會ひしはこれを始とす。あくる年、その次の弟また上れり。それより二年を經て、妹また上れり。されどその折は、次の弟家に歸りてあらず。十五年、次の弟上れり。その折はその次の弟、大阪に行きてあらず。あくる年、はての弟上れり。他鄕にて四人會したるはめづらしなど語りあふ。二十年、おのれ、根岸に寓居せり。その年の五月、その月の

三十日、夜に入りて門を叩くものあり、誰ならむと、出でゝ見るに、大阪に行きたる弟なりけり。うれしと思ひて、迎へ入れたり。その弟養家に急用ありて、明日拂曉、こゝを出で立たむの心なりといふ。兄弟五人會せむことは、生れてはじめてなり。明日は他の弟と妹とを招かむほどに、一日ほど出立を延しくれずやと乞ふ。養父の身にかゝはりたる一大事、とてもさることならずといふ。他の弟妹に知らせで、そなたを出で立たせむには、後にて恨まれもやせむ。よしこれより使をやらむとて、下谷の車坂、神田の今川小路、本郷の森川の三方へ、手をわけて人を走らす。その時午後十一時少し過ぐる頃なり。一時間ばかりありて、車坂の妹訪ひきぬ。また三十分ばかりありて、二人の弟前後に訪ひきぬ。五人一室に會したるその夜の喜、なにゝかたとへむ。維新後家政衰微、完全なる教育を受くる能はずなど、一人がいへば、兄弟のうちにて最も苦學せるはわれなりと、一人がいふ。朝とく起きて栗拾ひたること、夜おそくまで起き居て、風襲りたること、幼時より今日までの五人の歴史、悉く談話に上りたるもあはれなり。はては父の恩母の愛など、こまかに語り出でて、父君には七株松を植ゑて、われら兄弟によそへ給へり。さばかりわれらを思ひ給へり。一日もはやく七人の兄弟うちよりて、膝下に孝養をなさまほしきにあらずやといふ。時に時計午前四時を報ず。窓おしあけて、五人ともに上野の方を眺むるに、杉の梢のあたり、不如歸と啼きたる杜鵑、あるは二聲、あるは三聲。その聲いかにおのれらの腸を斷ちたらむ。今なほ記憶して忘れず。

弟は養家の用事すませて、舊里へもたち歸らむとの事なりしかば、燈火影うすき頃、四人ひとしく筆とりて書を認む。長きあり、短きあり、その長短はひとしからねど、親をしのぶ心に至りては、かはりもあらざるべくや。發車の時間も迫りたるよしにて、かの弟は出で立つ。おのれら四人、上野の停車場まで見送りぬ。七株松はいかなる松にかなど、門を出づるより、停車場に至るまで、故郷の物語より外の話もなし。

愛情といふものは、常に逢ふものの爲には薄く、別れがちなるものの爲には切なるものなり。おのれら兄弟は常に離隔し、たまたま逢ふも、また直に別るゝを例とせり。故に兄弟の愛情の切なる、蓋し世の人々の、夢にも想ひ及ばざる所ならむ。ことに五人相會したる、生れてはじめてなり。さるを一夜にしてまた別れむとす。この曉の離情、おのれら兄弟の他にはまた語る能はず。

あくる年の秋、父母の戀しさに堪へず、妹を伴ひて歸省す。父君も母君も、御心をゝしくましまして、おのれら兄弟に向ひて、未だ嘗てめめしきことばなど、かけ給ひしことはなかりしを、こたびは兩眼に涙を浮べさせ給へり。かくまで老いさせたまへるかと、心も心ならず。父君、庭の松を指し給ひて、「あれ見よ」とのたまふ。例の七株松、いづれもたち榮えて、その色いみじう青し。この七株松はおのれらにかはりて、朝夕父母の心を慰めまつれり。そを思へば、いつくしさ、なつかしさ、やらむ方なし。父君母君ふしどに入らせ給ひて後、家なる兄とおのれら二人と、くさぐさのものがたりす。兄、「父君も母君も、年ごとによわうならせ給へり。父君はしはぶき頻に、母君は眼の病おこらせ給へり。なにかと心をくだきたれど、今にそのしるしおはせず。いかにかならせ給ふらむ。心がかりにこそ」などいふ。それを聞き居たるおのれら二人の悲しさ、いかばかりならむ。朝夕膝下を離れず、孝養をつくす兄、その兄こそうらやましけれなど、恨むまじきことを恨む

も、また恨のかぎりならむ。居ること一週間、明日は出で立たむと思ひて、その旨聞え上ぐ。父君も母君もとどめ給はず。とどめ給はぬは、とどめ給ふよりも、なほくるしき御心なめり。あくる朝になりても、なに事ものたまはず。のたまはぬはのたまふよりも、なほ苦しき御心なめり。いよいよ立ち出づる時になりて、末の弟のこと、よきにたのむとの一言、父君の御口より出でたり。おのれら兄弟、その性質一ならず。その中最もかはりたるは末の弟なり。豪放疎暴、絶えて人のいふを聞かず。仙臺に上りたるも、都に上りたるも、父母の許を得ざるなり。父君かねてうるはしき屏風をつくらせ給へり。畫工してそれに書かしめむと思ひ給ひしに、この弟ひそかに詩を書きちらしたり。また妹の養父、あらたに羽織をつくりたるに、その裏の絹に、これも詩を書きちらしたり。その性かくの如し。さるを出立に際して、父君の言の、特にこの弟に及びしなど、そのみめぐみのしげき、實に七株松上の露にもまさりぬべし。

歸途仙臺に宿す。妹はをさなくて姉に別れたるまゝ、一回も逢はざれば、こたびはいかにもして逢はむと、それのみたのみにたのみたるに、姉は先つ日より、畑田なる吉根温泉に行きたる由にてあらず。その失望のさまいふべからず。姉と妹との愛情は、男の兄弟の中にていふ愛情の外に、また一種の愛といふもの、一種の情といふもののあるならむか。保春院といふは代々の菩提寺なり。仙臺にある舊臣二三名に案内せさせて御墓まうです。仙臺には姉の住めば、折々掃除などせさすと見えて、思ひしよりは清らなり。さはいへ大きなる石碑、はやく苔生じ、うるはしき花立、めづらしき水鉢、いかめしき香爐、そは昔のまゝながら、花もなければ、水もなく、香の烟の如きは、絶えて久しうなりたるさまなり。心は心として事足らずとは、おのが家維新後のありさまなり。その影響、祖先の墓にまで及べるかと思へば、いとなげかはし。

こゝに二夜寢て、その次の日、出で立たむとせしに、姉のもとにはやいひ送れり。今日にも歸らむ。彼は逢ひたしと、常にその事をのみ口にせり。さるを逢はせで歸さむには、その恨はいかにと、家人どものいへば、猶ほひと日を延しぬ。されど歸り來ず。こゝに妹を慰めて、共に出で立つ。增田、岩沼などの停車場を過ぎて、はや大河原の停車場にかゝらむとする頃、かなたより白烟をたてゝ、汽車はしり來ぬ。やがてかの汽車とおのが汽車と行きちがふ。ふと目をそゝぎしに、かなたの車に姉乘れり。姉君といひさま、手なる新聞うちふりて、車窓より見送りぬ。姉また同じさまにて見かへりぬ。その間僅に一瞬。この一瞬の間に、おのが腦裏に浮びたる感情はいかに。おのが筆にしておのがこの時の感情を、詳密に、精細に、はた自由に書きあらはすことを得むには、幾千萬言を費すも、なほ惜しからじ。さて妹はいかにと顧みれば、ただ茫然としてものもいはず。かの姉なからむには、この妹なからむには、かくのみものは思はざらむを。人はあらましと願ふ姉妹、おのれまたうれしと思ひし姉妹、今俄になからましかばと思ふも、かなしさ極み、遂にこゝに至れるにや。われながら判斷する能はず。

さて歸省せしその年の十二月、その四日はいかなる凶日ぞや、一人より外にはあらぬ最愛の妹、病死せり。七人の兄弟一堂に會せむと、寢ても覺めても、ただその事をのみいひあへりしに、彼は遂にその快樂を得ることかなはずなれり。彼を加へて七人なり。彼がその快樂を得ることかなはずなれるは、さぞ一生の[illegible]

ら兄弟が、その快樂を得ることかなはずなれるなり。この時のおのが心の中、それいかにぞや。この秋歸省せし時、彼はいへり。「父君も母君もいたく老いさせ給へり。はやく兄弟七人を會して、御心を慰めまつるべき策をたて給はずや」と。おのれは答へたり。「そは二三年たちたる後にこそ。學ならざるに、業遂げざるに、相會したりとて、父君母君は喜ばせ給ふべきにあらず」と。その時彼がことばに從ひたらむか、彼をしてかの快樂を得しめたらむを。おのれら兄弟もその快樂を得たらむを。あはれ彼は逝けり。今後何をもておのれら兄弟の快樂とはなさむ。

おのれ妹を携へて歸省せしかば、父母に對しては、いさゝか慰めまつりしすぢもありしならむ。ただ姉に對しては、何といひわけせむ。妹の死去を報ずる書、大方おのれ書きたり。されど姉への書は書くこと能はず。人して書かしめたり。そのかへりごとはいかにと思ひわたりしに、四日ばかりありて屆きたり。常はなつかしと思ひし姉の書、その日は封おし披くも、おそろしき心ちせり。書の中に、「きのふけふの大雪、かの七本松は雪折れもやせむと、思ひわたるに、松にはあらで、妹の倒れたりとはまことか。そなたこゝに立ち寄りし時、なにとて今一日彼をとめざりしぞ、かれをとめてわれに逢はせざりしぞ。かれをとどめてわれに逢はせざりしぞ。その恨はこの降る雪よりも、猶ほ深うなむ」とあり。おのれはそれに答ふることばをば持たざりき。

その月の二十五日、妹の墓參のために淺草に赴き、夕つ方家に歸りしに、鄉里より電報來てあり。取りて見るに、「父君病氣、とく歸れ」の數語を書きしるせり。こはいかにと、とりあへず、「明日たつ」よきにたのむ」といふ返電を發したり。御病はなになるか、醫師は誰なるか、御食事はいかに、御熱はいかになど、雜念しきりなり。その夜は寢ねざれば、起くといふこともせず、ただ夜のあくるをのみ待ちわたれり。その心ち、げに一夜千秋ともいふべからむ。停車場に入るに、まだ早きこと一時に十分餘。かくはやく來たればとて、發車時間のあるあり、愚なりといふ人もあらむ。その愚は、おのれもこゝにて感じたり。されど家を出づる時は、いそぐ心より外の心はあらざりしなり。先年弟の歸りし時、四人うちつれて、こゝまで見送りしが、今日はおのれを見送るものとては、一人もなし。見送らぬにはあらず、見送るべき兄弟、みな鄉里に歸りて、今は一人も都には居らぬなり。否、一人あり。淺草寺にあり。されどそは死せる人、いかでかこゝに送りくることかなはむ。あはれ彼にしてこの世にあらむには、今日もつれだちて歸省すべきを、なに病みわづらひ給ふ父君にもあはすべきを、なにとて彼は、老いたる父君よりもさきだちたらむ。はかなしや、かひなしやと、ひとりもの思ふ折しも、上野山と淺草と、二方よりひびく鐘の聲す。ひとしく鐘なるを、ひとしく聲なるを、淺草寺の鐘のかた、ことに身にしみて覺ゆるは、その聲するかたに、彼の葬られてあればならむ。

やがて發車の時刻となりしかば、乘りこみぬ。おのが室には十二人の乘客あり。相識らうち連れたるもあれば、母弟うち連れたるもあり。その人々のよろこばしげなるを見ても、ものおもはしきのみまさりてなむ。宇都宮もはや過ぎて、那須野が原にかゝれるは十一時頃なるべし。行き行きて白川にもなりぬ。この[illegible]こゝを過ぎて都へ上りし時、妹と、秋風に旅の露をはらはせていつまた逢はむ白川の關とよめり。おのれそを見て、「命なりけり[illegible]夜の中山」といひたり。[illegible]秋風にはらはるゝ露の

如く、はや消えしあともとゞめず。あはれその折幾年も經ざる中に、否、その年の中に、かくおのれひとり、またこの關を越ゆべしと思ひかけきや。おのがこの時の思、語らむとすれど、乘客は皆他人。立ちて車窓よりながむるに、南湖のわたり、雁のうちつれて鳴きわたりたる、あはれといふも世の常なりや。

　仙臺をも過ぎたれど、立ち寄らず。姉ははや出で立ちたらむと思へばなり。松島の停車場、鹿島臺の停車場、そこ過ぎて、夜九時ばかり石越に著きぬ。こゝより車にて夜路を走らす。狼河原に至れる頃、夜またく明けはなれぬ。ここに舊臣五名出で迎へたり。まづ父君はと問ひしかば、一時はいかがと案じまつりしが、少しは御心ちよき方なりといふうれしさに、心は勇みつゝ、こゝより更に車をやとひ、共にうちつられて、いそぎにいそぐ。午前十時、辛うじて家に著きたり。門内門外、出で迎ふる人いと多し。

　兄に誘はれて、父君の臥處へと赴きぬ。母君はじめ姉弟ども、皆なみ居たり。すこし離れて、舊臣ども七八人さもらへり。直に御枕邊に進みて、今つきたる旨を述ぶ。姉はうちしをれてありしが、やがて座を起ちて、奥の方ざまに行きたり。妹のこと思ひ出でてならむと、想像せしはあらずや。

　それより御容體など、くはしう問ひまつりしに、昨夜は舊臣どもに謠などをうたはせて聞きしが、その後は、一しほ心ちようなれり。日ならず恢復するならむ。まづ旅の裝を解けよなどのたまふ。姉再び出で來れり。されど妹のことは尋ねず。父君への心づかひなめりと思ひたれば、おのれもさる悲しきことはいひ出さず。さて七株松はいかにと庭前を見るに、猶ほもとのまゝにて一株も枯れず。

　妹うせてより、おのれら兄弟は六人となれり。その六人、皆集りたらむと思ひしに、末の弟一人見えず。いといぶかしと兄に問ひしに、「さればなり、彼は父君の御怒に觸れしことありて、家出せしが、昨日の朝かへり來て、父君にあひまつらむと、乞ひまつりしかど、父君は更に許させ給はず」といふ。かの弟の豪放疎暴、もとよりよからず。されど今猶ほ許させ給はずとは、いかなる御心つよさならむ。いでわれわび申さむと、ふたゝび御枕邊に行きて、彼の罪を許させ給へと乞ふ。「汝の願なれど、このことのみは許し難し」とのたまふ。「父君きこしめせ。父君が七株松もてなぞらへ給ひし兄弟七人、一堂に相會したることとては、一回も侍らず。いつか膝下にうちつどひて、共にその快樂を受けむものと、互に契りかはしゝに、遂にその一人なる妹はうせたり。父君よくきこしめせ。七株松こそもとのまゝなれ、兄弟ははや六人となれり。その六人たまたまこゝにつどへるに、その中一人のみあひ見給はぬは、あまり御情なきことに侍らずや」と、恨みきこえしに、しばしは御答もなかりしが、やゝありて、「さらば彼もこゝにつれ來よ」とのたまふ。許させ給ふか、そはうれしと起ちて、彼の居る一間に行き見るに、彼は端坐して、なにか思ふ所あるが如し。父君のおほせの旨を語り聞かせしに、そのよろこび面に溢れたり。率て來りしに、父君は御眼を閉ぢてましませり。「父君、父君、おほせのまゝに彼を伴ひて侍り」といふに、眼を開きて、彼の顏を見給ひしが、やがてまた閉ぢ給ふ。その折落し給ひし涙に、かの豪放なる、かの疎暴なる弟もいかに感じたらむ、兩の袂を顏に當てゝ、ただうつぶき居たり。

　三日ばかりありて、大晦の夜、兄弟六人うち集り、舊臣中より旗卷の役に供せるものを呼び出でて、當時の戰況などを語らす。床の間に

飾れる甲冑太刀などを指して、父君の奮戦し給ひし状を述ぶるに、膝の進むも覺えず。かのうせにし妹は父君の傳記を、かくつまびらかに、聞きたることはなからむ。今夜この六人の他に、彼のあらむには、そのよろこび今一しほならむを。なにとて彼はうせしぞ。今夜はなき魂魄の歸り來る夜なりとか。今おのれら六人この膝下に集れるを、彼は知るや、はた知らずや。

今年もはやこよひかぎりなり。都のことども心にかゝること多かりしかば、明日出で立たむと、その旨父君に乞ひしに、「わが病は心づかひすな。はや歸れ」とのたまふ。おのれ兄弟中、最もおくれて來れり。さるに今また最も早く立ち去らむとす。他の兄弟に對して面目なしなどいふことは、他人に對して起る心なり。おのれよりさきに來りし兄弟、おのれより後まで殘らむ兄弟、その兄弟はおのが心にはねたましうこそ。

あくる日はやがて元日なり。朝とく起きて見るに、天氣うらゝかに、空には根かゝる雲もなし。いよいよ出で立たむとするに、父君、「汝が首途の祝として、舊臣どもに謠を歌はせむ、しばし待て」とて、兄をしてその用意せさせ給ふ。かくて、父君も床のうちに起きさせ給ひ、屠蘇の杯など取らす。杯ひとめぐりせしに、一人の老臣出でて、なに仕うまつらむといふ。父君、「親子の別なれば、夜討曾我、七騎落などやよからむ」とのたまふ。おのれ、「めでたき別に侍れば、七騎落の方ねがはし」といふ。謠ふもの三人、やがて、笛、鼓、太鼓の聲起りぬ。父君病をつとめて、起ちて舞ひ給ふ。「契りほどなき早舟を、しばしとだにもいひあへず、跡を見送りたゝずめば、はや遠ざかる浦の波、たちわかれゆくありさまを」の所は、あはれとも覺えしが、「うれし泣の涙は、なにかつゝまむ唐衣、日も夕暮になりたれば、月の盃とりどりに」の所に至り、よろこばしさに堪へず、おのれも、「心うれしき酒宴かな」と歌ひて座を立ちぬ。坂を下りて門を出れば、舊臣どもあまた待ち居たり。こゝに車に乘らむとて、家の方を顧みするに、庭の七株松は、いづれも千年の色をあらはせり。こはこれおのれら兄弟の爲に、植ゑ給ひしものなれど、その千年は更に父君に捧げまつらむ。あはれ父君のかぎりなき御惠は、この七株松ぞよく知らむ。

恩愛刃

この恩愛刃は故老の物語を、そのまゝ書きしるしゝものなり。そのこと實に天明年間にかゝれり。一少女なれども、父の爲に身を捨てゝ讐を復せしなど、まことに感ずるに堪へたり。今や事外國に起れり。この時に當り、怯懦以て國家の恥辱を取らむか、この少女にも劣るといふべからむ。恩愛は父子の間にのみならず。國民たるもの、共にこの刃を振ひ、國家の爲に大いなる恨をはらさでやは。予のこの篇を草せしは、徒に文筆を弄びしにあらざるなり。

明治二十七年八月三日宣戰の詔勅を拜讀せし日

青葉城を去る三十里、東北の方に當りて一大島あり、大島と呼ぶ。周圍七里餘、人家四方をめぐり、船舶の出入常に絶えず。そこに秋山氏と聞ゆるは、最も古き家なり。當主を義方といひしが、觀光以來の餘澤として、土地の人望一方ならず。館のありし所は、島中の東なる鳥頭が濱なり。この地は安方の古跡のある所にて、かの善知鳥といふ謠曲を讀みたる人ならば、必ずその名を知れるならむ。後を顧みれば、龜山營に聳え、前を望めば、海原遙に連なれり。北の方には平四郎崎、唐人濱、外の濱など、おもしろき所見え、南の方には赤濱、鵜島、佛磯、長浦、鶴浦など、をかしき所あまた見ゆ。東西の方には小豆島、鷺島、大崎島など、波の上に浮び、東北の方には、あまの苫屋立ちならび、松青く砂白き所、風光明媚、晝よりもうるはし。館の高大なるのみならず、家臣あまたを召し使ふなど、そのさま小諸侯に似たり。本館を距る二十町ばかりに別館あり。ことに心をこめて造れるは、義方隱居の後に住まむ爲なりとか。

義方、兄妹二人の子をもてり。兄義正は、生れながらにして盲者なりしかば、そを別邸の方に置き、その妹に定直といふを迎へて、家を嗣がしむ。定直子なし。義方、松尾氏の一子靜雄の人となりを愛せしが、こゝにそを迎へて、養子となさしむ。[illegible]定直[illegible]迎ふ。時子といひて、心よからぬものなり。靜雄、時子と爭ひしことありしが、時子、定直に讒す。定直怒りて靜雄を逐ふ。義方の靜雄を迎へしめたるは、また深き考のありてなり。時子の靜雄を逐はしめたるは、また深き考ありてなり。この時に當り、義方の失望はいかに、時子の得意はいかに。その後四年ばかりありて、天明七年の秋の末つ方、義方身まかりぬ。盲者に一人の子あり、愛子とよぶ。その母は愛子十歳の折に、病みて失せぬ。祖父義方、愛子をかなしきものに思ひて、常にそをいつくしめり。義方、臨終の際、義正と定直とを招き、「靜雄は、當時江戸にありといふことなるが、彼は文に武に、心さときものなり、必ずやいみじき人となりてたち歸らむ。その上は愛子にめあはして、この秋山家をば嗣がしむべし」と、いひ死せり。この遺言よ、義正のためには、愛子のためには恩か、はた仇か。義方の死後、時子はいよいよわがまゝのみふるまひしが、定直にすすめて、前夫の子、行勝といふを養子となしぬ。その後一年ばかりありて、定直も身まかりぬ。義正かの遺言のまゝにせむといひしに、時子從はざるのみならず、秋山家に忠義なるものは

前後に運び擁ひ、館の中は悉く、わか意中の者のみをもてみたせり。

床の間に一幅の軸かゝれり、曾我兄弟の圖なり。手に松明を持ちて、讐敵に討ち入らむとするさま、眞に逼れり。その軸の傍に鎧甲、太刀など備れり。書架には和漢の書堆く、机上には筆硯横たはれり。人一たびこの室に入らむか、自ら瀟灑の心起るならむ。室の中央に蓐を敷きて、その上に病み臥せるは義正なり。年は僅に五十路を越えたるのみなれど、その衰へたるさま、一見、久しく病床にありしことは知られなむ。父なる盲者、愛子を呼びて、「昨日は卷を開きしが、今日はおもしろき書にても讀み聞かせずや」といふ。愛子はいとうれしけに、「御つれ〳〵、書讀みて慰めまつらむ。昨日の蟲干の折、めづらかなるものを取り除き置き侍り。こゝにもて參らむか」といふに、父はしばし案じ居たりしが、思ひつきたる樣にて、「それよ、いつぞや源氏物語を聞きしが、かの殘りはいかに」といふに、愛子は、「かの物語は宇治十帖のはじめなる橋姫まで、すみたりと覺え侍り、[illegible]もとに侍り、かの[illegible]なる[illegible]お中の君を生み給ひて、かくれさせ給ひし所を讀みし時、父君にはいたく泣かせ給ひしにあらずや。椎が本には大君、中の君の二姫御子を殘し給ひて、父君の宇治の山寺にて、かくれさせ給ふ所などあり。さるかなしきものは、なかなかに御病のさはりにもや侍らむ。他によき書を」といふ。父はなにか思ふ所あるものの如く、強ひてそを讀ましむ。愛子は心すゝまねど、答ふべくもあらねば、讀みはじめぬ。一秋深くなりゆくまゝに、宮はいみじう心細く覺え給ひければ、例の靜かなる所にて、念佛をもまぎれなくせむとおぼして、君達にもさるべきこと聞え給ふといふ所に至り、愛子の聲は涙にくもりぬ。父はなほ讀めといふに、また讀みぬ。一曉に出で給ふとても、こなたにわたり給ひて、なからむほど心細くなおぼしわびそ。心ばかりはやりて、遊びなどし給へ。何事も思ひにえかなふまじき世と、なおぼしいれそなど、顧みがちにて出で給ひぬといふ所に至りて、愛子の聲はまた涙にくもりぬ。「父君、今日はこれにて止め侍らむ。また明日讀み侍らむ」といへど、聞かず。愛子また讀む。一有明の月のいとはなやかにさし出でて、水の面もさやかに澄みたるを、そなたの蔀あけさせて、見出し給へるに、鐘の聲かすかに響きて、明けぬなりと聞ゆる程に人來て、この夜中ばかりになむ失せ給ひぬると、泣く泣く申す」といふ所に至りては、父も泣けば、愛子も泣きぬ。「父君、今日はこれにて止め侍らむ」といふに、父は猶ほ聞かず。愛子は、「いかにのたまふとも、また讀む心侍らず」とて卷を掩ふ。父の心に背くも、また孝の心にや。

父も子もしばしことばもなかりしが、父は涙を拂ひ、「愛子よ、世の中はかくさだめなきが常なり。おのれかくばかり衰弱せし上は、その恢復もおぼつかなからむ。汝は靜雄の歸らむを待ちて、彼となかき契を」といはむとすれば、「父君、そはまた何事をかのたまふ。醫師の言葉によれば、日ならずよくならせ給はむとの事に侍り。さる心細き事なのたまひそ」と口にはいへど、この頃の父の有樣、或はこのまゝにて、失せ給ふこともやあらむ。この身にしてかの大君の、一色かはる袖をば露の命にて」といふ、御歌のさまにならむには、いかにかせむ。げに置きどころなき身とやなりなむと、行く末の事を、思ひ續けらるゝも、また止むを得ざる情ならむ。

ひる少し過ぐる頃、林蔵より愛子を呼びにおこせつ。父にその旨告げて行きぬ。晴子をはじめ人々出で迎へて、もてなすさま常にかはれり。

機敏なる愛子は、早くもそれと悟れり。それとは行勝の妻となれよとの事これなり。果せるかな時子は說き出せり。「愛子よ、そなたを招きしは他の事にあらず。そなたも今年ははや十八歳なり。一日も早く身を定めて、かの病み臥し給ふ父君の御心を慰めざるべからず。靜雄は今は行くへもわかぬ身なり、いつ歸り來むもわからず。かりに歸り來とするも、彼を迎ふるが如きことあらば、一家忽ち分裂せむ。そなたの心は知らねど、行勝の妻とならむには、すべてまどかに收らむ。さあらむにはそなたの父は、やがて行勝の爲にも父にあらずや」と、說く所、その辯甚だ佞、その言甚だ巧。愛子にして、なみなみの女ならしめむには、必ずや說き落されたりしならむ。愛子は容易に答へず。いくそたび、いくたび、その返答をとて止まず。愛子は意を決して、「父の心を聞きし上ならでは」といひ放ちぬ。愛子の父は時子を毒婦と思へり。その子にわが最愛の女をめあはすことは、いかでか許さむ。父の心を聞きし上と答へたるは、やがてその結婚を拒絕したるなり。その答を聞きたる時子の忿怒、それいかに。滿面忽ち朱をそゝぎしが、「心まかせにせよ」との一言を殘して、奧に入りぬ。愛子も歸らむとて座を立つ。筐がくれにのごき居たるは誰。蓋し行勝その人ならむ。

「父君、ただ今歸り侍り」といへば、「何事かありし」と問ふ。愛子はやゝ鋭き聲にて、「聞くもいまいましき事にこそ侍りし」と答ふ。「行勝と結婚せよとのことか。おのれも大かたさる事ならむと思へり」など、互に時子の奸計を語りあふ。机上に一通の書牘あり。愛子は早くも目を注ぎ、「こはこれ靜雄ぬしの書牘に侍らずや。誰がいづこより持ち參りたるか」と問ふもあわただし。「それか、そは江戸の藩邸に勤番せらるゝ大澤ぬしより、わざわざ送られたるなり。とく讀み聞かせよ」といひも終らぬに、封おし切りて讀む。「家出せしより、數ふればはや五年。身體すこやかに、朝夕學問武藝に心を寄せをれば、御心やすくおぼしてよ。このごろ承れば、祖父の君にも父君にも、はや世を去り給ひきとかや。知らぬこととはいへ、不孝の罪遁るゝ所侍らずなむ。叔父君にはいかが暮し給ふか。愛子の君にはいかにおくらせ給ふか。聞く所によれば、時子今なほあしき心やまず、家も何となく治らずとか。この身は父君に逐ひ出されたる身なり。たとひ業終へたりとも、再び歸りて、秋山家を嗣がむの心は侍らず。愛子の君にはよき壻君を取り給ひて、家を立てさせ給へ」とあるに、愛子は讀み止めぬ。またくりかへしゝが、また讀み止みぬ。父は慰めつゝ、また讀ましむ。一字一涙、その讀むや、始めの如く達ならず。

愛子は悲しさやる方なけれど、父の病のさはりにもやならむと思ひたらむ、いで藥煎て參らせむとて、納戸の方へ行きぬ。こゝに女泣き居たり。驚きて尋ぬるに、本館の女どもに、いたく辱かしめられたりといふ。男また血にまみれながら走りきぬ。何事ぞと問ふに、こもまた本館の男どもに打たれたりといふ。愛子は父の許に來り、本館の人々のありさまただならず、われ等かのいふ所に應ぜざりしため、今迫も常ならむの心と見えたり。いかにたゞばよく侍らむといふに、父は怒りて、本館へ出で行かむとす。愛子はしばし待たせ給へと、おしとゞむる折しもあれ、本館の方に人々のさわぐ聲す。何事ならむと耳そばだつれば、口々に盲者を罵るなりけり。盲者はいかにくやしかりけむ、見えぬ目もて、その聲する方をうち睨まへたるさま、おそろしといふ外には、またことばもなし。盲者は愛子になだめられ、ふしどに入りしが、齒をくひしばりてものをもいはず。」と

かくする程に日も暮れぬ。夜更けて庭前に人の足音す。愛子はしばしも心ゆるさず。「靜雄ぬし江戸より歸り給へり」と下女のいふは、夢にはあらざるなきか。「只今人おこせ給へり」と下女のいふは、夢にはあらざるなきか。「ひるの間は人目やあらむ、今夜夜更けて尋ね參らせむとのことなり」と下女のいふは、夢にはあらざるなきか。いかでか夢ならむ。愛子は千秋の思にて待ち待てり。しのびやかに庭の枝折戸、叩く音す。心ときめきして出でて見るに、水鷄の叩くなりけり。はかられけりと、ふたゝびもとの座につく。かくすること三たび四度、蚊遣火の烟も全く絶えたる頃、また叩く音す　こたびはと思ひて、雪洞手にして庭に下りぬ。袖にて半掩ひたるは、風をのみ恐るゝにはあらざらむ。やがてそを伴ひて緣にのぼす。愛子は後に心くばりて、「今の物音は風にてありしか」など、殊更に聲高くいふは、外に忍びの者のあらむを恐れてならむ。雨戸さしかため、靜雄を父のもとへ伴ふ。靜雄は手をつきて、恭しく禮を述ぶ。そのさま、まことの父に對けるが如し。盲者またまことの子と思ひて、その禮を受けしならむ。愛子は泣きながら、このほどの事どもを語り出づ。一言一句、靜雄はただその意外なるに驚きぬ。「事のこゝに及びし上は、枉げて行勝ぬしにとつぎ給へ」といふや、愛子はけしきをかへ、「そは御ことばとも覺えず。妾は君より外に、夫と思ふものは侍らぬものを」といふも、はや涙を含めり。互に語らふ心はまだ夜深きに、夏の夜のならひ、杜鵑の一聲にはや明けそめぬ。靜雄は驚きて、「ともかくもよく考へさせ給へ。その中にまた尋ね參らせむ」といひて、出で立たむとす。愛子は未だきぬぎぬの別といふことは知らず。されどこの曉の別は、とる別のたぐひにはあらざりしならむ。靜雄は庭より出で行きしが、愛子は緣に出でて見送りぬ。折しも朝風さと吹きて、梢の露を拂ひしが、合歡木に夢を殘して、飛びたつ蝶あり。かの枝折戸の方へ飛び行くをうらやましと見れば、こはこれまこと一場の夢。靜雄の書牘を前に置きて、身は机によれり。

月の名は五月なれど、このごろよりの日でりに、池の水もいたく涸れ、庭の苔路も裂けなむとす。汀に生ふる蓮は更なり、その葉がくれの澤瀉、河骨に至るまで、皆うちしをれ、垣のつらなる撫子、姫百合、また力なけなり。この飛石めぐりて、照る日にほへる松葉牡丹の外は、みな雨待ちがほになむ。鳴神はるかあなたの海上に音せしが、忽ち一陣の涼風となり、しのぶの軒には風鈴響きわたり、芭蕉の上には雨こぼれきぬ。愛子は母の墓參にとて、朝まだきより出で行きしが、未だ歸らず。鳴神ややおどろおどろしき頃、時子は腹心のもの三人を伴ひて音なふ。何か說く所あらむとせしが、盲者は、汝等のいふこと聞く耳もたず」と、日ごろの鬱憤をこゝに洩らせり。時子もいたく怒り、「盲者なればこそ、あはれと思ひて、なにくれとなくかたらふなれ。そなたの心さあらむには、こなたにもまた考ふる所あり」といふや、盲者はうちふるひてあり。その顏はいかにと罵るや、盲者は突然、枕頭の刀をとりぬ。時子は三人のものに目くばせして、ひそかに出で行きぬ。時に鳴神いよいよおどろおどろし。愛子は濡れながら歸りきて、門に入らむとせしに、左右より二人の男出で來て、愛子の供人を捕ふ。他の一人またあらはれて、愛子にせまりぬ。愛子は懷劍拔き放ちて、そを逐ひ拂ひ、飛ぶが如くに走りきて、玄關に入りしに、こはそもいかに、父は三人のものどもに手を捕へられ居たり。無禮のものども何をかすると、一人をかきのけ、また一人をかきのくるに、一人はいちはやく愛子の手を捕へて、もてる懷劍もぎとり、

他の二人は刀を拔ちて、盲者に向ふ。盲者は刀を手にしたるまゝ緣に出づ。愛子は捕へられながら、「父君父君、それ左の方に敵はまはれり。それ右の方にめぐれり。前の方危し。後の方へも」と、聲のかぎりに叫ぶ。敵は前後より迫りしが、盲者は緣の柱によりて、敵を近づかしめず。愛子は狂氣の如く、はねのけつきのけ、父のもとへかけ行かむとすれど、力ある男堅く捕へて放たず。神はいよいよ鳴りわたり、降りくる雨は盆を傾くるが如し。盲者は緣棧に跪きしが、忽ち庭にまろび落ちぬ。こゝぞといひさま、二人のものは飛び下りて組み敷きぬ。上になり、下になるさまを見居る愛子の心はいかにぞや。父君父君と呼ばはれば、手もて口を掩ふ。その手を噛めば放しにけり。こゝに足もとなる懐劍拾ひ取り、父の上なる敵を目がけて擲つ。その劍、敵の頭上をかすめしが、敵うち驚きて逃げ去りぬ。他の一人もいかに恐れたらむ、つゞきて走りぬ。逃すべきかはとて、跡追ひしものの、父のこと心にかゝるをいかにせむ。歸りて父を見れば、倒れたるまま起きも上らず。愛子は濡れたる父の頭をもたげ、父君父君と呼べど、しばしは答へず。父の手を肩にかけ、辛うじて緣にのぼせたれど、流血淋漓、にはたづみまた赤くならむとす。

秋山家に一振の刀を藏む。その長さ九寸に過ぐる七八分ならむ。希代の名刀なり。その祖先、高祖公に從ひて數度の戰爭に出でしが、軍功ことに勝れたりとて、手づから賜はりたるものなりとぞ。これはこの家を相續するものに必ず傳へらるゝが例にて、こを傳へられざるかぎりは、家を相續すともまことの相續者とは認められざりしなり。この刀の爲に家の騷動をひき起しゝこと少からざりきとかや。その日の夕つかた、盲者は麻上下を出さしむ。そを著るや、しばし端坐してありしが、起ちて例の刀を取り出す。服紗を解けば、箱の表には恩愛刀の三字をしるせり。そを愛子の前にすゑ、「これこそはかねて話しゝわが家の重寶なれ。祖父の君、特にこをおのれに傳へ給へり。おのれはかゝる手創を負へるのみならず、心ち甚だなやましければ、今夜の中にも身まからむか。今こそそなたに贈らめ。謹みて受けよ。そなたはまだ知らざらむ。この頃よりの騷動は、時子等がこの刀を奪はむの心に外ならず。おのれ命惜しくば、こを彼に渡さむ。祖父の君の遺言あるにもかゝはらず、なほこの刀を奪ひて、わが子を立てむとするなど、憎むべきにあらず。この銘なる三字は、盲者がかつて自らかき記せるなり。蘇軾兒を失ひし時、仍將恩愛刀割此衰老腸といへり。父子恩愛の情、まことにさもありなむ。されど蘇軾の恩愛刀は無形なり。おのれは有形の恩愛刀もて、この衰老の腸を斷ちしこと、そもいくたびぞや」といふ。聞ける愛子は、うち伏したるまゝ、しばしは頭をあげ得ず。あはれこの恩愛刀、豈に衰老、否、父の腸を割くのみならむや。夜に入りたれど、空はなほ晴れやらず。外の方を見るに、あやめもわかぬやみなれど、今宵は庭の燈籠に火を點ずるものなし。

夜も明けたらむ、遠かたに鐘の聲す。かの宇治の山寺の鐘ならねど、その聲の常よりかなしきは、父の今はを急ぐとにや。夜中よりただならざるけしきなりしが、この曉に至りて、いよいよあつしくなりぬ。はせながくはおはせぬならむ、今一度靜雄ぬしに會はせまつらむすべもあらぬものにやと、愛子は心も心ならず。その夜は空なにとなく暗くして、星の影も見えず。枕頭にありて、始終父を扇ぎ居りしが、床の間に立てたる琴絃絶えて、おのづから響あり。うち驚きて父の顔を見れば、父はねぶるが如く、はやう永き眠につきぬ。

盲者の身まかりぬと聞くや、本館より時子、行勝など尋ねきぬ。父の病氣の折は尋ねしこともあらぬ人、父を殺さむとまではかれる人、かくなさけありげにとひ來る、その心は大かたはかり知られなむ。愛子はさかさまに立てまはしたる屏風の中にあり。香の烟の立ちのぼるを見ても、ただ消え入る心ちす。思へば先つ日、しひて椎が本を讀ましめ給ひしが、かねてかくならせ給ふ事を知らせ給ひしならむ。その折はおのれも、何となう悲しかりしが、さりとてかくおくれまつらむとは思はざりき。かの大君は父に別れ給ひて、いかに悲しくおはしたらむ。されど中の君といふ妹君ましませり。さてはまた御心を慰め給ひしこともおはせしならむ。姉もなき、妹もなきこの身、いかにしてこの世を送らむと、亡骸を抱きて泣き叫べど、死者は知るべくもあらず。

世におはするほどは、見ることもかなはせ給はざりし庭前の花、今こそ折りきて見せまつらめと庭におり立つ。まづ目につきしは撫子の花なり。近よれば、はや夕露しげく置きたり。わが身にかゝりし親のめぐみは、これよりもなほしげかりしをと、思ふにつけても、まづ濡るゝは袂なり。露ながら手向けむとて、靜にそを折り取りぬ。露のこぼれざるのみならず、その露のいよいよ置きまさるやうなるは、露そのもののみにはあらざるにや。暮るゝやがて僧ども來て、經を讀む。愛子はしばし聞き居たりしが、思に堪へで縁に出づ。軒に螢籠かゝれり。それよこの二日三日、水與ふることも忘れてありけりとて、水をそゝぎかくるに、かすかに動きて光を放てり。あはれと思ひて戸を開きしに、一つ飛びて、軒のしのぶにやどれり。なれもまたなき人をしのぶかと見るほどに、また一つ飛びぬ。こたびは窓なる小笹の上に宿れり。その光に見れば、親竹のたち榮えたるなかに、ことし生ひの若竹まじれり。かの竹すらも、親はあるものをと、ひとり身のうきふしを數ふるも、いかにあはれなることならむ。

その夜は通夜とて、本館より人々あまた來ぬ。次の夜も、また次の夜も、大かた同じさまなり。さはいへその人々は寧ろ、盲者の死を喜べるもののみなれば、愛子は敵の城中に捕れて、僅に父の亡骸を守るが如き思をなせり。夜更けて少し風吹きたちしが、波の音いとあらまし。かの宇治の川波の如きは、ものの數にもあらぬにや。時子は泣き居る愛子に向ひ、「人は生あれば、必ず死あるものなり。父君のこと悲しくはおはすらむ。されどこはうき世のならひ、またいかにともすべからざらむ。さな歎かせ給ひそ。葬儀の如きは、行勝心をこめて何くれとはからへり。心やすうおぼせ」など說く。情ありげなり。時子ことばをつぎて、「それよ、父君のもたまひたる寶刀はいかがし給へる。この五月の頃、ことに汐風吹く折は、一日に二たび三たび拭はねば、鏽を生ずるものとこそ聞け、よく拭へ給ひてや」と、まめだちていふもをかし。

盲者のうせし日より三日過ぎて、葬送の式を行ふ。菩提所は西光寺なり。迎の僧どもあまた來ぬ。愛子も棺の供して出で行きぬ。磯づたひに行くこと十餘町、山あり、蠑螺山といふ。その山の麓を過ぎ行くこと二町あまり、野あり、蘆野といふ。地藏堂などありて、さびしき所なるが、そこ過ぐるほどは、愛子自らも死出の旅路を行くこゝちす。母君の葬送の折もこゝを過ぎぬ。されどその折は年まだいとけなかりしかば、かくまで悲しとは思はざりき。また母君はおはせずとも、父君のおはすればと、心を慰めしこともありき。今よりは何をたのみて世を送らむと、思ふ思は、道に生ひしげれる夏草よりげに繁くてなむ。寺に近づきたるなるべし、鐘聲しきりに響きぬ。愛子は人々に扶

けられて、惣門の中に入りぬ。佛の名はわかねど、うるはしうかざれる堂の中央に、父の棺はすゑられたり。愛子はものも覺えず。寺の後なる老杉陰暗きあたりは、これ母の墳墓のある所。父を葬めむとする所は、やがてその傍なり。式はてぬ。愛子の愛はこゝに全く、地下に葬られ終りぬ。

葬儀はてゝ未だ七日も經ざるに、本館にては酒宴を張れり。夜に入りて、人々の歌ひ舞ふ聲、いとさわがし。愛子はいきどほろしさに堪へず、たち出でて、しばし聞き居りしが、またもとの座につきぬ。思ひ迫りて、うち案ずる折しも、ふと目につきしは、床の間の軸なりけり。男ならねどわれもと、ひとりうちうなづきぬ。やがて燈火をかきたてゝ書を認む。折々涙を落すを見れば、靜雄への書置ならむ。認め終るや、手なる珠數取りて經机に擲つ。更に位牌の前なる恩愛刃を取りしが、これにてといふや否、鞘うちはらふ。さてその刃のさえにながめ入りぬ。

夜はやうやう更けわたりぬ。行勝をはじめ、人々は皆醉ひて、眠につきたらむ。今はただ時子の月に對して、ひとりかきなす琴の音の聞ゆるのみ。かの曲の終らざるまにとて、庭に下りたつ。湖の方より浮雲出で來りしが、月の影俄に暗らなりぬ。今まで聞えし蛙の聲急にとまれるは、はや忍び入りたるなるべし。琴の音の半にてとまりたるは、それと知りて、彈きやみたるなるべし。父の讐と呼ばはる聲す。氣にても狂ひしかと罵る聲す。燈火もてこと叫ぶは、はや燈火も消えたるなめり。もののちる音するは、棋石などを投げたるにはあらざるなきか。琴柱のはぬる音するは、鋭き刃を受けたるにはあらざるなきか。筆立の仆るゝ音す。机につまづきたるは誰ならむ。逃ぐとも逃さむやといふ聲す。手負ひて逃げたるにや。おのれと呼びとむる聲す。追ひつきて後へひきもどしたるにや。斬りたるか、はた斬られたるか。物音全く聞えずなりぬ。

しばしありて庭の門なるそのうちに、小笹のさやぐ音す。門によぢのぼるさまなりしが、見れば其の人は愛子なり。口には血にまみれたる恩愛刃をくはへ、手には片袖につゝめるもの提げたり。うき雲なごりなうはれて、龜山の高根のあたり、涼しき月ぞさしのぼれる。影門よりまろび落ちつ。やがて見えずなりぬ。行方はいづこ。かの西光寺、それよ父の墳墓を指してならむ。

弦月旗

白河口、相馬口、數度の合戰に、官軍の肝膽を寒からしめたる一隊あり。弦月隊とな む呼べりける。この隊、常に弦月の旗をたてたり。故にこの名ありとか。この一節はそを率ゐたりし人の談話に基けり。かの旗卷の役は、慶應四年、即ち明治元年八月二十日にて、實に奥羽最終の戰爭にてありしなり。こゝに記したるは、その三四日前の事どもなり。

敵軍敗れて、篠原村に退きぬ。わが兵進みて、旗卷村を占む。村の中央に寺あり、光妙寺といふ。そを本營と定めぬ。夜に入りて敵の襲ひ來らむを恐れ、日野某を飯尾谷に、佐藤某を磯貝村に、安達某を大瀧坂に遣りて、それが備をなさしむ。夜も更けぬ。數百の軍兵、皆ねぶりにつきぬらむ、營中寂として聲なし。予はひとり燈火をかゝげて、地圖を見居たり。

折しも西の方に筒の音す。庭におり立ちてそを聞くに、その音いよいよはげしうなりぬ。こは大事よと、俄に令を下して、軍兵をいましむ。やがて急使あり。あまたの敵兵、飯尾谷に寄せ來ぬとありしかば、更に野口某をしてその方に赴かしむ。予も手兵三十騎を率ゐて、かなたをさして進む。時は八月十六日の夜なり。いざよひの月いとあかきに、み空高く雁さへ鳴きわたる。途にてまた急使にあふ。飯尾谷いよいよ危しといひも終らぬに、はや吶喊の聲す。飯尾谷は要害の地なり。そこ破れてはと思ひしかば、馬にまかせて走る。未だかしこに至らざるに、はやうち破られたりと見えて、逃げくるものども數知らず。たのみがひなき味方の軍兵かなと、なほ山下道をいそぎしに、後の方に筒の音す。顧みすれば、磯貝原のかなたなるその北に當りて、またはげしき音す。こは大瀧坂なめり。敵はや三方より寄せきぬ。こゝこそは生死をきはむる所と思ひて、自ら進み戰はむとせしに、かねてわが隊中の勇者と知られたる水谷某、進み出でていひけるは、「奥羽の諸軍あまたある中に、敵のめざすは、ただわが弦月旗のみ。今夜は力をあつめて、攻め來りしなりと覺えたり。みだりに進み給はむには、最期をとげさせ給はむこと必定なり。とどまらせ給へ」といふ。予、「この地を敵に取られむには、ふたゝび回復のほどおぼつかなし。ただ一討にうち退けむ」といひしに、猶ほとどめて聞かず。とかくするほどに、敵軍前後に迫りきぬ。「弦月の御旗を賜へ。大將にかはりて討死仕らむ」といふ。予とどめがたきを知りしかば、そを許しぬ。かれ旗を馬上にかゝげ、敵軍目がけて躍り入る。他の諸騎、またその後に從ふ。

予は間道をたどりて、辛うじて松が崎村に出でぬ。この村は飯尾谷、磯貝原、大瀧坂の通路なり。かつ旗卷の本營を去ること、ほど遠からねば、しばしこゝに憩ひてありしに、飯尾谷は更なり、磯貝原、大瀧坂、いづれも皆うち破られ、味方の軍兵、おひおひに遁げまどひぬ。

一騎あり、太刀ぬきかざし、こなたをさして來る。誰なるかと問ひしに、その答はせで、こゝは敵の陣なるかと問ひかへしぬ。味方の陣

なやと答ふ。大將はいづこにおはするといふも何となら苦しげなり。照る月かげにすかし見れば、まがふ方なき水谷某なりけり。「水谷よな。予はこゝに」といひしに、例の旗を懷より出して予に渡しぬ。かくて手をかなたにうち振るは、はやく落ちのびよといふなるべけれど、更にわかず。「水谷氣をたしかに」といひしに、齒をくひしばりて、馬よりまろび落ちぬ。猶ほよく見れば、身にはあまたの手創を負ひ、鎧の袖も皆あけに染りたり。息もたえだえなりければ、藥など與へて、本營の方へ送らしむ。

予は遁げくる兵を集め、こゝにてせきとめむと、夜ひと夜それが備をなす。敵遂に進み來らず。夜も明けぬ。かの水谷のこと心にかゝりしかば、本營に歸りてそをとぶらふ。彼は一間のうちにて、うめきつゝ臥し居たり。あたりの人々、予の來れるよしをいひけるに、苦しき身も忘れて、起きあがりぬ。「さな心づかひせそ」といひしに、「無念なり」とて、また倒る。「水谷よ、味方の軍勢大勝利なり」といひしに、「なに勝利とな。そはられし」といひて、笑を含みて、そのまゝ息絶えぬ。水谷は今年二十歳なり。その父はさきに白河口にて、予にかはりて討死せしかば、こたび父の仇を報ぜむとて、予に從へるなり。さるをまた予の爲に、かくはかなくなれり。この後何をたのみてか、弦月の旗を護さむ。思へば百萬の軍兵を失へるよりも、なほ悲しかりけり。ことに故郷には老母ありとか。かゝるさまは夢にも知らであらむ。知らざるのみならず、指折り數へて、凱陣の日をのみ待ちてあらむ。かへすがへすもあはれなることしてけるかな。さはいへ今はすべなし。せめて死體を老母のもとにと、ともかくもして送り出しぬ。予も四五町がほどを見送りぬ。あはれ千草に置き添ふ秋の露、野末にすだく蟲の聲々、予がこの曉の心を知るやいかに。折しもまた筒の音聞ゆ。いざとて馬に跨り、ふたゝび松が崎に向ふ。

迎妻紀行

かた袖

須磨の一夜

大町桂月

迎妻紀行

誤つて文人となつて、清貧の中に半生を送れど、天公はわれを律儀者と見給ひけむ、さづけ給へる子寶には、不足言ふべうもあらず。長男には、偏諱を與へ、文人の子なればとて、芳文と名つけぬ。次男には、今一つの偏諱を與へて、文衞と名づけぬ。わが出雲を立ち出でし時、内子臨月なりき。生れむ子、男ならば、出雲三郎と名づけよと云へば、餘り滑稽なりといなむ。然らば、文事あるもの、武備なかるべからず、偏諱に武を加へて、武衞と名づけむか。もし女ならば、何とか名づけ給ふぞ。女は望ましからず。何なりと勝手に名をつけよと云へば、女の身にもなつて見給へかし、女のたよりになるものは、女の子なるを察し給はずや、已に男二人あれば、こたびは、女こそほしけれとて、女を望み、われは男を望む。さても愚かや、天の配劑は如何ともすべからざるを、ひとへの腹の皮をへだてたるのみにて、人には其中のものを見わくる眼力なく、なほ男の女のと爭ふ。天公も知るあらば恐らくは噴飯したまふなるべし。

かくて生れし子は男なりき。われは地に墮ちて、未だ何事をもなさざるに、早くも三子のむすこの父となりぬ。五六十日たちて、子も肥立ち、母も肥立ちぬ。肥立てば、迎へざるべからず。迎へむには、旅費を要す。旅費を得むには、文を賣らざるべからず。さりとは果敢なき文人の身の上哉。昔者、呂東萊初めて妻をめとりし時、以爲へらく、人新婚すれば、學業を怠るものなれど、我は之に反して、大に勉強して、世人を驚かさむとて、東萊博議一部を著述せりとかや。これは一種のものずき、われは必要にせまられて、幾度か徹夜して書物の原稿も成り、雜誌の原稿も成り、新聞の原稿も成りぬ。かくて旅費を得たり。

雨蕭々たる日なりき。午後六時發の汽車に乘り込まむには、なほ五六時間も餘り居たれど、あわてゝ忘れ物せぬためにとて、もち行くべきものは、悉くかばんに入れたり。洋服も着たり。いざとなれば、このかばんさげて、柱につるせる外套を着ればよしと落ちつきて、なほ筆を執りしに、客來る、客去りて、たゞ[illegible]居りしに、出發すべき時刻となりぬ。車夫も來りぬ。寒酒いとのみに飮み、飯かき込みて出立しぬ。萬世橋に至りし頃、微醉さめて、身に冷を覺ゆると共に、初めて氣が付きて見れば、外套を着ることを忘れたりし也。取りに歸らば、汽車におくれむ。夜ひと夜、雨の寒さに、夜汽車の中にふるへざるべからず、内子家にあらばと、下らぬ愚癡こぼさむも詮なし、乃ち一句を吐いて曰く、

外套を忘るゝまでの寒さ哉。

乘り込み多き神戸直行の汽車に、おくれて乘り込みて、わづかに腰かくるだけの餘地を得たり。幾多の長亭短亭を過ぎて、雨方のまだなりの人出でしかと思へば、余の右に居りし婦人、夫婦の間を人にへだてられ居りしに、其の中の人去りて、夫婦相接するの機を得て、早くも顏を夫の方に向け、脚を余の方に延ばして、横臥しぬ。左の人も、脚を余の方に向けて横はりぬ。其脚と婦人の脚とは、余の背後に於て、幾んど相觸接せむばかりなり。其間に介せる余は、唯眞直に腰かけたるのみにて、少しも體を曲ぐること能はず。ベンチの上に、恰も十文字をつくりなせり。余もし雨足を踏みはだかれば、大

の字となるべく、更に兩手を伸ばせば、夫の字となるべしなど、下らぬことを考ふるほどに、眠氣催して頭おのづからさがり、脚の左方にあるかばんを添へて、下の字となりぬ。

翌日午前十一時、神戸に着き、山陽鐵道に乘りうつる。この汽車は、動搖甚しけれども、食堂の設けあるのみが、他處の汽車に其例を見ざる便利の點也。須磨、舞子、明石など、勝景の地を、幾皿の肉と一瓶の酒とに陶然としてすごし、岡山にて乘換へて、作州の津山に着きしは、午後七時なりき。これより中國山脈の頂を橫絕して、伯耆の米子に至るの路、二十六里、人力車を通ず。されど、山路なれば、一日には困難也。わが此の旅、出雲まで行かば、二週間を要せむ。然るに、一週間以上の餘暇を得る與はざるを以て、雨江に賴みて、妻子を米子まで送つてもらひ、そこに相會して、直ちに引返さむつもりにて、其の相會せむ日を明日と約し置きぬ。今は日早や暮れたれども、津山に宿せば翌日中に米子に達すること能はざるべしとて、汽車を下るや、直ちに車を命じて夜道をいそぎゆく。

霜さゆる十月の末の星月夜、銀河一道、中天を橫斷して、北斗七星、わが頭上に高し。風死したれど、寒氣、夜のふけゆくと共に加はりて、余は車の上にふるへたり。明日久しぶりにて妻子に逢はむ身の、勇める心は寒さなどに屈すべくもあらねど、われを載せゆく車夫も亦人の子なればとて、夜十二時、勝山町につきて、一旅店をたゝき起して、車夫と共にやどりぬ。此處は津山を去ること八里、米子までは、なほ十八里をあませり。

午前五時、蓐食して、車に鼻引つけて發足す。勝山より中國山脈の絕頂、即ち有名なる四十曲りの頂上まで、里程凡そ七里、中には平坦なる處もあれど、多くは上り坂也。昨夜われは陰寒にふるへ、今曉また寒戰す。妻子よりも、先づ逢ひたきものは、太陽の光也。されど、行く路は、谷あひにて、山高うして、日の出づる事遲く、漸くにして日は出でたれども、唯前峯の上部を射るのみ。その射られたる部分漸次下にひろがれど、容易に我身に及ぶべくも非ず。寒氣なほ甚しきに、もどかしき事、言はむ方なし。有名なる鬼ヶ嶽、左に溪流激し、右に大巖そゝりたち、其の巖の中に、可成り深く且つ大なる一窟通ず、四十曲りの道中、最も此處を奇とす。されど、去年出雲に趣きし時、既に窟中を窮めたれば、こたびは、よそに見て過ぎゆきぬ。四五里ばかり行きて、戀しかりし日光、初めて我身に及びたれど、さまで溫かならず。十時頃、新庄に着して、一旅店に憩ひ、酒を呼びて暖を取る。女中、わが寒がるを見て、氣をきかして、置き炬燵を持ち來る。牛鍋めさぬか、暖かになりますとは、山中に似合はず、如才なき女也。腹は張り居れど、二三十錢の金惜むべくもあらねば、言はるゝまゝに、牛鍋も取り寄せたり。このやうな山中にも、牛肉あるかと問ふより話うつりて、岡山には牛ばかり食はせる家がありますとは、此の開けたる世の中に汽車だに見たる事もなき山がつに對して平生口にせる所を、覺えず余の如き都人にも移したるものなるべし。

こゝより更に一人の鼻引をつけ、都合三人にて、われを引きゆく。人は共棲的動物也。二人より合へば、何か話せずには居られず。二人の鼻引、顙をならべたるを以て、何か話しあひて、引くことに身を入れず。二人のわりには、車ははかどらず。路危からざるにあらざるも、車夫三人もあれば、まさか車を谷底に顚落させる事はあるまじとて、夜來睡りの足らざるまゝに、うと〳〵と車上に眠り、絕頂の茶屋に車とゞまるに及びて、初めて覺めたり。

この絶頂より米子迄十一里にして近し。二人の鼻引は返して、一呼して山路を下る。その快さ、言はむ方なし。平地に至るに及びては、車夫もさすがに、夜來の勞働と睡眠不足とに疲れ果てつらむ、車の進行太だおそけれども、思ひやれば、叱るべくもあらず。天に一點の雲もなく、小春びよりのほか／＼と暖きまゝに、われも眠るともなく覺むるともなく、日野川の水と共に、伯耆の國に落ちゆきぬ。

とやまは薄く、み山は濃く、色付きたる秋の錦のながめ、いと面白きに、路傍の大巖にまつはれる蔦、その巖面を貫きて生ひ出でたる木まで紅葉せるに、四度まで經過せる路なれど、目新しく覺えて、進みゆくほどに、いつしか伯耆の大山、目の前にあらはれぬ。いつ見てもあかぬ山哉。山陽山陰の山は、すべて低く、且つ平凡なるに、此の山ひとり突兀として群を抜く。東京より汽車にて來る路にて、目にとまる山は、富士山を除きては、この山ばかり也。洵に山陰の珍とすべき山ならずや。

近き小山に隔てられて、大山はしばし見えざりしが、路は日野川をわたりて左折して、大山今は後にあらはれぬ。かくて米子の市街見ゆる平野に至りし頃、日は古城山のかなたに沈みぬ。多謝す、今日の太陽よ。御身は、夜來寒冷せし旅客に希望と光明とを與へしこと、いかばかりぞや。旅にうれしきは、晴天なるが、今日と云ふ今日、御身は一點の雲にだにさへぎられずして、一日のつとめをはたし、光明を人の子にはなちたまへり。願はくは、明日も明後日も、また斯くあれかし。思ひかへせば、御身の西に沈む影、われは寒烟衰草、古塋纍々たる處に見送りたる事ありき。行くに家なく、歸るに家なく、唯ひとり深山の上に迷ひたる時に見送りたる事もありき。御身の沈む影は、常に多感なる我身をして悲哀の情にたへざらしめしものを、今日は如何なる日ぞ、今日に限りて、われは滿腔の希望を以て、御身の沈むを送る。あゝ、笑ひ給ふこと莫れ。今日孤影煢々たる天涯車上の旅客明日も同じく車上にあれど、妻を添へ、子を添へて、御身の再びのぼらむを迎ふべき也。

米子町の中程にて、烟草をと、ポケットをさぐるに、わづかに一本殘り居たり。取り出だしてふかしたり。あゝ、大切なる烟草よ、われは、この一本をのみ終らぬ間に、久しぶりにて、なつかしき妻子の顏を見るを得べき也。

かゝる空想をいだきつゝ、定め置きたる旅館につけば、燈已に點ぜられたり。車を下るより早く庭におりて、妻子を問へば、未だ來らずと云ふに、われは失望して、川に臨める欄干にもたれて、茫然たること久しかりき。

最終の汽船未だ着せず、多分それに乘り給へるならむと、旅館の番頭の云ふに、成程とて、其の着する時刻を問へば、まだ半時間もあるに、一浴して迎へに行かむとて、浴し居りしに、間もなく、二三臺の車來りとゞまりたるかと思へば、はや聞きなれたる聲にて、おとッちやまは何處に居るのと云ふは、次の子也。此處にと言ひたさを忍びて、直ちに湯桶より飛び出したり。妻子の外に、送り來れるは、雨江と其の母と也。

大兒は、我右手にすがり、次の子は、左手にすがりて、喜ぶこと限りなし。赤兒は、母の手にて、にこ／＼と笑ふ。内子は、さすがに人目をはゞかれど、赤兒を我にさしつけて、昔時、二位の尼孕みし時、清盛必ず男を生めと云ひしに、生れし子は、あいにく女なりしかば、ひそかに傘屋の男の子と取り換ふ。其子、即ち宗盛なりとかや、御身如何に男を望み給へばとて、この子はかへ子に非ず。見給へ、この目のよく御身に似たる事をといふ。よそ目には愚癡の極なるべし。

かゝる歡會の中にも、思ひ出ださるゝは、去年

の春の事也。われ出雲に赴きし時、妻子の外に、雨江の父母を伴ひ、雨江は、此處まで迎ひに來り、同じ旅館の同じ室に相宿りしに、その父は、今年の保儀に身まかりぬ。今新に一塊肉加はりて、人數は去年に同じけれども、能く壯健にして、能く酒をのみし老人一人は、已に此世の人にあらず。わづか一年の中に、かはれば變る人の世の中哉、さるにても、みるめだになき山陰の僻地に、偕老の夫にわかれ、今は其のさみしさをまぎらしつゝ外孫にもわかれむとす。而して家には孫一人もなし。老母の心の中や如何ならむ。このまゝ外孫と共に、故郷の花の都にかへり給はずやとすゝめたれど、さすがに一人むすこの雨江とも離るゝに忍びざらむ。好意はうれしけれどもとて、應ぜざりき。

さわがしかりし小兒は、食終るや、間もなく、ばた／＼と打ちふして、さながら大風のなぎたる後の如し。話は盡きざれど、明朝の出發にさはらむとて、蓐に就きぬ。

あくる朝、涙にむせぶ雨江の母を、心もとなくも後に見て、われは次の子と共に車に乘り、内子は赤兒と共に車に乘り、大兒をば、荷物と共に別に乘せたり。去年の夏、三澤温泉に赴きし時、三四里の間、車を通ぜざるに、人夫をやとひて、大兒を負はしめむとせしが、人嫌ひして負はれむとせず、われに負はれ行きしに、わづか一年の後には、早や一人にて車にのるやうになりぬ。されど、もし睡ることもやとて、帶にてそのからだを車にしばりつけしに、一里とは行かぬ中に、果して睡りぬ。今日も、昨日の如き晴天にして、太陽の顏うるはしく、ほか／＼とあたゝかき日なりき。

車おそかりしが爲め、四十曲りのこなたにて日は沈みぬ。路上牛をひきゆくもの多し。次の子、年まだ三歲なるが、あの牛は何處へゆくのと問ふ。お山を越えて自分の家へゆくのと答ふれば、家たあ何アにと問ふ。家はおうちのことだよ、牛のおうちなのと云へば、そのおうちは何處にあるのと、頻りに根問ひせしが、路は四十曲りにかゝり、行けども／＼家なく、暮色はや蒼然たるに、しく／＼と泣き出す。ひもじいかと問へど、かぶりをふり、寒いかと問へど、かぶりふる。あゝ汝が情は、汝みづからも言ふ能はざるべし。父に似て、汝も生れて多感なるか。深山の落日、この父が何となく涙を催すを、幼き汝も同じく感ずるなるべし。大兒は、何も言はず、おとなしく車上にありしが、終に倦みはてつらむ、宿屋はまだですかと問ふこと四五回に及びぬ。もうぢきと答ふるほどに、漸くにして新庄に着きて、一昨日わが休憩せし旅店にやどりぬ。

次の日は、日まだ高きうちに、津山につきてやどりぬ。その次の日は、汽車にて岡山に着す。直ちに乘るべき汽車ありたれど、赤兒のおしめ悉くぬれたれば、そをほさむとて、一旅籠に投じ、ある限りのおしめを、二階のてすりにほしならべたるに、宿にてあまり惡い顏せざるも道理、こゝには、男の子ばかり六人ありとぞ。

神戸にて、夜汽車に乘換へて、翌日午前十一時、都につきぬ。母には迎へにこさせじとて、わざと時刻は知らせざりしに、其の甲斐なく、新橋の停車場に來りむかへたり。國澤氏へ嫁げる伯母も、嫁と孫とをつれて、來り居たり。伯母年七十、其の子は出世して、孫二人あれど、みな女也。我が三人の男の子をなでて、喜びあ中にも涙ぐみたるは、男の孫のほしきにや。人に望蜀の念あるは、人の人たる所以、樂も茲にあれば、苦も亦茲に存す。常住に足るを知れる者は、世に最も幸福なる人なるべし。

（明治三十五年）

かた袖

わが首途のいはひに親戚や近隣のしたしき人々を招きて、聊かもてなす心ばかりの酒宴の、上座には、本家の宗十郎とて、頭の中通りは禿げつくして、てら〳〵と毛一本もなけれど、さりとては顔肥りて赤く、まだ皺ひとつもなきに、その年齢の、いつも一座の問題となりけるが、黒紹の五つ紋の羽織に袴、扇ぱちつかせて、しかめつらしく坐りたるを此夜の上客として、それより左右に居ながれたる二十人あまりの客の、挨拶すめば、杯のとりやり忙しく、この春の試驗にわが筆頭一番にて卒業せしことより始めて、平生おとなしきこと勉強なることなど數へたてて、さてもいかにしてこのやうな善い御子が生るゝ事ぞと、口々に褒めそやされて、われはただ汗を流すばかりなるに、さすがに父は微醺機嫌の口先輕く、これが世に云ふ鳶の生んだ鷹でござらうなどと、覺えず頭を叩いて合槌うたるゝに、今更に恥かしく、聞くにえ堪へでうつむけば、明日はいよ〳〵おたちか、さて東京にては何と云ふ學校に入らるゝぞ、せめて今宵は一杯すごされよと、飲めぬ口に杯強ひて侑められ、止むを得ず目をつぶりて飲みくだすこともいくたび、一座の醉も杯と共にまはるにつれて、今迄話柄の中心となりし我をばよそにして、米の出來のよしあしなど、處柄とて、土臭き話に實が入りたる樣子なれば、よき折とほつと息つき、團扇片手に座をたちて庭に出でぬ。雲はれつくして、空一杯の星、息吹かば落ちむばかりの夏の夜なり。今までは氣付かざりし蛙の聲俄に耳だちて聞ゆ。池水をめぐりて、築山の上にのぼれば、酒席のさわぎは青葉に隔たりぬ。稻葉の上をわたり來て、わが懷をたづぬる夜風、草葉の露をさそひて、身にしみて涼しく、さやぐ熊笹の中より迷ひ出でて、ふはりと輕く飛びたつ螢の行末遠く、仰げば高き金剛、葛城の二山、天外に積翠を横へ、一條の大和川、平野の中に銀蛇を走らすなど、なれにし故鄕の山川の景色ながむるも、今宵ばかりと思へば、何となくなつかしき心地す。

　われは今故鄕を去りて、東京へ學ばむとするなり。年頃日頃起きても思ひ寢ても思ひたりしわが望みかなひて、われは又他念なし、我が志は大に、わが前途は遠し。われは年少の空想に驅られて、功名手に唾して收むべしと速了し、故鄕を去ることをつらしとも思はねば、父母の膝下をはなるゝことを悲しとも思はず。都にのぼりての後の事、學を卒へての後の事など想像に想像を重ねて、そゞろに胸躍りて堪へがたく、心はいつしか空にあこがれて、我身はさらにうつゝとも覺えず、頭おのづから低り、眼おのづから閉ぢて、われは寤めながら、未來を夢み、空に滿つるばかりの樓閣を描き出して、學士の稱號を受くるかと見れば、やがて海路遠く洋行し、今まで佛蘭西の都にありしかと思へば、忽ち東京の大路に二頭引の馬車を驅りけるに、思ひもかけず後ろの方にて、おや若さま此處にいらしてと呼ぶ聲す。

　この一聲に、われは空想の夢さめて、うつゝに回れば、金剛山舊に依りて前に聳え、身は庭の一隅に立てり。覺えず、どなたと口走りしが、耳になれたる聲音にそれと思ひ返して、藤さあ此へ來てお涼み、あの金剛山が薄黑う見えて、大和川がほの白う見えて、風にゆらるゝ稻葉のかげから螢が幾匹も飛び出すなぞは實に好い景

色ぢやないふと、愛想ふりまきしつもりなるに、はいと氣の乘らぬ返事しながら、浴衣ぞほの白く、えならぬ匂と共に我に近寄りて、あなた明日はもうおたちあそばすのね。いふもはやうるみ聲なり。

この休までは、學校の寄宿にはひつていらしても、日曜毎には、お歸りになつて、お目にかかることが出來ましたが、これからはるぐく東京へいらしたら、またいつお逢ひ申されませうか、わたしは心細くて、ほゝゝ、このやうに慣れくしう申して御免あそばせよと、涙をつつむ笑ひ聲さびしきに、われはわざと落付きはらひて、なに東京へ修業といつても、ほんの四年か五年の間、それに毎年夏休みと冬休みには、必ず歸つて來るからと云へば、それにあそばしても、とばかりにて、あとはえ云はでさしうつむく。

嗚呼わが功名の念と少年進取の氣象とは、我を驅つて狂せしめ、心中のよろづの懸念を排し去りたれど、全く排し得ざりはたゞ一事、この可憐の少女を故郷に殘し置きて、知らぬ他郷にひとり遠く出でぬること、ますく心に懸かるゝおもひなきに非ず。されど、この一念これも功名進取の念とたゝかふには敵し得ずなりき。もとより出でて歸らぬ旅にはあらず、何事もたゞ功成り、名遂げむ後にと思ひ定めたる身の、よしや二三年相見ずとてもと、われと我が心を勵まして、強ひて之を抑へたれど、今、まのあたり此の人を見、その優しき聲を聞きては、胸はまたかき亂れぬ。わが切なる心打ちあけむと思ひしことは、あまたたびなりしかど、いざとなれば、心臆して、それとは云ひ得ざりし不甲斐なさよ。われ今立ち去らば、天地の間に父なく、母なく、たよる所なき孤兒の、更に如何なる憂目や見むと思へば、人の涙はまだかゝらねど、わが泣くよりも悲しく、世がまゝになるならば、ゐて行きて、共に學ばむにと思ふも其の甲斐なく、さらばとて、少年客氣の人生は夢、功名は眼を過ぐる雲烟と悟るまでには至らず。われは默せまりて、仰いでたゞ涙を飮みぬ。

わが家の隣に、木村兵藏とて、さまで貧しからず、また富めるにもあらざる人、年久しく住まへり。姉のお龜とたゞ二人の兄弟の、親は貧苦の中に業を勵み、子を育てゝ、家道やゝゆたかになりしほどに、姉のお龜は、大阪の商人に嫁ぎ、兄の兵藏も嫁迎へて、いと嬉しく、これで重荷おろしたと喜ぶと共に、年來張りつめし氣のゆるみて、あはれや父はころりと先づ倒れ、間もなく母もその跡追ひて往生せしは、わが漸々物心覺えはじめし頃とかや。お龜のとつぎし商人、一時の商業上の失敗に自暴飮より身を放蕩にもちくづしたる末、美しきお龜が今更鼻につきて、色々難癖つけての離縁沙汰、お龜薄情なる夫には心殘らねど、たゞ一人の娘の子、かゝる人のもとに置くは氣づかはしとて、親子もろとも泣くく生家へ歸ることは歸りたれど、こゝにも雨洩る木の下蔭の、兩親は已に世を去りて、兄兵藏の夫婦は揃ひに揃ひし義理知らず、人でなしの、不人情の、強慾の、物惜しみの、生爪はがしても、おのれの利得になるものは見遁がさず、まことの妹を妹とも思はず、しぶくゝ引き取りたれど、よるとさはるとあてこすりて、出て行けよと云はぬばかりのもてなし、これまで時々生家歸りせし折には、よい身代の家へ行かれて、結構な御仕合と、追從こそ言ひたれ、かくばかり邪見なる嫂にはあらざりしに、兄も嫂の來ぬ前は、かくばかり邪慳なる人にはあらざりしに、今は[illegible]るまで前とは打つて變はれるに、これはとばかり、呆れはてゝ人を恨むとにはあらねど、今心の愚癡おのづから溢れて、涙の乾く間もなく、もとより親子二人とも、只管して兄の厄介

とならむとにはあらず、女の痩腕ながらも裁縫、洗張、機織、さては茶摘など、力の限り働きて、二人の食料は入れて、さまで世話にもならざれど、なほよき顔せざるに、さらばとて我家より二町ばかり東の方に、さゝやかなる家を借りて、親子ふたり細き煙をたてぬ。年ははや女盛りは過ぎたれど、器量よく、人柄もよければ、子連にてもと、所望する人ありたれど、男の薄情には懲りぬと、世をすね通しけるもあはれなり。

蕗子は、この薄命なる佳人の一人娘なり。七八年のむかし、われこの不幸なる親子の事はきき居たれど、縁もゆかりもなき他人の事とて、未だふかくは親しみはせざりしほど、或日他處よりの歸るさ、驟雨に遭ひて、家里遠き野中の路の、一株の老松の蔭に身をちゞめて、晴間を待ちけるに、折しも通りかゝれる可愛らしき小娘の、われを見て、福井の坊ちやん、一緒にこの傘へはひつていらつしやいなと云ふは、顏だけは、相知れる蕗子なれば、有難うとて、直ちに松蔭より飛び出して、其のさしたる傘の中に入る。その傘いと古く一處紙が破れて居れど、大人持ちの傘なれば、子供二人を蔽ふには十分なり、蕗子の左手に薬瓶もてるを見て、傘はわれ持たむとて、いなむを強ひてとりてさしかざし、その薬瓶は、母様が病氣なのと問へば、はい、お醫者様へ薬取りにいつた歸りがけなのよといふを、話の皮切りにして、歩む路すがら、氣になるまゝに問ひたゞすに、蕗子の母は熱病にて病床に臥せる事、働くことが出來ずして日々の費用に困り居ること、されど、兵藏夫婦は、ろくに見舞ひにも來ぬこと、醫者が薬代を催促すること、兵藏の家へ借りにゆきしに、はじめの二三回は、しぶ／＼ながらも貸して呉れしが、今は見限りて取り合うて呉れぬことなど、聞けばきくほど、あはれにも悲しく、われは子供心にも氣の毒に思ひて、小遣にとて、わが持ちし銀貨銅貨取り交ぜて、袂にあるだけさらけ出し、蕗子の家の前へ來りし時、これは少しばかりなれど、今の御禮にとて強ひて其の袂に押し入れて、雨の小止みせしを幸に、一禮そこ／＼走りかへりて、ありし事殘らず母に語りけるに、蕗子泣く／＼來りて、さきにわが與へし錢をさし出す。其の由聞けば、御志はうれしけれど、何のゆかりもなきに、このやうなもの戴くべき筈あらねば、早く返しまゐらせよ、如何に幼くとも、此の位の分別はあるべきにと、いたく母親に叱られしとなり。義理がたき人と、わが母も涙を催し、今まで病氣かよしは聞き居たれど、かくまでとは知らざりしとて、更に若干の錢添へて、蕗子と共にその家に至りしが、この後も不自由なきやうにと、母が度々心付けせしほどに、病やう／＼輕くなりゆきて、遂に全快するに至りしかば、親子もろとも我家に禮に來り、この御恩、死ぬとも忘れじ。御恩返しの萬分の一には、この身、如何やうにもつかひ給へ、またお役にたつことあらば、この娘も召しつかはれよと、涙と共にいつはらぬ感謝の意をのぶれば、なんの、あの位の事に、反つて痛み入る次第、お嬢子もこれからは度々お遊びにおいで。それにまた失禮ながら綾太郎も復習いたす時は、何にてもお教へ申しますから御遠慮なくと、學校にゆく資なきを知りての思ひやりに、親子涙にかきくれ、さらば御言葉に、あまえてと、よろこびて、蕗子は日ごと我家に通ひ來りぬ。思ひもかけぬ相合傘が縁となりて、われは今蕗子の師匠なり。平生外に出でて荒き遊び事するを嫌ひ、部屋にのみ閉ぢ籠りて、書をよみ、繪を見ることが此の上もなき樂しみなるわが身にとりては、日に一時間ばかり讀み書きを敎ふること、反つて面白くのみ思はれて、熱心に敎ふれば、蕗子又熱心

に覺え、日として机をならべぬ日はなく、口輕の下女に、雛人形の一對となぶられ、いよ〳〵親しむにつれて、其の末、罪なき言ひ爭ひも、はや夫婦喧嘩、御稽古かと冷やかされしこと幾度ぞや。

親も娘も人柄よくて、たよりなく、正しくして不幸なるをあはれとのみ思ひしわが心、いつの間にか戀とはなりけむ。華美なる粧して、白粉に顏を埋めたるよりも、飾らぬまゝの素顏のうるはしきがゆかしく、藤子が着るものも着得ず、飾るものも飾り得ずして、よろづ物足らぬ有様は、反つて我が心を動かしぬ。母が見かねて、夏冬折々の着物與ふれば、涙をこぼして喜ぶ顏見るだにいとゞうれしく、日々母より貰ふ菓子の一半を藤子に分ちて、その喜ぶさまを見ること我に取りては、言ふに言はれぬ樂しみなりき。藤子はさとり早き女性なり、よしや一を聞いて十を知るとまでは至らざるも、わが教へし事は、能く記憶して、進歩著しきに、われも教ふるに張合ありて、いつも藤子の來るを心待ちにし、その來ぬ日は、何となく不快を感じたりき。われ少年の時は、内氣と云ふよりは、寧ろ陰氣と云ふべき性質なりしに、藤子來るやうになりてより、笑顏日にわが面に溢るゝに至りぬ。時にはかなき憂鬱に沈むことあるも、藤子を見れば、忽ち之を忘れぬ。我幼時の家庭は、藤子の爲めに春を生ぜりと云はむも不可なし。折々はまた藤子の家をおとづれしことありしが、そこにおとなしく、やさしく、まめやかに母につかへし様は、更に一層我心を動かしぬ。これが眞の妹ならばと思ひしも、われに同胞なきが故のみにはあらざりき。

わが小學校を卒業して中學校へ入りし後も、藤子なほ時々わが家に來て學べり。藤子今は嬌羞を帯びはじめしばかりの年頃の少女なり。無心に笑ひ興じ、ふざけ合ひし昔とは異なりて、互に遠慮するやうになりぬ。はえ〴〵しき少女の顏、たゞいつまでも穴の明くばかり見たけれど、目の視線と視線と相逢ひては、何となく恥かしく、思はず知らずよそ向き、見て見ぬふりし、見ぬふりして見るも、我れながら可笑し。机をへだてて差し向ふに、藤子がやさしき鼻息、わが手にかゝりては、身ぞ〳〵と、嬉しきやら、恥かしきやら、今まではつかへず云ひし事もおのづから口しぶりて、別れて後、あゝ云へばよかりしと悔むこと多かりき。

わが家より中學校に通ふ路は、さまで遠くもあらざるに、父がわざ〳〵われを寄宿舍に入れしは、甘き親の手一つにそだつるよりも、多くの人の中にもまれて、おのづから男らしくならしめむとの主意とおぼし。わが陰氣なる性質は、藤子と親しむにつれて、一變してやゝ陽氣となり、寄宿舍に入るに及びて、再變してやゝ活潑となりぬ。望みもおほきくなりぬ。早く中學を卒業して都に上り、大學に入り、世に出でて名を成し、功を立てむと思ふ一念、今は絶ゆる間もなく心中にもゆれど、住みなれし家もさすがに戀しく、日曜日を待ちかねて、勇み家にかへれば、藤子も必ずおとづれて、別になれなれしき話とてはせざれど、顏だに見れば、何となくうれしかりき。

わが身を立つる未來の空想いよ〳〵大きくなると共にまた粗になり、たゞ國家の爲め、人民のためにとのみ念じて、未だ一身一家のこまかきことに及ぶ遑なければ、末は藤子をどうするとまでは考へ至らざれど、かゝる可憐の少女を、我が側よりはなして、知らぬ他人の手に渡さむは、惜しき次第といつしか思ひそめぬ。

逢うてはたゞなつかしく、別れてはたゞ逢うて見たく、人の手にわたすはいやなりとのみ思ひし一念、今年の春に至りて更に一歩をすゝめぬ。藤子の母の病めりと聞きて、ある日曜日、

見舞ひにゆきしに、思ひしよりもやみさらぼひけるが、我を見て、ほろ〳〵と涙をこぼし、蟲より細き聲音あはれに、このやうに疲れましては、もはや助かることは出來ますまいが、たゞ此の妹の行末を思ひましては、どういたしても目がつぶれませぬ。此の上の御願には、他にはたよる處のない娘の身、どうぞお見捨てなくと、後は涙に咽びてえ言はず。そのやうな弱きこと言はれずと、安心して療治なさるゝがよい、氣が病をたすけますからと慰めて、寄宿舍にかへりしが、その次の日曜に外出せしときは、藤子の母は早や此の世の人にはあらざりき。（

藤子引きとるべき筈の兵藏夫婦が、あの通りの人なれば、可哀想なりと我が言ひだすよりもさきに親が心配して、わが家にて、仲働につかはむと云ひしに、兵藏夫婦もとより異存なく、藤子はたゞ泣いて喜びしかば、事早くまとまりて、可憐の少女、今はわが家の人となりぬ。われも又中學を卒業し、寄宿を出でて家に歸り、日々顏見合せて、胸はつねにさわぎぬ。さるにても、わが平生朋友と議論などして、口角泡を吹くばかりの勇氣も、藤子に對しては何處へやら。幾度かおもひ決したれど、遂にあらはに言ひ出すの勇氣はなかりき。

今宵はからずも人目絶えたる庭の一隅に、たゞ二人相對しては、嬉しさ餘つて苦しさ言はむ方なし。されど思ひかへすに、人目なき處に、わざ〳〵我を尋ね來りて、名殘を惜しみて、平生になくなれ〳〵しく言ひしは、よく〳〵思ひせまりての事なるべし。一度かく思ひ出せば、是れまで、藤子の素振りの、何となくそは〳〵せしも、故なきにあらざりし、我が素振りも恐らくはそれと推せしならむ。今は早や心の底わざわざ口に出す必要なしと勇みたつまゝに、唯、藤とばかりにて思ひに燃ゆるわが手をさしのべて、闇に白き藤子の纎手を握れば、答はなくて、たゞはら〳〵と、我が手の甲に落ちて聲ある情の涙熱く、胸の奥にしみわたりぬ。我がおもひは之に知れと、顫へる手にかたく締めて、藤そんなら暫くあはないよ。どうぞ御身體を大切に。お前も無事でと云ふ折しも、突然、母來りて、綾太郎はそこにかえ、お客様をさし置いて、何をして居りますえと咎め給ふ聲、平生のやさしき聲とは異なりてかどだちて聞えけるに、われはさながら頭より水かけられたるが如き心地せり。

この翌朝、われは出發して、東京へ上りしが、半年毎の休暇には、必ず家に歸りぬ。われと藤子との間は、近くして遠かりき。

わが母方の縁ある家に、玉子とて、藤子と年齡同じばかりなる少女あり。これも幼時より我家に來なれて、相親しみしが、われは、何となくその人を好まざりき。我が幼時の性質、男子にして女子なりとすれば、玉子は、むしろ女子にして男子なり。活潑にして、にぎやかにして、よくしやべり、よく笑ひ、氣輕にして罪なく、惡氣もなけれど、我が打ちとけて親しまざりしは、世に云ふ蟲がすかぬものにや。されど、好かぬ人とて、われよりすゝみ出でて、あらはにこれを隔つるほどの勇氣もなく、うはべは仲好く遊びしかば、人には更なり、玉子にも、わが心それとは見えざりしなるべし。

玉子と藤子とを比ぶれば、藤子は海棠のやゝさびしきが如く、玉子は牡丹のにぎやかなるが如し。玉子のからだは、肥えたりといはむよりは痩せたる方にて、藤子のからだは、痩せたりと云はむよりは肥えたる方なり。藤子の顏はやや圓く、玉子の顏はやゝ長し。色はいづれも白けれども、藤子のやゝ黑きは貧に苦しめるが故にや。玉子の目はぱつちりと涼しく、藤子の目尻は少しさがりてかはゆらし。殊に玉子は富みたる家の娘なれば、衣服髪かざり、すべて美を

つくして、手入よき花壇の花とも見るべく、藤子は、なりかたちを顧みる暇なくして、ありのまゝに打ちまかせたるは、日陰の花とも見るべし。よしや器量は下れりとするも、藤子があはれなる身の上は、まづ我が心を惹きけるに、器量とても下れるにあらず。殊に玉子が性質活潑なるに反して、藤子のあくまでもおとなしく、しとやかにして、而かも陰気ならざるは、何となく我が心にかなひぬ。われは藤子を愛すといはむよりは、むしろ憐みたるなり。人なき折々、やさしき言葉かけていたはれば、はやほろほろと涙ぐむ有様に、やさしき女性と、われも覺えず涙を誘はれしことも幾度ぞや。

我母も、藤子を愛してつねに、其の人柄をほめたれど、そは一通りの情にて、玉子の方が更にその氣に入れるが如し。玉子の來る日は、機嫌とりわけてよく、折々いさかひすれば、理非はたゞされで、頭ごなしに我を叱るがつねなりしに、客大事と思ふこゝろのみにもあらざるべしと思はれぬ。

玉子、[illegible]甲の高等小學校を卒業して後は、西京に出でて、高等女學校に學べり。たちの好き藤子にも深く學ばしめなばと思へど、甲斐なし。ひと年の夏、休暇の期限、盡くるに垂んとして、明日は出發せむとせし日、母といろいろ物語りの末、母は言葉を改めて丁度明日は玉さんもおたちだから、京都まで一緒につれていておあげ。今日うちへ來て一晩とまつて、そして明日こゝから一緒に立つやうに約束してあるからといふに、さうですかと氣の無き返事して、何思はず、藤にも今少し學問させて見たいものですがと口走り、後ではつと思ひしが、母は忽ち聞き咎めて、さうは手が廻りませぬ、藤は萬事おつかさんが引受けて世話をするから、お前までが心配しなくてもいゝよと、はや目に角だてたまへる樣子なるに、我もこのまゝにてはすまされず。今の女子は學問すると、誰でもお轉婆になりますが、藤のやうなおとなしい人ならば、まさかさうでもあるまいと、ふと思つたのですと云へば、それでもお前、おとなしいばかりが能でもありません、玉さんを御覽なさい、利口で、はきはきして、品もよいし家柄もよいし、それはそれは藤などのくらべもんではありませんよと意味ありげなる言葉、うちけさむと口までは出でたれど、われを見つめ給ふ眼の、あまりに眞面目なるに、われとこゝろを抑へて、そのまゝ止みぬ。

これといふて話すべきこともなけれど、また、しばらく逢へぬ別れとおもへば、何となくしみじみはなして見たく、強ひて用事こしらへて呼びよせて、眼にもの云はするが、せめての心やりなりしが、待たぬ玉子、はや旅の用意とゝのへ來りて、われになれなれしく笑ひ興ず。われ京都の惡口いへば、玉子は東京の惡口言ひ、互に學ぶ土地の贔屓して、からかひあひたる末、ふとした事が氣にさはりて、はては口のみにとどまらで、手を出して爭ひしさま、通りかゝりし藤子の目には、如何に見えけむ。翌朝出立の時見れば、藤子の目泣きはらしたる痕あり。ひと夜も何に泣きはらしたる涙ぞと、東京に上りての後も氣にかゝりし。

その年の冬休みは、さゝはることありて、郷里にかへることを得ず。あくる年の夏に至りて歸りて見れば、藤子は早や我が家に居らざるに、われは胸まづ潰れぬ。どうかしましたかと母に問へば、たゞ暇を出したとばかり、何かあやまちでもありましたかと問へば、別にあやまちはないが、少しこちらに都合があつてと、至極曖昧なる答なり。われは、心も心ならず、或時、下女を物蔭によび一問へば、いゝ人でも出來たんでせうよと笑うて取合はず。じやうだんも時による、本氣で聞くに人を馬鹿にするなら

して見よ、われにも思はくがあると權幕するどく叱りつければ、まつぴら御免あそばせ、實の處、お藤さんは、お家からお暇が出まして後、しばらくは、伯父さんの處に居られましたが、伯父夫婦と云ふは御存じの通りのよくない人で、それは〱ひどい目にこきつかうた末、金にこまる事があつて龍神へといふのを、お藤さんが血の涙をこぼして、それだけは許してと承知なさらぬので、とう〱前借にて國府の宿屋へ女中に出したと申すことでございますと云ふ。して暇が出たわけはと問へば、それはわたくしにも分りませぬが、邪推いたしますればと云ひさして、俄に口をつぐむ。決して他言はせぬから、その邪推話してくれよと云へば、若樣も大抵御察しでございませうがと前置おきて話すを聞くに、わが多少疑ひしことと全く符合しぬ。母は我に玉子をと思ひ込み、親類中の内談もほゞとゝのひたれど、わが藤子に意あるを知りて、家に置きてはいつまでも邪魔者、間違ひなき内に遠ざけなば、心の移ることもやと、あさはかにも思ひとり、背に腹はかへられずと強ひて心を鬼にして、罪もとがもなきに、たよる所なしと知りながら、世にも可憐なる少女をば、家より出し給へるなり。許させ給へ、母上。藤子さらばわれもまた去らむ、藤子死なばわれもまた死なむ。親の子なれば、わが氣質は知らせ給ふべき筈なるに、藤子の外に心移すべき薄情男とおぼし給へるもうらめし、況んや、わが藤子にたつる心中を、たゞ若氣の出來心とのみ速了したまへるもくやしや。

若樣も罪作りですよ、お立ちになつてから後と申すものは、お藤さんまるで氣抜けがしたやうで、ぼんやり立つて東の空をながめて見たり、うつかり灰に福井綾太郎と若樣のお名前をかいて、人に見付けられて、眞赤な顔して、言ひわけするなど、若樣しをらしいぢやありませんか。若樣があまりおやさしすぎるものですから、お藤さんが首つたけにおなんなすつたのも無理はありませんわ。若さまもまんざら憎うはございますまい。ほゝゝ、思ひ思つた中ならば、粹をきかしてお添はせあそばすが親御の慈悲と申すものだつて、さうぢやございませんか若樣と、おぞや我れいまは下女風情の手玉にとられて、ぐうの音も出でず、からかひ半分の親切ごかしも今はうれしく、親がせめてこれだけさばけ居らばと涙なり。

兩親の慈悲深き故郷の家庭も、今は鬼の住家とのみ思はれぬ。國府の宿屋といふをたよりに、心も空にあくがれ出でて、奈良の方へと稱して、國府にたづね行きしに、すゝけたる小驛の家はづれに一軒の旅店あり。他に旅店なければ、この家なるべしと思ひ定めて立ち入るに、見掛けに似合はず可成りひろき旅館なり。廊下をいくたびも廻りて、階子段を上り、二間經て、六疊の一室に入る。この二階の建物は、このごろたてつぎたるものと見えて、材木なほ新たなり。この室には床つき居りて、このあたりの村夫子の作と覺しき詩の書きぶりも拙き一軸の掛物かゝれり。二方あけはなしにて、風通りよく、南は田に面し、金剛山、獨干を抽いて靑し。日はなほ未だ落ちざれど、時刻は早や七時に近く、鎭守の森のかけ三四町ばかり長く地に曳きて、その末がこの樓の障子の半ばに及びぬ。さて案内せし者、茶と菓子とを持來りしもの、浴衣もて來て風呂に案内せしものと、それ〲女中が入りかはりたれど、藤子は影だにも見えず。されど、在來の經驗によるに、飯の給仕には、その旅店にて、尤もすぐれて姿よきものが來るためしなれば、われはなほ一縷の望みをつなぎて待ちけるに、夕飯を持て來しは果して藤子なり。我を見て飛びたつばかり驚きて、おや、福井の若樣、こゝへはどうしてと、言葉さへあら

たまれり。顔はもとのまゝに美しけれど、からだいたく肥りて、絞りの浴衣に數寄屋の前垂かけたるさまは、またもとの藤子にあらず、わづか一年の間にかくまでも變れば、變るものかと、われはまづ心に泣きつ。

何處へおでましになりますと問はれて、お前に逢ひに來たと云へば、それは有難うさまとて、打ち笑ふさま、思ひの外に平氣なり。しみ〴〵話するに、酒なくてはとて酒をとりよせ、飲めぬ口とは思ひながらも、まづひとくちさせば、これも思ひの外快く飲み干すなど、もとの藤子とは、らつて變れる仕打なり。何時の間に飲むことを覺えしぞといぶかれば、酒がのめなくては、此の商賣は出來ませぬと云ふ。此の商賣するやうには誰がした、許して呉れよ、藤、そなたも我が母に恨みがあらう、我もあると同情を求むれば、あら勿體ない、せめて萬分一の御恩返しには、私が御家を遠ざかるより外には道はございませぬ、どうぞ玉子さまと行末久しくとは、意に隱しても隱し得ざる藤子の本音なるべし。母はともあれ、わが心は知り居るべき筈なるに、それとは水臭いとうらめば、いやもう若樣のお情は、よくわかつて居りまする。そのお情のおやさしいのが、今では結句恨みでござりまする と、解けても解けぬ風情なり。

藤子のうたがひは、口先ばかりにては言ひとくべくもあらず、たゞ氣長くわが身の行にてと思ひさだめて、この宿屋の料理屋を兼ねたるを幸に、晩方より出懸けて、夜ふけて歸ること多かりしが、さすがに藤子も幼馴染のむかし語りては、覺えず涙に沈むことあり。肥れる腕をさすりて、お家にて、いたはつてお使ひあそばされた頃は、このやうでありませんでしたが、こゝへ參つてから、階子段の上り下りから、長き緣側の拭掃除と、朝から晩まで休まるひまもなくこきつかはれて、この通りの手になりましたと溜息つくは、例の女氣とあはれなり。いやらしいは近在の若者、人に無理に酒のませて錢にぎらせて、いやらしいこと言はるゝ度毎には、命がちゞまる心地がいたしまする。孫まである村長さんが、禿頭の六十面さげて每度來て、醉つぱらつて抱きついて、柿の腐つたやうな息をふきかけられ、かなしいやら、腹がたつやらと、聞けば聞くほど悲しき藤子の身の上なり。

心はくだくるばかりなれど、今が今とて藤子をたすくる者なければ、たゞ暫くの辛抱となぐさむるのみ。母に藤子をよびもどさむことをすすめたれど、聞き入るゝ樣子なければ、我はただ心みだれて、家はよそに、しのびて國府にかよふほどに、今年の夏もつきぬ。われいま大學にありて、規則のゆるやかなるにつけこみて、休暇の期限つくるもなほ二週間ばかり滯在せしが、かくて果てしあるべきにあらねば、遂に思ひ切りて、また東京にのぼりぬ。

この冬また歸り來り、例の國府の宿屋に赴きけるに、藤子居らず。聞けば一月ばかり前に、龍神の方へ移りぬと云ふ。嗚呼龍神は色を鬻ぐ人間溷濁の港なり。一時は氣を失はむばかりに驚きたれど、あの清淨可憐の藤子がよもやとおもへば、また疑ひを起しぬ。樓の名はと問へば、たしか雲州樓と云ひましたと云ふに、全く根のなき事ともおもはれねば、今は氣も氣ならず、そのまゝ旅店を飛び出しぬ。

藤子果して龍神の遊郭に行きしものとすれば、藤子はもはや純潔の處女にあらず、汚れたる女なり。我が心を思ひも汲まぬ不實の女なり。この年頃、眠られぬ床に藤子の寫眞をながめて、心に描きし未來の理想は、こゝに全く消滅しぬ、藤子が恨めしくもあれば、また可哀想にもあり。いやらしくもあれば、またゆかしくもあり。方寸たゞかき亂れて今は分別もつかず。身は絶望の谷に陷りたれど、ひとすぢに愛慕せし心は、

なほ〆練となりて殘れり。その未練は、藤子を辯護して、よく／＼の事情あるべしと、一たび思ひ至れば、一目なりとも逢うて見たくなりぬ。われはすべての未來の希望を斷ちたれど、藤子其人を斷念する事能はず、訝しや、平生芥溜よりも穢らはしと嫌ひたる遊郭も、藤子が行きたる所とおもへば、さまで不潔とも思はず。藤子を清淨純潔なる少女と信じ切つたる我が一念は、遊女のためにらせず。我が藤子に對する行末すべての希望は失せはてたれども、たゞ藤子に逢はずには居られず、我が氣の失せたるもぬけの殼は、この一念に驅られて、前後の分別もなく、車を龍神の遊郭に飛ばしぬ。

千鳥の聲に、冬の夜更け初めて、茅渟の浦より吹き來る北風潮氣を帶びて寒く、高く小さき冬の月、空に澄みて寂しけれども、龍神幾條の花街は、紅燈絃歌の聲を照らし、浮かれ歩く人の足音乾きて高し。此の遊郭の内にて、やゝ上等と見ゆる中通りには、雲州樓と云ふ貸座敷なければ、その左右の幾條を彼處此處とたづねゆくに、こゝは客種もドりて、銅色なる額を手拭に埋め、どてら一枚にて寒さうな風もなく、鼻歌輕く歌ひつゝ、三人或は五人つれだちて、一軒每に覗き歩くは、いづれも楫を枕の寢覺寂しき浦の泊りの船夫とおぼし。嗚呼われ色を漁せむとにはあらで、二重外套の頭巾目深く被りて、枉げてかゝる賤しきものの中に交はり、泣いて足を人間洞溪の地に投ずるは如何なる因果ぞや。

漸く看板に雲州樓と記せるさゝやかなる一軒の貸座敷を見出して、暖簾くゞりて覗けば、鶉格子の中に裲襠姿はなやかに、六七人ならびて坐れるが中に、格子より二番目の女は、たしかに藤子なるが、われは二重外套の頭巾に、目と鼻とばかりを出して、人目をつゝみたれば、それとは氣付かぬ樣子なり。袖引かるゝまゝに躍れる胸をしづめて二階に上れば、どの子になされますと問ふ。格子より二番目の女と云へば、それならば、此の室へとて、障子開きて導きたるは、わづか三疊の小室なり。白き布かけて室一杯に敷き延べたる薄き蒲團の、後ろの方高まれるは、火閣入れたるにや。上の方の餘地には、丸行燈の光りかすかに、二個の枕を照らせり。

これはあまりなる有樣と、蒲團の上に打俯して、たゞ涙をこぼしぬ。やがて、階子段を登り來る足音、障子の外にとまるかと思へば、障子のひらく音して、裾捌きしなやかに、えならぬ匂と共に入り來りて、やさしき聲に何と云ひけむ、我が耳にはしかと聞きとれず。打俯せるわれをゆすりて、どうなされましたと云ふに、思ひ切つて仰向けば、おやとばかりに惘れて物も言はず。そなたは此樣な所へ來て、われを思ひ死にに死なするつもりかと恨めば、これには段々深い子細が御座りまするが、どうぞ聞きわけて下さりませ。非道な伯父を持ちましたが、この身の不運。酒に覺えを失ひて、夢に身を汚したと申すも恥かしい。もうこの上は問うて下さりますな。毒くは皿、此の上は恥も外聞も御座りませぬ。藤が魂は、とうに死んで居りますれば、世になきものと、お諦めあそばせ。御聲を聞くも涙の種、此の上の御情には、どうぞ御顏を見せて下さりまするな。片時なりとも、このやうな處に居られては御身のけがれ。さあ／＼早くお歸りあそばせ。若樣御機嫌よう。此で一生御目にかゝりませぬとて起ち上る。そなたの胸は聞いたが、わが胸も聞いてくれよ、まあ／＼待つてと取りすがれば、何はなくても、よく分つて居りまする、御免あそばせと、一聲言ひすつると共に、姿は消えて、紅の片袖空しく我が手に殘りぬ。

須磨の一夜

西國の歌枕見むとて、そこはかとなく、あこがれゆくに、三月ばかりは經にたり。はや須磨の浦曲に秋風たちて、置きそめたる白露も、分別ありてにや、取りわけて古戰場の草に繁く、無官太夫の墓荒れて、蟲の音いとゞ憐を添ふるの夕べ、さやかなる立待月の影にそむきて、旅館の中に過さむも、心なきわざにやとて、瓢箪に酒をみたして獨りたちいで、足にまかせて濱邊を歩めば、蟹蟲などの、人の跫音を我事と驚きて遁げ行くも可愛らしきに、蘆花雪を吹く邊に、白鷺の小首傾けて捨小舟の番する顔なるを、こよなき酒の相手と、石に腰掛けて眺めけるに、近く笛の聲す。敦盛の亡魂の青葉吹くにもあらざるべきになど、獨りごちつゝ、聲するかたをみれば、年老いたる一人の虚無僧の餘念もなく月をふみて尺八を吹きすますなりけり。

猶ほ近寄るまゝによく其樣を見るに、身には古錦襴の袈裟を纏ひ、編笠ははづして腰につけたり。年は五十路の阪を多くは超えざるべし。肩は稜々と瘦え、髮はおどろと亂れ、いかぐろき額に深く刻める幾條の皺は、崢嶸たる世路に受けにし艱難の名殘をきざみ、頭落ち顴出でて長鬚むく／＼と生ひて胸に低るれど、さすがに眉は臥蠶を欺き、眼なほ清らかなるは、昔は美少年と謠はれけむ。姿はいたくやつれたれど、風采は賤しからず、由ありげなり。さても怪しき人に遭ふものかなと竊にいぶかりつゝ、眸を凝らして其人を見れば、其人も亦暫し歩を停めて我を打守りたり。

夜更けて風全く死にたり。遠寺の鐘聲、烟霧の外に沈みて、人跡絶えたる白砂青松の間のしづけさは、梢より落つる露の聽くに聲あるばかりなり。

虚無僧は物言ひたげにして口を開かざれば、われ先づ聲をあげて、そこなる人に物申さむ。君と半面の識だにあらねど、見受くる如く、江上の月にあこがれたまふは同じ心の人にや。あはれ、明月あれども共に眺めむ人はなく、酒あれども共に酌まむ人もなくて、つれ／＼に堪へざりしが、圖らずも妙なる笛の調をきゝて、心俄に浮き立ちぬ。うれしくも對面したるかな。何の風情もなけれど、月をば肴に、心ばかりの杯、酌ませたまはずやと云へば、如何なる人にかおはする。辱くものたまふものかな。湯の辭儀して水となすも、反つて心なき業なれば、仰せに從ひて御饗應に與からむといふ。さらばとて、白砂の上に座を構へ、盃を兩人の間に飛ばして互に獻酬せり。

中天の明月まづ對話の題目に入りて何くれとなく物語るに、虚無僧は破鐘の如き聲を張りあげ、いと心よげに胸襟を開きて、敢て城郭を設けず、洒々落々として赤心を人の腹中に置き、詼諧など打交へて互にへだてざること十年の知己のごとし、ひごろ樵歌と牧笛とをのみ聞き飽きて、旅興大に索然たりしに、今夜はからずも君に逢ひて、十年の書を讀むにも勝る心地せりといへば、われは二十年このかた未だ君のごとく、共に語るにたるべき人にあはざりきなどいひて、破顔微笑するさま、たゞ人にはあらず。

こし方ゆくへの事どもより移りて、何を思ひたちての旅にかと問はるゝに、旅にはてむ身にはあらねど、世にすみわびての果敢なき心やりに、甕中のもののあらむことは、浮世の外の高山流水を友とし、夜々孤衾の[illegible]にそゝける高

竿の沸溪を千里の長風に乾かさばやとて、獨り遊び出でにしがなどいへば、虚無僧は鬚を撚りてから〳〵と笑ひ、小隱は山にかくれ、大隱は市に隱ると云はむも事ふりにたれど、心のまゝにならぬが浮世なり。暫しの心やりと聞けばさることながら、血氣の人往々心から怪しき世界をつくり出して煩悶すれど、天はたかく地は厚し。都のみが日の照る處にあらず。あながちに世を離れむとするは、なか〳〵に不平のなほ小なるものならずやと興に乘じて說きゆかむとするに、われは遮りて、かく悟りたまへる御身の、尺八持ちて生れいでさせたまひしにもあらざるべきに、一片の深網笠に浮世を遮らるゝは如何にといへば、能くぞ問はせ給ひし。われ、まことは世を厭ふにあらず、厭はざるにもあらず。又浮身やつして流浪せざるべからざるわけありきや否やをも知らず。故郷の人には狂とや謗られけむ、愚とや笑はれけむ。切なる一片の微衷は語らむとするに其人なく、又語らむと思ふ心もなけれど、尋常世を厭ふ發心と思はれむもさすがに本意なくて、志を同じうせる君に問はれたる嬉しさに、二十年の昔、語りいでむとて、杯取り上げて一息に飲み干す。

浦賀の港に轟きし大砲の音に、桃源の春眠正に覺めて、俄に勤王と呼び、攘夷と叫び、終に櫻田門外の雪に鮮血の花を散らせしよりこのかた、天下益々多事となり、長州征伐も女の夜這と時の俗謠に嘲られ、空しく泣寢入となりて、今は薩長二藩相連合して其勢太だ强く、時局漸く一變せむとするの際、われは近侍の士十五人と共に、我藩の若君に侍して、藩兵ひきつれて京師に上れり。夜々徒らに筐底に悲鳴せし寶刀の鞘走り出でゝ、日頃鍛へし腕の力試して、君に盡し、國に盡し、祖先にも酬いむものと、勇みに勇みし意氣込み、今更思へば恥かしきことの限りなりけり。

薩長二藩は、我藩の大なるを以て、先づ手に入れむと思ひしが、一度手をやきては取り返しの付かぬことと二の足踏みて、遂に、寄らず、觸らず、敬して之を遠ざくるに如かずとや思ひけむ、大津は海道一の要害なれば、貴藩にて固められたしと言はれけるに、其時は固より深き工みありとも知るに由なければ、遂に承諾して大津に向ひぬ。さるに、薩州の謀終に發して伏見鳥羽の戰となりて、順逆の二途明かに分れけるに、口惜しや、我藩兵は恨みを吞みて空しく大津の一方を望み、勤王ともつかず、佐幕ともつかず、蝱蜂とらぬ始末に、さては、薩長の奴原に謀られにけり、と罵り騷げども、早や六日の菖蒲と事去りて、臍をかめども及ばざりけり。

國元なる大殿は聞かせたまひて、さきに若君を遣はしたるは、一は萬乘の君を守りたてまつらせむとてなり、薩長の頤使を受けしめむとにあらず。さるに臣下の本分を忘れて輕々しく京都を去りたるは、上は朝廷に對して不忠極りなく、下は一藩に取りて此上なき恥なり。かへす〴〵も嗚呼の振舞、疾く〳〵歸れとて、事の外に怒らせたまふに、殿の短氣の性質におはせば、若殿樣の御身の上に若しもの御事ありてはと、一人の家老痛く心を惱まして、此事全く臣の計らひにて、若君樣には夢にも知らせたまはず、罪は臣一人にありとて、勇ましく其身の切腹も一若君の一命を購ひ得たれども、御怒はなほ晴れず、一行の國境に入ると同時に、近侍の士は皆青乘物に入れられぬ。遂に特別の恩典を以て死を賜はることとなりぬ。

われも近侍の士なり。しかも、若君に從ひて同じく京都に上りしなり。さるに、如何なる悪運にか、我身はかりは、不幸にも、一死の恩典に洩れぬ。

そを何故といふに、さきに我藩兵の大津に下りし時、我は伏見の煙硝庫の番人にとて獨り取

り残されて、衆と共に京都を去らざりければ、死を賜ふに至らず、遣る方もなく遺憾なるに、搗て加へて、検使といふつらき役目を仰せつけられぬ。

行先長き武士の若木の花をあたら無殘の太刀風に敢なくも散さむことは、見も知りもせぬあかの他人すら痛み悲しむべきに、まして、年頃同じ君につかへ、朝な夕な共に膝を交へて、睦み親めること眞の同胞に異ならず、死なば共に君の御馬前にとまで思ひたる朋輩同士の斷末魔に、「獨り惜しからぬ命永へて、いかでか検使の役を果し得べき。さはいへ、君命は重く、友誼は輕し。一身の私情を以て、奉公の大義に代ふべくもあらず。まことに偽ならぬこそ浮世とは聞きしかど、死にまさる生のくるしみのかくばかり切なることは、またとあらじ」と覺えけり。

さすがに武士の最期はつゆ怯れたる様なく、能く淨瑠璃文句にもあるが如く、笑顔を娑婆の置土産にて、十五人の若武者が、花の盛りにも逢はざるに、身の成る果をむなしく一片の刃に寄せて、一時に泉下の鬼となりしは、あまりにもあつけなくて涙も出でざりけり。

昨日迄は共に仕へ、共に親しみし侍從の身の、榮枯俄に處を異にして獨り生き殘りたるを、果報者なりと悦ばるゝにつけても、いとゞ人の心のあさましく思はれ、世の無常を一身に集めて、今更に、靜に地下に眠れる身の上のしたはしき心地せられて、日の明かなるもつらく、花の麗はしきもつらく、富貴は猶ほつらく、功名は更につらく、凡べて世人の幸とし、福とするものは、反つて苦惱の種となりて、いたづらに我れと我心を痛むるばかり、我れ獨り榮華を貪りては朋輩への誠は通らぬなり。

ことに我は初めより營倉の番人と定まりたるにあらず。他に定まりたる人はありたれども、大津に出發する時に當りて、その人俄に支ふる事のありければ、我れ暫かりそめに代りて番人となりけるに、其間が一髪の機、遂に長く生死の途を異にするに至りしなり。又隊長より申込のありし時、しばし躊躇ありけるが、小組の中にて我は最も熱心に大津に向はむことを主張したる一人なりけるに、その主張せし人は大津に向はず、主張せざりし人々、反つて大津に向ひて、其間の一髪の機、また幽明の界を隔つるに至りしなど、人の運命の果敢なく、世の禍福の頼みがたきを、思へば思ふほど亡き朋輩に對して心殘りのみせられて、穴へも入りたく、起ちても居ても身の置處なきに困じたる胸の思ひの、火とも燃えず、水とも消えずして、遂にみづから作り出したる今の姿なりけり。

かくまでに決心したれども、もと我も凡夫なり、朋輩の義理のみ胸に滿ちて、其他の事情の、つゆ心に入らざるにあらず。家には父あり、母あり、一萬石の田園あり、又愛女房となぶられし宿の妻も、これはしたり、話がはずみて下らぬ愚痴を溢しぬ。許したまはれや。

未だ恥かしさに、親御には申上げねど、月經とまりて、はや左の腹の重きやうに覺ゆるに、でかしたと一言、賞めて給はれや。日頃ふさぎておはすれど、御友達の身の上のみが可哀想にて、二世を契れる妻の身は可哀想とおぼしたまはぬか。少しは打解けて優しき言葉掛け給ひても、亡き御友達への義理は缺けまじきになど、先程まで口說きしが、はや疲れ果てゝすや〳〵と眠れる若き女のいたいけなさ。憐れや、我愛を得むとて洩らしゝ一言は、反つて我をして、妻をすてゝ世を去る決心の度を高めしめぬ。我は家を去るとも、我胤だにあれば家の祀りは絶えぬなり。

小夜更けて燈火の影幽かなる閨の中に、明日より若後家となるも身の上とも知らず、子を生みての後の事を夢みてにや、頰に笑靨の跡を打

たせて、両手を胸に動かして物を抱く様する妻の寝姿をあとに残し置き、武士の命と頼みし両刀をさへ残し置きて宵に立ち出づれば、春は夜に埋もれて月の光もおぼろなり。

吹き覚えたる青竹流の尺八をたよりに、木末に晴分れて黄昏空に聳れる城の天守閣を遙に伏し拝みて、何處ともなく足に任せて立ち去り、はや國境を出でむとする時、長棒の乗物の来るに遭ひぬ。立傘、挾箱など前に備はり、後には眉尖刀、紫の流蘇つけたる袋杖など持ちゆくを見て、和尚の行列とは知られけるが、武士を棄て、刀をも棄てたる丸腰の果敢なさは、みづから路を譲りて平伏するに、圖らずも我姓を呼びて駕籠より出づるものあり。誰かと見れば、檀那寺の和尚なりけり。いたく驚きたる様にて、我を人なき木の下蔭に伴ひゆきて、ねもごろに我身の上を問はるゝに、包む處なく語りければ、和尚は頻に涕涙を揮ひけるが、此度の御發心は止めまゐらせたればとて止まりたまふべきにあらねば、せめて此を參らせむに形見ともおぼして御體に着けさせたまへとて、我に贈りたるは、今も着け居る此袈裟なり。此時よりして今に二十餘年を經たれど、くはしく身の上を明かしゝは、唯御身一人、和尚を合せて前後唯二人のみなり。

朱鞘の長刀腰に帯び、板金剛蹈み鳴して、威風を肩に切りし少年得意の時代は、一炊の夢と覚めて、ある甲斐もなき五尺の體に添へるものとては一笠一笛に過ぎざるものから、世累なき身の心やすさは、月を枕とし、雪を衾とし、白雪流水の外に眠り、怪禽の聲に驚きて谷の清水に嗽げば、朝日に匂ふ花の香の、夢の名殘をほのめかすに、我ながら儚ならぬ我心のいぶかしく、數聲の笛を一杯の酒に代へむとて、牧童に敎へられたるまゝに杏花の村に向へば、降りしきる晴明の雨に、おのづから腹を斷ちし詩人の恨みも思ひやられ、露を吮ひ腸を喰ひ、咲く花に春の來るを知り、移ろふ紅葉に秋の老ゆるを知りつゝ、二十年あまりは經にけり。未だ都門の悪風に染まざる山里は、さすがに人の心なほ厚く、もとより議論を上下するに足るべき人は多からねど、漂拂の盞をめぐむ人は到る處に乏しからず。このわたりには、姿をそのまゝ名に呼ばれて、髮の翁ともてはやされ、最早名乗る必要なく、また呼ばれし事もなければ、もとの姓名はわすれ果てむばかりなり。

益なき長物語に、さぞやつかれたまはむ、われも亦喉の渇きて堪へがたければ、今一杯つぎてたまはれといふに、心づきて杯をさがせど、いつしか砂のうへにたふれたり。杯底の[illegible]に細砂の附着せるなれば、酒をそゝぎてあらひおとして虚無僧に帰し、したしき朋輩の非業の死に後れて獨り栄華を貪るに忍びずとて、世を遁れたまひし御心のほどは、西行法師の發心にもまさり、亡き人の墓に劍をかけにし季札にもまさりて、たふとしとも尊く、道徳地をはらへる澆季の世にも武士道のおもかげはなほ殘りけり、君の物語によりて、君のつかへたまひし藩の名はおしはかられたれど、君の姓名は何といはるるにか。なほ忘れたまはずば、名乗らせたまへといへど、虚無僧はたゞ笑うて答へず。

なほゆるやかに問ひまゐらせたきこと多く、申しのべたきこともおほければ、今宵一夜はまげてわが旅館にやどりたまはずやと云へば、あくまでも切なる御志はうれしけれど、ゆく處にゆき、止まる處に止まるべき閑雲野鶴の、人の情にほだされて物に滞らむは、わが望む所にあらず、また御身の望む所にもあらざるべし。夜ははや更けぬ。いざさらば、御縁もあらば重ねてといひつゝ身を翻すよと見るほどに、姿は早くも秋霧の奥にかくれて、笛聲むなしく松濤の外に嚠喨たり。

ゆく水(みづ)

笛(ふえ)の音(ね)

鹽井雨江

ゆく水

夕は、峯の時雨も、降りや初めけむ、露やゝさむき片山里の秋のくれ、霧ふきおろす山風に、送られて、紅葉まじりの柴木をば積ませてかへる一人の少年の、何に心の引かるらむ、牛おふ袖もうちしをれて、思ひいさまざるけしき。手繩もいつか角にまきかけたるまゝにて、たゞたどるにまかせつゝ、此方彼方、とがたとなく、見かへり見わたし勝ちにのみ。をりふしは、餘念なげにうちながめて、いつしか歩みを忘れたる如くたゝずめば、やゝ行き過ぎたる牛の、主をうながすか、ふりかへりて、二聲、三聲、鳴きてよぶに驚かされて、ひたはしりに走りよるとはすれど、やがて、また、おくれがちなる袖、何に引かるゝものならむ。招く尾花や、すがる白露、いづれ面白き秋の野邊。

毎時に水かふ處をおぼえてか、つめる柴木も隱るゝまでに、薄か萱か生ひ茂りたる草の細路ふみわけて、小松がくれをゆく野川の岸近く、牛はわれと獨り先きに下り立てば、少年は追ひもせず、そがまゝ、われも小松の根なる岩根に腰うちかけて、またもつくづくとうちわたす野邊山邊、眼にとまる色や、何ならむ。

來し方の山邊は、むらむらとたつさ霧につゝまれ、をりしも落ちかゝらむとする夕日のひかりにうつろひて、うすくれなゐの嵐となりてたなびくが隙より、なほ綠こき常葉木や、はや唐紅の紅葉などのこゝかしこに透きて見ゆるけはひ、さながら浮織の錦の引幕張りたらむ山もとにつゞきて、紅に、紫に、黄に、うすくこく、千草染めなす麓の野邊、綾の席敷きつらねたるこゝかしこ、白妙の袂ゆらゆらかにまねきつらねて舞ひよどみたる尾花の手振りに、はやすがごとき松風のかなで、さゞれ水のしらべにうちまぜて、鶉の亂れかゝる聲、近く蟲のむせかへる忍び音に、をりふしは、妻こふ鹿の遠く忍びかねたる鳴く音さへ通はせて、ものの色も音も、よにおもしろく、あはれを盡す秋野の夕げしき。自らなつかしみ、身も心もあこがれゆくべき山河の秋色。あはれ少年の心やとめ、袖やひきけむ。

げに、少年の心は、此の山河の風色にひきとゞめられしなり。あはれ、少年の袖は、このなつかしき秋野の色に引きとゞめられて、行きがてにするなり。されど、彼れは、錦なす草木、綾なす山水の、この美しく面白き色にのみ、眼とまりて、秋の野の行きがてにあるにあらず。彼れは、風聲露色に、思ひ出づる昔の秋のなつかしきなり。なつかしき昔の秋に、いよいよおもひいづる人のなつかしさなり。彼れは、いまだ父母の外なる縁を知らざるなり。たゞやさしかりし人のありしが、なつかしきなり。

彼れは、此の里に生れたるものにあらずといはるゝのみ、何處の人とも知らず。父をさへ知らず。知れるは、唯、母一人ありけり。其の母たりけるが、彼れを懷に抱きながらに、何處よりとも知らず、さすらひ來れるが、草の枕のつらき嵐にあてられてか、此の野末の假寢の宿、空しく秋の木の葉の恨みを添ふべかりしを、わづかに玉の緒の危くもむすびとめられしより、そがまゝに此處に住みつきたるなりと人の噂にて、彼れは知りぬ。父は何處の人にて、如何にかしけむ。母はいづくいかなる人ならむ。とふ人あるも、母はたゞうちゑみて、氏もなく、國もなく、家もなく、見るかげあらず、すみわ

びて、浮世のせとに頼むべき岸もなく、かくはさすらひはてし木のはし、藻屑の末、はづかしき身のうへとのみいひて、いづくいかなる上とは、まことのわが子ならむ彼れにさへあかさず、絶えていはざりけり。

　春秋の花紅葉さへ、世のならひに似ざる片山里の人心、もとより、彼れに、母に、つらかれとにはあらねども、いづくも口さがなきは、おなじ人の株附。とやかくとさゞめく親々の噂をはしばかりきゝつぎて、里の童どもが、ともすれば、あはれ、父なし子や、宿なし子や、乞食のわろやとはやしたて、誰れも遊ぶな彼れも作れな。あなきたなと、うちそろうて袖を隔てゝ、彼れは一人うち捨てらるゝ事あれば、をり／＼は、父なし子や、乞食の子や、ものほしからむ。これやれと、土くれ、草びらなどを投げかけられて、童が中のなぶり者にせらるゝが、幼心にも、あまりの口惜しきにや。彼れは、幾度か泣きし事あり。泣きて、母なるに幾度か父を尋ねたり。母は唯、父は、おはしたるお亡くなりたまへるにこそ。いと心高くおはせしを。汝れも気高う生ひ立てや。よしなき人をな見聞きそ。萬づ我心だにぞ。心よりこそ、おどろの奥の花も美しく、藻屑がはたの月もすめ。他の作れずば、汝一人行け。他の交らずば、汝一人遊べ。心の友と云はば、野山は何時もすてじ。母もかくてぞとのみ教へけり。

　彼れも心剛く、気勝ちたる方なりければ、幼心にも、我を折り屈げて、他の童の背後に腰をかゞめてさへ、立ちまじる事をえせねば、われと孤立を取り守れば、自ら童どちは、ますますかたらひよりて、いつしか四面、皆、敵の聲。さびしき野山に春秋を送りたるが中に、彼れを憐れみし唯一人の友、彼れを見捨てざりしたゞ一人のやさしき友、其のありし友の思ひ出でられて、彼れはなつかしく、すぎもかねたるこの秋野の夕草。

　彼れは、父のかなしきを知らず。同胞の美しきを知らず。唯彼れが世にやさしかりし人の心の忘れがたきものは、母のいとほしき外には、たゞこのやさしき女の一人あるのみ。名は松代、色も、容も、心さへ、名におへる少女なりけり。げに彼れが為めには、伴れともなり、影ともなり、楯ともなり、護りともなりぬ。父なし子や、乞食の子やと、のゝしり恥かしむる心なきうなゐの中に立ちて、彼の子ばかりは、父ない子は無きよ。死なれ給へるによ。もの乞はねば、乞食の子にもあらぬよ。さる事いはぬものにと、彼れが為めに恥を雪ぎくれては、石なげ木ぎれ打つが間を分けて、父なき子はあはれむべきものを、さはつらくせぬものよと、毎時に彼れが為めに楯とも護りとも成りくれし事も、幾度か。穉き子や、群れにな入れそ、誰れも作れたと、わけなく忌みも厭ひもなしはつるうちなきうなゐの間れに分れて、彼の子ばかりは厭はず、忌まず、常に、彼れを誘ひも作れも遊びもしけり。彼の子は、里に名も高く、門も大きく、國學者とやらむ家の子にて、しかも、毎時に乳母さへ作れ立ちたれば、頑是なき童共も、さすが、彼の子には手むかひも笑ひもえせねば、なか／＼に、彼れにのみ、憎み恨みはむかひけむ。されど、彼れは、此のやさしき女故に、嵐の音のみしげき片山里の野邊も、露さびしき色をおぼえず、つねに彼の子の乳母を案内にて、春は菫花つみ、菜花なき、土筆ぬきに、蕨の影を追ひめぐりぬ。此處の野邊　夏は篠の葉に乳母がつくりし小舟や、水車、かけもうかべもして、諸共にこの野川の水、小松がくれの此の野川の水を、袖ひちて結びこは。秋は木の實拾ひ、千草あつめて、家路も何に、此處の野山を分けこそゆきしか。

山の姿も、さながらに見え、水の調べも、皆

にきこゆれば、かざしゝ紅葉も、ありしまゝなる秋の色に出で、尾花の袖の遠近に招くかげさへ、諸共に袖つらねたる昔にかはらぬを、人は如何に、そのやさしかりし人は、如何に。今はあらず、共に見ずなりにたる野山の秋色、顧れば、少年の心とて、腸の寸裂するなくてやは。しかも、たゞならずかなしうやさしかりし友。草の庵の嵐にたまらぬ破戸もる夜寒の、さしもにかたき彼れが骨身にさへこらへてか、一冬彼れが引き籠りたる時なりき。日毎、乳母と共におとづれて、彼の子がつねに服みならひたりといふ薬をさへに、自ら持ち來りて、これのみてよ、竹丸君、妾もつねによかればとさへ、柔しくうつくしかりし友。今は、天とも地とも頼みたる母さへなくなりて、淺茅が原の西東、たのむ方なき彼れが生路のさびしき起臥には、いかばかりか思ひ出でられて、なつかしく、行方はてなきおもひなるらむ。

なつかしさに、彼れは、この三歳二歳、柴木こるいとなみのいとまには、書よむ事をおもひ立ちて、終日山路に樵りくらしては、歸れば、榾柮の火影にあくるを知らず、只管にたどりわづらふ文の道も、たゞ、こひしさにあこがれゆきてなり。さるは、彼れは、行方知らず、わかれしにあらず、雲居のよそに遠ざかりたるにあらず、たほ、野山をも隔てず、里をも、おなじうせるなり。たゞ、敎の庭の垣一重に隔てられたる松代は、父の掟さすまゝに、十歳の春を去る三歳の秋のくれより、深窓にとぢこもりて、文の庭より外へは出でも踏まずもなりたればなり。彼れは、さびしき草の野木、風露ます〳〵つらくして、日とも月ともたよりたる母の影さへとめずなり、ぬば玉の暗夜をたどる彼れが生路に、たほ心强くも、唯一人、柴木を力に、あるかなきかに立つる朝夕の煙、心細き起臥に、露のまも忘れがたき彼の友の事。遂に、彼れは、文學ばむと思ひ立ちぬ。おなじ道を行かば、自らまた逢ふべきたよりもあらましものをとおもふ果敢なきたのみゆゑ。

かゝる秋、かゝる友、かゝるなつかしき思ひに引きとゞめられて、野邊の夕暮、行きも過ぎかねたる少年は、小松が蔭に腰うちかけしまゝ、魂は野やめぐる、山やかくる。身は、さながら空蟬の殼。はやたそがれかゝる家路も忘れしばかりにうちながめたるが、飼はれたる牛の、頻りに首ふりあげてよびたつる聲に、さすが驚かされて、とつかは身を起して、うち立てば、來し方、行く方、野山は、夕べの霧にうづもれて、吹きすさぶ嵐に、何處ともなく、聞え響く音さむく、はら〳〵と散りかゝる袖の霰、白し。

* * * * * *

さゝれど門はうづもれて、ふみわけてとふ人もなき草の庵、われより外に影もなき榾柮の火影に、唯一人、書かいとく少年、しばしは餘念なげに見えたるが、寒つ椎柴、垣の萱原、いづかたもさびしき嵐、きかじとすれば、强ひても吹くか、いよ〳〵すさぶ軒の松風に、いつしか書の面もかき亂れかゝれば、霧にやむせぶ、雲にや迷ふ、天ゆく雁の聲も、たえ〳〵にきこゆるに、心ははや空にならむとすれば、さつと吹き入る山風に、一きは燃え立ちて、焦立つが如き榾柮の火影に心づき・書取り上げて、思ひ直さむとすれば、あやにくにくき鹿の聲、妻こひわぶるか、別れや迷ふ、山路の遠近に、鳴く音かなしきに、またうちしをれて、つく〴〵と思ひしづめば、秋の夜さむにふしわびて、こゝもかしこもむせかへる蟲の忍び音さへに、身にしみて、いよ〳〵千々に亂れはつる心、しづめかねて、押しあくれば、岸にさゆる山の端の月の光りにすみまさりゆく夜半の色・殘るくまなくおもひすましては、やうやく靜にもゆる榾柮の火かげ

にうちむかひて、よもすがら書よみあかす少年の心の中こそ憐れなれ。

舊きを終れば、市にたづねて、新しきと替へ、朝夕のものも、起臥の時も、うちわすれて、四年、五年、春秋のうつるを覺えず、花紅葉の散るを知らず、頻りにたどりたどるに、誰れ導くともなき彼れが文の道も、いつしかやゝ深くわけ入るにつけて、何といふ事知らに分け初めたる言の葉の、露も色も、いやましあはれの知らるゝにつけて、道の限り奥をもきはめまほしくも思はれ、且は、おなじ道にありといふ家の軒端のなつかしさ、いふかたなく、彼れが強くかたくなる心も、これが爲めには、いつしかこらへず。彼れは、はじめて、かたき膝を、われと屈めて、松代が父のもとに、履取る小者と、賴みて仕へぬ。

彼れは、心こはけれど、もとすぐたる男子なりければ、名に背かぬ和郎とて、松代が父にも、はやく竹丸々々とよばれて、世に二なき若者とあはれがられ、登城にも、他所にも、出づるには、必ず供せらるゝのみならず。志もけなげなればとて、いとまあれば、國學の道、しるべの勞をいとはず導かるゝに、初めて知る神代のことのはじめ、天皇が御事のもと、しきしまの大和島根の國ぶりなど、いよ〳〵きくに思ふに、心の改りて覺ゆる事のみなるに、彼れがかたくたなる心は、また、何となうやすからず。ねざめがちなる夜半の床、つく〴〵と、古の事、今の事、本末を思ひめぐらすに、いよ〳〵面白からぬ今の世なりけり。天地の姿は變らぬものを、君臣の分は、くづれもはてゝ、あとなく、日月の光りは、なほ明らかなるを、天皇の御かげは忘られはてゝ、草木の色はかはらぬものを、臣民の操はうつろひはてぬ。山の掟、水の姿、山河はさながらなるを、人の心は動きも濁りもなしはてゝ、塵よりも輕く、泥よりも穢く、唯、巧言令色、爭うて權につき、威にすがりて、誠に仕ふべく盡すべき方を忘れはてたるこそ、あさましけれと思ひつゞくれば、松代の父さへに、面白からず。彼れは、かばかりゆかしき國のはじめ、尊き君のもとをあきらめながらに、しかも、此の世の變りたる不思議を見もし、九重の玉垣荒れはてゝ、袞龍の御衣、露ふかくおはすときゝながらに、目しひ耳しひの知らざるが如きは、あやしきことのかぎり。思ひ出づれば、彼れが、もとはおなじ、田野の一つらの國民なるを、領主とも國君とも仰ぎて、これも世なりとの言の葉、思へば、世にこぶるにあらで、また何の意なるべき。文字、しかも、國の文字あるものが、犬馬の尾をふりて、いまの世に權家の堂下に馳驅すとは、世にあさましくも穢き主人の心かな。おもへば、此所の主人が身も穢し。衣服も穢し。調度も穢し。妻も穢し。此の軒も穢し。此の床も穢し。此の窓の空氣も穢し。此の家ながら穢し。かゝる穢き住家を、なにしに慕ひ來にけむ。慕ひ來て、なにしに、口惜しくも、腰をかゞめけむ。腰をかゞめて、なに意氣地なくも、彼れがために太刀を取り、履をさへさゝげけむ。生れて柴木樵りてあらば、いやしきおどろの奥に埋れはつとも、まことの王土の民草となりもすましゝ物を、口惜しくも、何しに穢き家に仕へて、假りそめにも、まことの民草の宿りを離れけむ。くやしさよと思ひつむれば、肉も骨も躍るばかりに覺えて、ねられぬまゝに押し直りて、枕べの燈火搔き立てゝ、うちむかへば、來し方、行く方、いとゞ思ひめぐらされ、亡き母のなつかしさ、いふかたもなく、おはせし日の事など、思ひつゞけらるゝに、ふと心づくは、臨終に留め給へる袱紗の一包。男にならずば、な見そと宣へるがかしこさに、けふまでそがまゝにて開はなさざりしを、今こそはと取りも出だせば、細々と遺し給へる家

の來歴に、初めて知る父の身の上、世の順逆を正さむとして成らず、無念の臍つんきて、はかなくなられし父が、志、忘るなと、血涙のあとさへあざやかに留められて見る母の文。さりときゝては、いよ〳〵焦立つ彼れがおもひ。齒をかみしめて、しばしは、悠然とながむれば、眼にうつる松代が面影、慰むるが如き面影。松代、松代、やさしき松代、此の頃は一しほ、やさしう覺ゆる松代、別れんは苦し、つらし、惜し。さはいへ、吾れも男、かゝる名殘りに、何時までかはと思ひおもへば、片時も今はかくてはこらへず、つと立ち上りて、柴木樵りし昔の藤衣にあらため着ると見たるが、また、そのまゝにどつかと坐して、深くも思ひ沈む、底に亂るゝや、如何なる雫。

いつしか登る妻戸の日かげに驚かされて、押しあくれば、つねに朝戸出はやき松代が、間近く一枝二枝咲きそめし梅の木の下に、はや下り立ちて、匂ひもすゞしきあしたの風に、青柳の綠のねみだれ髮を、梳らせたるけしき、羽衣を臨せる翁やいづれと、とはましき風情。竹丸を見るや、よべも變りおはせでか。下り立ちて見られよ。美しう咲きたるを。この頃は何となうすぐれぬけしき。わづらふことやある。心もとなし、父上もよし案じられ給ひつゝ、竹丸が重ねもあへ、藤衣の襟の薄けなるをうちまもり、あな便たや、春といへど、野邊も山邊も雪深く、風はなか〳〵に身にとほるものを、げに心いたらざりきと、自ら喚せて、新しげなる小袖とりかへり、こは、女子たちの、しかも、自らが着馴れなり。なめけなれど許し給へと、進むる心も言葉も、よにゆかしくもやさしく美しき人のまごころ。げに彼が父母の外に、また、唯一つ世になつかしきものありと覺え、彼れが飽くまで殘く思ひすごたるが中に、たゞ一つ清く涼しく離れがたきものありとさへ覺えたる人の誠心。それきくも、見るも、これを限りの名殘りとなすべきかと思へば、張りつめし心の矢竹も、もろくたゆみ、鐵石なす心も胸も、涙はとゞめあへず。しとゞに溢れかゝるを、袖につゝまむとすれど、粗き藤衣の、涙は雫と洩るゝに、いかに汲みてか、松代もうちしをれ、父母おはさず、さこそは御心に餘り給はめ。仰せ給へ。自ら斯くてもあらむほどはと、何處までも深からむ眞心ぞ。藻屑となりて、このまゝ此處に朽ちたましとさへおぼえられ、そこにも堪へず、伏しも沈まむとするを、危く窓の柱に支へて、なう、姫、竹丸は、此の竹丸は、思ひ立たねばならぬ旅ぞ、おもひ立たれ、今日御暇申すなり。今よりは、これをこそ、昔とも見、せめては思ひ續けてあらむ旅の空、とばかりにて、あとは小袖にかきくらす涙、末は、また、如何なる夜々の時雨なるらむ。

*　　*　　*　　*　　*

君が行く山路か、遠く雲立つ。晴れてよ、霞、なびきてよ、山。見まほし、いはまほし、今一度。あけていはまほしかりしこの思ひ、おもへば、口惜し。かひなくもいはで殘りし事の口惜しさよ。さはいへ、君。さはいへ、岩下水の岩にのみむせぶばかりのわが思ひ、音には出でも語らねど、色はよそにも知るべきを、知らでか、君は。知らでか、獨りは行きにたる。つらし、悲し、つれなさよ。よしや、何處にはてましともわかぬ旅にしあらばとて、なう、君、さして行かるゝ空ばかりは、西東、いづれとも教へば教へもせらるべきを、なう、君、よしや何時を待ちえてまたあひ見ましとも定めがたき旅ならばとて、互に命あらばと玉の緒の絶えぬを賴まむ程の契りばかりは、さても、とゞめばとゞめもせられ給ふべきを、いかなればか、君、竹丸君、いづべとも告げられず、命とさへも

たのまれず、唯思ひ立たねばならぬ旅衣、思ひ立つとばかりにて、父さへが、さばかりにとどめ給へる袖を、よそにして、あながちに立ちもいなれしみ心こそは、強う、すげなう、恨みなれ。

ふりわけ髪の何こゝろなく、むかしは、君よ、われはあるなる父といふものの、君はいまさぬ袂のいとほしさに、唯、遊びもつれにたるばかりの野邊山邊。なう、むかしは、君、はゝそはのははさへに亡くなりて、淺茅が原にたよるべき陰とては、絶えて無くなり給へりときくが悲しさに、われもまた泣きて迎へしのみのこの園ぐさはいへ、君、竹丸君、若草のわかぬばかりの野邊の色も、そむれば濃くも成るものを、むすぼともなき田の露も、つもれば深くも成るものを。君は知らでか、つれなきよ。

昨日までも、よべさへも、よにやさしうも覺えたる容顔も、すべて僞りの飾りなれば、朝な夕な、此の一年二年、父もよろこびおはしたる、世にたのもしき言の葉も、皆、まことのうらなりしか、いつはりにてか、うらなりしか。いないな、思へばさとしうたのもしうおぼゆる君、さるは、よく／＼深きよしありてのことならむ。きかまほし、知らまほし。思ひ立たねばならぬ旅衣、思ひ立つ、思ひたつ、立つとは如何なる言の葉ぞ。よしありげにもきこゆるを。たけのびしわがふりわけ髪の亂れをば、早くも正しき君が心の一筋に、むづかしくもいやしくも思ひ立たれ、さては、立たねばならぬとの言の葉や。その人數にしもあらざめれど、春は立ちかへり昔の色にいでましみ庭の花、秋はまたよきにしまゝの影もうつらむみ園の月、古を戀ふらせられむ春秋は、竹丸とかいひけむものもありしがと、よその忍ぶのたよりにも忍ばせ給ひてと、なつかしう惜しみ給へる袖の名殘りも、うらとばかりはおもはれず。なう、君、せめてこれをこそ、君がかげとも見めと、おぼつかなけにかきくれて、小袖の袂に濡されし涙の雨の雫にも道理盡しておぼえしを。思ひ思へば、竹丸君、あけてきかまほし、いはまほし、今一度。晴れてよ、霞。なびきてよ、山。人は何處ぞ、見まくほし。

晴るゝひまなくかぎろひて、霞に沈みゆく夕山邊。君は如何なる谷に行きくれて、岩の細路ふみまどひておはすらむ。おどろの奥には、おそろしき人喰ふ者も住むといふ。離し給ひそ、渡つるぞ。深山路には、情なき鬼あさみさへしはしときく、足な破りそ、手な傷めそ。旅とあらば、まゐらすべき藥も侍りしに、おもはぬ別れの悲しさにかき亂され、はか／＼しき駒のはなむけさへ、爲しもはたさざりしことの愚さよ、あはれ、松は、やがて、手向草ともよぶといふ。この松代の身ながらを、願ふは、君が旅路の幣にもがな。あらき峠も多かるべきに、神々の恙なき守りをこそ、祈らまほしくもおもほゆれ。霞むとすれば、雫けして、おぼろ月夜のかげ寒く、こゝもつまとふ夜半の嵐は、身にぞしむ。なほ雫ふかき奥山、いはがねのなれぬ枕に、いたはり知らぬ峯の松風は、いかばかりつらからむ。かなしき君がいとほしや。塗にとどむべき旅ならずとも、野山の嵐も、ふきたごみ、四方の日影ものどまらば、草の枕も、さすがにあたゝかに、岩根の床も、やがて、つらくばかりはあらざらむ時までは、今暫時のほどを、是非に、強ひてもとゞむべかりしを。さもあらば、君も、もしは、今日ばかりは、思ひとゞまりたまふこともありけむを。つねもいたらぬ心の、不覺の涙にさへくれまどへば、兎角の事も思ひわかざりし口惜しさよ。

せめて、去年までの例の、恙なくてましまさむには、わかがへなをまゝには、よし、見もすては離かせ給はざりけむ、わかためにいはるゝ

事も、とゞめたまふこともありけむを。君侯がたまはる今の母御、かしこかれども、今日は恨めしうぞ覺ゆる。父さへが、やがて、君侯にも披露して、一門をも取り立てやらむと思ふなるに、竹丸や、留まるべくば、止まりてと、別れ惜しませ給ふをば、さはいはるれど、思ひ立たねばならぬことありといふものを、あながちにとむるは、情にもあらず。ゆくこそよけれ、やるこそよけれ。留むるは彼れが爲めならず。家の爲めにしもあらじとは、あまりにすげなき母上の言の葉や。立たねばならぬ竹丸君、とゞめてはあしかりとは、そは道理もありとせむ。さはいへ、竹丸殿のとゞまらば、家の爲めにしあらじとは、如何なるが家の爲めにてか。何の爲めにか、あしうてぞ。あやしうものたまへる言の葉や。かしこかれども、この一言は、松代は、うらみに侍るかし。人も、いかにかきかれけむ。おもふに、戀し、母戀し。去年なる母の戀しさよ。世にましまさば、かばかりにいひがひなきあかぬ別路に、獨りもうち殘りて、今より幾よか、かくて世の中を歎き暮らし、恨みあかすべくもあらざりけむを。思へば、わが世の樂しみも、幸ひも、去年の母御と共に空しうこそなりはてにたれ。ありて世の中に、また望みなし。去年のはゝその嵐、小松が千代の色も香も、あはせて殘らずなりにけり。今は世の中に、何を望み、何をたのみて、何時をか待たむ。思へば、なつかし。母さま、よびてよ。おはす邊に、あはゆかまほし。きけば、天ゆく孤雁の聲、汝れも戀しき母やある。悲しき人にわかれてか。おぼろ月夜にむせぶ聲。

＊　＊　＊　＊　＊

人を思ひ、母を戀ひ、松代がよもすがらいねもあへず思ひあかせば、窓あかうさしのぼる朝日かげ、今日も、光りは變らねど、昨日の空や、なつかしからむ。つく〴〵とうちながめたるが、そよ吹く朝の風に、匂ひすゞしくゑみこぼれて、慰むるがごとき梅の木かげに、さすが、心やひかれけむ。下り立ちて、はややつれもおぼゆるかよわき手先に、一枝二枝手折りたるが、また更に忍ばるゝことや多からむ。竹丸が在りたる書齋のほとり、ちかく立ちよれば、空しき窓とおもひきや、松代の君かといふ聲は、はじめよりいまはしくおぼえたる母なるが弟。毒蛇の穴に落ちかゝらむずる夢見しが如く、あなやと聲立てぬばかりにうち驚きて、あとをも見ず、居間に馳せ戻りたるが、面は青ざめ、手足さへふるひわなゝきたるよ、よく〳〵いまはしくやおもふらむ。

もの見るに、もの思ふに、亡き母の親りになつかしうのみなりまされば、菩提寺詣でにと、父の許容もとめて、折り取りたる梅の枝を、手向のはなにと携へて、立ち出づれば、何處にてかきゝけむ、松代の君、寺詣にか、閼伽井の水くみにや作れ給へと、またもやいまはしき人の聲。いなとばかりにいひすてゝ、やゝ遠き山邊の寺、露ふかき樒の垣ねふみわけて、纔度かとひもなれたる母の御墓、ちから立ちよれば、しるしの石は、くねりたる蟲のあともなく、清うあらはれ、手向の水もあざやかにあらためられて、昨日か、今日か、新しうまゐりたる人あるごとし。さはる事勝ちに、此の頃は、わがまゐりの、やゝ程へたれば、門の翁の、清めくれたるならむ、うれしき人のなさけぞと悦びつゝ、色も匂ひもいときよき閼伽井の水を汲みあげて、なほもあたりを清めつゝ、携へ來にたる園の枝、一枝二枝を新しう手向けて、うちむかへば、ありし世の面影を、又いま更に、まのあたり見るこゝちして、昔忍ばるゝこと多し。

なう、母さまよ、見そなはせ、軒端の梅が咲きてに。母さまよ、なう、去年の春は、母さま

の膝ちかう、人と共に侍りて、うらゝかに通ふ窓の春風に、長閑なる薫りを愛しみつゝ、母さまが來む春もまた斯くて見ましとさへちぎられし園の梅、去年の古枝も、そのまゝに此の春はむなしく母さまの手向の花に咲かむとは、誰が思ひきや。かなしさよ。共に侍りまゐらせたるその人も、昨日より行方をそらに立ち別れ、松代一人が語られぬ花と共に殘されて、かひなきむかしの春を、空しく忍ばむとは、おもひしことか。なう、母さま、なつかしや、なつかしうこそと、生きたる人にいふごとく物語り、はては、つめたき母の石塚に取りすがりて、よゝとばかりにかきくらす涙の雨。草葉のかげの朝風も、さこそは、露のふかからめ。

なう、母さま、みほとりにゆかまほし。このまゝよびてよ、母さまよと、泣きすがりたるまま、半時ばかりは生きたるけしきも見えざりしが、はら〳〵とこぼれかゝる樒の露にか、やうやく心づきけむ、くみ殘りたる閼伽の水を、殘りなく手向けにをはり、懇ろにぬかづきて、幾度か行きては歸り、かへりてはゆき、やうやくに、また樒の垣根ふみわけて、門に出で、墓を清めくれたる情をいはむとて、翁をとへば、おもひきや、昨日お事のうちの竹丸主がとはれて、よしありて今日より旅に出で立つなり、また參らむほども覺束なければとて、石の垢、苔の塵、ねんごろに淸められ、翁に誦經さへたのまれて、夕づくころまでも、御墓の前にかしこまりて、泣きつ、詫びつ、頻りに別れを惜しまれ、ありし人のやさしらおはせしことなど、細々と翁にもかきくどかれ、朧月夜にむせばれて、いづくともなくたどり出で給へるが、また立ちかへりて、お事の見えなば、まゐらせてとて、とゞめ給へりとて、出すを見れば、ふところ紙たゝみたる中に、

さしてゆく空もおぼえず旅衣
　われとたちたる道にはあれども

旅立つとて忘られがたき御墓に詣でてとかゝれたる言の葉の心さへ、始終の振舞さへ、やさしううつくしうもおぼゆるは、強ちにうとみ去りたる、旅立ちにてもあらざりしか。さては、又、よく〳〵の事のありてならむ。如何ならむことぞ。かゝる心ながら、行方つげ給はざりしは、若しや歸るべからざる道に思ひ立たれしものならずや。おもひ思へば、いよ〳〵思ひたどられて、夢のごとき家路。松代の君のあまりに戻り路の遲ければ、父君母上が案じくらされてぞ、われも心もとなさに堪へかねて、走りては來にたり。心のどかにもおはすかな、人の思ひも知らでとゑみかくる言葉のはしも、あたいやらしき好作、つばかくるさへ、いとはしけれど、いききりて汗拭ふさまを見れば、さすがに言葉なき能はず。おもひの外に遲れてとのみいひすてゝ、またいひもせず、見もせず。急ぎゆきければ、待ちてよ、共にとつゞく好作がかげ。松代は山犬に送らるゝがごとくおぼえて、身の毛も立つばかりの思ひすれば、ふるひわなゝかるる足もとを、辛うじてふみしめつゝ、やうやくに立ちかへれば、案じてぞ、さこそ勞れつらめと毎時になく、やさしげに待ち迎ふる母の樣子、げに昨日より事かはりて見ゆるこそ、おぼつかなく心元なくもおもほゆれ。

＊　＊　＊　＊　＊

軒端の花は、再度まで昔の枝に立ちかへり、古巣の鶯は去年かへり、今年もまた既にかへれども、出でにし人は更に歸りも來ぬに、あはれや、松代、起きても、寢ても、夢にも、現にも、ものはいとゞおもはるゝに、よべは時鳥のしのび音さへ、しきりなるに、いよ〳〵ものの忍ばれて、いねもあへず、一夜を思ひあかせば、又思ひ亦らせとあくる空、今日は、殊更、五月

の雨のさみだれて、軒の絲水こゝろ細くかきくらすに、いとゞしく思ひしめりて、身も心も消えゆくばかりにながめたるに、常にこゝろづきなき好作、何を興じてか雀躍もやするとばかり、よろこばしげに、松代の君、松代の君と、聲高らかに入り來り、松代の君きゝてか、驚きぬ、竹丸、恐ろし、大それ者、すんでにあぶなかりき、松代の君、大事、めでたかりきと、何やらむ事はわかねど、立つたり、坐つたり、笑ひつ、のゝしりつ、鬼の首取つたる許りのけしき、狼藉者、狂人めと、つきも出だしやらむと思ひしが、竹丸とよびたる一言、もしや、わがおもふ人の上の事なるとおもふに、何事かきゝもわけたく、膝正しく居直りて、好作殿、騒がしき、何事にてかとゝへば、何事とは何事、彼の竹丸、和君が愛し給へる竹丸といふ和郎のこと、彼れは、かの慶安のころ、將軍によからぬ事企みて討たれたる馬鹿者の孤にて、馬の子はやはり馬、鹿の子はやはり鹿、馬鹿にも、愚にも將軍の御代を傾けむと、大それた同志をかたらはむと、國々を巡りゆく事が、都の所司代樣の耳にふれ、心よくも搦め取られて、江戸へ送られたるが、既に斬られたとかいふ事。松代の君、あぶなかりき、彼れ、婿にてもあらば、すんでに和君も父上も連累。首か、島か、いづれ重罪、恐しうは候はずや。斯くても、いとほしく思ひ給ふか。好作は男わろうても、さる心あるには侍らぬをと、あくまであだにくさげなる言葉。松代は、仆れむばかり驚きたるが、あまりにも好作の口つきの、面憎く腹立しさに、燃えたつ心に支へられ、飽くまでも落ちつきて、いつも元氣よう面白げにといひしのみにて、いづくを嵐のふくらむとばかりながむれば、好作も拍子落ちして、なほ二言三言。捨言にのゝしりて、すご／＼と立ち去りたる後影、心地よげに見送りたるが、さすがに怺へずなりけむ、ふしまろびて、不覺の涙に沈みたるが、あくまでやさしき手弱女ながら、心の奥には一廉の丈夫のたましひを具へたる松代なれば、もしやわが心を動かさむとする人のあらぬ企みにはあらずや、人の噂に立つほどならば、父君の知ろしめさぬことはあらざらむ、密に尋ねてこそと思ひ定めて、きつと涙を拭ひ、父のかへり待ちつけて、若しやかゝる事もやと尋ぬれば、誠に竹丸が上なりけり。されど、なほ斬られも討たれもせず、彼は江戸へ送らるゝ途にて、網うち破りて、行方知れずなりたりとて、國々里々に繪姿さへ廻され、詮議嚴しければ、所詮助かるまじ。汝れには告げまじと思ひしが、既にききかすめたる上は、聞にいはねば、なか／＼に迷ひの種なれば、いふなり。な迷ひそ、やさしうありたるが、不幸なれど、天下の罪人なれば、いまはいはふ事もならぬなりときゝたる松代が絶望、父が膝に一度は絶え入りたるを、漸くよびは生けたれど、それよりは、兎角心地勝れず、獨り引き籠りて、一向に思ひ細りゆくけしきに、夫もや定まらば、さはいへ思ひ慰む方もやあらむにと、父も折節すゝむれば、母は朝な夕なにけしきとうては、事につけては、好作のこと譽めきこえ、年齢も似つかはしといふ聲さへ聴ゆる事、しば／＼なり。好作は、いつとなく隙あればおとづれて、袖に言葉にほのめかすためげさ。

見るにつけ、きくにつけ、昔に似ざることのみなるに、いよ／＼ありしよのことの、戀しく思ひ出でられ、なつかしさにのみあかし暮らせば、月日は空に過ぎ行きて、君も踏みにし庭の秋萩、いつか色深く、君もわけにし垣根の薄、やがて露ふかく、最中ならねど、今宵は月も澄み亙り、雁の鳴く音、鹿の聲、昔をもよほす事のみなるに、思へば、今宵のごとき秋の月、母の膝近う侍りて、竹丸がふきすさぶ笛の音にあ

はせつゝ、彈きすましたる玉琴の事さへ忍ばれて、何となうなつかしうなりけむ、久しく手にもふれざる小琴取り出でて、松風にしらぶれば、あなめづらしきものの音や、好作はなきか、笛吹きあはせよと、母が呼べば、好作は望む處、連理の枝か、鴛鴦か、さては小督や、いづれよからむ。いざ〳〵とふきもよほせど、人ならで何あはすべき絲あらむ。松代はひきかけたる手も、そのまゝうちやめて、つく〴〵と前栽をうちながむれば、折りふし吹きすさぶ山風に、尾花の袖、唯ならずうち靡くと思へば、柴折戸をかすめて消ゆるものかげ、何ならむ。つまこふ鹿か、天ゆく雁か。

* * * * * *

杣人のつま木こる音をも、遙かなる梢にのみきけば、岩根踏む鹿の通路さへ、遠く麓にあと絶えたる高根の奥に、白雲を襖に、岩根の床、かたしく袖もなほうらわかき山人は、やがて、世を恨み、世を憤りて、よく〳〵思ひ入りたる竹丸が身の行方なりけり。彼れは矢竹の一筋、さして出でてより、水火に屈せず、風雪にたゆまず、岩根をもふみさき、荒波をもわけしのぎ、西となく東となく、南に北にさすらひつゝ、春の山に行き暮れても、花を知らず、秋の野にやどりても、月も知らず、一向に由ある方を尋ぬれど、都も鄙も同じ空しき石木のみにて、誠あるべき人もなし。嵐の山の花にうたひ、大内山の春秋の月にうそぶく大宮人はあれど、太刀づくりいかめしくほこりゆく武士は多かれど、君がみ楯の本を、よそにも忍ぶ人はなく、こゝろを知るものもあらず。こゝもかしこも、犬馬の狂ひ戯るゝばかりにて、語らふべきよしもなく、ひたにごりに濁りはてたる浮世の海原、さしてわたるべきわたりも覺えねど、もし夢みくらせる世の中にも、現の人もあらむかと、なほたづね巡りたるに、いつしか將軍をいひかたむけむとする惡人なりとて、都に搦め取られ、容易ならぬ罪なればとて、江戸に送られむとせるに、いかで斯くてやみ〳〵討たるべき事やはあるとて、わづかなる隙に、辛くも命は逃れ出でたれど、思へば、世の中は更にたのむべき方もおぼえず。暫時と身を隱したる深山の奥、そのまゝに世をもそむきはてむと、岩の下水、はやくむすび初めにたれど、峯の松風きゝ暮らせば、忘られぬ人の事のみ、いやしき忍ばれて、遂に住みはつべくもあらず。忍びてたどり歸る故郷の野邊、折節、昔の色なる光りを便りに、ありし邊を志せば、野末の水の響きにや、深山の松の嵐にやとばかり、かすかにきこゆる絲の音は、忘れもやらぬ人のたま琴、さては、人も恙のあらでかと悦びつゝ、松代が門までは、あこがれは來にたれど、世に憚る身の、名乘るべくもあらぬ悲しさ。せめて、よそながらも、と、もとあらの薄の垣根ふみわけて、庭の柴折戸ちかくさしよりて、忍びてうかゞへば、父母さへうちそろひ、松代が琴ちかく、好作がむつまじげに笛吹きすましたる有樣に、さては、はや、人の上も、はや昔にあらじと思へば、世は全くいとひはてられつ。招くが如き白雲をたよりに、わけのぼりて、斯くも深く思ひ入りしなり。

八重の白雲に、浮世の塵は隔てたれども、心はいつか身を離るべきならねば、岩もる清水は、まなくむせび、峯つたふ嵐は、たえずすさぶに、竹丸はいとひはてたる世の中の、いつかまた心に立ちかへりて、忍びも恨みも憤りもせらるゝ事なき能はず。殊に、さはかり望み絶えたる浮世の闇路に、唯一點の光りとも思ひ、よくよく濁りはてたる世の中に、唯掬はまほしき一滴の清水とばかりも、なつかしう思ひたる悲しき人の事、ともすれば忍ばれて、忘れ去る能

はず、はては、谷川のむかひなる岩に、その人の姿さへ見え、呼ぶごとき聲さへきこゆるやう覺ゆるに、あなわれながらあさましき心や。もとの清水はきよけれど、流れ〳〵ては、濁れる芥川ともなるものを、いつまでももとの色とのみ、おもふことやある。われながら口惜し。何時までさめはてぬわが夢ぞ。いつまで澄みはてぬわが心ぞ。いひがひなし、無念ぞと、齒をかみしめて、眼を閉ぢ、耳を塞ぎ、よく〳〵こゝろを靜めつゝ、又、眼を開きて、見わたせば、なほ去りがたき松代の影。吼り狂ふ谷川のすさまじき岸のべの、此の岩彼の岩に、のぼりつ、駈けつして見ゆるに、竹丸は、獨りいよ〳〵いらだち、天ゆく雲ならでは、知らぬ此の軒、人の知るべきやうもあらず。よしや、知るとて今は何たづね來べき人にもあらず。わが心、わが心、わが心の見する幻影ぞ。きたなし。かゝるものを。思へば、世よりも、人よりも、此の心こそいとはしけれ。よし、今は、此の心をこそ、くだきも終れと、忿然と立ち上りて、太刀の刃の如くけづられたる岩の角めがけて、われとわれ、微塵になれと飛び懸らむとする刹那、あつとさけぶ女の聲、思はずためらひて見かへれば、みなわさかまく早川に、浮きつ沈みつ、必死に狂ふ松代が姿。竹丸は、われを忘れ、あなあぶなやといひさま、躍り入りて、救はむとするに、瀬は急に、波ははげしく、やらじとのみ狂ふ中を、辛うじて潜りつ凌ぎつして、はや人心地なき松代を、しかと片手に抱きかゝへて、やうやくにたゞよひつけば、岸の岩ほを嚙みつ裂きつ、いよ〳〵吼ゆる水の音、すごし。

笛の音

ふる里の忍ぶの亂れ、いかならむ。昨日今日、都も秋の色ふけて、はらはぬにこぼるゝ萩の上葉の露もろく、風なきにしをるゝ尾花の袖の影やせて、もの思ふとにはあらねども、何となくながめらるゝ夕暮の宿。何處もおなじとはきけど、野邊はされどもまたそゞろに心ゆく方もやと思ひて、をりふし月かけのあかきに任せて、其處ともなく迷ひ出づれば、野くれ山くれ限りなく、清風白露吹きみちて、唯一面にすみわたりたる大空に、雁がねの三つ四つ二つ、何にむせぶか、聲たえだえに鳴きつらねたる、誰が爲めに誰が玉章をかけてかとうち見れば、こし方ゆくへ、いよいよ忍ばるゝ空のはてもなく、つくづくと打ちながむれば、風聲夜色ますます、さえて、吹きすさむ松の嵐の揉む折節、何方の里の敲りかゝると聞えて、はらはらと木梢になびく笛竹の音、いかなる人か、此處もまた獨りねの秋の床さむみ、ねられぬまゝのすさびなるらむ。きけば、あはれに忍ぶ故園のね、あな笛や、故園のねや、なつかしき故郷人は、いかにしつらむ。

なつかしき故郷人は、いかにしつらむ。なつかしき彼の故郷人は、いかにしつらむ。思ひ出づれば、今日は十歳の昔なる秋の暮、故山の麓に袂を分ちてより、秋は幾度か立ちかへり、月は幾度かめぐれども、人は儚なき世の風雲に隔てられ、また諸共に袖かたしきて見るべき夜半も無く、何時しかよそにのみ杉の板戸のあけくれて、今はいかなる里、いかなる宿、いかなる世をや送るらむ。人づての便りさへ、絶えてきこえず。落花流水、いつはなき無常の世の態を思ひやれば、幾度かまのあたりあふと見ては、おどろくねざめの床、此の頃は、いとせちに心もとなく覺ゆる花の友がきが身なりけり。なつかしや、ありし故郷の花の友垣。思へば、彼れ同胞と初めて結びたるは、己れが七歳の春なりけり。己れ、をちこちのたづきもうとき山里に人となりて、親しき友といふ者も無かりけり。いな、己れ、幼き頃は病に苦しむこと多くて、世の常の童の如くあらざりければ、多からぬ里の童の群にも入れられず、野邊の遊戯にも、毎時取り殘されたり。自らもまた強ひて打交りて遊ばむとは思はず、多くは、母の膝近く、錦畫草子畫をうち並べ、畫ときくを、朝夕毎時の樂しみとなし、心すゝむ折りとても、僅に垣ねの花菫、園べの木の實、近きわたりを友として、たえて野山の遊びを求めず。たのしかりけれど、さはいへ、折節は物淋しかりける春秋を、かゝるわたりにぞ送り迎へぬ。なつかしき彼の何處の花の友がきも、いまだあらで。

けになつかしき花の友垣、忘れもえやらぬ、わが七歳の春なかば、野邊も山邊も、見わたす限り、うらうらと霞たなびき、花に鳥に吹く風やさしく面白きころ、毎時に似ず、童心の何に誘はれ出でにけむ、垣根の花菫摘まむと下り立ちし袖の、いつしか野邊近くあこがれゆきたるに、誰が家の園か、櫻の花の雲をかくすまで咲き滿ちて、をりふし烈しき春の山風に、はやしどろもどろになりて、袖に面に散りかゝる唐紅の雪、心なき童心にも、流石に面白く覺えてか、手にせる花菫も溢るゝまでに、落花を拾ひあつめ、いさ歸らむとすれば、をりしも里の子の大きなるが行き過ぎたるが、何か憎かりけむ、われが頭をしたゝかに打ち叩き、あなやと思ふま

に、二なき女とせる花籠さへ奪ひて、しかも大地へ擲げつけ、蹴かへしざま、心地よげに罵りて、走り去りたる無殘。

餘りの無念さに、流石かよわく意氣地なき己れが童心も、かつと動きぬ。おのれ、嚙みつきても、仇討ちかへさむと、泣かぬばかりになりて、追ひ駈けむとしたれど、はや遙に逃げ延びて追ひつくべうもあらねば、空しく彼方を睨みつめ、涙をのみてたゝずめば、園の内にや人ありけむ。あな、憎やとよびて、走り出でたるは、女の童なりけり 彼は惡しき少年、妾や弟も幾度かうたれぬ。惡しき少年には、逃ぐるがよし。必ず構ひなと、母さまがいはれぬ。御身も構ひたまふなと慰むる姉につゞきて弟の童も走り出で來て、蹴り散らされし花籠を悄々しくも拾ひ取りて、己れの手に持たせなどする同情のうれしさに、反りて怺へたる涙は、怺へずなりて、泣きいづれば、女の童は、あな泣き給ふな、花はいくらもあるものを、此方へ入り給へ、此處はわが園、かの惡しき少年の入ることにあらず、妾たちも最前より花拾ひてありたり、三人ならば面白し、とく來てやとすゝむるに、悅びて、幼き童どち、いはけなき心に事もなく結ぶ遊びの友、いつしか餘念なく花を拾ひつゝ、わが名は文世、家は彼方、妾の名は雪野、あれは雪江よと、三人が互に名乘りて、每時來てや、花拾はむ。必ず來なむ、待ちてやと、しどけなき童心に、らちもなく結びたる花の友垣、思ひきや、わが爲めに幾春秋遂に忘れがたき花の友垣とならむとは。夫よりは、花籠を携へて、日日每訪れぬ。彼方も、園の柴折戸開きては、日每迎へぬ。花はいつしか散りはてゝ、春は果敢なく過ぎぬ。されど、おなじ園なる緣がくれの遣水には、なほ日每三人の影を映し、萩のたもと、紅葉がもと、三人の袖は、なほ日每同じ秋の露にぬれ、落葉が中、雪の上、なほ三人の跡は、日每かはらざりけり。學の道をも、三人、おなじ日よりふみわけ初め、文世、雪野、雪江といふ札は、おなじ時よりおなじ村校の同じ壁にかけられ、色も形もおなじ机は、墨さへ、筆さへ、硯さへ、おなじに、同じ列に並べられ、同じ朝より、三人は、同じ教の場にのぼりそめぬ。

雪野は、己れより一歲多く、雪江は、己れより一歲少なかりけり。雪江が姉上々々と呼ぶをきゝなれて、折節は、雪野を姉上と呼びて、心つきては、雪野さまと呼び直して、雪野も笑ひたる事ありしが、いつしか姉よ〳〵とのみいふやうなりぬれば、雪野も怪しまず、姉とのみにて、應答するやうなりぬ。誠に彼の子は姉の如くに柔和しうして、わがやめる時には、日每必ず一度は訪れぬ。病を如何にと問ふよしは云はざれども、我が好む繪畫、草子畫など携へ來りて、父、教の師の教へたる事など語りては歸るに、わが母も、彼れの歸れる後を見送りて、何時も柔和しき子やと譽めさせらるゝをきいて、何と無く己れも嬉しき心地しけり。されども、また、只の朋とは覺えざりけり。彼の子の病める時は、學校の行き歸り、必ず立寄りぬ。わがのみならひたる藥を持ちきて、文世の君の可愛やと、彼の子の母に笑はれたる事さへありけり。

彼の子は、また、雪江と文世との區別を、更に置かざりけり。文世は一人子、雪江も男子一人なれば、心のまゝに振舞ひなれたるが故に、稀れ〳〵には、いはけなき者の、わけなき事に腹立ちあふ事もあれば、わが惡かりける折は、そは文世の君が惡しといひ、雪江が善からぬ折は、雪江がよからずと、隔つることも包む所もなく、われも、彼の子の惡しといへる時には、雪江の君、容してよと詫び、雪江も、亦、文世の君ゆるしてと、互に詫びては、一入むつまじく

遊び戯れ、誠の同胞もかくまでにはと、人々に云はれたるまでの花の友がき、斯く散々にならむとは、思ひかけきや。うらめしきは無情の人のあらしなりけり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

風はいよいよふけわたり、月はいよいよさえさえて、衣の袖に降り積る霜の色白く、野末にすさぶ笛竹は、故園の音を寒み、身にしみまさる夜半の色、ものの忍ぶは、いよいよ亂れゆく。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

思へば、なつかし。われはなつかし、雪野同胞、斯くまでに美しかりける花の友垣を、何ものか、無殘にも破り棄てたる。世の常の無心無情の風雨故ならば、さばかりに恨みも覺えざらむ、名殘も殘らざらむ。さはいへ、わが花の友垣は、心あるべき情あるべき人の無心無情の袖なき袖にかゝりてぞ、かくは果敢なく破られぬる、微塵に散らされぬる。これが故に、わが恨み、遂に思ひやる方なし。わが名殘、遂に思ひ慰む方ぞなき。

雪野同胞の生みの母なりけるは、心飽くまで優しく、情極めてふかき人なりけり。彼の母人が徳ありしばかりにこそ、雪野雪江は世に温かなる日月にあひ、文世も世に二つなき樂土を得たれ。花の友垣、彼の母人の光りありしばかりにぞ、さばかりに美しくゆかしきいろふかくなりける。思へば、戀しきは、彼の母人なりけり。

彼の母人の徳さらず、彼の母人の光り消えざらば、雪野もなほいとしまれ、雪江も一の物とかしづかれ、文世も變らず捨て難きものに思はれ、花の友垣も、かく情なく散らずてありけむを、雪野雪江は元より、文世にも又遂に一生の恨みとなれる悲しみは、三人が爲めに天とも地とも神とも佛とも、なるべき彼の母なりける人が、世を早うせられたる歎きなりけり。これよりぞ、雪野同胞は殊更、文世も共に、世の中の厭はしくも、情なくも、頼みなくも、成りはてにける。

忘れもやらぬ、彼の母人なりけるが亡くなり給へるは、雪野が十歳の秋の暮、菊の白露消えかこに、櫨の紅葉、覺束なくも見ゆる頃なりき。雪野も、雪江も、文世に似ず、紅顔常に笑みがちなる童なりけり。されど情は又こぼるゝばかりに優しかりければ、母なりけるが病床に搔き籠り給ひしより、雪野はまづ雪江もやがて籠り勝ちに成りて、學校へも絶えて上らず。袖つらねでは踏まざりける學校の通路、机並べでは習はざりける教の場、ひとりふみひとり向ふ日の積るまゝに、文世がさびしさは、いよいよ身に浸みわたり、忘るべきかは神無月の下旬、童心にも朝かけて空も時雨の心細きほど、ものは思はぬに、何となう涙のこぼれて、頻りに胸の苦しければ、教の師にも告げて、疾く教場を下り、ひた走りに走りて、雪野が家を訪れたるに、彼の母なりける人は、今朝立ち寄りし時の氣色、とみにあらたまりて、今朝までも、わがおとづるゝ度に、文世の君かと打ち笑まれたる御目も、はや閉ぢたまひて、いふ事も、口給ふ事も、今を限りと見らるゝに、ものも覺えず、伯母さまよとばかり取りすがりたる泣聲の強かりけむ、母人は閉ぢたる目を再び開き、三人を手に膝にかき抱き給ひて、雪野や、雪江、いつまでも文世の君と中ようしてよ、母が草葉の蔭のたのしみとばかり、また眼を閉ぢ給へるが、再び幽に見開き給ひて、なう文世の君よ、雪野をと呼びかけ給ひしが、其のまゝ果敢なく事切れ給へり。何をいはまく思ひ給ひけむ、文世の君よ、雪野、思へば、戀しき彼の母人、彼の母人かましまさば、今宵の月、かくて人は見まし

ものを、よにあらば、雪野、雪江、今宵の月は、おなじ心なるらむ。思うてこゝに至れば、我腸もまさにちぎならむとす。

彼方にひゞく笛竹も、いよ〳〵急なる故園の節。むせぶか暫時、音も低し。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

母よ〳〵、我も母とよばなむ、彼の母なりけるが亡くなりたまへるは、げに十歳の昔の昨日今日、一年を十と數へ來ば、月日の數は多かれど、ゆく水の流れは、よゝにつきせず。春の花、秋の紅葉、うつるといへど、散るといへど、十歳ながら、なほおなじ色にかへれるを、わが友は如何に、わが花の友がきは如何に、昔は諸共にうるはしき天のうるはしき光りのみにあたりぬ。雨風のつらきも無かりしにあらざるも、たゞ彼の麗しき母人のおはせしが故に、昔は樂しき窓に樂しき月日をのみ迎へぬ。玉のうてな、こがねの殿ありしにあらぬも、唯彼のうるはしき母人のあたりちかうおはせしがゆゑに、むかしはうつくしき野山にうつくしき袖を連ねぬ。錦の衣、綾の袂、互にひきもまとひもせしにあらざるも、たゞ彼の母人のうつくしきみ心もて守り導きたまひたるが故にこそ。いまはいかに、わが三人、天も無し、地も無し、日も無く、月もあらず、家もなし、衣もなし、野もなく、山もあらず。わが世界と云ふもの、遂に無きなり。無きにあらぬも、ともに見る世界なければ、畢竟、誰が爲めの誰が世界ぞ、たえてわれにはあらず、われは世にありて、世になくなれり。おもへば、十歳の雪霜、よく〳〵花の友がきの、かへらずうつろひはてたる悲しさよ、たゞ悲しき彼の母人の影のきえにしばかりに。

思うてこゝに至れば、戀し、戀し、母戀し。われも母とよばなむ、彼の母人のおはせし世こそ、戀しかりけれ。われ行くたびに、文世の君が見えと笑うて迎へられ、をりふし雪野、雪江が見えねば、和子よ、和子よ、見えずや、文世の君が來たまふにと、いそ〳〵と呼び立てゝも悦ばれ、かへれるとなれば、ふりわけ髪をかいなでて、やうなき路草なせられそ、明日も必ずはやう來てよと、殘り惜しげに、うしろかげを必ず送られける、ありしむかしの戀しかりける。

ありし母なくなりてより、まなく雪野、雪江が母なる人、ふたゝび出來ぬ。生の母より心はいさ、姿は若やかに美しかりけり、二人は、うつくしき母樣が斯く出來てとて、われ行くたびに、日に三度は必ずいでて使へば、われも共によく〳〵母樣よとて、心なき童もおはしけ、ふらなくよろこびあへりしこそ、あはれなりしか。母よ母よと悲しくまつはる可憐の二人なれば、後なるは、も、雪野や、雪江やと、かなしく撫でぬばかりにせられしが、雪野十、といふ春、春代といふ妹出來ぬ。春代のほゝゑむやうになりてより、雪はこれもかも、いとむつかしきものに思はれ初めぬ。花ぞめのさてもうつろひやすき人心のつねや。春は雪の後なるを、はるを見ては、雪は忘られぬ。去年に又ともうたひ、白金ともめでにし雪も、春といふ聲きこえてより、人の心には、只管にいぶせき者となりぬ。悲しさに、去年の雪野や雪江。憎むべきは春にまよひし人心なりけり。

雪野はやうやく十一歳、いまだ女子の際には程遠きに、しかも、兄弟が家には、水仕女も二人三人あれば、朝夕の手業にも、ものたらぬものなきを、何を苦しみての人心ぞ、雪野が學びの庭より戻れば、水仕女と共に爨などうたしめ、臼などひかしぬ。何といふ邪見の心ぞ、やさしき女の童のうちにも、やさしくかぼそき雪野が腕、打たばとて、何ばかりの姿やうたれむ、挽かばとて、いかばかりの粉やひかれむ。さるを、

あさましくむごたらしきは鬼心なりけり。童心の果敢なく結びてより、唯一重二重深くのみなりきつる花の友がきを、無殘、花を微塵に吹き散らし、契りも深き友がきを打ち破り捨てたるも、おもへば、この鬼心といふ、邪見の爪牙なりけり。親といへば、年經ぬる竹の齡をかへしても、この世を長くなさむとぞおもふといふなる世の中ときけるを。

　學の庭のゆき歸りばかりは、なほ袖つらねたれど、雪野が手馴れにし花籠の、むごくも燒きすてられさへせられしより、雪江も野山めぐる心出でず、姉が臼挽き麥うつ側にのみ遊び暮らしぬ。うたうたひ、書よみ、をりふしは、共に挽き、共に打ちて。されど、大方は笛吹きすさびて。もとより律も知れるにはあらず、呂ももとよりあるにあらず。されどふしは何となら面白うふきたり。好きたればにやあらむ。おのれも笛はおもしろかりけり、母に幾度かねだりぬ、泣きてねだりぬ。されど、わが母は決して許し給はざりけり、笛吹くものは、昔より終りをよくせずとて、義經は兄に憎まれて、衣川にすてられて死に、敦盛は親に先立ちて、熊谷にうたれてはてぬとは、何時もたとへに引き出でられぬ、何事にも[illegible]てなき女がき、母にいはれたるまゝ、雪江にも敎へぬ。されど、これのみは、彼れきかざりけり。義經は强き大將、なにあれがわるからむとて、たえてきかず。われも、もと好むなれば、そを道理と思ひ、わが母樣が思ひ間違ひてならむと、彼もいひぬ、われも思ひぬ。雪江は、笛三つ四つもてり。一つを文世の君に讓らむと、つねにいひぬ。雪野もすゝめぬ。されど、余も、これのみはうけざりけり。とにかくに、母のいなみたまふものなれば。

　花や、木の實や、うづたかき野山にはあらねど、かくて雪野がしづ業の邊は、うつくしく、樂しく、面白く、三人が爲めの小樂土となりぬ。學校より戻りてのわがつとめのやうに、必ず訪れぬ。雪江の笛をきゝつゝ、雪野が手業を助くるを、わが日課、けに樂しく面白き日課のやうにして。思へば、われながらうつくしき小樂土、うつくしき花の友垣、いづれ憐れとおもはざるがあるべしとはおぼえざるを、ひたすらにつらかれとのみ吹きすさめる嵐、うらめし。人の心の嵐、うらめし。雪野が繼母は、いつしかわが訪るゝをも、よろこばざるやうのけしきにて、文世が顏を見るや、また來てか、うるさき子やとつぶやかれ、餘念なく遊べば、こゝはいたづらすべき所にあらず、遊ぶには野もあり、山もあり、疾く外にゆきねとのみ、手を引かぬばかりにして、促し立つること、三度、四度、幾度にかなりぬ。こゝろなき少年の心にも、さすがに引き裂かるゝやうの心地して、ものもおぼえず、ひたすらに走り歸り、わが部屋に二時三時泣きたり。それよりは、また雪野が家へは入らず。唯、學の庭のゆきかへりに、雪野やゆかむ、雪江やと、門よりおとなひて伴れだち、文世の君、あすも誘ひてよ、文世の君、あすもよと、彼れ同胞も、門より別れて歸りぬ。それも、いつしかつねにはあらずなり、花の友がきは、遂に春風秋雨、むざんやあひ隔てられはてぬ。學の庭に相見る面影はかはを、露のおもひでにして。

　されど、なほ其の折りは　おなじ野邊の春を迎へ、おなじ水邊の秋色を送り、花の友垣は、おなじ山河の邊なりしものを。思へ出づれば、くやしかりけり。われ十五の秋、世に思ひ立つことありて、父母もよろこび許し給ひて、獨り都に出で立ちぬ。志したるこの道、遂げずんば、誓ひてふたゝび故山の門は入らじものをと思へば、門の板橋、したゝかに蹴かへして、勇み立たむとすれば、をりふし峯の杉むら、さつ

とふき下ろす山風に、門の柳の枝の、三筋四筋はらはらと亂れて、袖に面にまとひかゝるに、何となうひきかへされて、見かへる袖を、送り出で給ふ父母の姿に、また、何となう恥かしくおぼえ、柳の枝、したゝかに右手にうち拂ひて、立ち出でたるが、今日ばかりならぬ門の小川の水のいさよふかけに、また、はしなくもなきとめられて、二足三足たゆたへば、なほ門さらず目送り給へる母の、文世、文世、霎時、雪江が君が、雪野の君がとよび給ふ瞬間、倒れぬばかり走りよれる同胞、文世の君や、ゆき給ふかとのみ、はや涙なりけり。

けふとはかねてきゝまゐらせたれば、文世の君には大事の首途なり、自らも惜しき名殘りなり、つきぬながらも是非に一度は心しづかにお別れを惜しまむと此の日頃、朝に夕に思ひも願ひもかけたれど、いかにせむ、思ふにまかせぬ身の悲しさよ、許し給へ、心なしとな思ひすて給ひそと、姉がいへば、さはいへあまりに名殘りの惜しければ、忍びていまこそ來つるなれ、よしや母上の見咎めて、責めもこらしもし給はむとも、とてもかくても、よそに別れには、今より後、何をおもひ出にかながらふべき命を知らずと、姉上もいへば、われもおもふに、さらば遅れたらむも、都への道は一なり、何處までも、跡をとめて、心ばかりの駒のはなむけせむ、是非にせでは止まじと思ひ定めて、密にいそがせ來てし甲斐ありき　文世の君、名殘りをしや。今日を限りとおもはねど、秋風白露まとひ來て、心づくしの別れ路と、涙をはらひつゝ、ふきすましたる笛竹のひとふし、それを限りとは、誰が世に思ひかけきや。雪野もあひ見むまでのしるしとて送りたる松の一葉、おもふに、こゝろなからずやは、われも一葉の紅葉、とゞめにし形見は、錦きて歸りて共に相見む日を契りしにあらずやは。思ひかけきや、花の友がき、かく散りはてゝ、春の山、秋の野、いたづらにかへらぬむかしとならむとは。思へば、戀し。ありし故郷の友垣こそは、戀しかりけれ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

嵐も今は霜とふくらむ、ましろになびく片山の尾花のしけみわけ入れば、笛はいつしか音をたえて、きけばしづけき筧の水、たづねて月もやどるらむ、すみすましたる谷のいほ、らもれし人は、誰ならむ。散りにし後の花の友がき。

金明水

霧分衣

龍華寺の富士

日和つゞき

教へ子

歌御會始參列記

北陸游草

武島羽衣

金明水

大磯よりは、やう／＼勾配のはげしくなりゆくが爲に、汽車は一きはの勢力を増し加へて、空も共に、黑烟を打靡けつゝ國府津、松田、山北、小山などの驛々を越えて、晝過ぐるほど、早くも、御殿場の停車場に着きぬ。

薄き濃きをちこちの山々を負ひて、蒼松の影まばらなるゆくての平地には紋ぢらしの暖簾に、紅白の納手拭懸けわたしたる幾多の水茶屋、いづれも萱葺きの軒を並べて客引きとむる赤前垂れの聲かまびすしきに、こなたかなた行き違ひたる馬くるまの音の騒がしきなど、夏は、思ひのほかに賑はゝしきところなり。陰晴常なき富士の根の麓近ければにや、こゝも、あわたゞしかる空のけはひの定めなく、遙かに、二子足柄のいたゞきを掠めて、絲の如く湧きいでたる一簇の村雲は、次第に黑く廣くわだかまりつゝ、見る／＼蔚翠たる穹窿をおほひきて、今にも夕立たむ姿のあやしきに、汽車を下りたる乘客の大半は、おほむねこゝに、一夜の宿りを求めさるはなかるべし。

されど、かゝる所に、半日をだに過さむことの、いと益なきわざに思はれければ、直ちに須走通ひの馬車に乘らむとせしも、乘合ひの都合もあれば、立ちいでむまでには、少しく程のあるべしと御者のいふに、さらばとて、暫し、かたへの掛け茶屋に憩ひぬ。肩襟かけたる女の、澁茶汲みいだしたるあとに、嘸つかれたまひしなるべしとて、わが前にすゝみきたりし亭主に向ひてきのふけふ富士山の氣色いかにぞと問へば、いと心ぐるしげなる顔して、かくふりはへておはしましたるなれど、ふつ日ばかり前よりかの御山には、いとあらましき風の音すごく、きのふ須走まで登りたまひけるまらうどの、かくては、到底おぼつかなかるべしとて、再び歸りきましたるが、今なほこゝに止まりたまへり、されど、けふひと日だに過ぎたらむには、必ずなごみぬべき空のさまなれば、今宵はこゝに宿りたまひて、あす、心のどかに登りたまひねといふ。

跡なきことを語りいでて、あながちに客をひきとめむとするは、旅の宿にはいと繁きならひなり、これも、さのみおどろくことなかるべしと思ひとりたれば、さしも心にとめず、さばかり心づけたまへることは、忝なけれど、未だ暮れなむに程も長く、また再びふりいでたりといふにもあらねばなど、さまよく、もてはなれてあるに、萬づ用意のとゝのひたればにやあらむ、馬車は、はやいでたゝむとするけはひのするに、さらばとて、やをら、そなたざまにあゆみゆきぬ。

一鞭の垂下につれて、勢たけく動きそめたる馬車は、勇ましき一聲の喇叭を殘しつゝ、早くもこの村落をあとにして進みいでぬ。おのれらが一行は、そが數六人にして、わが隣りに腰かけたるふたりの男は、塵にまみれたる垢の汚くさきに、赤銅の色したる毛胸、心のまゝに打ひろげたるは、この近隣の農夫にやあらむ。向ひの側なる片隅には、富士登山の行者とおぼしく、白き晒木綿の衣一重纏ひたるまゝ、大きやかなる菅の笠携へたる傍らには、銚子縮の單衣の肩おしぬぎて、旅商人と見ゆる男の、絶えず扇打つかひたるがあり。眞田紐もて結び固めたるかたへの丈高き荷物をへだてゝ、こなたの端には、一人の女の年まだ若きが、お

のれと打向ひたるまゝいみじう恥かしげなるさましてうつむきゐたり。なえばみたる紺絞りの單衣に形ばかりなる帶もこゝかしこ破れ、梳りたりとも見えぬ髮は、いぶせく頸のあたりに亂れあひて、顔手足などいと色黑くきたなげなれど、そこはかとなく愛嬌溢れて、匂ひやかなる頰のあたりもいとをかしく、打けぶりたるまみのほどなど、極めてなつかしくらうたげなり。知らぬ人の中にまじりて、面はゆく思へばにやあらむ、あるは何事か心に憂ふる事のあればにやあらむ、袂のはしをまさぐりたるまゝ、物思はしげなるさまして、暫し顔をだに擡ぐることもなさざりき。

馬車は、幾度か危げなる木橋を打渡りつゝ、凸凹甚しき細道を走り行くに、引板かけたる谷川の音かれがれに聞えて、梢に近き蟬の聲々、所から暑さをそへたり、草かげに見ゆる石地藏、こゝかしこ打過ぎて夕顔の咲きかゝりたる垣根をめぐれば、打わたしたる田はた、目もはるに連りて、萬頃の稻のおもてには、穗波をよするそよ風もなく、赤土の地面より、目もはゆきまで照りかへりくる日影には、焼くがごとき炎熱けに云はむかたなし。物つよげなるかたへの農夫も、さすがに堪へずやあらむ、半ばねむかたに向きて、いかにはげしきあつさにはあらずやといふ。げに東京にてだに、かばかりはなかりしものをと答ふるに、打かへしていと失禮げなること聞き侍るやうなれど、君はこれよりいづこへおはしますにかと問ふ。學びのわざのいとまとて、暫し大磯にありけるが、かくても、此の頃は、日にけにまさる俗塵のけがらはしきに、いでたぐひなき富士の高根に登りて、ふた國の嵐に、身をすゝがばやとなむ思ふといふに、如何なる故にか、此時少女は、首を擡げて、ふとおのが顔を打守りぬ。農夫はなほも言葉を續けて、若きにも似させたまはず、いとなつかしき御心なり。おのれも君と同じ齡のほどなる子ひとり持ち侍れど、ねぢけたる心のかたくなしさは、浮きたることにのみ心を深めて、さるまめまめしき筋は、かけても思はず、かく御山近くに住みながら、まだひと度も、詣でたることもなき言ふ甲斐なさよなど、いと心つきなげに打笑へり。

馬もやゝ勞れて、ともすれば泥みがちなるを、御者の、絶えず鞭もて勵すに、いつしかこゝも打過ぎて、松の並木の枝さしかはす下蔭に出でぬ。梢をもるゝ輕風のいと涼しきに夏をよそなる幽泉の音かすかに響きて、こなたかなた好き程に打搖るゝ馬車もいと心地よきに、今まで高やかに打かたらひたる二人の農夫も煙筒口にしたるまゝ打眠れば、向ひなる行者も、瞼重げに馬車の窓に倚りかゝるに、旅商人も、いつしか、手なる扇の落つるもしらで、いぎたなく、おのが荷物の上に打伏したり。

千篇一律なる田舍の風光に倦みて、ふと馬車のうちをながむる折しも、はしなく、少女と顔を見合せぬ。先刻より沈みがちなりし氣色に引かへ、やゝ打笑みたる口のほどもをかしげに、何事か物云はむとて、え云はぬさまなりしが、きと決斷のけはひ見えて、君はまことに、富士の御山に上りたまふにやと問ふ、さなりと輕く答ふるに、さらば、といひて、暫しためらひけるが、かゝること聞えまゐらせむは、いとさし過ぎたりとやおぼさるべけれど、おのれは、いと切なる願侍り、如何にきゝいれ給はぬかと云ふ。いざかたりたまへ。おのが身にかなひたることならむには、如何なる事なりとも、うけひき侍るべしと云へば、いと嬉しげなるおもゝちに、半ば恥かしげなるさまして語りいでぬ。おのれは御殿場より程遠からぬ所にすめる農夫の娘なり。母は三年ばかり前に、身まかりけるが、程なく後妻として父の迎へたるは、すぢ惡

しきものなりければ、心さへいたうひがみて、早う父の家を思ふまゝにせむの心ありければ、いみじく我があるを悪み、いかにかしてなき者にせむと思へばにや、何やかやにつけて、理なき言のみいひかけて、つね打ち擲くことも絶えず、失せたまひにし母君のおはさむには、いかでかゝる目をやは見むなど打思ふ折々は、早く世に跡絶たまほしう思ひなせど、さすがに、父君の歎きたまはむことなど思ひてはかなくふた年の月日を過しぬ。さるにことしの春ばかり、母は、俄かに眼を病みて、日にけに物の影さへ見えずなりゆくに、父はいたう打わびて、ありとある醫師に見せけれど、皆はか〴〵しかるしるしもあらねば、いで此上は、世の神々に祈りまつるのほかなからむとてあるに、ふと富士の根の金明水の、かゝる病には、いみじう驗ありと人のいふをきゝて、さらばとて、をとつ日の朝まだき、十分の用意もしあへたまはで急ぎかの御山へと赴きたまひぬ。きのふひと日は待ち暮らして、けふになりても歸りたまはず、如何にせさせたまひにたるかと、いみじう心もとなきに、胸も安からず、けふ須走のほとりなる人のもとに、さりがたきことありて行く道すがら、君のかの御山に登りたまふと聞き、若し父に遇ひたまふこともあらば、いかでこのことを告げたまはなむとてなむかくは聞えまつるなりといふ。打きくまゝに哀れにいとほしう悲しく覺えて、そゞろに同情の涙ぬぐひあへず、たとひ父君に遇ひまつらずとも、隈なく尋ねとめてだに、この事はきこえさすべしなどねんごろに慰むるに、少女はいたく喜びて、詳しう父の姿かたち、きぬの色あひなど打かたりつゝ、最後にわが父の額には、いと大なる瘤あり。こは極めてしるければそれだに見たまはば、まぎれなく、その人なりと思ひたまへなど、いとこまやかにをしふ。かゝるほどに、絶えず進行を續けたりし馬車は、いつしか松並木をも打すぎて、波濤のごとき富士の芝山に、夕居る雲のたゝずまひさびしき頃、恙なく須走の村へと着きぬ。大きやかなる榎の下に、人家三つ四つ二つ打ならびて、打なびきたる夕餉の烟いと心細く、腰ゆがみたる嫗が門の乾麥取りいるゝさまも、げにいそがはしけなり。かへす〴〵父のこと契りたるのち、少女は右に、我は左に袂をわかちて離れゆくに、何となくなつかしければ、顧みのみせらるゝに、少女も、名殘惜しければにやあらむ、同じくこなたをまもりつゝ行くに、やう〳〵程の隔たるにつれてらうたげなる姿は、いつしか、生ける神の森の木の間にかくれたり。

　此夜御殿場あたりより過ぎ來りし一團の黒雲は、この須走の一村をこめて滂沱たる急雨の音すさまじく、風さへいとし吹きそはりて、一時は、容易に止むべくも見えざりしが、夜半過ぐる頃、一天塵もなく晴れ渡りて炯晃たる星の光りもかくれなく、鐵よりも黒き面前の神嶽の、高く半天を掠めたるもあざやかなり。何となう氣も勇みたちて、心の止めがたきまゝに、よろづ用意を整へたる後、いそぎ此家を立いでぬ。

　淺間神社の御洗水に口打そゝぎつゝのぼりゆくにあやなきあけぐれの闇もたど〳〵しく、老松巨杉の露雨よりもしげうしたゝれば、たどりゆく木の下蔭も、いと滑かなり。行くこと半里ばかり、夜はやう〳〵名殘なうあけ渡るに、しらみゆく光りにながむれば、こゝは富士の裾野なり。見るかぎり生ひつゞきたる萱すゝきは、蒼茫たる空に連なりて、袖うちまねく尾花の末も、消えかゝる夜を送りがほなり。やゝ程ふるに、東方の山花やかに打匂ひて、野末の露まづ消えゆけば、立ちこむる白雲も、やう〳〵分れゆきて、蜿蜒たる葉山しげ山の、かつ〳〵現る

るに、やがて玉芙蓉の絶巓縹渺として、雲表にほのめきそめぬ。朝日にはゆる千秋の雪、野もせにかゞやきて、よべの名残の雨雲の、五色の渥采となりて透迤たる連山のいたゞきに揺曳せるなど、げに目もあやなり。打見るまゝに、神ゆき心飛びて、暫しはまもりたるまゝ物も覺えず、足も空にてあゆむほどに、こゝはや馬返しといふ所なり。しばし憩ひたる後、また白雲に身をたぐへつゝ登る。こゝよりは、道やうやう峻しく、木の根岩かどの、いとむつかしう打延べたるを、からうじてたどりゆくに、喬木は長草となり、長草はまた離々たる斷草と打かはりつゝ、一合目二合目に至りたるほどは、見渡すかぎり、只打渡したる爛砂のみなり。顧れば、三日月が池、はるかに中天にかゝりて、油々たる白雲の汀を出るさまいと物すごく、水のおもの輝きて、あたりにてりわたれるなど、只それかとのみぞ覺ゆる。近くは箱根足柄の山山、遠くは越の白山など、ひとしく雙眸のうちに入りて、三保の松原も、さながら洲濱に作りたるがごとし、五合目にいたりける時、何事にかあらむ、人々のゝしりさわぐを聞けば、昨夜絶頂にありける人の數あまた麓へと下りけるが、堪ふべくもあらぬ雨かぜに、なかなか命失ひたるなりと云ふ。少女が父のこともふと思ひいだされて、いみじううしろめたければ、詳しき事のやうをも聞かまほしくて、急ぎゆくに、六合目の石室に、一人の男いとか弱げに打伏せり、綿薄き衾の下に、わびしげなる木の枕して、息も絶え〴〵なるに、いかばかりの傷をか負ひけむ、色いたう青ざめて、頭より頸を包みたる白き布には、血さへいみじう染みわたれり。見るから、哀れにいとほしく覺えて、これや人々の語りしならむと、今ぞ思ひあたる。ほとり近く進みよりて、如何にしてかゝりしぞと問へば、やう〳〵重げなる頭もたげて、あはれ、かばかりのうき目見ること、げにいかばかりつたなき宿世ぞや。つゞけいでむもわが恥をあかすやうなれど、さては罪もほろびぬべきためなればとて、やをら起きあがりて、片手を切株の枕にあづけぬ。

おのれが登山をなしたるは、今より三日以前の晝つかたにて、其折の同行は、僅に三人なり。空には根かゝれる雲もなきに、なぎたる風ののどけさは、ことし御山の開かれてより、指折るばかりの日和なりとて、宿なる人々は羨みたりき。夕つかた、ことなく頂上に着きて、やがて八合目まで歸り來りけるが、やう〳〵夕かけのしけうなりゆけば、そこにひと夜を明すこととなしぬ。こゝには、早う七人の登山者さへやどりてありければ、互に明日見む日の出のことなど打かたりてあるに、其夜俄かに吹きいでたる暴風は、砂石を飛ばして、さながらいかづちのとゞろくがごとく、夜明けてのちも、更に吹きやまむ氣色も見えず、雨さへ加はりて、荒れまさるなどすさまじとも世の常なり。かゝるためにとてかねて岩石もて固めたる室屋も見る〳〵地盤を離れて動きいづるがごとく、まして門にたてたる板戸などは、今しも破れなむ氣色なるに、人々の安き心なきは更なり、かゝるためしには、いと馴れにたる室屋の主人さへ、常とは變りて、いと只ならぬ顏の氣色にぞ見えし。其夜もくれて、また次の日となりぬれど、なほ同じさまなる雨かぜは、いつ晴れむとも見えず、あたりあやめもわかぬまでかきくれて、吹きまよふしぶきにはきぬこと〴〵くぬれて、わびしさいはむかたなし。夕つかたより、雨やゝをやみたれど、凛々たる寒風は、身にしみわたりて、息の根も氷るばかりなるに、人々世にある心地もせず、かくのみあらむには、凍え死なむもしるべからず、いかでかこの雨間にも下らむと、一人のいへば、げにとて皆同じさまに心を

定めぬ。あるじが切に留むるをも聞かず、左に手を取りたるまゝ、はらばひつゝ立出づるに、削りなせる千仭の絶壁は空晴れ風静かなるをりにてだに、足なえ手もわなゝきて、ともすれば踏みあやまりぬべき習ひなるを、まして南風のさよなかに、咫尺のほどのわくべくもあらず、吹きのぼりゆく狂風のきほひには、身體天つ空に上げらるゝ心地して、いかでひと足もあゆむべくもあらむ、いかがはすべきとて、悄したゆたふに折しも稀々として吹き起りたる天風は、鬼神の山妖海魅を驅るが如く、暗雲を走せ砂石を捲きて、俄然わが雙脚を掃ふよと見るほどに、身は雲外に飛ばさるゝ心地して、忽ち物も覺えずなりぬ。やゝありて、しげくわれを呼ぶ聲のするに驚けば、はや人に救はれてかくはこゝにありつるなりといふ。親も子もあらむ身の上なるべきに、知らぬ人の國にいでて、かく痛ましきさまとなりたること、まことに人のうへとしもおもほえず、さるにても、かの少女の父やいかになりけむと、いとど心いられして胸ときめけば、やがてこゝをも打出でて登る。げに渡る日の影もかくらふとよみけむもしるく、乾坤を貫ける絶大の天柱は、巉峴として攀づるに道もなく、上は萬丈の絶壁に接して、下は壁立の翠屏とほく、白雲身をのせて徐々としてのぼりゆけば、秀靈の氣、身にわたりて、そゞろに魂消え魄の飛ぶこととも知らず。惚けるがごとき滑石に、身を伏せつゝもゆくほどに、ふとかたへを見渡せば、やゝへだたりたる巨巖の下に、息たえて打伏したる一人の男あり。衣きれぐに打裂けて、笠はあらぬ方に吹きとべり。さゝやかなる瓶子やらの物打負ひて、手には金剛杖を固く握りぬ。打亂れたる髪のひまより、流れたる血しほのおびたゞしきに、顔はさやかにも知るよしあられど、年の程より始めて、きぬの色あひなど、なべて少女が教へたるにいとよくかよへば、いとゞ目もくれ心さわぎて、なほつらつらうち見るに、あはれ、額のほとりに、いと大なる疵さへぞ見えわたれるや。

霧分衣

窟のあるじが、鼻うごめかして、いと誇りかに語りしも理なり。近く、總房の山々を初めとして、遠くは、甲信野州の山嶺まで、ひとしく雙眸のうちに集りて、渺瀰たる保田灣の蒼波、只こゝもとに寄りくる日本寺の風光には、物うかりし旅の疲れも、いつしか名殘なう忘れはてぬ。

寺は總房の二州を劃りて、夙に奇勝の名もて世に知られたる、鋸山の中腹にあり。木だちいと物ふりて、幽邃凄涼のけはひもまた只ならず、人跡まれにして、塵寰影だにもなく、頓想おのづから跡たえて、そゞろに心ゆく所のさまなり。高く畳みたる石階の上に、佛殿僧房のいとおごそかに連れるかたはらには、無漏窟薜蘿洞、あるは弘法大師が護摩窟など、いづれも凄涼として並びわたれり。やゝへだたりて、苔滑らかなる岸陽の門より、河内女の晒す布作りとしも見えたるは、これ白布泉の瀑布なり。落々たる長松のいまには、通天閣、三峯門などの石門見えがくれして、なほそれより上方には、小峰、月輪、瑠璃の三峯、高く萬丈の絶巓に聳えたり。山の西端は、則ち明金岬にして、懸崖突兀として、遠く海中に斗出せり。其ほとりには、白く沫たちたる浪の絶えず山のごとくに崩れかゝりたるが、やうやう岸遠くなるまゝに、杳渺たる平波に打かはりつゝ、果には鼠色なる天光と一つに通ひたるに、其間より、豆大の蚕船のはるかに漕ぎかへりくるもいとかすかなり。

かゝる山中の眺めには、惜日の緩歩、只ひと時のごとくに過ぎ去りて、今や暮れむとする落照の光りは、僅かに瑠璃山のいただきを焼きて、蓊蔚たる満山、なかば杳冥たる暮靄のうちにうもれはてぬ。

元こし道のわかずなり行かむもびんなからむとて、打急ぎつゝ下り行くに、蒼々たる纖草、くまもなく生ひかさなりて、滑らかなる夕露は、所せきまで置きわたしたり。

漸くにしてこゝをたどりゆくに、崎嶇たる山路は、右に折れ左に曲り、かつ昇はれ且つ降れつゝ、逶迤として五六町ばかり續きたる果てには、いと大なる一つの林あり。丈高き杉は、雨間より枝さしかはして、行くさきたどたどしきまで陰暗きに、あるかなきかの泉聲のみ、只まぎれなく、響きわたれり。暫しあるほどに、道は再び明らかになりて、遂にやゝ廣やかなるかたそばは、われが面前に現はれいでぬ。

こゝは、麓より只僅かなる行程をへだてたる所にて、前には、萬頃一碧の田はた、目もはるにつらなりて、うしろには、分けこし山の姿さへ、隈もなく仰がれぬ。

先刻まで瑠璃山のいたゞきに、華くかゞやきたりし夕陽も、今は名殘なく光りををさめて、蒼然たる暮色は、早や満目を埋めはてゝ、次第に全村の上をも蔽はむとせり。

余は歩みを早めつゝ、下りゆくに、こゝはやがて麓なり。一條の徑路ありて、其先き左右に分れたる眞中には一つの大きやかなる銀杏の樹立てり。繁りたる葉は、あやなき闇をやどして、地上に黒く物凄き影を印したるが、其傍をぬひて、いとさゝやかなる泉流れたり、琴韻の音あざやかに聞えて、水のきよらかなること、恰も底を徹きたらむが如し。汀なる小草

をりしきて、暫し打息ひてあるに、彼方より、一人の若き農夫、足早に歩み來り、此泉のほとりに至りて、恰も常にかくするもののごとく、俄に足を止めて、わが傍らに打休みたり、色のいたう日に焼けて、黒ずみたるがために、年よりはふけて見ゆれど、未だ十三四をば越えざるべし。其涼やかにまどやかなるまみには、愛嬌の露滴りて、固く締りたる小さき口は、いと利發なる性質をあらはせり。穿ちたる千種の股引は、膝のあたり甚だ破れて、上に纏へる一枚の布子さへ、いとほころびがちに、縫ひたりと見ゆるあともなし。身に近く置きたる一挺の鍬は極めて大きく重たげにて、かばかりの小童には、只擔ひゆくだに、遙けき道は苦しかるべきを、如何にして、終日これをもて耕作を行ふを得べき。さるにても、この兩親の心こそいぶかしけれと思ひやりて、やをら小童の方にむかひ、突然ことやうのこと聞くやうなれど、いましは、父ありやといふに、彼はなしと答ふ。さらば、母はと問へば、彼は言葉なくて、只顔を左右に打ふりぬ。父なし母なしと聞きて、余は少なからざる同情の感に打たれ、なほ其父母はいましの何歳の折に死にたるかと問ふに、童子も、また俄かに悲哀の情を起したりけむ、打ひそみたるまゝ、しばしは、物も得いはで、うつむきゐたり。

やゝありて、父のうせけるは、おのれの僅か三歳ばかりの折なりき。跡に殘りたる母は、兄とおのれとの生長を樂みに多くもあらぬ財産を恃みにして、やう〳〵に其日を過したり。さるに、兄の十六歳になりける夏、わが村にては、久しく行はざりし鎭守の祭りとて、全村目おどろくばかりの賑はしさなり。されば田わざに暇なかりし兄も、其二三日のほどは、母の許しを得て、村の若者と共に、こゝかしこの料理屋に絶えず酒酌みかはしけるが、其樂みや深く心にしみけむ、それより後は、兄の本性とみに一變して、田のわざ家の事は、つゆ心にもとめず、只思ふまゝに身をふるまひてひたすらによからぬ遊びわざにのみ耽るに至りぬ。わが折々の諫めごとは更なり、母が心をこめたる意見さへ、つゆ顧みもせず、日にけにまさりゆく身の放蕩に、母は一方ならず打なげきたればにや、去年の冬より風の心地と打臥しけるが、やう〳〵にあつしくなりゆきて、また枕もえあげず、ことし一月の半ばかり、兄のことを心にかけたるまゝ、遂にはかなくみまかり侍りぬ。

かく語りさして、童子は溢るゝ涙の思ひに堪へざらむ、筒袖を兩の目におしあてゝ、よゝとばかりに打なきたり、余もまたかゝる哀れなる物語りに、旅の衣いとゞしほさむよしもなく、只童子が、背をかきなでて、慰むるに、彼れはやう〳〵にして頭を擡げ、いと嬉しげなるおもゝちして、見もしらぬ君にてだに、かばかりの哀れはかけたまふなるを、けにつれなきは兄の心なり。母みまかりぬれば、今は、迷ひの夢をだにさましぬべきを、なほ兄の心にかへらむとするけはひもなく、常に家をよそにしてうかむありくことのはかなさよ。この後、われの憂き目見むことはつゆ心にかけざれど、母上の、彼の世にいたりたまひたる後までも、なほ、かゝる心の闇に迷ひたまふかと思へば、これぞ死なむにも増して、心うきことなるなど、とだえがちに語りいでたるも、聲いとくもりたり。

夕影はやう〳〵しけうなりゆけり。錦山を初めとして、長く眉ずみの如く横はりたる遠山は、皆一つ色に薄霧につゝまれて、中腹の松の梢よりむら〳〵と登りたつ白雲のみ、只まぎれなく見え渡りたり。

童子は、東南の方に、一の大なる星の、今し

も炯晃としてあらはれそめたるを見て、いとあわたゞしげなるさまして、要もなき物語りにいたく時を費しぬ。君にもさこそ倦みたまひたらめ。最早兄の歸らむに程もなければ、おのれはひと足お先きに參るべしとて、厚く禮をのべて、かたへの鍬を打になひけるが、左方にしげりたる森を指さしつゝ、君よ、我家はかの森のあなたなり、かしこを打過ぎぬれば、いとさやかなる田川流れたり。其岸に沿ひて、半町ばかり行けば、一もとの柳たちたる門あり。これやがておのが家なり。この後、このわたりに散歩したまはむこともあらば、必ず音づれたまへかし。何はなしとも、澁茶をだにまゐらすべければなど打いひて、名殘惜しげに、左の方へとあゆみゆきぬ。

暫し見てあるに、らうたき姿は一二町ばかりゆきける頃、急にくねりたる路のくまに蔽はれしが、やがてふたゝび森の入口のあたりに顯はると見るほどに、蓊鬱として繁りあへる木立は、忽ちに、このさゝやかなる後ろかげを沒却せり。

余が歸りゆく路傍の田家には、はや三々五々として、螢火のかげほのめきみえぬ、折すごさじと鳴きいでたる蛙は穗のへをわたるそよ風に、聲打なびけて、一しほ夕ぐれの哀れをそへたり。

余はゆく〳〵思ひぬ、げに不幸なるは、かの童子の運命なり。彼は、母もなく、また父もなし。されど、此童子にもおとらずさちなきは、まことに余のすくせなり、余は、いとけなき折に、父を失ひて、今春、また母にもわかれたり。あゝ母上、母上、余は髣髴として、母の面影を眼前にうかべぬ。

あゝ余は不幸なり。然れども、われよりも増して不幸なりしは、實に母上の生涯なりき。母上は、若くおはしける時より、ひたすらわれらの教育に心を止めたまひけるかたはら、能く父上をも助けたまひて、みづからの樂みに、ひと時も費したまふこととてはあらざりき。子の樂みは、親の樂みなりとて、母上は、われらによききぬ着せ、好める物與へたまふをもて、こよなき樂みとはなしたまひたりき。わが兄と弟とは、皆商業に身をゆだねたるに、おのれひとり學事に志したるを母上はいたく喜びたまひ、みづからの衣裳身の廻りの物などには、つゆ个銀を用ゐたまふことはなくて、皆おのが書籍筆墨の料にもとて、分ちたまひたりき。母上は、かくわれらの行末を樂みに、長き年月のうきふしを忍びたまひしに、あはれそれをも見果てたまはで、あへなくまがつみの神にさそはれたまひしなり。

母上の病にふしたまひける間は、おのれ絶えず御枕のもとに侍りたりき。おろかなる心のさがとて、萬づに足らずがちなるを、つゆ咎めもしたまはず、滿面に笑みをふくめて、尋ねくる人々に向ひて、却ておのが看病に怠りなきをほめたまひぬ。その嬉しさにもかゝはらず、母上は日にけにやせほそりたまへり。きのふまでは立居したまふこともやすかりしに、けふは寐返り打ちたまふこともえせずなりたまひぬ。かくて、余は初めて、母上が此度の病は、再びさわやぎたまはむことかたかるべきにやと思ひなりぬ。されど、母上は、つゆさるけはひもしたまはず、只怠りたまはむ後の事を契らせ給ひて、つゆさるゆゝしき筋は、身まかりたまふまで、口にだにかけたまふこともあらざりき。

あゝ、母上は、まことに死にのぞむまで、其全快を信じたまひしか。あさゆふに細りゆく身を見たまひても、其危篤なるを知らでおはせしか。否、母上は、我よりさきに、とくうせたまふことを知りたまひしなり。されど、われらの落膽を恐れて、さることは、毫も口外はしたま

はざりしなり。あゝ父君は、朝夕に逼りたまふまで、ひたすらわれらの事をのみ案じ煩らひて、身の悲みなどは、ちりばかりもあらはしたまはざりしなり。

あゝ母上よ、母上よ、母上はさばかり思ひたまふわれらをすてゝ、などはてもなき外つ國にはゆきたまひしぞ、かくばかり戀ひしのぶわれらがために、などかた時のほどもみ姿をば見せたまはぬぞ。

感慨は縷々として、絶えず余が胸中につゞきおこりぬ。余はこのかぎりなき悲哀のために、目もくれ心も消えて、前後もわかず、只そこはかとなく足もそらにてあゆみゆきぬ。

夜のやう〳〵更けゆきて、鹽風の高う渡るにやあらん、磯ひゞく濤聲の、いと耳近く聞ゆるにおどろけば、こゝは余の旅宿の後方にあたれる林なり。絹のごとく交りたる枝の影は前後左右を埋みはてゝ、向ひなるひと本松をはなれたる月は、立ちこむるさぎりにつゝまれて、いと濡るゝがほに、わが袖にやどれり。

龍華寺の富士

寥闊を東南に去ること三里ばかり、駿河灣の海面にのぞみてとほく雲外にそびえたる高峯あり。久能山といふ。徳川氏の始祖家康の英靈を祀るところ、これを日光にくらぶるに、建築の宏麗、規模の壯大はたゞに數籌を輸するのみならざれど、ひとり登臨の美にいたりては、はるかに日光に冠たるものあり。前には、かぎりなき有度の[illegible]の響きをなして山また山をきづき、うしろには久能[illegible]の峯巒相つらなりて洪濤のひるがへるがごとく、海山相呑吐し、萬字の巨觀、一幅の畫様をあらはして、まことにたぐひなき[illegible]の畫圖たるを失はず。こぞ[illegible]、おのれこのわたりの秋ましらを見、かつは、精をも[illegible]はむとて、この山のふもと徳音院なる寺の[illegible]といふにやどりぬ。山かつきて、淸[illegible]小徑、よろづつき〴〵しうしつらひて、木きりたゝずまひ、簡易の心ばえなくて、はたけしのは[illegible]て、ここに往來をば[illegible]にのぞみて、[illegible]なく、[illegible]しいみじくもの哀れなることゝ、[illegible]には水に入りて低く、釣艇そらにねむりてのどやかに、愛鷹、二子、天城の群嶽は、紫嵐につゝまれて、縹渺として軒端にかゝり、ちりては開く浪の花、松濤のひゞきをたぐへて、またとこしへにおぼしまに咲く。夕べには[illegible]きをれる鰹ぶね、はしるの袖にかへりつゝ、あしたには、雲もれ出づる朝日影、まづ女神の島より飛ぶ、あるは、あまがしわざの鹽げむり、あるは秋を掛けたる沖の眞帆、とりあつめたるをかしさは見ぬもろこしの巴陵の勝状もかくやと思ひやらる。この樓の主人は、徳たかく〳〵ざえすぐれたる老僧にして、氏を山本、名を慈祐といふ、三衣に浮世の塵を拂ひすてゝ、ひたすら、あかつきよひの行ひにたゆみなく、心からなる墨染は世の滔々たるあやしげなる法師とは雲泥のけぢめあり。つれ〴〵なる折、淸談のついでに余にかたりけるは、この久能山のかたへをのぼること一里ばかり、けはしきかたそばを傳ひて行きたまはむには、日本平といふところに到りたまひぬべし。日本たひらとは、日本武尊東征の時、しばしいこひたまひし遺跡にて、郡中第一の高地、眺望いはむかたなくめでたし、またそこより東北の方に下りたまひなば世にかくれなきかの龍華寺に着きたまひなむ。東海道中、富士のながめの最もすぐれたるところにして、日本三景のひとつにかぞへたる人さへあなり。ふりはへさせたまひし旅のおんつとにはこのながめこそよからめといふ。いとうれしくて、なほこまかに道のさまなど問ひあきらめたる後、つぎの日のひるつかた、風なきて空もうらゝかなるに、いでやとて、心急く歩みをすゝめぬ。

きゝそけき[illegible]橋をわたりて、山田の細道をのぼりゆくに、岩ばしる溪流、青蛇を走らせて、[illegible]たる草径やう〳〵に影を埋めぬ。[illegible]木こる里びとのあとに從ふこと二十餘町、瘦筇の力にたよりて、峻坂のくるしさをねんじつゝゆくに、しばしありて、やゝ平かなる高原の上に來りぬ。わけこし谷の紅葉、錦おりかけて、満目の山[illegible]、恰もあやむしろをしきたらむが如し。行くかたの空をのぞめば、一條のほそ道雲に入りてなゝめに、九重ひくゝして、手に紅日を[illegible]るかとうたがは[illegible]ゝありて、遂に絶頂に出でぬ。こゝは地をぬくこと二千有十五

尺、駿遠の兩國雙眸のうちにあつまりて、打見の壯絕快絕なる、まことに老僧の言のはにそむかず。久能山脚下にあらはれて、うどの濱、洲濱に作れるが如く、伊豆の崇嶺わづかに寸碧を出して數點の螺をつらぬるに似たり。西の方目を極むれば、煙にまがふ波の上、うしほ吹く長鯨は、潑々としてうごなはる、あゝこれ遠江の御前崎にあらずや。やゝ右のかた、浩々たる原野の末、百錬の水刀は霜を帶びて横たはる。あゝこれ丸子の阿部川にあらずや。そのかたはらに、空にしられぬ一團の黑雲をかもしたるは、木枯しの森にして、また炊煙の一むら繁く立ちのぼりたるは、これ靜岡の町としらずや。遠く甲信のやま〳〵を初めとして、近く賤機、龍爪、大日、大無間の翠巒あざやかに見えわかれて宇津の山、手越、彌勒、燒津、姥が池、清水、江尻、沼津などの名どころ、はた掌上に指さすが如し。この大觀に接して、そゞろに、神ゆき心飛び、日ごろの鬱懷なごりなく消えて、立いでむ空も覺えねど、さてのみあるべきならねば道をかへつゝふたゝび麓路のかたへとこゝろざす。茶ばたけの間をつたひ、長松のかげをたどること十數町、ふとかたへを見れば亭然として雲かゝる楠のおほ木あり、千枝をふく風木高くて、年ふるすがた目とまるに、そのひまより、またふるびたるやしろの、いとものすごう立ちたるも見ゆ。つら〳〵おもへば、これ日本武尊をまつれる草薙の神社になむありける。垣頽れ丹青落ちて、いにしへのおもかげなけれど、神さびかう〳〵しきけはひ似るものもなく、いやちこなる御稜威の歲月と共に深ければにや、尊さ心にしみて、おのづからぬかづかれぬ。傳ふるところによれば、尊東夷御征伐のため、吾嬬國へ下りたまひて、この所に來りたまひし時、賊ども並びおこりて、野に火を放ちて、尊を燒きたてまつらむとしたりければ、尊佩きたまへる劍をぬきたまひ、をちかたやしげ木がもとを燒鎌のとがまをもちて打拂ふことの如くと、となへたまひて、劍を打ふりたまひければ、あたりの草ことごとくなぎはらはれて、ほのほ逆賊のかたへなびき、尊はつゝがなくておはしましたりとか。この故よしもて、御劍の名を草なぎとなづけ、また尊の荒御魂をこゝにいはひまつりて、草なぎの神社とは云ふなり。さてまうではてぬれば、踵をめぐらして、遂に龍華寺の方にいそぎぬ。龍華寺は、久能山を去ること一里有餘、不二見村字村松といふところにあり。近きころ、日近聖人なる僧の、この所の風光をよろこびて、かりそめに庵を結びしより、其名[illegible]にきこゆるにいたりきとぞ。馬琴が玄同放言に、富士の眺望は、駿河國有渡郡龍華寺の庭より見るを最一とすべしとあるも、やがてこゝを指せるなり。そも龍華寺の地たるや、程ちかき清水灣をへだてゝ、玲瓏たる芙蓉峯の、八葉重く蒼天を捧ぐるを認む。愛鷹、箱根、二子、天城の群嶺はその右麓に朝宗して、清見寺、[illegible]、隅田川、興津岫崎、岩木山、こぬみの濱、袖師浦、田子の浦、千本松原などさながら目睫の間にあり。みぎには、三保の松原、波のまにみどりを浮べて、ひだりには、清見潟の古關見る人の心をとゞめぬ。江のおもてには、大[illegible]ぎをはこぶあまぶね棹もほさず、あるは、[illegible]たふ富士のねの雪をふみ、あるは底に匂ふ三保の浦松のみどりをわけつゝ漁歌かたみに答ふるさまいと心ありげなり。世に富士のねをのぞむところ多かれど、あるものは、あまりに遠くして、あるかなきかの姿おぼ〳〵しく、あるものはまぢかきに過ぎて、なか〳〵に雲[illegible]のなげき絕えざるを、こゝは中らのほどを得て、常にかくれなき神嶺のけはひに接するを得、これ龍華寺のながめの、天下に冠たる所以の[illegible]なるべ

し。また世の名どころ、水によしあるは山のかたおくれ、山のながめすぐれたるは、水の心ばへ劣れるが習ひなるを、こゝは海山ふたつのけしきを具へて、上下ことごとく畫圖なり。これ龍華寺のながめの、天下に冠たる所以の二なるべし。また世の勝地はおほむね一つの名どころにかぎりて二つ三つをかねたるは少なきを、こゝは清見がた、三保の崎、田子の浦など、天下有數の名區をあつめて、たゞ一眸のうちに收む。これ龍華寺の眺めの、天下に冠たる所以の三なるべし、只なべてのたゝずまひ、優美にすぎ、纖麗に過ぎ、たえて壯大瑰奇の趣なく平板單調、つゆ變化なく、波瀾なきは惜むべし。これ、眞淵がいはゆるおのづからなる海山の、眉のごとにほひやかに、鏡なすたひらかなれど竟に聲のかぎなく、山の奥ゆかしかれる海のそこひの寂なきものか。さばれ、よもの景物ことごとく詩料を負してふたつなきながめはつきねど、夕かげのやう／＼しげくなりゆかむとすれば、かへり見がちにわかれゆくに夕陽、山のはに餘影をとゞめて、又たぐひなき江山のなごりを惜むに似たり。清見、興津、蒲原などの村々をへてわかれ、舟にかへりし頃は、海の蒼のみくれのこりて、一抹の靄の底にしづやかに、

漁火浪を焼きて、海角をはなれむとする新月のかげさやかなり。

日和つゞき

紺青の空果もなくさみ渡りて、恰も無邪氣なる小兒の心の如き秋晴の一日、筇を江東の百花園にひけば、同じ心に半日の秋興をたのしめる人々、衣香鬢影、七草の間をねりゆくよそめもおもしろし。

めではやす都をとめの袖の色に
　かよふそのふの秋草の花

醒人は哭き醉人は歌ふなる王孫の[illegible]をかみて、十里の堤上をたどりくれば、いつしか黄昏の袖は川のおもてにかゝりて向ひの岸の樓臺のともしびもちらほらと見ゆ。

秋草を見てのかへるさ見渡せば
　夕霧かゝる今戸石はま

次の日は好文會の例會の日なりければ、文友五六輩と鶴見なる花月園にゆく。丘あり谷あり、花徑あり、菊塢あり、瀧もあり川もあり、殊に山の頂きに登れば、房總の海はるかに見渡されて、眺矚の變化ある、たしかに一日の清遊をなすに足るものあり。更に雪のけしきいかならむと思ひやるにも、

おもかげに雪のけしきを先立てゝ
　友とめぐりつ月花のその

かへりには海晏寺にまうで、品川なる岩崎邸の庭園を見る。木の間より品海のほの見ゆるさま、繪に寫すとも及ぶまじ。

沙魚とりの小船みだれて秋晴の
　海しづかなり竹芝のうら

又次の日は亡き母の命日なり。御墓にまうでがてら、中野あたりの秋けしき見むとて、子等二人をつれてゆく。堀の内までの路々、田の畔などの蓼の穂の赤らみたるも「十分秋色無二人管一半屬二蘆花一半蓼花。」といはまほしげなり。香花たむけて打ちをがむこゝち、何にかは譬へむ。

たらちねの墓まうでせしかへるさの
　こゝろに似たり秋ばれの空

中野の停車場に歸りくる程、こゝかしこにて四十雀のなくに、

あまりにも日和つゞけば明日はしも
　雨にかならむ四十から鳴く

教へ子

人生の樂は、いかでか之を數へあらむ、垂加翁が三樂の少きより、エーヴベリー卿が二十三樂の多きに至るまで、時により、處により、なりはひにより、身の程によりて、人の面の異なるやうに、それ〴〵に分れむは、さることなれど、おのれは教へ子をおふし立つるをもて、こよなき樂の一には數まへむとす。おのれ、身を教育界にゆだねてより、こゝに二十餘年、その間にはぐくみ立てし教へ子、決して少からず、男あり、女あり、遠く離れたるあり、近くに住へるあり、をりにふれ、時につけて、あるはゆきかひ、あるは雁の翅に言づてゝ、舊を敍し今を温む。國の名產よ、ふる里の名どころよとて、眞心こめて贈りくる畫端書、器物の數々、これをわが文よむ屋におき並べて、朝展夕玩する樂は、げに王侯も易へすとこそ言はまほしけれ。

まづ筆執るや、やがて心のとまるは、原田の君の賜ひたるこの硯なり。君、學びの業を終へて、下野高等女學校に赴任するや、かしこの石工に命じて、わが爲にとてこの硯を造らしむ。色靑くして雅び、質潤ひて水を生ず、文士の硯あるは、猶ほ美人の鏡ある如しとか。あはれ、終生の淸玩、この文房の一友を得せしめたる、誠に君が賜なりけり。

書讀まむとて机に倚れば、まづ馴らさるゝこの託臂。こは成田の君の贈り給ひし物。又讀みさしゝ書を開けば、忘られ難きこの栞。こは古田のぬしの與へられし物、託臂は、紅白の絹もて梅花の形に縫はれ、しをりは、桃色、紫の絲もて古鏡をかたどりて編まれたり。終日几案に凭るの樂も、まだ見ぬ方の言の葉を尋ぬる樂も、いかでか、この二種なくてはと思ふにも、とこしへにしのばるべきは、この君々のなさけならむ。

ひねもすの讀書に倦みて、淸神の一興、半甌の香茗を啜らむとすれば、それよ、是茶碗こそ、小部君の、ふりはへて佐賀より贈られし物なりけれ。金色の緣を取りたる中に畫きしは、山水のさまなり。危巖亂石の間、松檜枝を交へ、高士煙巖のうちに居を占めたり。一條の飛瀑、かたへより落ち、流れて、洋々たる江河となる。風帆沙鳥、遠山黛の如く、一點の塵氣を止めず。あはれ、君が心、また能く之に似たるものあり。君性温厚、祖母に事へて孝なり、今や新潟の高女を離れて、母君とともに池田の師範に在り。おのれ、この和平なる陶畫を見る毎に、君がしづかに温き家庭を思はざることはあらざるなり。

書廚の上に一輪ざしの花瓶あり。こは京都なる中島の君の今年夏期の講習にとて上京せられし時贈りたまへる物なり。そのほど、

をり〳〵の花生けかへてこまやけき
君が心の色とながめむ

と言ひやりしが、生けたる花は、朝がほ、萩、桔梗、菊と次第に變りて、今は山茶花を插す時となりぬ。朝夕の風のひやゝかなるにも、いかにと思ひやらるゝは君が上になむ。

更に眼を轉ずれば、壁間一張の寫眞挾みあり、こは雲州松江なる靑山君の贈りこされし物、竹もて篠がたに造りなしたり。ゆかしき人々の寫し畫、なつかしき友だちの筆の跡など、をりをり差しかへて見るに、まのあたり打向ひたらむこゝちして、涙もさしぐまる。靑山君、性、端

殿、書亦た其の性を表して極めて方正なり。さきつ日も便ありて、すこやかなることは言ひ来ぬれど、山河の重れる處は、一日の程もおぼつかなき心地ぞせらるゝや。

この寫眞坎みと並びて掛けたるは、紀伊なる山部の君の賜はれる瀧の額なり。訇然轟然、霹靂の如く、飛び洒ぐこと幾十丈、銀河の九天より落下すると思はるゝも、理や、これなむ那智の大瀧なる。水煙濛々として咫尺を辨ぜず、塵念時のまに洗ひ去らるゝ心地す。君は大阪の人、母あり、祖母あり。業を卒へて、直にその膝下にて職を奉ずべかりしも、さりがたき事ありて、この南海の僻陬に在り。遠くふる里を離れて、いかに心細くや思ふらむ。あはれあはれ落ちたぎつ瀧の水上絶えず思ひ酌まるゝは、君の身の上にぞありける。

あるは、日影うするゝ夏の夕、軒ばの風に打ちゆらぐ岐阜提燈を見ては、土宜とてたまはりし松井の君がすゞしき心ねを思ひ、あるは、霜白き冬のあした、かたへに擁うる栗の火桶を抱きては、出で湯のつとに與へられし坂齋ぬしの温けき情をしのぶ。

今や師弟の仲らひ、やうやうに薄くなりて、函丈の禮を知らず、薫陶のむねを忘れたるが多きに、世の常ならずや。さるに、おのれ、この書室に來れば、靄然春風の如き教へ子の情誼に襲はれて、そゞろに、この世の心地ぞせぬ。われ坐すれば和氣來りて、われを包み、われ出づれば、和氣又來りて、われを送る。おもへば、さきつ日、坊間にて得たりし前田夏蔭翁の歌ある一幅に、山家水とて、

折りとりて薬を洗ふ山の井の
水や浮世の酔さますらむ

とあるが、おのづから、おのが今の心を歌へるやうなるも、奇なりといふべし。

歌御會始參列記

御空の雲霽れ渡りし昭和三年一月二十八日、宮中鳳凰の間において、初國しらす天皇の御代はじめての御歌會は行はれた。格子形の御天井、寄木の御床、金泥の雲と浪との御襖、金の菊の紋散らせる黒塗りの御椅子、十數の電光燦たるシャンデレールの下、正面には陛下の御料に、七寶の模樣ある金襴の御蔽ひのテーブル一脚が据ゑられ、その前數歩をへだてゝ、御室の中央、今日の披講諸役の席が設けられてある。右側には皇太后陛下の御席、つゞきて妃殿下皇后宮大夫が並ばれ、左側には親王殿下宮内大臣内大臣式部長官、宮等御歌所寄人參候など參列し奉る。嚴かなる時計午前十時を報ずれば、靜々と玉歩は運ばせて兩陛下には御氣色うるはしく、殿下妃殿下を從へ給ひ、最敬禮の中に出御せさせ給ふ。

○

陛下は陸軍の御軍服、后の宮は紫色の御洋裝、尊くも並ばせ給へる御姿は神代の昔、天の浮橋に立たせ給ひし二柱の大神もかくやと仰がれ奉りて、げにかしこさの極みである。やがて諸役設けの席に著きて、讀師先づ披講の懷紙を一ひらづつ文臺に置けば、次に講師「年の始に山色新といふ事を仰言によりて詠める歌」といふ端ことばありて高らかに一讀し、發聲更に歌の初句を謠ひ起せば、講頌受けて謠ひ續く。初めは甲調の節である。雙調の律より、黄鐘、斷金と移り行く節まはし、げに長閑な陽春の響きである。大臣の歌に至りてはでやかな乙調の節に轉じ、妃殿下の御歌になりて更に轉じてピッチ高き上甲調の節にて謠ふ。大原伯の發聲、殊にあざやかにて、玉の如く銀の如く、空までも澄み透るこゝちがする。次は皇太后の宮の御歌である。けふは御いでましなければ、讀師、宮の御歌使から御歌を賜はる。白梅重ねの御懷紙にしるさせ給へるを、これは三返り謠ひ奉る。初めは甲調、二度目三度目は乙調である。

○

次には讀師うやうやしく進みて后の宮の御歌を賜はる。蕾梅重ねの御懷紙に認めさせ給へるを、これも三遍披講し奉る。初めと二度目とは上甲調、三度目は甲調である。次に讀師恐る恐る天皇陛下の御前へ進みて、白き懷紙に御宸筆を染めさせ給へる大御歌を戴き來て、さゝげ奉る。これは五遍繰返し奉るので、初めと二度目が甲調、三度目が乙調、四度目が上甲調、最後に甲調で謠み納める。かくて全部の披講がすみ、宮内大臣、御前に進みて、御式の果てたるを御知らせすると、兩陛下は徐に玉座を立たせ給ひ、天皇は左の御戸口より、后の宮は右の御戸口より入御遊ばされて、こゝにめでたくも歌御會始の御式は終つたのである。ちやうど正午より十分まへであつた。御廊下に打ち出でて禁庭を見渡せば、夜來の細雨のどかに晴れて、塵一つなき綠の芝生、敷きしさゞれは玉の如く、軒近き白梅の、春に魁けてほゝゑむ樣、今日の御儀を喜ぶやうであつた。さるにても今日の

山々の色は新に見ゆれども
わが政いかにかあるらむ

の御製、年立つやがて[illegible]治をはかりて國と民とを忘れ賜はぬ聖意の程が拜察せられてこの上もなくかたじけない。

まつり事思ふ御歌は民のみか
かたき政は山もきくらむ

北陸游草

「旅にしあれば椎の葉に盛る」といひけむ旅行のわびしさは、はや昔の事也。今の世には心あひの友と共に旅行するばかり樂しき事はあらざるに、まして時は暑からず寒からず、一年の好時節なる五月の中ば、友なる者は心おきなき歌の友なれば

はかな言かたりかはして野山ゆく
旅は二人ぞたのしかりける

蓮華草の錦をしきたりと見ゆるに、菜の花の黄金色に咲きみだれたる、さながら畫圖の中を走りゆくこゝちぞする。

赤に黄に見る目あやなる春の野の
はてこそなけれ旅のたのしさ

汽車は速くも靜岡に着きて、榮町なる袋屋旅館に入る。翌くる日徳間氏に導かれて浮月といふ料亭にゆく。この樓、十五代將軍の庭園をさながら譲りうけて構へ内となしたれば、木立池のたゞずまひ、古雅にして優麗なり。池中に群鯉遊ぶ。大さ二三尺なるもあり。赤、白、黒、紫ばめる、黄がかりたる、この上もなく美し。試みに麩をやれば爭ひて相集る。

麩をやればあつまる鯉のわれがちに
ゑさを爭ふ世にこそありけれ

こゝの歌會をすませて、停車場に來り、寝臺に身を横たふると思ふ程、カーテンの隙白みて汽車ははや神戸に來れる也。人々に迎へられて、更に須磨ゆきに乘換ふ。須磨寺門前をすぎて、鵯越よといふに

逆落し落しゝ日よりひよどりの
とぶ空高く名はあげにけむ

人丸神社にまうづとて石段を上ること百數十級、風帆沙鳥、霞の中に見えがくれして、煙波ほのぼのと春日にてりわたれるなど、勝景得て筆にすべくもなし。濱に出でて松蔭をゆくに、海波全くなぎはてゝ、一灣の風光さながら清鏡にも似たり。路をさしはさむ青松の翠緑に、酒旗ひらめく掛茶屋の客まちがほなるもつきぐゝし。

沖の上にねむる白帆をながめつゝ
松の蔭ふむ道なゝめなり

踵をかへして舞子の濱に遊ぶ。海と[illegible]松の姿、同じやうなれど、思ひなしにや、一しほうたく美しげなり。

見る心まづこそをどれ美しき
舞子の濱の[illegible]はしきは

翌十三日を大倉公園の[illegible]館なる講演にくらして、十四日丹波山脈を越えて篠山に着く。

熊笹のしげみをわけて、
荒熊のをどり出でけむ
いにしへの丹波篠山、
年々につきせず實のる
栗の其いがにのみ
恐しき姿とゞめて、
なごりなく開けゆきつゝ、
果もなく並ぶ軒先、
ひまもなく歩む人かげ、
これもげに御代のめぐみと
篠山のさゝくみあひて
祝ひけるかな。

講演に揮毫に暇なくて、臥床に入りしは午後十二時也。あすは越前にて人々に會ふべき約あれば、午前五時といふに大阪に向ふ。

遠々し丹波篠山いつか來て
またも相見む丹波さゝ山

米原にて友と別るゝに、

乗下りの人にまぎれてうしろ影
見えずなるまで友を見送る

金津驛より江戸氏夫妻に伴はれて、蘆原温泉に一浴す。

みこし路のあはらの出で湯それよりも
あつきは人のなさけなりけり

などのびのびと身を横たへつゝ考ふ。次の日の晝頃より三國海岸の唐人防の風景見にゆく。自動車より下りて、繁き松林の中を行く事數町ばかり、縹渺たる海、限界に開くる所すなはち唐人防とぞいふなる。柱狀をなせる數十丈の巉岩磯際に聳えたちて、奇景名狀すべくもなし。

天つ空さゝへたりけむ柱かと
見る目おどろく礒の大岩

青巖の海波見おろせば身もをのゝくばかり也。かへさ望洋樓といふに晩餐の馳走をうく。杯盤の間に侍する美妓に

うるはしきふじの姿は少女子の
頰にみるもなつかしきかな

など醉興をのこして、あと見返れば[illegible]の如き入日は將に西海の波中に沒せむとしつゝあり。それより蘆原にもどり、次の日江戸氏と打連れて、汽車にて金澤なる歌會へと急ぐ。この市の大友佐一氏、實業家なれど文藝の趣味ふかく、令妹みゆき子の君も歌才ゆたかに、心ばへもいとやさしく、諸共に吾を新築の離れ屋に導き給ひて、隔てなくもてなし給ふ。なさけ厚きあるじぶりに旅なるこゝちもせず、

わが家にて箸とる如きこゝちしぬ
へだてもあらぬ君がもてなし

明くれば十八日也。書前教へ子なる和田きくゑがり訪ふ。こぞ書き送りしわが歌屛風見事に出來あがりてあり。されど我文字の見にくきぞかへすがへす口惜しき。いかでかゝる拙き文字を記したりけむ、裂き捨てまほしう思ふばかりなれど、我物ならねばせむすべもなし。齋藤彦麿翁の歌に

しばしとて筆とらぬまはなきものを
などて吾手の拙なかるらむ

といふがあれど、我もしみじみこの感を持つ事久し。手習は一日も忘れねど筆力の鈍さは十年一日の如く、いつも

うちゆらぐ池の玉藻のしなやかに
わが執る筆のめぐらましかば

とのみぞ歎かるゝ。午後尾山神社にての歌會を終へ、夕ぐれ和田氏夫妻に招かれて、金澤の北方一里ばかりなる深谷温泉にむけてドライブす。森本町をすぐる程より道やうやう山にかゝりて細く、小石草徑を埋めて、幽邃の趣加はると見るうちに車は石屋旅館の前にて止りぬ。和田氏いつもかはらぬ眞心にとやかくと歡待したまふ。まづ湯あみして、おばしまに倚れば三日月涼しくほのめきたり。きくゑの君

さゞなみのゆらめく池に三日月の
かげの映りてかはづなくなり

おのれも

湯あみをへし袂すゞしくやどりけり
洗へる如き三日月のかげ

深谷といふ名もしるく、山深き樣のすまひ、數十の浴客あれど闃として音も聞えず、あたりは寂しきまで靜か也。

しめやかに湯の香かをりて深谷の
村ものすごくふくろふの鳴く

まことや、こゝは佛法僧の聲しげしといふなるに、ことしはいかにと耳すませど、名のるけはひもなし。

歌がたり文がたりして深谷の
ふけたりけりな夜風身にしむ

冷えたればとて、更に一浴してふしどに入りぬ。夜あくるすなはち

塵の世の心あらひて深谷の
　湯ぶねにひたる朝ごこちかな
庭前のつゝじ白に紅にとりどりに目もさむるやう也。きくゑの君
　白と紅うす桃色に亂れ咲く
　　つゝじに蜂のむれてとびかふ
けふ十九日、あるは散歩し、あるは揮毫し、あるは物語し、あるは歌よみなどして樂しさは果しなし。教へ子きくゑ子聰慧にして文才最もゆたか也。かねて歌を好み、詩情又あふるゝばかりなれば、勉めて止まずむば今蓮月たらむも敢て難からじなど考ふるも一日の長をたのみて、とこしへに教へ導かばやとぞ思ふ。
　歌の園生ところせきまで匂はなむ
　　生ひさきこもる菊のひと枝
暮れぬ内にとて又自動車にて金澤にむかふ。あつく厚意を謝して大友氏の別業にかへれば、主人の君江戸氏など待ちわび給ふ。それよりくさぐさの物に歌など書きすさびて眠れば、いよいよ歸京すべき二十日の朝は明けたり。きのふまでの天氣に引きかへて蕭々として、降る初夏の雨、こゝちよきものながら何となう物さびし。晝前又樣々の物に揮毫す。主人の君張子のおきあがり小法師を取出でてこれに贊せよといふ。直に
　倒れざる心あればぞ倒れても
　　又倒れても起き上るらむ
としるす。我も亦この小法師の心にて世を渡らばやとぞおもふ。武藏四高校校長夫人をはじめ人あまた語らひ來る。ねもごろなる御心とりどりにうれし。さてやをら手荷物などとりしたゝめて、歸りのいそぎす。何となくなごりをし。みゆきの君傍にありて何くれとなく世話したまふ心根のやさしさ、謝するに辭なし。
　大伴のみつの姫松まさきくて
　　千代までしげれみつの姫松
午後七時半金澤發なれば、また時間ありとて、雨中の送別といふ題にて歌よむ。
　別れむと思ふ心もをしへ子の
　　情によわる雨のゆふぐれ
かくて最後のゆふげのもてなしにあづかりて、自動車にて金澤停車場にゆく。いそがはしうおはすらむを、あまたの人々の見送り給ふ事いともかたじけなし。窓より顔さしのべて、この喜びの心を述べむとすれど、感あまりて何事も得いはず。きくゑの君の見えざるはいぶかしと思ひてあるに
見送りの人にわけて[illegible]
　[illegible]かたしさ
いかばかり我慕へば人波の
　中にもとめておはしましけむ
とて[illegible]人の[illegible]といたはし[illegible]夫の時を違へて遲れたるなりけり。今しばしと思ふまに車はゆるぎ出でたり。君たちの姿は半ばかくれぬ。君たちの顏は人かげにまぎれぬ。君たちの姿も顏も全く見えずなりぬ。心はしをれて夢みるやうなり。力なく夜床に横たはりてすぎし日の樂しさ思へば
　たのしくも過ぎし十日の繪卷物
　　くりかへし見る胸のさびしさ
寢臺車の中にて聞けば
　山のはなしいで湯のはなし語りあひて
　　人げにぎはふ夏の汽車かな
二十一日朝八時半豫定どほり上野驛につきぬ。車を飛ばしてわが家に來れば、娘たちの笑がほもて我を迎へて門のべに
　　ならび立つこそうれしかりけれ
さて過ぎし十日の旅ぢを思ひめぐらせば
　面影に立ちてなつかし今更に
　　旅にて見てし山川家人

閑時想

湖畔の秋

古き東京を思ひ出て

旅客より觀たる大阪

煙霞になづみて

虚と實

馬場孤蝶

閑時想

一

新しき寝臺、思ひ出も憂も纏らぬ寝臺購ふ世の人の心こそ心得ね。げにいぶせく、げに醜き、わが、はた、われ等の寝臺は、生れてより墓に入るまで、いくその人の世をば載せたりけむ。そを思へ、女よ、げに悉くこれを思へ、かゝらむ人々の生涯の、おほかたは、人形幾つか縫ひ浮かしたる帳ひきまはせるこの四つの脚の間に過ぎ行けるさまざまを懷へ。さても帳上の人形の見けむしなじな、そのこゝに懸りしよりの世紀三つ、そが見たりし品かはりたる人の世やいかに。

こは、西の國の何がしが館の跡。世のうきふしに深うも思ひ入りぬる人の、そこに喜び、そこに嘆ける女のうへ、生れ來けむ幼兒のはじめ、逝きけむ人の終、浮べし笑、灑ぎし涙の昔を憶ひ、あるは、疲れし體をやすむるよすがとなり、あるは、敗れし身を迎ふる物陰となり、あるは、人目に包める胸の誇を放にし、はたや、知らせがたなの愁に心ゆかす、たよりよき片隅となれるを思ひては、げに、この家具に興ある心の寄せらるゝもことわりや。

二

うき世の波静けき東のはてに生れ、世すぎのさま、唯ひとわたりに事すみて、古き調度などに閑ふことと常ならぬ身には、かゝらむ興の自ら浮ぶをりこそなけれ、臥床はわが安憩の地、はた活動の地なりと覺ゆれ。立てる時、坐せる時、四方はよしいかばかり静ならむとも、心はよしいかばかりわづらひ無からむとも、臥したるにたくらべては、さながらに人の家に客たる思せらるゝをいかにせむ、げに臥床に就くは家に歸るが如し。しかも、旅にしては、この思なほ切ならずや。さなり、一夜の前は、いかならむ人の道の思を包めりし臥床なりけむ、一週の前は、いかに、一月の前はいかに、一年の前はいかに、人や、男なりけむ、女なりけむ、若かりしか、老いたりしか、今宵の道行するきはか、晝、夜を重ねしものか、古りにし驛路の秋ふけて、風さへ眠るをりしもは、たゞさながらや、身ひとり萬想の海波に漂ふ思こそせらるれ。眠りて見る夢は、覺めて見る夢のさまざまなるに若かず。夜にしては、眠に入るまでのしばし、朝にしては、起き出づるまでのつかの間、時に限無し何百年、路に[illegible]沒し何千里、鳥ならねども、翼あり、船ならねども、水を渉るを難むせず、僅にふみの一蹟に親ひし遠き世にかへり、聞きしばかりなる外つ國に遊べ、若き日に立ち戻り、老いし境に趣き、詩人となり、政客となり、樂師となり、戀人となり、貴人となり、富人となり、貧者となる、あゝ、かばかり夢多きは、唯、われのみか、さはれ、世のさまざまなる計畫、多くは、かゝる朝ゆふべの夢のうちにこそ定まるなれ。さらば、われにして、臥床は活動の地、人にしては、とまれ、活動のみなもと、あゝ、臥床無くて、人まことの家あり得むや、あゝ、夢無くて、世の事起り得むや。われもし詩客ならむに、まづ臥床を讃ぜむか。

三

恵多き世かな。貧しきわがきはだに、ふる

本購ふ資少しはありけり。古き和漢の書はよくも讀み得ざれば、手にすることも稀なれど、西の國の名だゝる人々の著せるは、古きをも、今様なるをも、つとめて購き、世の思潮に後れざらむと、人がましうも無き身の心だのみとはしつ、丸屋、中西屋など新本賣る店に立寄れば、あれをこれをと、われかのこゝろに、のぞましきは、もとより多かれど、その價、わが嚢裡の餘裕のゆるすところならずして、思ひやむことのみ多し。されど、ふる本なるは、新しきものの價を下ること、たかくも三四割なるが多ければ、やゝ心やすうも購はるれ。かくて、神田に本郷に、つとめのかへるさなど、ふる本あさること多ければ、店あるじのわが面よく知れるも知人友人はあり。もとむる代などもたかからで、あきなひのかけひき笑顔もて客にむかふさまは快けれど、言ひ出づる價のいと高きさへあるに、買はど買へ嫌ならむにはやみねとばかり、佛頂面したる主人ある店には、立ちよりがたくぞ思はるゝ。わが知れる限りにて言はむに、小川町なる野田のあるじが、洗へる如き心根、賣り惜むさま無きは快きかぎりなれ。つぎて、本郷なる郁文堂の、客のあしらひいと物靜かなるもいとよし。かゝらむ店には、立ちよる人々も、學の道にいと篤きが多かれば、家あるじの身は、よし學べるものならずも、陰ながらに、世の文運を助くること多からむと、めでたし。

四

ふと立入る店のはし近う、今は絶版のたやすくは手に入らぬ書見出でたる時、その價の、ふところのそなへとやゝ相かなひたるうれしさを、さるべき覺無き人にいかで語らむ。よし、さるものならずも、新本の價やゝ高くて購ふにためらへるを、いと割安う、ふる本賣る店にて得たる、げにこゝろ滿ち足る思ぞせらるゝ。これや、われ苦しきを忍びて、都に止まり住める一徳か。さはいへ、折よく購ひ得て、その喜の薄れぬも待たで、落丁、破損など甚しきが知られしつかの間のうらみは、何にかたとへむ。こは、よろづに心繫がるゝこと多きわれのみの思にか、げにや、肥馬金鞍のおごり、酒池肉林の樂、そを望まむに、われ等がきはにしては、天に登るにことならず、さはれ、なれば玉殿も何にかはせむ、このましきふる本得たるわれ等が心の滿ち足らへるは、貴人宴安の快さといづれぞ。幸多き身かな、文運興隆の時代に遇ひ得て、舶載の新書さへ、多くは古本賣る店に購ふもまゝなれば、おのづからに、波の彼方のすぐれし人々の想をもたやすく覗ひ得て、わがごときにしては、遠く笈を負うて、幾千里の外に遊ぶの要もほとんど無し。かくて、志だに衰へずば、學の道も日に進み、心のやしなひはた豐に、朝夕の料の乏しきも憂からず、衣薄きも身寒からで、老境のせまり來るをも忘れ得むか。

五

ふる本こそ興多きものなれ。ふと得たる書の扉あたり、知れる人の名はさらなり、知らずも、名たゝる人の筆の跡など見出でたるは、げになつかしき思ぞせらるゝ。一わたりのうち聞には、浮世の慾にのみかゝづらひて、心も行も卑しげなりと思ひなされし人の藏書に、思ひよらず、手ずれたる風雅のふみなどありしを知れるは、もちぬしの心のほどいと見あげられて、失せにしわがもちもののゆくりなう手にもどり來けむこゝちもせらるれ。ことさら、こゝもとならぬ國にて得しさまあらはなるふみどもを手にしては、もちけむ人々の外遊放學のおもひでのさまざま、これにもこもれりやと、な

つかしさ堪へがたし。女の叢書にて一たびは讀みつれど、なほ自ら備へまほしう思へるを、やうやうに索め得て、燈下に繰り返す折りしも、わがさきに深う心を寄せぬる句節どもに、力こもれる赤き線など引きある、さては、そのかたへに短き評語書きつけある、誰とも知られぬ持ちぬしの、ひととなりことさらにゆかしうもあるかな。あるはまた、教科の書ならぬに、百頁にもあまれる間一面に鉛筆もて譯語かいつけたるは、よし見る目にはいぶせくも、人の篤學のさま推しはかられてうれし。精しう讀みしさま無う、手ずれの跡だに無き、あるは、ふちさへ切らぬほどのふみども得たる時、薄志の人よとひと目にはとりなさるれど、さるべき仔細ありてかと思ひかへせば、ふる本あさるほどのわれ等が身には、思ひやりの情、など無からむ。さはいへ、唯一わたり讀みしばかりに見ゆる書に、何とも知られぬよごれ目の立ちたる、ところどころ破れちぎれたる、さては、ふちの切りざまいとみだりがはしきに遇ひては、何とは知らず、人のこゝろ根いやしげにも覺えらるれ。思へば、わが持たるばかりのふる本のこしかたにも興はあれ、人の手や幾たびかかへけむ、この都のうちにだに、幾つの町をか移り來けむ、公子の手やふれたる、美人の袖やかゝれる、過ぎし日は、金屋にや收められたる、玉机にやのぼりたる、こゝろあらむに、狹きわがふみだなのうち、昔の榮を思出の夜もありや。現は非情の靈の世ならずも、愁づかれのうたたねの、よしはかなくも夢路はあるを、しばしは、幻の世に往通ふ影にことづてゝ、過ぎし榮華の世ならずとも、垢面の人が友たりし、夜頃の懐を語らずや、いかに。

貧しきは苦しきものか。富みけむ日覺えぬ身のなど知らむや。さはれ、貧なればこそ、かゝらむうき世に興もあれ。雪の窓のためしにたくらぶべくはあらざれど、なほいさゝかは物學べばか、世のわづらひに思ひせまらず。恵多き世かな、貧境などや慰藉のさはなる。

湖畔の秋

其一

磯の松崎、清涼寺、かしこの山、こゝの丘、蕈狩る人の炊ぎの煙か白く〳〵と立登り行くを横に見て、切通の峻坂を走登れば古城の粉壁前に聳え、千頃の稲田黄金の波を湛へたる彼方に、荒神の禿峯屹として湖波を壓せむとす。八幡の城山は鶴翼を碧空に張り、四明が峯、比良が嶺はやゝ遠く青み、七十里の蒼波の面は滑として鏡に似たり。急歩嶮坂を下れは、一條の田路直に家古く里靜なる鳥居本の古驛に達す。驛路を行き盡して町條、板橋を越えて右すれば、松古く尾花老いて秋意の坐ろに身に迫るを覺ゆ。羊腸たる山路の極まる所を磨鍼嶺となす。まことや湖光萬頃翠巒に映ずと云ひけむ碧瑠の大湖は前に開きて、竹生の小島は浮べるが如く、山本山賤ケ嶽層々として、永久に行く秋を此江國に支へむとす。筑摩の社は入江の彼方にあり、長濱の里は白帆の急ぐ方にやあらむ。威あるかな膽吹の大嶽、靜なる山の色かな。春來れども衣を改めず。秋來れども色を變へず。花に依らず月を賴まず。綠容只其儘に湖景を整ふるところ、嚴たる雄姿まことに湖北の鎭たり。磨鍼の嶺上一孤亭あり、梁撓み軒傾き塀障將に壞れむとす。椽端に踞して遠く望めば多景の島は游龜に似たり、嗚呼、中仙道に侯伯の往來繁く、行遊の客朝に過ぎ夕に來るもの絕えざりし四十年の昔は、二亭嶺路を挾んで立ち、客を呼ぶ少娘皆艷容花の如く、鬻ぐるの糖餠日に作るところ幾十斗なりけむ。爾來桑滄の變、過客の此古道に依るもの日に寥々、一亭僅に其跡を止めて、之を守るの老媼は昔日麗容玉の如き少婦なりしにはあらざるか、夫は知らず。今は惟野なる田娘の茶菓を薦むるあるのみ。古驛の秋思を忍ばむとするものは、請ふ倘此古道を進み、番場、醒ケ井、柏原、今須を越え、寢物語を過ぎ、藤川を渡り不破の古關の遺跡を訪へよ。漂零の孤客の旅情は、かゝらむところかゝらむ時に偏いとゞ深かるべし。

其二

秋雨しと〳〵と降り出でたる日、石山寺に詣でむとて出立つ。粟津の原にかゝる頃雨は晴れぬ。三上山は近く我を招くが如きに、伊勢路の山々、諸山青巒層々と連りたり。汀の蘆間を分けて漕ぎ行く舟には、刈り取りし藻を積みて彼方の静に大湖の方を顧みたるなど風情あり。瀨田の長橋を横にして田畝の間を進む。螢谷といふは山背瀨田川に向つて突き出たる此方にある溪流なり、背頭森林を爲したれば遠く眺むるに河流と相應じて佳景を爲す。石山寺の旅舍の小亭、瀟洒にして急流に臨める、見るだに心を清からしむ。右折して石階を登れば、伽藍嶮石前庭を包み、上に寺堂を臨む。讀經の聲高く聞ゆ。多寶塔の下を過ぎ、月見堂に至る、崖頭に茶店あり、就いて憩ふ。前には鏡臺山とやらむ、禿山青立ち殆んど樹木を見ず、月は彼方より出づと云ふ。左は遠く比良が峯を望み、湖波浩蕩として麓を洗ひ、右は小峯大[illegible]頭の間に集まり、脚下には瀨田の河水滔々として流れ來る彼方に、長崎の只木材を組上げたるさまにて投置きたるやうにぞ見ゆる。暫時倦まず、僅に意を決して山を下る。[illegible]日月屋が河沿の小

一亭に午食をしたゝめ、大津に歸ると云ふ車夫を得て膳所の義仲寺に向ふ。古城趾前にあり、比叡の大嶽我を壓せむとす。大なるかな此景や、山は水を得て高く水は山は得て潤しと車上興を放にす。湖岸に迫つて花と散るところ、矮屋小舎の間方數十弓の地を義仲寺とす。前面高く方碑あり、旭將軍の墳なり。木曾殿と背中合せの寒さかな、詩聖芭蕉の古墳は其後方にあり。境内の堂宇小亭多く俗氣あれども、古塚一點の俗塵を容さず。拜すべきかな。地域一弓餘、石の玉垣の内、一大自然石の碑臺の上に三尺餘の墓碑は立てり、銘して芭蕉墳といふ。俳歌の祖翁此に眠りてより今に至る幾百星霜、古苔蒼然として塚碑を包み、人をして粛然容を改めしむ。右に萩花あり、秋雨の名殘を露と宿して枝もたわゝに吹き亂れたり。後に數株の芭蕉樹あり、蒼葉碑を蔽はむとす。低徊去るに忍びず。車を走すること少時、三井寺の門叩かばや今日の月、石磴數十級を登り盡せば、眼界遠く開けて、萬頃の湖光蒼雲と相映じ、四山黄野、滿目の風光盡く書中に收むべし。

希くは我山僧と共に月下山門を叩かむかな。去つて高觀音に登る、秋日將に盡きむとして湖景益ゝ奇にして大なり。道を失つて絃歌の巷に入る。行人に問ふて正路を得、逢坂山に出づ、山腹一祠を得たり。古蹟幽邃、所謂蝉丸の宮は是か。落葉散り布ける神殿の下に立てば、暮色蒼然、寶甍を包み、夕鳥の聲幽かに音づれて、閑寂の意胸に充つ。去つて大谷に出づれば、僅に東行の火輪車を得たりしが。

其三

金龜城北一小丘あり。盡頭を松原ケ崎といふ。奇松湖風に舞ふところ、赭巖絕壁、湖波洶湧其脚底を洗ふ、俯瞰すれば眼眩せむとす、怪巖あり水を拔く丈餘、兀として波と戰ふ。稚松笑ふが如く其上に生ふ。比良ケ峯下ろし膽吹下ろし吹き出でたる秋日、此岸上に立ちて湖濤の奇狀を見る、快いふべからず。巉巖に碎けては百千の白絲を風に振ふが如く、絕壁に激しては白馬の如く躍つて丘を越えむと欲するに似たり。蒼たる大湖の面は一波一浪高まり來りて、丘脚を碎き巨巖を呑み、山を崩し、陸を覆さずんば止まじとするかと疑はる。大き波岸を打つとき其聲や轆轆、小波岩に碎くるとき其響切々、高き時は湖中の神靈呪詛の聲を擧げて陸の壞裂を祈るかと疑はれ、低き時は水底の鱗族此永久の水陸の爭に泣くにやあらむと疑はる。若し夫れ金烏比良の翠峯に沈まむとして、金波湖上に漂ふ時は、湖中の金龍波を擧けて陸を襲はむとするかと怪まれ、秋日峯の彼方に沈めば、波面物凄じげなる色を添へ來りて、水底の魔神機を得て逆軍の陣形を整ふるかと怪まる。あゝ此爭は永劫盡期なし。水は丘を碎かむとし蝕せむとし、丘は水を蹴つて衰へしめむとし退かしめむとす。此の如きもの朝より夕に至り、夕より朝に至る、春は、夏は、秋は、冬は、時として此戰を見ざることなく、日として月として、はた年として此爭の止む時なし。水や勝つ、陸や勝つ、之は歲月の人に教ふる所なり。我聞く、岬頭を去る町餘の湖中に、一大石の華表の立てるありて、波靜なるの日は舟人之を水中に見ることありと。之を以て觀れば水は正しく陸に勝てり、然れども桑滄の變豫め期し難し、滄浪山の如き湖上、他日變じて一大青田となるも未だ知るべからず。請ふ歲月をして之を決せしめよ。

其四

金龜城頭望月の夜ぞ面白き。京橋口より直に、暗々たる林間の山坂を探りて登り行けば、木の間を漏り來る一道の月光ところ〳〵石垣の

上に落ちて、白衣の神人こゝに遊ぶかと疑はしむ。明暗の對照極めて緻なるを見る。渓上の板橋に立つて天を仰げば、皎月雲を破して怪松の枝頭にかゝる。四顧人影なし。進んで傘亭の下に至れば、膽吹の連嶺は白雲を引いて、山影さながら夢のごとく淡く、近き佐和山、磯山は黒く、遠き湖北の山峯は、薄くして靄の如く、濃淡の配合書圖にさも似たり。湖面ふかく霧こめて遠き近き田の面と同じ色をなし、何れを夫れと見分けむやうなし、此宵ばかり我古城は四面に水を受けたる思ぞすなる。名月や麓の霧は田の曇り。何我を欺かずとや云はむ。やがて月は昇ますゝゝ小さく、其光澄み渡れば、横雲遠く膽吹の峯後に沈んで、山容やゝ明になり來れり。其まゝに月も朧まし伊吹山、月ある時も亦よろしと眺め遣りぬ。涼氣肌に徹りて、清爽の懐胸にせまる。良夜なるかな。嗚呼明光千里、此同じ月に對し、都に殘りし父やいかに、母やいかなる夜をか結ぶらむ。姉やいかに弟やいかに。京都の風雅人をして老いしむ、[illegible]の友や如何ならむ姿して、はた、如何ならむ思ひにて此清光に對する。我や云ふべくもあらず、身は何も言ふなし、されど望多き友をして對不治者を、月よ、汝の光に照さしむるの憾なからしめよ。懐に得堪へで城を下る。鐘樓人を見ず、月光寂しげに古鐘の半面を照らす。

其五

我湖畔を去つて、茲に五年、同志多くは四方に離散し相見るもの僅にその二三に過ぎず、桐の一葉のあはれに散りて、とこしへに逝きにし人の果敢なきは云はずもあれ、往日盛春の懐を今尚胸に止むるもの今將幾人かある。都門の紅塵に痩するもの只我のみならむや。遙に語を寄す、鹿子木不倒生よ、汝今何處にかある、セイヌの河畔か、ラインの流域か、將又アルプスを越えて古都の秋風に吟ずるか、壯志空しく屈すべからず、健在なれや。好漢希くば愛ふる勿れ、我いかんぞ空しく死せむや。

古き東京を思ひ出て

上

もうそろ〳〵東京新繁昌記といふやうなものが出て來ることになつた。吾々はさういふものによつて、前の東京を大分憶ひだしたが、思へば、東京——震災前の東京——は隨分變つてゐた。いや、それは東京ばかりではなく、京都、大阪のやうな大都市は勿論のこと、少し大きい地方市ならば、この二十年この方だけの變化でも、實に非常なものであらうと思ふ。現に名古屋の街衢の今の變り方などは、その著しい一例であることは疑ひがなからう。

これまでの大部分の都市は、町と村との混合の形であつた。昔の東京の如きは、市のなかに山があり、森があり、畑があり、田さへあつたくらゐである。多くの地方市も東京ほどの程度ではないにしても、何處も幾ほどかさういふ風なところがあつて、町と村との境界を何の邊で附けていゝか分らぬといふやうな趣きはあつたらうと思はるゝ。昔のやうに、世人の生計が樂であつた時代と違ひ、誰でもがさまざまの度合において、外へ出て働かなければならなくなつたので、都市では誰もが出入りに便利な部分に住まふことを欲するやうになり、市内の住宅の數は見る〳〵増加し、空地が次第になくなつて行くといふ有樣であつたのだ。東京などでは、大邸宅——大庭園——を持つといふことが非常な不經濟であり、不便なことになつてしまつたので、それ等の大きい屋敷が賣り物に出て、小住宅地に分割されるのが多いのだから、空地は今後はなほます〳〵少くなつて行くであらう。

僕等が少年の時分には、まだ舊江戸の面影だらうと思はるゝやうなものが大分殘つてゐた。一例を擧ければ、今の中央大學の前は法學院、その前はイギリス法律學校、その又前が明治義塾、その前身が三菱商業學校であつたのだが、明治義塾時代までの校舍は昔の侍屋敷のまゝの建物であつた。いづれ何千石といふやうないはゆる布衣以上の旗本か、それとも、も少し大きい小名かの邸宅であつたのであらう、大きな式臺で、内には書院らしい一室もあるといふ、日本建ての家としては可なり廣々とした建物であつた。當時はまだ、前代からの遺物である建物が錦町、神保町、猿樂町、今川小路へかけて、幾つも見られ得たらうと思ふ。

今日も神田の西部は學校町である。だが、その時代はより多く學校町であつた。學習院のあつたのは、今の商科大學の前あたりで、帝國大學の豫備門も、法學部も、理學部も、その南手にあつたのだらうと思ふ。唯、醫學部と病院は今の帝國大學のある本郷の舊加賀侯邸にあつたのだ。從つて、神田のあのあたりは、本屋町といつてよかつた。勿論、新本のさう出版せられる時代ではなかつたので、大抵古本屋であつた。これはそれより少し後になつてのことだが、駿河臺下の停留所の西手の横町あたりから俎橋へ拔けるひどく狹い町が殆ど軒ごとに古本屋であつたことを記憶してゐる人は幾らもあるであらう。此の狹い横町が南の方を取り廣げられて、今の電車通りになつたことは此にいふまでもなからう。駿河臺下からお茶の水橋へ向ふ今の電車通りも小川町寄りのところは、電

車開通のためにできた新道だと思ふ。昔の路はあの坂道の下り口の西手の小さい横町を通るやうになつてゐたのだ。

谷崎精二氏の前記「東京新繁昌記」中の神田の部には、神保町邊の火事のことが書いてあつたと思ふのだが、あの邊が震災前に焼けたのは、明治四十二三年ごろであつたらうと思ふ。何でも、春であつたかと思ふのだが、三崎町あたりから出た火で、可なり廣い地域へ焼け擴がつた。あの邊は二十五六年ごろに大火に逢ひ、その後も一回焼けたことがあるやうに記憶する。さういふ風で神保町から錦町へかけての古い建物は、或ひは焼け、或ひは改築されて、あの邊は震災前に既に新市街になつてしまつてゐたのだ。

坪内逍遙大人の「書生氣質」には淡路町あたりの横町で、學生が矢場（楊弓場）の女に引張られるところがある。なるほど、今の寶亭の横町にそんな家が二三軒あつた。それは明治十五六年ごろのことである。

淡路町にあつた共立學校は、今の開成中學の前身であるが、高橋是清、鈴木知雄氏等の創立した英語學校で、大學豫備門、商業中學等への入學準備の學校であつた。今五六十代の人でそこに學んだ人々は大分多からうと思ふ。田島錦治氏の顔はよく覺えてゐる。僕と同級にゐたのは平田禿木、桑木嚴翼、瀧精一、立作太郎の諸氏であつた。島崎藤村君もあの學校にゐたことがあるといふ。明治二十年ごろの試驗成績表のなかでは、中村利彦（福島）といふ名を見出すであらう。これは堺利彦君の前名で、福島は福岡の誤りである。

今の萬世橋が昔の昌平橋であり、それと今の昌平橋との間に石造の、下が水路を通すために、圓形に二ケ所開いてをる橋があり、それを俗に眼鏡橋といつて、それが昔の萬世橋（よろづよばし）であつたのだ。だから、昔の上野への本道はその橋を渡り、川に沿うて右折し、直ぐ左折し又直に右折していはゆる御成道になつてゐた。鐵道馬車の道もさういふ風になつてゐたのであつた。御成道は將軍が上野へ參詣の通路に當つてをつたのだらうが鐵道馬車の通りだすまでは、實に狹い街であつた。あの街は後では古い繪雙紙や、繪本を賣る店が何軒もできてゐたのだが、昔はあすこで眼に立つたのは、鎧や古馬具や、槍、刀といふやうな古武器を賣る店であつた。弓矢を賣る店も一軒黑門町あたりにあつたことを記憶する。

中

古い繪雙紙には、上野公園の入口のあの廣場に、風車のあるのがかいてあるだらうと思ふのだが、勿論明治になつてできたものであらう。これは、鐵道馬車ができた時分にはまだあつたかと思ふ。その時分には無論三橋はあつた。この方は極近ごろまであつたと思ふ。切通し下から廣小路へ出る今の電車道は近年になつて開けた道で、あすこは板倉侯の邸であつた。その裏手の近ごろまで吹拔といふ寄席のあつた通り——南北の通りは昔からあつた。吹拔の筋向うあたりの西側の路次やうのところを入つたあたりに、大弓場があり、それから南の方の横町に借馬屋があり、狹く短いものながら、馬場もあつて、そこで馬に乘れるやうになつてゐた。それは、十六七年から二十年ごろへかけてのころのことではあるが、それにしても、あの邊でさへ、そんな空地があつたのだから、その時分の東京生活には餘ほどの餘裕があつたことが推知できるであらう。

不忍の池の緣が埋立てられて競馬場になつたのは何時ごろであつたらうか今明かには記憶しないが、明治十八年ごろにはもう馬場はできて

ゐた。そのまゝはその周圍は草の生え茂つた極狹い路で、池の周圍がもの寂びてゐて、如何にも風情があつた。その時分にはさういふ池にくつついた草徑と茅町の池へ面した道路との間には、もう一筋藍染川が流れてをり、それに月見橋だの、雪見橋だのといふ土橋がかゝつてゐた。さういふ藍染川と土橋は近年まで遺つてゐたが、何時かの博覽會の時か何かに埋められてしまつた。

森鷗外大人の「雁」といふ小說には本鄕の龍岡町から岩崎邸の裏手を通つて池の方へと下りて行く無緣坂あたりのことが書いてあるので、ひどく興を覺えたことがある。

大學の東端と丘續きになつてゐる茅町の西側に忍ケ岡小學校といふのがあつたが、床次竹二郎氏の出身校である。

根津にあつた遊廓が今の洲崎へ移された年代を今記憶しないが、明治十七年ごろまではあすこに娼樓が一廓をなしてゐたと思ふ。藍染橋までは引手茶屋であつたらしく、花暖簾などが風に飜るのを見たことがある。橋から先きが娼樓の區域で、權現の方へ曲つてゐる八重垣町の方に大樓があつたのではなからうかと思ふ。とにかく大八幡の跡といふのが、溫泉になり、旗亭になり後には病院になつて極く近ごろまで遺つてゐたが、それは庭なども見事なかなかの大建物であつた。

今では、根津の大通りは動坂の方へと突き拔けてゐるのだが、昔はあの道は直きに突き當りになつてゐた。その突き當りになつてゐたところと、團子坂から谷中へと通じてゐる路との間は池などのある邸のやうなものになつてゐたやうだ。或ひは田などもあつたかも知れぬ。谷中の坂への上り口の右手の方は田になつてゐたのだから。

團子坂が改修されて長い坂路になつたのは、七八年前かと思ふのだから、あの坂のへんに曲つて下りになつてゐたのを、藪蕎麥と菊人形と共に記憶してゐる人は多いであらう。そして、あの邊の路が今よりもずつと狹かつたことはいふまでもあるまい。

菊人形といへば、入谷の朝顏のことをいはなければならなくなるのだが、それは、上野驛の北端あたりの右方をば、狹いさま〴〵に折れ曲つた小道へと入つて行くのであつた。兩側は竹垣やら生籬やらで仕切つた植木屋で、門を入ると、葭簾で高く上の方を日蔽をして、その下へ板で花壇をこしらへて、それへ鉢入りの朝顏を列べてあつた。朝顏は土鉢に植ゑてあるのだか、それをば、陶の鉢のなかへ入れ子にしてあるのであつた。客は薄暗いなかで、花の色が氣に入つたのを選んで買ひ取つて、自分で持つて歸るなり、配達を命ずるなりするのであつた。七、八月ごろの天氣のいゝ朝は、入谷の狹い路をさういふ客が、花見か緣日かのやうにぞろ〳〵歩いてゐたのであつた。何しろ、朝四時か五時に起きて、不忍の蓮を見てから、入谷へ朝顏だけを見に行くといふのだから、隨分呑氣な譯のものであつた。その入谷を東へ拔けきると、その先きは、いはゞ漠々たる水田といつていゝくらゐで、蓮池や稻田が青々と續いて、それを隔てゝ右寄りには、淺草寺の塔や堂の屋根が見え、正面には、吉原の娼樓の洋館まがひの塔や圓蓋のやうな屋根の一簇が見える。全くいゝ氣分の眺めであつた。無理のきくものなら、今日までもあのまゝに遺して置きたい場所であつた。

朝歸りの客、入谷の朝顏から歸る客は、よく根岸の笹の雪へ寄つて、絹漉し豆腐へ葛餡をかけたのを菜にして、酒を飲んだり、飯を食つたりした。その時分は、笹の雪はこのあん掛け豆腐專門の家であつたが、入谷の朝顏がなくなると共に、料理屋になり、今ではあの邊には繁

妓屋ができるまでになつてしまつた。

入谷の朝顔は明治三十年ごろまでは確かにあつたと思ふのだが、菊人形の方は場所は變つても今日まで遺つてをるけれども、朝顔見物の方は餘りに呑氣なことなので、何時の間にかなくなつて、朝顔は緣日の草花屋が賣つてゐるくらゐなものになつてしまつた。

「たけくらべ」の場面に取られてゐる大音寺前――坂本通りの三島神社の角を曲つて吉原の裏手へと行く路――なども、寺などの生籬が道に沿うてゐて淋しいところであつて、浪人が郭通ひの客を脅かしたといふ昔話も憶ひ出せるやうな場所であつた。

昔の東京は震災までにもう大部分滅されてゐた。そこへ持つて來て、あの大震火であつた。沿革も風情もあつたものではない。何もかも骨灰になつてしまつたのだ。ついこのごろの新聞には日本堤を削り取ることになつたとあつた。もう別に風情のある場所ではなくなつたのだから、便利のための變革はむしろ歡迎すべきであらう。

下

龍岡町の南端、牛肉屋豐國の前に當る、大學の長屋の角の大きい欅の柱に刀でさんざんに切り込んだあとが遺つてゐた。俗には、それを化物柱だといひ、それが夜なかには化物に見えるので、通りがかりの侍が引き拔いて切りつけるので、あんな痕が遺つてをるのだといひ傳へてゐた。しかし、あれは、醉つた侍などが、大諸侯に對する反抗心などもあり、要するに、惡戲心から、すつぱ拔いて切りつけたにすぎないものであらう。

あれから南への左側、今本郷區役所になつてをるところまでは、麟祥院の枳殼垣であつた。その垣根のために麟祥院を俗にからたちでらといつてゐた。この寺は春日の局の菩提所なんださうだが、昔は、切通しの通りへもつと境内が出てゐたのだ。明治二十四五年ごろに道を擴げるために、寺の地面を切り取つたので、寺の塀際にあつた榎とか樫などのやうな巨幹の老樹が路傍に遺つて、その蔭に町家が建つた。大きな根張りの木の下小暗きまでに茂つた樹の蔭に、鮨屋などの暖簾が見えるといふやうなのは、なかなか面白い風情であつたのだが、さういふ老樹も何時の間にか伐り倒されて、道は今のやうな有りふれた電車路になつてしまつた。

『夕じほの切り通し坂をわれ行けばあらあらと車飛ぶなり。これは近きころできたるばかかな會といへるの詠草なりとぞ』

そんなやうな意味のことを、齋藤緑雨が隨筆のなかへ書いたのは、明治三十年ごろなのだから、まだ老樹が路端にあつた時分のことである。今は、吉原通ひも電車か、自動車になつてしまつたので、朦朧車夫の驅けながら出す「あらよ」の掛け聲も聞かれなくなつたであらう。

本郷三丁目から切通しへ向ふ街は北側は昔は俚俗盲長屋といつた本富士町であり、南側は春木町であるが、その春木町は、二三度燒けたと思ふ。中央會堂の燒け殘りの煉瓦の壁のところへ、夜半の月がかゝつてゐるのを、廢墟の月といふやうな氣がして、風情ある眺めだと見て過ぎたことを覺えてゐる。明治十五六年ごろには、中央會堂の西手の横町を入つたところに大弓場があつて、そこでは後に一つ橋の高商の弓の教師になつた窪田藤信（當時は金作）氏などと落ち合つたことを記憶する。その大弓場の主の高木清吉といふのはそのあと下谷の西町へ移つて、射場を開いてゐて、明治三十一、二年ごろ、そこで畫家村田丹陵氏や、今田櫻溪行の理事をしてゐる濱田敬三氏などと一二度

緒に弓を射たことがあつた。何しろ、大弓場といへば家ともに長さ十七、八間に幅二間ぐらゐは要したのであつて、當時では、それだけの地面をばそんなに場末でない部分において、大弓場といふやうな收入の少い商賣に使つたのであるから、その時代の一般の經濟狀態も大抵推定できるであらう。

本郷座は春木座といつた。僕などは何うも今でもツイ昔の名をいつていかぬ。もう七、八年ほど前、或る席でツイ春木座といつてしまふと、座にゐた下谷の老妓にこれは嬉しいといつてひどくほめられた。その春木座も震災までに二度ぐらゐは燒けたらうかと思ふ。昔は大劇場のうちに入つてゐたらしいのだが、中ごろ衰へてゐて、大阪から明治十六、七年ごろ鳥熊といふ芝居師が芝鶴、鯉之丞などといふ役者の一座を連れて來て大入場を廣くし、辨當をひどく安くし、その上に、雨天の日など、客が歸るまでに、客の穿き物を洗つて置くといふやうな新興行法でもつて、ひどい當りを取つた。この興行法は東京の大劇場へまで影響を及ぼしてそれ以後は何處でも大入場を取り擴げたやうであつた。

明治十二、三年ごろは大學の構内には、醫科即ち當時は醫學部といつてゐたのがあつたばかりで、此の舊加賀邸の赤門寄りの方は、茫々たる薄原で、その草の間に、昔の井戸の跡なのであらうが、黑く塗つた木を框にして、危險除けの目印にしてあるのが幾つとなく見えるのが、ひどく寂しく感ぜられた。門を入つて右手寄りには、椿の一杯生えた圓形の小山があつて、冬になると、よく土鳩がかしはの葉を木の間から見せた。其處は加賀騷動のなかの淺尾といふ惡女中を蛇責にして埋めたところだといふ俗傳があつた。けれども、それは古墳の跡らしかつた。十七、八年ごろ發掘したが、石垣のやうなものがあつたのみで、別に何も出て來なかつた。何うもその昔一度發掘したことがあるらしいといふ鑑定であつたとか聞いた。

その時分には、その草原には狐が大分ゐた。夕方など、尾を長く引いた褐色の小犬ぐらゐの奴が、後を見返り〱草のなかへのろ〱と逃げ込んで行くのをよく見かけたものだ。雪の降る前の夜など、ギャア——ギャアといふ厭な不吉なやうな聲を聞いた。狐はコン〱と鳴くとは聞いてゐたのだが、僕の聞いた狐の聲は何時もそのギャア——ギャアばかりであつた。ツイこのごろ讀んだある書には雄狐はコン〱と鳴き、雌狐はギャア——ギャアと鳴くと書いてあつた。それが本當ならば僕は雌狐の聲ばかり聞いたわけになるのだが、何んなものであらうか。

永井荷風君の小說のなかに、昔の御住居で狐狩をするところがあつたと思ふ。確かそのお邸は小石川水道町であつたらうと思ふ。昔は少し廣い邸などには狐などは何處にもゐたらしいのだ。今は郊外でさへ實際狐のゐるお稻荷さんはめつたにないであらう。

大學構内には池寄りの方に雜木や藪などのある小さい小山があつた。上り路が迂回してついてゐるので、螺旋山と呼ばれてゐた。その頂からは、小石川の砲兵工廠の裏手あたりは勿論のこと、神田、日本橋へかけての下町が、隨分遠くまで見渡せるのであつたが、その時分には、下町の方面でも東神田から、濱町邊へかけては、樹木のあるところが餘ほど多かつた。家の屋根とさういふ樹木が錯綜してゐるところが實に心持のいゝ眺めであつた。

震災前までは、濱町あたりにはまだ大きい庭のある邸が遺つてゐた。俗に細川邸といつてゐた大川端の長岡護美子爵邸の塀際の樫の樹のことは荷風君も何かで書いておいでなんだが、

あの外にも、よほど高い築山が青々と塀の上から見えてゐる邸が水天宮の裏手あたりにあつた。箱崎の土州侯の邸も庭が幾分は遺つてゐたらうと思ふ。そんなのが皆、諸所にあつた緑樹とともにあの業火のために無慘に一掃されてしまつたのだから、返らぬこととは知りながら、如何にも惜しいといふ一言は口から洩らさずにはゐられない。

筆はこゝで一轉するわけになるが、僕の少年時分には、大學の赤門前などは、まるで田舎であつた。確かに兼安までは江戸のうちで、それから先きは何うしても宿場といはなければならなかつた。縄暖簾の居酒屋あり、車大工の店あり、小宿屋ありといふ風で、その前をば、汚さを極めた幌かけの危げな車體をば痩せ馬に挽かせたいはゆる圓太郎馬車がガラッ驅けを追つて通るのだから、今の大塚の田舎町よりもなほ田舎びてゐるくらゐであつた。

西片町の臺――そこも茶畑であつた――から眺めると、白山下のところはずつと水田であつて、畦間のはしばみなどの雑木のひよろ／＼と立つてゐる景色が、夕方などは何ともいへずもの淋しく見えた。それらの田の埋立てられた跡が、今の指ケ谷町の蓬莱町から南へかけての街區である。

旅客より觀たる大阪

一

人によつては大阪をひどく〳〵惡くいふのだが、お前は好きか嫌ひかどつちなんだと、或る人からきかれた。大阪に限らず、どんな土地に對してでも、われ〳〵が全くの旅人である限り、好きとか、嫌ひとかいふことを、斷定的に答へることは甚だ困難である。或る土地が全體としていゝとか、惡いとかいふのは、その土地に少しは長く住まひ、その土地および住人に對し多少の利害的關係を持つやうになつてみた上のことでなければ、本當には分らぬことだと思ふ。何處までも傍觀者の位置に立つてゐて、好奇心からのみ物を見るのであつたら、われ〳〵が見慣れてをらぬ物、聞き慣れてをらぬ言葉に對する場合には、好惡の感情を離れて、面白さだけは覺え得られよう。しかし、自分がさういふ風俗に服し、さういふ言葉を使はなければならぬ時になつて、どんな心持になるかは、勿論全く別問題である。だから、天景も、風俗も、人氣もよく〳〵惡くつて、少しも取るところのない土地を除いては、一見して直ぐに嫌ひだなどといふのは早計にして亂暴極まる裁斷といはなければならぬ。

そこで、前置をはしよつて、直ぐ本文にかゝることにするが、大阪は面白いかといはれゝば、僕は聲に應じて、いかにも面白いと思ふと答ふるに躊躇しない。

二

今大阪の印象記やうのものを書くに方つて、大阪を時々東京に比較することが、書いて行く場合に甚しく便利なるを感ずる。

大阪の夏は、東京より暑いといふ人がある。これは僕などには何んともいへない。僕などは木立のある、空地のまだ可なりある山の手にばかり住んでゐて、東京の人家の櫛比してゐる下町がどれ程暑いのか、知らないのだ。東京でも、本當の東京卽ち下町は可なり暑からうと思ふ。殊に震災後のバラックの暑さは非常だと聞いたことがある。大阪の町の方が暑いといつて、東京の者が大阪を嫌ふ理由にすることはできさうもない。

のみならず、また本當の[illegible]へがたい季節でないせゐもあるだらうが、僕の今泊つてゐる梅田附近などは可なり風通しがよくつて、居心地が惡くない。現に夜に入つてなど、櫻橋の大林代理部の角あたりに西向ひに立つてゐると、涼風の肌にとほるのが何ともいへず快い。

涼味をいへば、大江橋の上の夜風を舉げなければならぬ。漣波を刻んで、豐に流れ行く水の上を一杯に吹き渡つて來る冷々とした風が袂に孕むばかり身にあたる心持は、全く夏の淨土とでもいひたい思ひである。あのあたりは、中ノ島の廣場を前に控へ、後からは梅田新道の大街路が貫通して居るので、身邊が如何にも廣濶な感じがして、街頭絕好の納涼地點である。なほあのあたりの風情をいへば、川下に向ふ時、右岸に建て續いてゐる家々の燈影が、如何にも好く〳〵夜景を整へる。これはたゞに、夏の夜ばかりではない。春の夕暮の景致も亦忘れがたい。僕はこの春北濱の旅舍から大阪驛まで夕暮の散策を度々やつたが、橋の上へ來ると、何

時もこの川沿の家々の燈影を眺めて佇立するのであつた。

もう三十年の餘も前のことなんだが、その時分は中ノ島が今のやうに廣くはなかつたのではなからうかと思ふ。それはともあれ、今の公會堂の傍にある神社のあたりかと思はれるんだが、そのあたりが公園になつてゐて、池に噴水が仕掛けてあつた。その公園の右の入口のところに、石作りの橋が——勿論今のあのあたりの橋々に比べてはずつと短い且狹い橋なんだが——南北にかゝつてゐて、その上が、公園へと往來する男女で一杯であつた。大阪の人はよく涼みに出ると聞いてゐたので、その橋上の雜沓は如何にも大阪らしい風情だと思つて、面白く眺めたのであつた。更に又、その時には、女連の男の多いのを面白いと思つたのだ。當時、東京では若い男女の同行することが、町なかでは一寸目に立つやうな一般の習慣であつた。

その公園のあつたところは實際はどの邊であつたのだらうか、中ノ島はそれ以來實際は廣くなつたのであらうか。とにかく、昔の公園のあつたあたりの川は今の堂島川で、大川のやうには廣くなかつたことは確かである。

三

大阪は川の市であり、橋の市であるといふ。なる程、これ程川や溝渠が多く、從つて、これ程大小の橋梁の多い市は日本では外には全く絶無である。東京の隅田川は可なり上流まで舟筏を通ずるけれども、只一筋だけであつて、しかも市のいはゞ片隅だけを流れてをるに過ぎぬのであるから、市に對しては、さう大して運輸の道として用をなしてをらぬと思ふ。その外の堀割に至つては、幅も狹く潮の干滿に連れての水の増減の度がはげしいので、和船でも少し大きいのになれば、とても出入ることはできないやうである。ところが、大阪の方では、堂島川でも、大川でも市の可なり主要部にそうて流れてをり、大小の横堀も大抵は何時も水が滿々と湛へてゐて、舟行の便は十分である。或る夜長堀川にそうてあるいてゐると、くらい水の上で發動機船の音がするので、川のなかを見ると、可なり大きい船がゆる〳〵と下つて行くのが見えた。東京では滿潮時の深川でならば知らず、日本橋あたりの堀川ではとても見られない光景だと思つたことがある。

梅田新道から淀屋橋を渡り、北濱を經て、堺筋を南下する街路が陸上の交通の最も頻繁な要路であるやうに、北濱に沿ひ、土佐堀を經て西流してゐる大川筋が水上での交通の大路であるらしく思へる。こゝはいはゞ、水上の街筋である、繁華な往還である。蝶番の仕掛になつてゐる煙突の曳船が、幾つもの平駄船を曳きながら、橋の下へかゝると、煙突を斜に倒して、橋をくゞるのは、初めて見る眼には、なか〳〵面白い光景である。漕いで下る小さい和船にもさま〴〵な風情があつて興味が少くない。一つの櫓を夫婦で押して行くもの、夫は竿を操り、妻は胴の間で遊んでゐる小兒に注意しながら、楫の方に氣をつけてゐるもの、或ひは、父親と息子らしい十四五の少年との舟人の一組、それに上下の舟の積荷もさま〴〵である。或るものは石炭らしいものを載せて上り、或るものは、西瓜か、冬瓜かと思はるゝ圓い瓜類を滿載して行き、或るものは、中は何とも分らぬ箱を積み、或るものは、檜皮のやうなるものを、或るものは、筵を幾つとなく、又或るものは、菰包みを數十個といふ風で、それ等の人や、舟や、物を引きくるめて、そこに人の世のさまざまな姿が想像されて、川に臨んだ旅舍などでは、欄に近く坐して、川上に往來する船に眺め

入つたことが度々であつた。

一淀屋橋に近いところの南岸には一寸した揚荷場があつて、そこには、いつも二三艘の荷船が繋つてゐる。これは和船としてはやゝ大型のもので、船縁に波除けの板がはめるやうになつてをるのから見て、廣い海へ出る船であるらしいのだが、艫の方には板が屋根のやうに組まれてゐて、船内で家族生活ができるやうになつてゐるのであらう、四つか五つぐらゐの子供が働く大人の後について、よち／＼と船上の板の間をあるいてゐることなどがある。そこでは、同じ船が大抵幾日も續けて碇泊してゐるらしい。詰らぬ興味からではあるが、さういふ船が岸を離れて出て行くところを見たいと思つて、波よけの板がはめられだした後など、餘ほど氣をつけてゐたけれども、つひぞ發船の光景を見たことはなかつた。

陸上のさま／＼な煩はしさからは全く離れて生きて行くやうに、われ／＼の眼には見えるそれ等の人々にも陸上のわれ／＼と同じやうな憂ひや、悲しみがやはりあるのであらうか。いや／＼、あの人々の生活を氣樂なものと見るのは、われ／＼の考へのいたらぬためであるかも知れぬ。たゞ、それが質朴な簡素な生活であることだけは確かであらう。

大阪の川は市の主要部を貫き流れてゐるがために、市民の川へ近づくことも容易である。さういふ川が遊樂のみちに使用せられるのは當然である。船料理は水の善用の一であり、ボート遊びはその二である。祭りの船はその三である。

舟中で盃を擧げるといふ風情を十分に味ふには、大阪の川は水が汚れ過ぎてゐる。そこで、船料理の本旨は夏の夜の涼味にあると思ふ。唯の船遊びの場合もやはりさうで、白晝のない川筋に舟を泛べるのは餘りに風情がなさ過ぎる。モオタア・ボオトをはしらすのも、短艇を漕ぎ廻すのもあの川ではどうしても夜の遊びである。大江橋の北岸の袂や、中ノ島の劒先きにある遊船溜りの、紅燈の一簇は如何にも都市の川らしい、心持のいゝ光景だと思ふ。

屋根船の軒端に提灯を懸け連ねて、緩々した調子の太鼓を打つて通る船は、全く浪花の祭禮といふ氣分のよく現れてゐるものである。これはどうしても大阪の川でなければそぐはないものである。何うしても流れの急な氣のする隅田川などと取り合はせることは、想像もできないものである。

大阪の橋も、はつぎ／＼に洋式のものに架けかへられて行くのであらうから、その附近の家々の建築樣式の變化と共に、昔ながらの風情といふものは全く失はれて行くことゝ思ふ。名高い四つ橋の附近の如き今日では何等の雅致も感ぜられはしない。けれども、周圍の總ての改築が一段落かたづいて、物が一先づ治定してしまへば、そこに又變つた風情が生じて來るであらう。

ピサロのパリの廣街路の繪に、前代の都會生活裏の詩趣の横溢を感じ得る現代人は、新しく變り行く大阪の裡にも、將來の新しい詩趣の萌芽の潜んでゐるのを、洞見するだけに十分敏感であることを疑はない。

四

本所や、深川の口元などでよく見掛けた昔の路次若くは拔け裏といつていゝくらゐの狹い横町の風情は震災後の東京ではもう全く見られなくなつてしまつたが、大阪では、路次のなかや、拔け裏や、裏町などによく見かける千本格子の建て續いてゐるのが、吾々には、如何にも好のいゝものに見える。通路にずつと石を敷き、家の前も石疊か、叩きにした靜まりかへつた長

屋建ての、キチンとした家々は、熱鬧の市の騷ぎをば全く餘所にして、心靜に暮してゐる人々の、一種の場所のやうな氣がして、快き幻影が眼前に髣髴するのを覺える。勿論それは想像だけの話で、それ等の如何にも靜寂さうに見える路次のなかに住む人々の方へも、都會生活の大海の風浪はうち寄せずに置く氣遣ひはないので、如何なる片隅に隱れ住む人々でもそれ〳〵の生活苦は否應なしに分擔させられてゐるには相違ないであらう。それをさうでないと想像するのは餘りに呑氣過ぎる考へなんであらう。梅田あたりで見かけるさういふ路次の家には、か細い腕に親兄弟の生計を支へて行く若い女の一家が住んでをるのかも知れぬ。或ひはまだそれよりもひどく、日々の糧と、少し見好げに着飾るだけの代を得るために、白粉にやつれた顏を塗り隱した女が、闇にまぎれて出入る家がさういふ路次の奧などにあるのかも知れぬ。

又さういふ想像を走せて見ると、白日の下物皆の眠りに入つてゐるやうに見えるそれら路次のなかに、一種佗しい寂しさがあり〳〵と漂つてゐるやうな氣がしてならぬ。

ともあれ、川ならば淀淵ともいひたいやうな交通の大路の行人や車輛の急流から取り殘され、忘れ棄てられた小暗き木蔭の水の淀みとでもいふやうなこれ等の裏路次の風情に、何ともいへぬもの靜かな詩趣のあることは誰にも感ぜられるだらうと思ふ。大阪でも場末の路次や裏町はかうではなく、もつと鄙野な棊つぽい氣分が漲つてゐるのであらう。その點では、東京の山の手の路次のなかなども、同じやうに無雅である。

盛夏から初秋にかけての涼み臺の氣分なども、東京ではもう味はれなくなつてしまつた情趣である。昔のやうな物靜かな裏町といふやうなところがなくなつてしまつたからであらうと思ふ。大阪では、まだ殊に夜になつては人通りの少々なる町が少くない。例せば、今橋の通りなど、煙草屋とか、一寸した骨董めいた陶器を賣る家の、店先のところに出てゐる竹の緣臺に、やゝ年たけた嬶などの少し派手なほどの浴衣がけで、月の光を浴びて、團扇使ひで腰かけてゐるのは、如何にも夏の町らしい風情である。

曾根崎の茶屋町など、餘り大きからぬ家の門口の緣臺に、闇の間を暫時と涼を納れてゐるらしい年たけた仲居と向ひ合つて、白服の若者などが腰を下して、小聲で話し合つてゐる傍近く、座敷歸りらしい若い藝者が朋輩と共に立つて、賑かに語り合つてゐるなども、東京の花街では何處でも見られない如何にも茶屋町らしい情景である。

東京に比べると、大阪の茶屋町の方がずつと多く潤ひがあつて、艶つぽさが強く身に染みるやうな氣がする。南地とか、新町などはそれが當然であるべき理由があると思ふのだが、曾根崎でもやはりさうなのは、一寸不思議な氣がしたけれども、これは多分、家の構造やその他に昔風であつた時代を聯想させるやうな氣分が可なり多く殘つてゐるためではないかと思ふ。

都會では、夏の夜の街の風情がいゝ心持のものであることには、誰も異議はないであらう。僕などは、趣味が舊日本式なせゐでもあらうが、浴衣がけの姿にいふべからざる懷しみを感ずる。浴衣がけは、人間の肉體が解放された形のやうに思はれて、見た目に實に心持がいゝ。男でもさう見えるが、女の場合には殊にさうであるやうな感じがする。夏の夜の賑かな町の散歩では、大阪の方が吾々には心持がいゝかと思ふ。大阪の人々の方が、東京の者よりより多

くそぞろ歩きそのものを樂んでゐるかのやうに見える。東京の者は、買ひ物にしろ、何にしろ、何か用ありげな、油斷のないやうな態度で歩いてゐるかのやうに見える。

福島の町の夜を見に行つたら、或るせまい街の露店の蓆を取り卷いて、若い娘たちが活動役者のブロマイドを一生懸命に選り分けてゐた。さういふ無邪氣な光景は、東京では一寸見られないかも知れぬ。

これは今年の春のことだが、曾根崎の横町を拔けて行くと、ほの暗い町角の近くに薄汚れた服裝の小柄な老人が人を集めて、何か低い聲で話しかけてゐる。そばへ寄つてみると、檻のやうな小さい箱へきつねを入れて、束にしたみくじをさしつけて、きつねがくはへて拔き出す一本を取つて、みくじ判斷をしてゐるらしかつた。古めかしい物さびた氣分が非常に面白いと思つた。それから又、その二三日後の正午過ぎ、堂島の方へと拔けて行く街では、飴屋が太鼓を叩いて唄をうたつてゐたが、東京の町なかなどでは、とても聞かれぬやうなをかしい唄であつた。飴屋は全く無表情でそのをかしい唄を鄙びた節で緩々と唄つてゐるのみであつた。

何といつても、大阪には、昔ながらのものがまだ大分殘つてゐると思ふ。人の心のうちにも、習慣にも同じく古き好きものが多く保存されてをらうと思ふ。震火後殊に何もかも變り、若くは變り行きつゝある東京から時々來る僕には、大阪の古めかしい部分が如何にも懷しくそれに親みを感ずる。僕は大阪が新時代の文化において後れてゐるのから、決していやな印象などは受けはしない。

いや、その新時代の文化なるものに對しても、大阪では一種の飛躍が看取せられる。大阪におけるモダアンなさまざまな物が輕跳浮華に見えたり、半可らしい臭味の感ぜられるやうなのは、この可なり勇敢な飛躍のためではないであらうか。要するに、周圍がくすんでゐるやうに見えるなかでは、さういふ飛躍が不相應に目に立つて、無鐵砲な激進のやうに感ぜられるといふ狀態であらうと思はれる。大阪風の昔のまゝの町家が建ち並んでゐる眞中へ唯つた一軒六七階の洋建築の家を建てたのでは、どうも四邊とそぐはぬ不均齊なヘンなものに見えると同じ理窟である。

東京に負けまい、さういふ焦躁がさまざまな方面に現はれるやうである。さういふ心持は至極道理である。さういふ競爭心があればこそ、東京に優つたものが時々できるのだから、結構ではないか。（昭和二年七月）

煙霞になづみて

一

人に多く觀賞せられるとさうでないとの差違から見て、遇、不遇の別を立てるのであつたら、天景の場合ほどその別の甚しいのは先づないであらう。近い例が當選新八景のなかからも取れると思ふ。

いはゆる木曾川の日本ラインは、木曾川では土田から犬山橋までの流域が巖石の千態萬樣、淸湍の色合、左岸の山々の綠翠、さういふ諸點で一番佳景の場所たることは疑ひないであらう。昔から木曾川で名高いのは、棧と寢覺であるやうなんだが、棧はまだ川幅が狹いし、巖もほんの小區域に限られてゐるのみで、形においても別段大きくもなく奇態でもない。寢覺は川のなかにある疊のやうな大岩といふのが觀どころなだけで、小高くなつてゐるところの小さい宮を圍む松の木立などは何だか後で拵へたもののやうな氣がして、俗なものに見えた。それに第一水の景色といふのが幾らもなかつたやうに記憶してゐる。どうも、いはゆる日本ラインのあたりが一番いゝのだらうと思はれる。下から觀る白帝城の姿もいゝ形であるし、天守の頂邊からの川や野の眺めも廣濶にして爽快である。交通の便はといふと、少々は鐵道幹線からは引込んではゐるけれども、名古屋からも岐阜からも短時間に容易に達し得られるのであるから、今日では決して隱れたる名所ではない。

ところが、氣の毒なのは、土佐の室戸岬である。岬そのものからいつても木の生ひ繁つた大きい嶠岬が海へ向けてヅンと突き出して、その姿がいかにも雄壯であり、岬端をめぐつては、ヅライヴ・ウエーといつていゝくらゐの平かないゝ路がついてゐる。それに、高知からの二十里ほどの路のうち、安藝から先きの海岸の松原や、濱の巖や、幾つもの岬の眺めが實にいゝ。で、さういふ點は申し分ないのだが、困つたことに餘り引込んだところにあり過ぎる。わざわざ見に行くより外にし方のない場所なのだ。神戸から高知までの十二時間の汽船はまだよろしいとする。高知の港——浦戸灣の入口も面白い景色だし、高知市も鏡川の南岸、潮江の堤から市と城を前景にして見る北の山々の眺めはなかなかの佳景である。

けれども、それから室戸岬の一里程手前の室戸町までは乘合自動車に乘るより外はない。小汽船は通つてゐるけれども、あの荒波の海だから、餘程船に強い人でもなければ、海路は思ひも寄らぬ。田舍の乘合自動車の脚も踏み伸ばすこともできないのに乘つて、四時間の餘も行くのだから、土佐の道路が幾らいゝといつても、吾々のやうな煙霞の痼疾ある者ならばともかくもなみ〳〵の遊覽客には一寸堪へられぬことであらうと思ふ。

大阪から兵庫を經て土佐の甲浦まで行く船もある。この船は、阿波のさま〴〵な港へ寄つて行くのだから、その點は面白からうが、時間が大分かゝるのと、船が小さからうと思はれるので、これも並々の人には向きさうにない。それからも一つ、大阪から阿波の小松島へ渡つて、汽車で富岡あたりまで行き、その先きを甲浦まで乘合自動車で行くこともできるといふ。いづれにしても、甲浦は室戸の西十里ほどのと

ところにあるだらうから、甲浦からはまだ二時間の餘も自動車で搖られなければならない。

さういふ風で、室戸岬は結局その岬頭に名高い東寺——四國の札所——があるので、四國遍路の香客にのみよく知られた絶景の地といふに過ぎない譯になるのだ。

しかし、旅行好きの人であつたら、阿波から土佐の高知まで、海岸線をつたつての廻遊は何でもないことであらうから、その途すがら室戸岬を訪ふのは少からぬ興味であらうと思ふ。室戸の町には油屋と外にもう一軒可なりな宿屋がある。

二

京阪に住む人々は羨ましい。日歸りの十分できるところに、佳景の遊びどころが多い。八幡あたりの景色や風情は何ともいへない程いゝ。男山から見下す木津、宇治、桂の三川の流域の水の色、野の色のトオンを異にして錯綜してゐる鮮かな色彩は實に眼が覺めるほど爽快である。關東で同じやうな色調のところを索むれば、下總の香取の宮の裏手、常陸の潮來の稻荷山から見る利根の水澗なのだが、利根の方は廣濶な代りに單調だといつて、それほど賞美せぬ人がある。八幡の方は山城、大和の方の山々で區劃がつき、景象が引締められてゐて、變化があり、纏まりがついてゐる。麗はしいといふ心持のこれくらゐする景色は一寸外にはありさうに思へない。山崎から京都の方へかけての諸村落に燈がついた時の夜の眺めが思ひやられる。

橋本まで堤を歩くのも一興である。堤の内になつてをる池のやうな水に臨んだ家の裏手の繁つた木の下に、はやでもあらうか、羽蟲を追ふらしい小魚の白い腹を見せて、きら〳〵して跳ぶのが見える。夕影のやゝ迫り初めた時分のさういふ光景は、殊に旅人であるところの僕などの胸には、寂しい幽趣の湧然として起つて來るのを禁じ得ない。

それは橋本の裏手であつたが、橋本は人の口からも筆からもあまりに讃美の言葉を聞き過ぎ、又もう少し家などの古びてゐる所のやうに想像してゐたので、それほどに思はなかつた。それに、燈がついたかつかぬかぐらゐの時に去つてしまつたので、あすこの氣分は十分には味へなかつたのであらう。けれども、あの町へすつかり灯がはひつてから後、對岸の山崎あたりの高みから見た風情は可なり好からうと想像せられる。

電車から見ても、枚方の家々の崖の上に建て續いてゐるやうに見られるのは、いかにも面白い變つた眺めである。淀川の堤から湖のやうな水を隔てゝ見える娼樓の夜景はなか〳〵よろしい。郭内を歩いてみたが、格子先の行燈が古い形でいかにも趣きがあつた。なほ全體に寂し味のあるやうな氣分が實にいゝと思つた。人寰を離れた天景は雄大とか廣濶とかいふ點で吾々の心を捉へるのであるが、村落が點景になるやうな靜かな景色には、反つて人生から來る寂味が加はるやうに思へて、又別種の趣きがある。

三

地圖を見さへすれば直分ることなのだが、唯考へただけでは、有馬へ行くには相應に時間がかゝるやうな氣がして、この古くから名高い温泉場を一度は見て置きたいとは思ひながら、つい出かけるのが億劫になつてゐた。ところが、寶塚から自動車で行けば何でもないのであつた。

寶塚までの路では武庫川の岸に沿うて長く續いてゐる松林が實に見事である。門戸より少

し北であつたと思ふが、松林に圍まれた汀に苔の青々としてゐる池のあるところの周圍が、なか／＼いゝ氣分であつた。寶塚のところまで行くと、武庫川も可なり水が多くなつて、左手の翠山と對應して、景趣が可なり好く調つて來る。

寶塚から先き、貸切自動車ならば、捷路を行くのだといふ。生瀨の村は川に臨んでゐて、山間の村らしい寂しみはありながら、さう寒村ではなさそうなところが、いゝ感じを人に與へる。車はやがて綺麗な松山の横腹を行く。登りにはなつてゐるが、路は險阻ではない。對岸の山は粘土の固まつたやうな岩質であるので、谿谷は一面に砥の粉のやうな色の河床で、水は殆ど流れてゐない。しだいに凄味を帶びた異景になつて來る。やがて、左手の溪を隔てた向うの山腹が物凄い程こそげ落ちて、薄い色の赭岩の大絶壁になつてをるのが見え出す。六甲アルプスと稱へてをるのだといふ。この路での最も奇景の場所である。このあたりは山がもう餘程高くなつてをるのであらう、路はところ／＼螺狀をなして登つて行くのらしく、同じ赭岩の絶壁が右手に見えたりする。絶壁はその通り剝落した赭い岩であるが、その上と、も一つ高みの嶺になつてゐる山とに松林の翠が鮮かであるのだから、色の對照がなか／＼美觀である。

有馬は擂鉢の底といふやうな山間の凹所にある温泉場である。家の立て込んでゐるところがいかにも昔ながらの温泉地らしい氣分で、面白いと思ふ。宿屋に内湯のないのも、古い温泉らしくて一興である。

伊豫の道後がやはり宿屋に内湯がない。手拭と石鹸を提げて、別の建物へ湯に入りに行くのもなか／＼面白い氣分のものである。並の錢湯だと時間によつて沸いてゐないことがある譯なのだが、温泉の方は夜が夜中でも何時でも入浴自在であるのだから、そこの心持が餘程違ふのだ。人力を借らずに、どんな時間にも湯が沸いてゐるといふところに、吾々は非常な氣安さを覺えるのだ。

有馬は道後よりも一層せゝこましいし、何となく頽廢したやうな、鄙びた寂しみが漂つてゐるやうに思へる。そこが僕などにはひどく氣にいるところなのだ。

湯が鐵鏽色をなしてゐるのも、いかにもからだにきゝさうに思はれて、結構である。あれがもし夏暑い土地ででもあつたら、あの湯の色は願ひ下げなんだが、幸にして、有馬は非常に涼しい土地なのだから、あの湯の色が少しも苦にならぬと思ふ。逗留客の混み合ふのは八月半月ぐらゐだといふ。七月半ばぐらゐでは、晩方など浴衣一枚では風が冷々し過ぎる程である。

かういふところの秋の寂しみは嘸ぞよからうと思ふ。松茸は豐富であらうし、小鳥も膳に上ぼせられなくはないであらう。

四

油繪畫家はよく何でもないやうな場所で絶好の畫材を捉へるものなのだが、われ／＼と雖も人の別に推賞もせぬやうな場所で、いかにも面白い景致を見つけることがある。

山陽線の有年から少し先きのところは、線路が千種川の河身と平行するやうになつてゐるのだが、そのあたりを通る時、車窓から見ると、河身が眞直に見えて、それへ直角をなして上郡の村が横に長く延びてゐる、詰り川と村とで丁字が書かれてゐるやうな形なのだ。一體に鄙びた田舍らしい氣分がいかにもいゝ心持ちがする。停車場近くなつて見る上郡そのもの、橋を挾んだ村落の姿も面白いと思ふ。

この線路は有年から先きの路ぐらゐまでの

間、用水沼が多い、汀に松林があつたり、神社があつたり、中には松の二三本立つてゐる小さい島のあるのなどもある。それらの沼の水が空の色を映して、周圍の野の緑とは劃然と異つて和かなやゝ薄い藍色を呈してゐるのが、僕などの眼には快く感ぜられる。

須磨、舞子、明石も汽船から見るとそれほどいいとは思はれぬ。あの邊は陸から見る景色がいいのであらう。或る時黄昏のホンの少し前に汽車であの邊を通つたが、ボッと靄のこめたやうなくすんだ全體の色調で、漣さへ立つてをらぬくらゐに思はれるやうな水の上に、泛んでゐる帆船や、和船も少しも動いてゐないやうに見えた沈靜の景色がいひしらぬこゝろよさを心に喚び起した。全く大きい畫に對するやうな心持であつたのだ。關東では何處であつてもあんな心持のする景趣は味へないと思ふ。

宇治は名所なんだから、これを推賞するのは當然すぎる譯なんだが、僕は湧き立つやうに波を立てゝゐるあの宇治川がいかにもいゝと思ふ。直きに去らなければならなかつたので、夕暮に汽車に乘つてしまつたが、車窓から見返つた火のとぼつた宇治の景色は又なくよかつたことは今も忘れ得ない。

鳳凰堂の建築が古雅な美しいものであることはいふまでもないが、備中の吉備津の宮の建築様式が古雅な特異なもので、非常に面白い。その百間廊下と稱する土間へ屋根をした參道も餘程珍しいものだと思ふ。（昭和二年九月）

虚と實

一

猿廻し與次郎はお俊の兄ではないのだが、その名の猿廻しが親孝行で褒美を貰つたのが、お俊傳兵衛の事實と餘り遠からぬ時代の事であつたので、「近頃河原の達引」の作者が、與次郎とお俊を兄弟として潤色したのだといふのだ。

が、併し、事實は作り物ほどの面白さはない。母親が近所の小娘に「鳥邊山」の稽古をし終つたところへ、與次郎が歸つて來、宜い加減な出放題で母親を慰め、それから、お俊を諭して退き狀を書かせて、寢てしまふ。やがて「頃は霜月十四日、月は冴ゆれど、胸の闇」といふので、傳兵衛の出になるといふ風でなければ、少くとも俗衆の興味を惹くには足らないであらう。

此處で一つ斷つて置くが、正月早々何も心中物の話をしなくとも宜かりさうなものだと云ふ人があるかも知れぬけれども、此れは、近頃河原の達引の話であつて、此の淨瑠璃では、お俊傳兵衛は聖護院の森で助かることになつて居るのだ。

所で、此の譃と實との交渉をもう少し考へて見度いと思ふ。

最近に英譯になつたアナトオル・フランスの『紫石英の指輪』の中に左の如き一節がある。

「モシュウ・ルテリイエー曰く――眞理といふものは、それ自身を打克ちがたきものとなし、晩かれ早かれ必ずそれの最後の勝利を保證するところの力をばそれ自身のうちに含んで居るものである。之れが大レナンの確信であつた。そして、さういふ考へは、又近頃になつて青銅に刻んで後世に傳へるに足るべき言葉を以て言ひ表はされた」

「モシュウ・ベルジュレエ曰く――所が、個人として私が考へて居るのは丁度その反對のことである。大抵の場合、眞理は人間の爲めに侮蔑され凌辱されてその犧牲となり、暗瞑の裡に死んでしまひ勝なものであるといふ說を、私は持するものである。之に對する實例は甚だ多い。吾々は、眞理は虛僞に對しては非常に多くの劣つた點を持つて居つて、實際上消滅の運命を辭する能はざるものであることを、忘れてはならぬ。先づ第一に眞理は孤立する。眞理はアベ・ランテェニュ氏が云つた通り、唯一つで立つて居るのみである。ランテェニュ氏はその理由によつて眞理を愛するといふのである。然しさういふ論據を以て、眞理を愛するといふのは駄目である。何となれば、虛僞は複雜多樣であつて、之に對する眞理の戰ひは全く衆寡敵せざるものであるからである。眞理の弱點はたゞにそればかりではない。眞理には動きが無く、變體する能力を持つて居ないのであつて、それ自身を人間の智情に入り込ませることのできるさまざまの仕組に適應し變化することができない。然るに、虛僞の方は最も驚くべき術策に富んで居る。虛僞は撓やかで、何うにでもなるのであり、且つ吾々はこれ位な點は逡巡せずに容認しなければならんのだが、虛僞は自然であり、道義的であり、虛僞は、吾等人間の有らゆるイリュージョンの根源であり本源であるところの吾々五官の働きから生れるものであるから、自然である。人間は、今の如く、共存的生活を營むものであるから、自然の諸現

象に對する最も古い、最も神聖な、最も不合理な、最も高尚な、最も野蠻な、而して最も間違つた解釋を土臺として、人間自身の善悪の諸觀念と、人間的及び神的の諸法律を建てゝ居るのであるが、虛僞はさういふ人間なるものの風俗、習慣によく適合するものであるから、道義的である。虛僞は人間の間で美しいもの、評判の好いものの總てのものの根本である。人間の花園を見るが宜しい、彼等の殿堂を見るが宜しい、彼等の宮殿を見るが宜しい、其等のものは皆翼のある人の形や、神話的な繪で飾られて居るではないか。人間は詩人が語るところの虛言にのみ喜び聽くのである。虛僞を破壞し眞理を求めるなどは飛んでもない考へである。さういふ企畫は澆季的好奇心と罪すべき智力的の大膽とによつてのみ鼓吹され得るものに過ぎない。さういふのは、人間の道義的性本にも社會の諸法則にも背反する企畫である。それは諸國家の諸情操にも諸德にも背反する罪である。さういふ大なる災禍の增大は人間に取つて致命的なものであり得ようと思ふ、若しさういふ方向に事件を急轉直下せしめることが可能であつたとしたら、何も彼も滅茶々々に破壞されて了ふであらう。然し、實際上のこととして、吾々は眞理の進步は極く僅で極く緩徐であつて、虛僞をば極く少しきや浸蝕しないものであることを善く知つて居るのである」

二

「モシュウ・ルテリイエー曰く――君の云ふところは、科學的眞理のことではないのであらう。科學の眞理の進步は急速であり、抵抗し難くあり、且福利を授けるものである」

「モシュウ・ベルジュレェ答へて曰く――所が、不幸にも、平均の普通の人の心に侵入して行くところの科學的眞理は、沼へでも落ちたやうに沈んでしまつて、其處で溺れてしまふことは、疑ひを容れざるところである。科學的眞實は何等人心の興隆を起させず、間違ひと偏見を破壞するには全く無力である。吾々に對しては絕對なる權威を有するところの實驗室の眞理も、一般公衆の心に對しては何等の權威も持たないのだ。私はこれを證明する爲めに、例を唯一つ擧げよう。コペルニカス及びガリレオの說は基督教の哲學とは全く相容れざるものである。然し、佛蘭西それ自身のみならず、世界中で前二者の說は最初等の學校へまでも侵入して居るに拘らず、それが爲めに撲滅さるべき筈であるところの神學的諸觀念は、それが爲めに極めて僅の變更をなさしめられて居るのみに過ぎないではないか、ヨアブ、アマの如き人の諸觀念、お古い猶太――基督教の天地觀、は中世時代の字板の面の繪のやうに無力なものと見えしむるのは確である。然し、アブラアスの諸說殆ど一世紀の間明かに露はされて居るに拘らず、猶太やカルデアの小さい古い傳說の價値はそれが爲めに少しも減ぜられはせずに、それ等の古傳說は今日も尙基督教の宗教的書物の中では見得られるのである。科學は未だ曾て宗教を害したことはない。宗教上の儀式の無用なものであることを幾ら論證したところで、其を行ふ人間の數を減らすことは出來ないのだ。科學的眞理は公衆の心には入り難いものである。何處の國民も皆神話によつて生きて居るのだ。彼等は古傳說から彼等の存在に必要なる總ての觀念を引出すのである。彼等は多くの觀念を要さない。五六の單純なる古い作り話があればそれで數百萬の生を飾るに十分であるのだ。要するに、眞理は人間に對しては何等の把握力をも持つて居ないのだが、それを持つて居ないところがまことに結構であるのだ、何となれば、眞理のやり方なるものは、人間の本性にも利益

にも全く相反するものであるからなのだ」

三

「モシュウ・ベルジュレエ更に曰く――概論すれば私の考へでは吾々が人及び事實に關して持つ知識なるものが、人そのもの若くは成し遂げられたる事實と符合することは極めて稀である。それから、此の符合を得ることができる手段は今のところ不完全であり、不十分である。それから又時代が進むに從つてそれをなし得る新しき方法が現れるにしたところで、さういふ時代の進みはそれが造り出すより以上に多くの物を破壞するのである。ロオラン夫人は、獄中で、非常な確信で、判決を不偏不黨の後世に訴へたのであるが、人間的公正に對するさういふ信頼は、私の考へから見れば、稍小兒らしい考へだと云はなければならぬ。後世は、それが無關心でなければ決して不偏不黨ではないのである。後世は、それの興味を引かなくなつたものは、直に忘れてしまふのである。後世は、ロオラン夫人が好い心持で信じたるがやうには、決して批判者ではないのである、後世は矢張り一個の黨派であつて、他の何の黨派とも同じやうに、盲目であり、驚きに打たれて居り、みじめであり、亂暴であるのだ。後世はそれぞれの好きを持つと共に、各取り別けそれぞれの嫌ひを持つて居る。後世はそれぞれの成心を持つて居る、そして過去のことは何も知らずに、それの現在だけに生きて居るのである。後世などといふものは在るものではないのだ」

「モシュウ・ルテリイエー之に反對して曰く――然し、公正及び修贖の時といふやうなものが來る」

「モシュウ・ベルジュレエ其處で問うて曰く――それではマクベスに對して、公正と修贖の時が曾て來たことがあるのか？」

「モシュウ・ルテイリエー問ふ――マクベスとは？」

「モシュウ・ベルジュレエ曰く――然り、マクベスである、蘇格蘭王フィンレグの息のマクベスのことである。古傳説とシェクスピヤアといふ此二つの大なる力が、マクベスをば罪人にしてしまつたのだ。所が、私は今そのマクベスが非常に善人であることを確信する。彼は貴族の横暴から人民と僧族をば保護した。マクベスは儉約を守つた王であり、公平な裁判者であり、勞働階級の味方であつた。其證據は史上に歴然として存して居る。マクベスは王ダンクンを慘殺しはしなかつた、マクベスの妻は決して惡い女ではなかつた、それはグルオクといふ名で、マルカムの一族に對しては一つの仇恨を持つて居た。グルオクの最初の良人はその持城の中で生きながら燒き殺されたのである。私は今此の机の上に、マクベスが善人であつたことと、その妻の無辜をば、證明し得べき材料の載つて居る英國の雜誌を持つて居る。若し今私が此れ等の證據を公にするとしたらば、マクベスに關する公説を變へることができると、あなたは思ひますか？」

「モシュウ・ルテリイエー曰く――私はさうは思はない」

「モシュウ・ベルジュレエ嘆息して曰く――私もさうは思はない」

四

マクベスのやうな事實の全く反對の實例は我國のものでは今寸舉げかねるのであるが、大袈裟になつて居る例ならば、幾らでも舉げ得られようと思ふ。淨瑠璃と講釋とで名高い伊賀の上野の仇討の如きが、その適例であらうと思ふ。渡邊數馬は父の敵を討つたのではなくして、

弟源太夫の仇河合又五郎を討ち取つたのだ。そして、所謂伊賀の上野の仇討なるものも、講釋などでやるやうなさう多勢の人間の殺されたものでは無いらしく思はれる。今左に手近の書から仇討のところだけを引用してみよう。

「酒肆より窺ひ見れば……前は甚左衛門（櫻井）又五郎、後は半兵衛（櫻井）槍半弓などを持たせて、馬を乘り並べて來る。又右衛門先づ走り出でむとするを、數馬御しづまり候へ、まだ間遠に候、早まりて從卒中に隔ば妨なるべしとて、袖を執へ、五六間ばかりに成たる時、こそと云ひて出る、又右衛門如何に甚左衛門と詞をかけ、拔打に右の股を斬り落す、片足にて左の方へ飛び下りけるが、仆れながら拔合さむとする處を、馬の下をくゞりて、胴を二つになしにけり、思ふ讐なれば、數馬と又五郎とは人をまぜもせず切り結ぶ、又右衛門は二尺七寸の金道の刀鐵棒の如くなるを把さきを握り、片手を以て之を振る、大の男の髯は目の下より頭に生えつゞき繪にかける鍾馗の如くなるが、己等一々撫で斬にするぞと、大聲を勵まして、數馬に近付く者どもを追ひ拂ひたる有樣猛氣壯厲之に嚮ふべきやうもなし、甚左衛門が若黨半弓に矢をつがうて又右衛門を射る、袖を貫いて身に中らず、二の矢を射むとする處を、又右衛門飛びかゝり、横ざまに斬り仆す、又右衛門が手に掛けて當座に斬り殺したる者甚左衛門共に二人、手を負はせたる者三四人、又右衛門が刀鍔下一尺ばかりより折れたる所に、半兵衛十文字を持て進む、又右衛門は折たる刀を右に提げ、左の手を揚げて相向ふ、既に危かりしを、數馬が若黨深手を負ひて絶入りたるが、まゐるといふ聲にや驚きけむ、ふと起あがり、持ちたる刀にて櫻井が右の腕を打落して、若黨は其のまゝ其處に仆れ死す、櫻井が者ども是まで候とて、肩に掛けて引取りければ、其の外甚左衛門、又五郎が從者皆四方に分散す、又右衛門が若黨も斬られて死し、數馬、又五郎、又右衛門三人のみ殘れり、又右衛門聲を掛けて、數馬よくせよ、其方息のかゝらむ間は助太刀は打たぬぞ、一人の力にて思ふ讐を討ちすませよと云ひ／＼力を添へにけり、數馬又五郎共に疲れて、いざ暫し休みて勝負を決せむ、尤もとて、石に腰をかけて息を繼ぐ、其後立向ひて又切結ぶ、又右衛門傍より、數馬上太刀になりたるぞと大聲に呼んで勇め立れば數馬競に乘つて、遂に又五郎を斬り伏せ、押付けて止めを刺す、數馬も薄手二箇所を負ひぬ、初めの酒肆に入つて戸を閉ぢたる處に上野の士一騎に驅け着ける、又右衛門戸を少し開きて、其首尾を言ふに顏色平生の如し、此の由を忠雄の嗣松平相模守光仲に達し、二士の迎ひとして、騎士二十人、足輕百人伏見に到れば、藤堂大學頭も騎士二十人、足輕百人にて伏見まで送られたり、横川治太夫は光仲の足輕頭なれば此事を裁判す、二士は先づ曉籠に乘せて横川と共に下る、日出る頃川船を飾り、陸には鐵砲に火繩を挾み行人を拂ひて嚴重たり、恙なく因幡の鳥取に着きて光仲二士に祿千石を與へ、其宅地を稠く守りて、外に出づる事を許さず……」

此記述は備前の士熊澤淡庵（猪太夫）の筆になるものであるし、且仇討の時代をさう遠く離れた時代に書かれたものでは無いのだから、先づ事實に最も近いものと見たければなるまいと思ふのだが、芝居や、講釋の愛好者は斯ういふ飾り氣の少い記述では滿足しまいと思ふ。

薄命記

蟬羽子を弔ふ

三日風流

うすむらさき

スミルナの花

ル、サントオル

ロオリイの生家

平田禿木

薄命記

人の笑ふも我をかしからず、人の泣くも我悲しからず、さるにても我心冷なるにあらず、幽泉胸底に湧きて、香風膚を吹く、彼のをかしきもの、悲しきもの、にくきもの、さわがしきもの、折々襲ひ來て、我靜なる心の流を亂さむとす、をかしきはをかしきに笑ふなるべく、悲しきは悲しきに泣くなるべし、さらばそれもよしや、世は昔よりをかしければ、世はむかしより悲しければ。

一生は果敢なき夢なり、いみじき迷なり、あはれ我眞紅の血をもて、洞壁に染めたりし幻影の、拭しにはゑがき、ゑがきては拭し、はかなきたはぶれの業して、顧ればば昔の幻今の幻にあらず、染めたりし血の今更に消し去るべくもあらず、人の心に野心の火あり、血愈々湧きて火愈々熱く、こゝに身を燒き魂を溺らせずんばやまず。

行く、河の流は去ってかへらず、こゝに果敢なきほまれをとゞめて、墓邊の幽花影ばかりのかをりを添ふ、才はアポロのみたちに輝き、歌はエオリアンの曲を奪ふ、彼の薄倖多恨の詩人キーツの如き、豈この血と火の間に身をおきて、花の如き天才を燒き盡したるにあらずとせむ、春夜雨の音靜なるを聽き、燈火をかゝげてエンディミオンを讀めば、幽草風にゆらぎて露香溢るゝばかりに、かすかなる草間の流に影をうつしては、我を追ふ天地の悲哀に痩せたる如く、誰かこのアドオネーを想うて、其才の美しく、其運の拙きを嘆かざらむ。まことに其詩を見れば、靜なること秋の水の如く、美しきことヴェネシアンが畫像を見るが如し、而も其一生を見れば慘々として殆ど語るに堪へざらむとす、アルビオンの詩神が壇に桂の冠とらむことを想うては、野心の焰愈々熱し來り、これとともにウェントウァースに心にとめし幻影の去るべくもあらず、あはれ一生は果敢なき夢なり、いみじき迷なり、たゞその目あてなるは、眞珠の霧中に燦ゆる光芒、孤燭金色の羽をひるがへしては、秋風の寒きにもひるまず、されどアヴォンの楊柳長に青く、ワイトの愁は年とともに艶なり、さもあらばあれ彼の才のわかく、運の拙きもの末の世に生れて、花の如きかよわき心には、春の雨のしめやかなるをも愁ふ。

頃は耶蘇降誕千八百二十年九月十八日、秋風病める袂を吹きてそゞろ寒く、永く故國を辭してイタリアに向ふ、まことアルペンの風の冷に、なほ夕空の雲の麗なるにあくがれて、露の香こぼるゝかしこの花に醉はむとにや、ナポリにつきしは十月の末なるべし、ピサの都にありしシェレーはあつき文寄せて、共に其薄命の運を分たむとせしも、そこには行かず、羅馬に來りてトリニタ、デル、モントのふもとなる茅舍に入る、病魔愈々痩骨を襲うて、翌千八百二十一年二月二十四日曉の空に、この多恨の生は終りぬ。

芥子の花影に笛の音悲しくきゝし幼き昔より、我生は早く孤獨なるに似たり、美しき空想に欺かれ、あやしき夢にだまされて、

おぼつかなくも迷の途をたどり來れば、愈々人間の心の冷に、世の情のうすきに驚く、親といふも空しき名のみ、はらからといひ友といふもあだなる名のみ、我世を去りて後誰か我一生の心のうちに、をかしかりし事悲しかりし事を語り傳へむ、世に我を知るものしなければ、我はむしろ彼の冷酷なるドラマティストの筆にかゝりて、我心の弱きところ、みにくきところ、笑ふべきところの悉く暴露され、我名を地獄の火に焼きて、其傲慢なる筆先に罵り倒されむこそよけれ、足を峻坂に立つ、落つるところに落ちざればやまず、舟を中流に浮ぶ、下るところに下らざればやまず、たゞ我をこゝにつなぐもの、はかなき一條の絲に似たり、かすかなるこの眞紅の絲は我心をかけて、冷熱の間にたゞよはしむ、ひとたびこの絲の斷たれむか、巉巖千丈、急流直下、落つるところを知らず、行くところを知らず、をかしくも亦悲しからずや。半夜雨蕭々として孤燈寒く、この薄倖の詩人が愛人に寄するの文を讀む、涙痕未だかわかず早く我袂を濕す、人間の心の弱きと、果敢なきと愚なると、誰かこれを笑はざらむ、嗚呼誰かこのアドオネーの魂を羅馬の客舍に奪ひし、筆をとりてこれを描き我言葉にうつさむとすれば、文字血に動きて我に戀あるの想あらしむ。

其一

今日少しばかり歌うつさむとて、机に向ひたれど、心は堪へ難きまでになやみて、筆すゝみがたく、御もとへといさゝか認むれば、せめて暫しの間君を忘るゝを得むふしと、おして筆とり候ひぬ。今我心に思ふこと何物もあらず。我一生の曉のいともおぼつかなきを思ひて、我忘れよと君にすゝめしは昔なりけり。まこと我戀は我を愚とやなしたりけむ、世に君なくてながらふを得べきや、たゞ又君と相見む折を思うて、何事も心につかず。我生はこゝにやみ、我にはこれより外何物も見えず、我身も魂も君が心にひきよせらるゝ心地して、我は今何とはなしにとけゆくやうに思はれ候。我は今にも君を見む望なくば、悲しきに堪へ難く、遠き旅路に別れゆく心地いたし候。君が心のいつも變らぬにや、はたさる事もあるにや、我戀の今はてしも知れぬやう思はれ候。

今君が文手にいたし候ひぬ、君と離れてかくばかりうれしき事のあるべき、眞珠の飾手にしたるよりゆたかにも覺え候。たはむれにも我につらくし給ふな。我はむかし宗教のために人々の命捨つるを見て驚きぬ、げにおそれをのゝきぬ。今こそ知りつれ、我は我宗教のために命捨つるを得べし、戀は我宗教なり、そがために我は死すべく、君がために我は死すべし。げに堪へ難きまでに我心たゞよはし給ふ君の心にくさよ。されど君見むまでは堪へ得べしと我は思ひぬ。否別れての後も、我は我心の道理をかき起して、我戀の道理と戰ひし事あり、今は苦しさにそれをもなし得ぬやう思はれ候。我戀の愚なる事よ、君なくて片時もながらふを得べきや。

其二

今日朝より頭いたくなやみ、思ひは千々に亂れて何をいはむよしを知らず、かく苦しみのうちにとぢられても、御もとに文したゝめむは、心すが〳〵しく、よその遊びにふけるにまして我心たのしく覺え候、我心はきはみなきまで君を戀しぬ。君がやさしき姿を心に浮べて、

絶え間もなきを思ひ給へ、朝には君の來給ふけはひして、夕には我窓に君の立ち給ふおもひをなす。我はかつて眼に見し事を心にゑがきて、絶ゆる間もなし。我心たのしききはにあれば、我はうれしき苦しみのうちにあり、我心うたてききはにあれば、我は悲しき苦しみのうちにあり。

我なす事いふ事君につらしと怨じ給ふ。まこと我も君が心なやませしをいたく悔ゆる時あり。ゆるし給へ、こは皆我感情の鋭きよりなす心なき業なるを、こは皆我罪なり。かばかりの心なく、我知らず〳〵なせしと信ずるを得ば、我はいと誠ある罪人にてあるべく候。君が文に彼の言の葉だになかりせば、我はさらさら疑ひの心を捨てゝ、身も魂も一つになり得べしと思はれ候。我君を捨つるを得べしと君思ひ給ふにや、我如何に我を思ひ、また如何に君を思ふかは、君知り給ふべし、されば我より君を捨てむ事の、いかばかり苦しきかを思ひ給へ。

我友の君をそしるといふ。我は其人々を知らざるにあらず、まこと其輩の明にならむには、我は固より友とは思はざるべく、否知り人とも思はず候。我友の多く何事につけても心を盡しくるれど、たゞこの事のみは我爲す事をさぐり、我爲す事を笑うて、我死すとも明かさずと定めし心の秘密をあばかむとす。こをゆるせよと我はいひ得ず、我は再び其人々を見むともせざるべしと思ひ候。もし我をばうはさの種とし笑はむとならば、我は固より其仲間を脱すべきのみ、我等が戀のあやしき鏡にうつされて、かゝる輩の觀物とせられむこと、如何にはづかしき事ならずや。たゞ世にひとり、たとへば再び君を見ぬとも、必ずや心の記念と永く君を忘れぬもののあるを思ひ給はゞ、それ等のそしりもさら〳〵心にかけ給ふな。我になみならぬ情ありといつはりて、今は我を惡むべきわけある二三の人々を我たしかに知りぬ、折あらば君に告ぐる時あるべく候。これ等の人々はたゞ君を好まず、君が美しきをそねみて我を永く君より離さむとし、つとめて君より遠ざけむとするなるべし。人の心は果敢なきものなり。これ等に心とゞめ給ふな。たゞ我を想ひ給へ。君が心よろづを捨てゝ我にのみあらば、生きてこの世にあらむこと、如何ばかり樂しかるべき、死するもさまで苦しからずと思はれ候。我は靈魂の滅びざるを信ぜむとす、君と永く別れむことの如何ばかり苦しきを思へば。君とたのしまむこと、たゞこの世にのみありと思へば、いとも長き生涯もまた短夜の夢にすぎず、我は靈魂の滅びざるを信ぜむとす、たゞ永く君とあらむことを願へば。我名そしる彼の輩の言きゝ給ふな。我世に出でてたゞ君を[illegible]するより外爲す事なき身なりとも、そは早や我名の聖く、これ等の人々の口にすべきものたらぬに足る。我もし君につらき事あらば、我[illegible]はつゝきにまされりと思ひ給へ。彼はたゞつかの間にして、これは幾世の後までもかはらぬものたれば。もし我に心ゆるし給ふこと君をけがすとあらば、我君を想ふ時、我心の如何にひくく、つゆばかりの傲りもなき事を思ひ給へ。我人の前にて君が名をいはざるべく、君も亦必ず我名口にし給ふな、彼の人々の我を好かぬと思はれ候。

この文を見て君の我見たしと思ひ給ふや。我は病も快く今は早や歩むをも得べけれど、我はそをなし得じ、再び君と別れむことの如何ばかりつらきを思へば。まこと君と相見む事の如何にや。我病の快けれど、まだ君と逢ふほどにあらぬを思ひ給へ。我身君が傍にあることのあらば、また君の傍を去らねばならぬ時あるにや。

君がはじめての文想ふ時、我はうれしともら

れしき思ひいたし候。君が身も魂も我上にのみありと思へば、我如何ばかり樂しく暮すを得べき。我君につらしと思はど、よく〳〵思ひかへして我心の奥を察し給へ、我戀は眞理のかざりなきよりまことに、眞理の幼きよりもかざりなきなり、こはかつて君に告げしところに候。我いかで君につらきを得べき、つらきもつらき心にはあらず、たゞ我心の――これも皆我心のおちぶれ果てたる故と思ひ給へ、いとも美しき我心の人よ、かゝる賤しき我を信じ給ふた、我は我病を忍ぶごとく、つとめて我戀のまことなるを信ずべく候。

其三

君なくて我世樂しからむすべもがな。我思ひは日々君の上にのみつどひ來りて、何物も味なきやうに思はれ候、我イタリアにゆかむ事もほと〳〵おぼつかなく候、まこと君のもとの去り難く、ひとたびは共に住まむ折のめぐり來ざれば、我は片時も世にあり難き心地す。されば我このさまにて旅立たむことかたく候、君の如きすくよかなる人には、かゝる恐れもあらざるべけれど。

君が友と共に避け給ふといふは何れの島にや。もしたゞ君ひとりとのみゆかば、樂しかるべけれど、數多の人に伴ふは我好まぬところに候。そこに新しく移らむ人々の、自らを喜ばすより外何をも知らず、その爭ひねたみのうちに、我いかで堪へ得べきや。ディルク子はきのふこゝに訪ひ來り候、樂しき物語もせで、たゞ苦しき事數多我に與へて立ち去り候。彼のエルムの庵とウエントウワースにて相見し人々と交はらむは、早や我堪へ得ぬ事に候。あはれこの二歲、我世は味なきやうなり。君と住む事のかなはずば、我はむしろ獨りにてあらむこそよけれ。

かく君と離れて、我身すくよかになるべしとも思はれず、されど我は必ず君と見ゆる事をせじ、折々微なる光のもれて、我再び暗きに沈まむは堪へ得ぬところに候。きのふ君と逢ひたらむには、我今の苦しみは如何ばかりなるべき。君と世に樂しくあらむこと、とてもかなふべきならず、こは我より幸よき運に生れたる人の事なるべく、我世に絕えてあり得べき事たらず。

御文の一節こゝに封じ入れ、御かへし申し候。こはいさゝか改め給ふを願ふになむ。うべなひ給はゞ、やゝあたゝかき御言の葉の願はしく候。

我身堪へ得れば、今心に浮びし一小詩をものしたく思ひをり候。こは今の我如き心のものには、いとゞ慰めともなりぬべく候。我は君の如く心のまゝに住める人をば戀せし、我のやうなる男を示すべく候。尼寺にこそゆけ、さらばさらばとオヘリアに叫びし、彼のハムレットの心のうちこそ、げに我如き數多の悲しみに滿ちたらめ。我は萬事を打捨てむと思ふ。我はむしろ死なむと思ふ。我は君がほゝゑむこのいやしき世界に飽きたり、我は男を惡み、更に女を惡む。我行末に横はるものは、たゞいばらの草村あるのみ。この冬我は何れにかあるべき。イタリアにゆかむか。そも知らず。たゞ彼のきたなき心もてるブラウンの如きもの、常に君に近くあらむことのにくさ。我に何れにやすらはむ望あるなし。羅馬にゆくと思ひ給へ。されば終日そこの街路を走りて、幻の鏡のうちに君が姿を追ふべし。人間の誠のつゆばかりも我心にしみよ、げに我にはこれも澄み得ず。世のいやしく、けがらはしき事よ。彼の媒あるこそせめてもの恩なれ。我はそこにゆくまで、すこしもやすみあらず。我は早やディルクをもブラウンをも、顏をも見ざるべし。我は常に誠

ある程が陵にいだかれむ事を思ふ、しからずば今雷のとゞろき落ちて、我身微塵にくだき捨てよ――さらば。

薄命は柳葉の落つるが如く、冷暗流水の行くに隨ひ、半生の幽思オノリアンの破壁ににほふ、春瘠せて曉寒く、ひとりこの愁雲煙雨のあとを見れば、悲愁我に迫りて銷魂の想あらしむ、まことに、生はあやしき幻の鏡に似たり、導火ひとたび迷宮を照らせば、萬象一時に湧き來りて、我を襲ひ我血を亂して、しかも彼の冷に笑ふもの、あやしく罵るもの、高く叫ぶもの、苦しく泣くもの、瘠顔露骨手をのべて、我に無盡の毒をすゝめむとす、沈痛エルテルの如きもの亦たこれに敗れたり。たゞ冷傲マンフレッドの如きもの、寂夜巖頭に愁鬼を呼び出して、激流と其氣の慘なるを爭はむとす、彼の朝に愁ひの夢よりさめては、ビナナが手にいかれて、柳影に哀れなる歌きかむ事を想ひ、夕に、葉の桂を折りては、ハフィアンの白鳩をかりて、ダイアンのみそでにすがらむとするもの、彼は肉瘠せ髮柔かに、姿窶れなる野の牧童に似たり、草に臥しては露の冷なるをうれひ、花をかざしては我衣の破れたるをなげく、心に湧く泉はわづかに夕暮の風にゆらぎて、幽香波をたゞよはすが如く、こゝにもあやしき導火は燃ゆべし、あはれ彼のをかしく笑ふもの、悲しく泣くもの、にくきもの、さわがしきもの、こゝに來りて何事をなす、はかなき運命のたはぶれならずや。

（明治二十七年）

蟬羽子を弔ふ

春の夜の雨しめやかなるに、ひとりことくにの詩人が恨みを想ひて、薄命の記をつくりしその筆未だかわかず、われは我友を弔ふの不幸に逢ふ。露をくみ風に吟じ、蟬の羽のかろく江湖にさすらひしもの、一朝斷續の聲を遺して、孤清の姿を葉がくれのけぶりにかくす、悲哉。

蟬羽子北村透谷君、君が清高の音なほわが耳にあり。君が獨苦の姿なほ我眼にあり。あはれ死といふもののあやしき、われは君が逝きしをまこととも思へず。君なきをまこととも思へず。悲壯君が如きもの、死して何ぞ靜なる、激切君が如きもの、死して何ぞ寂たる。されど勁踏の氣はなほ君が眉宇に溢る。沈痛の氣はなほ君が眉宇に溢る。死といふもののあやしき、われは君なきをまこととも思へず。

去年夏七月、ともに携へて青山流水の間に嘯ぶ。時に無聲は袋を負ひ、破杖にすがりて青山のほとりに漂ふ。東西日を期して富嶽のもとに會す。須磨の浦風に吹かれ、芳野の花の下に迷ひし無聲がもの語りに、われ等は共に武陵塵中の哀れを告げて、痛飲夜を徹すること二日、悲喜こもごも大笑のうちに投ず。蟬羽子醉ふて笈中の一曲を讀む。これそのつくるところの惡夢の一篇なり。起つて袖を振つてオフェリアの一曲を歌ふ。凄婉の聲なほわが耳にあり。俯して狂公子が獨語を誦す。沈鬱の音なほ我胸を去らず。

かくて蒼梧洞も來り會し、沼津より車をやとひ、馬を驅つて函嶺に向ふ。道崎嶇として石を轉ずるが如く、蟬羽子單衣破笠、起つて自ら鞭を取る。青山流水馳するが如く、四個快哉を叫びて三島に到り、酒を酌んで更に山に登る。ゆくこと幾仭、山茫々として草なく水なし。蟬羽子佇立久しく西方を望む。默して語なし。既にして曰く、我も亦瞬時の詩人たるを得たりと。笑つて更に道を追ふ。黃昏湖畔の破宿に投ず。

蘆の湖は沈々たり。月は破雲にかくれて、凄光僅に崖頭の孤松にかゝる。湖上朦朧として煙の如く、滿目の靜寂身は幻境にあるものの如し。四個相顧みて語なし。稍久うして蟬羽子僅に口を開きて曰く、人生何ぞ悲涙多き、わが半生何ぞ慘々たると。かくて暴雨の前の花のいろ、蛛網のかすかなるよりも果敢なき人の心を悲しみては、往時を語り、今昔を想ひ、嗚呼誰か我死後に我一生の悲涙を傳へむと。四個相顧みて語なし。凄々たるその貌、沈々たるその語、なほ我が胸奧に刻むものあり。

翌、蟬羽子袂を分ちてひとり奧羽の山河に向ふ。秋、かへりて湘南の一江村に退き、一家ともに靜に其心を養ふ。時に京にいでて相往來す。一日透谷橋畔の家に君を見る。君曰く、大濤怒り激浪躍るにあらずや。人間何ぞ獨り靜なるを得むと。また語をつぎて、誰か我一生の悲しき事を傳ふるものぞといふ。この時蘇峰氏の囑によりて、エマーソンが傳を編まむとす。蝶の歌をつくる前後三篇、悲凄々人の心を襲ふ。これ終焉の作となる、悲しからずや。

無聲が長途の旅よりかへるや、われは北郊の一村亭にあり。一日蒼梧洞を訪ふ、蟬羽子あり。三個ともいでて我庵に向ふ。天王寺の塔

夕陽に映るを見・愛護精舎の前をよぎり、いて一破亭に酌む、蟬羽子の曰く、何等の清遊、われは世の破れざるが故に我心を破るを恨むと。既にして曰く、悟るといふ事が氣にくはぬ。迷ふならば飽くまで迷ふにしかない、尊氏のやうなもの、光秀のやうなもの、なぜ一生の終りにこの悟りといふものに欺された。清盛のやうに、將門のやうに、なぜに迷ひ盡さぬのである。嗚呼この語われに終焉の辭となる、慘ならずや。

かくて夕暮に、手を携へて小西湖畔に到る、柳葉枯れ落ちて影を止めず、廢荷凋殘淒風寒し。ともに語をひそめて世途の崢嶸を語る。車に駕して江戸橋畔に袂を分たむとす。蟬羽・燈影に我を顧みて、佇立久うす。われ又これより蟬羽子を見ず。

嗚呼人間の孤獨なる、その悲涙と熱血を荷うて、自ら淒慘の淵に逝かざるべからざるか。蟬羽子、君に妻あり、君に兒あり、君に友あり。なほ獨り自らその悲涙を負うて、逝くべき處に逝かざるべからざるか。なほ獨り自らその熱血を沸かして、落つべき處に落ちざるべからざるか。二十六年五月十五日、夜深くして臥床人なし。月光朦朧破窓を洩る。蟬羽子獨り庵をいでて何れにかゆきし。綠樹陰晴く早や夏蟲の聲かすかに、君が心をさそふものありしか。君が燈火の如き眸をかきたてゝ、遙かに嫦娥の光を追ひつゝ、幽林の間かしこにさすらひ、こゝにさまよひしならめ。かくて月は西へ〳〵と落ちて、寂として其光の消えし一刹那、曉の風寒く君が脊骨を吹きて、露冷に君が病の袂に落ちし時、君が半生の悲涙と熱血は如何なる狂ひをわかしけむ、眠るが如くにしてこの悲慘の一生は終りぬ。嗚呼勁猾の氣はなほ君が眉宇に溢る。沈痛の氣はなほ君が眉宇に溢る。われは君なきを眞とも思へず。こえて十七日、族子知友相會し、香煙の裊々たるなく、讀經の寂々たるなく、魂は白金瑞松禪寺の清風に葬られぬ。

氣君の如き、かつて劍を按じて起ちしといへり。情君の如き、かつて飛蛾をころさずといへり。想を功名に寄せて得ず、筆を騷壇にたてゝ果さず、いたづらに薄倖の名を江湖にとゞむ。コンコードの聖者が傳の如き、僅に蘇峰氏が平生の眷顧に報いしのみ、去年病中に稿を脫す。梓に上りて僅に半月、未だ卷を手にするに暇あらず、早くこの不幸に逢ふ。かつて鎌倉に遊び、凡ての秋の悲を想ひて、一新哀詩をものせむとす、果さず。又身をさゝげて劇部に投ぜむとするの志あり。五幕十餘齣の戯曲を成さむとす、悪夢は其一なり。病中の稿、斷篇の今庵中に遺るありといふ。

三日風流

一嚢の書を負うて西東にさまよふもの、心ばかりの廬をかふること去歳より凡そ幾たび、かしこも宿ならず、こゝも宿ならず、身愈々閑にして心いよ〳〵亂れゆくに、しかじ、暫し身を青山の彼方に寄するにと、親しきかぎりの友にも仔細らしく別れを告げて、家を出でしは七月十七日、早う歸りませ、いえ遲くなるかも知れませぬ、夏はどこも暑きなればと、蚊帳のうちより我を送る姉の面の、愁はし氣なるを心にかけて、都は魂の祭も終へたる、その翌くる日の曉なりけり。

家を出でてよりまだ幾日ならぬに、早や一月もへだたりたるやうに、歸心哀れに身をさそふぞあやしき。初めての夜は今市の破驛に、木賃のやうなる宿にて明しぬ。日光澤より湧き出づるといふ、あやしきよび湯など立てゝ、今日は舊暦こゝの祇園の祭と賑ふもをかしく、清水流るゝ泉水を繞りて、我を庵のやうなる室に通し、やがて其室にも入りて歸るに、隣室の客四五人、泥醉亂舞、無禮なるさましてそこに侍る歌ひ女の三味線はやし、かしましきこと見せ物の呼び太鼓に異ならず。これもをかしと宿かふることもせず。さすがに堪へねば宿のものの部屋に逃りて、くたびれし脚をあやしき床にやすむれば、窓は破れて雨戸もなく、月影くもるともなく泉水にうつり、心はこゝろを映して夢結び憂く、身は夜もすがら蚊にせめられ、幻のやうにくさ〴〵のこと思ひ明しぬ。

蕉翁一代集、七部集、單衣一枚、足袋一足、旅指應のものを收めし行李一つは、汽車に託して先に立たせ、我獨り身輕になりて、こゝの宿はづれにて竹子笠求め、下駄を草鞋になして鬼怒川の流を渡る。路傍に咲く草花は、紫にあやしう朧ろげなるが多く、山梔子花のうす紅に優らしきをまれに見る。幾百年を經たりしと覺しき杉並木を行くこと凡そ一里餘、この間逢ふものは荷馬のたど〳〵しきと、菅笠かぶり箒負ふ野人の姿とのみ。姉妹とも覺しき二人の少女の、手拭かぶり赤きたすきかけて、路傍の草刈れるは哀れなりき。豐岡といふところ村役場あり、旅籠屋あり、絲とる車の音も賑やかなれば、我そこに寄りて道の程たづぬるに、凡そこのあたりの女言葉つきをかしく情こもれり。

ゆきゆくに河原忽ち開けて一望際なく、幾千の小松遠く連りて翠洗ふが如く、小石砂地の瀬は枯れてからくも水の流れゆく。顧みれば樵村煙遠く、過ぎ來し山々は碧雲にかくれて、新に架せられしと覺しき長橋を得々として我獨り渡れば、眼はさむるが如く心はぬぐふが如し。夜來の愁は何れにか去りし。遙に一景を迎ふれば幻の如く、遠く一景を送れば夢の如し。凡そこの夢幻の境を前後におきて、こゝに立つ人間もあやしき限りなるべしなど、下らぬこと思うて傍らなる老婆の掛茶屋に冷水一杯を求む。この向うの草深き岡に大日如來様がござりまして、大層あらたかな如來様で、小石一つでも持つて來れば、このあたりが大暴れでござります、今は旅人なども景の好きまゝに行きますなどいふをきゝ、徜徉れ〳〵と青松白砂の間を眺め、心ばかりを與へて立ち去るに、十歳ばかりの童子の重たげに酒樽荷ひゆくに逢ふ。これより谷川の音を耳になして、進むこと凡そ一町餘、近づくまゝに響いよ〳〵涼々、家あり橋あり、みな新に清けなり。見れば碧潭

岩に碎けて珠を飛ばし、流れては碎け、碎けては流れ、一派長く遙に河原の彼方に注げば、前に見し松も白砂も遠くほの見ゆるに、此方は前岸の蒼壁峭としてけづれるが如く、中流危巖あり、幾樹の痩松嶮崖に生ひて、清勁の姿掬すべく、我橋上にありて想を幾尋の深潭にひそめ立つこと稍久し。こゝを中岩といふ。これより山漸く深く行く人に逢はず。登りては老樹影暗く、蟬の聲のみ淋しくきゝなされ、下りては溪流の音なつかしくきゝて、漸く高徳といふに到る。樓あり高く、屋あり小ならず。會津屋、柏屋などみな農をもて旅籠をかぬ。こゝは今市より會津への街道なれば、自ら山間の一宿をなせしなるべし。道稍平に麓の野は遠く山を負ふの村を望み、路傍の孤松葉は瘠せて、草に咲ける花も哀れなり。大原を過ぎて山更に深く樹漸く繁く、鬼怒川の流滔々たるをつたひて進みゆくに、對岸數屋の破れ家軒をならべしを見る。やゝ行きて茶店のやうなるに休みて問へば、こゝが藤原の溫泉にて、向ひに見えしが瀧溫泉といふなりときゝ、如何に山中の僻地なればとて、宿もなきやうなるこゝのさま、破れたる屋上には小石をのせて風雨をふせぎ、夜のものの清げならぬがほされたるなど、さすがに淋しき思をなしぬ。早や晝なれば支度を賴み、玆へらるゝまゝ危き崖をつたひて下りゆくこと凡そ一二町、岩石の間さゝやかなる湯壺あるに數里の汗をながし、谷の清水に髮をひたして塵を洗ひ、尙湧き出づる透泉に身を浴して、眼をねぶれば溪流響き雷の如く、見あぐれば懸崖幾丈落つるばかりにもの凄く、まことに我造化の兒、創めてこの世に出でし想ひして、日頃俗界の亂麻を罵る秋骨子など、こゝに來らば定めて喜ぶことあらむと、都の友を想ふもをかし。一風呂浴びては粗食もうまく、澁茶に二椀を傾けて、こゝの扱ひぶりの質樸なるに、我も心よりうれしく禮いうて去りぬ。これよりは山愈々深く、栗、櫻などの大樹生ひ茂り、老鶯聲自ら寂びて、雲雀の歌ふも淋しく、路はうね〳〵と曲りて幾轉又幾轉、九曲森は流をかくして響のみを傳へ、岩一々奇ならざるはなけれど、行けどもゆけども路はおなじく、飽きて飽きて堪らぬ程ほど飽きて、清水を掬しては漸くに憂さを慰め、想ひも稍落ち目になりて、辛くをかしからぬことなど胸に浮び來るに、彼方の岩角の白堊のやうにしろきを毀ち、切り開かれて人の通ふべきところ、墨にて旅人の名など記されたるもをかしく、そこを曲りて暫しゆき、眉寄しく闘嶺にて、愛らしげなる小童の菅笠かぶりたるに、小馬の上より今は何時とゝはれたるはうれしかりき。それより同じ路を二里餘も歩みて、流に車しかけて米搗く音をかしく、鷄犬の聲も淋しき農家兩三、一群の兒童にさへ逢へるにこゝ高原の村と嬉しく、また〳〵歩みて、流愈々急にして崖のいよ〳〵奇しく、路の窮りたるらしきところに橋あり。橋は名にきゝし追欄橋か、流は小鹿川なるべし、里は川治と對岸に見ゆる二層の樓を當に渡りゆきて、さてその山田屋といふ半農半宿の家にやどりぬ。

日は稍暮れかゝりて、日ぐらしの聲もいとど淋しく、犬の遠く吠ゆるもあやしき山鳥の音にやとうら悲しく、隣の客のうれしからぬさへ心にかゝるは、我未だ天涯の客たるにならはざるにや、さりとても弱しと、宿の主人の僧の髮のびし程にて、瘠容自ら氣骨ありげなるを愛し、これと暫し物語りして流に下り立ち、閑明透きても見ゆべき清泉のあたゝかなるに浴して、さて我室に歸れば、日は早や近き山の端に沒り、殘りの輝り淡く、寂しき雲を染めて、潭影ほんのりと紅く水光薄きに、そもや西方落日の影を瞻望みて佛家の觀法を悟り、あはれ

非情の中にも愁なる人よりは好き師あり友あり、多数の人の有てる妻より嬉しかるべき優しの者もあるべきに、然る人にすらなり得ざる、きのふは東、けふは西、電光よりも果敢なき人の命を歎かれし蝸牛庵の風流もかくやと、彼是を想ひてはそゞろに悲しく、むかしは一枚の花を見ても我満腔の涙を寄すべかりしに、今はこれすら我宿ならず、草露山川も胡念亂想をすゝぐに足らねば、唯身一つのおきどころなきやうに、心は西東に驅けめぐりて、俗を出でては非情にかへり、非情を捨てゝは俗にかへる、何れをそれと分き難く、まこと我如きもの身を挺しては亂麻の賊を斬るべからず。退きて風流の一家も倚し難く、いづくに立ちて何處に歩まむ。その聲のかすかなるは秋の蟬より細く、闇に燃ゆる螢火のやうに、有るか無きかの光を身に添へて、いつ絶えて果つべき、いつ消えて逝くべき。夢蟲の果敢なき身をもて、想へば昨日のよしなし心も今日ぞくやしき。家よかれ母よかれ、姉妹よかれと、今更に及ばぬことまで思ひつゞけて、關山萬里、草枕幾夜の夢を重ねけるやうに、もの狂はしとも不覺の涙に袂をぬらして、家戀し人戀し、まことや聖が慈悲の御眼をひらきて、衆生に甘露の法をくだし給ひしも理と、人の世のことくめばくむほど其味深きやうに思ひなされ、血氣に成敗利鈍をよそにして、親あり家ある身を破りかけし心の愈々淺間しく、破るれば破るゝまゝにせよ、落つれば落つるまゝに落ちよと、大悟徹底らしきことを腹の底におきて、いひたき言をいひ放ち、やりたき事を行ひすませど、想へば一顧して深き情の水をくまでは、よしそれとても世の運命のあやしき、甘露の法も我心をうるほすに足らず、淙々たる響を傳ひ、山路深く分け入りて辛くもたどりつけば、くめば盡くべき濁り井の、我腸は枯れて死すべき。何れを宿とし何處に枕せむ。さま〴〵なること思ひつゞけ、夜食の膳すゝめらるゝに漸く心づきて、心は亂るれど身の愈々疲れぬるに、今宵も夢結ばでは愁しと、村酒一杯を傾けて横になりぬ。男鹿川の流は夜もすがら響き、水の音枕に落つる心地してうたてや今宵も夢結び憂く、雨戸明け放たれて月影のもれ來るに眼覺むれば、凄光あかく深潭にうつりて山の端煙の如く、落ち〳〵て寂光彼方の山に入りて、潭影またほの暗くうち沈むに、最も淋しき氣滿身をさそひて、まこと西方淨土も彼の幾尋の底にあらむなど、身を躍らして彼方の光とりたきまで、透谷子が臨終の事など想ひ起して、曉まで悲しき夢に入りぬ。

月見れば誰も心ぞなぐさまぬ、姥捨山の麓ならねど、昨宵は現のやうに嘆き明して東明の空さへ暗く、如何に飄遊は人のならひなりといへ、われ如何なる片雲の風にさそはれて、こゝまではさまよひいでし。七月十九日、けふはこゝ川治の里より鹽原の方にゆかむと、山の端のやう〳〵白うなりし頃、床を出で、溪流に口をすゝぎ、岩窟に清泉を浴び、燈つけて支度など調へ、この宿のよきに朝の草鞋も心地好く、追懶橋をあとにしてかたばかりなる道を分け行く。羊腸嶮岨をあへぎ〳〵初ひ〳〵しき旅人の踏みも迷ふばかりなるところ進めば、遙天の曉光おほひ重なる山々を染め、眼下千尋、里も家も遠く離れて、男鹿川の響淆々たるのみ僅によべの餘波を傳ふ。野飼の馬の叢中に立てるを見しは、草刈るもののあるにやあらむ。岩蔭の冷風に憩ひては老鶯雲雀の聲寂しきを聽き、九折重なりては雲路を歩む心地して、尺地の平なるところ野草わが丈ほどのび、縱横の路あやにくに危き傾をなす。一峯を遶りては一峯を迎へ、幾峯遶ぐるところ風景心に殘りて、これを記せば夢に似たり。これは高原嶽

といひて、もとは村里などもありしよし、野中やゝ廣くひらけ、草は徑を沒して朝露の未だかわかず、衣も脚もひたぬれにぬれたれど、幽草哀れなる花をつけて、山葡萄の實の枝重く垂れたるもをかし。かゝるところに吹きて落つるものこそはかなけれ。咲きて夏草の間に匂ふあか、むらさき、濃き淡き、落ちて塵に委す去歳のひとひら、今年の一片、そも〳〵年々歳々花は似たり、草間に咲けるその姿こそかはらね、去歳のひとひらは今年の一片にはあらざるべし。あはれ人間の短き己が命を嘆きて、花の姿のとこしへなるを羨めど、彼より見なば我も常久の姿にして歳々年々人相似たらむ。まことに人といふその命こそ無常もさそはず、墳墓も埋めず、されど去歳の人豈に今年の人たらむや。花といふ哀れに幽かなるその魂は、幾千年の昔より羈旅の人間の袂をぬらして、槿花一朝にして萎めど、ひらかばもとの姿なるべし。落ちては結ぶはかなき草の露よりも、もろきは夢蟲の腐草に生れては螢となり、葉末にすがりては蟬となる。ゆふべの光は今宵のひかりならず、旦のこゑは夕の聲ならず。闇に消え月に消え、風に絶え煙に絶え、流のあくた路の塵、埋れ果てゝはいつ歸るべき。五月の闇の空、夏の日のあした夕、その光こそかはらね、その聲こそかはらね、いかで失せしものの生れしにあらむや、いかで逝きしものの歸りしにあらむや。憫れむべし固陋の獨善獸、己をのみ尊きものとなして、五十年の他に永遠の命を求め、靈魂淨土に遊ぶといふは、いやしき心窩に起る妄想汚念の夢ならずとせむ。草は汝が骨を燒きて墳墓は汝が精靈を埋め、百骸九竅みな塵なり。まことに幾代の盛衰、人間といふそのものこそ有無の塵中に漂ふなれど、昨日のひと豈に今日の人ならむや。塵こそ果敢なきものはなけれ、はかなき塵こそとこしへなるものなれなど、あやしきこと思ひつゞけて、登りしは凡そ二里ばかりなるべし。老樹生ひ茂り谷川の響もの凄きほとりを下り行けば、岩石峨々として泉に如何なる氣を含むか、底も淵も悉く赤く、架けられたる橋は木の葉塵さへふり埋みて、あか河といふはこれなるべし。さすがにうれしからぬ心して渡るに、傍に倒れたる樹は蒼苔に埋もれ、暫しそこに憩ひて疲れを休むれば、水は響淙々として梢をわたる風さへ凄く、雲霧山氣あやしき想ひをなさずといふことなし。これより登りては下り、下りては登り、砂礫いたづらに道を埋め、谷川の今は涸れて岩上に木の葉落ちかゝりたるなど、人も踏まぬと覺しきはさすがに危き思ひをなす。漸くにして廣き野中に出づれば、一枝幹は細くわが丈ほどなるが、頭にたゞ一つ大なる葉をもち、風はこれを翻してまはること小車の輪の如く、傍に小屋あり、をかしと見て過ぐるに、やゝありて人の語らしき聲をわが後に聽けり。耳を傾くれば優しき女の聲らしきにいよ〳〵あやしく、さては彼の小屋のうちかとこゝろづき、お妙樣といふものならむなど獨り笑ひて、今は早ややすき路を下るともなく下り行くに、夏草の繁みを分け土をかへして麻など作りあるを見て、里近しと大に勇み、杉林の間人家高樓の見えしは、鹽原の奧荒湯といふに出でたるなりけり。

唯見る岩角切り開かれ蒼々として且つ白く、峯上幾階の石段見あぐるばかりに、社らしきものありて、兩側に二層三層の樓軒をならべたるところ、下より望めば相州江島といふ景色なり。人烟絶えたる深山のうちより、忽ち大都會にでも出でたる如き心地して愉快極りなく、先づ藤屋といふに足を休め、支度など命じおきて寺の湯、猪の湯などいふあやしく硫黄くさき靈泉を浴び、高樓の廣間に横になりて得意限りなし、時は漸く朝の九時を過ぎしなるべ

處に藤村秋骨等と都の夕餐を想ふもをかし。酒は驚くほどの惡酒にてぴり／＼と腹にしめど、傾くるも／＼更に醉はず。昨滿身何ともいへぬ寂寞の氣に襲はるゝ心地して、前には幾丈の絶壁峨崖を望み、無心の雲漫々として山を蔽ひゆくにそゞろ寒く、愍れむべしわれ沒情の漢となりしか、けふ幾里の道を歩めど疲れず、今夜酒を飲むに醉はず、悲しき目に逢うても涌く如き涙も出でず、うれしき事を見るも微かなる笑をもらさず、女を想ふの心もなまぬるくなりて、人を戀ふるの情も浮きたるやうなり。きのふは日夕の平凡を見るも、われこれを絶代の驚奇とも思ひなして、涙をそゝぎ血をそゝぐことを得しに、今は絶代の驚奇に逢はむも、わが心更に動くことなし。世の波のいかに高きとはいへ、人の心の至眞を殺して熱き腸の底まで涸らして、氣をそぎ意を弱め、われを生木のまゝに埋もれて立たするやうにするか。徒らに人を罵ることのみ覺えて舌は愈々毒氣を含み、世の人心の淺く頼みなく氷のやうなるにならひて、わが心も自ら薄く冷に、いかでこれ人間の眞興を破りて至眞の寶珠に觸るゝを得べき。顧ればわれ故郷を二つにし墳墓を二つにするもの如し、まことに情もろく心弱き時蟲けらの如く、氣昂る時は電光のやうにかき散らされて何れを何と分き難く、彼處に枕すれば此方に責められ、此方に枕すれば彼處に責められ、凡そ稜々たる骨頭もなく、昂々たる氣象もなきに、なまじなる風流氣を出したるこそ愍れむべしとも笑ふべきの極みなれ。よし彼是を汲めばとて悲壯勵苦の志は消えずにあれ、失せずにあれなど、われを英雄天才めかしたる感慨に耽りしも、旅にぢれてのうは言なるべし。燈もなく暗がりに獨り酌むは愈々氣狂ひじみたりと店に歸れば、女われをひきとめ澁茶に菜の漬物などすゝめて、草々のもの語りす。色はあさぐろく口元きりゝとしまり、年は三十を一つ二つ越えたるなるべし。もとは東京淺草に居りましたなれど、連れ合に亡くなられまして、大阪の方へも參り、病のためにここに養生がてら斯樣な商を致してをりますと、傍に子供らしきが寢ね臥したるも哀れに、われも旅のわびしきまゝに色々なる話しかくれば、この女言葉に艶なけれど、言ひ捨つること自らをかしき節こもりて、あはれ憂き旅は後の笑ひ草、苦勞人は人々におもしろかられけると、思はず時を移して立ち出る時、あやしき雲の夕立二點三點落ちかゝりたるに、お傘をといふを辭して急ぎ宿に歸り、その夜はからくも夢を結びぬ。

翌くる日はこゝを立ち、馬車を驅りて洞門、關屋を過ぎ、那須野の原を經てその停車場に向ふ。車中人あり、明日秀甫棊譜をたくはへて妙に微笑するところ、頗る東都の島田先生に似たり。言葉つきこのあたりのものと見ゆれば鹽原の三郎ならむか。車のうちより言葉を交し、停車場に到り同じ茶店に憩ひて、昨宵の惡酒の話などすれば白き瓶に會津酒入れたるを取り出して頻りにすゝめ、わがこれより行く處など尋ねて、御周旋下さりませといふ。をかしき言いふ奴と旅なれば心地好からず、すゝめらるゝまゝに傾けて一杯又一杯、やがて珍酒の一瓶を空になすばかりにやり、此方は一切無言でをれば、この男茫然として暫しわが顏を見、やうやく口を開きていふ。私はこの近在のもので養家は川治の方にありまして、今は家に歸りて戸主ではありますれど繼母との折合惡しく、實は兩三年他に行きて志を立てるつもりでござりますと、われに何か好き口の周旋を賴むとのことなり。那須の梢風といふ雅名やら何やら分らぬ名刺に、本名の某といふを添へて出だし、身のまはりのものなど當世紳士の體裁に

し。川治はいかにも山中の僻泉にして今は來るもの少く、たゞ春三四月、桃の花谷川に映りて鳥の囀おもしろき頃、近郷數多の男女相集ひて隨分をかしき風流を見るべしといへり。こゝは鹽原古町を去る僅に二里の山中にて、今は來る人も少からず。鹽の湯あたりより一日の遊を試むるもあり、自ら賑ひて二日ばかり人間らしきものを見ざりしわが眼には、頗るうれしき思ひをなせり。福渡戸などは京客寄り集ひて今は俗地なるべし、よし今夜はこゝを宿とせむと、快膳の珍味を喫し終りてそのことを通じおき、まだ何か欲しきに袂にありし四五錢を持ち出でゆくに、買ふべき家はなくみな溫泉宿のみなるに閉口し、歸りてまた横になりて、いぬるともなく夢に入りぬ。

さむれば日暮らしの聲哀れに心をさそふに、起ちては臥し、臥しては起ち、なにせしことか、もの狂はしきまでに心は亂れちぎりて、電のやうに驅けめぐりたき心地、よし鹽原へ行かむ、那須までも行かむ、京へも歸らむ、松島へも行かむ、何處へなりとも驅けてころげて轉げこむところまで走らむ、美酒あらば飲むべし、女あらばをかしき言いひて驚かし呉れむと、急に藤屋を立ち、今度は下駄がけにて二里餘の山路を下る。眼前に溪流を見、快き人家のならぶを見ながら、路は九折をなして容易に達すべからず。腹立たしきまゝに坂路の砂利あるところを走りに走れば、愍れや古町にぢき近き處にて下駄の齒一枚をかきぬ、自ら淺間しき思ひをなして、心中恥づること深し。それより溪流に沿ひ、人あり馬あり翠松清風の快き路を行けば、念佛庵は空しく閉され、塵にまみれて衣冠を洗ふの主もなく寂しくて、天狗岩のほとり水茶屋あり、二十ばかりなる清く痩せぎすの女一人そこよりいでて、わが今市にて求めし竹子笠の下より眼鏡光らして歩み行くを、恥かしさうに笑ひ見つゝ走り行く。夏草のなかに一輪ゆりの花、野末の花とは斯様のものにて、孤蝶子が流水日記など凡そかゝる機のものなるべし、成程々々と心中ひそかに笑ひつゝ福渡戸の町にかゝれば、家毎に我姿を見ざるはなし。さてはいや風書生、笠をかぶり袋をさげ、衣は汗にしみ、下駄は齒を失ひ、これより東奥の山河を踏み破らむといふその旅風俗、頗る妙なりしならむと愈々をかしく、升屋といふ家より島田髷結ひて紫繻子の帶しめたる娘、對ひの離座敷に物はこぶを見る。いつぞや天知子一家の人々の暑を避けて、おもしろき紀行文を見しは此家ならむなど、嬉しき事まで想ひ出して、今夜は美味にもありつかむ、高樓によき夢も結ばむと松風樓といふ三階のいかめしき家に投ず。可成は好き扱ひをも受けむと心ばかりを包みて遣れば、一夜の御泊りに恐れ入りますと鹽原全圖に團扇など添へて出す。老松孤鶴吟する書はこの家の松に因みてなるべし。玉章とあるになつかしく、よく／＼見ればこれは四五年前まで大阪町百尺といふ料理屋のものなりしに驚き、さては大家の名筆も薄命はのがれ難く、流れながれてかゝる處に來りしことかと、これもをかしく、このあたりの都鄙かず、質樸の美風未だのこれるに、今夏は何故か來る人もなくて、いとゞ淋しきは氣の毒といふべし。

幾里の山路を越えて來しも身に疲れを覺ゆること更になく、心のみさえゆくに、溪流夢を破りては今夜もねぶること難からむ。厭、厭、厭、旅はもういやと、夕餐を終へてより直ちに宿を出で、物賣る店に下らぬものなど買ひ散らし、ゆき／＼て野立石のほとりに到れば、そこに掛茶屋ありて年増風の女おやすみなされませといふ。今夜は是非眠らむ、眠らして見せむと一本を命じ、棧橋を渡りて岩上の亭に憩ひ、冷豆

て、年は三十前後、妻もあり兒もあり、一面識もなき書生分際に道中で身の上話して、立志の計を賴むといふ。世にはをかしき人もあるものと心に笑ひ、何でも小學教員か、政治熱に浮かされたる男の農家の辛抱出來難くて、田舍にはよくある話なれど、餘りといへばこの邊の人の氣樂なること、行李さげてこの男今は何處へ行きしやら。

汽車に投じて郡山なるわが親族がりおとなはむとす。去歲までは黑磯にありしなれど、そこにて二人の兒をさへ遺して妻なる人に逝かれ、わが母もその野邊送りの營みに會せしに、四つになりし娘の野中の橋上に立ちて、棺のもとを去らざりしとか、車のそこを過ぐる折哀れなることを想ひ起し、白河のほとり城荒れて夏草は往時の夢を蔽ひ、去秋藤村のこゝを過ぎし折ひたすら風流念佛を唱へしといふも、まことに搖落と飄零に逢うてはいかばかり悲しかりけむ。そのかみ蕉翁が栗の花さく宿訪ひし須賀川の驛もすぎ、やう／＼にして郡山に着く。遠く望めば吾妻山微かに、阿武隈川は町の東を流れて水田青く、宿は驛路にそひて趣あらねど淸けなり。われより先に着きし行李を解き、京を出づる折草市に妹伴ひ、四年家にて買うてもらひし花插など心ばかりの土産を出して、その夜は床に寢心よく、紅梅麥畠に落つる春の日の心夢に入りて、哀れはかなき三日風流、わが弱蟲に驚くこと甚し。（明治二十七年）

うすむらさき

はかなき草の種花の露をたよりに、これも夢ばかりの浮世のすさびと、ながらへはてぬ身の末も、あやしき現し心のうちにつゝみて、春には浮かれ秋には泣き、野に山にさすらふ身のうたてきや。

今日は如何なる魔にやおかされけむ、あやしうもの憂ければ日一日うちこもりて、野寺の宿の破れ壁にわが影をそむけしまゝ、書読むにあらず、物思ふにあらず、たゞ〳〵夢見心地にかき亂れかき消ゆる我おもひの、うら淋しくやるかたもなければ、宿をば立ちいでてうしろなる田の道にいでぬ、風寒くして秋の名殘のいと哀れなるに、ふと流るゝ水に沿うて、行くとはなしにたどりゆけば、よめ菜の花の葉も靑く、うす紫に匂ふがありけり、いとしき花よと立ち寄りて、水にうつせる姿を見れば、黄なるしべの稍色あせて、冷たき風にゆらるゝも哀れなるに、いよ〳〵見すぐし難く、我心のさと花の色に匂ひ來て、手折りてもゆかむなど、さすがにはかなき思ひの湧き來ぬれど、さてつく〴〵と思ひかへせば、家にはさすべき瓶もあるなく、哀れや天の美のこぼれて、このほとりにほのかなる影をばとゞめけむを、そのまゝに我手にうちしをらせむも愚なる業なりと、燃ゆるばかりの手もさしいだし難く、枯れ〴〵なる草村にかく哀れなる姿して、水の面にうつせる影の、さりとてはいぢらしなど、心もうち亂れて暫しそこにたゝずみしまゝ、立ち去りぬべくもあらず、さてはとなほも流に沿ひゆくに、畠には茶の花の白きがほろ〳〵と落ちて、彼方の岸の竹やぶに、からすうりの紅きがかゝるなど、秋のかたみの千々に哀れなれど、たゞ〳〵心にかゝるは彼の一もとの花のみなり、よしふと天地の間に生ひいでて、誰が心にふれて捨て難き香に匂ふとにはあらねど、あのまゝに野に枯れて、はかなき姿をかたみに、流れ行く水に美しき魂をのせて、何處とも知らず失せはてさせむもいぢらしく、げに如何なる宿世の花なりけむと、思ひはいよ〳〵堪へ難きに、よし家にはさすべき瓶のなくとも、せめて我あした夕に手をはなさぬ書のうちにもおしおかば、たとへばそのまゝにしをれはてしにせよ、哀れの影のそこに殘りて、ありし昔の面影もしのばれむ、われに捨てがたう袂とゞむる彼の花のいとしき事よと、よしなき心の燃ゆるまゝに、足をめぐらして心せはしくもと來し岸をたづねゆけば、我見し花は何れにか失せけむ、枯れたる草の風にゆられて、流るゝ水の影かすかなるのみ。

あはれ何れにか其姿をかくしけむ、心にくき花よと心もせきたつばかりに、前へすゝみ後へもどり、さま〴〵にたづぬれど、彼の花の行く方は知れず、哀れやわがはかなき心を知りて、蝶ともなりてこの寒き空に飛び失せけむ、よし何れ失すべきなが影のかくとも見迷ふ現しごゝろに、はぢらふさまもいぢらしと、いよ〳〵心の炎の燃えゆけども、思ひますのみにて花の姿の見ゆべくもあらず、心落ち魂も消ぬばかりに、すご〳〵と歩みをはこびて、ふと眼を擧ぐれば、夕日山の端に落ちて名殘の光は木々の紅にさしかゝり、いづくの寺の鐘の音か、ほのかなる空にひゞきわたりぬ。

夕暮のかすかなるに、さと我心の愁をあらうて、忘れしとにはあらねど、彼の花の跡もた

づねず、流れてかへらぬ水に沿ひつゝたどりゆくに、橋のたもとに一もとの姿哀れなるは、もと見しまゝのわがうす紫の花なりけり、さてはとうち驚かされて心も狂ふばかり、つと寄りそうて燃ゆる我手をさしのぶるや、夕風草村にうち渡りて、花びらのゆらるゝ寒さに我身も魂もふるひ動きぬ、さて涙も落ちぬべきばかりに、手折りし花を胸にいだけば、花は幽かなる星影にさと匂うて、うす紫のほのじろう、香りこぼれてゆらぐばかりに、我と我を忘れてつく〴〵と其姿の幽なるをながめ、いとしさいぢらしさに我心も溢るゝごとく、しばしはその姿に見とれてありけるが、あはれ如何なる心の狂ひなりけむ、葉をやぶり花びらを破り、やぶりしまゝに水の面に流しやれば、からはあくたと共に落ちて、いづくに去りし、いづくにゆきし、心も消え〴〵にほの暗き道をたどりて、宿にかへりしその夜一夜は、彼のいぢらしき姿のみ夢に入りてうつら〳〵と曉にいたりぬ、あはれこの花と我と如何なる縁かありけむ。

（明治二十七年）

スミルナの花

こは璉馬の詩人、アンデルゼンのもの語なるを、我友微笑の君の、英吉利の言葉に譯して、我に與へけるを、わが又拙き言の葉にうつしいでたるなり。

スミルナを去る程遠からぬところに、一もとの木立ものふりて、キャラヴハンのゆきかひ繁く、駱駝のあやしう長き首、ところせくふりたてゝ、たど／＼しう聖き地をふむあたりに一むらのさうびの花の生ひいでけり。野鳩の木の間に群れあそびて、雪のごと白き羽の、木の葉をもるゝ日の光に照りそふは、きぬに玉つらねたらむやうに輝きぬ。

木のもとの一むらに、一輪の哀れなる花咲きそめけり、いみじうあえかなる姿して、なさけの溢るゝばかりなりければ、鶯のふとこれを見て、いとゞ堪へがたう、やるかたもなき心の思ひの、哀れにも音にいでける、こを知るや知らずや、花はいらへだにせず、たゞひとしづくの露を葉にこぼして、かよわき枝力なくたれ、下なる大なる石の上に、寂しき影をうつしけるのみ。

さて花のいひけるやう、わがもとには、世にいでたりしいともいみじき歌の聖のやすらひ給ふ、木枯吹き荒みて、わが散りはてむ折も、わが香はこのほとりにこぼれ、わが葉は聖き御墓をかざらむ、わがふたゝび生ひいでむ、こゝの土は、イリアムを歌ひ給ひし聖の御身なりける、我はホーマーの御墓の花なり、いやしき鳥のために心をそゝぐことかたし。

これをきゝし鶯は、こゝろいよ／＼堪へがたう、身も失せはてむばかりに泣きぬ。

ひと日一むれのキャラヴハンの、黒奴を伴ひ、駱駝おひつゝこのあたりを過ぎけるに、童どものふと路ばたに、きのふけふ失せたりし鶯のなきがらを見ければ、哀れとてこを尊きホーマーの御墓のかたはらに埋めける、花は吹く風に身もふるひぬ。その日も暮れて早や夕ともなりぬれば、しかと花びらに魂をつゝみて、さて花の夢みけるやう、日もうらゝかなる春の日、數多とつ國人のこゝに近く來りぬ、ホーマーの御墓にこそまゐらむとてなるべし、そがうちに、霧深く日影うすき北の國より、はる／＼とたどり來たる、一人の歌人ありけり、花をつみてしかと携へたる書のうちにをさめ、いとも／＼遠き己が故郷にもち歸りぬ。

せばき書のうちにをさめられたる花は、今愁ひにあせて、たゞ歌人の折々ひらき見ていふやう、こはホーマーの御墓の花なり。

ふとあやしき夢よりさむれば、曉の風さぶく花のはだへを吹きて、ひとしづくの露の御墓にこぼれける、今や日はあか／＼とさしのぼりて、あしたの光に照りそふ花の姿は、常にもましてあえかにも見えけり、その日はうらゝかに暖き日となりて、花はもとのアジアの己が故郷に笑ひぬ。折しも人の歩むけはひして、フランクスにやあらむ、數多のとつ國人の、御墓のもとに來りぬ、こは昨夕の夢のまださめぬにや。

旅人のうちに、北の國よりたどり來たる、一人の歌人ありけり、御墓のもとにふと哀れなる姿を見て、こをつみとりつ、燃ゆるばかりに美

しき花びらに口づけして、さて立ち去りぬべくもあらざりける、かくて霧深く日影うすき、己が故郷にもちかへれり。

されば彼の人のイリアッド歌の巻には、美しき花のなきがらのおかれて、遠きむかしのエジプトの木乃伊のごと、いといとう静にひめられぬ、げに彼の夢に見えけむやう、こはホーマーの御墓の花と、歌人の折々ひらきいふを、今は花のきくなるべし。

（明治二十七年）

ル、サントオル

さきに假りに吟流と題して、こゝにその斷篇の一章を揭げたるは、ル、サントオルといへる短き物語の數節にして、佛蘭西の人モウリス、ド、グエランの作るところなり。グエランは千八百三十九年齡二十八にして逝きぬ。翌四十年ジョージ、サンのはじめて巴里の草紙にこれを公にせしや、文界新星のあらたに光をはなつを仰ぎ見ぬ。後女史は再びこれを自作の小說に添へて刊行し、千八百六十年グエランが小詩、日記、書簡の類を收めて其友の手に一の遺集を成すに至り、當時の名流サント、ブウブが批評の言葉をさへ添へたれば、サントオル亦漸く世に喧傳せらるゝに及びぬ。これよりさきグエランの姉ユウジェニイが才は端なくもその名高き書簡に認められ、グエラン姉弟の名聲しきて島國裡の騷壇をさわがし、マシュー、アーノルドの如き濃情の詩人をして、うるはしき批評の華文を成さしめぬ。

千八百三十二年十二月それの日の夕、アベエ、ラメネエがブレタアギュの道扉を叩くものあり。時恰も佛蘭西宗敎危急の秋に際し、ラメネエは地をこゝにトして普く有爲の才を招き、將に靈界の光をこのラ、シエネエの扉に發せむとす。この夕たまくく堂に會して、その以太利旅行の所感を語るの時なりき。齡まさに二十歳をこえたるべし。黑き髮はうすく前額を蔽ひ、南歐のすずしき眼には光と悲みとをたゝへたり。やゝ離れて立つの氣勢は、ひとめに觸れむとにや、將これを避けむとにや。かたく閉ぢたる脣は容易にひらかず、たゞ靜に耳を傾けて堂のあたりを見る旅人の風情こそ、ラメネエがこの夜のもの語にまして人の心をひきぬといふ。この人はこれモウリス、ド、グエランなりき。ル、ケエラの家に母を失ひしはユウジェニイ十三の春を迎へ、モウリス七歳の年をかさぬる時なりき。母が臨終の床よりこの哀れなる末の子は姉の手一つに委ねられぬ。幼きより校にゆくに、往復の文は早く二人の間におこりたれど、誰かその世に出でて後の文壇に傳へらるゝを想はむや。弟は世に知らるゝを求めざりき。否、世に知らるゝを知らざりき。彼は自らなせしところを埋もれしめぬ。宜なるかな、ユウジェニイがその晩年をさゝげてグエランが記念となせしこと。はじめトウルウスの校にゆき、後巴里スタニスラの大學に學びたれど、その學校の生活に適せざるは、うたゝシェレーが當年を想はしむ。かれが青春の夢は熱くしてかき亂されたり。かれは身を靈界に委ねむと、ラ、シエネエの道場に入りたれど、交を詩歌の友に寄せてまた純然なる宗門の人にあらず。をやみなき心の活動は戒律のわづらはしきと鬪ひ、燃ゆるが如き天才の焰はかの冷かなる道扉のうちに爭ひぬ。かれはブレタアギュの荒れたる岸にうるはしき故鄕の空を慕ひぬ。こゝにシャトオブリアン、ラマルテン、ユーゴーを友とし、否オメール、ダント、沙翁、ギョーテを讀破して、知識を慕ひ藝術を想ふのこゝろやまざりき。

グェランは終に巴里にいづべしと思ひぬ。かれは身をこの塵界に投ずるに先ち、アルグェノンの淸しき流に靜なる日をすぐせり。その友モルヴォネエの家にして、樓は淸流に對し海に沿へり。家にはよき妻と幼き兒とありてかれが沈める心をなぐさめぬ。靜なる日かれは孤り海の寂しきに泣きぬといふ。その故を知らざりき。その巴里にいづるや、かれは多くの知己を得ぬ。衣さへみにくからず、交際場裡に立ち交りて名を成すの機にも近かりしに、その細心濃情にこゝろはこの塵中に堪へざりけむ、終に肺患の襲ふところとなり、夢寐に慕ふ南歐の空に移りて、千八百三十九年六月それの日、ル、ケエナの故郷に逝きぬ。

かれはしば／＼ルウヴルの古物館に杖を曳きて、希臘古代の彫刻をみ、またバウサニアスは常にこれを座右にしきてはなたざりしといふ。サントオルの想は恐らくこのうちに得たるならむか。

われはこの嶺の岩窟に生れぬ。小暗き谷の巖角より落つる滴のやがてこの山をゆく流となりけるやうに、わが生のはじめの瞬間は、かのはるかなる巖の影に、その寂寥をも破ることなくいと靜に落ちしなり。臨月近づけば、われ等が母は木影深き岩屋の奥にこもりて、つゆばかりの苦もなく其兒を產みなすに、乳の力はわれ等をしてよく幼き世の愁き苦にうち勝たしむ。されどわれ等がこの岩の戸をいづるは、汝人間の搖籃をいづるよりもおそきなり。この淸く幼き折こそ神々もみ給はむと、このかくれ家にひそみて出でざるをよしとすれば、わが生の春の多くはわが生れしその巖の影にすぐされしなり。

かくれ家は山際を去ることいと遠きに、折ふし岩窟を驚かす新しき風のなかりせばわれはそこをいづべき途さへも知らざりしならむ、折ふしわが母はいでて、あさりし谷河の草の香、泉の韻を身に添へて來ることあれど、その谷のことも、水のことも、われには何の消息をきかせず。されどその香、その韻をもて歸り來るごとに、わが心はかき亂されて、やうやく光なきこのかくれ家に堪へられぬ如く、心はあやしくさわがしうなれり。ひそかに思ひけるやう、わが母の行くかの他界は如何なるところぞ。何の魔力のそこにはありて、かくしば／＼母をひき寄するにや。日毎に歸り來るごとに、其さまもひとしからぬは、其魔の爭ふことあるにや。ある時は深き喜をもて浮き立つばかりに、ある時は悲しくもの憂く、心は破れしやうにして歸り來るなり。もたらす其喜は我にも著く、步は豐に額をかをりて全身に溢るゝばかりに見ゆるなり。されど母がもたらす其悲は、わが胸をうつこと更に弱く、我はいよ／＼疑の奥に迷ひ入るなり。この時身の力はいよ／＼心をもの憂くせしむ。かく爲すことなくして堪へえぬ力の我身にこもるを知りしなり、あるはわが腕をもて空を摩し、あるは岩窟の暗きを馳せめぐりて、空をつくこの力の、風を追ふこの蹄のやがてこの腕のとゞくところ、此蹄の身をはこぶところを見出し得べしともがきしなり。われは徒に我腕をサントオルのこの胸に、あるは大なる樹の幹にからめぬ。わが手は岩をうち、水をさぐり、數知れぬ草をあさり、空氣のいみじきゆるぎをも感じぬ。靜に暗き夜には此手をさしのべて風をさぐり、ゆくべきわが途を定めしなり。メレムプよ。毛骨痩せてわが蹄の破れしを見よ。今かく老いたれど、むかしは我若かりし時、日は豐に山の端に照りて、この巖影に奔逸飛騰せしことありしを。わが兩手をふ

りかざし、歩をはげましてなほあくことを知らざりき。

かく動きてやまざりしわが日も、折ふしは靜なる時なきにあらざりき、かゝる折にこそ我はわが身の日々に肥えふとりて、わが生命の内に新に湧く如くに思ふより他あらざりき。熱ある活動を捨てゝ靜に此寂寞たる巖影に退きしより、我は神々の結びし賜物をあくことなく味へり。靜寂と影とは内部生命の奇しき戸をひらくなり。此嶺の巖の影こそ、わが氣を高めわが力を養ひし者なれ。此影にこそわれは神々の胸よりいでし純潔なる生命を味ひしなれ。此巖影をいでて日の光を見し時、われはためらひぬ、われは之をうくる能はざりき。われは我身を離るゝ心地して、あしき飲物に醉ひし如くなりき。かく簡樸にして調和したりし我生のかき亂されしやうに、其生の或物の失はれしやうに、其ものの風に失せ果てしやうに感じぬ。

メレムプよ。汝はサントオルの生涯を知るなるべきに、如何なる神々の御心をもて、我をしてそのいと悲しくいと老いたるものとなさしめたる。われは既に久しくサントオルの生を捨てたり。我今齢にさへられて、此嶺を下る能はず。我時は途を馳せず、徒に草の根をぬくのみ。靜なる湖こそなほ我を覺えめど、ゆきて止まらぬ水の流は早く既にわれを忘れぬ。我生の春の日を語らむか。我あやしき心より出づる回想こそ、破瓶よりしたゝる酒の滴の如くならめ。幼き日を語るはやすし、靜に完ければなり。簡樸なる生活は我を滿足せしめぬ。之を想ひ之を語らむに何の苦もなし。されど、我身神にしあらば、この生を語らむも一言にて盡くべきに、メレムプよ。われは想ふところ多く、いふところを知らざるなり。

わが若き日は疾く心のなやみやむ時あらざりき。活動はわが生命なりき。われは我歩の限りを知らざりき。我には力あり、我には自由あり。われはこの荒野をさまよひぬ。ひと日、サントオルの跡いとまれなる谷影に迷ひ入りしに、向ひの河岸に流を追ふ人間の姿を見たり。げに彼はわが生れて初めて見しところのものなりき。我は彼を賤しめぬ。わが半に過ぎざるものとわれは思ひぬ。その脚は短く、その歩のむづかしき事よ、彼の眼は悲を含むものの如し。彼恐らくは神々に捨てられ罰せられて、かく賤しきさまになりしサントオルならむと思ひぬ。

われは河流にあそびて心をすゝぐことしばしばなりき。わが身の半は水に閉さるゝ如く、半はいと靜に浮ぶに、われは高く波上に手を拱き、うち寄する水のまに／＼したがひゆけば、かれは我を導きていと遙なるところにさそひ、岸なるくさ／＼のたのしさを見せしむ。木立茂き下影の流を溯り、溪水の奧深く分け入りしとき、こゝにも夜の神の力は及びて、あやめもわかぬに驚きしこと幾度ぞ。かくてわが暴き性は和げられ、わが浮ぶかの水の上に夜をしろしめす女神の榮光の輝くごとく、生命のいと幽かなる覺智はわが全身に溢れしやうに感じぬ。メレムプよ、我今老いてかの水の流をうらむなり。平和にしてかはることなく、かれはサントオルよりも靜に、人間よりも尊き知識をもてその運命に從ふなり。われこの水の淵より出づれば、われはその賜物を身に添ふ。しばしたゆひ添ひて香の如くに失せゆく。

盲目にして荒れたる心の動きてやむ時なく我歩をはやめぬ。身は地獄の境に立つ心地して、神のわが前に立ち給ふ思していと激しく馳するさなかに急に歩をとゞむる時あり。實にこの時こそ心の底もふるひわなゝく如くなりけれ。森に入りては枝をきり頭にかざして馳すれば、我歩の疾きは葉のひゞきをとゞめぬ。とゞまるこ

と暫くにして葉はもとの如くにさゝやぐ。されば巖窟におけるこれ等の激しき活動に我生はかき亂されて、わが全身の常にふるひ動くごとくなりき。疾風の如く馳するこの空間に、われは熱のあがるを知れり、われは活火の燃ゆるを見たり。わが胸は鼓動してやまず、われはそこにみなぎる波濤と戰へり。かの高岸の波浪をさゝふるが如きたのしさを、われはこの煩悶のうちに見出しぬ。われに冷氣をもたらす風に頭をたれて、われは忽ちにしてへだたる山の巓を望みぬ、われは岸に生ふる樹々を見たり、河流の水を見たり。水はもだゆる急流に追はる。樹々は地につきて離れず、わづかにその枝に通ふ風によりて動くを得。思ふ、われ獨り自由なる活動を有す。われはこの生を負うてこの谷よりかの谷に移るなり。われは巖より落ちて再びのぼる能はざるかの急流より幸に、我蹄の響はかの潮音纖聲よりも清し。われを導くはこのサントオルの蹄音のみと。かくて我身はこの馳驅に醉ひてあくことを知らず。蹄をとゞめ頭をめぐらせば我背には湯氣の如き氣の昇るを見き。

わかき時は風になやむ青葉のごとし。生命の豐なる光は至るところに輝かざることなし。深籟その青々たる枝を動かす。河流の如き自由をもて心のまゝにさまよひつゝ、溪谷の影、高き嶺、至るところにシベエルの御神います如くに感じつゝ、盲目にしてきづななき生涯の如く、われはゆかむと欲するところにゆきぬ。されど神々しき靜寂に充つる夜は、われを山際より巖窟のいりくちに導き、そこに大海の波濤をなぐさむるごとく我を慰めぬ。眠を追ひてしかも我が休息を破ることなく、いみじき生命の活動は夜の波の如くなほ漂ひ動けり。わが隱れ家のいりくちに臥し、身は巖にかくし頭を大空の下にして、われは靜に夜のうるはしさを觀じぬ。木の葉のうちに宿りし滴の、やがて嵐の後に落ちて流にそゝぐ如く、我心に充ちし晝のあやしき生命は、滴一滴こぼれいでてシベエルの胸にかへるなり。これをきく。海原の神は夜毎にそのかくれ家をいでて高き巖に立ち給ひ、靜に波のゆきかひを眺め給ふと。われもかく海原の眠れる如き生命のひろがりを我前に望みぬ。かく我にかへりて明かにその存在を認むる時、我は新に生れたるが如くに感じぬ。むかしかのアムフィトリットの波の、忘られたるドオフェンを沙上にのこせしといふ如く、我をその胸にはぐくみし深き淵は、われをこの山上にのこせしにあらずやと思ひぬ。

わが眼は遙なるへだたりを觀ぬ。波洗ふ岸にも山の端にも、落日光をのこして未だ影を蔽はず、峯巒高く清蒼として立つを見るなり。ある時はパン神の孤り寂しくくだり給ふを見き。ある時はあやしき神の歌をきゝぬ。あるは夜に浮かるゝナムフの姿を見き。大空をかけりて星に消え森にかくるゝオレムプの鷲の姿を見ぬ。神々の氣は活きて、古きかしはの老樹をもふるはしめぬ。

メレムプよ、汝は神の御心を知る尊き知識に從ふ。しかも汝は運命に驅らるゝ人間の如くにさまよふ。こゝに石あり、これを擊てば磐音古意を傳へて破れたる琴の一絲の如きを。人はいふ、むかしアポロンの野にその羊のむれを追ひ給ひし日、ふとこの巖上にその琴を懸け給ひしより、いみじき音のかくはこゝに遺れるなりと。メレムプよ、多くのさまよへる神はその琴を巖の上に懸け給へり。されど一人も――一人としてこれを忘れ給ふはなかりき。われ巖窟に靜に觀せしとき、われは眠れるシベエルの夢をさまし得べしと信じぬ。神々のこの御母こそ夢にさそはれてその祕密のあるものを洩らすべしと思ひぬ。されど、我は夜の氣息に溶くる

ものの音と、溪流の淙々たる響をきくより外また何物をもきくこと能はざりき。
　ひと日キロンは我に語りていふ。マカレエよ、われ等はともに嶺のサントオルにあらずや、何ぞそのならはしの殊なりたる。われは終日ただ草をあさるに、汝、汝は何ぞかのパン神の破りて捨てし笛のきれ〴〵を拾ひ、これを脣にあつる果敢なき人間の如くなる。神のこのかたみに荒き氣を吸ひしより、あやしき狂氣にやおかされけむ、野をあさり森を分け、流を追ひ嶺に蹈み迷ふ。かれ等人間はその知るべからざる運命に驅られてとゞまるところをしらざるなり。遠きシジイの國にて風に戀はれしといへるかの牝馬も汝の如く荒きものにはあらざりき。日暮れて北風しりぞくの時も汝の如く悲しきさまにはあらざりき。マカレエよ、汝はもろ〳〵の神を知らむと欲するか。人間と、動物と、この宇宙に燃ゆる火はいかなる源よりいでたるか。萬有の父なる老いたる大洋こそ、この祕密をその心の底にひむるなれ。夜の夢にやこの祕密の半ひらきたるその脣より洩れむと、これをかくす數多のナムフはさわがしうそのほとりに歌ひ舞ふなり。死すべき人間はその德によりて神に近づき、人をたのしましぬべき琴をその御手より受けたれど、あるは身を富ましぬべき新しき種を得たれど、はかり知られぬその脣はまた何事をも告げ給はざりき。われ若かりしときアポロンはわが心を地に生ふる草のたぐひに傾けしめ、そのかぐはしき香をとるのすべを教へぬ。我はひたすらにこの嶺の奥深きかくれ家にこもりて、尊き藥草の類をあさり、その德を世にひろむるを怠らざりき。瘠削として高きかのオエタの孤峯を見ずや。アルシッドはその葬りの火にかの巓を燒きぬ。マカレエよ、神の子はその葬りの火に猛獅の皮をしきてこれを山上に燒き盡すなり。地の毒はその血をけがしぬ。われ等サントオルは膽太き人間と女神の姿をなしたる白雲との間に生れて、如何なるたすけをジュピテル御神に望むべき。否、かれはその電光をもてわれ等が祖先をうちこらしたり。神の猛鳥たるかれは最初の人間をつくりしその工匠のはらわたを永くさかむとし給ふなり。マカレエよ、人間とサントオルとは、神の力をぬすみしこの盜者を認めておのが族子の祖とはなすなり。神のそとにあるなべてのものは、種子の如くにあやしき運命の風にはこばれて、たま〳〵そこに落ちし神の御性のかすめられたる斷片にすぎざるならむか。これをきく、テセエの父エゼエは其子のうまれのいつしか知らるゝの日あるべしと、海によれる巖の影にしるしのものをおきけると。嫉み深き神はおそらく萬有の證をかくしたるにあらずや。マカレエよ、いかなる海の岸にか、かれ等を蔽ふその巖は横はれる。

　こはキロンのわれに與ふる知識なり。身いよいよ老いて心に高き想を抱くはこのサントオルなり。毛骨きのふにかはらず、風にゆらるゝかしはの老樹の如し。雄蹤齡とともに衰ふるの氣勢なく、むかしアポロンより賜はりて今そのもとにかへせし限りなき永遠の生命は、なほかすかに彼の身に添ふばかり。

　われは、メレムプよ、われは今曉に消えむとするかの星影の如き老境に沈むなり。かの巖の高きにも我今のぼるの力あり。そこにさまよひてをやみなき荒雲のゆきかひをながめ、大空にのぼる雨の如きイア、デ、プレエアデ、あるはオリオンの姿を觀る。されど波に漂ふ雪の如く、われは日に失せゆくごとくに感ずるなり。やがて我は大地の胸にそゝぐかのもとの流にかへるなるべし。

（明治二十九年）

ロオリイの生家

ソルタトンからの道も極く解りよく、二哩ばかり行くと、もうイースト・バッドレエの村でした。デューウーレルの生地であるニュウレンベルグの市へ行つたやうに、沙翁の生地であるストラトフオードへ行つたやうに、「ロオリイの家へ御案内」とでも云つて、村の子供が、ばら／＼と駈け出して來ることかと思つてゐたところ、家並の低い、蔦かづらの纏はつた、茅葺の民家が連らなつた、如何にも靜かな、クェイントな、デヴォン州一流の村でして、人つ子一人出て來ないのは嬉しく思ひました。……それも當り前なのです、ロオリイ生家のヘズ・バアトンは、村からまだ一哩先きの田舍にあるのだと、鍵を持つて來て寺の扉を開けてくれた老人に教へられた時にはちよつと驚きました。折角此處まで來たものと、委しく道を訊いて、ぶら／＼一時間が程、西へ／＼とエキスマス街道を行き、少し右へ入ると、美しい林の點々してゐる、デエールともいふべき窪地へ降りましたが、左に森蔭を控へた鏡の寢床のやうに細長い、白壁の、茅葺の家がそれなのでした。今は農家になつてゐるので、ヘズ・バアトンとは、斯うした英吉利の農園の多くについてゐるやうに、古くからの屋敷の名前であるのです。左右に翼屋が出てゐる、正面の茅屋根は破風で三つにわれて、階の上下とも無器用な竪子の窓になつてゐる、眞中の破風が一番大きく、その二階が櫓のやうに前へ突き出てゐて、二本の太い角柱に支へられ、階下が入口の玄關になつてゐるのです。柱の左右に、こんもりとした、恰度二階へ屆く位な丈の梅葉が植ゑてあり、前庭は餘り手の入つてゐない、寧ろ荒れたままの花畠になつてゐる、極く丈の低い灌木の植込みでこれをしきつて、十四五間を、玄關への參道にしてあるのです。この地方の、テユウドル式の住居といつたら、先づ斯ういふものなのでせうが、農家とはいへ、質素とも何とも、云ひやうのない程粗末な建物で、これがあの女王朝の白馬金鞍の豪華子の生家と思ふと、ほと／＼可笑しくなつて來る位なものでした。が、玄關から數十歩を隔てゝ參道からこれを望むと、流石古い建物だけあつて、何とも云へない雅趣が見え、六月の眞晝に、白壁を前に前庭の美人草や壁上花が咲き亂れたところを、畫にしたらさぞとさへ思はれるのでした。ちよつと水彩とも思はれるのですが、やつぱり油でなくては出ないやうな、深い味が漂うてゐるやうに思へ、それも皆正面の三つの破風と、寺院の式を無造作にしたミュリオンの窓と、デヴォン特有の、櫓二階の玄關がする業なのです。左の方は塀になつてゐる、その後ろに低い森があつて、何の木であるか、天をも突くやうな、丈の高い大木が一本立つてゐる、その右蔭に細長い烟突があるが、これは近頃築いたものらしく、右側には、母屋に添つて頑丈な穀物倉らしいのが見え、その翼屋の正面は盲壁になつてゐて、今は葉のない枯枝の古木が白壁へその影を映し、そこにも屋根を割つて、横に廣い煙突が立つてゐるが、それがあの、ウェッズ禪寺の山内で見た、軒を並べた修業の寮の屋根に立つ煙突も同じに、一見如何にも突飛のやうに見え、而も少しも全體の調和を破ることなく、却てそれを整へてゐるのは不思議であるのです。正面一柱の煙突は、恰度左右の破風窓の眞後ろに當つて、ちよつと屋根から

その頭だけ見せてゐ、これも新しく築き換へたものらしいのですが、質素な、古い建築とよくそぐつて、少しも可笑しくないのです。要するに、假りに全景を額縁のなかへ取入れたものとして、一事一物皆その處を得、何一つ加へることも出來ず、また、何一つ取り去ることも出來ない。案内を請ふのも忘れて、自分は暫く參道の中程に佇んでゐました。

家の人は何處で働いてゐるのか、屋内はひつそりとしたもので、訪問鎚の音を聞きつけて出て來たのが六十を越したと思へる老婦人で、來意を告げると、別にお目に懸ける物もないのですがと、快く案内に立つてくれました。正面左側の薄暗い梯子段を、うねうね曲りくねつて登つて行くと、西側のちよつと廣い一室が、ロオリイ誕生の間といふのでした。折々見に來る人があると見え、室は何にも使用されてゐず、全く空いたままになつてゐました。がまた、お斷り通り何の奇もなく、豫て自慢で見せられはすまいかと覺悟して來た、女王が行き惱み給ひし泥濘へ投げた、有名なあの外套もなく、煙草の新たに渡來した節、初めて用ひた煙管もなく、ギアナの山で掘り出した金塊もなく、オリノコ河畔で採集した砂金もなく、あやかるやうに(地主樣になつて、靜かな餘生を送つた沙翁ならば知らぬこと、ロオリイにあやかつては大變なれど)、お掛けなさいといふ椅子もなく、それはもう綺麗さつぱりなものでした。が、頑丈な、太い棧をあしらつて張りつめてあり、手を延ばしたら屆きさうに思はれる、黑光りの、古い槲の天井は何う見ても昨今のものではなく、それよりもまた、駈け寄らんばかりに自分の心を惹いたのは、斯うしたエリザ朝時代の住居でなければ見られない、古風なあの煖爐でした。幅も今のよりはずつと廣く、奧行もずつと深くなつてゐて、てもなく下戸棚の眞中へ爐をおいたといつた形、その左右に、これも古い槲の腰掛が一つづつおいてあり、團欒の人達は、前からばかりでなく、昔の錢湯の石榴口でも潛るやうに、戸棚の下へ入つて、三方からあたれるやうになつてゐる。斯うしたコオジイな一隅で、親しき限り打ち寄つての、冬の夜の物語など、さぞと實に偲ばれるのですし、ノオマン・ショオのハムプステッドの住居を始め、好事の建築家が、率先してその家々にこの樣式を復活し、それを土臺に、團欒の中心であり一室の基調である煖爐の意匠に一新生面を開いてゐるのも、至極の道理と肯かれるのでした。眞上の壁間に扁額が懸つて、ロオリイ三十二歳の折の直筆とか云ふ、「其處に生れしと云ふ、淺からぬ所縁あれば、何れの地を措きても、我は其地に落着きたく思ふ」との、當時の持主へ宛てた書簡の寫眞が入れてある。「本物はエキセタアの博物館にございますで、彼地へお越しの節御覽じませ」と、かれこれ他に自慢はせぬが、これで立派に釘を打つた積りで、老婦人は獨り會心の笑みを洩らす。此方もそれと點頭いて、厚くその好意を謝し、遠い國から來た者と自分の國柄をも打明けると、日露戰役當時海外にあつた日本人が、定つて受けた辭令をば、型通りにまた浴びせられ、もと來た暗い梯子段を降りて、玄關での分れの際に、「失禮なれど」と半王冠の銀貨を手渡しすれば、「これは何うも」と惡びれもせず納めてくれた。

參道を出ぬけて、自分は幾度か振り返つて、素樸なこの茅屋を見た、印象派畫家の筆か何かでこれをこのまま畫にしたらばと、つくづくまた思つたのでした――そして唯一言、「ロオリイの生家」と題したならばと――白磁古瓶に眞紅の薔薇をあしらつて、「白色の諧調」と、そこに無限の調を奏でさすやうに。

精進行

別れ

文鳥

ミネルヴァへ

戸川秋骨

精進行

エマはお父さん携帯で來たと上級生のAが言つた。エマとは私の娘の名であるが、私はさう言はれる位この旅行では脇役である。あまり東京を踏み出した事のない私が、中央線の大月驛なんて、トンネルの十數箇もくゞつて行く處まで出かけるのが既に不思議であるに、それから犬でも輸送する箱と外思はれないやうな電車の中へ入れられて、三時間近くも走り吉田口まで達したのは、實に未曾有な事である。が、これ迄は坦々たる普通な旅程で、何も別に言ふに足る事はないのである。難路は此れから先きにあるのだから、この旅行が私には年代記ものになるのである。吉田口から電車よりは一層見すぼらしい鐵道馬車に乘せられ、といふよりも、荷物と一所に御者臺に積み込まれた。馬はのそのそと車道を辿つて行く。御者が居なくても、獨りで歩いて行く。近頃平田禿木君の譯になつたディヴィッド・カッパフィルドにも馬が勝手に歩いて行く驛馬車の事が書いてあつたが、先づ私達は此處で十九世紀の初めに立ち戻つた姿だ。それでも歩かせられるのよりはマシと思つて、小さなスウト・ケイスを大事にかゝへて衝立つたまゝ引かれて行く。忽ち馬車は脱線する。降ろされる。困つたなと思ふと、脱線も早いが回復も早い。二三人お客が降りると、御者が、そのお客相手にヨイコラサとやると、車は忽ちもとの通り線の上にのる。こんな風で一里ほどの道を來て、さて此處が河口湖への道だと云つて降ろされたのは何でも畠の眞中のやうな處だ。どうしたつて言ふんだ。どつちへ行つたら宜いんだか、見當がつかない。こんな處に湖水なんぞ有りさうにもない。御者にきくと、眞直に行つて左へ曲つて右に折れて、又左へ行つて、どうとかすると、何とやらがあるから、其處からどうとかしろ、と言つたが、どうするんだか覺えられはしない。仕方がないから、宜い加減に行つて見ると、百姓家の背戸のやうな處に出てしまつた。まあ其處を失敬して通りぬけ、路次のやうな處をうろ〳〵した揚句、それでも往來らしい處に出た。例のケイスをよち〳〵かゝへて、二三度訊いてやうやく湖畔に達した。此處まで來るとなるほど東京からのお客樣らしいのが大分見える。案内書に依ると、此處から乘合の船が出るのださうだか、見渡した處そんなものは出さうにもない。もう晝だから一休みして、それから和船を艤して出かける。

河口湖は富士五湖の内にも一番手近にある。從つてその湖邊は相當に開けて居て、旅館もあり、西洋式のホテルもある。素より風景も甚だ佳い。併しまた甚だ人間臭い、都會臭い、決して山間の湖水といふ感は多く得られない。只この湖水の面をギッチラコ、ギッチノコとやつて行くのは、如何にも悠長で時代ばなれがして居て宜い。船頭は此處のものだが、東京に出て居て、夏だけ歸つて來るのだと、口を切つて東京の話を始め、私の住んで居る大久保の事などをも知つて居り、某といふ有名な人も彼處に居ますかなど、私の知つて居る人の噂さへも出し、やがてこの湖畔の名所を説明してくれる。向うに見えるのが宮樣の御別莊で、此方のが某とかいふ政友會の人の別莊、それが大倉さんのですと、一番良ささうな家を指す。なるほど良い位置に、良い別莊をかまへたものだ。何で

人は悪い事をしなければならない。悪い事をしてお金を人から捲き上げなくてはいけない。さうすると斯ういふ處に、別莊も建てられれば、華族にもなれて人から尊まれる。どんな不行儀をしても人から讚められる。よく／＼心懸けて惡い事をするものだよ、と暇にまかせて子供に言つて聽かす。他家の子にそんな事を言つて聽かしては、正直な行をして人から惡く言はれる事を好むやうな特志の父兄が、異議を言はれるかも知れないが、なに自分の子だから、眞實の事を言つて教へても差閊へはあるまい。

船頭はやがて右手に見える島を指して、あれが攝政の宮様のお休みになつて、御中食を遊ばされた島だといふ。向うから見てはどうか知らないが、水上から仰げば頗る風致のある島だ。

私達は竹生島參詣と云つたやうな氣分になつた。一度は渡の上、國は近江の江に近き、山々の谷なれてと云つた氣分。船頭はまた左の方を指して、彼處に赤松が並んで立つて居ます。あれが敷島の松と云つて、煙草の敷島の包みに出て居るのはあれを取つたものです。もう少し行つて横に見ると宛然それですといふ。なるほどさう言へばさう見えない事もないが、そんな事はどうでもよい。唯その風景は決して惡くはない。船頭はまだ／＼いろ／＼な稱讃を試したが、風景も見飽きて、退屈であるし、涼しいとは言へ、日に照らされて頭も痛み出し、少し苦しくもあるに、まだ中々彼岸には達しない。それでもギッチラコ、ギッチラコと一時間半も漕いで、やうやく向う側に到着する。船を出ると其處から十二三町の山越をするやうになつて居るのだが、この荷物をもつて山越は少し困る。が、人夫などは影も形も見えない。ますます用を達してくれさうな人すら見當らない。思案にくれて居ると、偶然側から小學校の生徒とでも言つたやうなのが二人連れで出て來た。これ幸と、この荷物を西湖まで持つて一緒に來てくれないか、お禮はするからと云ふと、子供達は一言も口をきかないで、只にや／＼しながら荷物を受取つて跟いて來てくれる。凡そ七八町も山道を登ると、その先きがトンネルになつて居る。そのトンネルのびしよ／＼した中を二町程も行つて、その他端の口に出ると、其處が第二の清水西湖の畔である。此處で子供達から荷物を受取り少許の銀貨を渡し、それで宜からうかと訊いたが、先方は不相變口を利かない只前のやうににや／＼笑つて、それを受取り、すたこら勢よく歸つて行つた。始終一言も口をきかないのであるが、要領は頗るよく得て居る。

此處が西湖の畔と云つたが、驚いた事には家は只一軒あるばかり、人と云つては幸その渡船場に青年が只一人居たのみ。水面の高さは河口湖より五十丈も高いとか、幽邃といふよりも、むしろ荒涼としてもの淒く、なるほど深山中の湖水に來たといふ感になる。見渡した限り家などはない。渡船場の青年はすぐにボオトを支度して私達を乘せてくれた。對岸は一帶に只鎔岩の岸壁をなして居り、左右は森林をなした險峻な山である。蓋し對岸と左右とは、水を距てゝ水成岩と火成岩と岩質を異にして居るのである。水は平らに波立たず、周圍の林は靜かに、全く森閑たる趣。聞えるものは、ただボオトを進める櫂の單調な音のみ。その內先方から二三人の客をのせた船がやつて來る。それが接近すると此方と先方と兩方の船頭の間に相談が始まつた。取りかへようかと此方が言へば、先方も宜からうといふ。物品の交換である。談判は一瞬の間にまとまつて、さて取引となつたが、その物品たる雙方のお客なのだから驚く。私達は茲に物品となつて、他の船に乘り移された。船頭としてはこれは至つて便

利な事だが、お客様は好い面の皮だ。それは兎に角、この西湖の方は小さくはあるし、ボオトではあり、かたぐ〜四十分を出でずして、彼岸に着いた。其處は人家も多少はあり、人間の住む處と受取れたが、さて此れからを如何したら好いのだらう。案内書きには、此處から馬車で一里とか樹間の道を行つて、精進湖畔に達するのだとあるが、馬車なんかありはしない。兎に角茶屋に休んで待つて居る事にする。がいくら待つても馬車は來ない。來た處で聞き及んで居るやうな乘合の簡單なものではないらしい。自動車の別仕立に至つては、さらに多額の金を要する。もう既に船の別仕立で汽車賃の何倍かを支拂つて居る。この上多額の支拂は少し馬鹿馬鹿しい。と云つて此處にかうして止まつて居るわけにも行かない。待つ事もう四十分位になるが、まだ宙ぶらな狀態で居る。一體なんだつて自分はこんな處までやつて來たのだ。誰れに賴まれたのでもないに。併し今更らこゝは引き返すわけには行かない。況んや自動車ならば幸に一臺あるのだから、兎も角もさうするより仕方はないと云ふので、まことにお粗末な自動車のお客になる。すると恐らく三十分も走つたかと思ふ頃、路傍の變な處で、それが止つて、此處が精進湖だから下りろと運轉手が言ふ。なるほど見下ろすと湖水があるが、人家らしいものは一軒もない。此處でどうすれば宜いんだと聞けば、村へ行くなら船に乘るのだと言はれる。いやはや又船かとウンザリする。又仕方がないから船にのる。何の事はない、仕方のない爲めに旅行をして居るやうなものだ。併しこんな度の船は極めて簡單で心持が良い。空はすつかり曇り、少し霧雨をさへ降らし始めた。がその爲めか、湖上の趣は西湖のそれにも增して幽邃に、矢張人間臭い處は全くなく、私達は全く自然の懷に抱かれてしまつたやうに感じる。斯うなると來なければ宜かつたとも思へない。船は十五分もしてその村の岸に達するとすぐに上陸して私達は目指して來た家につく。新宿を朝の五時に出で、到着が午後の五時、汽車、電車、鐵道馬車、和船、ボオト、自動車、乘物づくしで十二時間とは少し驚かされる。目指して來た家には大勢のお孃さん達が居て、劈頭に書いたやうな警句をその中の一人が吐いた。K先生が指揮官格で、赤城、正宗の兩畫伯もすでに陣取つて居られた。

この精進湖畔には古くから精進ホテルといふのがある。最早二十年以上も昔にイギリス人が——箱根の小涌谷なる三河屋に居た男ださうで——此處でその業を開いたのださうであるが、これは村から反對の側の全く離隔されて居る湖中に突出した一角に建てられた孤獨の建物で、湖畔中最も景勝の地位を占めて居る ホテルは湖の南岸にあるが、村は北岸にあつて從つて南に水面を受けて居る。村の戶數は八十、人口は六百といふから、一戶あたりが大勢になる。家は殆んどすべて蠶絲をまく枠の手製を業として居る。その枠は此處の木材で製したのに限るといふ程良好なものであるとか。それでその製作が僅かに此の村の生活を支へて行くのださうだ。湖畔には一二の旅館もあるが、此處まで來る人はたんとはない。從つて孰れもお客が無ささうに見受けられる。さすがにこんな僻地でも小學校と郵便局とはあつたが、警察署も役場も見當らなかつた。私は何處へ行つても先づ糞の處分をしなければならない、不精な人間であるが、此處には厠屋もないので閉口した。併しそれ程人間界を離れて居るのだから難有い。湖畔にはカンピングの連中が、幾組もあつて、私達の到着した時、丁度それぞれ夕食の支度をして居た。中には金が來ないので、けふは一日芋を食つてすましたなんて、湖水に浴しながら、

大きな聲をあげて居るのもあつた。

どうも私としては不思議に安眠の出來ない一夜を過して、翌日は朝から富士の方面へ行からといふのであつた。勿論登山するのではないにしても、それなら早くから出るべきを、八時近くになつてやうやく出發した。私は昨日の今日ではあるし、安眠もしなかつたので、如何かと多少の懸念はあつたものの、足だけは大丈夫と心得て居るので同行した。此處からは何處へ行くにも先づボオトで對岸まで出なければならないので、今も一行は二隻のボオトで湖水を渡り、宿の主人を東道に富士への道を進んだ。道は極めて平坦で而も樹林の間を行くのであるから、この上もなく快い。東京市中の道よりも良い位だと云つたなら、塵をつけと言ふ人があるかも知れないが、風塵を立ばさせたり、泥濘に足を取られる市中の道よりも遙かに良い。殊にそれが樹蔭になつて居るに於てをやである。それで居て知らぬ間に、一歩々々高處に向つて居るのであるから全く難有い。宿の主人に樅とかツガとかバラとか良く似よつた立木の區別その間ごなしを教はりながら行く、程なく殊更ら深い密林の間に出た。これが即ち有名な青木ケ原で一に樹海といふ富士山麓北面一帯の樹林であるさうで、行けども行けども、それは涯を知らない。やがて私達は富士の風穴といふのに來た。風穴といふのは、以前から蠶種の事で聞いて居た處であるが、もつと峻險な山腹にでもあるのかと想像して居た。高く聳えた岩壁などに穴のあるのは、よく深い山に見る處であるから、富士の風穴なるものもそんな處にあるものと心得て居た。殊にそれが蠶種を保存して置くのであるから、寒冷な處でなければならぬ點から、どうしてもそんな高い懸崖にでもあると外思はれなかつたのである。處が今殆んど平地のやうな處を歩いて來て、此處が風穴へ入る處だと言はれ、何だか誑かされたやうな氣がした。宿の主人はこの風穴の預り主で、すでに此處の蠶種はこの主人の手を經て出し入れするのださうであるから、此處では甚だ重寶な人だ。主人の世話で、一同は靴にカンジキを括りつけてその風穴なるものに向ふ。穴は素より横に延びて居るのであるが、入り口は縦に下に降りるのである。さて斯うしてその入口まで行くと、さつと冷氣が身を襲ふ。岩につかまり岩を踏んで暗い地下に入つて行く處はどうしても地獄へ行くと外考へられない。その地下へ入る途中の岩の段落の附いた處に、太い蝋燭が置いてある。各自は火の點ぜられた一本を先進者から受取り、さらに自分は別の一本に火を點じて、それを後繼者に渡すのである。かくして各個一本づつ蝋燭を手にして、中に入つて行くと、穴はすでに横になつて居ると共に、最早岩はすべて氷に包まれて居る。なるほどこれではカンジキがなくては滑つて歩けないに極つて居る。否、それをつけてさへ動もすれば滑りさうである。先づ第一に見るものは、荒けづりの板で圍まれた小屋のやうなものであるが、これが則ち蠶種を保存してある處だといふ。この邊には上方から太いツララが下つて居る。直徑は四五寸もあらうか、もう其邊は冷氣ではなくて、寒氣である。而も嚴冬の寒氣である。吐く息は煙のやうになる。その内に天井を低くして居る岩が低く垂れて、立つては歩かれなくなる、立つどころではない。身體を二つに曲げる程にしても、折々頭を上に打ちつける。大勢が續つて身體を二つに曲げて進んで行く處はまるで子を取ろ、子を取ろをやつて居るやうだ。こんな態度で進む事十間程すると、やゝ廣い處に出る。すると其の行き止りの處に、こん度はツララとは反對に氷柱が二三本立つて居る。これは上から落ちる點滴が四時たえず、それが氷つて成つたも

のだといふ。それでも夏向きは冷氣が幾分かあるもので、その[illegible]のために氷雪の[illegible]から底まで一貫した穴が穿たれて居る。その穴へ見物人の誰れ彼れの入れた名札がよく見える。主人はこれから先きはいよ／＼狭く、僅かに身體を殆んど直線にねかして通しる位で、その先きが又廣くなつて居るが、これ以上は普通の人には行けないと説明してくれる。そしてこの通り風が奥の方から吹きつけて居ると云つて、その狭い口の處へ、蠟燭を向けて見せた。なるほど焔は此方へと傾いて消えさうになる。風穴とは恁ういふ處から來た名であらうか。私達は只感心して聞いて居た。が暫らく低徊して後また這ふやうにして出て來る。地獄と云へば火を聯想するが、これは氷の地獄と云へばその概念は得られよう。嘗て秋吉臺の鐘乳石の洞穴の事を書いた時にも、私はそれをダンテの地獄に比したが、今も同じ比較を説かざるを得ない。ダンテの地獄にも罰として氷に鎖された處があるが、佛書の方にも紅蓮大紅蓮の氷にとざされといふ言葉がある。氷の地獄とは恁ういふ處から想像されたものであらうか。何にせよ冷い恐ろしさである。かくして地上に出ると山中の可なり涼しい處であるに拘らずむつとしたその暑さを感得した。

富士へ登るにはこの精進道の方面からするのが一番樂だといふ。なるほど今迄歩いたやうな道ならば、此程樂な事はない。殊に秩父の宮様が先年お通りになつた跡といふので、道路は一際良くなつて居る。なんでも險阻な道は宮様のお跡を行くに限ると思つた。私達は可なり道草を喰ひ、事實文字通り路傍の叢の内に折々熟して居る木苺を取つて味つた事もあるが、風穴を出てから一里ばかりして、富士の一合目といふに達した。この邊は落葉松の林で、四方の眺めも開けて、極めて明るい處である。此處で一同は用意の握りめしを喰ふ。大きな握り飯に小さな梅干の一つ入つたそれが此處での大饗な晝飯である。時は正に十二時。

此處でお孃さん達は大抵へたばつてしまつた。隨分弱いお姉樣達だ。もつとも此處まで來たのが、都育ちの人達には、既に豪い事なのだから、さうけなすのも惡いが、どうです兎に角二合目まで行かうではないかといふ話になつて一合目を出たが、とても行かれさうにも思はれない人が二三人出來たので、落伍者はすべて赤坂畫伯に託して、好い氣になつて二合目まで漕ぎつけたのがK先生、正宗畫伯とお孃さんが二人に、若生とエマと、宿の主人は言ふまでもない。二合目からの間は[illegible]で、[illegible]瀧を越して途中に清水を湛へた處は、日本畫にでもして見たい處である。併し此處ではあまり落ついて休みもせず、さらに三合目まで行つて見ようといふ事になり、又てく／＼と出かけた。道は以前通り頗る上等、少しの苦もなく、と云つてさう[illegible]でもないが、兎に角やがて目指した三合目に着く。此處は眺望もなにもないが、茶屋は都會風の結構な家である。隨分[illegible]るので、此處でサイダを飲み暫らく休む。處で折角此處まで來たものだから、もう少し登つて見ようと云つたものがあつた。それも宜からう、併し二人のお孃さんはもうこれ以上はやめよう、と言はれる。このお孃さんの一人は乘馬の名人で、富士廻周の乘馬旅行にも選手として出た位ださうだが、徒歩はまた別の能力である。で、お孃さんは此處で待つて居ると言はれたが、私もそれが宜からうと思つた。何もそんなにわざ／＼草臥れるにも當るまい。誰れに頼まれたのでもないから。頼まれたのでないと言へば私だつて同樣だ。加之昨日と昨夜との今日である。少し無理と云へば無理なのである。馬鹿と云へば馬鹿である。だが人間は兎

角馬鹿をやつて見たがるもので、またそれが良いのだ。あまり利口になつてはいけない。それにこれで引きかへしては何だか口惜しい。何處まで行くと極めて歩き出したのではないにしても。聞けば五合目まではこんな道だといふ。そして五合目で吉田口からの道と一緒になるのだといふから、いよ／＼行つて見たくなる。そんなわけで又兎も角も三合目を出る。この度は大人四人にエマが附いて來るばかり。少し歩き出してから、五合目よりはお庭へ行つて見ようといふ事になり、その方に歩を向ける。お庭といふのは本道を右に横に入つた處にある天然の庭園で、高さは四合目と五合目との間にあるのださうだ。

道はこれ迄と同じであると聞いたが、さて來て見ると、どうして／＼樂どころではない。もつとも高山に登るにしては、そんなに嶮しいといふ程の道ではないが、それにしても決して樂ではない。老生些か、ではない甚く閉口の體であつ。こんな事では決してお嬢さん達の惡口などは云へない。まあ、大袈裟に言ふと、十歩行つては一休み、五歩行つては又一息と云つた形である。それでもどうやら斯うやらウン／＼、セイ／＼言ひながら登つて行つた。足は只もう引きずるやうにして行くばかりだ。いよ／＼たまらなくなつて路傍の樹間に身を横たへてしまつた。周圍は所謂處女林の靜かさである。而も若々しい葉色は石楠花の薄紅に依つて彩られて居る。仰向けば、青空はその梢の間から遠くに併し鮮やかに見える。實に良い心持だ。K先生は心配して傍に居てくれるから、構はず登つて下さい、行く先きは解つて居るからと云つても、離れないで居てくれる。エマは何處を風が吹くかと云つた風をしてどん／＼登つて行く。この處親父顔色なしだ。が、どうも怎うして仰向けに身を投げ出して居る心持と云つてはない。その良い心持の結果は眠りを催して來る。私はこのまゝ眠つてしまひたいな、なんならこのまゝ死んでしまへれば猶更ら良いが、と云つたらK先生も笑つて、當人は良からうが、はたは迷惑ですと云はれた。全くさうに違ひないが、他人の迷惑なんぞ、いくらでも我慢する。私は花の下にて春死なんと願つた西行よりも、高い山の樹間で死んだ方が餘程贅澤だと思つた。併し斯うしても居られないから、こんな好い氣持だけを只ほんの瞬間だけ樂んで、すぐに一行の跡を追つて、また休み／＼やうやくにしてそのお庭なる處に到着した。この邊はもう石楠花の林と云つて宜い位である。それが今丁度眞盛りであるのだから、寂たる山中悉く紅と云つた趣がある。お庭なるものは、要するに鎔岩の錯雜して横たはつて居る間に、矮小の赤松と石楠花との入り亂れて生ひ立つて居るので、なるほど人工を加へた庭園の趣をなし、一寸奇觀である。自然が人工を凌がんとして居るとでも言つたら良からうか、少し逆な話ではあるが。

さらに仰げば富士の峯は目前に屹立して此方を壓迫して居る。その姿が甚だにく／＼しい。一體富士つて山は怪しからん奴だ、遠方から見ると勾配もゆるやかで色合も良い。しをらしい姿をして居るが、此處まで來て見ると頗る峻嶮な急勾配をなし、その色と云つては毒々しい赭色を帯びて居る。火山だからそれが當然なのではあるが、何にしても人を欺く事甚しい。半死半生の體で折角此處まで來たのに面白くもない。富士なんかにもう登る事ではない、なんて云ふのは要するに負け惜みか、以て此處まで來るにどれだけ骨が折れたかを證明するものである。併し全く富士といふものに對する幻想は消えてしまつた。半死半生の骨折は、現實の暴露といふ賜物を與へてくれた。私は北齋の描

いた富士が、綺麗に色勾配で赤い色をして居るのを傍らから眺つて居たが、今日初めて、北斎の絵の寫實で、その實際を誤れて居ない事が解つた。これも今日の獲ものの一つである。そんな事を考へて居る内正宗畫伯はもう早く歸らないと夜になつて足許があぶないと初めて氣がついて注意してくれた。今居る此處は海拔何千尺といふ高處なので、もう五時半といふに、日の光はまだ赫々として二時三時の趣がある。爲めに私共はうか〳〵して居たのであるが、此處から精進まで約四里半の道程、それを五時半から始めるとして、到着は十時か十一時になる。あの山道の而も樹林の間を、燈火も無しで行かなければならないのだ、而も足弱のお嬢さんも居る。これは急がずばなるまいと、今更ら驚いて飛ぶやうにして此處から下り始めた。鎔岩の碎けた砂利を積んだやうな嶮處では止め度なく足が滑つて、谷底へ轉がり落ちるかと思つた程であつた。そんな風にして進み〳〵三合目まで歸つた時は六時を少し過ぎて居た。此處で待つて居た二人のお嬢さんを伴つてさらに行手を急いだ。一合目まで來た時には全く日が暮れてしまつた。宿の主人は風穴まで歸れば提灯があるからと云つて、其處までの一里の道程をまたスタコラと急いだ。もう此邊は例の青木ヶ原で、木下闇を──と云つて月は出て居たのであるが、梢に蔽はれて光は足許まで達しない──辿つて行くのである。一行只默々としてはた〳〵と靴を踏む音のみ聞える。その内に漸く風穴につく。此處からはあと一里二十町で、提灯が得られるからもう心配はないといふので一安心する。處がそのあてにした提灯はないといふ事で、宿の主人は穴の中で點したあの太い蠟燭を厚紙で覆つたのを二個持つて來て、それを提灯の代りに捧げて行く。今はもう只足許だけに氣をつけて行くのみである。そしてこの心細い燈火をたよりに一行いよ〳〵默り返つて急ぎ足です〻む。足の疲れは勿論であるが、それよりも暗がりの不安の方がもつと困る。と云つて如何する事も出來はしない。家などは一軒だつてありはしない。只勢をつけて進むばかり。もう何町歩いたらう、あと幾町あるのだらうと、そんな事のほか何も考へては居ない。その内にやうやく渡船場まで辿りついた。時はもう十時に近い。見るとかねてどんなに遲くなつても歸るからと宿の主人が約束して置いた船子は私達を待つて居てくれた。普通ならもう疾くに渡しを引き上げて居る時であるから、この注意が懇切になかつたなら、私達はまた二十町も歩かなければならなかつたのである。此處で私達は生き返つたやうな心持で船にのり、十數分で向ふ岸につき宿に歸つた。歸りはしたが、併し疲れ切つて、私はもう食事も咽喉を通らない。僅かに入浴だけして寢てしまふ。

重ねて言ふが、山登りなんて、全く馬鹿のする事だ。私は一合目で引きかへしたお嬢さん方の賢明を賞せざるを得ない。骨折つて高い處へ行つたとて何の面白い事があるものか。そんな事をするよりもぶら〳〵適度に道草でも喰ひながら歩いた方が、いくら好いか知れない。しかし前に言つた通り、これはどうしても負惜みが言はせる愚論かも知れぬが。

次の日は又ハノラマ臺といふのへ、K先生が私とエマとを案内するといふので、昨日のことは忘れたやうに、こりずまた出かけて行つた。パノラマ臺といふのは、精進湖畔の一つの峯の頂きの開けた處で、近くは眼下の精進湖から樹海、遠くは遙かに北の方アルプスの連峯を見るべく、快晴の折などは信州の高地を走る汽車の煙をさへ見る事が出來るといふ處である。而もこの臺にのぼる道程は二十三町だといふ。

但し可なり峻しい二十三町ではあるが、いづれにしても大した事ではないといふので、私達は勇んで登つた。いかにも登りは峻しくはあるが、絶頂へ達するのもわけはない。來て見るとなる程その名に反かない。精進湖は眼下にあつて、小さく蟻のやうにその上を動いて居るものはボオトである。南西の方を見れば本栖湖がこれも眼下に見える。さらに精進の先きには西湖が横たはり、そのさきに翠緑の間に河口湖が静かに眠つて居る。若しそれ青木ケ原の樹海に至つては、文字通り樹の海をなして廣袤幾里にも亙り、上記の諸々の湖畔にまで及んで居るのが瞰下ろされる。富士は東南の方にその高峯を雲の間からつき出し、その下には大室山といふのが行儀よく奈良の春日山と云つたやうな姿をして、副火山らしく控へて居る。西北の方は即ちアルプスの方面であるが、今は雲深く、ただ遠山の重畳として居るのが朦朧と窺はれるばかりである。但しその朦朧たるのが却つて[illegible]のないわけでもなかつた。[illegible]はやがて[illegible]を取り出し、南西の方なる本栖湖に突出した[illegible]半島[illegible]を見下ろし、その彼方の[illegible]出した[illegible]を主とし、[illegible]の山々と湖水の面とを[illegible]の上にうつ[illegible]。この半島には

やがて離宮が置かれる予定になつて居るのだとか。畫伯が寫して居る間にも、雲は來りまた去り、光景は刻々に變化するが、時刻の移るにつれて雲はだん〳〵に深くなる。あまり時刻が移つては昨日の轍を踏む恐れもあるといふので下山したが、それでも可なり長時間を此處に過した。

宿に歸ると正宗畫伯も一二の獲物を携へて歸つて來られる。晩食になる。晩食はいつも同じ味噌汁と鯉のあらひである。鯉のあらひは此處で大した御馳走であらう。此處でなくても都でも御馳走である。が閉口する事には骨がよく取れて居ないので安心しては喰はれない。その上いくら御馳走でも毎日同じものでは少しく辟易する。味噌汁に至つては都のとは全く趣を異にしたもので、一寸私には形容の出來ないものである。都育ちのお嬢さん達は、此食物には閉口して居るらしい。殆んど何にも箸をつけぬ人が多いらしい。何れも携帯の罐詰で僅かに食をすまし、その間にはこれも用意の菓子を間食にして居る。實は漬ものとても多くはない。湯茶も澤山にはない。といふと如何にも淋しいやうであるが、決してそんなわけではない。のみならず事實はその反對で、主人は非常な好遇をして居るのである。その出來るだけの歡待をつくして居るのは様子でも察しられる。が何にせよこんな僻村の一家に十數人のお客様であるから、特別に人を雇つてあるに拘らず、物資の乏しい此處ではこれ以上の待遇は不可能であらう。事情は誰れも汲んで居るが、何分お姫様達には、こんな生活と食物とは堪へられない。可笑しくもあり、氣の毒でもある。その中で獨り食事毎に、うまい〳〵を連發して喜んで居る、若しくは喜ばしさうにして居るのはK先生で、先生が果してどれだけうまいと思つて居るのかは私には解らないが、あゝ口で言ふほどうまがつて居るのでもないらしい。まあさうでも言はなければお嬢さん達が一層辟易すると思つての一つの方便であらう。眞實にあんなものをうまがるのなら、私は先生の人格を——馬鹿！　冗談言つちやいけない、食物と人格——又私のパラドックスになりかけた、やめませう。が私は天下に何も望みはない。うまいものさへ喰つて居ればそれで満足する。而もそのうまいものたるや、世間の人の言ふやうに難しいのではない、また通などとは私には薬にしたくもない。只、西洋式ならば良いパン、日本流ならば炊けた米の飯と香のも

か、それで澤山なのである。すると論理上それだけが天下に於ける私の望みであり、願ひであるわけだが、果してさういふ結論になるならそれでも良い。こんな事を考へると私はワアッワアスなんぞが、湖水の畔で何を喰つて居たらうと下らない事を考へたり想像して見る。食物となるとすぐ私は議論をしたがる。食ひ癖が悪い、か、さて今の場合、私は此處の食物がうまいかと訊かれたら、先づ私はうまいまづいと云ふには、いろ／＼な條件が出て來るからそれを考へなければならない、とさう云ひたい。その時の事情、腹の工合、氣分、たべ方、器物等、食事にはいろ／＼な條件がある。また議論を始めた。兎に角私は今の食事をうまいとは勿論思はない、が空氣などのせゐもあらう、運動の盛んな點もあらう、どんなものでも結構なのであつたから、この食事もまづいとは思はなかつた。たゞK先生のやうに積極的にうまいとは義理にも言はれなかつた。K先生のうまい／＼も如何かと思ふが、お孃さん方の空腹にも拘はらず、これが口に入らないに至つては寔に氣の毒である。もつて生れついた都會風に加ふるに習ひ來つた性を以てするのであるから、これは致し方もあるまい。何事もさうであるが、趣味も過不及共に不得である。

翌日は自由行動にするといふので、私は草臥を休めるために、家でごろ／＼して居た。する事もなくて居ると、いつもさうであるやうに、こんな處へ來ても、私の頭は回顧に傾く。

私は一緒に來て居る上級生のYに話しかけた。私が十二三歳の時、京橋の數寄屋橋附近に住んで居たが、其處の堀割に向つた町の角の處にYといふ家があつた。あなたは定めしその家は知るまいが、それがどうした理由か、あなたの家のやうな氣がしてならないのだと、例の癖を出して訊いて見た。するとそれは果してYの家で、自分はその家で生れたのだといふ事であつた。私はよく／＼その家の前を通つて、その兩方の門柱に打ちつけられてあつた名札を今もはつきりと目の前に浮べる事が出來る。それは優しいやゝ御家流とでも云つたやうな字で、楷書で行儀正しく書かれてあつた。昨日今日の事はすぐに忘れてしまふが、凡そ四十年も前のこんな事は却つてあり／＼と覺えて居るのは不思議である。私の回顧はそれからそれへと移つたが、今これも此處へ來て居るトンチャンの家――と云つては失敬だが、みんながさう言つて居るから、私にもさう言はして貰はう――その方が親しみもあるから――そのトンチャンの家もその邊にあつたので、その頃よく、私はお使にやられた。その時其處に居たおぢいさんの顔も今猶朧ろに思ひ出される。それから今同席のタッといふ名のお孃さんの家も知つて居た。これはもう商賣になつてからの事であつたが、折々其家に出かけたものであつた。その子供時代のさうした家々の子達と、今日の自分が斯うして一所に、こんな山の中に來て居るのも何かの緣だらうと、少し佛臭い考へになつた。けふは本を讀んだり、こんな空想に耽つたりして、一日を過してしまつた。

明日は出立といふので、みんな荷物の片づけを始める。宿の主人は正宗畫伯の製作を荷づくりするために二人の若い人を指揮して世話をしてくれる。主人は正宗畫伯を先生々々と云つて敬意を表して居る。私も先生だから先生と云つてくれゝば良いがなあと黙つて居るが、一度もさうは言つてくれない。先生と言はれるにはどうも畫を描くに限る。惜しい事をした。併し私には口惜くても一筆も書けない。こん度來る時の間には合はないが、こん度生れたら畫家にならうと思つた。こん度生れたらは、甚だ氣の永い話だが、萬事はそれ位ゆつくり考へなけ

りで駄目だ。

さて最後の日が來た。しやうも往き道のやうに乘りこみ出しに、折々山道を歩かせられた分には、この大勢でとても荷物携帶ではやり切れまい。いや不可能の事だ、といふので自動車でといふ事になり、それも中央線でなく、御殿場まで一息に出ようとなつて、多人數ではあるが、それを二臺に分乘する事にした。豫定の時刻を後れる事三十分ばかりで、一臺が來、さらに十分程後れて、次の一臺が來た。それが十時に近い時であつた。私の乘つたのは後れた方の一臺であつたが、進む事十分位にして車は忽ちパンクしてしまつた。この邊の自動車はみなやくざなものばかり使つて居ると見え、故障ばかり起して居るさうで、パンク位は素より覺悟の前だ。時間もそれを豫期して餘裕を取つてあるのだから驚かない。完全な修理には二十分位を要するが、この先きに御殿庭といふ天然の庭があるから、其處を見物して居てくれろ、その內には[illegible]完全に整つて行くと運轉手がいふ。どうせ仕方もないから、その言ふまゝにおとなしく、十五六町も歩いて行くと、なるほど路傍に自然の庭と思はれる處もあつた。丁度富士のお庭を縮小して、熔岩が具合よく露出した間に、若木が茂つて居るのである。が、富士のお庭よりは遙かに見劣りがする。石楠花の紅のないだけでもかれには及ばない、況んや規模が小さい。尤も、この路の傍には腰掛なども設備されて休息の出來るやうになつて居るので、其處に腰を下ろす、甚だ悠長なものだ。併し其處でキヤラメルを一個口に入れたかと思ふと、忽ち自動車がやつて來たので、すぐに飛び乘つて、すぐに飛ばす。こん度は故障の起りさうもない樣子だ。行く道は、樹海の一端を通過し、或は廣びろした野原に出で、或は松林の間を行く。その間の風光の變化は、まことに應接に暇のないほどで、殊にその中心となつて居るものは富士で、すべてがその裾野の內に連續して居るのである。中には心持の良い平原がある。こんな處に住んだらば面白からうと云つたら、誰れかが此邊も今度設立される土地會社の分讓地となつて居るのだと敎へてくれた。如何にも其邊は人間臭のしない處なので、[illegible]く感心して居ると、運轉手はこの邊のものださうだが、口を出して、以前は山賊がこの邊の洞穴に住んで居て、里に出沒し、自分のお爺さんなんかはそれに縛られた事さへあつたが、今ではもうそんな事はないといふ。山賊に出られては大へんだ、先日行つた富士の風穴の邊には熊が出るさうで、宿の主人も一度ならずその姿を見たと云つたが、良い處で人間臭もないと思へば、そんな物騷なものが出る、どうもさう良い事はないものである。兎角する內に自動車は里近い處に來、やがて鳴澤といふ此邊での要所である村に入る。其處を通過して暫らく進むと、こん度は河口湖が見えて來る。湖上から遠望された數島の松といふのも見えて來る。前に通つた細い狹い町を自動車でうねり〳〵、ゆる〳〵と通つて、やうやく町外れに出ると、先發した自動車が其處で例のパンクをして停つて居る。私共はそれに乘つて居た正宗白鳥氏の、困つたと云つた樣な顏付をして居るのを、如何にも同情が無ささうな笑顏をして見下ろしながら、横を通つて行つてしまつた。

自動車は吉田口への街道を横切つて富士登山口なる淺間神社の前を過ぎ、これこそ眞に見るとも言へる平坦々たる道を走つて東南の方へ進む。その內に山中湖が見えて來る。これで私共は五湖を悉く見たのであるが、五湖それぞれの趣があり、この山中湖は一番明るい感のする處と思つた。從つて行樂の場所としては此處が尤も適して居るかも知れない。次では河

口湖も好適の處と思はれる。併し前にも言つたやうに、山の奥なる水の眞價を味はうとするには――そしてそれが山間の湖水の特長であらうが――西湖から奥、精進、本栖まで入らなければなるまい。自動車は暫らく、左手に山中湖の瞥見するのを見て、だん／＼登り坂にかゝる。その内に運轉手はもう此處が峠だといふ。峠とは籠坂峠の事であるが、併し其處は一向峠らしくなく、只少し許り勾配が急になつて居るのみで、先づ平地と異ならないと云つても宜い。籠坂峠の形勝はかねて聞き及んでは居たが、ここでは如何にも平凡な處だと思つた。すると忽ち道が一曲折すると、忽ち身は幾百丈の崖ぎはにあるのが解つた。車外を見ると道は平らな頗る良い道であるが、それが紆餘曲折して、遠い／＼遙か下の谷底にまで達して居る。直下に見下ろしたら――何と云つて良からう、金輪際に及ぶとでも言ふ處か、深く低く、その及ぶ處を知らぬやうである。同時にこの谷を間にして彼方に富士の裾は、遠く遙々として、これも涯を知らず、やがて伊豆方面の諸峯に連つて居るのであらう、その末は雲か山か、それとも海か、いづれであるか全く見分けがつかない、廣さと云ひ、遠さと云ひ、また深さと云ひ、文字通り、目の覺めるやうな光景である。先づ雄大とでも常套の語を用ひて片づけてしまふより外仕方はあるまい。私のやうな貧弱な筆の持主にはこれ位雄大な景色を見た事がないと言つて置くより、敍述の法を知らない。車はこの頂上からうね／＼と曲折して、上段の道と下段の道とは指呼す、出來さうな程接して居るが、而も其處まで達するには少くとも數町を走らなければならぬ。そしてその谷底に達すると、それが須走口への本道になつて居るのであるが、この急坂の中途に山梨縣と靜岡縣との境界がある。谷底に達して後は全く靜かな清閑な田舍道になり、須走以下二三の瀟洒な村を過ぎ、十二時を過ぎる二十分ほどに御殿場に着く。

　が、あのパンクした先發の車はどうしたらう。待てど暮せどやつて來ない。自動車の輻輳する、そして富士の登山者でにぎはつて居る此處に、自動車の音のする度に、それかと眼を睜つて見るが、一向やつて來ない。もう一時間も經つが、また來さうな樣子もない。殆んど待ちあぐんだ後、私達の車の運轉手は迎へに行つて來ようと行つて出かけて行つた。私は多分の心配を抱き始めた。あの坂道で何か異常な事でもあつたのではないかと、さうでない限りはさうしてもう來なくてはならないと、[illegible]はさう結論させる。私達はもう汽車の時刻も迫つてしまつたがまだ來ない、殆んど二時間も過ぎてしまつて居ると、やうやく一台の――出發の時のとは異つて居る――自動車で一同は到着した。待つ身につらきといふのは良く言つた文句だ。聞けばパンクする事前後三回、殆んど顚覆せんとする事一回、吉田まで引きかへして車をかへて、やうやく斯の通りとある。まあそれでも無事に來られたのは幸と、豫定の汽車に乘り込んだ。汽車に乘り込めばもう安心、同時に平凡で、何も記事はない。精進行並に富士北麓の迂回旅行は大略こんなものであつた。

別れ

重い足を曳きずり曳きずり今やこれを最後に、その門を潜る事になつた。左手にある葡萄棚、右の片隅に立つて居るジャンヌ・ダアクの立像、雨天體操場、塵をとゞめぬまでによく掃除の行き届いた廊下、それ等は一々みな六年前から今日に至るまでのいろ〳〵の事を想ひ起させるものである。

さうだ、やうやく學齢に達した娘をつれて、その校門を潜つたのは、もう六年前の事であつた。女の子の學校であるから、父親の附き添つて來て居るのは、甚く少數で、大抵は母親か若くは姉らしい人が連れて來て居るが、それが又大抵は、相當な資産家階級若くは名家に屬する人柄に見えた。いづれも初めて學校へ入學させるといふ喜悦に充ちた顔付で、樂しさうに、嬉しさうに話し合つて居る。互に私語のある人同志が多く、特に打ち解けて話して居るのも少くはなかつた。やがてそれ等の人達は子供に附き添つて講堂へ集つたが、講堂では素よりその伴つて來た子供とは、席を異にして居たので、誰れの面にもやゝ不安な色が見えて居た。その内に主事とでもいふやうな婦人が講壇に立つて、新入生を迎へる言葉につゞいて、當人達の心得は勿論、保護者たる人達に對しても、それぞれ注意を與へた。その注意の數々は可なり多かつたが、主事が一々の件を言ひ終る度毎に、母親らしいその保護者達は一々丁寧に頭を下げるのであつた。丸髷の人もあるにはあるが、多くは新式の髪の結び方で、上品に化粧をして居り、服裝もそれに相應した三十歳あたりから五十歳前後の婦人で、普通ならば小學校の先生などは、眼中に置きさうにもない人達らしく見える。それが又一々丁寧に頭を下げるのが如何にもしをらしく見える。子供は大事なものと見える。こんな所に人間の本性の見えるのも嬉しく思はれるがまた可笑しくもある。中學や大學の入學試驗の時、少しの手づるでも求めて、菓子箱位を提げて、叩頭して學校關係者の許を父兄の頼んで歩くのは、よく聞く處であるが、二錢三錢のお賽錢を投げて、家内安全、商賣繁昌といふ蟲の良い事を祈ると同樣、實際菓子箱位の訪問が何の役にも立たないのは解つて居るに、なほ且つ左樣して置けば少しは安心があると見えて、そんな事をするのも、寔に子故に迷ふ親心の止むを得ぬ處であらう。隨分氣位の高さうな婦人達が、小學校の先生の前にこれ程つゝましやかになるのかと思ふと、不思議でもあり亦面白くもある。

そんな注意の數々がすむと、こん度は全く親達とは別の處に、子供は、同連れて行かれたが、その時親達は全く不安に襲はれたやうな樣子であつた。片時親達若くは附き添の手許を離した子ではないのである、それが初めて單獨になつたのである。どうなるだらう、先生の話が解るかしら、ハンケチをもつて居なかつたが、紙を渡してやるのを忘れた、などいろ〳〵な懸念をもつて居る樣子があり〳〵と見られる。それは如何にももつともな心配で、四十人か五十人の子供の中には泣き出したのもあつたのであるから、家に居れば頭の[illegible]から足の先まで、起きるも寢るも朝から晩まで、人手を煩はして居た相當以上の家の子達であつて見れば、生れて初めて親と離れては、不安に相違あるまいが、丁度それと同じ程度に於て親も不安であ

るのが當然である。併し父子供の方は案外平氣でもある。

珍らしい新らしい場所に、新らしい事を見聞するので、好奇心に滿されて居るその幼な心は、この單獨を樂むやうな趣も見えた。いづれも七歳八歳の可愛らしい事この上もない年頃である。さて、一時保護者の手から離された子供達は、やがて戻つて來たが、その兩方の頰に喜悅と滿足とが輝いて居た。その上上級の生徒がまた妹でも世話するやうにいたはりながら、この新入生の用をしてやつて居る處は、さながら一種の樂園である。

これは則ち六年前の事であつたが、この新入の日以來、雨につけ風につけ、自分は子供を學校まで見送つてやつた。學校用品の調達は素より、着物や靴の末に至るまで一切世話してやつた。隨分頭髪の世話までもした。學校の門を潜る事も、それから幾度であつたらう。その結果は子供の同級生の誰れかれとも知り合になつた。初めの入學式の際に察した通り、その父兄達はみな相當以上の人達である。その内には大臣もあり、資産家もあり、實業家もあり、華族もあり、大將もあり、孰れも所謂身分のあるものばかりで、自分のやうな細民はないと云つても宜い。たま〳〵知事階級位ならばと思へば、そのお爺さんが矢張資産家であつたりする。兎に角自分はその子供達と親しみが出來て、娘の友達はまた自分の友達であるかのやうになつて來た。

恁うして長い六年の歳月は忽ちに過ぎ去つた。そして今や當時の子供達は揃つて其處に連絡してある女學校に進む事になつた。自分は小學校卒業の式にも列した。六年前に其處へ來た保護者は、矢張以前とあまり異らない風貌をして再び其處に列席して居る。併しこの度は誰れの顏にも不安は見えない。みなはれ〳〵した嬉しさうな顏をして居る。この卒業生の作物――繪畫を主として、編物や細工もの、裁縫等が陳列されて居る。その間を母親や姉さんらしい人達が、互にけふを喜ぶやうに話し合ひながら歩いて、自分の娘の作品の前へ來ると際立つて目を睜る。併し私はこの際に於ても少し不安に捉はれて居た。幸ひにして過去六年間は事なく過した。娘は私の望んだ通りに、最初はあまり上席にも置かれなかつたが、日を經るまゝに、月を重ねるまゝに上進して來て、最後のけふは最上の席まで來て居た、それでけふは答辭を述べるのだと言つて居た。その點は私とても喜ばしいのである、がそれでも自分は不安な氣分に甚しく惱まされて居た。第一これ等の同五十人が立派に生長したのは既に當然の至りであるに拘らず、六年前のやうな可愛らしさはなくなつてしまつた。やむを得ぬ自然の成行であるが、それが惜しくてならない。併し私の不安はそんな事ではない。もつと自分に直接關係のある事で、自分の考へと娘の考へとが異つて居るのではないかといふそれであつた。作物展覽の室でA君の奥さんが、お嬢さんはお茶の水へお入りになるのださうで御座いますネ、と言はれた。私は少し返事に窮した。それを否定したら、では何處か他の學校へお入りの御つもりで？と言はれて、私はいよ〳〵返事が出來なかつた。これが私の不安の一點で、それかためにたゞ何とはなしに惱んで居たのであつた。その内に式は開かれ豫定の順序は進んで、娘の答辭になつた。どうも家に居ては朝目を覺ましてから寢るまで、弟と喧嘩をする事ばかりを日課として居るやうで、日々の學課は素よりけふの答辭の事などはおくびにも出さないと云つた風であつた。而も草稿なしでそんな文句が言へるのかと、私は多少の疑懼をもつて居たのであるが、驚いた

事には思つたより靜かに落着いてよく、それを述べ終つた。私はそれに案外な思ひをした。後でフロックコオトを着用した堂々たる保護者の一人が、私がその親であるとは知らなかつたのであらう、どうもアノ答辭には泣かされました、云々と私に向つて言つたのには、正しく恐縮せざるを得なかつた。これには前のA君の夫人の間にも增して挨拶に窮した。兎に角こんな事で式は終り、一同は分散したが、それでも私の不安は終らなかつた。

それから二三週日にして女學校への入學式があつた。私は又もそれに列席した。此處でも父兄へ新らしい入學に就いての注意が傳へられた。併し小學校の時ほどそれを傾聽して居るものはあまりないやうである。式がすんで後、新らしい教科書は買ひ調へられた。一學期分の月謝も納付した。子供達はみな晴々として新らしい講堂に入つた。新らしい學課が授けられた。新らしくこの四月に外から入學試驗の關門を通つて這入つて來たものもあつた。その中には私の知人の子もあつた。いづれも新らしい學業に就くのを喜んで居たのは當然な事である。只私の娘のみはさしてそれを喜んで居る風もない。そして折ふし、あれは私の關係のある學校に入りたいといふのである。私は折角この連絡の出來て居る學校をすてゝ、他の學校に行く事の、一方に於ては甚だ贅澤な事であり、一方にはこの學校當事者の感情を害ふ事などを思ひ、さては六年も世話になりまた一緒に學んだ仲間と、袂を別つ事の、不人情にも見え、忍び難い事などをも考へて、その由を娘に言つて聞かせたが、どうも一向に納得する樣子もない。何故學校につゞけて居るのがいやなのだと聞けば何故……學校へ轉ずるのが惡いのだと逆襲して來る。その理由を言つて聞かしても承知しない。みんな私の好きな人が他へ行つたからといふのが、娘の第一の理由である。なるほど尤も仲の好い一人は、入學試驗の難しいので、日本一の評判のある學校へ、首位よく入學してしまつた。他の一人はこれも亦貴族的なので日校一と言はれて居る某學校へ轉じた。そんな人達は娘が特に親しくして、一種の聯盟をつくつて居た連中であつたのであるから、或は娘が他校へ移りたいと云ふのはその關係が事實唯一の理由で、他に何にもなかつたかも知れない。いづれにしてもこれ迄のやうに學校を樂しまないで、殊に學期からは……學校へやつてくれと言ひ張るのである。

私はこんな事情に辟易して、密かにそれとなく……學校の當事者にそれを話して見たら、どうせ轉校するものなら、早い方が良いかも知れないと云ふ事であつたので、すぐにその手續きをしにかゝつた。それでも私にはなほ苦しい不安があつた。學校は何處でも良いやうなものの、それでなくとも少し女らしからぬ性質の自分の娘の、不羈奔放な教育を受けてはなど、日頃口には自由放任を說いて居ながら、自分の事となると、甚しく保守的な考を逞しくする。どうも私共の考は純眞ではない、さうしていつも傳統の力に支配されて居る。甚だ憾むべきものだ。然し併しそれよりも私には六年間も一緒であつたにといふ執着が強く働きをなして、子供よりも私の方がこれ迄の仲間のものと袂を別たせるのがいやなのであつた。甲の子は可愛らしく玉のやうであつた。乙は活潑であつた、茶目であつた、丙は[illegible]い子であつた、誰れは利口であつた、彼は頭が良かつた、と云つたやうに追憶が頻りに浮んで來る。初めて入學式の日に娘がカバンを肩から下げて行つたら、先生である仲間の婦人が、マア可愛い[illegible]、[illegible]して、[illegible]持つて來たので[illegible]、と云はれたのも[illegible]居るが、なん

な[illegible]事まで私には思ひ出されるのである。當の娘には執着も何もない、淡泊極まるに拘らず、私には此處まで來てもまだ決しかねるやうな氣がしてならなかつた。

その内に實業方面で可なり成功をした昔友が久しぶりで尋ねて來た。この男は中學の同窓時代から野心に充ちて居り、同時に世間を上手に渡る術を心得て居たので、苦學の當年から、成功の今日まで、巧みにいろ／＼の業にたづさはつた實用の知識を澤山に持ち合はせて居る男であつた。話は青年時代の事から、一家の事に及び、子供は幾人居るの、何處の學校へやつて居るのと、互に話し合つた。すると何事も利害から打算し判斷するこの男は、娘の學校を聞いて、アノ學校なら申分はない、學習院かアノ學校が一番だ、後に嫁入りの話が出るやうになると、彼處は第一に指を折られる處だと、さう露骨に言ふのであつた。私はこの學校の他間の良い事までは、これ迄考へた事もありはしたが、嫁入如何の問題までは考へて居なかつたので、さう言はれてなる程それも左樣だナと初めて氣附いた。さうして私の躊躇は一段強くなつた。

それで私はこの際に及んで今一度娘に考へて見るやうに言つたが、娘は素より[illegible]などはしたい。早く退校の手續をして[illegible]と云ふのである。未練もない、利害の考へなどは素よりない、私すら考へて居なかつた嫁入問題などの夢にでも入つて來さうな筈はない。子供の心は真直である、純眞である。私はそれが羨ましくなつた。どうして私はかう徹底しないのであらう。決心の鈍い人間なのだらう。こんな風で子供のいつも純なる考を持つて居るに感心してしまつた。利害打算などは業にしたくもない。仕方がない、こんな思ひ切りの良い、さうして勝手な眞似をするのが、この子の天賦なのであらうと、私はさう諦めて豫定の通り學校をかへさしてしまつた。そして女學校の當事者を訪ねに、届書を渡すために、今やこれを最後と學校の門を潜つたのであつた。當事者に遇つて、感情を害はぬやうに懇談した處、先方も酷く退校の事を惜んだが、それは子供の氣分も考へておやりにならないわけには參りません、それが大事で御座いますから、親の心と子供の氣分とうまく合ひません事は間々ある事で御座いましてと、當事者なる老婦人は如何にも經驗のある人のやうに言つてくれた。私はその時、親と子との考の相違から生ずる淡い悲しみと寂しみを感じないわけには行かなかつたが、而も娘は學校をかへたに拘らず、平氣で此處の誰れかれと、以前同様に交遊をつゞけて居る。

文鳥

時計が諸く、安直に買へるといふのを聞いて、自分も一つ買はうと志した。併しいくら安價に買へた處で、自分如きものには、さう大して上等のが買へる筈はない。それでも好い氣になつて、これ〳〵の程度で、一個世話して貰へまいかと、其方に關係のある某君に依賴に及んだ。某君は直ちに快諾してくれたが、今丁度適當なのがないから少し待つてくれと云ふのであつた。これは飛んだ迷惑をかけた次第であつた。多分自分の提出した條件で困つたのであらう。よせば良かつた、何もそんな氣がねをしてまで時計を買ふ必要もないのだから、併しことに依ると、今適當なのがないと云ふのは、體の良い斷りかも知れない 仕方がないから打棄つておけと、そのまゝにして置いた。すると果して一月經つても二月經つても、適當なのが實際ないのか、何とも消息がない。蓋しそんな安價で工合の良いのがある筈はない、それは素と素と自分が惡かつたのだ。矢張相當な代價を拂はなければ、相當なものは手に入らない。いくら問屋では安く卸しても、小賣の價にはそれ〳〵の理由があるのだと、さう思つて時計の事はもういつか考から逸してしまつた。なほそれを買ふべき金の懷中から逸し去つて居た事は勿論の事である。

それから三月だか四月だか、兎に角忘れる位な月日が經つて、ヒョックリ某君がやつて來て、丁度適當なのが出たから何時でも來てくれろといふのである。一寸ことわつて置くが、私は出たといふ言葉を用ひたが、それは決して手頃な古ものが出たといふ意味ではない。新らしいものである事を承知して置いて貰ひたい。そしてなほ重ねて言ふが、某君には餘程迷惑をかけたに相違ないと思ふ。何故ならば私の賴んだやうなものを得るまでには三四月もかゝつたのであるから。處でさう親切にされて見ると些かきまりも惡く、實は迷惑でもある。何となれば大事な金といふものを、再び整へなければならないからである。併しいづれにしても左樣言つて來てくれたものを、今更ら要らなくなつたとも言へないので、可然禮を言つて、日を期して買ひ取りに行く事を約束した。

代價はどれほどであるか解らないが、兎に角これほどあれば足りようと思ふほどの金を用意して出かけた。それほどで足りようとは思つたが、多少懸念はないでもなかつた。併し某處で毎月受取るべき金がある、その支拂を受ける期日はもう疾くに來て居たので、途中是非右の某處へ立寄つて行くべき用件がある故、其處で金を受取るのであるから、金についての心配は實は少しもないわけであつた。處でその某處へ立寄つて見ると、この月はまだ支拂をしないらしい――此處では支拂期日が定めてありながら往々實行されない事がある――併しそれでも現在所持の金で不足はあるまいと信じて、某君の居る店へ行つた。買ひものをするのであるから立派なお客樣であるに、何だか氣がさして、少し肩身の狹いやうな感がした。某君は居ますかと聞くと、今居りませんが、晝食を喫ひに行つたのでせうといふ。なるほどもう晝だ、自分も何處かで腹をこしらへなければならないナ、と初めてそれに氣がついた。それならば時間潰しのため、この店からすぐ近くの三越へ行つて見ようと、再訪を約して其處を出た。それから

三越へ行きはしたが、別に用もないので、丁度昇らうとして居た昇降機の中へ入つた。何處で下りるといふ宛もないので、その行く處まで引つ張られて行つたら、それは六階であつた。昇降機を出てたゞ宛もなく歩いて行くと、花を並べてある處に出た。これは丁度好い處へ來たと思つて、その室の中へ入つて見ると、花よりもさらに好いものがある。いろ〳〵な禽鳥を籠に入れて並べてあるのが、實に綺麗で心持が良い。所題の文鳥の出て來る玄關が馬鹿に長かつたが、此處で初めて文鳥に御目にかゝつたわけである。

禽鳥の中では文鳥は羽根色の美しい鳥である。囀る聲にはあまり取り柄もないが、夏目さんの『文鳥』を讀むと、鈴木さんの說で、それはチヨ〳〵と鳴くさうである。いづれにしてもカナリヤの饒舌り過ぎるのよりも餘程良い。私は疾うから禽鳥を飼ふなら文鳥が良い。第一まき餌で手がかゝらなくて良いと思つて居た。見るとウソ、ジウシマツ、カナリヤ、紅雀、相思鳥、などの並んで居る中で、特に文鳥は綺麗に見える。相思鳥はさらに綺麗で、鳴き聲も良いと聞いて居るが、すり餌だから少し困る。兎に角文鳥は可愛らしい。籠も酷く工合が良さうである。急に私はそれがほしくなつた。無論もうその時は時計の事などは全く念頭になかつた。何のために此處三越に來て居るのかも無論考の內には少しもない。むしろ文鳥を買ひに來たのかと思はれる位、それに氣を奪はれてしまつて居た。結局つがひ一籠を買ふ事にした。それからなほぶら〳〵して居る內に、何の考もなく一二點の買ひものをしてしまつた。さうして居る內に、もう時計の店へ行かなければなるまいといふ考が自ら起つて來たので、三越を出て其處へ引きかへした。

店には丁度某君も歸つて居て、すぐにその時計を取り出して見せてくれた。見ると自分の豫期して居たのよりも遙かに上等である。先づ所謂相當のものらしい。値を聞くと云々といふ。それは丁度自分が用意して來た金額である。素より自分の用意には端數がついて居たが、それだけ代價よりも多額に準備して居たのである。それで支拂をしようと思つて、紙入を出して中を見ると、金が不足して居る。これは變だ、どうも不思議だ。如何にもものを忘れ過ぎるやうであるが、この時はまた三越での買ひものの事は忘れてしまつて居たのである。それでもさすがに文鳥の事はすぐに思ひ出したが、それでも金の不足する筈はないのにこれは怎うしたのだらう。怎うなるとたゞドギマギして來て思ひ出せないものである。頭は隨分活に働きはするが、働くべき處に働かずに、只店の人や時計やに對してのみ働く。僅か暫時の間ではあるが、その間にいろ〳〵な事を考へた。併し要するに前の買ひものの方には向はない。さきに時計の事を全然忘れて、文鳥を買つたが、それは可いとして、その外にも買ひものをした事は怎うしても思ひ出せなかつたのである。先方は時計を渡さうとして待つて居るに、此方は金が不足して當惑して居るといふ、如何にも見苦しい不體裁である。どう探したからとて無いものは無いのだ。これはほんの咄嗟の間の事である。瞬間の事である。併し兎に角何とか決着をつけなければならない。仕方がないから私は兜を脫いでしまつた。實は今迂濶に三越で買ひものして金を足りなくした。明日にも重ねて來るから時計はこのまゝにして置いてくれと賴んだ。先方は初めから普通の商賣ではない。知つて居る間柄の事であるからと考へて居るのであらう、時計は持つて行つてくれ、代金はあとで良いといふ。それは至極難有いが、それでは何だか一種の屈辱を感ずる。是非重ね

て來るまで時計を取り除けて置いてくれと賴んだが、先方は決して心配には及ばんから、持つて行つてくれといふ。とう〳〵その意に從つて金は拂はずに時計はもつて歸り、翌日改めて金をもつて行つた。恁うして手數のかゝつた時計は私の手に入つた。その翌日には又文鳥も屆いて來た。時計と文鳥との關係は恁うであるが、話はこれ切りではない。

その日から毎日緣側に文鳥を出して、大供も子供も珍らしがつて騷いで居た。庭には可なりな大木もあるので、いろ〳〵な禽鳥が來るらしい。雀は勿論殆んど群をなして緣にも來、文鳥の籠のまはりにも來て、まき餌のこぼれを拾つて居た。その內に一羽の文鳥が交つて、籠の近くに來るのに氣がついた。いづれは何處かの飼鳥であつたのが逃げて來たのであらう。逃げはしたが、矢張食ふに困つて再び籠鳥の近くに餌を求めに來たのだナ、さうに違ひないなどと少し自分の身にらしい事をさへ考へたりした。その文鳥の馴れて居る證據には籠の小さい口を自分であけて頭をさし込み、粟粒をついばんで居る。どうかして生擒にしたいものだと肝膽を碎いたが、その內先方はだん〳〵心安だてになつて、しきりに奧の方までやつて來た。文鳥の籠を座敷の內に入れて置くと、座敷へも入つて來る。此處まで來ればもう大丈夫と、その座敷へ入つた處を、書生が外から廻つて障子を閉めてしまひ、マンマと外來の文鳥を捕獲してしまつた。さてさうなると又大騷ぎで、第一に早速籠を買ひにやる、餌を入れる器具を工夫する、それ〳〵の手數があつて、つまり文鳥は三羽になつたのである。

それから十日ばかりしての事である。子供が緣側の上の梁の處に燕が來ると云ひ出した。時候はまだ春の初めで、燕の巢を作るには少し早過ぎはしまいか——これは私の考が間違つて居るかも知らないが。のみならず軒若くは庇ならば兎に角、こんな家の內の梁に燕の來さうな筈はない。況んや子供の言ふことであるから、それには一向注意もしずに居た。そんなわけで三四日經過したが、或る朝私は早く起きて雨戶を開けると、文鳥の籠の置いてある緣側の隅の方で、騷がしい音がするのである。それはてつ切り籠の鳥がぬけ出したのだと思つて、私は急いで開けた雨戶を再び鎖して、その隅の方へ行つて見ると、一方の籠には二羽、一方には一羽と、ちやんと入つて居て、而もその外で何だか音がして居る。變だと思つてそつと行つて見ると、これは又意外の事で、又さらに一羽の文鳥が來て居るのである。蓋し子供の言つた燕なるものはこれであらう。毎夕來つて泊つて居たものと見える。けふはまだ早朝で家の內は隨分暗いのであるから、禽鳥の眼は鋭敏でなく、その運動も敏活を缺いて居る。從つてこん度は私の手で容易に捕獲する事を得た。そしてそれを前の風來鳥の中に入れた。これで文鳥は都合四羽になつたわけである。

丁度その頃の事であつた。私は例の手數のかかつた時計を踏み潰した、と云つては大袈裟であるが、兎に角踏みつけて、その硝子蓋の如きは粉々にしてしまつた。それでも時計屋にもつて行つたら、幸ひ內臟には故障がなく、只外部の外科手術で負傷は全治しうると言はれたので安心した。只そのために時計は永い時日を時計屋に監禁の身となつた。實際の負傷の割合よりも遙かに永い時日を。これが何となくこの時計の自分に緣のない事を暗示するやうに思はれてならなかつた。

文鳥の話はまだこれだけではすまない。最後になほ一條の悲劇がある。そしてそれは少くとも暫らくの間、いろ〳〵の事を私に考へさした。事實最後に私は自分の手で一羽の文鳥を殺

したのである。それも自ら進んで殺したのであるならば、則ちそれだけの自覺の下に殺したのならば、自分にはそれだけの口實なり理由なりをもつて居るわけであるが、實はさうでなく、誤つて殺したのであるから、申譯はあるとしても、自意識の上には少からぬ負傷となつたのである。

その話は恁うである。或る日掃除のために捕獲文鳥の籠を下の臺から外した、するとそれが急場に買ひ求めた出來合の安籠であつたので、下に渡してある幾條かの竹の節が甚だ疎隔して居て、卽ちその一條と一條との目が甚だあらかつた爲め、最後に捕獲した文鳥は、籠が臺から離れるや、忽ちその身體を竹の間からすつぽ抜けさして落してしまつた。これは文鳥自らにも意外な事であつたのだらう。決して逃げるつもりで故意にその身を落したのではないらしい。どうもそれは鳥の顏つきで解る。笑つてはいけない。鳥にだつて表情はある。私は一寸呆氣に取られてしまつた。文鳥もこれは怎うしたんだと云つたやうな顏付をして、一寸まはりを見まはした。併し兎に角身は籠外に出てしまつたので、文鳥は何を措いてもと云つた工合に、庭の樹木を目がけてその方に飛んで行つてしまつた。

文鳥は自由の身になつたが、矢張例の粟の問題に苦しめられるといふ事は知つて居たのであらう。一時何處かへ姿をかくしてしまつたが、暫らくすると、庭の木に歸つて來て此方を見て居る。これはやがて又籠へ歸つて來ると見込をつけて居ると、果して以前やつたやうに籠のまはりに來た。其處で又私は切りに工夫をこらして捕へようと以前の方法を幾度もくり返したが、また幾度も失敗した。併し鳥は決して遠方へは行かない。矢張庭の木にとまつてなつかしさうに、此方を見て居る、特に庭の中央の松の高い枝にとまつて。春のはれやかな日の、鮮やかな翠の松にとまつて居る文鳥は、少し擬古風のではあるが、正に一幅の畫である。鳥がにげたので私は幸ひこの珍らしい滅多に味はれない風情を樂しみ得た。そのまゝにして置けば、或は永くこの趣を樂しみ得て、小さい籠の中に入れて見て居るのよりも餘程よかつたかも知れない。何のために苦心して、先方には勿論いやな牢の中へ押し込めようと力めたのであるか、自分ながら理窟が解らない。無論所有といふ下等な考が無闇に働いて居たのは事實である。それに丁度親類のものが來合せてこのまゝ棄てて置けばいづれも大きな鳥の餌食になる、猛鳥の逃げたのはみなさういふ事になると、さも恁ういふ場合の禽鳥の運命を心得て居るかのやうに言つたので、全くの利己心からでもなく多少保護を加へるつもりも加はつて、かく再び籠に入れようと力めたのではあつた。が、まア辯疏はさうとして、さて幾度かの失敗を重ねて後、鳥も亦籠を以前のやうに座敷へ入れて置くと、以前の通りに入つて來た。私は時分を見計らつて、前に書生のしたやうに、外から急いで障子を閉めた。すると可哀想に！　間髪をいれずとは正しくこの場合の事か。秒時の遲速もなく、私のしめた障子は丁度逃げて行く文鳥をはさんでしまつた。前後に無限の偉大なる時間を有しながら、たとひ兩者の利害が結局其處へ來る傾向をもつて居るとは言へ、秒時の差もなく、兩者がぶつかり合ふとは、人爲か、運命か、悲劇か、どうもこんな場合天といふやうな考が出て來て、諦めさす事をよくするものであるが、まアそれより外に仕方があるまい。私は急いではさまつた文鳥を手の内に收めた。實にたわいのないものである、初めは大した事でもないやうに見えたので何とか助ける道があるかと思つたが、さう思つて居る内に息は忽ちにた

え、見る〱その紅の嘴は色を失つて紫色を呈して來た。そしてぐたりと私の掌の中に身を横たへてしまつた。その柔らかい手ざはりは殊更ら氣の毒といふ感を強くする。私は何と考へて良いのか、考へ方に當惑してしまつた。どうも自分の動機はそれほど惡いとは思はないが、結果は甚しい惡い事になつてしまつた。否、私は自分に說法をしたり、理窟を云ふのはやめよう。只文鳥の靈は永久に去つてしまつた。空に歸してしまつた。やがて僅かばかり土を掘つてその屍を葬つた。子供は庭の草花を取つて來て、玩具の小墳にさしてそれを墓の前に置いた。

殘つた三羽の文鳥は何も知らない顏をして矢張チヨ〱と鳴いて居る。

も一つ時計の事を言ふが、それは踏み潰したのが原因であつたか、工合が惡くなつた、醫者にやつたが、輕症だと云ふに拘らず中々なほしてくれないので困つて居る。

ミネルヴァへ

東京は殆んど焦土となつてしまつた。喰ふに困らなければ、こんな處に居る必要はない、京都へでも大阪へでも行つてしまふが良い。とさう或人は言つた。さうかも知れない、仕事も碌にありはしないし、見るものも、聞くものも、食ふものも、遊ぶ處もなくなつてしまつたのだから。併し東京で育ち、東京で學問し、東京で苦しみ、東京で仕事をし、而して江戸で生れた兩親をもち、東京に多數の親類を有する私には、所謂逃げて行くべきクニなるものがない。素より京阪地方に居を移す道を知らない。殊に芝居を見るではなし、音樂を聞きに行くではなし、うまいものを喰ふでもなく、まア修道僧同樣な生活を送つて居る私には、東京の目拔の處が燒けたとて、直接には何の痛痒をも感じはしないのである。從つてこの土地を去る必要もないわけである。

×

子供が編ものの稽古をするのだから毛絲を買へといふのであつた。何處で買つても宜いものを、お友達が何處其處で買つたから、自分も某の店でといふので、燒け跡見物かた〳〵丸の內附近から京橋の邊に出て、大きな建物の燒け殘りが如何にも廢墟といふ氣分を起させるに感心しながら第一相互館の內にあるミネルヴ何とかいふ處へ足を向けた。この第一相互館といふのはその第三階だけが役に立つのださうだ。先づ建物の內へ足を踏み込むと、セメントだか何だか、兩側の壁の崩れたのが恐ろしい感を與へる。灰にまみれた材木が橫たはり、古い俵の破れたのが幾個となく亂脈に散らばつて居る。薄暗い中を小氣味惡く步いて階段を登つて行くと、その階段も一段々々滿足な形をして居るのはない、いづれもボロ〳〵になつて居る。子供がジャン・ヴァル・ジャンの惡黨に捕つた處のやうな光景だと云ふ。なるほど嘗て見た其芝居の背景、その道具立ては先づこんなものであつた。西洋の恐ろしい罪惡の行はれる裏町の光景にはよくこんな處が出て來る。第一薄暗いので足元が危い。其處へもつて行つて、大きな荷物だの、木材鐵材類を荷つて上下する人足に行き過ふので、何だか地獄の感がする。凄い事夥しい。

三階そのものとても少しも家らしい感を與へる處ではない。第一階と同樣で、大きな工場の壞れたのと云つた趣がある。その壞れた廻廊の壁に、何々商會とか、何々賣店とか、それは左に幾室目とか、右に何軒目とか云つた風に、案內が半紙に書いて貼られてある。それに依つてその三階の一角にあるミネルヴァ何とかいふ毛絲の賣場も解つたので、其處へ入つて行つた。するとこれは又驚いた。立派な、少し大袈裟な言ひ方かも知れないが、眼のさめるやうな美人が五六人、狹い室に立ち並んで居るではないか。地獄を通つて極樂淨土に、突然出たやうなわけである。まるで夢のやうである。この多勢の美人の內にはお客樣もあらう。普通の賣子としてはあまりに上品である。と先づそんな感がした。するとその一人々々が皆慇ろに頭を下げて私達を迎へるではないか。私は再び驚いてしまつた。今までの凄慘な光景は一つ敷居を跨いだだけで、全く春の花の天地になつてしまつた。或は前の恐ろしい感との對

照から、此處が殊更らさう見えたのかも知れないが、必ずしもさうばかりでもないらしい。正しく美しい世界であつた事は、私の子供のお友達たる人のお母さんも、その賣子の一人であつた事を、後に知つて笑つた事に依つても察しられる。まア水の女神だか森の女神だか知らないが、ニンフの居る處へ辿りついた放浪人といふ感を私達はなしたのである。目ざして來た毛絲は棚につめ込まれて並んで居る。私は子供に望む程度のものを選ばした。ニンフは馬鹿に優しく子供に侍いてくれる。私はそれを傍觀して居たが、いよ／＼と云ふ處になると、子供が必ず私に相談をかけ、最後の決定を求めるので些か閉口した。

子供は親に對して非常な力をもつて居る。子故の闇に迷ふとは、昔から言ふ事であるが、それは寔に結構な迷ひであらう。唯物的幻滅の今日でもそれは少しも變りはない。その爲めには迷信なるものに捉はれて色々と怪しげな道に踏み込んだ人の數ある事を私は知つて居る。否、隨分スケプティックを以て任じて居る私とても、子供の不治の病氣の時には賴みにならぬ怪しい治療の道に依つて治して貰はうとした事もあつた――素より自分は何の信仰をもつ必要はないと言はれたからでありはしたが。さて又婦人の――美人の力に至つては、これは言ふまでもない事である。私はそれに就いて極めて痛烈な皮肉な說を讀んだ事がある。それはキングレエクのイオセンの中の一節であるが、著者はアラビヤ人の恐ろしい顏付の事を書き、それでも男の方はまだ良いが、女の方に至つては、一點どうも人間らしい處がなくて迚も近づけないと云ふやうな事を言つて居る。此言葉には何の不思議もないが、それに次で、一體女と云ふものは、第一に標致がよくなければ萬事がだめだ、美人といふ事が何より重大な條件である。醜婦であつたら、それがどんな高德の婦人でも人から何の注意をも受けはしない。道德も技能もすべて女にあつては美貌に隸屬して居ると、さう著者は云つて居るのである。私はこれ程人間の弱點を露骨にさらけ出した文字を見た事はないと考へるが、實際それは眞理である。もつとも板額の如き女の話は別物であるが、而もこれはまた自然の歸着が、道德よりも美にあるといふ一例にもなる。その事に就いてはグリヤスンが說破して居る。「身體上の美は、ソロモン、ペリクリスの宮廷に於けると等しく、今日も有力である。十人並の智力をもつた美人を、額かたち醜き數多の知名の婦人とならべ、その美に依つて起される感覺と、知名に對して拂ふ尊敬との相違を考へて見よ」と云ひ、さらに「美人と道德家との間に日々行はれて居る鬪に於て、道德家は殆んど常に打ちまかされて居る。何となれば美の原理は宇宙の道に於ける根本的に變化せざる要素であるに、道德の規定と道德の考とは、單に人間に關するものであるからである」とさうグリヤスンは言つて居る。何だか面倒臭い話になつたが、つまり私の言ふのは子供と美人とは世の二大勢力であると共に、自然の二大動力であるといふのである。

今私は相互館のこの三階で、この兩勢力の挾み打にあつて居るのである。左からやさしいニイレイドが、これが宜しいでせうと云ふと、右からドライヤッドが、それがよくお似合ですよと云ふ。子供はつまりその眼を私の方に向ける。いやも應もないではないか。卓子の上に眼を落すと、‥‥樣と男爵夫人に宛名した狀袋の書面が幾個もある。或はこのニンフの內にその夫人が居るのかも知れない。少くともその人は此處に出張されるに相違ない。厄介な處に來合はせたものだ。うつかり拔け跡を見せてやらうなんて、飛んでもない洞窟におち込んだも

のだ。サアシイの島へ來たユウリシスといふ格だが、素よりユウリシスの賢明はない。ジャン・ヴァル・ジャンの陷つた惡黨の巢窟と子供の言つたのが、むしろよく當つて居る。而も自分にジャン・ヴァル・ジャンの勇氣はない。子供の前に、美人の前に、理窟はない、道德さへ顏色はないと云ふのだから。況んやものの價に於てをやだ。私は子供の望むがまゝに、美人の差し出すまゝに、品物を買ふ事にした。その品質は素より惡からう筈はない。併しその價に至つては、豫定の額の數倍に及んだ。後に子供が學校のお友達と話したら、前に云つたやうに、その人のお母さんもその時其處に居て、買ひ求めた品の一點はそのおばア樣の拵へたものであつたとか。

それからさらに一步をすゝめて、子供の買ひものの爲めに三越へまで行つた。新らしく開かれたまだ假屋の店ではあるが、もう相當に品物も並んで居る。その繁昌に至つては何處に罹災の苦しみ悲しみがあるのかと怪まれる位である。それを見ると私などは初めからの罹災者だ、永久の罹災者だと思はざるを得なかつた。私は所要の子供のものを探して、此處彼處と步いて居る内に、知己の店員の誰れ彼れに見つけられて、可なり忙しく幾度か同じやうな挨拶を交した。その內にYさんにばつたり出遇つた。Yさんは私の義兄の知人であると共に、また私と青年時代の學校を同じくして居る人であるが、この店では可なり重要な位置にあり、一方の聯隊長を承り、その任務をはづかしめない人であるとは人の傳へる處である。眞否は知らないが、この度のマアケット式、チェイン・ストアの經營も、主としてYさんの頭から出たのだと、さる人から聞いた事もあつた位である。私はこのYさんの好意に依つて、買ひものの上に、いろ／＼な便宜を得て居たのである。

今私はこの押すな／＼の中でYさんに出遇つて立話を始めたのであつた。無論地震以來初めて遇つたので、その折の事を話し合ひ、互に無事であつた事を喜び合つた後、話は母校の事にうつり、さらに時事に轉じて、折からの大事件である××氏の事などを私は言ひ出し、私の××氏に一面の識ある事から、その思想行動の可否は別として、あんな人達が牢に入れば、その度每に世間は少しづつ善くなつて行くのだ、それが殺されたら大いに世間が幸を受ける事であらう、耶蘇の殺されたのは氣の毒と言へば氣の毒だが、その爲めに今日の耶蘇教が立派に成立した。耶蘇が殺されなかつたら、あのガリラヤの漁夫や、收稅吏に何が出來たらう。耶蘇の死はむしろその徒に取つては喜ぶべきものであつた。××氏と耶蘇とは大分違ふ、それを比較してはその當を失する次第であるが、その主張する處にたふれたのは同じである。××氏の虐殺に依つて××××は盛んになるとも衰れはしない。私はこの點に於て××氏の死を名譽と思ふと共に、それを殺した某氏を衷心から氣の毒に思ふ。「神よ、彼をゆるし給へ、彼はその爲す所を知らざればなり」とでも言つてやりたい位なものである。とこんな事を人込みの中で話したわけでは勿論ないが、こんな問題もその忙しい中の話題には登つた。そして私は××が味噌をつけた事をまで語つた。

なほ私は自分の家の近火の際この店から見舞を受けた事の意外なのに驚いた事を話し、こん度は三越が類燒したのだから、私の方から御見舞をしなければすまない。其方が大きな店だからと云つて、義理は同等なるべきだが、併しその見舞に何をして良いのか解らないから、それだけは貴下から指圖をして貰ひたいと私は云つた。Yさんは頷いて店の話をし出した、そして店員の勤勉と努力とを語つてくれた。同時に

新らしい店員雇入れの事から、今年入つた店員なる私の教へた某の働きぶりの良い事を賞めて、珍らしい人物であるとまで言つてくれた。まだその外私の關係の學校を卒業した某といふのがある。アレ彼方に客と話をして居るアノ男ですヨとYさんは私に指して示した。なるほど私の見覺のある顏である。随分長くこんな事を話して後、私はYさんに別れてなほ求める品を探しながらその某の前を通つたが、忙しいのに邪魔だと思つて行き過ぎようとしたら、先方から挨拶をしたので、此方も立止まつて話をした。こんな風にして私は一巡あらゆる賣場を廻つたが、子供の要するものはまだ陳列されて居なかつたので、この店を出てしまつた。後でフト氣がついて考へて見ると、私は方々の店員をつくる一種の職人であつた事をYさんの話で知つたのであつた。私は東京の中心に何の關係もない、すべて時局なるものに何の關係をももつて居ない。また店頭に賣買される商品にはそれ〳〵製造者がある。それを撰ぶ人もある、さらに高い處には商戰商略を考究して居る人もある。然るに私の如きはそんな實世界には何の關係もない。實際私はそんな世界には何の用もない、又役にも立たない人間である。そしてそれを以て自ら得意として居るものも居た。學校では只學問を切り賣りして居るもの、又それが正當な事だとも考へて居た。いや、今でもそれが至當な考であると信じても居る。併し今やYさんの話から、同時に私は商品ではないが、商人を作る仕事の、極めて一少部分ではあるが、その一部を擔任して居るのである事を思はせられた。随分迂濶な話で、もう少し早く氣がつきさうなものであつたのだが、笑つてはいけない、それでも其處まで氣がついたのは中々偉いのだから。そしてこれ迄少し世間に出て肩身の狹いのを感じて居たが、これから少し威張つてやらうとも考へた。併しそんな氣分、そんな考はほんの一時の事で、やつぱり私は以前の私で、今でも小さくなつて戰々兢々として日を送つて居る。そしてその方が、偉い自覺だとか、責任の感だとかをもつて行くよりも氣樂であるからである。無論學校では不相變學問の切り賣り主義で、而もあまり上等な學問ではないのを賣つて居るのである。

×

こんな事を考へたり、流行のミネルヴアや三越へ行くものが、何で修道僧なものか。私は矢張俗人である。そして東京の浮足につれて、同じやうな調子を取つて進んで行く當代の人間である。のみならずそれを又良い事にして居るものである。

頑冥不靈か、猫つ冠りか

子供を連れてといふよりも、むしろ子供に連れられて一種の「めざめ」の芝居を見に行つた。芝居そのものの事は私には解らないとして、私にも云ひうる事は、新らしい恁ういふ芝居に限つて、女性が皆ものの解つた、時代よりも一歩出たやうな人であり、男がいつも沒分曉漢であるといふ事である。イプセンのものに於ては勿論さうである。ベダ・カブラ

でも、ノラでも、アルヴィン夫人でも、みな特色ある秀れた婦人である。實際の世の中では大抵女が、殊に母親が、わけの解らない人であるに、芝居になるとさうでなくなるのは餘程不思議である。

新らしい芝居に於て、また特に私共の感じる事は、官吏、宗教家、教育家が罵倒若くは愚弄されて居る事である。舞臺に出て來る男が、沒分曉漢であると私は云つたが、その沒分曉漢を代表するものは、官吏か、宗教家か、さもなくば教育家である。なるほど左樣考へて見ると、日本でも一番のわからずやは、官吏か、宗教家か、教育家であつて、恐らくそれ等が一番の馬鹿であるかも知れない。私は今「春のめざめ」を見て、ドイツの教育家なるものの、わからずやなる事は、日本のそれに中々劣らないのだと、大いに感心したのであつた。日本の官吏のわからずやである事は、これは云ふだけが野暮である。田中内閣諸大臣の行動を見たら、どんな癡鈍な人でも、そのわからずやたる事が解るであらう。

さらに教育家に至つても同樣である。私も學校といふものに隨分永く關係して居るので、少しはその消息をわきまへ、事情を知つても居るが、今「春のめざめ」の中の學校に於ける會議の光景、その先生の言論態度を見るにつけて、如何にもそれが吾國のと酷似して居るのに感心してしまつた。いや、左樣云へば私自身も教育者の一人であるかも知れない。自分では教育者ではないときめてはゐるが、事實學校教師の生活を以て私は終始してゐる。教育者でないと云つた處で、事實先生だから仕方がない。先生であつて見れば、この芝居に出てくるアノ頑冥不靈の校長並びに教師のやうな人間に私もなつて居るに相違ない。自分には解らないが、左樣に違ひない。さうでなければどうしてこの永い歲月を先生として通つて來られよう。立派に頑冥不靈のわからずやに私もなつてゐるのだ、アヽいやだいやだ、併しいやだと云つた處で、どう仕樣もない。

が、まてよ或は自分は頑冥不靈のわからずやには幸ひになつて居ないのかも知れない。といふのは、或は私は猫を冠つて居るのかも知れない。左樣云へば友人の馬場孤蝶君は嘗て私をつかまへて、此奴は猫つ冠りだと云つた事がある。併し猫つ冠りだが、どこまで皮を剝いでも、しまひまで猫だとも、馬場君は云つた。人を薤かなにかのやうに考へてゐる、難有い仕合はせだ、併し猫つ冠りも、それほど徹底して居れば宜いかも知れない。さうだ若し頑冥不靈でなければ、私はこの猫つ冠りを年來やつて來たのに相違ない。永年の慣習はもう性になつて居よう、わからずやでもなく、猫も冠らずに、今日まで學校の先生がしてゐられる筈がないのだから。併し猫つ冠りとてもあまり良い事ぢやない。いやだいやだ。どうしたら宜いんだらう。ほんたうにいやになつてしまふ。さうだ近代劇なんてものは、見ない方が良いのだ。吾々は現實にふれない方が良いのだ。なるべく虛僞と體裁とを保つて行けば宜いのだ。知識は則ち悲しみの始まりだ。醉生夢死こそ眞の樂土なのだ。末の世は芝居をまで眞劍の世界にしてしまつた。惡い事だ。つまらない事だ。臭いものは蓋をして置けば宜いのに。

不二の高根

成都道中記

遅塚麗水

不二の高根

帝、紫微の宮に坐し群仙を會して曰く、東方は精華の鍾まるところ、坤輿の中樞なり、それ太山を作りて永く萬邦の鎭となすべしと、一夜に大地を擧して此の不二の高根を成る、史あるの前幾千萬載、斯の山既に秀でて靈あり、惟れ孝靈帝の御宇、東瀛の氣漸く清明に、初めて斯の山を中宵に見る、頂は分れて八峯を成し、その雪を載くが爲めに宛も玉芙蓉の如し。爾來二千年、仰げばいや高く望めばいや尊し、歌仙も其の高きさまを歌ひ盡すこと能はず、畫聖も其の尊き形を畫き盡すこと能はず、嶽神は容易に祕奥の符を示さずして、唯だ人の獨詣して冥契を得るに任せ、三千年にして一人之を歌ひ、五千年にして一人之を畫くものあるを俟つ。

靜坐して此の玄靜なる不二の高根を想ひ、更に憶ふて余が嶽南の曾枝村に至れば、歸牛牟々落暉を帶びて靜かに度る小川の漣漪にも嶽影皺み、千本松原の露隕つること多きところ、欹帆仄帆皆な晴灣に涵せるこの高根の上を行き、縉紳の別墅の楣間を照らすの紫嵐の色は復た尋常一樣の家に入る、冥目して其の美を心に描けば、悠遠崇高、一たび登りて其の高を極めむとす、今茲七月念三日終に登る。

函嶺より望めば晴巒雨峯を壓して高く雲漢を抜くの此の山あり、上峯は五朶を成せり、上青天と連り下白雲と接す、車の行くに隨ひて四朶となり三朶となり、既にして復た四朶となる、雪は日を得て雲母の色をなし陰は紫嵐を凝らせり、看て御殿場に至り客舍に就く、日は亭午に近し、主人曰く、登嶽の客は皆な平旦にして行く、貴客は京人、跋渉の具に乏しからむ、豪力を傭へと、豪力なるものは綿衣、草鞋、食糧を負うて客の東道をなすもの、余や應ぜず、直に飯を命ず、飯し終る、馬を喚ぶ、馬來る、先づ草鞋數隻を買ひ來らしめて之を腰間に佩び騎して發す、主人送りて戒めて曰く、嶽上日暮寒きこと甚し、石室のうちに宿するといへども衾を重ねて僅かに困夢を得るのみ、殊に平旦の如きは朔風獵々として加賀の白山を度り、甲州の諸山を掠めて直に嶽に至り、寶永山の大洞窟して之を吸ひ横さまに缺處より吹く、沙礫や殘雪や皆な消きて走る、終に雲を呼び雨を喚ぶ、既に雲に路を偸却せられ更に狼雨に逢はゞ或は恐る貴客之くところを失はむと、余は鞍上に據り顧眄し以て勇を示し轡を按して行く、仰ぎ見れば嶽影忽ち亡く風色甚だ惡し、馬夫面を仰ぎて曰く、雨將に來らむとす、然れども山は應に美晴なるべしと、雲の徂徠すること頻りなり、隱々として中に嶽影のさながら斷霞の如く紅きを見る。

一路燕麥香し、馬鈴の音を趁うて胡蝶亂れ飛び、夢の神をそのやさしき翅に載せて我が懷に送る、既にして大嘶聲あり、夢覺むれば急坂馬頭より起る、馬夫曰く、回馬坂なりと、馬を舍つ、賣茶の翁に茶を乞うて喫し且つ憩ふもの少時、是より矮樹と長草、路は委蛇して其間に通ず、窮りて一宇あり、金剛杖を賣る、之を購ふ、長さ五尺、六稜角をなす。

既に登れば草や樹や漸く短く漸く少なり、初めは人を沒し、次には帽に及び、次には肩、而して袖、而して行縢、歩に從うて取次に短少となる、遙かに望めば草色煙の如く迢々として雲に入る、近づけば却て無し、唯だ蓬の

處々に散點して憐れに澤なき花を吹き亂せるのみ、終に一合目に至る、路は爛沙の上を走れり、顧れば近山遙水甚だ鮮明に、身は既に人間を拔くこと幾百尺の上に在り。

鞋に沒するの沙は淨うして纖埃なし、踏みて行けば珊々として聲あり、已に二合目に至り更に三合目に至る、石室あり、茶を賣り菓子を賣り卵と鞋とを賣る、凡そ一合毎に石室あり、皆な山骨露出のところを相し、之を背にして屋を作り、圍むに累石を以てし、僅かに一面を缺きて出入のところとなす、遠く望めば隆然として凸し、室に入れば方三四弓、直ちに地上に向つて板を列ね上に蓆を布く、巖華寂寞頗る幽陰なり、已に四合目に至れば足柄の山愛鷹の山及び甲州の諸山は皆な余が鞋底に在り、大地の蒼々然たるところに兩碧の甚だ明かなるを見る、南なるものは富士の沼にして東なるものは甲州山中の湖なり、小なること盆池の如し、膚寸の雲の帶び得たる雨を受くるも、水は當に四坡に橫溢すべきを疑ふなり、背を決すれば東海の濱一帶百里、水は南溟の雲に入る、其間を截ちて蜿よりも濃きもの一道走る、是れ紫瀾の岸を打つて回るの影なり、時は暮に近し、雲あり、相逐うて上峯より落ち、皆な下界に堆屯して流れず、風の吹き披くあらば青絲を穿ちたる銀針ありて之を縫ふ、青絲に似たるものは是れ田子の浦に浮べる三保の松原か、千松萬松何ぞ其れ縷の如きや、銀針に似たるものは富士川か、三十六瀨何ぞ其れ一芥を浮ぶるに勝へざるや、既にして山影皆な消ゆ、雲既に人寰を鎖せり、嶽上の奇は將に是より始らむとす。

忽ち脚下に波濤の如き聲を作すあり、一望平布の雲は爭ひ立ち、羊角して嶽に上る、是れ風雨の人間に滿つるなり、雲急に余を追ふ、余は遙方の石室を望みて走る、雨は逆上して灑ぐこと亂雹の如し、草帽飛ばむとするもの數々、身は雲と相先後す、漠々なるもの既に行縢を沒せり、超乘して走りて僅かに石室に至れば、雲は既に咫尺、余を石室のうちに窮追して、更に上峯に向つて走る、走るところ沙石皆な活く、石室の人瞻つて迎へて曰く、此れ過雨なり、頃刻にして霽れなむと、言未だ終らざるに黑風白雨室に滿つ、膝を抱きて俟つこと久しうして石室の戸に微紅あり、走り出でて余を追ふところの雲を望めば、既に上頭の寶永山に觸れて碎け、更に夕暉に照らさるゝに逢ひ、雨は千顆萬顆の珠璣となり紛々として中天より落つ、手を擧げて之を受くれば光彩一瞬にして消え、唯だ衣に新たに亂暈の痕を添ふあるのみ、人寰のところを見れば正に黃昏、夕暉の前に雲あり、奇峯を成して爭ひ起つ、皆な日を銜めるが爲めに紅くかゞやき、周圍に金精の色を放てり、朱馬の駃騠して炎の如き鬣を振ふが如きあり、金剛力士の金兜を戴き朱甲を擐して相觸れて立つるが如きあり、處子が百寶の花鬘を被り紅鳳の花輦を穿ち霞衣を披きて舞ふが如きものあり、終に相盤旋して却走す、既にして朱丸の如き夕暉急下すれば奇峯取次に沒し、天地寥郭、皎然たる大月虛明に浮ぶ。

指を屈すれば今宵は是れ舊曆六月十一日なり、余や金剛杖を橫へて看ること之を久しうして殆ど我あるを忘る、仰いで上峯を望めば雲あり、俯して下界を瞰れば雲あり、上下の雲間に唯だ纖よりも黑き一大絕壁の斜に懸垂するあるのみ、回顧すれば縹渺蒼茫、身は天柱に攀ぢて紫微に入るの想あり、この高遠の景に對しては口言ふ能はず、筆描くこと能はず、神澄み氣清く悄然として淚の隕つるを知らず。

爛沙の上を變るの一路微白なるを踏み、磬折して登り、終に行きて六合目の石室を得たり、石室の主人燭を挑して睡す、驚き起ちて迎へて

曰く、暮夜獨往貴客の如きは希なりと、余や寒きこと甚しきを以て直ちに主人の坐を奪つて坐し、且つ飯を命ず、粗糲にして食ふに堪へず、枯魚一枚豆腐汁一碗又た箸を下すに堪へず、蓋し此の地海を拔くこと七千尺、大氣の稀薄なるが爲めに火氣甚だ微弱にして飯を炊ぐも之を熟すること能はず、糯を加へて僅かに精力を添ふと、饑うるを以て勉強して數碗を傾け、終に衾を擁して臥す、枕邊に鏘然たるものあり、琴筑を鳴らすが如し、屋上の雪の解けて筧を傳ふの聲なり、之を久しうして眠り得ず、首を上ぐれば小燈焰なし、石室のうち淒陰幽寂、屋外唯だ風聲を聞く。

靜かに起ちて扉を推せば落月袖に在り、寒星人と親しむ、微茫のうち物あり、簇々として來りて石室を去ること數尺のところを過ぎる、白衣冠して白馬に騎せるものあり、素車に乘るものあり、白幡を擎ぐるものあり、虛を度りて聲なく寂々として行く、嶽上の鬼物、この夜闌け人籟絕ゆるの時に當り出でて游ぶなるなからむや、燈を執りて之を照せば馬や幡や車や忽ち消え、靑紗の如きもの袖邊を掠めて飛び、一氣あり、氷よりも冷やかに、來りて燈を吹き滅し、一團の白氣上峯に向つて去る、蓋し夜雲の行くなり。

大靜大寂久しく立つべからず、終に扉を鎖して寢ぬ。輕寒蒲團に上りて眠熟しがたし、曉ならざるに短夢回り來れば、主人は既に爐に蹲して飯を炊ぐ、余や既に萬古の雪に嗽ぎて、心下に一塵事なし、靜坐して以て日出を待つ。

既にして石室の主人麾きて曰く、日將に出でむとすと、起ちて扉邊の平石に蹲して之を看る、初め東方昏黑のうち紫氣あり、搖曳し、漸く變じて微紅となる、余眸を凝らす。俄にして炬の如きものあり、色は渥丹の如し、或は升り或は降る、會ま彷彿として上峯に天鷄の聲を聞く、石室の人曰く、是れ淺間神社の鐸聲なりと、余屛息して立ち、石室の人跪きて膜拜す、須臾にして溟中渾沌のところ依稀として五彩の龍文を作し、次第に鮮明を加へて光芒陸離、遂に混じて猩血の色をなす、うちに物ありて浮べり、雙黃の卵子の如し、忽ち合して熔銅の色をなす、石室の人曰く、是れ太陽なりと、熔銅の色は再び變じて爛銀の色をなし、環らすに紫金を以てし、終に白熾鐵の色をなす、忽ち大鎚の一下に逢ふが如く百千道の金箭直ちに天を射り、溟中猩血の色逆だち起ちて之を追ひ、太陽乃ち蹶如として升る、天地茲に淸明なり。

余やこの宇宙の大觀を看るを得て胸宇の海の如く濶きを覺ゆ、石室の人と共に飯して流星の如く連りに數碗を傾け結束して出づ、石室の人曰く、是より險なること甚し、徐々として脚を擴めて登れ、然らずば呼吸切迫して上峯に迄る能はざらむとすと、謝して行く、仰ぎ見れば崢嶸たる絕頂は四峯を成して高く天を銜き無心の雲も亦た怖ぢて近づき飛ばず、下瞰すれば絕壁斜に走りて直ちに人寰に至り、一物の遮るあるなし、爛沙漸く大に處々に山骨を露はす、そのところ每に雪あり、鞋痕この碎銀の如きものの上に狼藉たり、掬して之を食はむとし鷺歩して淨處に就く、「萬年の雪」の冷やかなること脾肝に透徹す、路は益々急なり、磬折して登り、僅かに八合目の石室に至る、是より愈よ險なり、鞋底幾たびか磨弊して終に襪に及ぶ。蹲して鞋を易ふるもの兩三次、嶽神の棲處は既に近し、奇巖處々に立つ、呵して立てる巨魔の如し、既にして九合目に至り、既にして絕頂に至る。

氣魄先づ驚く嶽頂の一大洞、深さ數千仞、周圍五十餘町、四壁は皆な懸氷なり、千戟萬

の森然として倒垂するものの如し、日華を受けて青く燿き紅く煌き歩に隨うて異彩紛々として洞に充つ、洞を環りて劍が峯欹ち雷岩欹ち白山嶽欹ち久須志が嶽欹ち中將嶽欹ち成就が嶽欹ち三島嶽欹ち駒が嶽欹つ。八峯の陰皆な雪あり、其の峯を瓣にし其の洞を蕋にし萬古の氷雪之を澹粧濃抹して斯の玲瓏たる玉芙蓉を成す。

　余や先づ銀精いまだ凝り成さざる如き水を湛へたる銀明井に汲みて之を飲み、終に駒が嶽に攀づ、木梯を懸くるもの二、『八子の梯子』といふ、傳曰ふ、聖德太子の驪に騎りて登りたるのところと、石廟あり、青銅馬を安置す、古鏽して蒼玉の如し、登り盡せば累々として石室あり、路盡きて華表、甕の如き巨鐸を懸く、之を過ぎれば則ち淺間神社、堂あり、石室のうちより趨り出で、余に淨手の水を與ふ、手を洗うて更に其の鐸を振へば聲四嶽に震ふ、平日聽いて以て天鷄の啼くとなせしもの是れなり、神に拜す、堂下は皆な氷、立つこと久しうして足指龜せり、終に出でて石室に憩ふ、醴を賣る、謂ふ、是れ金明水に和して釀せるものと、役の僮、鐵印と木槌とを持して來り、余の金剛杖に向うて頂上の印を刻せり、石室の人は皆な緇衣を襲ねて爐を擁す。余や單衣のみ、而も垢塵と雨暈と相交りて奇文を成す。寒きこと甚し、金剛杖を揮ひ勇を鼓して進む、唯だ其の獵々たる朔風の吹くを逆へて行くの時に當りては、身は水楊の如く震戰するを覺えざるなり。

　祠背に出で洞を環りて行けば畫虎の碑あり、巖岱の畫くところ、背に都良香の富士山記を刻す、傍に碑あるもの二三、更に鰶池のほとりを過ぎ、天の浮橋を渡り、三島が嶽に登り、下に獅子が巖を看て終に劍が峯に攀づ、高さ四百尺、八朶の峯中尤も高きもの、その形は宛も巨劍を倒に植ゑつるが如し、攀援して峭巖の中を行けば、衣袂多くは裂く、既に登れば天は我を去ること數尺なるかを疑ふ、下りて絕崖千萬仭、直ちに嶽麓に向つて走れる大澤を看て賽の河原を度り、馬背の山に登り、雷が巖を看る、天陰りて風雨大に發するの時、雷殷々として此の岩邊より起ると言ふ、更に小內院の洞を窺ひ、金明水の湧くところに至り、井華を小壺に汲みて之を腰間に佩び、久須志が嶽の邊を度り、祠に賽して石室に憩ひ、成就が嶽より小石累々として重りて塔の如き東賽の河原を過ぎり、大環の缺くるが如き『缺間』に至る頃ほひ、天飇大に起りて石を走らす、須臾にして風は息めり、唯だ洞中に蓬々の聲を聞く、頃刻にして獅子岩に宿せる雪は紛々として起ち、流雲の如き紫鬣の婆娑として振ふが如くなるを見ると共に、刀よりも利き風一陣二陣『缺間』より吹く、時に人を吹き倒すに至ることありと、余や匍伏して過ぎ、再び駒が嶽の青銅馬の在るところに立ち、以て風雲の奇を觀る。

　風の過ぎるところ、皆な蒼し、雲の裂けて人寰のところを現はすなり、吹くこと益々急なるが爲めに白衣蒼狗相逐うて飛び去り、遙かに諸州の山を露はす、小なること蟻垤の如し、試みに掌を開きて之を掩へば、豆の山や甲の水や憐むべし皆な余が手中に在りて藏る、嗚呼高い哉、海を拔くこと一萬三千尺、脚は三州に跨り頂は雲漢に入り、晴雪十三州を照し、八方の山皆な仰ぎて朝す。

　余は既に高きを極めて其奧を窺ふ、是に於て終に嶽を下る、頻りに飛躍すれば空より闖つるが如し、七合目の石室に至れば一路の赭沙遠く嶽麓に連る、「走り」と稱するもの是れなり、草鞋を穿つこと三、杖を植ゑて沙を踏みて下る、沙は人と走り、人は沙と走り、滾々として急下す、唯だ天風の耳輪に觸るの聲を聞くのみ、三合のところに至り杖を停めて顧れば、白雲深

く鎖して上界を見ず、唯だ遊鷺の隊を成して翔透して行くを見る、蓋し『富士詣』の行者なり、更に回馬坂に至り、歸馬に騎して客舎に歸る。客舎の主人迎へて祝して曰く、嶽神の福を君に錫ふや厚し、兩日の美晴君が獨往を護ると。

此の夕うすむらさきの暮嶽に對して、月虚明に浮び銀河低く垂るゝの疇昔の夜を憶ひ、悠然として神往かむとす、更に眼を閉ぢて冥想すれば嶽の詩神の雲に乘りて彷彿として大荒を度るを見る。

游後三日古道照顔盧の南窓に於て金明水を研に濺ぎ墨を磨して以て此記を作る。

城崎温泉

本谷川は温泉の末を集めて圓山の江に注ぐ、或夜ひそかに旅人の新妻が燕脂を流すらめ、神代の昔荒神の劍を揮って、山を劈き島を造ると言ひ傳へたる津居山の港の迫門より、日本海の潮は江を傳うて此處までは通ふなり、木欄干の小橋を渡れば、湯の宿は千本格子の窓を並べて、二階三階窄き路を夾んで立てり、名物の麥稈細工、出石燒を賣る店に交はりて、淺葱暖簾を垂れ籠めたる旗亭もあり、町に在る六つの湯殿、大小の差異はあれど、何れも檜の香の薫る破風作りにて、鐵道の開けし以來、太く其の舊觀を更めたり、繪日傘を翳しつゝ、湯具を抱へて浴場に通ふ客の送迎へする湯島女も亦姣く見られたり、春の水のさゝ濁りするに似たる温泉のうちに身を浸せば、日に焦けし我が肌の象牙とばかり白く透けたり。

城の崎の湯の起源は遠き昔に在り、脚を傷つけたる鴻の來り浴するを見て、初めて甘露泉の麓に温泉の湧くを知りたるは、今の鴻の湯其の跡なりといふ、天平年中、僧道智曼陀羅を修して、温泉を穿ち得たるは今の曼陀羅湯、龜山の帝の中宮安嘉門院の來り浴したまひしは、今の御所の湯、月卿雲客時に輿馬を枉げ、文墨方外の徒も亦た鞋を解き杖を留む、しほらしな山わけ衣春雨に雫も花に匂ふ袂はとは、吉田の兼好が此の湯に浴みせし歸るさの雨に逢ひての口すさみ、わけて聽く麓の泉峯の蟬とは、頓阿が夏の幾夜を温泉の宿に過せし時の吟なり。

温泉寺の春日佛師の作と稱する國寶十一面觀音に參詣し、更に汽車にて玄武洞驛に至り、圓山の江を渡りて、玄武洞を觀たる翌の日は、竹野の濱に潮浴せり、柴栗山の『左右に隱岐佐渡及び三越を肘腋に睨し、滿洲女眞を雲天の外に望む、酒を把って浩然曠世の懷あり』といふ文を彫りたる石は、海濱の丘に立てり、北陸佐渡を袂の陰に看むるなどは文人の誇張なれど、快晴の日には隱岐の島を水天の間に望み見るべしといふ。

（『日本道中記』より）

成都道中記

一

夕ばえに紅くたゞれたるちぎれ雲は、江を隔てゝ翠黛の色濃やかなる塗山の峰の彼方にたむろせり、太古、大禹が諸侯と會盟したりと傳はれる山は是れなり、長慶の五月雨晴、日照に詩[illegible]蜀あたりに[illegible]て、太陽の光を見ることいと稀れに、蜀犬、日に吠ゆといふ古き諺の人を驚かざる四川にありて、けふの美景は誠に珍らしゝ。

[illegible]の[illegible]花を後にして、巫雲、楚雨の[illegible]にさまよひ、更に三峡の険を踰えて、巫峡の[illegible]、白帝城の[illegible]、[illegible]の[illegible]夜、[illegible]を掛けて帝都に、さまよふ[illegible]を發して二十[illegible]峡の[illegible]をくぼりつゝ、汗漫の旅は、茲に七十日、やうやく重慶にたどりつきし余を、[illegible]の顧問ならず、東川道[illegible]務省理局にあるT氏に[illegible]は、[illegible]その命令に[illegible]へ、静かな夕な、ひたすらに余を[illegible]したり、F氏の館舎は[illegible]門の[illegible]にありて、ゆたかなる長江、[illegible]の景光を俯瞰し、門を[illegible]たる亜字形あ[illegible]き叢藪には、花弁を積みたる鉢を並べ置き、日本にては、盛夏ならでは咲き出でざる山梔子の花、五月の初めといふに早や蕾を破りて、芳香、既に傳はれり、けふは五月の四日、われ、重慶より十日餘りの旅の途を、成都へと試むるその前日にてありしなり。

新婚早きF氏夫妻の、その日常の生活に洋式なりき、殊に[illegible]のその前夕、余があすの旅に発たき首途を祝すべく、特にコックに赤飯と尾頭つきの魚の用意を命じたり、やがて日はとつぷりと暮れて、南岸の獅子山あたりより繰り出づるとき夜の月、漸く光は水のごとく、食堂の窓より入り來るなり。

あすはつとめて早き旅立ちなれば、とF氏夫妻はにこやかに余を食堂に導き、三鞭の杯を擧げて余が一路の平安を祝しくれたり、一千文明に離るゝ[illegible]子の[illegible]路、夜往の旅舎のいぶせきはいふも更なり、兵燹の跋扈、天然痘のはやる土地もありと聞く、殊に土匪の横行は噂高きにあるべし、好ある道のためなりとはいへ、つとめて自愛したまへといふ、余はその厚意を謝して、形なりに盛られたる[illegible]の赤飯を食べけたり、食後、露臺に椅子を移して夜闇に語る、顧見れば代赭色に濁りたる長江の水も、さやけき今宵の月を浮べて、うすむらさきの霧の底より寄する夜潮は、しろがね色の波髪、湧いて岸を打つなり。

と見れば月に傍うて黒雲一つ浮び出でたり。その[illegible]のごとし、月を呑み一又は吐く。

二

翌朝、大霧雨、朝餐をすませ、F氏の案内の轎子に上りて、先づ[illegible]に赴き、我が領事館に行く、G領事はあらかじめ余の爲めに成都に伴ひ行くべき轎子を[illegible]、兩人の轎夫をも雇ひくれ、別に外務省巡査[illegible]といふを余が爲めに同行させたり、[illegible]、[illegible]外務省の川支文化事業局より、[illegible]に[illegible]すべき[illegible]も、[illegible]に同行したれば、同行の[illegible]氏は之れを[illegible]して、共に行くこととなりしなり、言語不通の[illegible]、心[illegible]からざるにあらざるに、[illegible]して一行くこと不思議の縁なり、[illegible]はこの功德によりて[illegible]中の危[illegible]を免はせたまへと、余は自ら名のりて[illegible]大使といふなり。

狠雨、横さまに吹き入る領事館の廊下に立ちて、余は、氏と共に轎夫を按閲したり、相形の獰猛なる人を斥けて、つとめて容貌の柔和なるものを採る、余の轎子に四人、M氏の轎子に四人、大藏經と古範篇全卷を收めたる大函四個は、これを一函づつ兩分して、各擔夫二人を附したり、別に老夫頭ありて之を統御す、部署既に成れり、G領事以下の館員と乾盃して後、余の轎子を先頭に、次にM氏、次に二挺の大藏經函、夫頭の後より發す、風雷は收まりたれど、雨はいよいよ猛烈なり。

凡そ重慶より成都に赴くには、二道あり、一は永川より資陽、簡陽を歷て成都に入るもの、一は、合川、安居、樂至を歷、簡陽に合して成都に入るもの、是れは間道なり、官道、近ごろ土匪の爲めに路塞がる、已むなく余は間道を採りたり、その路、險なれども捷なり、九百餘里と註せらる。

猛烈なる雨を冒して、余等は朝天門より船を僦ふて、嘉陵江を下り、更に長江を横ぎりて重慶の對岸江北に上陸す、民船の幌を撤して、余等を載せたるまゝ轎子を船に移す、舁夫八人、擔夫四人、夫頭を併せて十三人、膝を抱いてうづくまる、船狹くして人多し、長江の水、昨に較ぶれば數尺を增したり、味噌汁に似たるその色も一段の濃さを加へて、或は葉莖形に、或は漏斗狀に、時としては常夏の國の池に咲くといふなる鬼蓮の葉のごとく、縁より捲き上りて中を凹まんとする大渦の輪を廻りつゝ、逆落しに流るゝその物凄さ、艫に立てる老船頭は、右手に櫓を執り左手に篙を握り、舳の少年は、左手と右手とに櫂を握つて、眞向の猛雨に面も振らず船を行るなり。

塗山、字水と彫られたる絶壁を彼方に見つゝ、江を下ること數町、やがて江北の磯の邊に船は着きたり、城外に傍うて嘉陵江の邊を行けば北塘の里なり、こゝには護照檢査所といふがありて、例の淡黄の木綿服に、草鞋を素足に穿き、肩より斜に彈藥帶を懸け、赤さびしたる銃槍を執りたる兵士ありて、余等に護照を出し示せといふなり、言はるゝまゝに出して示せば、少時待てといひ捨てゝ內に入る、門には紅の色の縁をとりたる三角旗の、眞中に隊長の名の王の一字、黑く染め出したるが樹てられたり、兵士再び出で來りて、擔夫の擔へる函は何ぞと問ふ、成都圖書館に贈るべき大藏經なりといへば、又た內に入り去りしが、やがて三たび出で來りて好しといふ、余轎夫を疾く疾くと促して村を去る。

浮屠山を江の彼岸に望みつゝ、午後二時、黃桷埡に入る、名は極めて風流なれど、貧しき村にてありき、唯ある飯店に入りて、轎夫と共に卓を圍みて飯す、油滓にて黒光りする大盆にて、湯も沸かせば肉も煮、飯も炊くなり、汚穢いはん方もなし、余は數個の鹹蛋を買うて飯の代りに食ふ、鹹蛋とは山鹽に漬けたる家鴨の卵なり。

これより幾個の寒村を過ぎて、午後四時、悦來場に入り、いぶせき旅館の門を敲いて、成都道中の第一夜をこゝにて過ごす、雨やうやく晴れ、夕陽、人に媚ぶ。

三

客室とは名ばかりにて、湫隘は言語に絕せり、壁は落ちて骨を露はし、煤けたる障子の紙は悉く破れて風ある毎に舌を吐く、壁に傍うて形ばかりの寢臺ありて枯草堆く積まれたり、室に近き圊の臭氣と、圊に隣りする槽に蠢く豚の臭いとに、余は鼻を掩うて茫然と立盡せり、余等を載せ來りし轎夫等は、早くこの日の責任は解除されたりとて、廚房に、飯店に、已にその姿を晦ませり、余はM氏と共に、桐油

紙、毛布を寢臺の上に敷き、蜘蛛の巣を拂ひ、塵ほこりを掃つて後、やうやくも大頭をすかし留めて、飯と開水とを買ひ來らしめ、裸蠟燭の火を圍んで旨からぬ夜食を取りたり、床蟲しきりに咬み、蚊亦枚を銜んで襲ふ、[illegible]の夢圓かならず、やがて鷄鳴。

こゝは嘉陵江の左岸にありて、一帶の[illegible]、村は石磯に傍うて十二三家あり、旅館は懸崖の上にありて、江山の景色は繪くが如し、開水を買ひ來りて顔を洗ふ、梁間の燕語、晴を喜ぶものゝ如し、朝飯は例の鹽行、別に雞卵を攝る、鷄卵十個の價、二百文の銅貨一枚なり、一個の代價が一錢二三厘に當る。

午前六時、江畔の路を降りて船に上り、嘉陵江を溯る、今日の行程は一百里、すべて船の旅なり、目の觸るるところ都て一枚の大磐石、その色赤くして火の如し、舟子二人、舳と艫とにありて船を行る、長江の水の黄濁せるに較べて、嘉陵の水はさゝ濁る春の水のさまに澄みたり、右岸の棧道は成都街道にて、岩の陰、樹のほとり、寸馬豆人、時に見え時に隱る、その絶壁の面には佛の像の往々にして彫刻されたるがありき、雨に[illegible]は[illegible]霜に打たれて、四[illegible]缺けた[illegible]、おぼろ〳〵に見えながら、[illegible]の相貌、また尊くも拜まれたり、八時半、土沱といへる寒村の苔磯に船を寄せて、人夫ども朝飯くふ、余はM氏と船中にありて、F氏夫人の贈るところの、コニャックの瓶を解いて相酌むなり、さるにても、昨日の雷雨に餞けられて千里の首途に上りしは、吾が生涯に記念すべき快心事なり、一詩なかるべからずと、枯腸を絞つて作し得たるその口占は、

國を去つて三千、麥已に黄なり
峩嵋を窮めんと欲して渝城を發す
斯の游、正に想ふ奇絶多きことを
天、風雷を役して吾が行を壯にす

船に凭つて歌ふ、河霧漸く霽れて、近岑、遠青、波の頭とばかり推し寄せたるが、その山々の頂までも、都て耕され盡して寸土も遺すところなし、罌粟畑、殊に多し、阿片を作るの原料なり、四川の軍閥、租税を稲田の圃に取るに自ら極限あり、唯だ烟税は自由なれば、公にはこれを禁じたれど、陰には罌粟を作ることを奬勵す、花今や[illegible]、山阿、水[illegible]、うすむらさきの[illegible]簇がりて[illegible]するは皆この花なり。

土沱より上流に水の[illegible]ければ、[illegible]人の曳夫を雇ひ、綱を牽かせて上る、[illegible]丈、曳夫はこれを肩にして、岸の[illegible]ごとく走りつゝ、我が木遣音頭にさも似たる歌をうたうて船を曳くなり、身に一絲をも掛けず、皆な拔刀隊なり。

船の行くこと牛よりも遲し、轎夫等は、船の胴の間に閑談して牌と稱する花札やうのものを弄びて博奕するなり、やがて北碚の渡頭を過ぎたり、屋の如く峙てる渡頭の大石の面に、白堊泥をもて上灘錢六百文と大書したるを見る、水勢尤も激し、大船の遡りて此處に來るもの、更に曳夫の數を增して船を曳かしむ、赤裸無褌の荒くれ男數十百人、曳々聲して船を牽く、吾が船は他よりも小なり、水に這ふ竹索に觸れて、危くも顛覆せんとして僅かに免かることを得たり。

左岸の絶壁に巖窟ありて、中に華麗の廟宇を含めるは禹王廟なり、廟と相對して右岸の[illegible]より瀑布雪を噴いて落つ、風光まことに畫の如し、十二時、[illegible]沱を過ぎ、三時半、[illegible]子を過ぐ、船を岩陰に繫いで上陸し、[illegible]な遲き午餐を[illegible]る、いまだ器皿の不潔に慣れざる余は、[illegible]を取つて假に代ふ、[illegible]廟の岸に着く、危礁を免れ[illegible]あり、[illegible]川[illegible]師の[illegible]し、[illegible]つゝ、[illegible]行す、[illegible]なる川の[illegible]

けさゞべなるに、婦人小兒は姿も見せず、老父の顏には不安の色あり、余等の宿りしは、茶店とて、門邊に高く懸けたる燈籠には高人下榻と書かれたれど、その湫隘なるは、前夜宿りし旅館と異なるところなし、飯店も、肉賣る家も、兵士の徴發を懼れて皆な雨戸を鎖したり、僅かに主人に乞うて豆腐と葱と鷄卵とを求め得て、雜炊を作りて餓を凌ぐ、この邊の家にては、薪の代りに鋸木屑を用ゆ、竈の左側に鞴あり、一掴みづつ鋸木屑を竈中に投じ、風を送りて火を吹くなり。

今宵も例のコニャックを傾けて、藁の臥床の上に疲れ果てたる身を横ふれば、兵士七八人、旅團長と覺しき髭男を先頭にして入り來り、旅客を點檢す、數名の泊り客は、慌たゞしく走り出でて立ち並ぶ、小兵の班長肩を怒らせ、虎髭をくひ反らしつゝ客の氏名を呼捨てにしてその職業と何處に行くかとを問へば、衆客唯々として答ふ、倨傲まことに惡むべし、但し余等はワイコレン（外國人）の故をもて、護照を檢閲されたるのみなりき。

壁一重を隔てたる隣家にては、新たに夫を喪ひて、今宵はその通夜を營むにてありき、銅鑼を鳴らし太鼓を敲いて、導師、衆僧と共に經を誦みて死者の冥福を祈る、その騒音のとぎれ〳〵に、寡婦の哭聲太だ悲しきを聞く、寢ねられず。

四

七日、曉五時、沙溪廟を發す、桑の大樹多し、早起きの少年群、木梯を架けてその葉を採るなり、危磴を登りて山の巓を極むれば、遙かに大河の西より來りて嘉陵江に會注するを見る、是れ涪江なり、曉風殘月、氣象太だ雄大なり。

七時、唯ある寒村の一茶店に入り、轎夫の飯するを待つ、童男童女五六人あり小學讀本を會讀す、皆敏慧なる面もちして、容姿も醜くからず、傍より窺ひ見れば、共和國教科書、新國文の第二冊なり。

園中花　先後開　桃花紅　李花白　桂花黄　菊有多種　顔色不同

一幼女　剪彩紙　削竹籤　製爲風車　風吹車動　旋轉不已

取火燃燭　光照四壁　人在燭傍　壁上有影　人坐影亦坐　人行影亦行

座上客　遠方來　父陪客　食午飯　飯後出門　與客閒眺　前有青山　旁有流水

一々插畫あり、我が邦の小學二年級の教科書に比すれば、生字の多少、字句の長短、插畫の繁簡、都て太だ難きを思はしめたり。

九時嘉陵江を度りて合川に入る、人口十萬、市街は高丘に據りて甚だ殷賑なり、江に傍へる一飯店に入りて朝飯す、こゝは鄧錫侯將軍の治下にて、路行く市民の三分一は皆な兵士かと疑はる、十一時、伯少舗を過ぎ一茶店に憩ふ、市に岩鹽を見たり、その色灰白、鐵槌をもて碎き、天秤に掛けてこれを鬻ぐなり、村外は罌粟畠多く、又た甘藷薯の畠多し、轎その間を行く、路の隨處に黄葛樹あり、太さ五六圍、時には十圍を踰ゆるものあり、大枝小枝、宛轉として相錯綜し、葉を着くること甚密、遠く望めば丘の如し、行路の人、皆なその蔭に憩うて、涼を取るあり、所謂榕樹なるもの、土に生ふる都ての樹草を伐採してつゆ愛惜するの念なき西支那の地に、この樹獨り數百歳の齢を保ちて、斧斤の災を免るゝを得たるは、その木質の石よりも堅くして、斫りて器具を作るに堪へず、割いて薪料とする能はざる樗櫟の材なればなり、四川道中、別に樹らしき樹はなくて、獨りこの黄葛樹あるのみ、蜀山の兀たるは、阿房宮の

爲めにはあらざるなり、松栢の影は皆無、唯だ竹林は到る處に淸陰を布く、橋あるところ必ず竹林あり。

日、亭午を過ぎて銅罐鎭に入る。川主廟あり、茶店に入りて憩ふ、路上に群れ遊ぶ鷄の雛の背に、赤インキにて種々の模樣を描きたるは飼へる家の記號なり、この目標にて自他の雛を識別するなり、亦た面白し、蠶を飼ふ家多し、今や四眠なり、是れより安居に至る二十支里、都て嘉陵江に沿うて絶壁の上を行く也、路窄くして僅かに轎子を通ずるに過ぎず、脚下はそゝり立つ大岩の、一たび脚を失へば、その深潭は我等の墓田なり、途中、幾たびも例の民船曳夫の拔刀隊に逢ふ、烈日に焼け爛れたる崎岩に、蝸附猿攀して船を曳く、揮へる汗は雨の如し。

黄昏、安居の市に入らんとする時、數名の兵士立ち現はれて、我が轎を喚び留めたり、底事ぞと問ふまもあらせず、轎夫の利腕取つて捻ぢ上げ、老夫頭の臂をも攫んで引き行かんとす、M氏と共に轎を降りて、その狼藉を叱咤すれど、余は元來唖も同樣にて言ふべき辭を知らず、M氏も亦た南語を操るに慣れざれば、唯だ怒り罵るのみなり、衣兜より護照を出して、濫りに外國人の從者を拘引する非理を責むるの意を示せば、兵士等は己が眼を指して手を揮ふ、字を解せざるの意を示すなり、斯る間に他の兵士等は、亂暴を哀號する轎夫に加へ、白き齒を露はして、茫然として立つ余等に嘲笑の一瞥を與へつゝ、夫頭もろとも遮二無二、引き行けり、空轎路に横はりて、暮色漸く迫る、余等は策の出づるところを知らず。

良や久しうして老夫頭、倉皇として遁れて還る、顏色土の如し、隱れゐたる他の轎夫等を物色して、疾く〳〵進み去れよとばかり、轎を舁ぎつゝ月昏き闇の夜道を走ること三十支里、午後十時、僅かに安居鎭なる寒村に入り、村の元の素封家の王某の落魄して、荒れ果てたる祖先の祠廟を家となし、貧しき旅館を營める人の門を敲いて、その祠堂のうちに宿る、食ふに飯なし、僅かに鷄卵を得る、行李のうちに蠟燭を探れば燃殘りのもの一寸ばかりなるがあり、幽かなる燈火のもとに枯草を藉いて眠る、古廟陰森、何來の風に燭火は消えたり、夜雲低く簷に垂れて疎雨を催し、怪鳥しきりに啼く、終に睡る能はず。

五

八日、この曉、二發の銃聲を聞く、四時たらざるに、轎夫を戒めて早くも出發の用意をなす、主人曰ふ、近ごろ兵隊の大移動ありて、軍需品の輸送始まり、行旅の雜人は皆な拉致さると、村の壯丁を雇うて舁夫を補充し、雨を衝いて安居鎭を立つ、こゝより二十支里、中和場まで舟を傭うて涪江の支流を溯る。

八時半、中和場に着し、いぶせき飯屋に入りて飯くふ、少女あり、明眸にして皓齒、容姿愛すべし、齢を問へば十六、名を問へば、指をもて卓の上に玉英と書けり、父は小作農、母と共に行旅の人に飯を賣る、少女、器皿を洗ぎ洗うて後、客に背いて髪を梳くなり。

十一時、[illegible]涯場に入る、こゝは潼縣の一都會にて、けふは市の立つ日なり、日用の物資は、皆なこの市に集る、禹王廟、殊に雜沓す、一茶店に入りて茶を飲まんとすれば、碗の中に膏の浮び漂ひて飲むに堪へず、砂糖きびを買ひ、咬んで僅かに渇を醫す、西支那の隨處にては、砂糖きびは一種の淸涼的嗜好物なり、宛も吾が緣日の洋杖店のさまに、路傍の露店、竝べ列ねてこれを賣る、長きは丈餘、短きは一二尺、紳士も咬み、苦力も咬む、甜香にして賞すべし、轎夫等は、一丈もある砂糖きびを、息杖の代りにつきつゝ、且つ咬み且つ走るなり。

偶ま、町の彼方に鉦鼓の聲の起るあり、底事

ぞと往き見れば、この町の素封家の先人供養の行列なりき、鼓隊、銅鑼隊、つゞいて童男、童女數十人、紅紫いろ〳〵に彩られし花燈籠を擎げて練り行く、その次には、樺色の法衣をつけたる僧侶十數人、中に導師と覺しき老僧は、錦襴の帽子を冠れり、その次は祭りする家の一家眷族、身に白き衣をつけ、白き帽子をかぶりたるが、手に〳〵長き線香を捧げつゝ進み行く、この行列の過ぎ行く町の毎家の店柱には、一炷の線香を插しはさみて、人々掌を合せつゝ見送るなり、白檀の香、街に漂へり。

正午、三匯場を出でて三時塘坦に入る、過ぐるところ多くは水田、農家は插秧に忙がしく、皆な男子、絶えて婦人を見ず、錨のさまにさも似たる大鋤を水牛に曳かせて田を鋤くなり、日は高けれど、疲れたれば此處に宿る、旅館は金華店といふ、先づ旅館らしき旅館なり、門を入りて中庭、正面は上官房、紳縉を迎ふる大房なり、庭を挾んで左右に宿房あり、東廂第一房西廂第一房といふ、余等は上官房に入る、房内の不潔なるは言ふまでもなし、軒端に懸けたる籠の間の白頭翁、この洋服姿の東洋人を珍らしとや思ひけん、象牙の澤あるその嘴を鳴らして、啼くことしきりなり。

早や支那流の生活に慣れたれば、豚肉と西瓜を合せ煮たるを下物として、殘り尠なのコニャックを傾け盡し、更に酒を買ひ來りて飲む、やがて晩風に微醉の面を吹かせつゝ、出でて、町の三元廟にある演劇を看に行く、廟の樓門の上が舞臺にて、アセチリン瓦斯の燈火は花のごとし、正面の廣場、本殿の階段、廊門より本殿につゞく左右の回廊、その回廊の二階まで早や立錐の餘地もなきまでに看客群集す、余等は回廊の二階に席を占めたり、劇は「狂女」といひ、良人遠征し、新婦追慕の情に禁へず、終に火を縱つて焚死するに終る一齣の新劇也、登場の武夫、新婦、侍女等は、皆なこの町の年少これに扮す、新らしき男女、新らしき演劇、支那西陲の農村にも、時の思潮の潛流し來ると思はれたり、悲むべきか將た慶すべきかを知らざるなり、携へ行ける雙眼鏡を、傍に立つ婦女子等に貸し與へて覗せしむ、我も我もと傳觀し、拇指と、人名指とを屈して環となし、唯だ見れば小的といひ、更に左右の掌を擴げて大圓を作り、眼鏡を把つて看むれば大的と語りて歡笑するなり。

六

九日、曉、空雷、山を踰え、又た山を踰ゆ、十一時、毛家壩に入る、こゝもけふが開市の日とて、賑はしゝ、此の町にも三聖廟あり、廟間にある二十四孝の匾額は、翡翠紺黄いろ〳〵に彩られて綺麗なりき、

三時、龍潭場を過ぎて宿る、旅館は例のごとく湫隘なり、直に開水を買ひ來りて顏を洗ひ、膚を拭ひ、更に襯衣を脱して手づから之を浣ぐ、蚊軍の襲撃太だ猛烈なり、蚊遣香を求め來りて、終夜焚いて蚊を攘ふ。

十日、曉五時、出發、けふも曇天なり、十時半、永順場を過ぎて、張桓侯廟畔の飯店に入りて朝飯くふ、主婦甚だ巧慧、我等の命ずるまでもなく、熱水を灑ぎて食器を洗ひ浄め、飯を盛りたる大碗に、更に一箇の茶碗を添ふるなど、いかさま我が邦人の習慣を知れりと覺えて心地よし、但し、路に遊べる豚、鷄さては狗までが、店内に入來りて、吾が食卓の下に集り、零るゝ飯粒や肉片を爭ひ食めるは、總て隨處の飯店と異なるところなし。

路は又た山に入る、山は皆な巖なり、轎の行くこと極めて遲し、登り盡せば望み甚だ快豁、萬頃の水田を繞る四方の山、近きは小巒を舒べ、遠きは翠黛を拖いて、來りて脚下に朝す、天風颯々として鬢髮を吹き揩がすなり。

零時半、山を下りて石橋場の一茶店に憩ひ、

遙かに安岳の粉壁に輝けるを望み見つ、轎を促し、やがて安岳に入る、城内に入れば市廛甚だ繁華なり、大道を夾んで、知事官衙、兵營、市會、公署ありて、皆な簷牙高く啄める壯麗なる建築也、兵士、銃槍を執つて門を警む、巡行の兵士もその數を知らず、皆な成都の督辦劉湘麾下に屬するものなりといふ、余はM氏と共に埠頭に案内させて、茶鋪に入りては龍井茶を、雜貨店に入りては琺瑯焼の飯碗と茶瓶を、洋貨店に入りては一壜のコニャックを買ひ得て還る、二時出發、五時鴛鴦場を寒村に入りて宿す。

十一日、朝五時半、鴛鴦場を發し、十時、大佛寺の村を過ぎて憩ふ、茶店の臭穢、いはん方なし、鷄卵をもて朝飯となし、昨、安岳にて購ひ得し茶葉に熱水を灌ぎて龍井茶を喫す、茶味甚だ妙なり、是れより路は田隴の間に通ず、家鴨、數百千、群をなして水田に泳ぐ、亦た道中の奇觀なり、四時半、樂至を過ぎて宿す、市街は相當に賑かなれど、旅館は例のごとく極めて陋穢なり、こゝにも多數の兵士ありて廟宇と民家とに分宿し、黃昏に至れば軍歌を合唱しつゝ遊行す、町の人皆な目を側つ、晩にきのふ購ひ得しコニャックの罎を解いてこれを飲む、辛辣なる木臭ありて鼻を撲てり、蓋しメチール、アルコールをもて作りたる惡酒也、しかもその價は實に七元、英國製の商標あり、猾商の奸詐、惡むべきなり、夜に及んで多數の兵士、中庭に沓至し、ワイコレンと喚びつゝ、余等の動止を窺ふ、扉を閉ぢて睡る、蚊の羣がること無限なり、蚊遣香を求むれども無しといふ、手巾を顏に掛けて、わづかに困睡す、夜明けて起き出づれば、血に飽きたる蚊の死骸の、朱萸の如く、[illegible]きが枕邊に狼藉す。

十二日、曉四時、樂至を發し、六時半、童家壩を過ぎて飯す、山漸く盡きて、水田となる、路は坦らに、轎の走ること飛ぶが如し、正午、施家壩を過ぎ、一敗屋に入り、午熱を避けて涼を納る、偶ま二人の兵士あり、一人の傭夫を拉し來りて大地に推倒し、傍にありし太き棍棒を振り上げてこれを亂打す、傭夫、掌を合せて哀を乞へども肯かず、打つこと更に數十回、衣は裂けて血は滲む、傭夫痛みに堪へず、泥中に顏を埋めて喘ぐ、やがて見る／＼血を吐いて息は絶えなんとす、兵士、相顧みて乾笑し、棒を棄てゝ立ち去れり、村の人、堵の如く繞りてこれを觀れども、救解する者もなく、兵士の去る後、亦た半死の人を其儘に打ち棄てゝ散じ去れり、天下の官道にありて、庶民に私刑を行ふ凶暴なる兵士あり、誠に驚異すべきなり。

田隴の間を行く、涓々と靜かなる水音を立てて、人と路を爭ふ小川には、珍らしき鬱金の色に燃えたつ睡蓮の花の簇がり咲くあり、石榴の花も隨處に咲きて、鮮紅人目を喜ばしむ、野薔薇の花も亦多し、田間、處々に竹を組みたる櫓を立てたるは、地中より湧き出づる山鹽を採るなり、石炭の露頭も到る處の山にはあるなり、居民手づから掘り採りて燃料となす、鳴禽には、我が國の郭公鳥、百舌に似たる鳥が隨處に好音を弄せり、何れもその聲を聞けどその形を見ず、この外に鳥の啼く音を聞かず、山に樹木なければなるべし、困臥の夢の[illegible]る夜更の空に、名のる杜鵑は常に聞けり、坐ろ旅思の湧くに禁へざるなり。

路は沱江の河原に入りて、蘆荻の間を通ること五六支里、たそがれの渡頭に立ちて看むれば、夕陽の城壁の、折からの暮色を背にして、漆の如く眞つ黑に峙ちたる、宛ら[illegible]の大印畫を看るがごとし。

七

[illegible]少年の櫂れる舟に乘り、沱江の流れを遡りて簡陽城に入る、日は已に暮れたり、城壁の高さ[illegible]丈にあまり、その規模の壯大なるは、南京、

蘇州の城壁と伯仲す、六時を過ぎたれば城門既に鎖されたり、城の外壁の下を行きつゝ、城外の町に入らんとする折しも、城門を護れる幾名の兵士、異口同音にツイコレンと叫喚して吾が轎を停めたり、轎を卸して立ち出づれば、銃槍提げし兵士は我を包圍して、何處に往くぞといふ、成都の日本領事館へ行くものなりと答ふれば、闇のうちに近寄りて、吾等が行装をすかし視たる後、手荒く轎上の行李を引き卸してその蓋をはねたり、心にその無禮を怒れども、余は勉めて抗らはず、衣兜より燐寸を取り出して彼に與へ、その檢閲に便したり、中なる寫眞機と、そのフイルムを取り出して、兵士等は何事をか語り合ふ、怪しき單語と手眞似にて、寫眞機なることを説明すれば、彼れ初めて頷いてこれを返す、燐寸を彼に與へしことは、異心なきを示せる方便なり。

斯くして辛くも兵士の誰何より遁れ去りし我等は、轎を促して、城外の町に旅館を求めたり、途、一大橋を過ぐ、長さは四十間もあるべく、幅は七八間とおぼし、橋の上には漆塗りの屋を構へ、金泥にて萬安橋の三大字を書きたる額を懸け、橋の中央の楣間には、利渉大川の四大字を、紺碧にて書き成したる[illegible]の懸りたり、額の下には寶龕ありて、夜も光る金色の觀世音像、手に淨瓶を執りて慈悲の藹容いみじくも、往來の人を護るにてありき、その規模の雄大なる、長江を溯りてこゝに七十日、余は初めて斯かる壯麗なる橋を度りたり。

今宵の旅館も、さすがに城市に相應はしき體裁を備へ、室には二個の寢臺ありて、碧紗の蚊帳さへ懸り、板敷の床は埃を鎭むる爲め水さへ灑がれたり、開水を呼んで、滿身の埃塵を拭ひ、鶏を割き、老酒を煖め、盃を擧げて成都に至る早や一日半程なるを喜び祝せり。

十三日、けふは曇天、曉四時に簡陽を立つ、一望水田、水を抽くの稻禾、青うして雨ふらんとす、成都に早や近ければ、轎夫踴躍して行くこと甚だ疾し、正午、茶店子に飯し、五時龍泉驛に宿る、旅館はこれを疇昔の夜に比すれば、實に雲泥の差なり、草を藉いて臥す。

十四日、けふは成都に入るといふに、生憎の雨なり、雨を冒して發す、行くこと二十支里、昔の蜀の都、成都城の東門近く進み行けば、廓觸たちまち豁けて人の往き來も次第に繁く、ねずみ色の制服をつけたる交通巡査の、途の中央に樹てられたる「向右手走」の木標の下に立つて、交通を整理し、自動車往き、人力車來る、余等は護照の檢閲を受けて、東大門を過ぎ、我が領事館に入りたり。

八

我が領事館は、成都城内の西南、通俗教育博物館の園池に近き處にあり、嚴めしき支那風の門を入れば、甃石の逕盡きて亭宇あり、砌には花卉を栽ゑたり、これを過ぎて洋館、庭にも欄干にも薜蘿はひからまりし層樓にて、樽松宇平太氏、總領事代理として事を視る、書記生は賜暇歸朝中にて、館員は唯だ一名あるのみ、夫人兒女數人、こゝに棲む、居留民は唯だ理髪師某の一人あるのみなり、余等が大藏經を護持して重慶を出發する前數日、無頼の市民、領事館に亂入し、應接室、事務室の椅子、卓子、窓硝子を打ち毀ち、器物若干を掠略して去れり、余、今十日に亘れる不安の旅程を終へて、成都に訪へば、吾が領事館はさながら廢屋の如し、言ふべき辭を知らず。

樽松氏は樓上の一室を洒掃して、余等に與へ、夫人と共に款遇して到らざるところなかりき。

越えて一日、余は館の文案楊氏を東道として先づ國立成都大學を訪ふ、蜀漢皇城の遺蹟は、早や全く毀たれて、僅かに「爲國求賢」の、

康熙帝の題字ある荒れさびたる牌門を留むるのみなり、門を入れば考試の大殿あり、是も頗る荒廢したり、殿の後庭にある數棟の木造洋館は、所謂國立大學なれど、窓の戸は破れて硝子なく、故紙を取つてそれを補へど、それさへ破れ果てゝ、折からの斜日を防ぐに由もなく、髮長く顔青ざめたる諸生等の、物さびしくも机に凭りて書讀むさまいと哀れなり、去つて通俗教育博物館を訪ふ、古銅器の外には、觀るに足るものなく、その一室に五卅事件に死傷したる學生等の寫眞を並べ懸けたる、こゝにも排外の鋒芒は露はれたり、園中の四圍内に、西藏産の犛牛あるは珍とすべし、漆の如き鬣毛を抽いて、牙よりも鋭き短角を現はし、金睛人を睨む、獰猛、人をして辟易せしむるなり。

次の日は昭烈廟と丞相祠堂とに、錦官城の西八支里に詣づ、繞らすに丹墻を以てし、門に漢昭烈廟の四大字を掲げたり、門を入れば左に乾隆重修碑、右に蜀丞相祠堂碑の巨碑あり、第二門を入れば、昭烈帝廟、等身の先主袞衣の像を安置し、左右の廻廊に當時の文武諸臣の像を置けり、第三門を入れば諸葛亮祠にて、孔明の塑像あり、龕前の大香爐に、香煙うづまき上る、龕の左方に徑一尺に餘れる二個の銅鼓あり、面に花文を鑄出し、繞らすに六蜈を以てす、孔明が軍旅に用ゐたりと傳へたれど、恐らくは後代の模造品なるべし、殿内に歴代諸名家の題字多く、中に顔眞卿の草書古柏行と、杜子美の詣丞相祠の石刻あり、殿の外壁には、出師表の石刻を嵌す、池畔の琴亭には古琴一張を置く、是れも孔明遺愛の琴に擬したるなり、壁間に岳飛書するところ前後出師表の柘本を懸けたり、亭を過ぎて竹樹幽邃、幽潔なる小亭ありて人の遊息するに任せたり、石逕の窮まるところ、惠陵あり、實に昭烈帝と皇后甘夫人を葬りし處と傳ふ。

午後は道教の大本山、青羊宮を青羊の市の邊に觀に行けり、老子の將に關を出でんとする時、關令尹喜に、千日の後、我を蜀の青羊の肆に見んといひしに因みて、後人のこゝに一觀を造營したるなり、宮は明末、張獻忠の爲めに焚き毀たれて、舊時の壯觀は見る由なけれども、前庭に建てたる八角堂の華麗なるは蜀中隨一といふべし、前後に石階あり、玉の澤ある石欄これを繞り、八箇の石の柱ありて簷を支ふ、柱には蟠龍を彫りたり、「老而不老」の金字額を掲げ、碧瓦畫梁、奇巧を極む、うちに老子騎牛の青銅像あり、相貌、油滑、まことに其人を見るが如し、斯る由緒ある道教の本山ながら、徒令の兵士群れ集ひ、簷を傳へて浣衣を晒すあり、石壇の上に竈を築いて飯を炊ぐありて、狼藉を極めたり、支機石公園を訪ひ、園後の堦を度りて城壁の上を歩す、錦江の水、溶々として環流し、氣象まことに雄大なり、支機石は漢の張騫、これを銀河の邊より齎來りしもの、織女の機脚を支へたる石なりしと傳ふ、余竊かに思ふ、是れ隕石なるべしと、祠亭の中に立てる石を看れば、高さ八尺ばかり、徑細くして根は肥え、正に黝蒼なる凡石にてありしなり。

この夕、傅松氏は、成都在住の耆宿、前輩者、朱青長、徐子休、宋芸子、尹碩撫、顔楷、林君翠の七氏を招いて、余と會飲す、多くは前朝の遺臣にてあるなり、筆談ゆくがごとし、顔楷氏、余の發途の前に和するの送別詩あり、

榴篆前經共に一燈
澶洲の文帆揚州城
君を送つて一に與す崑崙の水
萬里橋邊萬里行

九

春秋以前、蜀に王たる蠶叢、柏灌、魚鳧の都せしは、その何處の地なるやを詳にせざれど、江山の形勝より推料すれば、恐らくは今の成都附近なるべきを思ふなり、魚鳧の後に王杜宇あり、

杜宇の後に開明あり、開明の後に慎靚あり、秦の惠王、慎靚を攻め亡ぼし、更めてその子の通を蜀に封じ、張若張儀に命じて成都城を築かしめたり、これより後、漢代に至りて城池を擴大し、隋、唐の世に及びて更に増するところあり、當時、城上に都て芙蓉花を栽ゑしめたれば、芙蓉城の名あり、明の洪武年間、太祖の第十一子獻王、蜀に封ぜられて羅城を建て、甍ぶるに瑠璃を以てしたり、當時の結構は、時の天子の都たる金陵に比敵するほどに、壯麗なるものたりしと傳ふ、それも張獻忠の亂に燬き拂はれて、今に存するものはその外郭のみなり、中央に故の蜀漢皇城、その西には少城の遺址あり、これに隣れる滿州城は、革命以前は滿州將軍の旆を駐めたるところなれど、今は毀たれて跡もなし、城内は成都、華陽の兩縣に分割され、成都府これを統べたり、東西南北の四方に門を設け、西を除ける三方には河を繞らして自然の要害となす、李白の詩にある地錦江を轉じて渭水と成るの錦江と渭水とは、城の東南に相會して岷江となるなり、朝の霞に籠められ、夕べの靄に彩られて、高大なる城壁と四門の櫓樓とが、宛ら蜃樓のごとくこの天府の空に立てるその偉觀は、余が今次の旅中に眺めたる城市のうちにて、殊に壯麗なるものにてありき。

城内第一の繁華街と稱せらるゝ東大街のごときは、十間に餘れる廣衢にして、これに次げる諸街路も、亦た七八間の幅はあるべし、是れは數年前、今の萬縣の楊森氏がこの地にありし時、武斷的に道路を擴張したるものなり、場末の小路に至りては、今も尚ほ舊態のまゝにして、兩轎雙び行く能はざるほどのものあれど、大體に於いては、北京は知らず、その他の大都會にて、成都ほど清潔なる城市はあらずと思ふ、前に記せる東大街などは、實に左太沖の蜀都賦にあるごとく、金鋪交も映じ、玉題相暉き、比屋連甍既に麗にして且つ崇しといへることばの、あながち溢美の言葉にはあらざるなり。

繁華の街は東大路及びその附近なれど、その他は概して、古典的の空氣に滿ちたる物靜かなるところなるなり、これを我邦にたとふれば、京都といふが好く中れり、市の中心より遠ざかりて、元の士族の屋敷町ともいふべきところに行けば、瓦と粘土とにて作られたる破れ築土のうちつゞきて、傾ける門の軒、柱などに、女蘿の蔓の縈はりからみ、飴賣りの吹くチャルメラの、一種の哀調を帶びて彼方より聞え來るなど、なかなかに面白し。

樹木大いに多し、蜀都賦にも見ゆ、支那の城市には珍らしく樹木の多き都にてありき、竹林は殊に多し、我の往き訪へる文殊院などは、寺を繞りて大竹林あり、蜀主劉備が非常の時の用意にと石炭を積み蓄へ、その上に土を被ひて丘となせりと傳ふる煤山の翠阜の上に立ちて見渡せば、蔚乎たる翠黛、正に若葉、青葉の都なり。

孝子節婦を旌表する牌門の華麗なるものは、道中の隨處にあり、闔門に旌表すといふもの是なり、中にも成都の西郊三支里の、雙孝里にある牌門は、最も華麗なるものにてありき、高さは二丈を踰え、鏡のごとく磨き上げたる大理石をたゝみあげてこれを作る、簷牙高く啄みて上に麟鳳を置き、柱や棟や、そこに五彩の雲龍を繪き成して金碧燦爛、中央に孝子の名を刻し、左右の柱には頌徳の聯句を鏤め、上に聖旨旌表の四大字を鐫せる石額を揭ぐ、その精妙なる、盡日觀れども飽くことを知らざるなり、浮圖關の圖中にあるものも、亦そこの旌表門の一つなり。

今の成都城は、康熙年間、明代の規模に由つて重修したるものなり、城壁の高さ一丈八尺、周圍二十二支里、計四千十四丈、垛口五千五百三十八、東西相距る九里強、南北相距る七里強、

門外に門を開きたり、東を迎暉、西を清遠、南を江橋、北を大安といふ、府治大城なり、別に西に寄りて満州将軍の居たる内城あり、周囲四支里強、五門を設けり、余、戍楼に登るの日、雨あれば出でて、城壁の上を逍遥してその大路の形勝を観たり、壁上の幅は二十四五歩を踰えたり、卜筮厳君平の廟址なる支機石公園の後より、石段ありて登るべし、暮れ残る江の水明かに、前山、夕陽を帯びて黛ぶ、まことに壮懐の綿々たるを覚ゆるなり。

十

蜀江錦の名その昔に高かりしが、いまや漸く亡びたり、萬里橋の西にある、錦官城里にありて、濯錦の名を残せり、錦工の習ひしところなるべし、錦江の水、今はいたく黄濁したれど、その昔は錦を濯ふにふさはしき清麗なる水なりしならむ。

成都より出づる織物は、今、[illegible]緞子の類のみなり、別に巴緞といふものあり、古代の紋をもてこれを織り、綱緞として人の目を奪ふ、市人はこれを蜀錦と称すれども非なり、[illegible]なり、[illegible]にある三[illegible]人は、これを帝国の[illegible]として珍重するなり。

今、府街には、古玩店、軒を並べたり、しかもその骨董品は、他の書畫と共に多くは贋物なり、[illegible]架を同じうするといふ[illegible]はあれど、魚目極めて多くして、眞珠最も少きなり、西蔵佛多し、銅にて鋳たる銅佛、香木をもて彫りし香佛、塑泥をもて作れる泥佛、いづれも西蔵将来の物といへど、これも亦た多くは模造品なり。

市中漫歩の際、往々にして洋装断髪の婦人に逢着することは殊に驚くべきことにてありき、支那の西陲、上海よりも三千餘哩の遠き邊境に、この忌はしき風俗の既に滲み入りしなり、然る婦人は女學生にて、而かも、いづれも妙齢なる佳人なり、軍閥跋扈の時代とて、随って女學生等は夜も目も開けぬ有様なれば、彼らは軍人の、その虚栄心を満足せしむべく、[illegible]軍人の妾となり、以てその衣裳に矜るといふ、悲しむべく又た歎くべし。

十一

[illegible]萬里橋、駟馬橋を見、更に錦江に舟を浮べて流れを溯り、途[illegible]橋附近より上陸して田隴の間を行くこと凡そ一里、浣花渓に草堂寺を訪ふ、杜工部の少陵に[illegible]、[illegible]なり、頗る[illegible]といふ、中央に[illegible]、[illegible]には黄庭、右には[illegible]を掲げけり、竹林清新のうち、四亭ありて、老[illegible]人に茶を餉む。

午後は佛教大學校長の邀要に、文殊街なる文殊院の精舎に赴けり、昨日、[illegible]を訪って面晤したる四川[illegible]流の首[illegible]家[illegible]氏と、市立通俗教育館[illegible]長の[illegible]氏とは[illegible]たり、院主[illegible]安師、我[illegible]引接等の住持學僧と喜び迎へ、余を導きて佛教、経典、[illegible]堂より、[illegible]山の大衆の会堂、經を誦して歩[illegible]進退する念佛堂を經、終って背後の庭に卓を列ねて餐を共にしたり、精進料理なり、[illegible]たりたれば、辭して文殊院を出で、又、漢國[illegible]會成都[illegible]分會に催さるる留東學生[illegible]氏の[illegible]會に臨む、集り合するもの数十名、四川料理なり、席上にては一切日本語を用ひ、支那語を操ることを許さず、宴酣、[illegible]人の[illegible]、余、一場の挨拶を試みたり、宴は酣にして余興に入る、[illegible]、進分節、[illegible]、江間、[illegible]いで出づ、[illegible]甚だ巧妙、[illegible]余の[illegible]色なかりき、強ひられて[illegible]に[illegible]、各自の[illegible]を高唱してその責を塞ぎたり。

四川料理は[illegible]を主とし、多く[illegible]を用ゐず、[illegible]淡にして本邦人の口に[illegible]、宴[illegible]にして[illegible]、一大皿を[illegible]卓に[illegible]、[illegible]の中には大[illegible]を浸せり、[illegible]すれば、[illegible]きたる[illegible]数十[illegible]、[illegible]す、これに一種の

酒を灑ぎ、箸もて潑剌たるその鱗を挾み食ふ、まことに鮮美なり、又た竹孫の美あり、竹筍の根邊に生ずる筍なれば、竹孫といふなるべし、茄子色なすその笠、網絲を束ねたるに似たるその膚、脆軟にして齒牙の香はしきを覺ゆるなり。

十二

當初余が成都に來りし目的は、岷江を下り、峩嵋に登り、その金頂の上に立つて、西の方、西藏國境に連亙する大雪山を望み見んと思へるにありき、椑松氏の言に據れば、岷江、眉縣、嘉定府の邊、近ごろ土匪跋扈して、行旅全く杜絶せりといふ、余は巳むを得ず初志を飜して、直ちに重慶に還らんと決心したり。

成都に入りしより、折からの梅雨期とて、雨ふらざればすなはち陰る、出づる毎に必らず轎に上れども、頗る游目に便ならず。

あすは發軔といふその前日は、密雲やうやく霽けて、嫩き夏の日はこの青葉の城に照り映えたり、この日、余は新知の諸友と共に東門より出でて十支里なる望江樓に遊ぶ、望江樓は成都人士の行樂の地にして、兼て送客惜別の餞場なるなり、門に入れば竹樹のうちに石逕斜めに通ぜり、雨足りて苔厚く、薫風枝を度りて日華散落し、白玉錢を撒ずるに似たり、唐の女校書薛濤が曾てこの園の幽邃を喜びて栖みしところなりと傳ふ、別に故宅の女採院の南碧雞場にありといふ。

園内に薛濤井あり、井の直徑一尺ばかり、石欄を繞らす、毎年三月三日、井水漲り溢る、紙を採つて水に浸して拂拭すれば、輒ち嬌として紅色をなし、鮮灼愛すべしといふ、濤、この水を取りて十色牋を作り、浣牋花と名づけて常に詩を書せり、今成都の市に鬻げる薛濤牋は、その故事に由つて作れるものなりと、明の世、蜀藩毎年、上巳の水を汲みて牋二十四幅を作り、十六幅を朝廷に貢し、八幅を藩邸に納めたりと聞く、成都市中、井あれども飲むに禁へず、飲料水は皆な城外の江水に由る、獨りこの薛濤井の水、甘冽にして齒牙の冷かなるを覺ゆ、茶を好むの人は、常にこの井の水を汲んで茶を煎るなり。

井の傍、浣牋亭あり、蓮池に枕めり、苔逕の窮まるところ、濯錦、吟詩の二樓あり、之に隣りて五仙館、更に茂林を抽いて崇麗閣の三層樓立つ、錦江の水は悠々としてその下に流るゝなり。

余は欄邊に榻を移して、諸氏と共に詩酒半日の清遊を試む、酒も好し、肴も珍らし、醉蝦は疇昔の夜も滿飽したる美饌にてありき、別に豚の皮、家鴨の皮を油にて熬りたる珍味あり、その名は知らざれど、香脆、さながら煎餅を咬むがごとく極めて妙なり。

さるにても余は明日をもて、この懷かしき芙蓉城下を去つて、將に再び渝州に向はんとするなり、薫風離緒を吹き、吹いて江干の垂揚垂柳に入り、千枝萬條、紛として亂れ舞ふなり。

十三

月の十九日、領事館を出で、M氏と共に轎に乘じて發す、華陽縣知事、特に二名の兵士を派して一行に随はしめたり、前日來、成都の劉湘將軍は、重慶の袁祖銘氏を討伐せんと、江を傳つて西上する萬縣の揚森將軍と策應して、兵を成都街道に進むべく活動を開始したり、路、しば〳〵兵隊の行軍に逢ふ、隊長は便服して轎に乘り、士卒は素足の草鞋を穿きて銃を擔ひ、一樣にお納戸色の洋傘を翳して進行するなり、遠くより眺むれば、さながら我が花時に上野飛鳥山に見る長唄師匠連のお花見行列の觀あるなり、偶ま馬に騎るものあれど、馬は皆なポニーにて、胸がひ臀がひに色美しき流蘇を飾り、懸けたる鈴を鏘々と高く鳴らし、轡を按じて徐行するさま誠に滑稽千萬なり。

兵隊の行列に阻まれて、綿陽に宿るべき筈の路は茶店子にて日は暮れたり、旅館は兵士塡咽して宿るべき處もなし、暗中に彷徨して、僅かに町端れの一小旅館の門を叩けば、今年三月、北京の學生騷動の時、射殺されたる學生の、骨を郷里に歸葬すべく、棺を護りて來りし一團の人ありて既にこれを占領し、「忠肝義膽」など大書した旗を立てゝ、中庭に集り爆竹を燃しをれり、驚き去つて辛くもいぶせき旅館に宿る。

枯草の臥床、破瓦の屋根、室の隅には、我が邦にある肥桶にさもにたる屎桶ありて、うちに宿尿を湛へ、室を隣りて豚小屋あり、余は轎夫に錢を與へて屎桶を外に擔ぎ出さしめ、汚なき卓子を持ち來らせて、その上に燭を置きたり、飛蚊跳蚤、雨のごとく火に集る。

樽松夫人の贈るところのウヰスキーを出して、僅かに今夜の岑寂を破る、下物には大頭が成都より買ひ來りし唐辛味噌を徴發す、興漸く發す、大頭を呼びて共に飲ましむ、酒を行るの姑娘ありと聞きて喚び來らしむ。

やがて、大頭の後に跟きて入り來りしは、齡のころ二十二三、髮を洋風に結ひなして、耳朶に翡翠の珠を懸けたり、名を問へば指をもて卓上に翠娥とかきたり、その名は天人なれど、鼻の鞍のごとく凹りたる貧相の女なりき、元と、成都に駐在する佛蘭西人の細君なりしが、その人母國に去りしかば、淪落してこの村に栖めりといふ、妾なるべし、やゝ英語を解せり、やがて又た二個の姑娘入り來れり、共に十七八、平面にして頤瘦せ、薄き眉を書き添へたり、一人は綿陽、他は通賢のものなりといふ、三人とも頗る大戸、共に語ること一時ばかりにして、ウヰスキーの罎その大半を乾げたり、余等は驚き呆れて、その罎を推し隱し、燒酎を買ひ來らしめて又た飲ます、蕉葉の余は既に醉へり、蚊の集まることいよいよ多し、戸外より木を拾ひ來り、焚いてこれを攘ふ、その烟に辟易して、三人走了を唱へつゝ、醉歩蹣跚として去れり。

十二日、晴、滿天の星の光を浴びて、午前三時半に旅館を立つ、石板子にて、朝飯、成都より隨ひ來りし兵士一名、何方へ行きしか姿を晦ませり、そのまゝ出發、十一時綿陽に入り飯店に就いて午飯す、路に餓死の人を見たり、市の人顧みず、やがて喪家の犬の糧となるならん。

綿陽の城壁に沿うて河の邊を行けば、石板子にて見失ひし兵士、既に渡頭にあり、二名の兵士を伴うて余等を待てり、兵士は縣知事廳に余等二人の引繼を了り、新たに縣知事より派したる二名の兵士を伴ひ來りしなり、成都よりの兵士に銀一元を與へて去らしむ、護衛の兵士は、五十錢の日當を護らるゝ人より受けて、縣より縣へと送りつぐなり、大凡兵士の月俸は五元に過ぎず、故に旅客の送迎は彼等の最も喜ぶところなり。

船に乘つて流を下ること二時間、二時半龍泉驛に着す、兵士塡咽す、轎夫復た飯を攫つて發し、行くこと三十里、一渡頭を度りて、寂しき山間の路を行き、薄暮、辛くも施家場に入り、旅館を物色したれども、往くところとして兵士ならざるはなし、この夜もいぶせき家の一室に困臥したり。

二十一日、空雷、雨ふらず、午前五時、施家場を發し、樂至の町端なる穢き一飯店に入りて晝飯す、たまたま轎に上りて來れる一洋婦人あり、齡は四十を踰え、衣帽も汚れて且つ破る、白晳なるべきその顏も、日に焦けて黑く、手に洋杖を携へたるが、碧き眼に不安の色あり、余等の几に凭りて飯するを見、おのれもその傍に憩ひて飯を食ふ、思ふにこの邊に布教する宣敎師なるべし。

この邊、天然痘大に流行すと見え、痘面の人多く徘徊す、中には痂の端いまだ全く剝落せ

ざるものもありたり、危地一刻も居るべからずと、急ぎ轎夫を促して町を去りたり、樂至にて簡陽より來りし兵士去り、二兵士、新たに縣廳より來る、錢を給すること前日のごとし。

樂至を出でて、足指次第に仰けり、巖角たる磽确、高々險しの山に入る、やがて嶺巓に登りて、路は更に小澗に沿うて走る、轎に坐して群巒の頂を脚下に瞰る、天風、蕭々然たり、遙かに鷄鼓鳥の啼くを聞く。

晚、皎然たる月光を浴びて孤村阿家灣の旅館に宿る、情なきほどいぶせき宿なり。

十四

二十三日、朝五時半、出發、亂山の間を行き、分水嶺を度り、同じ名の驛に入る、昔の壘壁に據りて兵營を構ふ、驛中も兵士多く游行せり、成都道中、險要の地なるべし、山を下りて田隴の間を度る、竹細代の橋の屋根より日ざし烈しく照射して、けふの暑は殆んど堪ふべからず、二時を過ぎて通賢に入る、こゝは一物の產地とて、機杼の聲町に充ちたり、轎を素麵賣る店の前に停めて入り、食らうて午餐に代へたり。

午後六時、雨を冒して小河を下り、七時半、姚市に入る、余等は豫め、夜に入りて旅館を物色するの便利ならざるを思ひ、姚市に入るの前、先づ夫頭を走らせて、旅館を覓めしめたり、薄暮、姚市の町に近づきし時、夫頭得々として好き旅館を覓め得たりといひて迎ふ、直ちに轎を急がせて町に入れば、けふは市立つ日とて、市街は雜鬧はしく、川主廟には演劇さへありといふなり、群行く人を推開けて、夫頭を先にして旅館に入れば、主人と覺しき老人立ち現はれ、轎の長柄に手をかけて押し停め、先刻、夫頭らしき男、外國人よりの寄書を傳へ、一夜の宿をこひたればこれを許しぬ、今見れば貴下は東洋人なり、東洋人は宿めがたし、他處の旅館に行きたまへといふ、何故に東洋人を拒むかと、M氏は氣色ばみて詰り問へば、東洋人に室を借すべからずとの規定なり、強ひて宿りたまはんとなれば、公署にこの由を告げ、その允可を得て後にせよといふ、此町にも排日の鋒鋩露はれしかと、余等は途方に暮れたるが、ふと門邊に懸けたる額を見れば、福音堂の金文字、夜目にも鮮かに讀まれたり、教會堂にてありしなり、尋常の旅館にしては、餘りに瀟潔なりとその門に入れる時、既に訝しく思ひゐたるたり。

教會に推しかけ行きて宿めよといふは、余等の方が無理にてあれど、余等は福音堂の主人に謝し、夫頭を叱して更に旅館を物色せしめ、僅かに場末の一小旅館に、一夜の支那人と同宿することとなれり。

室内の薄暗なるは牢の如し、南瓜と豚肉の羹、葱と牛骨と牛肉の外に、途中、路傍に釣りする童子より、名も知らぬ魚數尾を買ひ來めたるを調理させて、夜食の膳を賑はしめたは、成都道中としては、この上を望みがたし、但しその味なきは言語に絶えたり、魚の旨からぬも無理にて、鯉に似たるもの、鯽に似たるもの、鯰に似たるもの、肉柔かにして細骨を噛むが如く、而も多く脂なし、高粱酒を購ひ得て、大醉して旅愁を攘ふ。

枯草の床に、今宵は、床蝨の尤も多かるべきを思うて、余等は盛に黃燐粉を撒き、毛布を被りて蚊を避けて眠る、床を隣りの支那人、既に睡り去り、猛鼾齁々、時々切齒し、且つ放屁す、この惡容のために、夜闌まで睡られざりき、睡氣やうやく催し來れば、旅館の主人、その僕と共に隣房に入りて麥を碓く、夜を撤して轆々たり、終に睡ること能はず。

十五

二十三日、晴、午前五時姚市を發し、九時半鑫鎮に入る、こゝも市の立つ日とて、一村は宛ら祭禮の如し、飯店に入りて一飯す、是れより多

く田隴の間を行く、逕は三尺に充たず、烈日に照射されて、青田の水は沸えんとし、徑に敷ける石は足を爛らさんとす、轎に坐する余、流汗、身に淋きも、就くに淸蔭なく、飲むに流泉なければ、奈何ともする能はず。

午後一時柘壩の驛に入りて午飯す、穢れて黝き大碗に、吹けば飛ぶ支那飯の、もみがら、小石の交りたる熱飯を食ひつゝある時、俄かに鐃鈸、喇叭の音高く聞え、市の人々走り行くなり、底事ぞと箸を捨てゝ立ち出で見れば、亡き兩親の供養すべく、町の豪家が一族を擧げて、香花寺へと練りゆく行列にてありき。

先頭に兵士一隊、喇叭を吹きつゝ進み、次に鼓隊と鉦隊とありて行き、つゞいて種々なる造花たもて、すし・装へる輿の上に、その兩親の木主を安置し、白麻の服をつけたる親近の青年凡そ十數人ありてその長衲に肩を加へて歩む、その後よりは、當主の夫婦、その兄弟、姉妹をはじめ一切の眷族、皆な轎に上りて從ふなり。

午後五時、[illegible]鎭に入る、旅館は曩に宿りし[illegible]館なり、大皿に熱湯を湛へて、積日の塵垢を拭ふ、蚊、[illegible]、[illegible]の[illegible]を攘ふべく、[illegible]いぶしとに[illegible]出たれども、[illegible]折柄、轎夫の一人、腹痛を催し一回す、四肢冷厥す、余は曹陀に淸涼丸藥を加へたる液を作り、これ妙藥なり、飲めば必ず癒ゆべしといひて之を與へ、熱湯を麥酒罎に入れて四肢を溫めさす。

けふも中夜まで睡られず、杜鵑啼くことしきりなり、郷を去りて萬里、身は今巴蜀亂山の中に在り、己が好める旅にしあれど、汗漫の遊びはや・年の四分の一に及べり、この困難なる道途にありては、まことに瘴癘身に累するの惧なきしもあらず、平生頑健をもて人に誇れども、一旦疾に罹りなば、萬一、死あるのみと思へば、いとゞ中宵に亂啼する杜鵑の聲に、坐ろ故郷を思ふの念に禁へざるなり。

二十四日、きのふの暑さに代りて今日は雨なり、やゝ涼し、曉、轎夫の房を訪へば、病める轎夫は既に快癒して、はや結束しつゝあり、五時出發。

盡日、寂しき山谷を登頓して、行人に逢ふこと稀なり、岩陰・竹林の後より、土匪ども現はれ來るかも知れずと、轎上にありて安き心なし、[illegible]酎を飲みつゝ自ら慰む、九時、三渡場の村に入り、いときたなき飯店に入る、茶を求むれども湯もなし。

亭主、蝌蚪の浮游する水桶の水を竈上の鐵鍋に汲み入れて煎る、茶碗をも一寸[illegible]飲まんとすれば、獸肉の脂きらく／＼と浮び漂ひて、飲むに堪へず、夫頭、胡瓜と豚肉とを買ひ來り、煎て供す。

飯後、復た轎に上り、涪江の上流に沿うて危岸の上を行く、岸は大磐石なり、石の面に刻まれたる急磴を下りて、やがて轎に上りしまゝ舟に上る、水の流れ甚だ疾し、舟を中流に縱ちて之くところに任す、一時、安居鎭に着す、往路の時、古廟に一夜の風露を凌ぎしところは此の村なりき、陸に上り、川に沿うて、安居の市に入る、兵士に吾が轎夫を拉致されたるはこの市なり、今來て見れば、兵隊は旣に南方に移動して留まるもの一小隊ばかり・先づ飯店に入りて晩き午餐をしたゝめたり。

十六

俄かに市の人々の何事か喚び交しつゝ走り行くに、余は戸外に立ち出でて人の行くてを眺むれば、鼓聲、鉦聲うちまじりて聞えたり、柘鎭にて見たる例の行列なるべしと思ひつゝ見てあるほどに、溶街の一角に白幡の旛がり立つて來るがありたり、やがて鼓隊と鉦隊とは吾が飯店の前を練り行けり、次いで例の一隊進む、[illegible]采の[illegible]に[illegible]人なり、鉦を鳴し[illegible]、次は棺車なり、棺は

朱漆をもて塗られ、金にて模樣を施す、甚だ佳麗なり、棺車には白絹の長さ二三丈なるが十數條結びつけられ、死者の兒女や親近數十人、身に白麻の喪服をつけ白き喪帽を冠りたるが、引いて徐かに歩むにてありき、長き白絹は、所謂紼といふものなるべし、これを引くもの皆な哀れに悲しげに、その足どりもたど／＼し、余はその紼を執れるものの先頭にありし芳紀十七八なる一娘子の、首を俛し、手を垂れ、裳の端洩るる白鞋の、歩々白蓮を生ずる風情に、蹣跚として行くその威容の美しかりしを忘るゝ能はず、棺車は軋々として哀音を長く引くなり。

　棺車について、哀號する婦人の一隊來る、都て十餘人、多くは黃髮の老女なり、白布の衣をまとひ、聲を放つて泣きつゝ歩む、その聲甚だ哀し、喪家にこの日を雇はれて泣くなり、泣くに巧みなる婦人ほど勞錢更に多しといふ、次は喪主夫妻、一家眷族、轎に上りてこれに從ふ、行列の長さ二町を踰えたり、記すまでもなく、是はこの市の富豪某の葬式の行列にてありき、飯店の主人曰ふ、この日の費用にても、一千元には下らざるべし、葬前葬後の費用を算すれば、五六千元を踰ゆるならむと。

　余等に從ひ來りし兵士二名、訴へ來りて曰ふ、通貨にて交替すべきを、料らずも忘却して此地に來り、事情を知府に訴へたれど許されず、如何にすべきとうち悄る、さらば余、汝と共に知府の衙門に赴き、知事に會うて談判せんと、導かれて衙門に行く、窄き街路を幾曲りしてやがて急坂を登れば、そこに衙門あり、昔は壯麗なりしなるべきが、今は荒れ果てゝ、見る影もなし、刺を通ずれば、壁落ち障子破れたる板敷の一室に導かる、待つこと一時、人の來べきけしきなし、余耐へかねて、萬年筆もて紙片に、日將に暮れんとす、乞ふ早く面晤をたまへと認めて、之をこの室に導きたる白髯の老翁に示せば、老翁は兩眼を指さして後、手を揮りて字を知らざる由をいふ、やがて一青年來る、眉目清秀、衣裳も亦た頗る潔なり、筆を執つて書していふ、知府、病床にあり、われ代りて貴下に見ゆと、蓋し知府の息ならむ、余、兵士の交替地を過まりてこの地に來りし由を語りて、新たに護兵を得たしといひ、伴ひ來りし兵士も、亦た具さに事情を告げしかば、彼は直ちに快諾し、後刻兵士を派遣すべしと快諾す。

十七

市に還れば、日は既に暮れたり、護兵も新たに來りたれば、他の兵士に銀を與へて遣り還す、この夜の旅館も、例に依りて不潔なり、疲れたれば早く臥したり、前後を知らず。

　二十五日、微雨なり、いまだ天明ならざるに、溯上の舡を牽く曳夫の群の喊聲の盛んに起るを聞く、四時半といふに旅館を出で、轎を急がせて江畔懸崖の路を度る、脚下は亂岩巉立して、一たび脚を失すれば人は轎と共に粉碎せん、烟雨のうち、民船の下るを見る、疾きこと矢の如し、三十里にして銅溪鎭に至る、やゝ賑はしき町なり、飯店に入りて朝飯くふ、肉菜を西洋皿に盛りて出す、やうやく重慶に近づけるを思ふ、飯を終りて更に涪江に沿うて下り、竹市より船に上りて悠々として江心を行く、急瀨多し、船いくたびか石に擱して停る、停る毎に舟夫水に入りて船を推すなり。

　彼岸より此岸に渡るに橋はなけれど、急瀨あるところは水淺ければ、石を疊みて宛ら橋杭の如く並べ樹てたり、この邊は二町にも餘る河幅とて、遠く望めば櫛を倒しまに樹てたるさまなり、江を度るの人は、その石杭の上を跳しつゝ行くなり、婦人老幼などは、手に一枚の木板を攜へ行き、杭と杭とにこれを架し、度り終れば更に木板を前方の杭に架して踏み行くにてありき。

余の船、銅溪鎭より中流に縱つて下ること十五支里、烟雨のうちに畫圖の如き兩岸の景趣を看て、零時半、合川に着きたり、鄧錫侯將軍の鎭するところ、市街は江岸に枕んで高きこと數丈、その規模は重慶に似て小なれど、頗る繁華なり。

余等は江に傍へる賑はしき街に入り、一飯店に就いて午飯を攝りたり、群客席を爭うて混雜す、余等は僅かに閣卓を占領し得て、酒飯を命ず、店の小僮、手に水烟管を持ち、群客の間を踏遍して、客毎にその烟管の口を銜ましめて烟草を接待す、紳士も、苦力も、轎夫も撰ぶところなし、蜀の地に肺を病むものと梅毒を患ふるもの多きは、この種の事、その因を爲すものならんと思ふ。

去つて旅館に就く、江岸にある湫陋なる敗屋にて、破れたる床の下は、直ちに江濱の石磧なりき、床に一孔を穿ちて圓となす、客、跨つて不淨を放下すれば、磧上なる群豚と群犬とは、走り來りてこれを舐め淨むるなり。

余等は、石油發動汽船嘉陵といふが、明朝五時をもつて重慶に下るを聞き知りて、乃ち兵士を遣り還し、轎夫を歸村せしめ、獨り老夫頭を留めて、一夜をこのいぶせき旅館に過す、蚊、蚤以外に、蜉蝣あり、群を作して襲ふ、木を燃やして攘へども去らず。

翌二十六日、曉五時、吾が嘉陵は纜を解きて發す、風烟縹渺、兩岸の景趣はさながら三峽に似たり、小清廟の下流、右岸の蒼崖、大洞をなし、飛泉あり、洞口より出でて江に注ぐ、水の色甚だ清澄なり、露頭の石炭は右岸の隨處にあり。

八時半、江岸に泊せる兵船より、銃聲起る、都て三聲、甲板にゐたる旅客皆な慴伏す、船停まる、武裝の兵士、輕舸を飛して來り、旅客を訊問し行李を檢査す、余は船長と筆談して、初めて月の二十三日、江北に、袁祖銘の軍と楊森の軍と銃火を交へ、袁軍大敗し、死屍八百を遺棄して、江の南岸に走れりとの事を知りたり。

十時半、三郎關を過ぎて、右岸の絶壁に彫られたる大佛と重慶の死命を制するの險要と聞えたる浮圖關の城壁とを看め、十一時半、我が駐渝領事館の前庭に立てる日章旗を仰ぎつゝ朝天門の埠頭に着し、重慶市に入れり。

門を護れる兵隊は、日頃よりもその數を增して警戒頗る嚴重なり、轎を促して街を行けば、過ぐる町々の工商の家は、皆な兵隊の宿舍となり、軒に隊旗を樹てゝ兵士塡咽す、そのけはひ、何やら椿事のありたる樣なり、太平門外のF氏の館舍に入れば、主人夫妻、喜び迎へて曰ふ、月の上旬、萬縣にある楊森の麾下、王、藍、許、唐、張の諸將軍、竊かに兵を進めて、遠巻きに重慶を包圍し、袁祖銘の軍は全く釜中の魚となり、策の出づるところなく、十九日風雨晦冥の夜に乘じ、船舶數百艘を徵發して、江を渡つて北げたりしを、楊軍、これを挾擊して機關銃を亂發し、死傷八百を出したり、斯くて楊軍城に入り、王陵基を衞戍司令に任じて治安の維持に努めしめ、恟々たる物情の、やうやく平靜に復せしは、實に一昨日來の事にてありきとて、戰渦のうちを突破して、些の奇難にも遭はざりしを祝したり、館舍の壁には丸痕を留む、都て十二三、その一丸は、余の臥房の扉を貫いて、露臺に嚮へる窓の硝子を粉碎したりといふ也。

十八

往復十有八日の成都道中は、生來いまだ嘗て嘗めざりし困難なる旅行にてありき、征清の役、余は牙山、平壤に從軍して、具さに辛苦を嘗めたれども、これを今次の旅行に較ぶれば、誠に言ふに足らざるを思ふなり、旅館らしき旅館に宿りしは、十八日の旅次のうち、僅に一兩夜のみ、それさへ我が國の木賃宿にも及ばざる

底の設備なり、狭き梯桟に坐して、風雨と溽暑とに虐げられつゝ、山に谷に登降上下して、疲れ果てたる身を、薄暮、辛くも旅館にたどりつけば、轎夫等は余を棄てゝ、直ちに烟房に走り、旅館の主人も亦た顧みず、薬を索めて臥床を作り、重き鋪貨を提けて飯菜を街に買ふ、皆な自ら役を執るなり、第一に困りたるは閑に上る事なり、随處の旅館にては、屋後の軒の陰に、大いなる孔を穿ちて、上に數條の木板を架け渡し、人はその上に踞して不淨を排泄するなり、閑に隣りては、檻あり、豚を飼ふ、その臭穢は言語に絶せり、余等は晴れたる日には戸外に出でてその用を便ずれど、雨の日には勢ひ其處に入らざるべからず、大抵我慢はしたれども、偶ま内の迫るに堪へがたくて閑に上れば、轎夫も、苦力も、旅人も、些の羞恥の色もなくその上に群踞し、烟草をふかして談笑するなり、此際余は不思議なる事を發見したり、曰く、支那の轎夫や苦力などの下層階級の人は、決して不淨を拭はざることにてありき。

兵隊の亂暴には随處に出會ひたり、勞役を嫌へる遊惰の民が、自ら志願して隊伍に編せられたるものなれば、何等の規律も節制もなく、その素質は苦力よりも劣れり、平時には日用の物資を徴發して一錢を拂はず、戰時にありては勝ちても負けても掠奪を專らにす、斯る夥伴が武裝して横行す、危險千萬といふべき也。

土匪跋扈の風説も、到る處にて聞き、戒心しゐたりしが、一度もそれらしき者に遭はざりしは幸ひなりき、軍閥の全盛時代とて、その苛斂誅求により、沿道の商賈や農民は、全く困憊疲弊して、生を聊せざる有様なり、それ等の窮民は、いつ何時、土匪に變化するやも知れず、物騒の事どもなり、些の油斷もなりがたし、塵垢、肌膚に滿ち、汗臭、醜の如くなれど、旅中は常に衣袴を脱がずして假睡したり、當時、贏ち得たる疥癬は、いまだ癒えざるなり。

通邑大都、乞食は常に群をなす、或る都會にては、乞食追放令を出して、これを隣縣に放逐し居れり、さりながら、支那人は、乞食を一種の職業と見做し、轎夫、苦力の賤しき者にても、剰れる錢あれば之を施す、余、通賢の市を過ぎて、餛飩店に入り、その一碗を食うて午飯に代へたることあり、折から落頭藍面の乞食の一人、入り來れり、亭主は手を抗げて揮ひ斥けたれど、乞食は嚢中より錢を出して、我に餛飩を食はせよといふ、亭主、頷きて、余と同じ卓邊に導き、余と同じ茶碗に餛飩を盛りて與へたり、余は微笑せるこの亭主の心理に感服す、恐らくは是れ全支那人の心境なるべし、餓莩は到るところにあり、二三人折重つて死せるもあり、群蠅雨の如く集まれども、人見てこれを怪まず。

支那に入りて感佩すべきは、道路の長きことにてあり、中にも重慶より成都に至る一千餘支里の官道には、短きは三尺、長きは四五尺の板石を敷き詰めて、山を踰え、谷を渡り、田隴の間を過ぎて何處までも絶ゆることなし、されば余の如き生路の客にありても、地圖を披くまでもなく、その敷石の上を辿り行けば道に迷ふことなきなり、随處の小川や溪流に架せられたる橋梁も、亦た石造若くは厚き磚瓦を積み上げて作れる堅固のものにて、中には石欄干に龍獅子を高彫したる壯麗なるものもあり、成都の官道、昔はその道幅も、現時に比して太だ廣かりしは、その橋梁の大いなるも知らるゝが、久しき歳月に亙りて、所在の農民等は、道の左右の土をそぎ取りて、己が田畠の領域を擴むるに努めたる爲め、今は唯だ板石以外に路らしき路はなく、若し二個の轎子が途中にて相逢はば一方の轎は岐路に避けて、他の行き過ぐるを待つなりき。

轎夫、一日の勞銀は一元三十錢なり、我が一圓五十錢に當る。十日の旅程にて十三元、之に

酒錢を加ふれば、四人にて六十元を超ゆ、十年前は、十日の勞銀、九吊文(吾が一圓五十錢)にて事足りしと云ふ、兩三年前より、次第に上りて七八元となり、今年は俄かに十三元となる。米一斗の價、銀四圓餘なり、物價昂騰は驚くべく、隨つて轎夫の賃銀は高くなりたれど、其勞働の劇甚なる、誠に同情に値するなり、山谷を跋渉する一日約一百餘里、風雨烈日に暴露し、轎の長柄の當る兩肩の肉は、紫色に瘀血して碗をふせたる如く腫れ上る、そのさま實に見るに忍びず、斯る激しき勞働なれば、飯を食ふこと一日數度、走りつゝ放尿し又撒屁す、轎上の余も、これには閉口し、鼻を掩うて苦笑するなり。

十九

旅舍の湫陋や、兵隊の横暴や、時疫の流行や、斯る旅次の困難なるは言ふまでもなけれども、第一、困りたるは通貨の事にてありき。

是一たび四川に入れば、通貨は實に硬貨あるのみ、紙幣は全く通用せず、重慶の銅元局にて鑄造したる銅貨は一個二百文、その大さは、我が舊二錢銅貨を一廻りも大きくしたるもの、銅に錫を和して作る、當時、銀一圓は大約六吊文、六千文の相場にて、銅貨は三十枚なり、重慶より成都に至る轎夫の勞銀、酒錢を併せて七十圓、別に又た銀貨一百兩を用意し行けるが、その重量、實に三貫を踰えたり。

徳川時代、東海道の雲介は、轎の棒のその肩に中る輕重にて、旅人の持てる金子の多寡を知れりといふごとく、余等を載せたる轎夫等は、敏くも早くその嚢中の物を猜するにてありき、余等は旅慣れたる人の注意によりて、銀貨、銅貨を幾個にも包み分けて、これを行李のうちに收め、若くは手に持てる信玄袋のうちに置いて、萬一、不慮の難に遭はん時、一擧にこれを掠め盜まれざるやうに意を致したり、支那人の旅客などは、その重き銅貨を叺に入れ、擔夫に擔はせて行くなり。

途中、通邑大都には、兩替屋ありて銀貨を銅貨に交換してくるゝなり、さりながらその相場は常に變動して定まらず、一圓銀を出して、五千文の時もあり、甚しきに至りては四千文の時もありたり、旅客は常に兩替店主の授くるまゝの銅貨を甘受せざるべからず。

一方より他方に通貨を寄送するには、重なる都會の郵政局と郵政局との間に爲替あり、兩替店と兩替店との間にも亦た爲替あり、支那の制度の紊亂せるうちにありて、比較的安全なるはこの爲替制度なり、中に就いて郵政局の爲替制度は、我が國と全くその趣きを異にし、丁度、昔時の割符の如く、一片の傳單の中央より縱に點線あり、金を送る人は、その金額に相當する印紙を買うてその點線の上に貼附し、郵吏は點線に就いてこれを兩分し、其一片を郵送者に與へて金を受くべき人に向つて郵送せしめ、他の一片は金を受くべき人の住む都會の郵政局に送致するなり、金を受くる人その一片を携へて局に赴けば、郵吏は自己の局に送り來れる一片を執つて、左右相照合してこれを證査し、しかる後、その金を渡すなり、爲替印紙は、銀十錢以上、一千圓まであり、金を送らんと思ふ人は、郵政局にてその金額に相當する印紙の幾枚を購うて、その傳單の點線上に貼付するなり、我邦のそれに比すれば簡易にして、しかも確實なる送金法なるべきを想ふ。

成都の北、五十支里に灌縣あり、そこに二郎廟あり、川主廟といふ、太古、禹既に疊唐、巫峽を開いて大水を治めたれど、尚ほ沫水を導かざりしかば、蜀の民、大いに水に苦しむ、秦の時、李冰といふ人あり、その子二郎と共に岷峨の間に隱れ、東谷と友とし善し、張儀、成都に城きていまだ就らず、常に水患に苦しむ、乃ち李氏父子を秦に薦め、水を治めしめたり、李

冰、その子と共に先づ離堆を穿ち、内外二江を通じ、石犀五を作つて水の怪を壓し、分つて數十渠となして民田に灌漑す、奔流駛湍して民の魚鼈となるを免れ、成都平原千里の沃地となる、凡そ成都道中の都會、多く川主廟、二郎廟あり、李冰父子を祀れるなり、石犀の一箇、數年前まで成都の蜀漢皇城址内にありしといふ、今これを尋ぬるに由なし。

凡ゆる困苦と缺乏とに耐へて、成都の旅行を成し遂げ得たるは、實に余が護持し行ける大藏經の功德に由るものなるべきを思ふなり。

二十

袁氏の重慶にあるや、苛斂誅求、至らざるところなし、各種の租稅は、既に明後年の分までも徵收したりといふ、凡そ稅を課すべきものは、鷄の目鷹の目にて穿鑿し、遺すところなし、今春以來は、重慶市民が、一日もその生活に缺くこと能はざる、長江の水を盛りて運ぶ水桶の木蓋にすら、課稅するに至りたり、幾百千人の擔水夫が、水桶を擔つて江岸より市中に至るに、例の愛宕の山の石段に幾倍する長磴を登頓上下せざるべからず、步趨の勢ひにつれて、桶中の水は動搖して桶を超えて溢れ零つるを防がんために、圓形の木板を浮ぶるなり、稅吏はその木板に烙印を捺して、一枚につき幾錢づつを課するにてありき。

揚森の軍、既に重慶を遠巻きにし、袁氏の與黨、釜中の魚となりて意氣全く沮喪し、城に嬰りて死守するの策も盡き果てたり、斯くなりし上からは、奪ひ掠め得らるゝだけの金幣を懷にねぢ込みて、一刻も早くこの重圍を脫出し、後圖を計るにしくはなしと思ひ立ち、白羽の箭は先づ東川の鹽稅を管掌する鹽務稽核處の長官田邊熊三郎氏の棟に立てり。

脫出の前一日、袁氏はその參謀長を、吾が領事館の附近にある田邊鹽務官官邸に遣はし、この月の下旬、北京政府に送附すべき半期の鹽稅三十六萬圓を提供されたしと申し入れたり、參謀長は例によりて便服したれど、護衞の兵士十數名は、皆な武裝し、朱の流蘇を飾りたる拳銃に彈丸をこめて、その身邊を圍み護れり、談判は官邸の應接所に於いて、午後一時よりはじまりたり。

余は重慶にありて、屢ゝ氏と相往來したり、領事館に近き紅十字社の前、城壁の左、高き練塀の迂曲する小逕を入る、逕盡きて廊門あり、門を入れば一面の芝生、玄關に通ずる甃石路の左右には躑躅垣ありて、葛蘿これを掩ひ、茉莉花、山梔子を栽う、山梔子今ま花さき、幽香、庭に溢れたり、洋風に漢様を交へたる閑雅なる田邊氏の館は、北に面して玄關あり、玄關より入りて、左方は食堂、右方は應接室なり。

田邊氏は齡正に還暦、久しく支那の各地にありて鹽稅を督せり、眉に白毫あり、長さ一寸、人呼びて白眉翁といふ、採つて號となす、支那古硯の蒐集家として、指を第一に屈すべし、その藏するところ端州、歙溪、凡そ支那各地に產する古硯の類、無慮二百餘枚は、皆な先哲の手澤あるもののみにて稀世の物と稱せらる、又た古書古畫をも蒐集し、その應接所の四方の壁には、余が往き訪へる當時には、皆な張瑞圖の書幅を懸け連ねありき、中央に紫檀の大卓を置き、同じ椅子を列ねたり、袁氏の使者との談判は、この卓子を夾んで開始せられしなるべし。

文雅なる白眉翁と、武裝せる袁の使者との談判の結果は、問はずして知るべき也、縱ひ白眉翁ならずとするも、肯かざれば死あるのみなり、翁も最初のうちは、頑強に捺印を拒みしが、天漸く陰り一雨を催さんとする午後四時を過ぎ、室内の昏ければ、家僮を呼びて燭を齎し來らしめし折しもあれ、嘉陵江の彼岸にあたりて、倏ち銃聲の起るを聞きたり、參謀長は眉を

昂げて靠れる椅子より起ち、聲を勵まして翁に向ひ、肯かれざればそれまでなり、余は最後の手段を執らんと、周圍に立てる警固の兵士に目すれば、十餘の拳銃は、翁を繞りて咫尺のところに擬まりたり、翁終に三十六萬元の拂出命令書に捺印することを諾せり。

支拂命令書は、卓上に展べられたり、悲憤にをのゝく翁の手は、その腰間に佩いたる軍務官の印を執りたり、胸を張り肩を挺して立てる參謀長、燭火に映る拳銃口の、青白き環をたそがれの時に浮べて、針の如き眼をみはりて取り圍む護衛兵、彼岸の徒輩いまだ止まず。

白眉翁、徐ろに軍務官の官印を把つて、將に支拂命令書に押捺せんとしたるその一刹那、一丸あり、飛び來りて應接所の窓の硝子をつらぬき、白眉翁と參謀長との間を貫り、卓上の燭臺を掠めて後方の壁を穿てり、室中の人、色を動かさざるはなかりきといふ、袁氏は斷じて軍務稽核處の金庫よりこの巨資をその手に收めたり、軍費には又た造幣局より、四川省通用の銅貨を鑄らせて、袁氏、軍隊の我に利あらざるを見るや、同處工人を督勵して盛に銅貨を鑄さしめたり、銅貨の大いさは我が國二錢銅貨より大いなり、一枚二百文、銅の質最も粗惡、銅元局貯藏の銅塊全部を鑄盡して、亦た之を携へて脱奔したりといふ。

余が重慶を去りて歸東したる後、幾ばくならずして白眉翁は、重慶軍務稽核處を去りて、新たに南昌の軍務稽核處に赴任せり、南昌は、九江なる潯南鐵道の終點にありて、今や廣東政府の北伐軍と、聯合軍との會戰地帶となり、兵馬倥傯の場となれり、余は薄倖なる白眉翁の事を憶ふ。

二十一

邦人にして巴蜀に遊びし人、今より六百餘年前に我が五山の僧釋雪村友梅あり、雪村はその字、幻空はその號なり、越後白鳥の人、正應二年をもて生る、若き時より國師一山の童子となり、鎌倉の建長寺に侍從し、又た移りて京都の建仁寺に入れり、後ち後宇多天皇の徳治二年、十八歳の時、錫を飛ばして海に浮び、元の成宗の大徳十二年に彼の地に至りて緇流と交游し、やがて湖北の道場山に登りしが、元主は雪村を日本の間諜なりとして長安の獄に投じ、三年の後西蜀に流竄せらる。

雪村が罪の成都に配置せらるゝや、實に數年の久しきに及びたり、非常の人にありては、悲憤痛病をなすべきに、方外修行の徒、雪村白梅として天命を樂めり、雪村の栖める寺は、今何處にあるかを知りがたけれど、その詩を讀むに、錦城東際の寺、蟹井北邊の房とあるより見れば、或は杜子美の浣花草堂に近きところなるべきか、その共に遊べる人には、當時の學者、快庵、石橋及び翻野などの人もありて盛に唱和應酬したること、亦たその詩中に散見し、石橋とは殊に親しく往來し、その病に臥すや、石橋の秘藥を贈り來りしを飲みしために、間もなく快癒したるの喜びを歌へる長古あるにても知らる。

既にして赦に遇ひ、成都の諸友に別れて孤舟岷江を下り、嘉定にては伏雨に苦しみ、重慶にては瘴毒に困し、やがて九月九日を迎へたれど、身は猶ほ重慶にありて、

巴國の風霜曉いまだ寒ならず、旅邊酒なく陶潛を懷ふ、白衣知る是れ誰か送らざる、黄菊情多し拈又た拈す、遡與東に歸る雲嶺の外、溪聲西は遶し雪山の尖、明年見弟に從るの樂、水石蕭々竹半簷。

と吟じ、重慶を去りては舟に乘りて江峽を下り、遂に雲陽にその知るところの禪師を尋ねて、滯留數日の後、再び江を下りて宜昌、江陵に出で、長安に入りて留ること三年の後、天曆元年京兆の翠微寺に住し、翌年の夏、元主文宗より寶覺

眞空禪師の號を賜られ、初めて歸朝の途に就きたり、實に我が後醍醐帝の元德二年なり。
十八歳より四十歳に至る二十三年の長きに亙りて、異境にありし雪村は、國に歸るや先づその老母を省すべく、鎌倉に夜を日に繼ぎて來りたり、里閭に入りて覓むれども、風物既に故のものならず、偶、雪村の騎りし馬、石に躓きて、雪村、鞍の上より落ち、したゝか泥に塗れたり、傍に流るゝ小川にて衣裳を滌がんとしたりしに、そこにある草の家の片廂の下にて、絲を紡ぎゐたりし老媼、このさまを見て、いかに旅の御僧、わらはが滌ぎまゐらせんと近づきつゝ、旅は物憂きものにておはすらめ、御僧のさまを見るにつけ、明け暮れ忘るゝことなきはわが子の上なり、われらには二人の男の子あり、その一人は十八の時、唐國に渡りしが、はたとせ餘りたちぬれど、つゆ消息なきは、早や世にはあらぬ人となりしなるべしと嘆く、雪村、進み寄りてその顏を熟視すれば、正しく我が母にてありき、母子抱擁、しばしは嬉し涙にかきくれたり。
翌年、鎌倉の壽福寺に入り、やがて京都の建仁寺を董せり、貞和二年冬、病を得、勅して醫藥を賜はれども辭して受けず、その病革まるや、扶け起されて遺偈を書せんとして、筆を執れども字を成さず、一喝して筆を牀上に擲ち、寂然として逝く、年その墨いまだ乾かざるに、五十七。

雪村の詩集に岷峨集あり、載するところの詩實に二百四十餘首なり、蜀中得たる詩のみならず、禹域のうち、その自ら錫を飛ばしたる各處の詩を集めたる也、その詩に由りて游蹤を尋ぬるに、南は衡岳、北は恒岳、東の泰山、西の華山、漢中、成都、嘉定、重慶より、雲陽、瞿唐、巫峽、巴縣、洞庭、瀟湘、廬山、江蘇の名勝に亙りたるものの如し。
重慶より成都に至るの官道百支里のところに永川といふ都會あり、そこに昔より日本僧の墳墓ありと傳はれり、余、重慶にあるの日、これを聞きしが、終に往弔するの期を得ざりき。

二十二

支那の通邑大都を過ぎて、行旅の人の常に足を停めて驚嘆するは、華麗なる店飾りある藥舗の店頭なるべし、例の金箔を塗り紺青を彩る大看板の軒に懸りて、燦然として街を照らすさまは、まことに綺麗なり、中にはその鋪先に、彫欄を繞らせる家もあり。
成都や重慶にて、殊に人の目を惹くものは、藥鋪の軒に懸けたる白木耳の看板なり、四川、雲南地方の山に生ずる茸の一種にて、これを料理の材料として、支那人が享樂的滿足を贏ち得べき滋養の效めの顯著なるものと稱せらる、上海あたりにて、その上等なるもの一オンスの價、實に十四圓といふに至りては、彼の椎茸の同量二十五錢に比すれば、五十五倍に當り、正に高價といふ言葉を超越したるものといふべし。
高貴なる滋養分と藥料とを有てるこの白木耳は、無味淡泊、紙を咬むがごときものなり、しかも支那人はこれを最上の滋養食物とし、不治不起と稱せらるゝ癆咳にも、これを服すること久しければ本復すと信じをれり、近くこれを東京の市價に見るに、一斤實に百八十圓に値るといふなり。
白木耳の形は、きくらげとは全く異なり、さながら白き鷄頭花のごとく、その新鮮なる物にありては、半透明にして粘液を分泌すれど、乾燥すれば白膠のごとき角質となる、色の白きは銀耳と呼ばれて尤も貴く、樺色をなせるものは金耳といひて價劣れり、乾燥して月を經れば、その色澤を汚損し、價も亦た次第に低下するなり。
先年我が農大の三村博士、福州より白木耳の發生する榾木といふ樹を取り寄せ、菌類學上の性質と栽培法とを研究してその成績を發表した

ることあり、當時、矢野龍溪翁は、彼の椎茸の生産地として聞えたる伊豆の修善寺の山林が、好適なる地味なるべしと思ひ立ち、菊屋の主人にその種子を分附して移植に努めさせたり、栽培は容易にて、半歳にして立派なる白木耳の發生を見るに至りしが、その産出の僅少なるが爲めに、未だ市場に出すに至らずと云ふ。

竹孫、これも四川、雲南、殊に四川の西藏に近き打箭爐附近の竹林の中の筍の根に發生する蕈の一種にて、形はしめじ蕈のごとく、その新鮮なるものにありては、笠は茄子のごとき鮮紫に彩られ、莖は絹絲を束ねたるがごとくにして雪白たるは、余が上海上陸の後、四川料理の饗を受けたる記事のくだりに書きし通りなり、これも亦た滋背の效ありとて、その價甚だ貴し、余、成都にありし日、留東學生團の歡迎を受けし時、再びこの珍味を嘗むるを得たり、竹孫の美なり、あぢはひ澹泊、これが氣力を增益する妙藥なりとは思はれず、唯だ脆美、極めて齒切れの好き快感を覺ゆるなり。

不老不死の藥として、西藏界の打箭爐地方に産する爐蟲草といふものあり、根は動物の蛹蟲にて、莖は即ち花植物なり、即ち地中にある芋蟲の口から蔓草の一莖を抽けるがごときものなり、成都や重慶の藥舖にては、爐蟲草の乾燥せるものを賣る。

長壽縣は、宜昌より夔府、萬縣、涪州を歷て重慶に至る江岸の驛路に當る一名邑なり。人口は四五千、極めて平和なる城市なり、この市に住む人は、昔より長壽の者多く、百歲を踰ゆるもの多しといふ、何故にしかく長壽の人の多きかといふに、城市を繞る四方の山にけ、多く何首烏を産し、市の人は、茶の代りに常に何首烏を煎じて飲むに由るなりといふ、余は何首烏が爾か延壽に效驗あることは知らざれども、亞熱帶なる四川の奧地の都會が、歲の半ば以上も溽暑に苦しみ惱むに反して、この長壽縣は、山河の形勢極めて高朗温藉に、氣象も亦た暢和にて、正しく避暑地のごときところなれば、自ら長壽の人多きなるべしと思ふ。

二十三

馬頭初めて見る米嚢花の詩を吟ずれば、懷しき故鄉のさまが眼の前に彷彿すれど、これが罌粟の花、阿片の毒液を分泌する美しき花なりと思へば、心の寒きを覺ゆるなり。

阿片の害毒は、既に支那人の膏肓に入れりといふべし、最早、救ふべき道はなからむ、四川にある名邑大都はいふまでもなく、いかなる片田舍に入りても、阿片の吸飲器を、公然、店の前に並べて賣つてゐざるところなく、その阿片を吸はせる所謂烟房といふ家の、あらざる處はなきなり、合川、樂至、簡陽などの大都會にては、旅館の周圍に、一皿二百文と書ける角行燈を軒に懸け、入口に暖簾を垂れる家が五軒も十軒も相望めり、但しこれは、行旅の人や、兵卒や、轎夫や、苦力や、行商者などを得意とするものにて、商店の主人、公署の役人、知事、將軍連の家庭にありて、阿片に親しむものは例外なり、如何なる田舍にも四五軒の烟房あらざる處なし。

暖簾を披いて窺ひ見れば、小なる烟房にも數臺の臥床を備へ、大いなる烟房にては十數臺の臥床あり、烟を吸ふ人、雜然として枕藉す、阿片を熔かすに、中產以上の人は小さき銀盤を用ゆれど、斯る雜輩にありては、皆な銅貨をもつてその用を便ず、一穗の燈火の上に、先づ銅錢を翳してこれを熱し、指にてその熱度を觸れ試みて後、毛絲の細針のごとき鐵線の尖端にて、烟膩色なす阿片の一小塊を採り、銅錢の上に載せてこれを練るなり、小塊は、やがて罌粟粒の如き小泡を立て、婬蕩的の微烟をあげつゝ熔けて泥狀となる、まるめてこれを一丸となす、鐵線の端に懸りて、さながら彼の線香花火の、細柳の火

を噴くその丸のごとし、やがてこれを、吸烟管の末端にある小孔のうちに詰めて、小燈の火に翳ざしつゝ、臥ながら吸ふなり。

阿片の支那に入りたりしは明の成祖の頃にて、暹羅より朝貢したるものなりといふ、當時は、藥料として用ひられしものなるべし、その嗜好物として用ゐられしは、乾隆の頃、或る病弱なる一尼僧によりて偶然に發見せられたるものなりといふ、尼僧、早く夫を喪ひ、庵を結びて寡居す、久しうして癱痪をうれひ、兩脚枯木のごとく、坐臥意にまかせざりき、親戚の人々これを憐み、物を贈りてこれを慰む、阿片の最小量を服すれば、その痛苦を忘るゝことを得るをもて、常にこれを用ゐ居たるが、或日、ふとその一小塊を執りて、脚爐の炭火に翳したるに、異様なる香氣を發したれば、戯れに烟管に入れてその烟を吸ひたり、神心忽ち恍惚、久しからずして疾は忘るゝがごとく癒え、歩趨意のごとくなれり、この事やう／＼四近に聞え、胃痛、發熱、喘息など、凡ゆる疾病に利用されて、終に恐るべき習癖となり、支那全土を風靡して、生靈を毒するに至りたるなりといふ。

二十四

長壽の靈藥として、古來より知られたるものに鹿角あり、老鹿の袋角を切り落して、その角と肉との間にある小血片を採つてこれを乾燥したるものなりといふ、血片の大いさ實に二十錢銀貨大、琥珀のいろなせる半透明のものなり、藥研にてすり卸して粉藥とし、藥酒と共に服用すれば特效あり、主として還暦以上の老境に入れるものに元氣を賦與する藥にて、血氣盛りの青年がこれを飲めば、忽ち衄血を催すといふ、特種の藥草多き四川省の都會の藥鋪にては、鹿に食はしむるにこの藥草をもつてし、四十年、五十年の永きに亙りて之を飼ふといふ。

西洋醫術の、いまだ普く行はれざる支那の邊陬の地にありては、今も尚ほ草根木皮の天下なり、四川道中、市の立つ日の廟宇の前庭には、櫛比する飲食雜貨の店に雜りて、大道に草根木皮を鬻ぐ露店あり、おもに白髪の老翁ありてこれを賣る、神農以來の流傳もありてか、轎夫、苦力の徒にありても、概ねその藥草の效能を知りをるは面白し、旅中、余の轎夫、脚を毒蟲に螫されて、脛のあたり毬のごとく腫れ上りて發熱し、疼痛の堪へがたきを訴ふ、余、如何ともしがたし、偶ま夫頭某、藥店に走り行き、紫蘇の葉の乾かしたるもの一束を購ひ來り、水を加へてこれを煎たり、やがて醬油色なすその液をもて疵を洗ひ、煎濡れたるその葉にて痛處を包み、藥をもて之を繃帶す、かくてその夜、床に就き、再び紫蘇の葉を煎じて、疵を洗ひ、葉にて痛處を包み、繃帶を加へ置きたるが、天明けて後、脛の腫れは一夜のうちに引き、疼痛もまた全く去り、轎を擔いで飛ぶごとく健歩せり。

補身劑として、老人に青春の氣分を賦與する物に三蛇膽酒といふものあり、酒を湛へし甕中に蛇を投じ、酒精の力を假りてその骨肉を泥のごとく熔解せしめ、終に透明に近き藥酒とするものにて、十年、二十年、三十年の久しきに亙りて、暗處にこれを貯藏するなり、元は廣東の物なれど、雲南に近き四川にても、これを貯ふるものあり、重慶にありし日、懇意にせる支那人の家にて、夜食の饗を受けし時、此酒を侑められて一杯を試み、通宵睡られず閉口したることあり。

別に蜥蜴酒といふものあり、本邦の青蜥蜴に類する氣味惡きこの爬蟲を、醇酒に浸して熔解したるもの、名づけて蛤蚧酒といふ、藥力、尾にあり、尾全からざれば效あらずといふ、又た虎骨酒といふものあり、老虎の骨を熔かしたる酒なり、余、終にこれを試みず。

日本風景論（抄）

志賀重昂

緒論

日本には流水の浸蝕激烈なる事

緒論

「江山洵美是吾郷（大槻磐渓）」と、身世誰か吾郷の洵美を謂はざる者ある。青ケ島や、南洋浩渺の間なる一頂の噴火島、爆然轟裂、火光熠々、天日を焼き、石を降らし、灰を散じ、島中の人畜殆んど斃れ盡く、僅に十數人の船を艤して災を八丈島に逃れたるあるのみ、而かも此の十數人竟に其の噴火島たる古郷を遺却せず、火の熄むを待つこと十三年、乃ち八丈を出で欣々乎として其の多災なる古郷に歸りき。占守や、窮北不毛の絶島（千島の内）、層氷累雪の處のみ、後、開拓使有司の其の土人を南方色丹島に遷徙せしむや、色丹の地、棋楠樹青蒼、落葉松濃かに、黒狐、三毛狐其蔭に躍り、流水涓々として處々に駛り、玉蜀黍稷べく、馬鈴薯植らべく、田園を開拓する者は賞與の典あり、而かも遷徙の土人、新樂土を喜ばずして、歸心督促、三々五々時に其の窮北不毛の故島に歸り去る。シカゴの博覧會、近世紀に於ける人智の粋を盡くし、會場亦た金碧燦爛、眩燿眼を奪ふ、中にエスキモー土人の村落を置き、土人此處に居る幾多、而かも之れを欲せず、朧其の氷山雪塊の本國に逃れ去らむとしき。朧きは人の情なり、誰か吾郷の洵美を謂はざらむ、是れ一種の觀念なり。然れども日本人が日本江山の洵美を謂ふは、何ぞ啻に其の吾郷に在るを以てならむや、實に絶對上、日本江山の洵美なるもの在るを以てのみ。外邦の客、皆な日本を以て宛然現世界に於ける極樂土となし、低徊措く能はず、自ら

　花より明くる三芳野の
　春の曙みわたせば
　もろこし人も高麗人も
　大和心になりぬべし　　頼山陽

の所あらしむ。想ふ浩々たる造化、其の大工の極を日本國に鍾む、是れ日本風景の渾圓球上に絶特なる所因、試みに日本風景の瀟洒、美、跌宕なる所を謂ふべきか。

（一）瀟洒

（一）脩竹三竿、詩人の家、梅花百株、高士の宅、是れ歐米諸國に在りて遂に看る能はざるの景物。
（二）一聲の杜宇知る何の處ぞ、澱江の渡頭新緑流れむとす
（三）芭蕉庵外、一湖の緑萍、青蛙雨を喚び來る。
（四）一雨塵を洗ひて洛東の樓臺愈々高く、東山の嵐翠滴らむとし、眉の如きの新月、山の側面に懸る。
（五）須磨の古驛、眺が苦屋の鹽焼く煙一縷、方に磯馴松の間より騰がる。
（六）鈴蟲聲は咽ぶ萩花の路、風は清し宮城野外の秋。
（七）老仙一聲、寒砧萬戸、多摩の江心恰も秋月の白きを看る。
（八）南都の客舍、聽き得たり鹿鳴の呦々を。
（九）鮭捕り網を斜陽に曝らす石狩江村の晩、奥州訛りの漁唄、雪の如き荻花の間に起る。
（十）夜雪初めて霽れ、分明に認め得たり屯田村（北海道）の燈火三四點。
日本風景の瀟洒なる所此の如し、而して瀟洒の粋を

（二）日本の秋

となす。若し夫れ亞細亞大陸よりの西北風微か

に吹き初め、霜氣漸く動きて、爽籟八十餘州に徧透するや、歐米諸邦稀に看る所の白樹は、黄ばみ盡くして笛聲、砧聲と共に落ち、頃しも鴻雁は、湖北地方に餌食の缺乏するを以て、黨派を團結し相競ひて寒雲を渡り、餌食の饒多なる日本に南來して蓼汀蘆渚の間に下り、時に看る、植物黄色素の代表者にして而かも歐米諸邦に看得ざる公孫樹は、葉々黄金を累ね來るを。獨り植物黄色素の代表者の日本に多在するのみならず、植物紅色素の代表者たる楓樹屬も亦た日本國中到る處に普遍し、楓樹、ミヤマモミヂ、ツタモミヂ（一名トキハカヘデ）、オニモミヂ、三角楓、ハナカヘデ、ヒトツバカヘデ、ミツデカヘデ、ウリカヘデ、ウリハダカヘデ、ハウチハカヘデ、テツカヘデ、カヂカヘデ、カラコギカヘデ、オガラバナ、チドリノキ、メグスリノキ、チヤウヂヤノキなる十八種の一齊に紅葉して宛然天女の雲錦を曝らすが如きは、實に瀟洒と美とを兼併するも、想ふ此の如きの大觀、歐米諸邦に多く看得ざる所、英吉利人、自尊自大、動もすれば輒ち其のテームス江畔ニユーンハム、ハンボールンに於ける九月の秋色を夸揚し、マグダレンに於ける十月初旬の秋色を稱賛す、然れども楓樹屬は英國に殆んど絶無たり、楓樹屬にして絶無なる處、如何ぞ秋の大觀を知覺せむや、乃ち知る、

紅葉ちるなからのやまに風吹けは
にしきをたゝむ志賀の浦なみ　　刑部卿範兼

の如き句は、彼の自然界の景象を細察し酷愛する「湖畔詩人」ウォルヅウォルスの頭腦中にすら描く能はざることを。スコット、一代の天才、自然の景象を寫すや往々妙に入る、特に自然界百般景象の彩色を調合鹽梅するの頭腦に到りては、僅に瀑・流の畫家と比肩し得、而かも惜む其の文筆紅楓を寫すの絶少なるを。要するに英國の人、其國に在りては紅楓を描寫する能はざる者、英國の秋たる何ぞ日本の秋と相對比するに足らむや（第四十二頁より四十五頁に到る「紀南半島、四國の南半、九州の水蒸氣」と參照すべし）。（本集には之を缺く）

（二）美

（一）綠楊は帶の如く畫の如く名古屋城中を籠め、櫓閣高低其間に隱見す。

（二）桃鄕（駿河）の落花、亂點して紅雨の如く、地に布きて錦繡に似。

（三）嵐峽の春雲、霞月を掠め、夜色朦朧。

（四）川中島四郡、菜花麥苗、黄綠綿綿、千曲の一水其間に屈折し、上野、信濃の層巒、濃淡高下、地平線上に塗抹す。

（五）二州橋下、春潮雨を帶び、鱠殘魚網に上る。

（六）灌佛の人は歸る國分寺の外、一群の少女山躑躅花を髮に插みて過ぐ。

（七）櫻島噴煙の圓錐的火山、蓊蔚其の腰脚を環り、綠竹之れを圍み、其間柑、柚、臭橙、金橘、朱欒の枝條相雜接し、煙草の畦圃高低參差す。

（八）肥後の山間、側して谷を下瞰す、深十數百尺、内に人家數煙、炊烟映發し、一株の枚煙、霜葉、犬聲と共に起る。

（九）駒ケ嶽（信濃）の峯頭、蕭然たる偃松は、雪の如き花崗岩の上に匍匐し、葉は白に抹し、白は赤を抹す。

日本風景の美なる所此の如し、而して其の粹を

（一）日本の春

となす。支那人、朝鮮人や輒ち「葵花三月」と稱ふ、「櫻花」の眞面目を知覺するか。

漢土無櫻。久無鶯。非無櫻也。無我櫻也。鶯亦然。彼之有鶯。其形大。其色殊。其韓不若我鶯之美也。其或來于肥筑之地。我稱之爲高麗鶯。至於我鶯。則曰。黃頭鳥也。

柴鵪鶉也。皆以其近似者。比擬之云爾。其實我鶯聲之美。既過彼鶯。而使彼有之。則誰舍此而不稱耶。而吾未見黃頭鳥。柴鵪鶉之詠於詩也。含繞梁遏雲之巧。而愛閭巷無節之謠。是豈人之情也哉。故知其果無我鶯也。嗚呼。櫻而不若我花之麗。鶯而不若我聲之美。謂之無櫻無鶯可矣。人而不得爲人之道。孰謂之有人乎。苟生於我而爲人者。修其德音。勿使鶯獨擅其聲之美。

齋藤 竹堂

正德辛卯。韓使來聘。時宜義筆語於客館。與彼學士。書記等。質問物産。宜義曰。此樹我土名櫻花。樹高二三丈。葉與垂絲海棠一樣。惟枝條不柔軟爲異也。三月初生葉開花。略似薔薇長春花形。其色有白。有紅。又有重瓣。單瓣之異。蒂長三四寸。於葉間或三蕚至五六蕚。爲叢而生。一如海棠花。而蒂差長。單瓣者結實。形似郁李子而小。生青熟紫。味甘。其葉稚者淺紫色。大者綠色。至霜後。葉丹可愛。花品甚多。至數十百品。其最可觀者。有若勝。粉紅重瓣。花頭甚豐。特極嬌麗。有御愛。單瓣粉紅。比常花差大。有美人紅。重瓣嬌紅開早。有緋櫻。千葉初綻深紅。及開色漸衰。有香櫻。芬郁特甚。又有一叢中開花。重單相間者。衆花攢簇爲毬者。攢密綴枝作花。如千葉郁李花者。豐腴豔美。群芳皆在下風。徧查古今載籍。牽收垂絲海棠。不言有此花。豈以中原之地所稀有而不及見耶。貴國與弊邦相鄰。地氣當不甚遠。或有此花。名字亦以何稱之也。學士李東郭答曰。俺始到馬島。得見貴邦所謂白櫻桃。其枝葉之奇。信如書中所際。而第恨已後花時。不得見其花色爛熳耳。俺國櫻桃樹高不至一二丈。不過鬱密叢生。其實有紅白兩種。而花色亦零碎。婆娑不甚美好。故種之者。只爲其食實而已。與貴邦之櫻。絶不相類矣。

稻 宣義

と、支那人、朝鮮人は「鶯花」の眞面目を知覺せざる者。歐米諸邦に到りては、初春に梅花なく、晩春に櫻花なき處、其の春なる者、畢竟言ふに足るなきのみ。

(三) 跌宕

(一) 那須の曠野、一望微茫、松樹或は三或は五蒼健高聳す。

(二) 萬頃の太平洋面、筍岩(洋客は「ロットノ妻」と稱す、基督教經典の所謂ロットの妻、女天命を犯し、上帝の罰を蒙りて鹽の柱に化す云々より斯く命名せしもの、岩は八丈島と小笠原列島との間、太平洋上に在り、)峭起し、雪浪之れに怒撃し、一隻の信天翁雙翼を張りて岩頂に佇立す。

(三) ブランド牧師の古堂(信濃)、高巖絶壁の上に在り、危瓦墜ちむとす。

(四) 雁寒雲を渡り、匹馬白川關外の曉色に嘶く。

(五) 秋高く、氣清く、天長へに纖雲なく、富士の高峯、武藏野の地平線上に突兀す。芙蓉萬仞、月中に高き處。嶽影太平洋上に倒映する處。

(六) 北海道の沿岸、路左幾百尺の石壁峭立して天を插み、路右斷崖に臨み、其下怒濤騰沸、飛噴逆上す。

(七) 立山(越中)の絶頂、百餘の山嶽を下瞰し、一齊に雙眸中に收むる處。

(八) 阿蘇の峯巓、側に二條の噴烟空を衝きて蒸上し、前に直徑七里ある舊火口外輪の連山隄防の如くに圍繞するを目八分に看、輪内陸開して平林田疇、村落簇々、煙火東西に廻り、耕鋤駄馬隱約の間に在り。

(九) 樽前(膽振)の嶽腹、大塊なる赭褐色の溶岩相錯列し、噴火後、高樹は乾皮龜裂し、

枝葉悉く去りて骨立竦峙する處、一片の缺月慘澹に照し來る。

(十) 捨子古丹(千島)の滿島積雪皚々、最高點より一條の噴煙斜めに騰沸す。

(十一) 日本海上、雲霧冥合、其上より鳥海山の三角形なる峯尖忽焉と露はる。

(十二) 雷雨鳴門(阿波)の上を過ぎ、雲色は潑墨の如く、渦流は人立す。

(十三) 驟雨一過、太平洋上、四望淼渺、虹半ば消えて、紅色、黄丹色、黄色の彩雲、滾々として天、水に連る處に湧く。

(十四) 最上川の上流、飛泉疊瀉、一瞬十里、毛髮爲めに竪立す。

(十五) 仰ぎて大川の天上より落つるを看、俯して奔雷を地下に聽く、是れ那智の瀑布。

(十六) 滿眸皆な梅、月色皎々、他に些の一物を看ず。

日本風景の瀟洒、美、跌宕なる所此の如し、其の此の如きある抑ゝ故あり、曰く、

一、日本には氣候、海流の多變多樣なる事

二、日本には水蒸氣の多量なる事

三、日本には火山岩の多々なる事

四、日本には流水の浸蝕激烈なる事

此の四の者を逐次縷述するに先ち、日本國の日本海岸と太平洋岸との百般上に大差ある事を知了せざるべからず、唯だ其の大體を表記し、以て僥々たる縷述に代へむか

日本海岸

(一) 日本海岸は傾斜急劇なる所多く懸崖も多し。

(二) 日本海岸は曲屈少し、故に短し。

(三) 日本海岸は曲屈少し、故に港、灣、熱閙なる埠頭少し。

(四) 日本海岸には沖積平原割合に少し、其の平原と稱するものも岡巒の連濱まで延長する間に緩慢なる斜面をなす所を云ふもの多し。

(五) 日本海岸の地質は堅硬なる所多し。

(六) 日本海岸の土地は沈降若くは減少する所多し。

(七) 日本海岸には鑛山殊に多し

(八) 日本海岸の風位は規律正し、殊に冬季は強烈西北風吹く。此の西北風は亞細亞大陸より直ちに吹き到る、故に本來甚だ乾燥せるものなれども、日本海を經過する間其の海上した[illegible]水蒸氣を收納し、之れを傳送して日本本州の分水脊をなせる山脈の頂部に衝突し、其の水蒸氣は即ち其所に凝結して、分水脊以北なる土地を濕潤[illegible]たらしむ、故に冬中曇天多く、雪を降すこと多量。

冬季は濕氣多く、夏季乾燥す。

年内を概するに太平洋岸より晴天少し。

(九) 日本海岸は北方に在るが上に、其の氣象は亞細亞大陸の感化を享け(即ち大陸的)、且つ日本海の中央には寒帶海流流注するを以て、氣候寒冷。

(十) 日本海岸は潮汐干滿の差少に、且退潮の間と雖も干潟を看るなし。潮水は月の盈虧に應ぜず

(十一) 日本海岸は冬春の間颶風[illegible]、船舶の難破するもの多し

(十二) 日本海岸の氣候は概して太平洋岸より[illegible]し、然れども太平洋岸よりも濕氣の多量な

太平洋岸

(一) 太平洋岸は傾斜急劇なる所少く懸崖も少し。

(二) 太平洋岸は曲屈多し、故に長し。

(三) 太平洋岸は曲屈多し、故に港、灣、熱閙なる埠頭多し。

(四) 太平洋岸には沖積平原割合に多し、岡巒の連濱まで延長する間に緩慢なる斜面をなす所の所謂平原とては少し。

(五) 太平洋岸の地質は軟鬆なる所多し。

(六) 太平洋岸の土地は昇起若くは增加する所多し

(七) 太平洋岸には鑛山殊に少し。

(八) 太平洋岸の風位は變化あり、然れども夏季は大概東南風吹く、此の東南風は印度洋、支那海を經て吹き到る、故に本來[illegible]なるが上に、印度洋、支那海を經過する間[illegible]なる多量の水蒸氣を收納し、之れを日本に傳送し來り爲めに[illegible]を[illegible]す、又た八九月の候に當れば印度洋を經て大雨暴風の來襲すること多し

冬中晴天多く、雪を降すこと少量

夏季は濕氣多く、冬季乾燥す

年内を概するに日本海岸より晴天多し。

(九) 太平洋岸は南方に在るが上に、其の氣象は支那海、印度洋の感化を享け(即ち洋海的)、且つ其の沿岸には赤道海流流注するを以て、氣候溫暖。

(十) 太平洋岸は潮汐干滿の差大に、四五尺乃至一丈に到り、又た干潟數里を看る 潮水は月の盈虧に應ず

(十一) 太平洋岸は夏秋の間颶風[illegible]、船舶の難破するもの多し

(十二) 太平洋岸の氣候は概して日本海岸より[illegible]し、然れども日本海岸よりも濕氣の少量な

る地方も多し。氣候暑中强し。
(十三) 日本海の水源は太平洋よりも遲緩なり。其の鹽分は太平洋よりも少量。而して晴天少し。故に沙鹽の事業盛ならず。
(十四) 日本海に注入する川河は北流す。
(い) 石狩川 (石狩)……………………對
(ろ) 御物川 (羽後)……………………對
(は) 信濃川 (信濃、越後)……………………對
(に) 犀　川 (信濃川の一支流、信濃)……………………對
(ほ) 神通川 (飛驒、越中)……………………對
(十五) 日本海中に在る島嶼は海岸に平行す、即ち海岸に沿ひて連續的に海中に並列す。之等の島嶼は、火山脈の海中に在りて、低所は海中に沈没し最高點のみ海上に隆起し以て島を成すものにして陸地と一群島を成す。之等の中未だ全く本土より分離せず島と成らざるもの多し。
(い) 羽後の男鹿半島より起り、日本海に入り、羽前の飛島、越後の粟生島を隆起し、越後に上り、角田山、彌彥山、米山、妙高山を隆起し、竟に富士山火山脈に合するもの。
(ろ) 火山脈佐渡に起り、能登半島に上り、寶立山、高洲山、鷹爪山を經、再び海に入り、隱岐の島後、島前、長門の見島、壹岐島を隆起し、平戸島、五島に到るもの。
(十六) 日本海岸には漁して砂糖、煙草、藍の類を產出する所少し。
(十七) 日本海岸は往來交通の利便甚だ少し。
(十八) 日本海岸は太平洋岸よりも人口少し。
(十九) 日本海岸にては未だ日本歷史中の重要なる事件を演出せしことなし。
(二十) 日本海岸は未だ發達進歩せず、今日より發達進歩せむとするなり。
(廿一) 日本海岸は露西亞、滿洲、支那の北部、朝鮮に對するもの。

る地方も多し。氣候暑中强し。
(十三) 太平洋の發露は日本海よりも急速なり。其の鹽分は日本海よりも多量。而して晴天多し。故に沙鹽の事業盛なり。
(十四) 太平洋に注入する川河は南流す。
十勝川 (十勝)
北上川 (陸中、陸前)
利根川 (上野、下野、下總、常陸)
天龍川 (信濃、遠江)
木曾川 (信濃、美濃、尾張、伊勢)
(十五) 太平洋中にある島嶼は海岸に平行せず、即ち前者の如く連續的に洋中に並列す。之等の島嶼は、火山脈の洋中に走りて、低所は洋中に沈没し最高點のみ洋上に隆起し以て島を成すものにして廣然と群島を成す。之等は皆な本土より全く分離して眞正の島と成れり。
(い) 伊豆七島及び小笠原列島、富士山火山脈の南走し洋中に入りたるものにして、大島より八丈島を隆起し、小笠原十七島を隆起し、明治二十四年新版圖に入りたる硫黃三島に到るもの。
(ろ) 大隅列島及び沖繩列島、火山脈遠く南洋諸島に起り、臺灣島を經、沖繩列島を隆起し、大隅列島より薩摩に上り、櫻島を隆起し、霧島山を經て肥前に入るもの。
(十六) 太平洋岸には漁して砂糖、煙草、藍の類を產出する所多し。
(十七) 太平洋岸は交通の利便甚だ多し。
(十八) 太平洋岸は日本海岸よりも人口多し。
(十九) 太平洋岸にては往昔日本歷史中の重要なる事件を演出し、又古來歷代の舞臺多くは此所に演せし。
(二十) 太平洋岸は甚だ發達進歩し、日本の文化は多く此所に聚れたるもの。
(廿一) 太平洋岸は支那の南部、南洋諸島、亞米利加、濠洲に對するもの。

如縄路傍北溟道。不與南方景象同。
隨月潮頭無大小。磯岸濤勢有雌雄。
天開碧帶晴臨日。海迷渴呼鞭鞨風。
孤客老懐自奇得。越山四度七年中。

市川寛齋

紅墩直上亂松邊。萬井人家午爨煙。
水合群流歸大壑。山無餘勢是平川。
少遊逸事哀殘闕。武衛遺民漸變遷。
滿眼昇平今有象。蘆花洲化稻花田。

菅我耐軒

不信人間道無力。欲傳神女夜來聲。遺君力荷夜未了。托敎湧貴隻且頭。大塊文章看何日。黑風白雨妙蔵山。

翠川生

日本には流水の浸蝕激烈なる事

日本の地形、幅狹く、丈ケ長く、蜿蜒として細く伸張し、而して峻崇たる山脈は、海岸線に并行して國の中央に連亘す、況んや火山力多大なるが故に、聳立秀俊なる峯頭は觸處峯巒し、下滑優々、森列して際なし、是を以てか若し夫れ天雨を貸し來り、神斧を揮ひて日本國土の上より切斷せしめむか、其の横切面は鋭尖なる三角形を作さむ、此時に當り四周なる大瀛の水より發上せる多量の蒸氣は、雨となり、雷となり、氷雪となり、泉となり、瀾水となり、河流となり、以て三角形の頂點より急激なる斜面を直瀉して下り來る、日本に於ける流水浸蝕の激烈にして快なる固より然り。其の初め泉水なきに個、既にして潺湲微かに音あり、既にして濺々、既にして滾々、會々磐石に會ふや、迂回して下り、漸く斜面の急峻なると共に、漸く其の速力を増進し、忽ち巨巖に當るや、爲めに止められて進行し得ず、鬱勃憤然、奮躍して巖に上り、之れを剝蝕し去り、勢ひ鬱として下り、更に崩然たる崖壁に當るや、激して飛雨となり、濺沫澗に滿ち、犇て内部の孔竅に浸入し、内外交々攻撃して、遂に彼の

於戲奇哉鬼橋奇。鬼耶神耶將化兒。海内異觀此一橋。天台石梁亦徒爲。吟客夜投帝釋窟。大嘯驚夢夢纔支。曉霧擎人急嶮際。怪嶂危巒貫翠巖。石門重開雲呑吐。波角牽掣倒垂枝。忽看大壑巾否塞。飛來長流何處之。寧知寄際通山脈。百丈横跨千尋谿。萬古不擁穹隆勢　雲根天矯逆蛟螭。上生老樹爲蔽橋。牛馬來往似坦夷。下如大月生溟渤。水爲伽藍州爭。縱有雲漆漂山至。洞然流去亦不移。疑伏老蚪俗蝕山死。鱗甲化石不絶離。又疑天半長虹飲谷々。靈氣固結凝不虧。不然太古架橋始。眞宰教民運巧思。萍梗曾搜東方勝。全洞庚申屈指推。不知絶奇在目睫。一條壓倒萬欽寄。寄語天下烟霞客。公論不是我言私。不攀見猶勿談美。不渡鬼橋勿説奇。

坂谷朗盧

てふ

帝釋ノ鬼橋

備後國奴可郡帝釋村に在り、一名神橋、又た雄橋、所謂雄橋は雄橋より帝釋川の下流一里に在り。

「鬼橋」、「神橋」の俗稱あれども敢て鬼神の之れを架したるにあらず、單に帝釋川上流の激烈なる水力は雄然たる岩壁を浸蝕して此の石橋を刻出す。

備後國尾山町より五里二十町、若くは尾道町より六里十一町、芦田郡府中村に出で、村より北行し、二里、同郡木野山村に到り、更に三里二町、甲奴郡上下村に到り、更に三里三十一町、同郡宿草村に到り、更に二里十八町、三上郡庄原村に到りて東折し、更に四里三町、奴可郡西城村に到りて南折し、更に三里十二町、竟に帝釋村に到る。又た伯耆國米子町より東南五里、日野郡二部村に出で、村より西南行し、更に二里、同郡黒坂村に到り、更に三里三町、同郡霞村に到り、更に三里十七町、同郡多里村に到り、更に四里四町、備後國奴可郡小奴可村に到り、更に三里二十五町、同郡油木村に到る 以下前出す

帝釋村の東北、帝釋川の上流に一大洞窟あり、「帝釋ノ河原」と稱す 帝釋村より帝釋川に沿ひ、山徑を辿る凡半里、「鬼橋」の上に出づ、橋は稍々中弩、此を橋上に在るを覺えず、迂回して下に降り、仰ぎ望めば、幅七間餘、厚サ五間餘、長サ三十間餘の弩形せる一大石橋、山より山に架し、帝釋川を跨ぎ、水面上より高サ七間餘に懸かるを看る

の如きを刻出し、既にして奔馬の如く下り、到る處脆弱なる地皮を剝蝕し來る、其の

（一）火山岩に於ける浸蝕

の如き、流水は先づ岩の表面を剝蝕し、且つ其の多孔なるに乘じ、頻りに内部に入りて攻撃し、竟に其の両根、日光、榛名の峰を造り、榛名山中の奇岩怪石等を彫像し、其の雄

快なるは到底支那人、英吉利人等の其國に在りて目睹する能はざる所、特に豪放奇警なるは、

耶馬溪記

歳戊寅。遊鎭西。過海。南望彦山於雲際。已疊其有異矣。既經二肥薩隅。還西豐後隈邑。臘月五日。入豐前。過一水北來。蓋發源彦山者。沿焉而東數十里。皆黑壁左右峯巒皆非凡。山溪相迫處。鑿山腹爲道。又穿竇取明。余買炬以入。過竇。窺見月在溪水朗然。宿民家。翌大霧。待霽乃發。復沿溪東。愈東愈奇。群峯夾水攢竦。如春笋護出。有土載石者。石挾土者。全石者。全石破裂成洞穴者。兩石相鬪其一欲仆者。石數層累成夏雲狀者。而樹自石罅。横生縱生倒生而上指。叢生蔽石。如與石爭勢而欲勝之。石又自樹中。奮躍而出。而石陰皆苔。紫綠相間。或沒石半面。或沒全身。又如援樹攻石者。大抵峯勢石皴。如匠巨刻意圖。時窮冬。多老木葉脫。槎牙瘦古。皆覓黃筌法。而苔枯變蒼渴者。王叔明也。古人筆墨。不吾欺也。至植阪。憩孤店。店面石壁數丈。飛泉懸焉。仰則更有高峯。不知其幾十丈。余急呼所佩酒瓢。命煖之。寒突蕭然。會一獵師獲豪猪。割而炙之。肪脆如水。連引數大白。又行。溪又數曲。隨峯勢上下。或激雷噴雪。或渟膏凝碧。峯影爲之或碎或全。似水妬山而亂其影也。至屈智林。溪稍開。有小村。過一橋。自此行溪北。開者益開。數十里。詣古城正行寺。寺主含公。余故人。訣余既久。余先詑曰。君州山水大奇。含公曰。更有奇者。使子見之。居二日。與含公。南行。行田塍間。至仙人巖。巖石突立山中。含公指示余。余不甚賞。其明。又徑田塍。至羅漢寺。寺據山。鑿山作洞窓橋梁狀。安五百像。余復不甚賞。宿寺前逆旅。挑燈而談。余曰。山不得水。不生動。石不得樹。不蒼潤。所以余賞馬溪。而不賞仙巖。至於羅漢。則人工耳。然皆馬溪之支裔矣。且馬溪。溪山相迫。無田塍礙目。而其路坦夷。眞可遊也。然爲二豐通道。過者慣看。況公等生長此土。宜不恐其奇也。余則再遊不可期。將復溯之以諦觀之。含公奮袂與偕。早發。過一水。北出馬溪口。峯容樹色。忽覺迴別。自淺入深。自平入奇。泝前數曲者。一曲奇於一曲。比諸前遊。更可喜也。復至絕壁下孤店。店主識余面。驚曰。是前喫猪客也。有何幹。再來此耶。余曰。欲看山耳。曰。山有何好看。吾不禁子看也。遂席溪畔。與含公。傾瓢一醉。宿山寺。明。雨。借轎西還。山峯得雨。皆變幻作態。或可以爲一山者。分成數峯。如群仙駢肩。露其半身。萬松振鬣。鼓濤於雲中。又如廿五菩薩奏樂而至也。還至屈智林。含公慮吾酒盡。預戒家僮。馱樽於馬來。取醉。宿阿保村。翌歸寺。又三日辭去。踰海東歸。自海雲中。顧望鎭西山嶽。其屬豐前者。皆有別態。彦山其尤大者。耶馬山脈水理。蓋皆自彦山發。故獨絕耳。余足跡幾半海內。弱冠東遊得妙義山。以爲無雙。今馬溪百里。如妙義者。不知幾十峯。謂之海內第一。或不誣也。　頼山陽

の如きを穿鑿し、水勢愈々猛雄となり、捍怒鬪激するや、其の

富士川

甲斐の笛吹川系と信濃より發源せる釜無川系とは甲斐西八代郡市川大門村傍近に相合併して富士川と稱せらる。富士山に發源せるものにあらず。

甲府平原は太古の湖底にして蓋し笛吹川南流し湖水を排出して現時の沖積平原を化成す

富士川の大概は第三紀層地を流走するも水景の豪放雄快を極盡するは南の方火山岩の間を流走する邊に在り、

甲斐國南巨摩郡鰍澤より定期の下り船あり、即ち鰍澤(海拔二二七米突六、沖積層地)より川流と共に南下し、早川の東流して此川に注入する處までは水勢平々、悉く第三紀層地の間を流れ、村々た村、稻田

瑚々、時に曠[illegible]流れ[illegible]に過ぎず、早川分流の處より以南は、河流は第三紀層地を穿鑿するも、傾斜の劇なるを以て、水勢亦た急劇、下山村（海拔二〇四米突五）、第三紀層地を過ぎ、波木井村（鰍澤より此村まで二時三十分間程、村は身延山久遠寺への上陸場たり、村より寺まで四十分間程）、南部（海拔一二七米突八、第三紀層地、波木井より一時間程）、萬澤（海拔凡八十三米突）の各村を經、甲斐國南巨摩郡を去り、駿河國庵原郡に入り、漸く火山岩に會し、水勢澎湃、火山岩に觸れて四迸倒注し、宛然たる一大飛瀑、其響轟然として奔雷の如く、會々「釣橋」岩上に跨り、危欲落ちむとするの觀ある處、更に景象の奇警を添ふ。「釣橋」より以下、左岸は富士山より流下せる溶岩累積す、岩は直ちに富士山頂と延縁するもの、北松野村（右岸）に到らむとするや、溶岩は山を越えて右岸まで延線し、此所に六角體の岩柱累々として横列し、其狀積俵に異らず、所謂「俵岩」とは是れ、南松野村（右岸）に下れば、其の對岸に岩本の輝石安山岩山秀立す、愈々南下し、竟に岩淵停車場（東海道鐵道）構内の溝渠に入り此處に上陸す、南部より此處まで三時間程、鰍澤より六時三十分間程。

の如きを呈出す。更に豪放雄快の一層々なるは、

（二）花崗岩に於ける浸蝕

是れなり。想ふ花崗岩は堅硬なるもの、容易に浸蝕さるゝものにあらず、而かも猶ほ且つ流水の汪々滔々に當るべからず、竟に

みかけには堅く見えたる岩かねも
みつにくだけて景色そふるか　　方　井

の如き状あり。然れども花崗岩や素と堅硬なる大丈夫漢、豈に徒らに流水の勢威に屈伏する者ならむや。若し夫れ流水の勢威に浸蝕せられ、竟に摧けざるべからざるに到れば、自ら自己の分條、裂理に依りて大塊に摧け了る、故に其の摧けたる痕跡や、踔厲跌宕、堂々として大丈夫漢の本色あり、甲斐の

昇仙峡

甲斐甲府市の北微西二里乃至三里の間に在り。此勝は甲斐東山梨中巨摩二郡の間を流經する荒川の溪水及沿岸に開展す、荒川北より來り花崗岩を穿鑿し其水は晶明其岩は雪白加ふるに激烈なる浸蝕に因り奇々怪々の狀を呈出す、況んや奔水處々に飛瀑を作し其の雄快なる胸宇を壯にす、若し夫れ霜氣峽に横はり木葉紅を曝らし黄を染め水愈々痩せて一碧と青く岩愈々露はれて一層と白きの候に到れば景象一個に神に入るを覺ゆ、此勝は甚だ江湖に知られずと雖も東京附近にて花崗岩水蝕の妙を探らむとせば一游すべし。

甲府市より北微西二十五町、人力車を驅り和田村に到る、村より和田峠を登り初め、「三本松」の下に一憩して下瞰せば、甲府の全市、笛吹川の溪谷は雙眸中に落ち、荒川一帶銀の如く其間に屈折し、景象一幅の油畫に異らず、峠は悉く火山岩に成る、登り了りて丸山村に到れば、未だ脚下に火山岩を踏み居るも、路の左方には花崗岩現出し來りて、高砂山全體白雪を積むに似たり、村より溪路上下、半里にして天神平に下る、所謂昇仙峽の勝は「天神平」以北に在り、荒川の一水北より花崗岩を穿鑿し來り、川左の路に沿ひて其の浸蝕の痕跡を行く／＼觀視せば、其勝眞個に筆に記すべからず、「天神森」を去るや、「長瀞」あり、急流の長く横に靜りて一碧瑠璃を織かすもの、「不動ノ瀧」あり、瀧の上、猿公の長臂するが如き巨岩、「猿岩」と稱す、「雷轟瀧」は水の奔轟の如く飛躍するもの、瀧の傍に富士岩聳立す、宛然たる一塊の小芙蓉、其畔より「覺圓石」を右に看、「[illegible]山石」、「十徳石」、「磐石」を左に仰望し、忽にして一路右に大岩の峙するを認む、所謂「[illegible]石」とは是れ、「覺[illegible]山」、「二ノ嶽」、「三ノ嶽」大なるもの二個並立し、「大砲岩」亦た頭上に突起す、漸く北行せば[illegible]一路を開鑿せし[illegible]圓右衞門の碑あり、[illegible]の奇觀な[illegible]る[illegible]像を刻し、上に[illegible]の[illegible]あり、「石門」に入る、兩岩相抱きて一門をなし危く崩れむとするの觀あり、此の邊火山岩右に突起し、「覺圓峯」左に孤聳し、兩壁峽立、中に一線の天色を露はし、岩皆な花崗岩、松樹其の隙際より亂生し、岩に根を蔽はせ扶持自ら守る所、奇岩跌宕、碑より少しく北せば、「浮石」あり、雪白の花崗岩水中に臥するもの、石の傍に「雪虹潭」あり、雪鱗り虹湧き其稱に背かず、潭畔の懸崖に岩面を磨して一文を刻す、蒼古字を蝕して讀むべからず、所謂「磨崖碑」とは是れ、叙にして「昇仙橋」に上り、「仙娥瀑」を觀る、花崗岩峰立し、瀑其上より瀉ぎ下り、飛沫繽紛、半ば潭に落つる時纚々として一束の疎雨に異らず、雨下り滿飛び奔りて橋外に出づる所、雄快一番、人目を壯にす

仙娥瀑より以北御嶽の金櫻神社に詣る者は第百五十八回「金峯山」の章中に在り、參照すべし、（本集には缺く）

の如き即ち是れ。其他流水浸蝕の激烈なる

たにかはの音には夢もむすはしを
ねさめの床と誰れながくらむ　　近衞攝政家熙公

と詠みたる寐覺ノ床（插畫中に詳なり（[illegible]））の如き、木曾の懸橋所在の如き、皆な流水の花崗岩を浸蝕して鑿通せしもの、眞に觀て以て壯とするに足る。且つ夫れ流水花崗岩の罅隙に入り、冬間其の結氷するや、結氷の際、水の分子膨脹すると共に、岩は罅隙より摧け、音響轟々として猶ほ[illegible]の爆[illegible]彈を一時に發[illegible]す

るか如しとは、木曾、甲州山民の往々說く所、是れ亦た花崗岩が臨終の豪爽なる處、蓋し木曾地方景象の雄大莊嚴なる、所謂

そも／＼木曾の路は大むね岨のかけちさかしき山坂にてほのかなる溪あひ奥深き山里のみにて見上ぐれば千尋のきり岸高く聳えて空をかくし見下せば一筋の溪河白く漲りて玉をちらしあるは木こりの通ふ細路嶺よりみねにめぐりあるは筏をおろす流溪よりたににいり魂を驚かす水の響心をさむからしむる巖の形かの唐人の山は人の面よりおこり雲は馬の頭にそひて生ずといひけむもかゝる所にこそはと思合はさるしかのみならず年經し林に風おこりて鳥の聲ものさびしく古びたる石に霧まとひて瀧の音かそけきなど言盡すべくもあらず

かゝるけしきは世に大かた稀なるをこの道をゆきかふ人は常になれてさる所とも思ひたらず豐後の野馬溪上野の妙義山などをことにふれてこと／＼しくいひ出でつゝ二なきものに思ふもすくなからずそれはた世の常の所にはあらざめれどたとへば屋などにかきたらむ繪ともいふべくやこゝのさまはそのすがた大にしてたけたかき屛風橫長き卷物をみるこゝちなむせらるゝ心ある人は誰もしりたらむことながら事の序に驚すになむ

てふもの、全く流水の花崗岩大塊を浸蝕する所に在り。

下岐蘇川記

天保丁酉四月。余竣役。與兩藩士倶自江戸還。取路東山。舍輿步行。旁探名勝。五月四日。下十三嶺。晚宿伏見驛。連日崎嶇經涉山間。頗疲。至奴輩把槍荷鎧者。或踣痡不能起。且聞水路之勝熟矣。因謀賃舟下岐蘇川。至桑名。殆二十里。不一日而達。乃召舟人戒之。翌日夙起。趨水濱求舟。舟人家在前岸樹林中。閉戶未起。阻以灘聲喧豗。累呼不達。脣焦舌燥。久之乃應。與其兒艤舟來迎。日已加辰。乃發。舟狹長。薄板爲之。呼爲鵜飼。兒纔十三歲耳。父在舳。兒在艫。各持櫂。操縱甚習。灘急舟走。兩崖巑巘。一時皆搖。當前所見。倏忽在後。唯見岸行山走。而不覺舟移。山皆石身載土。松爲之髮。而紅杜鵑糝點於其間。腥血如滴。又處々有水簾懸焉。綏綏灑灑。墜於潭石上。石皆奇狀。羅列兩岸。或特立若柱。或折曲若門。或若渴虬飲澗。或若臥牛橫道。五色陸離相間。或各作大小斧劈。間有作荷葉披麻者。擘波浪而出。突背其來。不暇應接。蓋濤瀧變幻中。帶清秀深隱之態。非荊關之徒。倪黃之手。不能狀也。雖僕隸輩不解山水之趣者。皆連呼奇不絕聲。忽遇一大巖屹立水中。舟殆觸之。少誤則齏粉矣。衆懼而默。舟人笑援柁避之。輒掠巖角過。如此者數處。未嘗差絲毫。但經巖際。波激舟舞。噴沫撲人。衣袂盡濕。回視僕從。各握兩把汗。殆無人色。舟人甚閒暇。從容吹煙而坐。視上流船倂力挽上者。難易懸絕。已而離峽。漸平遠。犬山城聳於翠微上。粉壁鮮明。衆望且歡然。比至城下。又有暗礁齧舟。轟然欲裂。衆復相顧愕然。過此以往。漁舟相望。歌唱互答。衆心始降矣。蓋始發抵此。爲陸行半日之程。不一餉時而至。其快可知矣。嘗讀盛廣之酈道元所記。誇稱江水迅急之狀。至唐李白述其意云。千里江陵一日還。平生竊疑以爲文人虛談。今過此際。始知其不誣也。但舟行甚迅。不能徐觀峽中之勝。爲可恨已。又三里抵笠松。鳴鐘方報巳。登艤岸上店。日猶昳。仰見屋椽。動搖不定。瞑坐良久乃止。

並湧施美媚口。此行跋渉山谷。炭食彌旬。費之以贊叢。蓋已。復入舟。岸愈濶。水愈鍇。險阻已遠。無復可觀。枕藉而臥。風方逆。舟人用力搏搏甚勞。[illegible]聲喧聒。使人頓寃。午下。稍得風便。揚帆復走。衆乃睡醒。此間遠於桑名。日尚高。謝遣舟人。從陸而行。至四日市宿焉。自伏見至此。殆爲二日半路程。遡上行且家家猶酣寢。彼旗關傍聲巳。衆在行旅。信億渉日。殆忘月日。至是乃知爲高年節。不圖今日舟行爲弔掃之擧。抑亦奇矣。且舟渉危險。布帆無恙。免爲泪羅之鬼。不亦厚幸乎。若天下之至奇至美者。每在於嶮巇危嶮之地。不獨山水之勝也。求之者比於入虎穴探龍頷。危而後有所獲矣。余於是乎有感焉。未可以語千金之子也。[illegible]之以示書學勵行之人。　[illegible]

且つや花崗岩たる、多くは白色に、雲母、石英、長石、角閃石の各結晶より組織せるを以て、湍水の之れに衝るや、[illegible]に[illegible]白[illegible]し誠に銀河とも[illegible]
（河内名所圖會）

てふ天ノ川（河内）の如きを作り、宛として銀河の懸くるが如く、水晶簾を斜に垂るゝに似。會ゝ秋月の皎然として浮び出づるや、之れに映じて熒々たるもの、更に反射して一層々の清漣を添へ、所謂

名月のかつらや浮木あきの川　（河内天ノ川）　[illegible]

やま白しまことに月の御影[illegible]　[illegible]

の觀を現じ來る、況んや此の如きの月光、矢嗚參河の花崗岩溪谷を照らして千軍萬馬の古戰場に映じ、笠置山（山城）の花崗岩峽に入りて、元弘帝宸襄の故趾に輝き、湊川（攝津）兩岸の花崗岩沙に反射し嗚呼忠臣墓臺の花崗岩に反射するに到りては、[illegible]なる眞に言ふべからず。獨り月のみならむや、梅花も亦た然り、若し夫れ溪流・道、花崗岩を穿鑿し來り、梅樹、懸崖兩壁の間に綺錯し、枝幹橫斜、花影倒まに水に蘸し、花や玲瓏、水や晶明、宛として萬巨を累積するが如し、梅花の絶勝たる月ヶ瀬（大和）の如き實に是れ。若し夫れ月ヶ瀬の梅花、月と映發するや、

[illegible]時[illegible]更。月色淸朗。步[illegible]眞福寺。梅枝帶月。冷香襲衣。影畫橫斜。寶圖[illegible]寂落滿地。水流其下。[illegible]然有聲。疊耳入境。傍岸西行。前望月瀨。水淸如寒玉浸月影。壁作銀鱗。而兩山之花倒蘸其上。隱約可見。一碧中流。山水俱動。吾平生之願至是酬矣。　齋藤拙堂

となり、雪と映發するや

丹崖碧巘悉化爲白玉堆。花亦與素雪。[illegible]粉傳何郎之面。其美更增。一俯一仰。入目惶然。獨溪光以碧作標玉色耳。梅渓之淸於是爲極矣。古人論梅。謂眞雪[illegible]分白。然雪以自勝。梅以[illegible]勝。各有佳處。　[illegible]

となり、月、雪と相合して映發するや、

山雲龍[illegible]白異[illegible]時。萬玉[illegible]如玉光。與雪相爭應不暇。待[illegible]斜陽[illegible]收。　[illegible]氏　[illegible]

となる、而かも梅花を映發するもの、豈に獨り月と雪とのみならむや、溪は花崗岩なるを以て嶄然たり、水は花崗岩を穿鑿するを以て淸冽なり晶明なり、梅、月、雪を介在より大に映發せしむるは、主として花崗岩に在り、月ヶ瀬の梅花を以て[illegible]絶する[illegible]因にあらず。若し夫れ所在の[illegible]ならしめなば、[illegible]るや、瀑水は[illegible]下すること百尺、花崗岩壁を[illegible]して[illegible]ち、[illegible]めに萬斛の雪を運びて天より[illegible]ち下すが如く、白光閃々、忽ちにして「瀧壺」に下るや、花崗岩亦た此所より[illegible]出して水を[illegible]り、水、岩に激して逆上し、[illegible]、[illegible]するの壯觀

に到りては、花崗岩に依らずむば遂に看るべからず、其の

みつの色たゝしら雪と見ゆるかな

誰れさらしけむぬのひきの瀧　常

皇后宮太夫□居

たき壺は銀の盥やみつすゝし　嵐角

てふ小野ノ瀧(插畫中に詳なり)(□□は略す)、仙娥瀧(第百七十八頁「昇仙峽」の項中に詳なり)(□□□□百九頁)の如き是れ。既にして此岩の流水に浸蝕せられ、竟に粉碎となるや、其の成素たる雲母、石英、長石、角閃石は各個分離して、下流所在に雪の如き白砂を撒布し、青松其間に點綴して所謂白沙青松の活畫圖を描き出し、中國、瀬戸內諸島の美を添へ來る。夫の夜見ケ濱半島(伯耆國會見郡、幅一里、長サ四里、出雲の島根半島と相對して日本海に斗出し、一線の白沙、亭々たる青松之れを裝ひ、藍碧の海水は東、西、北の三面を彩り、眞個一盆の大蓬萊、人をして游賞低徊措く能はさらしむもの)は、實に日野川の流下運搬せし花崗岩沙の日本海の浪濤と中ノ海、出雲の水勢との爲めに、東西兩側より驅り揚げられ、竟に砂洲を化成せしもの、其他中國に於ける花崗岩浸蝕の奇蹟には、

小瀬川ノ蛇喰岩

周防、安藝二國の境界をなせる小瀬川上流(□□□野川)の紫川と相會する處に當り川底の花崗岩に川穴を穿つもの即ち是れ。

川口より上る四里半、周防國玖珂郡□谷村大字岩根に到るや、花崗岩峽岸をなし、水中忽ち巨大なる花崗岩(魚切岩)を看る、魚此岩より上流に登る能はず、故に此名あり、岩より□里餘、川底の花崗岩處々に口徑三尺乃至五尺、深サ四尺乃至十餘尺の洞穴を穿ち洞に尺大の石を藏む、(蛇喰岩即ち是れ)、石塊の上流より扱く驅せ下りたるが此の會流處に到りて止り、花崗岩の裂隙に挿まり、流水の爲めに內に在りて種々摩擦し竟に斯洞を穿つ(□□上東條□□氏の記事に據る)。

の如きあり。要するに流水浸蝕の神韻は花崗岩に在り(第百三十五頁より第百六十一頁に到る「花崗岩の山嶽」と參照すべし(□□□□))。其の

(三) 石灰岩に於ける浸蝕

に到りては、日本には水蒸氣の多量なるが故、地下の泉流も亦た多量、而して石灰中の炭酸は此の泉流中に溶解して、其の特性たる絶大の浸蝕力を逞うし、爲めに石灰岩は內部に在りて自ら溶解し、洞窟を穿ちて深山中に奇怪を倍す。想ふ石灰岩の洞窟や、大概は口狹くして內寬く、身を側てゝ洞門に入り、左體を伏して蛇行すれば、漸く大に漸く寬く、燭を舉けて凝視するに、虛朗玲瓏、洞中、洞底、石鐘乳萬千株、或は森然として上より倒まに垂れ、或は矗乎として下より聳立し所謂石筍、上下相迎へ、或は未だ合せざる者あり、或は僅に合したるも未だ合所の細き者あり、或は合すること既に久しく合所大ならずして一柱を化成せる者あり、其他石灰の洞中に沈澱する者、磊落蹲踞して虎の如く、獅子の如く、立ちて人に似、僧に似、或は火に近き者は暗紅色、稍ゝ遠き者は半白色、遠き者は純白色をなし、光彩多樣、火を挑げて四周を照せば、萬株の石鐘乳、底淨、石筍柱は悉く純紅色と變じ、壯麗陸離、恍として水晶殿中、若くは不夜城裡に入るが如く、恰も聽く泉流の淋鈴として遙に自然の音樂を奏するを、人をして杳然として仙寰の遠からざるを覺えしむ、宜べなり、其の

秩父二十八番札所觀音地內胎內潜リノ岩窟

武藏秩父郡□谷村に在り、武甲山の外皮たる石灰岩は浸蝕して内部に空隙を生じ、其の下の泉水内部より之れを浸蝕して一の大洞窟を穿ちたるもの、昔時弘法大師此の洞窟を發見せりと申傳ふるも、今は信ずべくもあらず。

秩父郡大宮町より西南凡二十町、赤橋□峠を踏み、行く〳〵武甲山の秀色を左に仰望し、上影森村に至り、左折して細徑を行くこと凡十町、岩□立寺に達す、寺は二十八番の札所たり、寺中に石灰岩

絶壁をなし、其の下部に洞窟あり、所謂「奥ノ院」とは是れ。洞口頗る狹くして低く、一人づつ傴僂して僅に入るべし、洞内[illegible]咫尺を辨ぜず、入る者燭を[illegible]、行くこと數步、[illegible]あり、之れを下れば一大房あり、坂を布き歩行に便にす、此處より下方に向ひ、更に二房あり、一を「牛馬ケ窟」と稱す、大房より上方に向ひ長梯あり、之を上れば第二房に入る、第[illegible]房より[illegible]、遂に出口に到る、洞内一[illegible]、[illegible]石灰の洞壁に[illegible]もの、一々怪奇萬狀、「辨天」、「大黑」、「大梵天」、「三寳荒神」、「帝釋天」、「[illegible]」、「[illegible]」、「[illegible]」等の[illegible]名あり、[illegible]、[illegible]氣[illegible]徹し久しく居るに堪へず、十五分間にして普く探討し得べし、出口より[illegible]村まで數町に過ぎず。

出流ノ岩窟

下野國上都賀郡の西部[illegible]出流村に在り、[illegible]、[illegible]、[illegible]らす、想ひ見る萬行の[illegible]出[illegible]の泉水[illegible]年の[illegible]、[illegible]泉水と共に無量[illegible]。

[illegible]道佐野停車場より[illegible]、人力車を驅り佐野[illegible]に出で[illegible]、[illegible]上都賀郡に入るや、[illegible]村に達す、佐野町より[illegible]凡六里、村より二町、淨路を登れば、斷崖上に「大師ノ窟」あり、長梯に上り口に達し得、此窟より少許にして「觀音ノ窟」あり、[illegible]、大房あり、內には[illegible]、[illegible]の[illegible]を安置す、石鐘乳、[illegible]列し、[illegible]麗無比、之れを觀世音の背姿と稱す、「觀音ノ窟」を出づるや、二小窟あり、內部相通ず、梯子に賴り上窟に入れば、內より下窟に下り外部に出づるを得、[illegible]、窟は內[illegible]は遠く[illegible]に[illegible]ること[illegible]。

又た佐野停車場の西北一里半、出流原に一川流の石灰岩山に逢ふや忽ち潛入して失踪し而して諸山の他側より復た流出するものあり。

天ノ岩戸

志摩國志摩郡[illegible]坂[illegible]の南腹に在り

一名「龍祭窟」

地下の泉水石灰岩を浸蝕して此の洞窟を穿鑿せしもの。逢坂峠の南腹に在り、口狹く傴僂して入る、內に入ること凡十間、[illegible]小洞[illegible]あり、高サ凡六尺、愈々進めば凡六[illegible]の一大房あり、房盡くと雖も、口狹くして[illegible]あり、[illegible]にして傴僂せずむば入るべからず、洞內冷[illegible]に甚し、如何なる大暑の候と雖も寒暖計七十度以下に過ぎず

●[illegible]石 は天ノ岩戸より[illegible]十町、志摩國志摩郡[illegible]村大字[illegible]に在り、石灰岩の水蝕せられ[illegible]形をなすもの、「正從[illegible]石大神」とは是れ。

權現ノ窟

美作國[illegible]郡[illegible]坂村の北りに在る洞穴

里人[illegible]洞を以て權現の在所なりと崇祀す、[illegible]の所在には石灰岩[illegible]、[illegible]に[illegible]き[illegible]、石灰、大理石の[illegible]出を以て古來より名あり。

鐘乳穴

備中國阿賀郡水田村。

[illegible]、上房郡[illegible]より[illegible]里二十八町[illegible]村に到り更に[illegible]、[illegible]村に到り更に一里十四町水田村に達す、[illegible]。

洞口甚だ大、然れども中に入るや、暫くにして行き當り、石壁屹立す、壁に小口あり、燭を秉り傴僂して[illegible]、[illegible]、石鐘乳、[illegible]沈澱するも[illegible]、[illegible]ノ[illegible]名稱を附す、[illegible]上に小穴あり、側[illegible]し[illegible]、[illegible]洞內は高低二段をなす、[illegible]下れば[illegible]水あり、小[illegible]、[illegible]に石壁あり、[illegible]、[illegible]に石壁あり、壁上小穴あり、此より內未だ測りたる者なし。

羅漢洞

伊豫上浮穴郡小屋村 松山市より南行し[illegible]坂峠を越えて萬[illegible]村を經[illegible]村より[illegible]に達す、洞の[illegible]四間四十八間、支洞[illegible]

洞門木を以て[illegible]、[illegible]、門內岩石錯立、危[illegible]として落ちむとするの觀あり、[illegible]燭を[illegible]り進む、[illegible]胎內[illegible]と申傳する處あり、[illegible]下に[illegible]、傴僂すれども內狹くして[illegible]す、此處を過ぐれば洞內宏闊、石鐘乳、鍾底森列し、其數幾許なるを知らず、上下兩鐘相合して一柱をなす者[illegible]列し、[illegible]ノ鳥居と稱す、鳥居の下に[illegible]、[illegible]山あり、更に[illegible]の[illegible]あり、[illegible]くは此處に[illegible]く、洞內[illegible]到る處に[illegible]す、[illegible]洞を神佛の在所なりと迷信し、入れば[illegible]と唱ふ(蓋し[illegible]氏の記事に據る)

球磨川

肥後[illegible]郡の東境、火山岩の間に[illegible]村に到りて相合し西折して[illegible]村に到るや八代[illegible]村より發源して南流する川邊川を相合せ人吉町[illegible]更に[illegible]川を合せ一[illegible]村に到る[illegible]、[illegible]八代郡に入りて[illegible]、[illegible]八代町の西南間を[illegible]し[illegible]に到り[illegible]に注ぐ、[illegible]。

人吉町の[illegible]向町より[illegible]、十六里、[illegible]間は[illegible]八代町[illegible]、[illegible]、[illegible]石[illegible]、[illegible]る處に到れば、雨となり霧となり、[illegible]然毛髮を竪てしむ、[illegible]古生紀層の石灰岩壁[illegible]然。[illegible]、[illegible]、竹、[illegible]、[illegible]く能はず、既にして河流漸く沖積平原に入り水勢緩慢、竟に八代に達す、此流を上下する船は前後に[illegible]、[illegible]八代[illegible]

に全島洞穴たる[illegible]石（石灰岩）より成る白崎あり、太奇觀。

神瀨ノ岩戸　神瀨ノ岩戸は人吉八代間舟路の中程、川を下る六里、右岸に登り十八町、其口獅子の口を張りたるが如きもの即ち是れ、洞は南に開き、幅高サ共に三十間、深サ四十間餘、中に小祠を安置す、石鐘乳、底鐘、萬狀に列し、燕の如き小鳥幾百となく其間に和鳴[illegible]し、洞底寒流潺湲として聲あり、里人此洞を神の在所とし、小鳥を神使と尊崇す。

其他風穴、常陸多賀郡の如き、皆な或は神を祀り、佛を安置し、或は神仙の在所なりと崇視することを。蓋し古來山伏が修驗道の祕所と唱へ、役ノ行者が密法を修したる處と傳へ、弘法大師の護摩洞など云へる洞窟も、其の所謂奧妙を窮め神靈を發けは、石灰岩の溶解して鑿たるもの十に七八。

其他地下の流水、突爾と石灰岩壁の中途より外に湧出すること、宛然酒を盛れる樽の栓を拔きたるが如きの觀あるものあり。地上の流水、此岩を穿鑿し、爲めに兩岸嶄然、垂直線狀をなし、其面平滑、猶ほ木板を拵して新に鉋し、鉋して琢磨幾回せる如き狀をなすものあり。皆な奇觀。

石灰岩の浸蝕中、奇觀の更に奇觀なるは石門にして、其の絶大無雙なる川合の一切通し、參河北設樂郡三輪村大字川合、豐川の上流に在り、高サ四十四米突、右側の門柱に洞穴あり。此の附近に石灰岩の洞穴處々に散在す、洞中石鐘乳多し。此の如き、實に溪流の石灰岩を浸蝕して穿鑿する所、眞個に鬼工。

火山岩、花崗岩、石灰岩に於ける流水浸蝕の結果、奇警雄快なるのみならず、

（四）各岩の浸蝕に伴へる雜多の結果

亦た然り。想ふに流水浸蝕の結果は、日本の景象に美、奇、大を添ふもの。其の

二十二日晨起理裝赴瀞川。鵜浦迄至岸。則昨夜所儎小艇艤焉。乃解纜緣流而溯。是爲九里峽。蓋聞峽盡則鬼溪。溪接紀和勢之界。其源發北山川。南流爲瀞川入海。瀞川俗稱音無川。舟程九里許。故又有九里峽之名。舟漸溯。景漸奇。一里而花開。二里而鶯囀。茅屋柴門。隱見溪靄山嵐間。陸句所謂。山重水複疑無路。柳暗花明又一村之趣可想焉。進到急灘。舟子步岸。繂以百丈。其深湍攀舷撑篙。能服手足之勞。如學五禽之戲。時近午。使永井生啓行厨。洗盃酌酒。燃薪煎泉。悠然自適。或臥吹烟。或仰看瀑。或捨舟步渉。或投礫驚魚兒。或喚樵夫。或[illegible]流筏。凡放心目者。莫不一[illegible]興。既抵小川口村。暮色蒼然。就農家宿。二十三日早起解纜。宿霧未散。溪山模糊。舷頭時聞鳴玉噫々之響。則暗泉濺石也。九里峽之間。有四十八瀑布。昨余所見。不過其半。所謂山陰道中應接不暇者。既而峽盡天開。仰喚瓊蝶翠霞。俯瞰琤琮流水。不復知身在一幅畫圖中也。舟子忽報曰。自此入鬼溪焉。回視。山勢逼縮。嶮崖左右起。維石巖巖。鬼斧神劃。奇正交發。所前歷之瀞淺急灘。變爲彌漫滄澤。玲瓏紺碧。靜如鏡。其長凡八町。土人因稱曰八町瀞。瀞之半得一大巖石。屹立水中。高五十餘丈。突兀摩天。石身劈裂。蒼蘚罨之。頂挿一株古松。蒼髯婆娑。望之如遊龍沖天。曰位牌。隔位牌。飛泉灑巖。巖傍斜抽一巨石。形如畫軸。曰簾卷。峭立安排。曲稜略具。苔痕化雲母色者。屏風石也。麗骨難攀援者。滑岩也。其佗曰佛石。曰蛙石。曰釜島。曰大黑島。皆因形取名焉。彌縫之以石楠躑躅等。或倒懸怪松。或横架枯木。石吻相嚙。崖肩爭聳。殆將飛墜。而藤蔓支之。雲氣蒸之。魚影浮空。山光涵水。奇觀萬狀。變態錯出。定造物者之

無盡藏也。舟子仰指瀞上巖穴曰。暗岩也。就見之如何。乃令先導。攀危崖。躋峭壁。踵額相接。始能達洞口。中虛寂然。可容十餘人。横鑿竅穴。如窓牖然。其奧黯然不可測。所以名暗也。余大聲一嘯。則四壁震動。卽錯愕盤旋而下。時已晡。繋舟于屏風岩下、復傾殘樽。陶然一醉。題句曰。詩中山水畫中舟。古得風光最上頭、鬼通路是神路通。瀞使先生記所由。低回顧戀久之。遂命歸棹出瀞。溪濶山舒。激流如箭、忽經小川口村。入熊野川。於是就芳野之途。鬼溪之勝如彼。而寥々無聞。抑山靈祕之歟。嗚呼世之湮沒不著者。豈唯此而哉。野村雨荘

なる紀伊の九里峽、瀞八町、鬼通路の如き、其名未だ多く世間に喧傳籍甚せずと雖も、洵に流水浸蝕の美、奇、大を代表するもの。

瀑布に到りては、火山岩を浸蝕して怒噴飛下せる日光の華嚴、裏見等の諸瀧（下野）、角岩を浸蝕して雷轟雨落し、一大角岩亦た下より之れを承けて散沫珠玉を亂撒せる養老ノ瀧（美濃）、直立一百七十五米突、東、西二瀑布と相駢びて古生紀層の岩石を穿鑿し、齊しく同一の瀧壺に條落する大臺ヶ原山中の中ノ瀧（大和）、澎湃として硬岩を穿鑿し來り、九天の雨滌一時に瀉ぎ下るに似、雄大莊嚴、「日本第一」の稱ある那智ノ瀧（紀伊）、第三紀層岩を穿鑿し、其音奔霆の如く數町の外に返響する龍門ノ瀧（大隅）の如き、日本の所謂大瀑布なるもの卽ち是れ。

其他流水浸蝕の奇抜なる結果には、岩船越の岩船（河内交野郡磐船村、高サ六米突餘、長サ十五米突、船に似たる巨岩）、葛城山中なる久米ノ石橋（河内石川郡平石村、幅一米突、長サ二米突半の巨岩、面に橋板の如きもの四枚あり）の如き奇巖あり。多摩川上流（武藏）、鐘坂（丹波）明智光秀の城墟傍近の石門あり。五串溪（陸前）、猿橋（甲斐）、山伏谷（美作、津山川の穿鑿せしもの、左岸に「地藏巖」あり）、豪溪（備中）の如き峽谷あり、而して此の如く流水の峽谷を穿鑿するや、各般の地層は谷の兩岸に各般の形式、狀態、彩色を現して露出し來り、看て以て美とすべきものあり、奇とすべきものあり、怪とすべきものあり。其の

（五）流水の浸蝕に伴へる他の現象

瀑布に到りては、小虹の起るあり、溪聲の大なるあり、岩石の磊落瑰奇なるあり。若し夫れ雲行勃々、急風に驅られて奔騰し、山背に衝りて少しく停まり、電光此間より一閃して、雷聲殷々、倏忽須臾に風止みて雨粒垂直線狀に下り、倏忽にして萬丈の彩橋、雲雨を破りて現はれ、一端は高嶺の絶頂に架して一端は溪下の水を飲み、其間幾多の小山嶽を杭となし、睥睨一空、雲雨之れを看、敢て敵せずして寂然避け去るもの、實に虹にあらずや。而かも虹の天界に現はる一回に一個若くは副虹一個に止まる、流上の虹に到りては然らず、

瀧の中より虹數十條起り錦を織れるがごとく誠に見事なり　大隅　龍門ノ瀧

てふ如く、懸瀑灑々碎雨をなす處、若くは流水亂石と鬪ひ、噴沫四迸、飛瀉跳梁する邊、日光會々反映するや、七色嬌麗、處々に小虹を吐き、遙に天界の虹と相應じて、大華、小華、上下數重、倚立左に配對す、眞に絶愛するに足るもの。

溪聲に到りては、日本の溪谷は淺流の湍然なるが故に、兩岸峭然、斗岸側立、爲めに流水音響の震動線は悉に外に放散するを得ず、音響峽内に凝結するが上に、嶄然たる斗岸に反響し、衝て石に觸れ巖と撃ち、正響、反響、相交し相應じ、加ふるに日本の陸面は傾斜急嶮に、且つや水蒸氣の多量なるを以て、溪聲は

愈々益々大となり、自然の大音樂を奏するを聽く。

岩石は、浸蝕の激烈なるが爲めに、千變萬幻し、且つや水力の猛劇なる、能く巨大の岩石を山中より下流に運搬し、里人の指點して「辨慶の攫へ來りたる石」「天狗の攫へ來りたる岩」など稱ふるもの多くは是れ。想ふ石、水に賴りて或は平大となり、尖峭となり、或は橫臥し、直立し、或は龍蟠し、虎踞し、或は岸に臨みて流を探り、水に浸して半ば露はれ、或は碎石滾々として蕩漾し、沙脚蒹葭の間に隱見し、石の氣韻、水を得て茲に初めて生動す。要するに流水の浸蝕に伴へる他の現象や、亦た頻りに日本國の景象に美を倍し奇を添ふもの。既に流水の浸蝕を云ふ、是に到りて

（六）湖水の浸蝕

を敍述せむか。湖水は面積素と小、故に風一たび浡々として起り、波浪を振ふに當りては、其の振ふべき範圍小なるが故に、波浪個々は却て猛となり大となり、咆哮洶湧、沿岸地質の脆弱なる部分を浸蝕す。琵琶湖の如き之れに注入する諸河流の流滓泥土に因り、沿岸に新土壤を沖積すること多しと雖も、時に亦た沿岸の土壤を浸蝕することあり、竹生島は、蓋し太古に於ける陸地の古趾、堅硬なる花崗岩より構造さるゝを以て、湖水は輒ち浸蝕し得ず、石壁森然、以て今日に殘留する所因、

竹生島のそばに小島ありこれはもとときに生ぜし島なり又まゝ子島ともいふ勢田川の下流に黑津の大日山といふあり此小島はむかし竹生島かけてこゝにとゞまりし山へといふ故に每年三月三日島つなぎといふ事あり　廻七千五間水面より高さ九間六寸　又こゝに島つなぎ松あり（近江名所圖會）

と、口碑宛然地勢の現象と相適ふ、太古琵琶湖の沿岸を浸蝕せしこと推知すべきのみ。其の

（七）海水の浸蝕

に到りても亦た然り。日本の海岸は多雨多風、水蒸氣多量なるが上に、風激し、濤亂れ、亂濤と海洋中の鹽分とは、外部より內部より沿岸地質の脆弱なる部分を浸蝕し、岩石爲めに崩墜するや、風や、濤や、鹽分や、共に此の崩墜せる岩石を驅り來り驅り去りて倔強の削器となし、浸蝕力更に一層、或は奇礁を碁峙せしめ、或は怪巖を紛錯せしめ、或は巉絕なる海角を刻出し、或は陸地の一部分を齧みて新に島嶼を彫作し、或は懸崖斗壁を抱し來り、或は曲灣を鏤み、或は洞窟を鑿ち、石門を闢き、隧道を通ず。洋客の日本の海岸を咏ずるあり、

"Where sombre pines and feathery
bamboos joined
In constant contrast, ever green; and
peeps
Adown the sheer face of the jutting
crags,
Where blue-green waters lapped among
the rocks,
Swishing with sea weed, and the hollow
caves
Resounded with the tide;"

——Rev. A. Lloyd.

と、此の如きの句、日本の海岸を看ずんば竟に發し得ざるもの。更に洋客の長崎の風物を哦ふあり、

"When morning dawned a glorious
scene displayed
Its coloured splendours to the trotters'
view:
That land-locked haven a wond'rous
picture made,

For three miles stretching out in shimmering blue,
Within its circling belt of hills embayed,
With creeks, and coves, and cranklings not a few:
So some old voyagers who were on board
It seemed good's as a Scandinavian fiord." —A. Miall.

と、獨り瓊浦の「十八灣」のみならず、九州の西海岸や、犬牙鋸齒の如き灣曲を彫鏤し、恰好たる諾威のフヰヨルド、其の

孤洞如秋月。海口露始穿。扁舟直穿過。似欲向蟾宮。（山水奇觀）

てふ

坊ノ津

薩摩川邊郡の西南隅に在る港灣たり、川邊沿岸出入多し。坊ノ岬西南位に斗出する處、一大石門の海上に兀立するあり、「秋月洞」と名く、利刃の如き二岩海上に竪立するあり、「雙劍石」と稱ふ、其邊到る處流水浸蝕の痕跡を徵すべし、景物跌宕、眞に奇觀たり。

の奇觀を遺し、景物到る處跌宕、其他對馬の海岸も亦た然り（插畫中に詳なり）。四國に到りては、伊豫の佐田岬、長嘴海中に延曳する九里、其の極西端、遙に九州の地藏岬（豐後）と相應對する處、古生紀層の堅緻なる岩柱、矗々として幾個となく海上に森立し、怒潮佐賀ノ關海峽より闖入して、益〻柱を刮削し、眞個に日本の偉觀をなす、其の土佐の

龍串

土佐幡多郡三崎村、蹉跎一切二岬の間、土佐陸地の西南位を取りて海上に延縮する沿岸に在り。三崎村の沿岸、男宮、女宮二山の下、「布引石」、「竹石」、「龍門」、「仙人洞」、「紫雲」、「鞘石」、「鬼傑石」、「獅子石」、「蛙石」、「雪中梅」、「小紋石」、「盲人石」、「不背山」、「木山」（峭絶なる孤丘上に一巨樹植つものを稱す）、「耕盤石」、「千疊石」、「夢ノ浮橋」等あり、此等の奇礁洞窟たる皆な激烈なる海水及び黑潮の浸蝕に因りて刻出彫鑿せられたるもの。

の如き、奇礁亂立、縱横欹斜、亦た海水浸蝕の好模本。本州に到れば、著名なる

親不知子不知

越中の東境より越後に入り市振、外波、歌を經て青海に到る間の街道は斷崖日本海に臨む。市振より青海に到る五里三十町間は斷崖日本海に臨み嶮絶を極む、市振より所謂親不知子不知までは第三紀岩、親不知子不知より外海までは秩父岩、外波より歌までは珠礬岩、歌より青海までは石灰岩（少許）、秩父岩より組成す、日本海の浪濤這般の岩石を衝擊し此の斷崖を刮削せしもの、浪濤の飛沫時に行人の衣袖に亂拋することあり。

松島

陸前宮城桃生二郡、所謂日本三景の一。所謂八十八島は素と陸前大陸（第三紀層）の地續個なりしも、太平洋の浪濤之れを衝擊浸蝕し、一部分のみを殘留して竟に化成せしもの。

其他、觀念窟（紀伊女ヶ島）、熊野の海岸（紀伊）、「岩門」（若狹遠敷郡外面濱の海中、高サ海上より八米突半、東西二門あり大門小門と稱す）、辨財天ノ窟（相模江ノ島）、夫婦石（伊勢二見ケ浦、插畫中に詳なり）、三尊窟（伊豆下田港の西南手石浦の岬上に在り、窟大にして舟を入るべし、最奧の石壁上に彌陀三尊來迎の像を刻す）、錦浦（伊豆熱海の近南）、鉉懸岩（後志奧尻島、插畫中に在り）、冬島の海岸（日高、插畫中に詳なり）の如き、皆な海水浸蝕の奇蹟。

獨り洋海上、湖上のみならず、乾陸上にも亦た流水浸蝕の奇蹟遺存せるものあり、即ち末ノ松山（陸奧、插畫中に詳なり）の如き、太古湖水若くは洋海に沿ひたる際、湖水若くは海水に浸蝕されたるも、後、土地の昇騰に因り、湖水若くは海水の遠く排出せられたる痕跡は、今日古歌と地文學に徵して之れを證左し得。

之れを要するに、日本の國土たる、內陸の水、洋海の水、共に其の浸蝕は烈なるが爲め、地裂け、山開き、危峯削られ、怪岩蟠り、石門闢き、飛瀑下り、奇窟鑿す、島嶼連り、懸崖洗は

れ、彎灣屈折し、長嘴短角凸兀斗出し、瑰偉、崚峭、變幻、詰曲を極盡す、眞に日本の絶特。其の插畫(は集に略す)中なる越前濱坂浦の泥柱は内陸流水の浸蝕して刮削する所、夫の舟人の拜崇せる北海道神威岬端の「神威岩」は海水の浸蝕して彫鏤する所。

忍路高島不可及。歌棄磯谷猶可矣。奥孃越見顔如玉。郎唱出追分曲。一聲一聲皆悲涼。不知何聲適我耳。

傳云。昔者。廷尉義經。匿蝦夷。酋長之女。不告別。而走滿洲。女追到神威海角。不及。悵望廷尉之船。頓身慟哭。呪曰。和人之船。載婦女。過此。則覆沒矣。遂化爲石。後人崇石。名神威巖。神威者。夷語猶曰神。從是本州之船。不復載婦女。而入于海角以東。忍路。高島。在角東。歌棄。磯谷。在角西。追分之曲故云。德川氏之末。織部正堀利熈。爲箱館奉行。慨然曰。生育植養者天道也。豈有天孫之裔不可殖於蝦夷之理哉。乃艤大艦。滿載婦女。放巨櫂。而過神威海角。本州人移住蝦夷內地者。始于此。

日本の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士に寄語す（その一篇）

島帝國の文人、詞客、畫師、彫刻家、風懷の高士にして、宦焉として草木と倶に朽ちむと欲せば止む、而かも雄大卓落たる技倆を揮灑し、絶代の大作、曠世の傑品を新創せむとするか、須らく日本國土絶特のものに寄託せむことを要す。夭桃白李、嫩綠軟紅、佳は即ち佳、而かも是れ未だ諸君子が滿腔の心血を濺ぐに足らざるもの、諸君子が滿腔の心血を濺ぐに足るは、彼の水蒸氣に在り、活火山、熄火山、火山岩に在り、流水の激烈なる浸蝕に在り。日本、水蒸氣の變幻開闔や、千態萬狀、森羅せる景象、悉く其間に隱見出沒す、眞成に造化の太秘を探らむとし、太極の至妙を悟らむと欲せば、水蒸氣の變幻開闔に依らずむば到底能はざる所、萬化を冥合する實に此の一氣より來る、諸君子何ぞ之れに依らざる。活火山、熄火山、火山岩も亦た然り、自然の大活力を認識し、高邁雄拔の心懷を寄託せむと欲せば、遂に之れに賴らざるべからず。流水浸蝕力の激烈、是れ我を恢弘し我を豪爽たらしむ、苟も此の水蒸氣を寫し、此の火山を刻み、此の流水を描かむとする者、豈に庸々齷齪の徒の爲し能ふ所ならむや、諸君子にして志隳ち節摧け、唯々として俗と俯仰し、平山凡水の間に滿足せむとするか、此の造化の日本に厚賚する所を如何せむとする。且つ夫れ諸君子、ただ北海道に遊ばむことを要す。想ひ看る寒冷海流親潮東より來り、溫暖海流黑潮の支派、對馬海流より到り、兩々の相撞擊するや、水蒸氣飛噴して白神岬頭（渡島）に凝結し、雲霧四合、其上より岬頭の峯尖高く半天に孤聳する處、其のカモイコタン（後志）の絶壁三四百尺、朔風蓬々として滿洲より吹き當り、亂濤奔馬の如く壁下に迫りて、碎沫軌道に飛濺し、汽笛長嘯、鐵車黑煙を噴きて隧道に入る處、其のタップコップ（石狩）の山上、瀰茫六十里、石狩の大江汪々として其間に曲折し、田疇墟落秩々として畫くが如く、新開地の活氣鬱勃たるを映出する處、皆な諸君子が心懷を寄託するに足れり。特に心懷を寄託するに足るは、其の原人時代の景象是れなり、北海道自然の景象や、假裝せず、矯飾せず、鬱々蒼古、實に化工の有の儘を開展す。絶代の大作、曠世の傑品、豈に此間に發せざらむや。

遊海島記

木曾より五箇山へ

勢至堂峠より白河へ

熊野路の旅

丹波市記

柳田國男

遊海島記

打麻乎麻續王白水郎有哉射等籠荷四間乃珠藻苅麻須
空蟬之命乎惜美浪爾所濕伊良虞能島之玉藻苅食
……萬葉、一

伊勢の海の清き渚に遊び、類無き夕風夕月夜の風情を身に沁め、物悲しき千鳥の聲に和して、遠き代の物語の中に辿り入らんとならば、三河の伊良湖岬に增したる處は無かるべし。昔麻績の大君が都を遠く流離ひ玉ひて、「うつせみの命を惜しみ浪に濡れ」と詠めさせ玉ひしも、同じこの荒濱なり。若し一たび海角の巖の上に腰掛けて、終古癒えざる大灘の狂ひを見、さては海峽の潮の流の險しきに驚き、飜りて又靜に裊かなる入海の水に、雲と白帆の映りては漂ひ行く狀を見ば、新に此歌の哀を覺ゆること切なるべく、若し更に黄昏の徐ろに催して、沖に燈火の一つ二つ仄めき初むるに遭はゞ、在りし世の浪の泡沫は、悉く旅人の袖を沾すなるべし。我少くして愁多く、曾て獨りサーチャイルドが歌の卷を懷にして、西に夕づつの國に憧れ行きし日、圖らずも此浦人の宿に留りて、此處に時の間の幻影を樂しみし事ありき。年經たる今日、都の裡に在りて、其日の松の影波の光を想ひ起すは亦儚き幸なり。

伊良湖岬、古は伊良虞が島と云へり。中世海は改まりて、寄洲は陸を繫ぎしかば、乃ち三河の國となりぬ。其前は伊勢國度會郡にて、神宮の御莊なりき。我が初めて伊良湖の後の山に登り、南は志州の海邊より知多郡の東にかけて、並立てる島山の有樣を望みつゝありし時、斯く語りしは老いたる村の翁なり。見玉へ、和地の大山より西に靡きたる群山と、此方の邑との間に在る一帶の平地は、すべて昔の海の跡なり。沙原は海の面より高きこと幾何もあらず。生ひたる松も皆若し。昔は伊勢の海に出入る船、皆此間をや通りつらん。對岸伊勢の海邊、菅崎幷洲などの濱より見るときは、伊良湖は志摩の神島と相並びて、正しく一つの島と見ゆべし。漁夫が沖に漕出でて吾家の方を顧るには、此處の平地に水の乘るを見て、船路の遠さを計るが常なり。

此に付けて聽きし物語は、曾て一夜安乘崎の燈臺に、如何にしてか燈を點ぜざりしことありき。折から沖を行きし船、此平地に水の乘りたるを、海峽なりと思ひ誤りて、其梶を轉へしかば、忽ち外海の沙濱に乘上げつ。船人等打驚き、積荷を陸に揚げて船脚を輕めんと、大なる提灯を近き里より借來て、帆柱の頂に結び付け、終夜犇きたりしに、これも浪路を急ぎし大船の、此光を燈臺の火と誤りて、同じ夜に四艘まで、遠近に破船したるもありしとか。

難破の災は昔も今も屢耳にすることなり。久しき前伊萬里の陶器を積みし船、江戸へ上る路にて、神島の沖に疾風に遭ひ、遂に此浦に來て覆りし、其折巧優れたる數々の寶の、海底深く沈みたるが、中には形の全きもありて、貝取る海士の潛き入る者、折々拾ひ上ぐることあり。年月經たる潮の匂に、殊なる趣の更に添はれるを、人々戯れに伊良湖燒など名けて玩ぶを見るにも、昔想はれて哀なり。近頃

燈臺の設けも備はりて、海路安らかに爲りたれど、猶時々の風浪は遁れ難くてや、淺ましく悲しき物語の、傳へらるゝものも多きなり。

我が來て未だ半月ならざるに、遠州新井の濱の鰹船、烈しき嵐に遭ひて、沖に漂ふこと二晝夜、一船盡く溺れ死し、幾つとも無き遺骸の、磯に流れ寄りたるを目前見たることあり。これは稀なる例ならんも、何れは波の上の生業なれば、小さき雲もともすれば心に掛りて、如何に朝夕の心細からんに、況してや此の海峽の潮の速さは、馴れたる水手も息吐くべき處なり、

阿波の鳴門か、銚子の口か、伊良湖渡合か、恐ろしや

渡合の廣さは一里にも足らず。げにや伊勢の海の入江々々の滿潮引潮を集めて、流し下し差し上す勢は、比ぶるに物も無く、潮凝の須臾の間ならでは、水の淀むといふこと無し。殊に風ある日は、いかた、ならひの障つる山無きは更なり、其他何方より吹き來るも、多くは神島に吹當てゝ、忽にしまきとなり、帆を劈き船を覆す勢は、偏に鬼神の業の如し。

されど此は皆世を海渡る者の惱にして、陸の遠目には中々に珍らしき景色たり。神島の東面は絶壁にて、其岩根に碎け散る白波の、光も色も全く花のやうなる、又は島松の風に吹立てられて佗しげなる姿、さては雨ふる暮方など、一帆の絶え〴〵に難み行く樣も、凡て皆世の常の畫工が思ひも及ばぬ境なり。

小舟の神島より來るを見るに、先づあらぬ西北の方などに漕出でて、其折々の風に乘り、又は引潮の流に誘はれて、此濱には向ふなり。船路の斯く煩しければ、自ら往來も稀にして、海打向ひては汀の人も見交すばかりなれども、海の荒るゝ頃などは、月を超えて猶音信を聞かぬことあり。我が初めて此島の人に逢ひしは、島に病みたる者出來て、急に新しき鷄卵を求むとて、荒布の大なる束を幾つとも無く舟に載せて、伊良湖へ取換へに來りし時なりき。

神島には家の數二百許あり。多くは海の業に暇無く、世に疎きが常なれど、時ありて名古屋豐橋あたりに往通ふ者あり。鳥羽の港よりは月に三四度、郵便脚夫巡査などを載せて來る船あれば、島を出づるには其歸途を待ち、又は家の舟に送られても行くべけれど、或は三河路を廻り、伊良湖の方より島に歸らんとする者は、皆此里人の許しを得て、岬の絶端なる小山の頂に上りて火を燒けば、島より其煙を望見て、迎の舟漕來るを習とす。

島の名のみも床しきに、月落ち懸る曉、又は晴れたる日の夕は、端的に仙郷を望む思ありて、行きて見まほしさの堪へ難かりしを、島人も聞知りて、水無月待宵の空の雲、吹漂はす微風に乘りて、我を迎の舟は來りぬ。恰も島の祭の日にて、其夜は芝居あり。明神の社の後なる小松原に舞臺を設けて、潮風に黑みたる若者等、自ら俳優の巧を眞似び、妻や妹の眼を悅はしむ。阿漕の平次妹脊山の鱶七など、何れかは蜑少女の心を憧れしめざる。涙の墮つるに堪へぬ者もあるべし。素より手簡なる遊ながら、其の人雜ぜもせぬ樂を見ては、都の旅人は羨ましさに堪へざりき。

想出るまゝを書付けて、物語の亂雜なるを咎めずば、猶神島のことを言はんに、其夜我は更けて島の寺桂光院に宿りぬ。東と北とを見晴したる山腹にて、庭に聳えたる大小の巖は直に絶壁となりて、下は青潭、波の音轟々として物寂びたる夜を、御山の椎、熊笹の葉に月面白く照りたり。共に寢ねたるは今宵の芝居に、よぼ〳〵の翁を語りし、松阪の某といふ者なり。白髮の翁にて、[illegible]ず。年々此島に來て早四十年に近し。近頃は[illegible]、[illegible]の聲[illegible]が

ちなれど、島人馴れぬ太夫を厭ひて、芝居のある每に今も此翁をのみ招くとか。

明くれば山僧案内して島の内を見あるきぬ。島は大小二つの山より成り、東に在りて伊良湖に面するもの、西の山よりも遙に高し。此頂より望めば、正南には安乘崎、大王の鼻は突出して、其より遠に猶海見ゆ。安乘より此方には國崎、皆志州の地なり。其他は忘れたり。島は數へも盡し難し。北に向へば知多郡の師崎は正面に、左は野間の崎、海を隔てゝ伊勢の國に、山の名里の名、限りも無く聞きたれど、今は面影も朧なり。知多より東に些し離れて、三河の幡豆の崎、左に一色、右には蒲郡、其に曾て聞きし名なり。群山の中に一つ禿げたるが眼に着くを、あれは赤阪の驛のあたり也、かの南を汽車は行くと、聞くさへも夢のやうなりき。

神島の二つの山は相結びて、南北に谿を作る。北の平地は隘く、南なるは寬かなるに、猶里人が北にのみ集りて住めるは、遠淺の舟の上下に便なると、大洋の風を厭ふが爲なるべし。南の濱へ行くには細き徑あり。徑の兩側に山の雫を堰き溜めて、僅なる稻を植ゑたり。山畑には麥も作るといへど、之を合せて島人二月の糧に足らず。其餘は知多郡より運ぶなるべし。

山の南に下れば荒野なり。風勁くして草も榮えず、浪哮り砂飛びて、其淒まじさ久しく佇るに堪へず。海に近く幽なる樾あるを、立寄りて見れば小さき墓二つ三つ並び立てり。昔より海に死したる人の、此濱に漂着するものあれば、皆此處に葬るが習にて、偶々身寄の者の弔ひ來て、墓標を設けて歸らんといふあれば、亦此處に建てさす。一つの碑の背に紀伊國といふ文字の、辛うじて認め得るもあり。死して後まで猶旅なる此等の人の上に比ぶれば、命ある間の心細さは屑ならずなど、獨思ひぬ。

岸を傳ひて行けば、東の山に近く大いなる石窟あり、岩角を踏みて探り入れば、深さ數十間、海水下に通ひて怪しき樂の音を作す。五月海氣蒸す頃は、此石壁に奇しき花開くと、昔より言ひ傳ふ。形は牡丹の如く、徑尺餘にして白し。好事なる名古屋人などの、年々舟に酒を載せて、遙に見に來るもありとか。或は苔の類なりといふ者もあれど、見れば殊に床し。都に思ふ人などありて、旅の日記見せに遣らんとき、

神島の巖も花は咲くものを何か心よ答
としも無き

と頭下るも亦面白からん。岩屋の東は伊良湖より見ゆる絶岸なり、鵜の鳥夥多しく集り來て、浪と白きを爭ふさまなり。海士の子其菜を採りて、伊勢尾張の農夫に販ぐ。石灰も亦此島の產物の一なり。岩の花咲く窟の邊より、西も東も、島凡て此石にて、海の幸乏しき頃は、島人之を切出して生計とす。熱田のセメント會社は、十年の間を約して一手に買入るゝ由にて、既に若干の前金をも受取りぬなど噂せしが、今は如何にしけん。やがては島も無くなるべしと思はれて心細きを、としも顧みぬ島人の、終日戞々と石割る音、今猶其海に響くらんか。

海の風涼しき磯に坐し、往來する蜑人を呼留めて、山の名、船の行方を問ひ、又其老いたる父と語る程に、黃昏は沖より催し來て、日は落ち雲の色は暗くなりぬ。夕暮は浦に住む者の尤悲しむ時なり。今日こそ若者共、皆祭の爲に歸りて家に在れど、汐路遠く舟出して、風も浪も更に其音信を傳へぬ日には、海の果のみ眺められて侘しきに、昔も斯る折にや歌ひ初めし、節哀れなる鄙歌の傳はりて、遊子の夕を

塞からしむるものも多し。人々が海の稼に出でたる時、島に殘りて女子供を問ひ慰め、又は萬一の災あるときは、寄合ひて夫々の處置を定むる爲に、老功の人を選びて之を村隱居といふ。御寺村長の次に尊まるゝは此人々なり。我に樣々の物語聽かせしは、多くは此等の村隱居なりき。

此夜は水無月の望なれば、其名も由ある桂光院の庭にして、清き影を仰がんと思ひしに、生憎に雲多く、初夜より風吹き立ち、海いたく荒れたれば、念を絶えて寢たり。明方雨となりて、嵐は大いに鎭まりたるに、此間に歸り玉へと、主僧強ちに我を喚覺す。周章しく岸に下れば、帆の音はたく〳〵と早漕ぎ離れたる船もあり。物陰のまだ暗きに、送りに出でたる人なるべし、誰とも知れず彼處此處に立てり。再來べき島にもあらず、と思へば胸迫りて、船の底に伏しぬ。松の聲の私語のやうなりしも遠ざかれば、濤合の波の穗の仄々と、舟路は東雲になりぬる、忘れ難き風情なりき。

伊良湖に歸り來れば、神島の懷かしさは、更に勝らざりし前に異らず、屢後の山に登りて遠く望みぬ。神島の陰になりて、片端見ゆるは大築海島小築海島、人は住むや否や知らず、其名の物語めきたるが珍らしと思ひぬ。其彼方には菅島、小さき燈臺あり。其南には答志島、萬葉に、「釧着くたふしか崎に今もかも」といふ歌思ひ出づ。此島人も亦芝居を好みて、先年は都にも稀なる定小屋を建てたりと、神島にて聽きぬ。鳥羽の港へ行かんには、此島陰を通るなるべし。障ることありて終に赴かず。某寺といふ清き禪院ありて、海を見るに宜しといへり。伊良湖の圓通寺に在りて、此島の和尚に見えしとき、樣々の昔話をせしが、けにや曾て戰國の末の世に、自ら海賊と名乘りて、鯨船に弓鐵砲を積載せ、東は濱名、西は熊野の津々浦々に迄、勇しき名を轟かせし、志摩の舟武者が子孫は、今も此邊に殘り住みて、昔の事も知らず、歌をうたひて世を送るなるべし。

志州の島々の、西に遠山を負ひて、晴く淋しげなるに引かへて、日の影晴やかなるは尾張の島なり、篠島、日間賀、佐久の島、いづれも平なる禿山の見どころは無けれど、山の色鮮かに海に映えて、朝は殊に愛らしく見ゆ。釣舟の外海の灘に往來するもの、其島陰より此方、濤合の澪にかけて、時としては白帆數十連ることあり。殊に篠島は曾て歷史にて其名を知りぬ。延元二年の八月に、南朝の將軍若き皇子を奉じて、伊勢の大湊より船に乘り、奧州に下らんとせしが、伊豆の崎にて颶風に遭ひ、宮の船は此島に漂着す。其假宮の跡吉井など、今も里人に守られて、殘れりと聞きしが、是も亦行きて見ず。後汽船にて知多の龜崎に向ひし日、暫時此島陰に泊てゝ、聞きつる城山の松も望みたれど、今は今めかしき海水浴場設けられて、三味線の音も喧しきに、斯くては懷古の情も無かるべしと、終に空しく通り過ぎにき。

篠島の名に由りて今一つ思ひ出づるは、俳人杜國がことなり。芭蕉が芳野の旅に伴ひて自ら侍僮萬菊丸と稱し、洒脫なる名を世に傳へたるは此人にて、初め名古屋に住み、事に由りて罪を得、此島に流されしが、中比竊に遁れ出でて、伊良湖の北なる畠村といふ處に來て世を終りぬ。芭蕉曾て越人と共に、此半島に遊びし時、初めて彼に逢へり。

鷹一つ見付けて嬉し伊良湖崎

といふ句は、斯る海角の荒濱に來て、圖らず逸才を見出でたる喜を述べたるものなりといふは眞にて、此折の唱和の卷は、今も土地の人の藏するありて、けに如何ばかり心の合ひつらんと、想ひ遣らるゝものなり。此人が事は近き

昔なれば知る人も多く、我は父樣々の日記手簡などを見て、更に其人柄の慕はしさを覺えぬ。墓は福江の港、潮音寺の門の南、三叉路頭の叢の裡に在り。碑苔に閉ぢて、高さ尺に足らず。曾て伊良湖の鷹とまでも歌はれし人の跡ながら、埋るれば斯くも埋るゝものかと、坐に涙ぐまれき。

杜國逝きて百年の後、此荒磯に又一人の詩人ありき。此はまことの漁夫が子にて、伊良湖の浦人なり。糟谷牛之丞といふ。歌には磯丸と書けり。生れて文字を知らざりしが、二十六の年、母の病を明神の社に祈るとて、ふと歌を詠み初めぬ。おのれ稚き頃、家に有りし短册の中にて磯丸の歌を知り、次ぎては近昔の家々の聞書などに、漁夫磯丸の名の屢傳へられたるを見て、珍らしきことに思ひしが、圖らずも伊良湖に來て其家の隣に宿り、又幾度か其墓に詣でぬ。里人の質朴なる心には、唯神業なりとや思ひけん。火伏雷除其他種々の禁呪は悉く此人の歌なり。初めて來りし時、我窓の外に小さき社あるを、何の神ぞと問へば、磯丸樣なりと答へぬ。されど今は里人の信も稍薄らぎたればにや、或時人が鼠除の歌拜ませんとて、神棚より取出だせしを見しに、紙は何時と無く其鼠に喰破られて、文字も讀まれずなりてありき。假令歌は巧なりとも、斯る里に生れずば、暫時の間にても神とは崇められ得んやなど、獨思ひしこともありしが、其報にや、我は終に拙き歌のみ詠みて、あたら都の中に年老いんとす。

神なる磯丸が塵の世の骸は、此里數百年の祖先と共に、渚に近き松原の奥に葬らる。月白き宵など、我は幾度か倚き寂しさに醉ひて此邊に逍遙し、見ぬ世の浦人が安らかなる眠を訪れき。墓の石を見るに多くは自然石にして、名も月日も刻まず。されど詣づる者は、其形と在處とによりて、我が母、人の姉を分つならん。同じく埋れ行く身の程ならば、初めより跡を留めずして、唯昔を慕ふ妻子にのみ、記憶せらるゝもよかるべし。けにや如何に優れたる碑の文なりとも、古き伊良湖人の生涯を、此の無言の石塊より以上に、巧には傳ふることと能はざりしならん。

此濱の自然兒の間に、我は多くの忘れ難き友を得たり。殊に窓の外を、夕暮の歌の聲清く通り過ぐる者、又は沙に引上げたる小舟の緣に腰掛けて、見たる遠き湊を雲の彼方に指し、平和の單調に倦みて、再荒海の戰に向はんと願ふ者、戀も歎も凡て皆、此小天地の裡に取集めて、人をして問題の繁きに堪へざらしむ。村に唯一つの白壁、小高き丘に寄りて立てり。若者はいふ。海に乘出でて十數里、家を離れて六七日、初めて伊良湖の戀しさを知りぬ。和地の大山の陰に當れる田原の山が、左へ外れて見ゆる所を出山といふ。熊野の山々の、神島の陰になりて、見えずなるあたりを山外れといふ。雲立ち風荒む折々は、馴れても心細く、ともすれば網舟の梶の手弛みて、家路見返りがちなり。或は押送りの舟の夜を込めて、宮、名古屋に急ぐに、曙に野間の鼻をかはれば、伊良湖は早山のみ見えて、低き處は皆水なり。山の見ゆるは十里を限にて、妻子思ふ淋しさは此時より切なり。伊勢の大港の茶屋の二階に上れば、晴れたる日には伊良湖の白壁、沙の上に見ゆることあり。願ふこと成らざりし若者等の、心強くも村を見捨てゝ、再還らじと誓ひし者などは、斯るとき殊に多く酒を飲む。さては其白壁の落書に、相合傘の行末望あり、金溜めてこそ又逢はめと、二年三年の別を忍ぶ者、かかる夕は悔い疑ひ心弱くなるは、凡て此浦人の癖なり。

なんぼ田島の新木の櫓でも那の兒懷へば
苦にやならぬ

田島は知多郡のことなり。生活の烈しく人情の險しき、この對岸の地に來て、彼等は生涯の幸運を占問ふなり。さては其故郷に待つ者も、情柔かに夢多く、遠き水の上を眺めては漂ふ人の行方を愁ふるが故に、自然旅人を勞るの情も優しきなるべし。

此少女等が手に摘み髪に插むべき花、山邊濱邊にいと多き中に、百合撫子露草などの他所の里にも有るは言はず。山にて美しと思ひしは雁皮の花なり。葉はうつぎに似て小さく枝細くして、花は薄桃色の筒形なるが群りて咲けり。手折り持ちて峯に登り、日の照る海の色に翳し見るに、風情の淡く幽なるも亦處がらに合へり。薫の強く烈しきは蔓荊の花、爰にてははいふの木といへり。廣き沙原に、到る處叢を爲して咲滿ちたり。千鳥啼き星繁き宵、乘越の丘の草に坐して、遠く安乘の燈臺の火の、潮に映るを望みつゝ居れば、此花隙も無く香り來て、獨久しく在るに勝へず。相州の海邊にても、曾て此薄紫の花を見しことあれど、未だ此崎のやうに多く咲きたるは有らず。盛の頃に風吹く日は、沖行く舟にも薫るといふはさもあるべし。

岬の絶端の山を小山といふ。小山の東面は松の林にて、靜かなる處なり。大洋の風常に通ひて涼しければ、折々其奥に入りて書を讀むに、兎多く群遊びて甚く人を恐れず、圓なる目をして此方を見るも興あり。干潮の時は、此松原の果より小山の裾を廻りて、右に入海の方へ向ふべし。神島の正面より聊か外海に片寄りて、大なる巖多く海に連れり。昔は海驢といふ獸の、群を爲して來り遊びしが、今は來ずなりぬ。與八といふ翁の物語に、若き頃は幾つともなく、此大きなる獸を打留めたりき。或時はあまりに近く寄りて、仕損じたることあり。岩の陰に眠れるを見出して、其岩の頂より伏して狙ひしに、粗末なる火繩筒なれば、丸ころ〱と轉げ出でて、海驢の頭に落ちしかば、驚き覺めて海に飛入りぬ。二の矢繼ぐ程には、早半里も泳ぎ去りしなるべしと笑ひて言ふ。

晴れたる日には鷹、鷲を見る。熊野の山奥より、信濃の高嶺に往通ふものは、大抵伊良湖の空を過ぐるなり。山の上にわなを設け、犬などを餌にして之を捕ふることあり。磯鷲といふは、尾羽にもいいやずれとて、茨などに觸れて破れたる所多く、良き種類のものに非ずとか。鴨は春歸る鳥と思ひしに、入江の蘆原には夏も多く住めり。入日の影漸く涼しくなる時、沙濱を逍遙して其鳴く聲を聞けば、時ならず珍らし。或は水に入りて戯れに之を追ふに、久しからずして又下りて鳴く。或日は彼の與八案内して、網をもて捕らんとせしが、狩も獲る所なかりしかば、疲れて松原の中に來て息ひぬ。

與八は濱に寢る人なり。暑き夜は家の中は寢苦しとて、孫と共に茣を持ちて、沙の上に出でて寢るなり。此を濱寢と云ひて、昔より此海邊の習なり。今も濱寢をする人、此翁のみに非ず。月の明かに照る夜、立出でて見れば、彼方にも此方にも、黑き物の横はれるを、其舟の南に三人寢たるが、與八と其孫とならんなど、人のいふも面白し。明くる日此事を語りしに、夜露は茣を透りて、衣も濡るゝことありといふ。

村の若者も多くは其家に寢ず。二十前後の頃は、皆村の重立ちたる人に託せられて、夜は其長屋に行きて寢るなり。長屋の仲間の中には、不文の掟ありて、賤しき所行を戒め合ひ、又其長屋の戸主夫婦も、之を監督して其過を防ぐなり。我が三月の間宿りしは、或長屋の隣にて、夜更くる迄質朴なる青年が海の話を聞き、我も折々は都のことを語るに、或は驚きて耳

を聳て、又は笑ひて喜ぶさま、手傷なれども身に沁みて嬉しかりき。
　里人海に潜きて淡菜を採るを生業とす。乾して支那に輸出するなり。此貝にも亦珠あり。色淡黑にして虹の彩を帯びたり。一匁の値は四五十錢、一季の間に一人が獲る珠は十四五匁、粉碎して目の藥とすといふは眞にや。形の良きものあれば、長屋の若者常に持來りて我に贈る。これも嬉しき記念なり。或日此貝採る舟に載せられて磯に出でしに、大浪のうねり舟に居てさへ恐ろしきを、勇ましくも千尋の底に飛入りて立働くさま、潮澄みたれば明に窺ふべし。又小さき魚扠をもて、岩の陰なる魚を刺す。魚突といふは此濱の若者の、一の藝として他に誇るところなり。石決明も大いなるもの多くあり。雌貝雄貝といふことは知らざりしが、此處に來て敎へられぬ。雄は皮厚く背闊く色黑くして味良からず。蠣は近き昔、奥州より優れたる種を持來て、伊勢の海の各處に放せしかば、今は名物の一つとなれり。大なるは硯ほどなるがあり、小山の磯の朝の汐干に、浪に寄せられたるを打碎きて、海の水に洗ひ直ちに食ふに、彼の蓮の實を貪りて、故郷思はざりし人のこと思ひ出されぬ。

　小山の松林より東、外海の岸は、昔より戀路が海、玉章の磯などいふ。何の故とも知らず。濤高く飛沫霧と立ちて、物凄じき荒寥なり。打向ふ海は大灘の果も無く、沖を走る大舶は日よりも高く、仰ぎて見るやうなる心地す。此渚傳ひに歩めば、心の留まるもの多し。或時は釣竿の長きに、絲の半附きたるを拾ひぬ。又大いなる豆のやうなるものを拾ひ上げて里人に問へば、藻玉とて海草の實なりと答へぬ。嵐の次の日に行きしに、椰子の實一つ漂ひ寄りたり。打破りて見れば、梢を離れて久しからざるにや、白く生々としたるに、坐に南の島戀しくなりぬ。
　此荒磯の盡くる所、伊良湖の村の境なり。山は海に迫りて奇巖怪石數限も無し。其形によそへて牛の首といふ。石門二つあり。一は海の中に立ち、其下船を通はすべし。一は岸にあり。此にも洞のやうなるもの多く、海水此間を東西に流れて、變幻の態を極む。漢文の巧をもて寫さまほしき境なり。
　石門は日出村に屬す。海岸線は茲に一曲して、北東に向へり。日出の次は堀切、小鹽津、和地越戸赤羽根と、遠江に行くべき上代の道なり。帝都の大和に在りし世には、山を越えて伊勢に出で、大濱又は安濃の津などより舟を漕出で、三河の南端に上陸して、此道を東國に赴きしなり。外海に向へる村々は、其生業の狀も伊良湖とは異なり、人情も自然同じからず、言葉も些か變れるやうに聞えき。
　和地の大山は、伊勢の海を大觀するには、此上も無き山なり。北の方田原の山の陰を除きては、見渡さぬ境も無く、入海の八十島より、知多郡の山脈まで、皆其の山の嶺を見下すべし。近國十州の山々、樣々の形して並び立ち、海は遠く遠江の果より、志摩の東南端まで、悉く見渡すべく、僅に半島一片の土塊に隔てられたるが爲に、內外二樣の海の怪しきばかり其趣を異にせるも、此山の頂に在れば、直に之を知ることを得べし。況して麓なる一色の海岸は、岩も松も皆土佐などの畫のやうにて、疊み寄する浪の上に、帆の靜かに横走る、又は雲の往來の珍らしきも、未だ見ぬ人には語り難き景なり。
　船は種々の形せるものを、朝に夕に見たり。四日市の港に出入るもの、熱田鳥羽より紀路に通ふもの、豐橋の南牟呂より神社に行くもの、又は福江と細崎との間を通ふものは、大小の汽船なり。和船の純粹なるは此頃少くなれり。

外海の船を初めて、近き沖行く漁舟までも、大抵帆のみは三角の西洋形にて、帆柱の數も多し。楫も舊來の形は不便にて、暴風の時楫柄に拂はれて、折々人の海に落さるゝことありしかば、今は大抵西洋形に改めぬ。船首の形も聊昔のものとは變れり。

庭よく海の凪ぎたる朝、渚に立ち又は丘に上りて、船を見ることは樂し。大小色々の形せる舟の、己がまに／＼思ふ方に向ふさま、うちつけに世の中の姿を示し、漕ぎ行く舟のといふ歌の深き心は、今更に酌み知りぬ。漁する舟は日の中は遠く出で去りて淋しく、夕に向ふ頃は再び歸り出でて海もどよむかと思はる。雨しぶき風荒るゝ日にも、舟の影の全く伊勢の海に絶ゆる時はあらず。唯舊暦七月十三日の夕より、十六日の曉までは、亡魂の故郷に往來する日なりとて、舟人甚しく海に出づることを忌み、各其伏屋に歸りて、又海を顧みず。我が永き旅寢の末、終に伊良湖に別れしは、恰もその盂蘭盆の時に當りき。折ふし日は晴れ海穩かに、空も水も同じ色に、清々と澄み透りたるに、海上空漠として片帆も行かず、孤舟も寄らず、處々の島陰山陰に、立上る煙の白きもかつは寂しさを添へて、うたゝ別れの悲しさに堪へざりき。語らひ馴れたる里人、我を送りて遠く松原を行き、砂原を行き、橋を渡り、畑の中道を歩み、伊良湖見えずならんとする所に到りて、終に歸り去りぬ。

其後三河尾張を旅して伊勢に入り、津の公園の山より遠く望み、又は贄崎の燈臺の下に立ちて、つく／＼と東南をながめ、彼は神島彼は伊良湖の後の山、彼は和地の大山と、一々に指點して獨言ちたりしが、更に其海邊をさへ別れぬれば、今は早夢ならでは、見ること難くなりぬ、人々恙なしや否や、近きに又行きて見ん。

伊勢より來りし人の物語に、此頃其海峽に砲臺築かんの企ありて、神島二百餘戸の漁民は、志州の國崎に移さるべしなどいへり。伊良湖も亦如何あらん。願はしきものは平和なり。

（明治三十四年七月）

木曾より五箇山へ

明治四十年五月二十八日、晴、雲多し。

木曾の上松の宿屋境重の横手より、田畔道を川端へ下る。道の上で働ける鐵道の工夫等、頻にばら〳〵と土や小石をこぼす。

木曾川を西へ渡る、こゝにも名物の釣越は有れど平水には舟にて渡す。三留野の青木君、自ら鐵條の綱を手繰る。

茲に落合ふ川は小川と云ふ。小川の澤は眞直に西へ入り、東の方駒ケ嶽の雪と相對す。駒ケ嶽の雪より滑川と云ふ急傾斜の川流れ下る。空澤なり。上松の民家はあたかもこの十文字の結目に在り。

小川越の頂上を高倉と云ふ。西に御嶽、東に駒ケ嶽を一時に見る所なり。閑古鳥啼く。

小川の奥は凡て御料なり。左手の初めの澤は麝香澤。此澤の檜は最も名木なり。麝香澤は檜の高き香より付けた名なるよし。

次の澤は南の股、北の股。南の股に來て初めて杣木を曳く古代の掛聲を聞きたり。木曾の杣は今でも決して大鋸は使はず、木の前後より斧を入るゝなり。倒るべき方を受口と云ひ、反對の方の切口を蔽口と云ふ。大木は三方から斧を入れる。之をば弦掛と云ふ。鼎の脚のやうに殘したる三脚の、一つを切放せば向側へ倒るゝなり。

大木の倒るゝ音は烈しきものなり。中空に非常な塵が立つ。谷には日傭が萬口の音、さいたはつたの差圖の聲、嶮しき勞働なり。我輩が生活は之に比ぶれば遊樂に近し。

檜の枯林の中に、萬年草の廣場あり。樫鳥は地から三尺ばかりの處をあちこちと飛廻る。其間に山の勞働者の小屋あり。檜皮にて隙間だらけに圍みてあり。

五月二十九日、きれ〴〵の雲、一度は雨。

小川の北の股より、王瀧村の瀬戸川の奥へ越す。山道半は棧道なり。源頭の森林には却つて平地多し。溪流の力の未だ十分に排水を爲し得ざる窪地に、昔焼畑を造りし跡あり。ゾレと云ふは焼畑のことなり。

石楠花花盛り。淡紅と白の二種、共に優しく柔なる花なるに、葉の色はまことに無骨なり。新に檜の柾板にて造れる杣小屋あり。黒き常磐木の林の中に美しく光れり。

王瀧村の上島にて晝飯を食ふ。此より川上にも人家はあれど、先づ此處が山と世間との境なり。

王瀧川は木曾川本流よりも立派なり、本流は國道を顧みて天下に聞ゆれど、實は根からの凡水なり。

上島より上に大字野口、王瀧川が作りたる大野の入口なり。山の中腹に巖石の露出する所を、此邊にては皆ゴウロと云ふ。

氷ケ瀬まではよき道なり。左は美濃の付知へ行く新道、右の山道に入る。苦しき峠あり。

柳ケ瀬には一軒屋あり。母と夫婦と女の兒二人、亭主は病身なりとて、容貌少年の如し。

濁川こゝにて王瀧川に落合ふ。御嶽の地獄谷より出づる川なり。上流にぬるき温泉あり。

下り行きて泊る。

深夜に湯壺にて、美濃の加子母の老人と話をす。十五六年前まで群馬縣に行きて住めり。妾に男女二人の子ありしを、其妾にやりて獨故郷に還りたり。博奕の好きさうな爺なり。但し今はよほど衰へて在る風なり。

五月三十日、快晴。

再び王瀧川の澤に引返し、猪川上へ行く。駒鳥昨日より到る處に啼く。

瀧越は十七戸、嶮しき峠を二つ越え、三里餘にて漸く上島へ出ると云ふ山里なり。太古の川底なりし平地を十町位耕作す。世間にては三浦とも云へど、三浦は此奥山の總稱なり。全村皆三浦氏なり。相模の三浦の殘黨と云ふは勞證なし。兎に角も武士の落人なるべし。どの家が一番古いと云ふことの外、一の記錄も口碑も無し。女は丸々世間を知らず。美濃より來て此村に永住する教員の夫婦ありと聞く。御寺も醫者も無し。

山査子なるべきか、土地にては小梨といふ花を、手桶に一杯折り來りて軒の下に置けり。家主が款待振なるべし。檜皮にて編みたる一尺ばかりの四角な籠、山に行く者は必ず持つ。新しきものは色合何とも言はれずうつくし。

又一つえらい峠を越す。越して再び王瀧川の岸に下る。小路は去年の洪水に損じたれば、川の石の上を步む。深山の景色を畫く者、常に晝尚暗しといへど、此溪は極めて明るし。思ふに今日は此の如き好き天氣なり。此川は中々賑き川にて、兩岸の崖遠く、しかも川に石はすべて花崗石なる上、水の邊は針葉樹少く、奥山の木は今が若葉の薄綠なれば、取集めて斯く明るく感ぜらるゝならん。靜かにて明るきはよき感じなり。處々の瀨に美濃の岩魚釣を見る。久しく物言ふことを忘れたる人々なり。

若葉の林の日影をよろこび、熊笹の刈株を踏みて行くうちに、谷は次第に開けて水の音少しく遠ざかり、又檜樺の原始林に入る。土浦の瀧には針金の吊橋を渡る。御料所屬の休泊小屋の前に休む。

柾小屋と云ふ所にて、愈王瀧の本谷に別れ、左へ水無澤を上る。柾小屋は今は無くなり、其跡に鞨小屋あり。瀧越の男三人、こゝに來りて夏中鞨を製す。此邊すべてつめたき水溜なり。芍藥花さく。

鳩啼く。聲が里の山鳩とは異なり。青鳩ですと文六は云ふ。今一人の同行者、あの位うまい鳥はありませんと云ふ。鳩は之に構はず平氣で啼く。所謂妻を呼ぶ季節なりと見ゆ。

ごみ澤を上りきりて、三國山の頂上より八町北に出づ。美濃飛驒の山の額百ばかり遠近に見ゆ。處々の煙。

嶺通りに數十の塚あり。遙に御嶽の方に列れり。根笹其上に叢生す。何れの時代にか國境を定めたるものなり。

人の爲の路は久渡鳥の通路なり。去年の鳥屋猶存し、霞網の竿なども殘れり。

尾根の少し窪みたる所、岩のごろ／＼としたる所が飛驒への下口なり。五六步下れば岩ぬれたり。これが竹原川の源頭にして、我等はその最初の涓滴より道連と爲りしなり。川より外に道なければ、岩より岩に飛び、自分も一種意識のある瀧と成りて里に下る。

初めて見たる飛驒の人は、兄弟三人の草刈なり。眼と顏と皆圓く、中のは娘なり。躑躅咲く松原まで下りて來て振返り見れば、まことに暗く淋しき谷なりき。

文六は瀧越の者なれば、水を飲みながら、木曾の水ほどうまからずと云ふ。まことに木曾はなつかしき山なり。飛驒の家も木曾と同じ板屋なり。

竹原村の御厩野と云ふ里に出づ。美濃の加子母へ越ゆる縣道の峠の口なり。或家に息ひしに朴の葉に包みたる鮨をくれたり。

竹原川はこゝにては最早立派な川なり。その益田川に合流する所迄を見屆けて、下呂の吉村屋に來て寢たり。此町は以前河原に溫泉あり、故に湯之島とも云ふ。今は洪水にて水底になり

てたゞの町と成れり。

五月三十一日、けふも上々の天氣。

下呂より小坂まで人力車。道は益田川の岸、桑畠の中、出逢ふは桑の葉を運ぶ車及籠なり。

小坂より右へ、又落合川の上流、唐谷の御料林に入りて伐木を見る。此道三里餘。

山の小屋に宿す。夜月よし。蛙啼く。

初めて蕨の粉を食ふ。これより北の山里、秋神の杣の者携へ來りしものと云ふ。

六月一日、晴。

山を下る。杣の頭なる老人、途中まで案内して、木を流す堀川を見せる。竹の杖をつき、鹿の皮の山袴をはき、熊の皮の尻當をぶら下げたり。その寫眞を撮りしがよく寫らず。谷の向うなる山の杜若花、草の丈三寸ほど。谷の向うなる嶮しき山に、藤の花極めて多し。

谷に臨みて大木の栃あり。花滿開、花の數は千以上あるべし。朝日の影に全容を浴して、壯麗無上なり。道に墮ちたる花を拾ひ見るに、花片は淡黃にして底の端を鮮紅に染む。兼々進化論には腑に落ちざる廉ありしが、果して栃の木などの立派なるは、生長と種類保存との爲には非ず、此木が三十丈高く、花の底の鮮紅なるは恐らく彼の爲に必要にも非ず。人間を樂しましむる爲と推定する方遙に妥當なり。

溪流の對岸は絶壁にて御嶽へつゞけり。絶壁の上は廣き平地にて之を原八町と云ふ。栗の天然林なり。之を見つゝ獨山を下る。

道に四寸ほどの蛇を見る。子供の時燐寸の箱に入れて飼ひ置きしことを想ひ出す。昔巨人が巨蛇と鬪ひし頃より、人の方は約百世なり、蛇の方は何百代を經たるか、御互に當時の強烈なる憎惡と畏怖とを遺傳して、今日尙打解くること能はず、何とかして完全なる平和を恢復し、同情の眼を以て彼の鱗の美を鑑賞したきものなり。

溪も山もすべて靑き中に、朝六の橋のみ白し。此橋を白く塗りたる人は心あるか。古き傳説をよく味ひて設計したるものか。

小坂より高山へ七里の車。途上こんな人々に出逢ふ。曰く、子持の女を載せたる人力。村會議員とも云ふべき男、手に團扇を持つ。旅稼の人夫二人又一人。職人二人、其一人は白衣。空の郵便車を曳く脚夫、笑ひながら來る。小學校の子供二人又六人。下駄材を積める荷馬車。萌黃の風呂敷包を負うた娘。脚絆猿袴の商人。米俵を負へる馬、空荷馬車。旅の農夫。荒物類の荷車。子供を三人載せたる村の荷車。土方。堆肥の荷車を引く百姓の夫婦。電信の工夫。農夫、谷川の水を見ながら來る。旅商人三人。下駄臺の荷馬車六。農會の技手と云ふ風の男。自轉車の高山人三人、やがて又引返し來り我車を追拔く。藥取の子供。石灰の俵を積む荷馬車。四十位の田舍の旦那、よき人力車に乘りて來る。若き木挽。郵便車。乾物の荷車。石灰の荷馬車六輛又四輛。一人にて曳く荷車に病人の婆、こはい顏をして寢て居る。乘馬を引く者。空荷車、上に鹽物の籠一つ。農夫。子を負うた女。町へ出た百姓二人、又三人。夫婦にて曳く石灰車。高山の郵便配達人。買物に出た男四人。穀物の荷車。善光寺參の老女二人。町へ出た人。躑躅を持てる女連三人等。

六月二日、午後俄ばかりの雷雨。

町見物、熊膽を求む。

宿の主人を招き白川村の話を聞く。明日此山に入る用意を爲す。主人は越中の人にて、十五より二十三の年迄白山の東の谷に銅山を經營してありしよし。早く成功して早く失敗したる派出なる經歷あり。其頃の白川村は面白かりしとのこと也。

色々の訪問者に接す。飛驒は思ひし程の山國には非ずと言ひしに、少しく悦ばざる人もあるやうに思はれたり。

六月三日、晴、午後四時雷雨。

郡上街道を三日町迄。右へ折れて牧ケ洞の峠、峠を下りて夏厩の村、時鳥無暗に啼く。此邊最も雪の深き所なり。山の木はまだ都の四月頃の若芽なり。桃の花あり。

上小鳥は寥落たる民居なり。山路板の車に行逢ふのみ。水力にて板を挽く僅なる小屋あり。又黄蘗を煮る小屋あり。とある野原には大木の梨の木七八本あり。年々よく實り、旅人來りて採食ふ。

行々小梨多し。即ち瀧越の手桶の花なり。紅白の二種ありて、白は李に似たり。六厩へ越ゆる小さき峠、滿山此花の盛なり。遠く望めば林白く、近く行けば薔薇の香あり。珍しき花見なり、初めて旅に醉ふ。

贅澤なる言草ながら、丸々目的の無き旅をして見たし。毎年旅行に出づれど、まだ放縱散漫の趣味は解し得ず。旅行者の中にては、自分は第二の階級に屬するか。親の大病で歸るほど無意味の旅行でも無けれど、さりとて遊歷の書家ほどの悠長さは無し。つまり興行人や間諜などの亞流なるべし。

六厩には燒畑多し。燒畑此あたりにては薙と云ふ。此地は既に莊川村の内なり。輕岡峠にかゝり雷雨に遭ふ。板を頭に載せて雨をしのぐ人を見る。

小倉の洋服を着たる若き男、ふら〳〵と來る。同行者曰く、あれは莊川村の助役なり。今日の村會にて辭職を可決せられて歸る所なり。醉つて居るなりと云ふ。

三尾河一色總則猿丸新淵と來れば、莊川の流はやゝ大きくなり、淵には鱒を捕る竹籠を掛けたり。路の側に少しの田、少しの麻畠あり。麻は薙畑にも作る。以前は一村の衣料大方この麻なりし、ヌノと云へば麻布のことなり。

夜、月色に背き、運送店の奥座敷に寢たり。

六月四日、晴、早天は霧。

此邊の躑躅は花大きく、色は濃艷なる朱なり。田の畔にも咲けり。田の畔に芍藥を栽ゑた家あり。

三方崩山、雪を戴きて遠く見ゆ。此溪谷の中心に當る。その直下に大字御母衣あり。一戸にして三十人四十人の大家族ある村々は、凡てこの山の東麓に列れるなり。

葉小さき山桑にて蠶を養ふ。栃の樹多し、この實は山民冬の間の糧なり。

莊川村と白川村との境は小さき谷川なり。川上に尾上郷と云ふ二戸の大字あり。之れより越前の大野郡へ幽なる山路ありと云ふ。地圖には見えず。

御母衣に來て遠山某と云ふ舊家に憩ふ。今は郵便局長。家内の男女四十二人、有名なる話となりをれども、必ずしも特殊の家族制には非ざるべし。土地の不足なる山中の村にては、分家を制限して戸口の增加を防ぐことは折々ある例なり。唯此村々の慣習法はあまりに嚴肅にて、戸主の外の男子はすべて子を持つことを許されず。生まれたる子は悉く母に屬し、母の家に養はれ、母の家の爲に勞働する故に、かくの如く複雜なる大家内となりしのみ。狹き谷の底にて、娶らぬ男と嫁がぬ女と、相呼ばひ靜かに遊ぶ態は、極めてクラシックなりと言ふべきか。首を回らせば世相は悉く世絆なり。淋しいとか退屈とか不自由とか云ふ語は、平野人の定義皆誤れり。齒と腕と白きときは、來りて綢繆纏綿し、頭が白くなれば乃ち淡く別れ去ると云ふ風流千萬なる境涯は、林の鳥と白川の男衆のみ之を獨占し、我等は到底其間の消息を解すること能はず。

里の家は皆草葺の切端なり。傾斜急にして前より見れば家の高さの八〇%は屋根なり。横より見れば四階にて、第三階にて蠶を養ふ。屋敷を節約し兼ねて風雪の害を避けん爲に、かゝる西洋風の建築となりしなるべし。戸口を入れば牛が居り、横に垂席を掲げて上れば、爐ありて主人坐せり。

對岸の嶮しき山の樹間に、ちら／＼と小屋見ゆ。炭焼かと思へば鑛脈を探る冒險者の宿舍なり、大阪より異人も折々來ると云ふ。

荻町、鳩谷にて夕方になる。柘榴の葉の色花の色、胸の痛くなるほど美しかりき。

六月五日、風雨。

早天に飯島を立つ。高山の荷持を歸し、越中城端に返る荷持を雇ふ。五箇山を往來する荷持はボッカと云ふ。負子の義なるべし。木曾などにては持子と云ふなり。ベースボールの棒に撞木を取附けたるやうなる短き息杖を携ふ。

庄川の左の岸を下り行く。姫子松多くなり、次で赤松も段々見え始む。赤松の林を隔てたる庄川の急流は全く唐畫の趣なり。上流には盛なりし藤躑躅、下流にては早悉く散りて、谷うつぎ花盛なり。

道の側の叢に蟇が鳴く。所謂谷ぐくなるものか。其聲時鳥河鹿などの類にて、節は谷水の音にまぎれず。

椿原港より對岸は既に越中にて、處々に籠渡あり。國境の境川より五六町こなた、小白川といふ七八戸の村あり。村に寺あり。軒に釣鐘を釣りたる外、たゞの百姓家とかはらず。住持も經を讀まず。村のはづれに日本最小の小學校あり。

赤尾の町と云ふ山村より、雨烈しくなる。尾瀬峠を越す、中腹に竿多く、一重の椿咲けり。

城端は機の聲の町なり。寺々は本堂の扉を開き、聽聞の男女傘を連ね、市に立ちて甘藷の苗を賣る者多し。鄙の暖簾京めきたり。

汽車にて加賀の金澤まで來て寢たり、今日の旅、草鞋十一里。

六月六日、晴。

疲れたれば寢轉びて物を書く。

夜は按摩の老人を引留めて、遲くまで白山の話をさせて聽く。

六月七日、雨。

此町に一人在りし友人、この四月に逝せたり。朝起きて枕上にこのことを思ふ。

腹を損じたれば能登の和倉へ寢にゆく。

七尾に牛馬の共進會ありとて、多く若き駒を曳く。土地の人驚き馬とよろこびて、麥酒などを飲ませる者あり。女子供の馬を怖るゝこと鬼の如し。

能登の[illegible]屋は何の葉を交ぜて葺けり。古き屋根には黄なる花の苔叢生せり。

能登島は平遠にして、麥畠の色靑く黄に、織物を見るやうなり。能登一國も太古は島なりしか。國府の平野は一帶に海よりいくらも高からず。

六月八日、雲多く日影淡し。

湯宿の奧の間に終日臥す。オスカア、ワイルドの『奧方の扇』とアーネストとを讀了る。若き女枕元に來て頻に大聖寺の話をしたり。

六月九日、大雨、風冷かなり。

朝船にて七尾の港に歸る。海岸はすべて赤土の崖なり。日本海は潮差少なければ、浸蝕の痕波の上に美しき線を作せり。

津幡にて乘換を待つ間、北海に渡る漁夫の群に交りたり。數百の荒くれ者の中に、老人女なども見ゆ。送りに來たる者十五六人、プラットホームに殘る。髮の赭き女、眼を病める男の兒を負ひて立てり。泣くなら己ばかり父と一緒に行くぞと云へば、兒は母の赭き毛を引きて猶泣く。又やゝ淸げなる女の、徒跣にて一抱へ

も有る藥鑵を下げたるあり。やがて汽車の中なる男にそれを渡して物を言ふ。鉢卷をしたる老人、元氣さうなことをいひて大きな唾を吐く。勞働者の聲は皆すこし嗄れたるやうに聞ゆ。

富山に着く頃雨やみたり、立山は此より見えざれど、四山は凡て雪を戴けり。

六月十日、晴れて涼し。

監獄に行きて見る。女囚は二十人ばかりありて網を織る。禿げて頭に一本も毛なき老婆あり。女囚の罪は凡て神妙にて、何れも惡人とは見えず。後に聞けば出口より三番目のは、男を川へ突落して金を奪ひたりし女なり。

六月十一日、朝は曇る、今日入梅。

汽車にて新川郡に入る。名の如く大方は川床より成りたる平地なり。東に行くに從ひ少しく傾斜あり。蟲川の川上遙に山見ゆ。

滑川。濱にて忠丸を見に行く。漁業練習生を乘せたる漁船なり。二三日の中に出帆してオコック海に鱈を釣りに行くなり。

魚津に着きて泊る。鯛の引網と蜃氣樓を見に日々數百の客あり。蜃氣樓は今日は見えず。面白く話を聞くに、我がかねて夢想せしものほどは美しからず。いづれギジョンなれば見ぬもよし。

六月十二日、晴。

此町にても亡女の家の前を過ぐ。格子の隙より大人の後影見ゆ。

三日市を過ぎ、愛本の橋より右に折れ、黒部川の岸を上る。山を崩し石灰を燒く煙、狹き谷に滿つ、村の名は内山と云ふ。此奧信濃の境まで村なし。林道を開きて北城に出づ。路上に溫泉三所あり。

黒部川水濁りて白、綠の色なり。川の中洲に處々廣き茱萸の林あり。此林の色と今日の水の色とよく似たり。

殘雪は山の塵を被きて、近よる迄は見えず。奧に入れば林は黒けれど檜は見えず。名物の黒部杉、姫子松。ナラにては櫂を作り、女ども負ひて山を下る。

黒薙の溫泉に入りて宿す。巖の下に藥師の堂あり。川音の間に、折々代鉦の音まじりて聞え來る。

六月十三日、晴。

今朝も猫川上に上る。出平の小屋に憩ひしに、よき猿の皮を敷きたり。猿の話を聞く。夏は樹深ければ唯聲のみを聞けど、秋になればよく群を爲して往來するを見る。稀には孤猿あり。一旦群を離るれば女と食物を分つの煩累も無き故、自然に厭世になるなり。其代りには常に他の群より迫害せらるゝよし。

原の路を引返す、路上に樹を焚く少年あり。鍛冶の炭を製するなり。

愛本の橋本にてマキを食ふ、笹の葉に包める團子のことなり。

舟見は靜なる町、廣き道少しく坂になり、正面に雪の山高し。艾を作ると門毎に蓬を乾す。

泊の町に入り海邊に出でて見る。淋しき濱に舟二つ繫り、女ども灰石を荷ひ出せり。東はやがて越後の境に近く、赤土の山を切開き、松の間に電柱の列ねたるは、昔義仲が越え來りし宮崎の鼻にて、其名も悲しき親不知の荒磯へは、此道を行くなり。

歌と云ふうまやはいづこ宮崎のみさきをおはたゞ青き海

勢至堂峠より白河へ

猪苗代の湖岸では、東南の一隅が最も好いと思ふ。而も九月の夕月の晩であつた。熱海の停車場の奥、石筵の縣種馬所を見て、其足で三代村の糶庭を見に行つた。山潟の停車場で下りて、疏水の上流の橋を渡り、少し行くと山の裾の高みになり、濱の松原の梢ばかりが見える。松の上は湖水で、磐梯山が之に映る。二十年前の五月二十何日かに、此山が破裂した日は、變な日だとは思ひつゝも、忙しいので皆桑を採りに出て居つた。此邊からは一番よく見えて恐ろしかつたさうである。

其山が段々後に見えるやうになる。折々降り坂になつて里へ出る。里はきつと湖水に注ぐ小流に跨つて居る。其川で明日の糶庭に出す駒を洗つて居る。五位鷺が啼いて松原へ行き、追々夜が暗くなつて、船津の人家は燈火ばかりが見えた。水路で會津から來る者は此處へ船を着ける。三代村へは田の中の路を、まだ是から一里ほど入込むのである。

三代村も湖水に注ぐ一の川の岸で、糶庭は其川の川原に設けてある。翌日は恰も三日目であつた。諸國から入込んだ馬商人が家々に泊つて、夜遅くまで話をして居る。此村は會津街道であつたから、村の中を用水が流れ路幅が廣く、くゞり戸や腰高障子の家が多く、火の影が路へさして、只の田舍のやうでは無かつた。駒糶の作法も詳しく聞いたが、長くなるから略する。當日一等の駒を御手打馬と云つて、褒美に赤い盃などを呉れる。良い馬は領主が買上げる故に、御手を打たれるといふ意味である。頭取の男は郡山在の者で、心持の好い男であつた。朝から晩まで馬の値を喚ぶので聲が枯れてをつた。馬でも稚い中は可愛い眼をして居る。埒の中を引廻すのに、多人數に怖れて顔を牽手の袂から放すことが出來ぬ。牽手は大半は女である。思ひ〳〵の身嗜みで出て來る。これを見物が囃すのである。中には子を背負つた女房もある。此邊の若駒は凡て婦人の手で育てられるので、優しい別離の場が、この一日に何回も演ぜられた。

三代村の川を段々に登れば勢至堂峠である。この次の日に、市にはとても出られさうも無い馬を一匹借りて此山を越えた。並の峠路ではあるが、湖水を後にして登つて行くと思ふと心持がよい。分外に廣い山野であつて、木地屋などの小屋掛して居るのを大目に見てある。頂上に近くなると、湖岸の平地は隠れてしまふが、遙か右手に白川布引の珍しい山の容が見える。凡そ四五里とも思ふ間、高低なき嶺が東西に走つて居る。其山の上は地竹ばかりで、只は歩行かれぬさうである。「布を引く」と云ふ語は今は無い語である。此名をつけた昔の人がなつかしかつた。

峠の名になつた勢至堂は、降りの中腹にあつて荒れた宿場である。昔は門前の茶屋に赤い前垂が居て、會津へ歸る武士はこゝで酒を飲んだ。こゝはまだ會津領では無かつたのである。勢至菩薩は馬の守護佛かと思はれる。奥州では處々にその石塔がある。この山中の村でも家々に駒を育てゝ居る。中には母の死んだと云ふのも居た。昨日の糶で買はれた二歳駒が、五匹六匹一繋ぎになつて、見知らぬ爺に引かれて行く。何れも首に小さな木札を下げて居る。樹の蔭に休んで居る一匹の札を見たら、香川縣綾歌

郡云々と書いてあつた。

左側が片岨になつて、右が追々開けて來ると、江花の古驛は坂路の兩側に村を爲して居る。此邊も皆熱心なる馬飼で、一等賞を得る爲に馬に泥鰌を食はせたり、卵を飲ませたりする連中であるから、子供等が出て來て自分の乘つた古牝馬の、ぴよこ〳〵と歩行くのを見て笑つた。

此處から長沼を經て奥州街道へ出る路は、田の中の平地である。親にわかれた若駒どもは、多くは此方へ率かれて行く。稻の上から首だけが見えるのが、如何にもいたいけであつた。白河へ出るには右手に近路がある。岩瀨の奥の山の端が、阿武隈川の水域へ尾を引いて幾筋とも無く、たとへば佛手柑の皮のやうに出て居るのを、一つ一つ越えて行くのである。此が會津家の參觀道路であつた。谷合毎に里はあるが、何れも寂寞として四十年後の零落を示してをる。處々赤松の並木、或は敷石の殘つて居るものは見えても、今は純然たる山路で、都會と都會とを結び付けた路とは思はれぬ。

昔はこんな道が却つて重要であつたのであらう。何れの地點で進軍を中止しても、すぐに防禦の陣形を作ることが出來る。蘆名氏が白河地方に勢力を延ばしたのも、斯う云ふ山路の御蔭であらう。併し平穏な農民の爲には、侘しい田舍である。牧の内地方は今でも産馬が主たる産業で、秋の白河の馬市を賑はして居る。江花からたしか六つ目の丘陵から、その白河の城下が美しく見える。此邊は飯土用村である。飯土用と云ふ地名は東北に多い。何か信仰に關係がある地名と思ふが、まだよくは分らぬ。江花と云ふ地名も意義不明である。「ハナ」は塙、即ち高地のことであらうが、「エ」といふのが合點が行かぬ。私は暑い日にこんなことを考へながら、白河の柳屋に來て泊つた。

(明治四十三年七月)

熊野路の旅

大和の初瀬の觀音の後から、吉隱名張を經て伊勢へ詣る路は、僅かの年數ですつかり衰微した。汽車が出來て人が足を厭ふやうになつたら、忽ちにして阿保山峠の上の、伊賀の茶屋と伊勢の茶屋とは、泉も石垣も草に埋もれ、梅の古木が殘つて居るばかりである。然るに此三四年前から、春の好い季節になると、遠方の人では無いが若い者などが、わざと汽車に乘らずに遊び半分に、此山路を打連れて伊勢詣することが段々盛になつた。當世の語で言ふと卽ち遠足である。山や谷川が自然に開いた通路は、さう容易くは滅びて了ふもので無い一つの實例であつて、聊か心强い感がある。併し自分等のやうな者が此路を通ることになると、假令日數の掛るのは構はぬにしても、車が通ふか荷持があるかが、先づ大きな問題である。麓まで來て引返さねばならぬやうでは困るから、地圖の上では計畫が立てにくい。殊に紀州路は、昔も今も入口が東西に一つ宛しか無くて、沿海が七十里以上ある。あんな汽船でも、之を當にせぬことにすると、眞に袋の底へ入つたやうなもので、出て來ることが骨折だ。仍て新しい自分等の經驗に由つて、玆に當分用の案內記を拵へて置かう。

自分たちは和歌山の方から入つた。汽車で南大和の古山川を見ながら、往からとしたのは先づ失敗であつた。大阪から和泉の濱を電車で行く方が、奈良經過の關西線より半日以上早い。和歌山市の停車場には、黑江行の電車が來て待つて居る。此城下町の今の形勢と紀の川水運の樣子、及び和歌浦と紀三井寺の所謂名勝地が、何ばかりの物であるかは、此車の中から見て行けば十分である。陸運に引附けられて、柑類の栽培が次第に和歌山の方へ寄つて來ることも一目して察せられる。新しい木新しい種類は、市に近い處ほど多い。

黑江と日方は家續きの長い一箇町である。總體に山が迫つて、外に路線の取りやうも無いから、漁家も商家も悉く所謂長汀曲浦に沿うて構へられてある。併し里を出離れると昔の熊野路は直に嶮つ山を越えようとする。車の路は其立石を左にして、濱へ濱へと成るたけ急に坂に懸らず、且つ成るたけ多くの里を貫かうとする。里は概して小さな灣に臨んで居るのである。だから新道は快活であるが、以前の山路は同じ海と遠い風とを望むにしても、山の樹越しで遙かに幽邃の趣に富んで居ただらうと思ふ。

併し磯の浪の音を近く聞くのも、決して惡くは無い。偶人家の無い山の陰の入江などになると、鴨が來て浮いて居る。鹽津の靜かな湊では、暮のことであるから蜜柑を積む汽船が來て繫つて居る。路の都合で此町では、家の屋根を遙か下に見て通る。守峠といふ處に人力車の立場がある。黑江の電車は鹽津まで延びる豫定になつて居るが、果してどこを通つて來るものとして許されたか、自分には推測することが出來なかつた。

鹽津の峯を降つて、暫く海の見えぬ谷を横ぎり、濱中の港へは行くのである。此平地なども昔の深い入江が、追々干潟となつたものらしく、熊野繁昌の時代には、舟でなければ通られぬ横路であつたかと思ふ。濱中の町にも、蜜柑が黄金の山のやうに集り、之を撰り分けて船

に運ぶ女の勞働者が、其中で働いて居る。高い好い薫がする。山路になると、處々の畠にまだ採り殘された果實が見える。椒と云ふ村を右斜に見て、丘の根方を傳ふ樂な路を走つて行く。椒は即ち端椒で、自分が豫想した通りの地形であつた。浦の初島の歌を想ひ出した。

それから有田川の川口の塘の上に出來て居る箕島の町まで、新路が新田の中を眞直に貫いて居る。箕島は蜜柑輸出の中心地を以て目せられて居る、小舟で川を下して來る寫眞を、繪葉書にして賣つて居るが、實際の光景は見なかつた。此から先は犬が人力の綱を曳く。二人曳ほど速いけれども車賃も無暗に高い。犬の勞銀も中々よい收入である。川口の長い橋を渡ると、路は近頃の堤の上に附いて居る。對岸の山は餘程上流まで果樹ばかりである。其山はもとは海に面した磯山であつたのが、有田川が自分の齎出した土で追々と裾を延ばし、殊に左岸に大分の平地を作つたと見える。沖島一帶の丘陵は實に海中の島であつたのを永い年代に內陸と續くことになり、其內側に水害に罹りやすい低地の蜜柑畠などが出來た。今の堤も此丘の端を便にして築かれて居る。

湯淺の盆地は僅かの高地で、此谷と水脈を分たれてある。玆にも短距離の輕便鐵道が企てられ、絲我の村はづれに少しばかり工夫が働いて居た。まだ盛土も滿足で無いのに、停車場の建物ばかりが田の中に、手持無沙汰に立つて居る。電話と電燈と電車とを、無邪氣な此邊の人は文明の全部と解して居る。而も其動力の採用に附いては、中世式に孤立して居るから妙だ。

湯淺は居心地の良い靜穩な町であつた。朝日の出て來る日高境の山を眺めて、今日はどの邊を越えるのかと思つて出たら、川上に存外奧の深い谷が入込んで居た。谷の口は南廣村の井關と云ふ部落で、此水で廣い田を作つて居る。それから津木と云ふ長い村を通るのである。昔の路も多分此筋であらう。良い路だが淋しいもので、人力車などは頓と出逢はない。右の方へ分れて由良へ越える新道が、味も模樣も無く同じ勾配で、すつと山を切つて登る。此方は猶更車が往くことを欲しないと云ふ。序に言ふが此邊で車を曳く犬は、先年月ケ瀨で雇つた犬などから見ると遙かに小さい。都會でならチン〳〵をして遊んで居る奴である。カメ中の紈袴子弟である。此も車夫と同じく年々其品質に於て退歩して行くのでは無いか。かよわい者の勤勉力行は傍で見るのが隨分大儀である。

津木の谷は僅かの山脈を右に隔てゝ居るのに、早些かも海邊の氣分がせぬ。車夫などは此邊のやうな山家ではなどと言ふ。村の犬は妙に耳の立ち尾の卷いた白狗が多く、頻に來て車の犬に威壓を加へる。其あとから鐵砲を持つた村の人が來て叱る。あれは皆猪を撃ちに行くのです。此邊ではもう猪が捕れるのかい。へイ仰山居りますなどと話しながら、鹿ケ瀨の隧道に向つて登つて行く。

トンネルの東は日高郡東內原村の原谷である。此も頗る深い入野であつて、降り降つて廣い耕地に出ると、御坊の町の松原越に、海がチラリと見え、遠淺であるのか、汽船が沖の方に來て繫つて居る。御坊はまだ大きく成り得さうな町だ。縣首府の勢力が次第に強くなるものか、町に獨立して新聞がある。田邊に行けば二つ、新宮になると四つ新聞を出して居る。町の新聞を見る人が、恐らくは同時に此等の町を繁榮せしめる御客で、出入の商船は寧ろ其御出入の商人であるらしい。其爲か否かは知らず、縣道はあまり埠頭とは交涉せずに、左へ切れてさつさと日高川の長い橋を渡り、我々の熊野路

を拵らせてくれる。茲でも清姫の燃えたのは大分上流のことであらうと思ふ。

此邊から濱が荒くなるからか、漁事を活計にして居るらしい民家までが、ずつと海から引込んで高みに住んで居り、路は流を越える爲に何度と無く登り降りする。大體に於て手の屆いた好い路だが、前年の出水に損じた處を、二處ばかり歩かねばならぬ。印南は小ぢんまりとした港だけれど、與在所が淺い上に砂を出す川がちと邪魔をする。此頃の切目川は谷が深いだけに、持出す砂も多く、其砂を西の風が淘り上げて、所謂由良の地を作つて居る。印南から此へ越えるには坂が稍長い。

其坂の一部分の些し切通しになつた處が有名な切目王子である。切目と云ふ語も或は此地形を意味するのかも知れぬ。東國で言へば即ちウトウ坂である。切目王子は今は切目明神と唱へて居る。熊野の九十九王子の衰微は、必ずしも我々が笈や頭陀袋の趣味を忘却した結果では無い。熊野を西國三十三番の打ち初にした時代にも、既に王子の社は三つに一つしか殘つて居なかつた。野中とか近露とか、近い頃に合祀せられた王子も甚だ多い。結局昔が多きに失したので、今が少なきに失するので無いと言へばそれ迄であるが、古い國に來て古い物の無くなつたのを見るのは、南方さんで無くても決してよい心持はせぬ。

切目の濱村から、又切目崎の續きの山を越える。淋しい山路である。雨が降ると寒いけれども、やがて新年と云ふのに草紅葉が殘つて居る。岩代の里中には梅も菜花も咲いて居る。岩代の早豆と云つて、既に蠶豆が花盛である。有馬皇子の結松の古蹟も此邊にちがひない。荒海の渚であるが故に、殊にあの歌の悲みが身に沁みた。

高野の蓮華王院の文書で、夙くから名を聞いた南部庄は、思ひの外の新しい町であつた。茲でも昔の船津の跡は、ずつと川上の方に求めねばなるまい。岬の路も新しく開けたものらしい。之を過ると最早熊野の國であるが、今では何等の氣分の變りも無しに、安々と口熊野に入込んで行く。後の山々は迫つて居ても灣内が廣くて、渚に沿うた町と松原とを、忘れるほど通らねば田邊には達しない。田邊の船着は秋津川の川口に近く、舊城の一角を僅かの模様替をして用ひて居る。城の構は幾分か備後の鞆津に似て居り、東國には珍しい形式である。城の要害なら寄り附き難い方がよろしい。海運を詮とする近世の都會の利害が、昔の軍略上の利害と調和し得たのは不思議である。

但し自分は大阪商船の[illegible]を見て、聊か發明をしたことがある。獨占の勢力は大きいもので、打捨てゝ置いても客の方から頼んで來る。即ち客は熱心な寄手であるから、石垣を築いて置いても攀ぢ登るのかも知れぬ。和歌山から田邊へは二十五里、犬に曳かせても二日かかる。數箇の輕便鐵道を掛けるだけの資本家か政治家かで無ければ、とても犬の車賃を負擔することがならぬ上に、田邊から東へ向いては、其犬にさへ別れるので、港が城の如く威張るのも是非が無い。併し此が爲に大に陸運を改良しようと云ふ策略は如何なものであらうか。古來最も勇敢なる船方を出した熊野が、是では空しく海に降伏したことになる。自分等が若し熊野人なら、寧ろ進んで航路を味方に引込み、之を我物として存分に變更利用して見たい。

（大正三年一月）

丹波市記

大正五年四月三日の午前十一時、畝傍山陵の御親祭が畢つて後、兩陛下には橿原神宮を拜せられて、直ちに停車場の方へ還御になると、沿道の奉迎者は警官に許されて、悉く路上の人になつた。神宮から歸つて來る我々の車は群衆の中に入つて、土埃を浴びながら立留らねばならぬことが何度かあつた。殊に畝傍驛で特別列車に乘り遅れた參列員たちはよほど困つたらしい。自分が常の服になつて驛前の茶店を出た時は、人通りの最も烈しい處であつた。獨りでに足が北に向き、吐出されるやうにして八木の町を出た。眞直に南北に通つた中街道を、大勢の村の人が歸つて行く。若い衆や小學生徒の大きいのは、足早に前の人を追ひ越して行く。併し五町七町と來るうちには、混雜と云ふ程では無くなり、次第々々に人は左右の横路へ分れて行き、條里制の痕跡かと思はれる縱横に併行した大小の路を、文字通りの老若男女が、幾つかの群になつて歸つて行くのが、耳成の山を背景にして、如何にも長閑な畫のやうに見え始める。村へ入ると今歸つて來た子供等が、まだ門口に立つて今日の話をして居る。其村を又出離れると、遠近の人の數がずつと少なくなる。又次の村に來る頃は早ちらりほらりで、十市の里を北へ拔けて、大きな池の堤に立つて四方を見ると、大和國原は早既に、全く閑寂なる元の田舍になつて居た。

三輪の山は外線が如何にも美しい。其後に引込んで立つ高い山は、―纏向の穴師の山に雲ゐれば雨ぞ降るちふ歸り來我が夫―と歌はれた、あの萬葉集の山であらう。今は上通りと呼ばれて居る山の下の道を、正北へあるいて行くと、三輪の神の花嫁御の墓だと云ふ、箸中の塚の下を通る。最も古い帝都の多く有つたのは此邊の傾斜地で、此から見ると葛城山脈の入日の景色が、二千年の昔もさぞ花やかであつたらうと思ふ。柳本の町を北へ出ると、杉に圍まれて大和神社が、物深く神々しい。此神の社頭に在る名木の枝垂櫻が、たつた二つ三つ花になつて居る。橘の實が佳い色をしてぎつしりとまだ枝に著いて居る。さうして一人も參詣者が無い。御召列車を拜みに、線路の側まで出たかと思ふ村の若者が三人ほど、馬場の松の下に踞まつて話をして居る。靜かだと云ふよりは寧ろ淋しい。

元治元年十月二十六日の略此時刻に、庄屋敷の勤め場所の棟上祝から、大豆越の山中と云ふ家へ赴かんとする途中、此社の前で御神樂勤めをして、神官から狐踊のやうな眞似をすると咎められた初期の天理教徒は、其永年の忍耐力を積上げて、とう〱丹波市を一箇の小エルサレムにして了つた。其大伽藍の新しい屋根の瓦が、もう茲から遙かに光つて見える。人が若し獸ならば、もう丸で變つた空氣を嗅ぎ始める頃である。

丹波市は元來石上神宮への岐路である爲に、出來た町であるらしい。現に今も布留川の水が町中を走つて、特色のある此宗教の禮服や、土產物の天理煎餅などを賣つて居る家々に、物洗ひ場の便を供與して居る。三島庄屋敷の新聖地は、即ち布留社の參詣路の中程に出現したもので、宛も天理教廳へ行く爲の路の如くなつた、二千數百年の古い道を、多くの信

者が、何か此奥にもまだ別の御社があるやうだ、などと云ふやうにならぬ用心の爲に、官幣大社の方では偉大なる石柱を、前の丁字路頭に建てゝ居るが、天理教の方では特に是と云ふ道しるべを必要として居ない。六七町の間、正東に向つて僅かづつの坂路で、至つて形勝の地である。汽車からよく見える宏大なる瓦葺の多数が、何と何とであるかを知るのが、自分の今日の遠足の第一の目的であつたが、あまり澤山の建物が、狹い道路を境にして密集して居るので、滿足に見物することが六つかしかつた。白壁に燒壁板の住心地のよささうな大きい家に、庭木などを十分に栽込み、石垣練塀の用心もよろしく、或は二階などが打開いて、日當りも眺望も申分の無いのが目に著くので、或は管長中山氏なる者の住宅かと思つて門へ廻つて見ると、どれも〳〵何々教會の詰所とある。佛教の本山ならば宿坊に相當するものであるが、魚味を用ゐる宗旨だけに、表附きが快活で、或は玄關に金箔の衝立など、幾分か上品な旅館のやうに見えるのも是非が無い。

松村と云ふ大教正の郷里である故か、河内高安の詰所などは殊に立派だが、此外に五つも六つも、略同じ大きさのが既に建つて居り、又此からも競うて建てるのか、そこゝに田を潰して大材木を寄せて居る。其は信徒の保護の上からも、假本殿の美觀の上からも、必要な計畫である。多分詰所のある結果であらう。成田の不動前に見るやうな大きな宿屋は一つも無い。本通りの左右には小家が多く、腰掛けて食べるやうな食物店、或は參拜人の買つて還りさうな物を賣る、小商人が住んで居る外に、數百の取引先を店先に掲示した、某銀行三島支店などもある。

其間を來往する人の中で目に立つのは、木綿袴に髭をはやした人、劒術指南のやうなのから、小學校教員のやうなの迄、剛柔色々の樣子をして居る人が、皆是れ各地教會の布教員で、不思議な事には三十か四十迄の者が最も多い。只の信徒を案内して行くのもあれば、御簾か荒薦かと思ふ長い紙包に、冠の纓插みをくゝり附けたのを肩に掛けて、二三人笑ひながら歸つて來るのもある。自分のやうな氣まぐれな見物人は、新婚旅行らしい大阪者の一組があつただけである。

本部の大建築は村の東北隅を占めて居る。ちやうど二年前に竣功した二十四間に十六間、高さ八丈惣檜の大建築を、信徒等は教義の上からやはり假御本殿と呼んで居る。此貴地が教祖の所謂甘露臺である爲に、故の地を移すことが出來ず、改築に先だつて一時假教堂を作つて置いて、其間に古い神殿を取壞したので、其入費だけ餘分に掛つて居る、勸める人も咎める人も無いから、自由に拜殿に登つて見ると、四百疊を敷くと云ふ一室の中央に、幅一間の渡り板が神前まで通つて居る。神前は北向でよくは分らぬが、少し佛式を加味したやうな構造である。北の口から幅一間半の渡り廊下で、教祖殿に通じて居り、右に折れて管長の住居へ、左に曲つて教廳の事務室と聯絡するが、此等の建物は勿論別にそれ〳〵宏大な玄關があり、殊に本殿と住居とで取圍うた中庭は、造り上げたら見事な泉水になるらしく、此へ入つて來る中門は日本建築には珍しい樓門で、たゞ些しく硝子戸を立て詰めた、住居の方の平家とは調和せぬ。

拜殿は今が最も淋しい時であるらしく、時々二組三組の參拜者が來て坐り、拜を畢つてからそこらを見廻し、小さな聲で永く話をして居る。其群の中には必ず一人の教員が交つて居る。女の教員もある。紫の袴に廂髪で、師範學校にでも居りましたと言ひさうなのが、懷

から木の笏を取出して、拜禮をした時は珍しかつた。子供が澤山來て廻廊の上で遊んで居る。子守が別に固まつて喋つて居る。よほど開放的な宗教である。祖靈殿の方へ進んで行つて見ると、パッチ尻からげに風呂敷包を背負つた十七八の小男が、土埃も拂はずにのそ〳〵と入り、教祖の靈牌に近い所まで出て、信者らしからぬ辭儀をして居る。婆様が三人ほど是も教員に連れられて立つてあるいて居る。赤ん坊が一人泣いて居る。少し指の曲つて顏一面赤紫に腫れた忌はしい病人が、紺の衣服を著て事務員のやうな人と共に出て來る。斯んな人が思切つたヒノキシンをするのであらうと思つた。

今一人酒臭い息の男も、肌膚の色がちと怪しい。非常に熱心に私に此宗教を説明したが、どうも論理的で無かつた。立話である上に醉つて居るのだから仕方が無い。此處を御地場と云ふことゝ、教祖を親様と云ひ、神を天の親様と云ふこと丈は、此男に教へて貰つて初めて知つた。頻りに眼目と云ふ語を使つたが、何が眼目なのかは言はなかつた。

此祖靈殿で又一見ると、上方の人らしい二十五六の子持の女が、束髪で絣の羽織を來て拜殿の右中程に坐り、熱心に御手振をして居る。眞言の手印と踊の手とを取交へたやうな擧動だが、ぢつと見て居ると、其手の振り方の一つ一つに、信仰上の意味があるらしく思はれた。只其手が如何にも丸々と太つて居るので、なまめかしい感じがせぬでも無かつた。其傍へ村の青年と云ふやうなのが二人來た。此方は手の振り方が輕佻で眞似としか思はれず、彼等も私がぢつと見て居るのを知つて笑つて止めた。

門を出て右へ別の途を歸つて來ると天理中學校がある。休日であるから何も見られぬ。正面には注連繩を張つてある。別に普通の中學と變りは無い。●只每朝神拜をさせるだけだと云ふことである。それから後戻りをして本屋によつて見た。銀座の警醒社よりは、一段と宗教臭い本屋であつた。細君の女が店番をして居て、傳道と營利と二つの熱心を以て、あらゆる天理教の書籍と雜誌を勸めたので、御蔭で教祖殿の番人が、說き能はざりし諸種の事情を知つた。

奈良のホテルに歸つて、此日の見聞を或老大官に話すと、それは一度見て來なければならぬと、昨日は多武峯の歸りにそつと往つて見られた。微行のつもりであつたが、教廳では何時の間にか知つて居て、丁寧に新建築の全部を案内した上に、私が買つて來たより數倍の書物を一包にして、恭しく此の何も知らぬ老有力者に贈呈したと云ふ話である。

旅行略暦（自記）

初めて旅らしい旅をしたのは、明治二十七年の三月で、筑波を越えて北常陸の海岸を幾日もあるいた。同行者は今の海洋氣象臺長の岡田武松君であつた。

同じ年の暑中には田山花袋君等と日光に行く路で、野州南境の草原の村をあるいた。田山氏の感化は著しいものがあつたが、あの時代の青年は一般に、今まで人の試みなかつた旅行を、して見ようといふ傾向を持つて居たのである。

日光では毎日出てあるいて、谿の流れ山の樹の色々の姿を見たが、初めて荒濱に働く人たちの、朝晩の生活にまじつたのは、伊良湖半島の二月であつた。是は明治三十年の夏のことで、本篇の文はそれを漸く五年の後に、記憶を追うて書いて見たものである。

全體に紀行と云ふものには縁の無い旅であつた。さゝ計畫を立てゝ旅行をしたのは、官を罷めて大正九年の夏から、翌年早春までの前後の時で、是だけは途上の感想を新聞に載せ、尚若干の補足と、海南小記」とに、その半分ばかりを公表して居る。

最も大きな旅行は明治四十一年の五月から八月まで、九州の田舎を細かく廻て後に、更に中國から引返して四國の西半分の山と海角とをあるいた。僅かな日記と談と小さな講演と、後狩詞記の一篇とが、其記念として殘つて居るのみである。

北海道と樺太とには、二十何年か前に長い旅をしたまゝであるが、幸ひにして非常に美しい印象を有つて居る。近頃愉しかつたのは男鹿半島の花の盛りの旅である。瀬戸内海は前後四回、小さな汽船を利用して幾つかの島を訪れた。

名所舊蹟の巡拜は割愛して、成るたけ風土をあるいて見ようといふのが、此旅人の小さな發願であつた。しかも全國の郡の主たるものを三百ほどといふ計畫が、三分の一も果さぬうちにもう草鞋が無理になつた。せめては、海岸を一巡りと思つたのが、未だ三百里からも殘つて居る。島々の土を踏んだのも百には充たぬ。さうして今日迄の旅行道の革正を前途に期して居るのは、考へて見ると理窟に合はぬ話であつた。

不二山に登る記

峡谷の白百合

天龍川

ヨセミテ谷と上高地

小島烏水

不二山に登る記

一　霧の不二、月の不二

（明治三十六年八月七日御殿場にて觀察）

不二より瞰るに、眼下に鋪展せられたる凸版地圖の如き平原の中白面の甲府を匝りて、毛ばだちたる皺の波を疊み、その波頭に鋭峻の尖りを起てたるは、是れ言ふまでもなく金峯山、駒ヶ嶽、八ヶ嶽等の大嶽にして、高度いづれも一萬尺に迫り、必ずしも我不二に下らざるが如し、不二は自らその高さを意識せざる謙徳の大君なり、裾野より近く不二を仰ぐに愈よ低し、偉人と共に家庭居するものは、その那邊が大なるかを解する能はざるが如し。この夏我金峯山に登り、八ヶ嶽に登り、駒ヶ嶽に登る、瑠璃色なる不二の翅脈なだらかに、絮の如き積雪を膚の衣に著けて、悠々と天空に伸ぶるを仰ぐに、絶高にして一朶の芙蓉、人間の光學的分析を許さゞる天色を佩ぶ、我等が立てる甲斐の山の巉峭を以てするも、近づいて之に押るゝ能はず、虔んでこの神威を敬す、我が生國の大儒、柴野栗山先生讃嘆して曰く「獨立原無競、自爲衆岳宗」と、まことに不二なくんば人に祖先なく、山に中心なけむ、甲斐の諸山水を跋渉しての歸るさ、東海道を汽車にして、御殿場に下り、登嶽の客となりぬ。

旅館の主人、馬を勸め、強力を勸め、蓙を勸め、編笠を勸む、皆之を卻く、この極樂の山、只一本の金剛杖にて足れりと廣舌して、朝まだき裾野を往く。

市街を離れて里許、不二の裾野は、蟲聲にも色あり、そよ吹く風にも色あり、色の主を花といふ、金色星の、夕下界に下りて、莖頭に宿りたる如き女郎花、一輪深き淵の色とうたはれけむ朝顏の、闌秋に化性したる如き桔梗、蜻蛉の眼球の如き野葡萄の實、これらを束ねて地に引き据ゑたる間より、樅の木のひよろりと一際高く、色波の旋律を指揮する童子の如くに立てるが、その枝は不二と愛鷹とを振り分けて、殊に愛鷹の兩尖點右なるは主峯越前嶽にして位牌ヶ嶽は[illegible]は、[illegible]つて前に[illegible]耳を立てたり、與平治小屋附近[illegible]の[illegible]りを過ぎて開花するところより、[illegible]石室に[illegible]るまで、焦砂を[illegible]はずに花を以てし、[illegible]、熱を冷やすに刀の如き[illegible]を以てす、[illegible]茱萸に、剖れ飛ばされて下二は[illegible]たび[illegible]し、二たびは青木の体に落ちて、[illegible]に吸收せられ、地に消化せられ、忽焉として見えずなりぬ、滿野蕭として秋の氣を罩め、馬脊草間に出没すれども、慘として馬動かず、この間の花は、薊、撫子、螢袋、擬寶珠、姫百合、[illegible]、唐松草等にして、木は百中の九十まで松属の物たり。

一里松附近より、角度少しく急にして、大木を見ず、密々たる灌木、疎々たる喬木の混合林となりて、前者を代表するに萩あり、後者には栗多く、それも大方は短木、この邊より不二は奈良の東大寺山門より大佛を仰ぐより近く聳え、半より以上、黄袗は古びて赭く、四合目邊にたなびく一朶の雲は、垂氷の如く倒懸して滿山を冷やす、別に風より迅き雲あり、大虚を左りて、不二より高きこと百尺許なるところより、之を瞥し、山腹に輝を入る、雲消えて輝も亦拭ひ去らる、山色何の瑠璃ぞ、

只だ赭丹赭黄なる熔岩の、奇醜大塊を、至つて無器用に束ねて積立てたるのみ、その肩を怒らし胸を張れるを見て、淑美なる女性的崇高を知らず

馬返しより太郎坊まで、羊歯の小自由國や、偃松の小王國を保護して、櫟落葉松の純林、鉾を揃へて隣々相立てるあり、これありて裾野の柔美式なる色相圖に、剛健なる鐵銹色を點し、無韻の冬をも調して、一路峻出崢嶸の天に向つて立つものあるなり。

太郎坊を出づるや一變して喬木を見ず、灌木はミヤマ榛の木の痩せさらばひたるが僅に數株あるのみ、初めは草一面、後は焦沙漏々たる中に、虎杖、鬼薊及び他の莎草禾本を禿頭に殘れる二毛の如くに見るも、それさへ失せて、霧沸々として到るに遇ふ、天そゝり立つ大嶽とは是れか、眼前三四尺のところより斷切に遇ひて、殆んど山の全體なるかを想はしむ、下界屢ば見るところの事物ほどなる雲の穴より或は頸を延ばし、或は斂めるは、應にこの時なるならむや、今は山と、人と、石室と、地衣植物と、渾天地を霧の小壺に蒸せられて、混茫一切を辨ぜず、登山の行容は悉く二合一勺にて馬を下る。

二勺より路は黒鐵を鍛へたる如く、天の一方より急斜して、潤沙、焦石、戛々、風の喉ぐ音して人と伴ひ落下す、偶ま雲を破りて頭上微かに見るところの寶永山の赭土より、冷乳の紅を傾けたる如く、大霧を捲ると見る間に、急瀬上下に亂流する如くなりて、中霄に溢れ、片々團々、扯れて飛んで細かく分裂するや、シャボン球の如き小薄膜となり、球々相摩擦して、爭ひて下界に下る、三合四合、皆天には霧の球、地には火山の彈子、五合目にして一天の霧漸く霽れ、下に屯めるもの、風なきに逆しまに颺がり、故郷を望んで歸り去なむを私語く、この登山に唯一のおそろしきもののやうに言ひ做す、胸突八町にかゝり、暫く足を休めて後を顧る、天は藍色に澄み、霧は紫微に收まり、領巾の如き一片の雲を東空に片寄せて、透きわたりたる宇宙は、水を打つたるより靜かなり、東に伊豆の大島、箱根の外輪山、御坂山に隠されたる冷水の如き富士の湖、氷上を辷りて僵れむとする駒ケ嶽、神山、冠ケ嶽、南に富士川は茫々たる乾面上に、錐にて刻まれたる溝となり、一線の針を閃かして落つるところは駿河の灣、銀の板平らかに、滔々として天と一に融く。

銀明水に達したるは午後七時に垂むとす、淺間社前の大石室に泊す、客は余を併せて四組七人、乾魚一枚、麩の味噌汁一杯、天保錢大の澤庵二切、晩餐の總ては是の如きのみ、葉マキ梨の葉を綴りて縫ぬる如く、一同皆蒲團に包まりて一睡す。

夜九時、大風室を四匝せる石壁を透徹して雷吼す、駭魄して耳目きはめて鋭敏となり、昨夜御殿場旅舘階上の月を憶ひ起し、一人竊に戸を排して出で、火孔に吹き飛ばされぬ用心して、這ふが如く劒ケ峯に到り、その一角にしがみ附きて觀る。

霧收まりて天低う垂れ、銀錫閻浮大の白月、額に當つて雪水流るゝこと一萬里、鋼鐵の如き玄沙倏忽として黒玻璃と化す、雲の峯一道二道と山の腰より立ち昇りて、神女白練の御衣を曳いて長し、我にいま少し仙骨を有するの自信あらば、駕して天際に達する易行道をなしたりしならむ、下は卽ち荒涼として、裾野も、森林も、一面に大海の如く、茫乎として端涯を知らず、終所を辨ぜず、長流はすゝむ、不二の根に登りてみれば天地は、未だいくばくも別れざりけりと、まことに今日本六十州、有る限なく雲の波に浸されて、四面圍繞の中、兀立

するは我微軀を載せたる方幾十尺の不二頂上の一撮土のみ、このとき白星を銜める波頭に、漂ふ不二は、一片石よりも輕且小なり、仰げば無量無數の惑星互星、耀として、呼吸億兆何の悠遠ぞ、月は夜行性の蛾の如く、闌けて愈よ白く、こゝに芙蓉の蜜腺なる雲の絲をたぐりて、天香を吸收す、脚下紋銀白色をなせる雲を透かして、僅に瞰ひ得たり、この芙蓉の根部より萼枝を出だしたる如き、寶永山の、鮮やかに黒紫色に凝固せるを、西へと落ちたる冷魂の、銹におぼろなる弧線を引いて、雲と有耶無耶の境地に澄みかへれるは本栖湖にやあらむずらむ、雲は寄る寄る崖を嚙んで、刎ね返されたる倒波の如きあり、その下層地平線に觸れて、波長を減じたるため、上層と擦して白波の泡立つごときあり、之を照らすにかの晃々たる大月あり、その光被するところ、總てを化石となす、試に我が手を擧ぐるに、晶きこと寒水石を彫り成したる如し、我が立てる劍ケ峯より一步の下、窈然として內院の大窖あり、むかし火を噴きたるところ、今神仙の噫氣を祕藏するか、かゝる明夜に、靉靆として立ち昇る白氣こそあれ、何物たるかを端知せむと欲して、袖庇に耐風マッチを擦するも、全く用を成さず、試に堅石を摩するに、鳴[illegible]の如く鳴りたる聲ありて、奈落に通ず、立つこと久しうして、我が五體は悉く銀の鍍線を浴び、自ら駭くらく、水精姑く人と假幻したるにあらざるかと、けに呼吸器の外に人間の物、我にあらざるなり、おもひみる天風北溟の荒濤を蹴り、加賀の白山を拍ちて旋らず、雪の跡の黒駒や、乘鞍が嶽駒ケ嶽を掠めて、山靈木魂吶喊を作り、この方寸曠古の天地に吹きすさぶを、氷冷齒に徹し、骨に徹し、縕袍二枚に夜具をまで借着したる我をして、顎を以て齒を打たしむ、竟に走つて室に入り、夜具引き被きて、夜もすがら物の怪に遇ひたる如くに顫きぬ。

◎翌朝四時十五分といふに、床を蹴る、未だ日の出を見ずして、大島、利島、御藏島の、模糊の間に活きて游ぶにあらざるかを疑ふ、三浦半島と房總と、長蟲の如く蜿りて出沒す、武甲の山は純紫にして、蒸々たる紅玉の日、雲の三段流れに沁み入りて、眩光を斜に振り飛ばすや、劍ケ峯の一角先づ燧を發する如く反照し、峯に倚れる我が髭燃えむとす、光の先づ宿るところは、極高き眞理の精舍にあるを念ふ、太陽なる哉、我は現世に在りて只太陽を讃するのみ、顧れば甲武の山の若紫を燒いて、山硫黄色の暗潮、味を擱く。

下りて七合目に至る、[illegible]の翁、剛力の肩をも借らず、杖つきて下山するに追ひつく、郷貫を質せば關西の人なりといふ、年齒を問へば、即ち對へて曰く、當年八十四歲になります！

二　雲の不二、日の出の不二

（明治三十七年八月二十八日頂上にて[illegible]）

四合五勺、石標ありて小舍なし、五合目小舍ありて人を見ず、五合五勺、小舍もなし、人もなし。

我はこの夕を何と說かむか、天は溶みて水の如く、脚下は雲なり、その雲は下層の暗灰、なる所謂雨雲色にして、途々の登山に振り仰げども、山に在ながら山を見ず、たゞすさまじき古綿を、幾束となく冠らせたる如くなるに、頭上自ら鐵盾を載せたるより、重き心したるは、實に是れなりしなり。

されど四合目より以上、この雲を突破して、今初めて山側縱面の上半を仰ぎ視たるとき、今までは忌々しく汚なげなりし、かの雲は、白色にして理細かなる、大理石の厚板を累ねし如く、

脚下に井然として、水平線上、別個の海水平線を半空に横たへ、山は浴を出でたる奇醜の巨人の如く、腹部より下約二千七百米突は、この渺茫たる雲の波に浸りて見えず、その大理石の如く白かりし雲は、今彼が如く黝くなりて、下へ下へと澱み、上層に純白のものを被らせ、又の上に薄紅を刷いて、無限大の虚明を悠々として渉る。

仰げば夕の空は、透明をきはめたる無何有郷、底の底に到りて猶底を見ず、俯せば依然として葉片狀に畑理ある、件の三色雲を瞰るのみ。

天上天下唯我一人、六角稜の金剛杖を樹て、大空に嘯く、一鳥飛ばず、一草微顫せず、日は西に落ち、甲の山を燒き盡して、之を赭宥にし、一瞬に大旋渦をなせる光線は、火鏃の如くに飛び來りて、空氣の厚層を射貫き、凹凸せる雲の大濤に沒することと眼にこそ見えね、幾億萬本といふことを知らざるべし、しかも水分に饒かなる空氣は、飽くまで之を吸收して、色の尖端までを味ひつくし、舐めつくし、細かき波動は碎き散らされて、底に流るゝ石油色のうす紫は失せ、その上を流動せる、水の如き天鵞絨は、剝げて黄色より橙色となり、橙色より橙味の勝ちたる緋色となり、その樺色に衍けられたる雲の緋衣も、解ぐれ／＼て、今は紅のみ上層に屯ろしぬ、是れ明治三十七年八月二十八日が、全世界に永訣を告げて、逝くときの最後に留めたる、凡そ色といふ色の、唯一なりしなり。

喘ぎに喘ぎて辛くも六合目に辿り着きぬ、自ら佛體なせる熔岩二三塊の需品を片寄せながら、主人は戸を閉てむとするところなり、今頃客ありとは思ひもかけねば、我が突如入り來れるに駭きて、慇懃爐邊に請じ、抵掌して後客猶在りやを質す、曰く否と、戸即ち閉づ。

饑ゑて堪へ難し、葱に小豆を入れたる白味噌（この味噌、駿州靜岡附近に鬻ぐところに同じ）の汁に鷄卵を落させむとしたるに、空氣稀薄にして堅まらずと聞き、吊鍋にて汁と共に煮沸すること半時、之を珍汁として、胡瓜と梅干にて飯をしたゝむ、米はこの邊にて既に糯を交ゆ、葛湯を命じたるに、これも湯にて掻き廻したるのみにては、かへらずといふ、即ち同じく鍋にて煮沸して飲む、室の背より竹樋を傳ひて、ちよろ／＼と落つる水は、皆大雪を溶かして導けるもの、之にて炊き之にて煮る、粗食なりと雖も、うまからずとせず。

同室の客は、植物採集のために登山せりといふ、甲府中學校の教諭、星野牧太郎氏、その同伴の剛力一人、白髯長きこと山羊の如き老先達一某、屋根低うしてうす暗き一隅に、柏餅にくるまりて眠れる一對の某氏二人、及び室の主人と、僅に是れのみ、至靜にして絕えて雜話を聞かず。

夜八時頃、不圖けふは舊曆七月の十六夜なりと、爐邊の人の閑談に、おもひ立ちて我一人戸を排して出づ、月已に上りたり、白丸の如く、銀盆の如く、瑠璃球の如きそれにはあらで、赤銅の燻ぶりたる如きなるが、やがて、滿面に灼熱を放射するが如く、赤きもの見る／＼蝕はれて、卵子の黄味を吐き出したる如し、落日光を惜しみ、道の大半を明鏡にして、反影するかと凝視す、鏡中に一流たる象あり、千萬年の太古、山燒けて今猶その灼熱を存したるか如し、此月にして若し雲に半ば包まれて在らしめば、夕に日の昇る大變を叫しみたらむのみ。須彌山に近づく鳥は、皆金色に化すといふや、月ひとりいつくしみ金色を保たさらむ、雲は凝固して前晩より幾重、一連只、纔に明らかにして、唯其何ぞ、この山を繞れる萬木の綠の

游ぶに似たる、蝴蝶の靈の化したるに似たる、その光、尖端の氣を迸らせて肺腑に入る、月夜下界に仰ぎ視る如き、有耶無耶の星光にあらず。

徹夜夢を結ばず、斗鷄の四時、室の主人の懶氣なる咳のみ聞えて、起き出づるけはひもなきに、我のみ褥を刎ねて起き直る、偶ま戸の内側を傳ひて、一穗の赤き物あり、徐々に這ひて室に入る、平原地にありて、朝々見るところの白光、針の如く細くして、しかも鋭く穿透する如く強からず、凝視するに、その赤味は、焔の舌にてベロ／＼と戸を舐むるが如くなるに、遅れたりとあわたゞしく、先づ戸を開く、這ひ出でたるは、肥えたる老嫗と、その從者らしき壯佼なりし、朝明りに見ゆ。

躍つて戸外に出でたり、正に四時三十九分。

偖もほがらに霽れたる哉、一天何物の神手に拭はれて、しかく些の翳を留めざる、天藍色は水よりも淨うして、この凸突したる一赭岩の上に立てる我は、手を擧ぐれば、この滑らかに琢かれたる透明體の底を撫づるに易々たり。

しかも先づ駭かれたるは雲なり、その柔らかきは雲の波なれど、やゝ密やかなるは綿の海にして、乾も硬きは氷の柱なるべし、凡そこれらの硬軟いづれも純白なる波は、地心より四合目々鬱蒼の果端として、怒濤奔流す、少なくとも奔流の姿勢を取る、高きあり、低きあり、凝立するもあれば、横さまに蜿りて奔放せむとし、中途にして凝結したるが如く、動かざるあり、高低の間の波は、おそろしく龜裂せられて、その紺蒼茫たる天を仰いで、巨口を呿けるが如く、その下に無間地獄の深きより深き魔の世──人の世を沒し了ぬ、げに故ラフカデヲ・ハアーン氏がその著エキゾチックスの第一章に、不二登山記を作り、綿の海と呼び做して、不二の雲を二なきもののやらにいたく愛でたるも理なり。かつて飛彈の槍ケ嶽にて觀たる雲の波も、之に比すれば言ふに足らず、南面駿河灣の暖流を受けて、溫度の差の大を致せるは、這の一大畸形の雲を、山崩れの如く半空に亂拋したる所以なるか、嗚呼皆是れ造化の意匠の缺片なり、粗削りのまゝに丸めたる天技の斷屑なり。

されど日は未だ出でず、天地の大靈、祕んで在ますは正にかの東の方、ハッと赤らみて佇[illegible]の如き[illegible]の雲、この大波より打ち揚げられて、天とも地とも判たざる混沌たる世紀的太虛に、二三塊漂游し、その下に鼠色の雲ありて、鷄冠の如く兀起せり、北の方の雲はうすく黄ばみ、件の雲を[illegible]て、舳を回らす如く、動もすれば衝突せむとし、衝突せむとす、知らず何物か出で來る。

されど脚下に瀰れる雲の波は、依然として微動だもせず、或物は全く凝結して、尖き稜角を成し、敲けば鏘々然として缺くべきが如し、その下、伊豆の海ならむと思はるゝ方の雲は、Z字形に掻き亂されて、夕づつ一つ、この世に忘られたるやうに晃めく、光芒白銀の色を帶ぶ。

應に出づべくして、出でざる日は、東の方いかなる雲闇の弱點を突破せむかと、覗ふものの如し、偶ま東南の方に向ひて、雨脚の如き光あり、樺色の雲を貫きて、水の色むしろ無色の空を、桃紅に染むるや、水色なせる領分は、次第に長縮して、敢て爭はず、雪浪、氷浪、綿浪の遥かに盡くるところ、地球の中心より火の海を涌かし來る如く、陶窯中に灼熱せられたる陶土の如き雲は、藹々として朱樺の林を簇生したる島嶼を成す、初めは伊

豆七島の一二ならむかと爭ひ、後に方角違ひに一笑す。

されど、日未だ出でざるなり。

北を回顧すれば、甲斐の高嶽は、金峯山の一列を先手とし、白玻璃函を半は啓いて泛び出でたる紫玻璃の如く、鋭角を一天に突破す、雪浪、氷山、奔騰之と高さを競ひて落ちず、かゝるとき雨脚の如くなる光は、佛手柑狀を成して、交る〴〵天に向ひて彈き始めたりしが、やがてすつくと萬丈の雲氣柱を立て、樺の大雲に喰ひ入るや、雲は俄に變色して、何とも名狀す可からざる茶褐色を作り、綿々として幅ひろがりぬ、我が立てる四周も、遽々然として惡夢より醒めたる如く、室の前なる白木の華表、先づ鮮やかに額白くなりぬ。

光もいつしか冷たくなりぬ、伊豆方面の樺色雲は、惡濁褐色をなして、太平洋に流るゝこと矢の如き黒潮川が、伊豆の海を蓄地に突き切る如し、その東西皆水色となり、樺の朱は次第に滅じて、今や天の色、波の色、總べて消極的とならむずるよと見る間に、朱盆の如き一大火球、燦々として投げ上げられぬ、音なき臼砲を發したる如し、只一瞬間のみ、時に五時三十二分、その通路に當れる雲は一時蟷螂の如く、右往左往に亂れ飛ぶ。

之を先年に觀察したる七月中旬の日の出に比す、紅柘石狀の火焰に似たる色を吐くことなく、猩血の逆流する如き雲を出ださざりしは、秋暑久しく乾きて、天上の一日は、下界の一月の如く、はや高寒の域に入り、大氣澄明せる故ならむか。

猶日を離さぬうちに、上ること弓杖許、紅玉の紅は褪せて、錫銀色を彌らしぬ、日八分に冲するや、熱灼せる鎔液の如き物は、冷えて白光を八方に放射し、或光線は雲を劈き、その然らざるは氷柱を一噴す、今まで我物顏に四合目以下に屯ろして渾沌たる天地を領したる雲の浪は、大恐慌を起し、氷柱の圭角は削られて尖り、溶けて瀧の如く、烈しき流動をはじむるや、有らゆる雲といふ雲は、俄に歪曲して、さしもに安全なりし趣を音なく破り、小さき孔竅見る〴〵その水面にひろごり、狂ひ奔りて友を呼び、この鋭き征矢の的面となるを避くる如し、今や無量數の細小鏡面にも比ひつべき、透明なる水粒は、こゝに相互に衝突をはじめ、紫なる光波は、その隙を狙ひ、白色の光線のたうちて、その間を疾く通過せむとあり、之を防遏せむとして、能はざるあり、竟に波は大坎を穿ち、その缺けたる底より、淺水を透して海草を見る如くなるは、四合目以下の綠山なり、又玻璃を隔てゝ綠丘を覗ふ如し。

かゝるとき微風おだやかに聖なる大命を傳へて曰く、高き物先づ出でよと、雲靡がりぬ、北に金峯山出で、八ケ嶽出で、淺間山は荒らかに、蹈ん反りかへりて層を怒らし、日光山はゆつたりと、笑みを含みて立てり。

微風亦來る、聖き物先づ出でよといふ、雲開きぬ、裾野の草といふ草、皆活きたり、たゞ伊豆相模の方面のみは、氷浪に嚴封せられて、濃灰色の泥山は、函根の化けたる者かとおもへど、定かならず。全體に北方の氷浪は、縱横に割れたる荒砥の如くなり、その蓋つて濃やかなる一團のみ、水晶流となりて、西を指して走りぬ、かくて上へ下へと流るゝ雲も穩やかになりて、汪洋たる八千八水の信濃川が、日本海に落つるが如く、音も立てずに、太だしく曲折もせずに。

戻りて室に入りぬ、老爺は戸外寒氣の中に雙膝を埋め、目を瞑して忝しく宣詞を上げゐたりしが、やがて終りて、余がために鰹節の汁を煮たす、この媼、生え抜きの江戸兒、伴

かたる二十三四の壯佼を小兒の如く頤使す、眼中男子なし、余に向ひて曰く、今年になつて三度目のお山です、この前は宅の若いものを引ツ張つて、日の丸の旗を指して來ましたが、御開山以來、日の丸で參詣したのは、妾が初めてだと言ひます、敵國降伏のお祈りを上げたんです」と、甚し俠婦なり。

余は此室を辭し、六合目以上、火山彈流にて路を分たざるところを往く、その往くや雲の波に背きて、巖固なる熔岩を傳ひ、八合目に至る、吉田口と須走口と、こゝに合す、隣室は甲斐の國、此室は駿河の國。

久須志神社に達して、扇面に社印を乞ひ、携ふるところの金剛杖には、去年中畑口よりの一頂上印に加へて、東表口改、を押さしめ、御符數枚を乞ひ、隣れる石室に入りて草鞋を換へ、金明水汲所、及び内院を下瞰して、不二山頂、第二の高點、併せて日本國土の第二高點なる白山ケ嶽に上る。

今假に不二山を四合目より横斷的に半截して、以下を水半球となし（雲霧に包まれたるが故に）以上を山半球となさむか、かくして件の山半球を、内と外との複圖に別たむか、内には大圓錐を倒しまにしたるが如き噴火坑あり、周圍十數町、深さもおそらく五六十間に過ぎざるべしと雖も、ダンテ神曲に言ふところのサタン墜落のをりに推し退けられて、成りたる竇穴の如し、たゞ淺間山の如く、今も猶、惡氣を噴いて、大不平を鳴らさざるのみ。

外は如何といふに、いづれも雲の波を隔てゝその水平線上に明々尖立せる高山と仰顧す、こゝに所謂我が山半球を、又假りに縱斷的に二分して、東西の兩半球とせむ、東の主人を白山ケ嶽となし、西の主人を劍ケ峯とせむ、前者より見たるはその東と北とにして、後者は西と南とを支配す。

我は先づ久須志神社の東側より、一塊の熔岩を踏み臺にして佇みぬ、脚下に屯ろせる暗灰雲の剝げ易きや、裂けて一泓の綠漣を涵したるは、是れ不二北麓の裾野にして、裾野の段階的平原頽れて仄するところ、白く銹びたる古鏡一面を照らし出だせるは、河口湖なり、御坂峠の一脈、綠褐色なる纈纈の衣を延ばして、之を包守す、殊に附近の裾野は、淡綠の天鵞絨を布き詰め、禿げたる繼ぎ目を黑松の針にて縫ひ行く。

日高きに隨ひて、愈よ裂けたる白雲は、次第に發ること絮の如くなり、雲と雲の拉れ目より、一塊の絮を押し出したるは、甲斐の國の山にして、殊に圓錐なる箱根の如きは、頭に一二丈許なる銀の環を纏り、鈍角愈よ平たげに、巨鐘の波中に沈みたる如きを窺ひ得たり。

更に看る、白山ケ嶽に至るまでの間、金峯山の大鯨背を露はして、泳ぎ出でたるを、その背に振り分けられたる餘波を浴びて、鋸齒狀に尖りたる氷山の浮游せる如くなるは、八ヶ嶽なり、その右に信濃上野の列嶽、大小高低一ならず、淺間山は長方なる机形に横はりて、一炷の烟は鐵瓶に水煙の濛々として立つ如く、東に向ひて微かに這ふ、その煙の消ゆるあたりに、棚びて立つは、落々たる日光の山、西の方八ヶ嶽の左に當りて、近くは甲斐の駒ヶ嶽あり、鳳凰山、白峯等、尤物の頭顱累々、地上偉人たらし、天上何ぞ巨人多きや。

釋迦ケ嶽の割石を危く下りて、小内院を瞰る、赫々たる岩壁は、馬蹄の如き噴火孔緣より熔岩流となり、下りて喇叭狀に開き、麓より小なる松原を突破して、背に庖丁を入れたる如くに痕跡鮮やかなるを覗ひ、前と正對なる半球の凸點、劍ケ峯に出でたるは八時十五分、山は身延を外づして、他は汎々たる雲煙に沒却、

し、伊豆及び近き相模方面は海底圖を摸索するよりむつかしくなり畢んぬ。
　三島ケ嶽より成就ケ嶽に至るまで、半圓形に歩して、山頂の一面を全く了す。
即ち中畑口を取りて下る、東（須走）北（吉田）の雲の海、大方は裂け、半ば割れ、半腹以上からりと霽れたるに似ず、この方面はさすがに駿河灣に近きだけ、暖濕の空氣山頂に冷やされて、凝結するを以ての故にや、沍々として見わたす限り、猶雲の波、拇指大の氷塊の如きもあれば、小豆大の銀粒の如きもあり、その白光ありて硬きは皆是れ玻璃質の雲、あらず水球なり、その雲より雲を凸起して、鯨の吐水の如き白柱を二三本立てたるは、いかにしても氣體にあらずして、固體なり。
　飜つて中畑口の七合目に下るや、雨の如く大に、霧の如く密やかなる水球、殺到して四周皆白し、愈よ知んぬ身は件の雲の波に吞まれ且つ葬られたるを。下りて五合、三合、一合となるや、霧は紙の如く剝げて、人魚の泳ぎ上るもの四五に遇ふ、皆心配氣に問うて曰く、お頂上は雨ですか、余手を振りて曰く、快晴無比と、しかも顧れば一天低うして重きこと前日の登山のときに同じ。

　太郎坊を去るとき、石灰の如き雲屑は、穿たれて蒼きこと深淵の如く、淨きこと溪谿の如き、方三尺ばかりの虛明を見る。
　這の空中の小坎は、是れ山頂より瞰たる、人の世への唯一通路なりしよ。

峽谷の白百合

（早川を遡る記）

起きて見ると、湯の宿から北に當る峯に、下弦の月がかゝつてゐる、未だ時が早いので、浴室はがらんとして、咒はれてでもゐるやうだ、その空虚には、湯槽の上に高く架け渡した樋を洩れる落水が、忍び音を立てゝゐる。

うす暗い湯に飛び込む、幾筋となく立つては、こんぐらかる湯烟の中からは、蒼白い私の手が浮いて見える、家根の窓は例の通り明けッ放しで、大空まで見通してある、刃金のやうな月からは、雫が滴れさうでいかにも冷たい、谷の木の葉はまだ鮮やかに若いのに、底の方ではもう秋が動いてゐる。

今ごろ大井川の水は、さぞ冴えてゐることであらう、けふから、その祕密の谷へ入れるのだと思ふと、唆かされるやうで、落付いて手拭を使つてはゐられない、湯から上る匆々、例の貸下駄を穿ッかけたまゝ、浴室の前庭に出て、谷の空氣を思ひ入れ吸ふ、口を嗽ぎながら、ふと見ると、眼下の早川谷は、霧で壓し伏せられてゐる、峯々の頭がもう明るくならうとするのに、谷底は未だ、夜の空氣を、そつと溜めてゐるやうだ、霧の中から、一穂の燈がちらつく、直ぐ脚下の湯の外に、人家が無いから、それであらうと思ふが、直徑二三十尺の距離が何所の國のやうに遠い。

その中に弟も起きて來た、室へ歸つて朝飯を濟ませ、谷から漁れた山鯇が、初めて膳に上つた、深山の湯宿では、鯛の代りに山鯇が出る、バタや砂糖の菓子の代りに小豆を塗り潰した栗餅が出る、凡ての生活が、横濱からものの五十里と來ない中に、一變したといふことは、恰度私が宿の上り框に腰を懸けながら、草鞋を穿いて、人夫が米や鍋や鐵砲の荷拵へをして、獵犬が尾を掉り、クン／＼鼻を鳴らして勇み立つてゐるこの日の門出に、宿の若主人が、魔除けにお持ちなすつてと、石楠花の曲り撓つた枝を出されたときに、私はもう適切に日本アルプスへ來てゐると知つた、太さは南天の幹ぐらゐ、黒く漆を塗つた上に、何だか讀めない二字獸めいた文字を白で書いてある、私は邪魔になるので、荷物の中に加へることを辭したが、昨日までの生活を忘れ得ることを心中で謝した。

忘れたい、只だ忘れゝばそれでよい、私は能力を眠らせ、神經を休ませて、口から平生吸つてゐる煤煙を吐き出させ、手足から街の垢をと砂埃を洗つてしまひたい、私はけふから谷と水の洗禮を受けるかと思ふと、足も氣も輕くなつて、案内の獵師を先へ立て、宿の人たちから送られて湯川に架けた板橋を渡つた

早川に沿いて、上り下りの多い山路である、溪流の水音は、坂の高低に隨つて高く又低くあふられるかと思ふと、鶺鴒や木菟の音の間に隱れて、聲を呑む、河原には花が多い、石の間には河原撫子が咲いてゐる、路傍には胡麻や桐などが、少しばかり作つてあるが、畑といふほどのものは、先づ無い、それに路も花の大頽れで、ラッキョウの皮が剝げたやうに、頭上の崖から、脚下の谷まで白くゑぐられたところがある、大木が横倒れに路を塞いでゐる、跨いで行く。

川がS字形の大曲りをして、向うから幾筋か

の谷水が落ち合ふ、對岸に屏風立ちの高い山は、日本アルプスの前衛、早川連嶺の一部である、私はふと、その山のうしろから、鋒ッと異形の頭蓋骨が谷底を覗き込んでゐるのを見つけた。

あれ、あれ、と鶯でも飛び立つたやうに指さして見平（猟師の名）に聞くと、よくは解らぬらしいが、農鳥山の南の裾にあたる、白河内嶽であらうと答へた、巨大な髑髏！　山霊に取り憑かれてゐる私は、身を震はさずには、仰いで見られなかつた。

白河内嶽――數多い日本アルプスの山の中でも、こんな名を聞いたことは、一度もない、今朝日に輝いて見えるのは、前山の肩越しに、ほんの禿げ額から上だけであるが、偃松の緑が斑ツちやけた石に刺繍して、去年ながらの殘雪を頂いたのが、白栗毛のやうに强い光澤を放つてゐる、この年初めて見た姿見の白雪である、私はアッドの大森林で何處まで、縹渺しい無名の前山が、長い肩を張つて自分に迫るのに[illegible]近しさうに峠として、我が偉大なる白河内嶽は、老人の骨骼を摑くのに、何も識を忌避するには當らないといつた風に、堅忍不撓の面相を刻み、前に眺められたる味方と見――鳳凰、地藏、石谷を踏まへて、西洋の大立像のやうに聳えてゐる、超人間の象徴か、平凡を破れ平凡を破れと叫ばずにはゐられなかつた。

川に沿いては、樅の矮木、又は樅の植林がある、樅の中には杉も交つてゐる、林の間からは早川谷の澄んだ水が、奥底の知れないやうな瞳で、ヂッと此方を睨んでゐる、此方でも恐る〳〵谷を覗き込むと、瞳は流し目に私たちを見返して、ぐるりと回轉して、さうして別の新らしい瞳と代る、大きい小さい、冴え切つたのが、代り〳〵に見える……谷は優しい曲線を作つて、潤くなつて屈折する。

樅林の土は、黑くてジメ〳〵してゐるだけに、足裏の觸感が、ふつくりと柔らかい、天地創造以來、人力車に轢かれたことのない土と、自轉車や自動車に尖塔を建てさせたことのない空氣とは、日本アルプスの突を出た瞼の下に當る、この土地に澱んでゐる、この空間に[illegible]を起させるものがあるとすれば、それは山の精か、谷の哲者か、はた落葉の密かな靈聲である、村の人たちは、[illegible]足の必要すら認めない、私の[illegible]も大分に近くなつて來たのを[illegible]。

間もなく奈良田の村――森の中の、谷の底ののさゝやかな鳥の巣のやうな――を眼の前に望んで、村へ入らずに川縁へと道を切る、對岸の山へ路をつけて、紙の原料に木馬を使つて楮や白樺を伐り出すので、人足が入り込んでゐるため、奈良田にも木賃宿が二三軒はあるといふことだ。

川縁には、紫の菅草がいゝ、ほんの少しある、藤蔓で束ねた平板の長い橋を渡つて、早川谷を東から西へと、戻り氣味に過ると、人の也ゐする村と、人の作つた路は、こゝでフツリと切れて、私たちは魚のやうに、早川の奥谷へ

この川の水はおもに甲州アルプスの主宰者、白峯山から落ちて來るのである、北を仰ぐと農鳥山の支脈の小山が襟を掻き合せてゐる、がどこか潤々と河原が展けて、大きな石が日光に見々と遠くまでモザイクの斷裂を行列させてゐる、岸に漂着してゐる白い木がいやに目立つて光る……もし水流の方向を見ずに、山の姿をばかり見ると、下流の方が上流ではないかと思はれる程と、山が建つてゐる、實際奈良田村から兩岸に檢つて見ると、川の水が落ちて行く先を高い山に繞られてゐるので、直白く輝く空氣を、大鎌で斷切りにしたやうに、ポツキリ折れてゐて行く先は解らない。

渡つた先の岸には、古びた石作りの建物があ

る、山葵が採れるとかで、建てられた製鹽所だ
さうだが、今は煙突から噯ほどの息も立つて
ゐない、恰度都會近くの村落にある舊式の水
車が、新らしい工場の揚水器などに押されて、
ホンの風景畫の裝飾にしかなつてゐないと同
じやうに、この文明式の建築物は、嚴しい深
山とむさツぽい幽谷の中では、全くの繼子扱ひ
で、見る影もなく、壓倒されてゐる、かしこで
人が自然を殺しにかゝると、こゝでは自然が人
間を虐げてゐる、私はこれから、その虐げ
られる仲間に入りに行くのだと思つて、岸に立
つて見廻すと、大いなる生命の中心に運ばれたや
うな滿足と恐れとが、身に迫つて來る、どこを
見ても曲線だ、どこを見てもクライマックス
だ、私は「今に何かある」と覺えず後先を見廻し
た。河原には信濃撫子が、紅に咲いてゐ
る。

向ひの崖には、水成岩の特徵を示した大石が、
板でも剝いだやうに平ツたく筋目をつけて疊な
つてゐる、その高いところに、白い花が釦のや
うに浮きあがつて見える、私は河原の石を跨い
だり、横に途を切つて川へ流れ込む細流を涉つ
たりして、その崖と眞向ひになるところまで來
た、大きな巖が嘴のやうに川の中へ突き出て
ゐる、その上へ登つて人夫は荷を卸す、私も足
を投げ出して、休みながら水を見る。

その水の色！

水は石に激して、乘り越える、一旦石を通り
越して、戻り氣味によろ／＼と、石の下に潛
け込むのもある、その後から被せて、強い水が
乘つ切つて來ては、又前と同じ姿になる、午前
八時半といふ藍空の下に、谷川は呼吸をはずま
せて、時が一秒々々と永劫に飛び去る後を追つ
かけては走つてゐる、見てゐる瞬間に、川が眩
しく斜になつたやうだ——蒼い色は水の血液
であらう、この純なる血は、海のやうに惡雜
なところがない、さうして又海のやうに奧の知
れない、まあ底氣味の惡いといつた濃藍でなく
て、底まで見透しになつてゐる、それだけ迅く
ても、喚いても、どこかしんみりと靜かである、
流動する湖水だ、と私は思つた。

底に達くまでには、石が多い、石は洗はれて、
磨かれて、小さいのは水にこづかれたり蹴けら
れたりして、地の殼を磨つてゐる、さうして玉
蟲の甲のやうに光つたり、又は釉藥をかけたや
うに寶石色をして、水に包まれてゐる、薄い皮
一枚の下には幾千萬の神經が蛇のやうに顫いて
ゐる……蛇は水中塔のやうに突き立つた大石に
縋つては又辷りこむ、水面は忽ちヒ、かいつ
て、水精の霰が水平線から飛びあがる、たばし
る粒の心には細い針で穿いたやうな穴が開く、
空氣の白味を含んだ半透明の藍白が煮えくりか
へる……見よ、血が醒めた、石の影には波紋が
黒く簇つて魚のやうに跳つたり、彈ねたりする、
水の底からは、むら／＼と霧が湧く

水から眼を放して、向うの切岸を見る、白い
花といつたのは山百合のそれであつた、幾株も
離れ／＼に、石の骨に喰ひついて、大きな蕾
が水に俯向いてゐる……森の魂が拔け出した
やうだ、崖の上の立木のこんもりした若葉は、
そよ／＼と谷吹く風に銀白の裏葉を翻す、水
と共同の搏脈をしてゐる、谷を埋める千萬の
葉から、有らゆる綠素をしぼつて、水を碧く
するのではないかとまで、濃い流は、晝は日の
描いた明るい畫を映し、夜は月の落した闇の畫
を染める、その上を幾斗の匂ひが漲つてゆくの
だ、何といふ豪華な奢侈であらう！　私には大
きな崖も雲も斷片であるが、山百合の花だけが
完全に纏まつて、その一輪が谷のポイントで
あると思はれた。

一秒々々の經過が微細に變つて、蒼い面が
パツと白く裏から剝がれて行く、谷川の水ほど

の神經が只ッた一つの雲——同じ水の化性——を除いて、その他の自然の、何物にあるであらう、その數ある水の中で柔らかな、滑らかな、油のやうにとろりと澄む水、夢を見る傍から醒める水、絶えず新らしい水、兩方の切崖が高く聳えてゐるから、朝日と夕日の金光が、おそらく未だに一線も落ちたことの無い水、衰への皺を刻まない水……アヽその啜り泣きと、忍び音と、神經をそゝくるやうな曲節とで、昔からローマンチックの詩人を魅した水！

上流を思ふと、白峯山の「萬年雪」の光景が、忍ばれる、雪や氷となつての最後から又最始の水が初まつて峽谷の中に蓄されてある祕密の線を通つて來る……その水を上へ〳〵と溯つて、一萬五百尺の白峯の絶頂へ私の身が運ばれたとしても、さうしてそこに新らしい情緒を得られたとしても、水といふ古い祕密は、どこまでも私の心にしんみりと通つて來るであらう、波羅門の信徒が、雪山より發源するガンヂス河に、年々身を投げるといふのも、おそらくかういふ日、かういふ川でするのであらう……私は默つて水の面を見詰めた。

見詰めては「何といふ凄い、美しい水だらう」と、人夫に話しかけて見たが、刻み烟草をスパスパやりながら一寸振り向いて、ニッとしたばかり、「水は始終こんなものだあね」といひたい顏つきだ——私は毎日通ふ道の△△停車場の古ぼけた煉瓦作りを思ひ出した、曇り通しの玻璃窓は、半分缺けて針のやうに切れ目が尖つてゐる、その破斷口を通り拔けて、機關車から吐き出す煤烟が往來へ轉がり出る、通行人の傘や帽子が、焔に包まれた纏のやうに、烟の中でひとしきり姿を隱す、栅の下にちよぼ〳〵生えた埃で灰色に化けた青草を、尻に敷いて立ン坊が膝に手を組んだまゝ、グッタリと首を垂れて、居眠りをしてゐる……その煤烟が谷川の電流に、綯ひ交ぜになつて眼の前を奔る。

私はまだ追ひかけられてゐる。

（明治四十三年七月）

天龍川

一

山又山の上を、何日も偃松の中に寝て、カアキイ色の登山服には、松葉汁をなすり込んだ青い斑染が、消えずに殘つてゐる、山を下りてから、飯田の町まで寂しい宿驛を、車の上で搖られて來たが、どこを見ても、山が重なり合ひ、顏を出し、肩を寄せて、通せん坊をしてゐる、これから南の國まで歩くとすれば、高い峠、低い峠が、鋭角線を何本も併行させたり、亂れ打つたりして、疲れた足の邪魔をする、山越しに木曾路へ出て、汽車に乘るとすれば、トンネル又トンネルがあつて、この温氣に、土龍のやうに、暗の穴を這ひ、石炭の粉の雨を浴びなければならない。

けれども、山の町から一直線に、傍目も觸らず、廣々とした南の國の、蜜柑が茂り、蘇鐵が丈高く生えてゐる海岸まで、突き拔ける天龍川といふ道路があることを私は知つてゐる、しかも日本アルプスで、最も美しい水の道路であり、水の驚異であることを知つてゐる、この道路はどんなことがあつても、酸化したり腐蝕したりすることは先づ無い、今まで頑な、鐵製のやうに、兀々した石の上で、寢起してゐた身が、濃青の水、情緒の輝やきに充ちてゐる自由な川波に乘つて、何千尺の高さから、大洋の水平線まで、一息に下り切るといふことが、「一艘さして雲のみを行く心地しぬ、名も恐ろしき天の中川」といふ、この川を詠んだ古歌の心を、味ふのに十分であらう、金剛杖の代りに櫂、馬車や汽車の代りに、亞米利加の印度人が、操つたやうな、原始的な、輕い、薄ツぺらの板舟で、五十里の峽谷、それもおそらく日本に類のない深谷を下られるといふ道路は、他のいかなるそれよりも、美しい幻影に富んでゐるに違ひない。

今でこそ衰滅の俤しか殘さないが、羇旅の人たちに、古典的の壁畫を見つめさせるやうに、すがれた色彩と、暗い陰影を味はせる東海道にあつても、この天龍川は、昔に名高い大河であつた、この大天龍は、川筋の變つた今では、その頃をたづねられないが、名だけは古い地理書に殘つてゐる、「十六夜日記」の女詩人は、河畔に立つて西行法師の昔をしのび、「光行紀行」の作者は、川が深く、流れがおそろしく、水がみなぎつて、水屑となる人の多いのにおびえてゐる。

日本の歴史の恐怖時代ともいふべき、平家の末路から、鎌倉の執權政治にかけて、悲壯なる運命劇は、何故か東海道の河畔で演ぜられたのが多い、承久の亂に鎌倉に囚はれて、東下りの路すがら、菊川の西岸に宿つて、末路の哀歌を障子に書きつけた中御門中納言宗行卿、さうである、「菊川に公卿衆泊りけり天の川」蕪村の光景は、川の面を冷いやりと吹きわたる無慘の秋風が、骨身に沁みるのをおぼえようではあるまいか、更にそのむかし、平家の公達、重衡朝臣が、西海の合戰にうち負け、囚はれて鎌倉へ下るときに、この大天龍川の西岸、池田の宿に泊つて、宿の長者熊野が女、侍從の許に、露と消え行く生命の前に、春の夜寒の果敢ない分れを惜しんだことは、「平家物語」に物哀しくしるされてある。

かの近松の道行振りなどの、始祖をなしたか

とおもはれる「太平記」ハ、俊基東下りは、私などが少年時代に、よく愛誦したものであるが「旅館の燈幽にして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶いて、天龍川をうち渡り、小夜の中山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に……」といふ七五調の、メロヂアスな文句は、いかに大河を横切つて、死にに行く身の悲壯なる光景を、夢幻的に現はしてゐるであらうか。東海道の美しい歴史は、文化の京都から、野蠻の關東へと、發頽して行く筋道となつて開展される、王朝時代のデカダン詩人、業平の東下りは、哀れにも華やかな序幕を明けた、さうしてそれから後に、多くの「東下り」なる悲劇が、殊に多く川の岸を舞臺として、演ぜられてゐるのは、注意すべきことであらう、行きて返らぬ川の姿と、石にせゝらぐ水の啜り泣きと、荒涼として河原蓬の風にそよぎ、蘆花の咲殘する川景色は、さなきだに寂滅爲樂の無常思想を、背景としてゐる當時の人たちに、いひこやるせない心の悶えを起させたであらう、それは大河を前に、うつろひ易い人生の姿を見てあれば、水無月の人の淵瀬の大井川（夢か[illegible]といつたやうな感じに打たれないものはなかつたであらう。

かくの如きは、古くから日本の文學を裏付けてゐる無常觀で、あまりに常套な、又あまりに感傷的な句ではあるが、しかも時の姿、流れの姿は、人の身の上ばかりでなく、川それ自身の榮華をすら、鼠色に暮れゆく川上の、遠山に沈む斜陽のうす黄色の中に、うすら寒い谷の影を、描き出されるやうになつた。

未だ木曾街道に、汽車の出來なかつた頃は、河舟の數二千五百艘、搭載量一萬七千四百石、と唄はれた、下り船上り船の往き交ふ繁昌も、今では火の消えたやうに寂びれ切つて、偶まに川下りをしようとして、河畔に立つ旅人があつても、船が出ないために、空しく失望して引き返さねばならなかつた、私も二度ばかりさうした憂き目を見て、心ならずも傍路へ外らされた。

しかもこの儘に、埋沒させるには、あまりに華やかに、あまりに麗はしく、若々しい川の姿である、Rev. I.O' Roke といふ日本へ來たことのある英國人は、五六年前、倫敦の王立地學協會で、講演して、一およそ全世界に見られ得るほどの川の純美は、凡て天龍川にあつまつてゐる、ライン河を下り、ダニューブ河を下つたが、到底天龍川に及ばない」とたゝへてゐる、私はライン河もダニューブ河も知らないが、天龍川の延長五十四里、その中の三十里は、日本アルプスの屋棟ともいふべき信州を流れて、川幅が最も狹く、傾斜が最も急で、岩石の中でも、最も堅硬な花崗岩や、結晶片岩の中を流れてゐるといふ渓谷であるから、この川の特色としては、かの歐洲アルプスから、地層の走向に沿つて流れ出るローンや、ラインのやうな、水平らかにして、幅濶く、流れの遲々とした谷に比べて、もつとフレッシュで、もつと純粹で、もつと深谷的なものであらうとおもはれる。

しかのみならず、私は憫れなほど、水に缺乏してゐる都市に住んでゐる、水も何米突若干錢と、秤量にかけるやうにして、高い租稅を拂はなければ飲めないばかりか、川水の姿を見ようとすれば、鐵橋の下の、[illegible]のやうに、どす黑く濁つた水を、夕暮の窓に、[illegible]の燈火の釘影で、美しく裝飾して、眺めくらして、はかない欲望を充たすのであるが、さもなければ、偶に古城の御濠の水や、石垣の曲りくねつた黑松の行列や、淀んだ[illegible]、灰色に化けてゐる名ばかりの、青柳の樹影に、透かし見て、水藻や、バッチーマで、青々し淀んだ、汚濁

腐敗した水のおもての青みどろの色に、淡い哀愁の情を寄せてゐなければならない。私たちの祖先は、森陰に眠り、水邊に浴みしたであらう、水を追うて都市に出て來たであらう、もし私たちに水の都を慕ふ情緒を、許されるならば、日本アルプスの雪の山、氷の山で、閉された、厚ぼつたい、森嚴にして冷酷な周圍の中から、きはめて纖細な、しかしながら尖鋭な、鎌の刃を閃かし、この鐵壁を突き通し、縫ひ通し、岩石の心臟から、谷間の狹い喉頭を通過して、深い深い、大きい大きい、太平洋へ出る銀色の川の姿に、見惚れないで何としよう、見惚れるばかりでなく、たとひ一日二日なりとも、絶えず動搖し、奔放する水の線の上に、住まつて見たい、一髪の間を隔てゝ、耳許に水音を聞くだけの、生活をして見なければならぬ。

私は飯田から二里ばかりある、時又といふ船の出るところまで、車を走らせた。

二

渚には空船が底を空に向けて、乾されてゐる、川岸には荷を積みかけた船が、纜つてゐる、私はこの荷船に乘るのである、どうせ積荷を主な目的とする船であるから、無理やりに、荷物の中へ割り込んで、坐るぐらゐの窮屈は、忍ばずばなるまい、何となれば時又から、一日で、天龍の下流、鹿島に達するまでの「通し船」を、傭ふには、非常に高い賃銀を拂はせられるので、私のやうな日本アルプスの貧しい巡禮に、貴族的の豪奢を、要求することに當るからである、私は時又から滿島まで、八里の間を、この荷船に便乘し、滿島から西の渡まで、九里の間は、村落蕭條として、荷船さへ通はないだけ、それだけ、天龍川が怒吼激越の高調をして、深谷の怖ろしい姿が見られるのであるから、その距離だけを、別に船を仕立て、西の渡から鹿島までは、毎日客船が出るさうであるから、それに乘り換へることにしたのである。

時又は川添ひの間の宿で、一寸した料理屋が川端にある、浴衣を着た、白粉剝げのした女が、素足に草履を穿き、川緣に立つて、名古屋訛りの言葉で、船頭に言傳てを賴みながら、手紙を渡してゐる、船はその茶屋の側から出る、これが港であつたら、黒い船、赤い船が、檣や烟突を、林のやうに立たせ、重々しく鎖を引き擦り、錨を卸して、青い海の上と、燒けるやうな赤い雲の下に、飾裝的に行列してゐるところであるが、この奇體な、みすぼらしい川船は、渚に繋がれてゐるここではいかにも[illegible]に、航海者が悍馬を御ふ風なぞは、一向に平氣だといふやうな顔をして、一寸した水のうねりにも、神經をぴりゝと動かせ、今にも水の底を潜りかねない氣配をして、待ちくたびれてゐるけに見える、船體を白く塗つてゐないから、白鳥とは見えないが、又鱗を振る魚とも見えない、船の長さ七間半、幅四尺、深さ三尺ぐらゐで、兩方の舷側には、小さな穴を明け、棕櫚繩で、長さ九尺ぐらゐもあらうかといふ樫製の櫂を、左右に二挺結びつけてある、櫂の折れ目に鐵環でツキをあてたのもある。

船の中には、竹棹が何本となく拋り出されてある、その棹の先には、鐵の環が二つ嵌り、尖端は木槍の身のやうに、細く削つてあるが、岩石を烈しく突き立てると見えて、サヽラか草楊枝のやうに裂けてゐる、荷物を見廻すと、菓子、酒、鹽、饂飩、穀類、提灯などが積まれ、「濡れ物」、「御用心」など紙札を張つたのもある、荷物がなければ、一船に定員二十五人を詰め込むのださうであるが、今は人の方が附けたりなので、四五人の乘客しかなかつた。

薄ツぺらの船板は、へなへなしなつて、コルクみたいに柔らかく、水をいなすから、板と言

つても、帆布一枚で、漂流するやうな氣もされる、一人の船頭は艫に立つて、櫓を操り、一人は舳先に立つて、水先案内の役を務める、外に船頭が二人で、兩舷の櫂を、ボートのやうに水にピタピタ入れると、瀬の音がさらさらと鳴り始める、岸から水中へ辷り込んだとおもふと、物に魂でも入つたやうに、ツイと放れた。

船底がゴブゴブいふ、雨風に搖れた船の、心臓が喘ぎ喘ぎ波を打ち出した、もう水に流れ始めると、先刻感じたやうに、柔らかい帆布でもなく、水を泳ぐ魚でもなく、角度角度が前後兩翼の櫂で決まつて、白い石の土堤、桑畑、荒壁の土藏、屋根の上のゴロ石などが、引いて取られるやうに、すつと後へ退り、川上の伊那山脈は、紫陽花色の、もくもくした雲の下へ捲ちこまれて、强烈な印度青の厚ぼつたい裾も、前なる草山のうしろへ、沒してしまふ。

「筏の行つたあとを通るだなあ「白い瀬の東を下りるだよ」と、舳先からは艫の方へ聲をかける、中の船頭は、鐵の環の入つた竹棹を、水にグイと入れる、眼に見えない强い力で、兩手を引ツ張られ、ぐるぐる引き廻されて、惰力のついたところで、拋り出されたやうに、船はいきほひづいて、滾入るやうに前に俯んで、又ひとうねりの大波を乘つ越すと、瀬の水は白い齒を剝き出して、船底をがりがり嚙み始める、水球が飛び散つて、舷側は平手で、ぴちやぴちや叩かれる音がする、腰の廻りへ、袴のやうに茣蓙を着て、鮎を釣つてゐる人が、水沫の中で搔き消されて、又しよツぱい顏が浮ぶ。

「親殺し」といふ崖の下で、水は油を流したやうに、澄んで、今までのさわぎは忘れたやうに、けろりとぼけてゐる、「礒へついて廻したぞ」と、艫の方から聲がかゝつたが、夕立のやうに、水がざわついて、小さな水球が、霧雨となつて飛んで來たので、もう名高い天龍峡に入ツて來たと知つた、龍角峯とか、何々石とかいふ岩石が、水ですり磨され、覇王樹のやうに突ツ張つて簇がつてゐる、どの石もみんな深成岩と言はれてゐる花崗岩で、地殼の最下層の、岩骨が尖り出て、地下の神經を剝き出しにしてゐるのである、岸と岸との間は、おそらく十五米突ぐらゐな距離しかあるまいが、この並行線は、いつまでも一致しないで、喰ひ合はうとしては離れ、離れては又曲りくねつて、その間を玉蟲のやうな、翡翠のやうな、青葡萄のやうな水が、すうい、すういと流れ、表をかへすと、雪のやうな白い裏地が見える、崖の骨に喰ひついて、萱草の花が火を燈したやうに、黄色く咲いてゐる、船はもうハムモックのやうに、空と水の境を搖られる。

峽の出口の、鵠が淵へ來ると、騷ぎくたびれた水は、しんとして、靜まりかへる、それもしばしで、オハチへ來たころは、渦まく水が强い呼吸で、吹き分けられたやうに、落ち込みが出來て、浪の中に二三尺の穴が明く、船はその中へ吸ひ込まれさうになつて、大岩の曲り角へと突つかけて來ると、竹棹が崖へ飛びついて弓のやうにしなふ、一人の船頭は櫂で舷をコトコト叩いて、上り船に信號をする、ざんざの水音と、コトコト叩く櫂の音が、入り亂れるが、その櫂の音は、力のない音響の一滴に過ぎなかつた、私はこの櫂で叩く音を、簡單な上り船への信號とのみ見たくない、チェンバレイン氏が「日本のアイノ」に描かれたやうに、水中の惡魔を、追ひ退けるため、水を追うて川を下りたといふおまじなひが、今でも無意識に傳はつてゐるのでは、あるまいかと考へた。

コアゼの大瀧へ來たときは、どんどろ水が、滾り落ちて、船は麻痺した身體が、動かない手足を、じたばたさせながら、何とも仕方ないやうに、立ちすくんでしまふ、舳先の船頭が、手に

擲て舞はす櫂は、蜻蛉の薄翅のやうに、鮮やかにキラリと光つて水を切つても、船は水底の、世にも怖ろしい執念の力で、引き留められるやうに、行き惱む、中たる船頭か、木彫の仁王のやうな、力瘤の入つた筋肉を隆くして、丁字櫂を握つたまゝ、踏ん反り返り、合掌に引いてゐるのが、千貫の大岩でも、水底から引き上げるやうに力瘤が入る、水と船との死物狂ひの鬪ひを、小面の憎いほど知らん顔して、煙管を横銜へに、竹の網を張りながら、こつちを瞰下してゐる男がゐる。

竹棹で大きな白い岩を突かうとした船頭は、帽子を水の中に落して、あつと言ふ間もなく、墜落つたやうに、黒い點となつて、引ツたくられてしまつた。

この邊の川は、むかしは大岩だらけで、よく船を打ち割つたものださうだが、今でも俵石などといふ巨大な岩塊が、水の上へ背を露はしてゐる、朝に、一本の背を拔かれ、夕に一本の角を折られるやうに、岩石は切り開かれて、川路は作られても、洪水や風雨が、後から後から、大小の石を轉ばして來ては、一水もやらじとやうに、邪魔をする。

大久保の長瀞へ來たときは、水は湖沼のやうに、穩やかな、圓かな夢でも見るか、ひつそりして、やんわりと大様な龜甲紋が、プリズムの斷面を見るやうに、青硝子色をして、のんびりとひろがつてゐる、乘客たちは、安心したやうに、濡れた袂を絞るやら、マッチへ火をつけるやらしてゐる、銜へ煙管に膝を抱いて、ポカンと青い空を見てゐるのもある、竹棹の先の鳶口を、岩に引つかけ、船を右舷に傾斜させて置いて、船底の片隅を、溝をなして流れる閼伽水を、短い汲桶で、汲み出しては、川へ抛りこむ。

大久保といふ村落のあるところを過ぎて、峽間がひらけたかと思ふと、あまり高くはないが、日本アルプス系の一峯が、遠い空に聳えてゐる、おもひ出せば、或時は夕暮の夏の、赫々たる入日に、鋼線が燒き切れるやうな、輝やきと光澤を帶びて、燃え榮つてゐたのも、是等の山々であつた、その山の白い頭を、いや白くして、白金の輝やきを帶びてゐた氷雪が、日の光と、生命の歡樂に、どよみを作つて、房々とした黒髮の長い處女の森を通り拔け、何千年となく無辜の生靈を葬つてゐる、陰慘たる洞窟から、滲み出て、異教徒のやうに、反抗の叫びを高くして、放浪兒のやうに、刹那々々の短い歡樂を謳歌して、幾千萬の水泡の形にか、山と山とに圍まれてゐる狹い峽谷を、我先きに、先を爭つて通過してゆくのである、一分一秒は、白く泡立つ波と、せゝらぐ水の音に、記錄されてゐる、凡ての雰圍氣が、みんな水に化けてしまふかとばかりに、一團の雲とも、水蒸氣ともつかぬ塊りになつて、吹つ飛んで行く。

谷川の水であるから、海にあるやうな深い水の魔性はないかも知れない、けれどもまた海の水のやうに、半死半生の病人が、寢たよろぼひて、渚をのたうち廻つたり、入江に注ぎ入る水に、追ひ退けられたりする甲斐性なしとは違つて、冷たい空の下でも、すこし絹のやうに柔らかに、青色の火焔のやうに透明に、髮の毛までも透き通るまでに晶明に、地球上最も堅固な岩石の、花崗岩をすら、齲齒のやうにボロボロに缺きくづして、青色の光線を峽谷に放射し、反射して、心のまゝ、思ひのまゝに、進行する見事なる峽流の姿は、豪奢な翼を精一杯にひろげて、烈々たる日光の下で、王者の舞ひを舞ふ孔雀の威よりも、大きく見える、私は水の青色と、絶え間のない流動の姿とで、沈鬱な氣分を壓伏され、神經を靜かに鎭安された

やうになつて、一枚のハンケチを顔の上にかぶせ、仰向きになつて、暫らく青空を見つめてゐた、それも眩しくなつたので、瞼へ視線を落すと、崖には山百合の花が、白く點々として、芳烈な香氣が川風に運ばれて、鼻腔へ入る、秋は紅葉が赤くなると、どんなにか美しいかと、土地の人らしいのが、自慢話をしてゐるのを、聞くともなく聞いてゐるうちに、自分ながら眼睛が、あやしく散大するやうで、凡ての物が、面紗を透して、遠く小くなり、感覺があるのか、ないのか解らぬほど鈍くなり、恍惚として、夢ともなくうつゝともなく、寢てしまつたが、ちらりと光つた青色の水の姿で、目が冴えて、起き上つた。

川はいま段落をして、船が引きずり卸されるやうに、下向きになつたかとおもふと、船頭たちは櫂の手を休めて、無抵抗主義に乘り越える、その時は爪先が立つて、前へ傾めるやうな氣がして、人をは思はず、舟の上の油紙を引き寄せ、頭から下へ、蒲團代りにかけながら、水面の恐ろしい傾斜を、まざまざと眼前に見せつけられた、「一寸合符といつて、難所でさあ」と船頭は平氣である。

つゞいて[illegible]の大難所に來て、水の[illegible]ところを避けて、或は右へ、左へと、一個の肉體を、自由自在に運動の綱索で、調節させるやうにして、石の線を描いたり、蛇の舌をへろへろさせるやうに、突進して、鋭く、強い、速力を出したりして、水の音樂と、姿態と、拍子とに、合奏させてゐたが、八間岩といふ大屏風を引き廻して、峡流も横ざまに線を引いたやうに、一頓して落下する、もう峡流といふより、飛瀑と言つた方がいゝ、船頭はこゝで一人殘らず、客を陸に上げてしまつた、ビショ濡れになつても、かまはぬと最後まで、殘つてゐた私をも、追つ立てるやうにして、陸上の人としてしまつた。

空に引き渡した鋼線に縋つて通ふ渡し舟を、見ながら、私たちは、河原の石コロ路を、二三町も歩いた、舟を下りたも、船の中へ置き去りにして、尾ツ端折になつて、炎天の焼石の上を、腫れ物に障るやうに足袋裸足で歩いてゐる乘客もある、河原には砂を落ちて白くなつた萱草の花の蔭から、蜥蜴の這ひ出す影が、暑くるしく石に映る、今夜の泊りの「滿島まではまだ四里半もありやすー」と、道伴れになつた同船の客から聞いて、傘をさしかけ、磧にしやがんで、下つて來る船を待つ、河原に焚火をした煙と見えて、焦げた薪や、灰が散らばつてゐる、溺死人でも、あつたんぢやないか知らと思ふ。

暫らく停まつて呼吸を入れてゐた船は、このあを目がけて、走つて來る、難所中の難所といふ、やぐらの瀬へかゝつて來たときは、波から三尺ばかり船體が乘り出したと思ふと、水煙が噴水の柱のやうに立つて、船頭の黒い立像が、水沫の中から二三度浮び出た、火影に映る消防夫の姿のやうに。

乘客一同は又迎へられて、舟中の人となつた、槇の渡しを横に見て、川田、[illegible]の二村のあるところで、乘客は大抵どつちかの村へ下りた、[illegible]、[illegible]が岸に揚がつた、村近くなつて、峡流も静かになり、水を搾る水車臺も、どうやら呑氣らしい、御供といふ荒村にしばらく船をとどめて、胡桃の大木の陰になつてゐる川添ひの、茶屋で、私たちは晝飯を食べた、下條村の遠州街道が、河岸で白い路を一條、楢の中を通つてゐる、こゝで又殘りの客があらかた降された。

今まで峡流には珍らしいほど、屈曲の少なかつた天龍川は、こゝで急な瀬と、深い淵を挾んで、大屈曲をしてゐる、崖は漆喰で固めたやう

に、石を插みつけ、それに根を下した紅葉の一枝が、紅を潮してゐる、日はすこし西へ廻つたと見えて、崖の影、峯巒の影を、深潭に涵してゐる、和知川が西の方からてら〳〵と河原を蜒つて、天龍川へ落ち合ふ。

兩岸が圓い石を束ねて、水はその中に狹められて流れてゐる、白壁の土藏が、柳の樹の間から、ちらほら見える、船からは、酒樽を渚のほとりへ揚げ、船頭が口へ手を當てゝ、オーイと呼ぶ、岸の上から人が覗いて、何か言つてゐる、船頭は今朝の女から、言傳つた手紙を、樽の上へそつと置き、小石を重石代りに乘つけて、又船を川中へ押しやらうとすると、河原について、瀬が淺いので、がりがり言ふばかりで、動かない、二條の細引を舳先に括りつけ、二人して水の中へ入りながら、深いところまで船をおびき出して、動き調子がついたときに、手繰りながら船に躍り込む。

川はS字狀に屈曲して、淺瀬と深淵と落ち合つて「捨栗の大曲り」を行く、左岸の峯は雲つくばかりに立ち上り、日の光も森にかくれて、燻んだやうに暗く、森の中には、枯木が巨大な動物の骨のやうに、散亂してゐる、崖から庇のやうに突き出た大石の上には、大木が根ぐるみ乘りかけてゐる、冷たい風が、川水を吹いて、裾から腋の下、背から襟へと、駈けめぐつて、そこら中をくすぐつて、振り返る姿を川波に殘して、通りぬける。石から石の上を飛びめぐる鶺鴒と筋交ひに、舟は兩岸の迫つた間の急湍を、櫂を休めて悠々と乘つ切る、川には筏に組む材木が漂ひながら岩に堰かれてゐる、王子製紙會社の紙の原料で、中部の支社で製するのだといふ。

右岸から和田川を併せて、船はこよひの泊りの滿島の土堤を仰ぎ、高い岸には屏風に張り交ぜた色紙のやうな畑を見るやうになつた、ふと眼の前にそゝり立つ大きな岩に、吸ひつけられさうになつて、櫂を斜に構へ、岩の根をコヂリ上げるやうにして、やつと放れたが、岩石が目まぐるしく多くなり、瀬が急になつて、村とはいへ、船着きがよくない、やうやう船を繫つて、私は船頭におぶはれて、岸に着いた。

白い土藏が、山腹に見えて、水車がゴト〳〵舂づいてゐる、鷄が餌を搜してクッ〳〵啼いてゐる、傾斜のゆるい坂路の村の中には、荒物屋があつて、夾竹桃の花か、その庭に眞ッ赤に咲いてゐる、導かれたのは村長で、旅宿屋を兼ねた田村爲輔といふ人の宅で、離れ二階の廣い座敷へ通された、良材を惜しげなく使つた建築で、疊も新しく、床の間には、日本畫の額に、美しい草花が投げ込まれ、鹿の角の飾物や、金蒔繪の硯箱が置かれてある、靜かな庭には、杉や、樅の樹や、柳のしなやかな枝振りなどが、今までの動搖した氣分を鎭めてくれる、それに天龍川は深く落ち込んでゐるので、もう二階からは見えない、浴衣に着換へ、欄に倚つてると、家の背には、峯を負ひ、眼の下には石を載せた板葺家根が、階段のやうに重なつて、空地には唐もろこしを縁に取つた桑畑が見える、苗代田が青く光つて、水はその間を、縱橫に流れてゐる。

谷の中が、黄な臭いやうに、ボーッと明るくなつたとおもふと、高い空を浮ぶ雲が、夕日を受けて、鈍い朱に染まつた、蜩が、時間を一秒一秒刻み込んで、谷の中へ追ひ込んでゆくやうに、キ、キ、キと啼き落す、杉林の一本々々の樹が、どちらから寄るともなく、塊まつて、黒い法師のやうになつて、囁き合つてゐる。

夜になると、こつちの岸と、向うの岸の中腹に、燈火が螢火のやうについて、神寂びた寺院の迴廊か、大森林の秘奧にともす法燈でもあるかのやうに、ひつそり閑となつて、その間

に藥研のやうな天龍の大峽谷があるともおもはれない。

三

朝霧が山村を罩めて、鷄の聲が、霧の底から聞える、黄色い南瓜の花に、まだ夢が殘つてゐるかして、寢惚けた姿をしだらなく大地に投げ出してゐる、ぼッと白壁が明るくなる、森がうつすらと、煙つぽい綠を、向うの山の懷に、だんだら染めに浮かせる、起き上つて支度をする頃は、方々の家から、輕い炊煙が立ちはじめた。

昨日は時又から、この村まで八里の間を、荷船に便乘したのであるが、その船はもう南へは下らないので、特別に一艘仕立てさせ、西の渡まで、九里の間を下すことにした、高價を拂つて買ひ切りにしたのであつたが、船へ來て見ると、旅商人が二人ちやんと乘つてゐる、のみならず人の行李、鍋、釜、白樺の皮、薪材まで、幅を利かせて積み込んである、山間の船頭には、昔の雲助のやうな、押の強い風が殘つてゐて、買ひ切つてあらうが、何であらうが、一人でも餘計に乘せて、賃錢を取れるだけ取り得としてゐる、併し先を急ぐ旅であるのと、重荷をしよつた旅商人に、苦勞をさせるでもなからうと思つて、強いて咎め立てもしなかつた。

滿島を放れるころ、朝日が東山の端を放れ、水の光が艶をもつて、石の傍を白くちよろちよろ走るのが、魚のやうである、ふと見ると、西岸は日光を浴びて、樹の影が水に落ち、とろりと澄んだ濃藍の長瀞に、樹の梢は、すくすくと延び上つて、水鏡をしてゐる、川はひつそりと音もなく、蒸々と立ちのぼる峽谷の朝霧の底を、櫓の音が、ギイギイと靜かにひゞく、森の下蔭を通りぬけ、淺瀬の上を乘越して、信州から遠州境へ近くなつて來た。

ふり仰げば、北方の綠に包まれた山々は、遠山川が深く浸蝕してゐるために、谷の通路に當るところだけが切り離けたやうに低く開けて、北東に日本南アルプスの大主系赤石山脈の、そゝり立つ鉅鐵の大階が、頭を下界に封じて、たゞ上の高寒は、はや冬のやうに、透明凜烈の青みどろに澄みわたり、透きわたつてゐる虚無の中に、鋭角線を引き伸ばして、強い鋼筆で、透明な硝子板に傷をつけたやうに、斷然と大波を打つてゐる。

左岸に紫嵐の山村を眺めながら、いつしかこの地方特有の領家片岩の露出區域に、峽流を南へ南へと導いて、水神の大瀧にかゝる、渦と渦とが、ぐるぐるめぐりに嚙み合ひ、大氣を含んだ透明の泡が花瓣のやうに、むらむらと水底から湧きあがり、白く尖つた波が、ざわざわと鱗光りに光る中を、櫂を休めた船は、爬蟲類のやうに、濡れ色になつて、するりと乘り上げては、ついと下る、一方は石で、一方は水、急湍と靜流が、衝き當り、波頭と波底との兩方の點の間に、凹み谷が出來て、平川の波紋が、網を打つたやうに、のんびりとひろがり、それを中心にして、周圍から白い尖波が、爪立つやうに小刻みに擦り寄つて、二三尺の高さの、小さい夕立となつて、水柱がザアと音して、頽れ落ちる、その中を聳立てる船の姿は、沙漠を走る駝鳥のやうで、乘つてゐる私の頭の中では、せゝらぐ水につれて千本の小さい針が、さらさらと搦み合つてゐる。

えいえい聲に切り抜けると、小瀬の急灘が待ち設けてゐる、白い旋波が、上下運動を起して、岩石を乘り越え、二三尺も帆檣を引いて、跳舞する中を、船は舳を垂れるやうにして乘り入れると、[illegible]ともすると、船に添つて大浪の走ること、一度二度と、波頭の自由の躍りか、自[illegible]のやうに[illegible]、逆流する波の

速度と、直航する船の速度とが、一つに縺れて、船は波頂の間に動揺するところを、黄蜂がふはりと舞ひ出で、波頭を掠めるばかりに低く、水に影を映して、又ひらりと飛んでゆく。

眼の前を走りゆく両岸の光景は、川柳が押し流されて、河原へ仆れてゐる……蔦の三ツ葉の細い莖か、大石の上を捲いて、一端が川に垂れかゝつて、又反曲して空を摑まうとしてゐる……崖の庇石には、ツツジが生えてゐる、川へ轉けた石には、青苔がベッたりこびりついて、蘭科植物が、うつすらと生えてゐる……と見る間に、天龍川第一の難所と呼ばれた新瀧の荒瀬にかゝると、川とは言へない大波が、むつくり起き上つて、轟轟たる海潮音のやうに鳴りはためき、船は石と石との間に挾みつけられ、右卷左卷の大波小波の中で、押迫の力を失ひ、漏斗の形をした中央の滅り込んだ波の底に落ちて、胴中から両斷されるかと、冷いやりさせたが、さすがに海底と違つて、吸引力の無い淺瀬だから、又吐き出され、浮び上つて、ほつと一息吐いたかとおもふと、二三反するすると押し流された、それからしばらくは水の靜けさ！

こゝなる東岸は、富島といつて、さしも日本のハミール高原、本州を縦斷する日本アルプスの雪山があるために、日本の屋根の中心となつてゐる信州の、最南點であり、最低地でもある、海面からは僅みに二百米突の高さで、西岸は三河との、東岸は遠江との境界になつてゐる、船頭どもは、こゝまで來て、大役を濟ませたやうに、帶締め直し、身を舷側にはみ出して、身體の重量で、船を一方に傾斜させ、閼伽水を酌み出して、船を輕くさせる。

富島からは略ぼ直流して來た川も、佐太と粟代とで、二回の屈曲をする、その間の高瀬では、川浪が白馬の鬣を振ひながら、船の中へ闖入して來た、水珠が散彈のやうに炸裂し、霧だらけになつたか、船は身を反らして、辷るやうに乗り越える、山國の信州を出たといふことか、直ぐにも平地か、海岸へ到着するやうに、思はせたが、そゝり立つ崖は、次第に高くなつて、水面との距離が遠くなり、石は海豚のやうに、丸い背を出し、重なり合つて水にひたつてゐる、峽谷が大きくふくれて、岸の上には、杉林がこんもりと茂つてゐるかとおもへば、赤松が直射する烈日の下で、熱病でも煩つたやうに、皮膚が焦げてひよろ〳〵と立つてゐる、平原の地平線も見えず、海の水平線も見えないか、腕力にも、何にも依らないやうに、水と船とは、同一方向に流動運動をつゞけてゐる、空を見上げると、鋼線が両方の岸に張りわたしてもつこに入れた荷物が、揺られながら宙乗りをしてゐる、片側を覗いて渡舟に腰をかけてゐる渡し守の老人がゐる、あの人はあゝやつて、川添ひの町のやうに、一日水ばかり見て暮らしてゐるのだらう。

大谷、河内などいふ山村を、両岸に見たが、未だ人の町へは遠い、川水は肩で呼吸をするやうに、ゴホゴホと咳きあげて、大洞門の急灘にかかる、峽谷は一層に狭くなり、波の山が紫陽花のやうに、むらむらと塊まつて、頭を白く尖らして、側から側から隆起する、船は馬の背を分けるやうにその間を通行して、ふりかへれば、雲のくづれるやうな水の煙幕を開く、長灘だの、大瀬だのを、亂流の間に通り抜けて、イオリが瀧へかゝると、峽谷は塞まつて、水は大振動を起した、遠くの空には高い峯々が、天を衝いて、ぐるぐると眼の前を回轉する、崖の上からは、石が覗いて、峯の上へは白銀の雲が、鶏冠立ちに突つ立ち上つて、澄みわたつた深淵の空を掻き亂してゐる、長い峡流に、村落もなければ、人家もない、時々色の黒い土人が、裸

で鳶口をかつぎながら、胸まで水にひたつて、漂流する材木を、掻き寄せてゐるのを見るばかりである。

　上り船が一隻、三人の船頭が、崖の下をしがみつくやうにして、綱を肩にして引き上げ、一人が棹を弓のやうに撓はせて、遲々として水に逆つて來たが、私の乘つてる船と、行き違はうとして、ひどい波におつかぶせられ、向うもこつちも、ヅブ濡れになつて、兩方の船が、急な角度で傾斜した、向うの船頭がポツリと黑い點になつて、亂濤の間に小さく立つてゐる、振り返ると、もう船も人も、影も形も見えずに打捨てられた、波は白い生毛のやうに、微かに彫刻した象牙のやうに、柔らかく泡立つて、大石の下の窪みに、逆さに落ちて、渦を卷き、反流を起したかとおもふと、波浪の特質の前進運動を沮められて、船はあふりを喰ひ、一二度振り迴される、「何しろ山室の瀧せえつて、遠州一の灘所だあね」と船頭は後で話した。

　灘をこえて、水が靜かになると、兩方の岸を見迴すだけの餘裕が出てくる、河原には材木を伐り出す小舍がある、岩石は上流の花崗岩と違つて、小さな褶曲や、白や褐色の岩脈が、横に帯をしめたやうな、筋を入れたのが、美しく見える。

　湯島で大屈曲をしてからは、松島から中部まで、直下といつてもよかつた、東岸には中部の大村があつて、水際は河原に、青々と茂つてゐる、裸體に炎天よけの絲楯を衣た人足が、筏を結んでゐる、白壁の土藏が見える、紺の香のするばかりに、新らしく染め拔いた暖簾をかけた荒物屋が、町に見える、積荷はみんなこゝで揚げてしまつて、水洩れの出來た船底には、棕櫚繩をちぎつて、當てがひ、石で叩きこんで修繕をする。

　川は中部の村を、包圍するやうに、北の一角だけを殘して、三方を絎け、もう大分開けた河原の中を流れる、「豆こぼし」といふ灘は、水が急なので、二挺の櫓を一つに合せ、船頭二人の力をこめて取り縋るやうにして、漕いだが、それでも東岸には、一髮の道が通じて、旅人が通つてゐるのが、ふり仰がれる、その上に青緑の山は高くそびえ、川は勾配を急に、杉の培養林のある山を匝る、久根の銅山が見えて、その銅山を中心に生活してゐる人たちの家が、重なり合つて、崖腹に巣を喰つてゐる。

　西の渡の簇々とした人家を崖の上に仰いで、船を着けた、滿島からこゝまで九里の間を、三時間半。

　糀屋といふ旅籠屋に、草鞋を釋いて晝食を濟ました、天龍川もこゝからは、先づ下流の姿になるので、交通もしげくなり、下り船も、毎日便宜がある、船を乘り替へるため、暫らく川に臨んだ茶屋で、時間を待つてゐると、八反帆を南風に孕ませた上り船が、白地に赤く目じるしを縫ひつけて、二帆三帆と、追つかけ追つかけ、上つて來る、久根銅山から、銅を積み出すために、來るのだといふ、さうしてその帆には、太平洋の海氣と鹽分が、一杯に含まれてゐる、南へ來たのだ、太平洋が近くなつたのだ、桔梗色の黑汐が走る八重の海路が、川の出口に横たはつてゐるのも、もう遠くはあるまい、日本アルプスおろしの北風は、冬でももう、この地までは來ない、私は山から遁れた、たしかに遁れた、しかしながら私は、戀々として悲壯の谷なる天龍川の上流を、振り返り、振り返り見ることなくして、次ぎに出る客船には乘れなかつた。

（大正三年七月）

ヨセミテ谷と上高地

ヨセミテ溪谷を、上高地に譬へていふならば、上高地の德本峠に當るところに、インスピレーション・ポイント（海拔五三九一尺）かもしくはグレシア・ポイント（七二一〇尺）であらう。兩方とも花崗岩の絶壁で、德本峠附近のやうな、古生層地に比べると、もつと明るい感じがする、德本峠から、上高地盆地や、梓川の碧流を見下し、穗高嶽の大障壁を仰ぐが如くに、グレシア・ポイントからは、コセミテ溪谷（三九六〇尺）の白砂と、マルセッド川の細流を見下し、ハーフ・ドーム（八八五二尺）の杓子頭のやうに平べつたい半面と、白象の背をかゞめたやうな厚ぼつたい圓味のある半面を、肩と摩れるばかりに仰がれる、しかもハーフ・**ドームの背後**を迂回して流れるマルセッド谷の上流が、氷河谷の特徴たるＵ字形にゑぐられて、そこにいくつかの「吊り懸け谷」の連續が、段階をなして、例へばネヴァダ瀑布から、ヴァアナル瀑布まで、ひた下りに下つて「巨人の梯子段」を立てかけた形は、德本峠からの上高地に見らるべくもないが、槍ヶ嶽から穗高嶽につらなる大障壁に、力強く食ひ込むところの、岳澤、槍澤、横尾谷の「吊り懸け谷」を、假に德本峠の方面にひん向けるとしたらば、似寄つた風景が出來るであらう。

まことに氷河遺跡の研究地として、最も入り易いところは、シエラにあつてはヨセミテ谷であり、飛驒山脈にあつては、上高地の高地帶であらう。おもしろいことに、二つの溪谷とも、かつては溪谷氷河に充たされたのであらうけれども、その證跡はあまりに鮮明といひ得られない。上高地に、氷河の擦痕ある角礫、氷河の乘り越えた跡の圓頂丘、河童橋附近に散在するといはれる終堆石は、近頃の氷河研究者によつて、注目されたところであるが、その中で、比較的、明かであるのは堆石地形であるらしい、ヨセミテ谷でも、一目分明に、氷河の跡と判ぜられるのは、入口のエル・キャピタン岩（七五六四尺）の下を、半圓陣を作るが如くに、マルセッド川をはさんで吻合する終堆石で、[illegible]と、[illegible]花[illegible]、[illegible]花白花で、色付けられる鏡ヶ池（円）九六尺）を遮る堤防狀の、[illegible]堆石である。これ等を除けば、溪谷河床は、何分花崗岩の細砂に埋沒されて、谷底は裸の基礎岩石を見るに由なく、兩岸の障壁も、氷河の擦痕を認めることが出來ない。この意味において、上高地も、ヨセミテも、溪谷そのものの氷河遺跡は鮮明といひ得られない、しかして上高地峽谷を出外れた梓川は、たとひヘットナア石なるものの發見があつたにしても、氷河地形と見ることが出來ない如く、ヨセミテも、エル・キャピタン岩の入口を離れたマルセッド川となつては、幾分か微弱なりに、擬似の氷河地形を存するに止まる。

併し谷頭にさかのぼつて、ヨセミテ谷からマルセッド川の源流に沿うて上れば、ヴァアナル瀑布にしても、一段と高いネヴァダ瀑布（五九一〇尺）にしても、更に高所にまたがるリットル・ヨセミテにしても、氷河の痕跡は、明白に、鮮新に、樹の皮にナイフで、姓名の頭字でもほりつけたより、易々と、有らゆる地形に力說されてゐる。それは上高地において槍澤、岳澤、横尾谷、穗高嶽の高點、東南方面から槍ヶ嶽の東面にわたる氷蝕地形の、鮮明なると

りも、より以上である。

そのマルセッドの源流へは、私は騎馬（但しポニイ）で二回、徒歩で一回さかのぼつた、騎馬で登つたときは、半世紀前までは、ピストル一挺をポケットに入れ、加州の荒野を、肥馬をどらせて横斷した草分け時代の、バイオニーアの姿を思ひ出して、何だか私自身も、ジャック・ロンドンや、ブレット・ハアトの小説中の人物になつたやうな氣がした。ヴァアナル瀑布の落ち口も、瀧壺も、花崗の大岩盤で、萩の花がくしけづるやうに、髮の毛にたれた崖頭から、ポッキリ折れた岩壁を、まつしぐらに蹴立てた瀧の水が、三筋ばかりの、大綱になつて、刃金色に光りながら、落ちてゐる、なほ少しく、溯ると、水は俄かに淺くなつて、白日の下に眠つてゐるやうな靜けさ、神經過敏な水のおもての、さゞ波は消えて、跡を止めない。

ネヴァダ瀑布へ來ると、セコア屬の、針葉樹が五六本、生えてゐる崖腹から、瀧の水は、ゴボゴボ咳き込むやうに、たぎり落ちて、繁吹の球體が、そこら一面に、眼も開けられない煙を立てる。ヴァアナルからネヴァダへ上る間は、際立つて段階が二つ、山架となつて連續してゐる。それは岩石の硬軟の度合によつて、花崗の彎曲した節理と、縱裂の節理に付け入つて、氷河流下の際に、岩石を食ひ取つたもので、ヨセミテ峽谷の奇景を形づくるところの、北ドーム（七五三一尺）半ドーム（八八五二尺）ローヤルアーチ（八八〇〇尺）のやうな編笠式の圓つこい穹窿は、瀑布附近の岩壁にも、往々露出してゐる。それと共に注目を惹くのは、瀑布の流れに沿うて斜に步道を作る岩面である、まるで都大路の塗りかためた街道でもあるやうに、すべつこく光つてゐる。そしてその上を、輦車が進行した跡でもあるかのやうな、巨大な重量で摩擦した痕跡がある、古代の大氷河の軌道だ、それは鳥が飛び、魚が泳ぐと同じ必然性を以てはひ下りたのだ、紀元前のローマ時代に、英國に亂入したジュリアス・シイザアの兵士が、つけた道路が、未だに殘つてゐるやうに殘つてゐるのだ、氷河の通行後に印した岩石面の、すべつこさや、深い溝や、鋭い爪の引ッ搔きや、堆石のモザイクのはめ込は、人間道路の燈火、垣根、海面の浮標、燈臺などよりも、一目瞭然にそれと知られる。併し上高地では、私の知る限りでは、かういふ遺跡は、索め難いやうに思ふ、が、ヨセミテ谷から、更にテナヤ湖（八一四六尺）を經て、ツウラムネ高原（八五九四尺）へと分け入るに從つて、至るところ氷河の遺跡に充ち滿ちてゐる。飛驒山脈中で、こゝに比ぶべきところは恐らく雙六池から蓮華嶽（三俣嶽）附近にわたるところであらう、かのアシシの舊都に入るものは、一またぎに、中世紀の昔に復歸した思ひをするといふが、ヨセミテ谷の源頭にさかのぼれば、一足飛びに、氷河時代の昔に人間を投げ入れる。

以上に比較する如く、ヨセミテと上高地の氷河地形が、同樣でないまでも、略類似してゐて、しかも兩方とも、花崗岩質で、印象を鮮新に保存してゐるところは、氷河の解脫期が、さまで遠い以前で無かつたことを物語つてゐる、即ち「歐洲における氷河時代」「北米における氷河時代」と同じく「日本における氷河時代」も大抵同一時期に出來たものと、推測される一材料にはなり得られないだらうか。

（大正十五年八月）

菊川

枯れた芒と笹の、もや〳〵茂つてゐる崖の下を、水がちよろ〳〵流れてゐる、赤黑い土を踏んで爪先が急に下を向く、鶯が啼く、青木坂といふさうだ。

小さい板橋を渡ると、そこがもう菊川の宿である、炭を賣る家、毒々しい程な、赤い提灯を描いた看板が、畔道の曼珠沙華のやうに鮮やかに目につく、軒に切干のやうなものを下げてゐる家が、二三軒ある、矢の根鍛冶といふのが、名物であつたさうだが、今は鍛冶屋などはどこにも見當らない。

宿の中ほどを、横に斷つて、菊川が流れてゐる、大きい角張つた石が、二塊、川の央に横になつて、その陰の水は、蒼白く噴泊してゐる、川幅も狹く、水も淺く、洲が川の央に堆く露はれて、枯芒が一束ほど、その上にぼうぼうと生えてゐる、麻のやうな草が、水底に平つたく漬けられてある、橋の袂に直ぐ人戶があつて、岸に畑が作られてある、それから又低い瓦屋根が街道へとつゞいてゐる。

宗行卿の泊つた旅館は、その邊であつたらう、宗行卿より二十二年の後、仁治三年（一、九）二年）の東關紀行（光行）で見ると、「その家も尋ぬるに、火のために、燒けて、彼の言の葉も殘らぬ由申す者あり」とあるから、現今では家の跡すら解りやうも無い、私はこれが目的で來たのであるから、目的の手前に對しても、他所々々しい素振が、出來かねるやうな氣がして、橋の上に立ち佇つて、川の水やら、塵芥の棄てゝある岸を見た、橋はペンキ塗の生々しいもので、近所の屋並も、新らしい白木か使つてある、新宿附近の新開地へでも、往つたやうだ。

此一筋の細い流れが、日光や雲を映すやうに、哀しい人や、苦しい人の末期のおもひを印刻したのだ、さうして暗黑史上の、拭ひ難い腐蝕版になつて、今でも暗い影のさすところであると思つた――が、ペンキなどを塗つて、なまじひに新らしがる悲慘の大なるには若かない、亡び行くものをして亡び行く美しさに殉はしめよと、私は心の中で叫んで見た。

橋の側の家では、軒の下に蓆を敷いて、村女四五人、膝を並べて日向ぼツこをしながら、楮の皮を剝いでゐる、先刻の切干や麻のやうなものは、この楮であらうと解つた、何にするかと聞くと富田邊の註文を受けて、茶の箱紙を漉くので、この家は紙漉の商人ださうで、楮のことを「カゾ」「カンズー」などと呼んでゐる、ここ、荒寥とした、楮を剝いて茶紙を作る部落を瞰下して、崖の上の新道には、文明の勝利と侵掠とを宣傳する電信柱が、西を指して行列してゐるのが仰がれる。

又急坂を上る、栗ケ嶽が見える、澗水へちよろちよろ落ちて、路傍の濕地には、款冬の薹が立つてゐる、曲りくねつて、その坂を登ると、牧の原といふところに來る、高臺は悉く茶畑である、梅の花は末になつて、椿の花も土に落ちてゐる、小夜の中山にてと前置して「馬に寐て殘夢月遠し茶の烟」と例の元祿の放浪翁が言つたのは、この邊のやうな氣がする。

下り坂とならうとするところから、金谷の宿と大井川が見える、瓦屋根が並んでゐる間を、一髮の東海道が通じてゐる。川原は灰色に濶く開いて、白い絲のやうな水が、幾筋となく縫つてゐる、松林が西岸に多い、川上の白峯山脈は、前列だけ山の姿も見えるか、上層の山となるだけ、曇りの空で、掻き消されてゐる。

坂の下り路には、石を敷いてある、新道と舊道の合一點へ來た。　（「東海道名所記」より）

御嶽山の兩面

霧の旅

北國の海

海洋の旅

吉江孤雁

御嶽山の兩面

八月の初旬、信濃の高原は雲の變幻の最も烈しい時である。桔梗が原を圍む山々の影も時あつて暗く、時あつて明るく、其綠の色も次第に黑みを帶びて來た。入日の雲が眞紅に紫に或は黃金色に燃えて燦爛の美を盡すも今だ。此原の奇觀の一つに算へられてゐる大旋風の起るのも此頃だ。

曇り日の空に雲は重く、見渡すかぎり綠の色は常よりも濃く、風は稍々濕つてゐるが路草に置く露が重いので、まづ降る恐れはなからう。鹽尻の停車場から原の南隅の一角を掠めて木曾路へ入つて行かうとするのである。道は舊中仙道の大路で極めて平坦である。左手には山が近い、山の麓には小村が點在してゐる。右手は遠く松林、草原が斷續して、天氣の好い日ならば其果てに松本の市街が小さく見え、安曇野を隔てゝ遠く、有明山、屛風嶽、槍ケ嶽、常念ケ嶽、蝶嶽、鍋冠山などが攢簇して、山の深さの幾許あるか知れない樣を見せてゐるのだが、此等の山影も今日は半ば以上雲に包まれて見えない、只空の一角、私等の行く手に當つて青空が僅に微めいてゐるだけである。

此頃の中仙道の路上には到る處白衣の道者の鈴聲を聞かない事はない。金剛杖を突き、呪文を唱へながら行く御嶽道者等で、其鈴聲に伴はれて行けば知らず／＼に木曾路に入つて了ふ。

桔梗が原の盡頭第一の驛路は洗馬である。犀川の源流の一つ奈良井川は驛の後方に近く流れ、山が稍々迫つて山驛の趣が先づ目に入る。驛は坂路で頗る荒廢の姿を示してゐる。洗馬を通り抜けると、牧野、本山、日出鹽等の諸驛の荒廢の姿はいづれも同じであるが、戸々養蠶に忙しく途上斷えず幾組かの桑摘歸りの男女に逢ふ。此養蠶は此等山驛の唯一の生命である。

離落たる山驛の間を走つて中仙道は次第に山深く入つて行く。雲が晴れて日が次第に照らし出す。山風はいかにも涼しいが、前途の遠いのを思ふと頗る心もとない。

櫻澤、若神子、贄川、平澤の諸驛、若者だけは克く耳にしてゐた。櫻澤以西は既に西筑摩郡で、いはゞ前木曾とも云ふべき處である。此等の村々から松本の町へ出て來る學生がある。家から栗の實を送つて來たと云つては友人を集めて其御馳走をする、其後では必ず木曾のなあ――と云ふ例の歌を唄つて聞かせた。今では女の學生も出てゐる。同行者の一人は自分の教へ子だと言つて其子の家へ立寄つた。家の中は一ぱいに蠶棚が立てられてゐて、人の居る場所もない位。おとづれると、太い大黑柱の黑く輝つてゐる陰から老人の頭が見えて、其子は今桑摘みに行つて居ないが兎に角是非休んで行けと云つて、頻りに一行の者を引止めて茶をすすめながら、木曾街道の驛々の頽廢して行く姿をば慨歎して、何とか振興策はあるまいかと云つてゐた。

奈良井の驛は川と鳥居嶺との間に壓せられたやうな、如何にも荒涼たる驛である。此處から嶺へ登るので、此嶺は木曾川と犀川との分水嶺になつてゐる。

嶺を越えると其中腹に藪原の宿がある。あらゝ木細工、花漬などを賣る家が軒を並べてゐる。

「木曾の檜うち世の人の土産かな。」うすい木片を剝いで、一度使へば捨てゝ了ふやうな木の小皿が出來てゐる。其一枚々々に樣々な風雅な文句が摺り付けてある。

此藪原の驛からは多く大工が出稼ぎに出る。年中大方の日は嶺を越えて他へ出てゐるので、主人の居ない家では戸毎大抵馬を飼ふ。木曾馬と云つて小形な方で、峻坂の登り降りに最も適してゐる。多くて十四五頭、少なくも四五頭は飼はない家はない。其飼養は皆女の仕事で、日中は家から離れた草原へ來て馬を放し、自分は草を刈つてゐるが、夕方は放した馬を集めて歸つて來る。十二三頭並んで崖の上を廻つて來る。最先きの馬の背には飼主が乘り、鞍の上で草鞋など作つてゐると、親馬のあとを追ひながら子馬は立ち止つて道草を食つたり、また嘶いたりしながら走つて來る。と親馬も又立ち止つて長く嘶く、互に嘶き合つて一つ〳〵夕靄の中に消えて行く。

藪原の宿を出拔けると道は既に木曾川の岸を傳つて走つてゐる。明日は御嶽へ登るべき身の足の疲勞を氣遣つて藪原から馬車に乘る。馬車は川岸を廻り廻つて走るので、川を隔てゝ綠葉の重々と繋り合つてゐるのを仰ぎ見る心地好さ。

「面白いぞや木曾路の旅は、笠に木の葉が散りかゝる。」

之が秋の旅であるならば、夕風に散る木の葉の雨の中を、菅笠で辿つて行く寂しい味を占め得るのであるが、今は青葉が重り合つて、谿々峯々、盡く其青葉の吐息に薫つて居る。

馬車屋は元氣の好い若者で、自分が何匹も馬を持つてゐる事をば、連りに自慢して話して聞かせた。

「何に一呼吸でさあ、五里ばかりの道、此間四時間でやつた事がありまさあ。」

と馬の強いのを誇つてゐる。――午日の日の光は綠葉に輝き、松蟬の聲が喧しく聞えてゐる。暫くすると白い雲が行くての峯に湧き上つた。日影が隱れて、青葉がざわつき出す、川を隔てゝ前の谿が急に暗くなる、と雷鳴が聞え出して、川の瀨音が之に響くかと思ふと、大粒の雨が灰のやうな砂塵の上を叩いて落ちる。馬は跪き出す、馭者は絆を引きしめる。谿が鳴り山が響いて風が一過したかと思ふと、大雨が襲つて來た。止まるべき家もない、馬車は雨を衝いてひた走りに走る。晴天つゞきの後とて雨具の用意がない。屋根から洩れ、正面から吹き込む。日除けの幕を一面に引廻して防いでも、吹き込む雨にびしよ濡れに濡れる。

不意に馬車が止つたと思ふと、何か連りに話し合ふ聲が聞える。――出拔けに、引廻した幕を開けて顏を突き出した男がある。見ると、八字の髯が第一に目に付く、頭髮が伸びて、太い眉毛の下には大きな眼が凄く光つてゐる。紺絣の洗濯したのが太い筋張つた腕にからまつてゐる。ぎよろ〳〵と馬車の中の一人々々に目を止めて見たが、別に何と言ふでもなく、其まゝぐつと幕を引いて下りて了つた。日除けの隙から覗いて見ると、紺絣の下に雪袴と云つて此邊の農夫が着けてゐる紺木綿の袴のやうなものを穿いて傘をさしてゐる。そして馭者の方へ向つて一寸手を擧げた。すると馬車は又動き出した。

「何だらう。」車中の者は話し出す。

『オイ、馬車屋さん、今のは何だえ、出拔けに、』と幕の端を一寸引いて吹きつける雨に顏を背向けながら訊くと、馭者は一寸振り返つて、

「何に探偵でさあ。」

「探偵？　何の探偵だえ。」

「何に、つい二三日前にね、山の中で林務官を殺して逃げた奴があるでね、其奴が何でも坊樣

の風をして逃げたつて事だで、其奴を探すんずらい。』

馭者は度々此様な事に逢ふのか、別に氣にも留めてゐない様だ。雨はまた一しきり烈しく降る。その降り濺ぐ音、峯から流れ落ちて來る水の音、稲雷鳴が止まない。車中の者は身を縮めて晴れるのを待つ許り。話すら存分に出來ない。宮越、原野、上田などは雨中に過ぎた。福島の町に入らうとする手前で雨は晴れた。夕日が遠い山の頂を射て藍青の峯が微かに匂ふ。福島は川を挾み山を負うた心地よい町である。林務官殺しの話は此處にも聞えてゐた。福島に一泊。

福島から御嶽の頂上まで十里の間、其半ばは王瀧川の溪流に沿うて溯るのである。此山中の路は登り下りの坂で、松樹林、雜木林、或は碧潭の岸を傳ひ、或は深淵を瞰下して行く。五人十人或は二十人三十人、白衣道者の往來するのに逢はない事はない。桑原から澤渡へ越す所で一回王瀧川を渡る。橋は一方少し坂になつてゐる處から楓、欅、橅などの巨樹の繁茂してゐる急峻な山の中腹に向つて架けられてあるのだ。橋の下は水流は靜かであるが、如何にも深さうだ。此橋を渡ると深林の中の徑となる。小暗く立ち繁つた巨樹の根が道を横切つてゐて躓きがちである。林を出拔けると草原、崩越を越えて山に沿ひ暫く王瀧川を遠く脚下に見て行く。山又山が重つて、其間を川は蜿つたやうにうねつてゐる。何だか遠い世の姿でも見るやうな氣がする。山を下りて又一回王瀧川を渡つて王瀧の村となる。御嶽の第一合目である。

王瀧から田の原（六合目）まで登る間は、一合目毎に小屋が出來てゐて宿泊も出來る。松林が盡き、雜木林が次第に無くなつて、楢類の苔い若蒸した林となる。雨雲が覆ひ被さつて來て、三合目あたりから遂に雨となつた。林の中は只狹霧と雨滴とのみ、雨中を鳥の聲がする、日は暮れて來る、一行四人はびしよ濡れに濡れて遅く田の原の宿へ着いた。

田の原の宿を出たのは朝の四時、強力が燈して行く松明の火で、爬松の中を登つて行く。霧が濛々として襲つて來る。風が出て來た、なかなかに烈しい。加へて寒さも嚴しい、夜がほのぼのと明るく松火はいつか消えて了つた。天が明るくなると遠く見渡される。紫色の空、其鮮かさは嘗て見た事がない。桔梗色に光を帶びて輝く美しさ、其下に群巒の頂が浮んで見える、――併し此光景も瞬時に消えて、雲一杯、忽ちに覆つて了ふ。風はなか〳〵に烈しい。爬松の上を霧が小風に吹かれて走つて行く。

頂上の小屋に達したのは八時、小屋の蔭に當つて身を温め、劍ヶ峯へ登つて見た。御嶽の最高峯、岩角にすがつて下の方地獄谷から吹き上げて來る烈風に面して立つと、殆んど呼吸する事も出來ない。風と共に雲が谷から騰して來て、忽ちに岩角を包み小屋を包み、今まで見えてゐた一の池、二の池、三の池の姿も一切隱れて了ふ。此雲の往來、雲の卷舒、到底下界では見られない現象である。又、刹那に雲が開けると、乘鞍、槍ヶ嶽一帶、此山からつゞく峻嶺高峯、日本アルプスの連嶺の頂が、今日さめたと云ふやうな様に劃然と浮んで見える。此峯づたひ乘鞍の頂へも出る事が出來ると聞いた、風に吹かれ雲に包まれて此絶頂無人の境を亙るのである。私は是非行つて見たいと思つた。

併し私等の今取らうと云ふのは、此峻嶺跋渉ではない、烈しい白雲の中を衝いて所謂裏山を飛驒の國へ下りようと云ふのである。

飛驒路と云ふのは峯の小屋から右手にとり、

二の池の岸を繞つて磊々たる小石の中を下つて行くので、途と云ふべき途はない。少し霧が深く、小雨でも降らうものなら何れが路とも分らなくなる。峯の小屋の熊のやうな主は、

「危えぜ、克く氣を付けて行かつせ、何でも右へ右へと、小石の積んだのを目當に行きせえすりあ大丈夫だ。』と云つたが、福島から付いて來た案内の强力も、二の池から山を少し下つて裏山になりかゝる所で分れて木曾の方へ戻つて了つた。

御嶽の裏山！　年々飛驒路から多少の登山者はあるとは聞いたが、其他には通ひ人のない途だ。錦が峯を左手に仰いで池の岸から賽の河原と云ふ所を通る。一面の石原、大小何千個ともなき燒石の原である。それでも幾年かの間、登山者の草鞋の當る所だけがすれて、少し隔つて見ると微かに白く一筋の途のやうになつてゐるが、近く其上へ行つて見ると何處とも判然らない、只所々に小石を積んで道しるべにしてあるのが、せめてもの目當である。

賽の河原は中々長い、雲の影が明るく暗く其上を照らして過ぐる。如何にも心もとない前途である。河原を上りつめると、一面急峻な爬松帶の中へはひる。徑は一縷、危い崖の上を繞つて深い谿を瞰下しながら行く。一寸の注意も緩められない徑だ、谿の中には一木も一草も無い。只赤ちやけた燒石が磊々としてゐるばかり、水音も聞えない。溪の周圍には太古以來人間の足跡を印した事のない山が續々として群立してゐる。只荒れてゐる山だ。それでも次第に雲が晴れ渡つて青空が晴朗に輝き暖氣も增して來た。

一里程も下つたかと思ふ頃、爬松の幾谿を越えて遠くの方に薄い煙が見える。

「最う飛驒の國だらうか。」と思ふと何となく不思議な國へ來たやうな氣がする。確かに飛驒の國に異ひない。

爬松帶を出拔けたかと思ふと、徑は一層急になつて熊笹の中に入る。身長よりも高い熊笹をがさ〳〵と分けて下るが、足とまりは一段々々と段を刻んである。其中には雨水が溜つてゐて踏むたびに飛ぶ。兩手で笹を搔き分けるので、三尺離れるともう先行者の姿は其中に沒して見えなくなる。立ち止つてゐるとがさ〳〵と音はかりしてゐる。はつと明るくなつたと思つて額を上げて見ると、熊笹が低くなつて日影が滿面に照らしてゐる。そして熊笹の所々に頭を顯はして黃色い石楠花が咲いてゐる。

熊笹の中を翔け下ると、栂樅などの林に入る。如何なる巨きなものでも一抱へ位に過ぎないが、幹と云ふ幹には苔が蒸して、枝には兎絲が垂れ下つてゐる。中には白く骨の如くになつて立ち枯れしたものもある。或は枯れて倒れて草の中に縱橫に横はつてゐるものもある。其倒れた樹の上を飛び越え踏み越えて下るのだが、其急な事殆んど垂直線のやうだ。滑り落ちない以上は飛ばずには居られない。止め度なく飛んで下るのだ。一寸油斷すれば先行者の姿は草か倒木の下に隱れて見失ふ。立ち止つて『オーイ』と呼ぶと、遙か下の方で『オーイ』と答へるが、只聲だけで、其聲も妙に物凄く響く。樹林の中の空氣も人の聲を傳へた事は稀にしかないのだ。聞く者の耳も妙に變つてゐる。此の『オーイ』『オーイ』の應答が杜絕えると、自分の心臟の鼓動が高く響くだけである。

遠く下の方で谿流の響を聞くが、降れども降れども中々達しない。下りても〳〵殆んど同じ垂直の徑だ。膝頭が痛く、眼も眩むやうに覺える。斯樣な徑を果して登る人があるだらうか、下り盡したら何處へ達するのだらう。水の音は何時までも同じ度合に聞えてゐる。

二三里も降つたかと思ふと、不圖谿流の音が

近くに聞えて、路が右に一廻轉する、深い草が開けて丸木を渡した谿川へ出た、もう人里も遠くなからうと思つて、倒木へ腰掛けて休んでゐると、遅れた同行の一人が漸く追ひ付いた、先きへ行つた二人の影は見えない。

『ねえ君、先きの連中は路を間違へたのぢやなからうか。』

『なーに大丈夫だ、間違ひやうもないから。』

『さうだね。』見合せた二人の顔は妙に蒼白かつた。言葉も不思議に澄んでひゞく、話し合ふ氣になどはなれない。何だか、溪流のざわ〳〵云ふのが次第に高くなるやうで、如何しても長く停止してゐられない所だ、又廻りくねつて林中の徑を走り出した。

今度は前に比べると一層高く水聲が聞える。もう濁川の湯へ近くなつたのではあるまいか。水聲は聞えてもなか〳〵林は盡きない。路の急な事も依然として急だ。一時間位も走つたかと思ふと、川の縁に沿うて藁屋根が一つ目に入つた。あゝ川は益田川の上流だ、家は濁川の湯だ、愈々飛驒の國へ來たのである。

急いで川の岸を傳つて行くと、危い橋を渡つて家の前へ出た。前も後も急峻な樹木の山、此山に挾まれ溪流に向つた一軒家、木材だけは巖丈なものを用ひて、屋根も厚く葺いてある。

『やあ、遅かつたね。』と出拔けに聲がする。驚いて見ると、左手の小屋の中からひよつくら頭を出した者がある。見ると先行者の一人だ。

『早く來たまへ、好い心持だ。』近寄つて見ると、可成廣い浴槽にいつぱい、上から竹樋で引いた湯が、ざわ〳〵、ざわ〳〵と溢れて流れてゐる、アルカリー泉のやうだ。

草鞋を脫ぎ、衣服をぬぎ捨てゝ急いで湯へ飛び込む。柔な溫よかな心持、浴槽の緣へ頭を載せ足を投げ出してゐると、今朝出立した田の原の宿、頂上の白雲、急峻な裏山などは夢のやうになつてしまふ。

湯から出て、浴槽から直ぐ茣蓙を敷いた二階へ昇る。戸も無く、荒板の儘だ。四人は蓙の上へ裸形のまゝ休んでゐると、上り口の方から、髮を無造作に束ねた女の顏が出て、

『何か食べさつしやるかね。』と云ふ、其齒は黑く鐵漿で染めてゐる。

『何か食べるものがあるかね、川魚でも。』

『川魚なんかありましね、御飯と御汁とならありますし。』

『ぢや、それでも好い、急いで持つて來ておくれ。』持つて來たのは御飯といつても稗だらけ、御汁と云つても煤臭いやうで、加之に鹽湯でも飲むやうだ。山菜とかいつて野生の菜がある、其汁の味だ、ざら〳〵して、如何に空腹でも一杯とは食べられない。旅宿のある所まで何里あるかといふと、

『さうだね、まあ西洞まで行かつしやりや、宿屋はありましず、四里だね。』

『四里ぢや、一呼吸だ、路はどうだね。』

『矢張今降りて御座らつしたやうな……。』

『急かね。』

『だが、いくらか違ひましず。』

四里の峻坂、木の根を踏み越えて下るのか。一呼吸だと意張つては見たものの、實は内々閉口してゐた。それに空はどうやら曇つて來た。此で雨にでも逢はうものなら慘然なものだ。二階から下りようと段々の處へ行くと、戸を立て切つて上に小さな木札をかけて「林務官御室」としてある。斯樣な家でも特別室があるのかと不思議な思がした。

入口の處へは今、里から食料を運ぶ男が着いたと見えて四五人集つてわい〳〵いつてゐる。ぎよろつと片眼の飛び出した大男が腰をかがめて、かますにはいつてゐる青物など何かと調

べてゐる。先刻の主婦もゐる、六十程の老婆もゐる。若者が二三人ゐる。見ると。入口の柱に寄りかゝつて帯をだらりと垂らした十八九の女が一人、娘とも思はれない。蒼黒い土のやうな顔色をしてゐる。疲れたやうな眼を擧げたが、又すぐ視線を地へ落して了ふ。

『何だらう、え君。』一人が小聲に囁く。『さあ、不思議だね。』『林務官室!』誰かが小聲で言つた。『あゝ、さうかも知れないね。』――此家を辭して復た橋を渡つて昇降常なき路を辿つて行く。樹は次第に大きくなり、同じ栂、樅の類でも上の方に比べると、勢好く生長してゐる。谿は飽くまで深い、峯も飽くまで高く、如何に見上げても果しが無い。枯れて倒れて朽ちた樹が同じく縱横に横はつてゐる。初めの間は日の光が木立の間から洩れて青白く斑に射してゐたが、雲行が怪しくなつたと思ふと、林の中が暗くなつて山がごうと鳴り出した。ざわ〱ざわ〱草が搖いて木と云ふ木は枝が打合ふ。如何にも氣味が悪い、と思つてゐると、其ざわめきの中からぬつと何者か表はれた。見ると二つの大きな影だ、そして自分等の方へ向つてずんずんやつて來る、近寄つて見ると、黒い林務官の制服を付けた四十位の男だ。細い徑をすれ違はうとするので、

『ちよつと伺ひます、西洞までは未だ何里程ありませうか。』と丁寧に訊くと、一寸立ち止つたが其まゝ棒立ちになつて、一行には目も吳れず、何處か遠くの方を見入つて、聞耳を立てゝゐると云ふ風で、顔の色は蒼黒く、耳が不思議に大きい。『さう、五里位はあらうかな。』と吠えるやうな、木の洞の中から出て來るやうな聲で言ふ。『五里?』驚いた、前の湯では四里と聞かされたのが、二里も來たかと思ふのに猶五里だといふ。林務官は言ひ捨てたまゝずん〱行つて了ふ。後からは筒袖を着て、背板と云ふのを背負つた男が附いて行く、すぐ草の中へ後姿は沒して了つた。――山や谷は此時一層高く鳴り出した。『妙だね。』と何人か言ひだした。『何だか變だね。』

『ほんとの人間か知ら。』同じやうな感じは皆の胸に走つた。皆は振返つて今行つた人達の後を見ずには居られなかつた。

遂に雨になつた。

深山の雨、幾千年となく斧の入つた事のない深林の雨だ。初めは繁り合ふ木の葉に遮られてゐるが、次第々々に烈しく落ちて、枝がぬれ、幹がぬれ、草がぬれ、自分等の纏つてゐる蓙がぬれ、果ては衣服にも沁み透る。仰いでも望んでも霧と雨、果ても知れず深い千古の谿にふり灑ぐ雨の音、默々として谿を捲いて林を覆うて浮動してゐる霧の姿、壓すべき人類もない深山の中で、人などは度外に置いて、霧と雨とが勝手に動いてゐるのだ。

御嶽は信濃に向つては大きな山であるが、飛驒に面しては殆んど垂直のやうに思はれる。其深い峯と峯との中腹を傳つて下りて行くのだ。何處まで行けば人里へ出られるかと云ふやうな氣がする。時計を見るともう四時だ。『ねえ君、これは四里や五里の道ぢやないぜ。』――何里たか知らないが疲れて了つた。雨中を六里は確かに下つた。身に着けてゐる物は一切濡れてしまつた、マッチさへ火が付かない、煙草を吸ふ術もない。もう外部に對する勇氣はない。不平を口にする事すら出來ない、殆んど何處へ行くと云ふ考へもなく、又別に深く苦痛とも感じない。無意識の樣で、すた〱すた〱歩いて行くばかりだ。『人』だと云ふ觀念すら失つてゐる。

路が漸く急に下つて林が盡きて草山に出た、局面の變化は多少の希望を繋ぐ。遠くに瀨音が聞える、益田川の上流であらう。瀨音で餘程

元氣付いた。雨も此時小降りになつて、鼠色の雲が峯から峯へ動いて行く。が、次第に夕暗が迫つて來るやうに感じられる。

不圖路の下の方で馬の嘶く聲がする。透して見ると草山の麓に黒いものが動いてゐる。『オーイ』と聲を掛けると、『オーイ』と下の方でも應呼する。

『西洞まではもう近いかアー。』と訊くと、『二里位はあるぞオー。』と言つて草刈る手をやめて上を仰いでゐる。まだ二里の路！ 自分等は殆んど其處に立ちすくまずには居られなかつた。氣が付くと其處でも此處でもザク／＼と草刈る音がする。見ると、直ぐ上の所に馬を引いて來てゐる者が二三組ゐる。

『何處か此邊で宿泊て吳れる所はないか。』と聞くと、『西洞まで行かつしやれ、それまでは無えね。』と、佇んで、不思議さうに私等の方を見送つてゐる。仕方がない西洞まで歩かう。

路の兩側には四五尺にも餘る草が伸びてゐる。霧は次第に濃く罩つて其草原の上を這つてゐる、其處此處に木小屋が眼に入る、今の草刈共の泊る小屋に違ひない。

草原は過ぎて松林となつた、路は平かに廣くなつて遂に益田川の岸へ出た。なか／＼の急流だ、其岸を傳つて走る。四邊は次第に暗くなつて來るにつれて、只走るより外法がない、再び機械的に走り出した。殆んど夢中に歩いた。何里位か判明らないが、山が低くなつて地が稍々開けて來たと思ふと、其山の下に火影が一つ見えた。懷しき火影、此時位人家を懷しく感じた事はない。疲れた足をひいて走つた。途中で松火を點して來る女にあつて漸く西洞へ來た事が判明つた。其松火を貰つて教へられた旅宿屋へ着いた。大きな家の中央に爐が切つてあつて、六尺もある大きな木が三四本燃やしてある。宿の老爺は「ようこそ」と自分等を迎へて吳れた。胡瓜の汁の味でも濁川の湯のものなど比べものにならん、空腹を癒して臥床へはひると、疲勞すぎたのか眠られない、遠くない處で馬の鼻を鳴らす音も聞える。――不圖林務官の事が胸に浮んで來た、雨に逢つて如何したらう、今夜は濁川へ行つたらう。彼のやうな林務官が殺されるだらうか、――知らない中に寢て了つた。

（明治卅九年九月）

霧の旅

北國街道の上には夏草がかぶさつてゐた。

柏原から野尻湖まで、半ばかりの間、朝霧が深くかゝつてゐて、路上の草には露が重かつた。汽車をおりて初めて大地を踏んで行く草鞋の心持、久振で旅を味ふ心には、總てが鮮かに感じられた。

柏原には、一茶の遺蹟等の在ることは聞いてゐたが、霧が深くて見に行く氣にもなれなかつた。何處の國道沿ひにでも見る破驛の姿は此村にも見られた。桑の葉の蒸されたやうな香ひと、上簇期に近い夏蠶の臭ひとが、家々の戸口からもれて、路上に漂つてゐた。

村を出抜けると、霧の間から白樺の林の樹幹だけが、ぼんやりと朧に見えて來た。しとしと草を踏んで行く自分の草鞋の足音だけが耳に入つた。不圖立ち停ると、急に周圍がしんとして來る。何か一層濃く覆ひ被さつて來るやうな氣がする。其中で、霧が林の木の枝に引きかゝり、白樺の葉にからまつて、それで重い露となつて、またまた草の上へ落ちるのが聞える。

又はたノ\と歩き出す。と、向ふの方から農夫らしい風をした男が二人ばかり、ぼんやり霧の中へ浮ぶやうに姿を見せるかと思ふと、擦れ違つて、直ぐまた後の方へ消えてしまふ。

何のために、何處へ歩いて行くのであらう？

何を目當に旅へ出たのだらう？　何處へ行つたらば、其目的のものが得られるのだらう？

何故旅を思ふときに自分の胸は躍るのだらう？

この様な考へが不圖胸の中へ浮んで來る。

哀しさの果てを求めて旅へ行く、さういふ旅でもないらしい。旅へ出なければ消されない程の寂しさを常に感じてゐるわけでもない。目先の違つた色を求めて歩く、それ程に自然を無變化な、靜的なものだとも考へても居ない。美しい景色とか、變化の多い景色とか、さういふものを捜して歩く好奇心が自分の胸に起つたこともない。それでは何故か。何を求めて歩いて居るのだらう。何處へ行つたらば、その求めてゐるものが得られるのだらう。靜かに引きしまつた自分の心の中へ何が蘇生つて來るのか、何か浮んで來るのか、私はそれを求めてゐる。恐ろしさと悦しさの期待を持つてそれを求めてゐる。

新聞も見ず、手紙も見ず、友人にも離れ、知人にも逢はず、職業にも刺戟にも都會のどよめきにも、電車の響にも總てに離れて、私は歩いて行く。廣い自由の天地の中をたゞ一人で歩いて行く。其時私の心の中へ、胸の中へ、頭の中へ、浮んで來るものは何であらう。私はその者を捉へたときに、その者の閃きが何處へ現はれようとも、——森の中であらうとも、山の頂であらうとも、海岸であらうとも、力の總てを盡してその方へ走らずに居られない。

私はプレジュアー、ハンターが歡樂を追ふやうに、ドンジュアンが千人の女を抱くやうに、しかも幾人の女を抱いても、幾多の逸樂を盡しても、彼の求めてゐる女は唯一人であり、彼の願ふ歡樂は唯一つであるやうに、私はそのものを求めて歩いてゐるのであらう。それは私には決して空漠たる願望でない。私にはその求めるものは、はつきりしてゐる。たゞそれの表はれる場所と、それの表はれるやうな自分の心構へとを得たいと思つて歩いてゐる。

霧が障子の縁に突敷かれて、さあッ、さあッと音を立てるやうに思はれる。地上足の向いて行く三尺ぐらゐ前が目に入るだけになつた。今にもこの濃い霧が一時に崩れて雨となりはしまいか。でなければ、この霧が一時に凝結して動きのとれないものになつてしまひはしないか。そんな事を思ひながら歩いて行くと、今迄動かずに一層深く〳〵集つてゐた霧が次第に少しづつ流れ出した。濃淡の差別を見せて周圍に流れ出した。上の方へ、林の頂へ逃げるやうに昇つて行くもの、下の方へ、草叢の中へ低く爬ふやうに迷ひ込むもの、その中間を透して、豆畑や粟の畑や、草原の白樺の幹やがぼんやり見えて來る。農家が一二軒處々に立つてゐるのが目に入る。

太陽は、晝間見る月のやうに、たゞ薄白く、霧の薄れた中から形だけ見せるけれど、光をば散らさない。その形も見えたかと思ふと、直ぐ霧の中に隱れてしまふ。不圖鶯の聲が白樺の林の中から響いて來た。霧の中にこめられたその聲は、祕めた歡樂をうたふやうに、低い平原國を追はれたものが、山の中へ來て思ふまゝの自由を享樂してゐるやうに、何人をも憚らず唄つてゐる。

霧の薄れて行く林の中から、蟬の聲がまた聞え出した。迷つてゐる者に道を教へるやうに、日中が近寄つて來ることを告げるやうに、身をゆすぶり、木をゆすぶり、林をゆすぶつて、立ちこめる霧を追ひやるやうに鳴き出した。

蘆のこんもり群立つてゐる姿が處々に見えだした。水溜が次第に近寄つて來たことを思はせる。その中からけたゝましく行々子の聲が騷ぎ立てる。何ものかの警告を與へるやうに、今まで默つてゐたものが不意に目を醒ましたやうに。

今までは默々として動き廻つてゐた霧が、天地を我もの顔に領してゐたのだが、今度は一つ一つ聲を立てゝ、飛び廻るものの生命が目を醒まして來た。

先きの方に、山の裾が見え出して、その裾をめぐつて、曇つた鏡の面のやうに、水面がぼんやり霧の中から浮んで見える。山々の間に入り込んで、彼處にも此處にも、光の無い水が見える。けれど水の上は餘所よりも明るい。樹林のこんもり茂つた島の形も見える。小高い途が少しづつ降りはじめて、野尻の村へ入つて行つた。此處にも昔の宿驛の跡が殘つて居た。店家があり、舊い大きな家があり、それが大方皆戸を閉めて居る。日は少しづつ光を増して來た。湖面は少しづつその光を照り返して、周圍の綠がきら〳〵輝き出した。私は急いで家と家との間から、稻田へ出て、その畔の小徑を湖水の岸まで歩いて行つた。

湖に向ふ者の心の靜けさ。自分が何處をどう歩いて來たかも忘れて、突然その岸へ連れて來られたもののやうな氣がする。波の靜けさ、伸びやかさが心を靜めてくれる。波は柔かい手で撫でてくれるやうな氣がする。ぴつしや、ぴつしや、岸へ忍び寄るその音が樂しい囁きとなつて耳から胸へ、胸から體軀全體へ輕く行き亙る。淺い水の中から岸へつゞいて一面に生えてゐる淺綠の蘆の葉が光を反し、人の魂をその中へ吸ひ込む。その中に包まれて立つてゐる者の心は、綠の光となつて四方へ漂うて行く。湖上の霧は低く迷つて、山の間へ奥深く人を誘ふ。

心の引きしめられる心持、固く脣を結んで見張る心持、それは海の與へてくれる命である。湖の岸へ來て立つてゐる時、人の心はなごみ、靜まり、輕い柔しい微笑が脣邊に漂ふ。霧をくゞつて來る水の忍び寄る柔しい響、私はそれを耳にして暫く默つて水面を見つめて

立つてゐた。
岸に近い宿屋から船を一艘仕立てゝ貰つて、湖上を周ることにした。
『こんな處にこんな池があるといふことが、東京までも知れて居るんですかね。』
そんな事を言ひながら、一人の若者が櫓を押しながら船を進めて行つた。辨天の祠のある島には杉だの松だのが一面に立つてゐて、石の階段が水際から奥深く次第に高く導いてゐた。その奥には辨天の祠が在つて、四抱へ以上もある杉の老木が電火に打たれて立つてゐた。島を繞つて四方に湖水が開けてゐる。周圍四里近いこの湖水は、幾ら高い所に立つても一望に見果てがつかない。山脚の間々を繞つて入り込んでゐるので、或處は廣く、或處は狹く、周圍にも途がついてゐない。湖を極めるには船に頼るより仕方がない。湖上には日の光が縞を織つて、殆んど微動すら見せない。水の面は明るく、暗く、照り渡つてゐる。
島からまた船へ乘つて、誘はれるやうに奥へ奥へと入つて行つた。
何處の湖水にでもロマンスはある。この湖の成立は知らないけれど、若者の語るところでは一種の谿湖らしい。山麓の谿間に自づと水が湛つて、その谿間には巨樹の立つてゐるまゝで水に浸され、檜や、杉が、水中深く白骨のやうになつて、立枯れしてゐるといふことである。その巨木の立枯れしてゐる中へ、銅の船が一艘沈んでゐる。その船は、謙信の智將宇佐美貞行が、謙信の姉聟長尾政景の謀反を未然に防ぐために、二人して湖水に船を浮べ、湖上の樅ケ崎といふ所まで出た時に、水夫に命じて船底へ穴を開けさせ、政景の身を擁して、二人とも船と共に水中に沈んでしまつた。その船だといふ。それは事實であらう。その後幾度となくその船を引き上げようと企てた者もあつた。最近一二年前にもこれを企てゝ失敗に終つた者がある。船のあるのは事實だけれど、引き上げることは困難である。水が冷たいのと巨木の間に挾まれてゐるのと、泥の膠着してゐるのとで上げられない。
二人の死骸すら遂に上げられずにしまつた。纔に彼等が着けてゐた具足の端を水中から切り取つて、近くの寺の境内に埋めて、墓を建てたとの事である。幾百年前からとなく水中に沈んでゐるその巨樹を少しづつ切り上げて、その寺の境内にはそれ等の木で一宇の堂を建てゝあるとの事である。
諏訪湖には信玄の石棺が沈められてゐるといふ傳説が一時傳つてゐた。それは明かな虚構であるにしても、鐘が淵に巨鐘の沈んでゐる事は今でも信じられてゐる。何處の湖水にでも、何か水中に祕密を藏してゐない事はない。迷信の作り出して來る傳説であらうとも、史實の傳へる遺跡であらうとも、水は靜かな表面を見せて、少しもその祕密を現はさうとはしない。
冬季には、この湖水も諏訪湖と同じく凍りついて、氷上を渡ることが出來る。厚いときは二三尺にも餘ると、若者が話してくれた。
湖の東の方にあつて、逃げゆく霧の中から斑尾山が眞正面に見え出して來た。信越の國境を形づくる山の一つである。振り返つて見ると、妙高、黒姫、飯綱の三山が、これも霧の中から徐に姿を見せだした。
私は船をかへして、岸の方へ向ふ事にした。信越の境に跨るこの三山の雄大な景色を、ぢつと眺めて居たくなつたからである。上へ〳〵と逃げて行く霧は、山の中腹から頂にかけて、次第に空へまでも擴がつて、山に近い空は薄灰色にぼかされて、帶にどんよりしてゐる。
妙高は稍々右の方に當つて、峯が重り合つて

奇怪な姿を見せてゐる。黒姫は眞正面に雄大な壓倒するやうな勢で、上から見下してゐる。飯綱は左へよつて右肩からおろして來る一線を裾長く曳いてゐる。

　高原地といふ感じをこの三山の連立してゐる地くらゐ、明かに與へる場所は他にない。富士の裾野でも、私達は廣い平野の中へ立つてゐるやうな感じはするが、自分等のゐる處が高い場所であるとは感じない。八ケ嶽の麓には高原の感じは十分ある。けれども此の三山の裾のやうに、閉鎖せられ、瞰下せられ、サーカスへ入れられた馬のやうに、四方から山といふ巨人に見下されてゐるといふ感じはない。サーカスの中の馬の眼には、人間の塊團が恐ろしく見えるであらう。私達が、これ等の山の麓へ立つてゐるときは、如何にも自分等の小さなことが思はれる。明るい寂しい、空氣の澄んだ中で、丁度壜の中へ入れられた蟲が、人間の眼の働きを恐れるやうに、私達はこの明るい透徹した高原の大氣の中で、一種の恐怖を感じて身の周圍を見廻したくなる。

　靜かな湖上から眺めやつた三山の姿は、所謂日本アルプスのやうな、連嶺の重苦しさはなく、山に向ふといふ感じを最も明かに與へて呉れる。空中をおろして來る太いなだらかな線は、裾野の中へ走り込んで、この三山の麓では、その線の先きが互に交叉してゐる。私は子供の時分からいつもその線をぢつと見つめてゐると、何ものかが此の線上へ姿を現はして自分を呼んで居るやうな、その中にその者は幾つもの數に殖えて、その線上を下へ駈け降つたり、駈け昇つたりしてゐるやうな氣がした。また或時は、何人かがその肩を越して向うへ消えて行つたやうな、その人は一度越えた背を見せると、いくら呼んでも返辭をしないやうな氣がして、堪らなくなつたことがあつた。

　幾度見ても黒姫は、いつも同じやうで、しかも面目を改めて、私の前に嚴しく聳えてゐる。連嶺の亙り續いてゐる頂にばかり目を馳せてゐた私達が、初めて一山の美しき姿を仰ぐことの出來たのもこの山であつた。そして越後の海を初めて見て泣きたいばかりに心の締つた記憶と共に、何年たつても忘られないのはこの山の美しい姿であつた。しかもこの山は富士山のやうに全く轉び出たやうに孤立してゐるのではない。妙高、戸隱、飯綱の諸山は相呼應して、嚴として高原の奥に空を劃して立つてゐる。

　けれど私は、この山ばかりではない。何の山に向つてでもさうであるが、長く曳いてゐるその線上を辿つて頂上まで登つて見たいといふやうな感じはしたことがなかつた。寧ろそれに縋つて見たい、父親の膝に縋りつくやうに縋つて見たい心持が起つた。またある時は、その線上を登るのではなくして下つて見たい、あのなだらかな線上を滑り降りて見たい、何處までも降りられる處まで、走つて行かれる處まで走つて見たいといふ心持がした。私は山を仰いで見るけれど、それを形づくる線上へ眼を走らせる時は、いつも上から下へ視線を走らせてゐた。それは私一人の經驗かも知れない。下から線を上へ辿るとき、私には一種の苦しさが伴つて來る。山は盛り上がつたのかも知れないが、それを圍む線は少くも上から一條に、また一呼吸に書き下されたのだといふ感じがいつもされた。

　兎に角、この三山の私に與へてくれたものは、常住の姿であつた。不斷の生命の流れであつた。安心して自分の思つてゐることを、考へてゐることを、感じてゐることを、纏めて見ることの出來る感じであつた。この感じが私には何よりも尊いものであつた。自分の尊敬

してゐる友人の前へ、有らゆる自分の姿を、深く心に祕めてゐる考へを、安心して打開けることの出來るやうに、私は山に向つてゐるとき、常は忘られてゐる心の底の流れが、自由に流れ出すのを感ずる。自分の持つてゐるものの總てが殘らず響を立てゝ表面へ現はれるのを覺える。これが私の全體の生活でなくて何であらう。私の全體の生命でなくて何であらう。

深い悅びが、生の悅びが體軀全體に漲つて來る。私の體軀の血潮が有らゆる力を盡して、順潮にめぐつてゐる。それが狂ふやうに躍るのではなく、今にも血を吐きはしまいかと思はれるやうに心臟が鼓動するのではなく、脈搏は大樣に、力強く波打つて、身體全體がほてつて來る。心の活動が寸分の隙もなく充實して來る。何故喧噪の中で、群集の中で、臆病な人間が、この自然の前へ來た時、十分の活力を得られるであらうか。何故、私達人間は友人の前に居る時だけ、戀人と向ひ合つて居る時だけ、樂しい自由な、流れるやうな心持が味はれるのであらう。

私がそんな事を思つてゐる間に、いつか船は蘆の生えてゐる淺瀨の上へ、ぼさ／＼入つて來た。と眼の前に蘆の葉の薄綠が一連に輝いて見え出した。私は水にひたした濡れ手拭を取つて、船の中へ立つた。若者はもう水の中へ飛び込んで、肩で船尾の方を押しながら、蘆の發生してゐる中の船小屋の方へ、船を進めて行つた。私はこの小屋へ船の入らないうちに、蘆の根元へ飛び降りた。

稻田の畔の小徑を宿屋まで歸つて來た。湖面は日を照り返して、周圍の雜木林の中から蟬の聲と、鶯の聲とが聞えて居るばかり。その他には、何處か遠くの方で人聲がして居るやうではあるけれど判らない。明るくて、涼しい眞夏の晝、山中の湖水の岸は、總てがひつそりしてゐた。身を動かすにも荒い動作をしたくないやうな氣がする。

私はその家に泊つて、二三日讀書でもして居ようかと思つた。それ程靜けさが私の心を捉へてしまつた。けれど、また先きへの事を思ふとぢつとして居られないやうな氣がして、十一時頃にその家を出た。

野尻村は信濃の最北の村で、私の今歩いてゐる北國街道が、小さな峠を登つて下りると、其處の谿間に關川が流れて、その橋を渡ると、越後の國である。

國境に近い村には一種の感じが漂つてゐる。その村の人々も他處で見られない一種の感じを抱いてゐる。一種の郷土の誇りといつたやうな感じが國境を間にして、兩側の村人の胸に明かに湛へられてゐる。それでも彼等は互に交通してゐる。姻戚の關係を結んでゐる。一つの村の兒童は他の村の、他の國の川へ、峠を越して魚を漁りに行つてゐる。同じ國の村よりも、他國の村に近く住んでゐる彼等は、互に一種の誇りを持ちながら、互に惡み合ひ、助け合つて生活をしてゐる。

少しの坂路を登りつめると、草の生えた路が、なだらかに越後の國へ向いて降りて行く。路傍には、萩が咲き、葛の廣葉が風にひるがへる間から、紅紫の花か顯れる。落葉松の密林、白樺の疎林、杉が處々に孤立してゐて、下の谿間を見おろしてゐる。谿を隔てゝのテーブル、ランドの上には、黑姬の麓の高原には、黑い岩の散つて落ちてゐるのが、矮林か、叢だたみか、まだ消えやらない山頂の霧の影を寫して、白く光る處、薄暗く隈どる處、人間の住まない寂しい原野の姿を見せてゐる。

眞夏の書を一人歩いて行く心持は如何にも明るい。日光を遮る砂塵もない山中の空氣は、

眞上なる青い空から注ぎかける光を十分に吸ひ込んで、十分の明るさを見せて輝いてゐる。谿へ下る路が、崖の上へ來て、深い谿の底を見おろして居るとき、日の光は音を立てゝ、その谷底へ流れ注ぐかと思はれる。路傍の林の簇葉は、その光を漉して、青い光を樹根へ投げ、林の奥は見透されないやうに、光と影が入り亂れて、不思議な思ひを起させる。

谷底の川音が全谿に反響を立てゝ、流れから起る風が、高い兩岸から身を伸ばし、手を延ばしてゐる蔓草や松の木の枝を搖り動かしてゐる。

山の肌を洗ひ、細い血管を傳つて、頂から麓へ、麓から谿間へ落ち込んで來る幾多の水、樹々の根元や、燒石の間へぷつ〳〵湧き出した小さな泉が、途を求め、藪をくゞつて、下へ〳〵と落ちて來た水、谿間の奥深くへ數年となく湛へてゐて、次第々々に周圍の草の根をひたし、立樹を枯らし、やがて、その白骨のやうな立枯れた巨木をも水底へ沈めてしまひ、上へ上へと登つて來て、山の出鼻を包み、岩角を沒し、林といふ林を眼にも附かないくらゐ徐々として下から吞んでしまひ、そして一樣に、何處をも平らかな水の野原としてしまつた湖水の水、その水も一箇所山の間に缺所を求めると、四里にも餘る一圓の水が俄に色めき立ち、騒ぎ立ち、殺氣を帶んで來て、爭つてその一箇所の方へ向つて急ぎ出す。長い間沈默を守つて居たものの流動が始まる。湖水全體が一團となつて恐ろしい大きな渦紋を卷くかと思はれる。恐ろしい唸り聲を立てるかと思はれる。周圍を繞らしてゐる岸を削り、突裂いても、脱れ出る途の方へ向ふ。見る〳〵その一箇所の缺け目は擴げられる。響きは四方へ反響して幾百年默してゐたものの爆聲を一時に立てる。水は郷土を求めて、廣い郷土を求めて、海へ向ふ。默してゐる水の不斷の盲動と、聲立てゝ走る水の小止みなき活動と、私は湖を出て、谿間の川へ下りる時、その不思議さを思はずには居られなかつた。

關川の上流、妙高山の中腹に當る赤倉溫泉から少し下つた處に、「地震の瀑」といふのがある。谿間を充たして來る水が、不意に懸崖の上へ滑り落されて、驚いて、幾丈となき其崖を飛び降りる處である。地軸を動かすやうな瀑布の響、それは水の驚きと喜びとを同時に見せる響である。一度動き出したなら瞬時も止まつて居らない水は、何物に出逢つても、それを乘り越し、突き崩さずには居られない、默々として幾年の間でもそれ等の水は、機會を待つて領土を擴げてゐる。その領土の擴がり盡した時、其水は他へ向つて突出する。何物が其突出の力に抗することが出來得よう。水の不斷の凱歌が谿間には鳴り響いてゐる。

國境の川を渡つて、田口の停車場まで半里程の間、次第に地勢が平かになつて、降るべき場所まで降つて、もう是れ以上は海へ走るより仕方がないと云ふ感じをさせる。

今朝、山を包み、空を包み、林も、森も、野も、路も、村落をも沒してゐた執念い霧は、妙高の頂に逃げ集つてゐたが、正午を過ぎる頃から、又其頂を下りて、そろ〳〵山の中腹を包み、山を離れて廣く中空に浮び出で、麓の谿に怪しい影を落し、次第々々に里を目がけて降りて來た。そして廣い天地を包んでゐたのが、此山に集合せしめられたので、色は一層濃くなり、黒くなつて、忽ちに山の姿を全く隱してしまつた。涼しい風が、雨氣を含んだ風が、其中から吹き下して來た。日の光も薄くなつて、川の水は輝かしさを消してしまつた。

田口の停車場へは、山から降りて來たと思はれる、足支度をした人や、何處の登山口にでも

見るやうな人を乘せて來た馬が二三頭、近くの立木に繫いであつた。そして溫泉の香を匂はせた若い男達が、荒い皮膚をして、それでゐて生々とした光澤を見せて、酒にでも醉つたやうな顏をして、幾人も集つて來た。彼等は高田、直江津方面へ行く汽車を待つてゐた。

汽車は來た。それ等の男も私も乘り込んだ。停車時間の短い驛だから、手早に乘つたと思つたが、乘ると直ぐに動き出した。それ等の男は窓から首を出して、頻りに山の話をしてゐた。溫泉の話をしてゐた。

「旨い時に下りて來たもんぢや無えか、そら山は雨だ。途中であいつに出逢つたら大變だつたぜ。」

大勢が一時に窓から山を見上げるやうにした。山を包んでゐた今朝の霧は、雲は、一層色が黑くなり、もの／＼しくなつて、表面だけしか判らないけれども、確かに動いてゐるのが判る。雨となつて、山腹へ注いでゐることが判る。雨氣を含んだ風が涼しく車窓へ打當つて來た。日が曇つて來た。

明日の朝もまたあの霧が私を包むのであらうか。其時私は何處を步いて居るのであらう、私は未だそれを定めて置かなかつた。

北國の海

北國の海には華かさがなかつた。遠州灘の片に立つて見るやうな陸と海とが胸を現はして連接し合ひ、波が遠く陸地の眞白な肌の上へまろんで來るやうな、心を跳らせる輝かしさはなかつた。

雨晴から氷見へ行く越中の海岸を、私は一人で歩いて行つた。此處は、他の北國の海岸とは違つて、海がさう陸まで迫つても居なかつた。割合に廣い砂濱が續いてゐて、松林の中には赤い百合の花が、草の中に彼方此方咲いてゐた。午後の日が林の中に射し込んで、松脂の香が樹幹からもれて微かに漂つてゐる。海氣と松脂の香との混つた心持の快い感じ、其中を通つて行くと、皮膚の細かな目が、十分に開いて、思まゝ　それを吸ひ込んでゐると思つた。

耳は波の響の方へ奪はれてゐた。眼は松の木の根元に吹いてゐる薄紫の藻草に似たやうな草花へ向けられてゐた。そして私は鮮かな空氣を吸ひ込んで靜かに歩いて行つた。別に何も考へなかつた。考へることもなかつた。たゞ自分が此處を歩いてゐるといふだけの意識しかなかつた。知らず識らず私は砂濱へ出て行つた。雨晴の海中には、幾つもの岩が松を頂いて波の中に起き伏してゐた。時々先方から二三人の漁師が長い綱で曳船をして來た。其漁師等の足跡だけが、波打際に沿うて何處までも附いてゐた。氷見の濱の方から續いて能登の絶端が遠く沖の方に暈されて見えてゐた。

飛雲が時々空を掠めて、日の光は明るく暗く波の上へ影を落した。海はぢつとしてゐて、高波も陸へ迫つて來ない。四五尺位砂上にまろぶだけで、物を追ひかけるやうな、また惶てゝ逃げるやうな生々した波の勢は見えてゐない。それでも其波の響は濱を巡つてまろらかに鳴つてゐた。

私は其砂濱にぢつと立つてゐるうちに、誘はれるやうに、其波の中へ入つて見たくなつた。木の根へ衣物をぬぎ捨てゝ波へ入つた。滑らかな水が皮膚に纒ひ、こそばゆい小砂が足の裏をそゝつた。私は屈んで頸まで身を沈め、砂の上へ腰を下して、水面とすれ／＼に視線を走らせて遠く眺めやつてゐた。

大空の續いた空には、澄み切つた青色は見えてゐなかつた。空の裾は薄白くぼやけて、おアイヅこもくつきり區劃がついてゐなかつた。能登の岬の端れから先きは、遮るもののない水と空との間へ、白帆が三つ四つ浮び來て、それが方向をかへると思ふと、急に薄紫になり、やがて黒くなつた。波の色も薄黒く輝きはせずに、ヂッとくすんだ光を持つて、其黒い帆を默つて押してゐるやうに思はれた。

背後の方からは、岸の砂濱の方からは、碎ける波の音が絶えず響いて來た。其響につれて、私の耳もとを、小さなさゞ波が頸にまつはりつくやうにして、搖れて過ぎた。體軀を包んでゐる水も音を立てずに働いて、私の體軀は少しづつ深い方へ押しやられるやうな、何者かが徐に岸から遠く私を引き込まうとして居るやうな感じがした。ぬる／＼した潮の肌ざはり、小砂の足の下に、或は腰の下に湧き立つ感じ、私は全く水の思ふまゝにせられて居ると思つた。けれど、また私にはそれが不安であると同時に樂しくもあつた。恐らく魚のやうな、原始の人

間が感じたやうな樂しさであつた。自分もまた海の中の、波の中の一員であるといふやうな自由な心持もした。

日は一時、雲が過ぎ去つた後で、今の間にといふやうに烈しく照りつけた。波は一帶にぱあつと輝くやうに見えた。けれど、別に著いことはなかつた。日の照り出す時、波は一時に言ひ合はせたやうに、ぱつたり響をやめる時があつた。寄せて來る波と、引く波との力が合つた時、一時波の音が止んで、濱はしんとなつた。其短いしじまが破れると、今度は前にも增して、どつと響が高く鳴り渡つた。何事か考へて、相談してゐたのが、纏まらずに爆發したやうに、一層高く鳴り渡ると、暫くして其沈默がまた瞬間海の上をも、岸の上をも領する。何事が起るだらうかといふ期待を人に起させる。其短い間の靜けさの中で、人の胸の中には樣々な考への閃が電光のやうに走る。けれども直ぐそれが響に崩されて亂れてしまふ。

私は水から出て砂の上に臥てゐた。私達が立つて居て聞くと、臥てゐて聞く時と、波の響は異つてゐる。崩れかゝるやうな、嚇すやうな、遠く手を伸ばし、迫つて來ても及ばないやうな、恨みもあれば不安もあつた。けれどいつまで臥てゐても波は別に高くなつても來なかつた。

松林の中では、蟬の聲がヂイッ、ヂイッと眞面目さうに鳴いてゐた。私は着物を着て其の松林の中をまた一人で歩いて行つた。

海洋の旅

印度洋

コロンボから十二晝夜、三千七百海里の間は、波の烈しい日とては一日か二日であつた。併しそれとても、私一人にとつては、全く食卓へ出られないほどではなかつた。

コロンボを出帆した十月七日の午後一時から二晝夜餘を經過しないうちに、我々の船は赤道を通過して南半球へはひつた。印度洋のたゞ中を、この季節に航行する船としては當然のことではあらうけれど、我々は豫期しないほどの涼しい氣候の中で、熱帶を、太陽の直射の下を通過するのであつた。

風は或時は南から船の煙を後方へ、斜めに靡かせて吹いた、或時は北から、同じ角度に左舷の波の上へ、黒い煙を爬ひ廻らせた。

貿易風の季節は既に過ぎたので、たゞそのなごりの微風のなかを、爽涼な感じを味ひながら、南西へ、南西へと、我々の船はアフリカ大陸を目掛けて下つて行くのであつた。

晴れ渡つた日には、早朝から日光は燃えるやうな、併し我々の溫帶地に見る如き曇つた赤さではなく、黄金色に澄んだ光を、上下二重の虚空一面に溢らした。實際、熱帶には殆んど薄明がない。殊に大洋の上に於ては、暗が直ちに光に接した。日が直ちに夜の歩みの後を追うた。まだ闇が水の曠野の上に立ち籠つてゐると思つてゐると、何の豫表もなく、何の警告もなく全く不意撃に、水平線へ日の一角が浮び出る。

初めは光を發しない。たゞ朱玉の一片である。闇もまだ氣がつかない。波もまだ騒がない。見る〱その朱玉は水際を拔け出て、忽ちに金光をぱつと四散せしめる。第一に目醒めて騒ぎたつものは波である。きらつとその光波が空際から傳播すると、もうそれが八方へ散つて、爭つてその洗禮を受けようとする。闇はもうこの裏切りに逢つては全く力をなくしてしまふ。大きな幻のゆらぎ！今までの自分の領土を、夜の闇は、直ちに目の前へ展開して、何處へ逃げる力もなく、居ながらにして姿を消してしまふ。

落日の場合でもさうである。日の間、たゞ大洋の水と、我々の船とのみを照らしてゐた太陽が、まづ第一に水平線へ休息の席を求め得た時、次ぎには最後の力を、一時に集め出して、全體の光を宇宙に發散せしめた後で、吸ひ込まれるやうに水平線下へ沒した時、夜の翼は直ちに水の上へ、蒼空へ一面に擴げられる。日は惜しげもなく光の領土を闇の前へ投げ出す。闇は急速にその利權を回復する。

大洋の果しない荒漠の上で、晝と夜とはこの烈しい對照を見せて交代する。夜を支配するものは水の世界であり、晝を來らすものは蒼空であるやうに、上下二つの無限の領土は虚空を兩分して暗明の影を交互に投じ合ふ。

ところがこの急激に落ち來る印度洋の夜の天空を、月の光が次第に照らすやうになつて來た。最初の雲の間に片月の影を認めたとき、單調を破られる一種の懐しさを感じたが、宵ごとにその感じは次第に強くなつて來た。

實際、この穩かな、人の心を押し鎭める清

涼な月の光が、果てしなき波の頭を照らすのを見るときは、陸上で感ずるよりも一層の懐しさを覺えるものである。日中の餘りに華かな、眩惑するやうな、魅するやうな太陽の光と對照して、一層の柔さと靜けさとを味はせるが為であらう。

たゞ熱帶の月には、我々の地帶で大方の場合に見るやうな、銀白の磨き澄ました滴るやうな光ばかりでなく、其に幾分の黄色を加へ、光度も強くなつてゐるのである。彼南あたりの陸上でも、洋上のこの甲板でも、滿月の夜には新聞ぐらゐは讀むことは出來る。

けれど、晝間に見る目を痛ませ、眼神經まで攪亂するやうな日の光に比べると、何といつても我々温帶人に、最も親しい感じを與へるものはこの洋上の月である。この洋上の月は異鄉の情を起させるといふよりは、直ちに故郷にゐる感じを與へる。

それに天の高く、水の果てしないといふ感じを深く味はせるものは、大洋上の月夜である。晝間とても船外に、波濤を除いては、何の響もないのであるが、夜更けて紫紺の空に、高くかゝつてゐる月を仰いで立つてゐると、如何にも靜寂な感じが身に沁み、悠久の思ひが胸をめぐる。

印度洋特有であるといふ一波長二三浬にも亙る高い波のうねりが、その濃き紺青の兩翼を思ふまゝに擴げて、天際に頭をもたげるのも斯かる時である。

すると月光は、その大きい翼の上へ、銀絲の無數の網をそゝぎかける。瞬く間に、その翼の羽叩きは、波長の伸延は、見える限りの表面へ、ゆるやかな動搖と、靜默の不安とを與へて、その進路に當る何ものもその中に包み、その上へ載せようとする。船も忽ちその上へ乘せられてゆるやかにゆられるけれど、船中の人間には、別にそれが際立つては感じられない。ただ水中で、晝夜を分たず、一分間六七十の回轉數を繰り返してやまない船尾の雙暗車が、その不安を受けて、船の後方へ描き出す波の渦紋に複雜した形を見せるだけである。

併し、老練な船乘りは、水中の暗車と同じく直ちにこのうねりを身に感じて、甲板を歩きながら、暗車の響に耳を傾けてゐる。そして空を仰いで滿月の光が、檣頭に碎け、四方に散り、いま船を背に乘せたまゝ、なほ先きへと身を伸して行く大波の頭が、時に亂れて銀の房となり、白玉の群れとなるのを照らし出すのを凝と眺めいつて、默つて立つてゐる。

實際、大洋通ひの船に乘つてゐる人々に、眞に船乘りの樂しみを味ふのは、如何なる時であるかと訊ねると、「印度洋あたりで、月の晩、一人きり、夜更けに甲板に立つてゐると、何とも言へない靜かな心持がしますな、まあ船乘りらしい氣分といつたらそんなものでせうか」と、私の訊いた多くの人は答へた。

彼等は常に動き流れ、進行してゐる中に、求め得られる靜けさを、その船乘りの樂しみを、與へてくれるのが月夜であると思つてゐる。

またこの頃の夜々を樂しましめるものは、南十字星の出現である。赤道を越えて南半球へはひつたばかりの日には、如何に南方の水平線を眺めやつても、我々の目へ、別に異つた星影は映らなかつた。船橋に立つて、終夜ウォッチをしてゐる士官の一人は、午前の四時頃、南方の天際に見えるから、晴れた日の朝は、見えたらば直ぐ告げてくれるといふ約束にして置いたが、遂にその運びに行かなかつた。その間に三四日經過した。すると、今度は、最早や夕

方から、華かな日が靜かな夜に直ちに接する天の一方、南の水平線から餘り高くない所に、四つの星が十字を圍むやうな形に輝いてゐるのを認めた。

濃い紫色の空が、少し下つて色淺く、微明るく、水と接する一線を下に見て、燦爛と閃くこれ等の星の光は、北斗の七星に比ぶれば稍々強いやうに思はれた。南極を中心として周圍二十度ぐらゐの天上を運行回轉するこれ等の星としては、今我々に最も近く見えるのかも知れない。この十字星の上に點星と呼ばるゝ二個のやゝ小さな星が輝いてゐる。そして我々が今見る十字星は、クロッスを垂直の姿に立たしめないで、稍々斜めになつて、その尖端が直ちに波を射てゐる。その下には濃い藍青の遠波が、おだやかな胸を開いて、その尖端を抱かうとしてゐる。

若し南半球を故郷としてゐる人が、久振に北方から赤道を越えての歸り路に、遠く洋上に閃くこの星を眺めやつたならば、必ず胸を躍らさずには居られまい。我々が夜毎に仰いだ北斗はもう波間に影を沈めてしまつた。空の色にも、星の配置にも、異國の感じは漂つてゐる。

マダカスカルの南端の一角が朝靄の中にぼかし出された。幻のやうな山影、波に消え沈む一帶の陸地、それも一日ならずして、また積水の累層の中に隱れてしまつた。そしてアフリカの大陸がその凸凹した岩角と、濃緑色の丘陵とを我々の眼前に連亙せしめたのは、更に一日たつてからであつた。

ナタル港(ダアバン)では溝のやうに狹い、岩壁の間をすれすれにはひつて、船は、丘陵の下、石炭庫の側へ横づけになつた。いま我々の前に見えるのは、赤い瓦を葺いた、緑葉の中に埋つたダアバン市の人家の連なりである。湖水のやうに穩で、平かな灣内には白い淺瀬も所々に見えて、その上に眞白な海鷗が列をなして列んでゐる。市街はその淺瀬の手前の波打際から丘陵の上へかけて、下街は商館の並列、丘上は居住街と區別して、その中間に會堂の尖塔が其處此處に聳えてゐる。

そして丘陵の背後からは、陸地の奧の山々が夕方の風を靡かして遠く見え隱れてゐる。

今夜は久振で暗車の響もしない後部甲板から、陸上の市街の灯影に照らさるゝ全景を眺めやつた。

「海上より見たる市街の灯影ほど美しいものはない。」とモウハッサンはいつてゐるが、實際、それは、門司でも、香港でも、シンガポオルでも、彼南でもさうであつた。實際この春半ばの南亞の港には、稍々冷たい夜の空氣にも高い花の香が漂つてゐた。水にも黄色な花粉が渦紋をまいてゐた。そして市街の灯は華かに明るく、丘上より海岸まで幾多の星を撒き散らしたやうに、樂しく囁いてゐる。

併しこの美しい灯影の下に、一人の亞細亞人でもゐると思つたら間違ひである。此處は白人種の、詳くは專横倨傲な英國人の獨占地である。モンゴリア人種には絕對禁止の國である。

この港は、その禁園への門戸である。明朝の我々の上陸すら容易でないかもしれない。

銀葉樹

澄み切つたしかし柔かな春なかばの太陽は、今や、ケープ・タウンを取りまく花崗岩の山々の嶺を照らしてゐる。

「獅子頭」から、「十二使徒」と呼ばるゝ山の中腹を周つて、テーブル山の眞背後へ出るまでの間、仰いでも伏しても、山腹から海岸にいたる

までの間、様々な名も知らない野の花が高い薫りを立てゝ咲き亂れてゐるのを見た。

自然の惠と、この植民地政府の野生植物保護の手とは、萬花一時に開くケープの春を思ふまゝに美しく飾り立てゝゐるのである。

その野草の咲き亂れてゐる海岸の傾斜地の花の上には眞白な羊の群れが、一面に散らばつて草を踏んでゐる。そして時々通過する自動車の響に驚いて頭を擧げ、目を見張り、耳を立ててゐる。

自動車の路は、十二人の使徒の併立してゐるやうな山の中腹から、その背後へ廻つて、爽かな空氣のなかを、或は花野の上を、或は松林の間を、或は柏木の並木の下を、幾度か迂回し、幾度か昇り降りして行くのである。路の兩側には、製紙の原料にするといふ柳に似た木の茂りや、椿の藪に似て黃色い花を無數に付けた矮樹の一面に連なつてゐるのや、それ等の植物に埋沒して、所々に赤色の瓦を頂いた、蔦の葉の壁に爬ひまはつた白人等の住家が見られる。

テーブル山は正面から見ても背後から見ても全く同じ姿を見せてゐる。嶺は平かに切り取りでもしたやうに、また手で平かに撫でつけでもしたやうに、一直線を引き亙してゐる。

そして麓から眞直ぐに屹立つてゐるので、丁度大きな屛風を引き伸べたやうである。

その屛風の中腹にあたつて、まづ第一に目にはひるものは、銀色に閃く一簇の林叢である。午後三時頃、日はいまやこの山の背後から中腹へかけて、澄んだ光を注ぎかけてゐる。この銀色の一簇は、その光を千萬の葉に反射させて、忙しげにひるがへる。そして全林が搖めいて燻し銀の光を四方へ散らすときは、その上から臨んでゐる山容までが搖ぐやうに思はれる。見ると、その銀色の簇は、此處に彼處に、一簇また一簇と、或は傾斜地の上に、或は瞰下す谿の間に同じ光を反射させ、同じ搖ぎを立ててゐる。——この地に特有な銀葉樹の林である。

この樹の竹の葉に似た銀色の細長い葉には、一面に纖毛が生じて、葉の周圍までをも取りまいてゐる。

その葉は細い枝から簇生して、その枝も幹も薄い銀皮をまとうてゐる。この木の種子は松果に似た外殼に包まれてゐて、その中には楓の實に似たものが殼の間に付着してゐる。その實は、小さな笠を戴いた下に、白い綿毛をつけ、その下に、細い纖維で、眞黑な實を垂れてゐる。この實の風に乘じて飛びゆく可憐な姿は、この地の秋、三四月頃に見られるのである。

テーブル山の背後から、路が小高い地點へ出て來ると、右手に當つて、この銀葉樹林の頂を掠めて、印度洋の波が遠く寄せて崖下に眞白に碎けるのを見る。其處は葡萄牙人や和蘭人などの往時の船乘り等が、幾多の船を乘り沈めた『歎きの灣』と呼ぶ難所である。左手には果しない大西洋が、ひた押しに押し寄せて市街の下まで直ちに迫つてゐるのが見られる。兩大洋を一望に收める地點である。

セシル・ロオヅの記念像は『惡魔頭』と呼ばるる山の中腹に、市街を脚下に、大洋を望み、彼の事業の生きた記念たるアフリカ大陸の内地を遠く俯瞰する地に建てられてゐる。彼の住家はその下に保存せられてあり、彼が日頃好んで散歩し、疲れるとそれに倚つて默想に耽るのを常としてゐたといふ樹下の椅子もそのまゝ保存せられてゐる。

そして彼が飼養してゐた各種の野獸や、禽類が、同じくそのまゝに廣い草原の中に鐵柵を結び、欄を構へ入れてある。獅子が幾頭か石の上に半睡をしてゐたり、孔雀が廣い草原を得意げに歩き廻つて、雉子のやうな叫び聲を立てゝゐる。

記念像は、廣い石段の上に、ワットの製作したといふ馬上の銅像の「精力」を表象するものを前にして、更に一段と高く石階を登つて、その奥に、石の高い太い圓柱を幾本となく立てた堅牢な石廊の、雨覆を張つて、嚴しく構へた中央の壁龕に、右手を頰に當て、左手を前へ曲げて、稍々頭を傾けて默想してゐる彼の胸像が、如何にも力強く彫り出されてゐる。案内してくれた古谷商會のK君は、その記念像の背後の休み場へ我々を導いた。丸木と小石とで作つた小さな小家には紅茶の用意が出來てゐた。我々のほかに、英國の水兵が母親らしい女をつれて先へ來て休んでゐた。

休み場から下の方は急傾斜をなして市街の上から海を見おろした。そしてその傾斜地には松の林が日影を葉と葉、枝と枝との間から透かして、根元の砂地へ柔かな模様を織り出してゐた。松の葉は我々の國に見るものよりは針葉が長かつた。松果も遙かに大きかつた。私はその松果の大きな一つを記念に攜つてポケットへ入れた。

小家の傍で一人の老爺が薪を割つてゐる。そしてその周圍にカナリヤのやうな鷄の兒が、ピイッ、ピイッ鳴きながら蟲を啄んでゐる。いかにも靜かで、故郷の松林の中へでも歸つたやうな氣がする。カステラを細かくしては、その鷄の兒に撒いてやると、爭つて一層ピイッ、ピイッ鳴きながら拾つてゐる。

「お客樣、木切が飛びますぜ。」そんな事を言ひながら、老爺はまだ薪を割つてゐる。その手斧の響が林から、谿の方へ谺して、いかにも暢々した春の日の氣分が殘りなく行き亙る。

ホオッ、ホオッと山鳩が林の奥から、くもつたやうな聲で鳴き出した。すると、今度はすぐ近い草原で、孔雀が二聲三聲叫びをあげた。栗鼠がかさ／＼音をさせて傍の栢の木へ攀き上つた。

久しい間陸上のこの靜けさを味ふ事の出來なかつた我々には、何よりも尊い氣分であつた。この先き我々はなほ五週間以上晝夜脚下に船體の動搖を感じて行かなければならない。機關の響と、波浪の叫びと、暗車の騷音とに神經を亂されて行かねばならない。

暮れゆく春の日の光は、淡青の空に薄紅の雲を漂はして、山懐の銀葉樹は一抹の霞のやうに次第に背景の中に沒して行かうとしてゐる。ねたましきまでに鮮かな草原に、羊の鈴の音が此處彼處から夕方の冷い空氣に響を傳へて來る。花の香が吹き過ぎる海風にあふられて斷續して過ぎる。松の林、柏の林、竹の林、その間を點綴する赤瓦の人家、緑をのべた草原、背後の山、山の中腹を飾る銀葉樹林、大西洋の平かにのびて天際につらなるのを前景とした山下の美しい市街！

K君は「このテーブル山下を故郷に持つた者は、遠くへ出ても必ず立ち歸つて來ると、よく英國詩人などが歌つてゐますが、實際さうだらうと思ひます。」といつた。「あのテーブル山の巓へ雲がかゝつて――それをこの土地ではテーブル・クロッスといふのですが――見る見るうちにそれが雨となつて、市街の上へ急射して來る時の壯觀といつたら有りませんね。到底他所では見られますまい。南極から來る寒冷な空氣が第一に衝き當るのはあの山で、それがすぐ雨となつて降つて來るのですからね」ともいつた。

實際、美しい、緑濃き南アフリカの尖端、世界の花園、陸地には寶石を産し、海には魚類夥しく產するこの豐土、氣候も四時を通じて春半ばの暖かさに過ぎないこの樂園、然しこれはたゞ白人のみの、詳しくは英人のみの樂土である。著色人種には――全亞細亞人種には拒まれたる禁苑である。居住權は勿論、一時の上陸すら容易に許されない。特殊な關係にてこの地に居住してゐる日本人は古谷氏初め七八名に過ぎない。我々と同船して來た二人の商用ある人々は、或日限を定めて初めて上陸がゆるされた。我々の上陸にしても、日本人の男子にのみ限られた。その他の亞細亞人は男女を問はず、一時の上陸見物すら禁じられてゐる。

同盟國といふやうなことは、この南亞植民地の住民には何等の響をも與へない。彼等は個人としては兎に角、團體としては直ちに亞細亞人を排斥する。慣習と法律とは、たゞ一語著色人種といふ下に、如何なる亞細亞人をも律して排斥しようとする。若しくは、以前の人々が×××、を遇した如き待遇で迎へるのである。この慣習と移民法とを改めない限りは、如何に努力しても、日本人のアフリカ發展は、事實困難であらう。

市街の夜景は脚下に美しいイルミネエションを見せて、その先きの方には、數多いマストの頂を掠めて、大洋の平かな波が眠るやうに伸べしいてゐる。

古谷氏の人々の住宅は『惡魔頭』の中腹にあつて、テーブル山を背景に、市街地を見おろしてゐる。

匂はしい花の香の漂ふ春の闇は、これ等の山腹の居住街を包んで、靜かに人々の窓へ押しよせて來る。窓外に見える街樹の頂を越して、テーブル山の巓の上に、微明るい夕空がたゆたひがちに暮れかねてゐる。

K君と一緒に散歩に出て見た。靜かな山腹の居住街は、路幅が廣く、樹木が兩側に繁茂してゐる。松林の中の小徑は谿間の牧場へつづき、坂を登れば、また其處に廣濶な自動車路が通じ、電車路が通じてゐる。歩道の上には白服を着けた小娘等が駈けくらべをしてゐる。ピアノの音が茂みの奥から聞えて來たり、折々は影のうつる窓から人の話聲が洩れたりするけれど、一帶がひつそりした靜けさが四邊を領してゐる。そしてところどころの草地から澄み切つたまろぶやうな蟲の音が聞えて來る。K君は、『此處は春でも夏でも、年中蟲が鳴いてゐますからね』といつた。實際、此處には秋の靜けさと、春の樂しさとが混じ合つてゐる。四時に亙つて、蟲が鳴き、花が咲いてゐる。

この亞細亞人にとつての禁苑の中で、纔かに許された一郭に立て籠つてゐる人々の親しい晩餐に列した者の中には外交官のS氏がゐた。ロンドン支店へ行くエヌ・ワイ・ケーのM氏がゐた。農商務省のM氏がゐた。古谷商會のK氏がゐた。私も其處へ招かれた一人であつた。

ケープ・タウンの市街を復び自動車で埠頭にゐる船まで送られて歸つたのは、春の夜更けの風がさすがに肌に沁みて寒だつ頃であつた。

翌朝早曉、我々の船は埠頭を離れて外洋に向つた時、仰いで見ると、テーブル山の頂には昨日聞いた眞白なクロッスが靡き掛つて、その卷き伸びるにほふ姿は、人の情緒をそゝらずにはゐなかつた。――再びとこの南亞の一角へ、このケープの市街へ、この禁苑の花草の中へ、足をいれる機會はないであらう。

I shall never see you again! 私は一人

そんな心持をして甲板に立つてゐると、あのテーブル山下の市街に、周圍盡く敵人のやうな中に、勇ましく活動してゐる少數の同胞の祝福と發展とを、衷心から祈らずにはゐられなかつた。

沙漠の花

單調な十四晝夜の南大西洋の航海！ しかもケープ、タウンの早春の氣候から、ふたゝび赤道を南より北へ越えて、蒸し暑い無風帶の中をくゞつて來た我々の船は、中央アフリカの西端、カアプ、ウェルドの一角へ來て碇泊することになつた。船の進行中はいかに暑くとも、さすがに洋上の涼氣を多少とも味ふことは出來た。それが碇泊と共に全く不可能になつて、しかも眼を痛めるやうな石炭の粉末を遮るために、窓といふ窓を二重に鎖して、船室内はむつとするほどの暑さで、汗は全身を流るゝほどになつた。

自由自在に波を潜つて、鱶のやうな、海豚のやうな黑人の子供等が船の周圍に集つて來て、銀貨や銅貨を投げてもらつて、奇聲を發しながら、倒しまに水中に身を沈めて、一つも過ちなく拾ひ集めてゐるのも、一層暑さを感ぜさせた。

陸地つゞきの奥深い大沙漠から來る熱氣のためか、洋上の水の蒸されて空に立ちのぼるが故であるか、一種の濃い靄が天を包んで、太陽は思ふまゝの光を發し得ない苦しさを、一層の暑さとなして萬物の上へ壓しつけるやうであつた。

併し久振で大地を踏む足は、一歩毎に身になるやうな確さを感ぜしめた。動きなき大地の有難さは、不斷の動搖を脚下に感じてゐた者でなければ味はれない感じに異ひない。

身内の五臟までが在るべき場所に居据つて順調な響を發するやうである。

我々が東京の市中などで、よく街路の砂塵を浴びて咲いてゐるのを見るあの紅色の夾竹桃は、このアフリカへ來て、初めてその郷土に於て、如何にも樂しげに、またいかに誇らかに笑み盛つてゐるかを見ることが出來る。この花には、既にこの大陸の東海岸に於ても接することが出來たが、殊にそれより一層サハラ大沙漠に近いこの地に於ては、更にその根元地に近く繁茂してゐる自然さを思はせられる。そのほか、我々が温室内に見てゐた見るやうな色[illegible]な、名も知らない幾多の草花が、艶に笑み盛つて、その強い高い薫りは、日にさらされ、風に蒸されるこの大陸の黒土の上に、[illegible]に漂つてゐる。

十一月五日、日曜日の午後、赤い瓦で屋根を葺いた、鮮かな植物に取圍まれた、このダカア市の人家の大方は戸を閉ぢて、しんと靜まりかへつてゐた。街路の上を時々通つて行くものは、赤い帽子を頂いた眞黒な兵士か、白色な寛袍から眞黒な片手を上げて、頭上の籠を押へながら、跣足で歩いて行く女の物賣か、藍色の地に唐草模樣を染めた質かな布を、暑苦しさうに身に纏つて行く土人の僧侶らしい群れかである。

私はこのひそみかへつた街路の上を、柏樹の綠葉の房々繁つた並木の下を默つて、歩いて行つた。そして時々立ちとまつて、耳を澄ましたが、何處からも高聲一つ聞えて來ない。白けたやうな寂しさが四邊に行き亙る。そして大地の胸からは、吐き出すやうな暑さが立ちのぼつて、いつの間にか身體が疲れて來た。

小さな公園の中の、花の咲き亂れた木の蔭のベンチへ來て腰をおろした。時々がさ〳〵と樹

の枝を飜迴つてゐる栗鼠の小利口さうな顏が葉の間から見えるのと、銀色をした六七寸もある蜥蜴がちよろちよろ足許へ出て來て、また臆病さうに草の中へ姿をかくすのとがあるばかり、周圍の大陸の寂寞が身に沁みて來る。

私はふと思つた。この老大陸の一角へ、この赤土の國へ、二度と足を踏むやうなことはないであらう。一萬里以上も彼方の日本から、此處へ來て、同じベンチへ腰を卸ろす人も殆んど稀であらう。さう思つて、私は凝とその寂寞の中へ身を浸して、涙のにじむやうな心持で、何ごとであらうとも、この老大地の立てる囁きに聽き入らうとしてゐた。と、不意にそのとき、この重たい空氣の寂寞を破つて、悲しげな笛の音が何處からともなく響いて來た。

ピイツ、ピイツといふ短い迫つたその調は、實際何事かを泣きうつたへるやうであつた。いつ如何なる時にか經驗して、しかも忘れてゐる事柄を、人々の胸に思ひ出させるやうな、思ひつめたものであつた。

その笛の音は、街の一角から、並木路の一隅から起つたかと思ふと、彼方の角からも、此方の隅からも聞え出して、やがて集つて、次第に競ふやうに鳴り響いて、近づいて行くやうであつた。

私は思はず公園のベンチから立ち上つて、その響の後を追つた。

白い木綿の袈裟のやうなものを肩から掛けて、顏も、頸も手も足も眞黑な、跣足の男子が、短い笛を口に當てゝ吹きながら、四五人先きにたつた。後から同じ姿の、男女の區別もつかない兒童が六七人、短く縮れて、栗のいがのやうに見える頭髮を、さまざまに剃り分けた頭をして、ついて行つた。焦土の胸から生れ出たやうな黑童の一群!

アフリカそのものが響を立てるやうな、寂しい悲壯な笛の音! ピイツ、ピイツと短く響いて、直ちに人の胸へ迫つて來る。何を吹き、何を現はさうとするのであらうか。彼等はたゞ大地の胸より受ける衰亡の一種の感じを、直ちに口により、笛によつて發散してゐるのではあるまいか。

その響が次第に遠く、黑童等の姿が並木の下に小さくなつて、やがて何處へか吸はれるやうに消えてしまふと、周圍は一層森然となる。そして、形は見えないが、ヒン、ヒヨロと澄んで響く鳥の聲が、遠く近く、重い空氣に震動を與へてゐる。

私は何といふこともなく、或る街の一角を横へ折れて見た。すると、百歩も行かないうちに、私の眼前へ不思議な光景が描出せられた。樣々な身裝をした黑人の一群が、街路を立ち塞けてゐる。その群れの中からは、時々彼方此方に、奇妙な叫聲が聞える。少しづつ搖ぎを立てるやうである。

けれど、黑蟻の群れが執念く物に取りついたやうに、崩れはしない。一團の黑い塊をなしてゐる。

何事がその中心をなしてゐるのだらう。

私は足をはやめて近づいた。一群の中心には、少しの空地を殘して、その中に、二人の裸體の黑人が必死になつて爭つてゐる。何がその原因とも解らない。けれど彼等は最早や今までに、可成の時間闘ひつゞけてゐたのであらう。肩先きや、手頸やに齒の跡も見える。血が黑い皮膚を傳つて氣味惡く流れてゐる。上づツた白眼がむな、それ等の眼は血ばしつて、唇の厚い眞紅な口からは火を吐くやうに、急しい呼吸をしながら互にねらひを付けてゐる。

ぴたつと組付いたと思ふと、その攻撃の執念さ。全身の筋がひきつツて、肉と肉とが噛ひ合ひ、骨と骨とが打合つて、魂の奥までも嚙み

込んで行くやうである。何といふ恐ろしい爭ひであらう！　野獸の生死の爭ひ！

しかも彼等は聲を立てることもめつたにない。この暗闘の二人を取卷んでゐる者共も、殆んど聲を出さない。死がもう全群の上へ行き亙つてゐるのであらう。たゞ一方の者が咽喉ぶえを嚙み切られて、地上に倒れるのを待つだけである。彼等には仲裁すべき力もない。

また一旦はじまつた死闘に對しては仲裁すべきものではないと思つてゐるらしい。死が萬事の解決である。

私はそれ以上凝つと見てゐられなかつた。それに船へ歸る最終ランチの時間も切迫して來た。その黑い一團の者と同じやうに、私もまた默つて、その群れをはづすより仕方なかつた。

このアフリカの老大陸の一角で、彼等はいま死の爭ひをしてゐる。自分等の本來の領土が他人種に占領せられようが、また自分等の仲間の若者の多くは、眞赤な帽子を冠せられ、褐色の軍服を着せられ、船へ乘せられて、その他人種の大きな戰闘のたゞ中へ運び出されようが、そんな事には無頓着で、互に死を爭つてゐる。

私は船へ歸つてからも、一層胸苦しい夜がこの老大陸の胸の上へ黑衣を卸ろして來ようとも、あの血走つた眼の、火を吐くやうな口をした二人が、いまだに死闘をつゞけてゐるやうな氣がしてならなかつた。そして彼等を取卷く一群の黑團も、永久あの街路の上で、死が各自の上へ來るまで、凝と立つてゐるやうでならなかつた。

雪線踏破七日記程

河東碧梧桐

雪線踏破七日記程

一　大町まで

粘り強い梅雨空の雲は、東京に居ても拭ひ去られさうにない。又たそれを吹き拂つてしまひさうな風模様もさゝない。が、兎に角約束の日は來た。嶽の眞上でこの雲を一氣に吹き落す風に出喰はすつもりでをれば、それがどの位恐しい光景であるかを豫想してをれば、却つて山嶽としての、日本アルプスとしての緊張した痛快な意味を齎すものになるかも知れないのだ。

七月十二日の夜行で飯田町を立つて、甲府で夜が明けた。八ケ嶽は澄み切つた青空の下に、其一峯々々を新たに磨きをかけたものの如く、くつきりした空際線を劃してゐる。甲斐駒の連山も、次第に晴れ行く雲の中から、其駒ケ嶽の鋸齒狀の峯頭を一つ／＼、手品師が魔の箱から物を取り出すやうに露出しつゝある。さうして其鋸齒狀間の殘雪が朝日に射られて、人の目を眩ますらしくキラ／＼する。見てをる中に、地藏、仙丈の峯つゞきもあらはになつた。この鹽梅ならと思つて、ずつと四方を見廻すと、甲斐御嶽の左方のずつと奧かけて、八ケ嶽の裏廻りには、處々黑色に染めた雨雲か、大きな重味を背負つて、ぢーと壓しつけられてゐる。金峰山方面だと思ふ處には、驟雨が催してゐるらしい。八ケ嶽の頭の上許りが、イヤに底晴れがして、我一人聳めたりといふ風に八ケ嶽の取りすましてゐる攸ましけな沈默は、やがていつとは計られない、暴風雨の豫兆と見られぬこともないのだ。

明科に下車して晝飯を濟した後、一昨年黑部から白馬に登つた以來、二年間といふもの寢足になつた自分の脚力をためす爲め、平地ではあるが、一二里の道をあるいて見る氣になつた。長い犀川橋を渡つて、越後の絲魚川に通ずる縣道を歩むのは、言はゞ何の風情もない道なのであるが、それでも今少し／＼とあるいてゐるうちに、三里あるといふ池田まで來てしまつた。其間も日は照つたり曇つたりする。犀川橋に出れば、アルプスの連嶺が、其前に蟠屈する群小の丘陵を押しつけて、仰ぐ許りの山屏風をそゝる大偉觀に接する筈であるのが、それには一切雲の中に封じ込められて、たゞ[illegible]川原、乳川原、[illegible]川原の白砂か、我々が漸と身のまはりに寄り添ふのみだ。嶽の雲は一層へバリついてゐる、嶽にしがみついてゐる、と予は[illegible]語した。餘り久しく嶽に被さつてゐるので、それが漆黑に染んだらしい雲の色だ。それでも嶽にしかみつく力を緩べないで、何時いつまでも離れまいとしてゐる執着の雲だ。遠く越後の方に根廣な根を植ゑて、何處かに切れ目でも出來れば、直ぐに其補充をしようとする大軍團組織の雲だ。これがどうなるものか、ともう投げやりにしてしまつた。

池田から人車にした途中で、今度行を共にする一戸博士の車に追ひついた。博士と車を列ねて大町に入る頃、針ノ木谷の入口だと思ふ邊に夕立するらしい雲の刷け目が彩られてゐた。對山館に著いて、準備の爲め先著してゐた如是閑の嶽を見るなり、予の發した第一語は、此雲をどうするつもりだ、といふのであつた。

二　準備

山に行くので暫らく留守にします、といふ札

について、そんな危險な山へどうして行くのです、といふ質問を發せられると、一寸其返事に窮せざるを得ない。返答が出來ないのではない、かういふ爲めにといふ、簡單明瞭な詞が見出されないからだ。何しに淺草へ行くかと言へば、活動寫眞の新らしいフィルムを見る爲めだと答へ得る。何しに避暑をするかと言へば、神經衰弱療治の爲めだと言ひ得る。何しに徒歩主義會に入會したかと言へば、神身鍛錬の一方法だと說明し得る。何しにこの暑さに遠足をやるかと言へば、名所や舊跡を知る爲めだと理由を述べ得る。何しに玉乘りや輕業を見るかと言へば、我々の爲し得ない危險を敢てする氣分を味ふともこぢつけ得る。何しに深夜墓地などを散歩するかと言へば、言はゞ恐いもの見たさに過ぎないとの外に答へやうはない。何しに骨董をいぢるかと言へば、骨董の黴びた色調に我の共鳴する趣味感を語るの外はない。何しに酒を飲むかと言へば、たゞ飲みたいから飲むのではないか。何しに……山に行く動機と理由と趣味性は、總て是等の動機と理由と趣味性の複雜にこんがらかつた處に發してゐる。それを一言で、かういふ爲めだといふわかり易い返答を得ようとするのは、得ようとする者の無理な註文でないであらうか。若し嚴密にいふならば、我々の知識慾、感情慾、意識慾、それらの總てを滿足させる爲めと言ふの外はない。たゞ最もわかり易い事は、山に行くのは、金儲けに行くのではないといふことだけだ。

一體予の主義として、予が個人的に又た社會的に行動する總ての事を、我が生活の發現と見てしまふのだ。之は本職、之は副業、之は娛樂、之は學問、之は餘事、之は社會上の公的性質、之は夫婦間の私的內事、といふ風にそれぞれに明かな區劃を立てゝ、自分の行動が章魚の足のやうに分れ／＼になつてゐる、と考へるに考へられないことはない。が、さう考へることが、往々にして、章魚の足は自己といふ章魚の胴體から出てゐることを忘れて、足それ自身が孤立した自己を形づくつてゐるやうな謬つた思想を捏造せんでもない。之は娛樂だから、之は餘事だから、之は家內の人に知られない出來事だからといふ口實の下に、隨分人格を無視した馬鹿を盡すのが、俗人の十人が十人のする事だ。が、それ位ならまだ勘辨は出來る。之は學問上の事だ、之は藝術上の事だ、として學問は學問、藝術は藝術、とさういふ一つの研究物體が、自己と離れて宙にぶら下がつてゐるやうな謬想に至つては、滔々として、今日の大學教授や、文藝に携はる者を毒しつゝある。單り大學教授や文藝の士許りぢやない。政治家でも宗教家でも實業家でも、十中の八九は皆同じ宿痾に犯されてゐるのだ。さうして、一寸感冒にかゝつたというても醫者騷ぎをする者が、この大宿痾に惱んでゐる其病源を知らないで、ウッカリヒョンとしてゐるのだ。イヤ萬更氣がつかんのぢやない、今日の青年の思想が、自分共と大變に違つてゐる、どうも年寄りの言ふことを馬鹿にする、と其處に大なる缺陷を感じてゐる者は、多少とも其大宿痾に惱まされてゐる自己の容貌を認識してゐる證據なのだ。それもヤブ醫者が、扁桃腺炎でも窒扶斯でも、インフルエンザでも肺炎でも、皆一樣に熱病と斷定して下熱劑を與へるやうに、漫然として新舊思想の衝突といふ概念で、それも餘儀ないことだ、己達の若い時も、年寄りとは意見の違つたものだ、と妙に納まつてゐるのが多い。なぜ青年の思想が變つてゐるのだらう、なぜ年寄りのいふことが腹に入らないのだらう、と其由つて來る所を窮めて、さうして其處に考量を費すことをしないのだらう。が、既に或る鑄型で固められた年寄りの頭は、其思想

の衝突に際して、青年の思想を吸收して、そこに新たな跡を印し得る程の軟らかさを喪失してゐる。言はゞ三寶に盛られて既にこち〳〵になつた餅の様なものだ。自分に黴の生えてゐる事を知らないで、新たに舂かれた青年の餅をケナシつけようとしてゐるのだ、さういふ憐れな、みじめな容體をしてゐるのも、要するに學問や實務が、學問の世界、實務の世界にあつて、自己の世界とはかけ離れた處にあるものゝ如く思惟してゐる謬想に基くのだ。之を總て自己の世界、自己の生活の一體となつての發現と考へるやうになれば、娯樂だから、餘事だから、家内の出來事だからと區別して、之を本業以外に緩みをつけることが出來なくなつて來る。右手にペンを持つ時も、左手に美人の手を握る時も、それは同じ我が生活の發現だとすれば、ペンを持つ時の氣分と、美人の手を握る時の氣分を別々に拵へ分けることは、出來ないのではないか……。

こんなことを言つてをると、雪線踏破記の夜が明けなくなる。が、こんなことを言ひたくなつたのも、予の登山準備と、如是閑の計畫してゐる登山準備とが、まるで別々の心で行はれてゐる事を見出したからだ。同じ山に行く、同じ一行になつて連れ立つて行かうといふ者にも、これ程違つた思ひ〳〵の考へで動いてゐるといふことに、寧ろ興味を感じたからだ。

予の登山は、矢張予の生活であるといふ立場から、予の生活が素樸でなくて寧ろ粗野であり、簡易ともつかず單純とも言へず、たゞありのまゝに蕪雜である事に滿足してゐる立場から、予の準備は、飢渇と寒氣に堪へ得る範圍を出る事には毛頭考へ及ばなかつた。が、既に用意されたものや、宿の主人に命じて買ひ集めたものなどを見ると、副食物の鑵詰類にしても、座敷に擴げられない程の嵩になつてゐる。誰しもこれで滿足したといふ極限の無い限り、有れば有り、無ければ無いで濟むものだ。山に往つては、雪水で煮たブツ〳〵な鍋飯と、磨りも漉しもしない味噌汁で我慢しつけた予にとつて、これらの鑵詰類、コンデンスミルクや、ミルクチヨコレートや、お多福豆や杏や桃の果物や、それにミルクキヤラメル、ドロップ等の菓子類までを、氷砂糖をウンと用意した上に携へる事などが、單純なる贅澤でなくて、徒歩であるき得る處を、駕籠を用意されたやうな、予自身の生活にとつての變調と矛盾とを感ぜずにはをれない。まして予の頭には、嶽の密雲がこびりついてをつて、それを片時も忘れる事は出來ない。山に行くのか、暴風雨に曝されに行くのかわからない位に思つてゐる。山のシケを想像する時、これらの贅澤品が何の役に立たう、結句は遭難船が荷物を海中に投ずるやうな運命に終るものとしかならないのだ。が、予の心を如是閑の心の中へ割り込ませて、そこに一陣地を占めるには、明日出發といふ今夜の準備最中では、到底不可能なことだ。彼の素人臭さを暗に冷笑してゐるやうな、さうして其樣々な註文を滿足させることは、私には大困難事だと少からず迷惑がつてゐるやうな宿の若主人と共に、自分の世界を守つてたゞ傍觀してゐる外はなかつた。早く言へば、どうとも勝手にしろ、と投げやつてしまつたのだ。予は其準備に我から好んで忙殺されてゐる如是閑とは沒交渉に、明日からのプログラムを次の如く書き留めた。

一行。一戸直藏（理學博士）　長谷川如是閑（大阪朝日記者）
河東碧梧桐（日本及日本人記者）
案內者。傳刀林藏、黑岩直吉、外に人夫五人。
第一日。大町發、籠川谷大澤附近野營。
（大正四年七月十四日）

第二日。針ノ木峠より針ノ木嶽を究め、蓮華嶽頂上附近野營。

第三日。蓮華嶽を下り北葛乘越附近野營。

第四日。七倉を經て舟窪乘越野營。

第五日。烏帽子嶽附近野營。

第六日。烏帽子嶽より南して、適當なる場所に野營。

第七日。黑嶽を究め硫黄澤乘越野營。

第八日。槍ケ嶽を究め赤澤小屋泊。

第九日。上高地温泉泊。（大正四年七月二十一日）

蓮華嶽より烏帽子嶽までの間は、今日まで山岳會の榎谷徹藏氏、たゞ一度通過したるのみ、日本アルプス中の暗黑なる部分たり。

其信越國境線の通過は、豫定の二日にて行き得るや計り難し。

この一路を通過せし經驗ある案内者は、他の登山者に傭はれて、殘る案内者に其經驗ある者なし。案内者傳刀林藏は、未だ通過せざるも、多少の自信あれば、是非とも同行したしといふ。冒險的なれども總て之を彼に委任す。

準備品中に草鞋百五十足あり、人夫一人の擔荷量は、草鞋のみにては九十足を制限とす。草鞋のみにても一人半の人夫を要す。

米は一日人夫一人當六合宛、我々に四合宛とすれば四升二合と一升二合、合せて五升四合を要す。其十日分は途中一部分を[illegible]とするも、少きに非ず。カンジキにも必要なるべしとの事なるも、之を穿くも亦た經驗の一なれば之を携帶するを可とす。

アルペンストック、鳶口類は、普通の金剛杖よりも、きゝめあり。[illegible]雨の時の用に防水布の帽子とテント[illegible]は必要の條件なり。

米は三度目は[illegible]の汁として[illegible]十人前の汁としては、若しこれのみを副食物としては不足を告ぐる恐れあり。

榎谷徹藏氏の時は、最初人夫十六人を雇用せしといふ。途中次第に人夫を減じて、遂に二人にて終りを告げしといふ。我々一人につき二人の人夫の豫定なりしも、六人にては背負ひきれず、遂に一人を増して七人となせり。我等の人夫の中にも、初めて山に行くもの三人を算すといふ。登山者に病氣其他事勢の如き事故を起す場合は、時によると山慣れざる人夫の中にも存することを注意せざるべからず。

防寒具として、冬シャツ、ヅボン下・靴下、冬服上着、毛の[illegible]を識に、[illegible]ズボン、冬外套、[illegible]毛布[illegible]を用意せし。

テントは[illegible]竹にてなしあるも、風雨にては到底支ふる能はず[illegible]その時は如何すべきか、[illegible]の方法を講ずるの外なからん。

三　籠川谷

昨夜は携帶品の整理や、東京への登山報告などで十二時過ぎて、床に入つた。山に行く時の慣例として、いくら早く寢ようと思つても、夜が更けると思ひつゝ床に入つた。十疊の間に一杯にひろがつた蚊帳に入つたのであるが、けさも矢張山に行く慣例として早く眼が覺めてしまつた。便所に行く途中に、東京で見るやうな物干の露臺がある。そこに上つて、山の方を仰いで見ると、きのふよりは雲が高い。殘雪の處々に殘つた峯の頭が、一部分露出してゐるが、一方には朝の驟雨が、一谷を濃く降り染めてをる處もある。この雲、この驟雨と、予の臆雨に對する懸念も、山の雲と首引するやうに、いつまでも執着を持つてゐる。それを又た、我ながら餘計な事、執着の過稱だと打消したいやうな氣もする。それもこれもいづれは山に行く者の、心の騷がしさなのだ。政治家が其抱負を述べようと、將に演壇に立たうとする時の、心の騷がしさよりも、遙に純な眞實な心の動きであることを思ふのだ。都會に慣れた落著かぬ振動の餘波であることを許ることは出來ないとしても、何の野心もない、何の手段もない、何の情實もない心それ自身の騷がしさであることを誇り得るのだ。

一通り出發の準備をしてしまつたのが、もう八時を過ぎてゐた。依然として嶽の方に間歇的に驟雨の來てゐることを見た予は、一應人夫に向つて、けふの出發を一日延期してもよい、雨に逢ふ事を知つてゐながら、それを見かけて行くにもあたらない所以を說明すると、既にそれぞれの荷物の分擔をきめた人夫の一人が、

『夕立ならへー、さう心配することはねえ、晝頃にはキッとピント來る。これがへー、地雨なら自分達だつて行くのはへー御免だ。』

といふのだ。勞ひそれでも、と此の土地には不

慣れた者が天候の事を云ふ權利はない。玄關で草鞋を穿いてゐる間に、宿の主人が淹れのお茶一杯を汲んだ。それが天候の都合では、永久に我等を記念するものになるかも知れない、といふやうな淡いうら淋しさが、其色氣のない沈んだ黃色さの上に流れ漂つた。が、久し振りに草鞋で大地を踏む一步々々に、何處か身輕な土に馴れた落著きと、未來に大事業を抱へてゐる心の持ち方の安らかさとが自覺さるゝのであつた。

大町の町を離れると、この邊では田に蟲が湧いたといふので、どの田にも螢籠に玩具の船をつけたやうなもので、稻の葉の上をこすつて步く百姓がある。どんな蟲が湧いたのかと話し寄つて見ると、其の籠の中には、螢を小さくした蟲が眞黑に浮いてゐた。この百姓達は、毎日一夕立のあることを祈つてゐる。少し大きな夕立が來れば、この蟲を自然に流してしまふのだ。が、山に行く我等は、一夕立も半夕立も今後十日間は降らないやうにと祈つてゐる。餘り露骨に、矛盾したことをお互ひに祈つてゐる者が、假令一言二言でも、親しげに言ひかはすといふのが行きずりの緣なのだ。さうした世相がやがてくさぐさの悲喜劇を生むのだ。

野口といふ村を過ぎる頃、古代的な人形を刻んだ自然石の石碑が處々に立つてゐるのを見た。近寄つて見ると、左の大袈裟な衣冠束帶をしたやうなのは、女の黑髮の後ろに垂れた所を現はしたので、夫婦の手をつなぎ合つた大まかな彫刻なのだ。人夫はそれを道六神樣だと言つた。道六神と言へば、もつと北の方の南部秋田津輕に行くと、大抵陰陽石を祀つてゐる、關東の馬頭觀音類似のものだ。文明が進步したのか、又た虛飾になつたのか、陰陽石を象徵する爲めに、こゝでは夫婦和合の形を現はしたのだ。關東の馬頭觀音といふのも、變挺な名前で、それに種々の傳說もあるさうだが、要するに道六神の陰陽石の脫化したものだと思ふ。それは兎に角、十人の野郞が揃つて無人境の山に行くのでは、この道六神樣に願をかける謂れは毛頭無いではないか。

鹿島川の橋を渡つて、大出の村を過ぎると、籠川谷と鹿島川との出合に、永い年月の間に出來たらしい大きな三角洲のやうな高原がある。其の高原を行く中に、立木の松の間に、チラチラ白樺を見るやうになつた。白樺は土地の標高の或る水準線を規定する木だ。尤も土地の寒暖、緯度の相違にも由る事だが、略ぼ同緯度の甲信越等の山岳國では、約何千尺以上といふことが、若し白樺を認むとすれば明らかに規定され得ると思ふ。白樺を見れば、山に入つた感じにならないのか、このアルプスの地帶を踏む予の貧しい經驗の中には記憶することなのだ。

三角洲的高原は、其一尖端を以て籠川の谷に突入してゐるさうだ。三角洲が突入してゐるのでなくて、籠川谷に堆積した土砂で、三角洲に繼ぎ目を見出したのかも知れない。いつの間にか、道は左右山に挾まれて、それが次第に漏斗狀に奧の狹められた谷に入つてゐる。今までの立木の跡を絕つて、全く風物の一變した草原になつてゐる。草には葭笹などが多い、それが人間の脊丈を沒する程の高さに茂つてゐる。右手の山際などには、齒朶類の生え交つた沮洳地も見える。やがては麒麟草や、釣鐘草や、女郞花などの咲き滿つる花野となるのであらう。吉野群山に大和アルプス、六甲連山に六甲アルプスの名をつける世の中に、この谷のこの草原を、籠川五色ケ原といふ者の出ないのが、却つて不思議な位のものだ。籠川五色ケ原、と言へば、立山の五色ケ原を知つてゐる人には、さも爽快な感を興へるかも知れないが、今はたゞ深い[illegible]い

黒ずんだ緑一色の原なのだ。道はあつても、手入れの屆かない、蘆や芒のノサばつた葉を左右に掻き分けつゝ、さも果も知らない武藏野の逃げ水を追つてあるくやうな野深さなのだ。クワッと日が當つて來る。それを待ち設けて、草々がそれ〳〵持ち前の毒氣を吐くらしく、鳶色の蒸し暑さが、むつと頬を塗つてしまふやうな草いきれなのだ。籠川谷には、其テッペンに針ノ木峠の大雪溪がある。雪溪は一里の長さに餘つて、其急勾配は、人間に雪上の危い藝當を餘儀なくせしめる。其時の心の緊張さを思ふと、この入口の草原の倦怠に充ちたダルイ氣分の相反映することは、眞にさもこしらへたやうなアイロニーだ。其アイロニーは、人間の腦髓と尾骶骨程の相違だ。

この草いきれは可なり長くつゞいた。いやといふ程つゞいた。が、予は尚ほ他に予の注意を喚ぶ事相に捕へられて、どうしてもそれから離れることが出來なかつたので、草原の道が盡きて、岩ぎる籠川谷の水が脚下に鳴つてゐる岨傳ひになつたのさへ、それがいつからといふことを覺えない位だつた。事相といふのは、日の照つたり曇つたりする、頭の上に彷徨してゐる雲の佇ひであつた、大町を出る時、アノ澤にはひるのだと言つた籠川谷は、雨模樣の雲の下に、奧を祕密に封じ込めたらしく、ドンヨリと其懷ろを潛めてゐたのだ。無論一歩谷に踏み入れば、この大町にさすクワン〳〵照りの日光の代りに、うら寒さと心細さとを肌に押しつける霧が襲うて來るものと覺悟してゐたのだ。大出を過ぎた頃、時々曇つては又日光が漏れる。籠川谷に入つても、同じやうに晴れたり曇つたりする。空を仰いで見ると、切れ〴〵な雲が、どちらにか箒で掃き散らされるやうに動いてゐる、一體どちらに行けといふのか、と雲が其逃げ場處に迷つてゐるやうにも見える。さうして我等の行く手〳〵に日の光が落ちることもあり、姑らく曇つたと思ふと、我等の踏んだ跡々と日影がさして來もする。我等と雲の切れ目とに、目に見えぬ絲のつながりがあつて、それを誰かが操つてゐるものとしか思はれない程、不思議に空が晴れて行くのだ。霧に包まれる、物淋しい溪谷の樣を夢見てゐたものの如く、溪の懷ろは次第に我等の目の前に、雨戸を一枚々々くつて行くものの如く明けて行くのだ。予は幾度空を仰いだか知れぬ。雲の切れ目に、青く高く澄み渡つた空を見上ぐる度に、我々の頭から晴れて行く空の奇工に驚歎したか知れぬ。さうして、あれ程に密集し、凝固してゐた雲が、斯くして全く拂拭し消散し盡すものであらうかを、且つ疑ひ且つ喜んだか知れぬ。之れを天祐だと言へば天祐でもある。之を僥倖だと言へば僥倖でもある。が、當事者の予としては、そこに造化の力の働く不可思議を感ぜずにはをられないのだ。

不可思議と言へば、この徐々とした雲の切れ目が、遂に十日間の日程の中、一日の風雨どころか、眺望を阻む一片の雲も起らなかつた、極度の無事平穩な大高風になつてしまつた。が、嶽の野營も、もう二日といふ日から、案内者はこの風が面白くない、雨はさう遠くないと言つてゐた豫言が適中して、我等が一日上高地で靜養して後山を下つた日、松本平から見上げるアルプス連山には、既に慘澹たる妖魔の雲が覆かゝつてゐた。のみならず、我等の乘つた馬車の動きよりも早く、墨を流した雲は、我等の空を濁して走つた。大町方面の北方には、高瀬川原に沿うて、夕立のする圖[illegible]がはつきりと描き出されてゐた。行く時に切れ目のまつはつた雲は、歸る時の我等に又たまつはつて、それが馬車の飛ぶやうに疾風迅雷的に現はれて來たのだ。之も偶然であると言へば言へる。天候の變

だと言へばそれまでだ。が、最初から雲と離れ得なかつた予には、それが一つの不可思議な示現である如くに思ひなされるのだ。予の科學的知識を顛倒する、宇宙の秘密觀を語る一例とも考へられたのだ。

四　櫓架

林道が盡きて、愈ゝこれからが本統の針ノ木峠だと裏書するやうな篭川の川原に下りてしまつた。山に白樺を見るのが、其標高の水準になるやうに、もう道のない、川原の砂や石を勝手に踏んで行くやうになるのが、山上りの一期を劃する或る意味を語るのだ。實際林道を踏んでゐるやうでは、まだ志す山とは大した縁のつながりもないと言つてよい。川原の石の頭を踏みつけて、其處に嘗て印せられた、人の足跡の仄かな影を見出すやうになつて、漸く志す山の勢力範圍に入つたことを知るのだ。一方から言へば、道があるといふことは、其道を是非とも踏ましめる一種の拘束を意味する。道のない、といふ野方圖に開放された天地になつて、初めて山嶽らしい山嶽の繩張り内に入つたことを直覺せしめるのだ。予は其繩張り内には、すぐ次ぎに起つて來る水の徒渉、岸に立つた木を伐り倒したまゝの丸木橋、それに流木の白骨と晒されたのが、岩と岩との間に捻ぢ込まれてゐる悲慘な色彩、それらの目に新たな責め道具や、身に迫る強烈な光景の變化を想像裡に描きつゝ、幾分心の引き緊まる、氣分の轉換を餘儀なくせしめる頭の動搖に囚はれてゐた。が、其動搖を押し鎭める、どちらかと言へば、それらの現實の生々しい刺戟を忘れて、他の夢見るやうなローマンチックな詩味中に予を誘ひ入る光景も、亦た予の目の前に開展してゐた。其光景は、まだ林道を踏んでゐる時にも、白澤、扇澤などゝいふ右手の山から落ちてゐる高い澤との落合邊に見え初めたのであるが、この川原を踏むやうになつて、それが正に旺盛に、如何にも夢幻劇の背景の如く描き出されて來たに氣付いたのだ。それが何であるかは、言ふまでもなく都會の人に想像はつかない。一二度山に上つた人も亦恐らく閑却してゐるであらう。山に上るといふことをたゞ險惡な醜怪な岩石と額を磨り合はす難行苦行とのみ思つてゐる人に、かゝる悠揚とした、何の屈託もない、筋肉も骨組も伸び〳〵とする光景のあることを語ることが、予自身に取つても、甚だしき矛盾であるやうに感ぜられる。併し實際の光景は、とても予の忙殺裡の事ではそれを味ふことのむづかしい、又然することが其神聖さを傷けるやうな、靜止と閑寂のさゝやきを聞く、微妙な光景なのだ。予は川原に腰を下して休む度毎、動搖と騷擾とから絶對に隔離された別世界が、肌に觸るかさはらない程度に、フーハリと蟬の衣で自分を包んでしまふ、微妙な旋律の波動に我を忘れてうつとりとせざるを得なかつたのだ。

それを説明する前に一應、籠川のこの谷の様をわかり易くして置く必要がある。谷は言ふまでもなく藥研を眞半分に横に切つた形で、兩側の土手と並行する針ノ木峠から、急轉直下的に深い凹みをなしてゐるのだ。兩側の土手は、左手が蓮華つゞきの裾の峯で、右手が祖父嶽・鳴澤嶽・赤澤嶽等の、信越國境の連峯ではあるが、其の一方に、其峯つゞきの針ノ木嶽附近の突起を望むのみで、谷は鬱蒼とした斧入らずの森で覆はれた山裾に押し包まれてゐる。多くは花崗岩らしい白い石で疊まれた礎の一筋か、其黒ずんだ森の底に一條の血路を開いてゐるのだ。森が沈默と包藏の力で總ての物の息を絶たうとしてをる間に、單り雪解の水のみが其血路を潜つてゐる叫喚と凱歌を揚げてゐるのだ。其大きな威力を持つた森が兩側から頭の

上にノシかゝつてゐる陰森の氣に充ちた光景を先づ想像に描き給へ。さうして其處に、更らに一層沈んだ黑味を帶びた、葉の細かさの七重にも八重にも打ち疊んでゐる楊樹の森を、谷の兩岸に縁どりしたものとして立つと思ひ給へ。さうして、何處からともなく、上からともなく、下からともなく、さも蒼穹に印する晝の月の白さをした、それが曉の明星の大きさをした、點々としたものが、無數に空一杯に飛散してゐる光景を附け加へ給へ。飛散してゐると言つても、それが矢を射る雪のやうに、同じ方向に吹きつけられてゐるのではない。一つ〳〵が空に吊られて遊んでゐるかとも疑はれる、いつの昔からかこのまゝの靜かさで保たれてゐるかとも思はれる、悠久と邃古の意味を漂はしてゐると思ひ給へ。それが目も遙かの空にも、手の屆く咫尺にも、落ちんとして落ちず、膨らんとして騰り得ざる浮動の唯中に立つて、單に白い物が飛んでゐるとのみ無關心に看過し得るであらうか、それを夢幻的な詩美を誘ふ諧調に連ろゝ自然の運動と感ずる事が、態とらしい誇張したものに聞えるであらうか。それが何であるかは最早言ふまでもないであらう。日本アルプスの溪谷に、細微な併し力づよい彫琢の妍美を附與する楊樹の花の名殘りの綿なのだ。柳絮と漢字に書くものが、それであるや否やを知らぬが、兎も角柳類似の木の絮なのだ。高瀨谷にも、梓谷にも、黑部谷にも、この楊樹は一杯に莽々と立ち籠つてゐる。之を楊絮と言ひ得べくんば、楊絮も亦たアルプス溪谷の一詩美だ、否、其溪谷の陰森な背景にそぐふ唯一の自然のローマンスでなければならぬ。

五　大澤の野營

丸石澤といふ處には、川の中に砂の盛り上つた、可なりの廣場がある。いつのことか火を焚いた跡らしいものもあり、小屋でも組んだらしい材木が轉がつてゐる。先達林藏は、初め今夜の野營場を何處にするか、大澤には先客があるで、マア丸石澤か、と言つてゐた、其澤に著いたのだ。

固と此處には、十抱へもあるやうな、大きな白い丸みを持つた岩が据ゑられてゐた。地圖を見ると、蓮華嶽の裾から落ちてゐる谷に、丸石澤の名が書き込んであるが、それは澤といふよりは、細長い流と言つた風の山の裂罅に過ぎないものだ。段々峠が峯近くセリ上つて來たので、もう白澤や扇澤などの澤らしい壯觀は見られないのだ。丸石澤といふ名も、其裂罅に丸い石があるといふのでなくて、この小屋場の目標になつてゐた白い岩から出たものらしい。が、其岩も去年の洪水で流れてしまつたといふ。アレあの岩だといふのを見ると、我等の休んでゐる上手に眞白な大岩石が、砂に埋れた僅かな頭を露出してゐる。十抱へもある大岩石なら、途中に見出すべきだと思つてゐたが、逆に谷を遡つて流れてゐるのだ。金原明善翁が天龍川の改修をした時、どうも大石がドン〳〵流れて來て、下流沿道に住む者が迷惑をすると言つた時、其非難者を捕へて、一體川の中の大石はどちらへ流れるものだか、アナタはまだ川の事には素人だ、と言つたことを想ひ出す。こんな逆落しの源流になつても、自然の理法は、チャアンと正式に行はれてゐるといふことが今更ながら驚かれるのだ。

火を焚いた跡らしい、砂の焦けた處へ、休んだ一行の視線は集つてゐたが、此處に野陣を張らうと言ひ出す者もない。もつと峠の雪田近くへ往つて泊つた方が、明日の行程には便利だ、今日唯今の都合よりも、明日明後日の未來の都合の爲めを考へる、山中の野營的通法が、先達の頭にも我等の頭をも支配してゐたものらしい。

さも無意味に一人立ち二人立ちして、段々狭められて行く磧、石を踏み初めたのか、何處を野營地とするかの問題は、更に未了の意味を強めて、我等の頭を往來してゐた。

磧傳ひが次第に險惡になつて、もう散ばる石の頭のみを踏んで行けなくなつた。水が近くなつて、兩方の崖が迫つて來る。其崖がいつかの大水にモキ取られて這ひつくことも出來なくなつてゐる。已むなく其上の木立に搔き上つて、又た磧に下りる。さういふ時は、水を渡つて、行き易い崖にとりつけばよいのであるが、雪解の水嵩は、時に淵となり瀧となる許りで、容易く徒渉の道を作つてゐない。先達の敎へた通り、我等は何處までも、澤の左岸にのみ行き得る道を求めねばならない。暫らくして、何でも右方の山から澤が落ちてゐるのであらう、大岩石のイヤに折重なつた、それが頭の上を壓するやうに嵩張つて、どうにも向うへ進むことの出來ない岩の間に挾まれてしまつた。籠川の本俣を行くにしては、其右から落ちてゐる澤を渡らねばならぬ。が、それは急な懸崖に落ちてゐて手や足のかゝる處ではない。仕方なく、大分遅れてゐる先達の來るのを待つ外はなかつた。もう日の暮れかけた。夕風の寒さは水音の凄じいのにつれて、既に肌に浸み込んで來る。ホつと追ひついた林藏は、先生方何處まで行くか、と大きな聲をしてさも險しい顔をしてゐたが、

『到頭大澤まで來てしまつた。』

と言つた顔には、險しい中にも、まアよかつたと言ふ落著きが見えてゐた。何の事だ、我等よりも先發した一高生の人夫が、我等のすぐ頭の上で米を洗つてゐたのは、既に幾十分かの前からのことであつたらしい。林藏が岩にかき上つて行くのに跟いて約二三十間も昇ると、そこは大澤の徒渉地になつてゐる。そこにはもう洗ひ澄した米を鍋に引提げた人夫が立つてゐた。

一高生の圓錐狀形のテントは既に張られてゐた。其側では盛んに焚火もされてゐた。大澤には場處がない、と言つてゐた先達は、もつと上の方にと、一行十人の安眠地を探し廻つたのであつたが、其邊にはもう皮のへガレたやうになつた雪が低い木立を通して見えてゐた。

『こゝより仕方がなからアズ。』

と言つて、四方を見廻した處は、蕗に似た廣葉の草が、薊や蓬交りに、我等の腰まで立ち茂つてゐる草原のたゞ中であつた。さうしてそこは、一高生のテントを張つたすぐ上の傾斜地であつた。

其草は疎く、まだ膝で[illegible]されたたで[illegible]しい草はそこに一面に敷かれた、[illegible]で我等のテント内の寢床になつたのだ。林藏は實、慳貪に人夫を罵つて、誰は薪を拾へ、米を洗へ、と督勵しつゝ、自分は大鉈を揮つて、邪魔になる側の木をエイ〳〵言つて伐つてゐた。木はヤシャと水楢とタム山椒と榛とであるさうな。我等もたゞ傍觀してゐるに堪へないでテントを擴げたり、支柱を組んだり、其綱を張つたりした。暮色はもう迫りかけてゐた故かも知れぬ、ズツクの澁色をした天幕の色が、背景の夜叉の若葉にとり卷かれて、それがさまで不自然でも滑稽でもない頭を擡げてゐた。大町で其下調べをした時は、竹を組み合せる支柱の弱さを思うて、嶽の風が一捲する時の慘めな樣を眼前に描きもしたのであつたが、かうやつてみると何だか、諸君は草臥れたらう、速に安眠の地を得給へ、と昂然として力んでゐるやうにも思はれる。

やがて火が燃え初めた。人夫の獨りは何處からか枯木の枝を一背負ひ持つて來て、ドサと其處に下ろした。米を何杯焚くかと量り洗つてゐたと思ふ中に、もう岸を下りた籠川の本俣から、大きな鍋を舁ぎ上げた。雪水の鏡なす底に、た

だ白銀を伸べた米の白さも眼を射つて來る。人夫はかういふ岩蔭も何もない露宿地を、小屋場とは言はないで野陣場といふ。一行十人ともなれば、それ〳〵の分擔もきまつて、それがさも捗の行く敏捷さで、野營の準備が着々として進行する。眞に尖兵の敵地近くに備ふる行動とも見られるのだ。予はテントを張り終つた側の焚火に寄りながら、大澤のドーはこの籠川を行く者の既定の野營地であるにも關らず、我等以前に通過した者の無いことは、丈なす草を、所謂荊棘を開く程度に刈らねばならなかつたのでもわかる、今年の初めての探險者、それはとりも直さずこの道の開拓者、といふやうな淡い誇りの伴ふ野營第一夜の好奇心を味ひつゝ、夜叉の若葉に吹きつけられる焚火の煙を見上げてゐた。其齒を溶かした潤ひのある白さが、のびやかな滯りのない今の予の心持に溶け合つた。

テント生活の第一夜は、總てが鰥夫世帶の引越當夜の落著かない心持で終始した。新案特許の巧緻小田原提灯を點したのを何處に吊すかさへ區々な評議と考案とで一騒ぎした。學校生徒用のアルミニュームの辨當の片側を茶碗代用にして飯を盛り、用意した茶碗には卸つて味噌汁をついだ。我等三人はテント内に、人夫一同は其入口のぐるりに、立食とも宴席ともつかぬ會食の始まつた時は、たゞ食慾に驅られてゐる一同で、お互ひに食慾を一乘的に任る外何の屈託もない賑やかな夜であつた。汁の實にはこの邊に芽生えしてゐる蕗を入れたといふ。十分にそれを味つてゐる餘裕は無かつたが、それも山に親しむ心持を誘つて、これがアルプス地帶の野營であることを頭の中の備忘錄に強く印象せしめた。イハナが煮えたといふて小さな鍋を吳れる。大きいのが五寸小さいのが三寸位のイハナと鱒の子が二十尾許り煮ころばしてある。生きた肴を箸にすることは、このテント生活、干物と鑵詰責めを覺悟してゐたこの野營に、眞に贅澤な御馳走で無ければならない。このイハナは今日白澤のドーで出會つた大町での山のヌシと言はれる品右衛門爺さんの釣つてゐたのを買つたのだ。爺さんは我等の行く方面の山に就いて、大抵知つてゐるだけのことを語つて、我等を其膝下に侍する兒孫のやうに暖かい取扱ひをした。イハナの甘さにつれて、其半蓑を肩にかけた、六十六歲だといふ顏の深い皺、それも山嶽の寒暑によつて深く刻み込まれた山の皺襞のやうな縱横の皺が、彷彿として眼前に浮んで來る。

四合罎の酒二本を山中の飮料にして、其滴る雫さへ惜んで飮んでゐた予一人陶然として醉つて來た。馬鹿に警句を吐きますな、と言つてゐた一戶氏は、テントの外に出て、北斗七星の四星の劃した四角な線内に、下界では肉眼で見ることの出來ない星が見えます、など其專門に屬する蘊蓄を傾けてゐた。其間に如是閑はもう自分の寢場處を作つて、空氣枕をプー〳〵吹いてゐるのであつた。

七月十四日行程。天候半晴・午後快晴。午前七時十五分大町發。同十一時、大出着。午後十二時三十分與竹澤晝飯。同二時五分白澤のドー發、同四時五分扇澤發。同四時三十五分丸石澤着。同六時大澤のドー著野營。

六　針ノ木の雪溪

山の神樣に供へたお初穗だといふ、鐵蓋に乘せた飯粒を、銘々に摘み分けて、それを頂戴しながら野營を出發した。先達林藏の其飯粒を我等に捧げた態度が餘りに眞面目なので、我等も之を押し戴いて口にせざるを得なかつた。乾からびた飯粒のイヤな齒さはりも默つてゐねばならなかつた。が、今度の雪線行が、殆んど一片の雲もない快晴で始終したことは、この迷信の賜物であると信じてゐる人々の其の心持を輕

蔑することは出來ないのだ。
　物の半時許りも、きのふのやうな磧の轉石傳ひをしてをる中に、もつと岩石の憂き目を見るだらうと豫期してゐたとは正反對に、我等は容易にかねて待設けてゐた雪田にとりつき得た。磧と雪田とは、艀から陸に上がる程の煩しさもなく、艀から棧橋へ、棧橋から町へと續いてゐるのであつた。ことしの雪の多さは、きのふ見上げて來た右手の山々、それは最北白馬嶽つゞきの國境線に立つ、岩小屋澤・鳴澤・赤澤等の峯の頭に殘つてゐる雪を見ても略ぼ想像される。この溪の雪が、棧橋つゞきになつてゐるのも、時候後れの僥倖であつたであらう。我等はもう岩石懸崖の大時化を喰ふ心配もなく、稅關を通過すれば其處に人車も待つてゐるやうな落著き拂つた心持で、ナルイ其雪田を踏むのであつた。
　予は途中寫眞を撮影する爲めに一行にずつと後れた。一行は既に雪田の中の右手に寄つた土の露頭に休んでゐた。人夫の卸ろしてゐる荷も、露頭に散らばつてゐる醜い石ころのガサガサなものに見えてゐた。が、其醜かつた露頭に辿りついて見て、其處に滿開の櫻が這つてゐようとは、更に思ひ設けぬことであつた。予に若し千手觀音のやうな足があるならば、雪田の上に作られてゐる波紋、それには系統もあり秩序もあるやうな、海面の波浪其まゝの一々を踏んであるきたいやうに思うて來た空想は、花の薄桃色をした、それが十分に開き切らないで、半開な壺形をしてゐる可憐な現實に打消されてしまつた。自然は往々にして不用意な奇工をなす、不用意な誘惑に充ちてゐる。
　再び雪田を上りかけた時には、我等の足に、ギゴチな鐵カンジキが縛りつけられてゐた。三つの鋭い爪を持つてゐるといふよりも、三つの鷙鳥的な嘴を立てゝゐるといふ方が適切なカンジキは、足に鐵鎖を繫がれたことのある囚人でなければ經驗し得ない不愉快な重荷であらうと想像してゐたのが、雪の上には何の支障にもならない、滑らかな絨氈を敷きつめた上を、穿きなれた靴で踏む安らかさと自分の足のコンパスにしつくり嵌つた階段を登る自由さとが伴つて來るのを意外とせざるを得なかつた。不恰好な人工的な、其色からして錬れない暗晦色をしてゐると思つたカンジキは、今はこの雪の波濤を越す救命袋であることを思はずに居られない。雪を踏みつける度にサク〳〵と輕快な音がするのも、ボートを漕ぐ時のクラッチの音より遙かに音樂的に響くのであつた。予は一戸氏と竝行して、雪上を九十九折に行く、疲さなどを語りつゝ、次第に脚下に開いて來る黑川谷の屈曲紆、其屈曲毎に左右の山の尾の落ち込んでゐる森林の堆積の大塊にして細心な線味などを打ち瞰下ろしてゐたのであつたが、もう大抵で盡きてしまふと思うてゐた雪田は、溪の左に彎曲すると同時に、其處に尙ほ高々と頭を擡して立つ大雪田の開いてゐるのを、驚異の眼を以て迎へねばならなかつた。それは想像もつかぬ巨大な龍尾が、其榮えある全身を露出してゐるのでないかとも疑はれる。我等は今其顎あたりの片鱗を踏みつゝあるものとしか思はれない。雪上を吹き颪す風は以前から可なりに寒かつた。雪の眞白な上をのみ行く眼には、ともすれば物の綾を見失ふ錯誤があつた。大雪田の開いてをる方に半ば登つてゐる我を見出した時、風ともつかず陽炎ともつかず、我と我を疑はねばならぬイルージョンの大くるめきが此世界を搖ぶつて起つた。我をめぐつて廻轉する無形の線の渦卷きが、目にもたまらぬ速力で無音の大淘湧を沸き立たした。
　カンジキを踏みしめて、手に持つた蝙蝠傘をしかと杖にして、姑らく其くるめきの鎭まるの

を待つてゐた時であつた、予は天を仰いで覺えず、空の美妙さ！を叫ばざるを得なかつた。其處には今解いた許りの紺青の濃き空が、ピタと我が頭の上に蓋をしてゐるのであつた。紺青というても、それは底知れない深さと厚みとを持つた、淵の色を、更に透明にし至純にした光りと潤ひに彩られてゐた。そこに空が見えるといふよりも、紺青の色を塗り清めた巨大な板を、山嶽の頭に置き渡した、さも手も屆きさうな峯の頂きにくつついてゐた。予は其異樣な空の彩りよりも、其清淨さの洗禮を受ける嚴肅な氣持で、初めて山嶽の靈を迎へるやうな神祕の感に打たれてゐた。程經て我に立ち返つて見れば、單に雪の白色の刺戟によつて生ずる錯覺のイルージョンであることを知つたのであるが、其刹那は違つた世界と違つた環象とが降つて湧いたものの如く心を躍らせたのであつた。

七　蓮華サルーン

頂の木の間に立つて見る西南のアルプス連嶺の眺望は、先刻林叢の間に過ぎると霧がかゝるかも知れぬ、と氣遣うてゐたのと反對に、蓮華の一峯にとりつく頃から、更に夕暉の高風になつて、單り西南と言はず、それが東北の果に伸びてゐる北アルプスの全山脈までが我等の眼下に展開した。餘りに晴れ過ぎた晝の光景は、種を奪ひ去つた魔術師を見るやうに、大幅の畫面から陰影を無くしたやうに、何處かに平面的な突込んでゐない物足らなさを伴つてゐたのであるが、夕日が目と鼻の間に聳立する立山連山の肩を辷つて、横なぐりにこの輝石安山岩の破片の石原に落ちて來た頃から、鋭く尖るものも、鈍く圓いものも、ギザギザに鋸齒狀に切れたものも、山々峯々がそれぞれに深い陰影を半面に負ふやうになつた時から、夕暮の靜かさと寂しさと大きさとが、ぢつと大地を壓し鎮める沈默の莊嚴に充ちて來た。遙かに北の果に三角標の鋭さを尖らしてゐる白馬嶽は、横日の輝きを其猫背の一面にうけて、仄かに燃えさかる火焔を偲ばしめる。それにつゞく北城槍後立山は、最早薪の燃えさしに水の打たれたものの如く、濃き炭色を湛たへてゐる。が、まだ火のほめきの白烟の立つらしく一片の雲を棚引かしてゐる。大分手近くなつて、鹿島槍。祖父嶽は一は乘鞍に似た頂上の凹みの雪を浮き立たせ、他は其灰色のテッヘン、それは胡麻鹽の髮を逆く見るやうな暗灰色を更に燻つて見せてゐる。すぐ脚下の谷に見える岩小屋澤・赤澤・鳴澤の諸突起と、右に連互して、明日は其峯頭を踏むべき北葛・七倉・東澤・舟窪の諸突起は、名山大嶽の父老の間に介在する兒孫のやうにヒソと物蔭にかくれて、灯の明りの屆かぬ處に膝を交へてゐる。殊に低い鳴澤・赤澤などはもう眠さうな眼を擦つて、聲を潜める欠伸をしてゐるらしい中に、稍々年たけた舟窪だけは河童の皿めいた頂きの雪を露出して、さも我け顏に跪坐してゐるかとも思はれる。舟窪の上には不動の圓平な頭があり、右に寄つて南澤が同じイガグリ頭を立てゝゐる。南澤と三ツ嶽の間に、この山嶽中の異色、總てがザックバランな平民の寄合の中に、單り衣冠束帶を裃かぬ烏帽子嶽が、低く後生大事に保護されてゐる、それはもう我等の視界の中に割き消されてしまつた。三ツ嶽に重なる野口五郎、それに隣れて三ツ俣。雙六の諸峯は見えぬけれども、其背景に立つ黒嶽は、赤牛嶽の裾を延べて、神田祭の鉾に似たテッペンをそゝり立てゝゐる。それがお祭所にをさまつた靜かさを守り立て、誰にも見えるのだ。ずつと離れた右に、一段高く儼然と上段の間を占めてゐるのが槍穗高の群峯なのだ。上段の間には殊に明るい百目蠟燭をともすや

うに夕日は今其肩から頭上へかけて、たゞこの群峯を目標に照らすものらしく射つてゐる。槍の穂先きが餘りに小細工らしく、骨董品の槍先きを臺の上に置いた如く見えてゐた眞とは別に、穂高の峯々との間に一條の紅線を引いて、我等に面する側の暗綠色を一段と濃く劃つて見せる。小細工らしい槍が、天の支柱の殘礎を語りげに伸し上つてゐる大まかさを、其左側に根を張つた、霞澤・大天井・燕の諸聯峯が尙ほ援けてをるらしくナダレてゐる。若し夫れ立山連山の劍嶽・雄山・別山・淨土山に至つては、左に藥師嶽のお客分を控へ、右に小黒部其他の眷屬を率ゐて、落ちなんとする太陽を我手に支ふるものの如く、足を踏ん張り臂を張つてゐる、眞に巨人の彫塑に類するのだ。劍は刀創をうけた兜を偲ばしめ、雄山は矢疵を負うた鎧の片袖に類し、藥師は斃れた馬の屍を想はしめる。其斑々たる雪よりも其露出した岩石の方が、却つて雪を染む血痕かとも疑はるゝ程、正に千軍萬馬の間に驅逐しつゝある大奮戰の狀をも示してゐる。其爭鬪の騷ぎ、それが他の沈靜と寂寞を破るものとならないで、却つて靜謐と莊嚴の意味を助長してゐる妙趣の活躍を深く胸に刻み込まねばならなかつた。

今夜の野營は、この莊嚴の氣に包まれた蓮華の一峯の雪田近くに營まれた。少し前に人夫が追つかけ廻してゐた雷鳥は、とう〳〵捕り損じたといふて、其連れてゐたヒヨツコ許りを、我等の前に持つて來た。まだ黃色い產毛のとれない、ホンの巣立つた許りの雛を掌に乘せてをると、其暖かさでウト〳〵眠つてゐる。雄大な山嶽觀を恣にして、さうして手裏には雷鳥の雛がをる、それが自然に我等を劇的な感想に導いて行く。天孫降臨の悠遠な想像や、建國創業の絕大な意味の一端が今我等の眼前に開展しつゝあるもののやうにも思はれる。人夫が雪田の一角を掘つて、水を溜めようとしてゐる、カツカツと石に中るアルペンストツクの音も、初めてこの世界に人間の試みる音響の如くに思ひなされる。一旦放つてやつた雷鳥の雛が、姑らくして今度は四羽舉つて、親に離れた淋しさの爲めであつたか、雪田の上をこけつまろびつしつゝ、我等の野營の方に下りて來る。其ピーピー泣く聲が、夕澄む空に徹して如何にも美妙な音樂を奏でる。其我等を慕ふものの如きいぢらしさは、この雪線の無人境にあつてそゞろに詩的情味を湧かしめた。同時に禽獸草木も亦た我に靡くと言つたやうな誇らしい氣分をも伴つた。其時まで草鞋も解かずに、人夫が雷鳥の巣をテントの下に置いてゐるのなどを見てゐた予は、大事は成れり、と何物をか獲た心の歡喜に叫んでゐた。

日は暮れてしまつた。暗澹たる四面も靜謐な夕闇の中に、三日月の淡い光り、薄れかゝるやうになつては、予の頭は幾分冷やかに、心も醒めかゝつてゐたと言へ、焚火を圍んで人夫等と山話に耽るのも亦た高潮に達した詩人の情韻の如く味はれた。予は人夫共に鯣の三枚宛と乳ハン一個宛とを振舞つて、彼等が勝手にシャベる聲、詞よりも其音調の抑揚頓挫の一樣ならぬのを聞いてゐた。鯣の惡臭を去つて、單だ其波濤の音をのみ聞いてゐるやうな心持もする。之を蓮華サルーンと名つけて、當時を忘れぬ記念とした所以である。

七月十五日　天候快晴。正午前後少しく霧を見しも、直ちに晴れたり。午前七時大黒岬雪田出發、十時四十分針ノ木峠頂上着　針ノ木岳の頂上を極めんとして中途に廢す。午後二時再び針ノ木峠に歸る　午後四時三十分蓮華嶽一峯に野營。

八　葛谷キレト

朝起きて見ると、天幕の背ろに偃松に交つて石楠木が咲いてゐた。花は白とも赤ともつかず、一種の黃色さを帶びてゐた。石楠木とは言

ふものの、幹は殆んど無いもののやうに、花が地について咲いてゐるのだ。石楠木と言はず、石楠草と言ふ方がめでたい名で無ければならない。これも亦た蓮華サルーンに配すべき花であつたことを思ふ。

三角標の跡の殘つてゐる蓮華の頂上よりする、四方に廻轉してゐる朝の山嶽大觀は、又たきのふと異つた別の扮裝をしてゐた。何處に隱蔽する部分もなく、又た隱慝しようとする意志もなく、山嶽が自家の臺所を開け放して、之れを他から覗く者のあることも知らずに振舞つてゐるやうな、氣を許した態度がほのめくのであつた。

蓮華の尾根下り、それが此行の暗晦な山嶽の一部、其關門の第一であつた。蓮華の峯頭までは、今日まで幾人の足跡を印したか知れぬ。が、其尾根下りから向ふ、北葛乘越の鞍部を經て、北葛の峯にとりつき、それから七倉嶽・東澤嶽と經て舟窪乘越から舟窪嶽に行くまでは、僅に山岳會の榎谷氏一人のみが通過した、北アルプス中での最暗黒の未開地に屬する處なのだ。この暗黒の部分の爲めに、陸地測量部の新製五萬分一地圖も、假製の二字を冠しなければならなくなつたと思はれる、其の圖も何の用をなさぬ地方なのだ。我等は今までの晴れやかさに比べて、どのやうな危險の伴ふか計られない祕境の門扉に面して立つてゐたのだ。

第一關門の扉は案外に容易く開かれて、一行は北葛嶽の頂上を極め、其又た尾根を西に下つて、將に七倉嶽に渡らうとする時、第二の關門は、既に脚下に横つてゐた。第一の關門は奇怪な岩石の寄り集りで、それがさも互に鎬を削りつゝ鬪つてゐる間を、右に左に縫ひ下るのであつたが、第二の關門はそれとは全く趣を異にした、山と山との縁を絶つ爲めに作られた土砂の懸崖であつた。造化が第一關門に鑿と鋸を使つたとすれば、第二關門にはたゞ鉋のみを使つたらしい、それも谷の一方許りでなく、如何に薄い尾根が風雨に保ち得るかを試驗する爲めに、谷の兩側から山を削ぎとつた、言はゞ土砂の屛風なのだ。人夫は之をヤセ尾根とも亦たキレトともいふ。ヤセ尾根は一時的であるけれども、キレトといふ程に意味が迫つて聞えない。我等は之を北葛・七倉の間に存する爲めに、葛倉のキレトと言つた。榎谷氏通過當時明治四十三年頃は、まだ岩石の繋がりで、辛うじて其脇腹を這ひ渡つたとの事であつたが、今のキレトは、中央に巨大な石の頭を殘すのみで馬の背越しといふのも當らない、又た蟻の戸渡りといふ名もふさはしくない、たゞ鎌の刃を仰向けに押し立てゝゐる、幅のない砂の塔になつてゐた。

林藏はかういふ難場に遭遇するならひの通り、其背負つた荷物を卸ろして、それを通過し得るや否やの瀨踏みに立つた。彼の踏む一歩毎に、左右の谷には土砂がザラ〳〵と落ちる。中には可なりの石ころが、いつまでもといふより、次第に響きのある音を立てゝ谷深くころがつて行く。砂の落ちる度毎に、濛々と砂烟が立つ。彼は木を渡る猿の敏捷さで、疾く姿を其砂烟の中に沒して、尚ほ七倉にとりつく處に崔嵬と脾腹を見せてゐる岩石の容子を探りに上つた。このキレトはきのふ針ノ木峠からも手近く見えてゐたので、一行の頭には知られたる難場として深く印象せられてゐた處だつた。人夫達も我も〳〵と其キレトの側まで押しかけた。樣子を探つて歸つた林藏は、この[illegible]を見て、何しにこの狹い處へ出て來る、と大喝しながら、改めて、樂に行き得る旨を靜かに物語つた。彼の態度は、この危險地を控へて、頭のいゝ裁判官のやうに働いたのであつた。我等は其宣告を聞いて、先づ危險の意味の七分を減殺し得た。一戶

氏は先頭に渡つた。二番目に予がついた。キレトに一歩を踏みかけて見ると、さすがに左俣の深い一木一草もない裸々たる土砂の瀧を見下ろす踵は顫へた。谷が深く落ち込んでゐるといふよりも、こゝに土砂を積み上げる、山嶽築造の絶大な力が働いてゐるらしい動搖が眼を眩ました。實際落ちて行くザラ／＼な砂が、逆にキレトへ押し上げらるゝのでないかとも疑はれた。山嶽の風化雨蝕作用は、特に怪むに足らないとしても、前後に森林の蓊鬱たる山嶽の間に、其蓊鬱たる森林の廣袤より言へば、眞に一條の針を落した如き罅隙のかゝるキレトの存することは、自然の奇工、造化の惡戯を思はしめる、言はゞ辻褄の合はない山嶽景觀でなければならない。アルプス登りが、林道。磧・雪田と總てが版に押したやうに規則立つてゐる段取りである事に飽き足らないものに向つて、かやうな突飛な光景を包藏してゐる、山嶽の奥の手、手品の一種であるかも知れないのだ。幸うじてキレトを渡つた後、七倉の岩石に縋りつく足場も亦た甚しく危險であつた。我等はもう後に誰がつゞくかも知らず、すぐ頭上を覆うてゐる樺のヤブ潜りをして、兎に角七倉の國境線の尾根にとりついた。榎谷氏は、このキレトを通過して後、尚ほ姑らく露出してゐる岩石の間を攀ぢて、一歩も森林には入らなかつたといふことであるから、當時は國境の左側——信州側——に削ぎ落されてゐる岩側を上つたものと思はれる。が、今の情況は、到底其岩石の懸崖を行く事は不可能であつた。單りこのキレトのみならず、谷全體の風化作用は、僅に五六年間に長足の進歩をして、山容頓に舊時の面影を止めぬものらしい。若し尚ほ今後、この國境線を行く人があるならば、更に新たな光景に接すべきは疑を容れぬ。葛倉キレトは、いつまでも興味ある問題を登山者に附與するものであると言つてよい。

北葛・七倉は之を遠望しても、全山一色に彩られた黒い山であつた。其山を踏むに到つて、中腹以下の森林帶は、何の繼目もなしに、中腹以上の偃松帶に接續してゐることを知つた。自然何處にも道はない。たゞ一色の綠に彩られた偃松の原なのだ。北葛を下る時も、偃松の間をもぐつて、こんな事許りをしてをつては、人間が猿に退化するなどと笑つたのであつたが、七倉を上る時も亦たそれを下る時も、偃松は絶えず我等の身を離れず這ひ纏うてゐた。偃松の地を這うた伸びの足らない高山性のものは、却つて足がかりになつて、上下に[illegible]して[illegible]す其一握に餘る幹、其[illegible]我等の[illegible]る低山性のものになつては、人を阻む異常な抵抗力を持つてゐる。さうしてそれに拘泥力と執拗力とを具備してゐる。之を偃松の拘間と名づけざるを得ないのだ。が、偃松は必ずしも登山者を虐げる刑の執行者のみではない。山頂近い胸突きの急勾配を上る時、又は槍の鎌尾根風の尾根の脇を横に傳ふ時など、偃松の枝に身を託して行く事によつて、危險と疲勞とを幾許輕減し得るかは、特に言ふまでもないことだ。此行野口五郎嶽の頂上附近であつたと思ふ、見るから一尺に足りない枝の偃松が、約三四尺に餘る其根を垂直に露出して、深く下の砂礫に喰ひ入つてゐるのを見た。この強靭な根あつて、其枝の執拗さを保持してゐることが、かゝる雪線に生くる草木の生存要件であることに改めて驚異の目を瞬つた。偃松は又た登山者に附隨する慈悲深き[illegible]人屋であることを忘れることは出來ないのだ。

七倉を下りて、大木の樺林の中を行く、青葉を搖する風は、蓮華の第一關門、葛倉キレトの第二關門を無事に通過した我等に、初めて餘裕のある涼しさを味はしめた。さうして此邊に

又たどのやうな知られない難場があるかと危んでゐたにも關らず、道はナルイ草場を行くのみであることも、亦た僥倖の安心を與へた。が、越中側がさる慈母の懷ろを開いてゐるに引きかへて、信州側の土砂の剝落した、山骨の花崗岩らしいのが、縱横の襞積に傷けられて露出してゐるのは、嚴父の威容を持續して、尙ほ我等に不斷の警告を與へてゐるのであつた。此日次ぎの東澤嶽を越えて舟窪乘越に野營を張らうと、先達の頻りに急いでをつた際、其嶽にとりつく乘越にあたる狹い小さな澤を二三町も下つて野營を張らねばならなくなつたのは、如是閑が腹を病んで、さる强行軍に堪へなくなつた爲めである。先達も其澤の名を知らぬと言つた。殘雪の壓迫から漸く逃れた夜叉の木が、馬鹿に茂つた如何にも陰森の氣に充ちた澤だつた。テントを張る傾斜地も、それらの夜叉と雪とを滅多切りにして漸く平にし得た程だつた。病人の疲勞に同化された一行も悉く氣拔けのした寂しさに打たれてゐた。予は之に夜叉澤の名を與へた。

九　雪飯

飯を焚く時、水のない處では雪で焚く、といふことが、我等にどれ程淸淨な感じを與へたであらう。が、實際雪で焚く事實を眼前にして、それがどれ程イヤな汚濁なものであつたであらう。

夜叉澤に泊りをきめて、先づ何よりもと天幕を張つた後、林藏ひとり一行の滅入る氣分を引立てゝ、八方に隈なく配り聲をかけてゐた。もう火は出來た、何を愚圖々々してゐる、と雪を掘つてゐた人夫を殊に嚴しく叱りつけた。其人夫は自分の被つて來た菅笠を据ゑて、其上へ、雪田の一角を鉈で掘りながら雪の塊りを山と盛つてゐたのだ。かくて飯焚く大鍋に一杯に押し詰められた雪は、例の三叉に吊されて火の上にかざされた。眞白な雪が、既に焚き汚れした鍋のぐりの煤黒さに反映して、それが如何に磨ぎ澄した鏡の如く輝くか！　それッはかりでどうするつもりだ、と又た剣突を喰つた人夫は、再び菅笠を手にして雪田に下りた。其處にはもう雪の洞穴が出來てゐた。底の方では横に鉈使ひをして置いて、それを上から伐り込んで行く、丁度穴掘り大工が鑿を使ふのと同じやり方だ。人夫は仕方なしの鼻唄などを唄つて、手の指を眞赤に凍らしてゐる。予は病人の事や、今後の行程の事などが念頭に痞へて、たゞ呆然として其鉈使ひを見てゐた。若しこのまゝ何處か一番早く人里に出なければならぬとなれば、どちらに行くよりも、今まで來た道を引返す方が最も捷路であるとは、林藏の今少し前に言つた言葉である。野營二泊の行程を經て來て、それで他に人里に出る間道もないやうな山嶽內に打ち棄てられた我等は、このまゝ山嶽內におつと居を構ふる事の許されない限り、大町出發當時に考へたやうに、大層な準備を滑稽視してゐる山嶽のいゝ見世物になつてゐるのだ。どうしてこの窮境を無事に逃避し得るであらうか、と言つてけふの勞働にはもう堪へられない空腹を感じてゐる。前途の事は兎も角もとして、空腹を滿たす事の方が焦眉の至要事だ。それにしても雪で焚く飯は、と振り返つて、火にかけられた鍋を見ると、薄い汚れた茶色をした水が、ほのかな湯氣を立てつゝ、まだ解けきらぬ雪を漂はしてゐる。それが先きに押しつめた雪の水であるとはどうしても想像されない。何か獸類が雪を奪つて、あとに其尿を漏らしたとも言ふべき濁りを湛へてゐる。さうして焚きさかる火の煤は、アッケラカンとした鍋の上に立ち騰つて、さうして又た鍋の中に舞ひ落ちる。林藏に說明をきくと、鍋にもう〳〵二杯も三杯も雪を溶か

してをる辺はない、この中へ洗はない米をブチ込んで、其まゝ飯にしてしまふのだといふ。どうせ雪で焚く御飯は甘くは出來ません、こんなイヤなものはありません、と附け加へて別に意にも介してをらぬらしい。玄米を其まゝ用ふることよりも、糠を洗ひ去らない搗いた米を焚くことが、どれ程非衛生的であるかを思うて、予は既にイヤな嘔吐を催してをつた。が、そを多少神經過敏になつてゐる病人にきかせることの愚に心づいてをつた時、薪を拾ひに出掛けてゐた人夫が、遙かな雪田の頭の上で、「こゝに水が落ちトラー」と叫んだ。「さうか」と別に喜ぶ氣色もなかつた林藏に引きかへて、予の胸は天籟の感に覺えず躍り上つた。

十　東澤嶽

東澤嶽の頭は、二つの痩せ尾根と、一つの絶縁的な斷崖とで、略ぼ四つに分れてゐる。遠望した時は、樅か栂の森林で覆はれてゐる一つのピークで、それが大福餅をカンカチに凝まらしたやうな形であつたものが、近づいて見ると、其處に刃の跡や、爪で掻つた痕が無暗についてゐる。頭が四つに分れてゐるといふよりも、其無暗な傷の中に、やつと掻り残された所が四個所あると言ひたい歪形な山なのだ。頭といふ詞もこゝには適當しない、首のない胴體が僅に身を支へて立つてゐるとしか思はれないのだ。一體今度の雪線踏破の中で、最も標高の低いのは、この東澤嶽であつた。周圍の山嶽が、我勝ちに晴れやかな顔を大氣に曝さう〳〵としてゐる中に、單り物ひそかな隱れ顔で、見られまい〳〵とするやうであつた。山嶽がパーソナライズされるとすれば、この山は慥に繼子扱ひにされてゐるとしか思はれなかつた。今其山の肌にとりついて、其無慘な傷の跡を見ると、邪慳な笞や、暴力を振つた拳やで、其繼子が如何にみじめな目に遭遇してゐたかを追想せざるを得なかつたのだ。憐愍の情は、やがて暗晦な氣分を誘つた。不愉快な家庭に接するやうな厭な心持で、先づ第一の痩せ尾根を渡つた。

この暗晦な心持は、昨夜の夜叉澤の陰鬱な氣分につゞく劇の一齣であつた。

第一の痩せ尾根は、先達がアルペンストックで、削ぎ立つた砂利に足形をつけた上を、あたりの木や草に縋つて辛うじて渡つた。第二の絶縁的な斷崖は灌木で覆はれてをつたとは言へ、行くべき山のピークが垂直に裁ち切られて、それがまた洞穴的に掘り込まれてゐるらしい、底も見えない斷崖であつた。嘗て此處を通過した榎谷氏の見取圖によると、殆んど傾いて墜れさうな大岩石が蟹の爪のやうに兩方から聳えてゐたらしい。が、其時も已むなく岩石を避け下つて、遙かな澤を横に渡つたと言つてゐる。今は其様な岩石は何の跡をも止めてゐない。葛倉のキレトと同様風化作用の間斷なき侵蝕を語つてゐる。林藏と直吉は其瀬踏みに下りて、初めて綱を下ろしたらしい。さうして、先生方は先きに下りて呉れ、と言ふ。山に入つて綱を使ふといふことは、其危險の極度を意味してゐる。岩石の折疊む屏風の中に落ちて、手も足も用をなさぬ時に岩角に綱を垂れる、雪田の急勾配がカンジキや鳶口で支へ得ない時に、一行の胴體を珠數繋ぎにするか、若くは暴風雨の中を避難する時の警戒に用ふるか、其以外に綱を使用する場合は絶對にあり得ないのだ。綱を下ろす、といふことが一種の警報を傳へた許りか、先づ人夫の下らない安全な内に、我等は下つてしまへと叫んでゐる。恐怖と好奇の心の動くにつれて、我等も亦たこの繼子扱ひをされてゐる東澤嶽と連帶責任でも負はされたらしい淡い苦痛を感ずるのであつた。が、其綱を下げた所は、斷崖の盡きた、次のピークに移る澤の附

近で、それも萬一を警戒する程度のものであつた。それが眞に命綱になつて、九死に一生を託するものでなかつたことが、少々呆氣ないといつたやうな心の遊びの出來た其脚下に、而も綱の端の垂れてゐる石原の間に、何といふ花か廣い虎杖の葉の蔭をなしてゐる眞中に、脆弱い紫のベラ／＼な、其紫が目に沁みるやうなあでやかさに輝いてゐるのを見出すなど、そぞろに綱を下ろした危險な感じとのアイロニーを思はせるのであつた。

第三の痩せ尾根は、先頭に立つた、栂や樅や夜叉の木の間を潛つてゐた予の目の前に現はれた。僅かに三四尺に過ぎなかつたが、蔦倉キレトを小さくした砂の刃先きが露出してゐる。信州側は依然として木も草もない砂岩の大崩壞をアッケラカンと押し擴げてをり、越中側は其餘勢を受けて、森林の間に一條の沙瀑を懸けてゐる。三四尺に過ぎないけれども、其頭を踏み渡る足場がないのだ。予は其沙瀑の下の方に道を求め得るかと、姑らくヤブ潛りをして谷に下りて見たが、それは徒らにヤブ潛りの苦痛を增すに止まることを知つて、再び其痩せ尾根にとつて返した時、予についてゐた一戸氏は、既に其尾根を渡つて第四のピークにとりついてゐた。氏の尾根の一角を踏み潰した一つの足跡は鮮かに其處に印されてゐる許りか其踏み落した砂が尚ほ、遙かな谷の底にあるか無きかのさゝやきをつゞけてゐる。氏が飛鳥の如く身を躍らして、こゝに危い藝當を演じたことを頭に描きながら、予は靜かに鳶口を以て、其砂の一角を掘り崩した。さうして僅かな足場を作つて其難處を通過した。予と一戸氏とが、第四のピークを樂々と舟窪乘越の鞍部に下つて、其の鞍部は存外に長い地平線を描いてゐることに興味を引きつゝ、どの木蔭に晝餉の陣を張らうかなど選定してをつた間に、あとの一行が其の痩せ尾根にかゝつて、どのやうな騷ぎ方をしてゐたであらうか。予が水を求めに舟窪嶽の方へ攀ぢ登つて、其の目的を果さずに歸つて來る迄、さうして幾年の星霜が、こゝに人類の跡を絶つた、日はかん／＼照りながら暗澹たる重い空氣の人に押し迫つて來る寂しさに堪へてゐた、其の待ち草臥れた心持によつても略ぼ想像が出來る。

此の日は早く舟窪嶽の頂上に野營したのであつたが、其の以後、不動・南澤・烏帽子・三ツ嶽、と目的の槍ケ嶽に達するまで、雪線以上のピークを通過したことは、今日まで經來つた山々に約十倍すると言つてもよいのであるが、遂に二度この東澤の如き、秘密を包藏する山には出會はなかつた。雪線以上の山々は皆其胸襟を開けづ放してゐる。單りこの雪線以下の東澤嶽のみが陰險な禍心を抱いてゐる。それは大人格と凡人格との相違に想到せざるを得なかつたのだ。

十一　鉈の跡

初め蓮華嶽の尾根を下つて、地圖上暗晦な北葛、七倉にかゝつてから、先達はよくこゝは人が通つてゐる、イヤ通つてゐない、などと言つては道を求めてゐた。時には樂に行き得る場所を避けて、却つて偃松の起伏する中に踏み込む事もあつた。先達は、後にそれを說明して、この信越の國境線には、時々晒された骨のやうな木片が立てゝある、あれを立てに來たのは、神樣でも動物でもない、矢張國境線を定めに來た人夫である、それの通つた跡なら我々にも行けぬ事はない筈だと言つてゐた。七倉を越えて樺の大樹と樅の林立する中に入つた時も、先達は可い道があるが、これは動物道だと言つては、其踏み易い道を成るべく避けて、國境線のテッペンのヤブの中を漕ぐのであつた。一度人の通つた跡が、足跡になつて殘つてゐる所以は

ない、又た獸物のつけた道とさうでないものとを嗅ぎわける程、鋭敏な嗅覺があらうとも想像されぬ。どのやうな感覺によつて之れを區別するか、山に馴れた者には山學問によつて得た特殊の知識、といふやうな一つの疑問を置いて、一向に其先達の尾にのみついてあるいてゐたのであつた。が、先きに進んだ林藪が邪魔になる木を伐り拂つて行く事は稀であつても、最後に殘つた直吉が、却つて鉈を手にして、始終さまで障害にもならぬ枝を打ち落してゐる、其上立木の幹に絶えず鉈目をつけてゐるのを見た時、漸く其の疑問の解釋される端緒を得たのであつた。それ以來予が先頭に立つても、道を失してあらぬ澤に迷ひ入るやうな危惧心が一掃された。道を求めるといふよりも我を導いて呉れる暗示が行く手〲に印されてゐる。斧鉞を知らぬ森林、境界を沒却した樹叢、それらの侵入者を忌避する暗黑な世界にも、尙ほ總ての冒險者に一道の光明を與へる餘裕が存してゐるのだつた。人の通つた跡、獸物道とさうでないものとの區別、それを的確に正當に、何等の疑問もなく語つてゐるものは、通路に横はる木の幹又は枝に遺つてゐる鉈の刃の跡であつたのだ。鉈は山に行く人夫の瞬時も手放す事の出來ぬ必須の道具である。道を行く時も、野營を張る時も、飯を焚くにも、水を汲むにも、一挺の鉈は七つ道具のそれよりも調法に自在に使用される。米を忘れても鉈は忘れるな、と人夫の口癖にいふ程彼等にとつての第一の忠僕なのである。人類未到の地に入つて、初めて國境線を劃定した山役人とそれに附隨する人夫が、如何に其道を開く爲めに其忠僕を利用したかは、山に馴れた者の何よりも先きに直覺し得る事實でなければならぬ。其計り知られない忠僕の大努力は、岩石を化蝕する雪風の猛威も尙ほ銷磨し得ぬ程、幾歳月を經た今日依然として其痕跡を遺留してをるのである。一度の經驗もない山であると言つても、先達にはこの忠僕の努力の痕跡を發見し得る幾多の經驗を持つてゐる。其痕跡と先達とは相見えない百年の知己を以て任じてゐる。彼等が未到の地を行くにさまで躊躇しなかつた、それえに心配するこたアなからアズヘー、と言つてゐた所以も初めて了解出來るのであつた。

　先達の握つてゐるこの秘密を分捕つて以來、我等も次第に其鉈の刃の跡を見出すに馴れて來た。木の間を見通しで、尙ほ暗い中にも、手の指程の枝に遺つてゐる跡を發見する事もあつた。幹の風折れし朽ちた跡と、鉈を伐り込んで腐蝕しかゝつてゐる痕との區別さへ明らかに認識し得るやうにもなつた。先達が澤に下りようとする道を、鉈目はこちらにあると言つて爭つたこともあつた。たゞ一人先頭に進んで、後繼者と大分にかけ離れた時も、手に鉈目の枝を摑んで呼子を吹いた時もあつた。予は山學問を強ひて注入されたのでなく、山に生きねばならぬ自然の要求が予を山に鋭敏にしたのだ、セメント製造所に入る工夫が、五日經過すれば、セメントの粉末に呼吸器を害されぬ體質に變化する、と言つたやうな適者生存的の進化の理法に支配されてゐるのだ、予の近視眼が總ての物を見るに鈍感であつても、注意の集中力はいつの間にか非常な敏感を養ひ得たのだ、と改めて予の眼下に押し擴がつてゐる森林が、それは嘗つて我等の冒險を冷眼視し、機會だにあれば我等を迷路に押し包まうとする恐怖に充ちてゐた其森林が予に何事をか語らんとする如き親しみを持つてゐるのであつた。

　舟窪乘越から舟窪獄に攀ぢ登る道は、先達もどうとりつくかに思ひ煩つてゐた。が、少し左寄りに草場の中を草に縋りながら這ひ上つて、森林帶に入つて少し右に潛ると、そこに第

一の鉈目を發見した。それから後は約四十五度以上の急傾斜を殆んど側目もふらず直上して行く外無かつたといふのは、それ以外に鉈目が見出されなかつたからであつた。中途に岩石の露出した砂利場もあつた、が、そこに手をかけ得る灌木には明らかな鉈目がついてゐた。頂上近くなつての熊笹の中には、鋸で挽き倒した樅の大樹の跡も見出されたので、予は一戸氏と共に逸早く其頂上に著いた。頭を覆うて生ひ茂る熊笹の中で、何の不安もなしに目的地に著き得たのは、言ふまでもなく、予の勇氣でも大膽でも脚力でもない、鉈目のコツを會得した初歩の山岳間の爲めであつたのだ。

十二　舟窪嶽の野營

舟窪乗越は、長い地平線を描いて、乗越といふよりは峠とでもいふべき餘地を存してゐたけれども、そこに五七人をさへ容るゝに足る平地は無かつた。一堂に會する其晝飯も、一人は此方の木の蔭、一人は向ふの木の根と傾斜地に僅かな陣地を作つて、銘々に割據の形勢をなしてゐた。如是閑は腹上台で粥を食はねばならなかつた、其焚火をする人夫は、我等が信州側に陣取つてゐるに背面して、越中側の樅の木の下に自在を立てゝゐた。誰かが辨當と箸を持つ手が兩國に跨つてゐる、と笑つてゐる中に、一行の大打撃となつた一事件が降つて湧いた。それは一戸氏が携へて來た、此の行の唯一な科學的研究の器具たるバロメーターを取り落したのであつた。バロメーターは大きな懷中時計に類する、部厚な眞丸なものであつた。十人が割據してゐるこの傾斜地に其丸い轉び易いものが落ちたのだ。附近は森林であつたとは言へ、殆んどアッと叫ぶひまも無い、瞬時に其千仭の谷に形を沒した。如是閑は海苔の鑵詰が落ちたのだと思つたといふ。予の氣付いた時は、既に林藏と直吉が頓狂な聲をして、箸を捨てゝ立上つてゐた。東澤嶽の難路を通過し得た一行の歡びは、この割據的會食にも、談笑の親身な繋がりが以心傳心に通つてゐたのであつたが、この事件は倏忽として、其歡樂を傷けた。其歡樂のたゞ中に風穴を穿つてガラン洞にしてしまつた。バロメーターはたゞ氣壓と、それによつて計算される標高を知るものに過ぎないけれども、この天候の順潮によつて示される正確な標高は、陸地測量部の技師すら明記し得ない地圖上の好指針をなすものなのだ。我等の期待してをつた一面は、今や爲めに暗黒に歸してしまふ。誇張して言へば、我等の侵入軍の一角は、寄手の爲めに脆くも敗衂の憂き目を見たのだ。一戸氏は、バロメーターは少くも研究器具としての、技師に附隨する不動産だ、それを消費物にしてしまつたことは學問上の大恥辱だ、と言つて自ら其過失を究明してゐた。

林藏と直吉は其谷に走せ下つて、バロメーターが岩角に打ち當つて、其下の雪田の中に落ちてゐた、と言つて拾つては來たものの、其胴體と針とはもう離れ〳〵になつて、再び用をなさぬものになつてゐた。舟窪嶽の頂上に著いて、尚ほ此日の行動を進めて、不動嶽まで行くべきか否かの商量に可なりの時間を費した。不動の肩に見える雪田までは、少くも三時間を要するといふので、舟窪の頂上に野營を張る事にきめたのが、日もまだ高い三時四十分頃であつた。この頂上には、針ノ木から見通した時にも著しい雪があつた。其雪が額白の馬を見るやうに、殘雪の白々とした山々の總てが白馬の寄り集りであるが中にも、たゞ一つ際立つて見えてゐた。今其下に其雪を踏んで見ると、それは厚さ五六尺もある大きな俎板をなしてゐる。其解けて溜つた水の中に、蚯蚓がゐたといふので、それを汲み干したりする悠長な野

營であつたが、舟窪乘越の一椿事は、ゆうべの夜叉澤の野營とは別な物足らなさを我等の心頭から掘ひ去ることは出來なかつた。

七月十七日、天候快晴。午前八時半夜叉澤出發、同十一時半舟窪乘越著、晝食、午後三時四十分舟窪嶺頂上著、野營。

舟窪嶺には從來別に名前は無かつた。山岳會の地圖には「不動堀澤岳」とあるのがそれで、先達林蔵も其名を知らぬと言つてゐた。が、舟窪乘越の頂上に位するのであるから、之を北葛乘越の北葛嶺と同樣に、舟窪嶺と命名して置いた。後に山岳會の小島氏であつたか、既に舟窪嶽と命じてゐたのを發見した。

十三　烏帽子嶽麓

不動嶽以南は案内者の既知數だとして、大抵胸算用も立てゝゐた所である許りか、きのふまでの未知數の、而も測定すべからざる難場の危險などは全く跡を絶つたと言つてよい、明るいさうして自然と心の落著く山傳ひになつた。蓮華嶽の頂上に、勿來關に馬首を立てた義家のやうな氣分で、山嶽の大觀を眺めた以來、北葛・七倉・東澤に入つて後の一行は、關ケ原の大役に遅れた秀忠の兵のやうに、たゞ一途に道を急ぐ心で匆忙としてゐた。北葛の頂上からは、我等の策源地としてゐた大町の、其著しい鎮守の杉の森を中心にした平野も瞰下ろされた。高瀬川の白い磧の末には松本平も開けて、雲烟漂渺たる間に、八ケ嶽立科の連山なども望むことが出來た。が、休んでをつても心の落著かぬ身は、それらをしみ〴〵と眺め入つてゐる氣になれない。行く手は〳〵と眸界は馬車馬のやうに、たゞ前面の一路にのみ開いてゐるのと同じであつた。不動嶽の頂上に著いた時、人夫は初めて越中の海が見えると言つた。能登の岬がずんと伸びてゐる、と見詰めてゐた。やがて雙眼鏡を出して、富山の町が見えるとか見えぬとか爭ふやうになつたノンビリした氣分は、此日初めて味ふことの出來た、我等の眸界の限られた覆面をかなぐり捨てた愉快なものであつた。

南澤嶽は、之を不動嶽を下りた濁り澤乘越から仰ぐのとは、全く様子が一變する。偃松の全山を覆うた何の奇もない山であらうと思うたのが、頂上は透徹した白砂の臺で、其處に散在してゐる岩組までが、其雪白な肌をむき出しにしてゐる、能衣裳のハクが敷き詰められてゐるらしい眼に眩い明快さが、折柄の西風に焔の如き陽炎を立てゝゐた。其麓の白砂と偃松とを織り交ぜた高原も、恐らく〳〵このアルプス地帶に見ることの出來ぬ、白地に強烈な緑を織り込んだ自然の綾羅であつた。

我等は危險の伴つてゐた今までの道を夢の世界のやうに忘れ果てゝ、今の一歩々々を醒覺の現實と憧憬しつゝ、而も自然の王宮の珠簾に觸れ玉階を渉るやうな心のをのゝきを感ずるのであつた。姑らくして我等の行く道は次第に狹い谷に落ち凹んで往つた。黑木の森む闇を胎内潛りと言つた風に潛りぬける所にも出た。其上水板屋やタケ山椒の茂り合つた密樹が果しもなくつゞいた。たゞの今までの晝が遽に夜になつたやうな心持をしてゐる時、再び我等の眼前に別な明媚な世界が開展した。

初めは殘雪の間にかやうな池がある、とたゞ其汪洋たる水の淡い藍色をしてをるのに驚異の目を睜つたのであるが、其池の汀を通つて次ぎの丘に出た時、又た同じやうな池が脚下に丸い底の知れぬ水を湛へてゐた。其水の上には、まだ解けきらぬ雪の塊が、浮島のそれのやうに漂うてゐた。心付いて其處らを見渡すと、ナルイ丘阜は行く手に果しもなく起伏してゐる。其丘阜の凹み〳〵を染めてゐる殘雪は、巨大な白牡丹の花瓣の散りこぼれたやうに、そこら中に斷續してゐる。石の露出した部分の外は、一面に嫩草の萌え出た、それが殘雪と柔かなヌーボー式の線を劃した目もあやな原なのだ。烏帽

子嶽は、却つて大禮服の禮帽の形で、主人然と其殘雪の原に蹲んでをり、南澤嶽は慇懃な來客のやうに、森林を隔てゝこの原に近づかんとしてゐる。折柄の夕日は、この原に丘阜の濃き陰影を投げて、更に明暗の曲折をつけてゐる。華やかなといふ景色ではない、が、色彩に貧しい潤ひを缺いた畫面ではない。端倪すべからざる變化に富む奇景ではない、が、ありたけの材料を配置して、それが餘りに巧緻に柔和に技巧の妙を極めたものであることは爭はれないのだ。我等は磁石に引きつけられるやうに、第三の池のほとりの、白い花と黄色い花の咲き滿ちてゐる草原の上に腰を下ろした。形容にいふ翡翠の園がこゝに我等を待ち受けて其柔かなソファを一人々々にあてがつて呉れるものの如く、いつか我等は枕を並べて大の字になつた。南澤嶽の麓から狭い谷に我等を陥れた一種の坑道は、丁度こゝに開展してゐる新たなパノラマを見せようとする入口であつた。我等は其の暗い坑道を潜つて來た爲めに、このパノラマの明るさと色彩とが一層際立つて見えたのだ。池の白紅もまた見せ物の興行をする、と思ふと、池を隔てた向ふの堤、その上は平な臺地になつてゐて、其處には草の花が姿交りに咲きさかつてゐる、赤襷の百姓の娘が鍬をとつて畝づくろひでもしてゐねばならない地形をなしてゐる。何處かで雲雀の囀る聲がする、と我が眼と我が耳を疑ふやうにもなつて、其透きとほる次第に高まる澄み切つた夕空の中に、雲の稻妻を見るやうな仄かな雨も冴え〴〵した光りの閃くのを、何の不思議もなく見詰めるのであつた。我等は後に、この原を烏帽子公園と名づけた。

様々な幻覺を描きつゝ、烏帽子公園に費した一時間は、我等にとつて眞に一刹那であつた。我等は盡きぬ歡びを殘り惜しく切り放して、先著の人夫の待つてゐる野營地に急いだ。途中予の脚下に彷徨してゐた兎の子を直吉が手捕りにした。それを野營地の池の草地に放つて、兎狩のそれのやうに、大きな鬨聲を上げて四方から追ひ廻す喜劇も演ぜられた。改めていふのではないが、初めは處女の如く、終りは脱兎の如し、といふ諺がある。きのふまでの我等の處女は、今の脱兎を其まゝに、人夫共もハメをはづしてゐるのであつた。

七月十六日、天候快晴、午前六時[illegible]發、同十時五分[illegible]岳頂上著、午後[illegible]南[illegible]岳頂上著、同三時[illegible]公園、同[illegible]三十三分發、[illegible]、[illegible]午後五時[illegible]小屋に著

十四　岩石美

不動嶽の頂上に著いた時、一方に蓮華の尾根に見たやうな醜怪な眞黒な岩組の立つてゐる間に、さもザラメの砂糖を振り撒いたかと思はれる白砂の一廓があつた。一戸氏はそれを見て、單純な花崗岩砂ではない、寧ろカルサイトの方が多量に含まれてゐるのではないかと言つてゐる。花崗岩砂にしては、黝黒な雲母を交へてゐない許りか、其光澤が不透明な乳白な玻璃にも似てゐる。雲母のかはりにカルサイトを混じたものであるかも知れないが、我等の目には、却つて石英に花崗岩砂の交つてゐるものとしか思はれなかつた。其純白な高潔さが又たザラに撒布されてゐるとも思はれなかつたので、一握りの砂を紙に包んでポケットに收めた。

南澤嶽の信濃側は、七倉澤の大崩壊と別に岩石の片影もない白砂が、谷から吹き上げる風に絶えず濛々と砂煙を上げてゐた。下界に咲き捲く紅塵とは似もつかぬ白砂の煙りもつであつた。我等は此處初めて大崩の溪谷に眼を瞠ふのであつた。が、其山上には、日を射ます白砂と白岩とが、こゝに水晶宮を築くかた、美妙な

舞臺の裝飾りに配置されてゐた。

南澤嶽から烏帽子の野營地に至るまでの間に通過した、濁り澤の頭だといふ一峯も、南澤嶽の餘勢を享けて、其血統を引く眷屬のやうに、白く禿げたといふよりは、總白髪が銀色に輝く老衰の美しさを保つてゐた。

烏帽子嶽の頂上になつてゐる、其の烏帽子岩はたゞ之を麓から仰いだだけであつたから、其岩質が何であつたかを知らぬけれども、南澤や濁りの頭から推定すると、それは矢張同じ系統に屬する、純白の岩組であらうと思ふ。

烏帽子の野營地を出發して、すぐ其絶頂を極めた三ツ嶽――之を不動嶽邊から遠望すると明らかに頂上に三突起がある。が、三角標のある第一峯に上ると、それらの突起は著しく目に映じない――の頂上も、硬白砂の流れで、それを堰き止める岩疊みも亦た眞白な肌を露はにしてゐた。が、其白砂の流れは、不動や南澤のやうに雪を欺く白さでは無かつた。三ツ嶽の頂上近くの一鞍部に、粉末の白砂と豆大の砂礫とが略ぼ一様な間隔をとつて地面に異様な縦縞を描いてゐた。一戸氏は之れを融雪の地を辷つた痕跡、カールの轍則の最も微力な運動に基因するであらうか、との疑問を置いてゐた。雪の解け工合によつて、或處は粉末の砂を氷と共に流してしまふ。或處は水が砂に滲み込んでしまふ。之れが傾斜地を雪のずり落ちる、非常に優長な靜かな運動を開始するに隨つて、豆大の砂礫許りを遺留する部分と、粉末の白砂を其儘に押しつけて行く部分とが出來る。さうしてかやうな砂面の縞目を作ることになる。若しこれに何億倍の馬力と、雪量と、それに温度の工合を調節さへすれば、所謂氷河の大偉力となつて岩石をも穿ち、峯頭をも磨銷する。我等は氷河の小さな雛形を見せられるやうな思ひで、姑らく其何處か始まりで何處が終りともつかぬ縞目を見下ろすのであつた。が、雪田の上に風工合で間斷なき波紋を作るやうに、且つ雪田には之を上から見下ろすと、大砲の内身に彫りつけてある螺旋的線條の大渦卷を發見するやうに、融雪後の乾いた砂礫が、かゝる鞍部に旋回する小颶風の爲めに、かやうな縞目を作らぬとも限らぬなど臆測は區々にして遂に歸著する所を知らなかつた

三ツ嶽に次ぐ野口五郎嶽は、砂礫よりも寧ろ積物石大の堆積であつた。踏めば崩れさうな岩石の間を馳驅して、人夫共は大勢かゝつて雷鳥を追ひ廻してゐた。

一戸氏と予とは五郎嶽の西南越中側の[illegible]に、地圖には見出さなかつた一つの池を見下ろした。池は径大の丸さにしか見えない。其ざの眞砂嶽から落下してゐる大黒色の岩石のなだれは、直ちに其池の瑕まで迫つてゐる。さうして五郎嶽によつた方に、野營場にふさはしい軟草の原をしてゐる。其池か噴火口の跡であるや否やといふよりも、それまで山々の岩石美を念頭にして來た予は、其岩石のなだれが、何質の石であるかに先づ疑問を置いた。一戸氏も、あれが溶岩であるなら、池の成生の原因も略ぼ判明するといふ。二人は一議に及ばず、沙礫の懸崖を池まで下りる事に決した。下までは容易でありませんぞ、と既に中途まで下つてゐた我等を叱咤するやうな先達の聲も、山に入つて以來の知識慾を充たさうとしてゐる我等には、山頂の岩角を吹き鳴らす風の音としか聞えなかつた。予は岩石のなだれの方に歩を移して、それが予の知識の範圍で、輝石安山岩の一種類の外何物をも交へないことを知つて、こゝに一區劃をなす岩石美の變化に思ひ及んだ。

不動嶽以南は、假令カルサイトや石英を含んでをるとは言へ、ずつと花崗岩と花崗岩砂の色彩美で終始してゐたと思ふ。それが立山連山の

雄山の頂上のやうに、硬質な墓碑材料的の花崗岩でなくて、密度の甚しく稀薄な、風化作用は常に其皮下の肉をも犯してゐる軟質の花崗岩であつたといふことが、不動以南の明快な静澄な殿堂的光景を作す第一要素でなかつたであらうか。それが烏帽子公園の技巧に富んだ世界となり、南澤・濁りの頭の偃松を配した織手の腕を見せる絨氈となつてゐたことも、其岩質の地盤をなす賜物でなかつたであらうか。それがこゝに一線を劃して、輝石安山岩の支柱になつてゐる、山嶽の景色美も亦た一變することを否むことは出來ないではないか。

眞砂嶽の輝石安山岩は、ついで赤嶽の鐵氣を含んだ赭岩の聳立に急變した。輝石安山岩の片石の灰黒色を踏み崩して、赤嶽の偃松帶を通過すると、我等は既に草鞋を沒する赭白な柔かな砂に踏み込んでゐた。信州側に大削落をしてゐる赤嶽の一面は、赤摺りの鬼面を想像せしめる怪醜な襞皺を波立たせてゐる。我等は白砂白岩の雲帶から輝石安山岩の目に刺戟のない渾沌に入つたやうに思うてゐたのであるが、今亦た熱氣に充ちた赭岩の熱帶地に沒入したやうな、過渡に遑ない心の忙しさを感じた。其大削落の怪醜な襞皺の間からは、無烟の焔が颷颺として我が面を射るのであつた。

赤嶽の頂上から分れてゐる、黒部の深谷にこの幹線山脈の一分岐を派出してゐる黒嶽・赤牛の中、我等は手近な黒嶽の頂上を極めるべく進んだ時、予の心の驚きは、其主峯の左右に大カールを形づくつてゐる雪田の爲めではなかつた。黒嶽を構成してゐる岩石のガサ〳〵した粗面でありながら、其粗面の奥に祕む美妙の光りが、時に我が眼を射透し、時に我が掌に反映することであつた。其光りは黒布で覆うた鏡の、僅かな綻ひ目から洩れる反射のやうであつた。岩石に縋つて頂上近くの急斜面を攀づるやうになつた時、其反射は既に我等を包圍してゐた。丁度藥師嶽の方に傾いてゐた西日の直射する爲めでもあつたであらう、我等はどれと指さすことも出來ぬ、何處にと探ることも出來ぬ、それは地上よりするともなく、虚空よりするともなき、光明の赫奕とした世界に我を見出したのであつた。さうして我等は頂上近くの砂礫の中に、いつまで拾つてゐても盡きさうもない、六方石と柘榴石とを、さも夢中の出來事の如く恍惚として拾ひ溜めるのであつた。後に我等を案内した直吉は、紫水晶の出る洞穴も其裏にあるが、まだ雪があつてそこまでは下れなかつた、と語つてゐた。

我等の拾つた磨き水晶は、多くは疊針に氣のきいた小さなものであつた。が、其透明な一點の曇りもない光りは、そを見出す毎に我等の胸を躍らせた。光明に包まれて來たと思つてゐた予の心持は、この水晶を見出すに至つて、こゝに岩石の重疊たる波瀾の最高潮に達したやうに思つた。それは單りこの黒嶽のみでいふのではない。不動以南の岩石美が、幾多の變化をなしつゝ、それは冬郭・春殿・夏閣の結構を案内して、この一碧透徹の秋宮にまで深入りせしめた、曲折あり抑揚あり順序ある筋道の浩大さを回想しての言ひであつた。

事實この黒嶽以南には、赤嶽に類似した硫黄嶽の赭岩の外、ワリモノ嶽と言ひ鷲羽嶽と言ひ、三つ又の蓮華。雙六。樅澤と言ひ、槍ケ嶽の片麻岩に至るまで、特異の岩石美をなすものは無かつた。針ノ木以南の北アルプスの岩石美は不動以南・黒嶽以北に其粹を集めてゐるといふべきなのだ。

此日は赤嶽東南麓の凹地に野營を張つた。最初蓮華で見た鎌のやうな三日月はもう半楕圓を描いて、我等に半顔の微笑を投げかけるのであつた。牽牛織女の天の川を挾んだ星の位置、そ

れに其二星の間に介在する十字星の話など、一戸氏の天文談は、蓮華サルーン以後、赤嶽ミーチングの別な空氣を漲らした。

七月十九日、天候快晴。午前七時烏帽子嶽野營出發。同七時四十分三ツ嶽頂上。同十時野口五郎嶽頂上。午後零時五郎池。午後二時赤嶽。同四時黑嶽。同五時二十分赤嶽野營。

黑嶽は五萬分一地圖に水晶嶽と記してある。又た同地圖に赤嶽の名はない。却つて槍ケ嶽の北麓の硫黃嶽つゞきに赤嶽の名がある。それに同地圖の大なる誤は、三つ又の連峯に鷲羽嶽の名を記して、鷲羽岳（二九二四のピーク）は無名の一峯としてあることである。之は改版の時訂正すべきである。それに眞砂嶽、ワリモノ嶽の名もない。眞砂嶽は又た火打嶽と命名した人もあるが、地圖は二八六〇としたピークであり、ワリモノ嶽は鷲羽の北、赤嶽の間で、之は其標高さへ記してゐない。

十五　硫黃澤乘越まで

きのふ赤嶽、黑嶽方面から左に見下ろしたクモノ平の高原は、けふもワリモノ鷲羽の諸峯から右に見下ろされてゐた。初めは立山の五色ケ原のやうに、たゞノッペラポーな平原とのみ思うてゐたのが、それは黑部川の源流の本澤とタル澤とに取り卷かれた、曲玉のやうに半圓圖を描いた高原であることを知つた。雪のむら消えになつた間に綠の嫩草は一面に敷かれてゐるらしい。林藏が、其平原の土の露はな所や沮洳地が、蜘蛛の手足を張つた形に遺る、といふやうな話をするのも、其原に咲き滿ちてゐるべき草花の絢爛と相待つて、傳說的な滋味を感ぜしめた。やがて鷲羽嶽のカラ／＼な干乾びた感じのする石礫を下りて、飛信越の三國に跨つてゐるといふ三ツ又の蓮華の高原に出ると、凡そ幾回となく踏み渡る雪田と、さうして其間々に介在する芽生の草の原は、クモノ平を想望して味つた滋味を、更に實際に我等の手足に觸れしめた。烏帽子公園のそれのやうに弱々した親しみを露骨にしたものではなかつたとは言へ、いつまで踏んでも倦きる事のない、灑脫な大まかな結構であつた。烏帽子公園が光琳の間であるならば、蓮華平は宗達の間ともいふべきであつた。光琳の色彩には餘りに濃艶なアクドさがある。宗達の筆致には勁拔な頭の下がる力が籠つてゐた。

鷲羽の池はたゞ頂上から見下ろして、其噴火口の歷然たる跡を指示し、林藏が古い山通の話をして、この鷲羽の池は其昔滿々たる水を湛へてゐた樣が、眞に蛟龍の玉を藏すかのやうな靜謐の恐怖に充ちてゐたなど語るのを、ことは別な池の話をするもののやうに冷やかに聞き流したのであつたが、蓮華平を渡り了せた時、我等は自然に雙六の池のほとりに出てゐた。雙六の池に源を發する雙六谷は、山明に棲むといふ寶跡の傳說がある、それも池のたゞの水溜りであるのとは、餘りにかけ離れた小說に過ぎなかつた。

我等が雙六の池を立つて、樅澤岳の頂上に着いた時、奧樅澤だといふ一帶の信州方面に流れてゐる尾根の中程に、人間でなければならぬ白く動く物の休んでゐるのを發見した。雙眼鏡で見ると、それは明らかに二人の男であつた。姑くそれが釣竿を持つてゐることさへ判明した。姑らく休んでゐた二人は徐々として山の尾根を上りかけた。後にそれが當時の蒲田か中尾邊からイハナ釣りに出かけた者であつたことを知つた時、この邊の魚釣りの馬鹿に大仕掛けなものであることを、さも證據調べの物品を目の前につきつけられるやうに感じた。品右衞門が大町から針ノ木越をして、黑部の谷に釣りに行く事を知らぬのでは無かつた。黑部の籠渡しに小屋を作つて、釣つたイハナを乾物にして歸つて來る事さへ知つてゐた。が、それは品右衞門の山通としての景物に過ぎない話であつた。かゝる登山者の通路にも當つてゐない無人境にまで侵入する魚釣りの實際を見ては、イハナ釣りも生ま半弱な事ではない、命がけの偉業である事

を驚嘆せざるを得ないのだ。我等は改めて脚下に押開いてゐる、中尾や蒲田に通ずる高原川の源流右股の深い〳〵溪谷を見下ろして、身の飛驒近くに來たことよりも、黑部の溪谷とは別に、一方に槍・穗高の峻嶽を控へたこの大裂罅の陷阱の威容を讃歎するのであつた。

奥樅澤の中腹を横に亙る道は、之を誰かが金米糖坂といふやうな無趣味の名をつけてゐた。砂礫のザク〳〵な所は、金米糖を盛り上げたやうであつたけれども、それを亙る急斜面は却々甘いことでは無かつた。蟻地獄に落ちた蟻のやうな苦しみを繰り返して、辛うじて硫黃澤乘越に出た。金米糖坂といふよりも、山蟻渡りと言つた方が、我等には好記念をなす。

不圖我等は連日の好晴の爲め、山に狃らされた、山嶽の威武と尊嚴とを胴忘れした、心の荒んだことを反省せざるを得なかつた。といふのは、硫黃澤乘越の野營地で、夕飯を終るか終らぬに、俄然として飛驒方面から濃霧が襲來したからであつた、初めは槍ケ嶽を包み、次ぎには其鎌尾根あたりを掠めてゐると見えた霧は、既に我等の越して來た樅澤や奥樅澤を抱き込んでゐた。霧の足は馬鹿に早い、と言つてをる間にもう我等も其嚢中に押し籠められて仕舞つた。

火にあたつてゐる人夫達も、全く雲中語を交へてゐるものとなつた。山から谷へ吹き颪す霧であつたけれども、其足の素早さは、其包藏する禍心を暗示するものとも見られるのだ。一旦テントに入つた一戸氏如是閑も起きて來る。遙か西の方黑嶽かと思ふ邊が霧の裂傷を來して、倘ほ名殘を止めてゐる夕榮の明るさを稻妻の如く閃かすのも、物凄い烽火であつた。林藏は大丈夫と言ひながら、是非に山を逃げなければならぬとなれば、こゝには右股の引き場がある、山が時化て來た時、初めて人夫の强弱がわかるなどと物語るのであつた。予は却つて山の異變をこの行の波瀾とも見たい、と恐怖の中にも多少我等の陣容について覺悟を決したのであつたが、我等がテントに入ると間もなく、直吉の聲で、霧は晴れました、お月様があれ、あれ、と叫んでゐた。時間にすれば一時間にも足らぬこの凶變の豫報はそれは狼狽へた使者の虚報に過ぎなかつた。が、我等の心は連日の倦怠を膺懲する緊張さを持つてゐた。

七月二十日、天候快晴、風あり。午前四時五分起床、同六時三十五分赤嶽野營發、同七時十五分ワリモノ嶽頂上。同八時五分鷲羽嶽頂上。九時四十分鷲羽乘越。同十時半蓮華平着。一時間休憩　午後二時半雙六池。同三時八分雙六池發。同三時四十五分樅澤經頂　同四時五十分硫黃澤乘越野營。

十六　結末

硫黃澤乘越の野營地は、我等の目標に志して來た槍ケ嶽を、最上の棧敷から舞臺を見るやうな好位置にある。近づき得るだけ近づいて、それが又た觀望に適するやうに、遠ざかり得るだけ遠ざかつた場處にある。きのふ野營地に著いた頃は、五時頃の夕日を其全姿容の眞正面に浴びて、これ位穩かな夕べに君臨するのは、嶽始まつて以來のことだ、と言はぬ許りに一層肩を聳かしてゐるやうに見えた。我等は針ノ木峠に攀ぢて以來、一日としてこの嶽と相見えぬ日は無かつたのであるが、この夕程、それに親炙するやうな心持の動いたことは無かつた。嶽は槍の主峯が少しく左に傾きつゝ出來るだけ後ろにそつくり反つてゐる、其左側はナルイ傾斜をして、ウント足を踏張り腰を据ゑた尾根を北々東に展べてゐる。其尾根は恰もこの山嶽を眞逆樣にして、ありたけの外皮を振ひ落したやうに、其節々の末までを露出したギザ〳〵の隙間もない半開の屛風をなしてゐる。其一樣に彩られた灰白色は、人の驚いた時の蒼ざめた色とは似もつかぬ、幾歲月の修行經驗に自然と血の氣を喪失した悟道の人の

それに似た蒼白色を帶びてゐる。其肩にかゝつた晝の月の幻のやうに夕空に浮き出てゐる靜かさは、一向に四邊を壓して、總ての動搖を押し鎭めるやうにも仰がれたのであるが、山嶽それ自身は嘗て休止することのないこの動搖に堪へてゐると、却つて其祕密を語り顔にも見えた。先づ其尾根の爪で引掻いたらしいギザ〳〵を見よ、其のギザ〳〵の下に無數の縱皺と横皺とを描いてゐる個々の尖りを見よ。嶽膚一面を覆うてゐるそれらの尖りはどれ一つ取り出しても、それが主峯の槍ケ嶽に似た穗先きを形づくつてゐないのはないではないか。それが頭領の物眞似をする雜兵のやうに、教師の感化する子弟のやうに、個々の尖りはそれ〳〵に主峯に似寄らんことを無自覺に競爭してゐる、其競爭の爲めには何物をも犧牲に供して鎬を削りつつある。其處に山嶽それ自身の沈滯と靜止とがあり得ようか、無烟の砲火は放たれ、無音の鬨聲は揚げられつゝあるのだ。予はテントを張りつゝある人夫達を、遠く脚下にして、單りこの動搖に魅せらるゝ眩暈を感じつゝ、其個々の尖りに釘づけにされた視線をもぎ離すことも出來なかつた。

此日は大せんべ小せんべなどいふ突起と、西

鎌尾根の磊塊たる石を踏んで、やがて槍ケ嶽の肩飛驒乘越に著し、其頂上をも極めて一氣に上高地に下りてしまつた。一週日の雪線生活に馴れた我等も、梓川の徒渉の度毎に、かくして下界の醜穢を洗へ、と山嶽の尙ほ警告を發するもののやうに悚然として戰くのであつた。

七月廿一日、天候快晴。午前七時出發。同八時四十分鎌尾根通過。同九時五十分槍の肩著。同十時十分槍絕頂。同十一時十分槍を下る。晝飯。午後二時三十分赤澤小屋著。同三時二十分二の股のドー著。午後八時四十分上高地著。

夢の如し

坂本四方太

夢の如し

自序

「夢の如し」は三年ばかり前からボツ／＼雜誌に掲載したのを、今度思立つて、一纏めにしたものである。余は之を纏めて出版するに就いて一考した。斯樣な片々たる文章を集めて、再び世の人に示す必要があるかどうかと考へた。全體余の今の文藝觀では、心に深い感動が無ければ文章を書くな、といふのが根柢になつて居る。然るに「夢の如し」はどうかといふと、勿論そんな考で書始めたものでは無い。して見れば今之を出版する必要は無いのかも知れぬ。さうかといつて斷然打捨てゝ了ふ氣にもならぬ。何故であらうかと考直して見るに、深い感動とまでは行かぬにしても、或る幽かな細い濃かい感情に動かされて書いた事だけは確である。決して文章の技巧を矜らんが爲に書いたのでは無い。著者自身は之を綴り之を讀む間は、現在の煩雜なる精神狀態から逃れて、少年時代の醇良なる感情に立返り得た。勿論平凡極まる記事であるから、一般讀者の感情までも支配する事は覺束ないが少くとも讀者自身の少年時代を聯想させる便りにはなるであらうと信ずる。斯う考へて見れば萬更出版の必要が無い譯でも無い。且又明治の思想史は年一年と變遷して、瞬時も一處に停滯する事を許さぬ。若しも余と同じ時代の同じ境遇の人の少年思想は如何にあつたかを考へ、又余と異なる境遇にある人の少年思想との相違を研究する一助ともなるならば、是れ余が希望以上の幸福である。尚ほ附加へて言ふ。「夢の如し」は余の正確なる自敍傳でも無く、又全くの小說でも無い。只だ斷片的の事實と多少の想像とを取合せて、それに依て我が少年時代の感想を再現させようと試みた文章である事を告白して置く。

明治四十二年五月七日　著者識す

一

自分も一つ子供の時の事を書いて見る。極幼少な時の事である。

自分は元來田舍者で、日本海の濱邊なる漁村に生れた。併し漁師の子でも無く百姓の子でもない。昔なら矢張侍の子である。吾か家族は御維新の後、城下に住まふ必要も無いといふので、此漁村に移住した。自分の產土神は村の八幡樣である。三四歲の頃まで此村に生長したのだが、取留めた事は何一つ覺えて居らぬ。只だ今日までの三十何年といふ、長い月日の流れを源まで遡つて行くと、そこに何やら夢のやうな、而も或點は極めて明瞭な記憶が殘つて居る。今この記憶を其儘書いて見ようと思ふ、併し夢よりも纏まらぬ、謂はゞ幻影の如き或る感じだけが殘つて居るのだから、事件といふものは少しも無い。

家の裏が藪で緣先は畠になつて居る。海は砂山を越えて後ろにある。絕えずどう／＼と浪の音が聞える。道といはず畠といはず砂ばかりで、駒下駄で歩いても音がせぬ。何年たつても下駄の齒が減らぬ。家を建てる時は、砂の上に水を五六荷もぶちまけると、砂はガッシリ締つ

て磐よりも硬くなる。其上に上蓋石を据ゑて置けば善いのだといふ。是は無論大きくなつてから聞いた話だが、吾家が砂畠の中の一軒家であつた事は今でも善く覚えて居る。家は藁葺であつた。畠には梅の木が二三本もあつた。畠には蟹が居る。澤蟹が小石を背いた程居る。人が行くと驚いてがさ／＼と竹の枯葉に隠れる音が藪の嵐よりも烈しい位である。藪許りでは無い、台所の板の間を這ひ廻る。天井の上を走る。夜分寝静まつた後、唐紙の外に曲者の跫音かと驚かれた事も一度や二度では無かつたと、是は後に母から聞いた話である。

或時ふと眼が覚めた。炬燵に只獨り寝かされて居つた。見ると母も居らぬ、父も居らぬ。何時も此室に居らぬ事の無い祖父さへも居らぬ。恰も空屋であるかの如く森閑として居るので急に悲しくなつた。悲しくなつたから、聲の有りたけを出して泣いた。誰れも出て来ぬ。此室は今考へて見ると丁度四疊半位で、寝て居る右側の障子が薄暗くて、赤くなるまで煤けて居つた。到るところに黒光りのするけんどんの箪笥があつて、箪笥の上に大きな佛壇が載せてあつた。吊した眞鍮の燈明皿の光がきら／＼光つて居る。聲が出なくなる迄泣いて居ると、東の室の縁の方に音がして、誰か這つて来る気はひである。一寸泣聲を止めて耳を澄した。あたふたと唐紙を開けて入つて来たのは母と思ひの外祖父であつた。大方畠に出て居つたのであらう。片手に小さな鉈を持つて居る。お母さんは今お手水だから少しお待ちよとか何とか賺されたが、母でなかつたのが不平で再び泣き聲を張上げた。

祖父の顔は今でも善く覚えて居る。鼻の高い面長な顔で、左の頬に指で突いた程凹んだ處がある。いつか大層歯が痛んで、こんな窪みが出来たとの事。祖父は自分の頭の處に立つて、佛壇の抽斗を開けて何やら捜して居る。泣き乍ら上眼で見ると、祖父の尻に狐の尾がぶら下つて居る。祖父は毎年冬から春へかけて狐の毛皮のちやん／＼こを着て居るのである。炬燵にあたつて居る時などは、いつでも此の尻尾が疊の上に横たはつて居るので、後ろからそつと行つて引張る。すると祖父はア、痛い／＼祖父ちやんの尻尾が抜けるといふ。さう言はれるのが面白さに、尻尾が見えさへすれば直ぐ引張りに行くのだが、今日は母が居らぬので大不平の際だから無論引張りに立つ気は無い。仰向けに寝たまま愈よ大聲を揚げて泣いた。

祖父が抽斗から取出してくれたのは煎餅であつた。馬の耳と稱へる大きな煎餅であつた。端をひねつて漏斗のやうな形にしたので、背中に渦が三つ巻いて居る。この煎餅は法事のある時に饅頭と一所に配る煎餅だが、なぜ此時この煎餅が佛壇の抽斗に入れてあつたかは今に解らぬ。兎に角、自分は之を貰つて大に嬉しかつた。併し煎餅のうまい事が母の顔を見る代りにはならなかつた。是に由て煎餅を食ひ且つ大に泣いた。若し母が或る事情の下に、晩になつても朝になつても、一年たつても二年たつても、此まゝ内に還らぬのであつたらどうだらう。さうして祖父が馬の耳を佛壇から取出して、やけに泣く自分を慰めるのであつたらどうだらう。こんな例は世間に幾らもある。祖父たるものの身になつては、こんな遣る瀬の無い難儀は又と有るまい。幸にして今はさうでは無かつたが、自分の悲しさは、此の場合と少しも異ならぬ。異ならぬから馬の耳を食べながら泣いた。果ては馬の耳を抛り出して泣いた。

祖父も今はせう事なしに、狐の毛皮の上から自分を負うて、お母さんに連れて行くからチャンとおなりといつて外に出た。母が手水場に居らぬは勿論、今日は家族の總てが外出して、祖

父と自分だけが留守番に殘されたのと見える。負はれて泣き止みはしたが、灸を据ゑられた後のやうに泣きしやくりが止まぬ。外に出ると氣分がせい〳〵した。母に抱かれる望みが出來たばかりでなく、磯邊のうら〳〵とした春色が吾が小さい胸の不平を和らげたのである。やがてしやくりも止んだ。畠の向うは小高くなつて居つて、こゝから砂山の松林になる。松の下の道を負はれて行くのが躍り上る程嬉しい。祖父は嬉しくも無いかして、無言の儘すた〳〵と松の間を縫うて行く。或日裏隣のおさきに連れられて此松林に松露を掘りに來た事がある。松露を掘るのは譯は無いもので、有りさうな場所を見て熊手で搔くと、手に應じて玉數のやうな丸いのがころ〳〵と現はれる。

松林を離れると直ぐ砂濱である。果ても無い砂濱である。防風が紅い莖を僅ばかり現はして砂に萌え出でて居る。碧い海が見える。後ろを振向くと松林は遙に遠くなつて、丁度屏風の繪のやうに見える。祖父の足跡は松林から斜に、直線に續いて居る。誰のやら分らぬ足跡も三筋許りうね〳〵續いて居る。濱の砂は樺色である。海邊なら屹度砂濱があるもの、砂濱なら屹度樺色をしたものとばかり思つて居つたが、他國に來て見ると丸で砂濱が無かつたり、假令有つても砂の色は薄黑いのが多いと云ふ事は長じて後に初めて知つた。海はだん〳〵廣く見える。それに此の海岸のやうに、家のある處から汀まで二町も三町も、時としては七八町も砂濱になつて居る處は餘り無い。ところ〴〵小山になつて淺茅の生えて居る處もある。或は風のために擂鉢のやうな形に大きな窪になつて居る處もある。祖父は依然として無言のまゝ、砂の小山を越え砂の谷を渡つて、だん〳〵浪打際の方に降りて行く。海は眼が届かぬ程廣くなる。生暖かい風が松林の方から吹いて來る。頰に雨があたるやうに冷たく感じたのは、溜つた涙に風があたるのである。

日本海は波が荒い。海は絕えず大波が打つものといふ事も、こんな子供の時から深く頭に染込んで居る。須磨の浦や品川の海を見て、こんな海がと大に輕侮の念を生じたのも、全く海の觀念が違つて居るからである。綠色の水のうねりがだん〳〵膨らんで來るかと思ふと、波の腹が薄暗くなつて前に崩れつゝどさ〳〵と打つて來る。どさッと打揚げた波は、むら消えの雪の如く斑らに泡立つて、一時平かに漂ふ。暫く漂うた後、急に思出したやうに寄せ來る波の底に引返す。引返した水は待構へて居る波と合して前よりも一倍激しく打揚げる。水烟が霧の如くに立つ。時としては返す勢の烈しさに、威丈高に寄せる波の勢を挫いて、水面は却て意外に平和を保つ事もある。今日のやうな麗かな軟風の日といへども此活動は何時も止まぬ。

祖父はすた〳〵と波打際を西に向つて行く。何處まで行くのか分らぬ。時としては波の泡が祖父の草履の際まで這ひ進む事もある。恰も虎か何かが腹這ひになつて祖父の足を嚙みに來るやうに見える。祖父は頓着なく西へ〳〵行く。人には誰にも出遇はぬ。只軟風が祖父の鬢の毛を輕く動かし、自分の頰を撫でて行くのみである。涙はもう疾くに乾いた。背中は蒸すやうに暖かい。善い氣持になつて、毛皮に靠れてうと〳〵となつた時、何やら人聲が耳に入つた。眼を開けて見ると嬉しや紛れも無き母であつた。何が嬉しいつたつて、こんな嬉しかつた事は滅多に無い。祖父が卸してくれる間も待たずに、兩手を出して飛付いて抱かれた。祖父は泣いて〳〵困つたと笑し乍ら、自分を母に渡して額の汗を拭つた。母は裳裾を掲げて水の中に立つて居る。寛やかに冠つた白手拭がつ

やつやとした頰に映えて、微笑を湛へつゝ何やら言ふたびに、鐵漿をつけた齒が漆よりも黑く鮮かにきらめく。今から考へると母も此時は若盛りであつた。今の樣な皺くちやのお婆さんでは無かつた。母の顏は今に至るまで眼に染む程見て居るのだけれど、此時程なつかしく美しかつた顏は餘り覺えが無い。母は隣のおさい、おさき等を連れて島に和布刈りに來て居るのである。かど／＼しい親島は一段ばかり前に屹と峙立つて居るが、親島に至るまでには數十の子島が散在して淺瀨を成して居る。こゝは波も餘り立たず、女子供の遊場には此上も無く善い處である。

自分は實は此日の事に就いては母の顏を見て飛上る程嬉しかつた外は何も覺えて居らぬ。母に抱かれて乳房を含んだか、賺されて母の膝に眠つたか、或はおさきに負はれて遊んだか少しも覺えぬ。祖父が狐の毛皮を着て波打際を歸る後姿の小さくなるまで見送つたかも知れんが、無論それも覺えぬ。覺えぬ事は書きやうが無い。只だ斯かる覺束なき記憶の中で、春の磯に和布を刈りつゝ自分を迎へてくれた母の顏が、今に至るまで眼にあり／＼と見える事を不思議に思ふのである。

二

此村住居の時、近所の子供と遊んだ事などは少しも覺えぬ。恐らく遊びもしなかつたらう。只時々隣のおさい、おさきに連れられて濱に遊びに行く事はあつた。或日地曳網で鰯の大漁があつた時にもおさい、おさきに連れられて行つた。地曳の時は大變な騷ぎである。やアい地曳だアい、やアいみんな出て來ウいと觸れて廻ると、其響の未だ絕えぬ内に、眠つたやうな一村は俄に活氣を帶びて來る。それ地曳だといふので、男は鉢卷、女は髮の亂れも構はず飛んで出る。上の家から驅出す。下の家から走り出る。表から出る。裏から出る。子供も走る。犬も走る。家に殘つて居るものは足腰の立たぬ老人か、但しは小屋に寢て居る牛位なものである。四方八方から海べを指して吾一に馳せ集る樣は、丁度火事場に驅け付ける時のやうな勢である。斯ういふ時にはおさい、おさきも隨分手荒い事をする。自分は自分が入れる位大きな玉網の柄を握つて居るのに、いきなり自分の手と玉網の柄と、二本一所に引摑んで走る。痛いといつても容赦は無い。無理無體に引張つて走る。走るといふよりも飛ぶといつた方が善いかも知れぬ。自分の足は地に付かぬ位、まるで宙を引摺られて行くやうな氣がする。濱に出て見ると、もう網は曳揚げられて居る。眞ッ黑に集つた村人は之を取卷いてわい／＼喚く。騷々しさは、一度聞いた人でなければ到底解らぬ。格子のやうに並んだ脛の間から覗いて見ると、網の袋から鰯が眞ッ青になるほど砂の上に吐き出されて居る。ぴち／＼跳出る鰯は見る間に砂まぶれになつて了ふ。笊に掻込む。玉網にしやくひ込む。自分の玉網にも誰か知らぬ間に八分目ばかり入れてくれた。おさい、おさきは自分と鰯とを急いで吾が家へ屆けて置いて、更に二はい目を拾ひに驅出した。吾が地方では鰯は砂まぶれの儘で賣る習慣である。砂にまぶれて居らねば新鮮で無いとしてある。だから假令少々古くても砂をまぶして置く。自分も國を出るまでは砂にまぶれて居らぬ鰯は鰯で無いやうに思つて居つた。

遊びに出る時は何時でもおさい、おさきに連れられて出るか、さも無ければ祖父に負はれて出たやうに覺えて居るが、裏の瓦屋に行く時だけは何時でも步いて行つた。それも連れなしに獨りで行つた。瓦屋の母屋の方は覺えぬ。只だ職場の方の事ばかり少し記憶に殘つて居る。大抵

日に一度づつ職場に遊びに行つた。誰れか遊び連れでもあつたかと言ふに、さうでは無い。瓦屋の老爺は年が年中、只獨り薄暗い陰氣な職場にあつて瓦を敲きつゝある。他には誰も居らぬ。何時行つて見ても土間の眞中に尻を据ゑて、見臺の上の生の瓦を敲きつゝある。自分の顔を見ると、にこ／＼しながら、今日はどうでがアすといふ。何か菓子でも呉れたかといふに、さうでも無い。自分は只だ何となく此の老爺が好きであつた。何も呉れなくても好きであつた。然るに時々或物を呉れた。菓子は呉れなかつたが、お猴さんを呉れた。見臺の前につくばつて催促顔に待つて居ると、老爺は軈て一枚の瓦を敲き了つて、どれ又お猴さんを造つて上げようかな、と鏝の尖きに瓦土を少し取つて掌で揉み始める。嬉しいと思つて見て居る。土が揉まれて子芋のやうな形になると、老爺は後ろの棚から箸見たやうな竹串を一本抜き取つて其尖きで目鼻を附ける。出來上ると其儘竹串の尖きに刺して、へーお猴さんアハヽヽヽと渡して呉れる。お猴さんを貰へば他に用事は無い。急いで母に見すべく走つて歸る。老爺は自分の歸るを見送りつゝ、二枚目の瓦に取り掛かる。老爺はいつも淺黄色の眞綿を頭に冠つて、丸くなる程厚い、どてらを着て居つたやうに思ふ。夏向きはどうであつたか覺えぬ。日和の時はいつでも職場の前の干し場に、生の瓦が二列にも三列にも並べて干してある。老爺が居るか居らぬかは裏の縁から善く見える。見えると直ぐ裏口から出て、干し場に廻つて職場を襲ふのである。自分はお猴さんが好きである。お猴さんを呉れる老爺は尚ほ好きである。

内に遊んで居る時は祖父に本を教はつた事を覺えて居る。三歳や四歳で本を習ふといふのは珍らしいと思ふ人もあるか知らんが、全く教はつたに相違ないのだから仕方が無い。朧氣ながら本の形も覺えて居る。何でも教訓の繪本であつたと思ふ。大形の厚ぼつたい、表紙は茶色の、大分ぐた／＼に古びた本であつた。十年ばかり前に歸省した時、ふと此本の事を思出して、今一度見たくて堪らず、本箱を初め入つて居りさうな處は隈なく捜して見たが、殘念ながらどうしても見付からなかつた。祖父が炬燵にあたつて居る前に跨ぎ込んで何かいたづらでも始めると祖父は直ぐに此の本を炬燵の上に載せて開けて見せてくれる。一枚づつに繪がある。繪といつても美しい彩色などは無く、粗略な墨繪ばかりで、一番善く覺えて居るのが韓信股潜りの圖と、それから妙な猫の繪である。猫が尻尾を一文字に伸ばして欠伸をして居るやうな繪である。猫がおいゝならをして居るやうに見えるので、そこが出ると何時でも可笑しかつた。祖父はガラ／＼した髯の顔を余の頭に擦り乍ら、咥へ煙管の雁首で紙を撫でる、今度がおいゝならだよと祖父は猫を目當てにして行く。此猫の繪がどんな意味を現はして居るのか、猫が欠伸をすれば何故教訓になるのか、今は本が無いから薩張り解らぬ。兎に角この猫の繪の處に來るのが一番樂みであつた。繪の上には、どれにも歌が一首づつ記してある。其歌が皆教訓の歌であつたらしい。

併し自分が教はつたのは歌では無い。別の紙に大きな字で、天地、山川、父母、兄弟といふやうな單語を二字づつ書いて、巻頭に綴ぢ込んである。教はつたのは此單語である。一通り繪を見て猫のおいゝならでお仕舞になると、再び巻頭の天地山川に戻る。祖父が雁首で一字づつ突く。自分は、ちいゝイと讀みはいゝアと讀む。一日の中には遊び半分に幾遍でも讀む。人が來れば自慢に讀ませられる。詰り家の内で遊んで居る時、此本の出て居らぬ事は無いので、自分は何時の間にかスッカリ諳記して了つた。本は見な

くても、ちゝといへばゝといへば、直ぐ字の形が思出せる位であつた。

或時例の通り祖父に負はれて八幡様の石燈籠へ遊びに往つた。八幡様の石燈籠といふのは村の本通りの道端にあるので、汚い百姓家の間に十坪ばかりの空地を拵へて、大きな御影石の常夜燈が一對据ゑてある。宮はずつと離れて七八町も奥の方、即ち松の砂山を越えて彼方にある。自分はいつもの如く石燈籠の臺石に立たされた。祖父は其傍腰かけて道行く村の誰彼と言葉を交はして居る。自分よりは年嵩の子供が五六人、其處に遊んで居つたが、自分が石燈籠に降立つたのを見て一齊に注目した。軈て彼等の中の頭立つた一人が、みんな來い〳〵と家の裏の方へ走り去つた。跡に麥藁が澤山散らばつて居る。臺石の下にも散らばつて居る。自分は是が欲しくなつたので一心に見詰めて居ると、其中でX形に交叉して居るのが、兼ねて習覺えた父といふ字に見える。さう氣がつくと、祖父が之を知らずに居るのが何か物足らぬ様に思はれて、慌たゞしく指さしてちゝ〳〵と注意した。祖父は解らぬと見えて、アヽ善し〳〵、又家へ歸つて本を讀むかなといふ。もどかしくてならぬ。別に説明の仕様も無いので、何も根氣善くちゝ〳〵と指さして居ると、祖父は漸く悟つたと見えて、歯の無い口をアーンと開いて、解つた〳〵成程父だと快げに笑つた。此後祖父の教授法に一新機軸を生じた。本を出さぬ時は火箸を兩手に持つて、之を交叉して是は何かといふ。父と答へる。並行に立てゝ是は何かといふ。川と答へる。此答を得て、祖父はさも嬉しげに破顔一笑するのである。

自分は此村住居の時の祖父の顔を覺えて居る。父母の顔を覺えて居る。然るに不思議な事には父の顔を覺えぬ。特に覺えにくい顔であつたのでなく、自分が覺える様になつてからは父は餘り家に居なかつたのである。といふのは雨讀晴耕も理想ほど面白くなかつたと見えて、或時は神主の眞似をしたり、或時は寺小屋を始めたりなんかしたが、終に孰れも成功しなかつた。依て再び城下に職業を求める事になつて、兎角村の家には歸らぬ勝ちであつたのである。父が愈よ口に有付いた時、吾が家族は吾が眞の故郷なる此村を見捨てゝ城下に歸つた。涼しい夏の朝であつたやうに思ふ。母は早く起出でてむすびを拵へたり脚絆を穿いたりなどして、假初め乍ら旅の用意にいそがしい。おさきや五屋の老爺も來て何呉れと手傳つて居る。城下に通ひ慣れたろくといふ男が荷持ちに雇はれて來る。ろくは一荷の笊の片荷に風呂敷包やら信玄袋やら一切の荷物を詰込んで、殘る片荷にはさア行きませうと自分を下して載せてくれる。さうして天秤棒の眞中を兩腕に乗せて釣合を考へて居る。祖父は跡始末にでも殘るのであらう、眼鏡をかけたまゝ戸口に見送つて出て、ろくさん御苦勞、どうぞ氣を付けて行つてくれといふ。畏りました、左様なら行つて參りますと、ろくは天秤棒を擔上げる。自分は笊の綱につかまつた儘、いつの間にか一尺ばかり地を離れて宙に浮んで居つた。今や故郷の家を見捨てつゝ別に悲しいとも嬉しいとも思はぬ。只だ笊の中の座蒲團に埋まつて吊されて行くのが面白い。母は何時も遠出の時にする通り白手拭を冠つて居る。日傘をかたげて小足に後ろから跟いて來る。村を出外づれる處までおさきは見送つて來た。母に別れるのが悲しいと言つて眼を泣脹らして居つたさうだが、そんな事は一切覺えぬ。おさきに別れて麥田の道を眞直ぐに行く。善い心持に揺られて行く。軈て坂道になる。勾配は緩いが幅の廣い長い坂である。兩側には疎らに大松が生えて居つて、道には澤庵石が隙間なく敷いてある。これは昔、或奇特

た六部が山を越す人の難儀を救ふために自ら石を運んで敷いたとの事、今も山の上には六部塚といふ石碑があるさうな。涼しい朝風がさアと松の枝を鳴らして坂の上から吹下す。後ろを向いて見ると母は自分を見て微笑みつゝ跟いて來る。安心して前に向き直る、又た暫くして振り向いて見ると、母は依然として跟いて來る。又安心して向き直る。何處まで行つても敷石は盡きぬ。六部の坂は眠くなる程長い。

城下までは三里の道である。山路ばかりの三里の道である。六部坂の先きは眠つて了つたのか、起きて居つても覺えぬのか、どう考へ直して見ても思出せぬ。只一つ覺えて居る事がある。峠の道が極めて淋しくなつた時、ふと脚下の方に眞青な池が見えた。青いといつたら眞に青い。氣味が惡い程青い。ろくは無言でよちよち進む。母も無言ですた／＼跟いて來る。此時雉子か何か恐ろしい聲で、けエんと池の上を鳴いて渡つた。自分は非常に怖くなつて笊の綱にしがみ付いた事を覺えて居る。此池は昔お玉といふ美しい女が池の主に見込まれて引込まれたとかで玉が池と稱へる。池の主は蛇ださうな。玉が池に引込まれたものは昔から澤山ある。男が通るとお玉が出て引張るともいふ。昔或る若侍が遠乘の歸りに、此池の縁でお玉に引張込まれて死んだ事は、今も尚此地方の唄に殘つて居る。

三

城下の假住居は侍町の奥の草深い屋敷であつた。茂るが儘に生伸びた木槿垣に沿うて古い瓦葺きの門がある。門を這入ると直ぐに荒山氏の家で、斜に行くと吾家である。むかし何とかいふ立派な人の屋敷跡ださうで、しよんぼりと殘つた二軒家の周圍は殘らず蠶豆畑になつて居る。

家の西北に當つて大きな楠の老木がある。凌霄花が梢まで絡み付いて居つて、花が夕日に照映えて非常に美しい。豆畑の中には桑の樹や林檎の樹が枝をさし交はして、殆んど地境が見えぬまで生茂つて居る。どつと風が吹くと蠶豆の葉が白い裏葉を返して波を打つ。豆の花の香が漂ふ如く襲うて來る。自分はいつでも畑の中で絹ちやんと遊ぶ。絹ちやんといふのは隣の荒山の女の兒である。自分が鬼になつて絹ちやんを追駈ける。さら／＼と豆の葉の擦れる音がして絹ちやんの姿は見えぬ。こゝよと不意に花の中から絹ちやんが顏を出す。さうしてせゝと笑ふ。鬼ごつこに飽くと絹ちやんは袂から拵へた豆の葉を出して、小さな指で揉んでは膨らます。青蛙のやうに膨らむと直ぐ口が額にパチッと打つのが絹ちやんの癖であつた。都會の人は豆の花なんか何とも思ふまいが、この田舍臭い畑の中に生長した自分には、蠶豆の花ほどなつかしく感ずる花は無い。今も何處かで蠶豆畑を見ると直ぐ此屋敷の事を思出す。自分は此屋敷に何年居つたか覺えぬが、絹ちやんが大きくなつてからの姿は全で知らぬ。恐らく一年か二年が間の友達であつたに相違ない。

絹ちやんの内の叔母さんは絹ちやんよりも美しかつたが、若死して氣の毒であつたと今も母は言ふ。小造りな叔母さんで丸顏の物を優しく言ふ人であつた。叔父さんの方は一寸風變りな人で、これは能く覺えて居る。或時絹ちやんの留守に行つて獨りで遊んで居ると、叔父さんはにや／＼笑ひながら、善い事を教へてやろ、一寸鼻屎を取つて嗅いで御覽といつた。後ろを向いて少し取つて嗅いで見る。どうだ臭いかと叔父さんは尚もにや／＼笑つて居る。自分が少年の時から鼻屎の匂を知つて居るのは全く此叔父さんのお蔭である。玉蜀黍の毛を前に植ゑてくれたのも此叔父さんである。叔父さんは總

髪の丁髷を結つて居る。内に居る時こそ大膚脱で内職の細工物に夢中になつて居るが、表に出る時は重くれた深笠を冠つて木刀をさして出る。併し山の叔父さんばかりで無く、其頃の士族は皆こんな風俗であつたから少しも珍らしくはない。却て自分の父のやうに散髪で帽子なんぞ冠るものの方が余程変に見えた。それが何時頃の時代かといふと、丁度此の時が西南戦争の真最中であつたさうで、散髪の父も総髪の叔父さんも毎日東京の新聞の来るのを待佗びて居つたといふ。併しそんな気ぶりは兎の毛程も覚えぬ。自分は只豆の花の香に酔ふまで遊暮らして居つたのである。

其後祖父は在所の家を畳んで今の仮住居に一所になつた。此時は、もう狐のちやん／＼は着て居らぬ。寒くなると黒い綿入れの羽織を着て、変な縞物の襟巻を頸に巻いて居つた。今も其襟巻したまゝの写真が残つて居る。自分は祖父と二度ばかり写真を写しに行つた事がある。祖父は写真といはずにホトガラピーといつた。大方江戸通ひの頃に覚えた単語であらう。城下に只だ一軒の写真屋は吾家から僅か二三町隔つたところにある。今のやうに化粧室だのガラス天井だのと、そんな開化した写真屋では無い。広い根深畑の中におこし絵の舞台のやうな形した奥行の無い板屋がある。これが写し場である。今の写真屋に行くと病院にでも這入つたやうな鬱陶しい心持がするが、これは青天井同様で而も畑の中だから気がせい／＼する。只だ後ろに白木綿の幕を垂れて、其前に籐張りの椅子が二三脚置いてあるばかりである。

初めに写した時は祖父が着物を左前に着せてくれたので、内に帰つてからみんなに笑はれた。それに着物の色合が悪かつたかしてうつりも悪かつた。今度は母がとつときの黒ずんだ縞縮緬の綿入れを出して着せてくれる。着せて貰ひ乍ら袖に吹いて居る真綿を引張ると、細い光つた絲がツーと限りも無く出る。引出してはいけませんと叱られる。叱られても写真を写しに行くのは嬉しい。着物の紐を結んだ上に萌黄色の緞子の帯を締めてくれる。ズル／＼滑るので自分の体を丸太か何かのやうにキウ／＼締める。両手で袂を持上げて一重づつにくるりと廻る。母がお前の毛には癖があるからつて頭の毛を櫛でこき卸す。縺れた所に櫛の歯が引掛つて涙が出る程痛い。頭を曲げて櫛について行くと、そんなに附いて来てはいけませんと又叱られる。漸くすり抜ける様にして祖父に連れられて行く。

祖父は籐張りの椅子に腰をかける。自分は祖父の右脇に立つ。右の手の置き場に一寸困つたので詮方なく後ろに廻した。写真屋がおつむりをもう少しと己が頭を曲げて直しに来る。自分は後ろに廻した手が気になつて居つたが、写真屋は頭丈け直して手の方は何とも言はなかつた。右の手は後ろに隠れた儘写つて了つた。右の手を隠した事が何も面白くは無いが、何故か其事を今に至るまで覚えて居るから特に記すのである。座敷に帰つて出来るのを待つて居ると、軈て写真屋は雪隠のやうな処からガラス板を持つて出て、一寸日に透して見て手水鉢の水を注ぐ。善く取れましたとにこ／＼して言ふ。其から何やら又壜の薬をたらして火鉢の火で焙る。これでいよ／＼出来上るので、薬が乾くと新しい桐の箱にピシャツと嵌めてくれる。今此写真を取出して見ると、蓋の裏に祖父は六十九歳、自分は五歳と記してある。何時出して見ても右の手は袖の後ろに隠れて居る。さうして祖父は例の変な縞物の襟巻を巻いて居る。

写真屋の筋向うに鉄物屋がある。そこの老爺は何故か屡々吾家に出入したので、自分もたび

たび其家に遊びに行くほど親密になつた。丁度舌切雀の繪にあるやうな老爺だ。頭巾は冠つて居らぬが、赤く光つた頭には慈姑の芽のやうな丁髷を結つて居る。婆さんもあつたが、よく顔を覺えて居らぬ。此老夫婦の間に多代といふ娘があつた。色が白くて眉が濃くて、顔の少しやくれた所に愛嬌があつたやうに思ふ。多代は自分を非常に可愛がつてくれた。遊びに行くと、いつでも店の奥の薄暗い居室に連れて行つて、菓子をくれたり炬燵にあたらしたりして呉れた。炬燵の向うの壁に神棚があつて、神棚の下に三味線が懸けてある。多代は居室の眞中に坐つて、三味線を彈いて居る事もある。炬燵にあたつて店の方を見ると、吊した草履や草鞋の間から向うの學校の門が見える。今なら何でも無いが、此學校は異人造りといふので、白いペンキ塗りの門が無暗に珍しかつた。多代には婿がある。婿は役者であつた。藝名は何といつたか知らぬが、内では蝶といつた。蝶吉とか何とかいふのだらう。二十四五の若い男で、髪をいやに巻込んだやうに結つて、さうして眉を剃落して居る。顔が長くて青白くて、眉の跡がげぢ／＼に嘗められたやうで餘り好かぬ顔であつた。昼間は芝居の方へ行つて居る事が多かつたから、自然自分は此男には親まなかつた。それに多代のやうに子供好きで無かつたと見えて、多代ほどは自分をもてなして呉れぬ。併し別に嫌ふといふでも無い。蝶は家に居る時は多代とお取膳で炬燵にあたつて飯を食ふ。自分も其の隣に坐つて相伴する事がある。炬燵で飯を食ふのは暖かで善い事だと思つたので、自分は家に歸ると直ぐに其事を母に話した。すると母は輕侮の色を眉に動かして、そんな事は自墮落者のする事だ、そんなお行儀の悪い事を眞似してはいけませんと厳格に諭した。

蝶と多代とは相惚れ夫婦である。其頃吾が地方では天長節には非常な景氣で祝意を表した。商家では造り物をする。活花連中は活花を出す。女子供は今日を晴れと着飾つて是等の催しを見物してあるく。それから夜になると踊屋臺が練つてあるくといふやうな騒ぎで、今は左程でもあるまいが、自分が可なり大きくなるまで此風習は保たれて居つた。或年の天長節に荒物屋の多代も茶町の若連中として密かに踊屋臺の囃子に加はつた。チャンチキ／＼と市中の大通りを練つて行く内、向うから遣つて来たのが新地連中の踊屋臺であつた。踊子は一粒選りの水の垂れる様な若手役者ばかりで、絞りの肉襦袢に腰蓑を着けた漁師扮装である。群集は役者の顔を見たさに前後左右からどつと押寄せて来た。二つの屋臺はあとへも先きへも動かれなくなつた。二組の屋臺の踊子と囃子とは據なく屋臺を置去りにして、暫し横町の料理屋に休息した。多代が蝶のいなせな姿に打込んだのは此時であるさうな。

或夜自分は多代に連れられて芝居に行つた。前後は何も覺えぬが只一幕だけ記憶に殘つて居る。蝶の部屋を出て暗い段階子を降りる。下手の暖簾の下がつて居る所に出て、多代に凭れて立つて舞臺を見て居る。時々上を向いて多代の顔を見ると、多代は暖簾の外に首を出して、一心に花道の方を見詰めて居る。土間の見物人も桟敷の見物人も皆な一齊に其の方に眼を注いで居る。何か出て来る所らしいが、自分は譯が解らぬので只仰向いて天井を見る。縄のたくしたのや幕の畳んだのや張抜きの屋根のやうなものやら、いろんな汚い物がドッサリぶら下がつて居る。其中で櫻の吊枝は美しいと思つた。やがて役者が出て来たと見えて、見物の席が一時にわや／＼と動揺し始める。多代も手に力を入れて自分の肩を押へるやうにして熱心に見て居

る。先きに立つた大將が金紙の采配を振つて大勢の人を連れて出て來た。今考へて見れば忠臣藏の討入りの幕であつたらしい。其頃の芝居には電氣燈などは無くて大抵は蠟燭の灯である。重な役者は面明りとかいふ凡そ一間もある長い手燭で照される。由良の助には前後から二つも差付けて居る。暫くすると花道から出て來た義士で舞臺が一ぱいになる。軈て斬合が始まる、組打が始まる。此の時どうした機みであつたか義士の一人は舞臺の前の灯の處に組伏せられて鬘の毛がぼつと燃出した。一同總立ちになつて寄つて來た。誰れだ〳〵、蝶さんだ〳〵と口々にいふ。成程よく見ると灯の上に押付けられて居るのが紛れも無き蝶である。青い顏に怒りを含んで起上らうともがいて居る。故意か偶然か分らぬが何にしても尋常事でない。後ろに居る義士等は蝶の相手の肩に手を懸けて、もう善い加減にしろと忠告して居る者もある。之を見た多代は自分をばはふつて置いて、走つて樂屋の方へ救を求めに行つた。彼是れするうち幕になつて、蝶は大勢の人に助けられて鬢を撫でつゝ起上がつた。さうして悄然として部屋に引揚げて來た。多代は側に寄つて心配げに怪我は無かつたかと勞はる。蝶は鬘を脫いで、ひどい奴だとブリ〳〵怒つて居る。見舞人が續々來る。詫びる者やら慰める者やらで狹い部屋は大混雜である。自分は居所が無いので部屋の隅つこに立つて皆の顏を見て居つた。何でも其時の樣子で考へると、只だ立廻りに身が入つて斯うなつたのでなく、何かの意趣返しに蝶を舞臺で辱しめたものらしかつた。

其夜更けてから自分は多代に負はれて、蝶は提灯と風呂敷包みとを持つて歸つて來た。町並みの家はもう何處も締切つて了つてシーンとして居る。天には星が一ぱい出て居つて、負はれて居りながらも背中がうすら寒い。二人は草履を穿いてすた〳〵あるく。肩が擦り合ふばかりに寄添うてあるく。蝶は絕えず喧嘩の相手に對する恨みを多代に訴へ、多代はどうぞ喧嘩はせずにおいてお吳れと賴むやうに宥める。話が途切れると二人は只だ默つてすた〳〵あるく。夜は益々更けてくる。自分は子供心にも何となく秋の夜の哀れをしみ〴〵と感じた。

四

次に越したところは惣門內の大道に沿うた家で、家の高窓から向うの白壁の御米藏が見える。藏の長さが半町ばかりもあらう。北の端の方は窓の橫穴を覗かなければ見えぬ。或時は此橫穴から竹を出して下を通る金太飴を買つて貰ふ。四五本も買ふ中には引上げる時折れるのもあつて、金太の顏が橫平たく流れて居る事がある。開達丸賣も通る。芝居の太鼓も通る。巡査も通る。其頃の巡査は劍を佩びずに、四尺ばかりの樫の棒を脇挾んで居つた。巡査の事を捕亡さんといつた。其外色々の者が通る。豆畑の家よりも此家の方が陽氣で善いと思ふ。

門の內に大きな栗の木がある。柿の木がある。屋根にも庭にも柿の花が霰のやうにこぼれる。庭の眞中に牡丹がある。薄紅の大輪が咲く。雨の降る日は大家さんの指圖で傘を立てゝ遣る事であつた。大家さんは壁隣で西村といふ。西村には眼のしよぼ〳〵した茶筌頭のお婆さんがある。お婆さんの娘さんをお三輪樣といつた。白粉を眞白に塗つた、それは〳〵華美な姉樣で、母などはお三輪さんはお器量よしだと口癖のやうにいふ。鼻筋に際立つて白粉を厚く著けて居る。こんな風に化粧して居る女を見ると、母は狐のやうだともいふし、又は西村のお三輪樣のやうだと今でもいふ。脊は少し低かつたが、でつくり肥つて居つた。姉樣と呼んで善いか叔母樣といつて善いか、一寸困る柄の

人であつた。西村にはお婆さんと姉樣の外に叔父さんも何も無い。たつた二人きりで公債がどつさりあるのだといふ。お婆さんは女主人だけあつて公債や株券の話は隨分詳しいと、父が小聲で母に話して居つた事がある。自分は株券といふのは太神宮樣の劒のやうな物かと想つて居つた。

庚申樣の宵であつた。お三輪さんが裏口に見えて、今夜は便利燈をともしますから坊樣も遊びにお出でない。淸ちやん達も來ますからといふ。有難う御座んす、毎度御邪魔を致しましてと母が挨拶する。姉樣は直ぐお出でなさいなと言ひ捨てゝ、尻を振るやうにしてばた／＼歸つて行つた。便利燈ッて何？と聞いて見る。大方美しい洋燈だらうといふ。母はまだ實際見た事が無いらしい。美しい洋燈ッて、金のぴかぴか光つて居るのか知らんと、見れば直ぐ解る事を先づ色々に氣が揉める。何にせよ姉樣が態々呼びに來てくれる位だから、屹度綺麗なものに違ひ無いと、勇み立つて走つて行く。淸ちやんや太田の孃ちやんや三四人の近所の遊び仲間が早や茶の間に集つて姉樣と黒光りのする手習机を隔てゝ並んで居る。淸ちやん等は燈の陰で顏が見えぬが、姉樣は燈に向いて正面だから色の白い肥つた姉樣が胸の邊から浮出したやうに見える。便利燈はまだともさぬのかしらと不審に思ひながら孃ちやんの次ぎに坐る。姉樣が少し身じろいて、そこは狹いからこゝにお出でなさいなといふ。又立つて姉樣の側に坐る。

ふと氣が附いて見ると、今夜はいつもの行燈で無くて、机の上に小さなカンテラがともしてある。さうして淸ちやん等は珍しさうに此のカンテラを眺めて居る。自分は早／＼もこれだなと氣が附いた。氣が附くと同時に折角樂んで見に來たのが何だか馬鹿らしくなつた。家にもカンテラは手燭代りに用ひて居るから一向珍しくないのである。淸ちやん等は頭を寄せて面白さうにしやべつて居る。やがて謎の掛合ひが始まる。お前そつち行きやれ、わしやこつち行く。お原の前で出遇ふものナアニ。帶。白鷺が黒田に降りて我が思ふ事人に知らせるナアニ。筆。といふ樣な事。次に淸ちやんが姉樣の所望によつてかち／＼山の話をする。舌足らずのやうな變な訛で話す。淸ちやんといふのは神戸から來て居る左官屋の息子とかで、まだ何處やら神戸訛が失せぬ。その訛が可笑しいといつて皆が笑ふ。姉樣は皆が笑ふのを制しながら矢張自分でも口を曲げて笑つて居る。便利燈の不平は何時の間にか忘れて了ふ。太田の孃ちやんは飽きたのか眠くなつたのか、小さい口を兩手で掩うて欠伸をした。淚が大きな黒眼勝ちの眼の縁に潤ふ。姉樣は眼早く見付けて、孃ちやん眠いの、お月さん何ぼをお歌ひなさいな、今お菓子を上げますわといふ。孃ちやんは眼がさめたらしくキチンと坐り直して臆せず歌ひ出す。お月さん何ぼ、十三七つ、なゝ綾着せて、京の町に出したらば、笄落す、簪落す、紺屋の娘がちよいと出て拾うて、泣いても呉れず、笑うても呉れず、たうとう呉れなんだ。孃ちやんの歌が終ると、姉樣は庚申樣の菓子を下げて來て、孃ちやん初め一座のものにそれ／＼分つた。自分は紅葉の煎餅と指環のやうな菓子とを貰ふ。孃ちやんは紅絹裏の袂を膝の上に飜して其の中に入れて了ふ。便利燈はいつか吹消されて行燈が出た。今の子供には美しい洋燈よりは古風な行燈をともして見せる方が善いかも知れぬが、此頃は行燈の方が普通で、洋燈は固よりカンテラさへ此樣に珍重されたのである。

みんなが菓子を喰べて了つて手持無沙汰になると、姉樣はお話の代りに廻ひ／＼をして見せるといつて、行燈の抽斗から燈心と附木とを取出した。燈心を短く切つて行燈の内側から

紙に植ゑて行く。馬鹿に大きな手の影が動く。燈心の影が一本づつ殖えて行く。手の影が擴がつて傘のやうになる。シュッとつぼんで斜に逃ける。燈心の影は殖え〳〵て十本ばかりになつた。眞中の一本は少し傾いて落ちかゝつて居る。あッ眞中のが落ちると注意する。すると大きな手がさつと燈心の影で蔽うて了ふ。今度明るくなつた時はもうチャンと眞直ぐに直されて居る。やがて附木に火がともされる。行燈の中はボヤ〳〵と燃えて十の燈心は戰くやうに陽炎ふ。十の視線は十の燈心の上に入亂れて落ちる。附木の火は徐々に廻轉を始めた。最早手の影は見えぬ。燈心は各其根を軸として廻り出す。廻る〳〵。或時は大きく或時は小さく、附木の火の燃ゆる限りは廻る。面白くて堪らぬ。淸ちやんなどは燈心と一所に顔を廻して見入つて居る。みんなが夢中になつて嬉しがつて居る間に、孃ちやんはそつと袂を額に當てて菓子を口に入れた。これは自分が見たばかりであつた。見られた事は孃ちやんも知らぬ。姉様は燃えしざつた附木の火を受皿に落して、今夜はこれでお仕舞にしましよといふ。今まで盛に活動した燈心は急に元の固定した影となつて了つた。何だか名殘惜しいやうな、淋しいやうな、内に歸つて最一度遣つて見たいやうな氣がした。自分はカンテラを見ると今でも便利燈といふ事を思出す。便利燈を思出すと色の白い肥つた姉様のお三輪さんの顔も思出されるのである。

太田の孃ちやんはお三輪さんの姪で、太田といふのは隣屋敷の大家様である。昔は三百石取の家柄であつたといふ。長男の當主人公は人柄が善過ぎてまだ嫁様も貰はずに部屋住み同様の境涯である。併し當人はそれを苦しいとも何とも思はぬ。馬鹿の一藝は當り前だが、御主人には二藝も三藝もある。第一鮒釣りが上手、自分の父などは迚も太田さんには敵はぬといつて居る。第二が鴨狩り、第三が凧繪である。部屋中に書擴げた繪は鬼に賴光、熊に金時、蟬、奴など様々で、殊に大きな繪具皿に溶かした蘇枋の色は眼が覺めるやうに美しい。太田様の家は非常に廣くて、薄暗い間が多い。書室の後ろには入らずの間といふのがある。話の筋は善く覺えぬが、自分は母に其由來を聞くたびに恐ろしくて堪らなかつた。何でもずつと昔、此間で殺された御妾が今でも祟つて居るとかで、當主の薄馬鹿なのも其爲めだといふ。屋敷の隅に晝間も暗い程茂つた青木の森がある。其奧の祠には殺された御妾が祀込めてあるので、今でも夜十一時過ぎになると、ぴちや〳〵女のあるく足音が聞えるさうな。これは森の横の長屋に住まつて居る米屋のかみさんが眞面目に語るところで、越して來た當座は不氣味で寢られなかつたが、今では慣れて何ともありませんといふ。女の足音に慣れて平氣で居るのが却て恐ろしい。

西村並びに太田の長屋は總じて十軒ばかり、随分色んな種類の人が集つて居る。中で、最も善く自分の覺えて居るのが漬物屋の古屋さんと甘酒屋の佐野さんである。兩方とも所謂士族の商法でまだちよん髷の人が多い世の中に随分思切つた商賣替をしたものである。或日佐野さんが甘酒の行燈を張り替へたから一筆揮つて下されと、別の紙を持つて祖父と父とに頼みに見えた事がある。父と祖父とは顔見合はせて、看板は御家流でもいけず、唐様もいけず至つて六ケしいもので、迚も私等には書けませんと辭退する。叔父さんは如何様でもかまひませんが、是非御願ひ申します、それに此[illegible]るんで無く、俳字にして地を染めるので、御名前に關はるやうな事は決して致さぬ、どうぞ御書き下されと、眞面目に挨拶されて兩人は恐縮し、

暫時譲り合つた末、終に祖父が持前の御家流で「あまがゆ」と書いた。父は我々風情に看板は無理だといふ事を繰返し言譯する。どう致して、誠に見事な御手で、有難う御座ると、叔父さんは禮を述べられる。祖父が「あまがゆ」と書く理由を尋ねると、酒と書いては税が出ますでな、それで粥と申すんで御座るとの事。其日の夕方門に出て遊んで居ると、叔父さんはいつもの通り甘酒の荷を擔いで出て來た。行燈は赤と青とに彩色されて、今夜は眼立つて美しい。眞中に「あまがゆ」と篆字が見える。餘り行燈が美しいので、あれが本當に祖父の書いた字か知らと疑ふ程であつた。

古屋さんの方は元來劍客で、頬鬚の生えた怖い顔の叔父さんだが、何と思付いたか新規に漬物屋を始めた。別に店は出さずに毎日主人公自身が賣つてあるく。開業の當日は長屋中が總出で見囃した。ガリ〱〱漬物屋で御座アいといふ珍らしい聲がするので走つて出て見ると、叔父さんが兵隊の服を著て七味唐辛子の箱のやうな抽斗のある箱を擔いで、ガリ〱を振つては漬物屋で御座アいといふ。今なら一向珍しくも有るまいが、此時は服裝から何から餘程異樣に感じたのである。太田樣を初めとして金山寺が大分賣れた。今考へて見れば箱の型といひ、有難う御座いと禮をいふ口調まで總て東京式であつた。此以後降つても照つても、日に一度づつガリ〱の聲を聞かぬ事は無い。それからガリ〱が近所の子供仲間の大流行となつた。叔父さんは商賣から歸つて來ると土間の中で門弟を相手に擊劍をする。門弟が居らぬ時は娘さんを稽古して遣る。時々窓から覗いて見ると、娘さんがシッ〱〱と突いて懸かる。叔父さんがさア來い〱と取立てる。娘さんといふのは十八位、男のやうな顔の、色の黑い、夥しくそばかすのある、お三輪さんとは丸で較べものにもならぬ。

五

城下の町の外郭は緩やかに流れる運河を以て帶の如くに取卷かれて居る。終日荷舟が上る、筏が下る。末は大川に合して港まで出るのである。秋の末になると大根舟が橋の上手下手に一杯に繋合ふ。此時が一年中で最も河の景氣の立つ時で、市中の人々は澤庵漬の仕込みの爲めに皆此處に集つて大根を買入れるのである。舟のあるじは近在の百姓ばかりだが、買手は士族も町人も無差別に出て來る。只だざわざわと無暗に賑やかである。大根を舟から揚げるもの、擔つて町の方へ運ぶもの、行き違ひを爭ふものなど、河岸の兩側は人と大根で以て全く道が塞がつて了ふ。大根の季節になると、橋向うの饅頭屋が忙かしくなる。蒸し立ての湯氣立つ饅頭は店に並べる間もなく端から賣れて了ふ。あとから〱と詰掛けて來る。幾ら拵へても間に合はぬ。店番は泣顔になつて腹立つ客に詫びをいつて居る。饅頭の名を入舟饅頭といふ。白いのと黄色いのとあつて、形は入舟とも出舟とも見られる。自分は祖父と一所にたびたび此饅頭屋に遊びに來た。饅頭を買ひに來るのでは無い、自分の眞實の叔母の家だからである。矢張士族の商法で、叔母は後家の身でありながら、五六人の家族の中心となつて饅頭屋を始めた。家は元と定府の侍で、お爺さんは江戸ッ子である。頭をまるめた十徳を著た柔和なお爺さんである。いつも店に出て手傳つて居られるが、言葉が解りにくくて、自分は餘り親まなかつた。祖父はお爺さんとは歌詠み友達で、來ると直ぐ打連れて離座敷の方へ這入つて了ふ。自分は店に殘つて遊ぶのである。入舟饅頭の名は風雅な江戸ッ子のお爺さんが所柄に因んで附けたのであらう。或は入舟饅頭とい

ふものが昔江戸の何處かにあつたので思付いたのかも知れぬ。叔父さんは叔母が嫁入つて來て間も無く、西南戰爭が始まつたので、官軍の小隊長として出陣したが、敵なく田原坂で名譽の戰死を遂げた。叔母は悲歎の中に一人の形見の八重さんをせめてもの慰めにして、舅の江戸ツ子のお爺さんに孝養を盡した。饅頭屋を始めたのは餘程冒險的であつたさうだが、幸にも市中の人氣に投じて大當り、叔母はこれに力を得て一生懸命になつて居る。團子を捏ねる、餡を煮る、蒸籠を天井につかへる程積重ねて蒸し立てる。殆ど叔母一人で切廻して居る。忙がしい時は家內總出で、板の間の大丼を取卷いて手傳ふ。或時はお爺さんまでも大丼の廻りにしやがんで團子を掌で押延べて居られる。押延べられた饅頭の皮が丼の緣に幾枚となく並ぶ。叔母が端から取つて餡を入れる。餡を入れて二つに疊めば入角が出來る。それを蒸籠に移して釜の上に積上げるのである。蒸せた蒸籠は下から引きはづして、もや／＼と立つ湯氣と共に店臺の上に運ばれる。こゝに初めて白い入角と黃色い入角が美しく並べられる。

　どさくさして居ると八重さんが學校から歸つて來る。言ふまでもなく八重さんは自分の從姉で、年は自分よりも二つばかり上である。店の方から上がつて來て、ぐちや／＼と體を疊むやうに坐つてお辭儀をする。眉を隱すばかりに生え下がつた切前髪をうるささうに拂つて、叔母に何かをねだる。叔母は店の饅頭を取つて自分と八重さんとに二つ宛呉れるのである。善い遊び連れが出來たと思つて居ると、八重さんは自分にお構ひなく離座敷の方へ行つて琴を浚へる。お師匠さんが來て居る事もある。お師匠さんは鼻の尖に痘痕のある、聲のしやがれた盲人である。光つた頭を振立てゝイヤ、トテツン、ソレ、ツンテンと勢込んで敎へる。八重さんは憫けに師匠の不透明な白い眼を見上げつゝポツン／＼と彈いて、時々體を斜に左の手を伸ばして窮屈さうに琴柱の向うを押へる。師匠は獨り悦に入つた面持で白眼を吊し上げて聲立てる。一段濟むと師匠は額の汗を拭きながら、坊樣今日はお祖父樣はと意外な事をいふ。自分は拔足で來て默つて見て居るのに、彼は自分の居る事をチヤンと知つて居る。而も八重さんが右にあつた煙管をそつと左に置換へて、ほくそ笑んで居る事はまだ知らずに居るのである。やがて元と煙管の置いてあつたところを探つて、無いのに初めて氣が附いたらしく、馬が小便を嗅いで、笑ふ時のやうな顔して、又お孃樣が惡るさをなさるといふ。叔母が茶を入れて來て、此體を見て八重さんをたしなめる。八重さんは逃げるやうに廊下を走つて店の方へ行く。富さん御苦勞樣、お茶を一つ、こゝに置きます、あの通り八重はいたづらで困る、この兒は靜かで大人しいから丁度取替へると善いと思ひますといふ。師匠は挨拶に困つたかアハ、、、と笑ひにごまかしてお茶を戴いて飮む。何うやらてれるやうな氣がするので八重さんの方へ行つて見る。八重さんが饅頭を食つて居るから、自分も亦た貰つて食ふ。

　離座敷の奥の一室にお冬さんといふ女が居る。年は三十四五でもあらうか、顔色の靑ざめた、髪を櫛卷に結つた、いつ來て見ても長火鉢の脇に坐つて縫物をして居る叔母さんである。店が極く忙がしい時は家の人と同じやうに店頭に出張つて團子を捏んだりなんかして居るが、大抵は裏座敷に引込んで縫物をして居る。客人といふでも無く、無論叔母の家の人でも無い。只だ何となくお冬さんで濟んで居つた。後に聞いたところでは何とかいふ金持の隱居の圍ひものであつたさうな。明けて置くのも無駄だといふので、勘定高い叔母が間貸しをしたのであら

う。お冬さんは頭痛持ちと見えて蟀谷に四角な紙を貼つて居る事が多い。顏は青いけれども自分は好きな叔母さんであつた。本當の叔母さんよりも好きであつた。お冬さんは年中長火鉢の抽斗の中に焙り昆布を貯へて居る。遊びに行くたびに二三枚づつ出してくれる。さうして長煙管で煙草を飲む。口を結んで煙を橫の方にフーと一筋吹出す癖がある。西側の壁にたつた一つ圓窓があるばかりで陰氣な部屋だが、茶棚や簞笥が小ざつぱりして居つて氣持が善い。此部屋から見ると自分の家などは亂雜で不意氣で百姓家のやうなものである。自分は斯ういふ靜かな小ぢんまりした部屋にいつまでも居りたい樣な氣がする。何故其樣に好きかと問はれても一寸困るが、一口にいへば此部屋の匂が好きである。お冬さんは針仕事の手元を見つめて居つて話をする。自分は焙り昆布を嚙つて話をする。「坊樣何が好き」「お菓子」「お菓子は何が好き」「‥‥金米糖」といふやうな、他愛も無い話ばかりだが、いつまで經つても飽きる事を知らぬ。只だ一つ厭な事は八重さんに關する話の始まる事である。內の孃樣は坊樣のお嫁さんにして上けるとか、あしたから坊樣の家に連れて行くとか、言葉は少しづつ違ふが意味はいつも同じ事をいふ。自分はこれが厭で〳〵堪らぬ。何も八重さんを嫌ふのでは無いが、嫁になるといふ事婿になるといふ事が譯もなく厭であつた。戯言な事は半分以上理解して居つても矢張さう謂はれると氣になつてならぬ。八重さんが嫁に來たら鐵槌でぶつて遣るといふのが自分のいつもの遁辭で、お冬さんは口に含んだ煙草の煙を一時に吐出して、そんなひどい事をするとお嫁さんかお泣きなさるわと笑ふ。自分はそろ〳〵逃げ出す準備をする。お冬さんは疊みかけて虐めにかゝる。終に堪へなくなつて驅出して來ると、生憎廊下でパッタリ八重さんに出くはして、自分獨りで顏を赤くする事などもある。

最も愉快なのはお冬さんに新地に連れて行つて貰ふ事である。叔母の家から新地は極近い。橋涼みに出た人がぞろ〳〵ぞろ〳〵と其方へ足を向ける。新地は維新後に開けたものださうで、茶屋は勿論、芝居、見せ物、楊弓屋、借馬など有らゆる種類の興行物が集つて居る。見上げるやうな冠木門を這入ると、急に世界が變つて、格子作りの家が兩側に並んで居る。どの家も〳〵內に洋燈をともして晝のやうに明るい。華美な浴衣を着た女がちら〳〵見える。これが大方娼子だらうと思ふ。格子に近く鏡を立てゝ雙肌をぬいで化粧して居るのもある。二階に三味線の音がして居る家もある。一軒づつ順に見て行く。指を擴けてばら〳〵〳〵と格子を彈きながら歩くと、お冬さんは引いて居る手をグイと引張つて道の眞中を行くやうにする。狹い道は右に折れて左に曲る。曲るところに鮓屋の露店がある。美しい切鮓や握鮓が朱塗の板の上に並べてあるのが眼に付く。ヂイと其方に寄る。お冬さんは又手を引張る。其隣には饂飩屋が居る。鮓の香も佳いが、饂飩の薫も好い。お冬さんは愈よ強く引張つて眞中をあるく。自分は只だ別世界の香に醉つた心持であるいて居る。奧に這入る程群集が夥しくなるが、芝居小屋の少し手前に空地があつて、涼みがてら遊びに來た人が彼處に三人此處に五人と集つて涼んで居るのが闇にも白くそれと判る。小さな稻荷樣の社があつて、此處まで來ると今までの蒸せつぽい人いきれが無くなつて急に涼しくなる。此時代にはまだ氷屋などは無論無い。只だ汲みたての清水を手桶に入れて來て一文づつで鬻いで居るものがある。西瓜を割つて賣る店もある。それから佐野の叔父さんのやうな赤行燈の甘酒屋も居る。お冬さんは此處に來ると

いつでも甘酒を飲ませて呉れた。下卑た噺だが此甘酒の味は今以て忘れられぬ。今飲んで見ても此時の味は無い。少し疲れを覺えてうと／＼となると、坊樣眠つてはいけません、私は負うては得歸らんとグイ／＼引立てゝ元來た道を歸るのである。

いつか新地に生人形の見世物が來た時の事である。珍しく父に連れられて見物に行つた。狹い木戸口を人に押されて這入つて行くと、すぐ兩側に色々の人形が並んで居る樣子だが、何分にも大人の見物人の中に落込んで居るやうなもので人形はちつとも見えぬ。丁度井の底に居るやうな心持がする。まごつくと足を踏まれさうになつて來たので漸く父が抱上げて呉れた。見ると直ぐ眼の前に人間の生首が轉がつて居る。さうして血走つた眼をむいて口をパクパクさせる。イヤ怖かつたの何のつて、自分は覺えず父の頭にむさぶりついて悲鳴を揚げた。廻りの見物人は事の意外なのに驚いて自分共を注視する。父は狼狽して群集を押分けて出口の方へ急いだ。父の羽織の紐を踏張つて帽子に取付いたので、帽子と羽織とが滅茶々々になつて了つた。その生首といふのは生人形の一つであつた。此外にも色々怖い人形があつたのだか今はどうも思ひ出せぬ。兎に角急いで出口の處へ行くと、氣味の惡い人形は殘らず無くなつて了つて、そこには大きな白い象が突立つて靜かに鼻を上下して居る。囃の太鼓や三味線が陽氣に響く。こゝまで來て自分は漸く胸の動悸が收まつた。象は怖くないから長く停まつて見る。囃の大きな耳と長い鼻を絶えず動かして居る。囃の音が耳近く響くのに、囃方の姿の見えぬのが不思議であつたが、よく見ると象の尻の方に大きな窓があつて、そこに梯子をかけて人が出入して居る。囃方は象の腹の中で三味線や太鼓を鳴らして居るのである。初めは造り物か本當に生きて居るのかと半信半疑で見て居つたが、尻の窓が見えてから金巾張りの造り物である事を合點した。併し先きの生首だけはどうしても造り物とは受取れぬ。その血走つた眼の色は今考へて見ても直ぐ眼の前に現はれるやうな厭な心持がする。

六

うか／＼と遊び暮らして居るうち早や七歳となつた。もうそろ／＼學校に入る準備をするが善からうといふので、手習と讀書を始める事になつた。いよ／＼始めるとなると、遽かに重荷を負はせられたやうな、又何となく極りが惡いやうな氣がした。母は手習の趣味ある事に就いて色々に前觸れをする。手習をするやうになつたら卷筆といふものを買つて上げるとか、お清書の時はお父樣が梅や牡丹の印を附けて下さるとか言ふ。斯う言はれて見ると一日も早く手習といふ事をして見たくなる。牡丹といへば西村の庭に咲くやうな美しい花であらうか、それが又どうして父に描けるだらうか、などと餘計な心配までして只管準備の調ふのを待つて居る。

草紙が出來る。卷筆が出來る。卷筆といふのは軸が細くて毛の太い、軸と毛の間をば紺紙でくるんで、それを赤い絹絲で卷いたものである。他國にもあるものだか、どうだか知らぬ。昔か鄕里でも今の子供は用ひて居らぬかも知れぬ。卷筆は善かつたが、墨か氣に入らぬ。煤けた用簞笥の抽斗の底に何十年かの昔から藏められてある、堅炭のやうな白い粉の吹いた墨である。父や母は善い墨だ／＼と口を揃へて賞めた。薄暗い格子の間の眞中に机を据ゑていろはを習ひ始めた。手本は祖父が書いたのであつたか、父が書いたのであつたか全く覺えぬ。墨は案に違はずいやな墨で、磨つても／＼濃くならぬ。そ

れでも尙ほ母は善い墨だと譽めつゝ、肩越しに手を持ち添へて字を書かして呉れた。これは少し意外であつた。大方父か祖父が敎へて呉れるのだらうと思つて居つたのに、母が敎へて呉れようとは思掛け無かつた。さうして母の字がしつかり力の這入つた旨い字であるので一層驚いた。母は字の角々に力を入れて我手を引張つて行く。自分は只だ母が引張り廻す儘に手を伸ばして居る。面白い程善い字が書ける。獨で書いて見よと手を放される。初めのうちは母のに似た字が出來るが、段々にいぢけた小さい字になる。仕舞には絲のやうな字が出來たり、風に吹かれたやうに曲つたりする。それではいけぬ、斯う眞直ぐにと、今度は母が獨りで書いて見せる。母のは非常に旨い。迚も敵はぬと思ふ。四五枚習つたあとで、今日はこれでお仕舞にせよと言はれる。ガツカリしたやうな、多少の疲れを覺える。草紙を持つて行つて祖父に見て貰ふと、祖父は初めてにしては善い出來だと賞めて呉れたが、大部分は母の書いた字であるので、内心には少し恥かしく感じた。

　翌日も其翌日も同じところを手習して居ると、四五日目に母か一枚の白紙を呉れた。これにお淸書をするのだといふ。爪で大體の字配りを定めて筋をつけて呉れる。もう大分書慣れて居るので、譯無く爪跡を辿つて書いた。母の字に似た大きな字が出來た。父が勤めから歸れば牡丹や梅の花を附けて貰へるのだとの事、どんなに綺麗だらうと思ふと待遠くてならぬ。父の歸りを待兼ねて淸書を見せる。父は袴を脫ぎながら、疊の上の淸書を見て、善く出來たといふ。早く牡丹を描いて頂戴と逼る。一服する間もあらせずせき立てる。父はやをら机の抽斗を開けた。何が出るかと凝視して居ると、朱硯が出た。朱筆を執つて「い」の字の肩に簪のやうな二本棒を引く。「ろ」と「は」に梅の花の形した輪を描いて眞中に短い十文字を置く。枝もなんにも無い。これが梅の花かと稍や失望する。盥のうらにはもつと大きなのが墨で描いてあるが、あれも父が描いたのだなと合點する。「い」の字の簪見たやうなものは松葉ださうな。梅が四つも這入つて、「い」が松葉で「へ」が笹ツ葉であつた。善く書けたから梅が多いのだと母が言ふ。さう聞けば嬉しいやうでもあるが、牡丹はどうしたのか描いて貰へなかつた。牡丹は描かないのかと聞いて見ると、梅の花でも同じ事だといふ。牡丹は母の思違ひであつたらしい。昔母の習つた寺小屋のお師匠樣か何かに牡丹を附けたのかあつたので、大方父も其通りだと思つたのであらう。父のは其後何時も松竹梅であつた。初めは一寸失望したけれど、斯ういふものだと決まつてからは、字をはみ出す程大きな梅印の這入るのが馬鹿に嬉しくなつた。

　それから今度は讀書で、四書に續いて素讀の代りに小學入門を選んだ。これは當時の小學校の初級生の敎科書で、父が之を選んだのは專ら小學校へ入る準備の爲であつたのと、又一つには父の開化主義から割出した方針であつたらうと思はれる。自分が素讀を習つたのはずつと大きくなつてからの事である。小學入門の絲、犬、猫などは繪を見て讀むのだから、何の苦勞も無かつた。一月も經つか經たぬに、鯛、鯉、鮒、金魚、鰻まで諳誦して了つた。小學入門の次ぎか小學讀本と地理初歩とであつた。讀本は初めに人間の顏が五つ描いてあつて、凡地球上の人種は五に分れたり、亞細亞人種、歐羅巴人種……日本人は亞細亞人種の中なり、とある。地理初歩の方には「ナチユーラル、ゼオガラヒー」「マテマチカル、ゼオガラヒー」「ポリチカル、ゼオガラヒー」などいふ珍しい言葉があつて、一二枚めくつた所に東半球と西半球の

つた圖が描いてある。父は毎日兩方とも一枚づつ程教へて呉れた。入門よりもむづかしくはあつたが、併し自分は左程苦しいとも思はず習得た。左官屋の清ちやんが學校で教はるのにどうしても覺えぬといふのが不思議であつた。併し自分は毎夜復習せねばならぬ。晝間遊び過ぐして綿のやうに草臥れた時でも復習せねばならぬ。これ丈は非常につらかつた。或夜駄々を捏ねて、復習せずに了はうとすると、父が非常に怒つて、言ふ事を聽かぬものは内には置かぬ、これを持つて何處へなり行けと、手提げの笊に椀を入れて出した。乞食になつて了へといふのである。自分は初め大分剛情を張つて居つたが、これを見て急に恐ろしくなつた。母に泣縋つて救を求めた。父は尚ほ出て行け、内には置かぬと呶鳴る。母もお前が剛情だから惡いのだと父の味方をして居る。自分は全く孤立の姿となつて非常に心細く、今夜から本當に乞食になつたらどうせうかと、息が詰まるやうに悲しくなつた。只だ無暗にわあ〳〵と泣いた。やう〳〵祖父の詫言で、今夜だけは許して貰ふ事になる。許しては貰つたが復習は許されぬ。しぶ〳〵行燈の前に机を持出して地理初歩を讀始める。啜泣しながら讀むのだから丸で聲が調はぬ。「ポリチカル、ゼオガラヒー」はア」と讀上げるうにも涙が湧いて來てぽた〳〵と本の上に落ちる。やう〳〵讀本の方だけ許して貰つて、此夜は乞食にもならず安らかに寢た。

地理初歩と讀本の一の卷とを修了した後、いよ〳〵入校の準備に取りかゝつた。入校の手續などに就いて萬事世話になつたのは内野の叔母さんであつた。内野の叔母さんといふのは自分の入るべき小學校の教師であつた。五十ばかりでもあらうか、我母の遠い縁續きとかで、豫て懇意にして居つた。我家から五六軒先きの門構の家で、これも自分の遊び場所の一つであつた。叔母さんの家の庭には大きな梨の木がある。蜜柑の樹が二三本ある。櫻桃が十四五本ある。其中には自分の櫻桃と極められて居るのが二本もある。實の熟する時は毎日のやうに遊びに行く。櫻桃の實は燈でも點したやうに美しい。叔父さんは讃齋といふ漢學者で、綺麗に頭の禿げた老人であつた。叔父さんの部屋には本箱が幾つも行儀よく竝べてあつた。時々叔母さんが此部屋で本を教はつて居られるのを見た事がある。叔父さんも叔母さんも二人ながら眼鏡を掛けて、机の上の一つの本を見るのである。自分の家では斯樣な事を見た事が無いので餘程不思議に感じた。飯時に行くと叔父さんと叔母さんと向ひ合つて、二人で酒を飲んで居られる事もあつた。銘々前に猪口を置いて、叔父さんが飲むと叔母さんが酌をする、叔母さんが飲むと叔父さんが注いで遣る。時には二人が眞ッ赤になつて議論をして居る事などもあつた。

子は三人ある。上二人が女で、三番目が英夫兄さんである。兄さんは自分よりも大分年長で中學生であつた。紙鳶を揚げる事が上手であつた。自分の國では東京のやうに寒い時に紙鳶を揚げるのでは無い。春先きになると空が好く晴れて暖かい風が吹き始める。毎日々々同じ強さで吹く。家蔭の雪も殘りなく消えて了ふ。すると惣門の内外を問はず、彼方からも此方からも競つて紙鳶を揚げる。うなりの附くのを障子紙鳶といふ。普通のを赤鱏紙鳶と稱へて眞四角な紙鳶の一角に尾を一本つける。賴光だの金時だのと色取つたのが多い中に、英夫兄さんのは何時でも眞ッ黒である。さうして髭題目のやうな横文字をなぐり書きにしてある。こんなのは他に類が無い。空を見れば兄さんが揚げて居るか居らぬかが直ぐ分かる。兄さんは紙鳶揚げに飽きると、本部屋の二階に上つて英語を讀む。座

敷の方で讀んで居つた事は無い。何時でも木部屋の中で大聲を出して讀む。近所で英語を讀むものは兄さんが唯だ一人である。或時は同じ木部屋の中でどかん／＼と唐臼を踏んで居る事もある。雪が降ると、飢ゑた雀が恐ろ／＼唐臼の周りに集つて來る。二階に潛んで居る兄さんは急に戸を引閉て丶、小窓にぶつつかる雀を難なく捕へたりする。體格が善いから片時も活動を止めぬ。木部屋は兄さんの書齋でもあり、又運動場でもある。

自分は叔母さんに伴はれて初めて學校に出た。キュー／＼鳴る仙臺平の袴を穿いて出た。何だか改まつたやうな胸騒ぎのするやうな變な心持であつた。學校に到着した時に丁度授業時間で表は靜であつた。幅の廣い梯子段を昇つて、直ちに校長室に通される。校長室には疊が敷いてあつて、校長さんが箱火鉢に手を翳して前屈みに坐つて居られた。色の白い、鼻の下に黒い髭のある、お殿樣のやうな人であつた。叔母さんが紹介やら何やら色々と挨拶して居られるので、自分は只だ默つて一度お辭儀をした。大人がするやうに袴の下に手を入れてキチンと坐つて話の濟むのを待つて居る。あしたからお出でなさいと校長さんが言ふ。これを汐に立つて各教場を一巡する。廊下も何も無いので教場は丸見えである。疊敷の教場もあれば、テーブルに腰掛のもある。生徒が一齊に顏を向けて自分に注目するので大に極りが惡いけれど、何しろ叔母さんといふ附添があるから心丈夫であつた。成るたけ濟ました顏をしてシュッ／＼と通つて行く。叔母さんがお辭儀をせよといふ時には其通りにする。大抵こんな處だらうと想像して居つたが、餘り生徒が澤山居るので、内々は少し怖ぢ氣が附いた。時間の鐘が鳴ると、生徒がばら／＼と門内の運動場の方へ出る。自分を見て、上り子だ／＼と言つて居る。上り子とは新入生といふ意味ださうな。誰やら眼の前に來てにや／＼笑つて居る者があると思つたら左官屋の清ちやんであつた。清ちやんにまでも濟まして居られず、それに何やらなつかしいやうな氣もするので、自分も思ひ出したやうに笑つて見せた。

叔母さんは其儘に學校に殘る。自分は古屋の姉さんに連れて歸つて貰つた。姉さんは内では劍術をする、學校では裁縫の稽古をして居る。當分の内は此姉さんの世話になる事になつた。歸つて來ては流石にガッカリした。毎日あんな處に行かねばならんかと思ふと、何となく苦痛である。併し清ちやん達は毎日行くのだから面白いだらうといふ氣にもなる。母は何くれと準備をしてくれた。文庫といふ大きな木の箱に、硯や草紙や石板や算盤を取揃へて入れてくれた。辨當箱も出來た。上草履も買つて來た。もうこれで揃つたと言つて居るところへ、古屋の姉さんが遣つて來て、も一つ草履札といふものが入りますといふ。棚の上に草履を置く時附けて置く札である。父は早速板切れを將棊の駒形に削つて紐を附けて呉れた。清ちやんも明日の朝誘ひに來ると言つて來た。自分は此姉さんについて出るのだと答へて置いた。

七、

下等八級の教場は二階の大廣間である。先生は高木とかいふ白髪のお爺さんで、藪睨みの怖い顏の人であつた。窓際に高机を据ゑて、茶の羽織を著て、腰掛けて居る。生徒は幾通りにも竝んで坐つて手習をして居る。男生も女生もませ／＼である。自分も古屋の姉さんと一所に其中に割込んだ。銘々の文庫と文庫との上に、橋を架けたやうな鹽梅に、板臺といふものを渡して、其上で手習をするのである。板臺は墨で汚れて黒光りに光つて居る。自分は手習道具

を出して見て、他の生徒のとひどく違つて居るのに驚いた。自分の草紙は役所反古で作つた白ツぽいものであるのに、他のは墨でぴか〳〵光つて、爪で剝がせば剝けさうな位、黑く染まつて居る。何だか其方が本當に善い草紙であるやうな氣がする。硯も自分のは黑い石のツル〳〵滑つて磨りにくいのであるに、彼等のは大概庶石とかいふ赤土色の磨りよささうな硯である。これも自分のが古風で、彼等のが新式のやうに見える。文庫も自分のは古くてどす黑いが、彼等のは靑飴色に塗つた新しいのである。其他墨が違ふ、算盤が違ふ、風呂敷が違ふ、同じものはたつた卷筆と石板位なもの、自分は大に恥かしく感じたので、家に歸ると直ぐ其不平を訴へた。母は却て他の生徒のが下等なのだと辯解した。春慶塗の文庫が何が善いものか、お前のは古くても總桐だ、どつちが善いか内野の叔母さんに聞いて御覽といふ。草紙はといへば、馬鹿な事を、それは墨で汚れて了つたのだ、お前のも今に其通りになるといふ。何を聞いても一々反駁されるので、成程さうかと半分程得心したが、併し學校に出て較べて見ると、どうしても他のが善く見えて自分のは惡いやうに思はれる。少くとも墨丈けは初めから惡いと思つた通り、どう考へても惡いので、やつと是だけ母にねだつて買つて貰つた。

高木先生は怖い先生である。生徒がベチャベチャ饒舌り出すと、習字課無言ッと、破鐘のやうな聲で叱られる。すると教場は水を打つたやうに靜になつて、草紙をはねる音ばかりさらさらと聞える。一人がスルッと鼻汁を吸込むと、あつちでもスルッと吸込む。こつちでもスルッと吸込む。暫くすると又隅の方から話が始まつて再び全體にざわめき出す。先生は再び牛のやうな眼をむいて此方を睨む。時にはわんぱく者が引張り出されて罰を與へられる。兩手を擧けて塗板の下に直立するのである。もつとヒドイのは繩で縛つて梁木に吊し上げられる。初めて此教場に坐つた時、屋根裏に太い繩をたくしてぶら下げてあるので、何にする物かと思つて居つたが、或日西野といふ生徒が女生徒にいたづらをしたとかで吊し上げられた。西野か宙にぶら下がつたのを見た時、自分は胴振ひが出るほど恐ろしくなつた。自分の事で無くてもおど〳〵した。明日は自分の番に當つて居るやうな氣もする。初めの内こそ古屋の姉さんが附添うて居てくれたが、一人ッぼちになつては大きに心細い。朋輩の生徒が何のかのと調戲つたり苛めたりするので悲しくなる。泣く。泣くと生徒が慰め顏に寄つてたかつてベチャクチャ饒舌る。又それが悲しくなるので泣く。終日物も言はずに泣く。家に歸ると、又今日も泣いたなと母が言ふ。何故分るのかと思つたら、眼の縁に黑い輪が出來て居るので分るさうな。墨の手で涙を拭くからである。斯くて自分は新入生の泣き蟲といふ評判を取つた。

ところが幸にも八級の教場には長く止まらずに濟んだ。それは既に自宅で一通り小學入門やいろはの習字等は修業して居つたからである。間も無く七級に編入された。七級の讀本は自分の修了した一の卷であつたけれど、算術其他に未修の課目があつたので、七級より上には行かれぬのである。今度の先生は河合といふ若い先生で、生徒には受けの善い人であつた。學校に馴れたせゐでもあらうが、自分は七級になつて初めて學校は愉快な所だと感じた。朋輩にも口を利けば先生にも物を言ふ。初めて先生を呼ぶ時に、どう言つて善いか解らぬので、兄さんと呼んだ。生徒も笑ふし、先生も笑つた。家に歸つて今日笑はれた話をすると、家の者もみんな笑つた。河合先生は生徒を繩で縛るやうな事は無かつたが、其代りに長い矢竹の鞭を持

つてわんはんの頭をたゝく。話をしたといつては叩く、横を向いたといつては叩く。何でもかでも叩く。竹が古くなつて役に立たなくなると、生徒に山から取つて來てくれと註文する。翌日は生徒が爭つて竹を持つて來る。先生は之を束にして置いて、一本宛新しいのを出して、持寄つた生徒等の頭を打つ用に供するのである。幾ら頭を叩かれても生徒はよく河合先生になついて居つた。自分も河合先生は大好きであつた。內野の叔母さんは隣の六級の先生である。眼鏡を掛けて椅子に腰をかけて小學讀本の講釋をして居られる。その甲走つた聲が叔父さんと議論する時と同じやうに大きい。自分は叔母さんが間近に居られるので、氣強くもあり又幾らか窮屈にも感じた。

學校の淸書には梅の花の代りに蛇の目の丸が附いた。初めは變に思つたが後には此方が新式で善いと思つた。評は佳々とか大佳とか絶佳とかいふのであつた。先生の算盤が馬鹿に大きくてをかしかつた。それから乘算九々を全級同音で、思切り大きな聲を出して呼ぶのが面白かつた。併し自分は總ての學課の中で、讀本が一等好きであつた。講義を聞くと、家で敎はつた時よりも善く譯が解るので、非常に愉快に感じた。此讀本は大體ウヰルソンのリードルの飜譯で、今の讀本に較べると餘程西洋の趣味に富んで居つた。猿が手を有つ、蟻が足を有つといふ所が無い丈けで、あとはウヰルソンの通りであつた。洋服を著た子供が毬を投げて遊ぶ繪がある。自分も其通りにして遊んだら、どんなに面白いだらうと思ふ。氷の上を橇に乘つて遊ぶところがある。これも眞似をして見たい。これは田舍の富家なりとあつて、西洋造りの家が描いてある。自分も此樣な家に住まつて見たくなる。すべて西洋の家、西洋の景色、西洋の人物、何でも西洋の物が愉快さうに思はれる。木は嫩芽を生じ、草は新葉を發し、在るとして綠ならざるは無し、といふやうな文句がむやみに愉快に感じられる。だん〳〵級が進むに從つて、狼來れり狼來れりといふ話、怠惰者が酒に身を持崩して終に獄に繫がれるといふ話、子供が火なぶりをして火事を出したといふ話などの講義を聞くと、ぞく〳〵する程嬉しかつたり悲しかつたりする。兎に角自分は讀本を讀むと半分西洋の子供になつて居るやうな氣がする。內では母に昔話を聞く。母の昔話は怖い話が多くて讀本の愉快な話とは反對である。酒顚童子の話、小栗判官の話、それから維新前後の實話で、母の實家の近隣に居つた成瀨といふ老人が手癖の惡い息子を斬殺して湯を浴びて居つたところが、斬られた息子がだらりと右の肩をぶら下げて湯殿に出て來て、お父樣水を一杯飮まして下さいと言つたといふ話、堀內といふ醫者が代脈と密通した妻を斬つて、足の裏をグサリ〳〵と刀で突刺したといふ話などは聽くたびに縮み上がるほど恐ろしい。

學校に通つたのは長い間の事だから、面白い事も怖い事も數々あつたらうが、纏まつた事は覺えて居らぬ。又自分は學友の中に特に親友といふものが無くて、何時も孤立して居つた。勉強は大嫌ひであつたが、成績は惡い事は無かつた。大抵二番か三番に居つた。試驗の時には褒賞を貰ふに極つて居つた。褒賞といつても大したものでは無い。畫仙紙を五枚とか、罫紙を五帖とか先づそんなもので、卒業の時に銅版の字引を貰つたのが一番上等であつた。何級の時であつたか覺えぬが暫くの間村上先生といふのが受持になつた事がある。此先生は前の不人望な何とか先生に比べると、優しくて親切で非常に受けが善かつた。何時でも頭を綺麗に分けて居る先生であつた。或時先生は據ない事情で他に轉校せねばならぬとかで、皆さん今日

限って私の授業はお仕舞と致します、皆さんは私の受持の間は靜くおとなしく善く勉強して呉れました。どこの先生が變つても是迄と同じやうにおとなしく勉強せねばなりません、決して村上先生は斯うであつたとか、あゝであつたとか言つてはなりません……と此日は格別顏を和らげて訓誡した。女生は皆袂を顏に當てて泣き出した。男生は泣き出すまでには至らなかつたが、みんな物も言はずに先生の顏を見詰めて居つた。丁度其頃校長が變つた時で、開發的の何のといふ程度には無論進んでは居なかつたが、それでも授業の方法が着々改良せられる、體罰等も少なくなる、土曜日毎に修身講話が開かれる、校長が勸善訓蒙の講釋をする、といふやうな極めて校風の盛な時であつたやうに記憶して居る。

自分の家は又轉宅した。今度は城山の裾で、市街からは元の家よりも一層離れた、屋敷の廣い一構へであつた。屋敷の西は城山の續きの小山で限られて居る。全體が桑と麥の畑になつて居て、畑の中には大きな池が二つもある。此處に越して來てから自分は俄に友達が殖えた。それは自分共の遊場としては此上も無い小山があるからで、學校から歸れば殆んど毎日友達と裏の山で遊び暮らす事になつた。友達は來なくても自分は山で遊んだ。内に居つて本を讀むよりも獨りで山を歩行いた方が面白かつた。隣の小原の幹さんも矢張學校友達で、これとは殊に親密になつた。小原には叔母さんがたつた一人あるきりである。幹さんは母の手助けに毎日山に登つて杉の枯葉を集めて來る。幹さんが登れば自分も直ぐ其あとについて登る。殆んど競爭する樣にして集める。熊笹を分けたり雜木の枝にすがつたりして拾ひ集める。秋になると色々の菌が生える。何時でも幹さんと採りに行く。自分獨りでも採りに行く。朝採つて來て又晩にも採りに行く。さう無暗に菌が生えるでも無いから、時にはさら〳〵と夕風の渡る笹の中にボンヤリして立ちつくして居ると、急に淋しさを感じて一息に驅下つて了ふ事もある。猿茨の實、木苺の實、山葡萄の紫の實などは菌に次いでの嬉しいものである。茨ぐろをくゞつて鶯に似た蟲喰鳥が飛ぶ。これも嬉しい。小山を登りつめると、赤禿げの平に出る。松の間から市街を一目に見下ろして、遙かに國境の山々を望む。市外の野に一筋の布を曝らしたやうに見えるのは大川である。大川の末は流れて砂濱のかたへの港へ注ぐ。濱には音も無く白波が打寄せて居る。晴れた日には隱岐の島さへ見えるといふ。あると思へば見える。無いと思へば消えて了ふ。雲か島かの境が判らぬ。砂濱を三里東へ行けば自分の生れ故郷に歸られるのだと思ふ。白波は絶えず打寄せる。飛べは直ぐ飛んで行かれさうにも思はれて、身は小山の上に在る事を忘れて居る。ふと眼を右に轉ずると、險阻な城山は我が面を壓して巨人の胸を張つたやうに逼る。頂上の松すらも見えぬのは偉大に過ぎて恐ろしさを感ずる位である。

八重さんが遊びに來た時、自分は彼れを伴うて此平に登つた。僅かの山路にも歩き慣れぬ八重さんは、年少の自分に手を曳かれて藥研のやうな道を喘ぎ〳〵登つた。自分は八重さんを切株に腰掛けさせて、八重さんの家のあるところを教へる。八重さんは、何物をか恐るゝやうにあたりを見廻して只だ輕くうなづく。自分はあつちに廻り、こつちに走りして、八重さんの氣に入りさうな處を指ざし教へる。八重さんはもう歸らうと云ふ。碌に見もせずに、只管下山を急ぐ。何故八重さんは山が面白くないのだらうと訝りつゝ、強ひて留まる事も出來ずして再び山を下りる。下りるに從つて八重さんはだんだんに口を利き始める。顏の色も何時もの紅い

活潑な色に返る。八重さんは山が嫌ひかと聞くと、内の方が善いわといふ。八重さんは山が怖かつたに相違ない。町に住む人は其様に山が怖いのかと、何だか自分丈け怖くない事が不思議にも思はれる。八重さんは内に歸ると直ぐにいたづらを始める。今度來たら今一度山に連れて登つていぢめて遣らうと思つて居るうち、八重さんの家は急に東京に引越す事になつた。其後八重さんには二十年も會はなかつた。

八

或日學校の歸りに、戸長役場の前の泥溝をつついて遊んで居ると、後ろから、聲を掛けて、坊さん何をして居なさると呼んだものがある。誰れかと振向いて見ると長屋の婆さんであつた。婆さんは涙ぐんだやうな眼付をして、早くお歸りなされ、お祖父さんが死になさつたといふ。自分は直ちに竹を投棄てゝ立上がつた。別に悲しいとも思はなかつたが、何やら怖いやうな胸が震ふやうな變な心持で急いで歸つた。歸つて見ると、早や近所の人や、親戚の叔父さんなどが五六人も詰掛けて居る。父や母は自分が歸つて來たのも眼に入らぬのか、丸で構ひ付けもせずに取込んで居る。茶の間では酒を飲んで居る者もある。飯を食つて居るものもある。いつもの内の容子に較べると、何となく陽氣で、怖氣などは何處かへ消えて了つたが、只だ何だか他人の家へ呼ばれて行つた時のやうな窮屈さを感じた。で、人にお辭儀もせずにポツンと立つて居つた。

暫くしてから長屋の婆さんが自分を引張つて、祖父の寢所に連れて行つて、坊さんも末期の水をお上げなされといふ。祖父は何時もの通り蒲團を著て壁の方を向いて寢て居る。枕元に水を入れた湯呑が置いてある。祖父は死んで居るのだなと思つて覗いて見る。怖くも何とも無い。何時も寢て居る通りである。父も出て來て、其水を紙につけてお祖父さんの口に入れて上げよといふ。自分は教はつた通りに紙を水に浸して二滴ばかり祖父の口にたらした。水をたらされても祖父は何とも言はぬ。祖父はいよいよ死んだのだと合點する。

祖父が病の床に就いたのは昨日や今日の事では無い。此屋敷に引越して來ると間もなく腸胃を損じて、其後絶えず醫藥に親しむ様になつた。春日の麗かに晴れた日には、今一度元氣になつて見たいと、兩手に杖を突いて勉めて庭を歩く事などもあつたが、自分は其老いさらぼひた容子を見て、迚も恢復は覺束ないと思つた。元來祖父は若い時から至つて健康な體質で、舊藩時代には裏判方といふ今の會計官吏を勤めた。御用商人を相手の役人だから自然有福でも有り、其の頃の元氣はなか／＼大したもので有つたさうな。自分が覺えるやうになつてからも年を取つて微祿こそして居れ、體は大丈夫なものであつた。物見遊山の折は祖父が何時でも先導者であつた。春の野遊びに祖父が野風呂を立てる姿は今も眼の前に見る様な心地する。磧の花火見物にも度々行つた。我地方の花火は東京の玉屋鍵屋の様な花火屋の受負仕事で無く、士族の眞面目な仕事である。梶川流は打揚げが高くて月を吊る時間に餘裕がある。渡邊流は火が低くて色が美しい。從つて仕懸物が巧いといふやうに互に流派を爭つて秘傳ものにして居る。水を隔てゝ向うの堤に家の定紋打つた幔幕が張られる。六寸玉、八寸玉、時には一尺玉の筒さへ据ゑる。打揚けの合圖に法螺の貝を吹く。ブウーウーワン／＼と三度鳴響く。磧に集ふ數萬の見物人は胸を躍らせ、鳴りを鎭めて待つて居る。此時陣笠を冠つて、袴の股立を取つた導火方が筒の前に現はれる。竹の尖の火繩を大きく廻して靜に火を點ける。ドシーン

と天地を撼かす響と共に玉は遙かに中天にある。開くかと見るに、玉は尚ほ一尺登り、五寸登る。見物は息も詰まる思ひである。登り切つたところでパッと煙を吐く。紅龍白龍と相連つて現はるゝ時、磧の群集は一度にウヮーと鬨の聲を揚げる。陣笠の導火方は茲に面目を施して悠々と幕の内に退くのである。花火見物に限らず祖父は遊ぶ事は何でも好きであつた。祖父が遊びに行けば自分は何時でも連れて行つて貰つた。祖父は又至つて筆まめであつた。何處からか古新聞などを借りて來ては罫紙に細字で寫して居つた。それが積り積つて用簞笥に一ぱいと本箱に一ぱいあつた。床に就くやうになつてから、自ら死期を知つたのであるか、或時母を枕邊に呼んで之を選分けさせた。それは紙屑にするの、それは棺に入れるのと一々指圖して居つた。父死に先だつ一ケ月間程は全く耄碌して了つて、全で譯の分らぬ事を眞面目に口走つて居つた。それが可笑しいと言つて一同が笑ふと、祖父は血相變へて怒る事などもあつた。

　野邊送りの用意は一兩日續いて賑やかであつた。母が經帷子を縫ふ。長屋の婆が茶袋を詰める。自分は三途の河の渡し錢だといふので、墨で半紙にべた／＼錢形を捺した。甕に納めて白い布を掛けて、座敷の正面に直した時は、祖父も初めて佛樣になつたやうな心持がした。葬禮の行列は割合に淋しかつた。親戚五六人の外に近所の人が少しばかり加はつた。其中に宮本老人といふのが、昔祖父の下役であつたとかで、平素は餘り往來もせぬのに來て呉れた。此老人が悔みに來た時、若い者の死ぬるのは苦にもならぬが、年寄が死ぬる話を聞くと氣味が悪うてならぬと言つたげな。祖父は生前から墓を造つて置いた。祖母のと並べて戒名も彫付けてあつた。先祖代々の墓が五六基並んで居る中に、祖父祖母のが一番大きくて立派であつた。祖父の柩は此墓石の下に永久に埋められた。

　法事は其後たび／＼あつた。自分は何時でも親戚の子供連れと一緒に、つる／＼滑りさうな本堂の廊下を走り廻るのが面白かつた。讀經は音頭取りの鐃鈸の音を以て始まる。御經が始まると流石に氣が改まつて騒いでも居られぬ。子供連は前の方に並んで各兩手を膝に載せて菓子が出るのを待つて居る。菓子は例の馬の耳に大饅頭と茄子餅とである。茄子で作つた餅では無い。茄子の形をした黒い餅で、食べると齒に喰付くやうなものである。御經の聲は眠くなる程靜である。御經は曹洞宗に限ると父は言ふ。自分も子供の時から聞慣れて居るせゐか、家の寺のが一番善いやうに思ふ。法事の事を言へば母の里方もたび／＼法事のある家で、自分は母と共に度々呼ばれて行つた。家の寺と違ふところは、本堂の隅に大きな太鼓があつて、讀經の始まる前に小僧がそれを叩く事と、町の啞娘が菓子を貰ひに來る事と、それから法事の濟んだ後に方丈で御馳走が出る事等であつた。方丈は庭の池に突出て居て、手をたゝくと鯉がゴヨゴヨと集つて來る。馬の耳を投げて遣る。饅頭の皮を投げて遣る。鯉は燃えを躑躅の影を亂してカプリ／＼と馬の耳と饅頭の皮を爭ふのである。此處の和尚樣は酒の席に出て來る事は滅多に無かつた。只だ席を貸して呉れるだけであつたと見える。

　母の里は當時近在に住居して居つた。市街を一里ばかり隔つた小村の、木の葉石の出る山の裾であつた。自分は時々母に連れられて泊りがけに遊びに行つた。お婆さんと從兄が三人あつた。下の從兄は自分と同い年であつたが、村の子供と同じやうに、井手川の日高をしやくつたり、鯏を捕つたりする事が上手であつた。上の

二人は自分よりは年も大分上で兄樣であつた。二人して縁側一ぱいに小鳥を飼つて居つた。自分も一度小鳥を捕りに二人について裏の山に登つた事がある。また眠いのに薄暗い山路をすたすた登つて行くのは厭であつた。二人は自分にも構はず松の上の囮籠を見詰めて、一生懸命である。颯と音を立てゝ鳥が渡つて來ると、靜に靜にと叱り廻す。何も騷ぎはせぬのに無暗に叱る。獦子鳥がかゝる。鶸がかゝる。かゝるたびに囮を卸して唾を付けて網を繕ふ。兄弟の眼は火のやうに光つて居る。自分は餘り面白くないので辨當の握飯を貰つて食ふ。夜が明け放れると眼の下の田圃の黄ばんだ景色は眼も醒めるやうに美しい。城下にも斯んな廣々した處があれは善いと思ふ。

或年、上の從兄に嫁さんが來た。無論自分も呼ばれて行つた。嫁さんは隣の國から來たので、著くと直ぐ北側の三疊の部屋に這入る事になつた。元來が狹い家だから、座敷にも臺所にも客が一ぱい居るので、自分は始終嫁さんの部屋に居つた。嫁さんは白粉をつけて、綺麗な着物をきて、行儀よく部屋の眞中に坐つて居る。坊さんは大人しう御座んすなといふ。自分は只だ笑つて顏を見て居る。嫁さんは嫁に來ても、少しもこれて居る樣子は無い。只だ行儀よく兩手を膝の上に重ねて、おちよぼ口をして坐つて居る。朝から晩まで坐つて居る。手水に立つ時と御飯を食ふ時の外は一寸も動かぬ。式が濟んだあとの御馳走には自分も席に列なつた。嫁さんは御飯を山盛りにされて、困つたやうな顏して箸を執つた。叔父さんや叔母さんが唄と笑つた。これか儀式で目出たいのださうな。追々酒が廻るにつれて謠が出る。唄が出る。聟の從兄が眞赤に醉つて踊り出すといふやうな騷ぎで、何時の間にか嫁さんは晝間の部屋に引込んで了つた。聟が水の代りに白米を頭から祝はれた時は、もうスッカリ盛り潰されて了つて正體はなかつた。御客も醉倒れて了つたり、歸つたりして、少し靜になつた時、村の若い衆が十人ばかり座頭の姿態をして御祝に來た。三味線を彈くやら唄ふやら踊るやらで、又大騷ぎになつた。此夜自分は泊つたのか、家に歸つたのかどうも思出せぬ。

或時自分は聟の從兄について溫泉に一週間ばかり行つた事がある。溫泉場は城下から三里ばかり離れた小村である。自分は生れて初めて宿屋といふものに泊つたので、此一週間は實に我慢が仕切れぬ程長い思をした。遊仲間は無し、一日の中に二三回入浴する外、何もする事が無いので、退屈で仕方が無かつた。半日は挽物細工の店頭に立つて、獨樂や箪笥が出來るのを見暮らし、又半日は牛や馬が湯を使ふのを見暮らす。牛湯があり、馬湯がある。總湯には村の百姓も、通り懸りの旅の者も來る。湯に入るものは皆淺い柄杓を持つて、唄に合せて頭に湯をかぶる。始まる〳〵、三つに四ッつはいつでも六ッつ、なンな八ッつはお豐がまある、と十づつ數へて百かぶる。中には剽輕な入れ文句などがあつて、實際の數は二百にもなる。柄杓の湯を打つ音は鼓の音にも擬らて賑やかである。これは内湯でもする事だが、總湯の音ほど盛で無い。宿屋に泊つて居るものでも、此の騷ぎか面白くて、態々總湯に入りに行く人もある。自分は人と一所に湯に入る事はきらひだから、外で音をきくばかりで、一度も行つた事は無い。内湯でも成るたけ人の居らぬ時刻を見計らつて入るやうにした。湯は底の板がキラ〳〵光る程に澄み切つて居る。手の色も足の色も、體の色が總體青くなつて見える。こんな綺麗な湯に入るのはこれも生れて初めてである。湯に入つて足の先きまで見えるのは不思議な事のやうに思はれた。或日例の如く自分獨り這入つて、湯

桁につかまつて泳ぐ眞似などして居ると、不意に戸を開けて段を下りて來たものがある。後ろを向いて見ると思掛けない若い女であつた。眞白な體を少し屈めて、湯桁に坐つて肩の邊りから湯を流し始めた。自分の顏を見て、坊さんは六番かなと言つて莞爾と笑つた。何處やら荒物屋の多代に似て居ると思つた。自分は六番といふ意味が解らなかつたので、只だエヽと曖昧に答へて置く。女は俯向いて頸筋を洗つたり、又仰向いて首を洗つたりした。暫くしてドボンと湯に入つた。女の背中もやつぱり青く見える。片膝立てヽ坐つて居る姿勢までハッキリ見える。自分は女を殘して先きに上がつた。從兄に女が六番かと聞いた事を話したら、あれは昨夜十番の室に來た新地の藝子だと言つた。

九

自分は夢の如き回想記を終るに臨んで、二三の年中行事を語らねばならぬ。正月元日の朝はまだ暗い内に眼がさめる。起きて見ると、もうちやんと神棚に灯かともつて居る。年中ともした事の無い神棚の灯は、煤けた壁や天井を隈なく照らして居るので先づ氣が改まる。何となくそは〳〵と落付かぬやうな氣がして嬉しくて堪らぬ。皆が起揃つたところで父が一番に三寶の前に坐つて大福茶を飮む。祖父が存命の時分は勿論祖父が一番であつた。次ぎに自分の番で、おめでたうと三寶に頭を下げて飮む。泡の下から酸つぱい汁が來る。お仕舞には梅干の皮が出る。これで式が濟むので、あとは暫く雜煮の出來るのを待つて居る。屠蘇が出る。膳が並ぶ。膳の上にはこれも一年に一度づつ出る塗椀と太箸が配られる。自分の椀には徳川の定紋がついて居るので、あゝこれだなと年毎なつかしく思ふ。お平の蓋には南天の葉に、ごまめが二つ宛つけてある。どの蓋を覗いて見ても神棚の燈が黑漆に映じてきら〳〵と小さく光つて居る。三ケ日の間は毎日此通りである。雜煮を祝ひ了つた頃にはもう夜も明け放れて居る。押入れから新しい足袋や木履を出して疊の上で穿いて見る。急に丈けが高くなつて、家中の者を見下ろすやうな、危いやうな氣がする。着物を着代へさせて貰つて親戚に年頭に行く。三寶を敷いてお目出たうを言ふのは極りが惡いが、其代り年玉が出るから樂みである。石田ではいつでも鼻紙二帖に極まつて居る。一番善いのが母の里で、毎年祝儀袋に銀貨が一つ宛入れてある。自分には其頃銀貨程珍しくて嬉しい物は他に類が無かつた。遊び連れが寄ると、貰ひ溜めた鼻紙を賭けて吉獨樂といふ事をする。六角に削つた獨樂の側面に、大吉とか半吉とか、一枚とか二枚とか記してある。一枚と出たら一枚張る。二枚が出たら二枚張る。大吉は皆取るので半吉は半分取る。何れも大吉が出よと念じて廻すのである。其から又針打といふ事をする。縫針に刺した黑豆を前齒に咬へて、針の絲を引く勢に、疊の上に重ねた鼻紙の上に打付ける。打込んだ針の絲を靜に引上げると、幾枚かの紙がくつ付いて上がる。上がつた紙が銘々の所得になるのであるが、針打で取つた紙には針の孔がポッポツあいて居るので厭であつた。針打は石田の幸ちやんが一番の上手で、出した丈けは何時でもみんな取つて了ふ。

三月の雛の節句、これも自分には思出で多き日の一つである。舊暦の三月だから、桃や李が一時に咲く。女子供のある家では、どの家もどの家も大きな雛壇を作つて雛を飾る。我家には女の子は無くても母の古雛を飾つて貰ふ。大きな内裏さんの外に、武内宿禰などの武者人形もある。薄汚くなつた狆もある。流し雛の外には新しいのを買足す事が無いから、何時も馴染の雛ばかりである。近所の雛、親戚

の雛と皆に見せて貰ひに行く。行く先き／＼で御馳走になり、菓子を貰つて歸る。或年の雛の日であつた。自分は例の通り雛見に出て、石田の幸ちやんの內で、きらひな白酒を無理に猪口に一ぱい飲まされて、苦しい胸を押さへて歸つて來た其晩であつた。遽に腹が痛むやら吐くやらで、前後不覺に床に就いて了つた。翌日眼が覺めてもなか／＼頭が上らぬ。白酒の事を思ふと胸先がむかついて來る。醫者が朝と晩と二度づつも來るといふやうな騷ぎで、二三日は粥さへ喉に通らぬ苦みであつた。然し其苦みにも增した苦みは、病後一二ケ月が間の食慾の制限であつた。父や母は好きなものを食ひ放題に食ひながら、自分には醫者に叱られると言つて少しも分けて吳れぬ。殘念やら羨ましいやらで其都度泣いてばかり居つた。かねて泣蟲であつたのが此頃は特に淚脆くなつた。食物で小言を言はれると直ぐ淚が出た。薄い粥が一ケ月ばかりも續いた後、漸く飯の許しが出た。其日の晩餐には初めて人間の仲間入りしたやうな氣がして嬉しくて堪らなかつた。而も飯は初めだから控へ目にせねばならぬといふので、たつた一椀しか貰へなかつた。こんな事ならまだ粥の方が好いと思つた。併し泣いても笑つても母は一椀ぎりしか吳れぬ。折角癒りかけたものを今、後戾りしたらどうするか、お醫者樣が飯はまだ早いと言つて居られる、と母は固く醫者を信じて我が小さな願を容れなかつた。三日目に一口、五日目に又一口と極少量づつ增しては吳れたが、もどかしくて堪らんので、竊に母の眼を偸んで、お櫃の飯を摑み出して食つたり、又は佛前に供へた飯を卸す役目を引受けて、巧みに一口二口盜み食ふのであつた。盜むのは惡いと知りつゝも、盜飯がギュウと喉を擦過する旨味は何とも彼とも言へぬものであつた。若しも永久に空腹が續くものなら、自分は生涯飯盜人で了つたかも知れぬ。幸にして漸次本復したので、何時の間にか其事は忘れて了つた。

　病氣でなくても、其頃自分の胸を痛める些細な苦痛は數々あつた。元來が貧乏士族の家庭だから、萬事儉約々々で、薄弱な自分の性質をば一層ケチ臭い根性にして了つたやうに思ふ。酒を買ひに行かねばならぬ。酢も買ひに行かねばならぬ。雪の降る日は古い藁履を穿いて行く。藁履といふのは藁で造つた長靴のやうなもので、新しいのは溫かくて氣持が善いが、水に滲みた古いやつは跣足で步くよりも冷めたい。母はナカ／＼新しいのを買つて吳れぬ。自分は此古履を穿くのが厭で堪らなかつた。それから五厘か一錢の酢を買ふのに德利が馬鹿に大きい。フラスコと言つて、黑い大きな、底のグウッと持上がつた、葡萄酒か何かの空瓶である。醫者に藥を貰ひに行くにも矢張フラスコ瓶である。も少し輕い恰好な瓶を買つて吳れと言つても、どうしても買つてくれぬ。それから又時々牛肉を買ひに行く、牛肉を賣る家は當時城下に只だ一軒しか無かつた。片山とかいふ士族の商法で、店の奧に人相の惡い××が眼を光らして居る事が多かつた。牛肉を買ひに行く時は母はいつでも二錢出して吳れた。自分は此二錢の使に行くのが非常に辛かつた。當時は一斤僅か七錢か八錢であつたけれども、二錢が牛肉を買ひに行くものは恐らく自分一人であつたやうに思ふ。大きな店頭に立つて、たつた二錢出すのが恥かしくもあり、又僅か二錢のために遙々遠方に使に行くのが馬鹿らしくもあつた、自分は屢々母にもう一錢增して吳れるやうにせがんだが、母は行くのが厭ならおやめよと言つて取合はなかつた。自分は仕方なしに何時も二錢銅貨を只だ一つ握りつめてイヤ／＼牛肉を買ひに行くのであつた。

　蠶飼も我家の年中行事の一つに數へねばな

らぬ。軟かい桑の若芽が吹く頃になると、赤引だの小石丸だのといふ種紙から、塵五味のやうな蠶を菓子箱の蓋に掃き下ろす。それがだんだん大きくなると、大筵に三十枚位になる。斯うなると家中蠶棚で一ぱいになつて了つて、殘る所は臺所の板の間と薄暗い茶の間ばかりである。大方は母の手一つでするので、盛りになると父も手助けをする。上簇る二三日前からは長屋の婆さんも來て手傳つて呉れる。桑は裏の畑に植付けた立木から扱くので、これは別に人を雇つてさせる。食ひ盛りになると、家中雨のふるやうな音を立てゝ食ふ。雨の日は桑を枝の儘伐つて來て軒に吊す。その鬱陶しさは一通りで無い。夜中に眼を覺まして見ると、母は手燭をともして棚の間を見回つて居る事が多い。上簇前は徹夜する事もある。蠶飼時は遊ぶのも本を讀むのも、自分の勝手放題であるので、大に都合が善かつたが、其代り飯を食ふにも、夜寢るにも、誰れも構付ける者が無い。お負けに家中蠶の糞だらけで汚い事は此上も無い。蠶を飼はぬ家に遊びに行つて見ると、綺麗で廣々として居つて坐り心が善い。内も早く蠶が濟めば善いなア、蠶が上簇する日ばかり待焦れて居る。愈よ蠶の收穫も濟んで、棚が取外づされて、蠶の糞が掃出されて了ふと、急に家が明るくなつて、野に出たやうな、無暗に飛廻つて見たいやうな氣がする。座敷の眞中に膳を据ゑて飯を食ふのも久々の事で、珍しくも又嬉しくて堪らぬ。繭は直ちに繭買に賣つて了ふ事もある。絲採女を雇つて絲にする事もある。二つ繭の絲は自分等の着料にもなり手いゝもくりとかいふ屑絲は父の紬の羽織になつた事もある。ところが或年蠶に病がついて上簇前になつたのを大部分捨てゝ了つた。其の翌年は繭の値が下落して引合はなかつた。母が癇癪を起して、蠶は來年からはもう飼はぬと言ひ出した。父はマアさう言つたもので無いと宥めたが、母はどうしても聽かなかつたので、其後永久お廢めになつた。自分は再び汚い窮屈な蠶棚の中に起臥せずに濟むやうになつた事を竊に喜んだ。

　母が蠶飼に熱心したやうに、父は一時畑作に夢中であつた。大根も作れば南瓜も作る。普通の野菜類は何でも作る。池の眞中に五反ばかりもある畑は只だ其丈けでは廣過ぎるので、冬から春にかけては大部分は麥畑になつて了ふ。蠶が終る頃になると、丁度麥の秋である。體のだるい南風が幾日も吹續く。其間に刈入れが濟んで、天氣の善い時に麥の穗をはたき落とす時などは、全で百姓家のやうな騷ぎであつた。麥藁で馬や蠑螺を作る事を覺えたのは此時であつた。麥秋が濟むと五月の節句になる。節句には幟を立てる。多くの家のは細長い織物の幟だが自分の内のは幅の廣い紙幟である。鍾馗が鬼を引摑んで居る圖で、城山颪にガワ〳〵と鳴る。他所の幟よりも何となく勇ましい。鯉も二丈に餘つて長く垂れると屋根の葡萄棚に引ずつて居る。父が鎧櫃から甲冑を取出して飾る。色は褪めて居ても緋緘である。半頰の白髭は針を植ゑたやうに光つて居る。母は臺所で粽を作るに忙がしい。笹ッ葉は自分が裏の山から取つて來るのである。粽の團子は透けて見える程よく蒸せたのが旨い。

　夏になると伊勢の太神樂が來る。自分等少年は頭から焼けるやうに暑くても構はず跟いて廻る。太神樂は昔から夏來るに極まつて居るので、一行中の老太夫は母の子供の頃から見馴れて居るさうな。大きな士族の家では大抵打たせる。演技する事を打つといふのである。半日ついて廻れば屹度二つや三つは見られる。長いのになると半日も、稀には終日かゝる事さへある。士族の家では門の內又は庭先きで打つ。子供は

悪戯さへしなければ自由に見物が出來る。重なる演技者をば先生と言ひ習はして居つた。おどけも白粉を塗つたり赤い着物を着たりせずに、紺の手拭で頬被りをして、これも同じく袴を穿いて居つた。自分の家では一度も太神樂を打たせた事がない。太神樂について廻る時に、家の前を通ると何となく肩身が狹いやうな氣がした。

太神樂は存分に見て廻つたが其他の興行物の類は滅多に見せて貰へなかつた。或時相撲が招魂社の境内で興行された事があつた。自分は見たくて堪らなかつたけれども、母はどうしても許さなかつた。學校の歸途には木戸口に行つて見たり、板圍ひの廻りをぐる／＼廻つたりした。すると自分と同じやうな木戸錢を持たぬ學校友達が居つて、後ろの板圍に攀登つて見ようと言つた。彼はあたりに人の居らぬのを見濟まして板圍に飛付いた。自分も之に倣つて飛付いた。友達は早や頭を板圍の上に出して場内を見て居る。自分も腕を縮めて首を持上げて見る。中の見物は皆土俵場の方に向いて立つて居るので、誰も自分等を見て居る者は無い。友達は自分と顏を見合して又圍を跨いだ。自分が眞似をして跨いだ時は、彼はもう圍の内に下り立つて、何處かに姿を隱して了つた。自分は止めようかとは思つたが、友達が這入つたのに自分丈け這入らぬのは損のやうな氣がして、ツイずる／＼と草の上に下りた。首尾よく這入りはしたものゝ、扨て氣持が惡い。盛に動悸が打つ。人の間から一寸土俵場の方を覗いて見たが、どうも見て居る氣にならぬ。友達は何處へ行つたかサツパリ分らぬ。自分は巡査にでも咎められたらどうせうかと遽に怖氣がついて、急いで木戸口を出て了つた。内に歸つてからも默つて居つては氣が濟まぬので、半分は罪を友達に被せながら、有の次第を逐一母に語つた。母は竈の前に坐つて飯を焚いて居つた。母は非常に驚いたらしく、力の籠つた聲で自分の罪を責めた。昔、木村といふ侍の息子が村芝居に忍んで這入つた事が發覺して切腹を仰付かつた話などをして、涙をこぼして叱り且つ諭した。飯の焦げ附くのも忘れて小言を言つた。自分は其時は左程にも思はなかつたが、二三日後に表で遊んで居ると、丁度通りかゝつた意地惡の豆腐屋の小僧が、お前は相撲場の板塀を越して這入つたな、わしはチヤンと見て居つたぞと言捨てゝ去つた。自分は水を浴せられたやうに驚いた。誰も知つては居るまいと思つたのに、あんな意地惡に見附かつてはどうなるか判らぬと、此時こそ身に染みて後悔した。當分は氣持が惡くて友達と遊んでも遊ぶ氣がしなかつた。其後悪戯をして父にひどく叱られた事もある。學校で罰を喰つた事もある。併し此時程自分で自分の非を悔いた事は無い。これは自分が小學校を卒業する前年の事であつた。

七夕、盆踊、ずつと飛んで餅搗など、後半年の行事には取り立てゝ記す程の事も無い。

波の音

其妻のピヤノ

彼女と其周圍

篠原溫亭

波の音

一

八疊と六疊の二間が竝んで廻り緣になつてゐる、御望みなら其の二間とも貸しても宜い。もう避暑の人がぽつ〳〵入り込んで來て望み手が多いから、成るべく早く極めるだけ極めて欲しい。其家は女主人で別に氣の置ける事もない。と云ふ返事が九十九里の△△村から、素介の許に屆いた。

素介は妻と子供一人を遣つて置くのだから八疊一間で澤山だと思つた。けれども竝びの六疊に見ず知らずの客が這入るやうなら、寧ろ此方で二間とも借り潰して、邪魔物を拂つて置くに越したことはない。兎も角も氣に適つたらしい家であるから、二間とも借りて宜い、八月一日には必ず行く—といふ事を周旋者の大東君の所まで言送つた。

借るべき家が女主人といふのに、素介はひどく惚込んだ。色々と其の家の事を想像して見る。

其の主人は良人に死に遲れた寡婦であらう。年は五十の上を大分越して居るに違ひない。事によつたら野暮な切下げにして、少しは身分のある家であらう。老婦人は男勝りのしつかりもので無くてはならぬ。とまで頭の裡に描いて來た時、素介はそれが郷里の我が母に肖てゐることを發見して、我ながら餘り勝手な想像であつたことに氣付きをかしくなつた。こんな馬鹿げたことはないと思ひ消して見てもやはり女主人で係累のないといふことだけは殘り、大きに安堵した。

愈々約束の日になつた。

妻の芳子は初めての旅行地だし、また交渉すべき事も殘つてゐるので、素介は附添つて行くことにして一緒に兩國から汽車に乘つた。

病氣上りの芳子は列車の窓から心地よささうに眺めてゐる。稻田に挾まつた蓮池が屢々現れる。「赤い花が白い花が」と其たびに千重坊に教へた。佳い匂が風に送られて車窓に流れ込む。素介は妻の身も此れでは氣遣ふ程もないと思つた。

汽車は津田沼に停車した。白い病服した兵士が車の前に彼方此方する。素介に氣遣はしく眺めてゐると向ふへ行つて了つた。それ安心と思つてゐると又現れた。しかも素介等が乘つてゐる列車に這入つて來た。病兵には小倉服の銅徽章打つた男が附添つてゐて、大分込合つた車内を見廻したが、芳子の傍に少し空地があるのを發見してつか〳〵と寄つて來た。二枚續きの白毛布を押し延べて病兵を腰掛けさせた。芳子は眉を顰めながら何とも云ひ得ないで窓際に身を退いた。一人詰めの腰掛は三分の二以上病兵に奪ひ去られて、病み上りの芳子は非常の壓迫を感じ出した。

素介は最前からむか腹で見てゐたが、其病兵は非常な衰弱に襲はれて、生きた人の色といふものがなく、病勢體中に漲つて猶進むべき容態と覺つた時、「肺だ！ 肺病患者だ！」と直覺した。同時に素介の身體は彈かれるやうに腰掛を離れた。

「其處は不可ない」

と叫んだ。其聲が不調子で發作的に響いたので、廻りの人は驚いて皆面を押し向けた。

小倉服はぢつと素介を瞶めてゐたが、「それ

では」と病兵を立たせて毛布を剝いだ。立退いたのは可いが、其代りに今素介が立つた後の空席に敷き込んだ。取殘された千重坊は驚いて逃げ出だし、父の袂に縋りついた。父子して追立てられた姿になつた。病兵はお蔭で二人詰めの腰掛を全部一人で占領し、前よりも一層樂々と身を靠せ懸けた。

小倉服は用事が濟んだと云ふ見えで立ち去らうとした。

「おい待て」と素介は呼び止めた。

小倉服は振り向いてけろりとしてゐる。

「人を逐立てゝ、一人で安閑と席を占領して、それで可いのか」

「でも外に明いた處が有りません」

「何だ」

「御覽の通り病人ですからね」

「馬鹿ッ、病人なら病人らしく、夫れだけの手當をするが可い。こんな輕くない病人を普通の人のやうに普通の席に置く法があるか」

「夫れでも驛で可いと云ひましたから」

「驛員を呼んで來い」

談判は愈々むづかしくなつて來た。廻りの人も眼を圓くしてゐたが、「此方に明いた處がありますよ、此處にお掛けなさい」と呼ぶ。四邊の空氣がどうやら病兵の方に同情しさうに聞えたから、素介は少からず氣まづく感じ出した。

「なに宜しいのです。此の男が餘り無作法だから……」

小倉服は自分の手落ちであつたことに氣づいて「どうも御迷惑を懸けて相濟みません」と初めて帽を取つた。

素介は此の挨拶を機會に鋒先を納めて、芳子の前に腰を卸した。千重坊を二人の眞中に挾んだので頗る窮屈になつて來た。併しそれよりももつと窮屈なのは、夫れ以來何どなく車内の人に顔見らるゝやうであるのであつた。

芳子は此の五月に肺尖加答兒に罹り、喀痰の試驗などされた騷ぎをした。其の病後を海岸に養はんとして、今其途中にあるので、素介は其時の心配を猶皆濟し殘して附き添うて行くのであつた。

二

素介は妻と子を連れて成東で窮屈な汽車を下りた。

△△村までは此から三里の道程である。小川の土手、稻田の畔、行商の路、ヒヨロ〱の板橋、其の大部分は轍と道幅が殆ど同じで、度々人力車は覆らうとした。親子三人は三色に、眼玉を上げ下げして辛つと△△村に著いた。先づ大東君を訪ふと、直ぐに女主人の家に案内して呉れた。

梶棒は葭簀を張つた小店の草葺家の前に卸された。野天の小便壺の横から直ぐに緣先に導かれて、緣から八疊の間に上つた。此れが素介の大なる望を屬した、妻子を託すべき家で、藤守といふ名前であることも此處に來て初めて分つた。

正しく八疊と六疊が並んで廻り緣になつてゐる。併し天井も柱も敷居も鴨居も疊まで眞黑である。素介と芳子は度膽を拔かれて顔を見合せたぎり、言葉は暫し出なかつた。千重坊はたゞキヨロ〱と見廻して居る。素介はそつと疊に手を遣つて押拭つて見た。眞黑に著くべく豫想した指先が意外に無難であつた。透して見ると疊は黑光りに輝いて居る。煤けては居るが氣丈に毎日拭き込んだものと見える。著物にも足袋にも著かぬ事が分つたから辛つと腰を卸した。

お神の挨拶に出た女主人は頭下げて[illegible]なかつた、品位の高い身分とも思へなかつた。お婆

こに結つて簡つぽを著て、二布前掛を廻した、肉附のよい、小さなたどの婆さんであつた。貸しても宜いと云つた六疊は、實は借られては迷惑であつたことが分つた。其の因縁つきの六疊を見ると、床でもなく棚でもない正面に、數下の名號様が懸つて、位牌が一つ蠟燭立と妍を競ひ、線香立が其前にお伴をしてゐる。その右手の煤けた障子の前には、蚊帳やら蒲團やら寢莫蓙やらが積み重なつて居る。實際此の家には此の六疊と前の八疊と店の三疊としかない。

お婆さんは新しい花莫蓙を八疊に敷いて呉れた。素介親子は其上に坐つて居心地がついて來た。

六疊の縁側に庇髪が居た。机を前にサフランの花を一輪差しにして何か讀んで居る。素介は東京から來た女學生と思つた。此の古ぼけた家に此の新流行の女學生を發見して、素介は其奇しき對照に驚いた。

女學生は机を離れて茶を運んだ。しとやかに會釋して又元の机に還つた。年は十八九と思はれる。海岸の此の村に來て日數が經つと見えて大分と潮風に燒けてゐるが、肉つきが締つて壯健らしく、素介は妻と見比べて頗る羨ましき念を起した。

「あのお方は」と芳子が聞いた。

「娘でござんす」と直ぐにお婆さんが答へた。

芳子も豫想外であつたが、素介は猶更豫想外であつた。東京の學校へ行つて居るかと聞くと、お婆さんは云ひ澁るやうな口調で、横濱に行つて居る、避暑でつい此間歸つたと答へた。

夫れでも素介は猶疑はなかつた。娘さんは頻りに何か讀んで居る。お婆さんは幾度も茶を注ぎ替へて干蛤の砂糖煮を素介親子に摘ませてから座を立つた。

午時過ぎの日足はまだ縁に上つて來ない。縁に沿うて折廻つた二十餘坪の庭にはカンナ、ゼラニユム、薔薇、蔓り種の朝貌などが植つて居る。庭の先には實つた稲田が押廻つて擴がつてゐる。さら〳〵と輕い風が裳を曳いて其上を渡る。親子三人は身輕く白地に著替へた。

「東京とは何百里と隔つてゐるやうに氣候が異ひますね」

「むう空氣の善いのが著しく感じられる」

さつきからつまらなさうに足を出したり引込ましたりして居た千重坊は、

「あれなあに、ゴーツ、ゴーツていふもの」と突然問うた。

素介は此の村の入口に來た時一度氣つき、此の家に著いて早々又氣ついたのを忘れて了つて居た。「潮だ、もう波の音だ」と答へた。芳子は今に連れて行つて見せると千重坊を賺して置いて、自分も實際今まで風の音だとばかり思つて居たと打笑つた。

田舍の日盛りは特に靜かである。

「賣つて下つたい」

と村の子が店先に這入つて來た。お婆さんは土間の煮焚場からちよこ〳〵と出て來て、葡萄の一房を吊し上げ、中程から摘み切つて子供に渡した。賣溜の竹筒に入る錢の音がチヤラリと鳴る。

素介は見るともなしに店の樣子を覗ふと、駄菓子の箱、水菓子の箱が三つ許り並んで、向うの棚に地酒の菰被りが一箇、其鄰に酢甕らしいのが又一箇並つて居る。店の三疊の梁には何かごてごてに這入つた大きな笊が吊してある。

お婆さんは煮焚の中にたび〳〵お華主を迎へた。中々忙しさうであるが、六疊の娘さんは机の前を離れなかつた。

三

晝食は一時半頃に濟んだ。小鯵の洗ひに小鯵

の煮つけ、小鰺の生干と煮過ぎた石のやうな玉子の汁、それに瓜の鹽壓しが添つて居た。玉子の汁には千重坊も不同意を唱へたが、小鰺盡しの料理は新鮮なだけに一同舌鼓を打つた。

素介親子は滿足して晝食を濟した。げんなりしてうつとり眠氣を催してゐると、お婆さんが生れつきの早口で、

「お磯や、海にお供して見んかい」

と思ひ出したやうに云つた。女學生好みの娘さんの名はお磯と云ふのであつた。

お磯は會釋して三人の前に出た。素介が同意して直ぐに立ち上つたので、お磯は裾を褰げて庭に飛び下りた。跣足になつたので膝から下が露はに餘程日に燒けてゐた。お磯は「お孃さん、おんぶしませう」と幅廣な背中を縁に押し向けた。千重坊は直ぐに負ぶさつた。

庭は土氣のない砂地である。素介は五六年前一度此の村に遊んで、村全[illegible]からである事を知つて居るから此も跣足で縁を下りた。芳子は流石に思ひきらず、低い庭下駄で後から尾いて出た。眞先に立つたお磯の踵が、さくり／＼と砂を蹈み、其度にあり／＼と際立つて白い足裏が踊る。海岸の人の特色として、踝の上が眞黒で足の裏が眞白である。

一文字に横に延びた村を十文字に突切つて行く、直ぐに紺碧の大洋が松並木の間から現れる。釘鏽の赤い船板の橋をガタピシと蹈み渡る。お磯さんは此の橋は本家で拵へたものだといつた。

砂地は太陽の直射する光線でいきれがいらいら立ち上つて居る。素介と芳子は足の趾を燒かれさうで指先と踵を引き立てゝ歩く。お磯は見返りもせず、小鬢に涼風を吹かせながら心地よささうに行く。思ひきつて長く取つた振りが風に飜る。砂原の眞中に旗を立てた三軒の憩み茶屋がある。お磯は中の小屋の女に一寸言葉を懸けた。そして素介等を顧みてもとは本家に使つて居た下女だつたと説明した。

此處から砂地は極めて緩い勾配で斜面をなし遂に渚になつてゐる。眞白な波が眼の前に碎けては、油のやうな女波がする／＼と上つて來る。水平線上に白帆が幾つも見える。お磯は其白帆は鰹船で海岸に來るまでには三時間以上もかゝると云つた。汐浴びが十四五人も出て波に轉がつてゐる。素介も思ひ出して白地を引き脱いだ。

遠淺なのを一町も出ると、波が頭の上を越して打つ。揉まれ／＼に晝飯腹を二十分も波と戰つてゐると大分草臥を感じ出した。汀の方を見ると、妻とお磯さんとが襦袢と腰巻で淺い處に坐つて居る。素介は波に身を任せ押され／＼て深い處から上つて來た。

二人の女は一間半位の間隔を持ち背を並べて波を浴びて居る。お磯の膝に乘つた千重坊が眼敏く見つけて「お父ちやん／＼」と呼んだ。素介は水を蹴つて近づいてお磯の前に坐ると、丁度膝を隱す程の水で、千重坊は手を出して「懷いて」と云ふ。お磯は膝を突つけて千重坊を渡した。渡したまゝ身を引かうともしないでまだ千重坊に手を懸けて居る。素介はお磯を男馴れた女だと思つた。

四

夕飯の鰺の刺身は晝の小鰺よりは一段と旨かつた。灯の少い片田舎の夜は靜かで月が水より涼しい。素介夫婦は縁にゐざり出た。遠い處を過ぐる暴風のやうに汐の音が村を越えて來る。黒い稻田を越して[illegible]屋から團扇太鼓の音が聞える。お磯は東京から來た病人で、もう藥に飲み飽き近來は毎日毎夜祈禱して居るのだと語つた。

背の高い青年が這入つて來た。髮を綺麗に分

けて居るか、着物は洗ひ晒しの浴衣を着て、細い兵兒帶に竹細工の煙草入を差して居る。店の三疊に上ると直ぐ長い蓋を返して水菓子の箱を漁つて梨を一つ摑み出した。

—それだから困る、善いものは皆食つてしまふよ」

といふのはまだ土間に働いて居るお婆さんの聲であつた。靑年はアハヽヽと笑つて居たが、食ひ了るとのそり〳〵六疊に這入つて捜しものを始めた。何やら訊ねたやうであるが、お磯さんは返事もしなかつた。靑年は又出て行つた。

お磯は此の靑年を本家の兄さんだと云つた。兄さんは東京の大學に這入つて居たのを去年本家のお母さんが呼び戻したものださうな。序にお磯はこんな事を話した。

お磯は今の靑年の直ぐの妹で、此の藤守家には三歳の時貰はれて來た。此處のお母さんはもと大叔母に當つて居る。一番上の兄さんは學問が嫌ひで又漁も好まない。代々の家業に背いて一人農事を營んで居る。で一人の叔父さんが漁師を監督し、今來た兄さんが漁元の帳簿を預り、後家のお母さんが會計の財布を握つて居る。大きな兄さんは態々學問に東京へ遣られたのを逃げ歸り、次の兄さんは出さないのを三度まで東京へ出奔したさうな。

お婆さんは漸つと勝手が片ついたと見えて店に上つて來た。洋燈を低めて押入から網を出してパチ〳〵きより出した。そして其の片手間に猶一錢二錢の商賣をして居る。もう六十の上を越してゐるが、一分間も休まうとはしなかつた。

大東君が此の村の豫備軍曹を連れて話しに來た。二人は暫く雜談して歸つたあとにお磯の兄さんが又友達を連れて來た。此の二人は鰹漁と鰯漁の話をした。それから明朝地曳にお供しませうといふことに段落がついて皆々蚊帳に這入つた。

兄さんの友達は其夜藤守に泊つた。始終ある事と見えて彼は別に挨拶もせず、兄さんよりも先に蚊帳の中にもぐり込んだ。お磯もお婆さんも六疊の一つ蚊帳に眠つた。素介は此の樣子では若者は此まで幾らも泊りに來たであらう。若い娘のある家は危險ではないかと思つた。

五

翌朝ふと眼を覺すと表通りを、

「ウォーイ、ウォーイ〳〵」

と呼んで通る聲が聞える。四邊が寂として波の音さへ聞える中を、再び一種力のある音調で響く。素介は生れて始めて接した思ひがあつた。同時に一種の旅情が綿々として湧いて來た。

此の呼び聲に六疊の蚊帳の中でも眼を覺したらしい。

「ありや何ですか」

と素介は聞いた。お磯の兄さんが、漁師を起して歩くので、地曳が始まるのだと答へた。

其朝親子三人がお磯とお磯の兄さんと其の友達に導かれて地曳を見て歸つて來ると、家内は悉皆掃除が濟んでちやんと御飯も出來てゐた。お磯はお婆さんに膳立をせよと云はれて面を膨らした。お婆さんはお客樣のやうに蒲團まで上げさせて不足があるかと頭から叱つた。それでもお磯はぐづ〳〵するのであつた。お婆さんは遂に自分でして了つた。

素介夫婦と千重坊は八疊で飯を食つた。お磯兄妹と友達とは店の三疊で飯を食つた。其の間にお婆さんは一人井戸端で洗濯を始めた。竿に懸つたのを見ると中にはお磯のらしい腰卷もあつた。お磯は兄さん同樣に膳を突き出して無駄話を始めた。お婆さんは後から御飯を濟した。跡片づけも一人でした。

六

素介はお磯に對する觀念を一層深くした。

お磯は小學校からすぐに女學校に遣られたもので、穢くるしい家庭の臭味に染みる間が無かつたのであらう。横濱に行つて居るのは多分親戚があつてフェリス女學校か何かに通つてゐるに違ひない。だから大分ハイカラに養はれてゐるのだ。それにしても母親が足も地につけぬやうにして働いてゐるのを餘所に見て、腰巻までも平氣で洗はせてゐるのは憎い。彼は今若々しい空想に充たされて、家庭など眼中にないと思はれる……と素介は近來めつきり世話女房じみて來た妻の芳子に飽き足らなかつた償ひをお磯に於て見出した。お磯の女らしからぬ所に却つて引つけられるやうに感じた。素介は今後屡々九十九里に遊ぶべく決心した。

其日の午後であつた。素介は芳子が止しませうと云ふので、千重坊をお磯に負ぶはせて海岸に行つた。お磯は素介の金縁眼鏡、金時計、銀飾りのステッキを喜んだ、又千重坊の元禄袖とレース附の前掛を喜んだ、お磯は直ちに海岸に行かずして村を一巡した。知つて居る家々には必ず言葉を懸けて通つた、言葉を懸ける時には必ず其眼を素介と相手とに等分に向けることを忘れなかつた。他所人は素介とお磯を兄妹か何かのやうに見た、そんな時にお磯の顔は殊に生氣を帶びて來た。

お磯は遂に素介を村外れの松原に連れ込んで、石竹の野生の花を摘んでは千重坊に持たせた。海岸に出て素介が汐を浴びて居る間、お磯は素介の金縁眼鏡金時計、のステッキを守つて、腰掛岩に千重坊を遊ばせた。我が妹を慈しむやうに慈しんだ。

其夜お磯は本家から呼ばれて行つた。お婆さんは珍しく素介夫婦に打解けた話をした。「喜三郎はお磯を貰つた頃から此家で寝泊りするやうになりました」とお磯の母さんの噂を始めた。

母親の口やかましいのも其の一原因であつたが、喜三郎を最も多く引つけたのは食物であつた。實家は網元片手の農家だから麦飯が常食である、此方は假にも商人であるから米の飯を炊いた、正直な子供は舌ざはりの好い方を選んだのである。お婆さんはうるさいと思ふこともあつたが、父を亡つた孤ではあるし、懐いて來る喜三郎を打ち棄しも出來ず、亡くなつた良人のいふがまゝ、一人養子をしたつもりで寝泊りさして置いたのだ。今では却つて夫れが力になり、實の子も同然である。

翌日素介は東京に歸つた。三日手を明けたので役所の用事が大分溜つて居た。忙しさにかまけて九十九里の事も全く忘れて居たのである。

三四日しけが續いて芳子から怨みの手紙が著いた。まさか東京はかり晴天でもあるまい、約束の罐詰を送つて貰ひたいと書いてあつた。素介はお詫びに詰合物の外に雑誌や册子類を送つた。

其後芳子は閑に任せて三日に明けず手紙を書いた、手紙には千重坊の事が多かつた。「此間のしけにお肴が何にもないと話して居ると、千重坊が小さい鯛を買つて來て、此を料理して下さいと笑はせました」「今日はおばさんの眞似をしてお肴を砂地に埋めてお花が咲くのを待つて居ります」「昔のお爺が來ると構はないで居るので、見いのか何なのかと質問しました」「おばさんのお團子を持つて行くのを見て兎はお年寄りかと困らせました」とやつたやうな調子であつた。

八月も末になつてから芳子から持薬が切れた、と云つて來た。素介の遊心が又動いた。

七

出かゝつた所に女人の來訪を受けて十時發の汽車に二分遲れた。面白くない待合に二時間をポカンとして待ち、十二時幾分の汽車に乘つた。今度は本街道の東金に廻つたから安々と△△村に著いた。それでも藤守の店先に梶を卸させた時は五時に近かつた。

人力車を下りながら覗くと、座敷の眞中に食臺を置いて、芳子と千重坊とが皿のものを突き合つて居る、もう夕飯を食つて居るのであつた。常の如く緣に廻ると千重坊が飛んで來て「お父ちやん お父ちやん〳〵」と力一杯に素介の首に抱き付いた。生れてから初めて、三十日近くを父に離れたので、餘程戀しかつたと見える。抱き上げると其顏が遺憾なく燒けて眼ばかりきよろきよろする。固より手も足も眞黑である。細君の芳子も同樣日に燒けて丈夫さうになつて居た。素介は直ぐに同じ食臺に著いて旨く夕飯を食つた。

食事を濟して居ると本家の內儀さんが手土產の禮に來た。お磯の實の母親で此處のお婆さんより十歲も年下である、がら〳〵した物云ひで心安い人らしい。內儀さんは汐湯が立つたからはひりにいらつしやいと案內して歸つた。

お磯に導かれて行くと、濱とは反對の方で、生垣の中程に勅任官でも住みさうな大きな門が見えた。お磯は其門に這入つた。素介は大した構へだと肝を潰して後について這入ると、中は一面の廣場である。農家の收納場と云つた風で、右手に大きな土藏が立ち、正面に此も大きな物置小屋がある。物置には漁具が一杯這入つて居た。左手を見るとずつと退つて母家がある。母家は十疊と八疊二間が竝んで出來て、此方向きに廣緣が付いて居る。此の二間の外は廣い土間になつて緣臺が幾つも据つて居る。木口の揃つた丈夫向きの建方で、眞黑な大きな柱がぴか〳〵光つて居る。漁元らしい家だと素介は合點した。

風呂場はと見廻すと、例の廣場の手前十疊の座敷の眞ン前に、据風呂が仰のき氣味に据つて居る。流しもなければ屋根もない、ぼく〳〵した砂の上にぢかに据つて、暮れ行く空の中に桃色の火が釜から立昇つて居る。此の風呂は入用の時だけ舁ぎ出され、平生は小屋の隅に投り込まれてゐるであらう。喜三郎が板切れを運んで足場を作る。お磯が袖をまくつて湯加減を見た。

這入れ、と勸められて素介は少からず躊躇した。列國環視と云つた風に、少しの隱れ場もない、明けッ放しなのに恐れを懷いたのであつた。けれども九十九里の据風呂は皆かうであらう、女でも男でもかうして這入るのが此邊の定めであらうと覺つた時、素介は遂に著物をはふり脫いだ。

足臺に乘つてぼしや〳〵やると、肩から流れた湯は全身を傳うて足臺に流れ砂の上に落ちる、落ちた湯は一溜りもせず其場に吸ひ込まれて無くなつて了ふ。又一度ぼしや〳〵やる、又全身を傳うて足臺に流れ砂に落ちて吸ひ込まれて了つた。此の樣子では此の風呂桶全體の湯を覆しても直ぐに吸ひ込まれて了ふであらうと思つた。素介はこんな不思議な湯に這入つて氣持よく漬つた。

次は千重坊の番である。千重坊は度々、經驗したもののやうに、お磯さんと這入ると云つた。お磯さんは直ぐに裸體になつて、千重坊を抱へながらひらりと這入つて了つた。そして其處に少しの不自然も感じられなかつた。素介は先に自分が躊躇したのを氣恥かしく思つた。

喜三郎が茶を酌んで出したので、素介は緣に

腰懸けながら飲んだ。喜三郎は又鰹漁の話を持ち出した。素介は据風呂の事はもう忘れて了つた。

八

お磯はまだ湯に行つたまゝ歸らない、お婆さんも留守を頼んで今本家に行つた。千重坊を寢かしつけた芳子は蚊帳をまくつてにじり出た。

「お磯さんには子供があるんですつて」

と芳子は自分が聞いた時の驚きを又良人から得ようとして突然話し出した。素介はお磯の事で驚くのが、何かなしに良人たる威嚴を傷ふやうに[illegible]間に感じて、

「さうか」と極めて手短に答へた。

「横濱に行つてるのも其の御亭主が横濱の市役所とかに勤めて居るからなんで、子供は里に出してあるさうです」

「うんさうか」

「それから、其の御亭主はやはり此の村の人で、出來合ひなんださうですよ」

「どうせそんなものだらう」と素介は噛んだものを吐き出すやうに云つた。

あんなに若いものが泊りに來る位だから無理はない。お磯さんの振りを見ると十八九としか見えないが、實際は今年二十二になるさうだ……と芳子は語つた。素介も此れには反對の見解を持たなかつた。

芳子は又お磯を變な女だと云つた。此間も雜誌が届くと自分にでも來たもののやうに、一緒に封を切つて讀んだ。お磯は自らヒステリーだと吹聽して居る。或日の如き腹が痛いと蒲團を被つて寢込んだから、お婆さんが心配して粥だの卵だのと軟かさうなものを枕許に持つて行つたけれども見向きもしなかつた。それからと思ふと千重坊にとお婆さんが唐黍をむき始めると、ノコノコ起き出して來て、自分から燒いて二本程食つて了つた。

お婆さんには常に突慳貪に當り散らす、どうかすると糞婆と惡體をつく。お婆さんは又すべたいた娘と罵り返す。けれどもお婆さんはぶんぶんしながら、夫れが時分時でもあると膳立をして喚ぶばかりにして出て行く。そんな時には三時間も四時間も歸つて來ないので、お磯は[illegible]して御膳を食べて膳を突出して置く。お婆さんは腹が空えた時分に歸つて來て、お磯が荒した膳を默つて片づける。もう先の氣色は兎の毛程も見えぬ……と芳子は語つた。

其晩お磯は珍しく本家に泊つた。お婆さんはつくづく慨き話をした。

お婆さんの意見によると、自分の家には官員様も何も入らない。此の細しい商ひを續けて行きさへすれば夫れで澤山である。[illegible]養子を横濱などに出したばかりで、普通文官試驗を受くるなどと強ひて無益の金を費ふ。宇都宮だの仙臺だのと、もう三度も遠方まで高い旅費を費つて行つたが何時も落第ばかりである。其の間々には病氣したの何だのと、金の無心を云つて來る。

此四月には花見に來い來いと餘りうるさく云ふから、生れて初めて旅行といふものをして見た。馴れない汽車に乘つて、醉つて死ぬ程の苦しみをした。漸く横濱に着いて見ると夫婦で二階借りをして住つて居る。階子の上で飯事のやうに、七輪や火鉢をパタパタ扇いで御飯やお菜を拵へる。五十幾年といふもの藁でも粗朶でも大掴みにドンドン燃しつけたのに、見て居てさへ生命が縮まる。漁師村に生れながら濱にさへ一年に一度か二度出るか出ないで暮して居るのに、他[illegible]けて[illegible]したからの罰だと、五日も居ないで逃げ歸つた。今に彼等が代になつたら、彼方此方と尻を抱へて、一生うろつくで

あらう。
　夫れでもまだ試驗が受けたければ好きな程受けさせて遣る、金が足らなければ出來るだけ送つて遣る、昔お磯が可愛いからばかりだ。なあにかうして稼いで居れば、どうやらかうやら融通もついて來る。けれども自分が若し眼を閉つたら、本家には大勢の子もあるし中々此方までは手の廻る事ではない。夫れを思ふと彼等が行く先が考へられて安々とは眠られない。網きよりなどして幾らにもならないが、働いて居る間は氣が紛れて餘程樂である。

九

九月末に芳子からの手紙に、
――もう身體は悉皆癒りました、避暑の客は一人も殘つて居ません。此上逗留すれば著物を取替へねばならぬ。海岸にもう飽き〳〵したから何卒早々歸らして下さい――と書いてあつた。素介は一度△△村を訪れた。前の時眞黑であつた千重坊の面は大きに白くなつて居た。此頃は餘程快い天氣でなければ海岸にも出ないさうだ。そして近所の百姓の子に朋輩がたんと出來て、父にも母にも分らぬ土地の言葉を遣つて居る。彼は東京に歸ると聞いて飛び起つやうに喜んだ。
　お磯さんの姿が見えぬから聞いて見ると、もう半月も前に横濱に歸つたさうだ。芳子は其の歸る時が變つて居つたと語つた。
　お磯は歸る時に態々横濱から一番善い晴著を取寄せた、そして出立の日に越後上布に博多の夏帶を締め空氣草履で人力車に乘つた。本家の實母さんは氣が違ひはしないかと笑つて、人力車はどうしても贅澤だ、平生のやうに馬車にせよと止めたのを、藤守のお母さんが隱して人力車に乘せて遣つた。それからどうも分らないのは、素介等が難澁した成東道を態々擇んだ事であつた。お磯は出發の際、來年は是非お宅を伺ひますとくれ〳〵も芳子に云つたさうだ。
　素介は此の話を聞いて何ものかを教へられたやうな感じがした。
　素介は藤守を立ち出づる時非常に淋しさを感じた。
　お婆さんは子に別れる時のやうに素介親子を見送つて泣いた。

（明治四三、四）

其妻のピヤノ

その時丁度私は蟇口を修繕してゐた。蟇口はボックス製の安價なのだけれども、まだ少しも變色してゐなかつた。艶々した黑塗の革が、まだ剝げない銀鍍金の口金から、ぱちりと拔け出して可惜らものであつた。私は其の口革を元のやうに口金に嵌め込まうとするのであつた。紙撚を縁に當てゝは口金に挾み込んで鐵槌で叩いて見た。けれどもそれは無益であつた。幾たび繰り返しても同じやうに拔け出して、中々留る樣子がなかつた。私は釘一つ打つてない此の細工が、今の社會の輕薄さを代表してゐるとさへ思つたりして、いら／＼して來た。叩けば叩く程口金には見つともない疵がついて弓なりに曲るのみであつた。留め金の處が食ひ違つて、口が合はぬやうにさへなつて來た。午飯後の仕事場には卓の上に切屑が散かつてゐるのみである。事務員も園丁も思ひ／＼に園内に散らばつて、煙草を喫つたり居眠りをしたりしてゐた。此處には誰も歸つてゐないから、私は其の遊んでゐる切臺を利用して、私の事をやつてゐたのであるが、旨く行かないからもう抛り出さうかと思つてゐた所であつた。

「田中でございます」

と云ふ低いがはつきりした聲が、硝子戸の外面で聞えた。

私は今朝から仕事が手に付かなかつた。今か今かと心待ちに待つてゐた所であるから、其の聲を聞くなり蟇口と鐵槌を持つたまゝ飛出した。

其處には田中の細君が立つてゐた。羽目に寄り添つて、色のくつきりと白い、すらりとした女で、足駄を穿いて傘を持つてゐるが、もうすつかり天氣と極つて、それ等が頗る不調和に見えた。はにかんでゐるやうでさへあつた。

細君は此の前田中と一緒に來た時でさへ「停車場から三十分かゝつた。まるでお練りだもの」と田中が云つた位であつた。其の細君が足駄穿で、しかも一人で來たのであるから、私は不審を起さずにはゐられなかつた。

「お一人ですか」

と私は挨拶に先立つてさう云つた。「後から參ります」と細君は言葉少なに答へた。一人で先に人力車で來たのであつたことは後で察せられたが、私は下男下女等が先に來て、すつかり掃除が濟んだ處で、田中夫婦がゆる／＼やつて來るものとのみ豫想してゐたので、私の判斷力が其時一時まごついたのであつた。

私は私の宅で一憩みするやうに細君に慫めた。けれども彼女は直ぐに自分等が棲むべく定められた家の方へと足を向けた。もう豫て廻つて戸に手を懸けてゐる。私は彼女がやはり普通人の妻であつたことを此處に見出した。

次の瞬間に私は彼女の家を訪れた時のことを思ひ浮べた。

それは饗宴の或日であつた。田中に伴はれて乘つた俥は田中家用度のものであつた。梶棒の下された玄關は明かつた。下男が二人も出て來て、私の靴を脫がせて居ると、セッター種の大犬が、其手を潛つて私の股に首を擦りつけたりした。田中の弟とでも思つたのであらう。北堂を初め五六人の女達がずらり竝んで迎へてゐた。奥深い家で何處かにくわん／＼と響く物音がしてゐた。深夜のおとづれであつたけれども、そこには初夜の賑しさがたゞようてゐて、

物騒がしさは何處にも見出せなかつた。細君は私、其の後で東京から歸つたらしく、見送りの男などが付いて來て晩くまで酒を貰つてゐた。

翌朝早く起きて散歩に木立の門を出ると、青田を廻らした一構へで、門前には三町も前通りが出來て並木が植つてゐた。離れて之を見るとこんもり茂つて、浮城の如きものであつた。其處は東京を離れた一鄕である。田中家は昔のお代官の役で、殿樣のやうに住んでゐるのが其の一族であつた。

斯うした家に住み馴れた當主の田中夫婦は、今三間しかない長屋同樣の家に番頭にも劣つて住はうとしてゐるのである。そして細君は今勝手許を明けて入らうとして居る——丁度安月給の腰辨の細君が家移りをする時のやうに——私は園丁と事務員とを呼んで戸を明けさせなどした。

軈て年增のきかぬ氣らしい女が若い下女を伴つて來た。彼等は呆れたやうな顏つきで外面から此の小家を見廻した。彼等も亦私と同じやうに、田中の本家と此の假住ひの差違を思ひ比べたのであつた。軈て彼等は手拭を被つて、采配を持つて、甲斐々々しく働き出した。年增の口からは舌打さへ聞かれた。細君は邪魔になるやうに、始終彼方に逃げたり此方に逃げたりしてゐた。

掃除が一渡り濟んだ頃、田中が提鞄を打振りながらやつて來た。用を達して思はず時間を費したので、女達が先になつてまごついたことが判つた。田中は直ぐに上著を脫いで水を汲んだりし始めた。下女達は眼を圓くして見た。

田中は小旗を作つて「田中の荷物止まれ」と記した。そして崖下の道に突出して立てた。歩いて來る馬力を此處で止めようとするのである。思ひつきではあるが、やり方が如何にも大業な所にお代官式があると思はれた。路を通る人々が皆不審がつて讀んで行つた。

荷物は非常に遲れた。四時に著くべきものが六時になつても見えなかつた。田中は氣を揉んで出たり入つたりして居た。

勝手道具はごく輕便に土地で調へることに極つてゐたので、年增は細君を相手に入用な品を選ばうとした。けれども細君には其の知識が無かつた。田中に計つたけれども、知識の無いのはやはり細君同樣であつた。彼女は一切を呑込んで一人で取りしきることにして、若い下女を連れて買出しに出て行つた、もう薄暗くなつた。

荷物はまだ來ない。田中は細君を連れて荷物を迎へに行つた。けれども無益に歸つて來た、二人が門を這入らうとする此坂下から聞きなれぬ男の聲がした。「女だ」と田中は直ぐに叫んだ。荷物を曳いて來る下男の一人の名であつた。荷物は教へられた路に故障があつて、最も遠い距離を取つて來たのであつた。

足を止められて居た園丁や事務員等が皆坂下に駈下りた。馬力の荷は蟻が物を引くやうに一々舁がれて上つた。手車の荷は車ごと總がかりで坂の上に押上られた。緣先に橫つけにして、周圍のものは取卸されたけれども、中央の大荷物は容易に手がつけられなかつた。園丁の一人が何かと聞くと、「ピヤノでございます」と下男の友によつて答へられた。そして六十貫もあると付加へられた。

此のピヤノに就ては、前以て田中から注意されてゐた。そして間內の根太も其ため特別に手を入れられた程であるから、簞笥などのやうに容易くは動かないのも無理はなかつた。車の輪を拔いて一旦地べたに下された。緣には蒲團が敷かれた。そして六人の手によつて舁ぎ上げられ、八人の手によつて定めの席に直つた。細君は安心したやうにホッとして見廻した。

田中が郷里を離れて此の〇村に假寓して、園藝に身を委ぬるに就ては多くの反對があつた。北堂は最も其の强きもので、親類知人にも可なり誤解された。で事務の多い大家を出て、一週間に一度の歸宅で事足りるまでに漕ぎつけるには相應の苦心もあつた。良人を了解しながらも淋しい此の村に來るには、細君にはピヤノは離し難いものであつた。田中は母の誤解を解くためには、不自由を怺へて、欲しき家具の十分の一も持つて來なかつた。だからピヤノを持出すにはそれだけ苦心もあつた譯である。そして今其ピヤノが安全に室内に据つたのを見た時、危險な場所を無難に通り了せた一安堵と滿足とが田中の顏に讀まれた●

馬力も手車も皆下男によつて引かれて來た。二十餘里の路を中に一泊して安全に著したのであつた。下男の一人は翌日馬力に手車を乘せて引いて歸つた。一人の下男は當分止まることになつた。

一人の下男は大掃除を始めた。疊を上げてハタバタと叩いた。床下に潛つて隈なく掃き出した。柱も戸も緣も水洗にして了つた。家は見違へる程綺麗になつた。三越から馬車が著いて、椅子卓子緞通などが取卸された。村内の御用聞がぞろ／＼と押かけた。夫れ／＼に貨物を持込んだ。細君は座敷が片づき始めると、もうピヤノを彈き始めた。此までなれた此家には其等が皆不相應に見えた。來つけの御用聞までが變な顏をして行く。花を見に來る人々が捻ぢ返つて見るのであつた。

年增と下女とは三日程して歸つて行つた。彼等は東京に在る細君の實家から臨時に寄越された女中頭と女中とで有つて、一通り家内が順序立つたから戻つて行つた。其後は襯衣に縞の股引した下男が二人で働いてゐた。お味噌も搨れば糠味噌も漬ける、まるで山寺の生活で有つた。

下男等は大工もした。鉋を懸けたり鋸引したりして夜晩くまでかち／＼叩きつけて居た。棚を吊つたり物の臺を拵へたりするのであつた。其の間に田中は旦那らしく彼等に指圖をしてゐた。一寸仕事場に來るにも折目の附いたセルの單衣で、下駄も柾の通つたのを大家の旦那らしく足に突かけて來た。下男等は田中には「旦那さん」と云つて、私等には一々名字を呼んで居た。

一週間は家事に取られて仕事は出來まいと云つてゐた田中は、六日目に園内に下りて來た。用事が思つたより速く濟んだ故もあらうけれども、手を束ねて狹い家内に旦那で坐つて居ることが彼には苦痛であつたらしい。

丁度畑に出て、ダリヤの插木苗を植ゑて居た私の傍に來て、私の指圖を受けた。田中は私がするよりも丁寧に地を搔き混ぜては按排よく苗を植込んだ。彼の心には少しの動搖も見出せなかつた。寧ろ願ひが叶つた心地よさが其の手先に表れてゐた。其翌日下女が來たので下男等は八日目に此處を立つて歸つて行つた。田中夫婦の心は次第に落ついて行つた。

田中は愈〻跣足足袋の人となつた。私共が馴れて居るやうに、古ズボンに古襯衣を著出した。私は彼が愈〻園藝に耽溺んで來たのを喜ぶ一方に、ピヤノを彈いて不斷にお召を著てゐる細君の思はくを疑はずにはゐられなかつた。

田中は小鉢に砂を盛つてダリヤの芽插しをするに餘念がなかつた。丁寧に水を灌いで、一々木框の中に安置した。仕事を仕了ると箒を持つて來て散らばつた物を掃いたりした。傍目にもそれが不似合に見えたので、園丁の一人は私共が片づけます」と云つたけれども田中は心を

動かさなかつた。私にはさうしたことがよしんば田中には初めてさることにしても、さうした性質が田中をさせて行くので、彼には虚僞がなかつたのであるやうに思はれた。彼は日々園藝に親しんで行つた。細君のピヤノは日々繁くなつた。

半月も經つた頃であつた。私の知つてゐる同村に住む正子爵家から私に電話がかゝつて來た。

「つかんことを伺ひますが。田中さんが養生に此方に來ていらつしやると云ふお話ですが、貴方御存じではありますまいか」と云ふ突然な質問であつた。間もなく田中の叔父なる人が子爵家の下男に案内されて訪ねて來た。田中はまだ叔父にさへ其住所を明かさず、園藝に從ふことを世間には身體の養生と吹聽してゐたのであつた。叔父さんはレースの陰で、扇子を動かしながら、二時間も話し込んで歸つて行つた。田中は其日私に斯うしたことを云つた。

叔父さんが來たのは私を本家に歸さうとする母の依頼が大部分の役目であつた。園藝を研究するにも斯うした所まで離れて來なくてはならぬこともあるまい。自宅に居て技手を雇つても出來よう。それに雇人のやうになつて働いてゐるのが第一外聞が悪い。また園藝も可しとした所でお前は今後如何するつもりであるか。亡父が貴族院議員であつたとすればお前も其位の事はする考へが無くては困る。丁度今貴族院議員になつて縣會議員を止めた二叔父さんの跡が空位になつてゐるから、お前が其の後に据るには好都合の時である。無理にも歸つて貰ひたいと。で私はかう云つて叔父を歸した。私には政治運動をする興味がありません。其の才能もありません。ですから其方は斷じて辭退します。まあ思つて下さい。默つてゐても年功でなれる貴族院議員なら、なつても甲斐が無いではありませんか。それよりか私には園藝と云ふ立派な天職がありますから、まあ行ける處まで此の路を歩いて見ませう、と。すると叔父は舌打して、こんな猿のやうな生活をしても苦とも思はぬかと云つて歸つた。

私は田中の話を意義あるものに聞いた。

田中には嗣子が無い。醫學上田中の細君は子の無きものと極つて居る。だから田中は行末は弟に家督を讓つて隱居する覺悟でゐた。家族制度に永年縛された田中家では、嗣子の無いのを大なる缺陷とした。だから之を補ふ爲には七去三從をも厭はないと云ふのが其家法らしい。けれども明治の教育を受け、特に英語の教へを信じた田中には、こんな理由で離婚をつけることを敢てし得なかつた。彼は此の階級から脱する途を園藝に於て見出さうとしてゐる。自分は家産と家名を守るまでの理事者となつて、後繼者の生長するのを待ちたい。それが園藝に身を委ねることに於てのみ閑適に月日を運び得るものと思ひ極めたのであつた。私は田中の決心を常に悲壯としてゐた。そして今日の叔父との會見を以て田中の勝利として、田中を祝福せずには居られなかつた。

田中は園丁を呼ぶにも一々さん付けにした。「さうして下さい」「それではまづかありませんか」と云つた風に、尖らないやうな丁寧な言葉を選んでゐた。此が下男や小作人に對する時と大なる差違で、私にはいぢらしいやうにも思はれた。

彼は事務員や園丁に伍して、彼等と同等な所まで位置を低めて行かうとした。彼はダリヤの栽培に於ては一隻眼を持つてゐる。毎年開かるる品評會には常に一等賞を取つた。最優等の銀カップさへ幾つも持つてゐる。そして此の花

園でも其の方式に從つてダリヤを仕立てゝ見るべく決心した。私はそれに恰當すべき插木苗を擇んで與へた。

彼は田舍の自家から肥料の幾分を取寄せて綿粕、豆粕、油粕、米糠、木灰、過燐酸石灰、智利硝石などが其中にあつた。此等を適度に調合して腐葉土に混じて基礎肥を作るのであるが、腐葉土の篩ひ分をするにも努めて人手を借らぬやうにした。山積みに三石の土を篩ふに大汗をかいた。それから此の調合肥料を混和するには上手な百姓の手を要した。此も園丁の手を借らずにやつてのけた。自然使はねばならぬ鍬取りもへまではならなかつた。まだ日の淺い下女は不思議な眼を見張つて旦那樣の手捌足振を見た。それから此の混合肥料が熟するまでには、彼は幾度か穢くるしい臭氣を發する肥料の中に手をつき入れて見た。鷄卵を入れて半熟にたつた日に、又鍬を使つて切り反した。蒸し立ての飯か何かのやうに、熱い蒸氣が上る中に、彼は足踏張つて白いズボンを眞黒に汚しながら草臥れる色も見せなかつた。「もう百度から上になつてゐる」と呟いた。又鍬を取つて綺麗に山形に積み上げて滿足さうに見やつた。私は園藝學校でする事を思へば何でもないことだけれども、大家の旦那となつてからも、下男小作人を勵ます爲に自ら鍬を取つた彼を思はずにゐられなかつた。

ダリヤの植込まるべき床は荒作りの畝だけを園丁に任せて床穴は自ら掘つた。一體此の花園では根か目的で花は一通りで濟むものであるから床作りも造作はなかつた。けれども田中の床は品評花を咲かするのが目的であるから、例の肥料も大仕懸なれば穴掘も大仕懸であつた。殆ど二尺立方の穴が明けらるゝのであるが、田中は其の三十六穴を盡く人手を借らなかつた。それから混合熟肥を盛つてダリヤの苗を植込んだ。植了つて添竹を立て了るまでには可なりの手數と勞力が費えた。田中は此の手數と勞力とを一人でやつて除けた。私は私にも出來ぬ藝當であると思つた。私は又數多い肥料を作るにも豫算がなくては科學的の仕事ではない、一穴に費す肥料の金高は幾何に當るかと問って見た。彼は表を造つてゐたが、間もなく一穴の基礎費が十三錢五厘に當ると明かに答へた。田中は漫然事を行ふ人でもなかつた。

田中は世の多くの若旦那かするやうに輕躁をしなかつた。私が顏を洗つて園内を見廻る頃には大抵彼も出て來るのが常であつた。私が夜更しでもして、少し遅れると、背の高い彼の體が園内に伸びたり曲つたりして十種の世話をしてゐた。朝水をダリヤと菊の插木苗にするのは寧ろ彼の役目であつた。夕方の鉢を揃ひ朝方に簾を繕うてやるのは又忘れない彼の仕事であつた。或晩園丁が懸け忘れて歸つた簀取りの撫子の覆ひを、夜更の俄雨に彼一人でやつたことさへあつた。此は私にとへ一寸出來惡い仕事であつたのを、彼は何とも云はずに一人でやつて除けたのであつた。給料を貰ふではなし、園内の建物に住んで家賃さへ拂つてゐる態。しては、只それが花に趣味を持つてゐるのみでは出來難い事である。

或る日彼の末弟が、鶴見の射的大會の歸りにおとづれて來た。末弟は多くの賞品中から玩具の花火を置いて行つた。其夕暮に花火を揚げるのだと云つて子供を呼んだ。彼は風向きなど見計つてダリヤ畑の一隅に打揚げた。ドンと可なり大きな響して揚つた丸からは國旗と兵卒が出た。「そら出た、落ちるんだ」と云つて子供と一緒に彼は走つた。風が俄に強かつたので兵卒は園内を飛出して隣家の屋根に落ちた。一散に走つた彼は遂に之を捕へて、遅れて來た私の末子に渡した。此を繰返すか猶二度程あつ

た。斯うして私の子供は「小父さん」「小父さん」と云つて彼に懐いた。子のない彼は子供が好きであつた。三十を越したばかりの彼も子のない淋しさがあるらしい。斯うして田中夫婦の夕刻の散歩には大抵私の子供が二人三人づつ從つた。

下女がゐなくなつた。來てから二十日經つかたゝぬのに、一寸實家に用達しに行くと云つて出たなりもう三日も歸つてこない。田中は色々と想像して見た。

下女は亭主の不品行を見限つて出戻りした二十六七の女であつた。旦那が鍬を使つたり肥料をこなしたりするのを不審さうに見てゐて、或日細君にこんなことを尋ねた。「旦那の田舍の御宅は何樣な御暮しでせう」「傭人も幾人位御使ひになりますか」と云つたやうなことであつた。細君は寧ろ之を喜劇的に見て本當の答をしなかつた。下女が奉公に出る時の望みと云ふものがあつた。第一金の有る家、第二に家族の少い家、第三來客の少い家、此の三條件を具備した家に奉公したいと云ふのであつた。田中の此の假寓は第二第三の條件には合格した。第一の條件に至つては彼女の眼には甚だ薄弱に見えた、と田中は笑つた。そして「もう來ないのだ」と判斷した。私の解釋は自ら異つてゐた。仇し婦に心を寄せた亭主を憤つた若き女は、琴瑟相和した此の田中家に來て衝動を感じた。そして今一度辛抱して見ようと云ふ氣になつたのだ、と云ふのであつた。そして同じく「もう歸るまい」と私も答へた。

そんなことは如何でも可いにしても、直ぐに困つたのは田中夫婦であつた。機械を使つて西洋料理を作り得る細君は釜の下を焚くことを知らなかつた。二時間經つても焚えつかないので、遂に田中自身が學生の時代に覺えた經驗を利用して焚きつけた。それから又細君は味噌汁を好まなかつた。固より味噌を摺ることが不可能であつた。味噌汁の好きな田中には一朝もそれなくては過ごせない矛盾が此處に發生した。田中は自身擂鉢を前にすることにした。

味噌汁を作り米を炊くまでに墮落した田中には、糠味噌に手をさし込むことも大した差ではなくなつた。田中は茄子を漬けた。富豪の家に臺所を見ることなしで育つた細君は、又井戸の喞筒を上下する力を持たなかつた。畑中に働いてゐる田中は度々呼ばれてガチャン〳〵と喞筒の水を汲んだ。皿小鉢を洗ふにも一つ洗つては水を懸け懸けして、細君は一斗桶の水を使ふには瞬く間であつた。水汲む役に廻つた田中は默つては居られなかつた。水の節用方を考へた。そして一桶に水を盛り一切の皿小鉢を一旦洗つて、最後に今一度置き水を潜らすることを發見した。此の方法を細君に傳へて水の大節約が出來るやうになつた。

田中は米を磨ぐことは覺えたけれども、人に見付けらるゝのが何となく興味を殺がれた。牛乳屋が限つて其時にやつて來るから、何でもうんと早起して日の出ない前にやつて了ふに限ると云つてゐた。

田中が臺所で飯を炊き味噌汁を作つて居る間に、細君が掃除をする役割になつた。蚊帳と蒲團の上げ方はやはり力業の田中の手を借りるのであるが、采配と箒とは如何しても細君自身が持たねばならぬ。三間に采配をかけて掃き出して了ふには可なりの時を要した。之を仕了せると細君はもうへと〳〵になつて了ふ。餘所から見ると手拭の被り方が第一に素人臭い。最初はたゞ一巾に左から右へと懸けてゐた。それでは直ぐに落ちて了ふから、今度は前から懸けて頭の上に結ぶ方法を取つた。此で落ちぬだけの

ことは出來たけれども、强く締めると水泳の坊主被りになつて了ふ。そして飯も餘り好まない細君は自ら燒いた麵麭と牛乳とで多くは朝を過した。

綺麗ずきの田中は又雜巾を手にした。朝飯後には必ず床から柱、鴨居から緣先まで拭いて了つた。そして襦袢一枚を汗みどろにして了ふのは每日のことであつた。此が了るといそ〳〵として田中は花園に下りて來る。細君はピヤノにいそしむのである。

田中は火曜日に一度は本家に歸つた。此は一週間の仕事を集めて置いて一度にやつて了ふ譯である。本家には郡部上りの大番頭が居て、中番頭小僧を使つてそれ〳〵の日常の事務をして居る。火曜日に其の一週間の報告を受けて、之に批準を與へるのが田中の役目の一つである。又小作人等の希望や訴訟で番頭で判斷しかねるものがある。此の裁斷を與へるのも其一つである。だから一方から見ると此日は裁決の日ともなる。で土地では田中の事を火曜日旦那と云つてゐる。

田中は家内に於て事務を見て了ふと、屋敷内を一巡してそれから小作地の巡回をするのが常である。屋敷内の下男下女等は初めの内田中の氣分を穿き違へて花園の手入にのみ努めた。「旦那はもう農業の方は止すんだ。花物の方きりやるつもりだから東京に修業に出たのだ」と云つた風で、ダリヤや睡蓮、スイートピーの畑が綺麗なのに反して、野菜ものの畑が犬に蹈み荒されたり水田に草が生えたりしてゐた。田中は一々此を指摘しては其不心得を諭した。又小作人の畑、水田の小徑や畔などに草でも生えてゐると、之に其怠慢を詰つた。「斯う道路を荒してゐるやうでは到底肝腎な畑や田の中にも十分の力が入らない。其上草などは百姓第一の肥料の原料である、一方から云ふと金を捨てるやうなものだ。主人が居なくなつたからと云つて草などを生かすのは人見せにする仕事だ。こんな事はお前達は疾うに知つてゐる筈ぢやないか」

又可笑しい話もある。田中の引越の時東京に荷物を運搬した中の友と云ふ下男が歸つてから、園藝の通を振廻して困る。丁度夏期講習會を了つて歸縣した地方の技師共のやうに、同僚に向つて恐ろしく氣燄を吐くのであつた。最初田中が歸つてダリヤ畑に這入つて見ると、下からの芽が悉皆摘んで上二節位に枝が出してある。何樣したことかと詰ると「此は友さんがさうさせたんです。東京ぢや皆斯うだと云つてゐました」と田中が從來片暇として品評會花を作らせてゐた老下男が答へた。「冗談ぢやない、此ぢや木が高くなつて箒になつて了ふ」と叱つた。何でも初上りの友さんは違つた事をしないと東京下りと思はれぬと思つたらしい。「眼も放せない」と田中は云つて笑つた。

田中の留守中の細君は不思議なものである。朝起きるとピヤノを彈く。午前にも彈く、午後にも彈く、夜になつても彈く。此では何樣して食事を拵へ食事をするかと思はれた。そしてちつとも家の外に姿を見せぬ。事務員どもが不審がつて垣根越しに覗くと、きちんと帶を締めた姿が壁に面して見える。ピヤノ臺にへばり付いてゐるのである。が、私の子供などが垣傍に行くと極つて呼び込む。そして何くれとなく話をして片時も長く引張つて置かうとするのである。私の二番目の娘は柄が大きくてはにかまない女であつた。引越しの初めから能く行つては手傳つたりした。細君には其のかゝづらはぬ所が氣に入つてゐた。細君は之を手馴づけて留守の夜を泊らせた。夜分どたばたと定めて荒

れ廻つたことであらうけれども、細君はちつとも悔いる色が見えなかつた。留守中は此の腕白娘が細君の唯一の話相手であつた。細君は留守中にも夕方になると能く隣近を散歩した。其時は極つて私の小さい子供を連れて行つた。近所に西洋人夫婦が住んでゐる。若い夫婦で、私の子供を途上に見ると冗談をいつたりした。彼等は學校から歸ると唐突門外で、只今あと叫ぶのが常である。二人連立つて歸る時などは連節で謠ふやうに叫ぶから一寸耳に立つ。西洋人殊に女の方は何時しか此を覺えてしまつて、そして彼女が外出から歸る時は何時も門外でただいまあと叫んだ。私共は之を可笑しきものに思つてゐた。

こんな話を私の腕白娘は細君にして聞かせたと見える。細君が夕刻散歩する時、西洋人の家の側に行くと子供等に其の夫人の名を呼ばせた。子供は面白がつて連節で呼んだ。細君は宗教學校出身で西洋婦人が好きであつた。心待ちに謹けた顏して出て來る西洋人を豫想したであらうけれども、若い婦はそれを解し得なかつた。再三試みられても此の策は效力は無かつた。

私の腕白娘は細君に聞いて見たことがある。

「小母さんは何樣してそんなにピヤノばかり彈いていらつしやるの」と。細君はかう答へた。「小母さんがピヤノをずるすると小父さんに叱られるの」と。そして田中は其上にバイオリンでもマンドリンでも稽古しろと云つてゐるさうだ。

細君が田中家に嫁いで以來兎角病身であるので、田中は是にピヤノを買つて與へた。用の少い細君は東京にゐても多くの時間をピヤノで消してゐた。時たま姑母が其の腰掛に掛けて見るけれども、古い日本風に育つた老婦人の心はピヤノに這入つて行くことが出來なかつた。そして細君の心は獨りで深く深くピヤノに這入つて了つた。

花園は里ばなれした淋しい處である。無人な田中の家では夜の無用心を恐れて犬を飼ふことにした。犬はジャッドー式の胴の長い足の短い小形のものであつた。その名をマリーと云つた。田中は花物と犬の矛盾を知つてゐる男であつた。そして畑を荒されるのを恐れて門内で飼ふことにした。マリーは緣柱に繫がれて能く啼いた。御飯も炊けない細君はマリーの屎尿の世話もした。田中が火曜日旦那になる日にはマリーは唯一の話相手であつた。けれどもマリーはピヤノに馴れなかつた。細君が卓に向ふとキャンキャンと頻りに鳴いた。細君は思ひ餘つてピヤノの手を止めるのが常であつた。マリーは又日が暮れると神經過敏になつて人影さへ見ると吠えた。私の腕白娘でさへ吠えられる程であつたから、夜分は餘り田中の家に行かぬことにしてゐた。

舊六月十五日の晩であつた。月が眞正面に昇つて中秋のそれよりも明かであつた。火曜日に當つたから細君は一人になつて了つた。そよりともする風がない。花園は一色に變つて靜かなく默して了つた。我が動く外に音なき世界に這入つた細君は、ピヤノに向ふことさへマリーに許されなかつた。彼女は電燈を消して縁に月に坐した。しつかりとマリーを抱いて月のかげるまで動かうともしなかつた。

（大正七、九）

彼女と其周圍

待受けた電報が遂に來た。私は此の電報を受取ることを恐れてゐたが、又逃るべからざるものとして久しく待受けてゐた。

母の死期の迫つてゐるのは昨年十一月の歸省で略ゞ推測してゐた。そして今年に入つてから、度々寄越す弟の手紙で、驚きも濟し崩しに薄らがされてゐた。

最初の電報は七月七日であつた。もう十日も保つであらうが再電すると記してあつた。翌八日には、早いけれども子供四人へとして形見の金を送つたと云ふ電報が來た。私は成るべく早く行くと返電して置いた。九日には幾分快い方だ今月一杯は保つであらうと云つて來た。私は最初の電報で直ぐにも發たねばならぬと思つたけれども、留守が子供と下女とばかりになるから、長く滯在し惡い、今少しく迫つてからと、不孝と云へば誠に不孝な考へを起した。だから此の電報で胸撫で卸して、浮上つてゐた腰を又卸した。十一日であつたか、もう氷より外は一切通らぬ、やつと十日間であらうと又電報して來た。私はもうどうしてもぢつとしてゐられぬ、必ず十三日には發たうと決心して、其の用意にかゝつた。十三日の朝又電報が來た、今少し保つであらうと讀まれた。私は又迷ひ出した。そして何時でも發てるやうにして置いて次の電報を待つことにした。すると十六日であつた、「母上御待兼ね早くおいで、意識は五日間は明瞭であらう」と電報された。かうして私は十七日の夕五時二十分の急行で西へ走つた。

母の病床に駈けつけたのは十九日の未明であつた。蚊帳を潜つて「阿母さん」と聲をかけても返事がない。「御按排はどうです」と今一度云つたが、やはり十分に通じない。私は投出されてゐる枯木のやうな手を握つて見た、脈はまだ確であつた。弟が這入つて來て、少し聲高に「阿母さん〳〵、兄さんです」と云ふと、其時ポッカリ眼を開いて上の方を見廻した。弟は睡起だから直ぐには分らないんだと自分で云つて、又「阿母さん、兄さんが著きましたよ」と云つた。初めてはつきりして此方を向いた母の顏は私の想像程ではなかつた。母は「英かい」と云つて覺束ない眼を据ゑて思ひ迷ふやうであつた。私は昨年十一月、病床ではなかつたけれどもやはり殆んど同じ時刻に、母の寢室に歸著して聲をかけた時、直ぐに母の面に涕が滲み出たことを記憶してゐる。そして今日は却つて其涕が見えぬのを見て物足らなく思つた。けれども直ぐに、それが募つてゐる病氣の故だと覺られた。私は持つて來た子供達四人の寫眞を出して見せた。今度は皆が來られませんから、これを連れて來ました」と云ひ添へた。母はそれを見やつたけれど本當の意識には觸れてゐなかつたらしい。私は悲しまずにはゐられなかつた。

夜が明けて顏を拭つてから、母は私一人が傍にゐるのを見て、「待つてゐた」「もう今日一日よ」と眼を潤まして云つた。さうして子供へ形見を送つたことも切れ〴〵に附け加へた。私は再び子供の寫眞を出して見せると「此の二人は見た」「此の二人は、もう見ることが出來ん」と泣聲になつた。

其日は粥を食べよう、魚を食べようと、餘程元氣があつた。弟は一週間もないことだと

喜んで、忙しく運ばせたけれども、やはり一匙二匙で止めて了つた。弟は母が、私のことを我慢し我慢してゐたけれども怺へ切れずなつて、十六日に遂に、兄はまだ來んかい、と云ひ出したと、悲しみと可笑しみとをごた／＼にして語つた。

私と弟とは他の人々を排して左右に附添つた。其夜からはやはり二人で、母の床を挾んで、二人の床を延べた。七十四歲の母は甘えてだゝを捏ねたりした。

著いて四日目であつたかと思ふ。正午少し前に、謠を謠へと母は云ひ出した。私は去年望まれて果さなかつたことを思ひ出して、その富士太鼓を一綴り謠つた。母は拍子を取つてゐた。

或日母は思ひ出したやうにあれを取つて呉れと云つた。弟は心得て衣桁にかゝつてゐる銘仙の綿入を取つて打懸けた。「おテフが看病するのだけん」と母は言つた。私は昨年の春テフ（私の亡妻）が死んだ時、形見として一枚の綿入を母の許に送つて置いた。今母の病體にかかつてゐるのがそれである。私は初め衣桁に懸つてゐる其の綿入を怪しんだ。此の土用中の暑さに、見ても暑苦しい綿入は何の爲になるであらうと。が今の樣子を見て直ぐに其所以が合點された。弟は先月から、母が度々かうしてゐることを語つた。

看護に來てゐた親類の女の一人はかう云つた。伯母さんから沁々聞きました。私ほど子緣の薄いものは無い、長男は子供の中は養子にやつて置いたし、生長して後も遠方に離れてゐる。其嫁も一年足らず一緒に居たけれども別れて了つた。それももう死んで了つた。次男も小さい時から他所へばかり行つてゐた。遲れて貰つた嫁も直ぐに支那に行つて了つた。今度一緒に歸つたけれども其嫁は病身で十分世話して貰ふことも出來ぬ（今年に入つてから二度も煩つて現に病床にゐた）。何かに祟られてゐるやうだと。

けれども最後の母は、二人の男の子が、かうして來合せて、左右から看護してゐることが見舞に來る人々に對しても得意らしかつた。そして次第に體が衰へると共に意識が不明瞭になり、患部の痛みも薄らいで行つた。そして丁度蜘蛛の絲が何時何處で切れたか分らぬやうに、母は八月の三日に此世を去つた。

私は昨年の春、妻の臨終に堪へ難い苦しみを嘗めたが、今老いたる母の朽木の仆れるやうな往生を見て尊い心も起つた。

が日を經るにつれて思ひも深く沁みて行く、堪へ難い悲しみも起つて來る。默つてゐられなくなつて、茲に母に就て聞得たこと及び私の回顧を記して見ることとした。けれども實際の母と云ひ私と云ふ文字は、記事を進める先々に束縛されさうに思はれてならぬ。そこで母の字の代りに彼女、私の字の代りに彼の字を用ゐることにした。決して小說を書くつもりではないことを記して置く。

彼女が一人の赤ん坊を遺して實家に歸つたのは、まだ二十歲前の若さであつた。それは姑の氣に入らぬ、姑と氣が合はぬ。と云ふ普通世間に有りふれた平凡な理由に因るのであるが、彼女の心の底には婿さんが思つたより頼み甲斐ないと云ふことも幾分含まれてゐたやうである。

歸つた後、これも普通世間に在る順序で仲裁が這入つた。媒酌人も度々來たし、姑もやつて來た。けれども彼女の決心は異常に堅かつた。そして其の悉くを追返して了つた。彼女の心には嫁と云ふ社會が與へてゐる割の惡

い役目に、もう立つまいと云ふ根本的の見解が出來かゝつてゐたらしい。だから其後度々他からかゝつて來た再縁の口にさへ耳を傾けなかつた。

けれども單に取すまして何時までもぢつとしてゐることか、徒らに親同胞に心配をかけ世間に誤解を起させる基であるから、どうしても獨立自營をしなくてはならぬ、それにしては御殿奉公が、さうした社會から綺麗さつぱり縁を切るに都合の好いことを知つた。そして舊藩主の邸に召出された。

其處で子を産んだ經驗があると云ふことが履歴になつて、お姫樣附を命ぜられた。お姫樣はまだ幼くて、乳を召しあがつてゐた、そして其處にはお乳の人があて時間で乳を上げてゐた、それにも樣々の手續があつた。彼女は下々の自分達か、傍に兒を寢かしたから針仕事でもし、抱きたい時に抱き上げたり、泣く時に乳房を銜ませたりする自由さとは大分勝手が違つてゐることを發見した。

お姫樣は追々生長して、物を云ふやうになり、歩るやうになられても、氣まかせにお母さまに會はれることも出來なかつた。御對面の時はちやんと御行儀をして御挨拶がなくては叶はぬ。若し膝を崩したりすると、御附の不行屆になるのみでなく、御對面も叶はぬと云ふことになつてゐた。其頃の社會ではこれが不自然とも虐待とも見えず、彼女はひたぶる恐れ入つてゐたが、秋の暮の靜かに物思はする時などは、先に遺して置いた我が娘を思ひ比べることが多かつた。彼女の娘も丁度其時お姫樣と同年であつた。

お姫樣がお七歳、彼女が二十四歳の時であつた。もう自分も御殿勤めに慣れる、お姫樣も物心ないけれども我子のやうに懷いて居られた頃。突然彼女に向つて再縁の口がかゝつた。彼女は初めは一同斷つてゐたが、媒酌人も相當な人だ、奥樣附の老女からも口添があつて、もう無下には斥けられぬやうになつた。そして彼女は初めて自分の註文を持出した、第一には舅姑のある家でありたきこと、第二は婿が相當の理解を持つ人でありたきこと、第三は家族が多くて可なり多忙な暮しの家でありたきことなどであつた。媒酌人は第二は兎も角、第一第三の條件が餘り人の喜ばぬものであることを笑つた。そして婿さんは儒者であること、舅は極めて嚴格で一口に云へばむづかし屋であることを語つた。それから先妻の娘が一人あることとまで打明けた。彼女は可なり複雜な家庭である事を知ると同時に、舊冤を雪ぐには適當の所と思つた。そして遂に承諾を與へて、馴れなじんだお姫樣にお別れをしたのであつた。

舅は六十越した大柄の男で、江戸詰十度京都詰一度した、生花伸齋流に料理は四條流の奥許しを得た人であつた。だから、行儀作法は云ふまでもなく、日々の御總菜にしても下女任せでは行かなかつた。一寸した例でも、お前八盃が切れるかいと眼の前に豆腐の乘つた俎を持つて來させたり、雜煮の餅は中身が極く軟かで外部がちやんと形を備へてゐなくてはならぬと云ふこと、お前は永らく御殿に勤めてゐたから萬事行屆いてゐるであらうなどと皮肉を云つたりした。言葉の使ひ方でも國訛でさむしゆござりますと云ふと、さむしゆでは可かぬ、おさびしゆと直すがよい、と七やかましいことばかりであつた。

舅は毎朝茶を飲む習ひになつてゐた、番茶の一杯宛を空にする程であつたから、朝飯か思ふやうに食へなかつた。朝飯が十分でないから晝飯がまたれた、そして十二時が一分でも過ぎると、遲いの遊んでゐるのと罵つた。もう／＼毎日聞きともなきことばかりであつた。彼女もこ

れでは行かぬと色々に工夫して、玄米茶を飲んでゐる所に釜移しの飯を握つて、「お父さま宜い按排にお焦が出來ました、狐色で旨さうでございますから握つて參りました」と、鹽を附けたのを大白の皿に載せて持つて行つた。ポヤホヤと湯氣が立つて食氣をそゝる。舅もつい釣込まれて茶受に食つて了つた。
て存外朝腹に適してゐるから翌日から今日も今日もと自ら催促して食べるやうになつた。するとどうせ晩に握つた朝飯は型ばかりであつても、晝まで十分持つて午飯がやかましくなくなつた。かうした方便や氣轉が事毎に必要であつた。病氣で寢るやうにもなると、抱き起しから食事まで、其頃これも後妻であつた姑が人好しで間に合はぬから、重荷は自然と彼女の肩に落ちて來た。口が惡くて味がないのを癇癪の敵にされて、それは／＼泣く程の苦患が續くこともあつた。偶には醉狂でむづかしい家を選んだものだと陰口する人もあつた。けれども御蔭で先の家を身勝手で出戻つたと疑ふ人はなくなつた。

或る時彼女は言葉の序から米の蒸れ臭いのを舅に訴へた。すると舅は變な風に受取つて、「大家内では一度に澤山の米を搗置かねばならぬ、澤山の米を貯へて置くと偶には蒸れることもあらう。小家内の乏しい身代とは違ふから、さうせゝこましいことも出來ないよ」と。彼女は常に生家の暮しが此家に及ばぬことを氣にしてゐた、そして乏しい身代と云ふ言葉にひどく氣を損じた。「それなら自分があるから始終搗いてゐたら可ござんせう」と。それから彼女は一日置き二日置きに未明に起き出して米を搗いた。初めは馴れぬ業として眼がまはつて卒倒しさうであつたが、馴れるにつけて大した苦痛もなくなつた。斯うして二三ケ月續くと流石の舅も見兼ねて三四日置きに人夫を雇つて米を搗かせるやうにした。彼女は詰らぬことから意地になつて、遂に舅を負かしたことが快いは快であるけれども、むづかしい屋と人にも許された老人、特に舅の上を越したことを後めたく思つた。

此町の士族は祿が少ないので、種々の副業をして家計の足しにしてゐた、此家でも維新後屋敷の一方を開いて店を張つた。そして穀類砂糖傘杯を賣つた。馴れぬ商賣で穀類と砂糖では思はしくなかつたが、傘は相當の利益が上つてゐた。のみならず傘は貧乏な士族の副業と云ふよりも今は本業で製造してゐるのであるから、之を賣つてやらねばならぬ義務のやうなものもあつた。で舅は熱心に其方をいそしんでゐた、良夫は舊藩の學校以後小學校をも司配し、又、塾をも立てゝゐたので其暇がなく店には出なかつた。又暇な時でも傘の仕上杯にも手を出さなかつた。さうした事情から彼女は常に、舅の片腕になつて店の事もしなければならなかつた。舅は他家で出來たものを賣るばかりでは手が餘るので、自らも傘を張つたり仕上げをしたりしてゐた。傘を張つて油を引くと暫く日に干さねばならぬ。これが庭先などで間に合はぬから下田に出て乾さねばならなかつた。老人、舅には其れが無理であつた。さうした時は彼女は慣はぬ天秤棒を擔いで四五町ある田へ出て行つた。冬などは氷の張つてゐる田面を踏割り／＼二三十本の傘を干した。氷の裂片で跣足を破つて血綠になつたりした。舅は重寶な嫁として喜んでゐた。

かうして家内の面倒は追々緩和されて行つたが、引ちがへに家外の小面倒が起つて來た。親類知己間で彼女の批評が善となく惡となく加へられた。中にも分家の叔母とS家の叔母とは其の惡い方の優たるものであつた。S家には其頃頃合の娘が殘つて居て、叔母は之を嵌込む

ことに獨り極をしてゐた。それを彼女に先んぜられたから彼女に對する恨は深かつた。其意趣からしてS家の叔母は彼女に對して深刻な蜚語をも放つた。彼等の言葉にはこんなものもあつた。

あの後妻は中々ものである、むづかし屋やかまし屋で通つた舅をグウの音も出さぬやうにして了つた。軍鷄が出ると九斤鷄も哀れなものさ。今の中こそしをらしくもしてゐるやうけれど、亭主は學者で右向いてゐよと云へば三年も向いてゐる人だから、手の平に丸め込むのは何でもないことだ、舅でも死んで子でも出來て見るがよい、先妻の娘こそみじめだ。

彼女は今は外敵に向はねばならぬ時期に到達した、直面に來るのなら對抗の方法も無いでもないが、何れも隱れてゐてひよい／＼と放つ飛道具であるから始末に困つた。で偶には夫を捉へて愚痴を溢して見たが、夫は相手にならなかつた。そして單に概括的の教訓を與へてゐた。人が馬鹿だといつたら馬鹿でございますと答へて置け、人が礫を投つたら此方を向いてゐるよ。自ら悪かつたと覺つて頭を下げて來る時が來よう。と自分の無いことばかり云ふのである。けれども或時祭りか何かで親類中の酒宴が開かれた。夫よりは若い連中が二三人飲み殘つて、泥醉の揚句夫を怒らせようとかゝつた。―なあ○○さん、學者でなけりや馬鹿だらうと云ふことが世間で云はれてゐる。して見ると馬鹿と學者は同じもんだ。あんた學者であつて見ればやはり馬鹿の中だたあ―と云つた。平生へい／＼してゐる者共が失敬な、酒に事よせて夫を嘲つてゐると彼女は傍で聞いてゐて眞黑に腹を立てた。どうなるかと見てゐると夫は一向平氣である。今の言葉が聞えたのか聞えないのかさへ判然せぬ位である。醉漢は續いて又様々に嘲弄して見た。夫は横を向いてゐたが到頭鼾の聲がし出した。彼等も持餘して酒を止めて歸つて了つた。彼女は餘りの口惜さに彼等が歸ると直ぐ、夫を搖り起して何とか云つておやんなすつたら可かつらうに、と齒咬をした。漸く眼を覺した夫は、彼等の言葉を耳にも止めてゐなかつたらしい、そして―お前が醉漢の言葉を聞いて腹を立てるなら、お前もやはり醉漢ぢや―と云つてころりと寢轉んだ。そして―主人不二相識一偶坐爲二林泉一―と微吟し始めた。彼女は眼の醒めたやうな心地でぢつと夫を見守つた。

彼女は望まなかつた子を擧げた。しかも男の子であつた。けれどもそれは自然の結果でどうすることも出來なかつた。これを喜んだものは眞先に舅であつた。先の嫁に孫が二人あつても孰れも女で相續人とはなれなかつた、今度のが男子であつて見れば養子などの不自然な思をせずに濟むと云ふのが舅の胸づもりであつたからである。彼女が男の子を産んだことは親族間に種々に噂された。例の叔母達は、それが自身に何等利害の關係ないのにかゝはらず、小癪に障つた嫁が勢力を得るかと思へば一入面憎かつた。そして―もう一人の姉達も不用だ、奉公にでも出したら―と悪態をついたりした。

かうして彼女は一刻もぢつとしてゐられなくなつた。それから夫を說き落して我子が三歳になつた年、先腹の長女に養子を貰つた。男が初めからその養子に氣乘がしてゐなかつたのと、氣風が合はないので、其養子は續かず一年足らずで歸つて行つた。此の養子が歸つたに就ても世間から彼女は可なり痛くない腹を探られた。

舅は孫が追々育つにつれて、其方に愛を較られて行つた。そしてぢつと負されるやうになると、兄嫁ひと呼ばれた男が、廣い背を出して

不手際な負ひ方をした。一度などは搖り上げたはずみに肩の上から孫を落して蒼くなつた。そして彼女を叱つた、「お前の負させやうが惡いからだ、怪我でもさせたらどうする」と。男は物日々々に寺に詣つた。法談でも始まると毎日詣つた。そして大抵の場合人力車で行つたが、孫は極つて抱かれて行つた。もう四歳にもなると孫も自然と愛する人の機嫌を取ることを覺える。お祖父さんが著物を著かへ始めると玄關に下りて雪駄を揃へた。少し手間でも取れると、大きな雪駄を小さい兩手に穿かせて、敷臺をバタバタと敲いた。そしてお祖父ちやんお祖父ちやんと拍子を取つた。するとお祖父さんは「今行くぞ、よし〳〵」と云つて喫ひかけた煙管を倉皇と筒に收めて立上るのが常であつた。さうした場合に拭きつけた敷臺が雪駄の形に白く埃がついた。それを彼女が叱りでもすると、「又拭けば可い、男の子がそんな細かいことに氣がつくやうでは駄目だ」と却つて母の方を叱つた。かうして孫は寶珠の玉のやうにお祖父さんに抱かつて寺へ行つた。歸りには一人で俥の上に仰向になつて來る、又迎への俥が出る時は仰向になつて行く。そして歸りには又お祖父さんに寶珠の玉のやうに抱かれて來た。

　お祖父さんは孫には眼がなかつた、著物から下駄のやうなものまで、皆な自分で見立てゝ買つてやつた。傘を翳すやうになると、特別に骨を拵へさせて、人手を借らずに自分で思ひのままに張つてやつた。漆なども細かに塗つて子供には惜い位であつた。孫は嬉しがつて翳してゐたが、二三度翳すと大きな穴を明けて歸つて來た。彼女は青くなつて駈出て叱ると、「お祖父ちやんお祖父ちやん、此傘はもう飽きたから、小刀で破つて來たの」とはら〳〵することを云ふ。「よし〳〵、又違つたのを拵へて上げるよ。……男の子は其位の元氣でなくて可かぬ」とから〳〵と愉快さうに笑つてゐた。

　お祖父さんは其年の中に歿くなつた。一方に婿が歸つた後長女が男の子を産んだ。彼女はお祖父さんが生きてゐた時分は我子も我子のやうな氣がしないでうか〳〵と暮して來たけれども、今は自分と子との間を沁々考へねばならぬ時期に到著した。そして堅い決心を一人でして了つた。

　彼女は決心の次第を細々と夫に語つた。氣の大きい夫は遂に許しを與へた。それから彼女は幼い子に對して大人に說き聞かせるやうに長々と云つて聞かせた。子供には唯だ此の家には居る筈のものでない、養子に行つて他家を繼ぐべきだと云ふことが頭に這入つた。そして窘めるやうにして可愛がつたお祖父さんが亡くなつた此頃では、彼に取つては大した問題でもなかつた。或時彼はネツ木にする木片を持つて來て、出刃を振つて玄關の敷居の上で削つて居た、婿が之を發見して「敷居に傷がつくからお止しなさい」と叱ると、「何に俺の家ぢやないもの、構ふものか」と云つた。

　彼が六歳の時であつたさうだ。彼は母に連れられて里方のお祖父さんの家に行つた。話の序に母は彼に對して「お前の養子に行くお家はお隣りよ」と云つて聞かせた。彼女は母と話し入つて氣がつかなかつたが、何時とはなく彼の姿が見えなくなつた。もうそろ〳〵歸る時分と間内から庭の周圍を見つけてもゐない、ふと隣家の話し聲を聞くと細君が子供を相手に何か饒舌つてゐる。相手の子供の聲がそれらしかつた。極りの惡い思をして行つて見ると其處に我子が御客樣になつて、牡丹の大株が咲き誇つた庭を見下してちやんと坐つてゐた。細君の話によると、裏の木戸を叩いて「小母ちやん小母ちやん」と云ふものがある。開けて見ると、此のお子が「養子に來ました」と這入つて來たとの

ことであつた。彼女はをかしいやらきまりが惡いやらで、連れて歸らうとしても容易に動かなかつた。

併し此の偶然な出來事が事件を早めて、彼は其のK家に遣られて了つた。これで彼女は重荷を卸してさつぱりとした氣もしたが、又一方では大きなものでも取逃したやうで惜いやうな寂しいやうな氣もしてならなかつた。

彼女は先腹の長女の子即ち孫が四歳に達したので、土地で仕習はしてゐる紐解の祝ひをした。彼女は自分の子の四歳の祝ひを、男が立派にしようとするのを抑へてなるべく質素にして、紋付も紬で濟したのに反して、義理ある此の孫には羽二重の熨斗目を作つた、帶も博多を選び宴會もなるべく大懸りにした。そして此の孫が此の家の大事な相續人であることを皆の前で挨拶した。彼女は初めて溜飲を下げた。

が一方に、此宣言をすると共にK家に遣つてある我子がまだ籍を送つてないので之を濟さうとした。するとこれまで誰も氣づかなかつたけれども戸籍法が面倒であつた。戸籍法によると其子が長男になつてゐて、之を排して長女の子即ち孫を嗣子にするには廢嫡の手續をしなければならなかつた。彼女はそれをも敢てしようとしたけれども、夫は其長い行末を思つて、一人前の男子を無能者、不具者として訴へるに忍びなかつた。そしてこれは人事の及ばぬ所で、天道は犯すべきものでないとして、これまでの企圖を悉く畫餠にして了つた。彼女の心盡しも總て水泡に歸した。そして長男は下にも置かず大事がられた養家を出て、複雜な實家に歸るべく餘儀なくされた。

彼女には夫の行ひが何によらず、虚僞虚飾を用ゐず、己を正しうして天命を待つ方であることが追々に會得された。そして自分の行ひがこれまで餘りに奇激で不自然であつたことを恥かしく思ひ出した。かうして六つ違ひで二番目の子を擧げた時は心の内が大變樂であつた。それから二人の先腹の娘も成るべく我腹の子として見、孫も我子も平等にすることに努め出した。姉娘はお人好しで殆んど見違ひがなかつたけれども、妹娘は思慮が深くて殆んど義母の心のある所を了解した。姉が盲目の愛から我子のみを愛して、隱し立てして菓子抔を與へたりすると、妹は恥かしい思ひをして注意することが多かつた。妹娘が不幸にして眼を患ひ、つひに見えずなるまでには彼女は一方ならぬ苦勞をした。それは義理ある預り娘を不具物にする恐れではなくて、何不足なく生れた女を一生不幸にする悲しみからであつた。妹娘は此處に再び實母を見出したと云つてゐた。

十八で失明した妹娘は怜悧であつた。眼は見えぬながら針の耳穴にも絲を通した、そして雜巾でも刺さうと努めてゐた。それから自分の下駄も其の穿音で聞分けた。姉が時たま餘所へ出かけに無斷でつい穿きでもすると直ぐに咎めた。妹娘は又見えぬながら何かと母の爲めに勤めようとした。母が外出でもする時は直ぐに簞笥の前に行つて著物を出して來た。そしてどれを著て行かうと云ふと間違ひなく其縞柄のを持つて來た。母は妹娘が得意でして居るかうした勤めを氣任せにしてゐた。それは失明者で他出することの稀なる癖に、姉が著物を作るのを羨んでゐた位だから、かうした場合に妹娘に簞笥を任せて置くことが、又何んの隱し立のない證據にもなるからでもあつた。不幸なる妹娘は二十四歳で歿くなつた。多年心盡しをした娘が死んだことは彼女にも大なる悲しみであつた。そして晴々しいことのなかつた妹娘が、未來は眼も明き人に負けぬ裝ひもせよと、入棺の時は綺麗な文金島田に髮を結つ

てやつた。
　歳月は流れて行つた。彼女の夫は五十を越してから中風に罹つた。夫はさなきだに趣味のない家計を營むことを嫌つてゐたので、その後を引受けた彼女は貸地貸金などの始末が絲の如く亂れてゐるのを見出した。彼女は子供のやうに低能になつてゐる夫を、欺したり賺したりして經緯の緒口を求めた。其頃から彼女は長女に本家を讓り自分の子には別宅に移らしむる意志が萌してゐて、他に屋敷を一ヶ處購めた。
　其の頃は基督教が頭を擡げ出して、牧師を多く出した此の肥後の國には特に其宣傳が强かつた。此のＹ町にも海：牧師などが出かけて來て、小學校の教師達に布教したりした。そして學校生徒もそれとなく誘はれて說教を聞くことが少なくなかつた。かうした空氣の中で彼女は小學校を卒業したばかりの我子が其中に卷込まるゝことを恐れた。と云ふのは舅が深い眞宗の信者であつて、檀那寺の信徒總代なども勤めてゐたのに、夫が儒者で一向さうした氣分がなく、其頃流行つた繪踏にさへ出ては行かず、兎角の批評を世間から受けてゐたことを心外に思つてゐた矢先であるから、若しや我子が耶蘇教に這入りでもしたら、第一舅の心盡しに反する、次には夫の眞意をも傷ける基であると一人で胸を傷めてゐた。そして誰に相談することもなく檀那寺の住職に其の心情を訴へた。住職は世にも奇特のこととして、丁度其頃京都の本派本願寺で普通教校と云ふ高等中學に稍々比敵する學校のあるのを思ひ出して、其處を勸めた。
　丁度其時も時、夫は中風再發して遂に亡き數に入つた。彼女は悲しい力落しの中にも、子を思ふ一心から三十五日で忌を明けさせ、十六の少年を京都へ送つた。
　彼が京都に遊學してから容易ならぬ問題が勃發した。
　それは夫の死後、一家の主權が悉く彼女に移つたのを忌々しく思ふ親類もあつた。――もう時代は叔母叔父のでなく從兄妹に移つてゐたが、――分家、別家などの義從妹たちは、長女を可いやうに賺した。〇〇さんが京都三界まで學問に出て行くやうでは學資もどの位要るか分らぬ。〇〇さん一人は出世もするであらうけれど、お前の子などはどうなるかしれたものではない。現に別屋敷を買つたのも義母さんは子供を立派に仕上げて其處に住はせる算段である。お前も能く分別して今の中に始末をつけないと路頭に迷ふ時が來るであらう」と。お人好しの長女は直ぐに其の氣になつた。そして分家を申し出た。
　足許から鳥が立つた彼女は礑と當惑した。けれども今更どうすることも出來ぬから分家することにして親族會議を開いて貰つた。色々の議論が戰はれた末、長男と孫とに五分々々に分け、彼女が長男の方に行くものとして孫から五釐を出して祖母への扶持としようと云ふことで結末がついた。彼女は初めから會議には一言も口を出さなかつた。そして此の判決にも默して服した。親族中の中立派には、これでは長男の甲斐がないとつぶやいたものもあつた。彼女は其時十歲であつた次男をつれてまだ疊も這入らぬ粗家に疊三枚を敷いて引移つた。
　長男は其年の七月脚氣を患つて息を切らしながら歸鄕した。何の通知をも受けてゐなかつた長男は、斯うした大暴れのあつたことも夢にも知らず、元の家に人力車の轅を卸させた。丁度其處にはお人好しの義姉がゐて、「此の春分家してね、お前の家は那方よ」と手輕な挨拶で追拂つた。何が何やらさつぱり分らず、長

男は又人力車に乘つた。

けれどもこれは勝氣な彼女がせめてもの腹癒にした、親類に對しての面當の芝居であつた。

彼女は今度の事件の元兇と目ざした義從姉が見舞に來たのを幸ひに、何にも知らぬ長男が元の家に人力車を下したことを詰つて驚かした。

そして何故早く通知して置かなかつたかを咎むると、何に此れ位の事は一家の些事です、大事な修業心に障りを起しにはなりませぬ、と濟して居た。これも多分豫期した返辭であつたらう。これから彼女が一筋繩で行かぬ女であることが親戚間に覺られた。

義從姉たちが長女を勸めて分家させたのには初めから他の目的があつた。先づ彼等は地所貸金の世話をしようと證券を持つて行つた、お人好しの長女は奇特なこととして直ぐにそれを渡した。次には器具や衣類を事にかこつけて借りて行つた。そして半分も戻つて來なかつた。氣を揉み出して長女が催促すると何處やらから又借せられて今に取寄せて返すと云ふのみであつた。それから其の歳暮の小作米利子の寄り方が非常に惡い、氣を廻して直接借主に當つて見ると疾うに出した、と云ふ返辭もあつた。流石の長女も漸く彼等を疑ひ出した。そして一年經たずの中に又彼女に賴るやうになつて來た。もう彼等が恐くてしやうがない、何とか始末がして欲しいと歎き出した。

一旦は敵のやうに憎しんだ義姉も、元々お人好しで欺されたことと思ふと不便にもなる。今つれなく押出した所で行末困れば我子達の迷惑になるのは知れてゐると、痛い腹を押へて彼女は長女の相談に應じた。長女は又元の泰平の時に歸つて、一寸した浴衣を買ふにも相談に來た。そして證券も大略長女の手に歸つて來た。彼女は尾を振つて來る犬は打たれぬと云つてゐた。

彼女が見て來た二十年來の世間は、何方を向いても僞りに滿ちてゐた。此の僞りを晴すには我子を立派に仕上げるにある、子の出世より善きものは無いと思つた。そして前途まだ遙かな子供の旅路を思ひ、少なからぬ旅費を思つた。

彼女は此旅費を得る爲めに種々に思ひ迷つた。細かしい手内職などの追つくことでないことを知ると同時に、彼女は女に似合はぬ儲事を始めた。先づ最初に木炭を買つて見た、それが思はしくなかつたから次には飼兎をかつた。其頃渡りものの兎が縣下に流行した。一頭三十圓五十圓と噂された。兎は一年に三腹も四腹もする、一腹に五六疋の子が生れて、目の明いたばかりのでも五圓十圓と擲けることを聞いた。

彼女は金儲するは是より早い道はないと思つて直ぐに手を出した。そして力に餘る程の兎を押つけられて了つた。初めの一二ケ月は面白いやうに金になつたけれども、三月目頃からは左前になつて半年經たぬ内に只でも貰ひ手がなくなつた。かうして二三百頭の兎がふいになつて了つた。大儲の豫定が外れて身代に大穴を明けた。悔の八千度も追つかなかつた。

斯うして長男は京都に出た足かけ三年目に、鄕里に呼戻された。それでも彼女にはまだ野心が消滅しなかつた。何とかして今一度打返して長男を元の如く修業の途に上らしめようとの氣はあつた。其年の暮れであつた、彼女は又思はくをする爲めに少しの金を持つてゐた。長男は自ら其金を見出してぢつとしてゐられなくなつた。恐々ながら其中から二十一圓を盜み出して東京に出奔した。けれども彼女にはこれが手違ひでも何でもなく、子供が親の力を借りまいと決心して旅費として持出したことを出來したと思つた。そして何故もつと持つて行かなかつたかを惜まれんだ。彼女は思はくを

する金が直ぐに子供の修業の金として役立つたことを幸先よしと思つたからである。長男には月々極つたものを送らなかつたけれども時々仕送りをしてゐた。

間もなく、次男が小學校を卒業した。けれども彼女にはもう極つた學資を與へて中學以後の課程を踏ます豫算がなかつた。何でも資本要らずに一人立の出來るやうにと節を折つてK市の大商人に小僧から仕込ませた。次男は名を呼捨にされて日々風呂の水を汲んだ。彼女は齒を咬んで悔しがつた。

けれども久しからずして、次男は支那貿易の或る會社に事務員の末席につくことが出來た。そして傍ら商業學校に通ふことも出來た。神經質な彼は家庭に事務所があつて、家人に見らるゝやうな氣がして度々自家に歸つた。誰が變な顔してゐたとか、誰が小言を云つたとか、多くは何でもないことを氣を廻して、もう行きたくないと云つたりした。彼女は何時も辛抱が大事と戒めて返してやつた。丁度其頃日清戰爭が始まつて通譯の人が盛んに募られた。會社は幸ひ支那向であつたから次男は支那語を修むるには都合の好い地位にあつた。そして彼は支那語を習つて直ぐに通譯に合格した。併し遂東に渡つた時は講和期節で二月經たぬ内に歸らねばならなかつた。それから臺灣に行き、大阪に出て、支那に渡つて、これまでずつと南清にゐた。

斯うして彼女は二人の男の子を持ちながら、西と東に遠く手放して獨りつましく暮してゐたが、五十三歳の時長男に連れられて東京に出た。

初めて見た東京は思つたよりつまらなかつた。二重橋には一寸驚いたけれども、諸官衙にしてもK市の縣廳を少し大きくした位にしか見えなかつた。それよりもこれよりも一番淋しかつたのは、長男の家が三間しかない裏家であつたことであつた。其家は日光が碌に當らなかつた。臺所が狹くて尻つき鼻つきした。薪も積み重ねたのでなくて五束十束と買ふものであつた。肴も薄く切つた一切幾らの價で、ほんに消え入るやうな世帯であつた。それから庭と云つても下駄を脱ぐだけで一文字(分葱)一株植ゑる處がない。家外に出ると一日歩いても知つた人一人逢ふではなし、隣り近所と云つても鼻つき合せてゐてお早うとも云はぬ。もうもらこんな寂しい處はない。やつと口をきゝ出した隣りの内儀さんも無教育な町ものらしく、頓と話が合はぬ。話の序に出た亭主の陰口が餘り聞きともないから、不心得を散々諭してやつたら、膨れ出して其の次の日から口も利かなくなつた。此方の隣りの内儀さんが老人だからと言葉をかけて見ると、愛想がよい。來い來いと云ふから行つて見たら、内儀さんは常磐津の師匠で亭主は經師屋であつた。元々弟子に來たのが緣で入婿になつたのださうだが、堅さうだけれども、子がなくて養女を貰ふと、九つも内儀さんより年下な故でもあらうけれども、いたづらが過ぎて養女は逃出して了ふらしい。もう〳〵東京とはこんな不しだらな處かと彼女は熟々嫌になつた。三年目には長男に嫁を貰つて、引留めるのも振切つて郷里へ歸つて了つた。

三年振に歸つて見ると阿母さんも滅切り年取られた。墓所も佛石が傾いたり木が生えたりしてゐる。三年前に提灯を振つて夜汽車を送つてくれた義從兄のDさんも亡くなつてゐた。誰もが一體に白髮になつたやうで、一體に町が寂れて來た。そして親類緣者が皆な疲弊して了つた。なまじひ留守にしたことが後悔された。

けれども難有いことには皆なが喜んで迎へて

呉れた、以前鬼であつた義從姉妹達も、自分の爲でもあらうけれども、皆なか便りかゝつて來る。そして訪ねて行けば下にも置かずして大事にする。やはり自分が暮す處は鄕里であつたのだと思つた。

間もなく一方次男から月々餘るだけの仕送りをするやうになつた。困る者には手傳ひもしてやる、皆から尊まれて其日を安穩に暮した。屋敷内には手の廻るだけの菜園も作る、珍らしい花など植ゑて自ら極樂園と稱して人にも見せてゐた。

其後東京から長女が生れたと云ふ便りがあつた、寫眞で見ると丸々と肥つて可愛らしい。初孫であつて見れば抱いて見たさが一杯であるけれども、離れてゐてはどうにもならなかつた。追々育つて行く寫眞が次々に來た、髪の毛が房々として多いらしい、顏立が長男にそつくりである。會ひたくてならぬのを、丁度同じ年輩の親類の兒を見て慰めてゐた。四年目に又次女が生れた報知があつた。長孫が九歳の暮であつた、長男に連れられて來ると云ふので停車場まで迎へて見ると、想像通りの顏立であつた。もう〳〵可愛くてならぬから人力車の上で抱き締めて歸ると、途中で啼てなくお話をする。そして「お祖母ちゃんはもつと綺麗なのかと思つてゐたら」と云ふ。「それは田舍ものだから仕方が無い」と云ふと、「でもお父さんと一緒のお寫眞のは綺麗なことよ」と云ふ。そして「あの私は顏がお父ちゃんに似てゐるの、英（次孫女）ちゃんはお母さんに似てゐるの、けれども私の髪がお母さんに似て少し赭いの」と云つた。

彼女は孫が歸る時一緒に附いて行きたい程であつた、そして家族が離れ離れに住むことを今更ながら不運と感じた、又曾て激しく神經痛を起して獨りで一夜苦しがつたことを思ひ出してぞつとしたりした。其後肺炎を患つて他人の看病の心許ないことを思つたこともある。けれどもまだ長男にも次男にも歸つて來いとは云はなかつた。

或時長男の知人がK市に歸省した序に寄つて東京行を勸めたことがある。彼女は人などに連れられて旅するものではない。子が袴を穿いて迎ひに來たら行つても可いと笑談のやうに云つたこともあつた。又或時生命保險の勸誘に來た男に氣焔を吐いたことがある。私はまだ死んで葬式も出來ない子を生んではゐません、だから葬式料まで自分で骨折つて置く必要はありませんと。又養老保險を勸めると、私には二人の子があります、私の子供は私を野たれ死させる程不孝なものではありませぬと。そして長男が打ちやり放しの男で、盆正月と心遣ひもせぬのに反して、盆正月は固より子供が生れた時、子供が學校へ上る時、學期を終る時には必ず相當の心遣ひをして親の義務——寧ろ親の權威を示してゐた。

彼女は又芝居氣を持つてゐた。常に子供に教ふるに、決して人に先だつて出來し立をするな、走り口をきくな、皆々が思案に餘つて最後に持つて來たら、其時大きな手腕を現はして見せ、大きな意見を吐いて見せよと。けれどもさうした註文は長男にも次男にもまだ來なかつた。彼女はもどかしく思つてゐたらしい。

彼女は七十三歳に達した。けれども理想の樂は二人の子の間には切つてされなかつた。そして二十年前患つてた坐骨神經痛が祟つて、歩行困難に陷つてゐた、又近來罹つてゐた喘息がひどく募つて來た。そして一度起しかけた心臓痲痺にひどく恐れを懷くやうになつた。もうずつと前から長女義子は臺灣で亡くして、彼女の許に便りかゝつて來た。これまではこれをやり使つて間に合つ

たけれども、そればかりではもう心細くたつて來た。

其處へ次男が勤めの都合で漢口を引揚げて家族を纏めて歸つて來た。當分休養するとのことで、彼女に大いなる喜びと安心を齎した。彼女は好き死時と思つたのであらう、もう何處にも行くことではないと次男に云つた。それでも彼女はまだ餘力があつて、母としてまだ子に盡してゐることの缺けてゐる所があると、次男が歸ると直ぐに簞笥と書架とを註文した。何れも土地では珍らしいものであつた。これは平生彼女が乏しい中を割いて貯へて置いた金の一部を出したものであつた。次男は要なきこととは思つたけれども、それを受けた方が母をして親の權威を振はしむるに適當だとして服從した。

彼女は次男が歸つてから箍が緩んだやうに體も心も弱つて行つた。時々子供のやうなだゞをこねることもあつた。次男は母の晩年を見て取つて、父の三十三年に際して兄の歸省を促した。長男は其時七歳になつてゐた末子の三男を連れて十一月歸省した。

長男は其春妻を失つてゐた。彼女は孫を見るとともに潸然と泣いた。これが○家の相續人であるぞと云つて熟々と見た。そして長孫女と末孫を見たから、中二人の孫娘は見たのも同然だと云つて又泣いた。そして「お祖母さんが抱いて寢よう」と孫を引寄せた。孫は痩衰へた祖母の肋骨を氣味惡く見ながら、それでも抱かれて寢た。

彼女は沁々と長男に語つた。そしてもう思ひ殘す所はないから何時死んでも差支へはないと云つた。

（大正九、九）

進水式

犬と余

美哉山林

寒川鼠骨

進水式

人込の中へ行くには、是非共シルクハットでなければ萬事に都合が悪い。古いのを貸してやるから必ずそれを被つて行き給へ、でなければ僕は同行しないぞと友人に嚇かされた。

進水式は見たいが、シルクハットには少々閉口だ。

普通の山高帽を被るのさへ何だか氣がとがめるやうに思ふ脊の低い僕が、若しシルクハットなどを被つたならば、それこそ丸珍のポンチ繪ソックリであらう、困つたなと思つたが、一緒に行かぬとあるからには仕方がない。

恨を呑んで委細仰せを畏つて、舊式の、頭の馬鹿に高いシルクハットを借りて歸つた。

午前七時に新橋停車場で一緒にならうといふ約束だから未だ暗い内に床を出た。ランプをともして、流元へ行つて顔を洗つて冷水摩擦をやつてゐる内に、夜がしら〳〵とあける。

例により後架へ這入る。

常でさへ容易に便じないのが、今朝は氣がせく爲めか一向に音沙汰がない。

ウマク進水すればよいがなーと考へるが駄目だ。

ボン〳〵時計が六時をうつ。

三十分進ましてあるから五時半だ、モー一時間半しかない、早く便じて呉れないかなと思ふと愈々以て駄目である。

思ひ切つて厠を出る。

フロックコートを著て、シルクハットを被つた。

姿見の前へ立つて見たいやうな氣がする。

オイ鏡を見せろと家人に命ずる、妻や妹は頻りに笑つてゐる。

就中妹はシルクハットは大キラヒだやと言つてニガイ顔をしてゐる。

其内に妻が鏡を持つて來る。

障子の明るい所へ行つて一寸眺める。

成程みんなが笑ふのも道理、シャクンだ顔が一層シャクンで見え、帽子は顔の三倍位もある。

これでは全く帽子が歩行くやうなものであらう。

かゝるべしとはかねて期したる事乍ら、今更のやうに悲しくなつたが仕方もない。

思ひ切つて威儀を正し、威風堂々と門を潜らうとする途端、帽子が格子戸でコツンと敲かれて後へ落ちる。

ハヽヽと家人が笑ふ、待つて居つた車屋も笑ひ乍らそれを拾つて呉れた。

根岸には未だ人通りがない、坂本の通りへ出るとボツ〳〵人が通つて居る。

弱味を見せてはいかぬと思つて、両手を膝へぐつと突いて、車上で反身になつて見る。

通る人毎に頻りに余の顔を見上げるやうに思ひやられる。廣小路へ出ると早や澤山の人通りで、逢ふ人毎に悉く視線が自分に集つてゐる如く感ぜられる。

いよ〳〵反身になつて済まし切つてゐる。

成程市井の小人に誇るには之れに限るなと思ふ。

眼鏡橋へ來る、町が狭い丈けに人が悉く自分に接近して通る。

自分の顔がをかしいのか、笑つて通る者もある。

モー〳〵我慢がし切れなくなつて、仰いで雲

を眺め、成可く人の顔を見ぬやうにして行く。

新橋停車場へ着くと、女人は既に待つてゐる。

　君の事だから大方乗後れるだらうと思つて、切符は自分の丈けを買つた、早く切符を買ひ給へと言はれた。

　切符口を見ると、續いてゐる〳〵、一直線に續き切れぬので、うね〳〵と所々に弧線を作つて續いてゐる。其跡へ著いたら何時切符が手に入る事やらわからない。兎ても駄目だとあきらめてしまふ。

　すると女人は善き方法があるとて、切符賣口へ近づいて、今主人のを買はうとしてゐる車夫に二十錢銀貨をつかませた。

　車夫は喜んで主人のよりか先きへ買つてくれたのでヤット安心する。

　汽車は横濱へ寄せたので、馬鹿に澤山の人が這入つて來た。

　車の中は坐つてゐる人、立つてゐる人で既に一杯である。其處へ立派な身裝をした奥さんが、金切聲で「ドウカ御迷惑でも一人丈け入れて下さい、前の汽車にも乗切れないで、今迄待つたのです、今度乗らなきやア―などと言つて無理に押込んで這入る。

車掌がチンと戸をしめる。

　奥さんは吐息をついて「かうやつて入れて下さる方はいゝけれど」と言つてゐる。

　校旗を押立てゝ、小學校の生徒が、黄熟した稲の小道をうね〳〵と辿つて汽車道へ來つゝある、紅葉の谷を下つて來るのもある、早や汽車道に近づいて一列に陣取つてゐるのもある、これ等に歡迎されつゝ、詰められる丈け詰め込んだ汽車はガラ〳〵と走る。

苦しい。

　横須賀の停車場を出ると、左側には要塞砲兵、右側には水兵、ずらりと並んでゐる其中を、人波に押されつゝぞろ〳〵と進む。

　大なる鐵門を潜ると横須賀の町、左右には處の人と旅の人と打交つて並んでゐる爲めに、店などは一つも見られなくなつてゐる。

　時計屋の大看板と、東郷煎餅と書き、東郷大將の肖像を現してゐる看板とか屋根の上にあるのが目につく。

　ヤッ〳〵〳〵といふ聲にふりむくと、眞物の東郷大將が車に乗つて來かゝつたので思はず看板の肖像と比べる。看板の方が餘程綺麗であつた。

　乗艦員休息所、會社長、銀行員休息所など札の立つてゐる曲角へ來た。

　傳令使と書いた札を押立てゝゐる巡査が車で驅けて來る。憲兵と水兵が通行を禁止する。

　どや〳〵と人波が崩れるのと共に、余も押されて片側へ尻込すると、休息所と書いた札にシルクハットが突當つて前へ落ちるのをあやふく手で受ける。

　所へ皇太子殿下の御馬車が通る。

　殿下には擧手して禮をして居られるのを拜し奉つた。

　通りは不相變も禁止してゐる。

　折々行からとする人を水兵が捉へて、陛下の御馬車が通つてしまふ迄は通さぬと力んでゐる。

　女人は余の外套を引張つて、人込の中から通路へ出る。

　厭に勿體ぶつて髭をひねつてゐる。

　水兵などには目もくれない。

　水兵は何と思つたか、余等二個のシルクハットはとがめずに其儘通した。

　シルクハットの效能はこゝだなと合點をする。

　東門前鎭守府の下へ出る。

　休息所へ這入る。

海軍士官が、陛下の御通りですから御[illegible]をなさいと知らせてくる。

外へ出て見ると早や澤山の人が兩側に列を作つてゐる。

花火がパリ／＼、パリ／＼と續いて上る。

中に喇叭が[illegible]と澤山に響く。

余の前には洋服や和服の貴婦人がズラリ陣取つてゐる。勲章はまだ見えない。

チンコロは貴婦人の洋服の裾の地に曳いてゐる上へ寢轉ぶ。

氣の毒だからシツ／＼と追ふと、チンコロは渋々立つたが、其代りシュツと裾に小便をひツかけて向うへ走る。

間もなく騎馬の巡査がくる。

二名の騎馬憲兵。

二名の馬丁。

と連つて錦の御旗、いよ／＼鳳輦が前を粛々と打たせられた。

何もはなしに氣がゾーツとする。

馬車、人力車と澤山に續いて鎭守府へと上らせられた。

それと同時に、天皇旗は鎭守府の屋上にたかく翻つた。

余は、人波に押されつゝ工廠の門を這入る。

後甲板の上へ出て見ると、艦首に横はつてゐるのが新造の薩摩である。

灰色になつて、眼界を遮つてしまつてゐる。

グツト見上げると、こちらへ倒れかゝるかと思はれるやうに高い。

東に見れば聞いてより低し富士の山などといふが、これは又想像してゐたよりも、今日のあたり見る方が偉大である。

艦首から艦尾迄、青葉と牡丹の作り花とで飾られ二本の帆柱からは四方へ美しき旗をなびかした綱が引かれてゐる。中央のあたりに梯子がかけてあつて、青い服を着た職工が、續々と上つて行く。

一番の上になつた者から、一番下に居る者迄を數へると二十四人であつた。

殆んど直角に立てゝある梯子だから、一人五尺とするも百二十尺、成程大きな筈だなと思ふ。

既に昇つた職工は、甲板の上から下を見下してゐるが、それが如何にも小さく見えるので愈々高く思はせる。

大きな軍艦を山の如しと形容するが、今迄は未だ見ず、今に至つて初めて此形容の我を欺かぬといふ事を知つた。

今迄は艦艇が大きいのに氣を奪はれて、自分の居る棧敷などには氣もつかなかつたが、不圖棧敷の方へ目を移すと、居るわ、シルクハットが澤山に居る。

艦首の方から、艦尾迄、幾十間といふ長い棧敷の上には、シルクハットと婦人の洋服と、山高帽とで埋まつてゐる。其間に時々海軍軍人の美しき大禮服が往來してゐる。艦首の棧敷が終つた正面の處には、數段高い棧敷が築かれて、上方は紅白斑分の幔幕で圍み、その中央に金襴のやうなものをかけた椅子が据ゑてあるのが小さく見える。

其後ろに金屛風が立てゝある。即ち式場で、陛下の御座所だなと合點する。

艦尾の方は直ちに海になつて、海上には數多の艦艇が何れも滿艦飾をしてゐるのが如何にも美しい。

海の彼方には小山になつて、其根から頂迄、人が一杯に群がつてゐるのか、塵埃のやうに見える。

彼方の群集と、吾々棧敷の上の群集とを見比べてゐると源平の富士川對陣が偲ばれたのであつ

たらうと思ひ出て居る、
花火が頭りに上る、群集は一樣に式場を見つめてゐる。式は容易に始まりさうにもない。
余の前に突立つた三人のシルクハット、
「容易に始まらないね。」
「まだ一時間半あるよ。」
とに角腹が減つてしまつた、何か持つて來るのであつた。
「煙草を飲まないとは驚いたね。」
「これから二時間も辛抱同志會員とは恐入る」
「僕はさう思つたから、茶を持つて來た、」
「そいつは豪氣だ、一杯出し給へ。」
「一杯とはいかん、一つかみちや」
と言つて、ポケットから茶の葉を一つかみ出して
「これを噛んで見給へ、一寸まぎれるものだよ。」
これは新案だね、一つやつて見よう。
とつまんで、前齒でコツリ〳〵噛んでゐる。
其横には新聞紙を敷いて、シルクハットと山高帽とが二人ドッカと腰を下ろしてゐる。
「どうだらう、これで一師團位のねうちがあるかね。」
「ナーニ一師團で利くものか、タシカニ[illegible]江[illegible]位に當るよ。」
「ナーニ、それでは一個師團の價値があるわけだね。」
「場合に寄りやア一個師團にも五個師團にも匹敵するよ。」
「場合てマアどんな場合ぢや。」
「さうさ、マア常陸丸の時のやうな場合サ。」
「馬鹿を言ひ給ふな。」
こちらの方には菊水の裾模樣と、紅葉の裾模樣と、背に金の裾模樣と、三人の黑縮緬紋付が並んでゐる。
「見えるでせう。」
「見えませんわ。」
「アヽそれ、モー少しのして御覽遊ばせ。」
「イヽエ見えませんもの、傘で丁度隱れてゐますわ。」
「傘の[illegible]の方ですよ、ソラ、ねツ。」
「ハアヽヽ、見えます〳〵、あれが開くのですか、まア美しいことねツ、あれでせう。」
と言つて頸首につけた大なる地球儀のやうなものを指してゐる。
余の後ろでは、
「アレは君取るのだよ。」
「ナーニ取るものか、アノ儘動くのだよ。」
「アノ儘ちや動く道理はないぢやないか、[illegible]首と[illegible]尾の如く[illegible]へ下たよ。」
「一丈へ下なものか、[illegible]底には皆なアレが附いてゐるのだよ、だから[illegible]の動搖が少ないのだ。」
「ナーニそんな事があるものか、今迄見た[illegible]でアンナもののあるのは無かつた。」
「其處が新式な處なんだよ、アーッ。」
と大欠伸をする。
右手の方少し離れた處には、埒を隔てゝ二人のシルクハットが語り合つてゐる。
「君も此方へ來給へな。」
「僕は[illegible]色祭だから駄目だ。」
「ナーニ銀色も青色もあるものか、一人位は何んでもないよ、來給へ〳〵。」
「行きたいがマアよさう、若し切符を改められると大變だ、此垣一重が黑金のといふ處だ。」
など洒落てゐる。
式は容易に始まらぬ。
雨がポツ〳〵と降つて來る。
婦人達は一齊に申合せた如く洋傘をさらりと開く。
男子の中にはシルクハットを外套の下へ忍ばせてゐるのもある。
「御婦人の方は雨除けが此處にありますから

と役員がふれて歩行く。

一人も下へ行く者はない。

余の前の二人、

「ナカ／＼用意周到だ、雨よけ迄準備するとは至れり盡せりだね。」

「ナーニ至れり盡せりもあるものか、棧敷を作つたから不得止此下へ雨よけが出來たんだ。」

「そんな事なら御婦人の方と斷るわけはないぢやないか。」

「そこが新式な處で、海軍の外交的なる處ぢや。」

「マサカ。」

などいふ内に雨も小止みになる。

水兵が十名許り、あちらこちらと割つて這入つて、

「外套を取つて下さーい。」

と言ひつゝ歩行く。

婦人達は洋傘をしめ、コートを脱ぎ、帶をハンケチで拂ふ。

間もなく君が代の奏樂が始まる。

一齊に式場の方をむく、

文武百官が先づ式場の左右へ居並び、陛下が出御になつた。

余の處から數十間といふ遠さであるから、それが頗る小さく見える。

金屏風の下の大寶殿、暫らくの間は少しも動かぬ。

まるで洋式の雛様を見るやうだ。

すると雛様の一つが動く、陛下の前へ進んで、手を高く差上げる。

何やら持つてゐるやうだがよくわからぬ。

それが元の位置へかへると、雛様は再び不動の位置に並んで御座る。

ピリ／＼／＼と呼子の笛。

ヤアー、コツン、ヤアー、コツンといふ音がするが見えぬ。

其音が止んで暫らくすると又ピリ／＼／＼と呼子の笛。ヤアー、コツン／＼／＼と耳に入ると思ふ間に、一番端の支柱がガラ／＼ドンと外れて倒れる。

又呼子の笛が鳴る。

ヤアー、コツン、／＼／＼で第二番目の支柱が外れて倒れる。

第三より第九迄の支柱が斯くして皆な外された。

見物は一切無言鳴りを靜めて見詰めてゐる。

艦首が動き出すやうにも思はれるが、よく見ると動いては居ないやうだ。

「さア、動かないかしら」

どうしたらうかと、式場の方を見ると、陛下には左舷を見られ、又右舷を見させられ、左右に玉體を動かせて居らせらるゝ、汗が額へニジミ出る。

ハンケチを出して拭ふ。

「駄目だな／＼。」

「どうも駄目と見えるねツ。」

「ナーニ未だこれからぢや、動く迄には三十分以上もかゝるよ。」

などといふ聲が耳へ這入る。

暫らくあつて又ピー／＼と呼子の笛が鳴ると共に、コツン／＼と何處やらで音がしてゐる。

すると、ジリ／＼と一二寸動いた。

二三寸宛ジリ／＼と動くとすると成程三十分もかゝるであらうと思ふ内に、巨大な艦體はズー／＼と動き出した。

萬歳の聲が一時に上る。

數十の汽笛が一時に鳴る。花火が五六發も連發される。

ハンケチを振る、帽子をふる、萬歳の聲。

これ等が一時に目と耳とに這入る。

艦を見ると、艦首の地球儀のやうなものは開いて、大なる藥玉のやうになり、それが風にふ

かれ乍ら、舷上に手を上げ、花を振りまく職工をのせて、水を切つて勢よく海上へと浮び出て、ガラ〳〵ッと錨を下ろした。

歡呼の聲は鳴りもやまぬ。遙か對岸の山の上でも手をあげ旗など振つてゐる。

余の前なるシルクハット、

「どうも愉快だ、何が氣持がいゝつて、こんな氣持のいゝ事はないねッ。」

「僕は溜飲の下がつたよりか氣持がよかつた、所謂愉絶快絶ッタア此事ぢや。」

「僕は梅が負んで鶴が勝つた時のやうな氣持。」

「僕は不幸にして其相撲を見なかつた。マア例へば生れ落ちた時のやうな氣持ぢやね。」

「君は生れ出た時の氣持を知つてゐるのか。」

「イヽヤ、之から例へばサ。」

横の方の女連、

「マア、よかつたこと。」

「ほんとうにねー。」

「アラ、厭だ、ピンが無くなつてよ。」

「どうなすつて。」

「知らないで肩掛を振つたからでせうよ。」

と三人で棧敷の上を探してゐる。

僕も亦シルクハット々々所謂生れ出た時の氣持とやらで、陛下のお立ちと見えて、ズドン〳〵と續けさまに鳴る皇禮砲の音を聞きつゝ、人波の中を停車場へと急いだのである。

（明治四〇、一）

犬と余

何某と余といふ題で書くことが流行する。世間に多少とも評判になつた人が死ぬと、暫らした題で書いたり饒舌つたりする人が澤山に生れる。自分のやうな日蔭者は、さうした題で書くやうな目星しい人と相識る光榮を持つた事がない、併し流行に後れるのも業腹だから、余と犬との關係でも書いて見ようと思ひついた。エライ犬殿と余の關係を明にして自分の誇りにしたいのである。

自分は幼い時から何んでも好きだつた。草や木や花や果物や、そんな非情なものが好きで、狹い地面を父から許されて、植物園と號するものを設けて無暗矢鱈にいろ／＼な木草を植ゑ込んで遊んでゐた事もあつた。其植物園の木草が茂り茂つて、手のつけられぬ程、混雜して來た時分には、漸く生きものに趣味を持つやうになつてゐた。雀を飼つたり、鶯の子を飼うたり、目白を飼うたり、鳩を飼うたりしてゐたが、終ひには養鶏までに高じて、卵を抱かせて孵化させる生き生きした雛を眺めて二年許りも暮らした事もあつた。

併し、さうした草木や禽鳥よりも、一番に好きなのは犬であつた。余が犬に親しむやうになつたのは十二三歳の頃からだ。仔犬さへ見れば、何處からでも引張つて家へ連れて來た。さうして飼犬にせんことを父に哀願するのであつた。其度に父はいけない／＼とて聞入れて呉れなかつた。何故にいけないのかは少しも說明をされない。余の生母が亡くなつた時に、犬について不吉な事があつたからだらうとは叔母の想像であつたが、其内容が如何なものであるかは今に至る迄聞かされずに濟んでしまうた。仕方がないから自分は近所の飼犬と遊んで滿足して居つた。何處の犬でもよい、犬でありさへせば手なづけて、連れ歩行いて獨りでうれしがつたものだ。山に野に町に、何處へ行くにも必ず犬を伴はせた。

だから自分が獨立して家を持つた時に第一番に必要なものは犬であつた。友人に賴んで立派な犬の仔を貰つて歩行いた。さうして首輪を作つたり、蒲団を妻に縫はせたりして、大切に育てたものであつた。併しそれが漸く半歳か一年も經つて、次第に成長して、家に慣れ人に馴染んで可愛くなる頃には病氣になつたり、人に盗まれたりして滿足な結果を得るものが一つもなかつた。病氣になると犬の醫者に診察させて藥を貰つたり注射してもらつたりして騒いだし、盗まれると、近所の人に賴んだり、出入の商人に懸賞をしたり、車夫を走らしたり、手のありたけを盡して見た。然るに何時も治つた事もなければ行方の知れた例もなかつた。

斯んな事を繰返して數年を過したのであるから、最う犬に斷念すればよいのに、倘ほも懲りずまに貰つて歩行いた。どうしてアノ可愛い犬をやめる事が出來よう。犬をやめる位なら、家など持たないがましだ位にも考へてゐた。犬公方樣も大方は斯うした心持であつたらうかと思へるほど不思議に犬を思ひ切れなかつた。其處で又た一つの犬を友人の世話で貰ひ受けた。それは全身が白で顏だけ黑いムク犬であつた。其顏は少しシャクンで見つともよくは無かつたが、目の上に置いた二つの星が如何にも愛嬌を添へて、毛が深いだけに何となく柔かさうな可愛い犬であつた。

不思議にも此エスは師匠に甞て一年を無病息災、で成長した。思ふ所あれば大丈夫であると思つて、家内揃うて愈々大切にした。肉屋の御用聞が「今日はエス切れはいゝのですか」と駄目を押すほど犬には御馳走と思ふほどの物を、ありたけ食はせた。犬も其恩で忠節を擢んでた。彼れの仕事は夜番の外に、余が二つになりたての娘と遊ぶことであつた。娘は不肖の子ではないと見えて余の好くやうに犬を好いた。子守と遊ぶことよりも犬と遊ぶことを好んだ。竹尺を持つて頭を打つたり、耳を無茶苦茶に引張つたり、時とすると、犬の急所である所の尻穂を引抜かうとする事もあるが、エス（犬の名）は年長だけあつて、娘のしたいなりする事には少しも腹を立てず、唸りもせず、泣きもせずに、為すが儘に任せて素直に遊ぶのであつた。

「まア、泣いちや見つともないわ、エスに笑はれますよ。」

などと母親に言はれるほど、娘とエスとは仲よしであつた。

○

或日不図エスの姿を見失つた。櫻の花の散る夕方であつた。人間なら花に浮かれて、夜をあくがれ歩行くといふ事もあらうが、エスが花にあくがれ歩行く筈も無ささうだ。盗まるゝにしても餘り成長し智恵が出來過ぎてゐる。殺されるにしては首命が餘りに偉大に失する。或は彼も犬としては既に年頃であるから、想ふ同士と駈落ちでもしたかと考へたが、近處にはそれらしい相手が一つもなかつたのであつた。愈々見當が付かなかつたが、斯くある可きに非ざればと云ふので、例により手分けをして諸方を探し歩行かせ、其筋へは型の如く失踪屆を出して置いた。人間の失踪は屆けなくとも直ぐ樣制裁を受けることはないが、犬の失踪を屆出ないとさはキツイお眼玉を食ふから止むなく屆出たのであつた。

二三日經つたが掻暮れ行方が不明であつた。それが三日目の夕方になつて歸つて來つゝあるのを下婢が表で發見した。

「旦那ハーン、エスが歸つて來ましたぞ。」

斯う高らかに門外で叫んだ。自分は下駄を引ツかけるのも、もどかしく、表門へ出て見た。成程エスは正門から堂々と歸つて來つゝある。家出人は勝手口から這入るべしといふ憲法もないから、エスが正門から歸るのに何の不思議もないが、唯だ不思議なことは、彼の肉が痩せて眼が落ち窪み、足元さへよろ〳〵とよろけてゐる事である。孤影悄然として門に進入した十年亡命の客にも似た姿であつた。

「どうしたのでせう。」

「マア痩せてしまつて。」

「歩行けないほどお腹が減つたのでせう。」

「屹度縛つて置いて御飯もやらなかつたのですよ。」

「喧嘩をして餘所の犬を負かせたので其處につながれてゐたんでせう。」

「マア、ヒドイ人ね、何處でせう。」

何んでも何處かの家に食を與へられずに繋がれて居つたに違ひない。それが辛うじて繩を切つて歸る事を得たのに相違ないといふ鑑定に一決した。

何は兎もあれ、腹が空いてゐるに相違ないからとあつて食膳の用意がされた。其用意が出來る間をエス〳〵と呼ぶか、エスは主人も、其娘も、其細君も、其下婢をも何等顧みる所がなく、宛然行路の人のやうに彼の寝床へ進まうとするので、

「マアお腹がすいて目が見えないのだらう、かはいさうに。」

と食事が急いで持運ばれた。其時エスは既

に彼の寢床を通過して床の下へ潜り込んで居つた。食事は彼の潜り込んでゐる近くの縁の下へ運ばれた。けれどもエスは食はうとせなかつた。唯だ切なげな鼻息を漏すのみであつた。

日は暮れて夜になつてゐた。懐中電燈で縁の下を照し棒ぎれでエスの體を突いて見るが、彼れは腹立たしげな聲を立てるだけで、動かうともしなかつた。その内に夜が更けるので「今夜は安靜に休息させるもよかろ、其内に食ふだろ」というて人々も寢た。

○

翌朝もエスは床の下でグー〳〵寢てゐた。非常に疲勞してゐるものと認めて、眠るが儘に委せて余は外出した。

夕方歸つて來るや否や、未だ靴も脱がないのに、

「アナタ大變ですよ、エスが大變なんですよ、秋子を噛んだのですよ。」

妻は「ですよ〳〵」で脅かした。最初は娘を噛み、次に下女の裳を噛み、次に表へ狂ひ出ようとしたのを、隣の書生が喰留めて死力を盡して鐵葉の鷄籠の中に逐ひつめて、辛うじて首繩をかけたのであるとの事であつた。

可哀さうにエスは鎖に縛せられて、柿の木の下につながれてゐた。彼の犬相は恐ろしく險惡になつて、其目は狼のやうに光つて人を射た。併しエスを憐むどころの騒ぎではない、秋子はどうしたと聞けば、右手の甲を咬まれたので、石炭酸で拭つて膏薬を貼つたといふ事であつた。

サア大變ぢや、愈々狂犬であるとすれば、相當の手當をせにやァならぬ、併し狂犬であることは獸醫の診察を乞ふ迄もなかつた。與へられた食事を取らずに、却つて其器を嚙みくだいてしまつた。小雨が降るので、毛の濡れるのが憐れだというて、さしかけて置いた洋傘は、形もなく咬み破つて其骨まで曲げてしまつた。人を見れば凄まじい勢をもつて飛びかゝらうとする。久しく愛せられた主人にさへも、仇敵であるかのやうな相格をして、飛びかゝらうとする。最う斯く症狀が著しくては、どうする餘地もない。直樣警察に屆出で、處分を乞うた。警察は吏員を派して調査をし、エスを犬殺しの家へ送つた。

犬の處分は事なく終つた。併し終らないのは人間の處分であつた。十八日間の注射を受けねばならぬ。若しこれを受けねば恐水病に罹つて命を取られる。受けたものは十人の中が九人までは助かるといふ事であつた。

其處で九人の助かる中へ這入る事を欲して注射を受けた。漸く三歳になつたばかりの秋子は注射を受けるたびに泣き叫んだ。一つ注射した所は蚯蚓腫れのやうに腫れ上つた。其の蚯蚓腫れが三條になつた時には、朝目がさめるや早や泣き叫んで「先生のとこイヤ〳〵」といふのであつた。家から注射をする研究所迄は二里もあつた。さうして其研究所へ上る所には急な坂があつて人力車も上り得なかつた。春の日の暖い日の下を、母は其娘いぢらしさに、背負つて通はなければならなかつた。四日目にはどうにかスカシて注射を受けた。五日目は淺草觀音へ行くのぢやと言つて出かけたが、車が其坂下へ止ると早や覺つて泣き始めた。泣くのを無理に車から下ろして、背負うて坂を上り始めたが、背中であばれるので、どうする事もならなかつた。

母は最う消えも入りたい心持になつた。斯んな苦しい思ひを小さい子にさせて、自分も亦斯んな厭な思ひをせねばならなかつた。

―モウ、わん〳〵は懲々ね、今度こそはお父上樣にやめて貰ひましよ。

斯んな事を云つてゐた。其苦しい思ひが十八日續いたばかりなら未だよいが、一ケ年はまだ不安である。安全な九人の中に入り得るか不安全な一人となるかが決せられないのだ。

十八條の斷蛸師れが、やつと治つた頃に秋子は大熱を發した。サア大變ぢや、あれほど苦しい思ひをして十八日も通うたのに、十人の内の一人になるとは何といふ事であろと歎いた。併しそれは他の病氣の熱であつた。其後一年間は少しでも熱さへ出せば直ぐに斯うした恐怖に襲はれるのであつた。

自分の子であつたから善かつたものの若し他人の子であつたら、ドンな思ひをせにやならんか知れない。犬は最う廢めぢや廢めぢや。如何に犬が好きであつても、あの小さい者の注射の苦しみを見ては兎ても堪へられるものではない。十年の戀も一時に醒め切つてしまつた。最う最う犬など飼ふ事ではないと決心した。

○

それほど懲々した癖に、それから三年も經たぬ内に自分は又もや一匹の犬を飼うた。咽喉元すぎて熱さを忘れたばかりではなかつた。隣に住んで居つた高山君の犬を義理につまされて引受けたのであつた。

高山君の犬は洋種の番犬で、茶褐色の毛艶の美しい牝犬であつた。ポチ〳〵と呼ばれてゐた。自分が犬をやめて後に隣へ引移つて來た人であつたが、其時此ポチは仔犬として伴はれて來てゐた。犬に懲りて居る事とて、以前は他人の犬でもかまはず可愛がつた自分も、此ポチ君には餘り交際をせずに居つた。妻や下女にも言ひ含めて、成る可く敬遠主義を取り、殊に子供は近づけぬやうにさせた。此頃に秋子は早や七歳になつて居つたが、三つの春の出來事は少しも記憶にないらしく、時折り外へ出てはポチポチと呼んで、つや〳〵した頭を撫でて遊んだりしてゐる事もあつた。そんな時には自分であらうが妻であらうが見つけ次第に秋子を呼んで叱つたりするのであつた。けれどもポチは愛らしい犬で少しも怖いとは思はなかつた。

高山君は其勤めてゐる銀行の都合で朝鮮の支店へ轉任することになつた。それは秋の暮であつた。愈々高山君の一家が荷物を先きに出して、人間だけは電車に乘つて新橋に向つた時に、ポチも其家の人々の跡について出かけた。ポチは其主人が例の如くに細君や子供をつれて日比谷の菊でも見に行くのだと思つてゐた。然るに電車に乘る前に其主人が餡パンを澤山にくれた。これは前例のない事とてポチも少々怪んだが何しろ好物の事とて早速に頂戴した。頂戴して未だ其一つを食ひ盡さぬ内に電車は走り出した。ポチは決然としてパンを弊履の如くに打棄てゝ電車を追うて走り出した。次の停留場へ電車が留まつたので、ぬからず電車に飛乘つた。主人も子供等も乘つてゐて、

「オヤ、ポチが。」

と驚いたが、

「シッ畜生ッ。」

と後ろから尻をしたゝかに蹴つたものがあるので驚いて見ると車掌だ。

「歸れ〳〵。」

と主人は叱るやうに言つた。主人と車掌とが二言三言何やら問答をして居つたが、それが終るや否や車掌は第二の蹴撃をくらはせた。今度は横腹を猛烈に見舞はれたので、ポチは一たまりもなく、クワイン〳〵と泣き乍ら電車から轉がるやうに落ちた。落ちると同時に電車は又た驅け出した。ポチも亦其後を追うて驅け出した。次の停留場で再び乘込まうとしたが、車掌に足蹴にされて上る事が出來ない内に電車が走り出したからポチも亦走り出した。次の停留

現に其の場でも二三臺の電車が停滯してゐた。ポチは最後の車に乗らうとすると足蹴にされたので、今一つ前の車に乗つて見た。其處には主人の行は見出されなかつたので、車中を通りぬけて前の運轉手臺から飛降りた。降りかけに運轉手の[illegible]を食はされたが、幸に薄手であつた。ポチは今一つ前の車に車掌の隙をねらつて飛乗つて混雜の中へまぎれ込んだ。電車は動き出した。犬が／＼といふ聲に驚いて車掌は電車を止めさせた。急に止つた爲め吊皮に下つた客は前後の動搖を起して、何だ／＼と騷いだ。今度は洋傘やステッキや下駄や靴や、あらゆる武器で攻撃されて數ヶ所に打撲傷を負うて電車から突落された。

ポチは赤い舌を出して、茫然として眺め乍ら考へた。併し彼の頭にはよき智慧も浮いて來なかつた。何は兎もあれ歸つて主人よりの歸宅を待つ外はないとして、今度は脇目もふらず一目散に驅けて歸つて來た。さうして苦しい息を休めようと自分の小屋に入らうとすると、見知らない印袢纏が外から斷りなしに這入つて來た。的切り明巣覗ひだと合點してワン／＼と吠えた。すると袢纏はポチ／＼と自分の名を呼ぶのであつた。

袢纏は家を掃除して、殘物を纏めて家を閉して歸つた。ポチの小屋は翌日借屋に持去られてしまつた。ポチは其翌日も空腹を忍んで待つたが主人は歸らなかつた。其の代りお隣の旦那が何時になくポチ／＼と呼んで吳れたのであつた。

余は斯うしたポチを、高山君が赴任途中から出した手紙によつて飼はねばならない事になつたのであつた。

高山君は電車までポチが後を慕うて來た事を記して後に、

不憫には存候へ共あの場合如何とも致かね候儘打捨て申候何卒貴宅にて御飼ひ被下度若し左樣の事叶ひ難き場合は貴下の御手にて何處かへ緣づけられ度宜敷願上候

と言うて來た。緣づけるにしても一時は引取らざるを得ない。それで兎に角もと引取つて置いたのであつた。

自分は其頃は未だ犬に豫防注射をすることを知らなかつた。ポチの顏を見ると決して狂犬になる氣遣ひはないと信ぜられるほど柔和なので、大丈夫だとは思つたが、萬一が恐ろしいので、良緣あらば何處かへ緣づけようと心掛けた。其頃[illegible]も依賴した。併し[illegible]既に中年で先方へ行つても[illegible]馴れ難いであらうといふ理由で[illegible]先方から吳れといふ[illegible]何だか不安らしく、折角の高山君の依賴に[illegible]ものばかりであつた。

斯うしてズル／＼べつたりでポチは自分の家の犬となつた。不安乍ら一年と過ぎ、二年とすぎマア／＼で愚圖々々してゐる內に月日は遠慮會釋なく過去つて、早くも六年の春秋を送り迎へた。其春ごとに秋ごとにポチは誰れの胤とも知らず宿して澤山の子を生んだ。仔犬の貰ひ手は不思議に多いが親犬のポチを貰ふといふ者はなかつた。イヤ其時にポチを吳れといふ者があつても余は恐らく與へなかつたであらう。イヤ余は與へたかも知らぬが、余の子供等が決して承知せなかつたらう。蓋し此時代に於ける余は既に二人の男兒をまうけてゐた。其男兒等は犬を所持することを此世に於ける唯一の矜りでもあるやうに考へてゐたからである。イヤ余も實は咽喉元を過ぎて十分に熱さを忘れて居つたのである。さうして狂犬なども滅多にあるものではないと無智からして多寡を括つてゐた

からである。

事件は意外にも湧き起つた。それはあのやさしいポチが桶屋を咬んだといふ驚く可き事件であつた。

「ポチが人を咬んだんですつて、おまはりさんが入らしつたわ。」

十一になつた娘は斯う言つて書齋の自分を驚かせた。其内に巡査は前庭へ這入つて來た。案内した妻は、頻りに狂犬でない事を辯解して居つた。ポチは妻の前に尾をふつて媚びついて居る。序に巡査にも尾をふつて愛嬌をこぼして見せて居る。其態度に巡査も惚れたかして、ポチの頭を撫でて居つた。

「オイ、此犬に相違ないかッ、入つて見ろ。」

斯う巡査がいうたので向う木戸を見ると、筒袖に尻端折をして靴を穿いた丈の低い男が這入つて來よつた。

「ヘイ、それに違ひ御座いません。」

眼鏡をかけた、眼の窪つたやうな小男だ。

「お前何處かやつたんだろ。」

「イヤ、私は何も致しません、唯た歩行いて居つたばかりなんです、決して嘘はつきません、お隣に來て居た大工さんが證人です。」

と言ふ。巡査は咬まれた所は何處だか見せよと言ふと、小男は靴下を脱いで、其疵といふのを示した。

「何んだ、見えないぢやないか。」

巡査の言つたとほり、見えない位の傷であつた。巡査は後刻獣醫が來るから、それまで繋留して置けと、命令して歸つた。

妻は桶屋の小男を、知れる醫師の許に連れて行つて、適當な手當を加へさしたりした。自分も一寸は驚いたが、今度はポチを望診した上で必ず狂犬でない事を確信するだけの材料があるので安心して外出した。

留守中に獣醫が來た。妻の話によると、二三間先きから恐る〳〵ポチを覗いて、ポチの口をあけさせて見て、多分狂犬ではなからう、併し念の爲めに十日以内に今一度診察に來るといつて歸つたさうである。

それにしても捨て置けないので、桶屋へ見舞金を贈つたり、示談證を警察へ出したりして其翌一日を費してしまつた。

幸に獣醫が數回診察の結果、狂犬でない事が確められた、豫期した所ではあつたが一先づ胸を撫下ろした。

事件は引續いて起つた。狂犬でないといふ診斷を與へられた其翌日であつた。ポチは納豆屋の踵を咬んだ。又た前と同樣な手數を費して見舞金を贈つて示談にした。それから十日も經つや經たぬのに今度は疊屋の小僧を咬んだ、咬んだといふより舐めた位なものであつたが、それでも前と同じやうな手數を費した。桶屋といひ、納豆屋といひ、疊屋の小僧と云ひ、其風體は人並外れた物騒なものである。其舉動も人の家を及び腰で覗くやうな怪しいものであつた。ポチでなくても、警察の吏員が見ても一言はとがめる可き性質のものであつた。それに向つてポチが吠えかゝり、果ては少し咬みついたりしたのは、ポチとしては寧ろ職分に忠實であつたのである。

若し軍人であつたら天晴れ功名手柄を立てたもので、論功行賞に與る可き筈のものである。けれども狂犬病が流行つたりして物騒な時には、番犬を飼ふことを奬勵する警察は、其職務に忠實であつたポチを愛せぬばかりか、反對に「永久繫留」の罰に處した。

「斯う度々では困ります、狂犬でなくても繫留せねばなりません。」

斯う巡査は宣告して歸つた。

憐むべしポチは縲紲の辱を受くる身となつた。其小屋の傍の柱に麻繩で縛りつけられた。最初は全身の力を籠めて踏張つて見たり、氣合をかけて不意に飛出さうとして見たりしたけれども、總ての企ては無效に歸して、詮方なくなく小屋の傍らに腹這うて見た。不思議なるかな麻繩は恰も其の口の處へ來たので何心なく噛んで見ると、何んだか柔かで、齒應へのない物足らぬものであつた。併し外に日の暮し方がないので、遊び半分にグチャ／＼と噛んで見た。物の三十分も經たぬ間に、可なりに繩がさゝけて來た。勿論此時のポチは繩を切つて脱け出さうといふ惡意はなかつた。單だ遊び半分のいたづら事に過ぎないのであつた。噛むのは厭になつたから廢めて寢た。物の音に目を覺ますと、弱い癖に人の家に入りたがる大倉のジョンが來てゐる、自分の縛められてゐるのを嘲るやうに、ノソ／＼と横行濶歩しつゝある。ポチは忽ち腹立たしくなつた。我知らず勢ひ猛にジョンに向つて飛びかゝつた。其拍子にさゝけた繩繩はプスと切れた。人間であつたら、ソラ脱獄脱獄と、騒がれる所である。脱獄されるやうな缺陷を作つて置いて、脱獄者をのみ咎める人間の數に洩れぬポチの主人も以ての外の不屆としてポチを責めた。

「仕樣がないねー、斯んな大きな繩を切つては。」

細君は斯う云つてポチを呼んだ。ポチは縛められる事も知らずに尾を振つて細君の手元へ行つた。細君は又た繩を二重にしてポチを縛めた。ポチは今度も前と同じやうに、あらゆる努力を試み、又たあらゆる叫び聲を擧げて歎願して見たが、それは總て無效に歸した。

天は自ら助くるものを助く、ポチは自ら助けんが爲めに前の經驗に基いて遊び半分に繩を噛んで見た。無論、性質善良なポチは、繩を噛んだ爲めに、さうしてジョンに飛びついた結果として繩を切る事が出來たとは考へない。單に偶然の出來事として、わけもなく繩の切れたのぢやと考へてゐる。自分がエライ爲めに金が儲かつたと考へてゐる人間ほどにポチは馬鹿ではなかつた。だから嬲り半分に噛んで見たばかりである。其中に日は暮れた。夕飯は常のとほりに與へられた。運動をせずに常の如くに食つた爲めに、直ぐと眠りを催した。小屋へ這入つてウツラ／＼と寢入つた。便通を催すので目が覺めた。小用は遠慮なく其處等あたりで失敬したけれども、大便は仕慣れた植込へ行かんと氣持がわるい。家の人々は既に深い睡りに落ちて居るらしい。悲しい叫びをあげたが、誰れ一人起き出てくれる者もないので、再び渾身の力をこめて繩を引張つて見た。何の手答へもない、唯だ首輪が首骨に喰込んだだけであつた。仕方がないから小屋の横へ失敬して又た寢た。

翌日になつて、いたづら半分に噛んだ繩は再び切ることが出來た。早速に臺所口へ行つて尾を振つて細君にクン／＼と喜びを述べた。

「アラ、又た切りましたよ、アレを切るやうぢやモー仕方がありませんよ、アナタ。」

と細君は高い聲を張りあげて、オツたまげ乍ら其良人に報告した。主人たる馬鹿な自分は外へ出て鐵鎖を買ふ事を餘儀なくされた。

ポチは少々案外であつた。噛んで見ると齒應へはあるが、少しも齒が立たん、却つて齒齦が痛くなるだけである。だから噛むことは思ひ止つた。其代り時を置いては渾身の努力で引張つて見た。二日經つても三日經つてもビクともせぬ。餘りに引張つた爲めに、首輪の革が皮膚に喰入つて、其處から血が滲み出た。一日に何十回とあげた悲鳴は少しも效能がなかつたけれども、此の血は非常の效能をあらはした。

「首が切れて死んでしまふわ、母アさん、解い

でやりませうよ。」

姉さんは斯う言ひつゝ母の許可を待たず解放して異れたのであつた。

解放されたポチは、今度は風體の怪しい剪鋏剃磨を咬むのであつた。案外にも研師の人格がよいので、警察沙汰とはならなかつたが、斯う悪い癖がついては何時か處分されずに濟まない運命を招くのであつた。

○

斯うなつては何の余も捨て置くわけに行かない。田舎の親類へ遣らうといふ説も出たが、田舎だつて人が居るのだから田舎だつて困るに相違ない。犬殺しに異れることは到底忍ばれない。さりとて永久に繋留することは絶對に絶望である。近しい友人を會してポチ處分問題會議を開いた。けれど名案は出なかつた。其結果姨捨山へ捨てるのが最も慈悲の方法だと決せられた。人間の女でも役も無用になつた者は山へ捨てられた。それは無情殘酷な所業とされてある。併し山へ捨てられる以上に、苦しい思ひをさせられて、家に置かれるよりかも、山へ捨てられるが、當人はそれだけ幸福であるか知れない。然るに人間が山を出でて家に住み慣れてから久しい爲めに、家といふものに沾着して、山といふ故郷を忘れ、其處へ歸されるのを恐れるのは愚かな事どもである。今ポチは鐵鎖で縛められて此の家に餘生を送るのが幸福か、廣濶な山野に開放されて、其處で自由な生活をするのが幸福かと問へば、勿論開放されるに勝つたことはないのだ。鐵鎖に首から血を出して、日夜數十回悲鳴をあげて、さうして厭な陰氣な不愉快を忍んで不知不識其天命を短縮するよりかも、何時犬殺しの棒を受けるか、又た何時食物が盡きて餓死するかの危險はあるにせよ、鎖からのがされて廣濶な陽氣な自然の中に赴く方が、どれ丈けよいか知らないのだ。よしやポチ個人否な個犬としては多くの人間と同じやうに、此の家へへバリ付きたかるかも知れない。併し彼の現在及將來をおもへて彼の爲めに最善の道を考へる時は、どうしても彼を開放してやるに勝つたことはない。斯ういふ立論からして捨てらるゝことに開放といふ美名を附して決議されたのであつた。當人の意思如何に拘らず、勝手な理窟をつけて、教育したり、獄に投じたりすることを喜ぶ人間社會では、ポチを開放するくらゐな事は朝飯前の仕事だから、ポチも之に服從する外はないのであつた。

決議は愈〻實行せらるゝ事となつた。併し決議に加はつたものは口で強い事をいふ癖に、一人として自ら其任に當らうとする者は出なかつた。さりとて永年の飼主として朝夕親しんだ主人たる余には、如何にしても左樣な事をする勇氣は出でなかつた。いろ〳〵頼んで見たが一人として實行して異れる者はない。勿論、出入の車夫とか、臨時に人を頼む分には、金さへ出せば誰れでも引受けて異れるに相違ないのぢやが、そんな金錢づくで引受けるやうな信用を置けない人を頼むと、遠い〳〵野に行つて置いて來たなど口では言うて、其實は犬殺しに與へぬとも限らない。よしんば犬殺しに異れぬまでも、人里遠い自由の天地ではなく、其處等の都近くの、直ぐに犬殺しに見つかるやうな場所へ置いて來ないとも限らない。だから、決議は立派であるが、其れを實行する人が得られないといふ理由を以て、其儘にして置いた。

一犬に同情しても、人に同情せぬといふのなら仕方がない、若し人に同情するなら須く自身で實行したら善いではないか。

斯う嗾かす人もあつた。嗾かされても未だ實行する勇氣はなかつた。

何といふ卑怯な事であらう。苟くも自身に於

て捨てるといふ意思があつた以上は、他の手をかりると、自分の手でするのと、何の異る所があらう。動物愛護を唱道し乍ら其會合席上で獣類の肉をむしり喰ひつゝ、動物愛護の必要を説く矛盾と何の異る所があらう。自ら不仁を行はず他をして不仁を行はしめるのは、自ら之を行ふよりか、其罪は深い。自ら牛を屠らずして屠牛者に之を屠らせ、己れは何の不仁をもなさずして之を食卓に上せる子女は、其罪は屠牛者よりも深いとせねばならぬ。自分は又た自らポチを捨てることを能くせずして、他をして之を捨てしめようとする、何といふ殘忍な狡猾な偽善なんであらう。斯う氣がついたが、さて自ら實行することは如何にしても出來なかつた。ポチの爲めに慈悲の所行であるといふに何等か未だ徹底しない所があるかと云へば決してさうではない。然るに實行する事が出來ない。何といふ弱い心であらう。

其處で繋留したり放つたりして月餘を送つた。警察からは何とも言うて來ないのを幸に、放つてある時を多くした。所が今度は人もあらうに郵便脚夫を咬んだ。郵便脚夫は公の爲めに働くものである。其走る前を横ぎるのさへ許されねばならぬ。然るに其れを咬むなどとは大それた事をしたものぢや。

愈々慈悲の方法を決行せねばならなくなつた。犬は必ずよい時分には人に機會を與へるものぢや。折ふし多年心安くしてゐる田舎の老夫が來た。此老夫はポチには極めて親密な間柄であつた。ポチの話をした。老夫は引受けてが全地へ送らうと言つて呉れた。

ポチは何も知らぬ。膠州灣で、南洋で青島や西比利亞の番をしたのに、何の報いられる事もなしに、今や盟約國から突き離されようとしつゝあるのを、何も知らないで成金の夢を貪つてゐる日本人のやうにポチは多年主家を番し又た怪しい風體のものを咬んだのを賞せられもせず今捨てられに行きつゝあることを少しも知らぬ、ポチ／＼と呼ばれて小屋から出て、如何にも嬉しげに尾をふつた。煮干を貰うて喜んで食うた。

晴れた中川の空であつた。老夫はポチの首繩を引張つた、ポチは嬉しさうに尾を振つてついて行つた。一匹殘つてゐた仔犬も後をつけたが、老夫に叱りかへされた。

ポチは微笑ましげに門を出た。勇み立つて尾を振り足をせはしなく動かせた。恰も牢獄から放たれて青天白日を仰いだ人のやうに。併しポチは唯だ外へ出たのを喜んだのだ。捨てられるといふ事も知らぬ。罪を宣告しても聞きわけがない、自己の運命に就いても何も知らぬ、全くの法律上の無能力者それよりも以上の無能力者である所の此の動物を捨てるといふ事が如何にも哀れに思はれた。

人衝く牛をば角を切り、人くふ馬をば耳をきりて其印とす……人くふ犬をば、養ひ飼ふ可からず

など徒然法師が書いたのが今更らおしいやうな心地もする。涙をのんで馬謖を斬るといふ心持であつた。

翌日老夫が歸つて來ての報告によると、川二つ越した彼方の停車場で下車した。其處は廣い武藏野の中の小驛である。驛を出て繩を放してやつたら、非常に嬉しがつて走りまはつた。驛の町を出て二里許りも野道を行つた。其間にポチは大歡喜に滿ちて、老夫の先に立つて驅けりまはつて、珍らしげに蛙を逐うては遊びまはつた。宛も都會の子供が初めて田舎道へ連れられたのと同じやうに、飛んだり跳ねたりして驅けめぐるのであつた。思はず先へ行き過ぎて、少しでも老夫の姿が見えないと、必死の眼をして探すのであつた。ポチは老夫に離れよう

とせぬやうに、老夫もポチを見すて兼ねた。併し際限がないので、とある一つの丘へ上つて、林の中を行く、其處にあつた一軒家の後ろへ隠れて、ポチが引かへして探しに來たのを行過し反對の方向に道を取つて、次の驛へ著いたら日が暮れたといふ事であつた。

「アコなら大丈夫で御座いますだ。くらひ付からにもくらひつく人が居りましねエ。」

と附け加へた。

「人が居ないで食べものはどうする。ねエ母アさん。」

と娘は心配した。

「ナニ、かはいゝ犬だもんで、今に百姓家に飼はれますだに、しんぺえなさることアありましねえ。」

と老夫が請合つた。

其晩に余はポチが頻りに蛙を食うてゐる夢を見た。それほど思ひわづらうたのであつた。

ポチが出て翌々日、ポチの忘れ形見としてあつた仔犬が行方不明になつた。盗まれたとも、殺されたとも、蹤跡不明に終つた。

（[illegible]）

わづらひは猶ほも續いた。

同時に二匹の犬が居なくなつたので、二人の男の子等は遊び相手をなくした。非常に寂寞を感じた。それも其筈だ、ポチは殆んど其身を犠牲に供してゐた。己れは子等の玩弄の爲めに飼はれてゐるといふ自覺を持つてゐたくらゐ、それほど子等に親しんでゐたからである。寂寞を感じた子等は、何處からともなく仔犬を引張つて來たのであつた。併し妻は、

「モー〳〵おやめ、わんこは眞つ平。」

と言うてゐた。それも少しく毛色がよいとか、可愛いとか、それでなくとも、牡犬であつたら或は妻も子の愛に引かされて幾分讓歩したかも知れん。併し引張つて來る犬はどれもこれも毛色のわるい、容貌の見つともない、おまけに牝ばかりであつた。だから皆な逐ひ出されてしまつた。

宛も友人井上君から犬の子の居ることを知らせて來た。若し飼ふたら何時でも送り屆けてやろといふ事であつた。其事を子等の前に披露に及ぶと、一議に及ばず貰つて呉れと決した。

ムク〳〵と呼びしが自分の名と心得て今はムクと言へば走り來るやうに成り申候。何卒[illegible]御呼び下され度、ムク事[illegible]る上は[illegible]御[illegible]候へ共何分宜しく願上候、ビスケット、薩藷など好物に御座候。

斯ういふ手紙と共にムクは爺に抱かれ車に乘せられ、寢室としてのビールの空箱、當分の食扶持としてのビスケット一袋の婿入道具と共に送られて來た。

爺さんの手から庭へ下ろされると、腰を落して、さも物におびえたやうな態をした。それでも先づ小便をして、續いて糞をたれた。連れられて來た爺さんの居る間は未だ幾分頼みあり氣な顔をして居つたが、それが歸つた後は、持參の寢床たるビール箱の中へ小さくなつて寢ころんでしまうて、如何にも自己今後の運命を悲觀し切つて居るやうであつた。夕飯を與へると、怒り乍ら食うた。適當な食器がないので、夕飯後に夜店へ買ひに出たりした。斯うして三代目の犬が出來た。

ムクは非常に勇ましい犬であつた。二三日するとスッカリ馴れてしまうて、子等と遊んだ。遊び方が今迄の犬と違つて荒つぽいので、小さい子は時々泣かされたりした。少しばかり植ゑてあつた庭の菊は遺憾なく折られてしまうた。裏の菜畑も殆んど蹂躙し盡された。斯うして腕白のありたけを盡しつゝ、メキ〳〵と成長し

て、其深い毛は寒さを増すと共に愈々厚味を増して、手で觸れると熱氣のあるほどに勢が籠つて來た。さうして其の前足の大きさ重さと言つたら、これから何處迄大きくなるかわからぬほどで、今迄に此のムクほど元氣に滿ちて育つた犬がないので、末頼もしく思はれ、妻も遉に大切にして、餌を仕込むのに毎日一時間くらゐを費してゐた。さうして萬一盗まれてはならぬと言ふので、出入商人の出入する臺所口の手前へ垣を作つたり、裏の菜畑の周圍へ板を立てたりして、一歩も外出させぬやうにして置いた。

併し成長力が盛んで、而も活動の猛烈なムクは、垣も板も物の數ともせぬほどに成長して來た。年が改まつて彼れが生後七ケ月位になつた時には、早や其垣を渡つたり、板を倒したりするので、妻は其の修繕に煩はされて居つた。さうして隣へも行けば外へも遊びに行く、如何に防いでも防ぎ切れぬほどの元氣であつた。或時は隣の子供の帽子を分捕つて來て、サン〴〵に噛み破つて細君に苦しい思ひをさせた。或時は大きな肉片をくはへて來たから、取りあげて見ると、一つの牛の舌であつた。今に何處からか御尻が來るものと、綺麗に洗つて待つてゐたが御尻が來ない。午後になつて出入の肉屋が註文を持つて來た。

「今朝お宅からお隣へ行つて御用を伺つてゐる間に、籠の中のタンを一つ盗まれました、ヒドイ奴が居るから油斷がなりません、府屋町が近くに出來たから用心なさらないと下駄でも何でも掠はれますよ。」

と言つて注意して呉れた。さては出入の肉屋のものであつた。其のタンなら内にあると云つて、ムクが咬へて來た事を話してそれを渡してやつた。

「さうでしたか、ムクで幸せでした。」

と云つて喜んだ事もあつた。

斯ういふ風にあばれて居る間に、何時の間にやら狂犬になつた。此時まで犬に豫防注射をする事を知らぬ自分は、唯だ外へ出す事をのみ警戒して居つたが、四五軒先きに狂犬が出來て、ムクは一週間ばかりそれと咬み合つて居つた。さうして遂に感染した。余が第二子と妻は咬傷を受けた。

警察官も來た。獸醫も來た。さうして犬殺しも來た。併しムクに近づき得るものは一人もなかつた。主人たる余も、余が妻も、子等も誰れ一人近づき得なかつた。其勢が猛烈で、唯だ庭中を狂ひまはつてゐた。

第一世エス、二世ホホ、三世ムク、すべての犬が不結果に終つた。而も並外れの不結果に終つた。何といふ因縁であらう。生母の亡くなつた時の犬の不吉は何であつたのであらう。

人は煩ひの種を蒔いては、刈取ることに忙殺されて一生を終るのである。煩ひの種は犬だけではない。もつと〴〵遙かに大きな煩ひの種を蒔いては刈取るに苦しんでゐるのである。三代の犬に苦しんだ經驗を持ち乍ら、もう懲々してよかりさうなものを、未だ犬の居らないのを淋しく思ふ余は、餘程犬好きに生れ其生涯を煩ひの種を蒔かずに居られぬ性分と見える。

「何處かで貰ひたいなア。」

と云ふと、

「煩ひの種ぢやと仰つしやつたぢやありませんか。」

妻は不贊成を表明する。

「デモ豫防注射をすれば大丈夫だと言ふからな。」

などと飼ひたい意思を表明するが、家内の意見は未だ決せずに居る。（大正八、四）

美哉山林

自動車を棄てゝ、だら〳〵坂を下りると、直ぐ小さな溪川に到着した。

崩れかゝつた橋を渡り切ると、其畔に三百貫以上危險と書いた制札が立つてゐた。荷重が危險でないにしても險いから私達の乘つた自動車は走れない。路は爪先上りの勾配になつて、見上げた所には草屋根を取りまく柿紅葉が午後の陽にはえてゐる。

自動車の上でも、熟柿に護られてゐるやうな草屋――多くは南軒に乾した下蜀黍を黄金の聯珠のやうに輝かして、豐かな秋に滿足してゐるやら。靜かに落ついてゐる草屋を數多く眺めて來た。

併し今見上げるやうな鮮かな柿の色にも出會はなかつた。まるで大きな煙火筒に紅珊瑚の玉を仕込んで打上げたのが、青空高く散り開いたとでも言はなければならないやうな鮮かさだ。

是れ一つを見ただけでも私はよく出て來たと思つた。

坂を上ると小平になつて村に入るのだ。靜かな山村である。

家毎に必ず柿が照つてゐる。

不思議にも申合せたやうに葉が一枚も殘らずに散り盡して赤い實ばかり累々と梢を撓めて居る。

今年の美術展覽會でも柿の繪は澤山に見た。

金粉を應用して輝を現さうと努力してゐるのもあつた。

其中に一つとして今私が目の前に見てゐるやうな瑞々しさと生々しさとを持つのを發見することが出來なかつた。私はどうしても自然に眞似ること、自然の持つてゐる一部を其儘に寫すことすら人間には出來ないもののやうに思へた。

誠堂翁は何を考へつゝあるか、私にはお構ひなしに一足先きに立つてぐん〳〵と歩を運ぶ。

高垣さんや松村老孃は、おひろひなどとは思ひがけなく自動車からぶちまけられたので、不自由な其足をいたはり乍ら足野さんに護衞されし、跡の方からヨチ〳〵と尾いて來られる。

私は唯一人、靜かな村の道を、柿を見つゝも、又た黄色にうれた柚をめでつゝも久しぶりに悠々たる氣分で徐々に足を運ぶのであつた。

村を拔けると眼界が廓落と開ける。

左は山畑の崖沿ひになつてゐるが、右は山ふところの谷田が思ひの外に廣く下手へ流れてゐて、其向うに伊豆の山らしい奇形な――宇宙創造の時に用ゐ餘りの土や岩を無意味に打ちやつたやうな山の頂が並んで見える。

前正面は箱根山だ。

他から見るのと違つて、托鉢をする雲水が被る網代笠のやうな形に柔しい曲線で現れてゐる。

それが秋の末の片雲だもない澄切つた青空に、くつきりと立つてゐるので、直ぐにも到り著けさうに近い。

山の上の木も草も望遠鏡があつたら一つ〳〵に數へられはせぬかと思はれるほど明るい。

箱根からかけて、手近の山々までも、雜木の紅葉？ それとも草紅葉？ 薄赤く色ついてはゐるが、邊り眼前が明るく晴々しいので、何だ

か香に聞く龍澤寺へ行く道としては勝手が違はないかとさへ思つた。

開基の白隠禪師は其七十七歳の秋に此邊を歩行いて、美哉山林、と言ひ、侍者に筆を持てと命じ、

老僧百年後。可窆全身於此。

と書かれたのである。

近代に類のない禪家の巨匠が自ら擇んで隠棲の地と定め、又た埋骨の處と遺書まで認めたのであるから、私は常磐木の生茂つた山に取圍まれて、清い溪川の水が岩を嚙んでゐるやうな、人間の臭ひから遠離した別天地であらうと考へてゐた。

「鳥道人跡を絶ち、白雲幽石を抱く」とか「居處は囂塵を絶し草を踐んで三徑を成し、雲を瞻て四隣を成す」とか、「庭蕪れて更に芟らず新藤垂れて繚繞たり、古石竪つて巉崙とし山果獼猴摘む」とか、よく禪僧の詩に現れてゐるやうな幽玄味の景色であらうと考へてゐた。

それが斯んなに明るく晴々しいので、だしぬけに警策を加へられでもしたやうに魔誤つくのであつた。

頭の上の蜜柑畑から、黄玉のやうな顆が、葉隠れに嫣乎々々として默つて過ぎ行く私を笑つたりする。

桑畑に出る、桑の間處々柑樹を植ゑてゐるのに未だ其間に芋を作つてゐる今一人の男が、ぞろ／＼と行く禮装の私達一行には無關心のさまで、見向きもせず、頻りに芋を掘り急いで居る。夫婦者が幼い一人の兒を畦に遊ばせて、何やら蒔いて居る。

大方は麥蒔らしい。

蒔いてゐる畑の周圍には今拔取られたばかりの蕎麥の赤い莖が積み重ねられて居る。

午前に蕎麥を刈り、午後其跡へ麥を蒔くのであるらしい。斯んな山畑も斯く集約に利用されると思へば、白隠さんが「美哉山林」と言はれた百六十年前とは周圍の山林の景色もがらりと面目を改めてゐるのに相違ない。

前の山も右の畑地も、それを隔てゝ向うの山も、左の蜜柑畑の處も、それから前に遠い箱根山までも、こゝら一圓は悉く常綠針葉樹や濶葉樹が混生して、千年の綠の色を競ひ、斧鉞曾て入らない處女林のやうな美しくもまた床しい幽邃玄隠の景色が、僅かに百六十年の昔に見出されてゐたに相違あるまい。

尤も白隠さんは、禪家の中では近頃老婆親切な奇特な和尙さんで、遠羅手釜、汁談義、さしも草、おたふく女郎、一口歌などを初め、いろいろ通俗的な著書によつて、凡俗にも禪道のありがたさを分け與へようと、八十餘年の一生を少しも撓まずに骨を折られた人だから、人もよりつけぬやうに山深く逃げ隠れて、獨りよがるやうな隠棲を好かれなかつたのかもしれない。

それで自分で草創し乍ら靜かに隠居して居ることも出來なかつた此處の隠居寺なども、斯うした山淺く市近い場所へ平氣で建立めさつたのかも知れない。

「美哉山林」の語は、たゞ龍澤寺境内のお庭の眺めかも知れない。

「美哉山林」は昔のさまで今の事でけないと、此儘にむざ／＼思切ることは私にどうしても出來難いのであつた。誠堂翁は依然として一人先頭に立つて默々として歩む、高垣さんや松村さんが後ろから緩歩して來ることも亦初めの如くである。

私が中位にあつて獨り「美哉山林」を公案のやうにして考へ込み乍ら行く。

道は殆んど平坦というてもよいくらゐである。

箱根山の下で、此の谷の盡くる所あたりに、一叢の木立が見えた。

松杉が高く古く、さも神様でも在すらしく茂つて、後ろの山の半を掩ひ隱すほどに一塊りをなして居る。

あれだろかと誠堂翁が立ちとまるのに私と疋野さんとが追ひ及ぶ。

「あれではない、左手へ入つたやうに思ひます。」と、疋野さんは幼少の頃に參詣した朧氣な記憶を喚び起してゐる。何れにしても遠くない事だけは確かになつた。

道は又た村に入る。

熟柿に留守番をさせて、人は皆な畑に出てゐるのか如何にも靜かだ。

欅や藪も交つて、柿の景色も一しほ趣を加へる。

東京の町に見るのと同じな赤色にタバコの三字を白ぬきにした看板を出した家がある。

近づくと店は鎖してゐるが、山茶花の垣は人の入るに委せてある。

これも秋收の爲め田圃へ家を舉り出てゐるのに相違ない。鷄でも鳴くか、犬でもとがめると誂へ向だが、その聲も聞けない。

不思議に小鳥さへ啼き渡らない。

明るい死んでゐるやうな此村を右に曲り左に折れて行くと、又た正面に箱根山を仰いで、前に見た一塊りの常磐木の木むらが眼の前に踞つてゐるのであつた。

箱根山は早や頂を紫に染めかけてゐる。

コト〳〵と鳴る水車から道は左へ分れる。

疎松の下に圓通山の寺號を刻した巨塔が立つて居る。

それを上つて數歩で右に曲ると初めて「美哉山林」の絵卷の第一面を認めるのであつた。

老松と老杉とが亭々として高く茂つて道を挾んでゐる。折ふしの山風に颯々と鳴るのが、境が靜かなため、人の心身を洗ふのである。

白隱さんに日頃から一呑みにされて居る爲めでもあらう、此の頭上を鳴る松籟が私の襟元を冷し私の魂を叱るやうにも思へた。

白隱さんも私の好きな友達の一人である。

磐珪さんと白隱さんとは、鎌倉の宗演さんと八幡濱の不山さんとの對照が當嵌る。

白隱さんは派手で通俗で當時に流行つた所は伊豫や播州に燻つてゐた磐珪さんに比べて物足らぬ所がある。

なんのかんのと言ふ者があるにせよ、私には白隱さんも大切な一人のお友達といふより御師匠さんといふべき方である。

繰り返し卷き返して自分を襲つて來る病氣、家族の不幸など、初めの内には私も腹立たしさを覺えてゐた。

恨みもした。

疑ひもした。呪ひもした。悲しみもした。

それが度重なるにつれて、平氣になり、嬉しくなり、信ぜられ、祝福せられ、喜ばしくなつて、身體は日に〳〵月々に腐つて行くのに拘らず、心だけは腐らずに、飽迄も清く生き生きて行くことの出來るのは、白隱さんと交際をした御蔭も決して少くはないのだ。

此の「美哉山林」の隱居所を訪ねて見ようと思つたのも其爲めなのであつた。

だから松籟を聽いても、何だか草裏漢、糞袋などと冷罵されでもするやうである。

やゝ緊張させた氣持で靜かに歩を移してゐると、後の方から俄かに物音が騷々しい。

ふりかへると四五の騎兵が馬蹄輕く此の寂寥を破るのであつた。

白隱さんは其の夜船閑話を「馬枯箕を咬んで、午枕に喧し」といふ名句で結んで置かれたが、其馬が今茲處へ現れて私を驚かすのも面白い。

山門前へ來て騎兵は馬を杉の幹に繋いで下り立つ。

私が上つてゐる石段を下から來て驅け上る。靴の音が堂々として靜かさを亂す。

國師の隱居所としてふさはしい小やかな山門を潛ると十歩の前に茅葺の本堂が寂びた色に後ろの樹林から浮き出してゐる。

それに木香の新らしい瓦屋根の庫裡が續く。

堂階の前に立つと、圓通山と書いた扁額が仰がれる。

沙羅樹下老衲と署してある。

其字形の悠暢とした趣を手帳に形取つたりしてゐる内に騎兵どもは「小さな寺ぢやねーか」とか罵りつゝ出て去つてしまつた。

模寫を終へて右の方を見ると大疑堂と扁した坐禪堂がある、堂後に鈴なりの熟柿が、さも「柿が落ちるか風が落すかそもさん、參」とでも叱してゐるやうだ。

禪堂と並んだ藏作りの不動堂は白隱さん在世中に出來たものとは思へない新らしさだが、堂前の空地は、散立してゐる槇大樹の間を秋の木の葉の一つも止めず清掃されてゐるので自ら莊嚴感を誘ふのである。

庫裡から案内を乞うて、廊を通つて本堂に出る。

方丈と彫つた扁額には至道庵主と署してあるから白隱さんの師匠の又師匠の無難禪師の書である。見易からぬ寶に出逢うたものだと見つめる。

恭しく本尊に一禮して庫裡の一間に落著く。尼僧が出て親切に世話をされる。運ばれた茶をのんだり、柿を剝いて食うたりして、藏寶を拜見する。

住持が御留守だから大切なものを見ることが出來なかつた。

それでも白隱さんの書かれた畫だの書だの四五の軸物と白隱さんの草稿の綴本などを拜見する事が出來た。

書幅にも畫幅にも、それが白隱さんの手で書かれて、此の白隱さんの好みに出來た隱居所に、白隱さんの手垢乍らに置かれてあると思ふと、私はそのどれにも頭を下げるよりも接吻したいほどの強い刺戟を與へられるのであつた。

中でも綴本の原稿は、世上に多く見る白隱さんの軸物のやうに心内の活氣に委せて筆を呵したやうなのとは違つて、極めて敬虔な態度で、其日々々の氣分次第で、夫れ〲多少の相違はあるにしても、如何にも落ついた、さうして伸び〲とした、さうして謹嚴らしい、溫和の裡にも威嚴のあるやうな、何處やらに閒味を持つて豐肥な氣分のあるやうな、白隱さんそのまゝが目の前に現れて來るのを覺えさせるのであつた。

嗟君未到金陵日。
寡婦掃眉坐綠氈。
君既到金陵城後。
慈鳥失母啼寒煙。

といふ達磨忌の達磨贊や、雪村の出山像に題した、

琢破大圓鏡。活埋黑暗黑。
一片瘦稜骨。鷺兒過雪村。

だのの如何にも自然感の滿ちた自在な筆致を手帳に模したりして、私は年來の渇望を遂げ得た歡喜に心の躍るのを制し得ないのであつた。

併し未だ「美哉山林」の本舞臺には上り得ない。

私達が藏寶を展觀してゐる座敷からは、庭は少し丈け見えるばかりだ。

それは本堂と、さうして續く庫裡との後ろを壓するやうに山が迫つて居るので、其山を利用した泉石のたゝずまひは坐ながらに總てを眺めに入れ難いのである。

其處で庭へ下り立つて見た。

其處は胸を突くやうな急勾配の山を取り入れた林泉であつた。

老いて且つ丈高い松や杉の木立が空を限つてゐて、それが奧深く容易に際限がないやうに見えてゐる。

その松杉に取圍まれた傾斜面の山地には、常綠樹や濶葉雜木や、椿や、槭やドウダン躑躅や山躑躅や霧島躑躅だのさては修竹や萩の植込など、疎ならず又た繁ならず、程よく配植されてゐる。

さうして山の中腹に近く轆々と落ちる懸水の末が、清い溪水となつて、さや〳〵と音を立てつゝ樹間を縫うて走る。

常磐木と交錯してゐる槭とドウダンとは、飽まで紅に染まつてゐるのが、木の間を洩る西日を受けて、目の前一體を火の海と化し、私の眼を眩し、私の心を奪ひ去つて、暫くは雙手と佇立させるのであつた。

ア、「美哉山林」は斯んな時にでも吐かれた言葉なのであつたらうか。

七十六の齢を迎へた白隱さんは、擧て弟子共の切なる願ひに委せ、龍澤寺を創設させ、其の二月に開山の式を擧げたのであつた。

併し地域が少し氣に入らなかつた。

弟子頭の圓慈は老師の顏色を知つて、箱根山主に易地を願つた。

其願は翌年の春になつて聽屆けられた。

弟子達は諸國から多數集つて來て、夜を日についで工事にいそしんだ。

秋の九月になつて落成した。

其式として白隱さんの說法會が開筵された。

白隱さんは、老軀を提げて講壇に立ち寶峯塔銘を提唱した。聽衆の道俗は道を遠いともせず集るもの百人を超えた。

その人々は皆んな老師の七十七歳を壽いで、お目出度うと宣べ合つた。

新に隱居寺が出來、そして國々の信者が集つて、それぞれ偈を作つて自分の壽を祝つて呉れたのを受けて、白隱さんは滿足らしい淡い嬉しさを覺えた。

其の記念すべき九月の或日も暮れて夜に入つてから白隱さんは獨り方丈の爐火の上に沸る鐵瓶の音を耳に澄し乍ら、靜かに來し方を振りかへつて見た。

思ひ浮べられるのは、禪家の宗匠となつて、天下の雲衲の來參を受けるやうになつた四十歳以後の事よりも、寧ろ身を行雲流水に委せて諸國の大德に歷參した修行時代のことが多いのであつた。

一番に思ひ浮べたのは山城の白河に白幽眞人を訪ねて、內觀修養の訣を探つた時のことであつた。

每日々々高くはないが熱が出て、どうしても下らない。

呼吸をするのが苦しく、兩脚は氷のやうに冷え切り、耳はいつもがん〳〵と鳴つて、寢ると每晩のやうに寢汗がびつしよりと出る。

醫者はもう見込みがないと見限つてしまつた。

アノ時に宗格さんが白幽眞人の事を話してくれなかつたら、今頃自分は地獄の鬼になつてゐることであらう。

思ひ出しても身の毛がよだつ！

宗格の注意によつて、强いて病軀を起して、美濃から江州を過ぎ山を越えて白河の邑へ著いた。

里人に敎へられて細い溪川に沿うて上つた。

一里許りで溪が盡きて、もう登る道がない。

眞人の庵は何處かと見上げると、遠くの梢の上に黄色い四角なものが、ふは〳〵と風に弄ばれて揺れて居る。

それを不思議と思つて目あてにして岩角を踏み超え荊叢を押開いて上つた。

冬のこととて雪は草鞋をかみ、たゞさへ冷え性の足は他人のもののやうに觸つても感覺を失つた。

やつとの思ひで黄色く搖れる物の所へ著くと、それは蘆の簾であつた。

冷さと寒さとが一時に全身にこみ上げて、もう最後かとさへ思つた。

暫く其前で休んで靜かに息をついて、やゝ人間心地に還つたので、畏づ／＼簾を擧げて中を覗くと、人間のやうな物が何だか坐つてゐるやうに見えた。

イヤ目を閉ぢた人間が一人端然と坐つてゐるのであつた。膝まで垂れてゐる菲なす髮の中に猩色の艶やかな朱ら顔が包まれてゐるのを見た。

簾を擧げたのに頓著なく、平然として瞑目端坐して動かうともしない。

窟のなかは四尺角ぐらゐ、茶碗も土瓶も桶も何にもない。

唯だ中庸一卷と、老子、金剛般若經とが置いてあるだけであつた。

永年雲水で難行苦行を重ねた自分も流がに驚かされた。斯うして白幽眞人から養生法を傳はつて生きかへつたことを思ひ浮べると、其の當時の氣持にでもなるのか、咽喉が乾くので白隱さんは、傍の茶碗に爐の鐵瓶から湯をついで口を霑した。

さうして又た回想の山路を辿らうとするのであつた。

岩瀧山で毎日半掌の米で生活をして道念を練つたことが想ひ出されて、其前の年に南禪寺の保福和尚に參禪した京の雲水生活を思ひ出したりして、暫らくはうつとり氣分になつて居た。

それからは、若州の鐵堂和尚だの、豐後の寂而和尚だの、濃州の馬翁和尚などを初めとして、錫を掛け、參究した先蹤の事などを次ぎ次ぎに想ひ浮べて、微笑したり、長嘯したりした。

さうして遂に越後高田の英巖寺で性徹和尚に參し、二月十六日の夜の鐘の聲を聞いて大省悟したと自惚れて、「三百年來まだ自分のやうに痛快に了徹した者はない、四海を一掃するに誰れか我が機鋒に當り得よう」と高い鼻を蠢かしてゐたことを想ひ出すと、人知れぬ恥羞を覺えるので、獨り苦笑ひをした。

其の鼻を蠢かしてゐる時であつた、同參の宗格さんに敎へられて、共に信州の飯山に的翁端庵主に參した、的翁と種々問答が劇しくて遂に翁が「趙州無字作麼生か會す」と出て來たので「趙州の無何處に向つて手脚を著けよう」と外らすと翁は出しぬけに指で我が鼻を抑へ乍ら「アア、でも大きな手の著け樣ナ」と來たには思はず冷汗を流したつけ。

ア、彼の時は息の根のとまるやうな思ひであつた。

翁は「この穴倉の死禪坊め、そんなことでどうする積りだ」と罵つて大笑をあびせかけたには愈々穴に入りたい思ひをした。

的翁に就かなかつたら、自分はまだ人間を知ることが出來なかつたかも知れない。

有り難いことであつた／＼。……

此處まで追懷を續けて來た時に、今まで死んだやうに靜かであつた方丈の外に、コトリと音がして梢がさや／＼と鳴り始めた。

木枯が裏の山へ訪れたのであつた。

白隱さんは鈴を振つて弟子を呼んだ。

圓慈が出て來て「もう更けましたに、まだ御目ざめで」

と言つた。

白隠さんは爐の始末を圓慈に委せて床の中に横になつた。

其翌日の事である。すが／＼しい夜の明け方を、白隠さんが庭下駄を穿いて、此山を漫歩したのは。

さうして尾いて來た雛僧を顧みて「美しい山だなう」と言つて見とれたのである。

私が今見る紅葉は夕日に輝いて居るが、白隠さんのは秋の末だ。若い紅葉の朝露に濡れてゐるのに咏歎の聲を立てられたのに相違あるまい。

私はさうぢやと極めねばならぬやうに思へた。

斯んな事を留め度もなく考へつゝ、石に踞して山を見上げてゐると、林が鳴つて風が上から下へと吹き下ろす。紅葉がサラ／＼と散つて地に敷き溪に浮ぶ。

誠堂さんや其外一行の皆んなが、庭へ登つたなり出て來ぬ私を俟ちわびて居られると思つて、散紅葉を浴びつゝ山を下りて庫裡の前へ出るのであつた。

白隠さんは此隠居所を咏歎し乍ら、一年と留ることをせずに、法施して四方を經めぐるのであつたやうに、私も永年の思ひを達して茲に遺址を訪ひ乍ら、二時間も留ることを許されずに倉皇として辭し去らなければならないのであつた。

門を出る頃から、夕風が強く松の梢をゆすぶり始めた。此風では「美哉山林」の紅葉も、今宵の中に散り盡すことでもあらうと、惜みつゝ山を下るのであつた。

諸家略年譜

大和田建樹（前刊本全集第三十七卷參照）

落合直文（同上）

大町桂月（同上）

鹽井雨江（同上）

武島羽衣（同上）

馬場孤蝶（同上）

平田禿木　名は喜一。明治六年二月十日東京日本橋區伊勢町に生る。神田區淡路町共立學校（今の開成中學）に學び、二十三年第一高等學校に入學。二十六年一月、透谷、藤村、秋骨、孤蝶等と雜誌「文學界」を起す。二十七年一高退學、二十八年東京高等師範學校英語專修科に入學、三十一年卒業後、附屬中學校に教鞭を執り、三十四年高等師範學校に轉ず。三十五年四月、上田敏と雜誌「藝苑」を刊行、後鷗外博士の「めざまし草」と合併、「藝文」を刊行す。三十六年二月英國に留學、牛津大學に英文學並びに言語學を修め、三十九年六月、歸朝。高等師範、明治大學、學習院、第三高等學校等に教鞭を執りしも、四十四年教職を去り、以後二十年に亙り著作に專心、「最近英文學研究」「英文學印象記」「アルス英文學叢書」「泰西名著文庫」「近代名著集」「世界名作大觀」等を刊行す。四十五年九月、千葉縣葛飾なる水野氏の女と結婚、六男二女あり。

戸川秋骨　名は明三。明治三年十二月肥後國玉名郡に生る、但し父母共に江戸の人なり。明治學院に入り、續いて東京帝國大學文科大學の英文選科を卒業。明治三十一年山口高等學校の教師となり、明治四十三年以來慶應大學の教師を務む。明治二十六年雜誌「文學界」の創刊以來、その同人となる。海外旅行記『二萬三千哩』の著あり、随筆には「文鳥」「凡人崇拜」等あり。飜譯には、「エイルキン物語」「エマスン論文集」「グリイン英國民史」等がその重なるものである。

遲塚麗水　別號松白、本名金太郎。明治元年十二月二十九日、駿河國沼津町に生る。學歴なし。二十三年報知新聞記者となり、二十六年七月雜誌「國民之友」夏期附錄に「不二の高根」を書く。二十七年五月征清役に從軍記者として渡鮮、「陣中日記」の著あり。同年十二月都新聞社に入り、記者、社會部長、理事を歷て、現に同社の編輯顧問たり。大正三年冬、支那山東に遊び、「山東遍路」の著あり。十五年三月渡支、揚子江岸を溯上、三峽を經て重慶より成都に入り、七月歸朝、「新入蜀記」の著あり。昭和二年三月より七月まで印度洋諸島を遊歷、ガンボヂャのアンコール、ワットの大伽藍に詣で、加藤肥州の臣森本儀太夫の息右近太夫の願文を發見、「南洋に遊びて」の著あり。昭和四年四月より七月に亙り滿鮮蒙古の各地を巡遊す。著作には小説數十篇、前記紀行文集の他「日本道中記」「山水供養」「ふところ硯」「山水往來」をはじ

め數十に及ぶ。

志賀重昂　矧川の號あり。文久三年十一月十五日愛知縣岡崎に生る。明治十七年札幌農學校卒業。十九年南洋諸島、濠洲、新西蘭、布哇を巡歷、二十年「南洋時事」を出版、東京地學會より終身名譽會員に推薦せらる。二十一年、三宅雪嶺等と政教社を起し、雜誌「日本人」を發刊、論壇に雄飛す。「英文地理書」「英文萬國史」を米國に於て出版。二十七年、「日本風景論」を上梓。二十九年、進步黨結黨成るや名譽幹事に推され、三十年松隈內閣の山林局長、三十一年外務省勅任參事官、次いで參與官に任官。三十二年福建鐵道敷地踏査のため渡支。三十四年、「河及湖澤」を出版。三十五年南鳥島に渡航。衆議院議員に當選。三十七年、日露戰役に從軍、旅順攻圍戰を觀戰す。三十九年、樺太境界畫定行に從ふ。四十三年、南洋、濠洲等を巡歷。阿弗利加を巡歷す。ブラジル地學協會名譽會員に推薦せらる。四十四年「大役小志」、四十五年「旅順攻圍軍」「世界山水圖說」出版。大正元年各國巡遊。三年萬國阿米利加會議に出席、後、南米各地を巡察、翌年歸朝。六年、英國皇立地學協會名譽會員。八年『國民當用世界當代地理』を出版。十一年、南阿、南米を巡歷、十二年歸朝、更に印度、中央亞西亞、歐米諸國巡遊、翌年歸朝。十五年『知られざる國々』を出版。昭和二年四月六日逝去。その全作は「志賀重昂全集」八卷に收められてある。

柳田國男　舊姓松岡。明治六年播州國[illegible]に生る。東京帝國大學政治科出身。貴族院書記官長たりしことあり。又歐米を漫遊せしことあり。年少詩をよくし、田山花袋、宮崎湖處子、太田玉茗等と抒情詩を著す。今は傳說の研究に沒頭し、雜誌「鄕土研究」を發行してゐる。現東京朝日新聞編輯顧問。

小島烏水。名は久太。明治七年讃岐國高松市に生る。父寅信、母[illegible]。八年一家上京、十一年横濱に轉住、本籍を神奈川縣に移す。二十一年横濱商業學校に入學、二十五年卒業。二十九年横濱正金銀行に入る、外國課及內國課員。三十七年、吉村氏長女好子と結婚。三十八年豫金課長。三十九年山岳會（後に日本山岳會）を同志と共に創立、雜誌「山岳」を年三回發行、今日に及ぶ、現幹事、評議員。大正四年浮世繪研究雜誌「浮世繪」を發行、大正九年五十五號にて廢刊。同年七月、横濱正金銀行ロスアンゼルス分店主任。八年、桑港支店長。十年父歿し、十三年母歿す。昭和二年二月歸朝、頭取席電信課長、現在に至る。三年雜誌「浮世繪」再刊、四號にて廢刊。此年四月在米中の蒐集浮世繪版畫三百四十五點を東京朝日社に展覽、講演會開催、解說目錄を作り同社より出版す。四年、同志と共に浮世繪志會を組織し、雜誌「浮世繪志」刊行、今日に及ぶ。著作には『扇頭小景』（明治三十二年）『木蘭舟』『銀河』（三十二年）『旅行談』（三十五年）『不二山』『日本山水論』（三十八年）『烏水文集』『山水無盡藏』（三十九年）『雲表』『富士大觀』（四十年）『山水美論』（四十一年）『日本アルプス』第一（四十三年）『日本アルプス』第二（四十四年）『日本アルプス』第三（四十五年）『浮世繪と風景畫』（三年）『日本アルプス』第四（四年）其他、新聞雜誌に寄稿せるもの多々あり。

吉江孤雁　名は喬松。明治十三年九月、信濃國東筑摩郡鹽尻村に生る。松本中學校を經て三十八年早稻田大學英文科を卒業。同時に國木田獨步經營の近事畫報社、後に獨步社に

入り雜誌「新古文林」を編輯、四十年獨歩社破産解散後、早大英文學科講師となり、大正五年同校留學生として渡佛、主に巴里ソルボンヌ大學に學び、九年歸朝、現に同校教授たり。散文詩集『緑の雲』旅行記『高原』(四十二年)文集『青空』(大正元年)『砂丘』『霧の旅』(二年)論文集『純一生活』『愛と藝術』『神秘主義者の思想と生活』『近代詩論講話』『旅路』『緑の園』(四年)『佛蘭西印象記』(十年)『佛蘭西文藝印象記』(十二年)『近代文藝と藝術』『若き自然』(十三年)童話集『角笛の響』(十四年)『輝く自然』『自然の寂光』『自然の沈默』『新自然美論』(十五年)『南歐の空』(昭和四年)等の著作單行の他、坪内博士作「役の行者」「新曲浦島」の佛譯、ツルゲネエフ、モオパッサン、マアテルリンク、ロティ、アナトオル・フランス、ラスイヌ、ドウ・キュレル等が作品の邦譯あり。

河東碧梧桐 明治六年二月二十六日伊豫松山千舟町七十一番戸に生る。小學中學を經て、明治二十六年京都第三高等學校入學。翌二十七年九月、仙臺第二高等學校に移る。同年十一月退學。明治二十八年日本新聞社入社。明治三十九年同社員一同と共に退社。大正二年同人俳句雜誌「海紅」發刊。大正八年、大阪に創立されし大正日日新聞社入社、翌九年同社解散の後、歐米漫遊一年。大正十二年個人雜誌「碧」發刊。大正十三年同人雜誌「三昧」發刊。現今に至る。明治三十年前後より、今日に至るまで、俳句其他著書約十數種あり。

坂本四方太 明治六年二月、因幡岩井郡大谷村に生る。文泉子と號す。明治二十九年、京都第三高等學校卒業、同年九月東京帝國大學文學部國文科入學、同三十二年七月卒業文學士の稱號を受く。同三十三年東京帝國大學助手に任じ、後同學司書官及助教授に任ず。明治二十九年以來親しく子規と風交あり、根岸の子規庵に出入す。俳句漸く堂に入る。明治三十三年より子規居士に就き文を研究す。寫生文の主唱せらるゝや實に其先蹤を著く、爾後專ら寫生文に力を致し、創作數十篇、子規歿後の寫生文界に牛耳を執れり。大正二年病を以て大學を辭し、大正六年五月十六日長逝す。東京駒込染井墓地に埋む。

篠原溫亭 本名英喜、明治五年十一月五日、熊本縣宇土郡宇土町に生る。はじめ京都本願寺文學寮に學び、後東上して國民新聞社に入る。中頃「反省雜誌」の編輯に携はりしことある外、終身同社員たり。寫生文の作品は、明治三十八年七月「ホトトギス」に出でたる「最初の寫眞」をはじめとす。明治年間に小說「不知火」「二年越」等の著あり。大正十三年六月、文集『その後』を上梓す。十四年四月、腦溢血に罹り、數箇月にして全く癒えしも、翌十五年八月、病再び發り、九月三日を以て逝く。享年五十五。府下大井町篠谷養玉院(俗稱大佛)墓域に葬る。

寒川鼠骨 名は陽光、松山藩士寒川朝陽の第三子也。明治八年十一月松山市三番町に生る。二十六年京都第三高等學校法科に入學、卒業前退學。上京新聞「日本」に入る。同鄉の先輩にして同僚たる子規の門に出入し、俳句を弄び又寫生文を試む。「日本」廢刊後、その後身「日本及日本人」に從事し、以て今に至る。

附録

春嵐

島崎藤村

春

一

「岸本君、七月二十二日に東海道——吉原まで來給へ。其日を期して東西から富士のもとに會することとしよう。君の都合もあらうと思ふから爲替で旅費を送る。」

斯ういふ意味の手紙が東京に居る友達から行つたので、いよ〳〵岸本も西の方の旅から歸つて來るといふ報知があつた。東京の友達はそこで新橋を發つ。一行三人、青木、市川、菅——岡見兄弟は都合があつて加はらなかつた。

連中が東海道を下つた頃は明治二十六年の夏である。大分其日の汽車は込んだ。一行は疲れて吉原の宿に着いた。

會合の場所は街道筋によくある普通の旅人宿である。二階建の離座敷があつて富士は好く見えた。三人が占領したのは其二階の一室で、離座敷の方には他に泊客も無い様子。時々顏を出す四十恰好の家婦より外に放肆な談を妨げるものが無かつた。結句氣樂な宿である。

汚れた壁の上に寢轉び乍ら、三人は岸本の來るのを待つて居た。

「最早見えさうなものだなあ。」

と言つて青木は身を起した。

青木は瘦ぎすな方で、新しい紺飛白の單衣を着て、兵兒帶を無造作に捲付けて居る。寛けた懷からは白い夏シャツがあらはれて居て、その紐釦の外れたところに、すこし胸の肌が見える。この男の物を視る眼付、迫つた眉、蒼ざめた頰、それから雄々しい傲慢な額なぞの表情は、傷つけ破らざれば休まずとでも言つたやうな、非常に過敏な神經質を示して居た。懺悔するやうな口元には何となく人の心を牽引けるところが有つた。それを見ると、世の中の惑溺や汚穢を嘗め知つた人の口脣を思ひ出させる。そこから力の籠つた聲が出る。

「岸本君も困るでせうね。」と青木は市川の方を見て「是から將來奈何する積りなんでせう。」

「さあ。」市川も身を起した。

「さう何時迄も岡見君の世話に成つては居られないだらうし。」

「實は僕も其を心配して居るんです。」と言つて市川は青木の顏を眺めた。

市川は高等學校の制服を着けて居る。薄鼠色の夏の上衣に包まれた優しい肩、短く黑い髮、蒼白く廣い額、鷲の嘴を見るやうな隆い立派な鼻——すべて彼の風貌に顯れたところは、東京の下町で堅氣な家庭に育つた人であるといふことを思はせる。彼の細い柔順な眼は、大人のやうな思慮を表して居て、若者ながらに世上の人を睨むと言つたやうな氣があつた。三人の中で、斯の男が一番年少である。

青木は粗末な烟草入を取出して、銀豆煙管でスパ〳〵やつて、

「しかし面白い變化さねえ、岸本君が家を飛出すなぞは。」斯う言出した。

「どうして彼の男が旅に出る時の勢は凄じいものでしたよ。」と市川は友達が出奔の當時を想ひ浮べるやうな眼付をした。「麵麭は天にあり、てなことを言つて——」

「はゝゝゝ。」

青木は嘲るやうな聲を出して笑つた。

斯ういふ談話の間、菅は横に成つたまゝ身動

きもせずに居る。

『菅君は可羨しいねえ。』と青木は考へ深い眼付をしながら、『實に菅君は平和だ。』

『先刻から寢つゞけぢやないか。』と市川も笑ふ。

『僕は眠つて居やしないよ。』と菅も笑出した。『斯うして、君等の談話を聞いて居るんさ。』

二

菅は寢返りを打つやうにぐるりと身を返して、聽て俯臥のまゝ頰杖を突いた。彼は寢乍ら謹聽といふ態度を執つた。心の好いこと無類といふ斯の青年の眼には哲學者のやうな沈靜がある。彼はまた年に似合はず毛深い方で、顎の邊なぞは綺麗に剃立てゝ居るが、濃く厚い鬚の痕は青々と人の眼についた。連中で彼を好かないものは無い。彼は年寄にも子供にも好かれさうな性質である。

其時、市川は嘆息して、『實は僕も、もうすこしで岸本君の後を追ふところだつたのです。』

『君も左樣いふ氣に成つたかねえ。』と青木は同情のある語氣で言つた。

『なにしろ僕のところなぞは事情の多い家庭で、姉と養子の折合は好くないし。』と市川は言ひかけて、暫時對手の顏を眺めて、

『姉は又、何事も知らないものですから、一途に僕を頼りにしてるんです。僕が旅にでも出て了はうものなら、後は奈何なるか知れない。今一步——といふところで、僕は考へました。』

『そこで考へるのが至當だね。』

『岸本君の行き方は左樣ぢや無い。彼の男が考へる時分には、最早一步踏み出して了つてる。』

『そんなら見給へ。』と青木は力を入れた。『岸本君のやうに破つて出ようとしたところで——畢竟奈何なる。そこが悲しいところさね。束縛といふ執念深い奴は何處迄も人間に随いて廻るよ。』

市川は胸を突出して、『兎に角、危險い藝を演つたものだ。』

『はゝゝゝ。』と青木は苛烈い聲で笑ひ出した。旅の友達の爲に哭く心と、局促とした自分の身を嘲る心と、斯の二つが今彼の胸には一緒に成つて居る。

『流石の岸本君も弱つて來るだらうなあ。』と市川が言つた。『行くところまで行つて見なければ承知しないといふ男だ。』

『彼の男は昔から彼樣いふ風でした。』と菅も寢乍ら顎を突出す。

青木は癖のやうに頭を振つて、『僕に言はせると、あまりに先生は熱し過ぎる。熱するのは面白いが、馬車馬ではツマらん。』

『馬車馬！』市川は横手を打つた。

『彼樣傷くなつて了つても困りものだ。』と青木は笑ひ乍ら、二人の對手の顏を見比べて、『奈何でせう、君、彼樣いふ男には少許酒でも飲ませて見たら。はゝゝゝ。』

『酒を飲ませるか——こいつは面白からう。』と菅は笑ひ乍ら身を起す。

『菅君が斯ういふことを言出すからねえ。』と市川も一緒に成つて笑つた。

不圖物の音がした。

市川はそれを聞きつけて、耳を澄して居たが、人が來たのでも何でも無いと解つた時は、菅と顏を見合せて笑つた。待つても、待つても、岸本は見えなかつた。

『君、君、』と青木は待ち倦んで、『斯うして居たつても仕樣がない。すこし其邊を散歩いて來ようぢやないか。』

聽て三人は連立つて二階の梯子を降りて行つた。

三十分許り經つて、斯の宿へ來て草鞋を穿い

だ一人の青年がある。久留米飛白の單衣に角帶を捲付け、夏帽子、脚絆、尻端折といふ風體で、肩へ掛けるやうにした風呂敷包二つ、他には大和の檜木笠も携へて來た——斯の男が岸本だ。

彼は二階へ案内され、そこで脚絆の紐を解いた。さあ、友達は容易に歸つて來ない。青木や市川やそれから菅の置いて行つたもの、洋傘だの、手拭だの、其他手荷物の類が室內に散亂つて居る。急に熱い淚が岸本の頰を傳つて流れて來た。彼は自分の汗臭い風呂敷包に顏を押宛てゝ、激しく泣いた。

三

『彼程苦勞して來乍ら、斯ういふ光澤で居るんだからねえ。』と市川は意味有りげなことを言つて、久しく逢はなかつた岸本の顏を眺めた。散歩に出掛けた三人は宿へ引返して旅の友達を取圍いたのである。

紅く泣腫れた岸本の頰は先づ三人の心を動かした。彼の粗く剛い髮、大きな鼻、體軀の割合に幅の廣い肩なぞは、寒い山國の生れといふことを示して居る。傲岸であると同時に柔弱な、過激であると同時に臆病な、感じ易いと同時に愚圖々々した——斯ういふ憐む可き性質は、彼の容貌を沈鬱にして見せる。彼と、菅とは同窓の友であつた。

『旅費まで送つて貰つて濟まなかつたね。』と岸本はかしこまつたやうに坐り直した。彼は難有いといふ面持で、可懷しい友達の前に手を突いた。

菅は氣の毒さうに、『あれは青木君から、君の方へ送つたんです。』

『恐しく物堅いねえ。』と青木は笑つた。『まあそんなことは奈何でも可いさ。』

長い旅の話が始まつた。三人の友達は熱心に岸本の顏を熟視つた。家を出、職業を捨て、友達と離れて、半歳の餘も諸國を流浪して來たといふことは、岸本が精神の內部をよく說明して居た。夫ほど彼は動搖して居た。彼が漂泊したところは東海道から西の方で、熱田から便船で四日市へ渡る、龜山といふところに一晩泊る、それから伊賀近江の國境を步いたが、其間には種々な寂しい悲しい旅の思を經驗した。黑ずんだ琵琶湖の水を眺めた。西京の舊い都も見た。須磨の海岸には暫時逗留して居たこともあつた。彼は又、伊豫行の汽船に乘つた。それは舊友の足立を訪ねる爲であつた。そればかりではない、彼は大和の方へも一月餘の旅をして、吉野の宿で岡見の兄に邂逅つた。

琵琶湖に近い茶丈の生活はまだ岸本の眼にあつた。彼が西京から淸水の畔へ引返して、それから斯の吉原へやつて來る迄、二月半ばかりの間は茶丈を一間借りて居た。其頃は自炊だ。終には小爐を煽ぐのも面倒臭くなつて、三度々々煮豆で飯を食つたこともあつた。亭主といふは大工が本職で、傍ら寺へ納める花を作つたし、內儀は內職に螢の籠を張る、子息は大津の下駄屋へ奉公して居る、斯樣な人達と岸本はしばらく同じ屋根の下に暮した。そのうちに、蛙が鳴出す。螢が飛んで來る、蚊に責められるのが苦いから彼は自分で紙帳を張つて、裾へは古錢を飯粒で貼付けて、澁團扇でバタ／＼風を入れては其內へ入つて寢た。『ソラ、また始まつた。』と家の人達が聞きつけてクス／＼笑つたものであつた。內儀はよく時の惣菜などを皿に盛つて持つて來て呉れた。ある晩、亭主が大津の方へ行つた留守に、紙帳の外で、『岸本さん、』と呼ぶ聲がする。岸本は默つて震へて居たが、それから急に可恐しくなつて、丁度友達から爲替が來たのを幸、逃げるやうにして江州の宿を發つた。尤も斯樣な事は三人の前では話さなかつた。

『憐む可き巡禮だ。』
と青木は心に繰返して居た。

四

間もなく飲食する物がそこへ持運ばれた。久しぶりの會合といふので、互ひに酒を酌みかはした。樂しい、放肆な、人の心を浮々させるやうな飲料は、結ぼれて解けない岸本の胸をも流れたのである。

『菅君はいけないんですか。』と青木は盃を差して、『すこしやり給へな。』

『いえ、駄目です。』と菅は手持無沙汰に見えた。『僕は奈良漬に醉ふ方の口なんですから。』

『全く菅君はやりません。』と岸本は辯護するやうに言つた。『さう／＼、菅君と一緒に高輪の蕎麥屋で飲んだことがあつた。彼の時は君、ホラ、二人で五勺誂へたつけね。』

『五勺誂へるやつが有るもんか。』と青木は笑ふ。

岸本は菅と顔を見合せた。菅は笑つて舌を出して見せた。

『市川君はいけさうだ。』と青木は銚子を持添へて侑めて、『まあ、もう少しやり給へ。』

『僕は蒼くなる方です。』と市川は兩手で頰を押へて見る。

『蒼くなるのは強いんださうだ。』と菅が物を頰張り乍ら言つた。

『一體、市川君は何歳でしたッけ。』と青木は何か思出したやうに、『僕は未だ君の年齢をよく知らない。』

『僕ですか。』と市川は笑つて、『僕は二十一で――たしか岸本君は明治五年でしたね、僕は六年だ。』

『左樣かなあ、皆な未だ若いんだなあ。』と言つて、青木は菅の方を見て、『菅君は寧ろ僕の方に近いでせう――どうも其髯の樣子では。』

『えゝ。』と菅は笑ひ乍ら、青々とした顎の邊を撫でた。

其時市川は眼鏡越に岸本の樣子を眺めて居たが、妙に意味有りげな微笑を浮べた。自分の膳の上にあつた盃をグッと一息に乾して、それを差し乍ら、

『岸本君の爲に西京の健康を祝す。』

と乙なことを言ひ出した。急に岸本は紅くなつた。

『西京といふ人の噂がよく出たッけなあ。』と菅も微笑み乍ら。

『是の男もなか／＼罪の深い方さ。』と市川は岸本の方を見て、輕く對手の膝を敲くやうな手付をした。『君、君、東京の方で心配してる人が有りますよ。』

青木も菅も笑はずには居られなかつたのである。

軈て共同の事業の話が出た。彼等の中には早くから社會に出て働いて居るものも有り、未だ親がかりで學校へ通つて居るものも有る。境遇は區々である。岡見兄弟の家といふは日本橋大傳馬町の鰹節問屋であつたから、一切の費用は其方で持出して、雜誌を出すことにしたのが其年の正月――丁度、連中の一人の岸本が旅に出たと同じ月であつた。

醉が廻るに隨つて餘計に遠慮が無くなつて來る。岸本が旅で書いた稿の中にある笑ふ可き文句の眞似なぞが始まる。菅や市川は盛んに其をやり出した。『馬車馬』といふ言葉も幾度か繰返された。眼の兩側へ手を宛行つて、鼻息ばかり荒く駈出して行く獸の光景なぞを見せつけられるので、岸本はもうショゲ返つて了つた。青木は又、聞いて貰ふ積りで、自分の書きかけの草稿を風呂敷包の中から取出して讀んだ。

それは元祿の大家が明治の代に復活つた頃であつた。外國の文學も次第に海を越して入つ

て來た。

英吉利の詩歌――殊にシェクスピアの戯曲は青年の間に讀まれた。よく連中の話頭にも上る。

其日も、青木は『ハムレット』の悲劇を持出した。彼は横濱で西洋の俳優が演じたのを見たといふ。その舞臺面の話から始めて、ハムレットに扮した男の身振手眞似までやり出した。さあ、他の友達は眼を瞠る。中には口をモガ〱させて物を食ひ乍ら彼の方を觀て居るものもある。力の籠つた青木の聲は彼の名高い獨語を諳誦するに適して居た。彼は西洋人の寢言を借用して、實は自分の胸の底に蟠る言難い思を傳へようとするらしかつた。其時、胸を躍らせたは岸本で、青木の言ふことが一々思ひ當る。岸本は斯の友達に導かれて、今迄自分が考へて居たよりは、更に深く狂皇子の悲壯な精神を感得したやうな氣もした。青木に言はせると、ハムレットは最も悲しい夢を見た人間の一人である。斯の最も悲しい夢を見たといふ言葉が、妙に岸本の胸に響いた。青木は科白を遣つて居るのか、自分を自状して居るのか、解らなかつた。彼の眼――狂熱の光を帶びた彼の眼は燃え輝いた。彼は冷くなつた酒を飲んで、歔欷くやうに笑つた。

菅は足を投出し乍ら見て居た。

五

ハムレットを見せた青木は更にオフェリヤを見せると言出した。彼は醉つて起ち上つた。花束のかはりに白い帕子を振つて、清しい聲で歌ひ出したのは彼の可憐な娘の歌である。

"How should I your true love know
From another one?
By his cockle hat and staff,
And his sandal shoon.

He is dead and gone, lady,
He is dead and gone;
At his head a green grass turf,
And his heals a stone.

White his shroud as the mountain snow,
Larded with sweet flowers;
Which bewept to the grave did go,
With true love showers."

右譯歌

『いづれを君が戀人と
わきて知るべきすべやある。
貝の冠と、つく杖と、
はける靴とぞしるしなる。

かれは死にけり、我ひめよ、
かれはよみぢへ立ちにけり、
かしらの方の苔を見よ、
あしの方には石立てり。

柩をおほふきぬの色は
高ねの花と見まがひぬ。
涙やどせる花の環は
ぬれたるまゝに葬りぬ。』

(『おもかげ』の譯より)

友達仲間で斯の歌を愛誦しないものは無い。彼等は斯の歌を口吟む毎に、若々しい思想が胸の底に湧き上るのを覺えた。市川も岸本も酒の香に醉つて、青木の歌に調子を合せた。

『菅君。』

斯う言ひ乍ら、市川は沈着いた友達の手を握つた。彼は菅の顏を眺めて、樂しさうに身體を動つて、聽て笑出した。

『清さんは傳馬町ですか。』と岸本は思出したやうに、市川の方へ向いて尋ねた。岡見兄弟を區別する爲に、弟の方は清之助の名を呼ぶことにして居る。

市川は點頭いて見せた。

『岡見君は――』

『大磯の方でせう、暫時僕も逢ひませんが。』と市川は答へた。

其時青木は、三人の若い友達が睦まじさうに語り合ふ有樣を眺め乍ら、殘りの酒をやつて居た。連中で細君のあるものは青木一人である。彼は早く結婚した。二歳になる女の兒の親でありながら、漸く二十六にしか成らない。尤も、年齡順から言ふと、岡見の兄が一番年長者で、斯の人は三十近かつた。例の心やすだてから、岡見翁などと戲れに呼んだものであつたが、その翁ですら未だ獨身者で居る位で、他の連中と來てはいづれも世帶持の苦勞なぞを知らない時代にある。青木は今更のやうに、若い友達と、妻子のある自分と、その生涯の相違を引比べて見た。

『オヤ。』と市川が言出した。『岸本君は煙草を喫み出したね。』

岸本は近頃喫むことを覺えたといふ風で、洋銀の鉈豆煙管でスパ〳〵やつて見せた。

『大分手付が好いぜ。』と菅は笑つて見て居る。

『これでも君、餘程上手に成つたんだよ。』と岸本は煙を吹いて見せて、『旅に出ると種々なことを覺えるね。どうも手付が可笑しいなんて、西京では笑はれた。』

『ヨウ〳〵。』

市川は手を打つて笑つた。

其晩は斯ういふ談話で持切つた。彼等は七月の夜の明けるのも知らない位であつた。

六

翌々日の朝、四人は箱根へ向けて吉原の宿を發つた。各自おもしろい風俗をして居たが、就中青木は尻端折で、毛脛を出して、紺足袋草鞋穿、それに岸本が大和から持つて來たといふ檜木笠を借りて冠つた。途次盛んな笑聲が四人の間に起つた。沼津から三島までは乘合馬車がある。戲れに青木は鞭を執つて馬を驅りながら出掛けた。其邊は岸本が旅のはじめに歩いて通つた道路である。蠅の群は來て皆なの衣服に取着いた。

三島から山へかゝつて、午後の三時過には一同元箱根の宿にあつた。一夏箱根に夏期學校のあつたことがある。其時分、菅と岸本とは斯の宿に泊つて居たので、老婦とも心易い。其日も直に湖水に面した座敷を二間明けて貸して呉れた。粗末ながらも褞袍を出して、風呂を焚いて、夜具蒲團一切で、一晩三十錢づつの約束とは、諸色の安い頃である。

山の上は涼しかつた。木の葉の混つた山家らしい風呂を浴びた後、旅慣れない市川は痛さうな顏付をして、水膨れのした足の肉刺を苦にして居る。

菅は看て取つて、『君、煙草の脂を煉つて貼けると好いよ。』

『ナニ、そんなことをしないでも、切つて水を出すのが一番だ。』と岸本が言ふ。

『咎めやしないかナ。』と市川は顏を顰めながら。

『大丈夫、まあ僕に行らして見給へ。』

と岸本は小刀を取出す。市川は兩足を友達の前へ投出して、

『どうしても違ふなあ、そこは經驗が有るからね。』と言つて笑つた。

何となく部屋の内は濕氣臭かつた。屋根の上の方では、しきりに鶯や郭公の啼く聲が聞えた。四人は胡坐をかく、寢る、思ひ思ひにやつ

て、空想を誘ふやうな鳥の歌に耳を聳らせて居た。急に市川は横手を打つた。彼は何かめづらしい事實でも發見したかのやうに叫んだ。

『確かに細君以上だ。』

斯う言出した。

『よく君は人を喫驚させる。』と言はぬばかりに菅は振向いて見る。

『菅君、菅君。』と市川は岸本の方へ指しながら、『この着物は西京が縫つて呉れたんだとサ。』

『へえ。』と菅は面白半分に。

岸本は苦い顏をした。『市川君、左樣君のやうに言ふから困る。實際僕は西京の世話に成つたよ、着物の事から、何から——一切。』と彼は妙に生眞面目な調子で、更に言葉をついで、『僕も君、旅に出て他に頼る人が無かつたもんですから、其を西京も氣の毒に思つて呉れたんでせう。』

連中の談話に土地の名が出る時は、必と何か謂れがあつた。是は仲間内の符牒のやうなものである。

『まあ、左樣曲解しないでも可いさ。』と言つて市川は岸本の顏を眺めたが、幾分同情のある語氣で、『眞實なんですか、西京が君に懷劍を贈つたとか言ふのは。』

『ええ。』岸本の顏は紅くなる。

『如何いふ積りで彼樣いふ物を君に贈つたのか、其を西京に聞いて見たいッて、しきりに岡見君が左樣言つて居ましたッけ。』

『あれは母親さんの形見なんださうです。』

『形見?』今更のやうに市川は事の眞相を看破したらしく點頭いた。『しかし、君も非常な難局に立つたものさ。』

岸本は默つて爪を嚙んで居る。

『まあ、聞きたまへ。』と市川は言葉を續けた。『あれから岡見君が盛岡を呼寄せて、何とか貴方も心を決しなければ成りますまい、實は岸本君はこれ〳〵です、と言つて聞かせたといふ話サ。』

例の符牒が復出て來た。

『すると、盛岡が對手の名前を聞きますから、』と市川は手眞似をして見せて、『それは貴方が日頃姉さんのやうに思つてる人です、と言つたんださうです。西京と聞いた時は、流石の盛岡も柳眉を逆立てたといふ話でしたッけ。』

急に若々しい血潮が岸本の頰に上つた。其時高い笑聲が青木と菅の間に起つた。市川も二人と顏を見合せて笑つた。

『ですから、』と岸本は言ひかけて、困つたやうな顏をして居たが、軈て決心の定つた調子で、『僕は盛岡に逢つて見る積りです。逢つて何もかも話す積りです。その積りで今度出掛けて來ました。』

『青木君、』と市川は振向いて言つた。『奈何いふことに成るでせう、是方が盛岡に逢つて見るとしたら。』

『盛岡かい?』と青木は戲語のやうに、『そりやあ君、岸本君でなくッちやあならないと言ふに極つてるサ。』

『ヒヤ〳〵。』市川は笑ひ轉げた。

七

青木は瞑想的な眼付をしながら、若い友達の談話に耳を傾けた。彼が今背負つて居る重荷は、群つて集つて他から無理に背負はせられたやうなものではない。彼の早い結婚は決して強ひられた儀式ではなかつた。細君の操を迎へるに就いては兩親は寧ろ反對した位である。操は實に彼の戀女房である。二人が耶蘇の會堂へ急いで、そこで結婚の式を擧げる前、いかに相思の情の濃やかであつたかといふことは、斯う青木が白狀して居るので知れる。

「もし我が彼女に會はぬ前の事を思へば、侘しげなる野中の松に風の當り易きがごとく、世の事物に感觸すること多かりし。彼女の情を得たる後は、物として春の色を帶びざるはなく、自ら怪しみて霞の中に入りたるかと思はるゝ程に、苦く、辛く、面白からぬ物に隔たりて、甘く美しく優しき物にのみ近づきぬ。肥太りたる駒にうち乘りて、春の野に遠乘したる時、菜の花の朝日に照りかゞやきたる畔を過ぎて、緩々と流るゝ小川の岸に駒を立てたる心地は——此戀の眞味なり。」

戀愛は剛愎な青木を泣かせた程の微妙な音樂であつた。此世に屬いた物と言へば、名でも、富でも、榮華でも、一切希望を置かないと言つたやうな、一徹無垢な量見から、實世界の現象悉く假偽であるとまで觀じた程の少壯な青木ではあつたが、唯一つ彼の眼中に假偽でないと見える物は戀愛であつた。彼のやうに戀愛の思想を重んじ、また其を憚らず發表したものも少から。彼に言はせると、戀愛は人世の秘鑰である、戀愛あつて後に人世がある、戀愛を抽き去つた日には人世何の色も味も無い——

不思議なことには、戀愛が造作もなく彼の眼を眩ましたやうに、結婚はまた造作もなく彼の心を失望させた。彼は厭世詩人に就いて斯樣なことを言つた。「そも〳〵彼等は社會の規律に遵ふこと能はざるものなり。社會を以て家となさざるものなり。普通の快樂を以て快樂と認めざるものなり。彼等は繩墨の規矩を厭離するの思想こそあれ、人世に覊束せられんことは思ひも寄らぬところなり。婚姻が彼等をして一層社會を嫌厭せしめ、一層義務に背かしめ、一層不滿を多からしむるもの、是を以てなり。」と言つたり、又、「あゝ不幸なるは女性かな、厭世詩家の前に優美高妙を代表すると同時に、醜穢なる俗界の通辯となりて、其嘲罵する所となり、其冷遇する所となり、終生涙を飲んで寢ての夢覺めての夢に、郎を思ひ郎を恨んで、遂に其愁殺するところと成るこそ、うたてけれ。」と言つたりしたのは明かに彼の心中を暴露したものである。

暫時青木は茫然と三人の友達の樣子を眺めたが、旅から歸つた岸本が唯其處に坐つて居るとは思はなかつた——彼は眼前に往時の自分を視るやうな氣がした。

蘆の湖に面した方の障子が一枚明いて居て、其間から深く青い水が見えた。冷々とした空氣は部屋の内までも入つて來た。

八

「あゝ。」と市川は嘆息して、談話を續けた。「岸本君のやうな寂しい旅に出て、思ひがけない親切な人に邂逅して見給へ。彼樣いふことに成るのは當然だ——菅君、まあ左樣ぢやないか。」

「はゝゝゝ。」菅は冷靜な門外漢といふ態度で居る。「こりやあ經驗のある者でなければ解らないことだね。」

「どうも胡散臭いと思つたよ。」と市川は笑つて、「岸本君が大和から送つて寄した論文なぞは餘程怪しかつた。」

「あれは、少々串謔の氣味だね。」と菅も笑ふ。

「オイ、岸本。」と市川は友達を拘寄せるやうにして、「左樣君は考へ込むから不可。苟くも何事か爲ようといふ男兒が女子の一人や二人位弄つたツて何だ。」

「市川君はなか〳〵エライことを言ふ。」と菅は濃い眉を動かした。

何時の間にか湖水の面が寂しく光つて來た。灰色の靄は低く垂下つて、對岸の眺望を奥深く見せた。山の上で鷄の音もする。

「市川君。」と岸本は思出したやうに、「傳馬町は別に變りが有りませんか。」

と尋ねた。傳馬町は矢張例の符牒である。市川は笑つて答へなかつた。彼はすこし顏を紅めながら、暗く岸本の手を握つた。

『君は女といふものを奈何思ふ。』斯う市川が言出す。『奈何な良い家庭に生れて來た人でも、何處かに女郎のやうな性質を備へてるね。』

『さあ――。』

と言つたつきり、岸本は返事に困つた。彼は市川の口唇から斯ういふキビしい言葉を聞かうとは思はなかつた。何故市川が斯樣なことを言出したか、それが岸本には種々の意味に納れた。彼は、斯の目敏い友達と逢つて、飽迄も人の心を摑まうとして居る。

『何と言つても、貧乏書生ぢや駄目だよ。』と市川は冷嘲を帶びた語氣で言つた。『しかし盛岡にしろ、西京にしろ、普通の女とは仕込が違ふ。關根さんや岡見君なぞに教育された人達だから、それで君等の心情も解るんサ。もし左樣でなくツて見給へ、いくら君が――』と言ひかけて、急に話頭を轉へて、『それはさうと、岸本君、加藤さんといふ人がお嫁に行つたさうだよ、なんでも法學士か何かの許へ。』

『加藤さん?』岸本はボンヤリした顏をして居る。

『ホラ―學校に居たでせう？ 君の心は最初彼女の方へ行きさうだ。斯う思つて岡見君なぞが見て居るうちに、ずつと盛岡の方へ傾いちやつた。はゝゝ、まあ左樣いふ噂でしたツけ。』

岸本は最早其人の名さへ忘れて居たのである。言はれて初めて思出すと同時に、彼は斯の友達に翫弄ばれるやうな氣がした。

『君、君、』と市川は戯れながら、『西京のやうな人は、まあ別物として、他に一寸した風流は幾何も有つたんでせう――はゝゝゝ、だつて君、旅の身ぢやないか。すこし聞かせて呉れても可ささうなものだ。』

『譃談言つちや不可。』

斯らは言つたものの、岸本は腹の中で斯の友達の言ふことを笑へなかつた。彼は市川の鋭い睨み方に驚かされた。實際、彼の馬鹿らしい性質は旅に出て幾人の女にホレたか知れない。思出して見ると、最早忘れて居る人は二人や三人ではなかつた。彼は自分で自分の性質を羞ぢた。

九

其晩は湖畔の宿で四人枕を並べて寝た。翌日、青木は東京の方へ向けて發つと言出して、彼の發議で、[illegible]た。青木は送られる人、殘りの三人は送る人、それで[illegible]に送別會のやうなことをした。送別會と言つても名ばかり、名物の赤腹を魚田樂にしたのが特に目に立つた位のものである。

青木は別離の盃を銜へて、眞面目に當時の所謂元祿熱を攻撃し始めた。彼は宗教の必要を説いた。ホオマアには希臘古神の精を見ることが出來る。シエクスピアには英國中古の信仰を見ることが出來る。西行には西行の宗教がある。芭蕉には芭蕉の宗教がある。唯俗眼で以て視ることの出來ないのは、一切の儀式や形式を離れて立つた宗教であるからであらう。彼等が宗教の觀念は具體的ではないが、其を見て直に宗教なしと言ふのは、宗教の何物たるかを知らない論者である。見よ、人類に對する濃厚なる同情、沈痛なる人生の批判――斯ういふものを宗教の一部分と名けることが出來ないであらうか。

斯ういふ神祕な青木の哲學には、贊成するものも有り、しないものも有つた。市川にしろ、菅にしろ、岸本にしろ、いづれも一度耶蘇の教會に籍を置いて、而も其を出た浪人である。彼

等は當時の所謂宗教に失望した連中である。市川に言はせると、吾儕は先づ今の時世を考へねばならぬ、何故に古代の文學が復活したかを考へねばならぬ、何故に某々等は成功し何故に某々等は失敗したかを考へねばならぬ――是が市川の意見である。吾儕は先づ破壞すべし、といふ意氣込で居る青木に比べると、市川の思想は餘程違つて居た。

「確かに見方は面々だ」と市川は青木の膝を叩いた。「昨日は彼樣な話をするかと思ふと、今日はまた斯ういふ雄渾とした調子が出る――」

青木は頭を掻いて笑つた。

「しかし、」と岸本は乗出して、「青木君も慾しいやつを打込んだものさね。僕は南京で彼の論文を讀みました。」

「單騎敵陣に立つといふ勢ですネ」と市川も横から。

「いや、すこし激しい彼樣な駁撃をやつて見たかね」と青木は微笑んだ。「他を非難する時に、一番よく自分の缺點が分るよ」と言つて、膝を抱いて、「それはさうと、陶山君は感心だネ。先生は彼の繁雑しい中で辛く系統を立てて居るんださうだ。あゝいふ僕のやうには出來ないよ」

「時に、陶山君」と岸本も言つた。「彼がまた新しいものが出來るさうですね。」

「あれは陶山君の方から觀みに來たんです。なにしろ君、彼の喧嘩の後でせう。喧嘩して置いて觀みに來るなぞは面白いぢや有りませんか。僕は彼の氣象にホレた。ですから早速引受けてやりましたよ。」

「青木君が今度の著述は面白からう。」と菅が引取る。

「たかが、同じ何なら彼樣いふものでなくつて、何か他の題に當てゝ貰ひたかつた。實を言へば、僕はキヨニヤを一册出して見たかつた。」斯う青木は答へた。

其日、岸本は酒を欲しくないと言つて、二三杯引合つた後は直ぐ食氣の方へ廻つた。いつの間にか彼は自分の菜を平げて了ふ。軈て菅の皿の上にある物を突ッつく。

「厭だよ、君は――人の物を奪つて食つたりなんかするから。」

と菅は皿を持つて逃出す。青木や市川は手を打つて笑つた。

酒が發するに隨つて青木の顔色は蒼白に成るばかりであつた。飲めば飲むほど感傷の度を増して來る、といふ風で、非常に淒寒い眼を出して笑つた。それを聞くと、默つて居るのか、それとも泣いて居るのか解らなかつた。斯ういふ笑ひ方をする時の青木の容貌には狂じみた樣子が顯れる。さうなると聽く物を氣にする。

「僕には君等の知らない敵があるからね。」と彼の眼が言ふやうに見えた。其時彼は、暗い、波瀾の多い過去の生涯の縮圖として、紺紫白の單衣の袖を自分の臂迄捲つて、右の腕に彫つてある文身の柘榴を示した。

「口あいて腸見せる――彼の句の意サ。」

斯う青木は言つた。

「へえ、こいつは初めてお目に掛る。」と市川は目を圓くした。

「何故其樣なものを彫つたんですか。」と岸本が不思議さうに尋ねる。

「そりやあ君、若氣だ。」

と青木は笑ひながら引込めて了つた。

皆に別れる時が來た。それから青木は寓居の方へ一旦に出掛けるといふ。彼は心地の好い山上の夜風に顔を吹かせ乍ら、未だ酔ひが十分醒めないといふ顔で、ほんのり紅くして出掛けた。市川、菅、岸本も連立つて[illegible]歩いて行つて、[illegible]までも一緒について行いた。

「どう見ても青木は[illegible]たね。」[illegible]して菅の

上を歩いてる樣子は。
　斯樣なことを市川が言つて、動き光る木の葉の蔭で、青木と袂を分つた。三人の若い友達――就中岸本は憂鬱な眼付をしながら青木の後姿を見送つた。

十

　青木が發つ、市川が發つ、八月の上旬には岸本も送られて湖畔の宿を發つことに成つた。尤も、其時は菅と二人ぎりでは無かつた。西の方からやつて來た舊友の足立も一緒で、三人して箱根の新道を下つた。
　元箱根を發つ時、岸本の懷中には僅少しか金が殘つて居なかつた。他の友達はそれ〳〵歸るべきところが有つて歸つて行くのに、彼ばかりは何處へ歸るといふ目的も無い。もとより家を出て了つた彼である。今迄通り漂泊を續けるより外に、彼の取るべき道は見當らなかつた。何時が、そんなら、旅の終であるか――といふことは、彼自身にすら答へられなかつたのである。
　兎に角、彼は鎌倉まで行く積りで居る。
　椿澤の深い谿谷に添うて新道を下りた頃は、早川の水音が聞えて來た。可懷しい關東の方の青空は久し振で岸本の眼に映つた。
　晝すこし前頃、三人は塔の澤へ入つた。千歳橋の畔にある溫泉宿へ着いて、往來の方へ向いた二階の一室へ案内された。庭の池へ落ちる筧の音は早川の水聲と一緒に成つて、涼しい雨を聞くやうな思をさせる。山の上から降りて來て宿の浴衣に着更へた時は、三人ともに蘇生つたやうな心地に成つた。
　女中も若くて、可憐らしかつた。小田原の近在あたりから來て奉公して居る娘も、こゝの湯水で肌を磨くうちには、自然と垢拔がして來るとか。いづれもサッパリとした風俗をして、客扱ひにも慣れて居る。二人來て、茶を入れたり、誂の料理を運んだりした。
　菅は團扇遣ひで、其日は平常よりも快活に見える。
『貴方、そんなにお暑いんですか。』
とお君といふ娘は菅の背後へ廻つて清しい風を送つて呉れる。お玉といふ方は給仕し乍ら、三人の話に調子を合せて居た。三人は大きな食卓を圍んで樂しく笑ひながら食つた。
　斯の三人は同窓の友といふ特別の關係がある。足立はこれまで伊豫の方のある私立學校に奉職して居たので、菅や岸本が奈何いふ連中と一緒に事業を始めたか、その方の消息は深くも知らなかつた。其夏、いよ〳〵彼も伊豫を引上げて東上したといふ矢先で、二人の親しい舊友を通して、自然他の連中とも往來するやうな端緒が開けたのである。
　三人の中では足立が一番年上である。彼は青木よりすこし若い位の年頃であつた。男らしい額には軒昂とした意氣を示して居る。物言なぞのテキパキとして且つ大人びたところは、早くから浮世の波に揉まれたらしく見えた。かりそめにも曲つたことの嫌ひな男であると、日頃他から言はれて居たが、一面には甚だ氣象の面白いところが有つて、西國の人に特有な聰い感覺を具へて居た。元箱根の宿に居た間、近松の世話物なぞを讀んで友達を泣かせたことも有る。義太夫の一節も語つて見ようといふものは、友達仲間で彼一人であつた。
　岸本は斯の樂しい場所に長く留ることも出來なかつた。前途のことを深く案じ煩ふやうな眼付をして獨り廊下の方へ出て見た。亞鉛葺の屋根の上には浴客の夜具、白い浴衣の類が乾並べてある。それがギラ〳〵した八月の日を受けた時は、烈しく人の目を射つた。早川の急流は、清しい風に動搖する庭の綠葉を隔てゝ、岩と岩

との間を泡立ち流れて居る。茫然として岸本は欄に倚凭りながら眺めた。

十一

長い廊下のところには女中が集つて話して居る。

「ちよいと、お君さん。」と年嵩なのが言つた。「彼様に廊下へ突立つてるものぢやないよ。」

「だつて、」とお君は受けて、「あの三階の方がね、彼方へ行つたり是方へ行つたりなさるから。』

三階には避暑の客があるらしい。岸本は暫時欄に倚凭つて悄然と眺め入つて居たが、丁度そこへ足立と菅の二人が手拭を提げてやつて來る。庭の百日紅も花盛りの頃で、この廊下を美しく見せた。

「好かないよ。」とお玉が言出す。

「だからさ、お前さん。」と年嵩なのが引取つて、「左様いふ時には御免なさいッて言ふものだよ。」

「年長は年長だけある。」とお玉は雑返すやうに言つて、何か暗號のやうに一寸右の肘でお君を小衝いて見る。

『にくらしい。』とお君は、若い女らしい聲で言つた。

樂しい女中の笑聲、放肆な湯場の空氣、日に萎れたやうな百日紅の香なぞは、若い三人の心を醉ふばかりにさせた。「君、一はいり浴つて來よう。」斯う言つて誘つて與れる友達の後に隨いて、岸本も一緒に樓梯を下りた。

湯槽は石垣の間にあつて、深い岩底から湧出る温泉が溢れ流れて居る。そこには二三の浴客もある。「眞實、若い者には毒な場所さね。」斯様なことを言つて、菅は友達を笑はせた。黒みを帶びた透明な湯は、三人の手足を蒼白く、細長くして見せた。

騒然しい湯瀧の音は何時の間にか岸本の心を寂しいところへ連れて行つた。彼は他の友達のやうな快樂に耽ることも出來なかつた。あをのけに、死んだやうに成つて、槽の縁に頸窩を押付けながら、思想を纏めようとして見たが、時とすると湯瀧の音に我を忘れたり、時とすると浴客の呻吟に氣を奪られたりして、其時限りのことに茫然時を送つて了つた。

つと身を起して友達の方を眺めた岸本の眼付はすこし逆上せて居る。

『青木君が言つたツけ。』と菅は岸本を見て言つた。「是方は體軀が好いから、それで彼様な旅が出來たんだツて。」

「だから狂じみたことを行るのさ。」と岸本は寂しさうに笑つた。「頑健なのが自慢には成らないやね。」

「他に言はれないうちに、言つとくんぢやないか。』と菅が笑ふ。

「兎に角、骨太に出來てるね。」と足立も一緒に成つて笑つた。三人は寄宿舍時代に歸つたやうな心地がした。

湯から上る。間もなく別れる時が來た。岸本一人は旅の支度にいそがしかつた。

「菅君、」と岸本はモヂ／＼しながら、「此處の拂ひは奈何したら可からう。』

『ナニ、いゝよ。』と菅は引受顔に答へる。岸本は額を紅くして、『實は、僕はすこし足りないんだがね——」

『そんなに心配しないでも可いよ、吾儕の方で出して置くから。』

斯う足立が氣の毒さうに言つた。

菅、足立の二人は浴衣のまゝ岸本を送つて湯本まで行つた。あの岸本が默つて、考へ込んで、崖に添うた道路を歩いて行つた時の樣子は。斯う快活に笑ひ乍ら二人は塔の澤へ引返した。足立は又、岸本が伊豫まで尋ねて來た時のこと

を言出して、あの眞面目くさつた顔付で戀愛の講釋なぞを始めた時は實際閉口した、と斯う菅に話して笑つた。

翌朝、足立は東京の方へ發つ、菅は單獨で元來た道を山の上の方へ歸つて行つた　一人發ち、二人發ち、するうちに、最早友達は皆な發つて了つて、急に湖水の畔は寂しくなつたのである。菅は疲れて、元箱根の宿に歸つた。

不思議な變化が其日から菅の精神の内部に起つて來た。一晩中、彼は塔の澤のことを思ひつづけた。翌晩も、そのまた次の晩も、眠る前には必ず枕の上でお君といふ娘を思出すやうに成つた。斯ういふことが有ると同時に、遽然に彼は活氣を帶びた。恰も長い冬の間、地の下に隱れて居た草のやうに、彼の内部にあるものは總て一時に芽を出し始めた。

新しい世界は彼の眼前に展けて來た。彼は事毎に驚異の眼を瞠つた。而して、物の奥底に隱れた深い意味を考へるやうに成つた。夕方に湖水の上を飛ぶ螢は、よく彼の部屋の内までも迷つて來た。あの英吉利の湖畔詩人が寂しい山家の娘の歌――丁度、その中に、彼は自分を見出した。憧憬のあまり、彼は種々な感想を書いて夏の夜を送つた。それから先づ足立へ宛てゝ長い手紙を認めた。軈て、彼も山を下りた。

十二

八月の末、青木は東北の旅から歸つた。「知己は多く得べからず、修子のごときは吾生涯に於て有數の友なりしを。」斯う青木は日記の中に書いて、細君の操にも見せた。彼が奥州の方へ行つて居る間に、親しい女友は病氣して亡くなつたとのことである

斯の愁に加へて、彼の身體の内部には何となく異狀が起つて來た。過度な激昂と疲勞とから、もう幾晩か眠られない。そこで、國府津在の漁村に退いて、多病な身を養はうといふことに思付いた。兎も角も行つて見て來たい、序に鎌倉へ寄つて岸本に勸めたいことが有る。

斯う考へて青木は家を出た。道順として、彼は先づ鎌倉の寺に泊つて居る友達を訪ねた。

途次青木が想像して行つた通り、果して岸本は困つて居た。早速青木は東北行の土産話を始めた。八戸に大きな造酒家がある。そこの若主人といふはなか〳〵話せる男だ。藏書も澤山ある。一つ行つて見る氣はないか。酒屋の居候も面白からう。斯う岸本に勸めたのである。

談話好な青木は、餘計に後で疲れると知りつつ、つい夢中になつて話し込んだ。彼は今、國府津の方へ行く途中であることを話した。二人の談話はそれから菅の噂に移つて行つた。岸本に言はせると、菅は足立と連立つて、一度鎌倉の寺へ訪ねて來たとのことである。それは菅が山を下りて間もなくであつた。「一色淡閑、居るか」などと、驚かして入つて來たのは足立で、其時箱根の話が出たが、しかし彼の場所と人とを菅に結び付けて考へることは、奈何しても岸本に出來なかつた。其後、菅から誠意と涙の籠つた手紙を受取つて、はじめて岸本も心を動かされたとのことである。

「して見ると、いよ〳〵、本物かね。」

斯う青木は例の調子で言つたが、心には菅のことをあはれに思つた。

友達の親切な助言にまかせて、岸本は八戸行と決定した。いづれ東京の方で逢はう、と約束して置いて青木は別れて行く。また〳〵岸本は旅の支度に急しくなつた。

木挽町にある菅の家を指して、岸本が鎌倉の寺を發たうとした頃は、最早何となく空の模様も秋めいて居た。彼が風呂敷包の中には數册の愛讀書、例の西京の人――峰子から贈られたといふ懷劍、着替の單衣物が二枚、唯それだけで

ある。これから東北の地方へ向つて旅立たうといふ彼は、袷、羽織一枚持つて居ない。尤も是迄旅で着たものは、峰子の方で預つて呉れて、洗濯でもした上に送るといふ約束になつて居るが、岸本は其を待つ餘裕すらも無かつた。斯の寺の部屋代を拂ひ、門前の飯屋の勘定を差引けば、殘る處は僅少しか無いといふ境涯にある。ウカ／＼して居ると、東京迄の汽車代にも差支へる。そこで寺の住職に別離を告げて出た。雨は降つたり歇んだりして居た。

十三

長い漂泊の揚句、岸本は再び可懐しい東京へ入つた。彼は色の褪めた紺飛白の單衣を着て、多くの旅客と一緒に新橋停車場に着いた。群集の中を通り抜けて、古風な石造の建築物の外へ出ると、停車場前に客を待つ人力車、濕つた往來の土、物揚場の塀、河岸に添うて並ぶ町々などの混雑した光景が、彼の眼前に在る。旅のはじめに比べて見ると、彼は一層切ない無言の悲哀を抱いて其處へ歸つて來た。新橋向ふの柳並木の蔭には喇叭の音が透つた。萬世通ひの馬車だ。それを聞くと東京へ入つたといふ感想が餘計に深くなつた。

ふと、種々な物を載せた茶箪笥が岸本の胸に浮ぶ。その傍には髪を切下げた老祖母が居る。琥珀のパイプを銜へた叔父が居る。叔母が長煩ひの寝床も敷いてある。そこへコン／＼音をさしてやつて來る兒の乾咳も聞えるやうな氣がする。それは岸本が忘れることの出來ない恩人の家庭である。叔母危篤、歸れ、といふ兒からの電報を受取つた時にも、默つて家出をした彼は最早歸るまいと決心して、わざと返事をしなかつた位である。東京の土を踏むと同時に、彼は周圍を見廻した。而して、罪人のやうに人目を憚つたり、震へたりした。

木挽町まで歩いて、見慣れた格子造の入口に菅を尋ねた頃は午後の四時過である。從姉妹の一人が取次に出たが、しばらく見ないうちにめつきり脊丈も延びた。多くの女の兒の顔もかはる／＼玄關のところに顯れた。

岸本は女達に導かれて二階の梯子を上つた。二棟の建物から出來た家で、間數も澤山ある。往來に向いた方は家族の居るところ、奥には下宿する人達を置いた。客の都合でよく菅が部屋を取替へたことを、岸本は記憶して居る。二階の一室が、今、菅の勉強部屋である。

山の一件が起つてから以來、菅と岸本とは急に別の親密を加へた。二人の友達は互に心の顔を合せたやうな氣がした。

「吾家の老祖母だけには僕のことを話したよ。」斯う菅が言つた。彼は何事も打開けて、友達の意見を聞くといふ風である。

「眞實――僕のやうな盲目ぢや仕方が無いね。」と岸本は同情のある語氣で言つた。

「ナニ。」と菅は濃い眉を動かして、「盲目には盲目の手引が一番好いよ。」

其時、階下の方で、「時ちやん、時ちやん、」と菅の名を呼ぶ聲が聞える。菅は廊下のところへ出て、二階の上と下とで家の人と話をした。

「では、君、階下で飯をやつて呉れ給へ。」と菅は岸本の方へ向いて言つた。

十四

岸本は二三日居候といふ格で、菅に随いて梯子を下りた。長火鉢のあるところには、老祖母を始め、可愛らしい女の兒が集つて居る。叔母や十二三に成るいたづら盛の小娘も居る。從姉妹は臺所の方で下女を相手に働いて居る様子であつた。

老祖母に「一つ逢つて呉れたまへ。」と菅は言つて、顔の白い、眼の窪んだ、未だ年

色なぞの艶々とした老婦を友達に對面はせる。

『時三郎がいろ〳〵御世話樣に成ります。』斯う老祖母が言ふ。

『いえ、私こそ。』と岸本は額に手を當てた。

『貴方もしばらく遠方へ行つていらしッたさうですね。』

と斯の老婦が、親切な、沈着いた調子で言つた。

老祖母は若いものの働くところを見て、唯坐つて居た。この下宿を主にやつて居る叔母は、寡婦らしい、寂しい人で、老祖母のやうな愛嬌には乏しかつた。まだ外に、菅の叔母といふ人は幾人もある。從姉妹も多勢ある。斯の通り女の多い一族で、親類中見渡したところ男らしい男は菅と栗田の從兄弟と唯二人ぎりである。殊に菅は例の淡泊な、温厚な氣質から、『時ちやん、時ちやん、』と言つて頼母しく思はれて居た。多くの從姉妹の中に交つて成長した彼は、平氣で其若い人達と一緒に寝たこともある。不思議なことには、是程親しかつた家の人と菅との間が箱根以來急に變つて來た。何となく彼は沈着かないやうな風をして居る。

臺所の方では客の支度も出來たと見え、置並べた膳の前に從姉妹が立つて居る。下女は出たり入つたりして居る。叔母は何か食物を持つて子供の傍へやつて來た。

『さあ、老祖母の傍で、皆な温順しくしておあがり。』

と言はれて、飛んだり跳ねたりして居た小娘までも行儀よく一緒に坐つた。

『彼方の兄さんに笑はれますよ。』

と老祖母は小聲で叱るやうに言ふ。小娘は馬鹿にしたやうな、トボケた眼付をして、鳥渡岸本の方を盜むやうに見た。

菅と岸本とは默つて顏を見合せ乍ら食つた。叔母は襷掛のまゝ、長煙管で一服やつて居たが、それとなく二人の樣子に注意して居るらしかつた。

夕飯の後、岸本は菅に紹介されて、栗田といふ從兄弟に逢つた。菅とは餘程調子の違つた人で、高等學校の制服を着けて居る。この從兄弟にも、菅は打解けて居ないやうに見えた。

其晩、菅と岸本とは二階の部屋で遲くまで話した。二人は竊に、而も熱心に、互の意中を語り合つた。話は何時の間にか麹町の學校の噂に移つて行つた。九月に入つてから菅も教鞭を執るやうに成つたのである。彼は英語の外に、哲學史の梗概を高等科の生徒に授け始めたといふ。斯の學校へは岸本も嘗て出る前一年ばかり通つて居た。『今は青木が代つて教へて居る。一君、盛岡にも逢つたよ。』

斯う菅は微笑み乍ら言つた。

盛岡といふ符牒は生故郷から來たものである。勝子が本名である。勝子は今、高等科の生徒で居るので、菅の教場へも出て、講義を聽くとのことであつた。斯ういふ關係から、菅は岸本の胸中を思ひやつて、手紙の使位はしてやると言出した。其夜、岸本は初めて勝子へ宛てた手紙を書いた。

十五

其手紙は極く簡短に、どことなく以前の先生然とした調子で、八戸へ行く前に是非一度逢つて話したい、斯ういふ意味に過ぎなかつた。

しかし、勝子へ宛てゝ是丈の手紙を書く時節が來たといふことすら、岸本には夢のやうである。彼の鬱屈した性質は何事につけても思ふところを言ひ表すことが出來なかつた。彼は放浪したり、慟哭したりして、胸の苦痛を忘れようとしたのであつた。旅のはじめに、彼の意中を勝子へ傳へたのは岡見の妹である。それは岡

見の計らひである。岸本は唯それだけで滿足だと言つた。斯うして手紙を書かうなどとは、實際思ひもよらなかつたことである。

翌日の朝、菅は羽織袴で出掛けた。勝子からの返事を見るまでは何となく岸本も沈着かなかつた。友達の留守に、岸本は自分の風呂敷包を取出して、日あたりの好いところへ展げて見たが、一つとして旅の記憶を喚起さない物はない。脚絆なぞは、もうさん〳〵穿いて、穿いて、鞋の緒が切れかゝつて居る。

大きな、光澤のある、奥床しい眼が、ふと光るやうに思はれた。それは彼が旅に出たばかりの頃、岡見の紹介で訪ねて行つて、着物のことから宿のこと迄、親切に世話をされた其人の眼である。雪に濡れながら西京の學校へ着いて、寄宿舍の應接間にある火鉢の傍で、岸本は初めて峰子に逢つた。峰子は同情の深い、母親らしい温味のある女であつた。岸本よりは三つほど年長の姉さんで、未だ何處へも嫁かずに、女の生徒を教へて居た。恐らく峰子は弟のやうに岸本のことを考へたのであらう。その眼が姉さんらしく光つて居る間は至極無事であつた。辻に居る車夫から『奥さん』と言はれて、顏を紅めた頃の眼は未だ無事であつた。岡見の妹の名を貰めて、涼子とは好い名だ、峰なんていふのはありふれて居て面白くない、斯う言つて笑つた頃の眼は未だ無事であつた。岸本の爲に旅の着物を縫ひながら、『私がもし男なら、貴方と御一緒に旅でも何でもするんですけれど――女の身體といふものは左樣思ふやうにいかないことが有るんですから。』と言つた頃の眼は未だ未だ無事であつた。急に其眼は不思議な光を帶びて來た。どうかすると涙に濡れて、獨棲の寂寞を嘆くかのやうに見えた。終には物を言ふやうに成つた。もう姉さんらしい眼ではなかつた。

岸本が勝子に逢はうと決心する迄には、何程狂人染みた苦痛を嘗めたか知れない。琵琶湖に近い茶丈に旅の足を休めた頃、二月半許りの間は自分で自分を責め通した。彼が最後に西京へ寄つて、潔く自分の決心を話した時は、峰子も別離を惜むやうに見えた。斯樣な譯で、過去つたことを許して貰ふ積りで、岸本は勝子に逢ひたいと思ふのである。

午後になつて、菅は學校から歸つて來た。窮屈袋を脱ぐ間もなく、書物の間から勝子の返事を取出して、これを岸本に渡した。『この場合、かへつてお目に掛らない方が可いかと思ふ。』斯ういふ意味に書いてある。餘程前後を考へて書いてよこしたらしい斯の返事が、岸本には失望の念を起させた。彼は一種の怒りを感じた。夕方から、二人の友達は青木を訪ねる爲に木挽町の家を出た。

丁度、二人が出ると間もなく、斯の家の前で人力車を停めた若い女の客がある。脊は高いといふ方の人でもない。入口のところに立つて岸本を訪ねたが、菅と一緒に出掛けたと聞いた時は失望したらしく見えた。『まあ、殘念なことをしましたねえ。』と菅の從姉妹が取次に出て言つて、不思議さうに客の樣子を眺めた。

十六

『君、盛岡が吾儕の留守に訪ねて來たさうだ。逢はない方が可いかと思ふなんて手紙を寄しながら、またやつて來るところは、盛岡だねえ。』斯う菅は友達に話して笑つた。それを聞いて岸本が勝子に逢ひたいと思ふ心は一層増して來た。

『君の家の人は僕のことを何と思つてるだらう。』と岸本は聞いて見る。

『なあに、何とも思つてやしないよ。』と菅は友達を慰めるやうに言つた。

日曜には、連中が集つて來た。集つて話すといふことは若い時代の徴候で、何かにつけてよく會合した。其日も、岸本の出京を機會にして互に話さうといふのである。先づやつて來たのは足立で、雜誌の話から、軈て山の噂が出た。この事に就いては最初岸本も冷淡であつたので、其を聞く、菅が憤慨したといふ話から、菅君は話せないなんて言つて居ながら、一日斯ういふことに成ると冷淡に構へて居る――岸本は怪しからん。などと言つて立腹したといふ話を足立が始めて、岸本は辯解しようとする、足立は面白がる、果は三人大笑に成つた。

急に菅は耳を澄ました。彼の心は階下の方へ行つた。日曜のことで、從姉妹などが多勢集つて來て居る。麹町の叔母の笑聲も聞える。好惡で物を定めて了ふ學校出の女や、叔母がこゝに居りますといつたやうな人達に、箱根のことなぞは無論悅ばれさうもなかつた。

『一寸僕は失敬するよ。』と言つて菅が階下へ降りた後。足立と岸本の二人は更に山の上を思出した。咲いて居た白百合の花は未だ二人の眼にあつた。

『お君さんか、』と岸本は峯の澤の娘の名を言つて、『君は彼の人を奈何思ふね。』

『むゝ、なかなか性質も好ささうだ。しかし不思議さね、菅君が彼樣いふことに成るとは。他の人なら兎に角、菅君だから面白いぢやないか。』

斯う言つて、足立は快活な、愛嬌のある微笑を見せた。

足立に言はせると、菅はよく前後を顧みるやうな人であつたが、今は案外無謀な人に成つた。莊重な言葉つかひが激に流れて來た。友達は意外に烈しい人に成つた。彼は時としては頗る勇氣のある人のやうに見える。さうかと思ふと、また驚くばかり弱いところも出て來た。謹厚愼重とも言ひたい菅のやうな友達でも、熱ある病の爲には前後を顧みなくなるのであらう。彼は殆んど世も親も忘れようとして居る。斯う評した。足立はまた菅の切ない思を汲んで、いづれ折を得て再遊を企てよう、と言つて居た。

十七

次第に連中が集つた。市川も來る。青木も來る。足立と青木とは其日初めて一緒に成つたので、互に初對面の挨拶がある。

斯う顏が揃つたことは元箱根以來である。あの吉原の會合あたりには未だ遠慮勝に聞えた菅の笑聲が、今は活氣と青春とを帶びて來た。そればかりでも斯の二階に集つた連中の感想が違ふ。まして足立といふ新顏が見える。岸本は東北の方へ行かうとして居る。

『青木君、』と市川が言出す。『最早國府津の方へお引越しでしたか。』

『えゝ、この一日に。』と青木はすこし蒼ざめて、『弟も一緒に行く、家の奴の妹も出掛ける、複雜な旅行でしたよ。』

『青木君もよく引越して歩く人さね。僕が覺えてから四度目だぜ。』と菅は思出したやうに笑つた。

『學校の方は奈何するんですか。』と市川は心配さうに聞いて見る。

『汽車で通ふサ。』と青木は答へた。

『そいつは大變だねえ。』

『ナニ、君、時間割の都合をして貰へば、三日で濟む――其樣に困難なことでもないよ。』

と言つて、青木は柱に倚凭つたが、急に其柱を離れて膝を動つた。彼は疲勞に抵抗しようとして居るらしく見えた。

菅千春といふ人の噂なぞが出た。この人は雜誌を賑す寄稿家の一人で、年齡から言つても、

思想から言つても、若い連中とは餘程違つて居た。この人の書くものは岡見の畠に近かつた。同姓で間違ひ易いところから、連中のは菅君、この人の方は菅さんと呼ぶことにして居る。千春さんとも言つた。千春はもう好い阿爺で、娘が五人もある。

青木は不相變の調子で、

『千春さんも骨が折れるよ、風船を買つても五個だからね。』

斯樣な戲語を言ふ青木の顏には何となく憂ひの色があつた。彼は傷心した人のやうに見えた。尤も興に乘つて談話をするところは非常な元氣で居るやうで、直に疊の上へ横になるのも斯の男の癖だから、他の連中は何事も氣に留めないで居る。足立は用事があると言つて、あまり長く居なかつた。殘つた連中は斯の二階で夕方まで話し續けた。會心の文字を讀んで友達に聞かせるのは市川の得意である。其日も菅の机の上にある新刊の雜誌を開けて見て、謠のやうに身體を動かし乍ら讀出した。それは青木が女友の死を悼んだ詞の一節である。

『二世といふ縁に一世あるは少く、三世といふに三世あるも亦稀し。』市川は朗吟するやうな、澄んだ調子で、面白さうなところを拾つて讀んだ。

『どうも彼女は——僕に對してラブがあつたものかと思ふよ。』と青木は何氣なく節子のことを言出した。『非常に僕の子供を可愛がつて呉れたからね。』

『さあ、青木君の艷福だ。』

と一同大騷ぎに成つた。

市川はじめ、菅、岸本は、この青木の言葉を戲語のやうにして笑つたが、青木ばかりは笑はなかつた。妻子のある彼は若い友達の顏を見比べて、『今に君等も笑へなくなるよ』と言つたやうな眼付をした。

十八

記念として、市川、岸本の二人は一緒に寫眞を撮つた。岸本が東北行の旅費は傳馬町の方で出して呉れる、斯ういふことに成つたのも市川の盡力である。友達のなさけは唯そればかりでなく、せめて一度勝子に逢つて行け、とその機會までも菅が心配して作つて呉れた。

いよ〳〵其日が來るといふ前の晩に成つた。夢寐にも忘れなかつた情人との再會を控へて、岸本は眠られなかつた。盛岡の舊家に育つて名ある人の娘だといふことや、今は麹町の姉の家に居るといふことなぞは、間接に岸本も承知して居たが、奈何せん勝子とは遠く、また家族の人々とも遠かつた。朧氣ながら岸本に勝子のことを知らせたのは峰子である。勝子に親の定めた許嫁があるといふことも、岸本は西京へ行つて初めて確めた。

薄紅い、柔軟な、女らしく肥つた手は、暗黒にも岸本の眼に見えた。峰子の手だ。それは未だ世の中の汚濁に染みない人の處女らしい手である。その手が勝子のに彷彿であると、岸本が峰子の前で言つた時に、峰子は微笑み乍ら引込まして了つたことがあつた。岸本は彼の姉さんらしい女を通して勝子の手を見つけたのである。

二人の女の間には度々文通があつた。勝子からの便りに、自分の肥えるのも今が絶頂かと思ふ。としてあつたことなぞは、岸本も聞覺えて居る。何時の間にか彼の二人の文通は絶えた。斯樣なことを岸本は夜通し胸に浮べて、勝子との再會を想像して見た。

軈て、その夢のやうな日が來た。

同情の深い菅は食客して居る友達の身を憐んで、

『茶や菓子は出すやうに階下へ命じて置いたからね。それから僕は一寸用達に行つて來るよ。』

斯う言つて、出て行つた。

岸本は菅の勉強部屋で勝子を待受けた。時は遅く經つた。奥に下宿して居る人々もそれぞれ出て了つた後で、女の子供は學校へ行つて居ず、緣側から疊の上へ射す日の光も靜かに燃えるやうに見える。それは風のない、妙に底熱い、何となく氣の遠くなる九月上旬の午前であつた。

勝子は人力車でやつて來た。前後の場合を考へると、許されて逢ひに來た人ではないらしい。目立たないものを着て、其頃の若い人が結つたやうに髮を束ねて、花も插さずに居る。岸本は洗ひ晒の白い單衣に角帶を捲付け、可恥しいほど見窄しい風をしながら勝子を迎へた。つくづく彼は身の落魄を感じた。

十九

勝子は今岸本の前に居る。もし來たら彼樣言はうかしらん、斯樣言はうかしらん、と種々聞いて見たいことや話したいことなぞを考へて置いたが、さて逢つて見ると、岸本は思ふやうに話すことも出來なかつた。斯うして長く居ることは事情が許さないといふ風で、何となく勝子は沈着かないやうに見える。それに、一度師弟の關係があつたといふことは、自由な談話を妨げた。斯のあわたゞしい邂逅の間にも二人は禮儀を失ふまいとした。よく自墮落な教師の話なぞが出ると、眉を顰める方の岸本であるから、餘計に勝子の前では嚴格に成る。第一師弟の關係が岸本には深い苦痛の種である。彼は八戸の酒屋の名を認めたものを勝子に渡したりなぞして、復機會があつたら、と再會を約したが、心には許嫁のある人に逢つて話をするといふことの是が最初でも有り又最終でも有るかのやうな氣がした。

勝子は別離を告げて出た。入口のところには車夫が待つて居た。格子戸を出て、勝子は名殘惜しさうに岸本の方を見た。二人は無言の思を交換した。其時ばかりは、師弟の禮儀を守つたとも言へなかつたのである。

午後になつて菅が歸つて來た。岸本は談話の出來なかつたことを友達に語り聞かせて笑つた。全く、其日の會合は岸本の豫期した程でもなかつた。しかし後に殘つた印象は忘れることが出來なかつた。ありありと岸本は心に描くことが出來る。まだ勝子は眼前に居るやうな氣がする。もつと姉さんらしい人のやうに彼は考へて居たが、逢つて見ると存外娘らしいところがあつた。何となく彼は別の人に逢ふやうな心地もした。「私は貴方に濟まないことが有ります。」と岸本が言つた時に、勝子は、「濟まないとお思ひなさるんですか。」と言つて、しかし弟子として笑つて見せた。其同じ口唇で微笑んだ。勝子は着て來た羽織を熱苦しさうに脱いで、紫色の帶の間へ右の手を差入れながら、壁の方に近く坐つて居た。階下から菅の從姉妹が茶を入れて持つて來て呉れたのを、岸本は勝子にすゝめたりなぞして、以前の學校の人の噂でもするやうな調子に、勝子が許嫁といふ人の噂もした。『好い人だ さうですね。私も一度お目に懸りたいと思つて居ます。』斯う岸本の方で言ふと、『逢つて御覽なすつたら可いでせう。』と勝子が答へた。其時勝子は森下といふ男のことを言出して、自分を宗教に導いたのは彼である、森下にも一度逢つて見よ、と勸めた。斯の青年の噂は曾て岸本も聞いたことがある。現に森下の兄――眞面目な學者であつた――とは同じ下宿に居たこともある。尤も、女の方で褒めるやうな人には、あまり岸本も逢つて見たいと思はなかつた。それから又、八戸の酒屋の名を書いてやらうとした時に、丁度勝子の坐つて居

る直ぐ側が菅の本箱で、その上に卷紙がある、勝子は取つて呉れようとする、岸本は起上る、思はず二人の手が觸つた。心やすだてからとは言ひ乍ら、斯ういふ鳥渡したことが忘れられなかつた。

其日から彼の胸は餘計に苦しくなつて來た。彼は反つて勝子に逢はない方が可かつたと思つた。旅に出た頃は唯其人の面影にあこがれるといふ風で、僅かに岡見の妹を通して意中を傳へたに過ぎなかつたが、それだけで彼は滿足して居た。さあ、斯うして逢つて話をして見ると、猶々聲が聞きたくなる。彼は最早面影ばかりに滿足することが出來なくなつた。有體に言へば、勝子といふ人が欲しくなつて來た。

二十

早く遠いところへ行け――斯ういふ聲が岸本の耳の底にあつた。遠く離れて、許嫁のある人を忘れたいと思ふ程、彼の胸は堪へがたくなつたのである。

そこで八戸行を急いだ。別離を告げて菅の家を出る前に岸本は峰子から贈られたといふ懷中鏡を取出して、白の袱紗のまゝ友達に預かつて貰つた。

旅費を受取る爲に彼は大傳馬町の方へ行つた。人形町へ出ようとする角／＼ところが大きな土藏で、昔風の暗い暖簾を掛けた鰹節問屋の店と、其土藏との間に、別に岡見として入口が設けてある。何となく岸本は斯の家へ入りかねた。旅に出る時は種々世話に成つたり、大磯迄も見送られたり、勝子のことに就ては心配を懸けたりして置いて、西京の捕虜に成つて歸つて來たとあつては、どうも斯の家の敷居を跨ぎかねる。と言つて、他に旅費を心配して呉れる人はなかつた。思切つて呼鈴を押すと、女中が出て來て妻戸を開けて呉れるのが例で、岸本は茶室風の一間へ案内された。そこで雜誌も毎月編輯されることに成つて居る。

若主人の清之助は市川と同じく高等學校へ通つて居たが、其日は歸宅がすこし遲くなるとやらで、母親が出て岸本を款待した。涼子も來て話した。涼子は下町風の瘠ぎすな娘で、どちらかと言へば小造りの方であつたから、年齢よりは若く見えた。可惜いことには身體が弱かつたが、弱い位だから世の中の歡しいや哀しいも早く解つて、怜悧な、考へ深い容貌をして居る。普通の女に見せようとして、深く才氣を隱して居るやうなところもあつた。彼女は、兄さんのお仕込が違ふ、と連中はよく其を言つた。傳馬町といふのは斯の人のことで、二人の兄の事業に同情を寄せて居るのみならず、連中の書いたものまでも熱心に讀んで居る。涼子といひ、峰子といひ、勝子といひ――まだ他に青森といふ人もあつたが――連中の後には斯ういふ姉妹のやうな若い人々が居て、健氣にも彼等を助けようとしたり、あるひは愛慕を捧げ、同情を寄せ、すくなくも彼等の精神に近づかうとしたものである。殊に涼子は市川贔屓であつた。

岸本が旅に出る時、涼子は兄の岡見と一緒に大磯の別莊で病を養つて居たが、餞別として袋を縫つて呉れたこともある。彼の意中を勝子に傳へたのも斯の人である。談話好な娘で、種々な人の噂なぞをしたが、西京といふことは一語も言はなかつた。燈火の點く頃、親切な母親は夕飯を出して岸本に食べさせた。

軈て清之助が歸つて來た。彼は足立と同年位であつた。色白な沈着いた額や、男らしく優美な頬は、彼の綿密な性質と相俟つて、他の兄妹と面白い對照を成して居る。彼は靜和な感想を與へる方の美男である。彼は又、連中の事業を内部から助ける方で、蔭で多く働いた。

面倒臭いことは大抵斯の人が引受けて處理して居る。

「八戸と言へば、君、萬更離れた方角でもないやうですね。」

斯う遠廻しに匂はせるのは、清之助の癖である。

其晩二人は遅くまで話した。いよ／＼岸本が旅に出掛けるといふ時、先づ泊つたのも斯の部屋で、丁度それは正月の霙の降る寂しい晩。

「大凡見當は付いて居るが、もし間違ふと不可から、其人の名前だけ聞いて置かう、」とかなんとか清之助が言出して、岸本を夜の二時頃まで唸らせたことがある。是から將來、岸本は奈何なるだらう。斯う清之助は考へた。許嫁もあり候補者も多いといふ勝子を、我物顔に定めて居る岸本のことを考へると、清之助は笑つて可いか呆れて可いか解らなかつたのである。

翌朝、岸本は斯の友達から旅費を受けた。

其時母親が入つて來て、

「清さん、これから岸本さんもお寒い方へ行らツしやるといふのに、羽織もおあんなさらないぢや、嘸お困りなさるでせうね。」と言つて、岸本の方を見て、「貴方、差上げるやうなんぢや御座いませんけれど――」と氣の毒さうに言ふ。

涼子は最早そこへ持つて來て居る。岸本は皆なの見て居る前で、紺飛白の單衣の上に女達のお下りを頂戴して着て、色の褪めた羽織の紐を難有さうに結んだ。

二十一

岸本が東北へ發つたといふことを、青木は國府津の方に居て知つた。前川村は相模灘沿岸の漁村で、蜜柑畠の多い豐饒な谷一つ隔てゝ國府津の町に連續いて居る。その漁村には青木の祖先が眠るといふ寺がある。その寺の一部分を借りて、青木は家内中で引越して來て居る。萬更彼も縁故の無い場所へ移つた譯ではなかつた。

寺は小高い岡の上にある。廂が淺くて暑い寒いを感じ易かつた從來の都會住居に比べると、彼は狭矮しい樹の下を出て、大木の蔭に移つたやうな心地がした。高い梢のやうな屋根、枝を擴げたやうな軒、葉裏を見上げるやうな天井――何もかも彼の氣に入つた。心地の好い光線が、本堂の側にある牕を通して、射し込む工合も氣に入つた。加に、都會に住むとは違つて、新鮮な魚が安く食へる。海岸の空氣が吸へる。蜜柑畠の香も嗅げる。

何故早く斯ういふ場處へ引籠つて來なかつたらう、と青木は後悔した位であつた。其處の漁村の生活が彼の多病な身に適するやうに思はれた。

しかし其は一時の嬉しさからで、復た／＼青木は鬱屈し出した。一時間も書物を讀むと、最早がつかりして、根氣が盡きて了ふ。思想も矢張其通りで、どうかすると短い文を書くに四日も五日もかゝる。斯樣な例は是迄に無かつたことである。彼は自分の精神に異状の起つて來たことを知つて、可恐しく感じた。

青木に言はせると、それもこれも深い因のあることで、自分が多年の辛苦は漸く、水の泡に歸した。貯へを蓄へるといふ餘裕が無い、唯空しく獨立の出來ない仕事に苦役して居る、斯樣な風にして、奈何して精神が亂れずに居られよう。確かに自分は不安な原因を知つて居る。然し乍ら其を奈何ともすることが出來ない。斯う青木は嘆息した。彼は多くの物に欺かれたのであると考へた――希望にも、生命にも。

で、從來耐へて來たことを一切打破しよう、妻に對することも、妻の家に對することも、自分の家に對することも、事業に對することも、すべての事に彼は忍耐持久の精神を破らうと考へ

た―自分の好むことより外には何事も爲すまいと考へた―自己の獨立―其爲には愛をも犧牲にすべしと考へた。最後は三界乞食の境界に沒入る覺悟があれば、それで可い。『嗚呼男兒、何ぞ斯の如く長く碌々として遠慮をのみ事とすべけんや。』斯う考へるほど青木の精神の內部は暗かつたのである。

丁度細君は娘を連れて東京の實家の方へ行つた留守の時であつた。

『操は最早歸つて來ないのぢやないか。』

留守となると、斯樣なことも考へる。

二十二

東海道線の下り汽車は前川村を通り過ぎて國府津の停車場に停つた。東髮に結つた二十四五の婦人がその列車から下りた。『鶴ちやん―父さんが待つていらツしやるだらうから、早く吾家へ歸りませうね。』と言つて、負つて居る女の兒の顏を覗くやうにして、軈て前川村をさして急いだ。一週間許りで東京の實家の方へ行つた青木の細君は、今歸つて來たのである。

實家の光景はまだ操の眼にあつた。集つて來て出世を誇るやうな女友達の額つき、華麗な裝みの―[illegible]を、たゞ[illegible]でも、操に壓ふやうな壓されるやうな心地がする。あの人達の風俗は操に對して何を語つたか。約めて言へば、「貴方のところの旦那さんは今幾何お取りなさるの」と言つたやうなことに歸着する。妹は妹で、姉を憐むやうな眼付をする。夫の才能を認めて居る父ですら、どうかすると可惜いことをした、娘一人を殺して了つた、と言つたやうな語氣を洩す。いつも操は實家へ行く度に、抑へ難い口惜しさと、虛榮を厭ふ心と、此樣な反抗心とを抱いて歸つて來る。

黄ばんだ日の光は陰鬱な谷間を影日向にして見せた。それを眺めると、樂しい思出が烈しく操の胸中を往來し始めた。一貴孃の淑女として世を送るを得ば、他に何の求むべき幸福あらんや、とは夫が愛を私語いた時の文句である。操はまだ其を忘れずに居る。奈何に二人は種々の高尚なことを語り合つたらう。傲世逆俗を以て自ら任じた青年の氣風は奈何に操の心を動かしたらう。教育もあり、知識もあり、父からの榮譽をも背つたと言はれた操は、名譽もなく、財産もなく、唯壯快で才能ある男子に心を許したのである。

夢のやうな結婚の日―その記憶はまだ操の胸に新々として居る。

實際、二人の結婚は世にありふれたやうなものではなかつた。愛して、愛されて、すべての物を犧牲にして、それで漸く一緒に成つた仲である。斯の人の爲には奈何なる艱難をも厭ふまい。斯う決心して操は夫に隨つたのである。

娘は早く來た。若い夫婦は互に[illegible]いて浮世のまゝならぬことを泣いたこともあつた。そのうちに鶴子が生れた。新婚の當時に比べると、生活は一層困難に成つて來て居る。しかし操は前途も夫を助けて働かうと思つた。左樣だ、と彼女は歩きながら考へた。[illegible]のこと―近所の娘を集める、自分が針仕事でも教へる、それで一人下女を頼まう、奈何して今の有樣で子供の教育なぞが出來るものではない。是が實家から持つて來た操の考へである。

前川村の家へ歸つて、操は先づ夫の蒼い顏色に驚かされた。

二十三

『父さん、鶴ちやんは斯ういふ好い前掛を戴いて來ましたよ。』と操は夫の前に娘を連れて行つた。見て下さい、鶴ちやんに好く似合ひませう。』

紫だけ[illegible]のしてある、白い、[illegible]の好い前掛

は、鶴子の邪氣ない顏付を一層愛らしくして見せた。『東京の叔母さんが下すつたんです。』と操は附添した。

『へえ、好いのを戴いて來たね。』と青木が答へる。

『鶴ちやん、父さんにお話しないの？』と操は母らしく微笑んで見せて、驗て乳房を銜へさせながら、實家の話を始めた。青木は眼前の事物に興味を失つたといふ風で、煙草ばかり燻して居る。

『奈何でした、お仕事の方は。あれから何か爲さいましたか。』と操は尋ねた。

『俺かい。』と青木は不安な眼付をして、『俺は考へて居たサ。』

『考へて？　ホヽヽヽヽ、父さんは此節煙草ばかり喫んでいらッしやるぢや有りませんか。煙草が可くないんでせう。』

『馬鹿を言へ。煙草でも喫まなくつて、やりきれるものか。』と青木は妙なところへ力を入れた。『内田さんが譯した「罪と罰」の中にも有るよ、錢取りにも出掛けないで一體何を爲て居る、と下宿屋の婢に聞かれた時、考へることを爲て居る、と彼の主人公が言ふところが有る。彼樣いふことを既に言つてる人が有るかと思ふと驚くよ。考へることを爲て居る――丁度俺の彼なんだね。』

操には夫の言ふ意味が能く汲取れなかつた。『貴方、奈何かなすつたんぢやないんですか、大變顏色が惡いんですよ』と言はうとしたが、其を口へは出さなかつた。

實家を見た操の眼で斯の假住居を眺めると、何もかも侘しく見える。二間仕切つて借りた廣い部屋の内には道具らしい道具も置いてない。古い寺院に特有な、物の朽ちる臭氣もする。操は淡泊な方で、斯の貧しい境涯を左程苦にするでもなかつたが、東京の女友達のことを考へると、流石に肩身の狹いやうな心地に成る。例の實家から考へて來たこと――下女を一人、などといふ場合ではない、と思ひ直した。近所の娘を集めて針仕事でも敎へる、それも夫へは言出さなかつた。

『父さん、少し子供を見て下さいな。』

と言つて操は勝手の方へ行かうとしたが、働かない前から最早額に汗が出た。

急に鶴子が泣出した。青木は抱取つて彼方是方彼方是方と本堂の傍を歩いた。工合よく動ぶつてやらないと、直に鶴子は愚圖々々言出す。どうかして寢かしつけたいと思つて、わざと薄暗い方へ連れて行つたり、眠たい子守歌なぞを歌つてやつたりしたが、鶴子は眠りさうにも見えなかつた。無理に寢かさうとすればする程、餘計に兒の方では大きな眼を開く。『さあ坊主、ねんねするんだよ。』と青木は叱るやうに言つた。不思議な怒の情が來て急に彼の身體を震はせた。思はず彼は口脣を噛んだ。而していやと言ふほど最愛の兒を抱締めた。

泣叫ぶ鶴子の聲を聞きつけて、操はそこへ飛んで來たが、『ようござんす、私が負ひますから。』斯らいそがしさうに言つて、ぷいと勝手の方へ抱いて行つて了つた。

騷然しい海の音は寂しく變つて來た。勝手の方では操の啜泣く聲が聞える。

二十四

若い夫婦は慘として相對するやうな日を送つた。斯らいふ苦い經驗は夢のやうな戀の時代に想像の出來なかつたことである。一方へ向いては艱難と戰はねばならぬ。一方へ向いては鶴子を養はねばならぬ。二人は默つて、考へて、顏も見合せずに食ふことも有つた。

不思議なことには、復た斯の苦痛を忘れるやうな朝が來た。一夜のうちに操は機嫌を直し

た。彼女は希望を有つて働く氣に成つた。

其朝、青木は行倒を見たと言つて、散歩から歸つて來た。

「貴方、岸本さんが歸つていらしッたさうですよ。」と操は葉書を持つて駈寄る。

「最早歸つて來たのか。」青木の眼は輝いた。「奥州の方へ出掛けて行つたばかりぢやないか。」

青木は妻から葉書を受取つた。讀んで見ると、まさに岸本は鎌倉の寺へ歸つて居る。其日、菅と一緒にこゝへ訪ねて來るともしてある。暫時夫婦は顔を見合せて居た。

「眞實に、岸本さんは貴方に克く似ていらッしやる。」と操は何か思出したやうに言つた。

「俺も以前には彼様な風だつたかなあ。」斯う青木が答へた。

「あら、左様いふ譯ぢやないんですけれど――」

「兎に角、狂じみたところ丈は似てる。」と言つて、青木は肩を動つて、「彼の男のは自分で知らないで行つてる、俺はそれを意識してる――そこが違ふ。」

操は夫の顔を眺めて、ホッと深い溜息を吐いた。

午後になると、菅、岸本の二人が寺へやつて來た。菅は風呂敷包の中から菓子折を取出して、「鶴ちやんへ。」と言つて、操の方へ押遣る。

「貴方、御土産を戴きましたよ。」と操は夫の方を見て言つた。

「菅君は左様いふ心配をするから不可。」と青木は嬉しさうに笑つたが、日頃物の遣取も稀なので、何となく斯の手土産がめづらしく思はれた。

「岸本君、君はまた馬鹿に早く歸つて來たね。」斯う青木が言ふ。

「實は僕も驚いたんです。」と菅は岸本の横顔を眺めて、「彼様に早く歸つて來るとは思はなかつた――せめて一月や二月は八戸に居るんだらうと思つた。」

「彼方に一週間位いらしッたんでせう。」と操も言葉を添へる。

「えゝ。」と岸本は頭を掻いた。

菅は笑はずに居られなかつた。「何かにあるね、行つたかと思ふと直に歸つて來るところなぞは。」

二十五

是處へ來る前に、菅は岸本を引張つて、例の塔の澤に居る人の生家を探りに行つた。足立を後援者とした事件の成行も彼には甚だ有望らしく見えた。で、いよ〱斯の話がうまく纏まつた曉には、當人を引取つて、差當り青木の許へ置いて貰ふことにしたい。而して細君の教育を受けさせたい。斯う將來のことまでも考へて、其を青木夫婦に依賴する積りで來たのである。

菅は一度青木の家で逢つた不幸な食客のことを忘れずに居る。「青木さんだから、私のやうなものの世話をして下さるんです。」と其男が言つたことを忘れずに居る。

「君、蜜柑畠はめづらしいでせう。すこし其邊を散歩して來ようぢやないか。」斯ういふ青木の後に随いて、二人の若い友達は一緒に寺を出た。

豐饒な、緩漫な傾斜の光景は三人の眼前に展けた。起きたり伏たりして居る一帶の地――小山の上、谷の底、皆蜜柑の畠である。とある小徑のところへ出ると、兩側には大きな果樹が躊躇つて居て、光る葉や、深く暗い影や、未だ青々とした果實の顔を出したさまなぞが、暖國らしい感想を與へる。うんと力瘤を入れたやうな、土の上まで垂下つた枝が右にも左にもあつた。

岸本は途中で鳥渡立止つて、強い蜜柑の樹の氣息を嗅いで、

「菅君、君は結婚を奈何する積りかい。」と尋ねた。

「奈何するとは？」

菅も深緑の香に壓されるやうな眼付をして居る。

岸本は菅と自分とを比較べた。結婚——若い時代には胸の踊るやうな問題——そこまで話を運ばうとする菅の遣口を考へて、はるかに友達の方が自分より實際に近い道を歩いて居る、斯う反省して見た。奈何して友達は女を食はせるだらう、斯樣なことも想像して見た。

「まあ僕も安心したよ、彼樣して足立君が附いて居て呉れるからね。」と言つて、菅は考へて、「しかし、青木君の言草ではないが、毎日机の傍へ來て、芋や菜葉の話ばかりされたんぢや——成程、是にもすこし閉口するだらうね。」

二人は笑つて、青木の後を追つた。

小山に添うて細い坂道を上つて行くうちに、軈て二人は眺望の好いところへ出た。幾層かの蜜柑畠は其處から庭園のやうに俯瞰される。工合の好ささうな草の上へ、互に御輿を据ゑて眺めた。其時岸本は寂しい東北の旅の話を始めた。八戸の酒屋では、ズバ抜けた大將を初め、親切な家族の人々に慰撫られたことを話した。若主人に導かれて、酒倉、藏書倉、それから眼の眩むやうな縮で飾られた離座敷を見たことなぞを話した。奥州に居る間は、袷に襦袢を借りて着て、それでも震へたが、東京へ歸つて來て見ると未だ單衣物でも間に合つた。斯樣なことも附添した。

海は青く光つた。何時の間にか青木は草の上へ寢轉んで、死んだ人のやうに成つて居た。菅、岸本の二人は青木がそれほど困み疲れた狀態に在るとは知らなかつた。むつくと青木が起上つた頃、細君は子供を負つて谷の下の方からやつて來る。何故斯うして訪ねて來たかといふことを其時菅は青木に打明けて話した。「細君には御迷惑だらうけれど。」と菅は熱心を顏に顯して言つた。

「鶴ちやん。」

斯う菅が顧みて呼んだ。操は近づいた。三人は最早夕飯の準備が出來たことを知つた。

二十六

夕飯。海では鰹の釣れる頃で、心を籠めた細君が手料理の外に、新しい刺身なども膳に上つた。操は氣を利かして銚子をつけて來た。本堂の側にある窓のところは明るくて飲食するに好かつた。

青木は樂しさうに酒の香を嗅いだ。衰頽れたやうな神經が強い刺激の爲に漸く興奮して來る。

「菅君はいゝよ。」

斯う言つて盃を乾した。彼は岸本の顏を見ると、考へたくなる。餘計に心が傷む。それよりは、よく調和のとれた菅の資性が可羨しかつた。

「貴方等のことを聞きましたよ。」と操も傍へ來て子供を抱き乍ら言つた。物言ふ度に美しい齒のあらはれるのは斯の細君が持前の愛嬌である。——御二人でお寺を御上つた時に、友人が御噂へなすつたとかッて。

「オヤ、大變なことを聞かれちやつた。」と菅は笑つて、岸本と顏を見合せた。

「知つてますよ。」と操も笑つた。「岸本さんのことなぞは克く知つてますよ。宅で學校から歸つて來ますと、いつでも其の御噂です。大層從順な方だつていふぢや有りませんか。」

と言はれて、菅は右の肱で岸本を小衝いた。

岸本は紅くなつた。

『鶴ちゃん。さあ、いらッしやい、すこしだッこして上げませう。』

と菅は操の手から鶴子を抱取つた。この人には子供までも懷くと見えた。鶴子は首を縮めて、嬉しさうに手を動かす。

『あ、羞しいんだね。』と菅が言つた。

『菅君、僕にも貸して見給へ。』

と岸本も手を出す。鶴子は菅に抱かれたまゝ、暫時岸本の方を見て居たが、軈て泣出しさうに成つた。

『君は厭だとさ。』と誰か笑ふ。

『菅さんは子供がお好きなんでせう。どうしても違ひますね、お好きな方は。』

操は笑ひ乍ら鶴子を受取つた。

斯ういふ話をして居る間に、青木は奥の方へ行つて自分の草稿を持つて來た。新しく作つた蝶の歌がある。

『今朝立ちそめし秋風に、
自然の色はかはりけり。
高梢に蟬の聲細く、
淺草に蟲の歌悲し。
林には、
蝶の翅をへうらぶれて、
野面には、
千草の花もうれひけり。
あはれ、あはれ、蝶一羽。
破れし花に眠れるよ。

早やも來ぬ、早やも來ぬ、秋、
萬物秋と成りにけり。
蟻は驚きて穴索め、
蛇はうなつきて洞に入る。
田つくりは、
あしたの星に稻を刈り、
山樵は、
月に嘯きて冬に備ふ。
蝶よ、いましのみ、蝶よ、
破れし花に眠るはいかに。
破れし花も宿假れば、
運命のそなへし床なるを――
春のはじめに迷ひ出て、
秋の今日まで醉ひ／＼て、
あしたには、
千よろづの花の露に眠き、
ゆふべには、
夢なき夢の數を經ぬ。

只だ此まゝに寂しくして、
花もろともに滅えばやな』

傑の淸しい、力のある聲で青木は斯の歌を二人の友達に聞かせたが、讀終つて可傷しい眼付をした。彼は醉つて疲勞を忘れようとした。先づ胡坐になる。

二十七

『貴方。』と操は夫の方を見て、哀しい調子で、『今の歌の中に、運命のそなへし――といふところが有りませう。あそこのところを少許直したら奈何でせうか。』

斯う言出したので、菅も、岸本も同じやうに細君の顔を眺めた。

『運命のさだめし――とした方が可いかと思ひますわ。』

青木は笑はずに居られなかつた。

『僕の細君もこれでなか／＼詩人だよ。』

斯樣な戯言が、二人の友達を笑はせた。操は苦笑して勝手の方へ行つた。

青木が持出した草稿の中には未完成の戯曲もある。夏以來まだ僅少しか出來て居ない。彼は芝居に關係して見たいと言つて居る位で、

酷く其方に色氣があつた。で、斯の新作にも大分氣乘がして居るらしい。彼の考へでは、五縁、十夢、と斯樣な工合に書いて見る積りで、是はその計畫の一部分であつた。つまり其の一夢だ、と彼は言つた。なにしろ時世が時世で左樣新しいことは許さなかつたから、ありあまる程の思想を持つて居ても、それを適當な形式に盛ることが出來なかつたのである。

青木は自分で自分のにほひを嗅いで見るやうに、主人公が獨白の一節を讀んだ。二人の友達は耳を傾けた。

『伸びたわ、伸びたわ、われながら剛々しき斯の黑髮。二月ばかりも看經を斷ち、香も焼かず、戒も守らず、この髮の毛ほどに吾心の中も黑々と、迷執の奴となるぞ口惜しき――』

菅も、岸本も、斯の新作の文句を聞いて、ある歷史上の人物を胸に浮べることが出來なかつた。たゞ紙の上に描かれた青木自身の幻影を見るやうな氣がした。

『どうしても青木君だね。』

と菅が言つた。有體に言へば、斯の戯曲は彼の論文程に友達の心を動かさなかつたのである。青木は自分でも不滿足らしく見えた。

『もうすこし直さなくツちや不可。』

斯う彼は獨語のやうに言つて居た。

日の暮れる頃、菅は別れて行つた。其晩、岸本だけは泊ることに成つて、青木夫婦と一緒に枕を並べて寢た。『實に淡泊とした好い夫婦だ。』と岸本は繰返しながら、壁の方へ向いて眠に就いた。操は子供に乳を飲ませて居たが、間もなく晝の疲勞が出たかして、是もぐつすり寢込んで了つた。

青木獨りは眠られなかつた。斯樣な調子で押して行つたら、終には奈何なる。斯う彼は考へた。而して非常な恐怖の念を抱いた。どうかして眠らう、眠らう、と思つて、同じやうなことをノベツに繰返すやら、何度も寢返りを打つやらして見たが、奈何しても眠られない。苦しさのあまり、彼は寢床の上に起直つた。細い洋燈の光は友達や妻子の寢顏を曚朧と映して見せる。薄暗い、寂しい古壁の上にあるものは、唯聞きに聞いて居る彼自身の影ばかりであつた。

海の音が聞える。

『一大濤怒り、激浪躍るにあらずや。人間何ぞ獨り靜なるを得む。

斯う繰返した。彼には自分の生命の火が恐しい勢ひで燃盡きるやうに感ぜられた。

二十八

"Roll on, thou deep and dark blue Ocean—roll!
Ten thousand fleets sweep over thee in vain;
Man marks the earth with ruin—his control
Stops with the shore; upon the watery plain
The wrecks are all thy deed, nor doth remain
A shadow of man's ravage, save his own,
When, for a moment, like a drop of rain,
He sinks into thy depths with bubbling groan,
Without a grave, unknell'd, uncoffined, and unknown."

石澤歌

『捲き返れ、深海の青海よ――いざや捲け、

千萬の軍艦きほふともあだなりや、
陸をしも人の手は覆せ——その力
この岸に劃られぬ、大和田の原の上を
破れの屑漂ふぞ汝が功、こゝにして
人間の暴虐は影もなく、そが軀さへ、
束の間に滅えてゆく雨の襄の一滴、
空像の命こそ汝が底にしづみゆけ、
鐘の音も棺も將や葬もなき祕密の淵に。』

（蒲原有明氏譯）

斯の歌を歌つて、青木は岸本と一緒に海の方へ行かうとした。行つて顔を洗はうと思つた。

翌朝のことである。

新鮮な屋外の空氣は幾分か青木に蘇生るやうな心地を與へた。汽車道は斯の寺の境内を無遠慮に横斷して居るので、村へ出るには踏切を越さねばならない。石段を下りる、また上る、そこに古い門がある。岡の盡きたところが丁度寺の入口だ。操は子供を負つて其邊まで隨いて來た。

『父さん、鶴ちやんが行きたがつて居ますから、一緒に連れてツて下さいな。』

『此に子供を預けたつて困る。』と青木は立止つて言つた。

『だつて斯様に行きたがるんですもの。』と操は背中に居る兒の顔を夫に見せて、『さあ、鶴ちやん、父さんと一緒に行つてらツしやい。』

鶴子は父に抱かれたいやうな様子をした。

『困るなあ——友達が居るぢやないか。』と青木は妙なところへ理窟を附けて、無理にも妻へ押付けようとした。『子供はお前に頼む。』

『父さん——』

斯う操は操で頼むやうに言ふ。

泣慕ふ鶴子の聲を聞捨てゝ、青木は逃げるやうに漁夫の家の角を曲つた。岸本は何方へ加勢をして可いか解らなかつた。

砂を踏んで松のあるところへ出ると、二人は最早朝の光の中にあつた。海は目映しいほど輝いた。二人とも血氣壯な時代のことで、顔を洗つたばかりでは濟まされない。軈て衣服を砂の上に脱捨てゝ置いて、ザブリと海の中へ飛込んだ。彼等は押寄せて來る波濤に向つて競爭で泳いだ。

二十九

浪は高かつた。やゝもすると岸本は流されさうに成つた。青木の方は斯の海邊に生れた丈あつて、友達よりもよく泳げる。彼の體力はまだ左様失望したものでもないといふことを思はせた。斯の思想に力を得て、友達と一緒に浮いたり沈んだりして居ると、何時の間にか岸には多勢漁夫が集つて、二人の方へ恐しい魚鈎を投げてよこす。鈎は鳴つて來る。それが右にも左にも落ちる。二人は喫驚した。そこ〳〵に岸へ泳ぎ着かうとしたが、反つて浪の爲に反對な方へ浚はれて行つた。また〳〵浪が押寄せて來て、渚の方へ二人とも持つて行かれたかと思ふうちに、軈て崩れ落ちるやうな壯大な音響がした。其時、二人は白い泡の中に立つことが出來た。

海には幸の多い日であつた。鈎に懸つた鰹は、婦女や子供の群に引かれて、幾尾となく陸へ上つた。

斯の光景を眺め乍ら、暫時二人はそこへ足を投出して、暖かい心地の好い砂を身體に塗りつけた。甲羅を干す積りで岸本は逆倒つて見たが、首を傾けると、耳から汐水が流れて出る。同時に、両國の河岸でよく泳いだこと、家を飛出して最早九ヶ月に成ること、奥州のはてまでも遠く旅したことなぞを思出す。青木は自分で自分の膝頭を抱いて、不調和な社會に倦み疲れたやうな眼付をした。終には、其の膝頭へ額の着くばかりに重苦しい頭を垂れた。而して、熱

と目を瞑つて、岸に寄せる濤の音を聞いた。

歸り支度を始めたのは間も無くであつた。漁村を横ぎつて砂まじりの路を歸つて行くと、山門の處で二人は操に逢つた。子供にも。操はそこまで迎へに來て居たらしい。

「鶴ちやん。」

斯う青木が呼んだ。青木は女の兒を呼ぶにも坊主が口癖で、「鶴ちやん」とはめつたに言はなかつた。

操は默つて、鶴子を負ひ乍ら立つて居た。青木は傍へ行つた。「鶴ちやん」と復た親しげに言つて、思はず知らず笑つて、機嫌を取るやうに手を出して見せる。其時操は夫の様子を眺めて居たが、何を思ひ付いたか嘆息して、子供を負つたまゝ急に寺の方へ歸りかける。岸本はすこし呆氣に取られた。氣の毒さうに見送ると、細君は最早石段を下りて踏切のところを急いで居る。

「操、操。」

青木は妻を宥めるやうに呼んだ。

寺へ歸つて、青木は深い哀憐を感じた。奈何しても弱い者には敵はない、と彼は嘆息した。置去にされた鶴子は後で激しく泣いたとのことである。聞いて見ると、彼の方より折れて出るより外はなかつた。

「大變に泣いたんですよ。」

と操は鶴子の顔を眺め乍ら、恨めしさうに繰返した。

丁度午後から青木が東京へ出る日取に當つた。操は夫の爲に着物や風呂敷包の用意をした。軈て、岸本も友達と一緒に斯の寺を出た。二人は國府津から大船まで同じ汽車に乘つた。そこで岸本は鎌倉行に乘替へた。

三十

岸本が泊つて居るところは圓覺寺境内の古い禪寺で、苔の生えた石階を登りつめたところに門を構へたやうな位置に在る。住職は親切な人だし、門前の飯屋とも懇意ではあるし、以前からの關係で復岸本は斯の寺に置いて貰ふことにした。奥州の方へ出掛ける時に比べると、彼は一層眼が眩んだやうに成つて歸つて來た。八戸で餞別に貰れた金は、途中の旅費を差引いて了つても、まだ一月餘を支へるだけある。其中から、彼は東京で寫眞を撮つて、一枚は西京へ送り、一枚は勝子の許へ送り、餘は友達に分けた。

「君もなかなか政治家だね。」と菅が言つた。別に岸本は書籍を一冊買つて、世話に成つた禮として、それを西京へ送つた。彼はまた峰子へ、最後の手紙を書いた。「弟」にあたる人とは長く交際を續けたい、斯う言つて遣る。しばらく經つと返事が來た。すこし氣分が惡くて臥つて居た爲に返事を書くのも遲くなつた、弟こそは幸福者である、末長く見てやつて呉れ、といふ意味がアッサリと認めてある。愚痴めいたやうなことは少許も言つてなかつた。のみならず、反對に岸本の志を勵ましてよこした。

間もなく洗濯物が西京から屆いた。其中には清心丹なぞが入れてあつた。

斯ういふ親切な屆いた遣り方をするのは、峰子の天性に近かつた。その性質が反つて彼女を苦しめたのである。峰子の孤獨な、純潔な生涯は、その爲に不思議な苦しい色を帶びた。その親切から、彼女は岸本を迎へ入れもしたし、また彼を紹介した岡見の兄と親しい交際を續けもした。恐らく、峰子は兄のやうに岡見を考へ、弟のやうに岸本を考へたのであらう。岡見と岸本の二人が大和で邂逅つて、互に顔を見合せた時は、恰も悲しい喜劇中の人物であつた。其から、二人の親友は妙に笑へなくなつて了つた。

北の事情といひ、是迄さんざん世話に成つた

揚句といふ、岸本は岡見に向つて今更金の無心も出來かねるやうな始末と成つた。姉さんか母親さんのやうに面倒を見て呉れた峰子——其人にも岸本は今永い別離を告げた。最早彼を助ける人が無かつた。

三十一

次第に岸本は前後を顧みない樣に成つた。終には、友達の手も借りず、勝子の家へ宛てゝ直接に手紙を送るといふ無謀なことを行つた。岸本の胸は溢れ過ぎて、思ふところを十分言ひ表せない。それに比べると、勝子から來た返事の自由に書いてある。眞情がよく出て居る。鎌倉の寺に奈何いふ日を送つて居るか、といふ意味の書出しで、『君』といふ言葉がところ〴〵に使用つてあつた。勝子は最早師弟の關係を忘れて、純直な、可憐な胸を開けて見せた。君は無暗なことをする、と克く人が言ふ、自分故に君も其樣な風に成つたか、と考へると可傷しい、斯う書いてある。もと〳〵自分は文學といふことを左程好みもしなかつたのであるが、君故に、好になつた、而して今迄知らずに居た世界のあることを知つた、是も君の賜物である、斯う書いてある。清い交際も續け難いものとか聞いて居るが、君の心を力にして、自分も女らしい道を歩みたい、斯う書いてある。家を持つた人に言はせると、思つた程でも無いとやら、しかし父と呼び母と呼ばれ、夫と呼び妻と呼ばれてこそ、現世に生れて來た甲斐がある、吾等二人、何といふ薄い縁であらう、斯う書いてある。世間を見るに、すぐれた女は澤山にある、なにも自分一人が女といふ譯でもなし、斯樣なことも書いてある。斯の心情の解らない人は、假令狂じみてると言はうが、何と言はうが、言つても關はない。聞入れもしない、斯う書いてある。『あゝ、わが身はすでに死せるなり、殘るはたゞ君を慕ふ心あるのみ。』斯う書いてある。

斯の手紙の中で、清い交際も續け難いものとか聞いて居るが、といふ彼の文句のところが妙に岸本の胸に響いた。餘計なことを書いて寄したやうにも思はれたが、しかし率直に、自然に聞えた。

寫眞も來た。勝子はすこし肥り過ぎて、いやに降額のところなぞが光つて、何となく實物とは違つた人のやうに撮れて居る。眼付もあまり似て居ない。口唇は、觸らうものなら、火傷でもしさうである。可厭な寫眞だ。寧ろ岸本は味氣なく思つた。唯、それを見ると、今が處女のさかりであるといふことは確かに思はせる。勝子も矢張岸本と同じやうに、堪へがたい童貞の惱みを感じて居るらしかつた。

本堂の側にある明い部屋は岸本が起きたり臥たりして居る所で、長い廊下傳ひに、庫裏の方へ通ふやうに成つて居る。鳥の聲より外に境內の寂寞を破るものが無かつた。訪ねて來る人も無かつた。よく岸本は疊の上に横に成つて、日の射すところで假寐をした。

三十二

四五日の間は、名のつけやうの無い深い苦痛に壓されるやうな日が續いて、左樣いふ時には急に身體が震へたり、胸騷ぎがしたり、思はず知らず涙が流れたりするが、それを通り越すと、今度は妙に寂しい、居ても起つても居られないやうな日が來る。斯樣な狀態で、岸本は勝子のことを思ひつゞけた。實意の籠つた手紙を受取つてから、それに激せられて、一層彼は戀の情に燃えた。勝子がなければ、現世に生きて居る甲斐が無いやうに思はれて來た。

十月中旬と成つた。岸本は青木の許から送つて寄した雜誌を受取つた。中に青木の文章か

がある。それを見ると、可懐しい友達が住居のあたり、海岸の空、漁村の光景なぞが眼に浮ぶ。友達は今奈何なことを考へて居るかといふことも解る。

斯う書いてある。

「ある宵、われ隠にあたりて横はる。ところは海の郷、秋高く天朗らかにして、萬の象、萬の物、凛乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり。恰も我が局促たるを嘲るに似たり。恰も我が力なく能なく辯なく氣なきを罵るに似たり。渠は斯の如く我に透徹す。而して我は地上の一微物、渠に悟達することの甚だ難きは如何ぞや。

「月は晩くして未だ上るに及ばず、仰いで蒼穹を観れば、無数の星宿紛糾して我が頭にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内観して、我が内なるものを察するに、渠と我との距離甚だ遠きに驚く。不死不朽、渠と與にあり。衰老病死、我と與にあり。鮮美透涼なる彼に對して、撓み易く折れ易き我いかに悄然たるべきぞ。爰に於て、我は一種の悲慨に撃たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨我が心頭に入れり。罵者の聲、耳邊に在るが如し。我が爲すなきと、我が言ふなきと、我が行くなきとを責む。われ起つて茅舎を出で、且つ仰ぎ且つ俯して罵者に答ふるところあらんと欲す。胸中の苦悶未だ全く解けず、行く〳〵秋草の深きところに到れば、忽ち聴く蟲聲縷の如く耳朶を穿つを。これを聴いて我心は一轉せり。再びこれを聴いて悶心更に明かなり。曩に苦悶と思ひしは苦悶にあらざりけり。看よ、喞々として秋を悲むが如きもの、渠に於て何の悲みかあらん。渠を悲むと看取せんか、我も亦悲めるなり。渠を吟哦すと思はんか、我も亦た吟哦してあるなり。心境一轉すれば、彼も無く、我も無し。邈焉たる大空の百千の提燈を掲げ出せるあるのみ。

『われは歩して水際に下れり。浪白く萬古の響を傳へ、水蒼々として永遠の色を宿せり。手を拱きて蒼穹を察すれば、われ「我」を遺れて、飄然として襤褸の如き「時」を脱するに似たり。

『茫々乎たる空際は歴史の醇の醇なるもの。ホオマアありし時、プレトオありし時、かの北斗は今と同じき光芒を放てり。同じく彼を燭せり、同じく我を光らせり。然り、人間の歴史は多くの夢想家を載せたりといへども、天涯の歴史は太初より今日に至るまで大なる現實として殘れり。人間はこれを幽奥として畏るゝと雖も、大なる現實は始より終まで現實として殘れり。人間は、あるひは現實を唱へ、あるひは夢想を稱へて、これを以て調和すべからざる原素の如く諍へる間に、天地の幽奥は依然として大なる現實として殘れり。』

こゝまで讀んで、岸本は友達の思想が高潮に達して居ることを感じた。確かに、斯の友達は自分の先導者である。斯う考へるほど岸本は心を動かされた。

三十三

『われは自ら答へて、安らかなる心を以て蓬窓に歸れり。』と青木の文章は續けて書いてある。『わが視たる群星は未だ念頭を去らず。靜かに燈を剪つて書を讀まんとするに、我心はなほ渠にあり。わが讀まんとする書は渠にあり。漠々たる大空は思想の廣き歴史の紙に似たり。彼處にホオマアあり、シェクスピアあり、ボルテエルの徒――吁、悠々たる天地、限りなく窮りなき天地、大なる歴史の一枚、是に對してしばらく茫然たり。』

底の知れない不安は青木の文章にあらはれて居る。やゝもすると、青木はその不安に激せら

れて、反抗憤怒の態度を示したが、一面には斯ういふ深邃な瞑想を書いた。岸本は讀んで嘆息した。彼も亦た紙を展げて見た。結ぼれて解けない彼の胸は奈何言ひ表はして可いか解らなかつたのである。書かうと思ふことは、多く涙になつて流れて了つた。

「岸本さん、御客様。」

斯う言つて寺男が驚かしたのは、面白く空の晴れた晩であつた。人戀しくて居るところへ、しかも日が暮れてから訪ねて來た客が有ると聞いて、不思議に思ひ乍ら岸本は出て見た。青木だ。部屋へ迎へ入れると、急に逢ひたくなつて訪ねて來たといふ。夜氣に打たれた羽織の裾をすこし捲つて、行儀惡く坐つたところは、服装なぞに關はないといふ風で、闊く飄然とした様子に見える。

　青木は岸本の爲に心を痛めて來たらしい。尤も、二度と八戸行のやうな話は出なかつた。寧ろ彼は自分のことを話した。細君と子供は實家の方へ遣つて、當分別れ〳〵に暮して見る積りだと言出した。「奈何に儉約したつて、僕のところでは月に三十圓要る、それより以下では暮せない。」と言つた。「一家の奴は、君、下女でも使はなけりや、居られないといふ性だからね。」斯様なことまでも言出した。「無理もないサ。」と青木は何か思ひ出したやうに嘆息して、暫時岸本の顔を眺めて、「ナニ、君、其様な悲しい意味で別れるんぢやないよ。」終には斯う言つて笑つた。

　急に青木は耳を澄ました。

「あ、誰か僕を呼ぶやうな聲がする。」

と言ひ乍ら、彼は兩手を耳のところへ宛行つて、すこし首を傾けて居たが、軈て高い聲で斯様な歌を歌ひ出した。

『ひとつの枝に雙つの蝶、
羽を收めてやすらへり。
露の重荷に下垂る〻
草は思に沈めり、
秋の無情に身を責むる
花は愁に色褪めぬ。』

　荒れ悄れたやうな青木の眼は悽愴とした光を帶びて來た。寂とした本堂の方へ彼の聲は響き渡つた。

『言はず語らぬ蝶ふたつ、
齊しく起ちて舞ひ行けり。
うしろを見れば野は寂し、
前に向へば風冷し、
過ぎにし春は夢なれど、
迷ひ行方は何處ぞや。

同じ恨の蝶ふたつ、
重げに見ゆる四つの翼。
雙び飛びてもひえわたる
秋のつるぎの怖しや。
雄も雌も共にたゆたひて、
もと來し方へ悄れ行く。

もとの一枝をまたの宿、
しばしと憩ふ蝶ふたつ。
夕告げわたる鐘の音に、
驚きて起つ蝶ふたつ。
こたびは別れて西東、
振りかへりつゝ去りにけり。』

　これは岸本が國府津で聞いたのと違つて、別に出來た蝶の歌である。青木の新作である。聲は哀しかつた。岸本は斯の友達と一緒に、キ印にでも成るやうな、可畏しいところへ引入れられるやうな心地がした。

「青木君」と岸本が言つた。「僕なぞは、左様長く生きる人間ちやないやうな氣がする。二十五といふ年齢が來たら、多分死ぬネ。」

「君は直に左様弱つちまふから不可ない」

三十四

青木は風のやうに來て、風のやうに往つて了つた。彼は岸本の部屋に一晩泊つて、翌朝門前の飯屋で朝飯をやつて、そこで友達と別れた。

「盛岡も非常に弱つて居るやうだ。」

斯様な言葉を殘して行つた。

勝子の將來に就ては、奈何なるといふことを誰も言ひ得るものは無かつたし、又、既に運命の定まつた人であつて見れば、よしんば奈何しようと言つて見たところで、それが奈何なるものでもなかつたが、兎に角友達仲間の一問題で、菅の箱根と共に、絶えず連中が頭痛の種であつた。岡見は、例の俠氣から、岸本と勝子の間に入つて心配したが、是も成行に任せるより外は無いと絶念めた。

到頭、岸本は行き止るところまで行つた。第一食ふに困る。斯う悶き始めた頃は、やがて十一月の初である。最早寺に愚圖々々して居ることも出來なくなつた。丁度、三日に、鎌倉を發つことにして、例の門前の飯屋へ勘定に寄つて、そこの亭主にも別離を告げた。「是も何かの御縁で御座いませう。」斯様なことを言ひ乍ら、亭主は黄ばんだ大きな手を揉んで、酷く別離を惜むやうに見えた。晝食には赤の御飯の炊いたのがあると言はれて、有合の總菜に豆腐汁で、旅で暮す商人なぞと一緒に、岸本は二十二歳の天長節を祝つた。

前途は非常に暗かつた。勝子は死ぬかも知れない、といふやうな悲哀に惱へ乍ら、其日の午後、彼は東京へ向けて發つた。身體と言はず、精神と言はず、彼は今萌えて出る木の芽のやうな自分の生氣に壓されて、胸の塞がるほど苦しい人である。彼は最早自分で自分を制へることの出來ない人である。たゞたゞ怖しい勢で押出されて行く人である。

市川は谷中の寺に下宿して居た。これは上野の圖書館に近いといふ便宜があつたからで。そこから彼は高等學校へ通つて居た。團子坂の菊人形で人の出る時節、公園の方まで彼もぶらぶら散歩に行つて、歸つて見ると、岸本が來て居る。毎日辨當持參で寫物に通つて來る老人もそろそろ歸り支度をして出て行く。夕方から、岸本は身の上話を始めたが、市川の力で如何するといふことも出來なかつた。

友達を慰める積りで、市川は自分で持出した。彼に言はせると、涼子は一度この寺へ訪ねて來たといふことである。彼女は人力車を待たせて置いて話した。「あなたなら御出になすつても宜う御座んす。」斯様な言葉を市川に言つた時に、涼子は頬を紅めて、「まだそこまでは修業が積みませんから、」と言つて歸つたとやら。是の話を聞いた時は、岸本も黙つては居られなかつた。二人の情人が[illegible]の短い話の中に活躍して居る、斯う岸本は思ひ浮べた。市川は又、傳馬町から來た手紙の置場所に窮つて、それを櫻餅の空籠に入れて釣して置くし、さる日叔父さんに見つかつた、斯様なことまでも話して頭を掻いた。

其晩、二人の友達は蒲團を引張り合つて寢たが、其角嵐雪なぞを引合に出しては笑ひ、足が出たと言つては笑つた。岸本は身が熱ると言つて、妙に寢苦しがつて、拂曉まで碌々眠らなかつた。

「岸本には熱がある。」

と市川は夜が明けてから笑つた。「斯う逆上せて了つては手が着けられない。」と思慮の深い彼の眼が言ふやうに見えた。

三十五

菅は木挽町から池の端の下宿に移つた。そこへも岸本が訪ねて行つて、一晩厄介に成つた。市川からは、岸本宛の葉書が來て、「君はあまりに眞面目すぎる、」といふ意味を英文で書いて寄した。菅とても矢張市川と同じことで、何程岸本の爲に心配して居たか知れないが、と言つて突如に舞込んだ友達を奈何助けるといふことも出來なかつた。そこは年長だけに、「まあ、遊んで居給へ、」斯う言つて慰めた。

時間が來て、菅は麹町の學校へ教へに行つた。岸本は獨り其下宿に殘された。屋敷跡と、でも言ひさうな古い庭に圍まれた家で、片隅に菅の借りて居る部屋がある。間取の工合も都合よく出來て居る。外に下宿する人の聲も聞えない。窓によせて菅の机が置いてあつて、其障子の開いたところから、不忍の池に近い空も見える。岸本は窓の方へ行つた。倚凭つて前途のことを考へようとしたが、情人のことより外に何事も考へられなかつた。

雁が鳴いて屋根の上を通つた。其荒い叫び聲は怖しく岸本の頭腦へ響けた。「あゝ――自分の頭腦の内部の聲だ。」眼を瞑りながら彼は斯樣なことを想つて見た。而して、暫止して居られないやうな心地に成つた。

ぶらりと岸本は菅の下宿を出た。それは午後の三時過であつた。鐵道馬車の通つて居る頃で、上野の廣小路から銀座まで乘つて、ある時計屋の店頭に立つと、そこの主人は岸本の顔を忘れずに居た。まだ岸本が小學校へ通つて居る頃、天金の横町から其邊へかけて、よく鼻洟を垂しながら遊んで歩いたものである。その昔馴染が懷中から鐵側の時計を出して、幾何でも可いから引取つて呉れと言つた時は、主人もすこし妙な顔をした。馴染甲斐に、三兩なら買はうと言ふ。岸本は三兩が二兩でも可かつた。早速其場で約束が出來て、品物と引替に受取るだけのものを受取つたが、別に主人の方では名前を書けとも判を押せとも言はなかつた。

斯うして岸本は僅少ばかりの金にありついた。其時は最早女達の方へ歸らうとしなかつた。暫時彼は銀座の通に立つて、灰色がかつた柳並木、用事ありげに往つたり來たりする人々、濕つた空氣に包まれた町々の光景などを眺めて、叔父の家族と一緒に縁日だと言つて植木や金魚を買ひに行つた其往時のことを胸に浮べて居たが、軈てすた〱新橋の方へ歩いた。

「兎に角、一ぱい飲まう。」

斯う柄に無いやうな獨語を言つた。不思議な戰慄は彼の身體を傳つて流れ下つた。酒の香でも嗅がなければ居られないといふ苦しい心地は、彼自身に取つて驚くべきことである。しかし乍ら彼は自分で自分に抵抗することも出來なかつた。で、きよろ〱しながら飲食する場所を探した。新橋の畔まで行くと、そこに牛肉屋がある。

三十六

肉と脂の煮える強い香氣は、間もなく岸本の鼻を衝いた。樓上には種々な客がある。手酌でちびり〱やつて居る職人體の男もある。丁度岸本と同年配位な三人ばかりの書生の組もある。そこゝから起つ湯氣と、煙と、客の話聲と、飲食する音と、その間にまじる女中の笑聲と、斯う混雜々々した光景の中で、岸本は隅の方の場處に牛鍋を控へた。軈てジリジリ音がして來た。葱も柔く甘さうに煮えた。それを嗅ぐと、妙に泣きたいやうな心地になつて、胸が塞へて來る。わざ〱食ひに來たほどで、酒も上燗ではあつたが、口氣は進まなかつた。

の故か、不味い、その熱い苦いやつを無理に口に含んで、顏を顰めながらグッと飲んでやる。日頃、三四杯もやれば直に外部に發する方の彼が、其日に限つて紅くも成らない。飲んでも、飲んでも、醉はなかつた。終には身體がブル／＼震へて來た。

　燈火の點く頃、岸本は其二階を降りたが、身體の戰慄は止まなかつた。踊でも煩ふ人のやうに、自分で其を奈何することも出來なかつたのである。

　其時、往來で何かしきりに爭つて居るものが有る。岸本と一緒に飲食して居た三人連の書生だ。いづれもよろ／＼した足許で、行けとか、行かないとか、言つて居る。其中の二人は、物欲で饑ゑた魚のやうな眼付をし乍ら、無理やりに一人の男を連れて行かうとする。腕力で交際を強ひられて居る方の男は、危險を遁れようとして悶き騷いだ。

　斯の憐むべき捕虜の連れて行かれる方へ、岸本も同じやうに歩いた。夕方の空は蒼黒く變つて來た。彼は自分の生涯も同じやうに闇暗く翳りつゝあることを感じた。而して、怖しい勢ひで荒れ廢れて了ふやうな氣がした。ふと、途中で袂を探ると、勝子の手紙と寫眞がある。

何を思つたか、岸本はそれを裂いて捨てた。恰も思慮の無い少女が、抱いて寢るほど大切にした人形の髮の毛を挘つたり、衣服を裂いたり、手足を捩取つたりして、終には泥の中へ投捨てるやうなもので、何故其樣なことを爲るのか、自分にも解らなかつた。

　冷い風が吹いて來た。彼は其風が品川の海の方から吹いて來ることを知つた。

　總て舊い劇の書割でも見るやうな光景が彼の眼前に展けた。暗い、陰氣な、牢獄のやうな空氣が町中に溢れて居て、それを祭禮らしい色彩で無理に花やかに見せてある。軒先の暖簾の影には一人づつ男が立つて、手招きと、御辭儀と、卑下した言葉とで、煙草を勸める婦女があることを示した。別に案内を營業として居る家もある。滑稽と洒落とを裝ふやうな人達は宵闇に紛れて往つたり來たりして居た。

三十七

　この夜と晝と取違へて居るやうな場所を離れて、品川の停車場近くで朝飯を食つた頃、岸本はすこし正氣に返つた。はじめて彼が會つたといふは、年の頃二十七八になる、色の褪めた、頰骨などの隆く尖つた女で、どう容貌を修飾つても醜い生地を隱すことは出來なかつたが、[illegible]世渡りの經驗を積んで、稼業を粗末にしないと言つたやうな風の人である。飯をやりながら、岸本は斯の人のことを考へて見たが、最早相手にする客もなくなると言つたやうな、寂しい墮落した婦女の樣子が、彼の眼に浮ぶ。其時、彼は一夜の馬鹿らしい行爲を振返つて見て、強ひて平氣を裝はうとしたが、我と我が身を笑はずには居られなかつた。彼は自分もまた恥づべき人間の一人であることを感じた。

　不思議な決心は軈て岸本を理髮店の方へ導いた。そこは場末の汚穢しい家である。未だ朝のことで、他に客も見えない。

『旦那、御刈りになりますか。』と床屋の亭主が白い布を持出しながら言つた。

『さあ、』と岸本は頭を撫でた。『一つ綺麗に剃つて貰ひませう。』

　朝ツぱらから妙な客が舞込んで來た、と言つたやうな顏付をして、亭主は暫時岸本の樣子を眺めたが、『頭腦の工合でも惡いと見える。』斯う口の中で言つて、砥石へ剃刀を宛行ひ始めた。

　岸本は髮を長めにして、足立や菅と同じやう

な分け方をして居た。是は二人とも同じ學校に居た時からの型である。言はゞ同窓の形見である。唯、普通なら多く左の方から分けるやつを、岸本のは右の方から分けた。その粗く短い髮も、今は最早用が無いといふ風で、片端から剃落された。白い布の上へも落ちた。堅い地梨のやうな頭の恰好が次第に顯れて來た。

「可愛らしい、」とは言へ未だ生臭な青道心が、到頭そこへ出來上つた。青々と剃立てた頭を大きな鏡に映して見て、岸本は自分で自分の影にニヤリと笑つた。彼は自分ながら左樣不似合だとも思はなかつた。

「頭は出來た。これから服裝だ。」

と呟き乍ら、岸本はその床屋を出た。彼の懷中には、時計を賣つた金の殘りの外に、未だ幾何の持合があつた。鎌倉まで汽車に乗つても、一圓ばかり殘る勘定になる。そこで、例の寺へ向けて品川を發つた。この日、天氣快晴。雲なし。

三十八

『オヤ、岸本さん、大層サッパリとなさいましたね。』

漸く青々とした坊主頭で岸本が訪ねて來たといふことは、酷く住職を驚かした。

そこは岸本が二度も世話に成つた鎌倉の寺である。臺所に近く爐を切つた部屋があつて、古びた戸棚には茶と酒の道具が一緒に置並べてある。住職は中年から僧侶の籍に入つた人、もと町人の出とやらで、至つて腰が低い。言葉遣ひなぞも丁寧にする人である。

『まあ、どうかしたのでは有るまいか。』と言つたやうな眼付をしながら、住職は茶を入れて出した。岸本は用事を切出しかねるといふ風で、モヂ／＼して居たが、實は、思ひ立つことがあつて法衣を願ひに來た、斯樣な雲を掴むやうなことを熱心に言出した。

『そいつは困りましたなあ。』と住職は岸本の心を汲取りかねて居る。『かうつと。寺にありますと、何ですけれど、生憎差上げるやうなのが御座いませんし――』と言つて考へて、『岸本さんなんぞには、十徳といつた方が御似合なさるかも知れません。』

斯樣な調子で埒が明かなかつた。住職に言はせると、四季施のやうな法衣が得られないでもない。が、それには弟子入をしなければ成らない。時日が要る、其樣なまどろッこしい、手數の要ることは、岸本には待つて居られなかつた。到頭、彼は懷中から紙入を取出して、其を住職の前に置いた。彼は身に附いたものの全部を捨てる程の決心を示した。住職が今着て居る平素の法衣でも可いから、と言出した。

斯の決心が住職の心を動かした。其時迄、住職は自分のことを忘れて、岸本の顏ばかり不思議さうに眺めて居たが、ふと斯の狂人じみた青年を笑へなくなつた。遽然住職は涙を浮べた。而して何か思出したやうな眼付をした。

『御役に立ちますことなら――』

斯う言ひ乍ら、潔く自分の着て居るものを脱いで呉れた。

岸本が住職から貰ひ受けたのは、正式の法衣よりすこし丈の短いもので、黒に染めて紫色の紐が着けてある。言はゞ禪宗の僧侶が羽織である。そのヨソイキとでも言ひたいものである。斯ういふ略服で岸本の目的が達し得られるか奈何かは疑問であつた。しかし彼は其樣なことに頓着しなかつた。

十一時頃に岸本は斯の寺を出た。眞の放浪、眞の漂泊は是からだ、といふ顏付で、寧ろ彼は雀躍して出掛けた。其時の彼は實に不思議な風體であつた。上部の方は僧侶らしくもあるが、法衣に似て法衣で無いものを着て居る。下部は

全然普通の旅人である。それに笠の用意すらも無い。どこから見ても、成つて居なかつた。のみならず、彼は最早一文も持つて居ない。

三十九

何處へといふことは岸本自身にも解らなかつたが、足に任せて目的なしに歩いた。唯歩いた。彼の足は鎌倉から西の方へ向いたから、東海道を下つて行くことだけは自分でも承知して居た。收穫の頃で、熟した穀物が街道の兩側に波を打つて居る。農夫は日光を浴びて野外の勞働に從事して居る。中には、腰を延ばして汗を拭き乍ら、岸本の通るところを眺めるのも有つた。

次第に岸本は空腹を感じて來た。ふと、ある村へさしかゝつて、農家の前を通ると、一八の黄色くなつた草葺屋根の下から、五十ばかりの老婆が出て來た。表庭には豆なぞが乾並べてあつた。その老婆が岸本の姿を見ると、若い行脚僧とでも思つたかして、掌を合せて、何か斯う念佛でも唱へるやうな樣子をした。思はず岸本は微笑を浮べた。掌を合せる位なら飯の一ぱいも振舞つて貰ひたい、斯う思ふほど、彼は饑じくなつたのである。

日暮に近い頃まで、岸本は食はずに歩き續けた。軈て、松林の多い小山を越して、人家のあるところへ出た。寺がある、夕餐の烟も見える。其時は最早疲れて歩けなかつた。で、一泊を願ふ積りで、寺の住職に面會を求めると、上框のところへ出て應接したのは四十ばかりになる、色の黑い、眼付の險しい尼である。尼は直に岸本を胡散臭いと看て取つた。まさか狸だとも思はなかつたらしいが、何しろ變な奴が來たといふ面持で、出家なら出家らしくして來い、其樣な怪しげな風體の者を斯の寺に泊めること出來ん、斯う撥付けた。『早く出て行け、乞食坊主め。』と尼の眼が言つた。岸本は未だ物貰ひの經驗が無かつたので、人の哀憐を引くやうな言葉遣ひも知らないし、又、それほどの忍耐も無い。そこで彼は憤然として了つた。困つた者を助けるのは出家の役目ではないか、厭なものを無理に泊めて呉れとは言はない、と反對に斯樣な理窟を腹の中で捏ねて、『あゝ左樣ですか。』とかなんとか言ひ乍ら、その寺を出ようとした。

『もし／＼。』

斯う岸本を呼留めたのは、冷飯草履を穿いた寺男の老爺である。

老爺は庭の入口のところで聲を低くして、

『何處の御方か知らないが、さぞ御困りでせう。是を持つて御歸りなさい。それ、握飯を上げる。』

と言ひながら、大きな握飯を二つに、澤庵を二切ばかり添へて、それを岸本の手拭に包んで呉れた。

岸本の眼からはボロ／＼涙が溢れて來た。禮を言つて其處を出た頃は最早暗かつた。斯うして漸く其日の糧にありついて、握飯を食ひ乍ら歩いた時は、剃立の坊主頭が冷い夜露の爲に濡れた。其晩は別に何處へ泊るといふ的もなかつた。

四十

『御泊りになりませんか。』暗闇からちよこちよこと出て來て斯樣なことを言ふ人が有つた。聲は老婆だ。星明りに岸本の方を透かして見て、宿賃は七錢だが泊らないか、としきりに勸める。偶然にも、岸本の左の袂から十錢銀貨一つ出て來た。それだけ有れば、一晩泊めて、風呂に入れて、朝の飯だけ炊いて呉れるといふ。

斯の約束で、岸本は導かれて行つた。

爐には火が燃してあつた。無い／＼とばかり思つて居た金錢が――假令十錢でも――出て

來た御蔭で、思ひがけなく岸本は木賃宿に泊ることが出來たのである。手拭に附着いた飯粒を穢い風呂場で洗ひ落して、僅かに一日の疲勞を忘れた頃は、最早ガッカリして了つた。彼は明日のことなぞを考へて居られなかつた。天井の低い二階、古新聞で張詰めた壁、細く暗いカンテラの光、それから幾人の貧しい旅人が其上に枕して眠つたかと思はれるやうな、冷い、垢染みた木片の臭氣――何もかも、一夜を他の軒下で震へ明すから見れば、どうして苦に成るどころでは無い。部屋には外に客も無かつた。彼は先づ寢床の上に倒れて大の字なりにふんぞりかへつた。『ア丶草臥れた。』と心から疲れたやうな、放擲したやうな聲が思はず知らず出た。妙なもので、其樣なことでも言つて呻吟つて居ると、それだけ樂に成るやうな氣がした。蒲團は薄いのが一枚しか無い。彼はその中に包まつて、柏餅のやうに成つて寢た。

翌朝、岸本は急しさうに斯の宿を發つた。而して前の日と同じ方角を指して歩いて行つた。眼前には種々な光景が展けないでもなかつたが、判然と心に映るものは少かつた。彼は、今迄に何里歩いたかといふことも知らなければ、今何處を歩いて居るかといふことも知らない。斯樣な調子で、とぼ／＼と辿つて行くうちに、晝過に成つても食ふ物は無かつた。其時は最早、親兄弟は言ふに及ばず、友達とも遠く離れた。稀に途中で逢ふ人は知らない他人ばかりである。終には歩き疲れて、自分の身體を路傍の土の上へ投出すやうに成つた。

薄日が霜枯れた草の上に射した。岸本の眼に映るものは、今、その動搖する光ばかりである。ボンヤリとして眺めて居ると、彼の頭腦の内部も幾分か明くなつて來る。紛とした土の臭氣を嗅ぎながら、彼は身の周圍を眺め廻した。唯一人――斯うなると寂しいところを通り越してシーンとして了ふ。最早、何にも無いと言つて可かつた。有るものは、薄い日の光と、戰き慄へて居る自分ばかり――斯樣な風になつて、長いこと岸本は悄然眺め入つて居た。すこしも靜止しては居られなかつたが、と言つて休息まずにも居られなかつたのである。

日が隔つて來た。復た岸本は器械のやうに歩き出した。

四十一

しきりに犬が鳴く。往來には鍬を肩に掛けて歸つて行く農夫がある。稲を負つてやつて來るのもある。岸本は急いで人家のあるところを行き過ぎようとした。怪しげな者が通る、と言つたやうな聲を出して、犬が追つて來た。平常とは違つて、タヾの犬の鳴聲とも思はれない程、岸本の耳には怖しく聞えた。彼の方で逃げようとすればする程、餘計に來て吠え付く。終には、三四疋一緒に成つて、牙を顯して、今にも背後から噛付きさうな氣勢を示した。

『畜生ッ。』

と岸本は怒氣を含んだ。彼は悲しさうな眼付をしながら、石を拾つて投げた。

この犬の鳴聲が遠くなつて、軈て聞えなくなる頃、彼はある坂を下りた。不圖、浪の音が寂しく耳に入る。それを聞いて、彼は海岸に近いところへ出て來たことを知つた。坂を下りきつて、それから次の村へ入らうとするところに、橋がある。その橋の上に立つた頃は、黄色く光る西の空が彼の眼に映じた。

苦み、餓ゑ、疲れた旅の一日は次第に暮れて行つた。彼は朝飯を食つたばかりで、水一口も飲まずである。村はづれの家々、立ち登る煙、夕暮を急ぐ人々の顏、何もかも彼の眼には一緒に成つて、グラ／＼動いて見えた。橋の下には音のしない水が流れて居る。欄の上から覗き込

むと、急に彼は眩暈がして來て、その水の中へ轉げ落ちさうな氣がした。而して、その水を見ると同時に、實に思ひがけない思想を胸に浮べた。

幾度か岸本は橋の上を往つたり來たりした。最後に村の方へ半町ばかり歩いて行つて、急にそこで踵を返した。彼の足は浪の音のする方へ向いた。橋の畔から竹藪のやうなところを通り拔けて、小高い砂山のあるところへ出ると、一筋の細道が枯草の中に在つた。所謂濱道だ。それを迪つて海の方へ行く前に、彼は先づ四邊を眺め廻した。右に墓地がある。花なぞを供へた新しい墳がある。死人に手向けた水もある。彼はその茶碗を取つて、渇いた咽喉を潤した。それから古い石塔の倒れたのを見つけて、その上に腰を掛けて、考へた。

『萬事休す！』

斯う思つて起ち上つた頃は、最早海も暮れかかつて來た。蒼茫として彼の眼前に展けた光景は、永遠偉大な自然の繪畫でもなければ、深祕な力の籠つた音樂でも無い。海はたゞ彼の墳墓である――冷い、無意味な墳墓である。不幸な旅人は、今、自分で自分の希望、自分の戀、自分の若い生命を葬らうとして、その墳墓の方へ歩いて行くのである。到頭、彼はその墳墓の前に面と向つて立つた。暗い波は可怖しい勢ひで彼の方へ押寄せて來た。

四十二

『此世の中には自分の知らないことが澤山ある――今こゝで死んでもツマラない。』

斯う岸本は思ひ直した。彼は浪打際で踏み止まつて、そこからもう一度人里の方へ引返した。

偶然にも、岸本が今歩いて居るところは、前川村の隣村であつた。いや、小字が違ふだけで、同じ村續きと言つても差支ない程近いところへ來て居た。このことを土地の漁夫から聞いた時、岸本は地を踏んで悦び躍つた。して見ると、彼が入水しようとしたところは國府津に近い相模灘の海岸で、一度青木と一緒に泳いだ場處とは物の十町と離れて居なかつたのである。

其夕方、青木は近所へ話しに行つて居た。細君が駈けて來て、『西行さんが見えましたから、早く御歸りなさい、』と言ひ置いて歸つた時は、全く青木も不思議に思つた。まさか岸本が坊主になつて、其樣な近いところまで彷徨つて來て、加に土左衞門に成り損ねたなぞとは思ひもよらないから、誰が訪ねて來たのか、斯う思ひながら、急いで寺へ歸つた。彼は先づ友達の變りはてた姿に驚かされた。

『うん、君かア。』思はず青木は口走つた。『西行さんが來たなんて言ふから、誰かと思つた。』

漂泊の思想は絕えず青木の胸の底にも在つた。それを青木は、口癖のやうに、『西行的、西行的、』と細君に言聞かせて居た。で、飛んだところで、操が其の『西行さん』を利かせたのである。

寺では風呂が出來たといふので、青木は岸本と一緒に庫裏の裏手の方へ入浴に行つた。軈て夕飯の支度が出來た。例の牕に近いところで、寛いで、青木は自分も食ひ、疲れた友達にも食べさせた。

『岸本君にも驚くよ。』と青木は細君の方を見て言つた。『お墓の水を飲んだなんて。』

操は給仕しながら、呆れて居る。

『掬飯を呉れたと言ふのは、何處の寺かね。』斯う青木が聞いた。

『さあ。』と岸本は頭を掻いて、『何處でしたッけか――どうも、よく記憶が無いんです。』

『何處の寺だらうなあ。一つその老爺さんを尋ねて、禮を言つて遣りたいね。』

斯う青木が言つたので、操は客の方よりも、夫の顔を熟視つた。

「ねえ、操、」と青木は喃弄半分に、「同じ坊さんに成つても岸本君のは違ふね。何となく斯う、高僧とでも言つたやうな風ぢやないか――」

岸本は苦い顔をした。「何とでも言ひ給へ。」と彼の眼が言つた。尤も、斯様な馬鹿けた皮肉を言はれても、冷かされても、彼は一言も無いやうな位置に在つた。彼は唯『ウフヽヽ』笑ひ紛らして居た。

「しかし、」と青木は眞面目に成つて、「君は體軀が好いからサ。體軀でも弱くつて見給へ、どうして其様な思切つたことが出來るもんぢやない。」と言つて、氣を變へて、「なんでも、一度破つて出たところを復た破つて出るんだね――畢竟、破り破りして進んで行くのが大切だよ。」

斯う彼は若い友達を勵ました。

それは最早畠の蜜柑の熟する頃であつた。操は子供を寢かしつけて置いて、村まで買ひに出たが、間もなく重さうな笊を抱いて歸つて來た。『さあ、岸本さん、召上つて下さい。以前當さんと御一緒にいらしつた時分は、未だ青々して居ましたねえ。最早斯様なに黄色く成つたんですよ。』斯う言ひ乍ら、操は甘さうに熟したやつを擇つて、それを客に侑め、夫にも侑めた。岸本は新しい果實の香氣を嗅いだ。而して、其夕方迄のことを考へて、よく友達夫婦の顔を見ることが出來たと思つた。

四十三

『貴方。眞實に、他事ぢや有りませんよ。』と操は牕から顔を出して、朝の散歩から歸つて來た夫を迎へた。『岸本さんのやうにでも成つたら、奈何します。』

「俺が彼様なヘマな眞似をするもんかい。」斯う青木は牕の下に立つて答へた。

岸本はまだ寢て居た。青木は牕のところへ手を掛けて、庭から部屋の内部を覗いて見た。奥の方の暗い壁へよせて、臥床が敷いてあつて、仰に枕して居る友達の坊主頭がすこし光つて見える。まだ岸本は夜の明けたのも知らないらしい。

『へえ、よく寢てるね。』と青木は微笑み乍ら言つた。

『餘程御疲れなすつたんでせうよ。』と操も笑ふ。

「まあ、そうツとして、寢かして置くが可い。なにしろ二日の間碌々食はずに歩いた人だからね。」

鶴子の泣聲が聞えたので、快活な、強健な細君の笑顔は、其時牕のところから消えた。

青木が妻子を實家の方へ預けて、當分別々に暮して見ようといふ計畫は、お流れに成つた。例の言草ではないが、西行的に漂泊の生涯を送つて見たいといふのも、この夫婦別居の案も、結局同じところから出る苦悶の聲で、それが操の身に取つてはあまり難有く聞えなかつた。何故左様考へるのだらう。何故左様面白くないのだらう、何故このまゝ家庭を樂むといふ氣に成れないのだらう。斯う操は思つて居る。彼女に言はせると、時節の來るまで貧乏すると思へば差支ない話で、食へないと言ふなら共働きもしよう、現に、操は近所の娘を集めて、寺の本堂で裁縫や手習などを教へて居る。斯う女らしい頭腦から割出して、何も左様夫のやうに苦むことはなからうと思つて居る。そこはそれ、夫婦の情だ。假令暫時でも別れ話などが始まれば、餘計に離れ難いやうなところが出て來る。青木は、家庭に束縛されて居る自分を嘲り笑ひながら、一層深く妻を愛するやうに成つたのである。

岸本が轉け込んで來た頃、青木は例の麹町の

學校へ教へに行くことと、ある亞米利加の宣教師の爲に宗教事業の手傳ひをするだけで、書き物の方は暫時中止して居る。陶山の社から頼んで來たといふ西洋の文豪の傳記も三分の二ばかり書いて休めた。例の戯曲も其儘に成つて居る。何か書かうとすると、頭腦が痛い。身體の内部の疲勞と衰弱とを感ずることも一層激しかつた。そこで、操の勸告を容れて、當分靜養しようと心懸けて居るところで有つた。

時候は好かつた。其年の小春は殊に溫暖であつた。寺の周圍は、何處へ行つても日あたりの好い傾斜がある。谷といふ谷には、晩秋の香氣が滿ち溢れて居る。畠は寧ろ庭園と言つても可い位で、散歩に適した細道が幾筋となく其間について居る。最も青木の氣に入つたのは蜜柑の樹で、深い感想のする葉蔭から、黄に熟した果實の垂れ下つて居るのを見ると、其色が眼から入つて、何時迄も精神に殘つて、何となく憂愁を忘れさせるやうなところが有つた。青木は暫時の間、一生のうちで左樣幾度も經驗することの出來ないやうな、樂しい、蕭散な日を送つた。斯ういふところへ、岸本が變りはてた姿で到着した。感じ易く傷み易い青木は、平氣で友達の顔を眺めることが出來なかつた。

四十四

舟旅で酷く搖られたものは、陸へ上つた後でも未だ身體がフラ／＼する――丁度、青木の住居で眼を覺ました岸本が其樣な鹽梅であつた。

疲れた友達を慰める爲に、青木は其日を費さうと思ひ立つた。彼は岸本を國府津の町はづれへ誘つて行つて、そこに住んで居る一人の知己を訪問した。この人は東京のある私立學校で政治科を修め、それから郷里に退いた男で、今では相應に大きな家屋敷の主人公である。進んで戰はうとする新しい時代の青年を羨み眺め乍ら、自分は何事もせずに居る、と言つたやうな人物で、太い、逞しい、筋張つた腕を胸の上に空しく組合せたところは、この先生に好く似合つて居た。

其日、岸本は法衣を脱いで、身姿だけは平素と同じ風をして居た。毛一本でも、有るべき筈のところに無いのは物足りないもので、何となく上下の釣合が取れて居なかつた。彼は、頭痛持か、幇間かのやうに見えた。

「これは僕の友人です。」と言つて、青木は岸本をその家の主人公に紹介したが、同じ口唇で、「安珍清姫――あれを逆にしたやうな人なんです。」斯樣なことを追加した。斯の言葉には岸本も閉口したと見え、苦笑ひして、頭を撫でて居た。左樣かと思ふと、青木は人の居ない時に、岸本の顔を眺め乍ら、「正直言ふと、君はすこし暴進の形だつたネ――君のやうに熱して了つたんぢや自由が利かない。」と心配する。冷いやつと熱いやつとが、青木の口唇からは替り番こに出て來た。三人は連立つて海邊の方へ出掛けた。例の先生が奢ると言ふに任せて、二人の友達は一緒に舟で遊んだ。就中青木は、自ら恣にするといふ風で、あをのけに舟の中へ寢轉んだところは、白面で居ながら醉漢のやうでもあつた。過度の傷心と激昂とで、彼の神經は最早餘程衰へて居る。どうかすると彼は艫枕や舷に摑まつて、眩暈でもするやうな眼付をした。

夕方から、海の見える旅舍の二階へ上つた。そこは新料理屋と言つたやうな家で、欄に迫る松の緑の間から、蒼然とした暮色を望むことが出來る。次第に大島も隱れた。酒が始まつてから酷く青木は眞面目に成つて、沈痛慷慨な語氣でもつて、舊い習慣と形式とに束縛された多くの思想を攻撃し始めた。彼は當時の似而非愛

國者、自分で知らずに居る樂天家、他界の觀念に乏しい宗教家、それから浮世の英雄なぞを數へて、莊嚴な威容を備へた人間の爲ることも、多くは憐むべく悲しむべき戲れに過ぎないと嘆息した。青木に言はせると、今の祖國は唯青年の墓である。何等の新しい生命を認めることが出來ない。何等の創意も無い。唯、淺薄な泰平の歌を聽くのみである。

破壞！　破壞！　破壞して見たら、あるひは新しいものが生れるかも知れない。今日までの自分が苦戰は、すべてその精神から出た努力に過ぎなかつた。斯う青木は言ひ出した。

不思議にも、岸本の耳はすこし開いて來た。彼は自分を忘れて友達の話に耳を傾けた。其夕方ほど青木の眞面目に成つたところを岸本は見なかつたやうに思つた。寧ろ岸本は薄氣味惡く思つた位である。

四十五

翌日は青木が東京へ出向く日取である。岸本は、友達が內輪の苦しいことも承知して居るので、左樣長く厄介に成らうとは思はなかつた。前途の方針を定めたい、而して一日も早く友達の宿を發ちたい、斯う彼は考へて居る。

「ねえ、操、しばらく岸本君を吾宿に置いて上げようぢやないか。奈何だね、お前の方の都合は。」

「えゝ、宜う御座んすとも。」

青木夫婦は、岸本を前に置いて、斯樣な言葉を交換した。苦しい中にも、斯う言つて吳れるのは、實際岸本の身に取つて嬉しかつたのである。

『すこし僕に考へさせて吳れ給へ。』斯う岸本が言ふ。

「まあ、ゆつくり考へるさ。」

と青木は慰撫るやうな語氣で言つた。

時間が來た。操は夫の爲に羽織袴を取出した。耳が鳴つて困るとか、頭腦のところが痛むとか、よく青木が其を訴へるので、操も夫の身體を氣遣つて居る。と言つて、今こゝで主人公に休まれては、家の者が奈何することも出來ないやうな境涯にあつた。操が近所の娘を教へる位は、いくら骨折つたところで、知れたものである。否でも應でも青木に働いて貰はなければ成らなかつた。

例の無造作に、青木は袴を着け乍ら、「何時僕が西行的に出掛けても可いやうに、それだけは細君も承知して居て吳れるんです——」と岸本の方を見て言つた。

其時操は、「また西行さんが始まつた」と言つたやうな眼付をした。

「父さん、行つてらッしやい。」と操は子供を抱いて見せて、軈て出て行く夫を見送り乍ら、牕のところに立つた。「貴方、數寄屋町の方へ御寄りなさるんですか。」斯う呼留めて聞く。元數寄屋町には青木の家がある。コジンマリとした店を出して、筆墨なぞを鬻つて居る。其店は青木の母親さんが一人で切廻して居る。

「さあ、東京へ行つて見た模樣だ。」

斯う答へて、青木は國府津の停車場を指して急いだ。

暫時操は窓に倚凭つて居た。どうも夫の樣子が變だ、と彼女は考へるやうに成つた。何故彼樣好な仕事が出來ないのか、其が操には不思議でならなかつた。疲れた、疲れたと言つて、何事も爲る氣が無いやうであるかと思ふと、友達を相手に談話をするところなぞは、至極元氣で居るやうにも見える。夫の病氣は眼に見えない病氣である。サッパリ樣子が解らん。斯う考へて、嘆息した。

三十分ばかり經つて、上りの汽車が前川村を通り過ぎた。操は夫にかはつて、岸本を慰め

ようとした。彼女は夫の往時を語つた。而して何か思出したやうな眼付をした。
「眞實に、岸本さんは宅に克く似ていらツしやいますよ。」
「左様ですかなあ。青木君にも僕のやうな時代が有りましたかなあ。」
と言つて、岸本は自分で自分を嘲るやうに笑つた。彼は、前途の方針を定めたいと思つて、その思想を纏める爲に、蜜柑畠の方へ行つた。

四十六

枝に生つて居る蜜柑を持つて歸るのはヤカマしいが、畠で喰ふ分には咎めない、といふ事を岸本は青木の細君から聞いて居た。畠には好なのがある。到るところに、甘さうな、熟したやつがある。二つ三つ袂に入れて、其を喰ひながら岸本は谷の間を歩いた。物を考へるに好い場處もあつた。枯れた草の上に寢轉んで、眺めて居ると、生きたいと思ふものは彼ばかりではないやうに見えた。樂しい日の光！　樹の葉といふ樹の葉は皆な爭つて其を享けようとして居る。果實は果實で、その爲に色づいて居る。

『いちこ』といふものに一ぱい蜜柑を入れて、多分市場へ運ぶのであらう、其を擔いだ男が時々岸本の側を通つた。樹蔭には人々の私語く聲もする。土の臭氣もして來る。それを嗅ぐと、彼は親兄弟が戀しく成つて來た。

旅で死なうとまで考へて家出をした彼は、もう一度世の中へ歸らうと思ひ直した。兎に角、大體の決心はそこに在つた。そんなら何處へ歸る、といふことに成ると、道は左様容易く見當らない。恩人の家――順序から言へばそこへ歸るのが至當である。しかし、默つて出たツきり文通もせず、叔母が危篤といふ電報を兄から受取つた時にも返事をせず、しかも其電報が三度もかゝつて來たのに到頭強情を張り通して、今では病人の生死すらも解らずに居るやうなところへ、もう一度歸つて行くといふことは容易でなかつた。

琵琶湖に近い峰子の生家で受けた親切を未だ岸本は忘れずに居る。そこは江州瀬多の町はづれに在る。峰子の弟といふ人が若主人で其家をやつて居る。この人と峰子とは異腹の姉弟であつたが、性質は似通つたところがあつた。丁度峰子が西京から來て居た頃、岸本はこの姉弟に導かれて、亡くなつたとかいふ兄さんの遺した事業、多くの藏書、それから果樹の多い畠、花を植ゑた裏庭なぞを見たことがあつた。家族の人々と一緒に[illegible]して食つたことも忘れ難いことの一つであつた。岸本の心は斯の靜かな田園生活の方へ向いた。彼は瀬多へ使つて行かうかとも考へた。

岸本の前には、今、二つの道がある。兎に角、熟考すべき問題で、オイソレと定めて了ふやうな譯にもいかなかつた。友達が歸つた上、この事を相談して見よう、斯う思ひ迷つて寺の方へ引返した。

夕方に、青木が歸つて來た。彼は酷く激昂して居るといふ風で、其日東京にあつた出來事を岸本や操に話し聞かせた。青木が一面ともいふべき宗教的生涯――從來三年の間執着して來た其生涯を打破する時が來た。理由は簡單である。教會の方には苦情が持上つて、牧師としての林といふ男に對する反動が起つた。隨つて青木も、その方の事業を捨てなければならないやうな破目に立到つた。青木に言はせると、是は好い機會である。これから大に自分の意志を貫くことが出來る、今迄は自分の頑骨を枉げて面白くもない仕事に追ひ使はれて居たのである。早速例の評傳を纏めよう。それを脫稿したら、直に戲曲の方へ取掛らう。面白い。面白い。

一看よ、わが猛志を」

　斯う青木は獨で繰返して、ガッカリしたやうに壁へ倚凭つたが、額のところへは膩のやうな冷い汗が出た。

　其日の教會會議には、青木は議長として、おもしろい滑稽をやつた。斯樣なことを彼は附添して話した。

四十七

『あゝ、今日のやうに多忙しい思をしたことはない。』

　斯う青木は操の方を見て言出した。彼は重荷を卸した爲に反つてすこし茫然したといふ形で、底疲れのしたやうな深い溜息を吐いて居る。

『ふゝ。』と青木は思出したやうに笑つて、『今日は宛然眼が廻るやうだつた。午前に岡山君の社へ寄つて、それから麹町の學校へ行かうとすると、車夫が乘れ〳〵と勸めるぢやないか。俺も直切つて乘つたところに好かつたが、途中でもつて飛んだ失策をやらかしたよ。と言つて頭を撲つて、車の上から毛布を落しちやつた。』

『まあ――知らずにいらしツたんですか。』と操は呆れる。

『後でその車夫が非常な劒突サ。』

『ホヽヽヽ。父さんも餘程どうかしていらッしやる。』

　岸本も笑はずには居られなかつた。

　操は夫の樣子を眺めて何となく氣懸でならないやうな眼付をした。教會の方の仕事を辭めたのは可いとしたところで、筆でその補ひがつくだらうか。彼樣頭腦の工合が惡い〳〵と言つてるやうでは、心細い。斯う操は胸を傷めた。麹町の學校から受取る僅少の報酬より外に最早定つて入るものは無いのであつた。青木の家では今は米櫃に離れた形である。

『さあ、俺も多忙しく成つて來たぞ。』

　斯う青木が言つて、グタリとしながら煙草を燻して居た。岸本は何の問題を持出した。恩人の家へ歸るか、瀨多の方へ使つて行くか、彼の取るべき道はこの二つであると話した。

　青木は岸本から瀨多の說明を聞取つて、

『しかし、君、燒木杭に火といふことも有るからネ。』

と快活らしく笑つた。

　この友達の一言で、いよ〳〵岸本も心を決した。一夜明けると、また〳〵青木は東京へ出掛けるといふので、岸本も一緒に恩人の家を指して前川村の寺を出た。彼は友達夫婦に小遣の心配までもして貰つた。國府津から新橋へ向ふ汽車の中では、二人の友達はあまり言葉を交さなかつた。どうかすると青木は、堅く窓口のところに捉まつて、何處か斯う怖しいところへでも持つて行かれるやうな、不安に堪へないといふ眼付をした。

　斯うして漸く二度目に、岸本はツラい思を我慢しながら、可懷しい東京へ歸ることが出來た。新橋で友達と別れて、日本橋までは馬車に乘つて、それから歩いた。荒布橋を渡らうとする頃、彼は本船町を斜に視て通つた。そこには藥種問屋がある。それが市川の生れた家である。

　恩人の家は大川端にあるが、いきなり行つて叔父の顏を見ることも出來かねたので、岸本は先づ兄の下宿を訪ねることにした。その下宿は明治座の裏手にある。竈河岸のところまで行くと、芝居小屋の前には人々が集つて、繪看板なぞを見て居る。茶屋の格子先には引幕の贈物を出してある。新しい狂言が始まるらしい。

　叔父は、横須賀に店を持つて居たが、座の方へも金を廻して居たので、それ大札だの、茶屋の亭主だのと言つたやうな人達が大川端の家へ出入した。岸本はよく叔父に連れられて、狂言の

替り目ごとに看に來たものである。河岸には馴染の幟屋も見える。彼の胸は躍つた。

四十八

『岸本さんは居りますか。』

『只今お留守で御座いますよ。濱の方へ御出ましに成りまして、夕方でなければ御歸りに成りません。貴方は――』

『私も岸本です。』

明治座の裏手にある下宿の入口の所で、斯ういふ言葉が岸本と下婢の間に交換された。下婢は合點の行かぬ容貌をして、じろ／＼と客の様子を眺めて居る。其時、奥の方から家婦が出て來て、『オヤ。』と言つて眼を光らせた。

『岸本さんの弟さんだよ。』

と家婦は小聲で下婢に言つた。

そこは下宿でもシモタヤのやうな構で、瀟洒とした格子戸の塡つた家である。岸本の兄はもう幾年かそこに下宿生活を送つて居る。家婦に導かれて、岸本は二階の梯子を上つた。而して、桐の長火鉢なぞが置いてあるところで、兎に角兄の歸りを待つことにした。

兄は名を民助と言つた。其頃は横濱居留地のある商館に關係して、器械賣込のやうなことに從事して居た。多分その方の用向で、其日も濱へ出掛けたらしい。日本橋石町にある絲問屋の旦那といふのが、大川端の叔父の金主でもあれば、また兄の金主でもあつた。大將と言へば石町の旦那のことで、叔父がその大將の相談役、兄も叔父に次いでの役者であつた。

岸本が旅に出掛ける頃に比べると、兄の部屋には立派な道具が置いてある。骨董癖のある民助は机の上にまで珍奇な物を置いて樂しむといふ風で、一方には日記帳簿の類が順序よく積重ねてあり、一方には硯から一輪挿の位置までキチンとしなければ氣が濟まぬと言つたやうな風に整理してある。使用つた筆は水洗ひして揃へてあるところを見ても、實に斯う清潔好な、物の秩序を重んずる民助の性質をよく表して居る。部屋の隅には、新しい、厚手に出來た碁盤なぞも置いてあつた。

『どうも御待遠様で御座います。』と家婦が來て言つた。『岸本さんも、貴方、御近いうちに、御家を御持ちなさるさうでして。ネ、斯うしてポツ／＼種々な物を集めていらつしやるんですよ。眞實に、貴方、御大抵ぢや御座いません。いづれ御郷國の方から、皆さんも御出掛に成りますんでせうよ。』

この家婦の言葉で、岸本はいろ／＼知らずに居たことを知つた。部屋に道具の増えた意味も解つた。

夕方になつても民助は歸らなかつた。勇ましい鰯賣の呼聲、豆腐屋の喇叭、それからまだ種々賣りに來る聲が、ガラ／＼引いて通る車の音なぞと一緒に成つて、混雜した記憶を岸本の胸に起させた。漸く左様いふ騒然しい町の響も沈まり、流石町中でも夜は夜らしく成つて、落魄れた婦人が寂しい假白を遣つて來る頃、漸く民助が歸つて來た。

『オヽ捨か。』

と民助は弟を見て言つて、コン／＼續けざまに咳をした。

岸本は名を捨吉と言つた。

四十九

『まあ、其服裝は何だ。』

と兄の民助は前垂掛のまゝ、長火鉢の前に坐つた。

民助は總領、岸本は冷飯の方で、年齢から言ふと十三も違つて居る。容貌の上には似たところが多かつたが、就中鼻は岸本家特有の同じ大きな形で、遠い祖先の矜持と慾望とを見せた。

この二人は三百年以上も續いた舊家に生れた兄弟で、殊に民助は家長らしい威嚴と寛大な風貌とを具へて居る。

　岸本は默つて、首を垂れて、兄を畏れながら坐つて居た。彼の坊主頭と墨染の法衣とは、千百の饒舌や辯解にも勝つて、過ぐる月日の間のことを語るかのやうに見えた。

『實に驚いて了ふ。』と民助はすこし怒氣を含んだ調子で、『彼程電報を打つてやるのに、一度も返事を寄さないなんて。』

　斯う言ひ乍ら熱い茶を入れて、それを弟にも飲ませ、自分でも飲んだ。軈て民助は、岸本が長く居なかつた間に起つた種々の出來事――大川端の叔母の病氣も今では快い方に向いて居ること、石町の大將の娘が亡くなつたこと、それから國許の母親を始め家族のもの一同を遠からず呼び迎へる準備中であることなどを語り聞かせた。

　民助は、圓滑い調子の人として通つて居たが、弟に對しては寧ろ嚴格な方であつた。そのコハい人の前で、岸本は旅に出た理由を説明しなければならないやうなことに立到つた。斯ういふ祕密を兄弟の前に暴露すほど、岸本の身に取つて可羞しいことは無かつた。彼は精神から冷い汗を流したり、顏を紅くしたりして話した。

　兄の意中を憚るかのやうに、岸本は恐る〳〵民助の面を仰いだ。而して、今にも『大馬鹿め』と言つたやうなやつを浴せられることかと思つた。意外にも、正直な告白は兄の心を動かした。民助の憤激は哀憐に變つて來た。『へえ、貴樣のやうなボクネン人にも、其樣な洒落氣が有るのかい』と言つたやうな眼付をした。

『そんなら、そのやうに、初めから俺に相談するが可いぢやないか。』と民助は弟の顏を熟視つた。『何かい。許嫁のある人なのかい。緣の無いものは、こりやあ仕方が無い。』

五十

　其時、長火鉢に翳して居る岸本の手が妙に民助の眼に着いた。不恰好で、指先が短くて、青筋が太く刻んだやうに顯れたところは、どう見ても亡くなつた父の手にソックリであつた。父は足袋も圖無しを穿いた程の骨格であつたから、大きさは比較に成らないが、弟の手は父のを若くしたといふ迄で、形ばかりでなく、蒼白い表情までも實によく似て居た。それを見ると、十七の歳から身代を任されて、親孝行と言はれた丈に苦勞をしつゞけた、その自分の過去が彼の胸に浮んだ。民助の眼で見ると、維新の際には勤王の説を唱へたり、諸國を遍歷するやら、志士に交を結ぶやらして、殆んど家のことなぞを顧みなかつた人の手が其だ。どうかすると默つて家を出て了つて、二月も三月も歸らないから、其度に峠の爺なぞを頼んで、連れて來て貰つた人の手が其だ。平素はまことに好い阿爺で、家の者にも親切、故郷の人々にも親切で、一村の父のやうに慕はれて居たが、すこし癇癪が起つて氣に入らないことが有ると、弓の折で民助を打擲した人の手が其だ。國學や神道に凝り過ぎたともいふが、深い山里に埋れて、一生煩悶して、到頭氣が變に成つた人の手が其だ。『阿爺さん、子が親を縛るといふことは無い筈ですが、御病氣ですから堪忍して下さい。』斯う民助が言つて、御辭儀をして、それから後手に括し上げた人の手が其だ。ありあまる理想の懷を抱き乍ら、是といふ事業も殘さず、終には座敷牢の格子に摑まつて、悲壯な辭世の歌を讀んだ人の手が其だ。

『捨吉も年頃だ。そろ〳〵阿爺が出て來たんぢやないか。』

　斯う民助は心を傷めた。何でも、父が二十の

年齢とともに、彼の病氣が發つて、其時は愈るには愈つたが、それから中年に成つて再發した。この事實を民助は思ひ浮べた。而して、二十の年齢といふから、あるひは弟と同じやうな動機で。斯様な風に想像して見た。

其晩、岸本は久しぶりで兄の下宿に寢た。大川端にある叔父の家へも、いづれ時機を見て兄が一緒に行くとのことであつた。軈て、その恩人の許へ歸る日が來た。

「捨、一緒に來い。俺が大川端へ連れてッて呉れる。」と言つて民助は弟の方を見て、――何だぜ、法衣、法衣だけは廢した方が可からうぜ。」

法衣、法衣と言はれるには、岸本も閉口して居た。

叔父の家は、兩國といふよりも大橋に近い方で、ある華族の邸に付いて、隅田川の岸から一寸入つたやうな位置にあつた。田邊が叔父の家の姓である。一體この叔父といふのは、岸本にとつて本當の叔父では無かつたが、同郷で兄が懇意にするところから、岸本も引取られて、幼少の頃より非常な世話に成つたのである。言はば岸本が第二の親である。で、主人公のことを叔父さん、細君は叔母さんと呼ぶべきだが、大分年齢が違つて居たから姉さんと言つて、まだ弘といふ一人息子の生れない頃から左様呼び慣れて居た。叔父は書生を愛する方で、一頃は四五人も家に置いたことが有る。

岸本は、兄に隨いて行くといふよりも、引摺られて行くといふ形であつた。一歩も躊躇することが出來なかつた。大川端の交番のあるところまで行くと、柳の樹の下に肥滿つた人が蹲踞んで、餘念もなく釣をして居た。その人が叔父だ。

五十一

「釣れますか。」斯う民助は叔父の傍へ行つて聲を掛けた。

「えゝ、今日は沙魚釣と洒落てるところなんです。」

と叔父が答へて、釣竿を持つたまゝ振返つて見た。

「叔父さん、斯ういふものを連れて來ました。」

其時叔父は、身丈の低い、肥滿つた體軀を起しながら、驚いたやうに岸本の顔を見た。岸本はお辭儀一つして、默つて叔父の前に首を垂れた。

「オヽ、よく歸つて來た。」

と武士らしい威嚴を有つた叔父は、しばらく岸本の様子を眺めた後で、言つた。大川端には柳の多く有つた頃のことで、黄ばんだ葉が地に落ちて居た。水の中へも落ちた。叔父と兄とは盛に笑つて、樹の下で商賣上の話に移つた。「大將、大將」といふ言葉が二人の間に繰返された。何時來て見ても同じやうな隅田川の眺めは岸本の眼前に在る。潮は上げて居る。帆をかけた船は順を追つて樹と樹の間を静かに通り過ぎた。一錢蒸汽も往來して居たが、その度に氣紛れな浪がやつて來ては、浮いて居る塵芥を柳の下へ打ちつけた。

『兎に角、家へ入らう。』斯う叔父が言出した。

『捨、其處にある種々な物を纏めて持つて來て呉れ。』

叔父は釣竿だけ持つて、兄と一緒に話し〳〵家の方へ行く。樹の下に散在つて居る道具や、沙蠶を入れたブリキの罐なぞを提けて、岸本も後からノコ〳〵隨いて行つた。

叔父の家は、つい其處だ。例の邸について突當ると、門がある。最早幾年か飼はれて居るマルといふ犬が、黒毛の尻尾を振つて、いきなり岸本へ搔付いた。而して、妙に唸るやうな聲を出したり、身を擦付けるやうな眞似をした。マルは岸本を忘れずに居たと見える。

叔母の臥床は奥の座敷の壁へ寄せて敷いてあつた。病人はそこに起直つて居た。その側には老祖母も居た。頭を坊主にして岸本がやつて來たといふことは、申譯の爲だらうと、先づ家の人々に思はせた。兄は叔父と相對に、庭に向いた方へ座を占めたが、弟よりも自分の方が餘程キマリが惡いといふ風で、コン／＼續けざまに咳いて居る。圓滑な仲裁者として世を渡つて來た叔父は、家の内でも調和を謀る人で、快活に笑つて、主人らしい大量を示すやうに見えた。岸本は以前から、この書生といふよりも、寧ろ家の者同然に思はれて、「兄さん」とか、「捨さん」とか呼ばれて居たのである。

其時叔母は、自分の病氣も久しいものだと言つたやうな眼付をして、岸本の顔を見るにつけても、よく其夏を越すことが出來たと思つて居る。

『民助さんが、妙なものを連れて來ますと仰つたから、私は何かと思つて居た――左樣だ、お前さんのことだつた。』

斯う叔母が言つた。

茶を入れる爲に老祖母は病人の傍を離れた。棚で茶筒を取出して、それを拭き乍ら、北海の方へ行つて居る民助の弟――岸本には二番目の兄に當る男のことを言出した。『支那の兄さんは、流石に眼が高い。お前さんが居なくなつた時、いづれ是は歸つて來るものだ、まあ其迄は放擲つて置け、と仰つたが、果して彼の兄さんの言ふ通りだつたよ。』

五十二

叔父は田邊の家の養子で、なか／＼苦勞人で、十人好のする親切な性であつたが、氣象のしやんとして居ることは反つて女の側にあつた。だから、老祖母なぞから見ると、岸本に對つて言ふべきことも言はずに居るやうな叔父の態度が手温くて成らない。

『お前は左樣甘くするから不可。斯ういふ時に言つて置かないと、當人の爲に成らない。私は言ふよ。』斯う老祖母は腹の中で思つて、先づ一同へ茶を入れて出した。

叔母は女ながらに精悍な眼付をして、臥床の上で、着物の襟を直しながら、

『洋行でもして來れば可いんだ。』

と岸本の方を見て言出した。

『眞實だよ。』と老祖母が引取つて『そんな旅なぞをする手間で、洋行でもして御覽――それこそ、捨さんも見上げたものだけれど。』

岸本は默つて自分の手を眺めて居る。

老祖母は長煙管で一服やつて、『もうすこしお前さんもエラい人に成るのかと思つたよ。』と言つて、嘲るやうに笑つて、態と旅の間の事を思出したやうに、『傳馬町の岡見さんが、お前さんの手紙を持つて、本箱を取りにいらしツたから、彼時、私が挨拶に出て、左樣言つたサ――貴方と捨吉とは奈何いふ御關係か存じませんが、斯の手紙を拜見しましたところでは、日附が御座いません。成程、手は捨吉で御座いますし、しかし日附も無いやうな不確實な手紙では御受が出來ません。是は御斷り申します。――斯う私がキッパリ斷つた。』

まだ老祖母は何か言はうとしたが、其時勝手口の方に芝居茶屋の若い者の聲がして、番附を持つて來たので、一時この話は途切れた。叔父や民助は新狂言の噂に移つた。叔父の胸の中では、女輩の言ふことは岸本を窘まさうと思ふのであるから、自分も無論賛成だ、しかし坊主頭に成つて詫を入れて來たものを左樣追究めるでもあるまい。斯う思つて居る。

『一體、奈何いふ量見で其樣に長く遠方へ行つて居たんだね。』

この老祖母の問は、誰も聞いて見たいと思ふ

ことであつた。

「浮世を捨てたんでせうサ。」

斯う叔父は叔父らしい解釋を下した。

岸本は無言である。彼が無言なのは、言へて言はないのではない、言へなくて言はないのである。漂泊のそも〳〵は民助に告げた通り、彼が勝子に逢つてから、激しい精神の動搖を感じて來たのは事實だ。自分の家が自分の家でなくなつて來たのも事實だ。物の奥底に隱れた意味を考へるやうに成つたのも事實だ。洪水が溢れて來たやうに押出されて行つたのも事實だ。彼が其日まで經て來たことは、すべて、遽に起つた「新生」の光景である。何の目的があつて、其樣な長旅をしたかと問ひ詰められても、それは口にも言へず、目にも見えない。

五十三

『只今。』

と言つて、學校から歸つて來たのは息子の弘である。

『弘、兄さんが歸つていらしツたよ。』

斯う言ひ乍ら、老祖母は孫の鞄や辨當箱を受取つた。

弘は十歳にしかならないが、怜悧な、愛らしい兒で、それに下町風に育てられて、お辭儀の仕方なぞはウマいものである。子供心にも、弘は部屋の光景を看て取つた。何となく人々の思惑を憚るといふ風で、岸本の傍へも行かずに居る。其時老祖母は茶箪笥から弘の好なものを取出して、それを岸本に侑めたり、孫に食はせたりした。

この老婦の眼には、何時までも岸本が子供に見える。『老祖母さん、霜燒が痛い。』と言つて泣いた頃の岸本と、今と、左樣大した相違が無いやうに思はれて居る。

『何が不足で吾家を飛出したんだらう。』斯う老祖母は思ひ乍ら、岸本と弘とを見比べて、二人とも成人したものだ、と言つた樣な眼付をした。

叔母は臥床の上に坐つて、それとなく岸本の樣子に注意して居た。この病人の鋭い神經は、老祖母や叔父の感じないものを感じた。從來多勢書生を置いた叔母の經驗から言つて見ると、やれ放蕩したとか、料簡違をしたとか言つて、隨分心配をさせられたものだ。若い者が奈何いふ心地で詫に來たか位は直に讀めた。それは十年も前のことだ。一向岸本には「惡い事をしました。」といふ狀が見えない。キマリの惡い故でもあらうが、妙に斯うシラばくれて居るやうにも見える。而して、「姉さんに話したツて、解らない。」と言つたやうな、十年前の書生とは違つたところが有るやうに思はれた。

『餘程お前さんも變人だよ。』

他に言ひ樣が無かつたから、叔母は斯樣な風に言つて見た。

軈て叔母が病氣の話も出た。岸本が留守の間に、幾度か危篤に迫つたといふ話も出た。其年の夏は、岸本が植ゑて置いた裏庭の苺も大分花をもつて、實になる頃には毎朝弘が取つて來る、皿に盛る、白い砂糖をかけては病人が樂んだ。其度に岸本の噂をした。斯樣な話も出た。叔母は又、ある博士の勸めで、脊髓の爲に斯ういふ物を當てると言つて、女らしい懷を擴げて見せた。それは撃劍の道具にでも有りさうな皮製の胸當であつた。

漸く弟の詫も叶つたといふ風で、民助が歸つて行く頃、弘は最早岸本の傍へ來て戯れた。叔母は下女を呼んで胸當の紐を解かせた。それから、臥床の上に横に成つて、疲勞したやうな深い溜息を吐いた。

『捨さん、シャツの紐釦だけは掛けておいでなさいよ。左樣してると、何だか餘計馬鹿に見え

る。』

　寢て居ても氣は休まらないといふ風で、叔母は岸本の急所を突くやうに言つた。岸本は胸の紐釦を掛けて、苦笑した。

　間もなく弘は岸本の手を引いて行つて、「兄さん、兄さん。」と言つて遊んで居たが、緣側から四疊半、四疊半から玄關、勝手元までも追廻して戲れるうちに、どういふ機か岸本を臺所の柱に縛りつけて笑つた。下女も見て笑つた。

「弘、兄さんを叩いてお遣り――尻尾が出るかも知れないよ。」

　斯ういふ叔母の謔語が障子を隔てゝ聞える。無邪氣な弘は物差を探して來て、面白半分に岸本を打つ眞似をした。縛られた岸本の方も、弘や下女と一緒に成つて笑つた。復た弘が笑ひ乍ら打つた。無言の涙は岸本の笑顏を傳つてポロポロと流れ落ちた。

『弘、弘。』と笑ひ乍ら呼ぶ叔母の聲が聞えた。『左樣お前の樣にシツコくするもんぢやないよ。もうお止し。兄さんを許してお遣り。』

五十四

　二階は、特別の客でも有る時に通すだけで、平素はあまり使用はないことにしてあつたが、その片隅には叔父の前半生を語るやうな、法律に關する書籍が置いてあつた。それはまだ斯の日本橋へ引移らないで、叔父が美しい髯を生して居た頃、朝晩に手にしたものである。叔父の藏書の中には、田邊の家に傳はつた經書、子類、それから叔母の兄にあたる人が遺して置いたといふ寫本の歌書なぞもあつた。二階には又、岸本の本箱も置いてあつた。その中には、彼が學校生活の時代に、寄宿舍の窓のところで讀み耽つて、今はそれほど興味を持たなくなつたものや、卒業後しばらく横須賀の店を手傳つて居た頃、帳場の机の下に隱して置いて讀んだものや、それから叔父や兄には寢言のやうに思はれさうな、新しい思想を書いた種々の書籍が一緒に藏つてあつた。

　久しぶりで愛讀書の顏を見る爲に、鳥渡岸本はこの二階へ上つた。本箱の蓋を取つて、塵埃にまみれた藏書を眺めて、それからまた直に蓋をして了つた。彼は當分斯ういふものを手にすまいと考へた。二度と同じ道を通るまいと考へた。もう一度世の中を見直さうと考へた。斯の思想を自分で自分に押付けるやうにして、軈て、書生としての勤めをする爲に、樓梯を下りた。

　庭は可成廣かつた。往時からの習慣で、跣足に尻端折で、よく岸本は斯の庭を掃いたものである。其日も、物置の方から箒と塵箕とを持つて來て、先づ茶の間の前にある楓の下から始めた。庭の隅には古い楠もあつて、濕つた土の上へ實がこぼれて居た。梧桐は始末に畢へない奴だ。綺麗に根のところを掃いた時分に、大きなやつをガサリと落してよこす。仰いで見ると、下枝の葉は最早大抵落盡したが、梢の方には未だ澤山枯々になつて殘つて居た。水の無い池に添いて、椎の樹のあるところへ出ると、そこから奧の部屋が見える。唐紙の開いたところから暗い土藏の入口までも見える。

　丁度樽屋のをばさんが下町風の娘を連れて芝居の方の相談にやつて來て居る。叔父はつい科白が出るといふ風で、無邪氣な弘を對手に何か讀上げるやうな手眞似をした。弘は男の兒らしい眉を揚げた。而して、刀の柄へ手を掛けるやうにして、父を詰問するやうな態度を見せた。樂しい笑聲が溢れるやうに起つた。

『眞實に、弘さんはウマいことねえ。』と樽屋のをばさんが言つた。

『はゝゝゝ。』と叔父は快活に笑つて、『弘の十八番は勸進帳サ。』

老祖母も笑の涙を拭はずには居られなかつた。『ねえ、をばさん、斯うお芝居の眞似が上手に成つても困りますよ。此節は茶屋の若い者が貸して呉れ〳〵と言つて、連れて行つて、坊ちゃん、そこは左様するんぢゃ有りません、斯うするんですよッて教へるもんですから、弘が直に其を覺えるんです。まさか彼樣して可愛がつて呉れるものを、斷る譯にもいかず。お芝居の方の人にでも成つて了はなければ可いが、と思つて私は心配して居ますよ。』

『ホヽヽ。老祖母さんのやうに心配したら際限が無い。』と叔母は臥床の上で笑つた。

『左様ですともサ。』と樽屋のをばさんが引取つて、『子供がやるのは可愛らしいぢゃ有りませんか。弘さん、澤山おやんなさいよ――それに弘さんは、學校の方も好く御出來なさるんですもの。』

『弘、兄さんも歸つていらしつたから、是から英語を教へて頂くんだよ。』

と叔父が言出した。無邪氣な芝居の眞似はそこに途切れた。

斯ういふ樂しい笑聲を聞きながら、岸本は奥の部屋の前を悉皆掃いて了つた。それから、茶の間の窓に近い乙女椿の下から、玄關前の土を掃いて、掃溜めた塵芥は裏庭の方へ運んだ。

五十五

其日から岸本は田邊の家の書生に返つた。叔父の積りでは、岸本に商業を見習はせ、石町の旦那にも引立てゝ貰ひ、行く〳〵は自分の片腕にも、と斯う將來を樂んで居たのである。是といふのも岸本を子のやうに思ふからで。ところが彼は地に生える草のやうに、ずん〳〵勝手な方へ延びて行くので、叔父は酷く失望して了つた。もと〳〵叔父は士族の出であつて、昔風の學問をした人は親戚の間にも澤山ある。漢學の出來る人もある。歌の詠める人もある。左樣いふ人々は多く凋落した。叔父はそれを眼前に見て居るから、何卒して弘や岸本には自分と同じ道路を歩ませたいと思ふのである。今に彼奴も眼が覺めるだらう。』斯う叔父は考へて居た。叔父の心は岸本に解らず、岸本の心は叔父に解らなかつた。

十一ケ月ばかり居なかつた間に、岸本が身の周圍の光景も動き變つて來た。兄の民助は大將の持家を借受けて、いよ〳〵三輪の方へ引移ることに成つた。母は姉や孫娘を連れて、遠からず上京するといふ運びにまで成つて居る。

世の變遷は、岸本が國の方から他郷へ向けて移住する多くの人々を出した。彼の鄕里は檜、欅などを産する深い谿谷の間で、耕作に適した土地も少いやうな地勢にある。街道が廢れるにつれて、多くの家族は鬱蒼な森林を出た。斯ういふ人々の中には、舊士族、驛路を支配した家々、旅客を相手に生計を營んだ部落々々の商人、または勞働者なぞを數へることが出來る。彼等は住慣れた舊家を離れ、靜かな爐邊を捨て、機や養蠶の道具などを置いて、可懷しい故鄕に別離を告げて行く移住民の趣がある。殊に岸本の家は、最も古くから住んだものの一つで、土地の馴染も格別深いのであつた。母は子に、姉や夫や弟に逢ふといふ希望を唯一の生命にして、そこを離れて來ようとする女連の心情は、岸本が都會に居て想像するやうなものではなかつた。いよ〳〵國に居る人達も出て來るとすれば、岸本は十三年目で母と一緒に住まはれることに成る。彼が亡父の嚴命を受けて、初めて東京へ遊學したのは、まだ髪を河童のやうに冠つて居た頃、金平糖を旅の鞄に入れて貰つて、勇んで國を出た程の少年の時であつた。

兎に角、異樣な坊主頭で、母や姉を新橋に迎へるといふことは、ツラかつた。早く、髪の毛が

延びて呉れゝばいゝ、斯う岸本は可恥しく思つて居る。意地の惡いもので、延びなくても可いやうな時にはずん／＼長くなるが、さて延びて欲しいとなると、餘計に遲く思はれる。以前から見ると一層醜いやうなやつが、そろ／＼生えて來た。

しばらく岸本は友達にも逢はなかつた。十一月の末、丁度叔父の家では病人の爲に藥湯を立てるといふので、岸本も井戸端のところへ出て、水汲の手傳ひをして居ると、そこへ青木が訪ねて來た。

青木は最早世の戰ひに疲れて、力屈したといふ人のやうであつた。

五十六

青木は元數寄屋町にある自分の家の方からやつて來た。もし岸本が行くなら、一緒に誘つて、菅の下宿へ出掛けて見る積りであつた。彼は最早幾晩か不眠の狀態に在る。麴町の學校へも病氣屆を出して休んで居る位である。

生憎その日は差支があつて、岸本は他の友達と一緒に集ることが出來なかつた。そこで青木は獨りで出掛けた。

池の端にある菅の下宿へはよく連中が押掛けて行つた。是は菅の慇懃なのと、宿の氣樂なのと、丁度集るに工合の好い位置にあつたからで。そこへ行くと誰かしら來て居る、又やつて來る、といふ風であつたから、自然と會合の場所のやうに成つた。「不穩健は錢が要る、」などと言つて、互に笑つたものであつたが、それも蕎麥か牛肉位で事は足りたのである。

其日も青木が訪ねて行つて、しばらく話して居ると、そこへ市川が來た。軈て市川の發議で、彼が泊つて居る寺の方へ三人共に出掛けることに成つた。連中は相携へて谷中へ向つた。天王寺の塔が夕日に映るところを眺め、愛護精舍の前を通り過ぎて、出て飲食する場處を探した。斯うして三人して、繩の暖簾を潛つて入つた時なぞは、富士山麓に添うて歩いた當時の遊興を想ひ起させたのである。

そこは僅少の客を容れることしか出來ないやうな、狹い、小さな飲食店で、學校の食堂にでも有りさうな細長い食卓を二列に並べて、醤油樽のかはりに粗末な腰掛が置いてあつた。三人は下駄穿のまゝ差向ひに腰を掛けて、有合の肴で盃の遣取をした。刺身のヌタ位がそこでは甘い物の部である。斯ういふ場處でも、友達同志で集つて見れば樂しかつたので、放肆に談したり笑つたりした。「今日は、君等の顏が見たくて來たが、御蔭で近頃にない清遊をした。」と青木は二人の若い友達の顏を見比べながら言つた。「人間の力には限りが有るネ――僕は世を破る積りで居て、反つて自分の心を破つて了つた。非常にそれが殘念だ。」斯う彼は何氣なく言つて、感慨に堪へないといふ眼付をした。

軈て又、しばらく沈吟した後で、「一體、悟るといふことが氣にくはん。迷ふなら飽くまで迷ふが可いぢやないか。尊氏にしろ、光秀にしろ、何故彼樣一生の終になつて、悟りといふ奴に欺されたんだらう。何故清盛や將門のやうに迷ひ盡さなかつたらう。」

其時、意味の無いやうな笑聲が、隅の方で飲食して居る人々の間に起つた。

市川や菅は、初めて繩暖簾といふものを潛つて見たといふ風で、そこを出てから、青木と顏を見合せて笑つた。間もなく菅は別れて行つた。殘る二人は上野の公園をさして話し／＼歩いた。

動物園前のところで、若い紳士を乘せた一臺の車が青木の側を通り過ぎた。車の上の人は、曾て青木がある私立學校の政治科に居た頃、しばらく一緒に成つた學友である。所謂成功した

青年の一人である。若い紳士は車の上から一寸青木に挨拶して、さも／＼得意氣に通り過ぎた。青木は無言の侮辱を感じた。彼は、斯の成功者に比べて見て、自分の方が劣つた人間であるとは思はなかつた。

五十七

公園の木の葉は多く枯れ落ちて居た。市川と青木の二人は、東照宮の杜について暗い木立の間を通り拔けた。やがて廣い道路へ出た。

二人は並んで歩いた。話は他の友達の噂で持切つた。岸本は彼の通り手傷を負つて歸つて來る。菅は菅で、他の友達までも靜かにさしては置かないやうな狀態に在る。

青木は菅のことが氣懸りでならなかつた。彼は市川から、菅のやるせない思を聞取つた。市川に言はせると、彼の友達の怪しい病はますます激しく成つて居る。足立もまた、山の方に心を引かされることが有つて、まあ相憐むと言つたやうなところから、一方では友達を慰める、一方では身元調に山までも出張する、其樣な風にして盡力した結果、今では親の方でもさしたる故障が無いといふことまで突留めた。こゝに一つの難關といふは、麹町の叔母が不同意である。純潔無垢な菅の眞情と、友達思ひの足立が熱心とですら、この人の心を動かすことが出來ない。斯う市川は話し／＼歩いた。

『なにしろ、斯の叔母さんといふ人がなか／＼の難物なんです。尤も、叔母さんも――時三郎のは、普通の浮いた心でするのとは違ふやうだ、と左樣言つては居るさうですがね。』

と市川が附添して言つた。

斯樣な話をして行くうちに、二人は雜然並んで生えて居る古い常磐木の下に立つた。高いところからは暗い葉が垂下つて居る。その木と木の間を通して、不忍の池が見える。枯々とした蓮の葉の殘つた光景も見える。下谷から本鄕臺へかけて、對岸の町々は夕方の明い色の中にあつた。

青木は眺め入り乍ら、

『どうせ左樣長く美しい夢が續くもんぢやないよ。いつまで君、戀の影なぞに欺されて居られるものか。唯、誠が殘れば可い――僕は左樣思ふね。』

斯う市川に言つて、深く／＼思ひ沈んだ。

相乘の人力車を呼んで市川の家の方へ向つたのは、間もなくであつた。二人は江戸橋まで一緖に乘つて、そこで袂を分たうとした。橋の下を流れる濁つた水、低く舞ふ鷗、繫つてある船、それから腰を曲めて櫓を洗つて居る男――なにもかも黃昏時の空氣と煙とに包まれて見えた。河岸に添うて並ぶ藏の白壁も青白く沈んだ。なまぐさい魚類の臭氣は何處からともなく匂つて來る。最早ちら／＼燈火がつく。橋の上には鞄を擁へたり荷物を負つたりした人々が、がら／＼曳いて通る車の間を避けて、いそがしさうに往つたり來たりした。青木は市川の後姿が荷車の影にかくれて、終に見えなくなつて了ふ迄も見送つた。長いこと、彼は橋の畔に立つて居た。

五十八

寒い風に吹かれ乍ら、青木は元數寄屋町の方へ歸つて行つた。郵船會社の倉庫のあるところから日本橋の方へとつて、それから大通を眞直に辿つて行つた。彼は、すこし前曲みに、高慢な頭を打ち下げられたやうにして歩いた。これは頭窩のところに一種の痙攣が起つて、頭を高く擧げることが出來ないからで。

彼は最早何事も爲る氣が無くて居る。割合に骨の折れない麹町の學校へも行かず、物を書く氣もない。何か雜誌の方へ載せるものはない

か、と市川が尋ねた時に、「書けといふなら、何程でも書くサ――何程書いたつて同じことぢやないか。」斯う答へるやうな調子で居る。「どうも世間の奴等は不健全で不可い。」と言つて、彼が憤慨して居るので、青木君は、自分の方が健全だと思つてるから面白い。」と斯う市川なぞは心に驚いて居る位である。

「わが物に感ずるは世間の衆生が感ずる如きにあらず。物を通じて心に徹せざれば自ら休むことを知らず。形を穿ちて精に入らざれば自ら甘んずること難し。」是は青木が自分を自狀した言葉であるが、あまりに彼は物の奥を見ようとして、今では反つて苦み煩はされて居る形である。それが習慣と成つて、用の無い時でも考へる。考へて、考へて、疲れて了つても未だ考へる。すこしも頭腦の休まる時が無い。斯ういふ狀態で、考へるといふことが自分を苦めるとは知り乍ら、つい歩き乍らも考へて、ボンヤリと自分の家の方へ近づいた。

銀座の市街を中心にして、その周圍には、灰色がかつた二階建の家屋が澤山あつた。入口の丸柱、十字形の穴、古風な玻璃窓――いづれも同じ型に建てられた初期の煉瓦造である。青木の家も矢張その一つであつた。ぶらりと歸つて見ると、其日は青木の留守に種々な人が訪ねて來たとのこと。一體彼は客を喜ぶ方であつたが、次第にそれを厭ふやうな傾向に成つて、どうかすると此の頃では甚しく忌み嫌ふこともある。居なくて、反つて好かつた、と思ひ乍ら、筆墨なぞの品並べてある店頭を通つて、暗い壁に添うて樓梯を上つて行つた。

操は夫のことを心配して、國府津の方から出て來て居たが、なにしろ稼人が斯樣な風では奈何することも出來ないので、元數寄屋町へ一緒に成ることにして、一先づ世帶を畳む爲に國府津へ歸つた。丁度その留守で、二階は寂しい。二間あつて、往來へ向いた方が青木の臥たり起きたりして居る部屋である。壁によせて大きな書棚がある。玻璃窓の外は暗かつた。青木は煙草に餓ゑたといふ風で、のべつに燻して居るうちに、終には部屋の内が朦朧として見えるやうに成つた。

「まあ、大變な煙だね。」

斯う言ひながら、そこへ入つて來たのは青木の母親であつた。

五十九

青木の母親は一人で店を切廻して居る程の男勝りだから、二階へ上る前にも家のことに氣を配つて、親類の娘や下女は湯に遣る、店の番は次男に賴む、長火鉢の火迄いけて置いて、夫から炭取を持つて上つて來た。

「私の言ふことを聞きさへすれば、斯樣なことには成らないんだけれど――。」

斯う嘆息するやうに言ひ乍ら、母親は窓の方へ行つて、玻璃の妻戸を細目に開けた。冷々とした夜の空氣は部屋の内へ流れ込んで來た。

「駿ちやん。」と母親は青木の名を言つて、火鉢の側に坐つた。「此頃から私はお前に言ひたい〳〵と思つて居た。まあ今夜は、私の言ふことをよく聞いておくれよ。」

子を思ふ情から、先づ母親は炭取の炭を火鉢へ移して、冷さうな青木の手を温めさせたいと思つた。この母親の潔癖は青木の神經質に克く似て居て、何事も自分の思ふ通りにしなければ氣が濟まないのであつた。寄る年波と共に、その潔癖は忍耐力の少いものに成つて居る。

青木は思ひ屈したやうな眼付をして、暫く頭窩の處を氣にして居た。其樣子が母親の眼には可傷しく映つた。

「だから、私が言はないこつちやないよ。」と母親は深い溜息を吐き乍ら、「家を持つのは未だ

早い。持つて可い時期が來れば、お前が默つて居たつて、親の方で持たせる。そんなに早く家を持つて御覽、きつと困る時が來るよ――そりやあ、もう、眼に見えてるツて、彼程私が言つて聞かせたぢやないか。あの時に私の言ふことを聞いて、辛抱しさへすれば、斯様なに夫婦で困つて來るやうなことは無いんだ。それをお前が用ひないで、なんでも操さんにお嫁に貰ひたいと言つて、先方様の御承諾が出來やうが出來まいが、そんなことにはもう一向頓着しないんだもの。彼の時、親類も種々なことを言つた。眞さんは奈何する積りだ、定つて入るべきものも入らないぢやないか、みすみす困るのは知れきツてる。母親さんが側に付いて居ながら、默つて見てる法がないなんて。無論、私も不服だつたさ。何を言つてもお前は聞き入れないし、操も可哀想だし、と思ふから、私が斯の二階で假りに世帶を持たせて見て、――まあ無論にも及ぶまい、若いもののお二人きりなら[illegible]で間に合ふ、學問が出來たつて御飯の世話をするのはまた別だから、斯様おしよ、彼様おしよッて、私が操に教へて、それからお前達夫婦を世間へ出してやつた。まア、今となつて見ると、私の言つた通りぢやないか。」

六十

「まあ、お聞き。」と青木の母親は言葉を續けた。「此節親類の方で何を言ふかと思つたら、彼様して打捨つて置いた日には今に眞さんも身體を壞しちまふ、もうすこし母親も氣を付けて呉れさうなもんだなんて、――斯様なことを聞いた時は私もすまないと思つたよ。何とか、お前、遣方を變へて、成立つて行かれるやうな工風はないものかねえ。」

「頭腦の工合さへ好くなれば――」斯う青木は答へて、[illegible]不思議さうに母親の顔を仰いた。「それを私が思つてるのさ。」と母親は心配して言つた。「お前のやうに身體が弱くて、無に若い時から世帶を持たうなんて――それが一體無理なんだよ。」

「左様母親さんのやうに言つたツても困りますよ。今更奈何することも出來ないぢや有りませんか。」

「斯うして見たら奈何だね。操は當分實家の方に居て貰つてさ、お前は私の方で預かつても可いから。お前はお前で一つやつて御覽な。一緒に成つて居るに越したことは無いが、家があれは其費用も從ふし、餘計な心配もするし――」

「一緒に居ないたつて、心配はしなけりや成りません。」

「左様言つて見れば、まあ、其様なものだけれど。」

暫時母子は無言であつた。種々な感慨は進退の情に交つて、錯亂した青木の頭腦の中を通り過ぎた。

「畢竟、別れろと言ふんですか。」斯う青木が言出した。

「馬鹿なことをお言ひでない。」と母親は眼を[illegible]かして、「左様お前は取るから困る。誰が別れろなんて言ふものかね。當分操は實家の方に居るやうにツて、今私が言つたぢやないか。ここで暫時別々に成つてさ、お前も身が立ち、立派に妻子を養つていけるやうに成つたら、そこで一緒に成るが可いやね。私はお前達夫婦の一生の爲を思つて言つてるんだよ。」

「母親さん、病氣して居るものに其様なことを言つたツても――」

「いいえ、お前の病氣は左様しなけりや愈らない。」

急に青木は眼を瞑つて、すこし仰き氣味に頭を搖つた。顔色も蒼ざめて來た。

「濟みませんが、モルヒネを取つて下さい。」と

青木は母の方へ手を出して言つた。

『母親さん、私は今何事も考へられません。』

睡眠薬として醫者の呉れたものは、書棚にある。母親は立つて行つて、その袋を取出した。やがて階下から湯呑に水を入れて持つて來た。吾子の爲に白い散薬を開けた時は、思はず母親の手が顫へた。

六十一

暗い、重苦しい、酣酔したやうな心地の日がそれから續いた。今こゝで、やりきれなくて倒れるといふは、青木の身に取つて實に堪へ難いことである。何とかして彼は生きる力を回復したいと思つた。ある時は、宗教へ行つた。種々な宗教家にも逢つて見た。ある時は強い酒の香なぞを嗅いで、僅かに生命の火をかき立てようとした。どうかすると彼は自分の部屋から逃出して行つて、年若で節操の無いやうな白い腕の中に、戰き震へて居る自分を見出すこともあつた。餘計に疲れるばかりであつた。

操は鶴子を連れて來て居て、夫の爲に看護を怠らなかつたし、女中は女中で、姉なども訪ねて來た。丁度、近町の學校から生徒の總代として、啄子が女友達と一緒に見舞に來た日のことであつた。青木は、自分の書いたものは如何な反古でも捨てずに保存して置くといふ流儀だから、散亂つた草稿を操に纏めさせるうちに、其中から雑誌へ出した論文の下書が出て來た。それは陶山の社中を相手に自分の意見を發表したもので、「仙人呼ばはりは止して貰はう。」など、と高く激した時の文章である。

最早十二月らしい日の光が窓のところへ射して居た。草稿の下書を讀む爲に、青木は其の側へ行つた。而して獨りで展げて見た。生き残つた冬の蠅は窓の玻璃をめがけて寂しさうに飛んで居た。

「大丈夫の一世に立つや、必ずや一の抱く所なくんばあらず。然れども抱く所のもの必ずしも見るべきの功績を建てさするにはあらず。建築家の役々として其業に從ふや、幾多の歳月を費して後、確かに雄偉たる樓閣を起すの算あり。然れども人間の靈魂を建築せんとするの技師に至りては、其費すところの努力は直に有形の樓閣となりて、ニュフィの高塔の如く衆目を引くべきにあらず。衆目衆耳を聳動することなき事業にして、或は大に世界を震ふことあるなり。

「天下に極めて無言なるものあり。山嶽これなり。然れども彼は絶大の雄辯家たり。もし言の有無を以て、辯の有無を爭はゞ、すべての自然は極めて憐むべき啞児なるべし。然れども常に無言にして、常に雄辯なるは、自然に加ふるもののなきなり。人間にもし自然の如く無言なるものあらば、陶山君一派の論士は其傍に來りて、汝何ぞ能く言はざると嘲らんか。

「人間の爲すところも亦た斯くの如し。極めて拙劣なる生涯の中に、尤も高大なる事業を含むことあり。極めて高大なる事業の中に、尤も拙劣なる生涯を抱くことあり。見ることを得る外部は見ることを得ざる内部を語り難し。盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて、眞摯なる靈劍を實際に揮ふ雄士は、人間が感謝を拂はずして恩澤を蒙る神の如し。天下斯くの如き英雄あり、爲す所なくして終り、事業らしき事業を遺すことなくして去り、而して自ら能く甘んじ自ら能く信じて、他界に遷るもの、吾人が尤も能く同情を表せざるを得ざる所なり。

「吾人は記憶す、人間は戰ふ爲に生れたるを。戰ふは戰ふ爲に戰ふにあらずして、戰ふべきもののあるが故に戰ふものなるを。戰ふに劍を以てするあり、筆を以てするあり。戰ふ時は必ず敵を認めて戰ふなり。筆を以てすると、劍を以て

すると、戰ふに於ては相異なるところなし。然れども、敵とする者の種類によつて、戰ふものの戰ひを異にするは其當なり。戰士陣に臨みて敵に勝ち凱歌を唱へて家に歸る時、朋友は祝して勝利と言ひ、批評家は評して事業といふ。事業は尊ぶべし、勝利は尊ぶべし、然れども高大なる戰士は斯くの如く勝利を携へ歸らざることあり。彼の一生は勝利を目的として戰はず、別に大に企圖するところあり。空を撃ち、虛を狙ひ、空の空なる事業を成して、戰爭の中途に何れへか去ることを常とするものなり。「斯くの如き戰ひは文士の好んで戰ふところのものなり。斯くの如き文士は斯くの如き戰ひに運命を委ねてあるなり。文士の前にある戰場は、一局部の原野にあらず。廣大なる原野なり。彼は事業を齎し歸らんとして戰場に赴かず。必死を期し、原頭の露となるを覺悟して家を出づるなり――」

こゝまで讀んで、青木は草稿を閉ぢて了つた。

彼はその下書の上へ這倒めるやうな風をして、額を拳に押宛てゝ、慟哭した。

六十二

「青木君、何故君は此樣なところへ來て居るんだい。」と言ふ人があつた。

「何故ツて、こゝは僕の家ぢやないか。」斯う青木は答へた。

不思議にも、部屋の窓には鐵の格子が塡めてある。書棚のあるべきところには書棚がなくて、そのかはりに天然の巖石がある。その巖の鼻には今にも倒れて來さうな石が危く懸つて居る。部屋の入口の開いたところから、虎の檻が見えて、しかもその檻は是方へ向けて戸を開けてある。横の方の窓から何か覗いて居るものがあつたが、よく見ると可怖しい毒蟲であつた。

『こゝは何處だね。』と青木は知らない人に聞いて見た。

「解りさうなものだなあ――牢獄サ。」とその知らない人が言つた。

左樣言はれて見ると、部屋は堅固な鐵の塀で圍んである。青木自身は鋼鐵の鎖で繋がれて居る。鎖の長さだけより外に歩くことも奈何することも出來ない。

「だから僕が君に聞いてるぢやないか。」と知らない人が言つた。「何故君は斯樣な處へ來て居るんだツて。』

――別に僕は法に觸れるやうなことを爲た覺えが無いよ。見給へ、僕は臆病者だ。强盜をしたり殺人をしたりするやうな、其樣な勇氣のある男ぢやない。僕は其蟲を殺しても氣が咎める――それほど意氣地の無い人間なんだからネ。」

斯う青木は言つたものの、現在牢獄の中に居るといふことは事實だ。何の理があつてこゝへ來て居るのか、誰に縛られて斯樣な處へ押込められて居るのか、それは青木にも答へられない。自分の家だ、家だ、と思つて居るうちに、何時の間にか斯樣な牢獄の中に入つて居たのである。

部屋の隅には、種々な人が集つて居た。中には氣樂な酒宴の眞似なぞをして樂んで居るものもあつた。左樣いふ手合は、牢獄の番人が通る度に掌を合せて拜んだり、難有さうに御辭儀をしたり、どうかすると番人の足を頂くやうな、可笑しな眞似をしたりした。

氣まぐれものの蝙蝠が窓から入つて來た。「オイ、誰か娑婆に居る人ぢや、斯の蝙蝠の顏に肖たものはないか。」と一人か言へば、「どれ、面を見せろ。」とまた一人が言出して、各自に蝙蝠を捕へようとして、部屋中追ひ廻した。

何がなしに斯の騷ぎが可怖しく思はれて、青木は窓の方へ逃げた。彼は自分の書いた草稿を讀む積りであつた。鐵の格子に捉りながら窓の

外を眺めると、悄然としてそこに立つて居る人の姿がある。胸の上に手を組合せて、眼を瞑つて、女らしい口唇をすこし突出したところは、何か斯う言ひたいことが有つて、しかも其を言はずに居ると言つたやうな風である。蒼ざめた顔には最早昔の色香が無い。『オヤ』と青木は思はず知らず手を出して、其人を牢獄の中へ引入れようとして、眼が覺めた。

六十三

亡くなつた女が青木の夢に入つたといふは、めづらしいことであつた。節子とは一度師弟の縁もあり、親しく交際し始めてから二三年に成る。女達もすくなく、また強ひて女達を作らうともしない青木の寂しい生涯も、この人があつて、はじめて一枝の花を添へた趣があつた。疾風の爲に奪ひ去られたやうな節子の死は、實際青木の身に取つて可畏しい打撃であつた。多くの生の興味を打消されたのも、斯の稀な知己を失つた憶ひからである。

『父さん、假寐して風邪をひくといけませんよ。』

斯う言ひ乍ら、操が入つて來た。

青木はまだ半ば夢の心地で居る。日の光の射す窓のところには、何となく鐵の格子でも塡めてあるやうな氣がして居る。膝を折つて、壁に凭れて、歯を咬んで、それから斯う重い頭を垂れ下げて居る彼は、何となく鋼鐵の鎖にでも縛られて居るやうな氣がして居る。

樂しい笑聲が階下の方で聞えた。暫時操は耳を澄ました。斯うして親子連で來て居るといふことすら、操に取つて一通りの心づかひではなかつた。加に、親類は親類で、口煩く種々なことを言ひたがる、『彼樣どうも駿さんのやうに馴る譯が無い。』などと飛んだところで疑はれて、言ふに言はれぬツラい思をすることが多かつた。操はすこし痩せた。

『貴方、此頃母親さんが何か仰りやしませんでしたか。』

と操が言出した。

深い、可傷しい、瞑想的な眼付をして、青木はつく〴〵妻の顔を眺めた。

『あゝ。』と操は歎息して、『折角これまで苦勞して來て、今こゝで離れ〳〵に成つたんぢやツマりませんわ。何時復一緒に成れることだか――』

『へえ、お前にも其樣な話があつたかね。』と青木が言つた。

『すこしは私の身に成つて考へて下さりさうなものだ。』と操は悄れて、『斯うして貴方も病氣していらツしやるもんですから、少しは家の財産を分けて下すつたツて――』

『いや。』と青木は首を振つた。『それは母親さんを能く知らないと言ふものだ。決して母親さんは其樣な人ぢやない。末の見込がついて、是ならば大丈夫、といふ時でなければ財産を手離す人ぢやない。今こゝで分けて貰れたツて、皆な僕等が失くしちまふ、斯う母親さんは心配してる。だから、養生するものは養生するが可いし、食へなければ自分で働くが可い――他の世話に成るな。是が母親さんの主義なんだ。實に強い人だ。母親さんが彼樣いふのは、決して悪い積りぢやない。』

『しかし、私達の爲を思つて下さるなら、何故一緒にやれと仰つて下さらないんでせう――假令奈何な苦勞をしても可いから何處までも二人で一緒にやれッて。』

『左樣言つて貰れる時期は、最早通り越した。』

斯う青木が言つたので、操は不思議さうな顔付をした。操には夫の言ふ意味がよく汲み取れなかつたのである。

『私がお氣に入らないんでせう。』

と操は獨語のやうに嘆息した。

六十四

隣の部屋に寢かして置いた鶴子が、其時、眼を覺ました。操は子供を抱いて來て、軈て菓子を持たせて遊ばせて置き乍ら、一寸階下へ下りたが、間もなく引返して來て見ると、鶴子は菓子を奪られて泣出して居る。夫はそれをムシャムシャ食つて居る。

操は腹が立つやら、可笑しいやらで、泣いて居る兒を抱いたり、賺したりして、

『オヽ、好い兒〱。もう泣くんぢやないの。眞實にいけない父さんだよ、鶴ちやんの御菓子を奪つて食べたりなんかして――』

鶴子はまだ泣きじやくりを止めない。

「父さん、め。」

操は鶴子に叱つて見せた。

青木は寂しさうに笑ひ乍ら、暫時吾兒の様子を眺めて居たが、何を思付いたか、急に眞面目に成つて、

『鶴ちやん、堪忍してお呉れ。親のつとめも盡さないで濟まないね。』

斯様なことを言つて、頑是ない子供の前に手を突いた。その詫びる調子が平素とは違つて聞えたので、何故夫が其様なことを言出したか、それは操によく解らなかつたが、たゞ何となく氣の毒に成つて來た。操は夫を見て言ふに言はれぬ哀憐と同情とを感じた。新婚の當時、新しい洋服姿で、一緒に並んで寫眞を撮した夫の風姿に思ひ比べて見ると、今は目も當てられぬ程の變りかたである。晝夜の懊惱と、不眠の苦痛と、底の知れない畏怖とで、顔色なぞは最早別の人のやうに蒼ざめて居る。

『斯ういふことに成つたのは俺の運命だ。』と青木は男らしい眉を揚げた。『母親さんなぞに言はせると、吾儕の結婚は三文の價値も無い。いや、母親さんばかりぢやない、世間の人が多く左様思ふのは無理もないね。しかし、吾儕は世間の人に比べて見て、決して可恥しい結婚をしたとは思はん。吾儕の家庭も左様だ、吾儕の事業も左様だ――唯、矢盡き刀折れたんだ。操、まあ左様ぢやないか。』

操は默つて首を垂れて居る。

暗い青木の瞑想は、到底人力の爲すなきを思はしめる。彼は『自分』といふものにすら長いこと欺かれて居たと考へるやうに成つた。親も、友達も、妻も、子も――いや、左様いふ彼自身すら既にもう一種の幻影ではないか、斯う疑ふやうな精神の状態に居るのである。

夕日のひかりは部屋の内に滿ちた。反抗憤怒の情は青木の胸を衝いて湧き上つて來た。彼は爆發彈を投げる虚無黨の青年の様なぞを引いて、敵を倒すと同時に自分も倒れて同じく消えて行くことなぞを言つて、目的は兎に角、すくなくも其精神は勇ましい、斯様なことを妻に對つて熱心に語り聞かせた。

『あゝ、お前も敗北者なら、俺も敗北者だ――奈何だね、いつそ俺と一緒に死なないか。』

操は呆れて夫の顔を眺めた。暫時の間、彼女は物も言へなかつた。『まあ、貴方は奈何かなすつたんぢや有りませんか。』と彼女の眼が言つた。

『私は厭です。』と操は力を入れて暫時考へた後で言つた。『子供がありますから、私は厭です。』

『子供がなけりや?』と青木は反問した。

『子供さへなけりや、そりやあもう、奈何に成つたツて關ひませんけれど――』

斯う操は答へたものの、何となく可怖しいところへ無理に一緒に引入れられるやうな氣がした。

『父さん、父さん、これほど私は貴方の爲に苦

勞して居るぢや有りませんか、何もかも犧牲にして貴方の言葉に隨つて居るぢや有りませんか——まだそれでも足りないんですか。」斯う操は腹の中で言つたのである。

「はゝゝゝ。」

青木は笑に紛らして了つた。

六十五

憤激のあまり、青木は斯様な語氣を細君に泄らしたのであつたが、其晩から彼に對する家の人の態度が急に變つて來た。食後に一寸歩いて來る積りで、ぶらりと銀座の市街の方へ出掛けると、彼の後から弟が隨いて來る。しかも、見えつ隱れつして隨いて來る。而して、何處へ彼が行くか、何方へ彼が廻るか、奈何いふ夜店の前に彼が立つか、といふことまで一々様子を窺ふといふ風である。鋭い青木の神經がそれを感得かずには居なかつた。彼は遠廻しに監視されて居るといふことを知つた。この弟といふは、少年の時代から畫が好で、何處か性癖の上には兄の青木に似通つたところが有つた。ゆくゆくは、美術家として世に立たうといふ青年である。

青木は、家の人から自分の行動を監視されて居るばかりでなく、どうかすると眞實さへも話して貰へないやうな氣のすることがあつた。翌日の午前、誰か友達が訪ねて來て、しばらく店頭で談話をした様子であつたが、青木の方で逢ひたいと思つて居るうちに、家の人が歸して了つた。彼は二階の窓から、チラと友達の歸つて行くところを見た。確かに見た。菅か、岸本か、この二人のうちに相違ない。斯う思つて、母親が二階へ上つて來た時、

『母親さん、誰か友達が訪ねて來やしませんでしたか。』

と聞いて見た。母親は眞面目に成つて、

「いゝえ、誰方もお見えに成りやしないよ——店のお客様は來たけれど。」

斯様な調子で、家の人が寄つて集つて、彼に眞實を話るまいとするらしかつた。屋外へ出れば誰か隨いて來る、友達が訪ねて來れば逢はせないやうな工夫をする、郵便が着いても隱して了ふ、たゞ〳〵家の人は青木に對つて靜かに休息せよとばかり——彼は孤獨を感ぜずに居られなかつた。

それればかりではない。家の人は二階にある刃物の類——剃刀だの、小刀だのを隱して了つた。青木は直にそれを嗅ぎつけた。彼は操にその事を言つて笑つて、

『馬鹿！　お前達は寄つて集つて俺を狂人にしようとしてる。』

斯う叱るやうな調子で言つた。操はもう夫のことが氣がかりで、昨夜なぞは碌々眠られなかつた位である。

最愛の妻にまでキ印のやうに見られるか、といふことは言ふに言はれぬ悲哀を青木の胸に與へた。彼は自分で自分を憐まずには居られなかつた。去年の六月——まだ彼が非常な活氣に満ちて居た頃——芝公園の家の窓で、しかも青葉の吐息を嗅ぎながら書いた文章の一節が、其時、ふと彼の胸に浮んだ。

『死は近づけり。わが生ける間の「明」よりも、今死する際の「薄闇」は我に取りて難有し。暗黒！　暗黒！　わが行くところは與り知らず、死もまた眠の一種なるかも。眠ならば夢の一つも見ざる眠にてあれよ。おさらばなり、おさらばなり。』

六十六

青木の家は元數寄屋町の通から南鍋町の方へ曲らうとする角にあつて、彼が起きたり臥たりして居る二階の部屋の窓は通の方へ向き、

隣の部屋の窓は反對に鍋町の方へ向いて居る。その鍋町寄りの窓から直に物干へ出られるやうに成つて居る。物干のあるところは臺所の屋根の上にあたる。丁度、夜の十一時頃、その物干の方で異樣な悲鳴が聞えた。家の人がそれを聞きつけて驅け上つて見ると、そこに青木が倒れて居た。

あれほど家の人が注意を加へて居たにも關らず、何時の間にか青木は短刀を持出して、我と我身を殺さうとしたのである。手が狂つた爲か、咽喉の傷口は急所を外れた。母や、弟や、それから操は、全力を出して彼を救つた。早速醫者が馳付けた。部屋へ移され、親切に手當を施された頃の彼は、殆んど生きた屍のやうであつた。

翌日の午後、青木の傷ついた體軀は車に乘せられて、芝のなにがしといふ病院へ送られることに成つた。弟は青木を抱き擁へるやうにして、相乘で幌を掛け、操は一人乘で後から隨いて行つた。それは塵埃の立つ、風の烈しい日であつた。どうかすると二臺の車は往來の眞中に停つて、黄色い烟の通り過ぎるのを待つて居ることもあつた。通行する人々は急に身の向を變へたり、軒先へ隱れたりした。赤く濁つた空の光景は、東京といふよりも、武藏野である。青木兄弟も、操も、共に砂を浴びた。

斯ういふ風塵の中を衝いてまでも病院へ車を急がせたといふは、母はじめ青木の行爲に仰天して了つたからで。其日から青木は病室の寢臺の上に横に成つて、醫者の言ふなりに身を任せた。彼は恰も酣醉した人のやうであつた。

操の積りでは、すつかり夫の病氣を治療して貰つて、それから連れて歸りたいといふのであつたが、その病院の醫者に言はせると、これは病人ではない、傷口が愈ればそこで治療は終つたものである、それから先は醫者の力で奈何ともすることが出來ない、斯う辯解した。

この病人ではないが操を困らせた。彼女は夫の病氣を醫者の力で愈し得るものと信じたかつたからである。

生き殘つた青木が夢から覺めたやうに自分の身の邊を眺め廻した頃は、もう元數寄屋町の二階でなくて、芝公園の舊の借家の中に居た。そこは霜溶のした赤土の小徑に添うて、坂を下ると飯倉の町へ出られるやうな位置に在る。欅・櫻、それから雜木の葉は多く落ち盡して居たから、明い谷を隔てゝ向うに麻布の丘を望むことが出來る。三間ばかりある平屋で、曾て青木が見立てゝ入つた家である。操は鶴子を連れて、そこで靜かに夫を養ふことにした。彼女は宗教の方の友達を擇んで成るべく信心深いやうな話ばかりを夫に聞かせたいと思つた。朝晚操は夫の爲に祈つた。

六十七

二月が來た。麹町上二番町より五味坂の方へ連接いて居る道路にも草の芽を見るやうに成つた。そこは淺い谷間のやうな地勢で、別莊風の大きな建築物と樹木の多い庭園とに挾まれたやうな位置にある。櫻、辛夷などの梢はその谷間を飾らうとして待つて居るかのやうに見える。往來の土の上には靜かな影がある。ポツと日の映つたところもある。通行する人はすくない。二十二三になる束髮に結つた若い人が、肩掛に身を包んで、草の芽を踏み乍ら彷徨つて居た。

その頃の若い人が用ひた肩掛は多く毛絲で編んで、三角に疊んで掛けたものである。斯の人は鼠色のを掛けて、すこし斯う氣取つたやうな風をして、あちこちあちこちと歩いた。別に何處を指して行くでもなく、と言つて人を待つといふ風でもなかつた。たゞ〳〵青いものを踏

んで彷徨つて居るとしか見えなかつた。

この道路の盡きたところにある坂を富士見町の方から下りて來て、軈て三丁目の谷へ下りずに曲つた女がある。矢張同じやうに髪を束ねて、肩掛は鼠色の濃いのを纏つて居る。年齢はすこし長らしい。

『お勝さん。』

斯う年長の方から聲を掛けた。

『あら、お磯さん、何處へ行つてらしツて。』

『一寸通まで買物に行つて來たの。』

と言つて微笑んだ。

勝子は不意を打たれた氣味で、すこし顏を紅めたが、やがて自分の家を指して、磯子と一緒に話し〳〵歩いて行つた。

この二人は姉妹のやうな親しい間柄で、今は同じ屋根の下に日を暮して居る。尤も、磯子は友達の家の離座敷を借りて、そこから學校へ通つて居るので、買物と言つたは自炊する爲の海苔の佃煮のやうなものであつた。

連中の符牒に青森といふは斯の磯子のことである。青森は矢張盛岡といふと同じ意味から來たのである。優等の成績で高等科を出た人で、氣性の勝つた、望みの高い――まあ敵に成るものもあると同時に味方に附くものも多いと言つたやうな風の女であつた。磯子はまた親切な人として下級の生徒に思はれて居た。涼子が市川贔屓であると同じやうに、斯の人はまた岡見贔屓である。それも師として慕ふといふまでで、自分には先生をラバアとして考へることが出來ない、などと勝子に話して笑つたが、それほど禮儀深いところのある人であつた。師弟の關係は長いこと磯子を苦めた。何時の間にか彼女は岡見の涙を汲むやうに成つた。而して自分も亦た今では涙もろい人に成つて居る。

屋敷跡らしい建物の並んだ町のところで、二人は止つた。黑く塗つた門の内には勝子の姉の家がある。よく若い女同志がするやうに、手を引合つて其門を入らうとした。手と手と觸れた。二人の處女は互に情の爲に燃えて居ることを感じた。

六十八

斯の門内には、樹木を隔てて住んで居る家が幾軒かある。突當りの大屋さんの屋敷を左に見て、すこし奧まつた處にある二階建の家は、勝子の父が姉の家族の爲、また學校へ通ふ娘達の爲に借りて住まはせたので、そこから學校までは辨當を持たずに行かれるほどの距離にある。

離座敷の方へ行く磯子と別れて、勝子は庭傳ひに自分の部屋へ上らうとした。

『叔母さん。』

と呼ぶ聲が庭の隅の方で起つた。

淺々と芽を發生した芝の上には、勝子のことを叔母さんと呼ぶ娘達が遊んで居る。斯の娘達は、勝子をお勝叔母さんと言ひ、勝子の妹をお豐叔母さんと言つた。どうかすると、お勝叔母さんと左樣幾歳も違はないやうに見える人も居る。お豐叔母さんよりは年長の人も居る。どうして、お豐叔母さんなぞはまだ前髪を額のところへ切下げて居るほど若かつたのである。

勝子は部屋へ上らうとして、妹の豐子から許嫁の人が鳥渡來て直に歸つたといふことを聞いた。若々しい血潮は遽然勝子の頰に上つた。

許嫁の人は姓を麻生と言つた。親戚の間柄で、左に頼母しく思ふところから、斯うして時折尋ねて來るのである。麻生は温厚な、少壯な植物學者であつた。一般の科學にも趣味を持つた人で、大氣の運動や、颶風の理論や、纖質類胎葉發生の研究や、それから其當時の新しい發明として知られた種々の話を持出して、よくそれを勝子に語り聞かせたものである。勝子は其話に

耳を傾けるのを樂んで居た。而して、親切な、心の好い許嫁の人のことを考へる度に、人知れず小さな胸を傷めずには居られなかつた。

その時、妹は丸顏に適はしい、はツちりとした、大きな眼を擧げた。彼女は姉の顏を覗き込むやうにして、無邪氣な、あまえるやうな容子をした。その容子がいかにも愛らしかつた。まだ何事も知らずに居るやうな妹の顏を見るといふことすら、もう勝子には胸の塞がる種である。妹の知らない涙は思はず勝子の頰を流れた。

斯ういふ不思議な勝子の有樣が何時までも家の人の注意を引かずには居なかつた。父は總選擧の準備として、その月の初めに盛岡の方へ歸つたが、まだ議會の解散されない頃には全院委員長の次點者に擧げられた位で、隨分多忙しい身の人であるにも關らず、娘達の顏を見たいばかりによく車でやつて來て、殊に勝子の爲にはいろ〳〵と氣を揉んで居た。ヒステリーとやらではないか、斯う父が言つた。父は親しい醫者を呼んで勝子を診察して貰つたことも有つた。家の人の方から、其時醫者まで注意した言葉の中には、種々病人らしい容體もあつたが、醫者は勝子を壯健な女であると診斷した。

六十九

卒業も間近くなつて來て居るのに、勝子は學校の仕事が手に着かなかつた。卒業に近づくといふことは、やがて結婚に近づくといふことであつた。

日の暮れる頃、國に居る伯母の許から、盛岡名物の豆金糖が屆いた。其日は日曜で、姪の學校友達なども遊びに來て居て、奥の部屋では種々な話が始まる。小包で來た菓子もそこへ開かれる。洋燈の周圍には樂しい無邪氣な笑聲が溢れた。けふは學校の寄宿舍で誰とかさんの生きた葬式があつた、と言つて一人が笑へば、また他の娘が引取つて、誰とかさんはある先生から接吻を頂戴したさうだ、接吻といふものは親子夫婦の間に限ると思つたが、先生から頂戴することもあると見える、などと言つて笑ひ轉げる。「あゝもう其樣な話は聞きたくない。」斯う勝子は思つて、皆なの樂しい笑聲を聞捨てて、獨り自分の部屋に隱れた。

部屋の前はすぐ庭であつた。勝子は母親から送つて貰つた豆金糖を机の上に置いて、その草色した、シコ〳〵した菓子を割つて食べながら、物を書く爲に紙を展げた。勝子は未だ自分の心情が岸本にはよく知れて居ないやうに思つて居る。で、日記ともつかず、手紙ともつかず、有りの儘に書いて、折があつたら届けたいと思つて居る。其樣なものが最早七八本も書溜めてある。中には、髮を洗つたといふやうなことまで記した日もある。その夜も思つた通りを書いて見る積りで、岸本が旅に出掛ける當時のことを胸に浮べた。師と呼び弟子と呼ばれて居た頃、何故岸本は自分に對して彼樣ツレナかつたらう。彼の當時、勝子は左樣思つて居た。だから紙にも其通り書いた。岸本が生徒に別離を告げて、いよ〳〵學校を辭めて行くといふ時、まだ勝子は何事も知らなかつた。何氣なしに二階の教場の窓から見ると、丁度岸本が車に乘つて出るといふところであつた。思はず勝子は後姿を見送つた。何故彼樣なことをしたらう、今から考へて見ると不思議なやうである、斯う勝子は思ひやつた。紙にも其通り書いた。

『姉さん、何を其樣にお書きなさるの。』

と言つて入つて來たのは妹の豐子である。豐子は不思議さうに姉の顏を眺めて、意味もなく笑つて、軈てまたぷいと出て行つて了つた。

今、妹が入つて來た。『姉さん、何を其樣にお書きなさるの。』と言つた。勝子はそれを書

いた。

　筆をやめて、勝子は盛岡名物に返つた。子供の時分から食慣れたものは何時食べて見ても甘美かつた。胸に浮ぶは岸本の噂である。ある人に言はせると、岸本は自分勝手の塊である。彼の戀は人と一緒に死なうといふ戀で、人と一緒に生きようといふ戀ではない。彼は何事も人の爲に盡さうとしない。殆んど人のことを考へない。彼は深く愛するやうに見えて、其實すこしも愛して居るのではない。彼は眞に愛を解する人でない。斯う評する人もある。またある人に言はせると、岸本がツレナく見えるのは、あれは思はせ振りである。斯の思はせ振りといふ評を奈何勝子は信じて可いか解らなかつた、しかし岸本がツレナく見えるといふことは事實であつた。毎時岸本は木で鼻をかんだやうな手紙ばかり寄す人であつた。冬の名殘を思はせるやうな、寒い、寂しい雨が庭の芝草へふりそゝいだ。その音を聞くと、ある無言の鄕へ人を誘つて連れて行くやうな氣がする。夜は更けた。勝子は臥床へ入つた。

七十

眠らずに白むのを待つて居たやうな夜の空も、到頭明けた。屋敷內にある樅の樹の梢には、鳥が集つて來て、高い聲を出して鳴いた。その鳴聲が雨あがりの空に響き渡るやうに聞えた。雀はまた、塒から飛出して、勝子の部屋の前まで來て囀つた。

　早く起きたといふよりは眠らずに居た勝子の耳には、その朝の鳥鳴が特別な響を傳へた。日が射して來る頃には、時々鳥影も部屋の障子に映る。

「何處からか便りがあるよ、きつと好い便りがあるよ——盛岡かナ。」

　と勝子の姉が臺所の方で言つて居た。

　娘達はいづれも學校行の準備でいそがしかつた。勝子は、妹の爲に黑い柔かな髮を束ねてやつて、自分のも髻を振つたやうな風に、ノウハリと卷きつけた。それから、目立たないやうなものを出して着て、博多の帶をしめたが、何と無くその朝は沈着いて居なかつた。勝子は妹や姪達と連立つて、庭の植木のあるところで磯子と一緒に成つた。斯の友達は最早生徒ではない。今では普通科の生徒に何か教へて居る。一同揃つて出掛けた。

　其日は寒かつた。勝子は夢のやうな一日を學校で暮した。

　聽て待侘びた時が來た。課業の終つた後、勝子は學校の門前から車に乘つて、本鄕のなにがしといふ病院を訪ねた。そこには彼女を宗敎に導いたといふ森下が病んで居る。

　丁度、傳馬町の涼子も見舞に來て居て、そこで一緒に落合つた。

　病院を出た勝子は家の方へ引返さうとしなかつた。彼女の車はそれから池の端の方へ向つた。

　例の鼠色の肩掛に深く身を包んで、車を急がせて居る勝子の胸には、今、三人の人がある。一人は許嫁の麻生、一人は病んで居る森下、一人は岸本である。時とすると、勝子は博愛といふやうなことを考へて、この三人を同じやうに待遇はうと思ひ煩ふこともあつた。勝子に言はせると、自分は親の意のまゝに定められたものである。それが自分の運命である。友達として長く交際を續けるといふより外に、岸本に對しての自分の寄るべき道が見當らない。どうかして自分等は其方角に進みたい。一生の友達——何といふ樂しい思想だらう。これが前の夜に一晩かゝつて考へつゞけて、最後に落ちて行つたところであつた。勝子は車の上でも斯の思想を繰返した。

藍染川の流について、すこし折れ曲つて行つたところに、菅の下宿がある。車はその黒板塀の外で停つた。門内には、竹、青桐、それから譲葉なぞの植ゑてあるのが眼につく。庭は荒れたまゝで、手入も屆かないといふ風に見える。突當りの母屋には古風な出格子の窓もある。勝子は、胸を踴らせ乍ら、粗い格子戸の外に立つた。

勝子は岸本を訪ねて來たのである。

七十一

山のことで破れてからの菅は、一層深く勝子の心情を憐んで、斯うして再び岸本に會ふ機會を作つて呉れた。自分の部屋までも明けて貸して呉れた。そこまで事を運んだのは一切彼のなさけである。

岸本は出て迎へた。勝子は導かれて菅の部屋へ通つた。岸本が八戸へ行くと言つて、木挽町の二階で二人初めて會つた時に比べて見ると、岸本の方でも種々なところを通り越して來て居るし、勝子の方でも彼の時の自分ではないやうに思つて居る。二人は不思議な顏を合せた。斯うして再び邂逅ふといふことすら、既にもう岸本の身に取つては不思議に思はれたのである。

岸本の髪の毛は最早以前の通りに延びて、可傷しい記憶を掩ふかのやうに見えた。勝子を見て、先づ彼の胸に浮んだは、最早是から將來斯樣な風にして話す機會は有るまいといふことである。一度逢つて顏を見るといふだけに、彼は何程の悲しい日を通り越して來たらう。

「明日のことは解りません。」斯樣な風に岸本は言出した。「まあ、大に話さうぢや有りませんか。」

勝子は挨拶に困つた。「左樣貴方のやうに仰つたッても——」

大に話さうではないか、と岸本は言つたものの、さてそんなら何を話すかといふに、何事も大に話すやうなことが無かつた。話すことが無いといふよりは、話せなかつた。それに、勝子の方から言つても、寢ずに考へて來た事が有る位だから、其を言ふ爲にやつて來たやうな場合で有り乍ら、友達として長く交際はうの何のとは口へ出なかつた。勝子はもう何もかも忘れたやうに見えた。

岸本は茶をすゝめたり、菓子をすゝめたりなどして、軈て自分の母親が郷里から出京した時の光景を勝子に語り聞かせた。それは前の年の十二月のことで、母親、姉、姉の娘、それから供の人、斯う四人、日が暮れてから新橋の停車場に着いた。母親は男の着るやうな黑羅紗の鳶合羽、姉は厚ぼッたい肩掛に身を包んで、いかにも寒い山國から來た旅人といふ風に見えた。停車場の雜沓の中では、人々はあまり言葉も交すことが出來なかつた。母親の眼に映つた岸本は見違へるほど成人して居て、これが吾兒かと半信半疑で居る位であつた。碌々挨拶もせずに、母親は岸本と一緒に車に乘せられた。何處かの若い人と一緒に乘つた、斯う母親はまだ疑つて居た。岸本が東京の夜の市街を指して見せて、「母親さん。」と言つた言葉に驚かされて、はじめて「捨吉だつたか。」と思つたといふ。この事を母親が後で話して大笑ひした。長いこと別れて居た親子は斯樣な風にして一緒に成つた。話らしい話はこれ位なものであつた。彼是するうちに、最早別れる時が來た。二人は顏を合せたといふだけで、復々言ひたいことも言はずに別れて了つた。

七十二

岸本は獨り菅の部屋へ止まつた。其日の談話は、後で考へると實に茫然するやうなことばかり。是と言つて覺えて置かうと思ふ言葉も交換

さなかつた。唯、二人、物も言はずに居た時の靜かさは、勝子が歸つて行つた後でも、まだ部屋の内に殘つて居る。

"Your hand lies open in the long fresh grass,—
The finger-points look through like rosy blooms:
Your eyes smile peace. The pasture gleams and glooms
'Neath billowing skies that scatter and amass
All round our nest, far as the eye can pass,
Are golden kingcup-fields with silver edge
Where the cow-parsley skirts the hawthorn-hedge.
'Tis visible silence, still as the hour-glass.
Deep in the sun-searched growth the dragon-fly
Hangs like a blue thread loosened from the sky:—
So this wing'd hour is dropt to us from above.
Oh! clasp we to our hearts, for deathless dower,
This close companioned inarticulate hour
When twofold silence was the song of love."

[illegible]歌

綠の草の中にしも繊な君が擲げやれば、
指の尖のほの透きてあからむ花と擬ふかな、
とても微笑むやさ眼や。散りては更に寄せ來なる
雲の波だつ空の下に照りては陰る牧の原。
二人與籠るこのほとり眼路のかぎりはおしなべて
黃金の花の毛茛、野木の緣は白銀に、
いぬ芹生ふる山査子の垣根の端に連なりぬ。
けに靜けさの眼にも見えて、漏刻の如ししめやかに。
日影も忍ぶ草がくれ、蜻蛉はひとりみ空より
解けにし藍の一すぢの絲かとばかりかゝりたる、
「一時」の翅もさながらに二人の上に休らひぬ。
噫、うち寄せむ、胸と胸、これや變らぬ珍寶、
美し契の濃やかにたとしへもなきこの刻、
二重に合へる靜けさぞ君と我との愛の歌。」

（蒲原有明氏譯）

生命の家。胸に浮ぶは斯の歌である。物足りないと言へば、實に物足りない邂逅ではあつたが、一方から考へると、歡しいとか哀しいとかいふところを通り越して、唯もう心に驚くやうなことが多かつた。岸本はよく勝子の顏を見ることが出來たと思つたのである。

其日、別れ際に、岸本は自分の持つて居た帛子を勝子にやつて、勝子が持つて居たのを自分の方へ貰つた。勝子のは、すこし汚れて、クシャ

クシャに成つて居たので、そんな物を直接渡すのは可羞しくも有り失禮でも有ると思つた樣子であつたが、岸本の方で無理に貰ひ受けた。それが岸本の袂にある。彼はその鼻紙をかんだり涙を拭いたりしたやうな帛子を大事さうに取出して、それを自分の顔に押當てた。而して、可懐しい人の肌香を嗅ぐやうな思をした。

會合の模樣を聞かうとして、彼方に菅と市川の二人が一緒に入つて來た。何事も話が出來なかつた。』斯う岸本は友達に語り聞かせて笑つた。

市川は谷中の寺に飽きたと言つて、斯の下宿へ引越して來て居る。今では菅と同じ部屋に机を並べて居る。

『斯の下宿は好い、ノンキで好い。』と市川は何か思出したやうに言つた。

菅は笑つて、『君と二人なら喧嘩をしないネ——岸本君だとすこしあやしいが。』

『合口の方ですから。』

斯樣なことを言つて、市川は菅を抱寄せるやうにした。

七十三

菅一人の時ですら、池の端といふものは連中が會合の場處のやうであつたが、まして市川が來て机を並べたので、いよ／＼斯の下宿の方へ友達仲間の足が向くやうに成つた。家婦といふ人は客に向つて御世辭一つ言ふでなし、使つて居る下婢だつて左程氣の利く方ではなし、それで居てどこかにウマミのある、居心地の好い、氣儘な宿であつた。それに一間々々別に成つて居たから、玄關から直に通ることが出來て、出入にも自由である。荒れては居たが庭の樹木で圍繞かれたといふことと、もと／＼下宿に出來た家ではないといふことが、斯の部屋を閑靜に快適く思はせた。

市川が人に書かせたシエレイの畫像も額に入つて來て、新に斯の部屋を飾つた。すこし大き過ぎた、と彼が言つた。これは床の間の壁に立掛けるやうにしてある。長く垂下つた髪や、すこし斯う傾げた首や、それから若々しい眼付なぞが、木炭で粗く表れて居る。斯の畫像の前で、連中は盛に文藝復興期の話などをした。一人で彫刻もやれば、繪畫もやる、詩も作る、加に建築の設計もすると言つたやうな、諸藝を通じて力溢れた巨匠が續出した時代の話に成ると、連中はもう我を忘れて、卓は擲けたり、腕まくりをしたりした。ダンテ、アンゼロ、または美少年ラファエルの名がよく繰返された。中世紀あたりの男女の物語、怪しい僧侶の話、其他詩人美術家の情事に關したことなども、よく話頭に上された。

市川はこゝで某劇の梗概と言つたやうな文章を書いた。菅は又、ある薄命な詩人の傳記を譯した。

よく山の話も出た。動ともすると菅は非常な憤りを發したといふ風で、濃い、男らしい眉を動かして、冷嘲と言つたやうなことを論じたり、今日主義の道德を罵つたりして、激烈な精神の有樣を示したが、さうかと思ふと又、身につまされるやうな歎の一つも憶出して、やるせない思に返ることも有つた。足立が來て、山の話が始まると、彼は堪へ難いやうな眼付をして、兄らしい友達に倚凭ることもあつた。而して岸本を前に置いて、『斯ういふ男や盛岡の居るといふことが、僕にはもう堪へられん。』と言つたり、『君は男だから、まだ可いサ。それに斯うして友達も多勢居る——盛岡を見給へ、獨りで苦んで居なけりや成らない、奈何して慰められよう。』と言つたりした。

七十四

足立が山の日記もこゝで讀まれた。『我は友の

叔母君に逢ひぬ。」と彼はその中に書いた。「彼の君は流石に世の辛味をば嘗め給ひし人なれば、いと深き思ひやりもありて、その語らふ所も頗る着實なり。されど又、何處にかに、厭世的の思想あれば、戀といふ事の眞の味をば解し給はぬさまなり。我はさま〴〵に女の爲に辯じぬ。叔母君は只管に驚きて居給ひしが、漸くに友の衷情をば酌み取り給ひけむ、彼の少女をば兎に角に見むと言ひ給ひぬ。女は何事も簡單に言ひしのみにて有りけむ、叔母君は我言にて初めて事情を詳かにしたりと言ひぬ。我はなほ、友の心は必ずしも少女の容貌を得ずんば滿足せじといふに非ずして、彼女の品性の未だ汚れざるに效ふに有るとしを言ひぬ。又、戀には他性の内部に己を見出すことにして、人間の眞價は此内部の人の如何によりて定まるべきよしをも、ことわりぬ。斯ることは、[illegible]の心を引きけむか、いと覺束なきことなり。十月十九日。友の[illegible]を[illegible]ひぬ。[illegible]は、[illegible]しといふ少女をば此所に[illegible]ふるは[illegible]しからずと言ひ[illegible]。[illegible]は、まことに彼の少女は野に咲出し花の、色も[illegible]もなきは、[illegible]の[illegible]、[illegible]ごとく、當世の淑女がのみこゝろに叶ひさるべし。されど人間の眞價は外面のみにては判じ難からむ、人間の[illegible]、[illegible]

も、財も、衣服も、容姿の美も、みな朽ちて後さて殘る者はなにかあるべし。この純の純なる物こそ、眞の内部の人間なれと思ふなり。こゝに於いては、貴人、賤者、何の變りたる所かあるべき。此度の事はしも、世間を[illegible]には、何事も皆浮れたる心の[illegible]と見給ふも、理ならずとはし難けれど、これまで人の模範ともなし給ひし叔母君の斯く迄に思ひ詰め給ふこと、よく〳〵苦しき事なるべしと思ふなり。」また又、君は、叔母の偶然彼女を見て、[illegible]に[illegible]でし[illegible]しみ給へり、人間の靈火は[illegible]に[illegible]し、[illegible]にして消するものなり。彼の天來の[illegible]は、あさかなる心靈の導火線をたどりて、[illegible]に偉大なる光明とは人の内部に傳ふ。[illegible]は[illegible]の準備にこそあらめ。清火[illegible]の[illegible]はまず[illegible]ならざる可からず。いたづらに[illegible]の[illegible]ならむ事こそ、かへりて[illegible]からめ。又、君は、[illegible]の[illegible]に[illegible]されば、世間[illegible]の[illegible]を[illegible]には、[illegible]しと言へと、[illegible]に、[illegible]日を[illegible]に、今は[illegible]、[illegible]となり、一個の[illegible]に[illegible]し、遂に[illegible]を得ざればまず、ます〳〵[illegible]に[illegible]するものなり。君は今戀[illegible]に[illegible]、[illegible]、[illegible]故に[illegible]來は[illegible]なれ、[illegible]に[illegible]する[illegible]を下

し給うて、後にいたりて悔い給ふことなからずや。そもや、男子一度斯くと心に定めし事、千曳の石にあらずとも動かし得可き筈あらんや。我は死なば共にと思ふ女の、後々孤獨の生涯を送るさまの、今も[illegible]あり〳〵と我眼に映る心地のすれば、後にいたりて悔いざる迄、君に告げでは休まじ。叔母君。さらば人間といふものを、廣き點より觀察して、從來如何なる結果を來すかを實驗する爲に、わざと是の事件を破りてはいかに。[illegible]來る[illegible]の何れの枝に止まるかを見る如き心にてあらば、これいと容易き事なるべし。我、いな〳〵、我はさる事は得せじ。斯る冷淡なる、無情なる心は、我持つ事をだに恥づる所なり。我は彼の君の心の動かし難きを信ずれば、今更實驗の必要を認めず。知れ切る事を見出す爲の實驗には己の生命を犧牲にするとも厭はねど、古來より人の心の動かし難き所多かるを[illegible]て、[illegible]の少女を[illegible]的に[illegible]せんとは、あまりに無情なりと思ふなり。我はさる刻薄なる心を[illegible]せず。我は水に溺るゝ人の死す可きを知るが故に、これを救はむとて、ことさらに、女をば水中に投げむとする愚を學ばざるべし。我[illegible]はいと〳〵[illegible]し。この故に斯る無情の心を容るゝの餘地を有せず。あゝ、叔母もし

今此事を破りて、後來の不幸を恢復するの心算にもあらば、そはいとみじき誤りならむ。君は慈愛の心に富み給へり。されど、君は蜩君の情をば酌み誤り給へりとこそ見ゆれ。」

足立の友情は斯の日記の一節にもよく表れて居た。

七十五

紈袴不餓死　儒冠多誤身
丈人試靜聽　賤子請具陳
甫昔少年日　早充觀國賓
讀書破萬卷　下筆如有神
賦料揚雄敵　詩看子建親
李邕求識面　王翰願卜隣
自謂頗挺出　立登要路津
致君堯舜上　再使風俗淳
此意竟蕭條　行歌非隱淪
騎驢三十載　旅食京華春
朝扣富兒門　暮隨肥馬塵
殘盃與冷炙　到處潜悲辛
主上頃見徵　欻然欲求伸
青冥却垂翅　蹭蹬無縱鱗
甚愧丈人厚　甚知丈人眞
每於百寮上　猥誦佳句新
竊效貢公喜　難甘原憲貧
焉能心怏々　祇是走踆踆
今欲東入海　即將西去秦
尙憐終南山　回首淸渭濱
常擬報一飯　況懷辭大臣
白鷗波浩蕩　萬里誰能馴

よく斯ういふ吟聲が部屋の一隅で起つた。力のある、感情に富んだ足立の聲は、斯の詩を吟ずるに適して居た。市川や岸本も一緒に成つて、足立の聲に調子を合せることも有つた。

時の經つといふことを斯の池の端の宿では忘れさせる程であつた。暖い雨が降つて來て、窓の外の草木も復活るやうに見える頃には、こゝへ集つて來る連中の心も共に發達した。就中、年少な手合は、自分達が奈何なるといふことを考へる暇も無い位で、たゞ〳〵若々しい生命を樂まうとしたのであつた。市川なぞはもう醉ふやうに成つて了つた。彼は學校の日課を捨てゝ顧みなかつた。

流石に思慮の深い市川は、雷でも來て掴めとまで悶いて居る菅の顔を眺めると、

『冷靜なる判斷、冷靜なる判斷。』

と力を入れて言つた。

「君にはその冷靜なる判斷があるよ、」と菅が言つて、互に考へ深い默付をした。彼等は胸壁を衝いて湧き上つて來るやうな、活々とした内部の生氣に押されて、其を奈何ともすることが出來なかつたのである。

栗田といふ菅の從兄弟も時々やつて來た、而して斯の部屋で蕪村の俳句などを吟じて聞かせた。從兄弟同志とは言ひ乍ら、餘程菅とは肌合の違つた人で、磊落な、面白い調子の青年であつた。隨分諧謔を言つて連中の談話を混返しもした。斯の人が一句吟じて聞かせた後では、丁度舌打してウマイ物でも味つた後のやうに、まだそのウマミが口に殘るといふ風に見えた。『春の海ひねもすのたり〳〵かな。』などとよくやつたものである。

上野の花の盛りの頃には、音樂會の歸りにこゝへ立寄つて、演奏の評判をする人もあつた。斯ういふ手合の中には、岡見の弟、福富なぞを數へることが出來る。福富は、市川、栗田、それから岡見の弟と同じやうに、高等學校の制服を着けて居て、市川よりもすこし若い位の年頃であつた。藝術といふものに深く趣味を持つた青年で、其方で市川なぞとよく話が合ふ。ルナンの基督傳を連中の間に紹介したのも斯の

人である。彼は、市川を通して、自然と連中の仲間入をするやうに成つた。

四月の音樂會にはチットリヒが名殘の獨奏も有つた。福富は斯の部屋へ來て、會の光景を語り聞かせた。曲はベトオベンが「ロオマンチェ」。次に、スポオルの「コンチェルト九番」。福富に言はせると、吾國にベトオベンを傳へた最初の人は彼のチットリヒである。其人がまさに東洋を去らうとして居る。音樂狂でないものでも胸が躍らずには居られない。まして彼の音樂者が一挺のヴァイオリンを携へて、奏樂堂の白壁の前に立つて、小指一本で八音を上下した時は、スケアあり、トリルあり、半音階を迅速に上つて行つたなぞ、思はず耳が熱した。斯う事こまかに評をして聞かせるものは、連中で福富一人である。其日は市川も行つて、涙を流して歸つて來た。

福富といふ新婚者が増えたので、連中の談話は一層賑かに成つて來た。斯の池の端を出て大川端の方へ歸らうとした時、岸本は菅から受取つたものが有つた。

七十六

岸本の母や姉は最早三輪の方で、兄の民助と一緒に暮して居たが、岸本はまだ恩人の家に止まつて朝晩の手傳ひをして居た。其日も、彼は大川端の方へ歸つて、自分の部屋のやうにして居た茶の間に籠つて、菅から受取つたものを開けて見た。それは斯の一月頃から花の時節まで、およそ四ヶ月ばかりの間に、勝子が書溜めた日記體の手紙であつた。あるところは一週間も間を置いて書き、あるところは二三日續けて書きといふ風で、その日〱に思つたことが順序もなく並べてある。例の池の端で邂逅つた前後のことが殊に精しく出て居る。岸本は先づ大體に目を通して、何故勝子が斯樣なものを送つて寄したかといふことを考へて見た。奈何いふ朝晩を勝子が麹町の姉の家に送つて居るか、奈何いふ畏怖や悲哀が彼女の胸の中を往つたり來たりして居るか、それは斯の手紙のあつまりで略知ることが出來た。

更に岸本は一日づつ精しく讀んで見た。彼と勝子とは、丁度同い年齢で、書籍を讀むことだけは彼が教へた方でも、心の持ち方なぞは勝子の方がずつと姉さんらしかつた。斯の手紙で、彼は反つて勝子から教へられた。左樣焦つたり、騷いだりして、一途に思ひ詰めるばかりが、男女のなさけとは言はれまい、物のあはれは、まだ他にある。何故左樣迄思ひ詰めて了ふのだらう、何故左樣無謀なことを考へるのだらう、すこしは自分の心情も知つて貰ひたい——斯う、姉が弟に教へるやうに書いてある。それが日々の女らしい感想を通して、それとなく暗示するやうな風に書いてある。

何故自分の心情は斯う言ひ表せないのであらう。と勝子は又、別に書いて寄した。自分が家に居る時は、朝から晩までしやべりつゞけて居ながら、それで池の端では何事も言ふことが出來なかつた。斯う勝子は書いて寄した。

『盛岡ですか——彼樣な女は仕方がありません、意氣地が無くて駄目です。』勝子の話が出る度に、よく岸本は斯樣なことを言つたものである。其意氣地が無いと言ふ人から、反對に岸本は笑はれるやうな氣がして來た。『どうして、女の方が餘程好く物が解つてらあ。』とある友達に笑はれたこともある。

種々の悲しい境涯を通り越して來た岸本は幾分か他の心情を汲むことも出來るやうに成つた。彼は眞面目に勝子の手紙を讀んだ。而して、すくなくも自分といふものを離れて、女の身の上を考へ始めた。

四月の末、岸本は麹町の學校から卒業式の

案内を受けた。彼は、叔父から貰ひ受けた古い手提鞄――其頃は斯ういふものが流行つて、よく叔父が金を集めに芝居へ提げて行つた――其中へ勝子の手紙を入れて、人に見つからないやうな處へ藏つて置いて、それから可懷しい方角を指して出掛けた。

七十七

其日は過去つた事をいろ〳〵思出させるやうな日であつた。牛込の見附から富士見町にいつて、あの土手の上へ登ると、古い松の樹の間には一筋の細道があつて、其頃はそこを歩いても關はないやうなことに成つて居た。そこから樹木の多い市ケ谷の町々が見渡される。堀に添ふ一帶の平地も見える。土手は低い岡續きのやうに、ところ〳〵擴がつて平坦に成つたかと思ふと、また隆く盛上るといふ風で、道路へ落ちたところは面白い小さな傾斜を成して居る。日の射すところは草が青々として見える。岸本が麹町の學校へ通つた頃は、一時赤城に下宿して居て、斯の土手を往つたり來たりしたのであつた。

土手の盡きたところから、帶坂を上る。靜かな陰の多い坂で、椿の花などが落ちて居る。片側には古い町がある。そこは岸本が氣に入つた坂で必ず通ることにして居た道路であつた。學校へ近づくに隨つて、混雜した記憶が岸本の胸に湧いて來た。門を入ると、庭がある。入口の左右には講堂や應接間がある。入口のところで岸本は頰の紅い二三の笑顔に出逢つた。應接間と敎員室との間には、廊下があつて、寄宿舍から講堂へ通ふやうに成つて居る。式の始まるには未だ早かつたが、準備の爲に多忙しさうな人々が其廊下を往つたり來たりして居た。そこでも岸本は種々な笑顔に出逢つた。面長で、柔和な考へ深い眼付をして、すこし斯う世はなれた男の笑顔にも出逢つた。頭の禿けた、人の好ささうな、笑はないうちから最早ニコ〳〵して居るやうな老人の笑顔にも出逢つた。それから見覺えのある若い人の笑顔にはいくつとなく出逢つた。

『オヽ、岸本さんか。よく來て下さいました。』

斯う挨拶して、軈て多忙しさうに其廊下を通り過ぎた人があつた。長めにした癖のある髮、すこし蒼ざめた廣い額、種々な境涯を經て來たらしい頰、其他斯の人の容貌や風采に顯れたところは、いかにも男らしい沈着を具へて居て、それで何處かに常道を歩みさうもなささうなところが有る。任俠と言つたやうな豪放な氣風と、隱者に見るやうな用心深いところとが、一緒に成つて混つて居るやうにも思はれた。斯の人が岡見だ。岡見は生徒の指揮をする爲に式場の方へ急いだ。

まだすこし時間があるといふので、岸本は鳥渡其學校の門を出て、近くに住んで居る先生を訪ねようとした。先生は最早白髮の老翁であつた。岸本は先生から支那の傳奇類の話などをよく聞かせられたものであつた。

その家へ行く途中で、

『先生。先生。』

と斯う背後から自分のことを呼掛ける人が有つた。長い塀のある邸の角のところで、岸本は振返つた。晴衣らしい鼠色の紋付を着て、そして、急いで追ひかけて來た爲にすこし紅くなつたと言つたやうな、若々しい血潮の頰に上つた色を見た。朝に晩に忘れることの出來ない、大きな、深い光澤のある、女らしい眼が二つ光つた。

七十八

老先生の家を辭して、岸本が學校の方へ引返した頃は、生徒の父兄も大分集つて來て居た。

娘自慢と言つたやうに親達は、其日を晴と着飾つた子供の後に隨いて、各教場を見廻るのもある。廊下の白壁のところには仲の好い友達同志が並んで立つて、何となく名殘惜しさうな顔付をして居るのもある。姉妹のやうに手を引合つて、威勢よく寄宿舍の方へ通ふものもある。其日の卒業生は、普通科二十人ばかり。高等科四人。勝子もその四人のうちに加はつて居た。

男の書生の卒業とは違つて、學校を出れば直に丸髷に成る人もあらうといふ娘達のことだから、斯ういふ若い人々の卒業は何となく青春の時代に別れて行くやうな趣がある。早く卒業して親達の許へ歸りたいと言ふ人はすくない。心細いやうな不安の念は多くの卒業生の胸の中にある。彼等はいづれも母校を去りかねて居る。

市川は菅に誘はれて、一緒に池の端からやつて來た。清之助は傳馬町から來た。斯ういふ晴の場所となると、清之助の服裝が殊に眼につく。彼は、市川が高等學校の制服で居るにひきかへ、羽織袴で隆としてやつて來た。

圖らず連中はこの學校で一緒に成つた。庭へ向いた教員室の窓のところで、互に顔を合せて見ると、青木の見えないのが物足りない。あの吉原あたりの會合で聞いた青木の笑聲を、斯ういふ場所で聞くことが出來たら、と岸本は思つた。其日卒業する若い人々はいづれも青木の教を受けた生徒である。

『青木君は奈何したらう。』斯う市川が言出した。

『さあ、訪ねて行つて好いんだか悪いんだか解らないものだから。』と岸本は眉を顰める。

『細君は成るべく客に逢はせないやうな方針を執つてるネ。』と菅が言つた。

青木のことを考へる度に、何となく連中は暗い背景を有つて居るやうな氣がした。青木は今、全く孤獨である。友達すら訪ねて行くことを遠慮して居るやうな位置にある。それでも、菅、岸本の二人は心配して訪ねて行く方で、斯の學校の校長――關根の紹介で種々な宗教家に逢つたといふことを聞いた。岸本に言はせると、青木は宗教的の生涯に身を委ねようとして居るが、『どうしても僕には、あるものを信ずるといふ氣に成れない。』と言つたとのことである。又、菅に言はせると、友達が訪ねて行く時は温順しくして居ながら、どうして單獨に成ると彼樣狂ひ暴れるだらう、實に不思議だ、全く別の人なやうだ。』と細君が嘆息したとかことである。

菅は岸本の顔を眺め乍ら、『此頃、君と行つた時は暗い部屋に入つて居たネ。』

『さう〳〵。』と岸本も思出したやうに、『どうもこいつが有るからッて、しきりに彼の傷を氣にして居たッけ。』

岸本は咽喉のところを指して見せた。市川、清之助の二人はイヤな顔をした。

斯ういふ談話をして居るうちに、開會を報せる鐘の音が響き渡つた。四人の友達は一緒に式場の方へ急いだ。

七十九

後の方の壁に近く連中は集つた。菅は來賓の中に、若白髪の多い、面長な、洋服姿の人を見つけて、

『千春さんも來てるネ。』

と岸本に私語いた。岸本は菅の方へ顔を寄せて、點頭いた。

若い人達が讀んだ文章の中で、殊に來賓の注意を引いたのがあつたか、その娘が紫の矢絣を着て、帶を立矢の字に結んだところは、何となく傳馬町の涼子を思出させた。小作で、

才氣の溢れて居るやうなところも、其人らしかつた。四人並んで唱歌を歌つた娘の一人は勝子の妹である。送別の辭や歌が始まると、そこゝで鼻をかむ、聲を呑む、送られる方の生徒はいづれも頭を揚げ得なかつた。校長の關根は、いかにも斯らいふところの教育家らしい、謹嚴な風采の人で、柔和なうちにも威のある眼付をして、懇々と勸告の辭を述べた。勝子の答辭と、琴の合奏が濟んで、それから餘興に移つた。

茶菓を配る頃には來賓もそろ〳〵動き始めた。樂しく笑ふ聲、私語する聲が彼處にも此處にも起つた。接待掛の娘はその間を往つたり來たりした。市川は晴の筵に胸を騷がせたといふ風で、もう靜止して居られなかつた。彼は美しい幻影を眼前に喚起すやうにして、低い聲で、しかも力を入れて.

『オヽ、ルシラ、マデライン、リヽアン、マアガレット。』

斯樣な風に、女の名を呼んで見て、笑つた。清之助は市川の笑つたのを笑つた。菅は何か思出したといふ風で、考へ深く眺め入つて居た。恐らく、斯うして多勢集つて來て居ても、箱根に勝る程の人は見當らなかつたのであらう。

餘興には、舊い卒業生も混つた。手力男神に扮して、來賓の方へ顏を見せないやうに出て來た人が有つた。磯子だ。斯の人の雄々しい後姿には天の石屋の戸も開くらしく見えた。『どう見ても男ですね。』と連中の背後で感心して居る人もあつた。手力男神につゞいて、兒屋命、宇受賣命、それから種々な神樣に扮した人が出て來た。神樣はいづれも可羞しいといふ風であつた。眞賢木は竹で間に合せ、その後を石屋に見せた。天照大神には勝子が扮したが、これも竹の葉に隱れて、成るべく來賓へは顏を見せないやうにして居た。問答の後で、神樣達は一緒に唱歌を歌つた。

軈て式は終つた。若い人々は思ひ〳〵に集つた。彼處に一團、此處に一團、大事さうに卒業の證書を持つて居るのもあり、是から將來のことを話すもあり、國へ歸る相談などをして居るのであつた。一人々々離して見ると左程元氣のないやうな娘まで、一緒に集つて居れば活々として見える。群となると、必ずそこには若い空氣が附纏ふかのやうであつた。

菅、市川、岸本の三人は一緒に斯の學校を出た。途次盛んな笑聲が四人の間に起つた。市川は其日の式場で見た人々を數へて、物の本にあるやうな、あはれに驚いたと言つて笑つた。勝子が讀んだ告別の辭の中には、『時といふものにあざむかれ』といふ文句があつた。市川は又、それを言出して、笑つた。

八十

青葉をところ〴〵に見る下町の瓦屋根の間に、鯉幟が立つやうに成つたは、間もなくであつた。岸本の叔父の家でも、一人息子の弘が十一歳を祝ふ爲に、竿を庭の隅のところに立てた。鱗を畫いた魚の形は五月の空に高く掲げられた。

節句の前の日、岸本は本船町の家の方に市川を訪ねた。その邊は紺暖簾の香のするやうなところで、藏造の問屋が軒を並べて、店頭で荷造をするのと、荷車や荷馬車が往來を通るのとで、多忙しく混雜した眺めの町である。酒、砂糖、海苔、乾魚、其他海産物の類が絶えず斯の町を運搬されて居る。藥の簞笥を擔いだ商人も其間を通る。その簞笥の鐶の音を聞くと、最早定齋を賣りに來る季節に成つたかといふことを思はせる。岸本は小僧に案内されて、藥種を置

並べた店の側を通つた。市川の母親にも逢ひ、姉にも逢ひ、いくつか御辭儀をして、路次を突當つたところで若い友達の出て迎へるのに逢つた。

市川の部屋は母屋から離れた二階で、町の響も騒然しく聞えないやうなところに在つた。時々彼は池の端から歸つて來る。而して、斯の二階で物を書くことも有る。其日も獨りで横に成つて、ハタ／＼と鳴る五月幟の音などを聞き乍ら、靜かに友達のことを考へたり、自分のことを考へたり、それから連中が事業のことを考へたりして、何となく寂しい心地で居るところであつた。

「今日はゆつくりし給へ。いろ／＼君に話したいことが有る。」

斯う市川は岸本を前に据ゑて言つた。下婢は茶の道具を運ぶ爲に急な梯子を上つたり下りたりした。

二人の友達は先づ仕事の話を始めた。部屋の外には午後の日の光が輝き溢れて、何かなしに人の心をいら／＼させた。塵埃にまみれた下町の樹木ですら、今は新しい葉を着ける頃で、その青い明い色を眺めたばかりでも、眼を射られるやうな心地のする時である。萬の物は生氣の爲に蒸されて居る、悶えて居る。斯ういふ季節は、若いものに取つて堪へ難い。市川は悩ましい眼付をした。彼は、自分の多感な性質に疲れたかのやうに見えた。

「岸本君、君は奈何思ふね。吾儕はすこし早く生れて來過ぎたんぢや有るまいか。」

斯う市川は言出した。

「さあ――」と岸本も考へる。

「市川といふ男は、西洋料理を食つて反吐をはいたやうだ――斯ういふ難有い批評をある大家から頂戴した。」と言つて、市川はそりかへつて笑つて、「はゝゝ、居候（分）の煙管拜領し、てなことでなければ通らないといふ時世でせう。ダンテ、シエクスピアを持出したところで始まらないやうな氣もするネ。考へて見ると、實にウンザリしちまふ。」

「だつて、君、乗出した舟ぢやないか。」

「なにしろ後から生れて來た者は得だよ。」

八十一

市川は自分の心を言ひ表さうとしたが、適當な言葉も見當らなかつた。彼はこの本船町の二階に寢轉んで、靜かに自分達の爲ることを考へて見たのである。彼には、それがよく見える。同時に、何となく氣勢の盡きて來たことを感ずる。

「實は、すこし弱つてますよ。」

斯樣な風に、氣鋭の市川にはめづらしいことを言つて、刺激の多い五月に堪へがたいといふ眼付をした。

岸本には斯の友達の心境がよく汲取れなかつた。

「弱りもするサ。」

斯う岸本が答へた。

其時市川は寫眞を取出した。それは岸本が八戸へ行かうとした時、一緒に並んで寫したものである。市川は夏の制服、岸本は洗ひ晒しの飛白の單衣で撮れて居る。岸本に取つては悲しい旅の記念である。寫眞としては明瞭した方で、たゞ下部がボカシに成つて居たから、二人とも幽靈のやうに見えた。市川の話では、涼子がそれを評して「枯尾花」と言つたとか。心にくいことを言つたものだと岸本は思つた。

聽て市川は傳馬町のことを言出した。彼に言はせると、逢ふ度に別の人のやうに見えるのは彼の女である。ある時は頬の色なぞも紅味を帶びて、斯うボウと表情に富んだ顔付をして居るかと思ふと、ある時は又、蒼ざめて殆んど血の

色なぞも無いかのやうに見える。——あれほど不思議な人はない。どうして、一日でもラバアがなければ居られないといふ女でせう。」

市川は斯様なことを言出した。

それを聞いて岸本はすこし驚いた。尤も、これは岸本自身にも身に覺えのあることで、誰しも自分の意中の人を賞めて話すものは無い。「盛岡ですか、彼樣な女は仕方が有りません。」と言ふと同じことに聞える。斯ういふ場合には、賞めて居るのか、クサして居るのか、解らない。兎に角、市川はキビしいクサシ方をした。

『わるくすると、君なぞも捕つたかも知れない。』

斯う市川は戯れて、他を嘲り、また自分を嘲るやうにして、笑つた。岸本も笑はずには居られなかつた。

八十二

「岸本君、君は森下といふ男を知つてませう。」と市川が膝をすゝめて言出した。

「知りませんが、噂はよく聞きます。」斯う岸本は答へた。「僕が赤城に下宿して居る時分、彼の先生の兄さんとは一緒に成つたこともある。」

「森下と言へば、餘程評判の人でしたあね。なにしろ、病院へ入つたといふことを聞くと、盛岡で傳馬町か見舞に駈付ける位ですから。彼の先生も、一度退院して、また近頃入つたんださうです。それに就いて種々奇談がある——」

「奇談？」

「まあ、傳馬町が見舞に行つたと思ひたまへ。すると彼の先生が病床に横はり乍ら、口くせ、岡見さん、貴方は死ぬほど愛することが出來ますかッて——」市川は嘲るやうな聲を出して笑つた。「篦棒め、そんなことを聞く奴があるもんか、と彼の眼が言ふやうに見えた。

「傳馬町は何と答へたらう。」と岸本も笑ひながら聞いて見る。

「そこまでは知らないがね。」と言つて、市川は眞面目に成つて、「それからまた、斯ういふ話がある。彼の先生が盛岡の手を執つて、私の愛を受けて呉れませんかと言つたんださうです。其時盛岡が君のことを言つて、實は私には斯ういふ人が有ります、貴方の心に隨ふことは出來ません、それだけは何卒思ひとまつて下さいッて、綺麗に打明けて斷つたとか。はゝゝはゝゝ」

空虚な鯉幟の風に飄る音が屋根の上の方で聞えた。

「盛岡が彼の先生に言つた言葉が面白い。」と市川は言葉を續けた。「ねえ、貴方は獻身的だ、そこが岸本さんに克く似てる、何處か貴方等の間には共通なところが有るッて。はゝゝゝゝ、獻身的！　君、君、そこが嬉しいところなんでせう。」

斯う戯れ乍ら、市川は友達の膝を輕く叩いた。『また始まつた。』と岸本は腹の中で思つて居た。

「最早森下といふ時代ではなくなつて來たんだネ。岸本捨吉、市川仙太といふ時代に成つて來たんだらうネ。」

と言つて、市川は笑ひ轉げた。

勝子の噂はそればかりでなかつた。岸本は斯の友達から胸の躍るやうなことを聞いた。勝子は最後の決心に落ちて行つたらしい。彼女は許嫁の人の前に總ての事を告白して了つたらしい。市川の話によると、『しかし、私は貴方の言ふ通りに成ります。』と許嫁の人に向つて言つたとのことであつた。

「それから家の方でも騷ぎ出したんださうです、許嫁の人が話したんでせう。」と市川は附添した。「多分、父親さんが國の方へ連れて歸るや

ふなことに成るでせう」

八十三

健気な勝子の決心は深く、岸本の心を動かした。麹町にあつた事が直に傳馬町へ傳はつて、それがまた本銀町へ傳はるのは、めづらしくもなかつた。兎に角、黙つて看ても居られないやうなことを聞いた。斯う思つて、やがて岸本は市川の家を出た。大川端の方へ歸つて行く途すがらも、彼はその事ばかり思ひつゞけた。

菖蒲湯があつた。其晩、岸本は濱町のある湯まで入りに行つて、そこで自分の思想を纏めたいと思つた。節句の前の夜で、男の兒と生れたものは居候でも幅が利く、と言つたやうな爽快な氣象が風呂場にすら溢れて居る。湯槽には多勢若い男が入つて居る。可懐しい菖蒲の根の香もする。べつたり身體へ附着いた菖蒲の葉を取つて、それを弄びながら、岸本は槽の縁へ左右の腕を掛けた。彼は市川から聞いた話を心の前に置いて見た。許嫁の人の前にすべてを告白して、「しかし、私は貴方の言ふ通りに成ります」と投出した勝子、それを聞いた許嫁の人、それから起つて來た種々の混雑した光景、結局國の方へ勝子を連れて歸らうとする父親の姿——何もかも岸本は想像することが出來るやうに思つた。あの卒業式の日あたりには、最早そんな思想が勝子の胸の中にあつたであらうか、斯う彼は思ひやつた。

菖蒲湯で身體を洗ひ流して、サッパリとした心地に成つた彼は、自分の部屋へ歸つてから先づ紙を展げた。彼は勝子へ宛てゝ最後の手紙を書き始めた。用心深い老祖母が、寝る前に見廻りに來た頃には、彼が筆を執つて居る最中であつた。襖の音に眼でも覺したかして、復た老祖母は蚊帳を開けて見に來ると、未だ岸本は机に向つて居た。其晩ほど、彼は自分の一生のことを考へたことがなかつた。彼は勝子に對つてもブッキラボウな手紙ばかり書いたもので、また其を以て男性らしいとして居たものである。其夜、彼は初めて自分の心に近い手紙を書いた。しかも、その心は捨てたと書いた。彼は最早勝子を慕つて居るものではないといふことを書いた。今迄の自分は唯彼女を欺いて居たのであると書いた。而して、決心の定つた勝子で、許嫁の人の許へ行くやうに、親の心を安んずるやうに、斯う一氣に書いた。

この手紙は特に封じて、菅の友達から届けて貰ふことにした。

叔父の家では、翌日も高く幟を揚げた。病人を慰め、子供を悦ばす爲に、柏餅も家で蒸した。老祖母の丹誠で、國で食慣れた通りのやつがそこへ出來上つた。味噌のも黄色く甘さうに出來た。岸本はそれを頂戴して、少年時代の記憶に返つた。血の出るやうな手紙を書いた後でも、矢張好な物は甘かつたのである。

河岸にある柳並木の蔭は、岸本が静思の場所であつた。そこへ行つて、彼は自分の書いた手紙が開かれる時のことを想像して見た。彼が旅に出掛けようとした時も、歸つて來てそこで叔父に逢つた時も、今も、隅田川の水は増しもせず減りもせず、同じやうに静く流れて居る。岸本は柳の下で涙を流した。

八十四

菅は勝子からの返事を持つて、わざ／＼大川端まで届けに來て呉れた。

「君はわが心を知りたまはずとのみ思ひしに、今にしてそのあやまれるをおもひ知りぬ。たまはりしふみ、いかに深く、わが心の奥に響きしよ。われはいまは、これを、生のしるべとなさむ。」

これがその手紙の主な文句で、また最後の

離の言葉であつた。猶、勝子はせめてもう一度文通を許せといふ意味を書添へて寄したが、今となつて其をする必要は無い、斯う岸本は考へて、斷然その返事は出さないことにした。

叔父の家の邸內には井戸が二つある。勝手口に近い方からは冷い好い水が湧出して居る。流が廣くて、洗濯もそこで出來る、行德も來てそこで刺身を造る。岸本はその井戸端へ金盥を持出した。どうかすると下女が、『岸本さん、掛けて上げませうか。』と言つて、釣瓶から直に眼の覺めるやうなやつを浴せて呉れることもあつた。斯様な風にして、彼は日に幾度となく、冷い水の中へ燃えるやうな頭腦を突浸した。

五月十五日の晩は好い月夜であつた。十六日の午後、岸本は池の端の下宿を訪ねた。市川は居なくて、菅一人居た。彼はすこし痩せて見えた。

其時、一枚の葉書が舞込んだ。青木操よりとしてあつた。

『駿一こと昨夜死去つかまつり候。とりいそぎおしらせまで申入候。何卒皆様へも御傳へ下されたく候。十六日、朝。』

とある。

青木は死んだ。長いこと二人の友達は相對に成つて、首を垂れて居た。陰鬱な、悲痛な、何んと名のつけやうのない震動が二人の身體を通り過ぎた。その葉書にはことわつてないまでも、二人は青木が自然の順序に因つて滅びたものではないといふことを感じた。早速二人は芝の公園を指して出掛けることにした。

白晝の蛙が不忍の池の方で鳴いた。その鳴聲が五月の空氣を通して夢のやうに聞えた。

八十五

『まあ、よく來て下さいました。』と操は庭のところに立つて、菅、岸本の二人を嬉しさうに迎へた。

『あの御葉書でしたから、拜見する、直に二人で出掛けて來たんです。』斯う菅が氣の毒さうに言つた。

岸本も帽子を取つて挨拶する。

『到頭、宅も亡くなりましたよ。』と操は嘆息した。疲勞と悲哀とで、彼女の顏色は蒼ざめて見えた。

そこは、土地も高燥、樹木も鬱蒼として居て、吾性に適ふと青木が言つた場處である。二人の友達は、やがて操に導かれて、屋の內へ入つた。閑靜な、こぢんまりとした住居で、臺所の方へ寄つた一部屋は別に後から建増でもしたものらしい。そこだけ一段低く成つて居る。そこには人が出たり入つたりして居る。操は二人の友達の顏を眺めながら、隨分骨を折つて看護した甲斐もなかつたといふ殘念な面持で、前の夜のことを話した。白晝のやうに明かつた月の光の靜かさは、青木の魂を誘つたらしい。彼は生の荒廢に堪へられなかつたらしい。庭の青葉のかげで、彼は縊れて死んだ。

『餘程私も氣をつけて居たんですけれど、何時の間にか拔出して行つて了つたんです――』と操は嘆息した。

『昨夜は好い月だつたからネ。』と岸本も思出したやうに。

『しかし、』と操は氣を取直して、『よく彼樣いふ場合には、見つともないやうなことが有るつて言ひますけれど、其樣なことは少許も有りませんでしたよ――それは綺麗な最期でしたよ。』

菅は、左もあつたであらう、と言つたやうな眼付をして點頭いた。

鶴子は母の傍に据ゑられて、おとなしく遊んで居た。漸く獨りで歩く位の年頃で、父の亡くなつたことも知らずに居るらしい。その無邪

氣な、愛らしい顔付が、一層人々にあはれを催させた。

「父さん、ねんね。」

斯う鶴子は片言まじりに言つて居た。

青木の遺骸は暗い部屋の方にあつた。そこは彼が書齋にして居たところで、窓はわざと閉めて、青葉を通して來る光線が僅に戸の透間から射し込んで居る。操は亡くなつた夫の顔から白い帕子を取除けた。二人の友達はその傍へ行つた。見ると、鼻がすこし尖つたといふだけで、愁ひの殘つた青木の死顔は生きて居る時と左様變りがないやうに思はれる。手は胸の上に組合せて、艱難な一生の記憶を掩ひ隱すかのやうに見えた。岸本には、青木が死んだとは思はれなかつた。たゞ友達がそこに眠つて居るとしか思はれなかつた。

八十六

檢死も濟み、棺の用意も調ひ、いよ〳〵青木は十七日の午前に埋葬されることに成つた。目に見えて初めて驚くはうき世の習慣である。其朝の新聞には、今更のやうに青木のことを書立てゝ、よく苦節を守つた、といふ意味が謳つてあつた。斯うと知つたら、何とか法の立てやうもあつたらうに、と親類は來て嘆いた。せめて葬式だけでも立派に出してやりたい、と元數寄屋町の母は掻口說いた。家には家の宗旨もあるが、操が別にしたいといふ願を容れて、親類一同協議の上、青木の葬式だけは耶蘇の牧師を賴むことにした。

生前緣故のあつた人々は次第に芝の公園を指して集つて來た。岡見は大磯より、淸之助は日本橋より、足立と福富とは本鄕より、菅、市川、それから岸本、連中は皆な集つた。千春も來た。栗田も來た。

式は九時頃から屋の內で始まつた。なにしろ狹いところへ種々な方面の人々が集つたので、左樣々々は坐りきれない。中には庭に立つもあり、青葉の下に集るもあり、後れて來た會葬者なぞは谷間の小徑のところに並んで居た。

「浪風の荒きうき世のなかにも
休らふ處はめぐみの寶座なり。
吾等が通る、めぐみの寶座には、
罪も、哀も、消えてあとぞなき。
歡喜の膏油うくべき處は
主の血に潤ふめぐみの寶座なり。
すみかへだつとも主を呼ぶみ民は
めぐみの寶座にて共にこそあらめ。」

讚美歌が起つた。

麹町の學校からは、校長の關根はじめ、青木の敎を受けた高等科の生徒、普通科からも各級一人づつ來た。涼子も傳馬町から來て娘の群に交つて居た。磯子は其頃青森の方で、會葬することが出來なかつたが、彼女の友達は皆なやつて來た。勝子も來た。豐子も來た。

『祈禱いたします。』

斯う牧師が言つて、羽翼を展げるやうな手付をした。人々は思ひ〳〵に首を垂れたり、額のところへ手を當てたりした。

青木の履歷は極く簡單に讀まれた。それが濟んだ後、牧師は棺の側に立つて、哥林多後書の第五章を讀んだ。

菅、市川、岸本の三人は他の友達と離れて、臺所の方へ寄つた一段低い部屋に坐つて居た。そこにも人は一ぱいで、互に膝を突合せる程であつた。

牧師の說敎が始まつた。會葬者はいづれも耳を傾けた。牧師が言ふには、ある人は斯の人生の夢のやうに、果敢無い朝露のやうに思ふものも有る。基督信徒は決して左樣は思はない。

世に益のないものも生存へて、斯ういふ友愛の情に篤い青木のやうな兄弟が死ぬと言へば、いかにも解せないことのやうであるが、神意の存するところは測りがたい。人誰か死ながらん。斯の兄弟のやうに惜まれることを願ふべきである。父、言ふには、別離は一時だ。其靈魂は永久に吾儕と共にある。以て慰めよ。斯う牧師は説いて、青木の一生を葬つた。

八十七

棺は黒い布で包んで、青い十字架を附け、その上に牡丹の花の飾が載せてあつた。祝禱の後、牧師は布を取除けて、棺の蓋を開けた。人々は最後の別離を告ける爲に、其傍へ行つた。而して、順を追つて屋外の方へ繰出した。

市川、菅、岸本の三人も、終に棺の側に立つた。射し入る強い日の光に照された青木の死顔には、最早血の色が無かつた。眼は閉ぢ、瞼は重く垂れて、亡くなつた後までも未だ斯の人の生を冥想するかのやうに見える。感覺の無い額、蒼ざめた頬、それから堅く突出した顎のあたりには、何處となく暗い死の影を宿して居る。それを見ると、腐れ行く肉の可傷しさを思はせる。軈て、その上に蓋をして、隅々は釘で打着けられた。斯うして人足に舁かれて、青木の遺骸が屋外へ運ばれる頃は、母親も、親戚の女達も泣いて見送つた。

會葬者の群は小徑について飯倉の通へ出た。男は徒歩、女は多く車であつた。中には横濱から見送りの爲に出掛けて來た人もあつた。一行は赤羽橋を渡つて三田の通に出、三丁目の角から聖坂の方へ上らずに右へとつて、あれから四丁目を折れ曲つた。豐岡町、松坂町の裏通は、やがて白金へ通ふ樹木の多い道路である。これはやゝ迂回した道順ではあつたが、一番上り下りが少く白金臺の方へ行くことが出來たからで。

其日は初夏らしい暑さの日であつた。強い蔭日向は一行の行く先にあつた。袷時とは言ひ乍ら、歩けば汗が出る位で、我慢がしきれずに洋傘を擴げた人も少くはなかつた。棺の後から随いて行く群の中には、青木が生前政治界に野心のあつた頃、親しく往來した友人もある。宗教の方で深く交つた人もある。よく青木と議論をして喧嘩に花を咲かせたが、一面には親しい友人であつた陶山、それから陶山の社中の先輩で、陶山のことを『鐵瓶』に譬へ、青木のことを『銀の匙』に譬へた人なぞもある。斯ういふ名高い人達の後を随いたり、亡くなつた友達のことを考へたりして、市川、菅、岸本の三人は後になり前になり随いて行つた。途中では、この三人が一番後れた。

三光町から坂にかゝる頃、婦人や子供を乗せた車の列が時々止つた。若い人達が翳す美しい洋傘は、車が動く度に、路傍の青葉に觸れた。これが上りきるまで、待つて居るのは容易でない、斯う思つて、後から行つた連中は白金の方へ其坂を急がうとした。車の上には、涼子、勝子、豐子、それから彼の姉妹の姪にあたる人などを数へることが出來る。岸本は、二人の友達の後に随いて、急いで其側を通り過ぎた。

八十八

軈て會葬者一同は白金の瑞祥寺に集つた、式が式だから、たゞ本堂の側にある大廣間を借りて、そこで暫時休憩することにしてあつた。其時青木の弟は親戚の者と一緒に出て、挨拶して廻つた。一同は、茶を飲み、汗を拭き、といふ風で、扇子の用意の無い人が多かつた。そこでも、こゝでも、白い手巾が扇子かはりに使はれた。

墓地は斯の寺の境内で、幽邃な、樹木の多いところにあつた。混雜に紛れて、何時の間にか岸本は友達に逸れて了つた。彼は樹と樹の間を潜り拔けて、墓地の裏手にあたるところへ出た。そこにも人は集つて居る。古い、大きな石碑はいくつとなく並んで立つて居る。その苔蒸した墓の側に腰を掛けて、青木の死を考へて居るやうな人もある。岸本も同じやうに腰を掛けて眺めた。

山のやうに盛上げられた赤土の上には、次第に人が立つた。手を引合つてやつて來た娘の群は、その邊へ集らうとして、岸本の側を急いだ。岸本は今、後向に立つ若い人々を見ることが出來る。涼子は薄小豆色の縮緬の紋付、其隣に立つ豐子は黒ずんだ色の黄八丈、勝子は薄い御納戸の小紋の紋付を着て、女連の中に交つて居る。左様いふ人々の間を通して、土足で立働く人足の姿が見られる。

「それ入れろ、繩が切れやしないか。」

斯ういふ聲が起つた。穴の中へ棺の滑り落ちる音がした。軈て人足の土を搔落す音が烈しく岸本の腸を打つた、彼は青木の埋められるところを見るに堪へないやうな氣がしたのである。

其時、信徒の群は讃美歌を歌ひ出した。

『短き斯の世の旅の友よ、
しばしは別れて、離るゝとも、
再び相見てともに語らん――
心をおとさで勇み進め。
主の手に縋りて、たゞ靜に
もとゐある城を望みて行け。
靈の戸開きて父は女の
歸るを今かと待ちたまへり、
あとに殘れる女を見やる
心は御國の岸まで行かん。』

「君はこゝに居たのか。」斯う菅が岸本の側へ來て言つた。

『あゝ。』と岸本は答へる。

「岸本さんが見えないが、奈何なすつたらうツて、細君はしきりに君のことを心配して居たぜ。」

と言はれて、岸本は笑つた。二人は人々の間を通り拔けて、墓の前で他の連中と一緒に成つた。

會葬者は水を手向けて置いて、思ひ〳〵に歸つて行つた。別離を告げて歸る傍に、連中も交る〳〵亡くなつた友達の前に立つた。

青木駿一之墓

八十九

葬式は濟んだ。芝公園の住居は急に寂しくなつた。花を携へて青木の墓參に出掛けたり、夫の志を繼いで宗教に身を委ねようと考へたり、半分地の中へ埋められたかのやうに感じたりする頃の操は、最早未亡人である。

野邊送をしてから五日目に、未亡人は元數寄屋町へ來て、例の二階で青木の書いた反古を展けて見た。悉皆後片付をして、初七日でも濟んだら芝の公園を引揚げたい、と思つて居る。夫が着た着物、夫が若い時に書いた物なぞは、操の身に取つて堪へ難いほど可懷しかつた。

ふと手紙が出て來た。それは青木が二十か二十一の年に――まだ〳〵結婚しない前――操へ宛てゝ寄したものである。その中に、貴孃とあるは、若い時の操のことである。「拜啓。」と未亡人は讀み始めた。「親愛なる貴孃よ。生は筆の蟲なりと言はれまほしき一奇癖の少年なり。生は筆を弄ぶことを以て人間最上の快樂なりと思考せり。然れども、時としては此快樂は言ふに言はれぬ不愉快を感ぜしむることもあ

り。そは他ならず、詩文を試みて意想を寫す與はざるの時、書簡を認めて所見を述ぶること叶はぬ曉、精神鬱快として殆んど人事を忘るゝに至る如き、これなり。

生は貴孃の風采を慕ふこといと永かりし、而して親友たるの時日は斯くの如くそれ短し。生は貴孃の親友として世を送るを得ば他に何の求むる幸福あらんや、と曾て思考したりき。計らざりき、此得難き幸福を破つて、遠く貴孃に別るゝの日に迫らんとは。嗚呼天もまた無情なるか。今や貴孃に別れて遠く去らんとするに際し、聊か貴孃に懇願するところあり。そは、生の不幸を聞いてたも、といふ一事これなり。

『貴孃は常に生の幸福なるを祈り給ふ我親友なりかし。然らば、則ち生の不幸を察して心の苦みを慰むる術もあらば是を指し呉れ給ふべき道德上の義務を有ち給ふ御身なるべし。これ生が誰にも語らぬ心中の苦を打明けて、貴孃に書き送りまゐらす所なりかし。抑も生が所謂心中の苦とは何者ぞ。左に生の經歷を述べて、以て其詳細を御話し申さん。

『嗚呼、もし生をして一の大家たるを得る曉ありと念はしめば、生は今に於て自己の履歴を語るの必要なかるべし。生は寧ろ堂々たる自傳を玉の如き名筆もて書き始むべし。然れども其望なしとせば、生は暫時の間おもしろき妄想を持ちたることを隱さず白狀するこそ可けれと思ふなり。實に生の生活は、世の有爲の少年の爲に、一部の警戒書となるべし。生の失敗は以て彼等に示すべし。祕し隱すべきものにあらず。

『生の父は、封建制度の下にありて嚴格なる式禮の間に成長したる人にも關らず、傲慢磊落の氣風あり。されど或る一部分に至りては極めて小心なる所もあり。明治十一年祖父の中風病にかゝるや、直に官を辭して鄕里に歸り、爾後七年間孝養を盡して怠る所なく、是か爲に僅かの財産も消費し去れども意に介せざる如き、其小心なる一例なるべし。又、生の母は、最も甚しき神經質の恐るべき人間なり。一家を修むるにも唯己れの欲する如く、己れの畫き出せる小さき模範の通りに、配下の者共を處理せんとする六ケしき將軍なり。偖、生の神經の過敏なる惡質は、これを母より受け、傲慢不羈なる性は、これを父より貰ひたり。言葉を變へて、これを言へば、丁度五分と五分の血を父母より受けて斯の世に現れたり。』

九十

青木未亡人は讀みつゞけた。

『明治六年、生の父母は生を祖父母に託して東都に去れり。十一年まで五年間、生は全く祖父母の膝下に養育せられたり。斯の貴重なる時日の教育に就き一言せざるべからず。生の祖父は、凡そ世にめづらしき嚴格の人にして、活潑に飛跳ねることを好む少年を懲すの術に苦みたる事、今もしば〱祖母の物語に聞き得る事どもなり。又、祖母は今でこそ至つて溫順なれど、其頃は生に取りて餘り利益を與へしとは覺えず。何となれば、彼女は實の祖母にあらずして、生に對してはまゝ祖母たる人なればなり。生の天性は不羈磊落我儘氣隨なるに、斯のやかましき祖父と、我が利益には餘り心配せぬ祖母との間に養育せられたるなれば、こゝに生が淡泊なる小兒思想は或る奸曲なるむつかしき想像心にからまれて、物事に考へ深き性情を作りたるの事實は決して蔽ふ可からざるところなりとす。其頃、生の最も好みたる小說は、楠公三代記、漢楚軍談、三國誌等にして、日夜是等の小說を手離すこと能はざりし程なりき。又、生の最も喜びたる遊戲は多數の兒童を集めて軍事

を眞似ることにて有りし。生は常に自ら軍師となりて、進退運轉を司りたり。是等の遊戯は、わがやかましき祖父の最も嚴禁する所にてありしにも關らず、潜く快き濱邊の砂上に集りて、彼處の堤、是處の丘を城堡と定め、伏兵を臥す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし智勇を鬪ひ、砂礫を飛して銃丸に代へ、長短の木片は刀槍を代用せり。此遊戯は則ち生の祖父に對する不平を慰すべき單なる快樂にてありけり。然れども、これ以て全く生を慰むるに足らずして、鬱々快々として月日を過したれば、生は最も甚しき癇癖の人物となり、又極めて涙もろく、考へつめてはなか〳〵に愈すべくもあらぬコマリモノと成りたることも亦明かならん。

『何かにつけて、生は涙を零すこと多かりし。又、口惜しくてたまらぬ時は、殆んど正體なく泣き狂へり。

『偖、明治十一年の春となり、我がやかましき祖父は中風病にかゝりて、其性質は全く一變せり。生を叱責するの性は變じて、生を憐愛するの情と成れり。然れども、生は遂に温良なる性質を受くる道には一度も接したる事なしと言ふも不可なかるべし。生の血統中にも、亦温良なる好性質を有つ者は一人も無し。況んや、生の父は傲慢磊落の人にして、生の母は極めて甚しき神經質なるに於てをや。

『生の父母は、祖父を助けんとて東都より歸り來れり。生の活潑なる心に仇することは、母の神經質より甚しきはなし。又、生の母は普通の功名心を抱き、生をして功名を成さしめんと思ふの情切なりければ、毎夜十二時頃迄も窮屈なる書机に向はしめ、母自身は是が看守人たり。また母は婦女子の性として活潑なる擧動遊戯を好まず。生を束縛して殆んどすべての頑童等と交通を絶たしめたり。生の最も苦しく思ひしは、彼の戰鬪戯を成すを得ざることそ。生の諸書——就中、歴史小説を好むや、英雄豪傑の氣風を欽慕し、寢ても覺めても其事ばかりを思ひ續け、いつも己れの一身を是等の英雄の地位に置かんことを望み居たり。且つ又、生は既に考へ深き小兒と成りたれば、諸兒の如く笑ひ興じて愉快に光陰を送るといふことも出來ず、最も爽快にして豪放なる遊戯にあらざれば樂みと思ふこと能はざりし。又、生は父母、祖父母皆な愛情に薄き人々なりと思ひ込みければ、生を親愛するもの一人もなく、人生の價値とすべき所なしと考へ居たり。これ、則ち彼に生をして氣鬱病を發せしむべき最大なる原素なるべきか。

九十一

『こゝに記憶すべき一種の幸福なること有り。そは他ならず、生の母は生が小説を好むの癖あるを嫌つて、堅くこれを禁制したり。もし生にして、依然小説を讀むの權力ありて、全く身を功名心の極度に踏込ましめば、其結果は實に奈何ぞや。もろ〳〵の英雄の少時によくある例なる自死を試むるに至らんこと必せり。

然れども、功名心の病は遂に生の身を誤れり。そは明治十五年に至りて、初めて純然たる病氣の形を顯しけり。

『明治十四年は生が父母に携へられて東都に移りし初年なり。生は東都に移り泰明學校といふ小學校に入りしが、斯の學校は聊か以て生の不平を慰めけり、校長は東京にて第一等の教師と評判せらるゝ程の人にてありし。其人は生の淡泊なる性質を鍾愛し、最も親愛して生を教育せられたり。又、生は人の意表に出づる議論を好みて、文章を作るに愉快、活潑の氣象を顯しければ、卑屈コンたこなる幾多の教師ともほはかに生を敬愛するに至りたり。從つて校

中の評判生の一身に集り、生の最も得意とする功名心は斯の學校の生活には全く其功を奏したりといふべし。斯の年は、國内政治思想の最も燃え盛りたる時なりければ、生も亦その風潮に激發せられて、政治家たらんと目的を定むるに至り、奮つて自由の犧牲にも成らんと思ひ起せり。從來の功名心は悉く斯の一點に集合し、畏るべき勢を以て生の心を支配し始めたり。斯の年は多少生をして愉快に日を送らしむるを得たり。ある日、飄然として家を出で、懷には一錢の金をも持たずして、東海道を徒步し鎌倉に遊びたり。抑も鎌倉は詩人に取りての伊太利の如く、最も生の渴望して一見せんと欲するの土地なりし。何となれば其頃生の日常讀むところは重に日本の歷史にして、其歷史中最も重要の事件は彼の地に於て演ぜられたればなり。又、ある日は獨り千葉地方に遊びたり。生は斯の時滿十三年にも足らぬ少年なりしも、活潑に是等の運動を試みけるは、實に生をして身を誤るの基たらしめたり。生は自ら謂らく、斯くの如く活潑に生活は過行くべしと。何ぞ知らん、未だ一歲をも經ざるうち、生の一身は全く功名心の占領する所とならんとは。

十四年の十二月、小學校の課程を終りて卒業の式を擧げたり。生は是より先、青年社會にありて演說の稽古を成し居りければ、少しは其心得もあるものから、演壇に上りて一演說を試みたる所、意外の好評にて、其座にありし某新聞記者の如きは、その雜報欄内に生を稱して奇童なりといへり。

『十五年は生をして殆んど困死せしむべき程の一年なり。それら不幸の第一着は、わが極めて親愛せる善良の敎師の去つて北海道に行けること是なり。其第二は、生が新に入學したる私塾は實に生をして不愉快に堪へざらしめたり。其第三は、曾て熱心に盡力したる青年黨の面々散り散りに分離したることなどなり。其第四は、政府の擧動漸くをかしくなりて、斯の神經質の少年をして憤慨に耐へざらしむる事少からず。其第五は、生よりも一層甚しき神經家なる吾家の女將軍は、生が活潑に粗暴を交へて動作するをいたく嫌ひて、種々の軍略を以て生を壓伏せんと企てたり。

右等の仇敵は交々生の心中を惱亂せしめたれば、爰に全く活潑なる天性を損ねて、穩着沈默なる、肉落ち骨枯れたる一少年とこそ成りにけれ。從つて又、怯弱なる畏懼心をも釀し、年來艱難に堪へたる功名心をして徒に畏れ懼くことを知らしむるに至れり。

九十二

功名心果して成すに足らざるか、生が生活は何によりて過さん、何を目的として世を送らん、などと考ふれば考ふる程、心を病ましめ、氣を痛め、終日臥床に在りて涙と共に一二月を過し、何時癒ゆべしとも思はれざりし。こゝに至りて生が父は、何の原因より起りし病とは知らねど、氣鬱病とは知るものから、生を放つて地方に旅行せしめたり。これはこれ、生が旅行の嚆矢にして、爾後重に旅行を以て氣鬱を慰むるの機具となしたるも端緒をこゝに開きしなり。

其年五月、生は本鄕なる某義塾といふに入塾せしが、これまた生をして不愉快を感ぜしむるものの一たりし。

翌十六年三月、生は某專門學校に入塾したり。生は常に學問の仕方は自ら修め自ら窮むる禪宗臭き說を持ち居けり。されば學校に在りても、敎科書を調べんよりは數多の書史を涉獵するこそ面白けれと、日々書籍室に入りて漸く鬱を慰め居たり。

翌十七年は生をして一度怯懦なる畏怖心を脱却して、再び功名心の火を燃え盛んならしむるの歳にてありし。此時の功名心は前日のそれとは全く別物にして、名利を貪らんとするの念慮は全く消え、憐む可き東洋の衰運を快復すべき一個の大政治家と成りて、己れの一身を苦め、萬民の爲に大に計るところあらんと、熱心に企て起したり。己れの身を宗教上の基督の如くに政治上に盡力せんと望めり。此目的を成し遂げんには、一個の大哲學家となりて、歐洲に流行する優勝劣敗の學派を破碎すべしと考たり。其考へは實に殆んど一年の長きに渉り一分時間も生の腦中を離れざりし。嗚呼、何者の狂癡ぞ。斯る妄想を斯る長き月日の間包有する者あらんや。

一翌明治十八年に入りて、生は全く失望落膽し、遂に腦病の爲に大に困難するに至れり。然れども少しく元氣を回復するに至りて、生は從來の妄想の非なるを悟り、こゝに小說家たらんとの望を起したり。されど未だ藝術家たらんとは企てざりし。希くは佛のヒュウブ其人の如く、政治上の運動を纖々たる筆の力もて支配せんと望みけり。斯の年、生は各地に旅行し、風景の鑑賞家と成れり。又種々の人間に交際して、人情の研究家と成れり。

『斯の年の暮、生は全く功名心の梯子より落ちて、是より氣樂なる生活を得たり。

『以上、縷述し來りたる生の經歷と性質とは以て生をして自ら小說家たるを得んと自負せしむるに足るものなり。あゝ斯の自負は則ち今生を苦むること一方ならざる曲者にこそ。

『生は既に自ら生活を營むべき身にてあり。銳敏に商政を計るべき一個の無閑暇男兒なり。汝をして小說家となるべき企圖を抱かしめんか、汝は一椀の飯をも得る能はざるべし。しかれども汝が胸中にある小說家と成らんといふ望は遂に奪ふ可からざるものなり。

『嗚呼、これはこれ當今生の暇多き生活に伴ひたる一個の病氣なるべし。生の身は須らく繁忙なる事業に從はしむべし。これ則ち此度生が斷然志を決して、神戸地方に遊ばんとする所以なり。

『我親愛なる操孃よ、斯くまで苦しき生が心根を察し給へ、もし友の情あらば。

『然れども此の病は一時のみ。去つて彼地に着せしを報ずる時あらば、再び光り輝く朝日の下に幸福なる月日を過すと知りたまへ。』

斯の長い手紙は、青木がまた一生の方向に迷つて居る頃書いたものである。讀んで行くうちに、ある處は微笑を、ある處は哀憐の情を、又あるところは言ふに言はれぬ恐怖の念を操に起させた。

『斯の時分から、父さんは狂人だつたんだよ。』と操は獨語のやうに繰返した。其時、夫の友達が訪ねて來た。未亡人は店頭まで出て迎へた。

九十三

菅、岸本の二人は、青木の亡くなつた後を心配して、元數寄屋町まで樣子を見に來た。彼等は未亡人に導かれて二階の部屋へ上つた。そこは青木が若い時に勉強した處でもあり、種々な習作を試みた處でもあり、國府津を引揚げてから以來懊惱し苦悶した處でもある。丁度青木の書いた反古が部屋一ぱいに展げてあつて、その分量の多いことから言つても、二人の友達を驚かした。若い時から書いたものは、奈何なツマラない反古でも保存してあつて、すこしも掩ひ隱したやうな跡が無い。殘して置いては可恥しいと思はれるやうなもの迄も大切に藏つてあつた。二人の友達は、雜誌へ載せたいと言つて、その反古の中を搜つた末、僅に數冊の斷片し

か得られなかつた。面白いと思ふものは、反つて種々な文學上の計畫を書いたものに多かつた。それは青木が胸の中に描いて居たある世界の一部分を未完成の儘に見せたと言つたやうなものである。

　何故青木は自殺したらう。斯の問は二人の友達が答へようとして答へることの出來ないものであつた。世間ではいろ〳〵言囃した。「食へなくて死んだんぢやないか。」と言ふものもあれば、「厭世だらう。」と言ふものもあり、「藝術の上の絶望からだ。」と解釋するものもある。是と言つて死因と認むべきものは、二人の友達にすら見當らなかつたのである。

「何故青木君は亡くなつたんでせう。」と岸本は未亡人にそれを尋ねて見た。

「さあ、私にも解りません。」斯う未亡人が答へた。

　斯の「私にも解りません。」が一番正直な答らしく聞えた。

　其時、未亡人は嘆息して、

「宅では、私にも一緒に死ねと言つたんですよ。私は厭ですッて、答へました。子供が有りますから、私は厭ですッて――」

　妻子を置去にして死ぬといふ法があらうか、斯ういふ心地が未亡人の顏色に讀まれた。何となく彼女は侮辱でもされたかのやうな眼付をした。

　とは言へ、操は直に寡婦らしい追懷の心に返つた。彼女は、生前夫が言つたこと爲たことを夢のやうに想ひ浮べて、それを二人の友達に語り聞せた。「なにしろ、宅は豪放といふ方の人でしたからねえ。」と言つて彼程意氣相許したものを、と其人を惜んだり、「國府津は好うござんしたよ。」と言つて、樂しい同棲の時代のことを繰返したりした。

「是方へ參りましてから、あの刀騒をする前に、幾晩か品川へ通つたことが有りました――あればかりは、奈何しても私に解りません。」

　斯様なことを未亡人は附添して言つた。國府津で、岸本も思出した。彼の海岸を彷徨つて、終に青木の宿へ轉け込んで行つた時のことは、忘れようとして忘れることの出來ない經驗である。彼の時、助けられた自分が生きて、助けた友達の方が死んだ。斯う考へて、岸本は名の付けやうの無い思に打たれた。

『せめて、もう十年青木君を生かして置きたかつた。』

　と菅も嘆息した。

九十四

「左様かなあ、細君にもよく解らないかなあ。」

　と岸本は元數寄屋町の家を出て、菅と一緒に歩きながら言つた。

『何故青木君が亡くなつたと言はれたら、君だつても困るだらう。』と菅が言ふ。

「僕にも解らない。」

「あまり接近し過ぎて居るものには、反つてよく解らないんぢやないか。」

「さあ、左様いふところが有るかも知れないね。」と言つて、岸本は考へて、『青木君が國府津で書いた文章があつたらう、ホラ――あれなぞを讀んだ時に、僕は左様思つたね、青木君は非常に潤い處を歩いてるなあッて。彼様いふ處まで出て來て居るんなら、死ななくつても可ささうに思ふんだ。』

　斯様な談話をして、二人は三十間堀の方へ歩いて云つた。菅は青木と一緒に其町々を歩いた時のことを思出した。其時の青木が言ふには、

見給へ、ペンキ塗りの家もあれば、煉瓦造もある、昔風の日本造もある。今の時代は物質的の革命で其精神を奪はれつゝある、外部の刺激に動かされた文明である、革命ではなくて

移動である、斯う亡くなつた友達の言つたことを思出して、菅はそれを岸本に話して聞かせた。

「左様だ、革命ではなくて、移動だ。」

と岸本も繰返して見た。二人は三原橋の畔に眺め佇立んで、やがてそこで別れた。

青木が奮鬪して倒れたといふことは、連中に取つて大きな打撃であつた。友達は皆な考へた。しかし、仲間中から一人の戰死者を出したといふことが、反つて深い刺激に成つて、各自志す方へ突進まうとしたのであつた。市川、菅、足立、岡見、福富、それから栗田なぞの書いたものは雜誌を賑した。

六月の四日に青木の追悼會があつた。丁度其日は青木の三週忌に當つた。

其頃から、岸本は大川端の叔父の家を出て、三輪にある兄の家の方へ移つた。彼が久し振で母や姉と一緒に住まうとした頃は、やがて可怖しい激しい波濤が家庭の内部へ押寄せて來た。兄の民助は最早家に居なかつた。これは民助が日頃信用して居た男に欺かれて、過つて僞造の公債證書を使用した爲に、鍛冶橋の未決監へ送られることに成つたからで。口煩い世間の人は、種々なことを言つた。しかし岸本の家の者はいづれも民助の善良な性質と、名譽を重んずる心と、すくなくも其日までの正しい行爲とに因つて、民助を信じて居た。唯、民助には、舊家の旦那様が附いて廻つて、人に乘せられ易いといふ弱みがあつた。又、過去の榮華が忘れられないで、やゝもすると虚飾に流れたがるやうなところがあつた。兎に角、豫審の終結を待つより外はない。斯うなると、家の内の混雜は浪打つやうである。忽ち岸本も其浪の中へ捲込まれた。

九十五

三輪の家はもと金座のなにがしが住居で、今で言ふ御用商人の建てゝ贈つたものとやら斯の履歴のある廣い邸宅は、貸金の抵當として石町の大將の手に入つたものであるが、空屋にして置いては荒れるばかりだし、庭の手入も屆かないし、といふところから、買手の付くまで民助が借りて住んだのである。多忙しい身で民助が斯ういふ邊鄙な場處を擇んだといふは、旦那への義理と、今一つは家賃を出さずに住まはれた爲とで、そのかはり手車でも置かなければ商用の便じないやうな位置にあつた。こゝを住居らしくする爲には、家相應な道具も備へなければならなかつた。

岸本の母や姉は簡易な田舍生活に慣れて來た人達である。母が郷里から出て來たばかりの時に、『お秋、』と嫁の名を言つて、『これは皆な虚だぞい、斯様に立派に成つたと思つて、油斷すると宛が違ふよ。』と女同志で話したことが有つた。其時民助も、母の伴をして來た男に向つて、『これは虚でサ――虚ですけれど、斯の虚を實にしようといふのが私の意氣込です。』と言つたことも有る。しかし、奉公人や出入の者に向つては、それでは通らないやうな場合が多かつた。母や姉は、はじめから不安を感じて居たのである。

民助が居なくなる、間もなく山田といふ親類の男が來た。辯護士との交渉、負債の整理なぞは、主に斯の人と、岸本には三番目の兄にあたる幸平との二人に委せてあつた。岸本はまだ年も若し、經驗は少し、それに不慣のことであるから、自分の力に出來るだけの手傳でもして、成行を觀て居るより外に手出しのしやうも無いのであつた。

早速下婢へは暇を出した。まだ車夫の仁太は居る。仁太は可愛い僕で、給料は幾かなくても可いから、旦那の歸るまで置いて貰ひたいと

言つて居る。根岸の小學校まで通ふ民助の娘の送迎から、朝晩の掃除は言ふに及ばず、用事がある度に山田や幸平を車に乘せて彼方此方といそがしく引き廻る。それを仁太は喜んでやつて居る。

家は斯ういふ人々を容れて、まだ大き過ぎる程の構であつた。家内中集つて食事をする部屋だけでも可成廣い。その部屋から土藏の側を通り拔けて、廊下を突當つたところに、別に座敷が二間ある。民助が居なくなつてから、兎角不用心だといふので、その座敷の雨戸なぞは大抵明けずに置いてあつた。

七月のはじめ、岸本は鍛冶橋まで面會に行つて歸つて來た。『暑い、暑い。』と言ひ乍ら縁側のところへ出て眺めると、庭にある蓮池の向うには跣足で御百度を踏んで居る母親の姿が見える。池の邊には稻荷が祭つてある。母親は樹の蔭を往つたり來たりして居た。

九十六

異樣な煙の臭氣は吉原堤に近い屠殺場の方から風に送られて來た。その煙は、水溜のある草地や、畠や、田圃なぞを越して、遠慮なく侵入して來る。風が持つて來る煙のことで、それを防ぐことも奈何することも出來なかつた。

庭の蓮池には蟇蛙が澤山集つて居た。岸本の母親は、その周圍を廻つて、暗い梅林の間を通り拔けて、藪蚊に食はれ乍ら縁側の方へ近づいた。民助の無罪放免を願ふ爲に、母親は御百度參を日課のやうにして居た。陰濕た土を踏む爲か、白い足はすこし腫れて見える。斯の御百度ばかりは、家の者が何と言つて留めても、聞入れなかつた。

『母親さん、行つてまゐりました。』斯う岸本は縁側から聲を掛けた。

母親はいつまでも若い氣象を失はないやうな人であつた。信心深い額の上のところは最早すこし禿げかゝつて居たが、頬の色なぞには未だ艶々とした紅味が殘つて、快活な、働き好な、山國の婦人らしい性質をよく表して居る。初々しい姉はこの母親があるので、僅に氣を引立てられて居る。

『ア、御苦勞さま、今日は奈何だつたい――うまく面會が出來たかネ。』と母親は跣足のまゝで、庭に立つて居る。

『駄目。』と岸本は頭を振つた。『鬮が遲くて、兄さんには逢へませんでした。』

『左樣かい。』

『仕方が有りませんから、差入の方だけ用を達して來ました。朝はパンで可いから、晝と晩だけ辨當にして呉れなんて、兄さんはすこし贅澤ぢや有りませんか。家の方の事情はよく解らないんでせう。』

『左樣言ふなよ。御店でも彼樣言つて下さるもんだから、差入だけはしてやりたい――』と言つて、母親は低聲に成つて、『捨、お前はまだ知らないだらう、明日は復た執達吏が來るさうだよ。』

親子は暫時無言であつた。

其時、姉が土藏の方から出て來た。岸本は斯の姉から財産差押のことを聞いた。今、藏の内で、山田や幸平が道具の類を調べて居ることを聞いた。着類二行李は仁太が石町まで預けに行つたことを聞いた。

差押はこれで二度目である。母親は最早絶念めて、成るやうにしか成らないと考へて居る。

『捨さん。』と姉は物に襲はれるやうな眼付をした。『私はもう、奈何でも可い。持つて行くものは、持たせてやる。』と言つて、深い溜息を吐いて、『宿では彼樣いふ氣象でせう、家の者には何事も話がしてないんですもの、何處に奈何いふ金が借りて有るのかサッパリ解らない。』

最初の差押は、ある辯護士の爲に請人の判が押してあつたからで。それが解けてやれ嬉しやと思つて居ると、復た斯ういふ浪がやつて來た。精悍な大川端の叔母の言草ではないが、岸本の母や姉は赤兒の手を捩られるやうなものであつた。尤も一度浪をかぶつた經驗がある。其日は最初の時ほど周章てなかつた。

其晩、仁太は大きな行李を隣の差配の家へ運んだ。

九十七

差押の光景を見るに忍びないやうな氣がして、翌朝早く、岸本は三輪の家を出た。其日は兄に面會したいと思つて、復た鍛冶橋まで出掛けた。圓は二十番に當つた。何のかんのと言つても、岸本の家の者は民助を大切にして、尊敬と同情とを寄せて居た。斯の心は舊家の家長に對つて目下の者が持つ心であつた。で、獄中の不自由を思ひやるところから、差入物は缺かさずする。辯護士も名高い人を選んで辯護料若干、無罪放免の曉には若干、斯ういふ約束で、石町の旦那から一人、親類から一人、家から一人、都合三人に依頼してあつた。民助の爲とあれば、家の者はいかなる奉公をも厭はなかつたのである。

無事な兄の顏を見て、岸本は家の方へ引返して行つた。門内に敷詰めてある砂利の上を踏んで、玄關前の葡萄棚の下まで行くと、見慣れぬ下駄が四五足脱いである。未だ家の内は混雜して居る樣子。玄關の次の間で、臺所の方から出て來る姉に出逢つた。姉は岸本の顏を見ると、先づ着物の袖で額の汗を拭いた。

『捨さん、到頭來ましたよ。』と姉は執達吏のことを言つて、『隱し立をなさいますと反つて御爲に成りません、私共は職務で參つたのですから、御話があるなら債權者の方へなすつて下さいッて。今日の執達吏は割合に温和しい。そのかはり調べ方のキビしいことと言つたら、疊を剝して見ないばかりサ。』

『へえ。』

『お前さんの本箱も押へられて了つた。』

『僕の書籍なぞは奈何でも可い。』

『着物を押へられるのが、何より私はツラい。』と言つて姉は嘆息して、『罪の無い子供の着物に手でも着けようものなら、それこそ何とか言つて遣らうと思つて居た。お孃樣の物には手を着けません、これは別にして置きますッて、左樣言ひましたよ。』

『最早差押は濟んだんですか。』

『えゝ。執達吏は先刻に歸つた――未だ鬼は居ますよ。』

斯う言つて、姉は奧の方を指して見せた。つかつかと岸本は次の間へ行つた。縁側のところへ出ると、明けひろげた奧の座敷が見られる。そこには四五人の高利貸が集つて、何か密議を凝して居る。

『御親戚の方で何とか成りさうなものですなア。』斯樣な言葉を殘して置いて、軈て高利貸は歸つて行つた。夕方から家内の者は食事をする爲に集つたが、差押の張紙のしてないものは、唯飯を食ふ茶碗と、椀と、箸とだけであつた。岸本は大きなノシメ膳に對つた。その膳の裏にも矢張張紙がしてあつた。

『母親さん、今日は鹽斷ですか。』と岸本は飯をやり乍ら言つた。

『あい。』と母親は答へた。馬鈴薯に白砂糖を添へて、それを母親は菜にして食べて居る。斯うして身體を苦しめるのが子を思ふ母親の信心であつた。岸本がそれを心配しても、昔風の母親は聞入れなかつた。其日の混雜で、夕飯は例刻よりも遲かつたのである。三輪名物の蚊が襲つて來る頃には、物を食ふさへ煩しい。

夕立が落ちて來た。

九十八

隣家の差配で、風呂を立てたから入りに來いと言はれて、岸本は汗を流しに行つた。歸つて見ると、母親は洋燈の下に左の足を投出し乍ら、しきりと灸をすゑて居る。毎日お百度を踏む爲であらう、母親の足には水氣を持つて、押せば指の跡が殘る程に腫れて居る。

『熱。』

と母親は顔を顰めて、燃え盡きようとする火を打つた。新規な艾が復た其跡に盛られる。軈て線香の火が移る。斯うして左の足がいくらか輕くなつた頃、更に右の足を投出した。

斯の母親が子の爲にお百度を踏むのは、今度ばかりではなかつたのである。彼女は郷里に居る頃、岸本の爲にも踏んだのである。彼が默つて長旅に出たといふことは、何時傳はるともなく母親の耳に入つたのであつた。何程彼女が心を傷めたか、何程杏子の爲に無事を祈つたかといふことは、其晩岸本も聞いて初めて知つた。

母親は足を押へながら、『捨、俺はお前に聞いて見たいことがある。』

『母親さん、何ですか。』と岸本は言つた。

其時母親の傍で蚊を追つて居た姉が談話を引取つた。『阿母さんは彼の法衣のことを言つてるんですよ。今日の差押で、簞笥の中から出て來たもんですから――』

『へえ、法衣も差押を食つたんですか。』と岸本は頭を掻いた。

『いつか一度彼の譯を聞いて見たい。』

斯う母親は眞面目に言ひ出したが、岸本は笑に紛らして了つた。九歳に成る民助の娘――愛子は最早姉の傍へ來て眠つた。

其晩はいかにも七月の夜らしかつた。山田と幹平は、仁太が御供で廓の方へ涼みに出掛ける。岸本は獨り玄關のところに寢轉んで、吉原の太鼓の音などを聞き乍ら、勝子のことを思ひつゞけた。夕立の通過ぎた後で、雫が暗い葡萄棚から落ちた。

『アヽ、好い風が來る。』

と母親もそこへ來て寢轉んだ。

『捨、今夜は寢て話さまいか。』

斯う言ひ乍ら、母親は浴衣の裾で足を包んだ。

親子は團扇をバタ／＼させた。その狹い、五疊ばかりの玄關へ、親子二人ぎりで横に成つた時は、誰に遠慮があるではなし、親が勝手に欠伸をすれば、子は子で好きな方へ毛臑を投出した。

『何故母親さん達は出て來たんですか。もうすこし國に居る方が可かつたナア。』と岸本は思出したやうに。

『今に成つて見れば俺も左樣思ふ。』と母親も考へる。『なにしろ、お前、東京の樣子は解らないし、田舍の人は又、手紙でも來れば直に出掛けるものと思つて、彼方でも是方でも招んで呉れて、昨晩は隣家だつたから今夜は私共でお使を上げる。お別れに手打の蕎麥でも食べておくんなんしよや、愛樣も連れて來てなんて、左樣方々で言はれて見れば、一日も早く東京へ出たかつたよ。終には未だ岸本の女衆は出掛けない――何時行くずら、なんて言ふ人がある。それに田舍は口煩い、やあ秋樣は可哀さうだ、なんだあかんだあッて言ふもんだから、俺がお秋を連れて留守居ばかりもして居られなかつたサ。最早お秋は兄さんに渡した、俺の役目は濟んだ、やれ一安心、と思つたのは未だ昨日のやうな氣がして居るのに――』

急に、臺所の方で、誰か食べた物を吐瀉すやうな音がした。母親は身を起した。臺所に居るものは姉より外になかつた。姉の月經は出京

する間もなく成つたのである。

九十九

數日來、家の者は毎日のやうに額を集めた。庭の青梅も色づく頃で、仁太が長い竿を持つて行つて打落して來ると、姉はそれを笊に入れて、見ても酸ッぱさうな果實をそこへ持出して、よく相談事の仲間入をした。

財産差押に次いで起つて來る黑雲は、公賣處分である。それは高利貸側の本意ではなかつた。彼等は民助の事件を長いと睨んだらしい。で、差押だけして置いて、一方では猶豫の模樣を窺ひ、一方では大將や親類から話のあるのを待つて居たらしかつた。家の方で、延期の金を工面して持つて行くと、彼等はそれを手數料として受取る。それが不承知とあらば、元利耳を揃へて返濟せよと迫る。血の出るやうな金を斯うして幾度にも絞られた。

岸本の家で毎日岸本の眼に映る光景は、彼が今迄經驗のないやうなことばかりで有つた。區裁判所へ、出頭に行つて待合所で顏を見合せる人々、番人屋の主、黑服を着た門番、それから暗い馬車に乘せられて裁判所の方へ送られる男女——いづれも彼には別の世界の人のやうに思はれた。次第に三輪の家へ出入する人も少くなつて來た。時折訪ねて來るものがあつても、賴みに成つて成らないやうな人が多い。例へば、周旋屋のなにがし。斯の人に買物を賴めば、頭をハネる位は平氣でする人である。毎時來るのが十一時半頃と極つて居て、遠慮なく晝飯を食つて歸るので、「十一時三十分」といふ符牒に成つて居た。斯の人の子息は風俗改良の方とやら。謂れを聞けば、壯士俳優の見習をして居るとのことであつた。

八月に入つても、まだ猶豫の終結しさうな模樣はなかつた。山田は最早家に居なかつた。忠實な僕の仁太へも、給金のかはりに手車を呉れて、暇を出した。急に家の内は寂しく成つて來た。兄の轉平は失意の人で、ブラ〳〵して居る。母や姉は田舍から出て來たばかりである。そこで岸本は再び麹町の學校へ通ふことにして、家計を助けようと思ひ立つた。

九月の新學期が始まる頃から、岸本の通ふ路は隨分遠かつた。三輪から坂本迄、あの變化のない、平坦な道路だけでも可成ある。あれから上野の廣小路へ出て、切通坂を上つて、猿飴の角から更に本郷の町々を通り過ぎる。神田川に添うて飯田橋の方へ傾斜を下りる間は、最も彼が氣に入つた道路であつた。對岸にある樹木、小石川の方に續く町々の眺めは彼の眼を悦ばせた。九段へは、中坂から上る。富士見町、上六番町は、やがて彼を學校の方へ導いた。

百

勝子は夏休の前まで、一時學校の手傳として來て居て、普通科の生徒に何か教へて居たが、秋の學期の始まる頃から其手傳を辭した。許嫁の人の家は函館にある。結婚する爲にそこへ赴くのは、最早間も無いことのやうに傳へられる。長く都にとゞまるといふことは、彼女の父が許さなかつたのであらう。

岸本と勝子の不思議な關係が、何時までも學校の人の噂に上らずには居なかつた。得たり賢しと言觸らすものがある。年をとつた生徒の眼は皆な笑つた。あの先生は文章が書けるから、必と其樣なことで迷はしたのであらうなどと、まだ年のいかない生徒まで言つた。家が困らなければ、斯樣なところへ教へには來ない、斯う岸本は腹立しく思つた。自然と彼の態度は固くなる。彼が教場へ入つて來る其樣子が、いかにも可笑しいといふので、早速生徒は彼に一種の横道といふ綽名を付けた。

教員室の前にある廊下のところは、寄宿舎から教場への通路であつた。何かある度にそこへ掲示される。時間表もそこに貼付けてある。生徒はよくそこを往つたり來たりした。ある日、岸本が扉に倚つて立つて居ると、勝子は妹の豊子と肩を組合せて、何氣なく彼の前を通り過ぎた。その無言な、姉さんらしい樣子の人を眼前に見て、彼はまだ勝子が都に居るといふことを知つた。

それは東洋の大機といふやうな言葉が繰返される頃のことであつた。その月の十三日には最早大本營は廣島にあつた。平壤の戰は既に戰はれた。日英新條約の報も傳はつた。日々の新聞は殆んど戰爭の記事で滿たされる。それを讀んで發狂する人さへある。文筆に從事する人々、畫家なども多く從軍した。

勝子の出發はその月の下旬であつた。彼女は父と共に一旦歸國して、それから津輕海峽を渡ることに成つた。暇乞の爲に學校まで出て來た日は、丁度菅も居た。岸本は其頃、亡くなつた友達の遺稿を編まうとして、いろ／＼雜誌を集めたり、青木の未亡人から借受けたものを調べたりして、其仕事を心に描いて居る時であつた。其日も、奈何青木の反古を取捨しよう、奈何いふ順序に友達の形見を並べようなどと考へ乍ら、教員室を出て廊下を突當らうとすると、ふと圖書室の戸口のところで勝子に出逢つた。

豊子は岸本が自分の前へ來るまで遠慮して立つて居た。圖書室の机のところには四五人の生徒があつた。

『先生、いろ／＼御世話樣に成りました……』

斯う言つて、勝子は紅く泣腫れた顔を上げた。彼女はまだ何か言はうとしたが、それを言ふことは出來なかつた。

岸本は默つて、御辭儀をして、別れた。

百一

二三日經つて、岸本が學校へ出て來て見ると、勝子の妹は午前だけ見えなかつた。姪にあたる人も同じやうに休んだ。

斯の人々の缺席は、勝子が盛岡へ向けて發つといふことをそれとなく岸本に語つた。其日は氣紛れな風が吹いて來たかと思ふと、パッタリ忘れたやうに靜まつて了ふやうな日であつた。裏庭の垣根に咲き殘つて居た朝顔も最早小さく見えた。岸本は一日學校で暮して、軈て課業の終る頃、菅と二人ぎり教員室に殘つた。

『號外、號外。』

と呼ぶ聲は、振り鳴らす鈴の音と一緒に、時々往來の方で聞える。それを聞くと斯う靜止して居られないやうな、悲壯な感想を人の心に起させる。

『君には未だ話さなかつたね。』と菅は友達の顔を熟視り乍ら、『ひよつとすると、僕は戰地へ行つちまふかも知れないよ。』

斯ういふ菅の眼には不思議な輝きがあつた。彼はある新聞社の知己を通して、通信員として出掛けたいと思ひ立つた。斯の友達の急遽な思ひ立が岸本の胸を打つた。

『菅君は戰地へ行つて、もう歸つて來ない積りぢやないか。』斯樣な風に思はれる。

學校の門を出て、岸本は友達と別れた。彼は菅のことを考へ乍ら歩いた。ふと、朝顔の纏ひ付いた垣根が彼の胸に浮ぶ。縁側がある。部屋がある。書棚の側にはサッパリとした浴衣を着た足立が居る。地味な絣を着た菅が居る。足立の母親が居る。自分も居る。それは岸本がよく出掛けて行つて、種々な談話をしたり、日記なぞを見せて貰つたりした足立の住居である。母親の前にある帯地の類は、菅が垣根に居る人の爲に見立てゝ買つたので、それを自分にも見せ

て、「君はどれか可い」と選ばせたことを思ひ浮べた。家の方の故障で、事は破れても、足立に託して彼様いふ物を贈らうとする菅の情は清く又哀である。まだそれは足立の家の庭の朝顔が盛に咲いて居た頃のことである。斯う岸本は思ひ浮べた。歩き／＼彼は友達のことを考へたが、あの切ない思と、從軍の志望とを別々に離して考へることは出來なかつた。

富士見町の通まで行くと、繪草紙屋の前には、男女が集つて、血腥い戰爭畫を爭つて見て居た。

「北京へ。北京へ。」

と往來する人々の眼が言ふやうに見えた。街火を焚いて祝ふのは何の日だ、それは怒つた眼が言つた。水を打つたやうに鎮まり返つた、眞劍な眼付をした步兵の一隊は、靴音を揃へて、熱狂した傍觀者の前を通り過ぎた。その靴音が遠く聞える頃に、また他の靴音が近づいた。岸本は其間を通り拔けた。彼は青木の遺稿を編む爲に家を指して歸つて行つた。

百二

『秋風蕭條の記。日清の戰爭に世は武士のものとなりぬ。市川學窓に古人を友とし、岸本僧かに餘喘を保ち、余また悄然、ひとり足立の意氣軒昂たるは、何なるまぎれにや、風の便りに聞けば隣家の庭に野花一輪の咲出でしなりといふ。』

斯様なことを菅が書いてから、一年ばかり過ぎた。

明治二十八年の十一月に成つた。支那の俘虜を滿載したガタ馬車が幾臺となく東京の市街を通つたのも、最早二月程前のことである。その隣國の兵士等が馬車の窓から手を振つて、歸郷の喜悦を示した時、こちらも同じやうに歡呼を揚げた群集は、今、平和を叫び乍ら歩いて居る。其年の地方の收穫は平作以上に豫想される。本郷切通の坂を往來する人々の顏にも何となく喜悦の色がある。土の上には影が動いて居る。日は坂の上の空氣と塵埃とを照して居る。勝手の道具や、柳行李や、それから大きな風呂敷包などを積み載せた荷車の後に随いて、丁度上野の方から坂へかゝつた人力車がある。荷車は右へとり左へとりし乍ら、本郷臺へ向つて上つて行つた。人力車も徐々随いて上つた。車の上の人は萬感こも／＼胸に迫るといふ風で、人目も憚らず男泣に泣いて、傍へ來て何か手付をして見せた立ン坊のあるにも氣が着かずに居た。

斯の男が岸本である。彼は今、三輪を引拂つて、湯島に見つけて置いた新しい住居の方へ移らうとする途中である。

坂の中央で岸本は麹町の學校の生徒に逢つた。生徒は彼の顏を不思議さうに見て、意味もなく笑つて、軈て挨拶し乍ら車の側を急いで行つた。

過ぐる一年は、岸本に取つて忘れることの出來ないほど艱難な年であつた。其間に彼の母親は乳癌を煩つて、病院へ入つた。手術を施して間もなく愈るには愈つたが、彼を養つた乳房は其爲に袋ごと拔き取られた。母親の胸のところには最早片方しか垂れて居なかつた。其間には又、年老いた伯父が郷里から出京して、家の整理をする爲に逗留して居て呉れた。伯父は半年程三崎に居た。正直で氣短な性質から、よく家の者と衝突した。終には、最早オマイタアの許へは、奈何な事があつても出て來ないぞ、と入齒を動かし乍ら怒つて歸つて行つた。斯の伯父の居る頃、姉は愛らしい男の兒を産落した。寒氣の乳を吞ませたとやらで、生れる間もなく其兒は亡くなつた。幼い遺骸は隣の寺の墓地をかりて、芭蕉の樹の蔭へ埋けた。背に腹はかへられなかつた。諸方から集つて來た香典は大

抵家の者が食つて了つた。

それはかりではない。差押へられた財産は何時までも封紙の儘で居なかつた。岸本の家は到頭破産の運命に逢つたのである。母親が丹誠して縫つた衣類なぞは多く其時に失つた。それでも無くて叶はぬ日用の道具は、公賣の當日、知合の道具屋に頼んで買戻して貰つたので、其が今荷車に乗せて運ばれて行くのである。

湯島の家は俗に大根畠と稱へるところに在つた。岸本が荷車と一緒に着いた頃は、母も、姉も、幸兄も、それから愛子も、皆な最早新しい住居に移つて居た。

百三

大根畠は麹の香のする町で、上麹、白米と記した表障子、日あたりの好い往來の側に乾並べた桶、軒下に積重ねた松薪などの見られる場處である。そこは湯島四丁目の淺い谷を隔てゝ、神田明神の杜を望むやうな位置にある。

「捨叔父さん。」

斯う愛子が呼んで、荷物と一緒に着いた岸本の傍を通り過ぎた。仁太の居る頃には車で學校通をする程大切にされた娘も、今は豆腐を買ひに遣らせられるといふ境涯にある。愛子は前垂の下に味噌漉を隠して、可羞しさうに駈けて行つた。

三輪から持つて來た道具は新しい住居に似着かなかつた。銅壺の附いた長火鉢は中央の部屋の隅に据ゑられたが、斯の借屋で見ると可笑しいほど大きかつた。とは言へ、家内一同が其長火鉢の周圍へ集つて、食事をしながら互に顔を見合せた時は、何となく自分等の棲らしい處へ移つて來たやうに感ぜられた。快活な母親の笑聲は、急に際立つて高く聞えた。どうかすると狭い往來へ響き渡つた。都會の婦女のやうな低い優しい聲を田舎者に出せと言ふ方が無理だ、斯う言つて母親は笑つて居たが、それでも出京の當時に比べると餘程低く優しくなつた分である。第一、近所迷惑だ。そこへ母親も氣が付いて來た。

不幸にも、民助はまだ歸ることが出來なかつた。姉は夫の身の上を案じ煩つて、時々茫然と考へ込む。「姉さん、穴が明きますよ。」とよく岸本が長火鉢の側を撫でたものである。

寄ると觸ると、家の者は民助の噂をした。公判は其年の八月にあつたが、可恥しい服裝もさせたくない、と姉が言つて、黒絽の紋付羽織を差入れた。それを着て編笠を冠つて、裁判所の廊下のところへ引かれて來た兄の有様は、まだ岸本の眼前にある。廊下の兩側には、石町の大將、小川町の叔父、それから其他自己の人々なぞが並んで立つて居た。民助は黙禮して其間を通り過ぎた。法廷に立つた民助の彼姿は、他の囚人のやうにサルビレたものではなかつた。兄はどこまでも情の人である。假令法律上有罪の宣告を受けても、猶弟等は兄の爲に泣き、兄の爲に辯解をしたいと思つて居る。間もなく民助は控訴をした。その裁判はまだ開かれずにあつた。

二階が一間あつた。そこを岸本は自分の部屋にした。彼自身の上から言つても、過ぐる一年の間には種々な苦い經驗をした。又可恐しい打撃を受けた。打撃といふは他でもない——勝子の死である。

百四

勝子の死が岸本の耳に入つたのは、二月程前のことであつた。岡見兄弟は早く報知を受取つて居たのであるが、岸本へは話さずに置かうといふので、知らせなかつた。夏休の終る頃、麹町の學校へ寄つた時、岸本は寄宿舍の舍監から初めて其話を聞いた。『安井さんのことを

御存じですか、と舍監が勝子の姓を言つて尋ねるから、いゝえ、と岸本の方で答へると、舍監は『最早御忘れに成つたかも知れませんが、』と言つたやうな調子で、それとなく岸本の顏を眺めて、安井お勝さんといふ生徒が御座いましたらう――彼の人も亡くなりましたよ、」と種々な人の噂をする序に言出した。それを聞いた時は、思はず岸本も紅くなつた。他の生徒とは違つて、妙に勝子のことは尋ねにくい。何日亡くなつたか、奈何して亡くなつたかとは、確めかねたのである。その歸途には、地が隆く持上つたり、空が黃色く成つたり、そこいらに在る物の象がグラ〳〵揺いて見えたりした。

秋の學報を手に取るまでは、それが事實とも思はれなかつた。大川端へ出掛けて藥研堀の緣日を見に行つた夜なぞは全く夢のやうである。灯と、煙と、草の香のなかに、新婚の人々が私語を聞いた時、思はず岸本は胸を躍らせた。勝子は斯の世に生きて居る、としか彼には考へられなかつた。

學報は岸本の夢を破つた。

學校日誌に、『八月十三日、麻生勝子氏忽然永眠せらる。其の十日前來着の書面には、差したることもなしと有りしに、俄の事とて人皆な驚かざるはなし。勝子氏永眠の報あるや、直に校長より弔辭を送られ、又、葬式場へ向けて左の電報を發せられぬ。式場にて教師某氏より披露ありしと。マメヤカニテマコトアリサイアリシカツコヲウシナヒフカクカナシム。

――其後、兄安井氏、父なる安井氏、來校せられ、厚く生前の謝辭を述べられたり。又、麻生氏より禮狀ありて、勝子生前學校負債のことをいたく憂ひ、家計を節して貯蓄し、僅かづつ預けありしものをとて、金六圓寄贈せられたり。』

勝子の姉から關根校長へ宛てた手紙には、委しく彼女の臨終の光景が述べてある。

『七月二十四日、當地へ安着いたし候。』と姉が書いた。『翌二十五日、勝子を訪問し病狀相尋ね候ところ、別段心配するほどには相見え申さず。姙娠の有無を尋ね候ところ、いまだとの事故、養生の注意を加へ歸宅いたし候。其後、兩三度尋ね候へども、いつも〳〵追々快方とのみ申し居り、日頃の色なども至つて鮮やかにて、病人とは見え申さず候。されど終日病床を離れずとの事ゆゑ、こゝろひそかに心配いたせしのみ。八月六日、召使ひのものに手紙を持たせ、氣分よければ人力車にて遊びに參るべきやう申しつかはし候ところ、兩三日中に徒歩にて靜かに來るとの返事ゆゑ、心待に待ちしところ、九日の午前九時頃、麻生より使ひにて、勝子病氣惡き故直に來るべしとの報に驚き、使ひの者に尋ねたるも一向に要領を得ず。早速參り候。

――勝子は眼の色かはり、姿も心も平常とちがひ、小兒のごとく無邪氣なることのみ申し居り候ゆゑ、あまりのことに胸つぶれ、悲しみ滿ちて涙も出でず候ひき。病院長も參り診察いたし候ところ、案外にも覺束なしとの答、奈何して斯くまで變化の速かなることと院長に尋ね候へども、姙娠のため――ツハリとかが烈しく、自然に體の弱りしため心臟病を引起せしとのことに有之、それに神經の鋭敏なるため六ツかしきよし申され候。

『此上は迚も人力の及ぶところに無之、神の攝理に任せ候より外なし』と、心ひそかに祈り候。其日は唯小兒の如く、種々由なき物語して、夜も靜かに寢ね候由。翌十日、朝、參り候ところ、よく〳〵眠り候ゆゑ、兄と私とにて勝子の兩手を持ち添へ居りたるに、目を覺まし、兩人の手を強く握り、嬉しとていたく泣きけるゆゑ、互になぐさめて眠に就け申し候。[illegible]日までは、コレラにつかれしゆゑ人々去り給へ、神樣

と共に居れば淋しくない、看病うけても見ぐるし時は死に、生きる時は全快します、オヽ神よ我を助け給へ、など申せしが、また靜かに成りたる時は、相變らず眞に親切な言を人々に吹聽することゝ、自身死後——後事の周旋など依遣な、兄姉に依頼するなど、暫時も傍をはなさより離さず候ひし。十一日は、私小兒病氣のため、心ならずも見舞なかね、召使に兩三度樣樣を尋ね候ところ、同日午後より無言に相成候との音信ゆゑ、十二日午後、病兒を召使に託し、三時頃參りたるに、とんと容體變り、唯々呼吸するの外、いと哀の姿に成り、熱度烈しく、斷えず氷にて頭を冷し居り候。八時頃、僅に閉おられし舌ほどけて二言三言 それは最後の言葉と、後になりて思ひ申し候。

一終夜看病いたし、十三日、午前、四時頃スウプならびに牛乳等を食し、心地よく寐ね候ふゆゑ、脈を調べたるに前日とは大違にて、よく調子揃ひ居り候。素人の悲しさ、病輕く相成候ことと、兄と共に喜び、兄は母の旅行を心配して歸宅——國元母に危篤の電報せしところ、翌日出立せしと報知ありしに、豫定より二日後れ來着なきゆゑ、問合中——それより十分ばかりも經ちし時、スヤ／＼眠る顏のいつもに違ひしやうに思はれ、勝子々々と呼び候ところ、大きく丸き目を見開き、ニコリと笑ひ、何か物言ひたげに口動かしながら呼吸一時に止り、私の顏を見つゝ一時半頃……

『母は勝子永眠後、一時三十分ほどに着いたし候。勝子永眠後、麻生の悲歎失望、極に達し、實に哀にて氣の毒に御座候。毎日々々の墓參、世を味氣なく思ひなし病氣など引起し申さずばよきと、心痛いたし居り候。』

百五

『苟くも何事か爲ようといふ男兒が女子の一人や二人位葬つたッて何だ。』とは市川が元箱根の宿で岸本を激勵ました言葉である。岸本は今、あの友達の言葉を借りて、自分で自分を激勵まさうとして居る。『何だ、これしきの事に。』と言ひ乍らも、何時の間にか彼は茫然考へ込むやうな人に成つて居る。

友達仲間は彼の爲に心配した。殊に年上の足立は、勝子が結婚の當時、長い手紙を寄よこして、『そんなことに弱つて奈何する。』と勵ましたり、『君はあまり自分を責め過ぎる。』と教へたり、逢へば又、『むゝ、大分飄逸なところが出來た。』と言つて見せたりして、もうすこし別な心の持ちやうも有りさうなものだ、世間を見よと忠告して呉れる。それは岸本も心に感謝して居る。奈何せん、彼には自分で自分の自由に成らないやうなところが有つた。自分は弱くて情ない性りでも、左様は許して置けないやうなものが有つた。『三輪の因縁』か、それにつけて、觀念する傍から、誰も彼は安心した人のやうに成つて居たのである。

斯ういふ岸本は、勝子の死を聞いて、餘計に沈んで了つた。どうかすると、働く氣も何もなくなつて了ふことが有つた。時々彼は身の運を眺め廻した。母がある、姉がある、不幸な兄がある、愛子がある。彼が働かなければ、斯ういふ人々は食ふにすら困つて來る。そこで心を取直して、兩手で自分の顏を紅くなるほど摩つて、また錢取に出掛ける氣に成る。

湯島に移つてから、麹町の學校へ通ふのは餘程樂に成つた。昔の人が居た場所と思へば、その建物も可懷しい。教員室の窓のところには、各年の卒業生の寫眞がある。それが額に入れて、並べて懸けてある。白い、冷い壁も、背景として懷かしく見える。よく岸本は其額の前に立つた。

今は生徒も若い人の時代に成つて來た。ある

日、岸本は食堂で辨當をつかつて、それから廣い講堂を通らうとすると、玻璃窓の外には多勢生徒が集つて、思ひ／＼に晝休の時を送つて居る。打球の音も靜かに聞える。窓のところには二三の生徒が倚凭つて庭の方を眺めて居る。立絣の紺を着て、その後に立つ人は豐子である。豐子の着て居るものは、曾て可懷しい人の身に纏うたものである。

其時、豐子は岸本の姿を見つけて、彼の傍へ微笑み乍ら近づいた。

『先生。』

と親しげに言つて、やがて袂の中から書いた物を取出した。それは、懷舊といふ題で、亡くなつた姉を悼んだ文章であつた。

『先生、何卒これをお直しなすつて下さい。』

といふ豐子の可憐な眼付には、何處かに姉を思出させるところが有る。『何と思つて、斯樣なものを自分の許へ持つて來たらう。』斯う岸本は躊躇して、未だ行方も知らずに居るやうな、無邪氣な娘の眞を讀まされた。彼は自分の妹の顏を眺めるやうな氣がした。

百六

ます／＼岸本は無口な人に成るばかりで有つた。口で言へないことは、せめて文章に書いて表白さうとした。彼は種々な文體を試みた。小說、戲曲、論文、それから新體詩までも試みた。一つとして自由に表白せるものは無かつた。

其年の十二月、脚氣で弱つて居る姉を連れて、岸本は上總の方へ旅行した。横濱から汽船で富津へ着いて、小久保といふ漁村に姉を殘して置いて、房州小湊にある日蓮の生地を見る爲に鹿野山を越えた。石塊の多い山道で、崖の下には谷川の流れがあつた。其時、彼は路傍の石塊を拾つて、崖の上から落してやつた。其樣なことで自分の一生の方向を卜はうとしたこともあつた。もし石塊が河の中へ落ちるやうであつたら、文藝の道路を進まう。途中で止るやうであつたら、全く方向を變へて、他の職業の中に埋沒れて了はう。斯う思ひ迷つた。石塊はごろ／＼轉つて落ちて行つたが、一つは河を越して向うへ落ち、一つは河の中へ落ち、一つは河まで行かずに手前で止つた。結句奈何して可いか解らなかつた。

富津から歸路の舟には又、忘れ難いことがあつた。赤黒く日に燒けた船頭の親子が嚴肅な顏に力を籠めて、勇しい掛聲かなんかで艪を押した。それを見た岸本はいかにも男性らしい氣魄と精力とを感じた。而して、自己を顧みて、可恥しく思つた。自分も一つ斯の船頭の親子のやうに、全力を出して事業をして見たい。斯う可羨しく思はないではなかつたが、奈何しても彼には全力を出すといふ氣に成れなかつた。悄然として、其實意氣沮喪しながら歸つて來た。

彼是するうちに、其年も暮れた。足立は二十八、菅は二十七、岸本は二十五、市川は二十四、福富は二十三に成つた。岡見はとつくに三十を越えた。

復た／＼柳の條から黄色い花の落ちる時節が來た。

三月の下旬には、岡見は磯子を迎へて、一緒に大磯に籠つた。長いこと病床に横はつて居た彼女も到頭不歸の客と成つた。この少壯な宗教家は[illegible]で死んだ。

檢定試驗に合格した足立は、ある地方の中學から聘せられて、遠からず任地を指して赴くといふ。しばらく岸本は年中に會はなかつたので、先づ足立を訪ねる積りで、根岸の家を出た。低い出格子の窓のある住居には、自筆で是

立弓夫といふ表札が出してある。入口の格子のところに立つて訪ねると、足立の母親が出て挨拶した。生憎友達は居なかつた。
　多分池の端であらう。斯う思ひ乍ら、岸本はある邸の塀について無縁坂を下りた。不忍の池が見える。

百七

　池の端と言へば、飛んでも行きたい場所のやうに以前には思はれて居たが、次第に岸本の足は進まなくなつて來た。行つても話が出來ない。話が出來ないから面白くない。毎時默つて引下がつて來る。『君は寄席でも聞いて見たら可からう。』などと言つて菅が笑つたのは、あまりに岸本が沈んで了つたからで。
『——菅君といふものは、めつきり男をあげたよ。』
　斯う市川が相變らずの調子で言つて、大學から出る雜誌を展げて居るところへ、丁度岸本が訪ねて行つた。
　戰爭の當時、從軍したいと言つて居た菅が、話の纏まる頃には最早平和の世であつた。彼は試驗に合格して、今は大學の選科に居る。そこで英吉利文學を研究して居る。高等學校の制服を着けて居た連中も、今は角帽に金釦といふ姿で、各自志す方へと向ひつゝある。福富は文科、栗田は醫科、岡見の弟は工科を擇んだ。市川は福富と一緒に進むべき人ではあるが、一時日課を放擲した位で、高等學校を卒へずに退いた。彼は別の方角を取つて、福富や菅と歩調を合せようとして居る。
『機運遂に止むべからず。』
　と言ひ乍ら、市川は手に持つた雜誌を繰つて見て、やがて福富が書いた文章の一節を節面白く讀んだ。
「ピウス二世が法王の位に上らざりし時、其甥に送るうちに、「少年の時はめでたきものなり、人生の五月も歡ばしきものなり、されど學藝はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし
　市川は岸本の顏を眺めて、味深さうに、其文句を繰返した。
『されど學藝はそれよりもめでたく、知識はそれよりも歡ばし——はゝゝゝ。僕は矢張斯の主義だ。』
　菅は市川に同意を表した。『岸本君の旗色は、どうもすこし鮮明でないやうだネ。』
　と言はれて、岸本は頭を垂れた。彼は何か言はうとしてグッと詰つて了つた。唯彼は肩を搖つて居た。
『しかし、皆なが皆な同じやうに成らなくツても可からう。一人位は遊んでる者が有つても可からう。』
　到頭斯樣な風に言出した。
『そんなら其で可いサ。』と市川は岸本の方へ頭を突出して笑つた。『左樣いふ意氣込が有るなら、まだ賴もしい。』
　岸本はまた無言に返つて、深く思ひ沈んで居る。
　聰慧い市川に言はせると、今は奈何いふ時世であるかを考へねばならぬ。十年二十年の後に成つても、見られるか奈何か解らないやうな青年の夢を、今が今見ようとしたところで、左樣は世間が許さない。それよりは靜かに學問でもして、傍ら藝術を樂まうではないか。それが遙かに高尚な生涯ではないか。斯う岸本に說き聞かせた。
　菅は諧謔半分に、
『君は彼の時分に死んで了つた方が可かつたよ。』と笑つて、舊からの學校友達を憐むやうな眼付をした。『彼の時分』とは岸本が旅に居た頃のことである。

百八

『青木君が生きてたら、今頃は何を爲てるだらう。』と市川は四方八方な話を續けた。

『さあ。』と菅は受けて、『何を爲てるだらう。新聞でもやつてやしないか――しきりに新聞をやつて見たいツて、左樣言つて居たからネ。』

『それとも、ずつと芝居の方か。』と市川が言ふ。

『ちよつと先生も困るだらうよ。』と菅は考へて、急に氣を變へて、『足立君はあまり先生には感服して居ないんださうだ。』

岸本は默つて二人の談話を聞いて居たが、急に其時眼を瞑つた。彼はある物の閃光に觸れたやうな眼付をした。而して何か思出したやうに、嘆息した。

『左樣かなあ。』

と彼は獨語のやうに言つて居た。

床の間に立掛けてあるシエレイの畫像も、今は以前程の興味を引かないといふ風で、何となく後の方へ死んだやうに見える。亂れた髮の毛、大きな眼、開け展けた胸のあたり、畫としての缺點が眼に着く。畫像は頭の方を傾けて、三人の談話を聞いて居るかのやうにも見える。

『福富君は文藝復興期の研究ですか。』と岸本が聞いて見た。

『福富君？――』菅の眼は輝いた。『最早其樣なところは通り越して居らあね。』

『へえ。』と岸本は間の拔けた調子で、『何を先生は研究してるんですか。』

『ずつと新體さ。』と菅が答へた。

斯樣な調子で、岸本は他の友達に置いて行かれるやうな氣がした。皆な自分のやうに愚圖愚圖しては居ないと思つた。それでも彼は以前と同じやうな心地に返りたいと思つて、話頭を戀愛の問題へ向けて見る。

菅は最早其樣な話に飽き飽きしたといふ風であつた。『未だラブの話か。』と彼は顔を顰めた。『ラブなんてものは、其樣に大騷ぎする程のものぢやないんだネ――畢竟、飯を食ふやうなものサ。』

『はゝゝゝ。』

と市川は反返つて笑つた。

其時菅は、細く眼を瞑つて可かつたと言つたやうな眼付をした。彼の眼前には、何時までも同じ境遇に屈託した、醉生夢死して行くやうな昔の友達が、頭を垂れて思ひ沈んで居た。――虐げられたといふ髮は成た長く延びて、青白い額のところに垂下つて居る。その岸本の姿を眺めると、菅は空想家の末路を見るやうな思がした。

市川は笑つて、『世の中のことは、太くて短いとか、細くて長いとか、まあ其二つなんだけれど、岸本君のは――』と言ひかけて、急に菅の方を見て、『菅君のは太く短い方だつたね。』

『他の事ばかり言つてらあ。』と菅も笑つて、『左樣いふ君のは、何だい。』

『僕かネ。まあ細く長い方だらうよ。はゝゝゝは。』

百九

其時菅は白い紙紗に包んだ物を取出した。それは岸本が西京の峰子から贈られたといふ懷劍であつた。

『二三日前に木挽町へ寄つたら、斯樣なものが出て來たよ。』と言つて、菅は微笑んで、『隨分長く預かつてたネ――最早これは返しても可からう。』

とその懷劍の品を友達の方へ押遣つた。漂泊の記念は斯うして再び岸本の手に戻つたのである。それは岸本が鎌倉から出て來て八丁堀の方へ、

發たうとした當時、本郷町の家で菅に預かつて貰つたものである。

『一體何だね、これから堤さんの許へ出掛けて見ないか。足立さんも行つてるかも知れないよ。』

斯う菅が言出した。

よく女の力で支へられて居る家庭が世の中には有る。左樣いふ家庭には、よし男が有つても意氣地が無いとか、働が無いとかで、氣象のしやんとした人は反つて女の方に見受けられる。堤の家も矢張左樣いふ風のところであつた。そこには堤姉妹が年老いた母親にかしづいて、侘しい、風雅な女暮しをして居た。いづれも苦勞した、談話の面白い人達であつたが、殊に姉は和歌から小說に入つて、既に一家を成して居た。この人を世に紹介したのは連中の雜誌で、日頃親しくするところから、よく市川や足立や菅がその家を訪ねたものである。で、其日も菅は岸本を誘つて、市川と三人連で出掛けようと思つた。

飄逸な、心の置けない堤姉妹の家ですら、岸本は默つて、皆なの談話を聞いて歸るばかりである。何處へ行くのも氣が進まなかつた。

『まあ僕は止さう。』と彼は言つた。

『そんなことを言はないで、一緒に行つて見給へナ。』

と菅がしきりに勸めたが、到頭岸本は行く氣に成らなかつた。

市川は起つて帽子を冠つた。

『もう少許からツとした事は有りませんかねえ。』

と彼は堤の姉の言つた言葉を繰返した。間もなく三人は一緒に斯の宿を出た。

不忍の池の畔で友達と別れて、岸本は獨り大根畠の方へ歸つて行つた。途次彼は友達の言つたことを思ひ浮べた。而して、互に若い生命の萌出した時分には、同じやうな氣分で居たこともあつたが、梅は梅、柳は柳、といふ風に、最早別れ〳〵の人に成つて行くのであらうかと考へた時は哀しかつた。三月下旬とは言ひ乍ら其日は寒い日であつた。ポツ〳〵落ちて來た。

百十

濡れ鼠のやうに成つて、岸本は大根畠の家に近づいた。霙にでも變るかと思はれるやうな、寒い、冷い雨に打たれたので、帽子と言はず、羽織と言はず、全身は雫である。格子戸の内に驅け込んで庭の處に立つと、母親が直に見つけて[illegible]、母親は岸本を[illegible]乾いた手拭で頭を拭いて呉れる。泥に成つた足袋もそこへ脱ぎ捨てさせる。

『お前、足を洗はなくても可いかい。』母親は[illegible]子の姿を眺め乍ら尋ねる。

『捨さん、水を進げませうか。』と嫂は臺所の方から聲を掛けた。

岸本は着物を脱ぎ更へたり、雨に濡れた顏を拭いたりしたが、さあ身體は蒸々する、手は熱る、額のところからは汗が湧くやうに流れ落ちた。

『母親さん、濟みませんが飮む水を下さい。』

と岸本は長火鉢の傍に坐り乍ら言つた。母親は岸本の爲に冷水を汲んで來た。その薄紫色の水呑コップも華奢な[illegible]時代の形見である。岸本は目の醒めるやうな波立の冷い水を舌打して飮んで、漸く渇いた咽喉を濕した。

雨が降り込むので、表に向いた部屋の戸は閉めてあつた。幸平兄はその暗い壁に近く寢轉んで居る。愛子はその側で餘念もなく手毬をついて居る。

『オヽ、捨さん、お歸りか。』

と幸平はすこし身を起して言つて、復た仰向に寢轉んで了つた。斯の失意な、不幸な兒は、

最早働からといふ氣がなかつた。たゞ〳〵弟の食はせて呉れるに任せて、一生を運命の弄ぶまゝにして居る。

「母親さん、僕は最早麹町の學校を辭めようと思ひます。今日菅さんの許へ行つて、つく〴〵左様思ひました。斯様に愚圖々々して居たつて仕方が有りません。」

斯う決心の籠つた調子で言つて、岸本は母親の顔を仰いだ。

「あれ、左様かい。」と母親は心配さうに考へる。

「そのかはり是から筆の方で稼ぎます。」

「稼げるかしら――」

「今迄は學校が有りましたから、それで反つて物が書けなかつたんです。學校を辭めて、奈何しても稼がなけりや成らないとなつたら、必と書けます。」と言つて岸本は不安な眼付をして、「さあ、僕も是から友達に笑はれないやうに行るぞ。」

母親はたゞ岸本を頼りにして、末の子と一緒に住むといふことを樂んで居たのである。その子が今、奈何いふ精神の狀態にあるか、筆の方で何程の收入が出來るものか、左樣いふことには一向暗かつた。

雨は霙に變つたと見えて、蕭々降りそゝぐ音がする。青白い光は、雨に濡れた表の格子戸を通して、斯の屋の内を薄暗く淋しく見せる。しばらく岸本は冷い壁に倚凭つて、霙の音を聞いて居たが、やがて思ひついたやうに斯様なことを言出した。

「母親さんは奈何いふ積りで僕のやうな人間を造へたんですか。」

母親は長火鉢の灰をならし乍ら、苦笑した。

「左様いふことを聞くのは、一番親不孝な言葉ださうだ。」

百十一

ブラ〳〵して日を暮して居る幸平兒に言はせると、斯の家屋の下は――恐らく隧室にでも成つて居るので有らうとのことであつた。どうも物の音が響き過ぎる。よく晝寝をする幸平は斯様なことを考へ出した。是は岸本も氣が付かずに居た。して見ると、田舍者の聲が高いばかりでもない。早速姉は母親を辯護したのである。

霙の止んだ頃、岸本は二階へ上つて、窓の戸を開けた。狹い、ごちや〳〵した町中のことで、向側に並ぶしもた屋、仕立物の看板を懸いた家、姙婦預所、厚燒せんべい、又は子供を相手に凧、豆、駄菓子其他粗末な玩具の類を鬻ぐ家々などが見られる。その濡れた屋根の上に、雨降揚句の空を望むことが出來る。一方には未だ暗い雲があつたが、神田明神の方角はすこし晴れて、黄ばんだ灰色の、影の深い横雲が遠く懸つて居た。

午後の光は岸本の勉強部屋を薄明く見せた。尤も廂の淺い二階建で、天氣の好い日には逆上せるほど明かつた。勉強するには、日が射し過ぎる位で、その爲に直に倦み易くも思はれた。粗い灰色の壁には、父の遺筆が紙表具にして掛けてある。その隅に本箱が置いてある。岸本はその本箱の引出をあけて、例の懷劍を底の方に藏つて置いた。

麹町の學校は、懇意な人々の經營して居る事業で、それを辭めるにしても別に辭表などを出す必要はなかつた。机の上には愛讀の書物が積重ねてある。其中には勝子の墓に咲いたといふ花が押されて入つて居る。それは岡見が箱根土産に贈つて呉れたものである。書物を開けて、偶然其樣なところが出ると、また岸本は考へる、人情から受けた深傷を癒すものは人情より外に無かつた。彼は勝子のことを忘れよう

として、何時の間にかさま〴〵の女に思をかけて居た。左樣いふ場合は後から〳〵起つて來る。直に最早前の人は忘れて了ふ。馬鹿らしい彼の眼には、幻のやうな女の影が映つたり滅えたりして居た。

『製作、製作。』

これが自分を無理無體に押出さうとする心の底の聲である。

日暮に近い頃、岸本は階下へ降りた。臺所には姉が腰を曲めて、夕飯の支度に急しかつた。母親はセッセと鰹節をかいて居た。暫時岸本は眺めて立つて居たが、やがて母親の方へ自分の背中を向けて、

『母親さん、僕の背中を思ふさま一つ打つて見て下さい。』

と笑ひ乍ら、前曲みに成つて言つた。

『斯うかい。』

と笑つて母親は右の手を揚げようとした。急に手の筋が痙つて來た。乳癌の療治をしてから、時々母親は斯ういふことが有る。

『どれ、私が母親さんのかはりに打つて進げる。』と姉が笑ひ乍ら言つた。

『斯う思ふさま眼の覺めるやうなやつを――』

と岸本は姉の方へ背中を向けた。

『奈何に強くても宜う御座んすか。』

『えゝ、姉さんの力なら――』

姉は白い、細い手を揚げて、力一ぱいに弟の背中をドヤした。

百十二

青木は死ぬ、岡見は隱れる、足立は任地を指して出掛けて了ふ、市川、菅、福富は相繼いで學問とか藝術の鑑賞とかいふ方へ向いた。連中は共同の事業に疲れて來た。

斯う成ると、恰も長い戰爭に疲れた軍人のやうに、互に言ひたいことを言ふやうに成る。一人として背負つて立たうとする者が無い。『第一、大將が大將らしくない、彼樣どうも笑つて了ふやうな態度に出られては、折角神妙にして進んで行かうとする若い者が立たん。』と言ふものがあれば、『君なぞが六號に隱れて居るといふ法はない、もつと出て來給へ。』といふものもあり、『僕はこれで一番御奉公してるよ、僕ばかり働いたツてツマラない。』といふものもある。左樣かと思ふと、『皆な同じやうに世間から思はれるのは心外だ、そんなことなら僕は退社する。』などと言ふものも出て來る。新しく仲間入した松浦、安藤なぞが、反つて仲裁者の位置に立つやうに成つた。

何のかんのと言つても、連中は互に離れることが出來なかつた。斯ういふ中で岸本は大根畠の二階に籠つて、自分は自分だけの道路を進みたいと思つて居た。自分等の眼前には未だ未だ開拓されて居ない領分がある――廣い濶い領分がある――青木はその一部分を開拓しようとして、未完成な事業を殘して死んだ。斯の思想に勵まされて、岸本は彼の播種者が骨を埋めた處に立つて、コツ〳〵その事業を繼續して見たいと思つた。

漠然とした恐怖は絶えず彼の胸に往つたり來たりした。それのみならず、曾て家を忘れさせ、職業を捨てさせ、暗い寂しい旅にまで彼を押出した力は、軈て彼を無口にしたり、急に身體を震はせたり、譯もなく涙を流させたりする。麹町の學校は辭めて見ても、矢張仕事は出來なかつた。

四月のはじめ、彼は獨りで家を出て、上野公園から谷中を通つて、道灌山まで歩いて行つた。誰も來ないやうな場所へ彼は行きたいと思ふのであつた。彼の懐には平素愛讀する李白の詩集があつた。そこまで彼は泣きに行つた。思ふさま泣いた。

一種の誘惑は其頃彼の身に附纏うて居た。夫は關根から話のあつた養子の說である。彼は友達の思惑を恥ぢて、其樣な話のあつたといふことすら打明けなかつた。母にも姉にも祕して居た。負ひきれない程の生活の重荷は、今、其話に耳を傾けさせるやうな場合にある。

百十三

「捨。」

斯う呼び起す母親の聲に驚かされて、岸本は眼を覺ました。まだ四邊は薄暗い。部屋の内には洋燈が細目に點けてある。四月中旬のある曉のことである。

母親と姉の二人は暗い臺所の方でいそがしさうに働いて居る。井戸端まで顏を洗ひに行つて、やがて岸本はショボ〳〵眼を擦り〳〵歸つて來て見ると、若い愛子は未だ寢て居る。朝飯の用意が出來て、もう食べるばかりに膳が一つ出してある。岸本は着物を着更へて、その膳の前に對つた頃、麹屋の方で鳴く鷄の聲を聞いた。

氣のせはしない母親は、四時頃から起きて釜の下を焚付けたといふ。鍛冶橋に居る民助の許へ弟を面會に遣るといふことが、母親には最も大切な義務のやうに思はれて居た。面會と言へば、母親は昔諸大名を自分の家に泊めた時のやうに暗いうちから起きる。左樣してまめまめしく立働くのを、不幸な家長に對しての務めとして居る。未決監から屆いた手紙によれば、民助の控訴は聞かれなかつた。そこで彼は上告して身の明を立てようとして居る。其爲に弟に逢ひたいとのことである。

「眠いのに、御苦勞だのい。」

と母親は吾子の爲に飯をつけ乍ら言つた。

「捨さん、御苦勞さま。」と姉も臺所から來て言葉を添へた。「今度といふ今度は大丈夫無罪だらうと思つたに、控訴でも不可――私はもうガッカリして了つた。捨さんのことを考へると、眞實に御氣の毒でならない。」

「皆な無事で居るツて、左樣言つてお呉れや。」

と母親が言つた。

「兄さんに御逢ひなすつたら、何卒よろしく。」

と姉も附添した。

白々と明放れた頃に、岸本は家を出た。明神を左に見て、湯島の坂を下りようとすると、四月らしい朝の空氣のなかに下町の町々が見られる。遠く光る霞が彼の眼に映る。映るには映つたが、何となく繪付にでもして空に貼着けてあるやうに見えた。

「家の人を救ふことが出來るなら、自分はもう奈何でも可い。」

斯う岸本は步き乍ら考へた。

あやしい運命が垂下げてよこしたやうな香餌は、今、彼の眼前に懸つて居る。關根は養子の話に就いて、あまり委しい說明もしなかつたが、對手の娘は曾て麹町の學校に居たこと、その娘は大きな家屋敷と地所とを親から讓られたこと、それがある田舍に在ること、それから娘は十人並と言ひたいが、まあ餘り容色の好い方ではないといふことなぞを語り聞かせた。容色なぞは奈何でも可い、斯う彼は關根に言つた。而して關根に勸められて、いつか一度その娘に逢つて見ようといふ運びにまで進んで來て居る。家の人の爲――それは苦し紛れの言譯に過ぎなかつた。傲岸な彼の眼には、これは確かに恥づべき屈從であつた。しかし、その恥づべき屈從も、無職業の苦痛には勝るかのやうに見えたのである。

途中で日が出た。岸本は、ある町と町との間から、霞を通してその紅い光を望んだが、別に何の感興も起さなかつた。彼は多くの物に興味を失つて了つた。

百十四

鍛冶橋監獄署の門前には、面會に來た男女が集つて、門の開くのを待つて居た。土手のところに蹲踞んで居るのもあつた、橋の畔に立つのもあつた。差入屋に腰を掛けて、面會願を書いて貰ふのもあつた。七時に門が開く。それより三十分ばかり前に、岸本は着いて居たのである。

軈て門が開いた。人々は先を爭つて入つて行つた。勝手を知らない面會人は我勝に番號札を得ようとして、御願々々と言ひ乍ら受付の所に集る。これはたゞ到着の番號で、面會の番號ではない、騒ぐな、と守衛に叱られて、すごすご引下るのもあつた。

控所は、庭を隔てゝ正面に受付、斜に未決監の入口を望むやうな位置にある。二階は辯護士、階下は普通の面會人が腰掛ける所で、そこだけは土間に成つて居た。番號札を貰つて來た手合は、順にその控所へ集つた。

岸本がこゝへ通ふのは最早三年越である。面會人としては古參の方である。十九番といふ番號札を握つて、腰を掛け乍ら眺めると、いづれも新顔の男女ばかりで、見知越の人は二人か三人しかなかつた。そのうちに、玄關側のところで、カチャ／＼音がした。鬮が始まつたのであつた。

監獄署の鬮箱は、矢張神社佛閣のそれに似たもので、片隅の穴から細長い竹の鬮が出て來る。守衛がそれを掲げて見せる。面會の順番はそこで定るのである。岸本は三十番といふ鬮を引いた。

色の褪めた毛繻子の洋傘を小脇に擁へた女と、髪を櫛卷にして子供を負つた女とが、庭の隅で互に面會札を見せ合つて居たが、丁度其側を通る岸本に何番の鬮を引いたかといふことを尋ねた。

『三十番？』と一人の女が言つた。『三十番ならお若い方ですよ。』

『貴女は？』と岸本は聞いて見る。

『斯ういふ老けたのを引いちまひました。』

とその女が自分の札を出して見せて、寂しさうに笑つた。私は今日で、四日續けて來るんですけれど、まだ一度も逢へない――運が惡いんですねえ。

それを聞いて他の女は嘆息した。『薄情だと思はれたつて、鬮が遲けりや仕方がないやね。』

二人は斷念めて門を出て行つた。

控所に集る人々は、いづれも不安な眼付をして、互にジロ／＼顔を見合せて居た。すこし高聲に談話をするものが有ると、直に巡査が咎めに來た。斯うして待つて居る間には、必ず一人か二人特に視線を集める人があつて、それを慰みに時を送るのが面會人の常である。其日も、蒼ざめた顔を白く塗りかくして、帽子を首に卷付けたやうな女と、それから背のすらりとした、頬の薄紅い、微笑む度に優しい皓齒のあらはれるやうな、十八九ばかりの娘とが來て居た。他の面會人の眼には、斯の二人は好い對照であつた。岸本は柱に倚凭り乍ら、假に自分が養子と成つた場合などを想像して、關根が紹介しようといふ對手の娘のことを思つて見た。彼様な人か知らん、斯様な人か知らん、成るべく好い方へ引付けて考へるうちに、何時の間にか眼前に腰掛けて居る可憐な娘の横顔に見惚れて居た。

『斯う言つたやうな人だと好いがなあ。』

と彼は自分で自分に言つた。

容色なぞは奈何でも可い――左様いふ口を利き乍ら、腹の中では奈何でも可いで濟まされなかつた。矢張好い方が好かつた。

百十五

『三十番。』

と巡査が控所へ來て呼んだ。

面會人は互に自分々々の札を取出して見た。丁度岸本の前に腰掛けて居た年增の女が、低聲に成つて、

『三十番は貴方ぢや有りませんか。』

と言つたので、其時岸本も氣が付いて、起上つた。

『先刻から三十番々々々と呼んでるのに、聞えないか。』

と巡査は腹立しさうに岸本の顏を見て言つた。岸本はキマリ悪けに控所を出た。他の面會人はいづれも彼の後姿を見て笑つた。

岸本が立つたのは、玄關側にある開放けた窓の下で、そこには制服着けた署吏が面會の要件を聽取る爲に控へて居た。

『其方は？』と署吏は筆を持ち乍ら岸本の方を瞰下して言つた。

『岸本捨吉。』

『あ、其方は民助の何に當るか。』

『弟です。』

其時署吏は机の上にある書類を繰つて見て、果して此の面會人が民助の實弟であるや否やを確めた。

『面會の要件は？』

『在監人安否問ひ尋ねの件――上告につき辯護士依頼の件――差入物の件――それから、家族情況報告の件――』

署吏は岸本の言ふ通りに記しつけた。軈て彼がその窓の下を離れた頃は、最早面會所の戸が開いた。早い圖に當つたものは順を追つてそこへ呼込まれて居た。

『何故、自分は斯様にボンヤリして居るんだらう。』

斯う自分で自分を嘲りながら、岸本は復た控所の柱に倚凭つた。右の膝の上へ左の膝を組合せて、兩手で其膝を抱くやうにして、すこし斯う仰向き氣味に頭を柱に着けて居ると、つい復た茫然考へる。眼を瞑ると、一週間ばかり前に上野で見た洋畫の展覽會の光景が顯れる。初めて陳列された印象派風の明い畫がある。光線と空氣とを通して、雜然配置されたやうな景色がある。動搖した紫色の影がある。それを思ふと、高輪の學校で一緒に遊んだ友達なぞが、最早新しい美術家として頭を持上げかけて居る。休憩室には、福富、菅、市川などの連中が集つて、いづれも駝鳥の羽毛の輕い帽子を冠つて、露西亞卷の煙草を燻しながら、新畫の批評や美術上の話をして居る。そこには又、日清戰爭以後新に進んだ人物が出たり入つたりして居る。何となく代は變りつゝある。

急に隣の方から汗臭い、可厭な臭氣がして來た。眼を開いて見ると、疲勞したやうな顏付の男が何時の間にか自分の傍へ來て腰掛けて居た。例の娘は最早居なかつた。面會所の方からは泣き顏を見られまいとして、俯向勝に歸つて來る婦がある。車夫の顏を見たら胸がもう一はいで……などと言ふ聲も聞える。向うの未決監の内塀の側には、蒼ざめた顏色の女が巡査に引かれて通る。賤しい稼業の者が送られるらしい。

百十六

暗い箱馬車が其時門内へ引込まれた。而して、庭の内で一回轉して、馬の頭が門の方へ向いた頃に止つた。未決監の入口からは、日のめを見ることも少いやうな憂鬱な眼付をした囚人等が、手に〳〵汚れた風呂敷包を持ち乍ら出て來て、護衛の巡査と一緒に其馬車へ乘つた。中には馬車の窓から控所の方を盜むやうに見て

娑婆の人達を可羨しさうに眺めるもあり、誰か逢ひに來て居る者はなからうかと尋ね顔なのもある。

『集鴨へ廻される連中だ。』

と面會人の一人が思はず口走つた。

馬は勇ましさうに嘶いた。慘憺とした思を傍觀する人々に殘して置いて、馬車は庭の小石の上を軋り乍ら出て行つた。

斯の光景を眺めて、岸本も思ひ沈んで居たが、聽て氣が付いて我に返つた頃は最早自分が面會の番に近づいて居る。間もなく彼は巡査に呼込まれて、小さな、狹い面會室の丸木を横へた欄の前に立つた。奥庭の小石を踏んで面會室の方へ近づいて來る人の跫音がする。

『兄さんだ。』

と岸本は聞耳を立てた。

コトリと欄の前にある小さな窓の戸が開いた。岸本兄弟は、其時互に蒼ざめた顔を合せた。氣の短さうな巡査が、欄と窓の境に立つて、面會の要件を讀み聞かせる間、民助は熟と耳を傾けて居た。例の未決監の番號札を着物の襟に縫着けて、髮は短く、髭はすこし生して居る。寛大な氣風、あきらめの早い精神、兄らしい威嚴なぞの失はれずにあるところは、岸本の身に取つて心強くも思はれたが、何となく斯う獄中の人らしい、可傷しい兄の額付を眺めると、自然に弟の頭は下つて來た。

『簡單に言へ、そんな餘計なことを喋つては不可――斯の要件に書いてあるだけのことを言へ。』

斯う言咎められて、民助は巡査の方へ一寸會釋して、辯護士依頼に就いての希望を述べ、猶、此節のやうに差入が絶えては身體が疲勞する、監内で食物を買ふから金錢で入れて呉れよ、石町、大川端へも宜敷賴むとのことであつた。嚴重な監視の下で、制限ある時間に談話を交換するのであるから、面會は毎時器械的に終る。弟はたゞ兄の無事な顔を仰いで、氣休めに成るやうなことを言つて歸るに過ぎなかつた。

面會室を出て、

『あゝ、兄さんには家の方の事情がすこしも解らない。』

と岸本は獨り嘆息した。

不幸な兄の狀況を報告する爲に、それから岸本は大根畠の家を指して歸つて行つた。彼の心は、家族のものを奈何しよう、養子の話を奈何しよう、自分を奈何しようといふことで、滿たされて居た。

其晩可恐しく半鐘が鳴つた。本郷臺から見ると、遠町の方の空は眞紅であつた。關根や岡見などが、多年の間苦心經營した學校は、一夜のうちに烏有に歸して了つた。

百十七

それから二月ばかりは夢のやうに過ぎた。梅雨のあがらうとする頃には、岸本はもう全く別の職業の中に埋沒もれて了ふ積りで、築地のにがし園といふ方へ歩いて居た。そこは陶器畫を專門にする大きな仕事場であつた。

養子の話は奈何した。關根が對手の娘を紹介せると言つて、わざ〳〵岸本を呼寄せたのは、丁度麹町の學校に卒業式のある日のことで、その娘も卒業生の集會に出て來て居るから、今に逢はせる、今に逢はせると言ふうちに暗くなつた。燒跡の混雜から、式はある他の場所を借受けて、燈火の點く頃に始まつた。式の後、關根は岸本を人の居ないところへ連れて行つて、低聲に成つて、『岸本君、折角君をお呼びしましたが、どうも僕は君に彼の人を見せる勇氣がない――必と君は失望なさるから。』斯樣なことで到頭岸本は逢はずに歸つた。幾月も頭腦を惱まして、幾度も足を運んで、話のあつた當時か

ら胸をドキ〳〵させて、養子に行つた先方のことを種々に想像したり、空に日を送り乍ら待つて居たりしたことは――結局、後から考へるとボンヤリするやうなことに終つて了つた。とは言へ、彼は関根に感謝した。関根が躊躇した爲に、自分は反つて方向を過らなかつた。冷汗を流した丈で濟んだ。と思つた。

迷ひに迷つて居る岸本が、陶器の畫工といふ思想に落ちて行く迄には、種々な計畫を立てゝ見たのである。彼は兎に角、空想を實行しようとして、事を始めて見る男である。ある時なぞは、後れ馳せながらも友達の後を追はうとして、大學の選科に入る準備を始めたこともあつた。郷里の方に嫁いで居る實の姉といふは、相應に暮して居るところから、其方へ岸本は手紙を送つて、在學中の補助を得たいと考へた。その願は聞かれなかつた。斯様な風で、一月餘前から準備を始めかけた事もまた〳〵尻のくゝりを付けずに廢して了つた。

岸本は今、陶器畫の仕事場の方へ斯ういふ破れた心を運ぶ人である。今日食ふにすら困るやうな家庭の人々を引受けて居乍ら、そんな不慣な職業をイロハのイの字から始めて一日幾何の手間代に成るかも知れない人である。

彼が陶器の畫工を擇んだといふことも、矢張一種の空想からであつた。其頃西洋から來たある美術雑誌の中に、『藝術は吾心を得たり』といふ題の畫があつた。男が片肌ぬぎで、大きな花瓶に餘念もなく草花の模様を畫いて居ると、女は戸口のところに立つて、其花瓶の畫に見恍れて居る。岸本は斯の畫中の人物から思付いた。畫といふよりは寫眞板から思付いた。同じ一生を埋めるにしても、『藝術は吾心を得たり』とでも誰か言つて呉れるものが有れば、まだ〳〵埋め甲斐が有るかのやうに思つたのである。

園主は岸本を仕事場の片隅に導いた。廣い部屋には男も女も居た。園主は、先づ見習として、岸本に皿を一枚あてがつた。

『へえ、妙な男が舞込んで來たね。』

と人々は彼の方を見て囁き合つた。

百十八

花瓶、皿、壺、珈琲茶碗などの雜然置並べてある屋の内に、机を接して仕事をして居る人々の多くは、顔の色のさめた職工風の若い男でなければ、貧しい家から通つて來る給金取の娘であつた。斯の仕事場で盛に製造する物は、大抵輸出向の陶器で、形でも模様でも一定の型に依つて幾百組となく作る。皿なら皿、珈琲茶碗なら珈琲茶碗に相應する大體の模様の輪郭が先づ素地へ焼付けられる。娘は容易しさうな部分を塗る。男はその仕上をする。監督する人は別にあつて、多忙しさうに机と机の間を歩いたり、手に持つ十露盤で陶器の數を勘定したりした。

その日はいやに熱かつた。唐紙や障子は悉く取拂はれて居たが、狭苦しいほどに集つて仕事をする人々の呼息、汗の香、それから庭の方で焼く竈の火氣の熱とで、斯の仕事場の内は蒸されるやうである。柱の周圍に陣取つて居る女なぞは、もう恥も外聞も思つて居られないといふ風で、肥つた腕を肩の邊まで捲し上げるのもあれば、色の褪めた單衣物の袂で額の膏汗を拭取るのもある

『奈何です、ウマくいきますかナ。』

と園主は岸本の傍へ來て言つて、不思議さうに彼の仕事をするところを佇立み眺めて居た。

隣に机を並べて珈琲茶碗を畫いて居る十八九ばかりの男が、其時岸本の方を振向いて見て、意味もなく微笑んだ。後向に並んで仕事をして

居る小娘も互に眼と眼を見合せて笑つた。岸本のあてがはれた仕事は、金色に焼付けてある菓子皿の模様を手本にして、ドロ〳〵した紫色のインキのやうな薬を手本通りに塗りさへすれば可かつた。それには既に輪郭が出來て居る。十三四の小娘でも其樣な仕事は造作もなくやつてのける。新參のかなしさには、先づそれから見習はねばならぬ。いかに他の職業の中へ埋沒れて了ふ積りでも、是ではナサケなかつた。

隣の男は倦み疲れたといふ風で、時々耳のところへ細い筆を插んで、病身らしい眼付をしながら溜息を吐いた。

『君は何方です。』と其男が尋ねた。

『私ですか。』と岸本は寂しさうに笑つて、『私は本郷の方です。』

『本郷？　本郷は高臺で好う御座んすなあ。』と言つて、其男は聞いて貰ひたいといふ風で、『僕はネ、一月からこゝへ通つて居るんですけれど、身體が弱いものですから奈何も思ふやうに行れませんよ。田舍から出て奮發する積りでも、僕見たいに身體が弱くては駄目ですねえ。』

斯う嘆息して、向うの部屋の柱に倚凭つて居る男を指して見せた。

『彼處に居ませう――ネ。彼の人がこゝでは一番腕の有る人なんです。あそこまで漕ぎ着けるのはなか〳〵容易ぢやない。』

と言はれて、岸本は斯の仕事場で一番腕のあるといふ人を見た。其人も彼が豫想して來たやうな陶器の畫工らしくはなかつた。岸本は默つて了つた。それぎりもう隣の男と口を利かなかつた。

百十九

斯の陶器畫の仕事場へ岸本を紹介したのは麹町の老先生であつた。老先生は洒落氣こそ多かつたが、若い者を遊ぶやうな人では無かつたから、唯陶器の畫も面白からう位の慰み半分な考へで、岸本の言ふなりに園主へ宛てた手紙を呉れたのであつた。物に拘泥しない老先生も、斯うして岸本が男や女の中に交つて、輸出向の菓子皿なぞを塗つて居ると聞いたなら、さぞ驚いたことであらう。

繪畫を愛するのは岸本が天性に近かつた。彼は多少物の象を書く力をも具へて居た。小學校時代から高輪の學校時代へかけて、繪畫はむしろ彼の得意とするところで有つた。斯の思想に勵まされて、彼は陶器の畫工を選んだのである。萬更恃みにすることかなくて斯の仕事場へやつて來た譯でも無かつた。

とは言へ、人の氣を腐らせるやうな職工仲間の空氣は、到底彼に適しなかつた。彼は最早一日で嫌に成つて了つた。

『まあ、よく考へてお出なさい。』

と園主は岸本に言つて別れたが、中年者は見込が無い、と言つたやうな眼付をして居た。

素燒の陶器が荷造のまゝ積重ねてある門のところを出て、大根畠の方へ歸つて行く時の岸本は、二度とあの紫色の繪筆を持つ勇氣が無かつた。『大馬鹿！』と彼は自分で自分を嘲つて、泣き出しさうな顔付をしながら歩いて行くと、眼の廻るやうにいそがしい町々の光景は哀然とした恐怖の念を起させる。用事ありげな人々を乘せた車は前からも後からも驅けて通る。ボンヤリ考へ込んで歩いて居る彼は、どうかすると驅けて來る車夫に突飛ばされることも有つた。而して、可恐しい勢で引倒されさうな思をした。

大根畠の家には、母親が心配して彼を待つて居た。丁度彼の留守に、菅が訪ねて來て、いろ〳〵彼の噂をして歸つたとのこと。母親はあの友達から、いかに吾子が間違つた思想を起した

か、陶器の畫工が奈何いふ境涯のものであるかを關知つた。

「其様なものに成る位なら、俺が行つて斷つて來る。」と母親が言つた。

「なにも、强ひて陶器の畫工に成らうとは思つて居ないんです。」斯う岸本は苦笑して答へた。

「まあ、奈何して其様な氣に成つたずら。」と母親は岸本の顏を眺めて、「岸本さんは友達の言ふことを聞くやうな人でないからッて、お前、菅さんも左様仰つたよ。」

斯の「友達の言ふことを聞くやうな人でないから」が岸本には悲しかつた。

翌日、彼が築地まで斷りに行つた時、館主は彼に花鳥模様のある美しい菓子皿を呉れた。兎に角一時は全く別世界に隱れて了ふ積りで、多少其方の心支度もして繪畫に必要な道具を買ひ、參考になる書籍まで集めて見て、復た復た其計畫も水の泡のやうに消えて了つた。空想の記念としては、唯一枚の皿が殘つた。

百二十

――自分は今、眼に見えない牢獄の中に居る。鍛冶橋に居る兄さんの爲には、彼程他が大騷ぎしても、自分が苦んで居ることを見て呉れる者が無い。あゝ病人は寧ろ幸福だ――身體の頑健なものはそこへ倒れるまで誰も知らずに居る。」

到頭岸本は斯ういふことを考へるやうに成つた。七月の下旬、ぶらりと大根畠の家を出て行かうとする頃の彼は、最早何事も爲る氣の無い人であつた。

「捨。」

と母親が呼留めたので、岸本は夏帽子を冠つたまゝ柱のところに立つた。

母親は聲を低くして、「先刻お米屋さんが催促に來たよ。それに、大屋さんへは未だ先月分が拂つてないッて、姉さんが心配してる。お前、何とかしてやつてお呉れや――」

岸本は默つて母親の顏を熟視つた。

『姉さんが、捨さんには氣の毒で私から言へないが、兄さんの方へもお金を入れるやうに母親さんから言つて貰ひたいッて――」

其時お杉さんといふ人が、臺所の方から出て來たので、母親は口を噤んで了つた。

斯のお杉さんといふは、姉の姉で、今の亭主と口を利き合つたやうな場合には、怒りで飛出して來る。他に行く處もないから、岸本の家を便つて來る。墮落で、放縱で、年はとつてもなかなかの洒落者、内氣な姉に比べると、同じ姉妹とは思はれない。斯のお杉さんが賴むと言つて來れば、否とは言へないほど愛嬌のある人であつた。

『捨さん、また御厄介に成りに上りました。」

とお杉さんが言つた。

家を出て岸本は湯島の天神の方へ歩いて行つた。彼は錢取に出掛けるでもなく、職業を見つけに行くでもなく、友達を訪ねに行くでもなかつた。時々彼は往來の片隅に佇んで、通る人々をボンヤリ眺めたり、白い日を見て歎へたりした。天神の境内にあるロハ臺は、斯ういふ岸本が腰を掛けて考へるに好い場所であつた。そこには手拭で頭を包み、胸を露出し、晝寢の夢を貪つて居る人々がある。岸本も櫻の葉の蔭を擇んで、淸しい風の來る、日の光のチラ〳〵するやうなところへ、倚凭りながら眺めた。

追想は岸本を樂しい高輪の學校時代へ連れて行つた。學校の圖書館へ入つて、西洋の詩人の傳記なぞを讀み耽つたのも、彼の時代である。御殿山の夕日を友達に指して見せて、初めて自然の美しさが自分の眼に映じたことを語つたのも、彼の時代である。チャペルの方で鐘が鳴つ

て、二階の窓から赤く灯が洩れる頃、あるひは文學、あるひは宗教、あるひは哲學に關する新説を聞かうとして、友達と一緒に寄宿舍から急いだのも、あの時代である。奈何に彼の時代は樂しかつたらう。

櫻の樹の下へ長い竿を持つて來て、蟬を取らうとする少年の群があつた。追想は更に岸本を遠い少年の時代に連れて行つた。無邪氣な茶屋の子息や、額の紅い時計屋の娘なぞと一緒に遊んだ時代のことを考へると、今更のやうに其昔が可懷しく、戀しく、樂しく思はれた。

百二十一

空は明くても、心は暗かつた。ロハ臺を離れて、天神の境内から切通坂の方へ行かうとすると、石段を下りきつた處に、人の背よりは低い石の柱がある。鐵の欄はそこで止つて居る、そこでも彼は冷い石の柱に倚凭り乍ら、往來の人を眺め佇立んだ。そこは本郷臺から下谷の方へ落ちて居る傾斜の盡きようとする處で、熱い日のあたつた坂道が眼前に見られる。重さうな荷車は幾臺か彼の前を通る。中には、足に力を入れて、ウン〳〵言ひ乍ら前の方から豆腐の滓流を引いて行くのもあれば、其荷車の後へ頭を押付けて、聲も掛けずに押上げるのも有つた。

青く光る空には、熱を帶つた白い夏雲が浮んで居る。それを見ても岸本は別に面白くもをかしくも思はなかつた。切通坂の下まで行くと、町の右角に井戸があつて、釣瓶に口をつけながらガブ〳〵飲んで居る男がある。其樣な、汗をタラ〳〵流した勞働者が、反つて彼の目に映つた。

坂の左側を占領する耶のところには、その外郭を圍繞く廣い石の溝がある。塵埃除の樹木はそこに冷しい影を落して居る。その樫や柳の下には、ロハ臺で見たとはまた全く別の階級の人々が集つて居る。すくなくもロハ臺に腰掛けて考へ込んで居るやうな手合には、『是から奈何しよう』と言つたやうな顏付の者が多い。斯の石の溝へ來て並んで居るものは、『是から奈何しよう』位の連中ではなかつた。第一、其樣なところに其樣な人達が集つて居るといふことすら、今迄岸本は氣が着かずに居たのである。

『オイ〳〵妙な男がそこへ來て立つたぜ。』と白髮を短く刈つた、前齒の拔けた隱居が岸本の方を眺め乍ら、隣の男に囁いて聞かせた。

『恐しく顏色の惡い亡者だなア。』と隣の男は、そこいらに落ちて居る繩の片を拾つて、其で[illegible]首を磨きながら叩き返した。

『熱くすると池へ飛込むよ。』とまた一人の男が土塵にまみれた草鞋穿の足を投出し乍ら囁いた。

『はゝゝゝ。』

嘲るやうな笑聲が一齊に起つた。斯の笑聲は岸本にも聞えた。尤も石の溝に腰掛けて居る連中は何を笑つたか解らないやうな風に笑つた。

其時、石の上に帽子を敷いて、破れた扇子を持ち乍ら居眠りして居た男は、急に斯の笑聲で眼を覺ました。

『何を笑つてるんだ。』と其若い男が眠さうな眼付をして尋ねる。

『貴樣なぞに解つて堪るものかい。』と齒の拔けた隱居が戯れて、汚れた手拭で若い男の顏をクスグるやうに拂つた。

若い男は石の溝を離れた。彼は樫の葉蔭にある空車の上を擇んで、そこに破れた筵を敷いて、裏返しにした帽子の中へ頭を突込み乍ら、大の字なりに寢轉んだ。蠅の群は來て穴のあいたシャツや大きな尻のところへ取り着いた。

不忍の池の方から、青い蓮の葉を渡つて來る

風が、そこに樂しい休息の世界を作つて居る。紙屑、皮、塵芥、縄などを積み載せた荷車がそこに置並べてある。荷馬車を引いて來た、棕櫚のやうな汚れた鬣の老馬も、そこへ來て止つた。日に焼けた羅宇屋もそこへ來て荷を卸した。而して、汗染みた財布の中から其日の所得を取出して數へて居た。

『一體、俺は何しに斯様なところへ立つて居るんだらう。』

斯う岸本は自分で自分を笑つて、軈てその樹蔭を離れた。

百二十二

日暮に近い頃まで、岸本は屋外で暮して、本郷の通を猿飴の横町の方へ曲らうとした時は、最早何となくそこいらが黄昏れて見えた。ふと途中で、岡見の兄の歩いて來るのに遭遇つた。

『岡見さん。』

『や、岸本さん、しばらくでしたね。』

『何時御出掛でした。』

『一昨日ね、一寸用事が有つて大磯から出て來ました。』

黄色く光る往來の瓦斯燈の影で、二人は斯様な言葉を交換した。今は以前のやうな調子ばかりでなく、幾分互に尊敬し合ふところも談話の中に交つて來て居る。それだけ他人行儀に近づいたとも言へる。が、矢張連中は連中だ。逢へば互に可懐しい。岸本は岡見の行く方へ一緒に歩いて、やがて今日の艱難な境涯を話し始めた。

しかも其を言ひにくさうに話した。而して、何か未だ言ひたいことが有つて、其を言はずに居るといふ風であつた。岡見は薄々岸本の家の事情を聞いて知つて居る。自分が戀の成功に比べて、斯の若い友達の心情を思ひやらんではない。亡くなつた勝子は、自分が曾て愛した弟子でもあり、又、新しい妻の親友でもあつたことを考へないでもない。結局岸本の話は金に落ちて行つた。

岡見は例の侠氣から、

『話は早い方が可い。幾何ばかり、借、有れば可いんですか。』

と斯う言出した。彼は直に自分の懐を捜つた。

『十圓位で間に合ふことなら、今こゝで御用立しませう。』

と氣前を見せて、無造作に紙入の中から取出して渡した。岡見は友達を助けるといふことに依つて、自分の性質を滿足させた。いや、そればかりではない、彼は戀の成功者として高い稅を拂はせられた形である。

『では、兎に角拜借します。』

斯う岸本が言つて、その金を袂に入れて、それから岡見と別れた。

家では母や姉は最早夕飯を濟まして、幸平一人膳に向つて食べて居るところであつた。毎時兄弟は一つの膳で食ふので、弟の分だけは一方に茶碗を伏せて、歸りを待顔に置並べてある。

『捨さん、お先へ頂きました。』とお杉さんは楊枝をつかひ乍ら言つた。『今夜は、旦那衆の方が後に成つて了つて――』

岸本は食ふ氣に成らなかつた。『僕は止さう。』

『奈何して？』と姉は引取つて、『一杯お上りな。捨さんの好な茄子の御馳走ですよ。』

と言はれたが、岸本は好物の野菜が膳に上つたのを見た丈で、箸を付けようとはしなかつた。其時彼は岡見から借りて來た金を袂から出して、それを姉の手に渡した。

『捨さん、食べないんですか。そんなら僕が頂かう。』と幸平が言つた。

姉は呆れて、『ほんとに、幸さんの食べるには

驚いた風で「斯うして置いたッて、どうせ腐敗くなる物だ。」

と言つて、幸平は一方にある椀を自分の方へ引寄せた。斯の兄は大胡坐で、冷然として弟の分をも食つた。

百二十三

翌朝、岸本は遲くまで寢て居た。働好な母親は暑くならないうちにと思つて、洗濯物を急いで、臺所の板の間で糊まで付けて、それを狹い裏口の物干竿に掛けて來て見ると、まだ岸本は寢て居た。表格子の方からは、最早熱苦しい日が射して來た。岸本は起きようくとしても、どうしても頭が重くて持上らないといふ風で、唯臥床の上に悶き倒れて居る。そこで母親の手を借りた。丁度暴風の爲に倒れかゝつた樹木へ突支棒でもして、それで漸く舊の位置へ復したやうに、岸本は先づ頭から持上げて貰つて、漸く身體が自分のものに成つた。

すこしばかり物を食つた後、彼は二階にある自分の部屋へ行つた。そこで身の邊を眺め廻した。燒石に水とやら。岡見から借りた金ぐらゐで幾日を支へることが出來よう。大抵は穴埋で濟んで了ふ。母親、姉、幸平兄、愛子、それから鍛冶橋に居る兄、一時たりともお杉さん——

これらの人々を養ふといふことは、未熟な岸本の身に取つて、決して容易ではなかつた。兄を救ふため辯護士一人を賴むにすら、すくなからぬ金を要する。左様々々は親類でも屆かないといふことに成る。石町の大將始め、大川端の叔父、國許の姉、いづれへも迷惑をかけられるだけ懸けた。今は親類も疲れて來た。

斯らいふ時に成つて、岸本の心はもう一度西京の峰子の方へ行つた。旅に出た當時、峰子から受けた親切を岸本は忘れずに居る。彼の母親さんか姉さんのやうな人が、一見自分を知己のやうに思つて、着物から宿の世話迄もして呉れて、旅費が足りないと言へば奈何工面をしてもこしらへて貸して呉れた、其人の情を彼は今に成つて思出した。

およそ手紙の中で、金を貸して貰ひたいといふほど書きにくいものは無い。況して鎌倉以來一度も文通もせず、氣分が惡くて居るといふ噂を聞いても見舞狀も出さず、別れなければ成らない時が來て別れて、それを先方でも潔く思つて呉れたやうなものの、後に成つて見ればそれとなく捨てた形の人である、その人に向つて、「御無沙汰仕り升」とは、いかに困窮して居ても書きにくかつた。

不思議な、あさましい、平生は滅多に念頭にも浮ばないやうな思想が、其時浮んで來た。自分は未だ髪も黑く、頰も紅い——すくなくも自分の黑い髪や紅い頰に對して、十圓やそこいらの金は貸して呉れさうなものだ、と斯う思つて見た。其時彼は婦人の前に跪く多くの薄志弱行な男子のことを考へて、年老いて好色な後家にかしづく壯年、有福な女に弄ばれる男妾、金の爲にはいかなる媚をも賣らうとする美しい節操のない男子なぞを數へて、恥づべき自分の心情に於ては、すこしも左様いふ蕩子と遠ふところがないかのやうに思つた。岸本は自分で自分の可厭な臭氣を嗅ぐやうな思をした。兎に角、西京へ宛てゝ金の無心の手紙を書いた。それから自分の机の傍に倒れて、復た死んだ人のやうに成つた。何時の間にか彼は深い熟睡に陷没つた。

百二十四

まあ、斯様に寢る人が何處にあるずらく

と母親は二階へ來て見て、呆れて、暫時岸本の寢顏を眺め乍ら立つて居たが、軈て戸棚から

薄いものを出して、風邪を引かないやうに其を吾子に被けて呉れた。

「昨日から碌に御飯も食べない――必と身體の工合でも惡いのだらう。」

斯う獨語を言つて、母親は階下へ降りて行つた。

　ふと岸本が眼を覺ました頃は、最早午後の三時過である。彼は前の晩から寢つゞけに寢たと言つても可い程寢て、まだそれでも寢足りないやうに思つて居る。むつくと起き直つて、自分の机の前に坐つて見たが、寢過ぎと、疲勞と、夏の日の熱苦しさとで何事も手に着かなかつた。本箱の中に並べてある種々な新しい思想を書いた書籍――寢食を忘れて愛讀した程の書籍――それも別に興味を起させなかつた。岸本が落ちて行つた思想では、東西の大家が自分等青年に遺して置いて呉れた文學上の產物も多くは人間の徒勞を寫したものに過ぎない。悲壯な戲曲も徒に流した涙である。微妙な詩歌も溜息である。何を苦んで自分等は同じ事を繰返す必要が有らう――斯う暗く考へるやうに成つた。何の爲に其日まで骨を折つて來たのか、それが岸本には解らなくなつた。

　復た彼は疊の上に倒れた。追想は彼を昨日ロハ臺で考へたと同じ時代へ連れて行つた。不思議なことには、前の日に思出した高輪の學校時代と、其日思出したとは大した相違である。自分――何年も思出したことのないやうな自分が、其時浮んで來た。其時の自分は未だ彼の學校へ入りたてで、貧書生であるといふ自己の位置をも忘れて了つて、ひたすら富有な家から來て居る朋輩の眞似をして喜んだ自分である。孔雀の眞似をして居た鴉である。虛飾の好な自分は、不相應な洋服に半ズボンなぞを穿いて、靴下も淺黃と白の華麗なのを好み、髮も綺麗に分けることを覺え、夏帽子の飾りには特に色の美しいリボンを捲付けて冠つたものである。彼の時分には、よく演說なぞをやつた。茶番をすると言つて、身振物眞似に浮身を扮した。會堂に說敎のある日なぞは、若い人達と一緒に集つて、讃美歌を歌ふのが何よりの歡樂で、つい夢中で洗禮を受けた。彼の時分の朋輩には、それぞれ綽名があつて、それが各自の性質を能く表した。ある地方から出て來て居る男はガン／＼怒鳴るといふので「雷」、自分は出過ぎるといふところから「鑄掛屋の天秤棒」と付けられた。たま／＼知人が訪ねて來て、一緒に高輪の町を歩いて居ると、向うの方から朋輩がやつて來て、「オイ、天秤棒」なぞと呼掛けられた時は、流石に閉口したものであつた。彼の時分には、各級一人づつ級長といふものを擇んだ。自分は首席を占めては居たが誰も「鑄掛屋の天秤棒」を級長に投票しようといふものが無い。虛榮心の深い自分は、自分で自分を投票した。彼の時分には又、よく物を食ひに出掛けた。自分は錢も無いくせに、運動の時間といふと冗食に出掛けて、大分パン屋の婆さんに借をこしらへた。終には困つて、大川端の叔父に內證で、十八史略なぞを賣つた。男女交際などと言つて、浮かれて居たのも彼の時分である。

　すくなくも自分は眞面目な人間である。斯う岸本は自分で自分のことを考へて居たが、彼の時分を思出して見ると、その眞面目も宛にはならなかつた

百二十五

　すくなくも自分は正直である。斯う岸本は机の側に倒れながら、自分で自分のことを考へた。追想は更に彼を少年時代へ連れて行つた。而して、幼い時の自分といふものを見せた。

　追想が岸本を連れて行つた處は、銀座の大金の横町にある藏造の家である。往來に向いて

窓がある。その窓から明りの射し込む三疊ばかりの玄關が曾て自分の勉強した部屋である。野心深い少年であつた自分が、ナポレオンの小傳なぞを讀んで、感激して泣いたのも其窓の下である。その玄關と次の八疊の間は段々の付いた入口に成つて居て、今の大川端の弘が未だ人に背負つて居る頃、「バア」と自分が暗い處から出て大事な獨子息を威嚇したと言つて叱られたり、入口の壁と壁の間へ足を懸けて上るうちに落ちて氣絶をしたりした場處である。八疊の上には二階があつて、丁度自分が山猿のやうに、逆に登る稽古をした梯子がある。八疊には大きな書生が居て、夜は自分もそこへ集つて、同じ洋燈の下で書を讀んだ。叔父は未だ大川端へ引移らない前のことで、其頃は美しい髯を生して居たが、代言人の試驗を受けると言つては自分の机の前へ來て、自分に法律上の書籍を讀ませて、「それは斯樣です」とか『彼樣です』とか答へて、よく自分を試驗掛に見立てたものであつた。八疊の次が板の間で、その奥に居間がある。叔母の臥床はもう其時分から敷いてある。すこし叔母が氣分の好い時には、池の金魚の見えるところへ家の人を集めて、病を慰める爲に花札を引いた。其時自分も雨たの日の出たのの書いてある札を持つて見て、『青タン』とか「三クヮウ」とかいふことを初めて習つた。よく臺所の方では、叔母の爲に牛肉のソップを製へた。儉約な老祖母は、そのソップ滓へ味を付けて自分等にも食はせたが、終にはそのにほひが鼻へ着いて、誰も食ふ氣に成れなかつた。仕方がないから、老祖母はそれを乾して、三時の茶といふと出した。そのソップを製へる爲に、生の牛肉を細かく賽の目に切つて、口の長い大きな徳利へ入れる、是がまた一役で、氣の長い者でなければ勤まらなかつた。丁度其の二階には、叔父の親戚にあたる年老いた漢學者が親子連で來て世話に成つて居て、結句牛肉の切り役は斯の温厚な白髪の老先生へ廻つた。老先生が眼鏡をかけて、階下で牛肉を切つて居る間は、奥の二階は閑寂として居る。そこには先生の書籍が置並べてある。机の上には先生の置忘れた金錢がある——斯の金錢を十錢許り盜んだものがある。其盜みをしたものが、自分だ。

そればかりではない。尾張町の夜店には野菜の市があつて、家の人が買ひに出掛けたものだ。自分もよく隨いて行つた。そこには少年の眼を引き易いやうな繪本を商ふ店もある。美しい表紙畫の草雙紙が數多そこには並べてある。何かなしにその草雙紙が欲しくなつて、何度も／＼其前を往つたり來たりして、終に[illegible]ら一冊懷中に入れた少年がある——斯の少年が、自分だ。其時自分は捕まりさうにして、命がけで逃げた。草雙紙は置場所に困つて、溝の中へ裂いて捨てた。もし彼の時捕まつたら、自分の生涯は如何な風に成つて行つたらう。

當惑の情は少年の昔を眼前に活々として見せた。樂しく無邪氣に想像して居た時代は、實に岸本にとつて最も暗黒な、最も野卑た感想の[illegible]する時であつた。自分は荒くれた、[illegible]に[illegible]、掏摸のやうな眼付の少年であつたに相違ない。斯う思出して見ると、決して自分の正直も宛に成らなかつた。

百二十六

到頭岸本は階下の座敷へ寝床を敷いて貰つて、其上へ倒れるやうに成つた。傲岸な彼は、未だそれでも自分の敗北を認めようとはしなかつた。「我は敗北者なり」などとは噯にも出したくなかつた。斯ういふ負惜みの強い、自分を知ることの少い、盲と啞と聾とを兼ねたやうな青年が、人生とは何ぞやといふ疑問に逢着しながら、その解決に苦んで寝床の上に震へて居た。

る光景は──丁度深傷を負つて戰場の草の中に倒れ乍ら、まだそれでも抵抗する氣で居る兵士のやうである。

八月が來た。暑中休で書生はすくなくなつたが、種々な人が表格子の前を通る。白い着物がギラ〳〵した日に反射する。それが岸本の寢て居る座敷から見られる。

『捨さん、御醫者樣を賴んで來て進げませうか。』

と姉は枕許へ來て言つた。岸本は知らずに眠つて居る。苦しさうな汗が彼の額のところに流れて居る。

『まあ、眠つてばかり居る病人だ。』斯樣な風に姉は言つて見た。

『お秋、そうツとして寢かしてお置き。その病人は疲勞れて居るんだらうよ。』と母親は冷しい風の來るところを擇んで、針仕事をひろげ乍ら聲を掛けた。

ふと岸本が眼を覺まして四邊を眺め廻した頃は、急に夕立が落ちて來た。お杉さんは二階の雨戶を閉めに行く。母や姉は裏へ出て洗濯物を取込む。幸平兒は晝寢の夢を貪つて居る。丁度そこへ表の格子を開けて菅が驅込んだ。

親切な菅は岸本のことを心配して、訪ねて來たのであつた。

『いへ、君は寢てるのかい。』

と菅は上り端に立つて、濡れた薄羽織を脫ぎ乍ら言つた。

其時岸本は寢床の上に跳起きた。彼の懷中には黑塗の鞘に入つた懷劍が隱してあつた。それは菅から返して貰つて、二階の本箱の引出に藏つて置いたものである。友達に見られまいとして、彼はそれを蒲團の下へ隱した。

斯ういふ精神の狀態に在りながらも、岸本は自分の苦痛を友達に訴へようとはしなかつたのである。彼は唯、暗い憤怒の影を額の處に見せて、悄然と寢床の上に坐つて居る。菅にはサッパリ樣子が解らない。

『復たラブでも始まつたんぢやないか。』と菅が笑ひ乍ら言つた。

岸本は答へなかつた。彼は快活な友達の顏を眺めて、苦笑して居た。

『火事ア何處だア、丸山だ。』

斯う菅は子供の眞似をして戲れた。

母や姉が集つて來てからは、二人はもう其樣な話をしなかつた。夕立が通り過ぎてやがて屋の內が涼しくなる頃まで、二人の話は連中の噂で持切つた。その話の途中、菅は岡見が岸本を評した言葉を持出して、まだそれでも君の方が、溝口よりは腰が据つてるトサ──溝口と一緖にされちや可哀さうだ。」斯う言つて笑つた。溝口は最も薄志弱行な男として、連中の間に知られて居た青年である。

『菅さんと話をしてるところを、傍で聞いてれば、ちつとも病人のやうぢや無い。』

斯う母親は、菅が歸つて行つた後で、吾子の顏を眺め乍ら言つた。

西京からも返事が來た。岸本は寢床の上へ起直つて、峰子の手紙を開けて見た。斯うある。

『──まことに御氣の毒とは存じ候得共、何分にも薄給の身にて……』

百二十七

慨然として死に赴いた青木の面影は、岸本の眼前にあつた。『我事畢れり』と言つた青木の言葉は、岸本の耳にあつた。幾度か彼はあの友達の後を追つて、懷劍を寢床の中に隱して置いて、悶死しようとしたのである。身體の壯健な彼には奈何しても死ねなかつた。

絕望は彼を不思議な決心に導いた。

親はもとより大切である。しかし自分の道を

見出すといふことは猶大切だ。人は各自自分の道を見出すべきだ。何の爲に斯うして生きて居るのか、それすら解らないやうなことで、何處に親孝行が有らう――斯う自分で自分に辯解して、苦しさのあまりに旅行を思立つた。
其時の岸本は、何處へ行つて了ふのか自分にも解らなかつた。あるひは最早歸つて來ないかも知れない。もし歸つて來ないにしても、自分は母に對し家の人々に對して、自分の力に出來るだけのことを盡した。是上は運命に任せるより外はない――まさか饑死するやうなこともなからう。斯う考へた。
そこで彼は寢床を離れた。
旅費の宛もなかつたから、岸本は自分の書籍を賣ることにした。二階へ上つて行つて見ると、何年か掛つて集めた藏書が貧しいながらも置並べてある。三輪で差押に遇つた時、大半は失して了つたが、未だそれでも旅費を作る位はある。金に成りさうなものは、洋書は別にして、兩國の古本屋で集めた木板本の佛書、それから淺草で買つた唐本の類がある。貧書生の身で、苦心して集めたことを考へると賣るのはナサケなかつた。

岸本は窓のところへ行つた。そこで過去つたことを考へて見た。あの國府津の蜜柑畠に轉がつて、土の臭氣を嗅ぎ乍ら、もう一度斯の世の中へ歸らうといふことを思立つた時から、今日まで、何を自分は知り得たらう。何を知る爲に自分は歸つて來たらう――
ふと、其時、青木の歌の一節が岸本の胸に浮んだ。それは岸本が漂泊の旅に出た頃、彼を送る爲に青木の作つた歌である。青木の聲を聞くやうな歌である。

　一輪花のさけかしと
　願ふこゝろは、君のため――」

岸本は窓の處で斯の一節を繰返した。冷い涙は彼の蒼ざめた頰を傳つて流れ落ちた。
神田にある懇意な古本屋を指して、それから岸本は大根畠の家を出た。偶然にも彼の乘つた人力車はある耳鼻科の醫者の新宅の前を通り過ぎた。麹町の學校で親しくした耳の遠い先生が斯の醫者の弟にあたる。何の氣なしにその耳の遠い先生を訪ねて見る積りで、そこで車から降りた。居るかと聞いて見ると、居る。其時岸本は耳の遠い先生から、仙臺の學校の話を聞いた。その學校から教師として岸本に來て貰ひたいといふ話が、其樣なところで彼を待つて居た。
出稼――それは彼の望むところであつた。旅も出來る、多少家への仕送りも出來る、斯うなると書籍を賣りに行く必要はなくなつた。そこで仙臺行の話を持つて古本屋まで行かずに大根畠へ引返した。
其日は、實に、一日のうちに種々なことがあつた。岸本に取つては忘れることの出來ない日であつた。

百二十八

月は空にあつた。時は夜の十二時に近い。涼しい風の來る不忍の池の畔へ集つた男女も、一人減り、二人減りして、最早人の影が見えない。水に臨む家々でも多く戶を閉めて寢た。辨天の境内から出て來て、蒼白い闇の中を歸つて行く人々があつた。その中には、市川が居る、菅が居る、足立が居る、連中以外の人も居る、岸本も居る。いよ／＼岸本は仙臺の方へ行くことに定つたので、彼の送別をかねて、其晩友達仲間が一緒に集つたのである。尤も俄の思付で、興は反つてその俄に思付

いたところにあつた。

其晩は皆な醉つた。各自志すところは違つて居るにしても、猶ほ同じ親しい記憶に繫がれて居ることを思ひ起させた。市川も菅もそこまで附合はうといふので、足立や岸本の行く方へ隨いて來た。連中は一緒に池の畔を歩いた。盛に話したり飮食したりした部屋は、岸の是方から明く見られる。灯は靜かな暗い水に映つて居る。一夕の淸興は未だそこに殘つて居るかのやうでもある。

夜の景色は夢のやうに見える。暗い柳は人のやうに立つて居る。あの細長い條から黄色な花が落ちて、青々とした新芽が吹出した頃から見ると、今は柳も髮を長く垂下げた女のやうに容づくつて居る。長閑なやうであわたゞしい、樂しいやうで風雨の多い、努力の苦痛と浪費の悲哀とで滿たされたやうな——若い、新しい、壯んな感想のする時節は、樹までも斯う苦勞させた。新造と言ひたいが、柳は最早年増にしか見えなかつた。

仲町の方へ曲らうとするところで、岸本は友達に別離を告げた。

市川は月あかりに岸本の顏を透して見て、例の下町風の丁寧な調子で、

「もう御見送りはいたしませんから。」

斯樣に風に言つて、右の手を出した。岸本は其手を握つて別れた。

翌日、岸本の家では本郷の森川町へ引移つた。そこは二間ばかりの小さな平屋ではあつたが、勝手の好く出來た家で、狹いながら裏庭もあり、母や姉が留守居をするには別に不自由を感じなかつた。臺所の障子を開けると、直ぐ往來で、近くにある井戸へ水汲みに出掛けられる。荷物は裏で出來る。丁度鄕里から岸本の甥にあたる太一といふが、遊學の目的で出京して居て、此甥がまめ〳〵しく手傳つて呉れた。大根畠から荷車で運んで來たものは、何處へ形付くともなく、斯の狹い屋の内へ納まつて了つた。

思ひがけない應援の手紙が北淸に居る二番目の兄の許から屆いた。留守宅の生活費は月々其方からも助けられることに成つた。今は岸本も仙臺の方へ落ちて行くことが出來る。

百二十九

せめて一日ゆつくり東京で寢て行きたい。是より外に岸本の願ひは無いのであつた。それほど彼は疲れて居た。

先づ爲るだけの事を爲た上でなければ、休んでも休んだやうな氣がしない。兄の民助の上告も、大審院での審判の結果によれば、甚だ好都合に行つた。控訴院判決の全部は破棄されて、更に斯の裁判を名古屋の地方裁判所へ移すとある。上告は聞かれたのである。そこで民助は鍛冶橋の未決監を出て、名古屋の方へ送られることに成つた。斯の見送りを濟まさないうちは、岸本も肩が拔けたとは言はれなかつた。第一、母親が許さなかつた。

鍛冶橋から通知のあつた翌日、岸本は幸平兄と一緒に森川町の新しい住居を出た。其日は乾燥いだ、風の多い、日は熱くても割合に凌ぎ好いやうな日であつた。幸平と岸本とは三つしか違はない兄弟で、よく子供の時分には喧嘩して、兄が弟の頭をブン擲れば、弟は兄の顏を引搔いたりして、毎日のやうに啀合つたものである。「幸さんが顏を洗つた後なら、俺は洗はない、」なぞと言つて、弟がキタナイやうな顏付をすると、「何だ、この拾公、」と兄が言ふが早いか、最早拳固がコツンと飛んで來る。斯ういふ二人の兄弟が今は煙草の火を親しげに附合つて、弟は兄から捨さん、捨さん、とか、オイ、君、とか言つて親みに思はれて居

る。捨さんは夢見たやうなことをよく言つてる人だ。斯う兄は弟を評して笑つて居る。

鍛冶橋監獄署の門前で、斯の兄弟は總領の民助兄が出て來るのに逢つた。

『兄さん、荷物を持ちませうか。』

と岸本は民助の傍へ近づいて、低聲で言つて見た。民助は巡査の思惑を憚つて、小脇に風呂敷包を擁へたなり出掛けた。

未決監の囚人が地方へ送られるには、手數の掛つたもので、一々警察署へ掛つて、巡査から巡査へ引繼に渡される。名殘惜しく思ふところから、幸平、捨吉の二人は民助の後に隨いて、熱い土を踏み乍ら歩いて行つた。

ある橋の畔、並木の蔭で、兄弟三人は暫時一緒に成つた。巡査は見て見ぬ振をして、汗を拭き乍ら休んで立つて居た。

兄弟は眼と眼を見合せた。『今度こそは青天白日の身に成つて歸つて來る。』斯う民助の眼が言つた。其時、岸本が卷煙草に火を點けて渡すと、民助は横の方へ向いて、チュウとそれを一息に吸つた。巡査は氣の毒がつて、笑つて見て居た。

高輪近くまで不幸な家長を見送つて、そこで弟等は別れた。假令一時の過失があつたにもせよ、それは最早長い未決監の幽囚で清算された、法律は償いもついた、と弟等は思つた。

歸路には、大傳馬町へも寄つて、清之助に別離を告げる積りで、岸本は幸平兄に一足先へ歸つて貰つた。丁度清之助も居て、雜誌は是から一切自分の方で引受けてやる、仙臺へ行つて何か書けるやうであつたら送つて呉れ、斯様な話があつた。

『本船町、本船町』と言つて、こゝへ來ると必ず出る市川の噂が、此節ではあまり出なくなつた。

琴の音が聞える。

『あゝ、お涼さんだ。』

と岸本は自分で自分に言つた。其時、彼は市川が苦戀に秋の野を行く水の如しと言つたことを、胸に浮べて、何時の間にか其流れも堰止められたのであらうと想像した。思做しの故かして、その日の琴は激切な調を帯びて聞えた。彼の二人の情人にすら、世の中は添遂けるといふことを許さないのであらうか。斯う岸本は心にあはれに思つた。

百三十

『叔母さん、捨叔父さんは。』と甥の太一は森川町の住居へ來て、勝手口の方から聲を掛けた。

『捨さんかい。』と姉は流許に蹲踞んで、青菜の皮を剝きながら、『お晝の御飯を食べたッきり、未だ寝てますよ。』

『へえ、お休みですか。』

『御馳走も何物も要らない——寝かして呉れッて、今朝から横に成つてる。でも明日發つといふ人だから、母親さんが何か食べさしてやりたいッて、薯蕷汁でほんの送別會をします。何物もありませんけれど、お前さんもお相伴に——』と言つて、姉は腰を延ばして、『まあ、太一さん、お入りな。』

と言はれて甥は格子戸の方へ廻つた。

『今日は。』

斯う聲を掛けながら、甥が狭い入口の庭から見ると、奥に鞄や柳行李などが出してある。母親は旅の着物を疊んで居る。幸平は縁側で煙草を燻して居る。岸本は仰向に長くなつて、兩手を鳩尾の上に載けて、さも〳〵草臥れたと言つたやうな風に寝て居る。

『お愛ちやん、何か出來ますか。』

と甥は上り端の三疊で帽子を掛けながら言つた。愛子はその帽子掛の下に小さな机を置いて、千代紙で姉様を疊んで居る。狭い屋の内も

取片付けて見れば、どうやらかうやら是丈の人が住まはれるやうに成つたのである。

甥は国許に嫁いで居る姉の惣領息子で、岸本と三歳しか違はない。背は岸本よりも高い。叔父甥といふよりは、兄弟に見える。

勝手の方では夕飯の支度で忙しかつた。母親は旧家の主婦として昔多くの人々を扱つた経験から、田舎風の料理にはいろ／＼心得て居る方である。野菜の貯へ方もよく知つて居る。漬物なぞも甘く食はせる。其日も母親が露を引受けて、姉は薯を擂る方へ廻つた。山葵卸でおろした真白なやつが最早擂鉢の中にあつた。露をかけた鍋は湧々と煮立つて、やがて白い湯気が台所に満ち溢れた。母親はその湯気の中で立働いた。

『叔母さん、御手伝しませう。』

と甥は姉の傍へ来て言つた。

『どうしても男衆の力には及ばない。』

と言つて、姉は一生懸命に擂鉢を押へて居たが、どうかすると薄い擂粉木に縋み付く。甥が力を出せば、擂木は廻り出す。愛子まで来て押へた。

『さ、替りませう。』

と姉が手を出した。甥は擂粉木を離さなかつた。今度は右を左に持ち替へて、復たゴシ／＼やる。額は紅くなる。

『ア、手が痛い。』

と到頭擂粉木を姉に渡した。薯は次第に柔かく膨らんで来た。終にはヘチャン／＼と音がして、押へて居るものの手を嘗めるやうに成つた。

『お秋、もう好かないか。』

斯う言ひ乍ら、母親は露の鍋を擂鉢の傍へ持つて来た。姉がそれを掬つて入れる。甥が交ぜる。薯はグル／＼グル／＼廻つて、白が出たり、茶色が出たりするうちに、軈て擂鉢の中へ一ぱいに成つた。

『一寸俺に塩梅を見せとくれ。』

と母親が小皿を手に持ち乍ら言つた。

長火鉢の處には、幸平が大胡坐で、青海苔を炙つた。未だ岸本は寝て居る。

百三十一

『どつこいしよ。』

と岸本は身を起して、先づ周囲を眺め廻した。

『捨さん、其位寝たら沢山だらう。最早御馳走が出来て待つてますぜ。』

斯う幸平に笑はれて、岸本はそこへ足を投出しながら、伸をしたり、大きな欠をしたりして、軈て又ホッと溜息を吐いた。

『叔父さん、お早う。』と甥は笑ひながら挨拶する。

『あゝ、太一さん、お出でしたか。』

と岸本も笑つて、顔を洗つて来る為に井戸端の方へ行つた。

間もなく家の者は食事をする為に集つた。同じ夕飯でも明い處で食べた方がウマからうといふので、其日は奥の方へ引越して、縁側に近いところへ席を設へた。

『どうも胡坐にやらないと、食つたやうな気がしない。』と言つて、幸平は腕まくりで始める。

姉は薯汁を掛ける役、母親は飯を盛つて待つて居て、それを各自の椀の中へあけた。

『捨、今日はお前の送別会だに、たんと食べとくれや。』と母親が言つた。

『太一さん、お塩梅は奈何です。』と姉も言葉を添へる。

『どうして、岸本の祖母さんの御料理ですもの、拙からう筈がありません。』

『まあ、太一さんの御世辞の好いこと。』と姉は笑つて、岸本の方を見て、『捨さん、賢いおやな

いか、もうすこし御上りな。
「そんなに強ひられても、駄目です。」と岸本は御辭儀をした。「今日は七杯しか入らない。
「捨さん、七杯入れば、あまり入らない方でも無いでせう。」と幸平は笑つた。
「へえ、太一さん、お強ひ。」と母親は飯をあけて了つてから言つた。
甥は椀の中を眺めながら、「こりやあヒドい。なんぼなんでも最早澤山だ。」
「太一さんが其樣なことを言つて奈何します。」と姉はその椀を引取つて、どろりとした泡のやうな汁を掛ける。
「面倒臭い——食つちまへ。」
到頭甥は掻込んで了つた。
侘しい生活はして居ても、斯ういふ送別の食事なぞに成ると、母親は眼前の境涯を忘れ勝であつた。彼女は、昔多くの客を款待したと同じやうな、鷹揚な心地に歸るのであつた。
幸平、太一、捨吉の三人は、すこし詰込過ぎた氣味で、帶を緩めるやら、呻吟るやらして居たが、母や姉が片付けて了つた頃には、三人とも長くなつた。動けないほど食つた譯でもなかつたが、妙に腹が脹れた。誰が打出すともなく臍の下あたりを打始めるものがある。それに連れて腹鼓の競爭が始まる。
「馬鹿な男ばかり揃つてるなア。」
斯う笑ひながら、岸本は旅の鞄の側に仰向に成つて、一緒に調子を合せて居た。其時、格子戸のところに訪れるものがあつた。客と聞いて、三人は一齊に跳起きた。
「うん、菅君か。」
と岸本は上り端のところで友達に出逢つた。菅は格子戸に捉まつて話した。
「いよ／＼明日行くね。」と菅は微笑みながら、格子を通して、岸本の方を覗くやうに見る。
「あゝ。」と言つて、岸本は友達の顔を眺めた。「まあ入り給へな。」
「いや、左樣しちや居られない。今月の雜誌が出來たから一冊持つて來たよ——今日傳馬町へ一寸寄つたもんだからね。」
と菅は八月の雜誌を岸本に渡して、そこ／＼に別離を告げた。岸本は屋の外まで出て見送つた。
日が暮れてから、岸本は甥に手傳つて貰つて荷物を縛つた。過ぐる年月の間の嬉しいや悲しいが、出發前の混雜に交つて、彼の胸中を往つたり來たりした。其晩は、實に、寂しかつた。斯の寂しさは長い苦鬪の後でなければ思はないやうなものであつた。

百三十二

出發の日は拂曉から雨で、上野の一番に間に合ふやうにと朝早く別離の茶を飲んだ頃は、酷く降つて居た。前の晩に頼んで置いた人力車も來た。岸本は甥と一緒に乗つた。「恐しく重い行李ですなあ。」と呟き乍ら、車夫は着物と書籍とを詰込んだ柳行李を運んで、それを蹴込のところに積んだ。母や兄は庭、姉と愛子は格子戸の外に立つて、傘をさしかけながら見送る。斯うして岸本は、幌の内から今一度家のものの顔を眺めて、「御機嫌克う、」を取換して出掛けた。
それは最早八月の末で、毎年の氾濫を思はせるやうな季節であつた。上野の停車場には、東北行の汽車に乗後れまいとして、手荷物を提げたり、洋傘を持つたりした男女の旅客が多勢集つて居た。いづれも少しづつは濡れて生憎な天氣だと言つたやうな顔付をしながら、列車の方を指して急いで行つた。中には腕まくり、尻端折、泥の着いた足駄を鳴らし／＼行くのもあつた。雨具を着た驛夫はいそがしさうに其間を驅廻つた。

發車の鈴の響き渡る頃には、岸本はある三等室に陣取つて、玻璃窓に近く腰掛けた。別に彼を見送る人もなかつた。軈て車掌は相圖の笛を吹いた。石炭の煙は雨の爲に臥て、窓の外を暗く通り過ぎた。汽車は動き始めた。

岸本が旅の鞄の中には、前の日に菅が持つて來て呉れた例の雜誌が入れてある。それを取出して讀まうとする前に、ふと八戸行の當時が岸本の胸に浮んだ。彼は斯の汽車で一度斯の線路を往復したことを思ひ浮べた。あの時は、都は未だ暑かつたが、白河あたりまで行くと最早秋で、紫菀の花なぞが路傍に咲亂れて居たことを思ひ浮べた。荒寥とした東北の地方へ落ちて行くといふことは、岸本に取つて別に可懷しく思はせることがあつた。同じ室内に腰掛けて、母親に倚凭つて居る幼い娘すら、何となく勝子や豐子の面影を忍ばせる。ズウ〳〵鼻にかゝるやうな聲で談話をする旅客の容貌を見ても、東北人の特性は種々に見出すことが出來る。

岸本は雜誌を開けて見た。その中には、不忍辨天の境内で連中が集つた時の記事もあつた。市川の筆で、

「栗田君に寄す。思ふ雨より來り、岸本東北に菅市川諸友の歡を追はんとす。歸る遠きにあらず、發する亦遠からず。友人こゝに相會せざるべからずと、一夜駕をつらねて小西湖上の一亭に上りしは、東臺の暮鐘早や九時を報ぜし頃なり。蓋し議忽ちにして成り、忽ちにして會せしもの、荷葉青々として欄を蔽ひ、涼風袂を拂つて冷やかに、月は水を照して白し。長舟を湖心に浮べて斯の良夜を賞するが如し。某氏あり、意氣軒昂大詩人の焔を吐く。菅あり、憮然として而も大に飲む。足立の志成り、堂々たる大家、尚眇たる一書生然たるを怪む。大丈夫この氣宇なかる可からずと、そり身に成りて快語滿堂を壓するは、この人。函山の美を說くは、菅。岸本は須らく東北の野に大に美人を驅るべし、この勇、ありや否や、と諧子いよ〳〵長舌を弄して、終に吾曹を摩し來る。某氏更に杯を呼び、天女祠堂の門を出でしは、更既にふけしの頃、湖畔人なく唯月と風とあるのみ。この良夜盛會、栗田君なきを恨む。われ君を見ざること久し。則ち寄す。」

讀み了つて、岸本は笑はずに居られなかつた。雜誌も此頃では惡くなつて、連中は皆な御義理で書いて居るが、旅で見ればそれも可懷しかつた。

汽車が白河を通り越した頃には、岸本は最早遠く都を離れたやうな氣がした。寂しい降雨の音を聞きながら、何時來るとも知れないやうな空想の世界を夢みつゝ、彼は頭を窓のところに押付けて考へた。

『あゝ、自分のやうなものでも、どうかして生きたい。』

斯う思つて、深い〳〵溜息を吐いた。玻璃窓の外には、灰色の空、濡れて光る草木、水煙、それからションボリと農家の軒下に立つ鷄の群なぞが映つたり消えたりした。人々は雨中の旅に倦んで、多く汽車の中で寢た。

復たザアと降つて來た。

嵐

子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集まつて、そこにある柱の側へ各自の脊丈を比べに行つた。次郎の脊の高くなつたのにも驚く。家中で、一番高い。あの兒の頭はもう一寸四分ぐらゐで鴨居にまで屆きさうに見える。毎年の暮に、鄕里の方から年取りに上京して、その時だけ私達と一緒になる太郎よりも、次郎の方が脊はずつと高くなつた。

茶の間の柱の側は狹い廊下づたひに、玄關や臺所への通ひ口になつてゐて、そこへ身長を計りに行くものは一人づつその柱を背にして立たせられた。そんなに脊延びしては狡いと言ひ出すものがあり、もつと頭を平にしてなどと言ふものがあつて、家中のものがみんなで大騷ぎしながら、誰が何分延びたといふしるしを鉛筆で柱の上に記しつけて置いた。誰の戲れから始まつたともなく、もう幾つとなく細い線が引かれて、その一つ〳〵には頭文字だけを羅馬字であらはして置くやうな、そんないたづらもしてある。

『誰だい、この線は。』

と聞いて見ると、末子のがあり、下女のお德のがある。いつぞや遠く滿洲の果から家をあげて歸國した親戚の女の兒の脊丈までもそこに殘つてゐる。私の娘も大きくなつた。末子の脊は太郎と二寸ほどしか違はない。その末子が最早九文の足袋をはいた。

四人ある私の子供の中で、身長の發育にかけては三郎が一番おくれた。一頃の三郎は妹の末子よりも低かつた。日頃、次郎贔屓の下女は、何かにつけて『次郎ちやん、次郎ちやん』で、そんな脊の低いことでも三郎をからかふと、その度に三郎は口惜しがつて、

『悲觀しちまふなあ――脊はもうあきらめた。』

とよく嘆息した。その三郎がめき〳〵と延びて來た時は、いつの間にか妹を追ひ越してしまつたばかりでなく、兄の太郎よりも高くなつた。三郎はうれしさのあまり、手を振つて茶の間の柱の側を歩き廻つたくらゐだ。さういふ私が同じ場所に行つて立つて見ると、殆んど太郎と同じほどの高さだ。私は春先の筍のやうな勢ひでずん〳〵成長して來た太郎や、三郎や、それから末子をよく見て、時にはこれが自分の子供かと心に驚くことさへもある。

私達親子のものは、遠からず今の住居を見捨てようとしてゐる時であつた。こんなにみんな大きくなつて、めい〳〵一部屋づつを要求するほど一人前に近い心持を抱くやうになつて見ると、何かにつけて今の住居は狹苦しかつた。私は二階の二部屋を次郎と三郎にあてがひ、この兄弟は二人とも或る洋畫研究所の研究生であつたから、末子は階下にある茶の間の片隅で我慢させ、自分は玄關側の四疊半に籠つて、そこを書齋とも應接間とも寢部屋ともして來た。今一部屋もあつたらと、私達は言ひ暮して來た。それに、二階は明るいやうでも西日が強く照りつけて、夏なぞは耐へがたい。南と北とを小高い石垣に塞がれた位置にある今の住居では、濕氣の多い窪地にでも住んでゐるやうで、雨でも來る日には茶の間の障子は殊に暗かつた。

『こゝの家には飽きちやつた。』

と言ひ出すのは三郎だ。

『父さん、僕と三ちやんと二人で行つて探して

來るよ。好い家があつたら、父さんは見においで。」

次郎は次郎でこんな風に引受け顏に言つて、畫作の暇さへあれば一人でも借家を探しに出掛けた。

今更のやうに、私は住み慣れた家の周圍を見廻した。こゝは一番近いポストへちよつと葉書を入れに行くにも二町はある。煙草屋へ二町、湯屋へ三町、行きつけの床屋へも五六町はあつて、どこへ用達に出掛けるにも坂を上つたり下つたりしなければならない。慣れて見れば、よくそれでも不便とも思はずに暮して來たやうなものだ。離れて行かうとするに惜しいほどの周圍でもなかつた。

實に些細なことから、私は今の家を住み憂く思ふやうになつたのであるが、その底には、何かしら自分でも動かずにゐられない心の要求に迫られてゐた。七年住んで見れば澤山だ。そんな氣持から、兎角心も落ちつかなかつた。

ある日も私は次郎と連立つて、麻布笄町から高樹町あたりをさんざん探し廻つた揚句、住み心地の好ささうな借家も見當らず仕舞ひに、空しく植木坂の方へ歸つて行つた。いつでもあの坂の上に近いところへ出ると、そこに自分等の家路が見えて來る。昔から見知つた顏にも逢ふ。暮から道路工事の始まつてゐた電車通りも石やアスファルトにすつかり敷きかへられて、街の樹木のすがたも何となく見直す時だ。私は次郎と二人でその新しい歩道を踏んで、鮨屋の店の前あたりからある病院のトタン塀に添うて歩いて行つた。植木坂は勾配の急な、狹い坂だ。その坂の降り口に見える古い病院の窓、そこにある煉瓦塀、そこにある蔦の葉、すべて身にしみるやうに思はれて來た。

下女のお徳は家の方に私達を待つてゐた。私達が坂の下の石段を降りるのを足音で聽き知るほど、最早三年近くもお徳は私の家に奉公してゐた。主婦といふもののない私の家では、子供等の着物の世話まで下女に任せてある。このお徳は臺所の方から肥つた笑顏を見せて、半分子供等の友達のやうな、慣れ〳〵しい口をきいた。

「次郎ちやん、好い家があつて?」

「駄目。」

次郎はがつかりしたやうに答へて、玄關の障子の上へ鳥打帽をかけた。私も冬の外套を脱いで置いて、借家探しに草臥れた眼を自分の部屋の障子の外に移した。僅かばかりの庭も霜枯れて見えるほど、まだ春も淺かつた。

私が早く自分の配偶者を失ひ、六歳を頭に四人の幼いものをひかへるやうになつた時から、既にこんな生活は始まつたのである。私はいろいろな人の手に子供等を託して見、いろ〳〵な場所にも置いて見たが、結局父としての自分が進んで面倒を見るより外に、母親のない子供等をどうすることも出來ないのを見出した。不自由な男の手一つでも、どうにか吾が兒の養へないことはあるまい、その決心に到つたのは私が遠い外國の旅から自分の子供の側に歸つて來た時であつた。その頃の太郎は漸く小學の課程を終りかける頃で、次郎はまだ腕白盛りの少年であつた。私は愛宕下のある宿屋にゐた。二部屋あるその宿屋の離れ座敷を借り切つて、太郎と次郎の二人だけをそこから學校へ通はせた。食事の度には宿の女中がチャブ臺などを提げながら、二階の臺所の方から長い廊下づたひに、私達の部屋まで支度をしに來て呉れた。そこは地方から上京する商人の客をおもに相手としてゐるやうな宿で、入れ替り立ち替り滯在する客も多い中に、子供を連れながら宿屋

住居する私のやうなものもめづらしいと言はれた。

外國の生活の經驗から、私も簡單な下宿生活に慣れて來た。それを私は愛宕下の宿屋に應用したのだ。自分の身のまはりのことは成るべく人手を借りずに。それはかりでなく、子供にあてがふ菓子も自分で町へ買ひに出たし、子供の着物も自分で疊んだ。

この私達には、いつの間にか、いろ〳〵な隱し言葉も出來た。

「あゝ、また太郎さんが泣いちやつた。」

私はよくそれを言つた。少年の時分には有りがちなことながら、兎角兄の方は泣き易かつたから、夜中に一度づつは自分で眼をさまして、そこに眠つてゐる太郎を呼び起した。子供の『泣いたもの』の始末にも人知れず心を苦めた。そんなことで額を紅めさせるでもあるまいと思つたから。

次第に、私は子供の世界に親しむやうになつた。よく見ればそこにも流行といふものがあつて、石蹴り、めんこ、劍玉、べい獨樂といふ風に、あるものは流行りあるものは廢れ、子供の喜ぶ玩具の類までが時につれて移り變りつゝある。私は又、二人の子供の性質の相違をも考へるやうになつた。正直で、根氣よくて、眼をパチクリさせるやうな癖のあるところまで、何となく太郎は義理ある祖父さんに似て來た。それに比べると次郎は、私の幼い時を思ひ出させるやうな人懐こいところと氣象の鋭さとがあつた。この弟の方の子供は、宿屋の亭主でも誰でも遣りこめるほどの理窟屋だつた。

盆が來て、みそ萩や鬼燈で精靈棚を飾る頃には、私は子供等の母親の位牌を旅の鞄の中から取出した。宿屋住居する私達も門口に出て、宿の人達と一緒に麻幹を焚いた。私達は順に迎へ火の消えた跡をまたいだ。すると、次郎はみんなの見てゐる前で、

「どれ、三郎ちやんや末ちやんの分をもまたいで――』

と言つて、二度も三度も燒け殘つた麻幹の上を飛んだ。

「あゝいふところは、どうしても次郎ちやんだ。」

と宿屋の亭主は快活に笑つた。

やゝもすれば兄を凌がうとするこの弟の子供を制へて、何を言はれても黙つて順つてゐるやうな太郎の性質を延ばして行くといふことに、絶えず私は心を勞しつゞけた。その心づかひは、子供から眼を離させなかつた。町の方で、子供の泣き聲でもすると、私はすぐに座を起つた。離れ座敷の廊下に出て見た。それが自分の子供の聲でないことを知る迄は安心しなかつた。

私のところへは來客も多かつた。ある酒好きな友達が、この私を見に來た後で、久し振りで何處かへ誘はうと思つたが、あゝして子供をひかへてゐるところを見ると、どうしてもそれが言ひ出せなかつた。と人に語つたといふ。その話を私は他の友達の口から聞いた。でも、私も、引込んでばかりはゐられなかつた。世間に出て友達仲間に交りたいやうな夕方でも來ると、私は太郎と次郎の二人を引連れて、いつでも腰巾着づきで出掛けた。

そのうちに、私は末子をもその宿屋に迎へるやうになつた。私は額に汗する思ひで、末子を迎へた。

「二人育てるも、三人育てるも、世話する身には同じことだ。」

と私も考へ直した。長いこと親戚の方に預けてあつた娘が學齡に達するほど成人して、また親の懐に歸つて來たといふことは、私に取つての新しい歡びでもあつた。その頃の末子は

また人に髪を結つて貰つて、お手玉や千代紙に餘念もないほどの小娘であつた。宿屋の庭のままごとに、松葉を魚の形につなぐことなぞは、殊にその幼い心を樂ませた。兒達の學校も近かつたから、海老茶色の小娘らしい袴に學校用の鞄で、末子をもその宿屋から通はせた。にはかに夕立でも來さうな空の日には、私は娘の雨傘を小脇にかゝへて、それを學校まで届けに行くことを忘れなかつた。

私達親子のものは、足掛二年ばかりの宿屋住居の後で、そこを引揚げることにした。愛宕下から今の住居のあるところまでは、歩いてもさう遠くない。電車の線路に添うて長い榎坂を越せば、やがて植木坂の上に出られる。私達は宿屋の離れ座敷にあつた古い本箱や机や箪笥なぞを荷車に載せ、相前後して今の住居に引移つて來たのである。

今の住居へは私も多くの望みをかけて移つて來た。婆やを一人雇ひ入れることにしたのもその時だ。太郎は既に中學の制服を着る年頃であつたから、すこし遠くても電車で私の母校の方へ通はせ、次郎と末子の二人を愛宕下の學校まで毎日歩いて通はせた。その頃の私は二階の部屋に陣取つて、階下を子供等と婆やにあてがつた。

しばらくするうちに、私は二階の障子の側で自分の机の前に坐りながらでも、階下に起るいろ／＼な物音や、話聲や、客のおとづれや、子供等の笑ふ聲までを手に取るやうに知るやうになつた。それもその筈だ。餌を拾ふ雄鶏の役目と、羽翅をひろげて雛を隱す母鶏の役目とを兼ねなければならなかつたやうな私であつたから。

どうかすると、末子の啜り泣く聲が階下から傳はつて來る。それを聞きつける度に、私はしかけた仕事を捨てゝ、梯子段を驅け降りるやうに二階から降りて行つた。

私は直ぐ茶の間の光景を讀んだ。いきなり箪笥の前へ行つて、次郎と末子の間に入つた。太郎は、と見ると、そこに爭つてゐる弟や妹をなだめようでもなく、たゞ途方に暮れてゐる。婆やまでそこいらにまご／＼してゐる。

私は何も知らなかつた。末子が何をしたのか、どうして次郎がそんなにまで平素の機嫌をそこねてゐるのか、さつぱり分らなかつた。ただたゞ私は、まだ兄達二人との馴染も薄く、ころぼそく、兎角里心を起しやすくてゐる新參者の末子がそこに泣いてゐるのを見た。

次郎は 妹の方を鋭く見た。そして言つた。

『女のくせに、威張つてゐやがらあ。』

この次郎の怒氣を帶びた調子が、はげしく私の胸を打つた。

兒とは言つても、その頃の次郎は漸く十三歳ぐらゐの子供だつた。日頃感じ易く、涙もろく、それだけ激し易い次郎は、私の蔭に隱れて泣いてゐる妹を見ると、さもいま／＼しさうに、

『父さんが來たと思つて、好い氣になつて泣くない。』

『喧嘩は止せ。末ちやんを打つなら、さあ父さんを打て。』

と私は箪笥の前に立つて、やゝもすれば妹をめがけて打ちかゝらうとする次郎を遮つた。私は身をもつて末子を庇護ふやうにした。

『父さんが見てゐないと直ぐこれだ。』とまた私は次郎に言つた。『どうしてさう解らないんだらうなあ。末ちやんはお前達とは違ふぢやないか。他から父さんの家へ歸つて來た人ぢやないか。』

『末ちやんのお蔭で、僕が父さんに叱られる。』

その時、次郎は子供らしい大聲を揚げて泣き出してしまつた。

私は家の内を見廻した。丁度町では米騒動以來の不思議な沈默がしばらくあたりを支配した後であつた。市内電車從業員の罷業の噂も傳はつて來る頃だ。植木坂の上を通る電車も稀だつた。たまに通る電車は町の空に悲壯な音を立てて、窪い谷の下にあるやうな私の家の四疊半の窓まで物凄く響けて來てゐた。

「家の内も、外も、嵐だ。」

と私は自分に言つた。

私が二階の部屋を太郎や次郎にあてがひ、自分は階下へ降りて來て、玄關側の四疊半に坐るやうになつたのも、その時からであつた。そのうちに、私は三郎までも今の住居の方に迎へるやうになつた。私は獨りで手を揉みながら、三郎をも迎へた。

『三人育てるも、四人育てるも、世話する身には同じことだ。』

と末子を迎へた時と同じやうなことを言つた。それからの私は、茶の間にゐる末子のよく見えるやうなところで、二階の梯子段を昇つたり降りたりする太郎や次郎や三郎の足音もよく聞えるやうなところで、ずつと坐り續けてしまつた。

こんな世話も子供だから出來た。私は足掛五年近くも奉公してゐた婆やにも、それから今のお徳にも、串談半分によくさう言つて聞かせた。もしこれが年寄りの世話であつたら、いつまでも一つ事を氣に掛けるやうな年老いた人達を奈何してこんなに養へるものではないと。

私達がしきりに探した借家も容易に見當らなかつた。好ましい住居もすくないものだつた。三月の節句も近づいた頃に、また私は次郎を連れて、軒別の借家を見に行つて來た。そこは次郎と三郎とで精しい見取圖まで取つて來た家で、二人ともひどく氣に入つたと言つてゐた。青山五丁目まで電車で、それから數町ばかり歩いて行つたところを左へ折れ曲つたやうた位置にあつた。部屋の數が九つもあつて、七十五圓なら貸す、それでも家賃が高過ぎると思ふなら、今少しは引いてもいゝと言はれるほど長く空屋になつてゐた古い家で、造作もよく、古風な中二階など殊におもしろく出來てゐたが、部屋が多過ぎて未だに借手がないとのこと。よつぽど私も心が動いて歸つて來たが、一晩寢て考へた上に、自分の住居には過ぎたものとあきらめた。

適當な借家の見當り次第に移つて行かうとしてゐた私の家では、障子も破れたまゝ、かまはずに置いてあつた。それが氣になるほど眼について來た。せめて私は毎日眺めて暮す自分のまはりだけでも繕ひたいと思つて、障子の切貼りなどをしてゐると、そこへ次郎が來て立つた。

「父さん、障子なんか張るのかい。」

次郎はしばらくそこに立つて、私のすることを見てゐた。

「引越して行く家の障子なんか、どうでもいゝのに。」

「だつて、七年も雨露を凌いで來た屋根の下ぢやないか。」

と私は言つて見せた。

煤けた障子の切張りを續けながら、私は更に言葉をつゞけて、

「ホラ、この前に見て來た家さ。あそこはまるで主人公本位に出來た家だね。主人公さへ好ければ、他のものなぞはどうでも好いといふ家だ。唯、主人公の部屋だけが立派だ。あゝいふ家を借りて住む人もあるかなあ。そこへ行くと、二度目に見て來た借家の方がどのくらゐ好いか知

れないよ。いかに言つても、父さんの家には大き過ぎるね。』

『僕も最初見つけた時に、大き過ぎるとは思つたが――』

この次郎は私の話を聞いてゐるのかと思つたら、何かもぢ／＼してゐた後で、私の前に手をひろげて見せた。

『父さん、月給は？』

この「月給」が私を笑はせた。毎月、私は三人の子供に「月給」を拂ふことにしてゐた。月の初めと半ばとの二度に分けて、半月に一圓づつの小遣を渡すのを私の家ではさう呼んでゐた。

『今月はまだ出さなかつたかねえ。』

『父さん、けふは二日だよ。三月の二日だよ。』

それを聞いて、私は黒いメリンスを卷きつけた兵古帶の間から蟇口を取出した。その中にあつた金を次郎に分け、丁度そこへ屋外からテニスの運動具をさげて歸つて來た三郎にも分けた。

『へえ、末ちゃんにも月給。』

と私は言つて、茶の間の廊下の外で古い風琴を靜かに鳴らしてゐる娘のところへも分けに行つた。その時、銀貨二つを風琴の上に載せた戻りがけに、私は次郎や三郎の方を見て、半分串談の調子で、

『天麩羅の立食なんか、ごめんだぜ。』

『父さん、そんな立食なんかするもんか。そこは心得てゐるから安心しておいでよ。』と次郎は言つた。

樂しい桃の節句の季節は來る、月給にはありつく、やがて新しい住居での新しい生活も始められる、その一日は子供等の心を浮き立たせた。末子も大きくなつて、もう雛いぢりでもあるまいといふところから、茶の間の床には古い小さな雛と五人囃子なぞをしるしばかりに飾つてあつた。それも子供等の母親がまだ達者な時代からの形見として殘つたものばかりだつた。私が自分の部屋に戻つて障子の切張りを濟ます頃には、茶の間の方で子供等のさかんな笑ひ聲が起つた。お徳の賑かな笑ひ聲もその中に混つて聞えた。

見ると、次郎は雛壇の前あたりで、大騷ぎを始めた。暮の築地小劇場で『子供の日』のあつた折に、たしか『そら豆の煮えるまで』に出て來る役者から見て來たらしい身振り、手眞似が始まつた。次郎はしきりに調子に乘つて、手を左右に振りながら茶の間を踊つて歩いた。

『オイ、父さんが見てるよ。』

と言つて三郎はそこへ笑ひころげた。

私達の心は既に半分今の住居を去つてゐた。

私は茶の間に集まる子供等から離れて、獨りで自分の部屋を歩いて見た。僅かばかりの庭を前にした南向きの障子からは、家中で一番靜かな光線が射して來てゐる。東は窓だ。二枚の硝子戸越しに、隣の大屋さんの高い塀と樫の樹とがこちらを見おろすやうに立つてゐる。その窓の下には、地下室にでもゐるやうな靜かさがある。

丁度三年ばかり前に、五十日あまりも私の寢床が敷きづめに敷いてあつたのも、この四疊半の窓の下だ。思ひがけない病が五十の坂を越した頃の身に起つて來た。私はどつと床についた。その時の私は再び起つことも出來まいかと人に心配されたほどで、茶の間に集まる子供等まで一時沈まり返つてしまつた。

どうかすると、子供等のすることは、病んでゐる私をいら／＼させた。

『父さんを怒らせることか、父さんの身體には

一番惡いんだぜ。それくらゐのことがお前達に解らないのか。」
それを私が寢ながら言つて見せると、次郎や三郎は頭をかいて、すご／＼と障子のかげの方へ隱れて行つたこともある。
それからの私はこの部屋に臥たり起きたりして暮した。めづらしく氣分の好い日が來た後には、また疲れ易く、眩暈心地のするやうな日が續いた。毎朝の氣分がその日その日の健康を豫報する晴雨計だつた。私の健康も確實に恢復する方に向つて行つたが、いかに言つてもそれが遲緩で、もどかしい思ひをさせた。何程の用心深さで私は折々の暗礁を乘り越えようと努めて來たか知れない。この病弱な私が、兎も角も住居を移さうと思ひ立つまでに漕ぎつけた。私は何か斯う眼に見えないものが群がり起つて來るやうな心持で、本棚がはりに自分の藏書のしまつてある四疊半の押入をもあけて見た。
いよ／＼この家を去らうと心をきめてからは、押入の中なぞも、まるで物置のやうになつてゐた。世界を家とする巡禮者のやうな心であちこちと提げ廻つた古い鞄――その外國の旅の形見が、まだそこに殘つてゐた。
「子供でも大きくなつたら。」
私はそればかりを願つて來たやうなものだ。あの愛宕下の宿屋の方で、太郎と次郎の二人だけを側に置いた頃は、まだそれでも自由がきいた。腰巾着附きでも何でも自分の行きたいところへ出掛けられた。末子を引取り、三郎を引取りするうちに、眼には見えなくても降り積る雪のやうな重いものが、次第に深くこの私を埋めた。
しかし私は獨りで子供を養つて見てゐるうちに、だん／＼小さなものの方へ心をひかれるやうになつて行つた。年若い時分には私も子供なぞはどうでもいゝと考へた。反つて手足纏ひだぐらゐに考へたこともあつた。知る人もすくない遠い異郷の旅なぞをして見、歸國後は子供の側に暮して見、次第に子供の世界に親しむやうになつて見ると、以前に足手纏ひのやうに思つたその自分の考へ方を改めるやうになつた。世はさびしく、時は難い。明日は、明日はと待ち暮して見ても、いつまで待つてもそんな明日がやつて來さうもない。眼前に見る事柄から起つて來る多くの失望と幻滅の感じとは、いつでも私の心を子供に向けさせた。
さうは言つても、私が自分のすぐ側にゐる子供の友達になれた譯ではない。私は今の住居に移つてから、三年も子供の大きくなるのを待つた。その頃は太郎もまだ中學へ通ひ、婆やも家に奉公してゐた。釣だ、遠足だと言つて日曜毎に次郎もぢつとしてゐなかつた時代だ。一體、次郎はおもしろい子供で、一人で家の内を賑かしてゐた。夕飯後の茶の間に家のものが集まつて、電燈の下で話し込む時が來ると、弟や妹の聞きたがる怪談なぞを始めて、夜の更けるのも知らずに、皆を恐がらせたり樂ませたりするのも次郎だ。そのかはり、いたづらも烈しい。私がよく次郎を叱つたのは、この兒をたしなめようと思つたばかりでなく、一つには婆やと子供等の間を調節したいと思つたからで。太郎贔屓の婆やは、何かにつけて「太郎さん、太郎さん」で、それが次郎をいら／＼とさせた。
この次郎がいつになく顏色を變へて、私のところへやつて來たことがある。
「我儘だ、我儘だつて、どこが我儘だ。」
見ると次郎は顏色も青ざめ、少年らしい怒りに震へてゐる。何がそんなにこの兒を憤らせたのか、よく思ひ出せない。しかし、私も默つてはゐられなかつたから、

「お前の暴れ者は研究所でも評判だといふぢやないか。」

「誰が言つた——」

「彌生町の婆さんがいらしつた時に、なんでもそんな話だつたぜ。」

「知りもしないくせに——」

次郎が私に向つて、こんな風に強く出たことは、後にも先にもない。急に私は自分を反省する氣にもなつたし、言葉の上の爭ひになつてもつまらないと思つて、それぎり口をつぐんでしまつた。

次郎がぷいと表へ出て行つた後で、太郎は二階の梯子段を降りて來た。その時、私は太郎をつかまへて、

「お前はあんまり溫順過ぎるんだ。お前が一番の兄さんぢやないか。次郎ちやんに言つて聞かせるのは、お前の役ぢやないか。」

太郎はこの側杖を喰ふと、持前のやうに口を尖らしたぎり、何も言はないで引き下つてしまつた。さういふ場合に、默つたところへ來て太郎を窘めるのは、いつでも婆やだつた。

しかし、私は子供を叱つて置いては、いつでも後で悔いた。自分ながら、自分の氣短を思ひ、ないやうな聲を出すに呆れた。私は獨りで悔いを嘆いて、仕事もろく／＼手につかない。片親の悲しさには、私は子供を叱る父であるばかりでなく、そこへ提けに出る母をも兼ねなければならなかつた。丁度三時の菓子でも出す時が來ると、一人で二役を兼ねる俳優のやうに、私は母の方に早替りして、茶の間の火鉢の側へ盆を並べた。次郎の好きな水菓子なぞを載せて出した。

「さあ、次郎ちやんもおあがり。」

すると、次郎はしぶ／＼それを食つて、やがて機嫌を直すのであつた。

私の四人の子供の中で、三郎は太郎と三つちがひ、次郎とは一つちがひの兄弟にあたる。三郎は次郎の暴れ屋ともちがひ、また別の意味で、よく私の方へ突きかゝつて來た。何をこしらへて食はせ、何を買つて來てあてがつても、この兒はまだ物足りないやうな顔ばかりを見せた。私の姉の家の方から歸つて來たこの兒は、容易に胸を開かうとしなかつたのである。上に二人も兄があつて絶えず頭を抑へられることも、三郎を不平にしたらしい。それに、次郎贔屓のお徳が婆やに代つて私の家へ奉公に來るやうになつてからは、今度は三郎が納まらない。丁度婆やの太郎贔屓で、兎角次郎が納まらなかつたやうに。

「三郎ちやん、人を打つちやいやですよ。ひどいことをするのねえ、この人は。」

「なんだ。なんにもしやしないぢやないか。ちよつと觸つたばかりぢやないか——」

お徳と三郎の間には、こんな小ぜり合ひが絶えなかつた。

「父さんはお前達を惡くするつもりでゐるんぢやないよ。お前達を好くするつもりで育てゝゐるんだよ。母さんでも生きてゝ御覽、どうして言ふことをきかないやうな子供は、よつぽどひどい目に逢ふんだぜ——あの母さんは氣が短かかつたからね。」

それを私は子供等に言ひ聞かせた。あまり三郎が他人行儀なのを見ると、時には私は思ひ切り打ち懲さうと考へたこともあつた。ところが、幼少な時分から自分の側に置いた太郎や次郎を打ち懲すことは出來ても、十年他に預けて置いた三郎に手を下すことは、どうしても出來なかつた。ある日、私は自分の怒りを制へきれないことがあつて、今の住居の玄關のところで、思はずそこへやつて來た三郎を打つた。不思議にも、その日からの三郎は反つて私に馴染むやうになつて來た。その時も私は自分の手荒

な仕打ちを後で悔いはしたが、二十年他へ行つてゐたものは、父さんの家へ歸つて来るまでに、どうしたつてまた十年はかゝる。」

私はそれを家のものに言つて見せて、よく嘆息した。

私達が住慣れた家の二階は東北が廊下になつてゐる。窓が二つある。その一つからは、小高い石垣と板塀とを境に、北隣の家の茶の間の白い小障子まで見える。三郎はよくその窓へ行つた。遠い郷里の方の木曽川の音や少年時代の友達のことなぞを思ひ出し顔に、その窓のところで、しきりに鶯の啼聲の眞似を試みた。

「うまいもんだなあ。とても鶯の名人だ。」

三郎は階下の茶の間に来て、そこに聞いてゐるお徳にまで自慢して聞かせた。

ある日、この三郎が私のところへ来て言つた。

「父さん、僕の鶯を聴いたか？ 僕がホウ、ホケキョとやると、隣の家の方でもホウ、ホケキョとやる。僕は隣の家に鶯が飼つてあるのかと思つた。それほど僕もうまくなつたかなあと思つた。ところがねえ、本物の鶯が僕に調子を合せてゐると思つたのは、大間違ひサ。それが隣の家に泊つてゐる大學生さ。」

何かしら常に不滿で、常に獨りぼつちで、自分のことしか考へないやうな顔付をしてゐる三郎が、そんな鶯の眞似なぞを思ひついて、寂しい少年の日を僅かに慰めてゐるのか。さう思ふと、私はこの子供を笑へなかつた。

「母さんさへ達者でゐたら、こんな思ひを子供にさせなくとも濟んだのだ。もつと子供も自然に育つたのだ。」

とも考へずにはゐられなかつた。

私達が地下室に譬へて見た自分の部屋の障子へは、町の響が遠く傳はつて来た。私はそれを植木坂の上の方にも、淺い谷一つ隔てた狸穴の坂の方にも聞きつけた。私達の住む家は片側の塀を境に、ある邸つゞきの抜け道に接してゐて、小高い石垣の上を通る人の跫音や、いろいろな物賣りの聲がそこにも起つた。何處の石垣の間で鳴くとも知れないやうな、ほそぼそとした地蟲の聲も耳に入る。私は庭に向いた四疊半の縁先へ鋏を持出して、よく延び易い自分の爪を切つた。

どうかすると、私は子供と一緒になつて遊ぶやうな心も失つてしまひ、自分の狭い四疊半に隠れ、庭の草木を友として、僅かに獨りを慰めようとした。子供は子供で離れて行くのか、そして自分は自分で子供の内を通り過ぎる旅人に過ぎないのか——そんな嘆息が、時には自分を憂鬱にした。その度に私は氣を取り直して、また私は子供を護らうとする心に歸つて行つた。

安い思ひもなしに、移り行く世相を眺めながら、獨りでぢつと子供を養つて来た心地はなかつた。しかし子供はそんな私に頓着してゐなかつたやうに見える。

七年も見てゐるうちに、みんなの變つて行くにも驚く。震災の来る前の年あたりには太郎は既に私の側にゐなかつた。この兄は十八の歳に中學を辭して、私の郷里の山地の方で農業の見習ひを始めてゐた。これは私の勧めによることだが、太郎もすつかりその氣になつて、長い支度に取掛つた。ラケットを鍬に代へてからの太郎は、學校時代よりもずつと元氣づいて来て、翌年あたりにはもう七貫目ほどの薪を背負ひ得るやうな若者であつた。

次郎と三郎も變つて来た。私が五十日あまりの病床から身を起して、發病以来初めての風呂を浴びに、鼠坂から森元町の湯屋まで靜か

に歩いた時、兄弟二人とも心配して私のからだを洗ひに随いて來たくらゐだ。私の顔色はまだ悪かつた。私は小田原の海岸まで保養を思ひ立つたこともある。その時も次郎は先きに立つて、弟と一緒に、小田原の停車場まで私を送りに來た。

　やがて大地震だ。私達は引續く大きな異變の渦の中にゐた。私が自分の側にゐる兄妹三人の子供の性質をしみ〴〵考へるやうになつたのも、早川賢といふやうな思ひがけない人の名を三郎の口から聞きつけるやうになつたのも、その頃からだ。

　毎日のやうな三郎の言ふ早川賢、早川賢は家のものを悩ました。昨日は何十人の負傷者がこの東の上をかつがれて通つたとか、今日は燒跡へ燒跡へと歩いて行く人達が舞上る土ぼこりの中に續いたとか、さういふ混雑がやゝ沈まつて行つた頃に、何萬もの男や女の墓地のやうな燒跡から、三つの疑問の死体が暗い井戸の中に見出されたといふ驚くべき噂が傳はつた。

「あゝ――早川賢も遂に死んでしまつたか。」

　この三郎の感傷的な調子には愛嬌らしいところもないではなかつたか、まだ子供だ子供だとばかり思つてゐたものが最早こんなことを言ふやうになつたかと考へて、むしろ私にはこの兒の早熟が氣に掛つた。

　震災以來、しばらく休みの姿であつた洋畫の研究所へも、またボツ〳〵研究生の集まつて行く頃であつた。そこから三郎が目を光らせて歸つて來る度にいつも同じ人の噂をした。

「僕等の研究所にはおもしろい人がゐるよ。『早川賢だけは、生かして置きたかつたねえ』――だとサ。」

　無邪氣な三郎の顔を眺めてゐると、私はさう思つた。何程の冷い風が毎日この兒の通ふ研究所あたりまでも吹き廻してゐる事かと。私は又、さう思つた。あの米騒動以來、誰しもの心を揺り動かさずには置かないやうな時代の焦躁が、右も左もまだほんたうにはよく分らないが、三郎のやうな少年のところまでもやつて來たかと。私は屋外からいろ〳〵なことを聞いて來る三郎を見る度に、ちやうど強い雨にでも濡れながら歸つて來る自分の子供を見る氣がした。

　私達の家では、坂の下の往來への登り口にあたる石段の側の塀のところに、大きな郵便箱を出してある。毎朝の新聞はそれで配達を受けることにしてある。取出して來て見ると、一日として何か起つてゐない日はなかつた。あの早川賢が横死を遂げた際に、同じ運命を共にさせられたといふ不幸な少年一太のことなぞも、さかんに書き立てゝあつた。又かと思ふやうな號外賣がこの町の界隈へも鈴を振り立てながら走つてやつて來て、大袈裟な聲で、そこいらに不安を撒きちらして行くだけでも、私達の神經が尖らずにはゐられなかつた。私は、年もまだ若く心も穉い子供等の眼から、殺人、强盗、放火、男女の情死、官公吏の腐敗、その他胸も寒がるやうな記事で滿たされた毎日の新聞を隱したかつた。生憎と、世にも稀に見る可憐な少年の寫眞が、ある日の紙面の一隅に大きく揭げてあつた。評判の一太だ。美しい少年の生前の面影はまた、一層その死をあはれに見せてゐた。

　末子やお徳は茶の間に集まつて、その日の新聞をひろげてゐた。そこへ三郎が研究所から歸つて來た。

『あ――一太。』

　三郎は直ぐにそれへ眼をつけた。讀みさしの新聞を姉やお徳の前に投げ出すやうにして言つた。

『こんな、罪もない子供までも殺す必要がどこにあるだらう――』

その時の三郎の調子には、子供とも思へない
やうな力があつた。

しかし、これほどの熱狂もいつの間にか三郎
の内を通り過ぎて行つた。伸び行くさかりの子
供は、一つところに止まらうとしてゐなかつた。
どん／＼昨日のことを捨てゝ行つた。

『オヤ――三ちやんの「早川賢」もどうしたら
う。』

と、ふと私が氣づいた頃は、あれほど一時大
騷ぎした人の名も忘れられて、それが『木下繁』
『木下繁』に變つてゐた。木下繁も最早故人だ
が、一時は研究所あたりに集まる青年美術家の
憧憬の的となつた畫家で、みんなから早い病死
を惜まれた人だ。

その時になつて見ると、新しいものを求めて
熱狂するやうな三郎の氣質が、何となく私の
胸に纏まつて浮んで來た。どうしてこの兒がこ
んなに大騷ぎをやるかといふに――早川賢にし
ても、木下繁にしても――彼等がみんな新し
い人であるからであつた。

『父さんは知らないんだ――僕等の時代のこと
は父さんには解らないんだ。』

訴へるやうなこの兒の眼は、何よりも雄辯に
それを語つた。私も萬更、斯うした子供の氣持
が解らないでもない。よりすぐれたものとなる
ためには、自分等から子供を抜かせたい――そ
れくらゐのことは考へない私でもない。それ
にしても、少年らしい不滿でさん／＼子供から
苦められた私は、今度はまた新しいもので責
められるやうになるのかと思つた。

末子も眼に見えてちがつて來た。堅肥りのし
た體格から顏つきまで、この娘もだん／＼みん
なの母親に似て來た。上は男の子供ばかりの殺
風景な私の家にあつては、この娘が茶の間の
壁のところに小乾す着物の類も眼につくやうに
なつた。それほど私の家には女らしいものも
少なかつた。

今の住居の庭は狹くて、私が猫の額に譬へる
ほどしかないが、それでも薔薇や山茶花は毎年
のやうに花が絶えない。花の好きな末子は茶の
間から庭へ降りて、僅かばかりの植木を見に行
くことにも學校通ひの餘暇を劃めた。今の住居
の裏側にあたる二階の窓のところへは、巣をか
けに來る蜂があつて、それが一昨年も來、去年
も來、何か私の家には好い事でもある前兆のや
うに隣近所の人達から騷がれたこともある。
末子はその窓の見える抜け道を通つては毎日學
校の方から歸つて來た。そして、好きな裁縫や
編物のやうな、靜かな手藝に飽きることを知ら
ないやうな娘であつた。そろ／＼女の洋服が
流行つて來て、女學校通ひの娘達が好んだ帽子だ
と新規な風俗をめづらしがる頃には、末子も紺
地の上着に襟のところだけ紫の刺繍のしてあ
る質素な服をつくつた。その短い上着のまゝ、
早い桃の實の色した素足を脛のあたりまであら
はしながら、茶の間を歩き廻るなぞも、今まで
の私の家には見られなかつた圖だ。

この娘がぱつたり洋服を着なくなつた。私も
多少本場を見て來たその自分の經驗から、「洋
服のことなら父さんに相談するがいゝぜ。」なぞ
と末子に話したり、帶で形をつけることは東
西の風俗ともに變りがないと言ひ聞かせたりし
て、初めて着せて見る娘の洋服には母親のやう
な注意を拂つた。十番で用の足りないものは、
銀座まで買ひにお徳を娘につけてやつた。それ
ほどにして造りあげた帽子も、服も、附屬品一
切も、僅か二月ほどの役にしか立たないことを
知つた時に私も驚いた。

『串談ぢやないぜ。あの上着は十八圓もかゝ
つてるよ。そんなら初めから洋服なぞを造らな
ければいゝんだ。』

日頃父一人を頼りにしてゐる娘も、その時

ばかりは私の言ふことを聞入れようとしなかつた。お徳がそこへ來て、

『どうしても末子さんは着たくないんださうですよ。洋服はもう要らないから、欲しい人があつたら誰かに進げて下すつてもいゝなんて……』

斯ういふ場合に、末子の代辯をつとめるのは、いつでもこの下女だつた。それにしても、どうかして私は折角新調したものを役に立てさせたいと思つて、

『洋服を着るんなら、父さんがまた築地小劇場を奢る。』

と言つて見せた。すると、お徳がまた娘の代りに立つて來て、

『築地へは行きたいし、どうしても洋服は着たくないし……』

それが娘の心持だつた。その時、お徳はこんなことも附けたして言つた。

『よく／＼末子さんも、あの洋服がいやになつたと見えますよ。もしかしたら、屑屋に賣つて來てもいゝなんて……』これほどの移り易さが年若な娘の内に潜んでゐようとは、私も思ひがけなかつた。でも、私も子に甘い證據には、何かの理由さへあれば、それで娘の我儘を許したいと思つたのである。お徳に言はせると、末子の同級生で新調の校服を着て學校通ひをするやうな娘は今は一人もないとのことだつた。

『そんなに、みんな迷つてゐるのかなあ。』

『なんでも「赤襟の姉さん」なんて、次郎ちやん達がからかつたものですから、あれから末子さんも着なくなつたやうですよ。』

『まあ、あの洋服はしまつて置くサ。また役に立つ日も來るだらう。』

到頭私には娘の我儘を許せるほどのはつきりした理由も見當らず仕舞であつた。私は末子の『洋服』を三郎の『早川賢』や『木下繁』にまで持つて行つて、娘は娘なりの新しいものに迷ひ苦んでゐるのかと想つて見た。時には私は用達のついでに、坂の上の電車路を六本木まで歩いて見た。婦人の斷髮はやゝ下火でも、洋裝はまだこれからといふ頃で、思ひ／＼に流行の風俗を競はうとするやうな女學校通ひの娘達が右からも左からもあの電車の交叉點に群がり集まつてゐた。

私達親子のものが今の住居を見捨てようとした頃には、こんな新しいものも遠い『昨日』のことのやうになつてゐた。三郎なぞは、『木下繁』ですら最早問題でないといふ顔付で、佛蘭西最近の畫界を代表する人達——殊に、ピカソオなぞを口にするやうな若者になつてゐた。

『父さん、今度來たピッシェールの畫は隨分變つてゐるよ。あの人は、どん／＼變つて行く——確かに、頭が好いんだらうね。』

この兒の『頭が好いんだらうね』には私も吹き出してしまつた。

私の話相手——三人の子供等はそれ／＼に動き變りつゝあつた。二人の中でも兄さん顔の次郎なぞは、五分刈であつた髮を長めに延ばして、紺飛白の筒袖を袂に改めた——それもすこしきまりの惡さうに。顔だけはまだ子供のやうなあの末子までが、いつの間にか本裁の着物を着て、女らしい長い袴をはしよりながら、茶の間を歩き廻るほどに成人した。

『子供でも大きくなつたら。』

長いこと待ちに待つたその日が、漸く私のところへやつて來るやうになつた。しかしその日が來る頃には、私はもう動けないやうな人になつてしまふかと思ふほど、そんなに長く坐り續けた自分を子供等の傍に見出した。

『強い嵐が來たものだ。』

と私は考へた。

『父さん——家はありさうで、なか〳〵無いよ。僕と三ちやんとで毎日のやうに歩いて見た。二人ですつかり探して見た。この麻布から青山邊へかけて、もう僕等の歩かないところはない……』

と次郎が言ふ頃は、私達の借家探しも一休みの時だつた。成るべく末子の學校へ遠くないところに、そんな註文があつた上に、好ささうな借家も容易に見當らなかつたのである。あれからまた一軒あるにはあつて、借手のつかないうちにと大急ぎで見に行つて來た家は、既に約束が出來てゐた。今の住居の南隣に三年ばかりも住んだ家族が私達よりも先に郊外の方へ引越して行つてしまつてからは、一層周圍もひつそりとして、私達の庭へ來る春も遲かつた。

めづらしく心持の好い日が私には續くやうになつた。私は庭に向いた部屋の障子をあけて、兎角氣になる自分の爪を切つてゐた。そこへ次郎が來て、

『父さんは何處へも出掛けないんだねえ。』

とさも心配するやうに、それを顏にあらはして言つた。

『どうして父さんの爪は斯う延びるんだらう。こなひだ切つたばかりなのに、もうこんなに延びちやつた。』

と私は次郎に言つて見せた。貝爪といふやつで、切つても、切つても、延びて仕方がない。こんなことはずつと以前には私も氣付かなかつたことだ。

『父さんも弱くなつたなあ。』

と言はぬばかりに次郎はやゝしばらくそこにしやがんで、私のすることを見てゐた。丁度三郎も作畫に疲れたやうな顏をして、油畫の筆でも洗ひに二階の梯子段を降りて來た。

『御覽、お前達がみんなで嚙るもんだから、父さんの脛はこんなに細くなつちやつた。』

私は二人の子供の前へ自分の足を投げ出して見せた。病氣以來肉も落ち痩せ、ずつと以前には信州の山の上から上州下仁田まで日に二十里の道を歩いたこともある脛とは自分ながら思はれなかつた。

『脛嚙りと來たよ。』

と次郎は弟の方を見て笑つた。

『太郎さんを入れると、四人もゐて嚙るんだから、たまらないや。』

と三郎も半分他人の事のやうに言つて笑つた。そこへ茶の間の唐紙があいたと思ふと、ちよいと笑顏を見せたのは末子だ。脛嚙りは、こゝにも一人ゐると言ふかのやうに。

その時まで、三郎は何かもぢ〳〵して、言ひたいことも言はずにゐるといふ風であつたが、

『父さん——ホワイトを一本と、テラ・ロオザを一本買つて呉れない？ 繪具が足りなくなつた。』

斯う切り出した。

『こなひだ買つたばかりぢやないか。』

『だつて、足りないものは足りないんだもの。繪具がなけりや、何も描けやしない。』

と三郎は、不平顏である。すると、次郎は早速弟の言葉をつかまへて、

『あ——また嚙るよ。』

この次郎の串談が、みんなを吹き出させた。

私は子供等に出して見せた足をしまつて、何氣なく自分の掌を眺めた。いつでも自分の掌を見てゐると、自分の顏を見るやうな氣のするのが私の癖だ。忌々しいことばかりが胸に浮んで來た。私はこの四疊半の天井から澤山な蛆の落ちたことを思ひ出した。それが私の机の側へも落ち、疊の上へも落ち、掃いても掃いても落ちて來る音のしたことを思ひ出した。何が腐

り爛れたかと薄氣味惡くなつて、二階の部屋から床板を引きへがして見ると、鼠の死骸が二つまでそこから出て來て、その一つは小さな動物の骸骨でも見るやうに白く曝れてゐたことを思ひ出した。私は恐ろしくなつた。何か斯う自分のことを形にあらはして見せつけるやうなものが、しかもそれまで知らずにゐた自分の直ぐ頭の上にあつたことを思ひ出した。

その時になつて見ると、過ぐる七年を私は嵐の中に坐りつゞけて來たやうな氣もする。私のからだにあるもので、何一つその痕跡をとどめないものはない。髪はめつきり白くなり、坐り胼胝は豆のやうに堅く、腰は腐つてしまひさうに重かつた。朝寢の枕もとに煙草盆を引きよせて、寢そべりながら一服やるやうな癖もついた。私の姉がそれをやつた時分に、私はまだ若くて、年取つた人達の世界といふものを覗いて見たやうに思つたことを覺えてゐるが、ちやうど今の私がそれと同じ姿勢で。

私はもう一度、自分の手を裏返しにして、鏡でも見るやうにつくづくと見た。

「自分の生はまだ紅い。」

と獨り思ひ直した。

午後の好い時を見て、私達は茶の間の外にある緣側に集まつた。そこには私の意匠した緣臺が、緣側と同じ高さに、三尺ばかりも庭の方へ造り足してあつて、蘭、山査子などの植木鉢を片隅の方に置けるだけのゆとりはある。石垣に近い緣側の突當りは、壁によせて末子の小さい風琴も置いてあるところで、その上には時々の用事なぞを書きつける黑板も掛けてある。そこは私達が古い籐椅子を置き、簡單な腰掛椅子を置いて、互ひに話を持ち寄つたり、庭を眺めたりして來た場處だ。毎年夏の夕方には、私達が茶の間のチャブ臺を持ち出して、よく簡單な食事に集まつたのもそこだ。

庭にある遲咲きの乙女椿の蕾も漸くふくらんで來た。それが眼につくやうになつて來た。三郎は緣臺のはなに立つて、庭の植木を眺めながら、

「次郎ちやん、こゝの植木はどうなるんだい。」

この弟の言葉を聞くと、それまで妹と一緒に黑板の前に立つて何かいたづら書きをしてゐた次郎が、白墨をそこに置いて三郎のゐる方へ行つた。

『そりや、引拔いて持つて行つたつて、構ふもんか――もとからこゝの庭にあつた植木でさへなければ。』

『八つ手も大きく成りやあがつたなあ。』

『あれだつて、父さんが植ゑたんだよ。』

『知つてるよ。山茶花だつて、薔薇だつて、さうだらう。あの乙女椿だつて、さうだらう。』

氣の早い子供等は、八つ手や山茶花を車に積んで今にも引越して行くやうな調子に話し合つた。

「そんなにお前達は無造作に考へてゐるのか。」

と私はそこにある籐椅子を引きよせて、話の仲間に入つた。『父さんぐらゐの年齡になつて御覽、家といふものはさう無暗に動かせるものでもないに。』

『どこかに好い家はないかなあ。』

と言出すのは三郎だ。すると次郎は私と三郎の間に腰掛けて、

『さう、さう、あの青山の墓地の裏手のところが、まだすこし殘つてる。この次にはあそこを歩いて見るんだナ。』

「なにしろ、日あたりが好くて、部屋の都合がよくて、庭もあつて、それで安い家と來るんだから、むづかしいや。』と三郎は聲を返すやうに笑ひ出した。

「もつと大きい家ならある。」と次郎も私に言つて見せた。「五間か六間といふ丁度好いところ

がない。これはと思ふやうな家があつても、さういふところはみんな人が住んでゐてネ。』

『父さん、五間で四十圓なんて、こんな安い家を探さうたつて無理だよ。』

『そりや、こゝの家は例外サ。』と私は言つた。『まあ、ゆつくり探すんだナ。』

『なにも追ひ立てを喰つてる譯ぢやないんだから――こゝにゐたつて、ゐられないことはないんだから。』

斯う次郎も兄さんらしいところを見せた。

やがて自分等の移つて行く日が來るとしたら、どんな知らない人達がこの家に移り住むことか。そんなことがしきりに思はれた。庭にある山茶花でも、つゝじでも、何度私が植替へて手入れをしたものか知れない。暇さへあれば箒を手にして、自分の友達のやうにそれらの木を見に行つたり、落葉を掃いたりした。過ぐる七年の間のことは、そこの土にもこゝの石にも種々な痕跡を殘してゐた。

いつの間にか末子は黒板の前を離れて、霜溶けのしてゐる庭へ降りて行つた。

『次郎ちゃん、芍藥の芽が延びてよ。』

末子は庭にゐながら呼んだ。

『蔦の芽も出て來たわ。』

とまた石垣の近くで末子の呼ぶ聲も起つた。

遠い山地の方に出來かけてゐる新しい家が、別にこの私達に見えて來た。こんな落ちつかない氣持で今の住居に暮してゐる中にも、その噂が私達の間に出ない日はなかつた。私は郷里の方に賣物に出た一軒の農家を太郎のために買取つたからである。それを峠の上から村の中央にある私達の舊家の跡に移し、前の年あたりから大工を入れ、新しい工事を始めさせてゐた。太郎も既に四年の耕作の見習ひを終り、雇ひ入れた一人の婆やを相手にまだ工事中の新しい家の方に移つたと知らせて來た。彼もどうやら若い農夫として立つて行けさうに見えて來た。

一體、私が太郎を田舍に送つたのは、もつとあの子を強くしたいと考へたからで。土に親しむやうになつてからの太郎は、だん／＼自分の思ふやうな人になつて行つた。それでも私は遠く離れてゐる子の上を案じ暮して、自分が病氣してゐる間にも一日もあの山地の方に働いてゐる太郎のことを忘れなかつた。郷里の方から來る便りは何程この私を勵ましたらう。私はまた次郎や三郎や末子と共に、何程それを讀むのを樂みにしたらう。さういふ私は未だに都會の借家住居で、四疊半の書齋でも事は足りると思ひながら、自分の子のために永住の家を建てようとすることは、我ながら矛盾した行爲だと考へたこともある。けれども、これから新規に百姓生活に入つて行かうとする子には、寝る場所、物食ふ爐邊、土を耕す農具の類からして求めてあてがはねばならなかつた。

私の四疊半に置く机の抽斗の中には、太郎から來た手紙や葉書がしまつてある。その中には、もう麥を蒔いたとしたのもある。工事中の家に移つて障子を張り唐紙を入れして見たら、まるで別の家のやうに見えて來たとしたのもある。これが自分の家かと思ふと、何だか恐ろしいやうな嬉しいやうな氣がして來たとしたのもある。誰に氣兼ねもなく、新しい木の香のする爐邊に胡坐をかいて、飯をやつてゐるところだとしたのもある。

ふとしたことから、私は手にしたある雜誌の中に、この遠く離れてゐる子の心を見つけた。それには父を思ふ心が寄せてあつて、いろ／＼なことがこま／＼と書きつけてあつた。四人の兄妹の中での長男として、自分は一番長く父の側にゐて見たから、それだけ親しみを感ずる

心も深いとしたところがあり、それから又、父の勸農によつて自分もその氣になり、今では鍬を手にして田園の自然を樂む身であるが、四年の月日も空しく過ぎて行つた、これからの自分は新しい家にゐて新しい生活を始めねばならない、時には自分は土を相手に戰ひながら父のことを思つて涙ぐむことがあるとしたところもあり、その中には又、父もこの家を見ることを樂みにして鄕里の土を踏むやうな日もやがて來るだらう、寺の鐘は父の健康を祈るかのやうに、山に沈む夕日は何かの深い暗示を自分に投げ與へるやうに消えて行くとしてあつたのを覺えてゐる。

最近に、また私は太郎からの葉書を受取つてゐた。それによつて私はあの山地の方に出來かけてゐる農家の工事が風呂場を造るほどはかどつたことを知つた。何となく[illegible]や[illegible]の聲の聞えて來るやうな氣もした。こんなに私にも氣分の好い日が續いて行くやうであつたら、普請を見て、あの新しい家を見に行きたいと思ふ心が動いた。

[illegible]いこと[illegible]れない。[illegible]かな一日[illegible]寒に閉される思ひをして部屋の黄色い壁も慰みの一つに眺め暮すやうなことは、私に取つて今日に始まつたことでもない。母親のない幼い子供等を抱へるやうになつてから、三年もたつ中に、私は既に同じ思ひに行き詰つてしまつた。しかし、その頃の私はまだ四十二の男の厄年を迎へたばかりだつた。重い病も、老年の孤獨といふものも知らなかつた。このまゝ坐つたぎりに坐つてしまふのかと思ふやうな、そんな恐ろしさはもとより知らなかつた。『みんな、さうですよ。子供が大きくなる時分には、吾が身體がきかなくなりますよ。』と私に言つて見せたある婆さんもある。あんな言葉を思ひ出して見るのも堪へがたかつた。

「父さん、どこへ行くの。」

ちよつと私が屋外へ出るにも、さう言つて聲を掛けるのは、末子の聲だ。植木坂の下あたりには、きまつてその邊の門の前に立話する次郎の舊い友達を見出す。ある若者は青山師範へ。ある若者は海軍兵學校へ。七年の月日は私の子供を變へたばかりでなく、子供の友達をも變へた。

居住者として門を眺めるのもその春かぎりだらうか、そんな心持で私は、鼠坂の方へと歩いた。毎年のやうに椿の花をつける靜かな坂道がそこにある。そこにはもう春がやつて來てゐるやうにも見える。

私の足はあまり遠くへ向はなかつた。病氣以來、殊にさうなつた。何か特別の用事でもないかぎり、私は樹木の多いこの町の界隈を歩き廻るだけに滿足した。そして、散歩の途中でも家のことが氣に掛つて來るのが私の癖のやうになつてしまつた。『父さん、僕達が留守居するよ。』と次郎なぞが言つて呉れる日を迎へても、たゞたゞ私の足は家の周圍を廻りに廻つた。あらゆる嵐から自分の子供を護らうとした七年前と同じやうに。

『旦那さん。もうお歸りですか。』

と言つて、下女のお徳がこの私を玄關のところに迎へた。お徳の白い割烹着も、見慣れるうちにさうをかしくなくなつた。

『次郎ちやんは？』

『お二階で御勉強でせう。』

それを聞いてから、私は兩手に持てるだけ持つてゐた袋包をどつかとお徳の前に置いた。

『けふはみんなの三時にと思つて、林檎を買つて來た。ついでに菓子も買つて來た。』

『旦那さんのやうに、いろ／＼なものを買つて

提げていらつしやる方もない。』
『さう言へば、鼠坂の椿が咲いてゐたよ。今にもう俺の家の庭へも春がやつて來るよ。』
そんな話をして置いて私は自分の部屋へ行つた。
私の心は何となく靜かでなかつた。實は私は次郎の將來を考へた揚句、太郎に勸めたとは別の意味で鄕里に歸ることを次郎にも勸めたいと思ひついたからで。長いこと養つて來た小鳥の巢から順に、一羽づつ放してやつてもいゝやうな、さういふ日が既に來てゐるやうにも思へた。しかし私も、それを言ひ出して見るまでは落ちつかなかつた。
丁度、三郎は研究所へ、末子は學校へ、二人とも出掛けて行つてまだ歸らなかつた時だつた。次郎は最早毎日の研究所通ひでもあるまいといふ風で、しばらく家に籠つてゐて描き上げた一枚の油繪を手にしながら、それを私に見せに二階から降りて來た。いつでも次郎が私のところへ習作を持つて來て見せるのは弟の居ない時で、三郎がまた見せに來るのは兄の居ない時だつた。
『どうも光つていけない。』
と言ひながら、その時次郎は私の四疊半の壁の側にたてかけた畫を本棚の前に置き替へて見せた。兄の描いた妹の半身像だ。
『へえ、末ちやんだね。』
と私も言つて、しばらく次郎と二人してその習作に見入つてゐた。
『あの三ちやんが見たら、何と言ふだらう。』
その考へが苦しく私の胸へ來た。二人の兄弟の子供が決して互ひの畫を見せ合はないことを私はもうちやんとよく知つてゐた。二人はこんな出發點のそも〳〵から全く別のものを持つて生れて來た畫家の卵のやうにも見えた。
次郎は畫作に苦み疲れたやうな顏付で、癖のやうに爪を嚙みながら、
『どうも、糞正直にばかりやつてもいけないと思つて來た。』
『お前のはあんまり物を見つめ過ぎるんだらう。』
『どうだらう、この手はすこし堅過ぎるかね。』
『そんなことを父さんに相談したつて困るよ。父さんは、お前、素人ぢやないか。』
その日は私はわざと素氣ない返事をした。これが平素なら、私は子供と一緒になつて、何とか言つて見るところだ。それほど實は私も畫が好きだ。しかし私は自分の畠にもない素人評すら迷つた。ともあれ、次郎の言ふことには、頼らうとするあはれさがあつた。
次郎の作つた畫を前に置いて、私は自分の內に深く突き入つた。そこに吾が子を見た。何となく次郎の求めてゐるやうな素朴さは、私自身の求めてゐるものでもある。最後からでも歩いて行かうとしてゐるやうな、ゆつくりと遲い次郎の歩みは、私自身の踏まうとしてゐる道でもある。三郎はまた三郎で、畫面の上に物の奧行なぞを無視し、明快に明快にと進んで行つてゐる方で、昨日自分の描いたものを今日は舊いとするほどの變り方だが、あの子のやうに新しいものを求めて熱狂するやうな心もまた私自身の內に潛んでゐないでもない。父の矛盾は覿面に子に來た。兄弟であつて、同時に競爭者――それは二人の子供に取つて避けがたいことのやうに見えた。成るべく思ひ〳〵の道を取らせたい。その意味から言つても、私は二人の子供を引き離したかつた。
『次郎ちやん、おもしろい話があるんだが、お前はこれを聞いて呉れるか。』
そんなことから切り出して、私はそれまで言

ひ出さずにゐた田舍行の話を次郎の前に持ち出して見た。

「半農半畫家の生活もおもしろいぢやないか。」と私は言つた。「午前は自分の畫をかいて、午後から太郎さんの仕事を助けたつてもいゝぢやないか。田舍で教員しながら畫をかくなんて人もあるが、ほんたうに百姓しながらやるといふ畫家は少い。そこまで腰を据ゑてかゝつて御覽、一家を成せるかも知れない。まあ、二三年は修業だと思つて出掛けて行つて見てはどうだね。」

日頃田舍の好きな次郎でもなかつたら、私もこんなことを勸めはしなかつた。

「出來るだけ父さんも、お前を助けるよ。」とまた私は言つた。『そのかはり、太郎さんと二人で働くんだぜ。』

『僕もよく考へて見よう。斯うして東京に愚圖愚圖してゐたつても仕方がない。』

と次郎は沈思するやうに答へて、やゝしばらく物も言はずに、私の側を離れずにゐた。

四月に入つて、私は鄕里の方に太郎の新しい家を見に行く心支度を始めてゐた。いよいよ次郎も私の勸めを容れ、都會を去らうとする決心がついたので、この子を鄕里へ送る前に、私は一足先に出掛けて行つて來たいと思つた。留守中のことは次郎に預けて行きたいと思ふ心もあつた。日頃家にばかり引籠り勝ちの私が、こんなに氣分の好い日を迎へたことは、家のものを悦ばせた。

「ちよつと三人で、じやんけんして見てお呉れ。」

と私は自分の部屋から聲を掛けた。氣候はまだ春の寒さを繰返してゐた頃なので、子供等は茶の間の火鉢の周圍に集まつてゐた。

「スイ、じやんけんだとよ。」

何か好い事でも期待するやうに、次郎は弟や妹を催促した。火鉢の周圍には三人の笑聲が起つた。

『誰だい、負けた人は。』

「僕だ。」と答へるのは三郎だ。『じやんけんといふと、いつでも僕が貧乏鬮だ。』

「さあ、負けた人は、郵便箱を見て來て。」と私が言つた。『もう太郎さんから何とか言つて來てもいゝ頃だ。』

「なあんだ、郵便か。」

と三郎は頭を掻き〳〵、古い時計の掛つた柱から鍵をはづして、路次の石段の上まで見に出掛けた。

鄕里の方からの便りがそれほど待たれる時であつた。この旅には私は末子を連れて行かうとしてゐたばかりでなく、靑山の親戚が嫂に姪に姪の子供に三人までも同行したいといふ相談を受けてゐたので、いろ〳〵打ち合せをして置く必要もあつたからで。待ち受けた太郎からの葉書を受取つて見ると、四月の十五日頃に來て呉れるのが一番都合がいゝ、それより早過ぎても遲過ぎてもいけない、まだ壁の上塗りもすつかり出來てゐないし、月の末になるとまた農家はいそがしくなるからとしてあつた。

「次郎ちやん、父さんが行つて太郎さんともよく相談して來るよ。それまでお前は東京に待つておいで。」

「太郎さんのところからも贊成だと言つて來てゐる。ほんとに僕がその氣なら、一緒にやりたいと言つて來てゐる。」

「さうサ。お前が行けば太郎さんも心強からうからナ。」

私は次郎とこんな言葉をかはした。

久し振りで鄕里を見に行く私には、土産物をあつめに銀座邊を步き廻つて來るだけでも、嬉

から汗の出る思ひをした。暮からずつと續けてゐる藥を旅の荷に納めることも忘れてはならなかつた。私は同伴する人達のことを思ひ、漸く恢復したばかりのやうな自分の健康のことも氣遣はれて、途中下諏訪の宿屋あたりで疲れを休めて行かうと考へた。やがて、四月の十三日といふ日が來た。いざ旅となれば、私も遠い外國を漂泊して來たことのある氣輕な自分に歸つた。古い鞄も、古い洋服も、まだそのまゝ役に立つた。連れて行く娘の支度も出來た。そこで出掛けた。

この旅には私はいろ／＼な望みを掛けて行つた。長い支度と親子の協力とから出來たやうな新しい農家を見る事もその一つであつた。七年の月日の間に數へるほどしか離れられてなかつた今の住居から離れ、あの惠那山の見えるやうな靜かな田舍に身を置いて、深い溜息でも吐いて來たいと思ふ事もその一つであつた。私の側には、三十年振りで鄕里を見に行くといふ年老いた嫂もゐた。姪が連れてゐたのはまだ乳離れもしないほどの男の兒であつたが、直ぐに末子に慣れて、汽車の中で抱かれたり、その膝に乘つたりした。それほど私の娘も子供好きだ。その兒は時々末子の側を離れて、母の懷をさぐりに行つた。

『叔父さん、ごめんなさいよ。』

と言つて、姪は幾人もの子供を生んだことのある乳房を小さなものにふくませながら話した。そんなにこの人は氣の置けない道連れだ。

『さう言へば、太郎さんの家でも、屋號をつけたよ。』と私は姪に言つて見せた。『みんなで相談して田舍屋に「よもぎや」とつけた。それを「蓬屋」と書いたものか、「四方木屋」と書いたものかと言ふんで、いろ／＼說が出たよ。』

『そりや、「蓬屋」と書くよりも、「四方木屋」と書いた方がおもしろいでせう。いかにも山家らしくて。』

こんな話も旅らしかつた。

甲府まで乘り、富士見まで乘つて行くうちに、私達は山の上に殘つてゐる激しい冬を感じて來た。下諏訪の宿へ行つて日が暮れた時は、私は連れのために眞綿を取寄せて着せ、また翌る日の旅を續けようと思ふほど寒かつた。——それを嫂にも着せ、姪にも着せ、末子にも着せて。

中央線の落合川驛まで出迎へた太郎は、村の人達と一緒に、この私達を待つてゐた。木曾路に殘つた冬も三留野あたりまでで、それから西は既に花のさかりであつた。水力電氣の工事で堰き留められた木曾川の水が大きな淵の間に見えるやうなところで、私はかねて[illegible]と一緒になることが出來た。そこまで行くと次郎達の留守居する東京の方の噂も遠かつた。

『漸く來た。』

と私はそれを太郎にも末子にも言つて見せた。

年とつた嫂だけは山駕籠、その他のものは皆徒歩で、それから一里ばかりある靜かな山路を登つた。路傍に咲く山躑躅でも、菫でも、都會育ちの末子を樂ませた。登れば登るほど淸く澄んだ山の空氣が私達の身に感じられて來た。舊い街道の跡か一筋眼につくところまで進んで行くと、そこはもう私の鄕里の入口だ。途中で私は森さんといふ人の出迎へに來て吳れるのに逢つた。森さんは太郎より七八歲ほども年長な友達で、太郎が四年の農事見習ひから新築の家の工事まで、殆んど一切の世話をして吳れたのもこの人だ。

鄕里に歸るものの習ひで、私は村の人達や村の子供達の物見高い眼を避けたかつた。今だに古い驛路の名殘を見せてゐるやうな坂の上の方からは、片側に續く家々の前を添うて、細い

水の流れが走つて來てゐる。勝手を知つた私はある抜け道を取つて、丁度その村の裏側へ出た。太郎は私の直ぐ後から、すこしおくれて姪や末子も隨いて來た。私は太郎の耕しに行く畠がどつちの方角に當るかを尋ねることすら樂みに思ひながら歩いた。私の行く先にあるものは幼い日の記憶を喚び起すやうなものばかりだ。暗い竹藪のかげの細道について、左手に小高い石垣の下へ出ると、新しい二階建の家のがつしりとした側面が私の目に映つた。新しい壁も光つて見えた。思はず私は太郎を顧みて、

「太郎さん、お前の家かい。」

「これが僕の家サ。」

やがて私はその石垣を曲つて、太郎自身の筆で屋號を書いた農家風の入口の押戸の前に行つて立つた。

四方木屋。

太郎には私は自身に作れるだけの田と、畑と、薪材を取りに行くために要るだけの林と、それに家とをあてがつた。自作農として出發させたい考へで、餘分なものは一切あてがはない方針を執つた。

都會の借家住居に慣れた眼で、この太郎の家を見ると、新規に造つた爐邊からしてめづらしく、表から裏口へ通り抜けられる農家風の土間もめづらしかつた。奥もかなり廣くて、青山の親戚を泊めるには十分であつたが、大人から子供まで入れて九人もの客が一時にそこへ着いた時は、いかにもまだ新世帶らしい思ひをさせた。

「きのふまで左官屋さんが入つてゐた。庭なぞはまだちつとも手がつけてない。」

と太郎は私に言つて見せた。

何もかも新規だ。まだ柱時計一つ掛つてゐない爐邊には、太郎の家で雇つてゐるお霜婆さんの外に、近くに住むお菊婆さんも手傳ひに來て呉れ、森さんのお母さんまで來て吾が兒の世話でもするやうに働いてゐて呉れた。

私は太郎と二人で部屋々々を見て廻るやうな時を見つけようとした。それが容易に見當らなかつた。

「この家は氣に入つた。思つたより好い家だ。よつぽど森さんにはお禮を言つてもいゝね。」

僅かにこんな話をしたかと思ふと、また太郎はいそがしさうに私の側から離れて行つた。そこいらには、まだ乾き切らない壁へよせて、私達の荷物が取り散らしてある。末子は姪の子供を連れながら、部屋々々をあちこちとめづらしさうに歩き廻つてゐる。嫂も三十年振りでの歸省とあつて、舊馴染の人達が出たり入つたりするだけでも、かなりごたごたした。

人を避けて、私は眺望の好い二階へ上つて見た。石を載せた板屋根、ところどころに咲きみだれた花の梢、その向うには春深く霞んだ美濃の平野が遠く見渡される。天氣の好い日には近江の伊吹山までかすかに見えるといふことを私は幼年の頃に自分の父からよく聞かされたものだが、曾てその父の舊い家から望んだ山々を今は自分の子の新しい家から望んだ。

私はその二階へ上つて來た森さんとも一緒に、しばらく窓の側に立つて、久し振りで自分を迎へて呉れるやうな惠那山にも眺め入つた。あそこに深い谷がある、あそこに遠い高原がある、とその窓から指して言ふことが出來た。

「お蔭で、好い家が出來ました。太郎さんに呉れるのは惜しいやうな氣がして來ました。これまでに世話して下さるのも、なかなか容易ぢやありません。私もまた、時々來ても讀みに歸ります。」

と私は森さんに話したが、禮の心は言葉に

も盡せなかつた。
翌日になつても、私は太郎と二人ぎりでゆつくり話すやうな機會を見出さなかつた。嫂の墓參に。そのお供に。入れ替り立ち替り訪ねて來る村の人達の應接に。午後に、また私は人を避けて、爐邊つゞきの六疊ばかりの部屋に太郎を見つけた。
『父さん、土産はこれつきり？』
『何だい、これつきりとは。』
私は約束の柱時計を太郎のところへ提げて來られなかつた。それを太郎が催促したのだ。
『次郎ちやんが來る時に、時計は持たしてよこす。』と言つた後で、漸く私は次郎のことをそこへ持出した。『どうだらう、次郎ちやんは來たいと言つてるが、お前の迷惑になるやうなことはなからうか。』
『そんなことはない。あの通り二階はあいてゐるし、次郎ちやんの部屋はあるし、僕はもうそのつもりにして待つてゐるところだ。』
『半日お前の手傳ひをさせる、半日畫をかゝせる――そんな風にしてやらして見るか。何も試みだ。』
『まあ、最初の一年ぐらゐは、僕から言へば反つて邪魔になるくらゐのものだらうけれど――そのうちには次郎ちやんも慣れるだらう。なかなか百姓もむづかしいからね。』
さういふ太郎の手は、指の骨のふし／＼が強くあらはれてゐて、どんな荒仕事にも耐へられさうに見えた。その手は最早一ぱしの若い百姓の手だつた。この子の机の側には、本箱なぞも置いてあつて、農民と農村に關する書籍の入れてあるのも私の眼についた。
その日は私は新しい木の香のする風呂桶に身を浸して、僅かに旅の疲れを忘れた。私は山家らしい爐邊で婆さん達の話も聞いて見たかつた。で、その晩はあか／＼とした焚火のほてりが自分の顏へ來るところへ行つて、寛いだ。
『ほんとに、俺のやうなものの造るものでも、太郎さんは甘い／＼と言つて食べさつせる。さう思ふと、俺はオヤゲナイやうな氣がする。』
と私に言つて見せるのは、肥つて丈夫さうなお霜婆さんだ。私の鄕里では、このお霜婆さんの話すやうに、女でも『俺』だ。
『どうだなし、こんな好い家が出來たら、お前さまも嬉しからず。』
と今度はお菊婆さんが言ひ出した。無口なお霜婆さんに比べると、この人はよく話した。
『今度歸つて見て、私も安心しました。』と私は言つた。『私はあの太郎さんを旦那衆にするつもりはありません。要るだけの道具はあてがふ、あとは自分で働け――そのつもりです。』
『えゝ、太郎さんもその氣だでとお霜婆さんは爐の火の方に氣をくばりながら言つた。『この材木でもなんでも、みんな自分で山から背負つておいでるぞなし。そりや、お前さま、こゝの家を建てるだけでも、どのくらゐよく働いたか知れずか。』
爐邊での話は盡きなかつた。
三日目には私は嫂のために舊い馴染の人々を四方木屋の二階に集めて、森さんのお母さんやお菊婆さんの手料理で、みんなと一緒に久しぶりの酒でも汲みかはしたいと思つた。三年前に兄を見送つてからの嫂は、にはかに老けて見える人であつた。おそらくこれが嫂に取つての鄕里の見納めであらうとも思はれたからで。
私達は爐邊にゐて順にそこへ集まつて來る客を待つた。嫂が舊い馴染の人々で、三十年の昔を語り合はうとするやうな男の老人は最早この村にはゐなかつた。さういふ老人といふ老人は殆んど死に絶えた。招かれて來る客はお

婆さんばかりで、腰を曲めながら入つて來る人の後には、すこし耳も遠くなつたといふ人の顏も見えた。隣村からわざ〳〵嫂や姪や私の娘を見にやつて來て呉れた人もあつたが、私と同年で既に幾人かの孫のあるといふ未亡人がその日の客の中での年少者であつた。

しかし、一同が二階に集まつて見ると、このお婆さん達の元氣の好い話聲がまた私をびつくりさせた。その中でも、一番の高齡者で、一番元氣よく見えるのは隣家のお婆さんであつた。この人は酒の盃を前に置いて、

『どうか、まあ太郎さんにも好いお嫁さんを見つけてあげたいもんだ。父さんの御心配で、斯うして家も出來たし。この次は、お嫁さんだ。その折には私もまた今日のやうに呼んで頂きたい――私は私だけのお祝ひを申上げに來たい。』

八十歲あまりになる人の顏にはまだみづ〳〵しい光澤があつた。私はこの隣家のお婆さんの孫にあたる子息や、森さんなぞと一緒に同じ食卓に就いてゐて、日頃はめつたにやらない酒をすこしばかりやつた。太郎はまたこの新築した二階の部屋で初めての客をするといふ顏付で、冷めた德利を集めたり、それを熱燗に取り替へて來たりして、二階と階下の間を往つたり來たりした。

『太郎さんも、そこへお坐り。』と私は言つた。『森さんのお母さんが丹精して下すつた御馳走もある――下諏訪の宿屋から父さんの提げて來た若鷺もある――』

『斯ういふ田舍にゐますと、酒をやるやうになります。』と森さんが、私に言つて見せた。『どうしても、周圍がさうだもんですから。』

『太郎さんもすこしは飲めるやうになりましたらうか。』と私は半分串談のやうに。

『えゝ、太郎さんは强い。』それが森さんの返事だつた。『いくら飲んでも太郎さんの醉つたところを見た事がない。』

その時、私は森さんから廻つた盃を太郎の前に置いて、

『今から酒はすこし早過ぎるぜ。しかし、けふは特別だ。まあ、一杯やれ。』

吾が兒の苦勞をねぎらはうとする心から、思はず私は自分で德利を持ち添へて勸めた。若者、萬歲――口にこそそれを出さなかつたが、青春を祝する私の心はその盃に溢れた。私は自分の年とつたことも忘れて、いろ〳〵と皆を款待顏な太郎の姿をしばらくそこに眺めてゐた。

七日の後には私は青山の親戚や末子と共にこの山を降りた。

落合川の驛から元來た道を汽車で歸ると、下諏訪へ行つて日が暮れた。私は太郎の作つてゐる桑畑や麥畑を見ることも叶はなかつたほど、いそがしい日を鄕里の方で送り續けて來た。察しのすくない鄕里の人達は思ふやうに私を休ませて呉れなかつた。この歸りには、一旦下諏訪で下車して次の汽車の來るのを待ち、また夜行の旅を續けたが、嫂でも姪でも言葉すくなに乘つて行つた。末子なぞは汽車の窓のところにハンケチを載せて、たゞうと〳〵と眠りつゞけて行つた。

東京の朝も見直すやうな心持で、私は娘と一緒に家に歸りついた。私も激しい疲れの出るのを覺えて、部屋の疊の上にごろ〳〵しながら寢てばかりゐるやうな自分を留守居するものの側に見つけた。

『旦那さん、あちらはいかゞでした。』

とお德が熱い茶なぞを持つて來て呉れると、私は太郎が山から背負つて來たといふ木で焚い

た萱にもあたり、それで沸かした風呂にも入つて來た話なぞをして、そこへ横になつた。

「父さん、どうだつた。」

「思つたより太郎さんの家は好い家だつたよ。しつかりと出來てゐたよ。でも、贅澤な感じはすこしもなかつた。森さんの寄附して呉れた古い小屋なぞも裏の方に造り足してあつたよ。」

私は次郎や三郎にもこんな話を聞かせて置いて、またそこに横になつた。

二日も三日も私は寢てばかりゐた。まだ半分あの山の上に身を置くやうな氣もしてゐた。旅の印象は疲れた頭に殘つて、容易に私から離れなかつた。私の眼には明るい靜かな部屋がある。新しい障子の側には火鉢が置いてある。客が來てそこで話し込んでゐる。村の校長さんといふ人も見えてゐて、「太郎さんの百姓姿をまだ御覽になりませんか、なか／＼好うござんすよ。」と私に言つて見せたことを思ひ出した。「おもしろい話もあります。太郎さんがまだ笹刈にも慣れない時分のことです。笹刈と言へば、この土地でも骨の折れる仕事ですからね。あの笹刈があるために、他からこの土地へお嫁に來手がないと言はれるくらゐ骨の折れる仕事ですからね。太郎さんもみんなと一緒に、威勢よくその笹刈に出掛けて行つたは好かつたが、腰をさがして見ると、鎌を忘れた。大笑ひしましたよ。それでも村の若い者がみんなで寄つて、太郎さんに刈つてあげたさうですがね。どうして、この節の太郎さんは、もうそんなことはありません。」と、その校長さんの言つたことを思ひ出した。さう言へば、あの村の二三の家の軒先に刈乾してあつた笹の葉はまだ私の眼にある。あれを刈りに行くものは、腰に火繩を提げ、それを蚊遣りの代りとし、襲ひ來る無數の藪蚊と戰ひながら、高い崖の上に生えてゐるのを下から刈取つて來るといふ。あれは熊笹といふやつか。見たばかりでも恐ろしげに、幅廣で鋭く尖つたあの笹の葉は忘れ難い。私は又、水に乏しいあの山の上で、遠い吾家の先祖の遺した古い井戸の水が太郎の家に活き返つてゐたことを思ひ出した。新しい木の香のする風呂桶に身を浸した時の樂しさをも思ひ出した。ほんたうに自分の子の家に歸つたやうな氣のしたのも、さういふ時であつたことを思ひ出した。

しかし、斯ういふ旅疲れも自然とぬけて行つた。そして、そこから私が身を起した頃には、過ぐる七年の間續いてきたやうな寂しい嵐の跡を見直さうとする心を起した。こんな心持は、あの太郎の家を見るまでは私に起らなかつたことだ。

留守宅には種々な用事が私を待つてゐた。その中でも、さしあたり次郎達と相談しなければならない事が二つあつた。一つは見つかつたといふ借家の事だ。早速私は次郎と三郎の二人を連れて青山方面まで見に行つて來た。今少しで約束するところまで行つた。見合せた。歸つて來て、そんな家を無理して借りるよりも、まだしも今の住居の方が勝しだといふことに想ひ當つた。一旦は私の心も今の住居を捨てたものである。しかし、もう一度この屋根の下に辛抱して見ようと思ふ心は既にその時に私の内に萌して來た。

今一つは、次郎の事だ。私は太郎から聞いて來た返事を次郎に傳へて、いよ／＼郷里の方へ出發するやうに、その支度に取掛らせることにした。

「次郎ちやん、番町の先生のところへも暇乞ひに行つて來るがいゝぜ。」

「さうだよ。」

私達はこんな言葉をかはすやうになつた。「番町の先生」とは、私より年下の友達で、日頃次郎のやうな未熟なものでも末頼母しく思つ

て見てゐて呉れる美術家である。
『今ある展覧會も、出來るだけ見て行くがいゝぜ。』
『さうだよ。』
とまた次郎が答へた。
五月に入つて、次郎は半分引越しのやうな騷ぎを始めた。何かごと／＼言はせて戸棚を片付ける音、畫架や額縁を荷造りする音、二階の部屋を歩き廻る音なぞが、毎日のやうに私の頭の上でした。私も階下の四疊半にゐてその音を聞きながら、七年の昔からこの子を送り出すまでは、心も落ちつかなかつた。仕事の上手なお徳は次郎のために、郷里の方へ行つてから着るもののなぞを縫つた。裁縫の材料、材料で、次から次へと追はれてゐる末子が學校での稽古に縫つた太郎の袷羽織もそこへ出來上つた。それを柳行李につめさせてなどと家のものが語り合ふのも、何となく若者の旅立ちの前らしかつた。
次郎の田舍行は、よく三郎の話にも上つた。三郎は研究所から歸つて來る度に、その話を私にして、
『次郎ちやんのことは、研究所でもみんな知つてるよ。僕の友達に聞いて、それだけの決心がついたのは、えらい――とサ。しかし僕は田舍へ行く氣にならないなあ。』
『お前はお前、次郎ちやんは次郎ちやんでいゝ。廣い美術の世界だもの――みんながみんな、さう同じやうな道を踏まなくてもいゝ。』
と私は答へた。
子供の變つて行くにも驚く。三郎も私に向つて、以前のやうには感情を隱さなくなつた。めまぐるしく動いてて止まないやうな三郎にも、何となく落ちついたところが見えて來た。子供の變るのは大人の移り氣とは違ふ、子供は常に新しい――さう私に思はせるのもこの三郎だ。
やがて次郎は番町の先生の家へも暇乞ひに寄つたと言つて、改まつた顏付で歸つて來た。餞別のしるしに贈られたといふ二枚の畫をも私の前に取出して見せた。それは見事な筆で大きく書いてあつて、あの四方木屋の壁にでも掛けて眺め樂しむにふさはしいものだつた。
『父さん、番町の先生はさう言つたよ。いろいろな人の例を僕に引いて見せてね、田舍へ引込んでしまふと畫がかけなくなるとサ。』
と次郎はやゝ不安らしく言つた後で、更に言葉を繼いで、
『それから、斯ういふものを呉れてよこした。田舍へ行つたら讀んで御覽なさいと言つて僕に呉れてよこした。何かと思つたら、『扶桑隱逸傳』サ。畫の本でも呉れゝばいゝのに、こんな仙人の本サ。』
『仙人の本はよかつた。』と私も吹き出した。
『これは父さんでも讀むに丁度好い。』
『父さんだつて、まだ仙人には早いよ。』
『しかしお餞別と思へばありがたい。けふは番町でいろ／＼な話が出たよ。ギルドラックといふ人の持つて來たマチスの畫の話も出たよ。けふの話はみんな好かつた。それから先生の奥さんも、御飯を一緒に食べて行けと言つてしきりに勸めて下すつたが、僕は歸つて來た。』
先輩の一言一行も忘れられないかのやうに、次郎はそれを私に語つて見せた。
いよ／＼次郎の家を離れて行く日も近付いた。次郎はその日を茶の間の縁先にある黒板の上に記しつけて見て、何となく名殘が惜まるゝといふ風であつた。やがて、荷造りまでも出來た。この都會から田舍へ歸つて行く子を送る前の一日だけが殘つた。
『どつこいしよ。』

私がそれをやるのに不思議はないが、まだ若いさかりのお徳がそれをやつた。お徳も私の家に長く奉公してゐるうちに、そんなことが自然と口に出るほど、いつの間にか私の癖に染まつたと見える。

このお徳は茶の間と臺所の間を往つたり來たりして、次郎の『送別會』の支度を始めた。さういふお徳自身も遠からず暇を取つて、代りの女中のあり次第に國許の方へ歸らうとしてゐた。

『旦那さん、お肴屋さんがまゐりました。旦那さんの分だけ何か取りませうか。次郎ちやん達はライス・カレエがいゝさうですよ。』

『ライス・カレエの送別會か。どうしてあんなものがさう好きなんだらうなあ。』

『だつて、皆さんがさうおつしやるんですもの。――三ちやんでも、末子さんでも。』

私はお徳の前に立つて、肴屋の持つて來た附木にいそがしく目を通した。それには河岸から買つて來た魚の名が並べ記してある。長い月日の間、私はこんな主婦の役をも兼ねて來て、好き嫌ひの多い子供等のために毎日の惣菜を考へることも日課の一つのやうになつてゐた。

『待てよ。俺はどうでもいゝが、送別會のお附合に鮎の一尾も貰つて置くか。』

と私はお徳に話した。

『末ちやん、おまいか。』

と私はまた小さな娘にでも注意するやうに末子に言つて、白の前掛をかけさせ、その日の臺所を手傳はせることも忘れなかつた。

『ほんとに、太郎さんのやうな溫順しい人のお嫁さんになるものは仕合せだ。わたしもこれでもつと年でも取つてると――もつとお婆さんだと――臺所の手傳ひにでも行つてあげるんだけれど。』

それが茶の間に來てのお徳の述懷だ。

茶の間には古い柱時計の外に、次郎が銀座まで行つて買つて來た新しいのも壁の上に掛けてあつた。太郎への約束の柱時計だ。今度次郎が提げて行かうとするものだ。それが古い時計と並んで一緒に動きはじめてゐた。

『凄い時計だ。』

と見に來て言ふものがある。そろ／＼夕飯の支度が出來る頃には、私達は茶の間に集まつて新しい時計の形をいろ／＼に言つて見たり、それを古い方に比べたりした。私の四人の子供がまだ生れない前からあるのも、その古い方の時計だ。

やがて私達は一緒に食卓に就いた。太郎は三郎とむかひ合ひ、私は末子とむかひ合つた。『送別會』とは名ばかりのやうな有合な食事でも、斯うして三人の兄妹の顏が揃ふのはまた何時のことかと思はせた。

『いよ／＼明日は次郎ちやんも出掛けるかね。』

と私は古い柱時計を見ながら言つた。『母さんが亡くなつてから、今年でもう十七年にもなるよ。あの母さんが生きてゐて、お前達の話す言葉を聞いたら驚くだらうなあ。わざと亂暴な言葉を使ふ。「時計を買ひやがつた――動いてるやがらあ」――お前達のはその調子だもの。』

『いけねえ、いけねえ。』と次郎は頭をかきながら食つた。

『父さんがそんなことを言つたつて、みんなが左樣だから仕方がない。』と三郎も笑ひながら食つた。

『さう言へば、次郎ちやんも一年に二度ぐらゐづつは東京へ出ておいでよ。なにも田舍に引込みきりと考へなくてもいゝよ。二三年は旅だと思つて御覽な。父さんなぞも旅をする度に自分の道が開けて來た。田舍へ行くと、友達はすくなからうなあ、殊に畫の方の友達が――それだ

けが父さんの氣掛りだ。』

　斯う私が言ふと、今迄子供の友達のやうにして暮して來たお徳も長い奉公を思ひ出し顔に、

「次郎ちやんが行つてしまふと、急にさびしくなりませうねえ。人を送るのもいゝが、わたしは後がいやです。」

　と給仕しながら言つた。

「あゝ、食つた。食つた。」

　間もなくその聲が子供等の間に起つた。三郎は口を拭いて、そこにある箪笥を背に足を投げ出した。次郎は床柱の方へ寄つて、自分で裝置したラヂオの受話器を耳にあてがつた。細いアンテナの線を通して傳はつて來る都會の聲も、その音樂も、當分は耳にすることの出來ないかのやうに。

　その晩は、お徳も名殘を惜むといふ風で、臺所を片付けてから子供等の相手になつた。お徳は賑かなことの好きな女で、戯れに子供等から腕押しでも所望されると、いやだとは言はなかつた。肥つて丈夫さうなお徳と、痩せぎすで力のある次郎とは、おもしろい取組を見せた。さかんな笑聲が茶の間で起るのを聞くと、私も自分の部屋にぢつとしてゐられなかつた。

「次郎ちやんと姉やとは互角だ。」

　そんなことを言つて見てゐる三郎達の側で、また二人は勝負を爭つた。健康そのものとも言ひたいお徳が肥つた膝を乘り出して、腕に力を入れた時は、次郎もそれをどうすることも出來なかつた。若々しい血潮は見る〳〵次郎の額に上つた。堅く組んだ手も震へた。私はまたハラハラしながらそれを見てゐた。

『オゝ、痛い。御覽なさいな、私の手はこんなに紅くなつちやつたこと。』

　とお徳は血でもにじむかと見えるほど紅く熱した腕をさすつた。

「三ちやんも姉やとやつて御覽なさいな。」

　と末子が側から勸めたが、三郎は應じなかつた。

「僕は止す、左ならやつて見てもいゝけれど。」

　さういふ三郎は左を得意としてゐた。腕押に、骨牌に、その晩は笑聲が盡きなかつた。

　翌日は最早新しい柱時計が私達の家の茶の間に掛つてゐなかつた。次郎はそれを厚い紙箱に入れて、旅に提げて行かれるやうに荷造りした。

　その時になつて見ると、太郎はあの山地の方で既に田植を始めてゐる。次郎はこれから出掛けようとしてゐる。お徳もやがては國をさして歸らうとしてゐる。次郎のゐない後は、にはかに家も寂しからうけれど、日頃せゝこましく窮屈にのみ暮して來た私達の前途には、いくらかの部屋のゆとりのある日も來さうになつた。私は私で、もう一度自分の書齋を二階の四疊半に移し、この次は客としての次郎を吾家に迎へようと思ふなら、それも出來ない相談ではないやうに見えて來た。どうせ今の住居はあの愛宕下の宿屋からの延長である。殘る二人の子供に不自由さへなくば、さう想つて見た。五十圓や六十圓の家賃で、さう思はしい借家のないことも分つた。次郎の出發を機會に、漸く私も今の住居に居据りと觀念するやうになつた。

　私は獨りで、例の地下室のやうな四疊半の窓へ近く行つた。そこいらはもうすつかり青葉の世界だつた。私は兩方の拳を堅く握りしめ、それをうんと高く延ばし、大きな欠伸を一つした。

「大都市は墓地です。人間はそこには生活してゐないのです。」

　これは日頃私の胸を往つたり來たりする、あるすぐれた藝術家の言葉だ。あの子供等のよ

く遊びに行つた島津山の上から、芝麻布方面に連なり續く人家の屋根を望んだ時の曾ての自分の心持をも思ひ合せ、私はさういふ自分自身の立つ位置さへもが——あの藝術家の言草ではないが、いつの間にか墓地のやうな氣のして來たことを胸に浮べて見た。過ぐる七年のさびしい嵐は、それほど私の生活を行き詰つたものとした。

私が見直さうと思つて來たのも、その墓地だ。そして、その墓地から起き上る時が、どうやら、自分のやうなものにもやつて來たかのやうに思はれた。その時になつて見ると、『父は父、子は子』でなく、『自分は自分、子供は子供等』でもなく、ほんたうに『私達』への道が見えはじめた。

夕日が二階の部屋に滿ちて來た。階下にある四疊半や茶の間はもう薄暗い。次郎の出發にはまだ間があつたが、纏めた荷物は二階から玄關のところへ運んであつた。

「さあ、これだ、これが僕の持つて行く一番のお土産だ。」

と次郎は言つて、すつかり荷ごしらへの出來た時計をあちこちと持ち廻つた。

「どれ、わたしにも持たせて見て。」

と末子は兄の側へ寄つて言つた。

遠い山地も、にはかに私達には近くなつた。この新しい柱時計が四方木屋の爐邊に掛つて音のする日を想ひ見るだけでも、樂しかつた。日頃私が矛盾のやうに自分の行爲を考へたことも、今はその矛盾が矛盾でないやうな時も來た。子のために建てたあの永住の家と、旅にも等しい自分の假の借家住居の間には、虹のやうな橋が掛つたやうに思はれて來た。

「次郎ちやん、停車場まで送りませう。末子さんもわたしと一緒にいらつしやいね。」

とお徳が言ひ出した。

「僕も送つて行くよ。」

と三郎も言つた。すると、次郎は首を振つて、

「誰も來ちやいけない。今度は誰にも送つて貰はない。」

それが次郎の望みらしかつた。私は末子やお徳を思ひとまらせたが、せめて三郎だけをやつて、飯田町の停車場まで見送らせることにした。

やがて、そこいらはすつかり暗くなつた。まだ宵の口から、家の周圍はひつそりとして來て、坂の下を通る人の跫音もすくない。都會に住むとも思へないほどの靜かさだ。氣の早い次郎は出發の時を待ちかねて、住み慣れた家の周圍を一廻りして歸つて來たくらゐだ。

「行つてまゐります。」

茶の間の古い時計が九時を打つ頃に、私達はその聲を聞いた。植木坂の上には次郎の荷物を積んだ車が先に動いて行つた。いつの間にか次郎も家の外の路次を踏む靴の音をさせて、靜かに私達から離れて行つた。

昭和四年八月九日印刷
昭和四年八月十二日發行

現代日本文學全集 第三十六篇

著者代表 戸川明三

發行者 山本美
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌 東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京八四〇二番
電話芝(43)一一二一番 一一二二番 一一二三番 一一二四番

株式會社秀英舍印刷

秀英舍製

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 02990 2160

改造社